まんじ

No.155

2020.2.1

まんじ第百五十五号　目次

大相撲と世界杯ラグビー……新井　宏…4
宣　告……千坂精一…12
ドキュメント「明治元年」（1）……山田嘉久…30
―明治維新から150年
スペイン・ポルトガル弥次喜多道中（前編）……田寺怜葦…39
短　歌　行雲流水（六十二）……石黒修身…52
漢　詩　潮汐録（九十七）《漢詩の流れ85》……鯨游海…55
漢　詩　汲深録（十九）……松井秀人…58
ロボット雑考（その十四）……三戸岡道夫…60
古い物・遠い夢　平和の女神像と青銅の花入……忠内正之…63
青雲の彼方（七）……太田精一…75
信託　英―米―日　歴史の旅……永田俊一…87
その二（米―日）

三流の風景（最終回）……葵　州月…110
世界の国旗から学ぶ（最終回）……米村典紘…129
回想　ベルリン再訪（一九九一年八月）……山本鎭雄…145
―「ベルリンの壁」崩壊とドイツ再統一―
内田の国の諏訪信仰物語……横山正義…154
神武創業と物語日本史……浅野博文…158
性と化粧の物語（十八）……鈴木守…164
高山右近（五）……鍋屋次郎…172
…信仰に生きた生涯…
安芸門徒シルクロード紀行（6）……村上邦治…187
私の伊達政宗像を訪ねて（その四―③）……安藤剛…206
明治時代の著述者　渋江保の一生（その二十）……山本勉…223
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）（五）……匠克仁…226
ABCDE……Z……匠克仁…231
編集後記……編集子…239

大相撲と世界杯ラグビー

新井宏

9月22日　大相撲九月場所千秋楽

9月22日、久しぶりに晩酌しながら大相撲九月場所千秋楽のテレビを見ていた。まだ時間は五時半、六勝の栃の心と九勝の豪栄道の両大関の対戦中であった。これから横綱が登場するのだろうと見ていると、どうやらそれが結びの一番らしい。

確か横綱が二人いたはずだが、ともに休場したようで、しかも二人の大関も優勝には絡んでいない。この段階で決勝戦に進んだのは共に関脇で十二勝の御嶽海と貴景勝で、珍しいことであった。

いつもなら優勝争いにはモンゴル出身の力士が並ぶ。しかし九月場所は、白鵬と鶴竜の両横綱、大関の逸ノ城が途中から休場、大翔鵬がなんとか九勝を挙げたものの、玉鷲も東龍も散々の成績であった。

そんな状況を見ながら、気づいたのは、優勝決定戦に進んだ御嶽海も貴景勝も典型的な「アンコ型」の力士で、お腹ばかりでなく胸部さえ出っ張って垂れ下がっている。

おそらく世界中の格闘技でこんなに太っているのは「日本の力士」だけであろう。わずか直径四・五メートル（昭和初期までは約四メートル）の土俵では「押し相撲」が基本となるので、重心を低くし体重を増やすのが理にかなっている。だから、無理をしてでも「ちゃんこ鍋」を食べて、体重増を図る力士が後を絶たない。いわば人為的に造られた畸形である。

しかしモンゴル系の横綱は同じような環境にありながら典型的な「アンコ型」にはならず、むしろ「ソッポ型」（アスリート型）に近い体形を維持している。体質によるのであろうか。

優勝決定戦に進んだ両関脇と共に、モンゴル系四横綱（朝青龍、白鵬、日馬富士、鶴竜）やハワイ系四力士（高見山、小錦、曙、武蔵丸）、ついでに江戸期から平成期までの横綱の平均身長と平均体重およびその肥満度を較べてみる。

グループ	身長(cm)	体重(kg)	肥満度
貴景勝・御嶽海	一七七	一七二	五五
モンゴル四横綱	一八七	一四七	四二
ハワイ系四力士	一九四	二三三	六二
江戸期横綱(10名)	一七九	一四二	四四
明治期横綱(10名)	一七七	一三一	四二
大正期横綱(9名)	一七七	一二〇	三八
昭和期横綱(31名)	一八一	一三八	四二
平成期横綱(10名)	一八八	一六六	四六

両関脇の身長がモンゴル系横綱よりも十センチも低いのに体重が二十五キロも多く、肥満度で示すと五十五と四十二で大差がある。肥満度とはキログラムで示した体重をメートルで示した身長の自乗で割った値である。

それでは、日本の力士は昔から「アンコ型」が多数を占めていたのであろうか。

単純に言えば、江戸期から昭和期中頃まで、日本の横綱の身長は一七七センチほど、肥満度も四十二前後で、ほとんど変化していない。

身長・体重そして肥満度に大変化をもたらしたのは、明らかにハワイ系であり、モンゴル系は身長こそ十センチほど高くなったが、肥満度は日本の力士と変わらない。

ご承知のように、近年の大相撲は、外国出身力士が優勝をほぼ独占していて、日本人の横綱が優勝したのは、貴乃花の二〇〇一年五月場所以来、二〇一七年三月場所の稀勢の里の一回だけである。

結局、重量級のハワイ系力士の登場で、身長・体重に劣る日本力士達は「アンコ型」を増やして対抗することになったが、その後の長身「ソッポ型」のモンゴル系の登場で、ますます「アンコ型」に走り、技の相撲が廃れる流れを生んでしまった。

それにしても、格闘技では、柔道、空手、テコンドー、レスリング、ボクシングなど、オリンピックに採用された競技は例外なく重量階級制が導入されている。それだけに「重量級」が有利なのは当然であるが、これらのスポーツで「アンコ型」の選手など見たことがない。むしろ体重を引き締めて、軽量級に廻った方が有利なのが常識だからである。したがって、もし相撲にも重量階級制が導入されたなら「アンコ型」は激減するであろう。

乱暴に云えば、基礎的な身長・体重に劣る日本人が相撲の世界で生き残るためには、重量階級制を導入して、世界の格闘技に仲間入りすることが不可欠なのではなかろうか。

9月20日～10月13日　世界杯ラグビー予選

実は、このように力士の体型のことを考えていたのは、九月二十日から始まった世界杯ラグビーのことを意識していたからである。

相撲もラグビーもその基本に「押し」がある。「押し」に「重量級」が有利なのは当然であるが、そこには華麗な「わざ」も必要である。フランスのラグビー選手達が大相撲の稽古場を訪問し、押し相撲や四股踏み、足技などを観察したという。良い着想だと思う。

九月二十日、開会早々行われた日本対ロシア戦は、開始直後に格下のロシアに独走トライを許し七点を奪われる展開で、やはり外国は強いとの思いが先立った。しかし素人目でも、日本の方が優勢に見えるのである。

どうやらフオワード八名による「セットスクラム」や、野戦での「ラック」とか「モール」と称するボールの奪い合いでも「押し相撲」が主役で、押し勝ってボールを得た側が試合を支配する。特に「セットスクラム」は「押し相撲」の団体戦の様相で、日本が完全に押し気味で、じりじりとロシア陣内へ攻め入っている。

ラグビーではタックルされ倒れた選手はボールを離さなければならない。その結果、地上に転がったボールの上で臨時の「スクラム」を形成して押し合うのが「ラック」である。また「モール」は、タックルされても倒れない限りボールを保持できるので、味方の選手がそのまま前に押し込む方法である。ゴール前の混戦でしばしば見られる。そんなルールや見所を少しずつ学んだ。

いずれにしても「押し相撲」が優勢なら、常にボールをキープしながら前進できる。だから素人でも対ロシア線に日本が優勢なのがわかる。結局、七点先行されながら、結果的には三十対十で大勝した。

ラグビーの華やかさは、パスやキックに続く独走トライであろうが、いわば「押し相撲」に負けさえしなければ、確実に前進してトライを積み重ねることができるようだ。

したがってラグビーには「番狂わせ」が極めて珍しいのだという。「押し相撲」なら、技もあろうが、力の強い方が何回やっても勝つ。対ロシア戦を見て、やっとラグビーの見所が判った。

ところが、九月二十八日の日本対アイルランド戦で、その「世紀の番狂わせ」が起きたのである。つい先日まで世界一位だったアイルランドに九位の日本が挑むが、早くも前半二十分には十二対三と先制されてしまった。常識的には逆転など既に絶望的な場面である。

しかし試合が終了してみれば、アイルランドは、その後の六十分間、全く得点ができず、十二対十九で日本が勝利してしまった。失点が無かったということは、日本が「押し相撲」で優勢であったため、相手に攻撃のチャンスがなかったということである。

9月26日　シラク元フランス大統領逝去

ちょうど九月二十八日の対アイルランド戦の頃、シラク元フランス大統領が九月二十六日に八十六歳で亡くなったとのニュースが入った。シラクは愛犬に「スモウ」と名付けるほどの大相撲のファンである。

一九七二年以降、主要閣僚や首相、パリ市長を歴任しながら遂に一九九五年、三度目の挑戦で大統領になり、以降十二年間の政権を担当した。四十回以上来日、一九九五年十月には大相撲パリ公演を実現し、二〇〇〇年には「フランス大統領杯」を寄贈してくれている。

幼少期にパリの東洋美術館やギメ美術館を観覧し東洋美術に関心を持ったのが日本への関心の始まりという。学生時代に『万葉集』を読み、その後も遠藤周作など日本文学を愛読し、駐日大使館の重要な任務の一つは、エリゼ宮に大相撲の結果を毎日報告することだったといわれる。いわばシラクは典型的なジャパノロジストと言ってもよいであろう。

一番の贔屓の力士は琴錦と伝えられているが、身長一七七センチ、体重一二〇キロで肥満度は三十八、強豪力士としては典型的な「ソッポ型」である。勝手な想像であるが、美意識の高いシラクが「アンコ型」を贔屓にしたとは思えない。

シラクが相撲に興味を覚えたのは、多くのジャパノロジストと同様、印象派に多大な影響を与えた「浮世絵」を通じてであろう。

江戸末期、一枚の「浮世絵」が一杯の「掛け蕎麦」の代金と言われ、輸出陶磁器の緩衝材として詰められてヨーロッパに大量に持ち出されていた。その過程で、写実化して行き詰まっていたヨーロッパ絵画、特に「印象派」に、浮世絵の色彩の美しさや輪郭を細線で表示する手法、遠近法を無視した手法、デフォルムした表現などにより、影響を与えたのだと言う。

日本では大衆文化であった浮世絵は、美人画、役者絵、名所絵、春画などあらゆる分野をカバーしているが、相撲絵もその大きな部分であった。マネの「エミール・ゾラの肖像」の背景に、相撲絵が描かれている。

化粧まわしを締めた人気力士の錦絵は、相撲特有の「アンコ型」をかなりカモフラージュしており、畸形としての違和感はあまりない。しかし、シラクの政敵サルコジ元大統領は「相撲は知的なスポーツではない」と言って切り捨て、二〇〇八年に大鵬に優勝杯を授与したのを最後に、「フランス大統領杯」を廃止してしまった。

心の狭い人物のように思うが、相撲絵の畸形「アンコ型」を本能的に嫌ったのであろう。しかし日仏間の政治

的な問題としては一年後に「日仏友好杯」として復活している。

9月26日　クルップのドクター・クレンケ

ドイツのドクター・クレンケもジャパノロジストで相撲ファンである。風貌がカラヤンそっくりで、長らく製鉄都市ジーゲンのクルップ製鉄所の所長を務めていた。ドクターと言っても工学博士ではなく理学博士でありドイツでも異色の人物。

私が初めてお会いしたのは、一九七七年九月、勤務していた会社から、ステンレス鋼製造技術交流のためクルップ製鉄所などに一ヶ月ほど派遣された時であった。その頃、日本の製鉄業は粗鋼生産一億トンを超え、いきなり世界第一位に躍り出ていた。ステンレス鋼も例外では無く、日本の年産は二〇〇万トンを超え、世界の生産量の三分の一を占め誠に意気盛んであった。技術交流とは言っても、こちらが学ぶだけでなく交流先も大歓迎してくれる状況であつた。

ジーゲンの製鉄所は一八四五年に設立された歴史ある工場。十五万坪ほどの敷地に古い平炉がまだ残っていたが、ちょうどその頃、近代的な一五〇トン電気炉に置換された。

製鉄所の向いにある七階建ての事務棟には、広い所長室があり、最上階が幹部職員のレストランになっていた。その一室でクレンケ所長以下五～六名の関係者に歓迎を受けた。

会食中に、お酒も入りドイツやハプスブルク家の歴史のことで、識っている固有名詞を並べ立てて話したら、かなり通じたようで、びっくりした顔をされた。ドイツ人の技術者が日本に来て、豊臣秀吉や徳川家康の能書きでも言ったら、驚くような感じだったのかも知れない。その時、物静かなドクター・クレンケが一般の工学博士よりも一ランク上の教養人という印象を受けた。

ドクター・クレンケに二度目にお会いしたのは、一九八七年北欧に出張した途中で、ジーゲン製鉄所に立ち寄った時である。私の職場も生産管理部門から研究部門の責任者に替り、ステンレス鋼の溶湯から直接鋼板を製造する夢の技術をクルップと共同開発中で、交流も盛んで友人も多かった。

ちょうどその年に私も博士号を採り、その論文コピーをドクター・クレンケに紹介した。純粋な理論論文で、一般的な技術者には馴染まない内容であったが、さすが理学博士だけあって、有益な討論をして頂けた。

そして最後にお会いしたのが一九九七年九月のことである。最初にお会いしてから既に二十年、もちろんその頃には現役を引退されていた。私はまだ現役であったが、仕事の関係でお会いしたのではない。

私の趣味は考古学研究である。その中でも古代尺の復元研究は長年取り組んできており、既に歴史考古学の著名な出版社・吉川弘文館から『まぼろしの古代尺』という研究書を出版していた。その関係で、五年に一度、開かれる国際計量史学会には極力出席していた。一九九二年には第五回の学会がフランスのリール大学で開かれ、妻と一緒参加した。

その五年後、一九九七年には第六回の国際学会がドイツのジーゲン大学で開かれた。

ジーゲン市は歴史的な都市とは言え、人口は十万人の中小都市であり、ジーゲン大学も一九六四年創立、学生数二万人弱のドイツに四百ほどある大学の中のひとつに過ぎない。その旧知の地を訪れるということは、私にとっては奇跡ともいうべき偶然であった。しかも大学の位置するところがクルップ製鉄所に隣接する小高い丘の上、ジーゲン大学の展望塔から見下ろすと、その真下にクルップの製鉄所が見渡せる。

更には、大学周辺の丘陵地には新興住宅地が広がり、瀟洒な平屋建てのドクター・クレンケ邸が、製鉄所を見下す一角にある。いわば隠居した城主様がクルップ製鉄所を見下ろしながら生活している風であった。

国際計量史学会は三日間の日程で行われたが、初日にはジーゲン市長による歓迎会が市役所のレセプションルームで開かれた。画家ルーベンスの出身地であり、壁面には美術館のように彼の絵が展示されていた。

選挙でもあるのだろうか、市長の長いスピーチがあったが、遠路の参加者に敬意を表してか、日本とかドクター・アライとかの言葉も聞えた。しかし夕食会は学会持ちのようであった。

二日目には、講演の合間に二時間ほど時間が空いたので、公衆電話でドクター・クレンケに連絡をして見た。住所が判っていたので、妻と一緒に十分ほどの距離を少し迷いながら歩いて行くと、ドクター・クレンケが奥様と一緒に入口まで出ていてくれた。

突然の訪問であったが、城下町を見下ろしながら、昔の写真などを見て旧交を温めた。リビングには壁面に飾り物が多く掛けられていたがジャパノロジストらしく、浮世絵や焼き物も混じっている。

びっくりしたのは、その時、日本の大相撲のことが話題になったのである。聴けば、毎日衛星放送で大相撲の放送をみているとのこと。その日は一九九七年九月二十六日、後で調べると九月場所の十四日目で横綱貴乃花が十八回目の優勝を遂げた年であった。秋場所が始まったのも記憶になかった位、大相撲に関心のなかったので、一方的に話を聞くだけ。とにかくびっくりしてしまった。

10月20日～11月2日　世界杯ラグビー決勝

今回の世界杯ラグビーが始まる段階では、世界十位以内は、ニュージーランド、ウェールズ、イギリス、アイルランド、南アフリカ、オーストラリア、スコットランドなどのイギリス連邦国ばかりで、二十位以内にも、人口八十万名のフィジーや二十万名のサモア、十万名のトンガなどオセオニアのイギリス連邦島嶼国が入っている。更に二十五位以内にカナダや香港もある。まるでその他の参加国は、英連邦大会に庇を借りている雰囲気である。

しかし、なぜかアジアのイギリス最大植民地、インドやパキスタンの姿はない。

その中で、日本が初めて八強入りをした。だからそのことだけでも世界では奇蹟とみなしているらしい。

英連邦諸国でラグビーが盛んなのは、イギリスの植民地政策によるものだとの話も聞いた。スポーツが外交と密接な関係を持つのは、日中のピンポン外交や北朝鮮・韓国の冬期オリンピックなどにも例がある。

決勝リーグが始まり、その初戦は日本対南アフリカであった。前半は三対五と大健闘したが、予選リーグで見せた日本の強力な「押し相撲」が完全に押さえ込まれている。後半は為す術もなく〇対二十一、これが実力なのだと認識せざるを得なかったが、敗れてもとても心地よい試合であった。

昭和五十六年春のこと、南アフリカの鉄鋼会社サザンクロス社から六名ほどの従業員がステンレス鋼の特殊熱間圧延機の操業実習のために筆者の勤務する製造所にやって来た。

クロム鉱石の豊富な南アフリカで、ステンレス鋼を製造する計画が進んでいて、その主力の圧延機に熟練操作を要するステッケル式可逆式圧延機を導入するためであった。

たまたま、操業指導を担当した関係で、南アからの派遣者に加え、こちら側で実地に指導を担当したオペレーター等合わせて、十数名が我家にやって来た。

南アは英語の国とのイメージがあったが、体格の良い操業者達は、先住オランダ系アフリカーナのようで、英語は片言、専ら飲んだり、（無理に教えた炭坑節などを）一緒に踊ったりの交流、ドンチャン騒ぎであった。

その時に土産に貰った南アの美しい写真集を探すが、どこにしまったか思い出せない。ただ、木製の黒く焼いたペーパーナイフは今でも重宝している。

南アフリカの選手達の中に、デクラークと言う遠目には女性と見まがう金髪ロングヘアーの九番スクラムハーフがいる。身長一七二センチ、体重八八キロと小柄、スクラムには参加はしないが、そばにいて、かき出されたボールをバックス陣にパスをする役回りで、南アのチームでは司令塔である。肥満度は三〇。とにかく素人目に

も上手いのである。「小さな巨人」と称され、昨年度のプレーヤーオブザマッチ（POM）にも選ばれたとか。ちなみに、南アのチーム平均では、身長一八六センチ、体重一〇三キロ、肥満度三〇である。

その後、南アは対ウェールズ戦を十九対十六、対イングランド戦を三十二対十二で勝ち、遂に三度目の世界杯一位に上りつめた。いずれの試合も「押し相撲」にばかり注目して見ていた。日本はその南アフリカに負けたのだから仕方がないという妙な納得がある。

11月24日　大相撲十一月場所千秋楽

早くも、大相撲十一月場所が巡ってきた。この間、大相撲と世界杯ラグビーについて、時折メモしておいたものをまとめて『まんじ』の原稿にしようと考えていた。何やらスポーツ音痴の観戦日誌になりそうである。

しかし、そのお陰で我が人生のささやかな「思い出」を楽しむことも出来た。人生なんぞ、力まなくとも、平凡な楽しみは日常の中にある。

さて、十一月場所は福岡開催、またも千秋楽までテレビで観戦することもなかった。慌てて千秋楽を見る。

白鵬が一敗を守り断トツの成績で、貴景勝は六敗、御嶽海も九敗の散々な成績であった。

翌日の新聞には「押し相撲の興隆・縮まる力の差」とある。「押し相撲の興隆」とは、褒めた言葉とは思えない。「縮まる力の差」とは、休場を除く三十九名の内、六勝、七勝、八勝の力士が二十四名もいて、ドングリの背比べだということである。「アンコ型」力士間の対戦では、一方的な勝利には結びにくいと言うことだ。

そこで思った。やはり「アンコ型」は駄目だ。歴代の最強横綱を見ても、双葉山は一八〇センチ、一三五キロで肥満度は四十二、千代の山も一九一センチ、一一五キロで肥満度は三十二で「ソッポ型」である。

重心を下げることの出来る「短足」が有利と思っていたが、体重まで考慮するとそうでもない。

そもそも身長に恵まれない日本人が「ちゃんこ鍋」を食べて、体重を増やして「アンコ型」になるのは、健康志向の現代常識から言えば「犯罪」に近い。横綱経験者の平均寿命は六十二歳で著しく短命と聞く。

やはり「重量階級制」を導入して「アンコ型」を排除し、相撲を「知的なスポーツ?」にすることが時代の方向であろう。「フライ級横綱」が誕生すれば、アマチュア相撲がもっと興隆するかも知れない。

宣告

千坂精一

はじめに

あれから七十五年もの歳月が経過してしまっているから、昨今ではもうあの忌まわしい太平洋戦争のことを知らない世代が大勢を占めてしまった。

あの大いなる犠牲者の屍の上に立って今日の繁栄があるのだから、あのことはいつまでも忘れないでいてほしいものである。

私は生まれてすぐにはじまった最後の十五年戦争のなかを生きてきたので、まだ昨日のことのように鮮明に記憶していて、あの体験は生涯風化することがないほど強烈な印象を受けている。

生まれてすぐの満洲事変は一時的なものだったし、つづく日中戦争は十三年ともっとも長かったのだが、遠い中国大陸が戦場だったので実感がなかった。

だが、昭和十六年十二月八日にはじまって三年九箇月つづいた米英などの列強との太平洋戦争はいまだ悪夢にうなされるように鮮明に覚えている。

開戦のとき私は、四月に国民学校と改称された小学校の六年生であった。

毎朝、起床するとまずラジオのスイッチを入れてアナウンサーの声をききながら食事をし、登校の支度をする習慣だったので、その朝もなにげなくスイッチを入れたところ、いつもとちがったアナウンサーの慌ただしく甲高い叫び声が飛び出してきた。

「臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部発表。帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」

そうなんども繰り返していた。

そしてその日は、海軍の誇る空母赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、瑞鶴の六隻から発艦した戦闘機、急降下爆撃機、雷撃機などがハワイオアフ島の真珠湾に碇泊していた米国太平洋艦隊と、陸軍のホイラー、ヒッカム、ベロース、ハレイワ、海軍のカネオ、フォード、ハーバースポイント、エバなどの各航空基地を襲撃して大戦果を挙げ、同時にマレー半島沖の海戦でも英国が誇る最新鋭戦艦プリンス・オブ・ウェールズとパレスをクワンタン沖で撃沈した大戦果もあわせて、終日大々的に誇らしげに報道した。

だが、まだこの大戦果の酔いが覚めやらぬ半年後の昭和十七年六月六日、ハワイ諸島の北西に位置するミッドウェー島近くの海戦で、日本海軍が誇る空母加賀、赤城、蒼龍、飛龍が撃沈される大惨敗を喫してしまった。

やむなく第一次世界大戦後に統治を委任されていた赤道以北の南洋諸島に陸上基地をおいて抗戦をつづけた。

しかし、反撃に転じた米軍は物量に物を言わせて徐々に制海権を取り返していった。

八月にはじまった三次にわたるソロモン海戦でガダルカナル島の奪回を図ったがならず、これが聯合艦隊最後の大海戦になった。

翌十八年四月、ニューブリテン島のラバウル基地で陣頭指揮を執っていた聯合艦隊司令長官山本五十六大将は、ガダルカナル島の北部ソロモン諸島に点在している最前線基地の視察を兼ねて一式陸攻二機に分乗して戦闘員たちの激励に出向いたのだが、途中ブイン上空で暗号解読して待ち伏せていた米陸軍ロッキードP38戦闘機十六機の急襲を受けて撃墜され、山本長官は戦死、分乗していた宇垣参謀長は重傷を負ったが救助された。

戦国時代なら総大将が戦死すればそれで勝敗がついて領国を奪われてしまうのだが、近代戦ではいそぎ後任を立てて戦争を継続した。

戦死した山本長官の後任にはすぐさま古賀峯一大将が就任した。

ところが、司令部を移したトラック島が昭和十九年二月十七日に米軍艦載機の大攻撃で機能を失う打撃を受けたので、旗艦武蔵でパラオに後退したがここもまた空襲がはげしく防衛する搭乗員の技倆が低下してしまっていたために米軍から「マリアナの七面鳥打ち」と揶揄されてしまい、司令部としての機能が危険になってしまったのでフィリピンミンダナオ島のダバオへ移すことになり、三月三十一日夜急遽大型飛行艇二機が用意されたが、給油中空襲警報が発令されたので給油途中の二機に急ぎ分乗して出発したのだが、生憎ミンダナオ島付近で発生した熱帯性低気圧に巻き込まれ、古賀長官搭乗の一番機は行方不明になり、福留参謀長搭乗の二番機はセブ島沖に不時着して全員ゲリラの捕虜になってしまった。

このときは視察ではなく移動だがら司令部全員が搭乗していたので一時機能が麻痺してしまったという。

一度ならず二度までも長官を喪った聯合艦隊は、開戦三人目の長官に豊田副武大将を迎えた。

一、

マリアナ沖海戦に敗れたことによって本土への危機感が迫ってきた大本営は、防衛戦をさらに後退させて、四段階の迎撃作戦の準備をすすめこれを『捷号作戦』とした。『捷』とは、「勝つ」という意味である。

一号はフィリピン方面決戦。
二号は臺灣及び南西諸島方面決戦。
三号は日本本土方面決戦。
四号は北海道、千島、樺太方面決戦。
であった。

そして、一号作戦の内容は、

一、基地航空部隊は約七〇〇浬の遠方に索敵し、これに漸減害撃を加え、敵が近接するや陸軍機と協同してこれを水際に撃滅す。

二、艦隊はブルネイ湾（ボルネオ島北部）に集結待機し、情報次第出撃して敵の護衛艦と船団とを捕捉撃滅す。

三、万一遅れて敵が上陸開始後たるときは艦隊は全軍港湾内に強行突入してこれを撃滅す。

四、小澤中将の航空戦隊は、瀬戸内海から出撃南下して敵機動部隊を北方に誘導し、以て栗田艦隊を掩護す。

であった。

この米軍の第一攻撃地域がフィリピン方面と予想した大本営の判断は的中した。

これよりさきに大本営は戦局挽回を図って十航空隊を結集した第一航空艦隊（一航艦）を編成して直轄部隊とし、訓練中は作戦に参加させないで只管練度の向上に励ませた。

海軍の飛行兵になるには中学三年生終了で受験できる甲種飛行予科練習生（甲飛）、中学二年終了で受験できる乙種飛行予科練習生（乙飛）、二十三歳以下なら誰でも受験できる内種予科練習生（丙飛）の三種類があった。

甲飛十期生が土浦航空隊での飛行練習生（予科練）教程から三重航空隊での飛行練習生（飛練）教程を卒えて松山基地にいる実施部隊一航艦二六三航空隊（二六三空）に配属されたのは昭和十八年十月一日であった。

二六三空は別称豹部隊といい、司令が玉井浅一中佐、飛行隊長が重松康弘大尉であった。

ほかに一航艦の練成部隊には二六五空の狼部隊、二四一空の獅子部隊、三四三空の隼部隊があった。

玉井司令は配属されてきた甲飛十期生たちに期待をかけて、自身の手で徹底的に指導した。

その熱情に絆された甲飛十期生たちは玉井司令を親父と呼んで慕った。

しかしその期間は僅か半年足らずで、翌十九年二月十日にラバウルにいた基地航空部隊が撤退したので、一航艦は聯合艦隊の指揮下に入り、司令部とともに松山からテニアンに進出した。

その後豹部隊はペリリュウ、ワシレ、グアムと転戦したが、六月十八日にはじまったサイパンの攻防をめぐるマリアナ海戦で一航艦は三〇〇機を喪い壊滅した。

角田長官はテニアンの司令部にあって米軍の上陸部隊と交戦して八月二日に戦死した。五十四歳であった。

司令長官の後任には寺岡謹平中将が就任して一航艦はフィリピンで再建することになり、ミンダナオ島のダバオに司令部をおいた。

その前後に米軍は、

七月二十一日グアム島に上陸、八月十一日同島守備隊玉砕。

七月二十四日テニアン島上陸、八月二日同島守備隊玉砕。

九月十五日ペリリュー、モロタイ両島に上陸、モロタイ島は翌日、ペリリュー島は九月三十日ごろ占領。

九月十七日アンガウル島上陸、二十日玉砕。

九月二十三日ウルシーを無血占領。

したので、軍令部は米軍主力は十月下旬ごろフィリピンに来攻と判断した。

聯合艦隊司令部はこの最中の九月二十九日木更津沖に停泊の乙種巡洋艦大淀から慶應義塾大学日吉台キャンパスの地下壕に移転した。

豊田司令長官は、十月二日幕僚らとフィリピン方面捷号作戦の準備状況視察に出かけ、帰途臺灣沖航空戦に遭遇、十月十八日に新竹から日吉に帰着した。

そのあいだの一航艦のじり貧は寺岡長官の指揮機能欠陥と判断した軍令部は、後任の長官に軍需省航空兵器総局総務局長の大西瀧治郎中将を親補した。

大西はこれまで佐世保空司令、横須賀空副長兼教頭、航空本部教育部長、第一聯空司令官、第一聯空司令官、十一航艦参謀長、航空本部総務部長など航空畑の要職を歴任して航空戦力の向上に貢献してきていたし、実施部隊では航空畑生え抜きの闘将として海軍内での信頼が厚かった。

大西中将は部内で起こっていた〈特攻〉についてこれまでは「統率の外道」と極め付けていたが、フィリピン攻防の難局を打開するには戦果を期待できる〈特攻〉もやむなしと考えていた。

伎倆未熟な搭乗員に戦果をあげさせるにはそれ以外に方法はないと結論づけていた。

就任前に軍令部に呼ばれた大西中将は、総長及川古志郎大将、次長伊藤整一中将、第一部長（作戦担当）中澤佑少将のまえでフィリピン作戦について意見を述べあった。

その席で大西中将は、

「敵空母は電波探知機と戦闘機の空中待機で防備を固めているからわが攻撃隊は遠距離で捕捉され撃退されてしまう。これを打開するには直掩機をつけて目標まで護衛し体当たり攻撃を敢行するよりほかに策はないと考える。大本営においても是非この方法を許可していただきたい」

そう訴えた。

この大西中将の突然の発言に一同沈黙をまもっていたが、やがて及川総長が口を開き、

「航空隊を統率する貴官の意見はよくわかった。軍令部として戦局を打開させるための策として承認します。だが、実行にあたってはかならず本人の自由意志によってください。決して命令をしてくださるなよ」

くれぐれもとかたく念をおしたという。

大西中将はフィリピンへの出発に先立って軍令部第一課航空作戦計画担当の源田實中佐と体当たり攻撃について協議し決意を述べた。

十月九日、大西中将は厚木からダグラス輸送機に乗り、途中九州福岡の雁ノ巣に寄って筥崎神宮に参拝した。

十一日に臺灣の高雄基地に着いたとき、そこには数日前に第二航空艦隊が進出していた。

大西中将は同期の長官福留繁中将と会い、ここでも航空機による体当たり攻撃の決意を述べたが、福留長官は正攻法を主張して同意しなかった。

この日たまたま豊田聯合艦隊司令長官がフィリピン巡視の帰途新竹基地に立ち寄っていることを知った大西中将は、ただちに新竹へ飛んで豊田司令長官と会い、

「練度未熟で単独飛行がやっとの搭乗員たちに爆撃をやらせても損害が多いだけで成果は挙げられない。体当たりでゆくより方法はないと思うが命令することはできない。そういう雰囲気になってこなくては実行できない」

そう述懐していたという。

迷いに迷う思いを秘めたまま大西中将は敵機空襲の合間を縫って十六日にダグラス輸送機で新竹を出発、途中高雄を経て十七日夕刻フィリピンのニコルス飛行場に着くとただちにマニラの一航艦司令部に行き、その夜同期の寺岡中将と引き継ぎをした。

実は寺岡長官の更迭は海軍の一大汚点といわれているダバオでの水鳥事件の責任をとらされたのだという説がある。

水鳥事件というのは、治承四年十月の源平合戦のとき、駿河の富士川で源頼朝軍と対陣した平維盛軍が夜明けに飛び立つ水鳥の羽音におどろいてわれさきに逃げ、全軍総崩れとなった故事である。

このとき、ダバオには一航艦のほかに代谷清志中将を司令官とする第三十二特別根拠地隊がいた。

発端は昭和十九年九月十日午前五時ごろ、ミンダナオ島南端のサランガニ見張所から、

「湾口に敵上陸舟艇見ゆ」

との報告が根拠地隊司令部に入った。

じつはこれが誤りで、さきに司令部が、

「敵の上陸あるやも知れず、警戒を厳にせよ」

と命じたものを見張員は、

「上陸するものなり」

ととってしまったために、海上に立つ白波を見て上陸舟艇と錯覚してしまったのだった。

司令部は直ちに一航艦司令部に連絡するとすぐに戦闘準備にとりかかり、暗号書や通信機器を破壊した。

連絡を受けた寺岡長官も関係各先へ打電し、

「陸戦用意、暗号書、機密書類の焼却」

を命じた。

この混乱の責任をとらされて、寺岡長官は三航艦司令長官に、代谷長官は無役にさせられたというのである。

話をもどす。

翌十八日、大西長官は参謀長の小田原俊彦大佐から現状聴取して現有機数は戦闘機が三十機ほどであることを知った。

(こんな戦力でフィリピンを防備しなければならないのか)

しかも焦眉の急で、昨日米軍はすでにレイテ湾入口のスルアン島に上陸を開始したという。

そして、この日一七〇〇(午後五時)『捷一号作戦』が発令された。

一、

一航艦の麾下には四航空戦隊のほかに直属の航空隊が四隊あって、うちフィリピンにいるのはマバラカット、セブ、ニコルスの第二〇一航空隊(二〇一空)とクラークにいる第七六一航空隊(七六一空)の二隊であった。

十九日早朝、大西長官は二〇一空司令山本榮大佐と飛行長中島正少佐、それに七六一空司令前田孝成大佐と飛行長庄子八郎少佐の四人を午後一時までに司令部に出頭するよう命じた。

正午すぎに前田司令と庄子飛行長が到着したので大西長官は体当たり隊結成の考えを伝えた。

山本司令と中島飛行長のほうは三時すぎても出頭しなかったので、大西長官は不測の事態でも起こったのかと案じて副官の門司親徳主計大尉を伴い車でマバラカットの二〇一空本部へ向かった。

この日マバラカット基地はグラマンの襲撃を受けたあと戦爆連合の爆撃も受けたので出発が遅れ、山本司令と中島飛行長は大西長官と入れ違いに一航艦司令部に着いた。

大西長官が待ち切れずに二〇一空司令部へ行ったときいた山本司令は直ちに零戦を用意させてマバラカット基地へ帰ることにして、中島飛行長に操縦させみずからは胴体後部に潜り込んだ。

ところがその零戦が離陸直後に発動機故障で田圃に不時着してしまった。

操縦席の中島飛行長は鼻の頭に掠り傷ですんだが、狭い空間に無理矢理潜り込んだ山本司令は左足を骨折してしまった。

中島飛行長は山本司令を背負って畦道を歩いているときさいわいにも陸軍の貨物自動車が通りかかったので便乗させてもらい、マニラの一航艦司令部へ引き返した。

そこで参謀長の小田原俊彦大佐から体当たり飛行隊結成の話を聴いた。

山本司令は、

「二〇一空は長官のご意見と全く同じですからマバラカットにいる玉井副長とお打ち合わせ下さい」

そう意志表明しておいて、その場で海軍病院に入院した。

中島飛行長は山本司令の意向をただちに電話で玉井副長に伝えた。

こうして一航艦と直属の二〇一空幹部たちのあいだで海軍航空隊史上前例をみない零式戦闘機に二五〇キロ爆弾を抱かせての体当たり攻撃隊の結成が承諾されたのである。

これまでにも戦闘中に二進も三進もいかなくなって止むなく体当たりした単独例はあったが、組織としては初めてであった。

三、

山本司令からすべてを委任された玉井副長は、体当たり攻撃の実施について二〇一空所属の四飛行隊のなかから先任の戦闘三〇五飛行隊長指宿正信大尉を選んで相談した。

玉井副長は一年まえに飛練教程を卒えて松山基地の実施部隊一航艦二六三空（豹部隊）に配属になってきた甲飛十期生を司令として迎えて以来、この雛鳥たちを手塩にかけて育ててきたが、錬成を終了してテニアンに進出し、グアム、パラオ、ヤップと内南洋諸島を転戦して悪戦苦闘をつづけてきているあいだに多くの戦死者を出してしまった。

マリアナ戦以来ともに戦ってきた二六三空が八月ついに解隊となり、玉井司令は再編成された二〇一空副長になったが、甲飛十期生たちもまた二〇一空に編入されてきてふたたび配下になった。

玉井副長はおなじ戦死でも名が遺る彼らの死場所を模索しつづけていた。

これまでのように戦闘のたびにばらばら戦死していったのでは彼らの存在価値を示す術がない。

だがいま決行しようとしている組織的体当たり攻撃に参加させれば、前代未聞のことなので大々的に報道されるであろう。そうなれば後世に名が遺るであろうし、親

たちもわが子を犠牲にしたことが報われるであろう。とそこまで考えたかどうかは判らぬが、玉井副長はその夜つまり昭和十九年十月十九日の夜九時頃になって決断すると、

「甲飛十期生総員集合」

をかけた。

この時点で一航艦麾下の各戦闘機隊に配属された甲飛十期生二百二十名のうち三分の二ほどはすでに戦死していた。

戦後十八年ののちに発刊された『神風特別攻撃隊の記録』によれば、このときの経過は玉井副長自身の言葉としてこう記述されていた。

集合を命じて、戦局と長官の決心を説明したところ、感激に興奮して全員双手を挙げての賛成である。彼らは若い。彼らはその心のすべてを私の前では言えなかった様子であるが、小さなランプ一つの薄暗い従兵室で、キラキラと目を光らして立派な決意を示していた顔つきは、今でも私の眼底に残って忘れられない。その時集合した搭乗員は二十三名だったが、マリアナ、パラオ、ヤップと相次ぐ激戦で次から次へとたおれた戦友の仇討をするのは今だと考えたことだろう。これは若い血潮の燃える彼らに、自然に湧き上がった烈しい決意だったのである。

これを読んだとき私は、

「たとえ軍人であっても自分に死を宣告されたとき、こんな平静な態度で即答できるものだろうか」

なにか不自然さを感じて疑問に思った。

私は練習生教程を卒えたばかりの最年少の雛鳥で終戦までの八箇月間南九州の特攻基地で出撃する隊員たちを見送りつづけてきたが、戦争末期のあの頃はすでに特攻が恒常化していて出撃命令が下ればそれは生きて還れぬ特攻と決まっていたので、先輩たちは、

「親より先に死ぬもの」

と観念していたもののそれでもやはり生への執念は絶ち切れないでいたのに、はたして前代未聞の特攻出撃に命令一下で双手を挙げて即応できたのだろうかと疑問をもった。

この本の著者が当時の一航艦主席参謀と二〇一空飛行長だった人物であることからあるいは命令を正当化しているのではないかとも疑問を抱いた。

これは指揮官を決めた同書の項でも言えた。

「指揮官には兵学校出のものを選ぼうじゃないか」

ということになったあと、

「どうだろう、おれは闕を出してみようと思うんだが？」

と玉井副長は私に言った。私は兵学校の教官時代に接した闕生徒の面影を思い出しながら、闕大尉について、

玉井副長の概略の話を聞き、
「よかろう」
とこの人選に同意したのであった。

そして、關大尉を呼び出した、とある。

玉井副長は、隣りに座った關大尉の肩を抱くようにし、二、三度軽く叩いて、
「關、きょう長官がじきじき当隊にこられたのは『捷号作戦』を成功させるために、零戦に二五〇キロの爆弾を搭載して敵に体当たりをかけたいという計画をはかられるためだったのだ。これは貴様もうすうす知っていることだろうとは思うが……ついてはこの攻撃隊の指揮官として貴様に白羽の矢を立てたんだが、どうか？」
と涙ぐんでたずねた。關大尉は唇を結んで何の返事もしない。両肘を机の上につきオールバックにした長髪の頭を両手でささえて目をつむったまま深い考えに沈んでいった。身動きもしない。——一秒、二秒、三秒、四秒、五秒……と彼の手がわずかに動いて、髪をかき上げたかと思うと、静かに頭を持ち上げて言った。
「ぜひ、私にやらせて下さい」
すこしのよどみもない明瞭な口調であった。玉井中佐も、ただ一言「そうか」と答えて、じっと關大尉の顔をみつめた。

となっている。

關大尉は海軍兵学校出身の職業軍人であるから、戦死については動揺することなどないであろうが、それはしかしいつ戦死するか判っていないから不安がないのであって、戦闘機である零戦に二五〇キロ爆弾を抱かせて敵艦に体当たりさせるなんてことはこれまでに例がなく、副長に告げられたときはまさに青天の霹靂でわが耳を疑い俄には信じられなかったであろうから、返事に窮し逡巡して躊躇ったり尻込みするのは当然で、關大尉の態度がこんな綺麗事であっただろうかとこれもまた疑問に思った。

果してそれから二十年も経ったころそのとき現場にいた甲飛十期生たちの証言を取材した記事が発表され、その出版本によると、まず甲飛十期生については総員集合をかけられ二〇一空本部の従兵室に集合した十期生が四列に整列したのをまえにして玉井副長はこう訓示したという。

「貴様たちに話すことがある。ここ一週間フィリピン東海岸の制空、制海権を握り、このたび捷一号作戦を成功させることができれば日本はこの戦争に勝てる。そのためには貴様たちの零戦に二五〇キロ爆弾を抱かせ、敵空母に突っ込んで叩き潰しておく必要がある。大西長官が

今日二〇一空本部に来られたのもこの目的のためだ。日本の運命は貴様たちの双肩にかかっている」
そこで、玉井副長は声を励まして、
「いいかッ、貴様たちは突っ込んでくれるかッ」
突然思いがけない体当たり攻撃法をきかされて甲飛十期生たちは言葉を失ったままでいた。体当たりという異常な戦法がいままさに実施されようとしている気配に皆シュンとなっていたのである。すると玉井副長が十期生たちを叱りつけるように、
「行くのか、行かんのかッ」
そう大声で言った。その大喝に全員が反射的に手を上げた。

というのである。全員双手を上げて賛成したというのではなく不承不承手を上げたという恰好だったそうである。

これならわかる。そうであろうと納得できる。
關大尉の場合もやはりちがっていた。
最初の反応は、
「ひと晩、考えさせて下さい」
だったそうである。
翌日、マバラカット飛行場で出撃待機しているときに、報道班員の小野田政に、
「まさか自分が指名されるとは思ってもみなかった」

と漏らしたそうだが、關大尉にとっては思いがけないことだったようで、やはり逡巡して即答を避けたにちがいない。

そのとき玉井副長は大西長官の意図を説明して、『捷一号作戦』が発動されたからには明日にも攻撃隊を発信させなければならず、
「時間の余裕がない」
ことを告げて、
「どうだろう。君が征ってくれるか」
そう重ねて迫った。
關大尉は追い詰められてやむなく、
「承知しました」
と答えたので玉井副長は吻とした表情を見せたという。
本来そのように設計されていない戦闘機に二五〇キロ爆弾を装着して爆撃ではなく体当たりを敢行するという前代未聞の戦法に途惑う搭乗員たちは、特別攻撃隊員として志願したのでもなく、生還の余地ある通常の命令を受けたのでもなく、まさに選択の自由も生還の余地もまったくない死の宣告をされたのである。
いかに筋金入りの軍国少年に育てられた人たちと雖も、途惑うのは当然だったであろう。
開戦時の最高指揮官だった山本五十六聯合艦隊司令長官は、生還の余地がない作戦は決して許可しなかった。
真珠湾攻撃のときの特殊潜航艇による攻撃も、

会って慰問袋の礼を述べて西條の生家へ帰着した。
八月にトラック島へ出航したあと十一月に佐世保へ帰投して一年間の海上生活を終えた。
翌昭和十八年（一九四三）飛行機の操縦教育を受けることになって土浦の霞ヶ浦航空隊に入り、終了するとこんどは大分県の宇佐基地で急降下爆撃機操縦訓練の実用機教程を受けた。
昭和十九年一月、霞ヶ浦航空隊の教官になり、練習生たちをよく殴ったことで鬼教官の異名をとった。
そこであるとき、永田教官の発案で独身教官は五月二十七日の海軍記念日までに結婚することを約して誓約書を書かせられた。
關大尉は慰問袋が縁で親交を深めた渡邉家の両親に会って惠美子の姉滿里子との結婚を申し込んで許可された。
海軍大臣の許可が五月二十六日になってしまったので、三十一日に士官クラブの水交社で挙式をすませると土浦の官舎で新婚生活をはじめ、西條の母を呼んで同居生活に入った。
八月三十一日に担当した練習生を卒業させると、翌一日にこんどは臺灣航空隊の教官を命ぜられた。
移動休暇は一週間しかなく、滿里子を鎌倉の実家へ帰し、母を西條へ送り届けると、横濱から飛行艇で臺灣へ出発した。

「帰投の望みなき攻撃は許さぬ」
そういって許可しなかった。
そこで参謀たちはこの特殊潜航艇を収容する母艦をオアフ島とハワイ島の中間にあるラナイ島沖に待機させることでようやく出撃許可が出たのだが、結果は収容できず気休めの机上計画にすぎなかった。

四、

關行男は大正十年（一九二一）八月二十九日に愛媛県新居郡大町村（現西条市栄町）で生まれたからこの時満二十三歳になったばかりである。一人息子だったので厳しく育てられたという。
愛媛県立西條中学校を経て海軍兵学校に合格、一号生徒（最上級）になる直前に父が死去して母子家庭になった。
昭和十六年（一九四一）十一月十五日卒業と同時に戦艦扶桑に配属となり、太平洋戦争を迎える。
翌年四月、水上機母艦千歳に転属して少尉に任官、五月のミッドウェー海戦に参戦したが戦闘にいたらず瀬戸内海の柱島泊地へ帰投した。
少尉に任官して正式に海軍士官になった關は、少尉候補生時代に配分された慰問袋を受け取ったなかに激励の手紙が入っていて、贈り主が鎌倉に住む東京家政学校の女学生渡邉惠美子とわかっていたので、お礼を述べに鎌倉まで行って渡邉家の両親と惠美子の姉滿里子の四人に
臺灣航空隊に着任して三週間ほど経ったころ、とつぜんフィリピンのニコルス飛行場にいる実施部隊一航艦二〇一空の戦闘三〇一飛行隊分隊長を命ぜられた。
艦爆乗りの訓練を受けてから一年十箇月飛行兵養成の教官ばかり勤めてきたが、ようやく実施部隊へ出ることになった。
だが、艦爆乗りがなぜ戦闘隊に配属されたのか不思議だった。
爆撃機を操縦して急降下爆撃をするのなら自信があったが、戦闘機に乗っての空中戦にはまったく自信がなかった。
分隊長といえば飛行隊三役の一人で、隊長につぐ立場である。だが二〇一飛行隊は隊長の鈴木宇三郎大尉がさきの臺灣沖航空戦で十月十二日に戦死していたので分隊長といっても事実上隊長であったから全隊員を率いて攻戦指揮をしなければならない。
それができないのだからなにかやらせてほしいと頼んでも無駄で、飛行隊が出撃するときに見送るだけの役立たずで惨めな思いをさせられるのかと思うと憂鬱だった。
司令部は空襲下にあってニコルスからクラークへ、さらにはマバラカットと移動したが、飛行隊が出撃するたびに留守番の戦闘隊幹部でいることが苦痛だった。
急降下爆撃ならば自信があったが、格闘戦となるとまったく自信がないのだから仕方なかった。

そんなおりに泣き面に蜂で赤痢に罹ってしまい、副島泰然軍医大尉の私室に寝かされて断食した。
十九日になって茶碗半分ほどの粥が許されたその夜、ベットで眠っていたところを従兵に起こされたのである。
西條で一人暮らしの母と、新婚五箇月で妊娠しているかも知れない妻を残して死出の旅に就くのであるから逡巡して当然であろう。

五、

宿舎のベットで眠れぬ夜をすごしている甲飛十期生のところへ二〇一空要務士がきて、
「只今より明日の特攻編成を通告する」
そう前置きして、
「指揮官を關行男大尉とし、体当たり攻撃隊十三名、直掩隊十名、合計二十三名。指名された隊員は明二十日一〇〇〇、二〇一空本部前の庭に集合。以上」
そう発表した。
夜が明けた二十日は天候が悪く、敵機動部隊は南下した模様で敵情報告もなかったが、指名された關大尉と十二名の甲飛十期生たち、それに直掩隊の十名を加えた二十三名は通告どおり二〇一空本部前に整列した。
大西長官が前に置かれた木箱の上に立ち、敬礼を受けて右手で答礼したまま一人一人の顔を食い入るように見詰めたあとの訓示で、

「この体当たり攻撃隊を神風特別攻撃隊と命名し、指揮官のほかの十二名を三名ずつ四隊に分けて敷島、大和、朝日、山桜隊とする。日本はまさに危機である。この危機を救える者は大臣でも大将でも軍令部総長でもない。勿論自分のような長官でもない。それは諸子の如き純真にして気力に満ちた若い人たちのみである。自分は一億国民に代わってお願いする。どうか成功を祈る。皆はすでに命を捨てた神であるから欲望はないであろう。ただ自分の体当たりの結果を知ることができないのが残念であろう。自分はこれを見届けてからず上聞に達するようにする。しっかり頼む」

そう言って涙ぐんだ。

訓示が終わると大西長官は本箱の台からおりて一人ひとりの手を握ってまわった。

四隊に冠した隊名は、大西長官が本居宣長の詠んだ、

「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山桜花」

からとって命名したものだという。

直掩隊十機は、敷島隊に四機、他の三隊に二機ずつ割り当てられた。

大西長官の握手が終わると整列が解かれ、特攻隊員は待機することになり、敷島隊四名と大和隊三名はマバラカット西飛行場に、朝日隊三名と山桜隊三名はマバラカット東飛行場に向かった。

大西長官が二〇一空本部へ戻って休憩していた一五〇〇ごろ、

「敵機動部隊をサマール島東方海上に発見」

の報告を受けた猪口参謀が、海図を持って大西長官のところへ行き、

「距離がぎりぎりですが、攻撃隊を出撃させましょうか」

そう具申したが、大西長官は、

「体当たりは絶対のものだから、到達できる公算のない場合は出撃させない」

そう断言した。

それ以外は発見の報がなかったので、マニラの司令部へ帰ることにした大西長官は、

「もういちど皆に会っていこう」

そう言うと気さくに西飛行場へ向かった。

敷島隊と大和隊の七人はバンバン川の河原の天幕の中で待機していた。

大西長官が車座の中に入って若い隊員たちと懇談しているとき、ふと副官の水筒が目に入ったので水が入っていることを確認すると隊員たち一人ひとりと水盃を交わした。

大西長官がマニラの司令部へ帰ったあと、西飛行場の一郭にまだ特攻編成を知らされていない操縦員たちが集められた。

整列した彼らのまえに猪口参謀、玉井副長、マニラから引き返してきた中島飛行長、それに指宿三〇五、横山

三一一両飛行隊長が立った。

法政大学出身の十一期予備学生久納好孚中尉も整列した隊員たちの近くにいた。

二〇一空は大西長官から、

「今後の増強をもってする特別攻撃隊編成を予め準備すべし」

の命令を受けたのである。

その席で、中島飛行長は、

「このたびの攻撃には全員が双手を挙げて賛成するものと思う。これから体当たり攻撃隊員たちは当方より指名する。異存のある者は手を挙げろッ」

そう一喝した。

その場の雰囲気からして手を挙げられる者などいるはずがなかった。

そばにいた久納中尉が、

「遅かれ早かれ皆死ぬんだから行け、行けッ」

そう嗾けた。

こうして選出した甲飛十期生のなかから八名を選出し、久納中尉を加えた大和隊十二名がセブ基地へ移動していった。

マバラカットには敷島、朝日、山桜の三隊が待機した。

敷島隊には新たに指名された永峰肇飛長（丙飛十五期）が加わった。

十月二十一日〇九〇〇陸軍百式司偵哨戒機から、

「レイテ東方海上に敵機動部隊発見」

の報が入ったという伝令が飛び込んできたので、隊員たちは両飛行場の指揮所へ急いだ。

そこで今日の出撃は敷島、朝日の二隊に決まった。

指揮官關大尉を先頭にして敷島隊員、直掩隊員、朝日隊員の順で横一列に整列した。

玉井副長が銘々に水筒の水を注いでまわり別れの水盃を交わしたあとで、

「攻撃目標は第一に空母で大型、中型、小型の順に狙え。つぎに戦艦、巡洋艦、駆逐艦の順だ。進撃高度は三千メートル、低空で接近してから高度をとり切り返して突っ込め。一番機は飛行甲板のもっとも弱い前、後部エレベーターの真ん中か中央エレベーターを狙え。二番機は一番機の効果を見ておなじところに突っ込め。一番機が爆破に成功したら次の目標を狙え」

と指示した。

玉井副長の訓示のあと、突然静寂を破って数名の整備兵が『海ゆかば』を唄い出すと全員の合唱になり、つづいて『予科練の歌』になった。玉井副長の頬に涙が流れていたという。

合唱が終わって「出発」が下命されると敷島隊員たちはそれぞれの搭乗機を目指して早駆けした。

朝日隊は敷島隊と別れて東飛行場へ急いだ。

關大尉は玉井副長のまえに行くと、
「お世話になりました」
そう言って訣別の挙手の礼をしたあとで飛行服の懐中から紙包みを出すと、
「これをお願いします」
そう言って手渡した。遺髪であった。
マバラカット西飛行場から発進した敷島隊の編隊は東飛行場から飛び立った朝日隊と合流し、直掩隊に護られて東方海上を目指した。
このとき敷島隊の谷暢夫機は発動機不調で出撃を中止した。
一時間余り飛行して予定地点に到達したが敵艦隊の姿はなく、雲量が十近くになっていたので高度を下げて海上に出たがやはり船影は発見できなかった。なお一時間ほど索敵したがやはりなにも発見できなかった。
關大尉は、
「万一敵空母を発見できない場合は爆弾を捨てて近くの基地に不時着し再起をはかるよう」
指示されていたので、盛大な見送りを受けて出撃しておきながら基地に戻るのはなんとも惨めであったがやむなく断腸の思いで大きくバンクして反転したので列機も従った。
今日のところは死地から解放されてひとまず吻としたものの抱いている二五〇キロ爆弾の始末に困惑した。
特攻機は発進して洋上に出ると爆弾の安全装置を外すので、帰投するとなると着陸のさいに爆発する危険があった。
遠くに海岸線が見えるところまできた關大尉は高度を上げて爆弾を海に捨てたので、列機もそれに倣った。
直掩機はマバラカット基地に帰投したが、關大尉らの敷島隊四機と朝日隊二機はルソン島南端のレガスビー基地に不時着して翌日北部のマバラカット基地に帰投した。
關大尉は憔悴した表情で玉井副長の前に立つと頭を垂れ低声で、
「申し訳ありません」
と呟き、涙を流して謝った。
この日から關大尉の苦脳の日々がはじまった。
いっぽう昨日マバラカット基地から中島飛行長とセブ基地に進出した大和隊も二十一日に出撃の待機をしていた。
「空母六隻を基幹とした敵機動部隊発見」
の報に出撃準備を急ぎ発進しようとしたそのとき、敵機の襲撃を受けて六機全機が炎上してしまった。
ただちに三機だけの予備機を準備して、一六二五大和隊長久納好孚中尉と甲飛十期の中瀬清久一飛曹、それに同期の大坪一男一飛曹の直掩機が慌ただしく発進した。
この日は天候不良だったため中瀬機と大坪機は久納機と逸れて帰投したが、久納機はついに還らなかった。

出撃前に久納中尉は、
「自分はいちど出撃すれば絶対に還ってこない、かならず体当たり攻撃を成功させる」
そう豪語しており、
「いったん出撃した以上は引き返してくるような無様なことはしたくない」
と漏らしていたという。
また出撃の挨拶のあとで中島飛行長に、
「もし空母が見つからなかったらレイテに行きます。そこに敵艦隊はかならずいるでしょうから自分はレイテへ行って体当たりします」
とも言っていたという。
久納中尉は法政大学生の頃から海軍予備航空団に所属して操縦訓練を受けていて、十一期予備学生のなかでは伎倆抜群と評価されていた。
セブ基地での士官の中心は兵学校出身の職業軍人ではなく、予備学生であった。
出撃前夜、久納中尉はピアノを弾いたという。彼の好きなベートーベンのピアノソナタ第十四番ハ短調『月光』だったそうである。
久納機の戦果は確認できなかったが、本人の性情と特攻に対する熱意から推察して体当たりしたものと推察された。
二十二日、昨日マバラカット基地で待機となった山桜隊は、索敵機からの情報を受けて一六〇〇タクロバン東方の敵機動部隊攻撃に出撃したが、天候不良のため発見できずむなしく帰投した。
大和隊は補充機の調達待ちでセブに待機していた。
二十三日。敷島隊は二回目の出撃をしたが天候不良のため敵艦隊を発見できず、またもむなしく帰投した。
大和隊は、佐藤馨上飛曹（内飛四期）が単機でスルアン島を目指して出撃し、体当たりを決行したと思われるが詳細不明。
このとき佐藤機と一緒に出撃するはずだった石岡義人一飛曹（甲飛十期）機は途中発動機不調で引き返していた。
二十四日、敷島隊はこの日三回目の出撃をした。
マバラカットから南下してマニラ上空を通過してときは晴れていたが、しだいに雲量が多くなり視界狭小の悪天候になっていった。
予定地点に到達しても敵艦船は発見できず、やむなくまたもや帰投を余儀なくされた。
關大尉はその都度玉井副長の前に立って、
「申し訳ありません」
と涙の謝罪をくり返してきた。
いったん死を覚悟して飛び立ちながら死場所を得られ

ずに帰投する。この世の土を踏んだ途端に生への執念が蘇る生殺しの状態を三度も繰り返す地獄のような試練に耐えねばならぬ心境はいかばかりか察するにあまりある。

この日、大西長官は、

「明十月二十五日早朝、栗田艦隊のレイテ湾突入に呼応して体当たり特別攻撃隊の全機を発進させよ」

そう発令した。

敷島隊はマバラカット、大和隊はセブにそのまま待機し、朝日、山桜両隊は最南端のミンダナオ島ダバオに進出して分散待機した。

そして、十月二十五日を迎えた。

二〇一空司令山本榮大佐は敷島隊の出撃を見送るために昨日マニラの海軍病院を抜け出して戻ってきていた。

山本司令は骨折した不自由な右足を引き摺りながら關大尉ら一人ひとりに激励の言葉をかけ、固い握手をしてまわった。

副島軍医大尉は山本司令を滑走路近くまで介添えしたが、關機が動き出すと一緒に走り略帽を千切れんばかりに振りつづけて別れを告げた。

敷島隊はこの日〇七二五、關行男大尉を先頭にして谷暢夫、中野磐雄、山下憲行一飛曹（甲飛十期）、永峰肇飛長（丙飛十五期）、大黒繁男上飛（丙飛十七期）、の爆戦六機に、直掩の西澤廣義飛曹長（乙飛七期）、本田愼吾上飛曹（丙飛四期）、菅川操、馬場良治飛長（丙飛十五期）の四機がつづいて出撃していった。

このうち山下機は途中発動機不調でレガスビー基地に不時着した。

敷島隊は東海岸沿いに南下していったが、途中サマール島沖でレイテ湾に殴り込みをかける栗田艦隊を認めた。

やがてレイテ湾に近いタクロバンの沖に敵空母五隻と駆逐艦の一群を発見した。

目標に近付いてからは電波探知機で発見されないよう海面を低高度で進攻していったので気づかれなかったのだ。

特攻各機は關機に倣い一旦急角度で上昇し三千メートルあたりでそれぞれに目標を選ぶと、一〇四九一斉に空母目掛けて突入した。

指揮官關大尉の一番機は五隻の護衛空母のうちのカリニン・ベイを目標にして急降下していった。対空砲火で被弾しながら見事飛行甲板前部に命中したが抱いていた爆弾は胴体から離れ飛んでしまい炸裂しなかった。

それを見た谷一飛曹の二番機がすかさず追撃して左舷に体当たりして大破させた。

その他はどの隊員がどの目標に突入したか定かでないが、旗艦キトカン・ベイには艦橋を目指して外れ、飛び越えた左舷外側通路に衝突されて小破した。

ホワイト・プレーンには二機が向かったが一機が左舷

至近の海面に突入して小破させたものの一機は途中被弾したのでセント・ローに向かい一〇五二飛行甲板に突入したので大火災が起こり、数回大爆発がつづいたのち一一三〇船首を上にして沈没した。

大和隊のいるセブ島はレイテ湾の西方一〇〇キロの位置にあるので偵察機や攻撃機が頻繁に不時着していた。

そのセブ基地には大和隊のほかにマバラカットで新編成された若桜隊が待機していた。

基地指揮官中島飛行長は大和隊を四次に分けて出撃させることにして、この日は大和隊の第一次と若桜隊が出撃した。

〇九〇〇大和隊大坪一男一飛曹（甲飛十期）と荒木外義飛長（丙飛十五期）がバダク島方面の空母二隻を基幹とする機動部隊の攻撃に向かい、國原千里少尉（乙飛五期）、大西春雄飛曹長（甲飛二期）組の彗星艦爆機一機が直掩したが全機未帰還で消息不明だった。

夕刻一八三〇に若桜隊の木村繁、崎田清、勝又富作、中瀬清久一飛曹（甲飛十期）の四機が出撃し、新井康平上飛曹（甲飛九期）と日村助一一飛曹（丙飛十期）機が直掩したが、敵艦隊を発見できずに帰投したなかで中瀬機だけは帰還せず消息不明だった。

この日は關大尉指揮の敷島隊の戦果で沸いた。

零戦五機の特攻機で敵護衛空母一隻撃沈、一隻大破、二隻小破の戦果を挙げたのである。

これまでの戦闘でこれだけの効果をあげたのははじめてだった。

味を占めた軍令部は彗星艦上爆撃機に五〇〇キロ爆弾を抱かせ、さらには頭部に一、五〇〇キロの火薬と尾部にロケットを装備した小型グライダーに搭乗員一名を乗せて一式陸上攻撃機の腹部に懸吊した人間爆弾『桜花』、一、六〇〇キロの炸薬を搭載した魚雷に搭乗員一名を乗せて潜水艦で運んだ人間魚雷『回天』と特攻は拡大していき、大西長官が關大尉らの特攻隊を出撃させるとき先任参謀の猪口力平中佐に、

「こんなことをせねばならないというのは日本の作戦指導がいかにまずいかということを示しているんだよ。こりゃあ統率の外道だよ」

そう言ったというのだが、その統率の外道がいっときの戦果に酔い痴れて拡大していき外道も外道、大外道になっていってしまったのである。

だが結局は機材の消耗に生産が追いつかず、搭乗員もまた養成が間に合わず、じり貧になっていってしまった。

おわりに重ねて述べるが、この太平洋戦争時代を生きた人たちの犠牲があって今日の平和と繁栄があるのだということを、いつまでも忘れないでいてほしい。

（了）

ドキュメント「明治元年」(1)
―明治維新から150年

山田嘉久

神話で始まる「日本史」(皇国史観)も戦後は一変した。旧制中学から大学予科に入学した私たちの「歴史」担当は30才そこそこの松島栄一。その前年には母校講師になったばかりの新米教師だった。大学在学中に教えを受けた津田左右吉に大きく傾倒したという先生は大学卒業後、なぜか東京帝大史料編纂所に勤務している。戦前の東大国史研究室は平泉澄(代表的な皇国史観学者)の全盛時代で、その影響の少ない史料室を選んだという。

逆に此処で家永三郎や遠山茂樹などと同僚となったことがその後に大きな影響を与えたことは否めない。

戦後は「羽仁サロン」にも参加して、私たちが教えられた頃には筋カネ入りの唯物論主義学者だった。

先生の授業はユニークだった。

まず常識的に「日本国の誕生」から始まったが、ホモ・サピーエンス、北京原人、旧石器時代とすすんだものの、

はじめに

戦前における旧制中学の「歴史科目」は日本史(「国史」と呼ばれた)のほか「東洋史」「西洋史」に分かれていた。

私が入学した昭和18年頃にはそれぞれ専門の教師が担当していたが、戦争末期となると教師不足からか、一人の教師がすべての歴史科目を担当することが多かった。

その歴史の時間、担当はS教頭だったが、授業の始めには必ず全員で藤田東湖の「天地正大の気」を朗読させられた。東湖は云わずと知れた水戸学の大家で、当時の皇国史観では大いにもて囃されていた。

「天地正大の気　粋然として神州に鍾る
　秀でては不二の嶽となり　巍巍として千秋に聳ゆ」

で始まるこの詩はかなり長文のものだが、おかげで70年以上経った今でもその半分ほどは暗誦できる。

これがなかなか終わらないのだ。夏休み前になってもまだ弥生式土器あたりをうろうろしている。これで日本通史が終わるのだろうかと他人ごとながら(?)心配になってきた。

ところが夏休みが終わって2学期に入ると、一挙に「明治維新」に飛んだのには驚いた。先生の言い分では日本史は「日本国の誕生」と「明治維新」だけ知っていれば充分とのことだった。

この後、数年経って先生が「日本の国が出来るまで」(共著)で「毎日出版文化賞」を取ったが、この時初めて先生が古代史の専門家だった事を知った。今にいたるまで私はこの本を読んでいないが、類書「日本人はどこから来たか」(岩波新書)は昭和50年代に熱心に読んだ。著者は私と同じ中学の1年後輩の加藤晋平(千葉大のちに筑波大教授)。

なによりも加藤は司馬遼太郎のお気に入りの学者で、司馬の「街道をゆく」に何度も登場するし、司馬のモンゴル行きにも同行している。80才過ぎまで「ジンギスカンの墓」を探して、長期間、モンゴル国内のパオに居住していたという学者らしい真摯な態度に今も感銘を受けている。

〈私は先年、モンゴル高原へゆき、山の多い僻地に幕舎を張って調査をしておられる加藤教授にであった。北極から吹いてくる風の中なかで、風が刻んだような相貌のひとだった。〉(「街道をゆく―オホーツク街道」)

加藤はこの本で「日本民族は北方型蒙古系民族に属するもので、その起源はシベリアのバイカル湖畔にある」と結論ずけている。

司馬はこの説に賛同しているが、ただ加藤の「ジンギスカン墓存在説」に必ずしも賛成ではなかった。にも拘らず、加藤への資金援助を惜しまなかったと加藤自身から直接聞いた。

なお、松島教授も晩年、司馬と対談している。(昭和40年「中央公論」)テーマは古代史ではなく「近代日本を創った宗教人10人を選ぶ」。この中で先生は「大谷光瑞と西域探検」を取り上げているが、この頃、彼は文明史にも関心を持っていたのであろう。閑話休題。

先生の「明治維新」の授業は、当然、徳川慶喜の「大政奉還」(慶応4年)で終わったが、私はそれ以降の日本の近現代史については体系的に学んだことが無い。

この事は現代の高校生でも同じようで、特に平成に入ってから世界史は必修科目に対して日本史は地理との選択科目と聞いて驚いた。

日本の近現代史の中では、20世紀以降の明治時代については司馬の代表作「坂の上の雲」に負うところが大きかった。

しかし我々昭和ひとけた世代にとって最も関心のある

時代はなんといっても、共に生きた昭和史である。そのため司馬の昭和史を期待したのだが、それは空しかった。

なぜ司馬が昭和史を書かなかったのか？

辛口の評論家佐高信などは「司馬が昭和史を書かなかったのは、彼の好きな昭和天皇を書けなかったからだ」と酷評したが、一面では当たっているかもしれない。

ともかく司馬に裏切られた我々は昭和史については同年輩の歴史家秦郁彦、半藤一利などの著作に依るしかなかった。

しかし司馬が「坂の上の雲」の次に書いた「翔ぶが如く」は明治10年の「西南の役」を壮大に描いた長篇だが、維新後から明治初期の歴史に疎い私にとっては格好の歴史書となった。

特にそのターニングポイントとなった「明治元年」（1868年）―徳川二百余年の歴史に幕が下ろされ、「ご一新」のスタートとなったこの年は日本国民にとっては驚きと感動の一年だったであろう。

丁度、それから77年後の昭和20年8月に我々日本国民が経験した驚天動地の心情と同じものだったに違いない。

そんなことを想像しながら「維新から150年」の今―「明治元年」をドキュメント風に追ってみた。

1　慶応4年1月

この年の江戸は元旦から晴天に恵まれていたという。

干支は戊辰。この年の9月16日には「明治」に改元されることになる慶応4年は穏やかに明けた。

しかし江戸城は今年もその主である将軍が不在だった。14代将軍の徳川家茂は3年前の慶応元年（1865）に長州征討に出陣してそのまま大阪城に滞在したが、翌慶応2年7月20日に死去してしまった。同年12月に京都にいた徳川慶喜が15代将軍を継いだものの、慶応3年10月には大政を奉還して二条城、ついで大坂城に滞在中だった。

したがって江戸は2年続けて「主」不在のまま正月を迎えた。

一方、上方の新政府軍には大阪の旧幕府軍が京都に向かって進軍を開始したという知らせが入った。元旦、大坂城で「討薩の表」を掲げた慶喜が2日、主力部隊を京都に向け進発させたのだ。

旧幕府軍2万余に対して薩長同盟軍は6千に過ぎない。

3日、京都南郊の鳥羽街道で旧幕府軍と薩摩軍がついに戦闘を開始した。世にいう「鳥羽、伏見の戦い」の幕開けである。これは明治2年（1869）5月まで続く戊辰戦争の始まりであった。

鳥羽では旧幕府軍が善戦、伏見では旧幕府軍が一方的勝利で、勝利まではあと一歩という情勢であった。しかし翌日、戦況は大きく変わった。

4日、「玉」を擁する新政府は幼帝（明治天皇）から「錦旗」（錦の御旗）を下賜させるという演出を行ったのである。

賊軍であるはずの新政府軍陣地に錦旗が奉じられ、天皇の代理たる仁和寺宮嘉彰親王が征討大将軍として出陣となると、にわかに薩長の私兵が「官軍」、旧幕府軍が「賊軍」になってしまう。旧幕府軍にとっては、まさに青天の霹靂であったであろう。

この演出は「翔ぶがごとく」では岩倉具視、大久保利通の仕業と見ている。

鳥羽を進軍中の旧幕府軍は慶喜に直接指示を仰ぐべく友軍を一旦、淀城まで後退させることにした。こうして攻守は全く逆転、旧幕府軍は戦闘意欲を著しく喪失、敗色が濃くなってきた。

一方大坂では海上で大きな動きがあった。

旧幕府軍の軍艦頭榎本武揚が最新鋭の軍艦「開陽丸」で薩摩海軍を敗った。のちに「阿波沖海戦」と呼ばれ近代海戦の草分けと位置づけられている。

5日、一旦、淀城まで後退した旧幕府軍だったが、どうしたことか淀城は固く門を閉ざして旧幕府軍の入場を拒んだ。

淀藩は譜代の家柄で城主稲葉正邦は幕府老中を務めた人物である。このときは正邦は江戸城にあり不在であったとはいえ、旧幕府軍のうけたショックは大きかった。

鳥羽伏見の戦いに敗れた旧幕府軍は**6日**、大坂へと敗走した。

出馬要請を受けた慶喜は「ただいまより直ちに出馬せん。おのおの、持ち場に帰り準備せよ」と命令しながら、夜陰に乗じてひそかに大坂城を抜け出してしまったのである。

大坂湾口の天保山まで抜け出すことに成功した慶喜一行だが、暗闇の中で味方の開陽丸を見つけることが出来ず、やむなくアメリカ艦「イロコイ」に乗船して一夜を明かす始末だった。

一行は翌朝になってようやく開陽丸に乗り移り**8日**、江戸に向けて出帆した。

12日早朝、慶喜は品川沖に停泊する開陽丸から、江戸湾を望む将軍家の別荘浜御殿（浜離宮恩賜公園）に上陸した。（現在、その地に碑が建っている）

大坂を離れてから5日も経過している。これほどまで時間がかかったのは、紀州大島沖で暴風雨に見舞われ八丈島の北方まで流されたためで、10日夕になってようやく浦賀港に辿りついたものだった。なんとも無様な江戸行きだった。

知らせを聞いた幕臣勝海舟は馬を駆って浜御殿に向かった。

〈「錦旗が出た」とのみ、慶喜はいった。（中略）

「あとをよろしくとりはからえ」と命じ、椅子を立った。〉（「最後の将軍」）

慶喜は13日、江戸城中で和戦についての会議を開いたが、席上、主戦派の勘定奉行兼陸軍奉行並小栗忠順が徹底抗戦を主張している。

21日、新政府参与兼会計事務係に任じられた元福井藩士三岡八郎（のちの由利公正）は3百万両の募債と金札発行を建議。23日に政府のよって決定され、三岡に事務管掌が命じられた。

（生前の坂本竜馬も早くから三岡に注目していて、暗殺3日前に福井藩家老に出した手紙の中にも新政府の財政担当者に三岡を出仕させるよう懇願している。この手紙は最近、発見された。）

23日、大久保利通は会議で大坂遷都を主張した。

「大坂は外交、経済、軍事において首都に最適である」しかしこの案は公卿の猛反対を受け否決されたが、それでも大久保は諦めず、天皇の大坂行幸という折衷案を出して実現した。

大久保はそのままなし崩しに大阪遷都を実現しようとしたが、この案も失敗に終わった。

その後、紆余曲折を経て遷都案は大坂から江戸へと変更されるのだが、それには前島密の奔走が力があったと司馬は推察している。

当時の前島は江戸で医学を学び、ついで京へ上り幕人西周についてオランダ語を学んでいた一介の書生に過ぎなかった。その後、新政府に仕えやがて官営郵便制度を起こし「郵便の父」といわれるようになったことは周知の通りである。

2　慶応4年2月

3日にも西郷隆盛は大久保利通へ手紙を出している。

徳川慶喜が松平春嶽（前福井藩主）を通じ朝廷が徳川家に対して穏便な措置を取ってくれるよう協力を求めてきたと書いている。しかし西郷はこの嘆願を受け入れることなく「断固、追討の詔勅を発するべきだ」と大久保に同意を求めている。

その結果、その日のうちに明治天皇の名において「徳川慶喜親征の詔」が発せられた。

7日、当の春嶽は山内容堂（土佐）、島津忠義（薩摩）と連名で新政府に建議書を提出した。攘夷論を廃止して日本の開国方針を明らかにして外国公使に参朝させるべきことなどである。

8日、慶喜は新政府に恭順の意を強調するため、前会津藩主松平容保と桑名藩主松平定敬を登城禁止とした。随分、身勝手な言い分である。

2人はそれぞれ京都守護職、京都所司代として慶喜の

腹心中の腹心。慶喜という人物の冷静沈着さ、逆にいえば彼の冷酷さを窺い知ることができる。

11日、佐賀藩士大木喬任が政府に対して鉄道建設の建白書を提出した。佐賀藩は早くから「精錬方」と呼ばれる理化学研究部門を設置して佐野常民（後の日本赤十字事業の創設者）はじめ有能な技術者を登用していた。

数年後、同じ佐賀藩出身の大隈重信による鉄道建設（新橋―横浜間）に繋がってゆく。

12日、慶喜は江戸城を出て上野寛永寺に閉居した。

しかし同日、旧幕臣17名が雑司ケ谷の料亭に集まり会合を持っている。このグループがのちの「彰義隊」となる。

一方、この日、西郷隆盛は東海道先鋒軍の薩摩藩諸隊を率いて京都を進発した。新政府の東征大総督有栖川熾仁親王が京都を進発したのは遅れること2日後の14日である。なお、この親王は14代将軍徳川家茂の正室となった和宮の元婚約者として知られている。

15日、堺では土佐藩兵がフランス艦隊の乗務員を殺傷するという事件が起きた。「堺事件」である。

この日、堺に上陸し乱暴を働いていたフランス軍艦の水兵と同地を警護していた土佐藩兵とが衝突。土佐藩の隊長が発砲を命じフランス側に11名の死者を出した。

欧米諸国との衝突を避けたい新政府は「指揮した隊長2名と関係者全員を処刑せよ」との先方の要求を受け入れ関係者に切腹を命じた。

隊長以下20名の切腹は堺の妙国寺で行われたが、フランス艦長と20名の水兵が立ち会った。しかし切腹が11人まで終わったところでフランス艦長は耐え切れなく中座して、刑の中止を求めたのである。

22日、先に江戸城登城を禁止された会津の松平容保が国元に到着した。この時の模様は、当時10歳だった柴五郎（後の陸軍大将）が詳細な記録を残している。（「ある明治人の記録」）

なお、私ごとながら私が最も感銘を受けた本の一つである。

長きにわたり京都守護職の重責を担いながら「朝敵」の汚名を着せられてしまった会津藩士の嘆きは、やがて怒りへと変わり会津若松城籠城そして落城への悲劇と繋がっていくのである。

（このことについては司馬著「王城の護衛者」に詳しい）

23日、数度の会合と激論を経て、ようやく「彰義隊」が結成され、浅草の本願寺（東本願寺別院）に屯所が設置された。

25日、西郷隆盛は東海道先鋒軍の各藩隊長を静岡に集

め、江戸進軍の命令を伝達した。江戸城攻撃は時間の問題となった。

30日、京都ではイギリス公使パークスが明治天皇謁見すべく参内の途中、2人の刺客に襲われた。幸いパークスにけがはなく大事に至らなかったが、まだまだ市中には「尊王攘夷」に凝り固まったものや新政府の政策に反対する者が溢れており、物騒な事件は後を絶たなかった。

3　慶応4年3月

1日、新撰組を中心とする「甲陽鎮撫隊」が甲斐国甲府に向けて江戸を出立した。東山道（中山道）から江戸を目指す新政府軍の侵攻を食い止めるため、江戸攻略の要となる甲府城を接収することが目的だった。

近藤に甲府行きを命じたのは陸軍総裁となった勝海舟だった。「甲府城攻略のあかつきには甲府10万石を与える」と確約したと伝えられる。近藤は勝の空証文を信じて、すっかりその気になり自身のために大名並みの立派な駕籠を仕立てる始末だった。

道中の甲州街道沿いには近藤や土方の故郷がある。「故郷に錦を飾る」気分の彼らは各地で大歓迎を受け、どんちゃん騒ぎが続いた。そのため一向に進軍速度が全く上らなかった。

〈かれらが一向に戦闘行軍らしい行軍をしなかったのは、どうせ行ってもだめだ。という気持ちが半分ぐらいあったのではないか。それよりも、この甲州街道の村々で錦をかざり、一代の死みやげにしたいという気持ちが近藤にあったのであろう。〉（街道をゆく―甲州路）

いずれにせよ、ここで時間を無駄にしたことが、後々まで彼らに祟ることになる。

5日、東海道を進軍してきた新政府軍が駿府城（静岡市）に入場した。西郷隆盛は大総督有栖川宮の静岡着を鞠子（丸子）宿で迎えた。

同日、江戸では勝海舟が山岡鉄舟と会っている。鉄舟を勝の元に送ったのは慶喜の信任厚い高橋泥舟だった。鉄舟は泥舟の義弟にあたる。

6日、東征軍大総督府は東海道、東山道から江戸を目指していた新政府軍に対して、15日をもって江戸城を総攻撃する旨を通達した。

なお、この頃、新政府軍の陣中では「都風流トコトンヤレ節」なる俗謡が流行っている。（みやさん、みやさん、御馬（おんま）の前でチラチラするのはなんじゃいな）で始まる歌詞は長州藩の品川弥二郎が作ったと言われ日本初の「軍歌」となった。そして新政府軍の進軍につれて全国の庶民の間にも広まっていった。

同じ日、近藤勇率いる甲陽鎮撫隊が勝沼（甲府市）で新政府軍に大敗を喫した。東山道を江戸に向けて進軍していた新政府軍は乾（板垣）退助に別働隊を指揮させ、近藤らが道中で遊び呆けのんびりと行進している間に、いち早く甲府城を攻略してしまった。

戦闘は6日の正午ごろに始まったが、近藤の戦法はあくまで新撰組流の白兵戦。それに対する兵の練度、火力で勝る新政府軍は2時間ほどで壊滅に追いやった。

甲州一国の主となる夢を打ち砕かれた近藤は、往路とは桁違いのスピードで江戸へ向け敗走していった。

8日、桑名藩主松平定敬（さだあき）が横浜から海路越後に向かった。定敬は会津藩主松平容保とは異母兄弟で、幕末には京都所司代として共に将軍慶喜を献身的に支えていた。

しかし慶喜は前述の通り、新政府への抵抗を訴える2人に江戸城登城禁止を命じたため容保は会津へ帰藩したが、定敬は桑名藩がすでに新政府への恭順を決めていたため帰藩出来なかった。そこで百名ほどの藩士を伴って、桑名藩の分領である越後柏崎（新潟県）を目指すことにしたのである。

ここから定敬の長い変転の日々が始まった。

その後、8月、越後での戦争が敗色濃厚となってきたので、定敬は会津で抵抗を続けている兄容保の元に向かった。しかし此処でも会津若松城の落城前に兄と別れ仙台藩へ向かった。

10月には松島で箱舘へ向かう榎本武揚の旧幕府艦隊に合流した。この時の定敬は髪を下ろして一兵卒に身をやつしていた。

いったんは箱舘に落ち着いた定敬だったが、五稜郭陥落前に箱館を脱出、アメリカ船で横浜に戻りようやく降伏した。

9日、勝海舟の使者山岡鉄舟は新政府が東征軍本部を置いている駿府城に到着した。そして勝から預かった書状を西郷隆盛に手渡すと、堂々たる態度で戦争を欲する新政府軍の態度を論難した。

一方、西郷は「城明け渡し申す可き事」など7カ条の和睦条件を提示したが、これに対して鉄舟は慶喜の「備前藩にお預け」という項目にかみついた。

主君を思い食い下がる鉄舟に感じ入った西郷は「慶喜殿の件は吉之助（西郷）がきっと引き受けて取り計い申す」と確約を与えている。

西郷の元には鉄舟の他にも、さまざまなルートを通じて江戸攻撃の中止を求める嘆願が寄せられている。14代将軍徳川家茂の正室和宮が送った嘆願書もその一つであろう。

13日、勝海舟は薩摩藩邸に出向き西郷隆盛と面会した。先の鉄舟の西郷説得が功を奏し15日の新政府軍による江戸総攻撃を直前に控えきわどいタイミングで漸く実現した会談であった。

しかし当日の勝は緊迫した状況にありながら、和宮の身の安全しか話題にしなかった。

14日、前日に引き続き勝は薩摩藩邸に出向き西郷と本格的な講和談判に入った。勝は徳川家の処分案に修正を求め、西郷は15日と定めた江戸総攻撃を延期、この修正案を持って京都に赴き19日の朝議にかけて承認された。

ここに、江戸の無血開城が実現したわけである。

晩年の海舟語録である「氷川清話」にはこうある。

「あのときの談判は実に骨だったよ。官軍に西郷がいなければ、話はとてもまとまらなかっただろうよ。（略）おれはほかの官軍には頓着せず、ただ西郷一人を眼中においた。」（氷川清話）

同じ14日、明治天皇の名において政府の基本政策を示す「五箇条の御誓文」が発布された。

松平春嶽（越前）に仕えていた横井小楠の構想をもとに同藩士由利公正が原案を作り、さらに土佐藩士福岡孝弟が手を入れたとされる。由利は親交のあった坂本竜馬の「船中八策」（慶応3年6月）を参考にしている。

28日、新政府は「神仏判然令」を発した。

以降、数次にわたり発せられた神仏判然令はいわゆる神仏混淆を正そうとしたもので、これを契機に数年間にわって庶民の伝統的信仰を揺るがす「廃仏運動」が巻き起こった。

奈良県では興福寺（奈良市）がその標的になった。

〈この時期に、五重塔が、わずか二十五円で売りにだされたのである。買主は商人だったが、最初は薪にしようとした。（中略）その後、明治政府はその行き過ぎに気づき、廃仏毀釈をひっこめ、明治十五年には、逆に社寺を保存するための「古社寺保存金制度」を実施した。〉（街道をゆく―近江散歩）

この年、庶民は上野の花見を楽しむことはできなかった。上野の寛永寺に前将軍徳川慶喜が閉居しているために上野山内は閉め切られて立ち入ることができなかったためである。

例年、この時期に行われる寺社の宝物ご開帳も見送られ、江戸っ子たちは不満と不安の中で、新しい時代の足音に耳をそばだてていたのである。

（続く）

スペイン・ポルトガル弥次喜多道中（前編）

田寺怜葦

令和元年九月十八日水曜日。いよいよスペインに向けて出発です。

羽田発二十二時五十五分ＡＦ２９３便でパリ・ドゴール空港を経由してスペイン・マラガへ。ドゴール空港でのトランジットは早朝の五時間近くもあり少々心配です。ツアー以外で海外に行った経験のない女性二人の個人旅行は、かなり無謀と言えるかもしれません。旅のきっかけは町内の自治会で親しくなった日夫妻からのお誘いでした。御夫妻はスペインのマルベージャに別荘をお持ちで、年に一度は行かれるとのこと。御二人共八十代半ばにも拘わらず、とんでもなくお元気です。「良ければお出でよ。私たちは九月に行くけど、一緒でなくても、行くならいつでも鍵をあずけるから。」そんな夢のようなお誘いをいただいたのは六月の初め頃でした。こんな美味しいお話を無視できるほど冷静な私ではありません。さっそく近所の友人Ｋちゃんに相談を持ちかけたところ、私同様ノリの良い彼女はもちろん同意。私より一回り若く、会社勤務もしている彼女でしたが、何とか調整して九月に十日間の休みを取ると決意したのでした。

あれから三ヶ月余り、文字通り降って湧いた海外旅行の企画に、二人の夢はどんどん膨らんで行きました。初めは、別荘を拠点にのんびりと近場を楽しむつもりでしたが、せっかくだからあそこも、ここも行きたいがドンドン増えて、最終的には修学旅行さながらの強行軍となってしまいました。まず十九日はマルベージャの街を散策。翌二十日はマラガ。二十一日には御夫妻とお別れしてグラナダへ行き一泊。二十二日はグラナダから約九時間の個人ツアーでロンダ、セテニル、オルベラの村々を巡りセビリアまで行き、セビリアで二泊。二十四日はセビリア空港からリスボンへ（約一時間）。そしてリス

ボンで三泊して帰国というスケジュールなのですが、リスボン滞在中も予定はぎっしり。まず到着した日の夜はバイロ・アルト地区という場所にある、ファドを聴かせてくれる店で夕食。二日目はバスでエヴォラという村へ行きます。そして最終日の二十六日はポルトガル国鉄の特急列車でポルトへ行くのです。地図上で見ればそれほど大それた行程ではないのですが、土地勘も言葉も不自由な二人にとっては正気の沙汰ではないと言えるでしょう。

私たちのスケジュール表を見たH夫妻は、日を白黒させて言葉を失っていたようです。それでも脳天気な二人の計画は着々と進行していきました。インターネットのお陰で、航空チケットやホテル、列車等の予約が容易いということが現実の不安を忘れさせてしまいます。とはいえ、まずH夫妻の別荘へ辿り着くことの困難を考えて、同じ飛行機で行くことになったのです。同じ便ですが、御夫妻はビジネス、私たちはエコノミーという違いはあります。出発前に忘れてならないのがケータイ用のポケットWiFiをレンタルすることです。これが旅先で私たち二人の命綱になるのですから。

マルベージャ

マラガ空港からバス一時間程でマルベージャのバスターミナルに到着。例年はマラガ空港から別荘まではタクシーを利用するのだそうですが、バスに不慣れな私たちのために敢えてバス移動してくれるお二人に感謝です。節約旅行の私たちにとって、基本的な移動手段はバスと電車なのですから。マルベージャのバスターミナルから別荘まではタクシーで十五分くらいでした。マラガ同様、マルベージャもヨーロッパ有数の高級リゾート地です。別荘は、スペインらしい白いコンドミニアムの一棟で、安心安全な環境です。一階に居間、食堂等があり、寝室は二階。主寝室、客室にはそれぞれに専用のバス・トイレがあってホテルと変わりません。欧米方式のこの造りは日本人から見ると何とも贅沢です。陽射しは強いけれど空気はサラリとして爽やか。冷房も要らないくらいです。荷を解いて一息入れた後は四人で近くのレストランへ昼食に。アンダルシア地方は日の出、日の入りが遅く、夕食も二十一時頃になるのが普通らしい。昼食後は御夫妻がマルベージャの街を案内して下さいました。お二人の体力には今更ながら驚かされます。マルベージャはセレブの街、マリーナにはヨーロッパ諸国からの豪華なクルーザーが停泊しています。その中に見覚えのある旗を掲げた一隻が…マルタ十字…やっぱり。船壁にVALLETTAの文字が読めました。数年前のマルタ島旅行を思い出して懐かしさがこみ上げます。一番感動したのはマリーナへ続く通りで、通りの中心線に数

メートルおきにダリの彫刻が並んでいました。彫刻に触ることも写真を撮ることも自由なのです。なんてゴージャスな通りでしょう。

その夜は砂浜のレストランで、是非とも食べたかった鰯のエスペト（塩焼き）をいただきました。美味しかったけれど、手で食べるせいか、シャワーを浴びた後も指先の臭いが気になった。たぶん体調があまり良くなかったせいかもしれない。そういえば、普段は余り食べないアイスクリームばかり食べたくなる。胃が弱っている時のアイスクリームってどうなんでしょう。翌日二十日は、私たち二人だけでマラガへ行く予定です。

マラガ

ゆっくり目に起きたので、フライトの疲れもすっかり取れました。朝食はまた四人で近所のレストランへ。別荘近辺にはカジュアルなレストランが幾つかあります。スペインのコーヒーとパンは美味しい。優雅な朝食の後、「行ってきます。」と手を振る私たちを、H夫妻は少し不安気な顔で見送っていました。昨日のレストラン近くにあるタクシー乗り場からマルベージャのバスターミナルへ。この先は片言のスペイン語と中学生レベルの英語、そしてグーグルマップだけが頼りです。まずはマルベージャのバスターミナルでマラガ行きのチケットを買わなければなりません。ターミナルには幾つかのバス会社が入っているので、行き先を間違えるととんでもない所へ連れて行かれてしまいます。緊張しながらも何とかチケットを購入し、出発時間と停留所番号を確認。チケットには座席番号が記されているので、いざバスが到着して座席を確保したときには正直ホッとしました。初ミッションクリアです。高速を走って一時間余りでマラガ・バスターミナル着。マラガではピカソ美術館以外に予定している場所はないので、のんびりと街歩きを楽しむつもりです。

下調べした地図で、美術館はさほど苦労しないで行き着けるはず…でした。マラガは明るく華やかで、街のいたる所で楽器演奏やアート・パフォーマンスをやっています。そういうものが大好きで、いちいち足を止めてしまう私を、母親よろしく先を急がせるKちゃん。「さっきはあと十二分だったのに、十六分になっちゃった！」グーグルマップを見ながらKちゃんが顔をしかめる。私もマップを起動させてみる。「うん、十六分だね。」しばらくは二人でケータイとにらめっこしながら歩き続ける。「南へ一キロだって。」とKちゃん。「え～、私のは北へ一キロよ！」この時以来、グーグルマップをめぐる二人の迷走は旅行中ずっと続くことになるのでした。

三十分もあれば行き着くはずの美術館には一向に到着しない。「喉が渇いた、少し休憩しない？」と私。「だめ！

美術館に行ってから。」鬼コーチにお尻を叩かれながら、何とか美術館に到着。居心地の良い素敵な美術館でしたが、かなり疲労していた私の集中力は低下。それでも、ピカソの子供時代から晩年に至るまでの作品を日の当たりにして、彼が紛れもない天才であることを再確認したのでした。喉カラカラお腹ヘリヘリの私たちが目指したのは、マラガの老舗バルである「エル・ピンピ」。ピンピはパティオのある大きな店でしたが、やはりお客でいっぱいです。それでも何とかカウンター席を確保してホッとしたのも束の間、メニューを開いて顔を見合わせた。メニューが読めない！　考えるまでもない現実に直面して、がっかりするやら焦るやらで急に食欲が萎える。白のグラスワインとポテトフライ、生ハムを摘まみながら意気消沈の二人。「次からは英語メニューか料理写真のある店にしようね。」「でも、スペインのポテトって格別に美味しいね。」マラガからの帰りは高速を走らないバスに乗ったため、別荘に着いたのは十九時を回っていました。

グラナダ

二十一日土曜日。今日はいよいよ御夫妻とお別れしてグラナダへ向かいます。これからは正真正銘二人だけの旅です。万が一の時を考えて、ケータイの無料サイトWhatsAppを利用して御夫妻と連絡を取り合うことにしています。マルベージャのバスターミナルまでは昨日と同じですが、今日はグラナダ行きのバス・チケットを買います。グラナダへはマラガを経由して行くのですが、果たして直行便なのか、マラガで乗換えなのか不明のままバスは出発。どちらにしてもグラナダには行き着けるでしょう。マラガから一時間半余りでグラナダ・バスターミナル着。（直行便でした）バスターミナルは市街の中心部や宿泊予定のホテルからかなり離れているので、まずはタクシーでホテルへ向かいます。ホテル到着後、荷物を解いてパスポートを部屋の金庫へ入れ、パスポートのコピーをバッグに。グラナダは有数の観光地なので、スリや置引きには十分の注意が必要なのです。休む間もなく、私たちは市街中心部に向かうバスに乗りました。

ヌエバ広場近くにある「日本語情報センター」にお金を払い込みに行かなければなりません。「日本語情報センター」は、フラメンコに魅せられて自らダンサーとなった日本人男性がやっている観光案内所です。事務所は小さなビルの二階にあり、探し当てるのにかなり苦労しましたが、ネット予約した今夜の「洞窟フラメンコ・ツアー」と、明日の「白い村ツアー」の代金を無事払い込みました。事務所はその男性一人でこなしているようでした。この時ばかりは、日本語で交わせる会話の有り難さが身にしみました。「フラメンコ・ツアー」も「白

い村ツアー」も、車がホテルまで送迎してくれるので安心です。大事な用事が済んでほっとすると急にお腹が空いてきました。

スペインに来てからは、空腹が常態になっているような気がします。アルハンブラ宮殿の入場チケットは三時半予約なので、時間は充分にあります。繁華街の中心にあるヌエバ広場近辺で良さそうな店を物色。もちろん写真つきのメニューは必須です。バルやレストランは道路上にテーブルを出している店が多いので、どこも入り易いのです。勝手にテーブルに着くと、その内に店員が注文を取りに来ますが、その内はかなり長い場合もあるので、そういう時には店員を掴まえなければなりません。あれこれ迷いながら、とある店の屋外テーブルに落ち着きました。注文したのはガスパッチョと海老入りスペイン・オムレツそして白ワイン。まあまあ美味しいランチを楽しんでいるとギターの音色が…スペイン気分が盛り上がります。曲が終わり演奏者が回って来たので笑顔で心付を入れました。ところが、これを皮切りに次から次と様々なアーティストが歌ったり演奏したりしては心付を求めて回ってきました。ケチな私たちは二人目からは無視です。ストリート・ミュージシャンたちのアルバイトの場になっているみたいでした。

お腹も満足したので、そろそろアルハンブラ宮殿を目指します。信号を渡ろうとしていると、向かい側の信号機の下にいる男性に目が釘付けになりました。シャツの前面がギターそのものに作られていて、まるで大きなギターの柄の横から顔が出ているみたいです。布製であることは分かりますが、とんでもなく手が込んでいます。思わずカメラを向けると、笑顔で手を振ってくれました。スペインはほんとに明るい街です。アルハンブラ宮殿へは歩いても行けるのですが、上り坂なのでタクシーに乗りました。タクシーでは五分もかかりません。スペインやポルトガルのタクシー料金は安目ですが、お釣りの一部か全部をチップとして渡します。タクシーを降りた広場で素敵な光景に出会いました。まるでグラビア写真さながらに美しい花嫁花婿さんが写真撮影をしていたのです。厳密に言うと、美しい花嫁さんと普通の花婿さんでした。

アルハンブラ宮殿はイスラムの歴代スルタンたちが栄華を極めた宮殿、その敷地は一山に広がっていてハードな行脚となります。かなり高齢と見える欧米人の御夫婦も多く、その健脚には驚かされます。精密で壮麗なイスラム様式の宮殿内部を見学後、敷地内のカフェで一休みしてアイスコーヒーを注文。スペインのコーヒー自体は美味しいのですが、アイスコーヒーは別です。基本的にアイスコーヒーというものは無いので、「Coffee with rock」と言えば、ホットコーヒーと一緒に氷を入れたコップを持ってきてくれます。どちらかと言えばまずい。美

味しい日本のアイスコーヒーが懐かしくなります。だいたい海外でアイスコーヒーを飲もうとするのが間違いではあるのですが。帰りは下り坂なので歩きました。木々を渡る風が気持ち良く、道沿いに造られた細い流れがサラサラと心地よい音を奏でています。極上の森林浴に身も心も癒されます。砂漠の民にとってアルハンブラは、水と緑の理想郷だったのでしょう。

夜は八時半にフラメンコ・ツアーの送迎車が来るので、それまでには食事を済ませてホテルに戻っていなくてはなりません。再びヌエバ広場辺りで夕食の店を物色します。Kちゃんは「パエリアが食べたい。」と連呼しているのですが、なかなか適当な店が見つかりません。いつものように散々歩き回り、疲れ果てた二人がショーウィンドウのパエリアの写真に誘われて入った店はアラブ系でした！　飲み物はすべてノンアルコール。席を立つチャンスを失い、とにかくパエリアだけは注文しましたが、私たちの頭からは（期待）という文字が消えていました。運ばれてきたパエリアは懸念した通り、パエリア風ご飯という代物で、Kちゃんの落ち込み度合いは半端ではありません。日本の冷凍パエリアのほうが数倍美味しいと思います。そして悲しいことにこのパエリアが、この旅の最初で最後のパエリアとなってしまったのです。パエリアへの未練は一生消えないでしょう。

満たされない気分をチェンジして夜の「洞窟フラメンコ・ツアー」に出かけました。マイクロバスが幾つかのホテルを回って、ツアーの客をピックアップしていきます。私たちのホテルでは、日本人の客が私たち以外に二名いましたが、他は皆欧米人ばかりでした。洞窟フラメンコの店はジプシー地区のサクロモンテの丘にあります。マーティン・マヤー一家が率いるフラメンコ・ショーはアルボレア、カチューシャ、セロのタンゴ等、地域に根ざした伝統的な踊りで、迫力満点の素晴らしいものでした。知識はありませんが、フラメンコの真髄に触れた気がします。興奮冷めやらぬ客を乗せたマイクロバスは、帰路にサンニコラスの展望台に寄り、ライトアップされたアルハンブラ宮殿の遠景を楽しませてくれました。

二十二日日曜日。今日はグラナダからアンダルシアの白い村を巡る個人ツアーでセビリアを目指します。九時半に予約したツアーのタクシーが来るので、七時半には起きてホテルの朝食を摂りました。ビュッフェ形式の朝食はこれまでで一番美味しかった。私がそう言うと、Kちゃんも情けなさそうに頷きました。Kちゃんが時々軽い咳をしていたので気遣うと、「風邪ひいたみたい：」という答えが！

この強行軍の中で風邪をひいたら大変です。「昨夜寒くて：喉やられたみたい。」「寒かった？」話を聞くと、どうやら私が毛布をみんな持っていってしまったらしい。

グラナダは昼と夜の温度差が大きいのです。私たちの部屋のベッドはセミダブルを二つ合わせて作ったキングサイズ使用になっていて、掛け布団はものすごく大きな物が一枚だけしかなかったのです。欧米のホテルはダブルベッドが主流で、ツインを希望してもこのように二つをくっつけてあるものが多いようです。昨夜は遅い時間で疲れてもいたので、ホテルとの交渉も面倒で溺れそうに大きいベッドで二人一緒に寝たのでした。それにしても、あの大きな掛け布団を私が独り占めしたとは考えられません。Kちゃんも熟睡していて、寒いと思いながらも布団を引き寄せることをしなかったのだと思います。町責の念を感じながらも、そう結論しました。真実は不明なのですから。

「早めに風邪薬飲んでおいたほうが良いんじゃない。」「うん、大丈夫、今夜寝る前に飲むから。いま飲むと眠くなっちゃうし。」

ロンダ

「白い村ツアー」が始まると、二人とも風邪のことなどすっかり忘れてどこまでも広がるオリーブ畑の風景に見とれていました。本当に広大で、地球の丸さえ感じる風景に感動します。スペインがオリーブ・オイルの産地であると実感させられます。ツアーのタクシー運転手は穏やかな感じの良い男性でしたが、とても無口です。というよりも、お互いの言語能力の噛み合わせが悪いからなのでしょう。

オリーブ畑というよりも、オリーブの大地を走るハイウェイはガラガラで滅多に他の車を見ません。そのせいか車はかなりのスピードを出しています。個人的感想ですが、全般的にスペインの運転手の運転はワイルドだと言えるでしょう。

ツアー最初の村ロンダは、アルハンブラ同様イスラムとの攻防を経た歴史を持っています。スペインの多くの村や街がそういう歴史の中にあるのです。標高七五〇メートルの切り立った崖の上にあるロンダは、ダイナミックで男性的な景観です。旧市街と新市街を結ぶヌエボ橋は十八世紀に建造されたものですが、その高さは１００メートルもあり圧巻です。ヘミングウェイを筆頭に、ロンダに魅了された著名人は多いようです。限られた時間の中でヌエボ橋を渡り、新旧市街を見て、お土産も買いました。十三ユーロの買い物で二十ユーロ札を出すと、その店のおじさんが「ちょっと待っててくれ。」と言って消えてしまいました。大分してからお釣りを持って帰って来ましたが、無人の店を私たちに任せて暢気なものです。

ヌエボ橋を望む、パラドールというタイプのホテルのテラスでランチをすることにしました。飲み物とハン

バーガーを注文。ハンバーガーはひとつだけ注文して半分に切ってもらいましたが、案の定大正解。日本の倍の大きさでした。付け合せのポテトフライはやっぱり凄く美味しい。スペインのポテトが美味しいという事実が立証されました。私は、半分でもボリューム満点のハンバーガーを平らげましたが、Kちゃんはお肉を出してパンだけしか食べません。「この肉まずい。」確かに今まで食べたことの無い味でした。味も質感も、日本人が思い浮かべるハンバーグとは似ても似つきません。独特の香辛料を使った牛肉のスパム風といった感じでしょうか。「これ、ほんとに牛肉？」とKちゃん。「もしかして羊とか：：兎じゃないし、鹿？　う～ん、馬、山羊。とにかく奇妙な味だけど、ちゃんとしたホテルなんだから危ない物は使ってないでしょ。」とお気楽な私にKちゃんの視線は冷たい。

セテニル・オルベラ

タクシー・ツアーの次の場所はセテニルです。大きな岩と一体化して造られている建物が特徴の小さな村です。ロンダの後ということもあり印象はあまり強くありません。滞在時間も四十五分でしたので、中心部を一回りして終わりました。イタリアのマテーラという所にも、このような岩山と一体化した住居の村があるようです。夏は涼しいに違いありませんが冬はどうなのでしょう。想像すると暖かいような気もしますが。日常的に岩肌のパワーを受けるのは精神の健康には良いかもしれません。車が待っている場所に戻りオルベラに向かいました。道中は相変わらずのオリーブの大地と宇宙的な広がりを見せる三六〇度の空。所々に白っぽい岩山や村の遠景が見られます。運転手さんがその白っぽい岩山のひとつを指差して「あれがオルベラです。」と言いました。かなり高い岩山の頂上に真っ白な村が見えます。教会のような建物もあり、まるで絵本の中に入って行くような気がします。急な坂道をぐるぐると走り、オルベラの頂上に着きました。この頂上付近が旧市街で、ここから下の方に沿って新市街が広がっています。村を見下ろす高台にあるのは、美しいエンカルナシオン教会と、創設が十二世紀といわれるイスラム統治時代の古城カスティージョ。ここにもキリスト教とイスラム教の攻防の歴史があります。カスティージョは、アンダルシアの光と風の中で九世紀もの長い間、オルベラの人々の暮らしを見守ってきたのです。豪華な装飾など何一つ無い古びた石の城。崩れかけた石段を登りつめると、広大なアンダルシア平原の大パノラマが待っていました。力強く美しい大地にしばし呆然。この上にもうひとつ見張り台のような塔があるのですが、狭くて急な石段をこれ以上登る気力はありません。私がへたっていると、「行ってくる。」と健脚K

ちゃんは塔の中へ入って行きました。しばらくすると、塔の上に豆粒みたいなKちゃんの姿が現れて手を振りました。オルベラは観光客も少なく、悠久の歴史を感じられる素晴らしい所です。オルベラを後にして、車は一路セビリアへと向かいました。

セビリア

コロンブスのアメリカ大陸到達で重要な役目を果たしたセビリア港を持つこの街は、長い歴史とコスモポリタン的近代文化が融合した独特の都市です。観光名所も多いのですが、時間的には一日半位しかないので、予定しているのはセビリア大聖堂とヒラルダの塔、レアル・マエストランサ闘牛場、そして二〇一一年に完成した世界最大の木造建築であるメトロポール・パラソルです。宿泊ホテルがこのメトロポール・パラソルのすぐ傍なので動線は悪くないはずです。その代わり、このホテルはどちらかというとバッグ・パッカー向きのカジュアルホテルなので、居心地の良さは期待できないでしょう。

夕方五時頃にホテルにチェックイン。部屋に入ると又してもダブルベッドが。早速に受け付けの男性に苦情を言うと、壁に仕込まれたサイド・ベッドを開いてセットしてくれました。私たちは開いた口が塞がらない気分でチップを渡したのでした。トラブルは重なり、今度は金庫が作動しないので再び彼を呼ぶ。金庫も何とか使えるようになったが、もうチップは渡さない。こういうホテルなんだから仕方がないと諦め、気分を取り直し学生気分で街のバル巡りへ：：出たものの、結果は残念なものでした。もちろんパエリアは食べてません。

その夜のベッド決めでは、Kちゃんが簡易ベッドで良いと言い張るので、私が大きなベッドで一人寝ることになりました。風邪ぎみのKちゃんを簡易ベッドで寝かすことの後ろめたさを感じながらも、寝心地の良いベッドでいつしか深い眠りに落ちてしまったのでした。

二十四日火曜日。朝食はホテルで摂らずに、メトロポール・パラソル前のカフェでドーナツとカフェラテにしました。Kちゃんの風邪具合も少し良くなったみたいです。メトロポール・パラソルは、エンカルナシオン広場再開発計画で造られた、地上四階地下一階のキノコのお化けみたいな建造物です。建造物自体が巨大なアート作品と言えるでしょう。下から見上げると、人間は童話の中の小人のようです。この再開発計画の工事で敷地からローマ遺跡が発掘されたため、工事は一時中止、大問題となりました。莫大な予算を組んだプロジェクトですから、関係者はさぞかし頭を悩ませたことでしょう。現在そのローマ遺跡は、考古学博物館として地下一階にそのまま保存されています。歴史を大切にする素晴らしい知恵だ

と思います。お化けキノコの屋上へは、チケットを買ってエレベーターに乗れば行けますが、昨日は長蛇の列だったので諦めました。

食後の散歩がてらにパラソルに行ってみると、エレベーターにはほとんど人がいません。ラッキーとばかりにチケットを買って屋上へ。屋上には通路が廻らされていて、セビリア市街を見渡すことができました。セビリアの太陽と風が私たちを包みます。各方角の地図も掲示されているので、セビリア大聖堂とヒラルダの塔、レアル・マエストランサ闘牛場を確認。「そんなに遠くないね。楽勝で歩けるでしょ。」明るいKちゃんの言葉に同意しながらも、どこかびびっている私。旅が始まって以来、私のふくらはぎにはいつもシップが貼られているのです。Kちゃんは元陸上部のアウト・ドア派。私はと言えば、小学校時代から運動会ではびり、体育の点はいつも2という生粋のイン・ドア派なのです。

セビリア大聖堂は、ローマのサン・ピエトロ大聖堂、ロンドンのセント・ポール大聖堂に次ぐスペイン最大のゴシック様式教会です。荘厳・華麗・壮大といった言葉で表現されるこういうタイプの場所は、あまり私の好みではないのです。おまけに観光客も多く人だらけです。「中に入らなくてもいいかな…。」ふと漏らした私の独り言に、「ハァァーッ！」とKちゃんがのけ反りました。「わ、わかった。コロンブスのミイラが入っている棺もあるしね。ま、それは見てみたいし。」黄金に輝く大聖堂の中をぞろぞろと歩きます。あまりの壮大さ、煌びやかさに気持ちが萎えます。京都のお寺巡りをする欧米人も、この種の感想を持つのだろうか。コロンブスの墓は大変ユニークです。当時のスペインを構成していた、レオン、カスティーリャ、ナバーラ、アラゴンの四つの国の王の彫像が棺を担いでいます。棺の中にはコロンブスのミイラが納まっているとのことですが、無知な私は、コロンブスがこれほど偉大な人物だったのだと初めて知ったのでした。

大聖堂の後はヒラルダ（風見）の塔へ。ヒラルダの塔は大聖堂の鐘楼で、高さ98メートルもあります。狭い上り坂の回廊が果てしなく続きますが、階段でないのがせめてもの救いです。信じ難い話ですが、当時は兵士がこの回廊を馬で登ったとのことです。馬はどれほど辛かったことでしょう。

昼食は大聖堂近くの店に入りました。この辺りは店も多く観光客で賑わっています。アヒージョ風の小イカがとても美味しかった。塔に登ったので足はあまり元気ではありませんが、これからスペイン広場を回って闘牛場を目指さなければなりません。メトロポール・パラソルから見た闘牛場は大聖堂からそれ程離れてはいないようでしたので、グーグルマップを見ながら気楽に歩き始めました。途中でスペイン広場にも寄りますが、私は特に

興味が無いのでKちゃんの後をついて行くだけです。日差しが強い。前半は元気だったのですが、すぐのはずのスペイン広場にはなかなか到着せず、気持ちも身体も次第に干からびてきます。とにかく涼しい場所で休みたい。Kちゃんのすぐと私のすぐは、縮尺に相当の狂いがあるようです。ようやく辿り着いたスペイン広場は、私には果てしなく広く見えました。

「私ここで休んでるから、Kちゃん一人で回ってきて。」「わかった…。」疲れ切った私の様子にKちゃんも抗議しません。スペイン広場は一九二九年の万国博覧会の会場施設として造られましたが、映画、「スター・ウォーズ」エピソード2のロケ地としても有名なのです。映画の主人公アナキンの如く颯爽と遠ざかって行くKちゃん。

木陰のベンチに座ると心底ほっとしました。近くの売店でアイスクリームを買って極楽気分。広場を回遊する川のボート乗り場が目の前にあります。見ていると、スペイン人らしき四人家族がボートの上で揉めています。父親と十代と見える息子がオールを握っていますがちっとも進みません。父親があれこれ指示するのですが、ボートはぐるぐる回るばかり。その内に、今度は息子と娘が入れ代わりましたが、やはり状況は同じです。父親の声はますます大きくなります。「一、二の三で合わせれば簡単なのに。」と私は笑いが止まりません。家族四人が入れ代わり立ち代りの大騒動で、下手な喜劇よりも数倍面白い。ボートはいつまで経ってもぐるぐる回るばかりで、岸にぶつかったり他のボートにぶつかったりです。十分以上も迷走を続けて、とうとう家族はボートを降りてしまいました。こんなに不器用なオール使いは見たことがありません。誰か一人で漕げば進んだかもしれないのに、あくまでも共同作業にこだわるのは家族愛なのでしょうか…。もう一隻不器用なボートがいました。こちらはカップルです。彼女に良いところを見せようとオールを握る男性。しかし、あの四人家族同様にボートはぐるぐる回るばかり。長いこと頑張っていましたが、最後はとうとう係員に助けを求めてボートを降りました。二人のその後が思いやられます。それにしても何とも楽しいスペイン広場のエピソードでした。

闘牛場はグアダルキビール川沿いにあるので、川に出れば一安心。グーグルマップも後六分を表示しています。「あれじゃない？」二人の視線の先にはそれらしき建物が見えます。安堵感を感じたのも束の間、近付いて見ると何か違うようです。「丸くない。闘牛場ってまるいはずよね。」「そうよね。」とにかくその建物の周りを回りましたが、この道がまた長くて、もとの川沿いに戻るまでが一苦労でした。グーグルマップは九分に延びています。この建物は、どうやらマエストランサ劇場だったようです。再び重くなった足を運んでいると、こんどこそ正真正銘の闘牛場が見えてきました。グーグルマップは

後二分。へとへとになって闘牛場に着くと、チケット売り場は長蛇の列です。炎天下で干物になる直前にチケットを購入できましたが、入場時間は十八時半。一時間以上も休憩できるのは嬉しいような残念なような…。建物周りの木陰を探し、適当な石段に座り込みました。Kちゃんの風邪はもう完全に消滅してしまったようです。彼女の驚くべき心身パワーには脱帽ですが、彼女に言わせると私がやわ過ぎるのだそうです。

見学ツアーは二十人ずつで、英語説明とスペイン語説明の二組に分かれて回ります。もちろん私たちは英語組ですが、ガイドの説明は半分も聞き取れません。館内には歴代のスター闘牛士の衣装や写真、また、スター闘牛だった牛の首の剥製等が飾られています。

闘牛場のグランドの広さは思っていたよりも小さいものでしたが、ここで人間と牛の命をかけた闘い（ほとんど牛が不利）が繰り広げられたのかと思うと、日本人とは全く違う人間と動物の関係性が感じられます。日本の闘牛は牛同士ですものね。だからキリスト教であり、原罪の思想なのかもしれません。

帰り道は再び大聖堂を通ります。大聖堂近くのバルで夕食を済ませて石畳を歩いていると、何とも切ないギターの音色が流れてきました。強烈な太陽の光が消えたセビリアの夜、心にしみる調べです。人通りもまばらな大聖堂辺りは、また別の表情を見せてくれます。

私たちはしばしの間、一人静かにギターを奏でるおじさんの傍にうっとりと佇んでいました。

ホテルの部屋に戻ると、またトラブル発生。「タオルが昨日のままよ！」とKちゃん。「自分たちが使ったタオルなんだからいいじゃない。」「嫌だ、新しいのに替えてもらってよ。」こういう場合の交渉は、多少なりとも英語力のある私の役目となる。夜間の受付は昨日と同じ男性だ。連日の苦情に不機嫌そうな顔をしながらも、新しいタオルを持ってきてくれた。「Kちゃん、今夜はこっちのベッドで寝てよ。」「こっちでいい。慣れたし、荷物も上の棚に置けるから。」相変わらずそう言い張るので、この夜もKちゃんは簡易ベッド、私はクッションの良いダブルベッドで眠ったのでした。

翌二十五日水曜日は、セビリア空港発、午後三時十五分のポルトガル航空でリスボンへ行きます。ホテルから空港まではタクシーで二十分位なので、チェックアウト後しばらくは街歩きを楽しめます。

ポルトガル航空の飛行機は赤と緑のマークが可愛くて印象的です。セビリアからリスボンへの便は今時珍しいプロペラ機でしたので、Kちゃんは少し不安そうで無口です。「飛行機が落ちて死んだら保険金が出るから、良い死に方じゃない。」「まだ死にたくない。」

Kちゃんの不安を払拭するように、一時間十五分のフライトは快適で、あっという間にリスボン着です。セビリア発三時十五分、リスボン着三時三十分。ネットでチケットを購入する時に面食らって調べてみたら、セビリアとリスボンで一時間の時差があるのでした。

ケータイの時間も到着後ちゃんとリセットされたのには感動です。

「私のリセットされない、古いからかな。」Kちゃんが悲しそうに自分のスマホを見つめています。「そうなの。何年くらい使ってる？」「う～ん、相当に古い。」私はこれまで使っていたiフォンの充電機能が落ちてきたので心配になり、旅行直前に新しい機種に買い換えていたのです。新しい機種の性能はカメラも含め抜群に素晴らしいものです。グーグルマップでの二人の食い違いも、もしかしたらこの辺りにあるのかも知れません。とにかく無事に着いたことに感謝です。リスボン空港からホテルまでは地下鉄もあるのですが、不慣れな私たちはアエロ・バスという空港と市内を結ぶシャトル・バスに乗りました。シャトル・バスの路線も幾つかあるのですが、私たちは（ライン1）に乗り、二つ目の、地下鉄カンポ・ペケーノ駅で降りました。ここからホテルまでは歩いてすぐです。

ポルトガル編につづく

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

行雲流水（六十二）

石黒修身

近詠二十首

人

信念を貫き通し人類の平和に尽せし緒方女史逝く
アフガンでテロに斃れし中村さん偉業を為せし志称う
ノーベル賞吉野氏笑顔爽やかに品格の学究（ひと）面目躍如
吉野氏の記念講演その主旨で脱炭素説く広い視野もち
永遠のマドンナと呼ばれし八千草さんその死を悼む吾ら年代

ラグビーの八強入りは「ワンチーム」掲げし成果誇るべし
グローバルスポーツ界で日本の若きアスリートの活躍頼もし

世界・社会

香港の民主化デモは燃えやまず中国圧制の弊が顕わに
法王の御座（おわ）す館の高窓を仰ぎ拝せし曽遊のバチカン
来日のパウロ二世原爆の地で核廃絶を説くは貴（たっと）し
悠久の歴史に輝く首里城の一瞬の消失琉球の悲嘆
曽遊の折に見し首里城は琉球王国の偉容あらたか

身辺・生活

不順なる気象か秋は短くて冬に入るは寒々として

短歌

師走入り寒気と雪の報頻り凌ぎし冬の若き日憶う
若き日ゆいく度訪いし佐渡島は父祖の地なれど血縁細る
縁人はつか残りし佐渡島ゆおけさ柿届く荒海越えて
本来は「おけさ」由来の柿なるに今は「朱鷺」が先立っており
年寄りは転ぶなと世間云う吾も躓く他人事ならず
不覚にも家内で転び腰痛め旬日無聊をかこちし吾は
酒席付く会合嬉し然れども酔余の帰路は覚つかぬ状

漢詩

潮汐錄（九十七）

鯨游海

賀庚子春　　令和二年元旦

千鶴萬龜初夢來
吉緣福運必須開
干支庚是黃金謂
況亦子之繁茂魁

押韻・來開魁

〈庚子の春を賀ふ〉
千鶴　万亀　初夢に来たれば
吉縁　福運　必らずや須らく開くべし
干支の庚は是れ　黄金の謂ひにして
況や亦た子は之れ　繁茂の魁に於いてをや

〔注　解〕
初夢に見ためでたい賀春の詩。
必須＝必らずや須らく……すべし（命令・断定形）
況＝いはんや＝まして。なおさら（抑揚・累加形）

庚＝今年の干支の干の字。①金②西③更る④つぐなう⑤道などの意味がある。
干支＝十干十二支＝古代中国で五行説（木火土金水）から考案された年代表示法。干は幹（兄）、支は枝（弟）の意。十干「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」と十二支「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」。今年は庚子＝金の兄と鼠。
十干は一字毎に兄と弟とに二分して称した。即ち甲は木の兄、乙は木の弟、丙は火の兄、丁は火の弟。戊は土の兄、己は土の弟、庚は金の兄、辛は金の弟、壬は水の兄、癸は水の弟。この十と支を一字宛組合せ60年を表す。
謂＝①言う。思う②意味する。連用形の「謂ひ」＝…の意。
子＝鼠＝十二支の頭。繁栄・繁茂の象徴。
魁＝先頭。首。長。第一番。リーダー・トップの象徴。

☆鶴と亀夢の枕に群れて舞ふ
　先づことほがむ令和の夜明け

奉祝新元號・令和其一

令和元年五月

令春名刹白梅闌
氣淑風和黃鳥歡
萬葉豈唯歌四季
古人日日愛憎彈

押韻・闌歡彈

〈新元号を奉祝す・令和その一〉

令春の名刹　白梅たけなはにして
気淑やかに風和みて　黄鳥よろこぶ
万葉は豈に唯だ　四季を歌ひしのみならんや
古人日日の　愛憎弾むにおいてをや

〔注　解〕

令＝佳い。麗しい。尊い。しむ、せしむ（使役）。
レイは漢音。リョウは呉音。なお平仄は両声。
淑＝良い。美しい。しとやか。おだやか。徳のある。
黄鳥＝鶯の異名＝黄鸝。杜審言「淑氣催黄鳥　晴光轉線蘋」。和＝なごむ。静かになる。穏やかになる。さからわない。楽しい。やわらぐ。合算する（和語）なお平仄は両声。またカ（クワ）は漢音、ワ（ヲ）は呉音。
古人＝昔の人。先人。愛憎＝愛と憎しみ。

☆心なごむ花鳥風月をかしくも
　心はじくる強き詩もあり

隼二號着陸小惑星龍宮

平成三一年二月

孤影無音漂蒼天
非雲非鳥異形船
火炎噴出忽飛去
何故遠來何處遷

押韻・天船遷

〈隼二号小惑星「龍宮」に着陸す〉

孤影　音無く　蒼天に漂ふ
雲に非ず鳥に非ず　異形の船
火炎噴出し　忽ち飛び去る
何故に遠来し　何処に遷るや

〔注　解〕

我が国宇宙開発の先鋒たる「隼2号」の成功は、科学技術立国を標榜するこの国の快挙として永く記憶されよう。史上初の小惑星龍宮の玉手箱への着陸、生命の起源を探る上石採取の実現に興奮しない人は居まい。
火星に近い軌道を廻る龍宮の社会でも大事件でありその当時の「龍宮新聞」では右の如き記事を掲載した。
異形＝通常では考えられない怪しい姿。噴出＝噴射（漢語には無い）。異噴来處遷＝異噴来処遷の正字。

☆音もなく突如現はる宇宙船
　小石拾ひて何処に去るや

戯賦新元號誕生祕話・令和其二

令和元年五月

何爲許容由國書
九人識者選誰與
古來難抗強權坐
忖度横行永不除

押韻・書與除

〈戯れに新元号誕生の秘話を賦す・令和その二〉

何為ぞ　国書に由ることを許容したる
九人の識者を選びしは　誰か
強権の座に抗ふこと　古来難ければ
忖度の横行　永へに除かれず

〔注　解〕

万葉集巻五梅花歌卅二首序を書いたのは宴の主催者で太宰府の師（長官）だった大伴旅人であった。新元号はこの序の漢文による。
「時初春令月氣淑風和梅鏡前粉披蘭珮後香薫加之曙嶺雲移松羅掛蓋傾夕岫霧結鳥籠物封林迷庭新蝶舞空故雁歸…」
さて、出典を従来の漢籍のみから國學の書を追加し、一次候補案提出者に国学者を追加、更に九人の有識者の選定等を専行したのは一体誰だったであろうか。

☆令和の語国書に由ると人云ふも
　国書の元は漢籍なるに

《漢詩の流れ85》鎌倉・室町時代⑩釋龍澤

鎌倉時代の末期に、鎌倉五山及び京都五山の禅僧が担い手となる漢詩を中心とする禅林文学。そのエースとされた詩僧。京都建仁寺の高僧に登る迄は艱難辛苦の道を歩んだ。それというのも不憫なる捨て子であったのを播磨で拾われた経歴を持つ。
九歳の時京に登って仏門に入り学問に励んだという。

江天暮雪　（江天の暮雪）

江天欲暮雪霏霏　江天暮れんと欲して　雪ひひたり
罷釣誰舟傍釣磯　釣を罷め誰が舟か　釣磯に傍ふ
沙鳥不飛人不見　沙鳥飛ばず　人見えず
遠村只有一蓑歸　遠村只だ有り　一蓑の帰る

寒々とした白一色の淋しい世界。独りとぼとぼと蓑を着た釣人は帰ってゆく。雪は深々と降りしきる……。
何時か何処かでこの感覚を憶えている気がする。
ここで多くの人は気付くであろう。同じ詩心を詠じた彼の有名な柳宗元の江雪の詩があったのを。

千山鳥飛絶　千山鳥飛ぶこと絶え
萬徑人蹤滅　万径人蹤滅す
孤舟蓑笠翁　孤舟蓑笠の翁
獨釣寒江雪　独り釣る寒江の雪

漢詩

汲深録（十九）

松井秀人

（小斎に菊を賞す）
令和元年十月

開牖西風小院香　窓を開けば西風 小院香し
籬邊叢菊競新粧　籬辺の叢菊 新粧を競う
一枝採折憶陶令　一枝採折 陶令を憶う
獨恨無因共挙觴　独り恨む因し無く共に觴を挙ぐ

〔注　解〕
牖＝まど。
叢菊＝むらがり生えている菊。
陶令＝陶淵明。

〔口語訳〕
窓を開けてみると西風が吹き入り、小さな中庭はかんばしい。
生垣のほとりにむらがり生えている菊は、新しいよそおいを競っている。
一枝を折り採ってきてみると、陶令に憶いがいったが、
共に觴を挙げることができないことを独り恨む。

林間紅葉

（林間の紅葉）
令和元年十月

秋風蕭瑟楓林を度る

（曹操の高陵に感有り）
令和元年八月

蓋世梟雄望九州　蓋世の梟雄 九州を望む
冊年戰亂魏朝休　冊年の戦乱 魏朝休む
荒涼陵墓空埋志　荒涼たる陵墓 空しく志を埋む
覇業功名去不留　覇業の功名 去りて留まらず

押韻・州 休 留

〔注　解〕
蓋世＝意気盛んで天下を飲み込むような勢い。
梟雄＝勇猛な英雄。
九州＝中国全土。
冊年＝四十年。
休＝終わる。
○魏王曹操の没後、長男曹丕が二百二十年に魏朝を開いたが、その没後は、二百四十九年には司馬懿が実権を握り、その孫の司馬炎により魏は五代元帝で二百六十五年に滅亡。

〔口語訳〕
意気盛んで天下を飲み込むような勢いの英雄が中國全土を望んだが、その息子の曹丕が魏朝を開いて没後僅か四十年の戦乱の末、魏朝は終わった。
荒涼たる曹操の陵墓には　空しく埋められたのは志だけで、
覇業の功名も去って留まらない。

（雨裡に秋を送る）
令和元年十月

秋雨蕭蕭寒意生　秋雨蕭々 寒意生ず
風軒滴瀝若琴鳴　風軒の滴瀝 琴鳴るが若し
倦書長夜眠難就　書に倦み長夜 眠りに就き難く
牀下孤蛩已絶聲　牀下の孤蛩 已に絶声

〔注　解〕
雨裡＝雨の中。
蕭蕭＝ものさびしい様子や音声の形容。

樵徑敖遊天籟音　樵径を敖遊 天籟の音
青女飛霜紅葉散　青女霜を飛ばし 紅葉散ず
繽紛錦片夕陽深　繽紛たる錦片 夕陽深し

押韻・林 音 深

〔注　解〕
蕭瑟＝秋風がものさびしく吹くさま。
樵徑＝木こりの通る小みち。
敖遊＝気ままに遊ぶ。
天籟＝自然の音響の音。自然に鳴る風の声。
青女＝秋の女神。
繽紛＝もつれ乱れるさま。
錦片＝錦のきれ。

〔口語訳〕
秋風がもの寂しく吹き、楓林を渡っていく。
木こりが通る小道を気ままに歩いていると、周囲の自然な音が聞こえてくる。
秋の女神は霜を飛ばし、紅葉は散り
そのもつれ乱れる錦片のような紅葉に、夕陽が深まっていく。

雨裡送秋

（雨裡に秋を送る）
令和元年十月

秋雨蕭々 寒意生ず
風軒の滴瀝 琴鳴るが若し
書に倦み長夜 眠りに就き難く
牀下の孤蛩 已に絶声

押韻・生 鳴 聲

〔注　解〕
雨裡＝雨の中。
蕭蕭＝ものさびしい様子や音声の形容。

風軒＝風のふく軒。
滴瀝＝しずくが滴る。また、その音。
蛩＝こおろぎ。
牀下＝寝台の下。

〔口語訳〕
秋雨はものさびしい様子で　寒意が生じてくる
風軒の滴瀝の音は、琴が鳴っているようだ。
読書に倦き、長い夜をなかなか寝付かれないでいると
寝台の下の孤蛩も、すでに鳴き声が絶えている。

初冬茅舍

（初冬の茅舎）
令和元年十一月

陣陣寒風霜葉飜　陣々たる寒風 霜葉飜る
茅庵終日鎖柴門　茅庵 終日 柴門を鎖す
發煨爐畔茶煙上　発煨の炉畔 茶煙上り
夜半鐘聲消俗煩　夜半の鐘声 俗煩を消す

押韻・飜 門 煩

〔注　解〕
陣陣＝とぎれとぎれに続くさま。
霜葉＝霧のために黄や赤に変わった木の葉。紅葉。
茅庵＝茅ぶきの庵。そまつな家。
柴門＝柴で作った門。
發煨＝埋み火を掘り出す。
爐畔＝いろりのほとり。
俗煩＝世俗のめんどうなこと。

〔口語訳〕
とぎれとぎれに寒風が吹くと、霜葉はひるがえり
そまつな家は、終日柴の門を鎖している。
埋み火を掘り出したいろりのほとりでは、茶煙が上り
夜半の鐘声は、世俗の煩わしさを消してくれる。

ロボット雑考（その十四）

三戸岡　道夫

一、ＧＡＦＡという言葉

情報技術の世界にＧＡＦＡという言葉があるが、それは次の、アメリカの大手四社のＩＴ（情報技術）の頭文字を並べた総称である。

○グーグル（Ｇ）
○アップル（Ａ）
○フェイスブック（Ｆ）
○アマゾン・ドット・コム（Ａ）

一九七六年に創業したアップルが最も古く、アマゾンは一九九四年、グーグルは一九九八年、フェイスブックは二〇〇四年に誕生した。

インターネットが世界に普及する過程で、検索サービスやＳＮＳ（交流サイト）などの新しいデジタルサービスを創出して、業容を拡大してきた。

デジタル革命の波に乗り、国境を越えて急成長し、「プラットフォーマー」とも呼ばれる。通販などの事業を通じて世界中の利用者のデーターを蓄積し、新たな製品やサービスを生み出す。投資家からの成長性への期待は強く、二〇一八年八月にアップルの時価総額がアメリカ企業として初めて一兆ドルを突破し、同年九月にはアマゾンも続いた。

研究開発にも積極的で、アマゾンの二〇一八年の研究開発費は、約三兆二千億円と、世界企業で首位となった。グーグルは実用化が二十年先ともいわれる次世代計算機の量子コンピューター研究で先行する。

最近はデーターの独占に世界各国で批判にさらされることも多い。日本でも、政府がＧＡＦＡを念頭に、データー寡占による競争阻害を規制する、新たなルール整備が進んでいる。

二、ＩＴ巨人に危機感

日本でネットサービス「ヤフー」を展開するＺホールディングス（ＺＨＤ）と、ＬＩＮＥは、二〇二〇年十月に経営統合することで合意した。

日本のネット企業としては日本最大となり、アメリカのＧＡＦＡや、中国のＩＴ（情報技術）大手に対抗することになる。ＩＴ業界はデーター収集をめぐる競争がくり拡げられている。今回の水平統合は、グローバル競争で出遅れた両社が、国内のデーター獲得競争で優位に立ち、世界に本格的に挑む一歩となろう。

ＺＨＤの川辺健太郎社長は、

「東アジアから、米国に次ぐ第三極を作っていきたい」

ＬＩＮＥの出沢剛社長は、

「人材、資金、データのすべてが勝者総取りというビジネス構造で、グローバルテックジャイアントへの危機感がある」

と、両社長は米中のＩＴ大手に対する強い危機感を示している。

両社は二〇一九年十二月をめどに、最終契約を結び、それぞれの親会社のソフトバンクと、韓国ネイバーが共同で、ＬＩＮＥにＴＯＢ（株式公開買付け）を実施し、三四〇〇億円を投じて非公開にする計画である。最終的にはソフトバンクとネイバーが五十パーセントずつ出資する共同出資会社が、ＺＨＤの親会社となり、ソフトバンクが共同出資会社を連結対象にする。

ＺＨＤ傘下に完全子会社のヤフーとＬＩＮＥが入る。統合後のＺＨＤは川辺が社長を務め、川辺と出沢が共同最高経営責任者（ＣＥＯ）になる予定である。

ＺＨＤとＬＩＮＥの時価総額を合計すると、三・二兆円になる。これは中国ネット通販二位の京東集団（ＪＤドットコム、五・三兆円）や、中国検索最大手の百度（バイドゥ、四・四兆円）に、迫る規模になる。

しかし、百兆円前後のグーグル親会社の米アルファベットや、米アマゾン・ドットコム、中国「ＢＡＴ」の一角で、五十兆円超のアリババ集団には遠く及ばない。「第三極」の形成としては力不足である。

出沢社長も、

「我々は、すべてのサービスを提供できる、スーパーアプリ戦略を実現しようとしてきたが、グローバルの強いプレーヤーとの競争は、国内でも激しい」

と認めた。

ＺＨＤはここ数年、オフィス用品通販のアスクル、ファッション通販のＺＯＺＯなどを傘下に収めた、幅広い顧客データーを生かす戦略を明確にしてきた。若手層

に強いＬＩＮＥに手を拡げ、グローバル競争に備えた。今回の統合は、内弁慶で、国内事業に収益を依存してきた楽天など、他のネット大手の戦略にも影響を与える。

巨大ネット企業が、将来の競合になり得る企業と統合し、データー活用に生かすのは、近年の潮流である。

フェイスブックが、対話アプリのワッツアップや、写真共有アプリのインスタグラムを買収したように、米国勢は小規模でも革新的と認めれば、巨額を投じ手に入れる。グーグルやアマゾンなどは、機器メーカーや流通大手など非ネット分野でも、買収を繰りひろげる。自社のデーター分析などを生かし、新サービスやビジネスモデルを創出している。

米調査会社ＣＢインサイツによれば、ＧＡＦＡ（グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン）に、マイクロソフトを加えた米五社が、三十年間に買収した企業は、七五〇社以上にのぼる。中国勢も決済や物流などを絡めた複合サービスで力を付け、買収に積極的である。一方で、巨大ネット企業の買収で、新興勢力の良さが失われるとの懸念もある。

しかしＺＨＤとＬＩＮＥの統合による相乗効果は、見えにくい面がある。両サービスとも国内の利用者数では成熟度が強まっている。これまでにない価値の創出には、相当の工夫が必要である。

強いテクノロジー企業の存在は、国にとって大切である。データの活用は、産業競争力というだけでなく、プライバシー保護や安全保障にかかわる。技術力が高く、発言力のある企業が、デジタル社会の価値観を世界に発信することが欠かせない。

ヤフー・ＬＩＮＥの統合は日本のネット史に残る動きであるが、しかしダイナミックに動く世界の競争で、勝ち抜くシナリオがはっきり見えてきたわけではない。

（つづく）

古い物・遠い夢

忠内正之

平和の女神像と青銅の花入

はじめに

昭和・平成・令和と、いつしか年月は流れて、意識しない程に九十歳に近い老人となってしまった。相変らずの古びた話となるが、老人の愚痴めいた呟きとお許し願っておつき合い下さい。

（一）

写真の女神像は高さ四十一㎝、花入は二十三㎝、共に青銅で造られており、上々の出来栄えである。この二つは、私がかつて働いた協和銀行（今のりそな銀行）の創立十周年の記念品として、昭和三十三年七月、行員に贈られたものである。

等身大の女神像が当時本店（新丸ビル）のロビーの一角に飾られていた。女性の裸像は「平和の女神」と名付けられた。銀行の本店に飾られるものとして、果してふさわしいものであるかどうか、疑問視されるところであるが、鳩を手にして平和を訴える姿が「協和」にとって極めて大きな意味をもつことが後によく理解できるようになった。その点について追い追い説明していきたい。

女神像を縮小したブロンズ像が、当時の支店長クラス全員に贈呈されたのである。また一般行員に対しては、鶴首の花入が渡されたのである。相当思い切った予算を要した記念品の贈与であったと思う。

当時私は入行五年目の平行員で、当然のごとく鶴首の花入を戴いたのであるが、その頃から既に美術品に興味



女神像の共箱　　平和の女神像（縮小版）　　鶴首の花入

を持ち初めていたので、そのブロンズの女神像に強い関心を持った。一度手にとってゆっくり眺めたいと思ってみたものの、支店長と平行員の身分のギャップは大きく結局見せてもらえぬ侭であった。

直接の上司である、支店長代理に相談してみても、自分等に関係なしとして話かけに乗ってくれない。更にうるさく問うと、本店営業部のロビーに実物大の女神が飾ってあるというので眺めて来たらどうか、とのアドバイスがあった。

その頃私は支店長席と言う営業係であったから、用事にかこつけて本店に立ち寄り直に女神像を観察することができた。

なる程当時一流の彫刻家が精魂をこめて造ったといわれる逸品で優美極まる作品であった。女性の裸像を得意とする作家だけあって美しく艶かしい。当時は未だ堅苦しい時代であった。じっと眺めているのが恥ずかしくて早々に立ち帰って来た。思えばあの頃は極めて純情であった。

しかし実物像を見たことによって、小さなブロンズ像を手にとって見たいという願望が更に強くなった。噂によると、その像は既に美術品として評価されており、数万円の値打ちがあるとも伝えられた。

そのブロンズ像には遂に見えることはできなかった。従って、一般行員に渡された花入れを抱いて我慢したので

あった。

花入れは今も大切に持っている。中中の上出来で、拭へばよく光り六十年の貫録を示している。高台（底の部分のこと）の裏には「旧協和」のマークが刻まれている。九度に亘る転居に耐えて品の良さを保っている。最近になって、旧同僚たちに尋ねたところ誰も花入を貰った記憶が無いとのことで驚いた。

さて時代は移って、本年七月、縁あって、夢にまで見た小ブロンズ像が私の手許に届いたのである。六十年振りの初対面である。像と花入が揃ったところを写真でお示しする。

そして私事にも関わることなので恐縮であるが、十周年の記念品が揃ったところで、私の勤務した「協和銀行」の生い立ちから述べさせて戴きます。

銀行とは合併の歴史である。私が入行した「協和銀行」は後に「埼玉銀行」と合併し、更に「大和銀行」と合併した。そして今は「りそな銀行」となった。かつて十三行を数えた都市銀行は「三メガバンク」と「りそな銀行」の四つに集約されてしまった。更にこれからも、地方銀行を含めての再編成が続く可能性が高い。金融界をとりまく環境は常にきびしく且つ流動性を秘めているのであろうか。

この文章では難しい問題から離れて「協和銀行」のスタート時に遡ってなぜあの様な時期にあの様に豪華な記念品が実現したのか、探って見ることにしたい。

戦時中の昭和二十年三月、全国に散在していた数多くの貯蓄銀行（貯蓄銀行法に基づく特殊銀行）は、戦費調達を更に促進する目的から二分された。

都市銀行系を含む大手の九大貯蓄銀行は統合され日本貯蓄銀行となった。中小貯蓄銀行は一県一行の地銀に吸収された。（地銀は貯蓄銀行を兼ねることになった）

昭和二十年五月に開業した日本貯蓄銀行は、預金残高九十億円、有価証券保有八十六億円、店舗数三百六十六、行員数一万五千人という巨大銀行であった。会長に安田保善社社長の安田一、頭取には日本銀行理事で大阪支店長であった内山直三が就任した。

合併した貯蓄銀行の最大手は、不動貯蓄銀行で総資金量九十億円のうち約三十％のシェアーを占めていた。そのため、芝大門にある不動貯蓄の本店ビルがそのまま新銀行の本店になった。

トップの不動に続く銀行は上から、安田・大阪・日本の順で、少し小規模になって東京・内国・日本相互・掘津・第一相互の夫々貯蓄銀行であった。資料の表に見る通り、何れも財閥系や地方豪商の経営であり、立派な業歴を持つ存在であった。

合併時の9貯蓄銀行の内容（昭和20年5月15日）

行名	合併時預金	同店舗数	店舗配置	創業	合併時払込資本金	株主または大口資本系統
	百万円		——印は本店所在地		千円	
不動貯金	2,819	95	東京他全国主要都市	明33	8,000	牧野家（住友銀行）（三菱銀行）
安田貯蓄	2,160	75	東京、神奈川、大阪、福岡他	明29	5,035	安田保善社
大阪貯蓄	1,904	68	大阪、京都、兵庫、東京他	明23	7,000	山口（資）及び三和銀行
日本貯蓄	620	35	愛知、三重、京都	明31	2,300	東海銀行
東京貯蓄	456	30	東京、京都	明25	1,250	第一銀行（帝国銀行）
内国貯金	450	19	東京、愛知、静岡他	大1	1,000	前山家（帝国銀行）
日本相互貯蓄	227	17	大阪、兵庫、京都	大14	1,250	小西家ほか関西財界人
摂津貯蓄	202	18	大阪	大1	1,125	岸本家
第一相互貯蓄	169	9	東京	大11	500	第一生命
計	9,007	366			27,460	（）は昭和18年以降に大株主となったもの

昭和二十年八月敗戦、日本貯蓄銀行は当時の都市銀行を凌駕する程の預金量を擁していたが、運用が殆んど国債に限られていたため、敗戦のショックと昂進するインフレに弱かった。このため業績は低迷し赤字経営にならざるを得なかった。

昭和二十年十月、財閥解体の余波で安田一が辞任した。更に公職追放令によって内山頭取ほか五人の役員と監査役が昭和二十二年六月に退任を余儀なくされた。

新たに頭取となったのは小田切武林であった。小田切は当時四十九才、昭和二十一年六月以降日本銀行の理事に就任していた。

この時の事情が白著「松かさ」に語られているので要約する。

昭和二十二年五月末の土曜日、日銀総裁（一万田総裁）に呼出されて、築地の料亭で二人きりになると「日本貯蓄へ行って呉れないか」と切り出された。その場では「考えさせて貰いたい」と答えておいて、友人に相談したところ「寧ろ鶏口となるも牛後となる勿れ」、だよとハッパを掛けられたので、翌々日承諾の旨総裁に対して正式に意思表示した。

もとより自分は自身の進退異動についてはあまり逆はない方針で進んできた。如何なる新しい地位を与えられても、そこで何んらかの働きを示すことが出来るものと信じていたからである。

さて、現実に自分が日本貯蓄銀行に行かねばならないとなると、さすが呑気者の自分も真剣にならざるを得ない。

そこで考査局（日銀の内部組織で、銀行の検査を担当している）から資料を集めて同行の状態を再三再四検討して見た。結論は絶望的で問題は深刻である。貯蓄銀行法という法律に金縛りにあって収益力が低く抑えられているのに、インフレ昂進中なので、経費、人件費の増加を見込まねばならない。僅かばかりの預金増加や、日本銀行の援助では、到底収支のバランスを恢復すべくもない。否それどころか、日本貯蓄銀行の預金の推移を見ると停滞の状況を示しているではないか。後悔の念が湧いて来た。しかし後悔先に立たずである。

とやかくしている内に時日は遠慮なく経過していった。一夕某銀行幹部からの送別会に招かれた。わたくしを労っおこうとの趣旨であったろう。この会食の席上で接待に出た若い女性から聞いた一言によって勇気づけられたのである。

自分は新橋で焼け出されて、（前身は芸者だったらしい）現在は素人として高田馬場辺に住んでいるが、附近の日本貯蓄銀行の支店の預金者である。窓口へ行くと、とても愛想よく挨拶してくれる。行員同志も礼儀が正しくて実に気持がよい。自分は行員が皆んな親切で、礼儀正しいこの支店のファンである。よその銀行などには決してお金を預けない。・・・

会話の中から日本貯蓄銀行の名前を聞いて、とっさにこの発言があったものと思われる。溺れる者は藁をも掴むとか。日本貯蓄銀行の再建について数字を検討した揚句、意気阻喪していたわたくしは、この女性の話を聞いて、どれくらい精神的に力づけられたか分からない。日本貯蓄銀行にはまだまだファンが居る。今流行の言葉を借りれば、日本貯蓄銀行は「愛されている銀行」である。銀行は「愛されている」限り決してつぶれてしまう筈はない。とにかく行って努力して見よう・・・。わたくしは、考え直した。わたくしは、勇猛心を奮い起した。

小田切は昭和二十二年七月十二日、日本貯蓄銀行の頭取に就任した。

着任前よりかなりの困難性は予測していたが、実際に

直面すると更に深刻な状況下にあった。

「金融機関の赤字経営は許されない」とされた昭和二十二年十二月の「整備計画許可基準」の発令で、「もはや普通銀行に転換するより道は無い」と判断した小田切頭取は大規模な人員整理と余剰店舗の廃止という大手術に踏み切った。

昭和二十三年五月日銀特別融資二十八億円の借入が実現した。（現在の貨幣価値に換算すれば一兆五千億円以上となるか）

昭和二十三年七月、ようやく普通銀行への転換が実現し「協和銀行」が誕生を迎えた。

本店の建物はそのまま継承された。

普通銀行に転換したものの合併の後遺症、普銀業務の習熟、労働組合対策（労働組合は二組織があり組合員の中には過激な思想の持主が居た）等、数多の困難があった。

しかしカリスマ的ガバナンスを発揮した小田切頭取の指揮のもと、行員もよく協力した。また復興に伴なう旺盛な資金需要にも支えられて業績は飛躍的に向上した。

早くも昭和二十四年下期には利益は黒字となり、配当を復活するに至った。また昭和二十五年九月には、日銀特融を完済することができたのである。

そして昭和二十六年十月、株式を東京証券取引所に上場するに至った。

業容の順調な拡大に伴って手狭になったので昭和二十七年十一月、本店は東京駅前の新丸ビルに移転した。テナントではあるが立地条件は最高で行員のモラールは上がり、顧客にもアピールした。都市銀行の中核としての存在を認められる形となったのである。

この時にあたり、喜びにあふれる行員のなかから何か記念になるものを行内に残したいという声が湧き起こり、新本店のロビーの一角を飾るブロンズ彫刻女神像「平和」が全行員の心からの醵金によって贈られた。

作者は日本芸術員会員藤井浩祐で、氏はかねてから早春に萌え出づる早蕨の如き平和と繁栄の姿を、美しき女身像に託して表現したいと想を練っておられたのであるが、行員たちの意のあるところを諒としてこの像を協和銀行のために製作されたものである。



新丸ビル本店営業部と飾られた等身大女神像「平和」

後に小田切頭取は、普銀転換当時を回顧して次のように述べている。

「振り返って普通銀行に転換した昭和二十三年頃の協和銀行の状態をみますと、その当時は、毎期赤字を出しておりまして、累積赤字は二億円以上にのぼったということを当時おられた方は記憶されていると思います。当時の資本金は七千万円程度でありましたから、資本金の三倍程度の大きさの赤字であります。

そこで当時の支店長方は皆、銀行のことを心配し、自分たちがやらなければ銀行は駄目になるのだという考えをもち、普通銀行業務にはなるほど未熟ではありましたでしょうが、必死の男気をもって預金増強その他のことをやられたのであります。私なども一年半が二年位の間は毎晩家で夕飯を食べたことがない、また夜中に目が覚めても銀行のことを考えている。というような状態でした。」

昭和三十三年の創立十周年を盛業裡に迎える事が出来たことを小田切頭取を始め当時の経営者は大変喜んだに違いない。そこで所縁（ゆかり）のある女神像の縮小版と花人を記念品として全行員に配ったものと思われる。

業績の回復が先づ第一の関心事であることは当然であるが、小田切頭取が最も懸念されたのは、行名にある「協和」であり、「協和」とは、心をあわせ仲よくすることである。旧九行の派閥争いを最も警戒していたのであるが、緊張感が幸いしてか、ワンチームの力強い足並となったので、ひと安心されたようである。

そこで記念品は「協和」を「平和」と読み換えて女神像の贈呈となったものと思われる。

昭和二十五年度から定期採用がなされる様になった。私は昭和二十八年の入行なので十周年記念品の恩恵に与（あずか）かったのであるが、前述の通り戴いたのはブロンズの花入にすぎなかったのは残念であった。なお、その後、創立二十周年、三十周年と在職し、夫々記念品に浴したがいずれも消耗品の類（たぐい）であって、十周年の時ほど思い入れの籠ったものは無かった。

昭和三十七年二月、小田切頭取は頭取職を日本銀行出身の篠原周一に譲って自らは会長に就任した。昭和四十年二月小田切会長は現職のまま死去された。享年六十七歳、「協和銀行」の行先をもう少しの間、見届けていたかったであろうに残念なことであった。

私は本部勤務の頃、小田切会長には二度ほど、廊下で

すれ違い日礼しただけの思い出しかないが、「永井荷風に似た風貌かな」との印象であった。専ら強烈な個性の持主だとの評判であったが実体は案に相違していた様である。文人としての嗜みがあり、窪田空穂に師事した短歌は素人ばなれしており、また名エッセイストとして、煌めく才能を発揮している。今私の手許に遺文集が一冊ある。時たま之を読み返しているが、予想外に洒脱で、かつ思いやりのあるお人柄であったことが窺われ微笑ましい。

「協和銀行」は幾星霜を経て、「埼玉銀行」と合併し、更に「大和銀行」と合併し、現在の「りそな銀行」となり盛業中である。

あの等身大の平和を象徴する女神像は、昭和五十三年十二月に完成した大手町の自社ビルの一階ロビーにも飾られていた。しかし「りそな銀行」となり、平成二十一年「りそな銀行」東京本社が江東区木場のテナントビルに移行するに及び撤去されてしまった。今はどこかの倉庫に眠らされているらしい。

これからの銀行の将来は、並大抵ではない難路と考えられる。今こそ全行員の「協和」が要望される時、シンボルである平和像が眠っているのは誠に残念と思うのは私一人だけであろうか。

(二)

話題は変って以降は、小さな女神像を巡る私的な話となることをご了解願います。

時は少し遡る。昭和四十三年十一月六日、私は協和銀行富山支店長であった。十二月は稼ぎ時でもある。朝から張り切って営業に出陣しようと準備しているところへ、本部から電話である。人事部長からであった。

「本日付をもって福島支店長を命ずる」という。当行は福島県に支店は無かったと疑問に思ったが、大阪市の福島支店であった。

前任支店長が心臓疾患で倒れてしまい、店舗が明後日十二月八日に新築オープンするので直ぐに赴任してもらいたい。富山支店の後任は現在の次長を自店昇格させるとの内容であった。

新築オープン三日間は店頭に立って来客に挨拶するきまりなので、モーニングと身の廻り品をボストンバッグにまとめて翌七日の夜行列車に乗った。

翌日早朝、店舗の前に立って建物を眺めるとき、新築支店の姿は堂々として、巡洋艦を見る様なたのもしい心地がした。この様な立派な店の管理者になったかと、誇りに思うよりこれからの責任がひしひしと胸に迫ってきて「やるぞ」という力が湧いてきた。今ではその様なファイトは、全く望めないが当時は三十七歳と、若かったからであろう。

富山支店へとって返しての引き継ぎも完了し、根雪の残る社宅に別れて、一家揃って阪神鳴尾の社宅におちつくことができた。

鳴尾は西に六甲山を仰ぎ、東に武庫川を臨んだ暮らし易い土地である。

福島地区は、中小企業（自動車部品とメリヤスを主とした地域産業がある）、商店、住宅が混在する雑多な地区である。しかし下町的な人情に厚く、「キタ」としての気品も感じられた。自慢する訳ではないが、私の気性にピッタリ合っていた。というより合せることができた。

私はこの支店に二年余り在勤したが、長い銀行生活の中でこの時程気持ちよく働くことができて、成果も上がり、楽しかった経験はなかった。新築という好条件のもと、一般景況も上昇中でしかも、優秀な行員に恵まれていた故だと思う。

一段落してきたところで、苦労をかけた行員たちを次々と昇進昇格させる様心掛けていた。当然転勤転入の入替人事が進むことになる。

前置きが長くなったが、着任後一年ほど経過した頃、転勤人事でO代理が福島支店へ転勤してきた。この人物との出会いから、平和女神像が五十年後に私の手許に届くきっかけが生ずることになるとは思いも及ばないことであった。

O君は生粋の関西育ちであった。高校卒ではあるが、営業経験豊富なベテラン代理で、次長昇進へのトップランナーであったという。それなのに当店へ横すべりで転勤することになったのである。

聞くところによれば、O君は前任店で最古参の代理として支店を仕切ってきたが、新しく東京から赴任して来た、元気の良いエリート支店長と意見対立して転勤させられたという。支店で上司と争って最後迄妥協しなければ下の者の負けである。負ければ失点となる。銀行というところは得点主義でなく失点主義である。失点を重ねれば昇進に響く。この様なことは自明の理である。O君は解っていながらも我慢ができなかったのであろう。

O君と面接してみると、如何にも利かん気の性格の様である。しかししっかりしている。彼を腐らせてしまうのは惜しい。資質のある人材は活用しなければ勿体ない。新築店は目標が高い、銀行の期待も大きい。「前任店でどの様なことがあったかは問題としない。先入観は全くなしで、これからの君の働きを見て評価するから頑張りたまえ。」と言って彼にハッパをかけたと思う。そして色々話をしてみると、彼と私は生年月日が殆んど同じであり、従って戦中戦後同じ様な体験をしたことも分かり

親しみがもてた。

また関西勤務の長い彼は、関西地区の事情に疎い私に種々と教えてくれた。どうやら彼も古い物が好きらしい。奈良、京都大阪の名所旧跡等の話題から「喰い倒れ」の大阪に至る迄話が弾み、二・三か月のうちに二人は意気投合する間柄となっていた。

この店は来店客が多い。新築してから更に増えて、一日千五百人から二千人の数となった。取引先も新規開拓が進んだ。このため内部固めも必要である。彼を中心として、来客管理、事務管理を徹底してもらった。主管者である私と次長は専ら営業活動に専念することができた。

昭和四十六年一月、私は本部勤務となった。二年余りの勤務であったが業績を順調に伸ばすことが出来たと思っている。このことは、顧客の協力や、新築の意義を体しての行員一同の努力あっての故と思うが、心機一転縁の下の力持ちに徹してくれたO君の尽力が大きく貢献したことは否めない。

本部へ着任後も、支店の行員等の昇進昇格に配慮したつもりである。後任者によく引き継ぎして、次長は支店長へ、代理は支店次長へ、一般行員は支店長代理へと推薦した。

O君も例外ではなかったが、前任店での印象の影響か、はかばかしく進まなかった。やがて副長制度（支店次長と代理の中間位）の新設に乗って、城西地区の母店副長に選ばれた。

ブロック傘下の支店の事務管理を指導する立場である。彼はその立場で実力を発揮した。持前の几帳面さと、指導力と、更に押しの強さが功を奏したのであろう。その彼に大きなチャンスが訪れた。銀行の第三次オンライン施行に伴う要員として彼が本部の事務指導課長として抜擢されたのである。副長から本部課長への昇進は二段飛びであった。

彼の実力を認め抜擢したのは当時の事務管理部長大貫氏であった。O君は東京勤務の経験がなくまた古参の部下がおり、かなり苦労をしたようであるが、立派に役目を果たして、大阪支店課長に戻って錦を飾った。

その後、定年前に請われて神戸のコーヒーを扱う商社に勤務した。この会社はきびしいことで有名であったが、彼は定年迄勤め上げて、その後は奈良の自宅に戻り、静かな生活を続けたようである。

彼との交友は続いた。元の行員たちと一日京都で遊び、彼とは同室に泊って一晩語り明かしたこともあった。

当時の行員たちとの交流は残念ながら追々薄れて行った。病気で臥せる人や、亡くなる人迄出て来た。その中で最年長である二人は健在を競い合った。彼の住むところは奈良でも旧い地域で天皇の陵や、有名な寺もあるらしい。その廻りを一日二万歩散歩するのが日課だと云っ

て私を羨ましがらせていた。

その彼が二年程前転んで脊椎を痛めて車椅子生活となっているとの連絡が入った。早速驚いてお見舞いの連絡をすると、自宅で転んで打ち所が悪くて寝たり起きたりの生活となった由である。当面生命に障ることは心配ない様であるが、奥さんはさぞ苦労をかけるであろうと心配になった。しかし、更に驚くことに、最初の奥さんとは別れて今の奥さんと再婚したとのことであった。

今迄の交友関係の中でなかなか捌けた人柄だと認めてはいたが、艶っぽい話は少しも聞いていなかったので直ちに信じられなかったが、事実であった。

ご子息の進学問題で夫婦仲が悪くなり離婚。その後、福島支店へ転任する前の店で彼が指導した新入女子行員と再会して結婚した由である。お互いに再婚どうしであったと云う。

令和元年六月、O君の訃報が届いた。最近衰弱が著しくなり、施設で養生していたところ容態が急変したという。奥さんからの連絡であった。

思えば、再婚後三十年近くの間、奥さんの愛情と手厚い介護を受けて八十九歳を完うできたことは、最高の幸せであったと考えられるが、長年に亘る友人に先立たれて侘しい限りである。

さて前置きが長くなったが、今年八月末（令和元年八月）私のところへ問題の平和の女神像が届いたのである。奥さんからO君の四十九日の法要も済んで、私への「形見」の品として送って下さったのである。誠にありがたいことではあるが、なぜ彼のところに女神像があったのか、またなぜ私に下さることになったのか大きな疑問が残った。

奥さんの説明によれば、O君のお父上は、旧不動貯蓄銀行の出身で、昭和三十三年の十周年の時では、協和銀行の大阪地区の支店長をされてをり、その時の記念品をO君は大切に保存していたという。

また、O君は私との交友関係を奥さんと語る時、常に私がこの像に大変な執着心を持っていることを話題にしていたらしい。

そこでこの像は私に贈るのが最善と判断し奥さんから私に送られてきたものである。

改めてこの像を観察すると、六十年の歳月を経ているにも拘らず、きれいに保存されて美しい。大切な共箱も完全で、木の台座も備わっている。

日本芸術員会員「藤井浩祐」作、裸婦「平和の女神」像である。美しいこの裸像を私は玄関に飾って毎日のように、「協和銀行」時代の思い出やO君との懐かしい交友を反芻しながら眺めているのである。

しかし私にしてもいつ迄も元気で居られる筈がない。

本像を大切に所蔵してくれる所を探さねばならない。「りそな銀行」のOB会は現在四分断されている。「旧協和」、「旧埼玉」、「旧大和」、「りそな」の四つである。

いずれ統一されると思われ、この像を飾るにふさわしい部屋が設けられるものと思うので、この像をOB会に寄付したいと考えている。

合併銀行である、「りそな銀行」が更に大きく躍進するためには、女神の言う「平和」（協和）が最も重要な第一条件であると訴えたいからである。

一方の記念品である「鶴首の花入」は、これからも我家の茶道具の一員として大切に守っていきたいと考えている。

終

参考資料

協和銀行史　協和銀行　（S44・3・31）
松かさ　小田切武林（S30・7・15）
草木譜　小田切武林（S41・2・20）

青雲の彼方（七）

太田精一

七、ワシントン会議による国際新秩序

（一）天羽英二の結婚

大正十年（一九二〇）一月三日、天羽英二を乗せた日本郵船加賀丸は、神戸港第四波止場に着いた。兄の真一、弟の篤五郎が出迎えた。

英二は、大阪の叔父阿部万平宅で正月を過ごした後、一月六日東京に向かった。久しぶりの本省勤務である。欧米局第二課に配属され、来るべきワシントン会議の準備を担当することになったのである。

英二は外務省に入省して十年余りたっていた。その間中国、豪州、英国と三か国で勤務し、年も三十半ばになり、最も脂の乗りきっている時期であった。だが、彼にはまだ妻がいない。そのため、帰国と同時に親戚、知人、友人、外務省の上司から結婚話が持ち込まれた。

二月四日、日比谷松本楼で、友人の池辺龍一郎氏から結婚話が持ち掛けられた。

「天羽君、長い間の海外勤務ご苦労様でした。戦時中のロンドンは、しばしば空襲を受け、危ない思いもしたことだろう。まあ何はともあれ、無事帰国しておめでとう」

「有難う。今回は、豪州から、直接英国に赴任したので、その間日本の実情もわからず、本省からの訓令もその真意がわからなかったこともあり、トンチンカンな返電をしたこともあったようだ」

「ところで天羽君、君も三十半ばになり、そろそろ結婚してもよい頃だと思うが、僕の知り合いでいい娘がいるのだ。どうかね、その娘と一度見合いしてみたら、気に入らなければ、断っても僕は一向にかまわないから」

「そうだな、実は帰国してから、結婚を進められることが多くて、これで三人目だ。外務省に勤務していると

ついつい結婚は遅れがちとなる。だから外国人の女性と勤務地で仲良くなって結婚するといったケースが少なくない。また、料亭などでの会食も多くなるので馴染みの料亭の中居やそこの出入りの芸者と出来てしまって結婚するといったケースもある。だが、ここのところ外務省でも外国人との結婚は、機密漏洩の問題が生じる懼れがあるので、できるだけ避けるようにとのお達しが出され、これまでのように自由、気ままに結婚するわけにはいかなくなったようだ」

「僕の紹介するその娘は、良妻賢母型で、それでいて社交性に富んでいるからまさに外交官の奥さんとしては、理想的だと思うがなあ。父親は久保勇と言って鹿児島出身の人だ。ここに彼女の写真を持ってきたのでまあ見てくれ」

「他ならぬ君の勧めだから、その人にも会わずにむげに断るわけにもいかんだろう。しばらく考えさせてくれ」

そう言って英二は松本楼の窓から外を眺めた。昨日から雪は降り続いている。公園の木々の枝は雪をかぶり、時折その重い雪が地上に落ちて行く。

英二は、いよいよ独身に別れを告げる時期が来たように思った。

でも今、縁談の持ち込まれている末の妹町子の結婚を見届けてからにしたいとも考えた。

町子は、実業家井爪忝次氏と婚約中であった。彼は、英二の姉、カネの先生萩森たつの先生の教え子である。町子と井爪氏との結婚の日取りも決まり、三月三十一日、日比谷大神宮にて結婚式を挙げ、同日午後六時より帝国ホテルにて披露宴を行うことになったのである。

町子の結婚式の日取りが決まって英二はひと安心し、三月十九日久保勇氏の娘美代との見合いをすることに決めた。見合いは、妹の結婚式後、帝国ホテルの一室で行って、その場で結婚の意思を固めた。

見合い後結婚話は順調に進み、四月四日には、久保夫妻が英二の家を訪れた。春の日差しが温かく、桜が満開で、いかにも日本の春らしいのどかな日であった。

「婚約も調い、結納も取り交わしたことでもありますし、挙式はできるだけ早いほうがよいように思いますがいつ頃にいたしましょう」

久保夫妻は、多忙な英二のスケージュルに合わせるといいながら、式の日取りを早くしたい様子であった。

「そうですね、善は急げと申しますから、式の日取りはできるだけ早くいたしましょう。幸いにして、懸案の交渉事は、一か月後から動き出すと思われますので、いささか急ではありますが、五月二日（月）でいかがでしょうか。一か月足らずですのでお支度も大変かと思いますが、この時期を置いてゆっくりできる日程を組むことができませんので、その点よろしくお願いします。式は私の自宅で行い、披露宴は、帝国ホテルでと思っています。媒酌人には、日頃私がお世話になっております伊集院彦吉男爵にお願いしようと思っております。伊集院男爵は、私が英国大使館勤務の時にイタリア大使を務められ、ベルサユー条約締結の時は、一緒に仕事させていただいた大変立派な方です。薩摩出身で、そちら様と同郷ですので何かと都合がよいかと思います」

「伊集院様が、媒酌人をお引き受けくだされれば、こちらに異存はございません。ただ、お忙しい方でいらっしゃいますからお引き受けいただけるかどうかですね。また、帝国ホテルの方はどうでしょうか。予約が取れますでしょうか」

「伊集院男爵の方は、この話が持ち上がった折に相談方々それとなくお話をしておきましたので、問題ありませんが、五月二日ご都合がよろしいかどうか聞いておきます。披露宴会場の帝国ホテルは今すぐ聞いてみましょう」

英二は、すぐに帝国ホテルに電話をして予約を入れた。幸いにして、空いていたので、あとは媒酌人の伊集院男爵のご都合のみとなった。

四月十日（日）改めて伊集院男爵のお宅にお願いに行くことを申し合わせて、久保勇夫妻は、英二の家を辞した。

四月十日は、桜も満開で春たけなわの陽気であった。街行く人も何となく華やいでいる。伊集院男爵は媒酌人の役目を快く引き受けてくださり、五月二日（月）午後三時平河町の英二の居宅で式を挙げ、披露宴は帝国ホテルで午後六時から執り行われることが決まったのである。

結婚式の当日を迎えた。だが、英二には、早急に提出しなければならない書類があったので、朝いつもの通り外務省に出勤、外交調査会へ提出の海底ケーブル問題の報告書を提出、午後平河町の自宅に帰って三時に結婚式を挙げ、六時に帝国ホテルにて伊集院夫妻の媒酌により披露宴を行った。招待者一八〇人、華やかな披露宴であった。その夜は、新婚旅行として鎌倉まで出向き、鎌倉海浜ホテルに一泊した。翌朝、鶴岡八幡宮と大仏に詣で、鵠沼海岸を散策し、穏やかな初夏の海を眺め、二人で将来を語りあった。

この日は、国際情勢が緊迫し、懸案事項を抱える英二にとって、与えられたほんのひと時のささやかな休息の一日であったに違いない。

その後三週間ほど費やして、英二は、妻の美代と二人で、伊集院男爵をはじめ、結婚にあたってお世話になった方々へ一軒、一軒お礼の挨拶に伺っている。

（二）ワシントン会議に向けて

九月に入ると、外務省は、ワシントン会議への準備が

最優先として扱われるようになった。議論の争点となる問題に対し、日本としてどのように対応するか関係省庁との擦り合わせが、頻繁に行われた。

そんな時、一つの大きな難題が起こった。

海底ケーブル故障の問題である。

米国から外務本省との連絡に必要な通信が滞る恐れが出てきたのだ。海底ケーブルが八丈島沖付近において故障した結果、通信に大きな支障をきたし始めた。修理をしたくとも同島付近の気象条件が悪く、修理船を出すことができない。十一月十二日のワシントン会議の開会式までに間に合わないことも予想されるので、この際、那覇、ヤップ、グアム間のケーブルを利用して、それに東京、小笠原間のケーブルを結び付けることによって、過密通信による混乱の危険を回避する案を逓信省から外務省に提示された。しかし、この方法を使うには、主たる同盟国、連合国の同意を得る必要がある。それだけでない。グアム島においてヤップ線を運用している米国の太平洋海底通信会社の同意を得なければならない。ついては、暫定的措置として関係国及び同社の了解を外務省から取り付けていただきたいとの要請があった。

英二は、担当者として各国及び通信会社の了解を取り付けるため、書類を作成し関係方面に働きかけ、各国からおおむね了解を得た。だが、料金問題など細かな問題が残り、解決を見たのは、ワシントン会議が始まった十一月十二日を過ぎてからのことであった。とはいえ同会議は、多くの難問を抱え、翌年の大正十一年（一九二一）二月六日まで延々と続けられたので、日本の講じた方法の利用価値は、それなりに有効であったといえる。

十月十五日（土）、ワシントン会議日本代表団が横浜港を出発した。

加藤友三郎全権、徳川家達全権、埴原正直事務次官、松平恒雄政策局長、横田千之助法制局長官、出渕勝次参事官を主任とする十三名の事務方職員、それに電信、翻訳官、各省庁から選出された代表者、民間からの英米訪問者、加えて報道機関から四十名余りが参加し、総勢百四十三人の大代表団が構成された。

英二は全権随員という立場で代表団の一員となった。

途中、十月二十一日から大暴風雨が太平洋上を荒れ狂い、十月二十五日まで続いた。その嵐が、前途多難を予想させる前兆ととらえたのは、ひとり英二だけではなかったようである。

十月二十九日、バンクーバーにようやく到着した。小雨に煙る港は、霧が掛かっているように見える。斎藤博シアトル領事、斎藤和バンクーバー領事他多数の日本人が出迎え、約一時間後にバンクーバーを出港してシアトルに着いた。直ちに列車に乗り換えシカゴに向かう。シカゴでは、国務省、合衆国司法省、州知事、市長、法務

長官、商業会議所代表が出迎え、警察及び軍隊から警備が付いた。

十一月四日、午後四時半、ワシントンに到着した。ヒューズ国務長官ルーズベルト海軍次官補（後のルーズベルト大統領）他数名の政府要人が出迎えに出て、代表団のホテルは、ショーハムホテルと、パウハタンホテルに分宿することになった。加藤、徳川、両全権及び埴原事務次官、横田法制局長官、松平政策局長等は、ショーハムホテルへ、英二はパウハタンホテルに宿泊することになった。

投宿して四日後の、十一月四日（金）全く予想しない事件がAP電によって日本代表団にもたらされ全員に衝撃が走った。

原敬首相の東京駅暗殺事件の訃報である。

原敬首相及び内田康哉外相は、このワシントン会議を国際社会の中にあって、今後の日本の命運を決定づけるものと位置づけ、全権には加藤友三郎海軍大臣、徳川家達貴族院議長、幣原喜重郎駐米大使を据え、事務総長には埴原正直外務次官、事務副総長には松平恒雄外務省政策局長を指名したのである。正に日本外交の総力を挙げての布陣であった。

ところが、日本にあって、その司令塔となるべき原敬首相が、暗殺されてしまったのだ。だからと言って会議を目前に控え、帰国するわけにもいかない。十一月九日、ワシントンの大使公邸において行われた原首相の追悼会の席では、改めて既定方針通りにそれぞれの分野でベストを尽くして外交交渉にあたることを申し合わせ、お互いに団結を誓い合うのであった。

ワシントン会議は、もともと米国が主唱し、英国がこれに協調したものである。その最大の狙いは、第一次世界大戦後、台頭する日本の軍事力、ことに太平洋における海軍力に歯止めをかけ、中国大陸への日本の進出を阻もうとするものであった。参加国は、日本、米国、英国、フランス、イタリア、中華民国、オランダ、ベルギー、ポルトガルの九か国である。

会議の議題は、大きく分けて三つに分けられていた。海軍軍縮問題、支那（以後支那を中国と読み替えて表記）問題、太平洋問題である。海軍軍縮問題は、当然ながら全権の加藤海軍大臣が陣頭指揮を執り、同じく全権の幣原駐米大使及び埴原外務次官（事務総長）が、中国、太平洋問題の責任者となって交渉に当たる。徳川全権は、広い人脈を使った社交関係に手腕を振るうという布陣で臨んだ。

英二は、事務総長埴原外務次官の補佐として、中国及び太平洋問題を担当することになったのである。

十一月初旬から中旬にかけてのワシントンは、秋たけ

なわで、楓や公孫樹が美しく黄金色に輝き、夜になると空が澄み、月が煌々と地上を照らす。月の見えない夜は、星が天空を宝石のように散りばめている。

十一月十二日（土）午前十一時（日本時間十三日午前一時）ワシントン会議の開会式が行われた。

米国ヒューズ大統領の演説に次いで、各国の代表がそれぞれ演説、日本は、徳川全権が、日本代表団を代表して演説した。

十一月十八日第二回総会が開催された。バルフォア米国代表の演説に次いで、加藤全権が演説を行い、その後海軍主力艦制限問題が討議された。米、英、日の主力艦保有トン数が、五、五、三とすることが討議され、その実現のための委員会が組織された。

十一月二十一日（土）第三回目の総会が行われた。その後、会議は佳境に入り、十一月二十四日（木）のサンクス・ギビングデイの頃から、日英同盟を廃止して、日、米、英、仏による四か国条約を結ぼうとする案が討議され始めた。この条約については、国家最高機密扱いとされ極秘のうちに交渉が進められていたのである。

機密書類は、加藤、幣原、徳川の三全権と特定人物に限って配布、使用後はいちいちこれを回収することになっていた。天羽英二は、その保管責任者であった。

さらに、日、英、米、仏は、日裏を合わせ、ワシントン会議は、軍縮交渉であると内外に印象付け、全世界の敏腕記者団の鋭い感覚をそちらに向けさせ、何とか機密を保持続けていた。

だが、大正十年十二月二日付けの時事新報夕刊に「日英同盟に代わる四国協定成立、四国覚書交換終了。来週中には調印」という記事が掲載されてしまった。日本から米国に出した条約案がワシントン特電として全文が掲載されてしまったのである。

英二は、慌てた。何故漏れたか、埴原次官より調査を命じられ、必死で探索した。約一カ月掛かってニュースソースを追い、結論に達した。漏れたのは、徳川全権からしい。協定を写し取ったのは、時事新報の伊藤正徳記者と後藤武男記者ではないかということである。徳川家達全権に初めから狙いをつけて、気に入られるように身だしなみから態度、物腰に注意を払い同全権との接触を図り、すきを見て情報を写し取ったものと思われる。

ワシントンは、秋から冬の訪れの近いことを物語る霧雨が降っている。枝に残った木々の枯葉も水滴を含み風に揺られ、地上に落ちている。

ワシントン会議での米国の狙いは、まず、①西太平洋海域における日本海軍の拡大を阻止し、日本に対する優位な海軍力を保持する②中国における門戸開放政策の継続を日本に対しても受け入れさせる③日英同盟の廃止を促し、米英間の緊張を緩和することにあった。

西太平洋海域における海軍軍縮の問題は、米国の思惑通り運んだ。海軍主力艦保有トン数は第二回総会で提案された通り、米、英、日の保有主力艦は、それぞれ五、五、三と決まったのである。

太平洋問題については、太平洋において属地・領地を有する米、英、日、仏の四カ国が権利の尊重、共同会議による紛争解決、侵略に対する措置の協議などにより太平洋の現状の維持を図ることで一致し、四か国条約の成立をみた。これによって日、英同盟存続の必要が薄れ、廃止となった。

一番難航したのは、中国問題である。

米国は、日本の中国進出を抑える意図をもって中国の主権尊重、領土保全を標榜し、中国代表団の主張を支持して日本が第一次世界大戦で占領した山東半島におけるドイツの権益を引き継ぐのではなく、中国へ返還するよう迫った。日本は、会議当初から山東半島は、中国に返還するつもりであったが、中国における外国郵便局撤廃の問題は、南満州鉄道の付属地に郵便局を持つ日本にとっては、大きな問題となり、その後の外交交渉を困難にさせる要因となった。

十二月十日（土）第四回総会が開催された。総会には、極東委員会の進行報告、四国協商案報告があり、会議もいよいよ大詰めを迎えた。十二月十五日には、加藤全権が海軍協定成立の経緯を松平政策局長及び、団員一同に説明した。

英二は、十二月十日以降、ワシントン会議の報告を取りまとめ、その後の動きを外務本省との連絡に費やし、条約が調印の運びとなるまでワシントンに滞在することになったのである。

海軍軍縮条約、日、英、米、仏の四国条約、山東条約、中国における外国郵便及び軍隊撤退決議など、大正十年十一月十二日から始まり、三ヶ月余りも続いた会議は、細目については多くの課題を残し、大正十一年（一九二二）二月六日にやっと終結した。

（三）在中郵便局撤廃問題解決のため北京へ

ワシントン会議に忙殺されながら英二は、大正十一年の正月をワシントンで迎えた。ワシントン会議は、大筋では合意に至ったものの、細部にわたっては、解決すべき課題も多く、それらの課題を一つ一つ詰めて解決に導く作業が残っていた。英二は、山のような仕事を抱え、在米日本大使館通いを続けるうちに、あたかも大使館員として赴任してきたような錯覚を覚えるのであった。

元日は、拝賀式のため全員が大使館に出勤し大使から訓示を受ける。仕事始めは三日からである。

二月六日、日本時間の五日に男子が誕生し、母子共に健在であるとの来電があった。英二にとって初めての子

であり、しかも長男の誕生である。喜びが体の芯から湧き出てきて、じっと机に向かっていることができず、満面の笑みを浮かべ、このことを周りに人達に告げた。そしてすぐに「無上の喜びである」と返電している。名前は、大平と付けた。大平氏、大平凡を願っての命名であるという。

ワシントン会議での懸案事項を整理し、詳細についての問題点を指摘し終えた英二は、一月十四日、帰国のためワシントンを発ちシカゴに向かった。ロスアンゼルス、を経て、二月二十一日サンフランシスコから太洋丸に乗り込み、ハワイのホノルルに向かった。金門湾から太平洋に出ると波が荒く、帰国の途に就いたことを実感するのであった。二月二十七日ホノルルに到着、三月十日（金）午後四時横浜港に入港、内田外務大臣、堀秘書官、堀内謙介氏など桟橋まで出迎え会議の労をねぎらってくれた。身内の関係では、義父の久保氏、正吉叔父、寿郎が出迎えに出ており、大平の様子を尋ねると、丈夫で元気に育っているという。英二は、ほっと胸をなでおろし、まだ見ぬわが子の姿を想像し思わず顔がほころびるのであった。

三月十三日（月）陛下は、豊明殿にて宮中御賜餐を取り行い、ワシントン会議団員を労われた。それには英二も出席している。

帰国後、英二は、ワシントン会議での決議事項を巡って、中国と関わり合いのある事項、すなわち山東還付及び在中郵便局撤廃問題北京会議の全権随員として同会議に出席することになった。

日本は、第一次世界大戦において、中国山東半島にあるドイツの租借地を占領したが、パリ講和会議において、日本の全権団は、山東半島の旧ドイツ租借地を中国に還付することを迫られた。日本は、ドイツ租借地還付については、パリ講和会議の意向を受けて、すでにワシントン会議の始まる前に決めていたので、同会議で紛糾することはなかった。

だが、ワシントン会議における中国の要求は、単に対日問題だけに留まらなかった。同国に権益を持つ西欧各国及び日本に対し、租借地を除く在中郵便局の撤廃を要求してきたのである。中国は、この問題を契機に西欧列強の植民地的支配に、米国の力を借りて、くさびを打ち込もうとしたのである。

中国の主張が同会議で認められた。当然ながら日本に対しても撤廃するよう要求してきたのである。

そこで日本は、山東還付問題と在中郵便局撤廃の二つの問題の処理を容易にするため北京に交渉事務所を設けたのである。交渉団の首席全権には、小幡西吉駐中華民国公使が就任し、東京から交渉委員として吉田伊三郎参事官、薮内敬之助逓信局長、天羽英二が事務総長に選任

された。それに現地から出渕参事官、木村書記官が加わった。

英二は、大正十一年（一九二二）七月末東京を発った。八月二日天津着、吉田茂総領事に迎えられ、しばらく歓談の後、北京に向かった。

一方、中国側は、全権が王正延外交部長、劉符誠郵政総局長、高恩洵交通部長であった。交渉委員には、英国人のハイランドの他、中華民国政府の外交部、交通部の代表、事務総長にはフランス人のプーランを立ててきた。交渉は主に、英国人のハイランドとフランス人のプーランが、終始折衝に当たることになるのである。

八月十四日（月）から会議は始まったが実質的には、八月二十一日（月）の中国側提案の討議から開始された。

交渉は、まず中国にある約八〇の日本の郵便局の撤廃とその前後措置についてである。中国側は、これに加えて南満州鉄道付属地の日本郵便局も撤廃するよう要求してきた。これに対し日本側は、同付属地は、ワシントン会議でも例外として認められているはずであり、話題にも上らなかったので、残すと主張した。

中国側は、「ワシントン条約では、南満州鉄道の付属地の郵便局については、何も討議されていないので、当然撤廃される郵便局に含まれるものと考える」と反論した。

次いで日本側は、在中郵便局撤廃につき、日本人郵便局員十八人を中国側で引き取り中国の郵便局で再就職させるよう要求した。これに対し、中国側は、十人は採用すると妥協してきた。

交渉は、四か月続き、会議は三三回行われ難航したが、まとまりそうもない。

山東問題は、意外に早くまとまったので、郵便局の問題も早く折り合いがつくものと考えた外務本省から督促がきた。

英二は、中国側の外国人交渉人に日を付け、その篭絡を図り、やっと大正十一年十二月、交渉はまとまる方向に動いた。

それと同時に、小幡委員長は、吉田委員（参事官）を劉委員長のもとに派遣し事態の打開を図った。

「中国側が、あくまでも満鉄付属地における日本の郵便局を撤廃するのであれば、それは租借地にある中国の日本郵便局の全部を撤廃する方向にまで波及する懼れがあり、解決がますます困難になる。日本は租借地、満鉄付属地を除外し、約定を定めることに対しては異議がないので、その方向で検討せられたい」と伝えた。

翌日、劉委員長が、小幡委員長を尋ねて来られ、長時間この問題について議論し、日本側の要求に対して「満鉄付属地郵便局承認については、権限がないのでこの会議においては承認問題に触れることなく、約定を締結し

たい」と答えた。

小幡委員長は、劉委員長の立場も考え、劉委員長との間に、①満鉄付属地を切り離し、現在交渉中の約定を取り決める②約定中において、特に満鉄付属郵便局の存置を表示する条項の修正方につき協議する③付属地内郵便連絡に関し、別の便法を講ずる。以上三点につきおおむね意見の一致を見た。

ここに、在中日本郵便局撤廃前後措置に関する協議がまとまったのである。

今回の委員会は、ワシントン会議の決議に従い、在中日本郵便局の撤廃をきっかけとして日中両国間において郵便に関する諸種の約定を締結し、併せて郵便局撤廃前後措置を協議することにあった。

約八十カ所あった在中日本郵便局は、基本的には、撤廃することになったが、満鉄周辺の付属地については、この問題を棚上げし、一応の決着を見て、大正十一年十二月二十一日、日中郵便四約定を枢密院に送致した。その四約定とは(1)日中間郵便物交換約定、(2)日中間価格表記書状及び箱物交換協定(3)日中間小包郵便交換約定及び日中間郵便為替交換協定(4)南満州鉄道付属地郵便協定である。予定では、翌二十二日、枢密院書記官長のもとにおいてこれを審査し、三十一日外相の手から入江侍従次官の手を経て摂政の宮の裁可を得る。その後、一月一日官報号外にて約定を交付することになっていた。

だが、この約定は、後になって枢密院の諮詢を受けていないことが、政治問題化して動きが取れなくなったのである。

(四) 南満州鉄道付属地問題で枢密院が抗議

枢密院は、外国との条約その他国際約束は、必ず枢密院に諮ることになっているが、この協定はそれを無視している。この郵便協定は、批准を要せず、また調印に際して、何らの留保もしていないから調印と共に効力を発生するものである。政府は、すでに効力を発生したものを枢密院に持ち込んでいることになり審議のしようがない。さらに、枢密院は、政府がこの協定に関する参考として、「南満州鉄道付属地郵便協定」を提出した点につき、何故これを枢密院の諮詢に付さないのか、と詰問した。これは枢密院側が、この協定の内容にも不満を持っていたことを意味している。

これは、郵便協定における日中間の重大な争点をつくものであった。この満鉄付属地協定は、付属地内の日本郵便については、暫定的に現状を維持することを簡単に決めたものであったが、そのことは、満鉄付属地の性格について日中双方の見解の相違が解けなかったからである。

日本側は、「南満州鉄道付属地の日本郵便局は、租借地内にあるものまたは条約により規定せられたもの」という解釈で、廃止の例外に当たるとしたが、中国側は、日本の主張は「適法の根拠なし」と反論し、結局日本側も他日の交渉事項として、とりあえず現状維持を承認させることで妥協したのである。日本の在満権益は、ロシアの利権を引き継いだもので、これを中国側に認めさせたに過ぎない。それ以降既成事実を積み上げて行ったものである。

満鉄付属地は、ロシアと清国との契約でも鉄道付属地の性格は、あいまいなものであった。中国側からいえば、「中国の承認を得ない不法なもので、郵便局もその不法なもののひとつである」と主張していた。

中国側の言い分を認めないにしても、そうした交渉自体、満鉄付属地の支配の在り方全体を覆す要素を秘めたものであったのだ。枢密院の懸念はそのことにあった。

枢密院の今回の行動については、英二は次のように推察した。

(これまでの外相または外務当局の仕事の運び方に対する不快感と国際約定審査に対する枢密院の年来の主張を確認させる目的でこの問題を取り上げてきたと思われる。いずれにせよ外務省側にも手落ちがあったと言わざるを得ない)

早速外務省としての対策が練られた。すでに中国側と約束してしまった約定を国内事情によって今更修正したり、期間を延期したりするわけにはいかない。

内閣書記官長、外務次官、条約局長、などが参集して協議した。その結果、直ちに四約定の御裁可を奏請し、枢密院との争点は、将来の考慮に譲ることとした。三十一日午前十一時外務大臣は、入江侍従次官を経て四約定御裁可を奉請し摂政の宮殿下(昭和天皇)の御裁可を得た。これによって、大正十二年一月一日官報号外をもって約定を交布することになった。

一月二十二日、大正天皇から直接優諚の下賜によってこの約定が有効とされた。

この日中郵便約定諮詢問題に端を発して、枢密院は、政府を攻撃し、やがて貴族院を巻きこんで、政治問題化して、野党の政府攻撃の格好の材料となるまでに至ったのである。

英二は、手続き上の問題で枢密院への諮詢をどこまで行えばよいのか考えてみた。

枢密院官制第六条第四号に列国交渉の条約及び約束は、同院で諮詢すべしと規定している。しかし、これは一切の約定及び約束を諮詢すべしという意味ではなく重要なものだけを諮詢すべしという意味ではないかと英二は解釈している。英二だけではなく外務省の一般的解釈がそう理解していたのではないかと思っていた。実際にこれまでの外交上の経験に従っても、先例に照らしてもそう解釈するのが妥当である。

本問題はたまたま政府と枢密院との意見が一致しなくて、上奏し聖断を仰ぐ結果となってしまったが、いずれにせよ枢密院の諮詢を受ける必要があるかどうかの判断をきちっとするだけの材料を持ち合わせ、その判断基準に説得力がなければならないと英二は思った。

日中郵便約定諮詢問題も摂政の宮の御裁可が下り、ワシントン会議の事後処理にも一段落ついた英二は、やっと晴れ晴れとした気分で大正十二年の正月を迎えた。ワシントン会議を挟んでの昨年後半の半年間、ほとんど家庭を顧みる事もできなかったので、この辺で心機一転、心のゆとりを取り戻そうとして妻の美代、長男の大平、母親のカネと共に一月七日、海に近い鎌倉に転居した。

そこで、今後の日本を見据えた外交の在り方と外交官としての自分の進むべき道を考えようとしたのである。

（つづく）

信託　英―米―日　歴史の旅

その二（米―日）

永田俊一

一、日本上陸

（一）維新の日本

そして、信託はいよいよ太平洋を渡り、明治維新後の日本に伝わることになる。先ずそもそも受け入れた日本のその頃はどんなだったろうか。

維新は五箇条の御誓文に従い民主主義国家造りに始まった。政府各省設置・版籍奉還・廃藩置県・学制発布・民権運動・西南戦争と創造的破壊が進み、国会開設への動きが強まってきた。実際にはアジアの植民地化が進み先進帝国列強を前にした現実を踏まえると、対外独立維持の為、国力の早期涵養と軍事増強や国体強化が優先した。

金融や財政の体制を整え経済活動の強化に取り組み、不平等条約改正等課題山積の外交にも努めた。明治二年（1869）には造幣制度を一新、為替会社制度にして民間会社に銀行券の発行を可能にした。更に五年（1872）には国立銀行条例を定め、国立銀行に国債を裏付けに正貨との兌換保証を付して銀行券発行の機能を認め、取引の為に必要な通貨供給と不換紙幣回収に努めた。資金融通を主として行う私立銀行の設置も九年（1886）から許可され、一二年（1889）には国立銀行設置は打ち止めとされた。この頃には、政府が自ら殖産興業という用語を使い出し、官営工場の払い下げの方針も決まり軍需・鉄道・電信を除いた事業の民間払い下げが始まった。産業は自分の足で発展してゆくべきであるし、買い取って経営する力も民に備わって来つつあるということであった。そして最終的に不換紙幣を整理し兌換制度を確立するために銀行券発行を集中し、銀行の銀行としての中央銀行を

作るということであった。明治一五年（1882）秋には日本銀行が設立されている。

国会開設が約束されたのが一四年（1881）、一四年十月には板垣退助の自由党、一五年三月には大隈重信の立憲改進党が設立され、前者は農村を基盤に急進的改革を目指し、後者は都市知識人・地方商工業者を基盤に穏健立憲政治を目指した。その後一七年（1884）の自由党解党、大隈離脱による改進党弱化で民権運動は沈滞期に入る。再び活発化するのは、大同団結運動で民権活動家の運動再会が起る二〇年ころからで、二二年（1889）二月の憲法発布、二三年七月の衆議院第一回選挙と繋がって行く。

この間、明治五年（1872）の学制発布をうけ各地に小学校も出来ると日々の暮らしに安心感も戻って来た。しかし、学校は出来たが、小・中・高・大の学制が落ち着くのはまだまだ先のことであった。小学校は多少の時差はあれ、着実に各地に整備されて行ったし後戻りはなかった。しかし、その上の教育となると、公私共々資力の問題もあり、制度論に試行錯誤もあり時日を要した。小学・中学・大学と接続する学制の基本設計は定められたが、先ず国民皆学の小学校の確立に四半世紀かかり、中高等教育・大学教育迄全国的にそれなりの姿を整えるには明治一代を要したといってもよい。下等・上等半々に計八年修学で出発した小学校も、明治一三年（1880）の小学校令改正では、初等・中等科半々計六年と高等科二年となり、二三年（1890）改正で尋常小学校四年高等小学校二（～四）年と変った。

達観してみれば、明治一〇年最高学府として誕生した東京大学と、国民皆教育目ざし明治五年から張りめぐり出された小学校の夫々の発展の中で、間を繋ぐ中高等教育の配置、教育者養成の師範学校設置、私学や女子教育機関の発展がジグソーパズルのように整えられてきた歴史と言えよう。

（二）信託の紹介

先端学問の摂取と発展が成果を上げ、実社会を動かしてゆくようになる。

信託業務がわが国で一般に紹介されたものとしては、明治二四年、アメリカ帰りの経済学者で、後に銀行家・保険家にもなった土子金四郎（一八六四～一九一七）が、国家学会（法・経済・財政・外交等国家学諸学科を考究するため明治二〇年設立）の国家学会雑誌に掲載した「信托会社ノ業務」がある。土子はアメリカで行われている信託業務の紹介をするとともに、訳語についても、「原語は『トラスト・コンパニイ』にして業務『トラスト』という字は信ずるという意味にして、その会社の業務の性質を見れば、まず信托会社というを以て適当と考える」と述べている。「託」でなく「托」をあてているが、当時の英華和訳辞典などを参照しても、trustee には「受托者」とあり、trust を「信托」とするのは相当であったと言える。

ただ、一般に紹介ということではなく、用語として「信托」が使われたという事で言えば、法律学校の英国法講義録などにこの文字がもう少し前から使われていることが指摘されている。例えば明治一六年（1883）、東京法学会の法律雑誌である明法志林六七号に、東京大学法学部助教授に就任したばかりの土方寧が、「契約の定義」の説明において使っている。即ち言葉に於いても信託の法理においても学会においては理解が広まり始めていたということである。その後土方は、英吉利法律学校の創設発起人に名を連ね講師も務め、イギリスのミドル・テンプルに留学、帰国後は東京大学教授に昇進、法学博士の学位を得、一八九三年（明治26）からは法典調査会の委員を務めた。

土方は手形法や会社法などを中心に英法を講義した。彼の日本民法とイギリス法の特徴を講じつつ、後者の長所を説くその講義は雄弁滔々とはなはだ長くなるが、その趣旨は「精細明瞭」と言われるものであった。東京大学の法科大学長にもなり、貴族院議員にも勅選されたが、やはり演説は長く、「土方（とほう）も寧（ねえ）」と揶揄されたというが、少しも意に介さなかったという。

また、「信托」の言葉を使って英国の信託法を、その沿革から種類、受託者の役割・義務等を説明しているものとして、戸水寛人著『英国衡平法』（1888）がある。当時戸水は少壮の東京大学法学士で、後に教授となり日露戦争の際有名になった七博士の一人となった。

さて訳語の変遷に戻ると、明治二〇年代は学術的にも実務的にも信托が使われていた。また、二十三年制定の旧民法、旧商法でも供托、寄托、委托と、すべて「託」ではなく「托」が使われているが、法律上、「信託」の書き方になったのは、明治三十三年に制定された日本興業銀行法において、「地方債証券、社債券及株券ニ関スル信託ノ業務」と規定されてからである。明治三十八年には担保附社債信託法ができ、信託業務のできる銀行の範囲が広がる。

＊中国では古来託す場合に「托す」が使われ現代でも「信托」である。日本の場合、漢字使用の変化に関わる何らかの改革がこの時代に行われたと考えられる。

明治三二年末の帝国議会の決定に従い、翌春から文部省内国語調査会で、三五年四月からは勅令によって設けられた加藤弘之を委員長とする国語調査委員会で、漢字節減、現行普通文体整理、慣用特殊文体、国語仮名遣い、字音仮名遣い、外国語の写し方などが審議された。そして三六年夏には漢字省減整理方

針が出る。それと、「托」から「託」への転換の関係については、私においては引き続き調査中であり、御勘弁願いたい。

（二）信託的試み

次に実際の利活用についてみてみよう。先ずは英米の生活や視察留学体験やフォロー研究等から、信託を念頭に活用したと見られる事例を二つ。いわば社会の法理・制度としての信託が創設される前故、制度前試行期の信託ともいえよう。

新島譲（一八四三～一八九〇）は、幕末脱国アメリカアマースト大に学び宣教師の資格を得て帰国、同支社を創立したが、妻八重の生活資金に充てるためにと友人に資金を託したのが、亡くなる三年前の一八八八年（明21）。自分の死後の妻の生活を心配して、友人である上倉庄三郎（どくら・しょうざぶろう）に金三百円を預け、その資金を運用して妻の生活資金にして欲しいと頼み、上倉はその資金で森林事業を行い、その収益を妻・八重（やえ）の生活資金に充てることにした。上倉宛に書かれた、新島襄の手紙は、新島を委託者、上倉を受託者、妻・八重を受益者とする、「信託契約の申込み」と見ることができる。なお、後日談があり、死後上倉は忠実履行を開始しようとするが、引き継いだ同志社の経営に窮するだけでなく、新島の葬儀費用に充てるための当座の資金を必要とした八重は、上倉にその資金を返すように依頼した。そのときに八重が書いた手紙も残されている。

二番目は福沢諭吉（一八三四～一九〇一）翁。公益信託の応用で、自然環境保護のため集めた資金により、目的地を買い取り保存するナショナル・トラスト。その発想が、売りに出ていた故郷耶馬渓（大分県北部）の競秀峰の一角を買い取り、地元に管理を託した翁の行為にみられる。

晩年、六〇歳の翁が長男・太郎、次男捨次郎を連れて二二年ぶりに故郷の中津を訪れたのが、明治二七年（1894）二月のこと。墓参りをすませた諭吉親子が耶馬渓に遊んだ時、中でも随一の景勝地といわれる競秀峰の一角が、売りに出されていることを耳にする。故郷に存在する天下の絶景への哀惜と、当時英国で産声を上げていたナショナル・トラストの情報が（1895 ナショナル・トラスト法成立）、翁の心中で一緒になるのに時間はかからなかったように思われる。時流れて昭和二十五年、競秀峰を含む耶馬渓一帯は国定公園の指定を受け、その美しい景観を今に残してくれている。

＊地元有力者曾木円治宛二七年四月四日付の書簡では次のように言っている。

「・・・老生もほんの一時の発意にて申上候事なれども、折角思立候上は事を成就し度、且かようなものがあれば折々中津へ参る口実とも相成り、傍ら以って御頼申上候儀、御用繁の御中恐入候得共何分宣敷教御計画奈願候。

またかの山を手に入れるならば、可相成丈け境界を広くして、勝景の半端に成らぬようご注意被下度、何れか様の事は急にして出来候ものには無之、臨機応変、緩急を見計被下度、此方にては之を得て、銭の利する所も無之、全く好事なれば、大に金を出すのも馬鹿らしく、さりとて他人の所有を所望と言えば、価は自から高からざるを得ず、其辺は固より覚悟の前なれば、都て御手心にて小田部へお話し如何ようにても御取計被下度奉願候」（小田部は諭吉翁の長姉の夫）

前二者は民事信託、公益信託の分野。日本はアメリカで発展した商事信託の潮流を柱として受け入れたと言われている。その動きで欠かせないのが渋沢栄一翁（一八四〇～一九三一）。

背中に国家をしょって歩いたといわれる。第一国立銀行、東京石川島造船、東京瓦斯、札幌麦酒……明治六年から大正五年までの四十三年間に、設立に関与した企業は五百社あまり、関係した会社、公共事業は六百以上、まさに壮大なる社会貢献がそのバックボーンにあった。儒学のほか、古典などわが国の伝統文化にも深く通じるとともに、その目でじかに見た西洋文明を、偏見なく摂取する進取の気性を兼ね備えた人物であった。

そんな翁が明治二〇年代には、米国の信託事業について、「どうも経済界には大いに要用のものであろうと思うし、のみならず普通社会の安固を保つためにどうしても重要な方法だというように承り居る……」と関心を述べている。現に部下が現地制度調査報告書をまとめている。渋沢翁が、米国銀行業務の実情と信託会社の業務の調査を部下に命じ「米国信托会社業務調査報告書」が出来上がったのは、明治三三年。翁はそれを使い啓蒙活動も行っており、いよいよ経営的にも信託の「言葉を形にする」機運が高まってきたようである。

そして明治三三年日本興業銀行法で「地方債証券、社債券及株券ニ関スル信託ノ業務」が規定され、明治三八年には担保附社債信託法が出来、要用は先ず債券発行から結実する。米国が欧州から巨額な資金を調達し鉄道等の急速な敷設発展を遂げたように、日本でも大きな事業資金を集める処から活用された。

＊明治三一年、当時横浜正金銀行副頭取であった高橋是清が欧米出張に出るが、井上蔵相からの外債発行募集の可能性調査の内命も受けていた。特にロンドンでは維新前旧知のパース・バンクのシャンド氏らから内密に情報収集を図る。高橋の自伝によれば、シャンドからの話の中に「自分の考えでは、外国にその名をよく知られている伊藤公あたりの口論見で信託会社を作ったら、きっと外資を入れることが出来よう」とのアドバイスを受けたことが記されている。

その後明治三七年二月の日露開戦を受け、高橋は日銀副総裁としてロンドンに飛び、外債募集に奔走することになるが、この時もシャンドの紹介で米国クーンローブ商会の銀行家シフと

会い、三八年五月第一回外債の英米同時募集で成功裏に発行にこぎ着けた。引き続き外債発行募集に努めつつも、往年事業資金の外資導入のための抵当権設定の法律を欠き、出来なかったものを、興銀法を使って実行する瀬踏み等も行っていたことが記されている。

このように国際金融実務の先端では、信託は具体的に意識の中に入ってきていたと言えよう。

（四）信託の評価

その渋沢翁（青淵先生）が信託事業談として、明治三四年一一月金曜会で演説したところが、その後の日本の信託の方向付けをしているものとして、貴重な記録となっている。（伝記資料として残されている講演記録から抜粋）

『信託事業の亜米利加に行はれて居りますことは、敢て昨年一昨年頃から始めて知つたのではございませぬ、殆ど五～七年以前に承はり居りまして、どうか其要領を得たいと心懸け居りましてございましたが好い機会も無く経過致します中に、一昨年倅と穂積陳重が欧米へ旅行いたしますに就て、丁度穂積に托して、紐育に行つたならば内田領事に相談して、信托事業の亜米利加に行はれて居る大略を聞合せて持帰るやうにして欲しいものだ、どうも経済界には大いに要用のものであらうと思ふし、のみならず普通社会の安固を保つ為に重要な方法だと云ふやうに承はり居ると云ふ事を相談いたしました、・・・

紐育の領事の内田君が穂積からの伝言に依つて大要取調べて送つて寄越されましたのは、一昨年の冬頃かと思ひます、一と束に致して信托会社の効用並に其組織の順序等をば、美濃紙に殆ど十四五枚書き連ねて送り呉れましてございます、それで先づ簡単に信托会社の体裁は知れると申して宜いやうでございますが・・・併し尚ほ極く其詳細を知ることが欲しいものだ、並に其組織に付き或は法律上の制裁に於て、或は営業上の実況に於て、今一層密にすることが出来たならばと心懸け居ります中に、丁度昨年私の従事して居ります第一銀行の行員で高木正義と申す人が、自分の用事で亜米利加へ行きたいと云ふので、・・・丁度十月末でございましたか亜米利加へ参りましたが、亜米利加に滞在したのが六箇月以上七箇月ばかりも居りました、其間にシカゴ、紐育、フヰラデルフヰヤ、華盛頓あたりの信托会社に付きまして、或は社長若くは或る部分は法律家、又彼地に居る領事にも聞きましたと云ふやうなことで、各方面から稍々調査し上げたものが、一の報告書となりました（信托会社業務調査報告書）・・・

例えへば信托事業の定義であるとか、業務の順序であるとか其組立方であるとか、其業務の性質であるとか、或は役員の配置であるとか、営業上に対する大凡の部類

別、又は経費若くは収入或る会社に於て取調べた所では、斯る費用斯る収入であると云ふことまでそれから其の書式類なども取調べました、さうして同人の意見としては、日本には斯る振合にしては宜くはないかと思ふと云ふ、最終に其意見までも茲に高木の存じ寄は書き連ねて、一の小冊子として差出したのでございます。

大別しまするとこの信托事業が二つに別れて居るやうでございます、即ち遺産管理とそれから諸会社の株金社債等を発行する場合の其の信用の補足、それで一方は殆ど社会的に甚だ必要、通常の社会に於て安寧を保つとか、無事を求めるとか云ふに於て甚だ必要の事柄、併し極くジミな信托会社の効用と云ふて宜いやうでございます第二に申します諸会社の債券発行の場合に、殆ど其保障性質の如くまで立入つて、其会社の信用の不足をば補ふ、其債券が十分に流通し得られる、廻転の多からしむると云ふやうな働きに至ると、殆ど経済社会の一機関となり得るやうに考へます・・・紐育は今の第二の方法に依つて此信托会社がおもに働いて居る、之に反してフヰラデルフヰヤでは全く前者の趣意に依つて多く行はれて居る、即ち遺産管理と云ふ方が最も重もに行はれて居る、・・・此二つの利器は何れが大で何れが小だ、何れが是で何れが非だと申す優劣を下すことは、決して出来得ませぬでございませう、共に我国には利用いたしたいこと、考へるのでございます・・・

単に内地の取引だけでもが、ドウしても此の商工業会社が已れの資本のみで営業するのでは、ドウしても手が伸びぬとある以上、他の資本を入れるには、此信用を補足する方法即ち信托事業を以て之を補つて行くと云ふことは、大いに利益ある手段ではないか、併し是は内地だけに於て尚ほ然り、若し之を一歩進めて行きましたならば、海外資本の輸入法には、外国人がアレならばと信用する信托会社が成立つて参りましたならば、日本の鉄道にあれ其他の事業にあれ、資本共通の一媒介者たることは、確かに私はなり得るであらうと考へるのでございます、・・・而して又フヰラデルフヰヤ洲あたりに行はれて居る個人々々の財産管理に於ては、・・・幸ひに是が此通り世の中に行はれて行つたならば、甚だしきは此の遺産相続とか人の財産の委托とか云ふことに付いて、訴訟は大いに減少して、為に弁護士の御方は大きに御商売が閑になると云ふ小言が出るかも知れぬと思ふ位でございます・・・

之をして日本に組立てしむるに付て、如何なる方法が宜しいか、又今日は即ち其時機であるかといふのが、モウ一つの攻究すべき要点ではないかと思ひますのでございます、私は甚だ時機と思ひます、どうか是非完全なる信托会社を組立てたいと思ふのでございます、・・・

信托会社と云ふ方に就て、若し之を法律に求めると云ふことであるならば、目前の所ではまだそれ等の法律は

ございませぬ、是も法律から先に拵へてと云ふことであつたならば大変……ではないかも知れぬが、相当な歳月を送つて行かなければならぬ、・・或は又丁度興業銀行と云ふもの、法律が出来て居る、且つアレは大蔵省の管理に属して、設立委員は大蔵大臣が命じて、それ等の取調に依つて株を募集する、アレは幾分か其利息を補助するので、あの会社に極く簡単ながら信托事業と云ふものが、矢張り法律上記載されて居ります、若し或は此興業銀行が相当な手続を以て堅固に組立てられるならば、此興業銀行をして、先づ前に申した所では第二になつて居る所の会社間に入つて債券などの取締をする、或は信用を補足する為に保障同様の位置に立つと云ふ業務は、今の興業銀行に自から為し得られるやうな方法に仕向けて行つたならば如何であらうか、・・

亜米利加は現在此の信托と云ふ事業にも、前来述べ来つたやうになつて居りますし、更に一事業即ち銀行業務を、唯手形の売買をせぬだけで、殆ど預り金——貯蓄の姿なる預り金、又貸附も皆やつて居ります、銀行と殆ど撰まぬやうな業務を致して居るのでございます、それが亜米利加の実際に於ても、亜米利加の法律に於ても、亜米利加の学理に於ても是だ障碍は無いやうに見えます、・・・

興業銀行に依つてするとも云ふ組立にして行つたならば、・・・恐れるのは、仮りにそれで暫く宜いと見た所で、最初に申した信托の極くジミな且つ普く及ぼすと云ふ効能は、或は欠きはせぬかと恐れる。然らば此信托の所謂遺産管理に属する事業は如何なる手段で之を仕向けて行つたら宜からうか、高木は此信托会社設立に対する意見と云ふのには、それ等は多く各種の銀行に何か附則条例見たやうなものを附けて、やり得られるとしたら宜くはないかと云ふ如き意見を玆に添えてございますが、私はまだ是が安全な方法とも思ひませぬ、・・・

他の良い考案を見付けねばならぬのでございますが之を如何したら宜からうと云ふに至つては、まだ十分なる案と申上げるまでに至つて居りませぬ、・・・今の時に当つて此の準備をして、斯かる有様に成立せしむるは、日本の経済を利用するに相当の務めであると云ふことは苟くも経済界に考を付くべき諸君は、宜しく御攷究下さるべき問題かと思ふのでございます』

なお、この伝記資料には明治三五年一月二七日の日記として、

『午前八時朝餐ヲ畢リ、浅野総一郎氏来リ一昨夜九州ヨリ帰京ノコトヲ告ケ、且今日米人チーゾン、ミラノ両氏会見ノコトヲ請ハル○中略十一時帝国ホテルニ抵ル○中略浅野氏ト共ニ米国人チーソン氏ミラ氏ト会見シ、瓦斯事業及信託事業ヲ談話ス、信托事業ニ関シテハ興業銀行ヲ以テ之ニ充ツルノ意見ヲ述ヘ、且ツ添田寿一氏ヲ招

キテ両氏ニ紹介ス、細ニ信託事業ニ付テノ意見ヲ談論ス、岸精一氏中間ニ介シテ通訳ス』との記事がみえる。

（五）調査・部分実践

奇しくもこの明治三四年（1901）は、『合名会社三井銀行欧米出張員報告書』が出版された年でもある。これは当時三井銀行経営トップとして、抜本的経営近代化遂行中の中上川彦次郎が、入行間もない三名の俊英、池田成彬（後の日銀総裁・大蔵大臣）、米山梅吉（後の初代信託協会会長）、丹　幸馬（出張後早世）、を米欧に派遣、銀行業務を調査させた調査報告である。明治三一年九月から翌年一一月まで一年二か月かけて、米・欧（特に英）の銀行業務等を詳細かつ的確に調べ上げたもので、明治二六年の銀行条例を受け設立発展急な普通銀行界の具体的業務のバイブルになった偉業ともいうべきものとなった。

米国には五か月主としてニュウヨークを拠点として調査活動を展開、乗り込み長期体験調査したのは、パーク・ナショナル銀行とマーカンタイル・ナショナル銀行であった。前者は池田と丹が担当、後者を米山が担当した。後に池田とともに銀行の番頭を務めた後、信託法・信託業法制定後設立された初の信託会社三井信託を創立し社長に就任（大正一二年1923）、初代信託協会長としても貢献した米山は、銀行業務は勿論、併せ行われていた信託業務についても業務の詳細から、その歴史変遷・意義に亘って卓越な報告を残している。

一方、先の『信託会社業務調査報告書』を纏めた高木正義（一八六三～一九三二、山形出身）は、東京英和学校（現在の青山学院大学）を卒業後、一八八八年に渡米、ニューヨーク州のシラキュース大学に入学し、一八九一年に同校を卒業、翌年ジョンスホプキンス大学院に入学し経済学、社会学を研究した。一八九五年に博士号を取得し卒業した後、一年間コロンビア大学で特待生として経済学、社会学を研究した（ここでクラーク博士に師事）。

その後、ベルリン大学などヨーロッパ諸国の大学に遊学、一八九七年に一〇年間の留学生活を終え帰国した。帰国後まもなく東京帝国大学文科大学講師となり、社会学講座を担当した。また一八九九年から一九〇一年までは慶応義塾大学講師を兼務し、文学科、政治科で「社会学」を、理財科で「貨幣論」・「銀行論」を講義した。一八九九年一二月、株式会社第一銀行に入行し、翌年に教職を退いた。

入行後、高木は、合衆国などに出現しはじめた独占の一形態であるトラスト（企業合同）についての研究（『トラスト』（1900））と、信託会社の業務についての現地調査報告（『米国信託会社業務調査報告書』（1901））

を著した。一九〇四年銀行を辞した後外資輸入業をはじめとする様々な事業に着手、晩年は中国天津に居住、一九三二年当地で逝去した。

これを米山梅吉（一八六八～一九四六　静岡出身）の経歴と比べてみると、

米山は東京英和学校から東京銀座福音会英語学校を経て一八八七年渡米し、加州ベルモントアカデミー（語学学校）、オハイオ州ウェスレアン大学（神学校）を経てニューヨーク州シラキュース大学・ロチェスター大学で法律学を学び、一八九五年に離米する。帰国後は、勝海舟に師事、日本鉄道会社を経て一八九七年合名会社三井銀行に入社した。一八九八～九九年銀行業務取調べのため米欧出張、一九〇九年三井銀行常務取締役兼大阪支店長、一九二〇年三井合名会社参与、東京ロータリークラブを創立し会長に、一九二三年三井銀行を辞し、一九二四年三井信託株式会社を創立社長に、そして一九二五年信託協会会長に就任した。一九三四年三井報恩会理事長、一九三六年三井信託会長並びに社団法人信託協会会長辞任、一九三八年貴族院議員に勅選される。そして一九九四年三井報恩会理事長辞任、一九四六年、享年七八歳にて逝去した。

生年は五年違いだが、同時期同じ英語学校に学び、渡米同じ大学にも学び、八年、十年と長期の留学生活の後帰国、同時期銀行に奉職した点でも似通った道を歩いたことが分かる。そして同時期に米国で信託業務の調査を行い報告書も纏め、それがその後の日本における信託業の生成・発展に寄与し、自らも携わったという点でも注目される。また年代的には、両者がアメリカの何処かですれ違っていたであろうこの間の一八九三年には、前述のフリースがワコビア信託を立ち上げた年に当たり、組織としてのアメリカ信託会社の一段の充実期にあたっている。

その後間もなくノースカロライナ州銀行協会会長を務め、一九〇四年にはその信託に関するアメリカ銀行協会における講演で一躍全米に名を知られ、やがて一九一二年にアメリカ銀行協会信託部会長となり、信託の父とも呼ばれるフリース。この間機運の高まってきた日本から、信託を学び、信託を立ち上げる日本の多くのトラスト・マンが教えを乞いに訪れたかも知れない。少なくとも渡米して信託に関心を持った人であれば、直接にせよ間接にせよ彼の言った次のようなことは、耳にし目にして帰って来たものと思われる。

「信託会社は、遺言執行者、財産管理人、後見人、受託者、受任者、代理人等の信任的役割において、自然人にとって代わるため考え出され、組織されたものです。広く申し上げれば信託会社は他人のために行動するもので、自分のために行動するものではありません。信託会社は受益者のために奉仕し、提供したサービスに対して報酬を得るのであります。したがって、これら諸関係と両立できない業務を営むことは、信託本来の目的とは無縁なことだと思います。

責任能力が大きいことと同様、絶対に誠実であることが必要です。高い管理能力や厳格な正直さと高潔さは、あらゆる信託関係の基礎的条件であります。運営の効率性に対する信頼、信託業務の処理の誠実さに対する信頼は、まさに信託会社の力であり、本来の業務を営む限り、常に主たる資産でなければなりません。営む業務の種類、責任能力、提供する管理方法によって信託会社はその名を知られるのであります。」

米国で信託会社が勢いをつけ、銀行も信託兼営が増えていたこの時期、日本では中央銀行である日本銀行の設立（明治一五年、1882）を経て、私立銀行の発展が顕著になってきており、その銀行業務の近代化が求められていた。同時に信託についても実用の機運が高まってきた。

先述の「米国信託会社業務調査報告書」が上梓されたのが明治三三年（1900）、いずれも渋沢栄一の示唆にあったように、同年制定の日本興業銀行法には社債等に関する信託の業務が規定され、明治三八年には担保附社債信託法（担信法）ができ、信託業務のできる銀行の範囲が広がった。日露戦争（明治三七～三八年）後の経済復興に企業特に鉄道の外資導入が必須だった時、担保を付け社債を発行するための手段として、おおいに役立った。他方、個人を対象に財産の運用、管理を行なう信託業をいとなむ者が、アメリカの信託会社に触発されて出てくる。明治三九年（1906）には、欧米に信託業務の調査に出かけた三井銀行の山崎一の手で株式会社として東京信託が設立されて以来、相次いで信託会社が設立された。

こうして、概論的紹介が行われ次第に調査・評価が実地的具体的になり、いよいよ経営的にも信託の「言葉を形にする」機運が高まってきていたようにも思われる。明治末年にかけ、財産の運用・管理を行なう信託業を営む商法上の会社が相次いで設立されて行った。このまま順調な発展と信託法制定と行けば、ということだが、なかなか歴史はそうは行くものでもない。いよいよ法制定の話に移ることにしたい。

二、法制度の整備

（一）「信託法」「信託業法」の成立

相次いで設立された信託会社の中には優良な信託会社がある一方、信託会社の商号を名乗っているものの、実質は無尽業者や貸金業者である者が多く、法的規制がな

い（「担信法」で認められた会社信託は、銀行のみが兼業できた）のをよいことに不正を働く者も現われ、信託会社に対する社会的信用が揺らぐことにもなった。また、明治四〇年初めには、戦後の恐慌が襲い、銀行の支払い停止や休業が珍しくなかったので、金融周辺で望ましからざる不祥事が起こったことも故なしとしないが、同時に問題認識と改善意欲が、あるべき信託および信託業を求めて動き出した時期でもあった。

アメリカ、イギリス、ドイツその他欧州大陸諸国に関する詳細な調査レポートが当局の手で作成され、明治四五年（1912）に出された「信託の観念及受託者（信託会社）概論」は、内外信託制度に関する集大成といわれる。この年はまさに、明治天皇崩御の年であり、信託法制度は明治が準備し、大正が産んだと言えるであろう。

大正二年（1913）に日銀が公表した「信託会社及び貸金業者に関する調査」によれば、「信託の意義が不明確なまま濫用されている観あり」とし、「各種信託会社の定款や業務内容を調べてみても、掲げている営業種目のどれが『信託』業として考えられているのか了解しがたいものがある」旨述べている。そして、信託法制実現への努力は、大正元年（1912）の草案から、大正十一年（1922）「信託二法（信託法、信託業法）」が公布されて実るまで続くことになった。

この期間は奇しくも、第一次大戦（1914～1918）を内包している。日本も漁夫の利等と言われながらも五大国の仲間入りをし、他方で経済社会の構造転換を迫られる、歴史的に大きな変革の時代を迎えていた。日本信託業も大戦前とは違った変化を遂げつつあった。

一つは信託会社の大規模化である。戦前は多数の群小信託と極く僅かの大信託会社（公称資本金百万円以上）であったのが、大正一〇年（1921）には大信託会社が八分の一を占め資本金千万円を越える大信託会社も四社になった。

二つは、これら大信託会社の信託財産の受託増・信託業務依存度の高まりだが、他方でまだ信託で経営全てを支えるところまでは至っていなかった。

三つは、それまでは自己資本中心の貸金業者の性格が強かったが、不動産業務、証券業務、保証業務が信託会社の経営上重要な意味をもつようになった。

四つは、戦前の群小信託では零細商工業融資止まりだったが、都市大信託を中心に商工業金融の拡大がみられるようになった。

これらは大きく言えば、日本資本主義の発展に伴う企業の拡大・多様化の進展、生活水準の向上、それが故の金融の拡充・多様化の動きに起因するものだが、金融制度上の対応を強く迫るものでもあった。

そしてこの間、大正四年無尽業法（1915）、大正七年有価証券割賦販売法、大正一〇年貯蓄銀行法など、金融周辺の新たな問題に対処する法律制定が相次いだ。経済の発展に伴う金融の多様化が進む中、諸法制の立法順序は、緊急性もあり、実現容易なもの、既存業者の抵抗の少ないものから着手されたきらいはあるが、当時の金融当局の姿勢は次のようなものであった。

一つは、政府の描く理念的分業主義の構図に従い各金融機関に特定の役割を賦与することであった。二つは、夫々の分野における不健全、弱小業者を一掃することで、恐慌の発生・拡大の病根を除去することに繋がり不可欠なことではあったが、内容はドラスティックだった。

信託会社においても、弱小部分の整理は必要で、信託業法は将にそれを実現させたものであった。一方、政府が信託会社に期待した役割は、前述の調査報告書（明治四五年）にも伺えるように、社会奉仕的な財産管理運用機関という性格を持っていた。これが法成立前後の、信託会社の営利企業としての成立・存続可能性、金融機関性の排除の可否等の議論にも繋がってゆく。

いずれにせよ、信託二法は法務省・大蔵省内の検討作業等を経て、大正九年には臨時法制審議会に法制化の検討が委ねられ、そして原敬首相が凶刃に倒れた為、法制化は高橋是清内閣に引き継がれることになる。

その検討されていた信託法の内容を平たく言えば、米国カリフォルニア州民法典とインド信託法（英国の判例、学説を踏まえたもの）をベースに、イギリス式の精神に即して纏められた。そして当時の業界浄化要請の背景もあり、信託業法案は、信託業の中心を固有信託におき、付随業務を抑制する等その旨が色濃く反映されていた。因みに大正八年十二月の大蔵省起草「信託業法案」（閣議稟請案）では、その趣旨として、①基礎薄弱な群小信託会社の取締り②銀行営業との競合を回避し、かつ保証業務等付随的営業に注力する大規模信託会社の取締り③金融機構整備の必要性、の三点を挙げている。②に関しては、信託預金の名で銀行預金を吸収したり、財産の運用管理というより、貸付け保証、有価証券売買等の業務を主要な収益源とするものが多かったようである。

提出信託業法案では、信託の目的となるべき対象財産を制限列挙したこと、金銭信託の引受け制限の規定などにそれが顕れている。また信託法案にも、信託財産の保全や受益者保護の観点から、信託定義の明確化、信託財産の独立性・忠実義務の明記、信託損失規定の明記等にその趣旨が反映されたところである。

（この間の事情については、麻島昭一著『日本信託業発展史』、山田昭著『信託立法過程の研究』等に詳しく述べられている。）

怪しげな信託会社の取締り要請と、業界浄化を掲げ起業する新興信託会社の位置付けを法案作成のプロセスで

調整し、わが国のその時代におけるあり得べき制度を作り上げた、ということになる。

（二）法制度成立拾遺

さてエピソードを二つ。

一つは、今では「公益信託の父」といわれる法律学者、江木衷博士（一八五八～一九二五）のことである。

当時は、法制審議会で公益信託の法制化を主張する江木博士の執拗さが、「議事を阻害し混乱させたのは江木衷である」と大幅に審議を遅れさせた張本人として新聞に書かれたり、当事者の打ち明け話などで語られている。

信託二法制定時の司法省次官であった山内確三郎弁護士が、大正一四年（1925）二月二八日の信託協会臨時総会（米山梅吉三井信託社長を日米信託社長菅原通敬社長に替って新生信託協会の新協会長に選出）で、行ったテーブルスピーチがその間の事情を語って興味深く引用される。すなわち、信託二法を巡る大蔵省・司法省の縄張り争いや、独法系の山内と英法系の池田民事局長が協力して起草した原案に対する英法系の法制局の英法系の人々が口を揃え反対したこと等を述べた後、江木博士について触れている。当該核心部分を抜粋すると

「信託法案は、日本の法制にとっては陪審法案にも匹敵すべき重大法案であるとして臨時法制審議会に付議されることになりましたが、その特別委員会で、またまた猛烈な反対を受けたのであります。江木博士が反対の急先鋒で私は随分弁護してみたが却却聞き入れない。岡野敬二郎博士（中央大学学長、司法・文部・農商務大臣歴任）が更に説明に努めると江木君は真っ赤になって攻撃してくるので遂かに温厚な岡野博士も之に応酬するというような有様で、私も大いに興奮して食堂へ行って酒を六合も飲んで委員会に臨んだような始末でした。

その結果、法制審総裁の穂積陳重博士が仲裁されて双方の争いを鎮め、段々審議を進めて公益信託に関する事項を加ふると云う事に議が定まりましてさしも反対の急先鋒であった江木君も公益信託が加はるから賛成すると云うように我を折られ審議会の総会では却って江木君が説明の任に当たられるという云う有様で漸く審議会だけは満場一致で通過させる事ができたのであります。」と。

＊大正八年一二月に第四二帝国議会提出を目的として閣議に提出された司法省原案にも「公益」の字句は見られなかったが、同法案は提出が諸般の事情で見送られ、大正九年（1920）改めて信託二法の可否が臨時法制審議会に諮問されるところとなった。ここにおいて江木は政府案の欠点（公益信託に留まらず）を舌鋒鋭く批判し妥協することを知らなかった。そのため審議は遅延を重ね、辟易した政府系委員は江木の顔を立て公益信託の法制化を認めたのであった。

彼が孤軍奮闘して信託法に盛り込んだ公益信託は、五〇年を経て実用化が始まり、発達していった。昭和五二年に公益信託の第一号を設立し、以後、日本における公益信託の開発、普及に尽くした今井保太郎氏には、平成十年秋、社団法人日本フィランソロピー協会より、第一回「まちかどのフィランソロピスト賞」が贈られた。フィランソロピストとはここでは「私財を社会のために供した人」の意味である。平成一二年三月末で、公益信託は受託件数四百三十八件、受託財産五百七十一億円にのぼっている。江木博士によって「形」を与えられた公益信託が、五〇年の歳月を経て「心」として開花した事実に、我々は何を見れば良いのだろうか。

大勢か信念か、そして二つをどうつなぐか、まさに永遠の課題である。ちなみに江木博士の雅号は「空林庵冷灰」、冷灰は『荘子』の「心固可使如死灰乎」（心は固より死灰の如くならしむべきか＝心は冷えた灰のようにできるものなのだろうか）からとったという。今、冷灰居士は谷中の墓地に眠っている。

そして、この五〇年の歳月の中に、「この時（民法・商法成立）から二〇年後、信託法が成立し公益信託が盛りこまれ、さらに五〇年を経て実際の公益信託第一号が生まれたことを思うと、歴史の『あや』を感じざるを得ない。信託の紹介がもっと早ければ・・・、ボアソナードが大陸法の国フランスの人でなければ、秋田感恩講は公益信託と法的に位置づけられ、当初から財団と共に公益の受皿を担ってきたのではないか・・・結果その後の税制優遇が公益財団に先行されてしまったこと等が、・・事ここに。」とかつて私自身がした記述が思い出される。

二つ目は、信託二法の審議における質疑の一端である。貴族院で菅原通敬議員（日米信託社長で任意団体時代の信託協会会長）が行なった質問演説の中で、規制的規定について触れている部分がある。法案の分業化方針や、財産管理運用等あるべき信託業務に専念し、その為にも財産的基礎をしっかり持つような絞り込みを行う方向に対してやり取りが行われている。

「政府の考えは、恰も子供に味も素っ気もない栄養にもならないある一つの食物を与えて、これをお前にやるのだ、これはお前にしか与えぬのである、他人には与えぬのだ、その代りお前には甘いお菓子なり御肴なりは食わせないのだぞ、このようなことで、どんな子供でも満足はすまいと思うのです」と、業務制限や供託金負担が重いと儲からないと菅原議員は詰め寄る。

対して高橋蔵相は、「資本金の一割を以て保険金としたということは、まことに私は穏当な妥当なことと思います。それで会社本位にあらず、社会政策の最も重要なる

一つと政府は考えております」と、社会的公器としての信託を念頭に答えた。

また「既存信託会社に不自由と感じられる」との同議員の批判には、

「従来こういう会社がなければまことに易しいのでありますが、現に信託会社があるのであるから、これをやはり眼中において法を立てなければならぬ。それらを加味したものですから、理想的に取り締まるという方はいくらか加味したために緩めたといえども、目的を達しない程に緩めるわけにはいかない。多少今日まで自由に活動しておった信託会社はやはりその信託会社法案で営業しているから不自由を感ずることは、これは免れない」と答える。

更に、菅原議員の「政府案では信託会社が成り立たない」との反発には、

「政府は現在ある五百何十という信託会社というものが、悉くこれが軌道に入って来るとは思わない。また政府の考えでそう数百の信託会社ができるということも希望しておらない。むしろ信用堅固な大なる信託会社が少なくして厳重に財産を保護してくれるようなものの成立を希望するのであります」と答え、財産的基礎のしっかりした少数の頼れる信託会社に絞ると明言した。

結局菅原議員は最後の本会議で特別に発言を求めて、条件付き賛成の態度を、

「不完全にもこの法律のできますことが、不成立に終わるよりも経済界のためには有利であると思いましたがゆえに、慎重なる審議を遂げるために次の議会までこれを延期せんとした当初の私の希望をなげうちまして、また幾多修正を要すべき点ありと認めたことにつきましても、会期切迫の折りから、これが修正の念慮をも断ちまして、不本意ながら本案に同意することになったのでございます」と、言い表わして法案を通すことになった。

立場の違いを鮮明に議論しつつも取り締まりの必要な現実認識は共有せざるを得ないこと、あるべき姿に一歩でも近づこうとする当局の意志の強さを認めざるを得ないこと、大きな方向観は認め不成立で機を逸すべきでないとして、緊張感ある討論は最終決着をみ、歴史的法制定に到った訳である。

＊前述のフリースがワコビア貸付・信託会社を創設した頃、即ち一八九〇年から一九〇四年頃までにかけて多数の信託会社が設立された。しかし、信託会社といっても名ばかりで、本来の受託業務とは全く異なる業務を行い、むしろ受託業務の評判を落としてしまった会社も多かった。真の意味での信託業務を営んでいた信託会社は、この風潮に不安を抱き危機感を持つようになった。

アメリカ銀行協会信託部会が、信託会社の適正な業務分野の在り方と信託の基本的在り方について講演を依頼したのが、誰あろう、中心都市から遠く離れた小都市の小さな地方信託会社の社長であり、ノースカロライナ州銀行協会会長を務めていたフリースであった。一九〇四年九月一三日、ニュウヨークで行われたその講演は、フリースに信託マンとしても全国的な名声を得させ、後世に語り継がれる講演となった。

米国でも、濫立が業界の姿勢引き締めに繋がる醇化段階があったということである。

二、信託業法

（一）改めて信託業法制定の背景整理

信託業法制定は、第一次大戦中から出現した大資本信託会社の規制、明治末期以来不祥事等問題を起こす弱小不健全信託会社の整理を念頭に置き、この間台頭してきた各種金融業の役割及び相互の垣根を明確にした、金融諸法制の体系的構築の一環と位置づけられていた。即ち、理想的金融システムにおける信託会社を、金融機関としてよりも社会奉仕的な財産管理運用機関として位置づけ、財閥・大銀行資本による設立で基盤強化を図ろうとしたと言える。

確かに、信託会社に与えられた役割は財産管理運用機関だったが、現実には金銭信託中心の受託で金融機関性を獲得し、政府の思惑に反する結果となった。その理由は、有価証券・不動産等業務はそれら自体の普及状況が信託するには不十分であったこと、不動産信託の登録税過重等業務実行上の障害、分別管理等個別特殊的取扱いの費用が嵩むこと等、一言でいえば金銭信託以外の財産受託が未発展だったということである。米国でも、その後の流れは違うが、当初は金銭信託中心であったのは、以前見て頂いたところである。

金銭信託の発展は定期預金より高率配当を実現し、資金を短期間に集められたこと、業務上の障害がなく、収益性に期待できたからであった。特に指定合同運用金銭信託は例外的に元本保証（利益保証も）の認容、分別管理の不適用で、定期預金の競合的金融商品となった。実績配当主義の信託の仕組み故、経済が良好なら、手数料控除後でも高配当が可能であった。他方預金は確定利子故、預金の運用益が増加しても預金者でなく銀行自体の利益増に繋る結果になる。この高配当の優位性は、既に信託業法以前の、台湾銀行の信託預金で経験済みだった。

即ち大正五年（一九一六）、台湾銀行が、期間二年以上の資金を信託預金として受け入れ確実有利な事業に投資、運用収益から信託手数料及び保証料を差引き、残余全てを預託者に配当、かつ一定の利益保証を行なった（日本興業銀行も倣い信託預金を開始）。しかし、当時の定期預金利率よりかなりの高配当故、普通銀行が問題視した。政府当局も信託法、信託業法の制定に着手した時期で、大正七年六月以降受入れ自粛を内示、特殊銀行の信託預金問題も幕を閉じた。ここに後年、指定金銭信託に預金との分野調整のため、期間・金額の制限が設けら

れるようになる萌芽を見ることが出来る。同時にこの現象は、預金を補完し貸出しの範囲を広げるという意味で、広義の銀行活動助成とも見れよう。

（二）その後の進展

大正一三（一九二四）～昭和三年（一九二八）は、大戦中異常肥大した体質の縮小整理の時代で、昭和二年の金融恐慌はその総決算だった。一方で国民貯蓄は、国民所得が大戦中の好況の余勢で依然高水準を保っている反面、生産活動は行き詰まり、投資資金の遊休化を促し、昭和二年金融恐慌までは貯蓄活動が旺盛活発であった。こうした中、大正一三年誕生の金銭信託は、高収益配当が魅力で、利子生活者等個人、保険会社等金融機関の資金まで吸収、大正一四年三月末～昭和三年三月末の年平均伸び率は、五六％と、飛躍的発展を遂げた。

昭和三年～昭和六年（一九三一）は、世界恐慌と金解禁策とが重なり、更に深い不況の時代であった。物価の激しい下落と同時に、国民所得ならびに貯蓄も、激減をきたし、金銭信託の伸びは急速に衰える。しかしこの間でも、金額が減少した銀行定期預金に対し、増加はしたのは、先述の広義の銀行活動として金銭信託が、貯蓄性のもので不況抵抗力が比較的強いことや受託機関である大信託会社に対する厚い信用に基づくものと推察される。

昭和七年～昭和一一年（一九三六）は、満州事変後の軍拡とインフレ政策で一時的に景気が上昇した時期で、国民所得及び貯蓄伸張と共に国債の日銀引受けによる財政拡大による資金供給が、やがて遊休資金を金融機関に退蔵させる。五年ものの信託も導入され、九年頃から金銭信託の二次躍進期となったが、結局経済は本格浮揚には繋がらず長続きはしなかった。

昭和一二年～昭和二〇年（一九四五）は、一一年の二・二六事件後は物資不足の戦時経済下、国債濫発・軍事費膨張・インフレ昂進で国民貯蓄増はしたので信託の金額は伸びたが、定期預金比は漸次低下していった。低金利政策下の収益配当率の引き下げと増税で魅力が薄れ、インフレ昂進が期間制限のある金銭信託には打撃で、利殖預金としての存在意味が失われたためであった。

以上、定期預金から高利の指定合同金銭信託にある程度資金移動が進むと両者の均衡状態が生まれ、昭和四年（一九二九）頃には比率は頭打ちになり、以後は双方の金利水準の変更によって、資金は相対的に有利な方へ小刻みに資金移動した。そして、一二年以降は、比率も退潮を辿るわけである。

（三）信託業者の数の面から

信託業法施行（大正一一年一月）前年、信託業者は五百社強であったが、新規も含め認可申請したのが四八社、厳しい審査で結局認可されたのは二八社であった。それも多くが没落・身売りし、新設四大財閥系（三井、安田、住友、三菱）や大銀行系信託、乱立抑制調整された幾つかの地方信託に収斂して行くことになった。

信託業務に専念すべく方向付けられた信託会社は、政府の意図に反して金銭信託中心の発展を遂げるが、投資性資金の吸収となれば信用力に勝る四大信託への集中（その信託財産は、凡そ金銭信託の七割）を結果した。そして厳しい戦時経済下、一七年半ば頃より国内金融機関の統合整理が強力に推進された。

信託も財務基盤強化のため一八年「兼営法」で銀行による信託兼営が認められ、信託会社の親銀行による吸収合併、消滅などが相次ぎ、終戦時には三井、三菱、住友、安田、川崎、第一の信託会社と投信受託専業の日本投資信託会社、七社が残ったに過ぎなかった。

四、第二次大戦後の信託

米一日の関係で戦後にもドラマがあった。

（一）戦後の絵柄

二次世界大戦は、日本においては昭和二〇年八月に終戦を迎える。社会が大きく変化した。平和憲法を持ち、その憲法前文にも「国政は、国民の厳粛な信託によるものであって、…」とあるように、国民の信じ託した政治の行われる民主主義国家が目指されることになった。経済も自由な市場が目指されたが、如何せん焼け野原という、資源の枯渇した状態からの復興・正常化を図ることが先決で、不足と混乱の中、苦しい努力が続くことになった。需給の調節や生産計画等規制や調節といったことが、日常茶飯事におこなわれていた。

日本経済はこの復興・正常化から、高度成長、安定成長と経済大国化、バブル崩壊と長期停滞、そして現在へと、金融を巡る環境も変遷してきている。

その間の信託を巡る変化・発展を風景として概観したいと思うが、今回分としては、戦後復興期から、もはや戦後ではないと言われ（昭和三一年経済白書）、信託銀行の戦後の形が定まって来た辺りまでをテーマとさせてもらう。

（一）信託銀行への衣替え

戦後、戦災による個人資産の滅失やインフレの昂進等により、信託業務は大打撃を受け、信託会社の経営は苦境に追い込まれた。さらに、昭和二三年四月一三日に改

正された証券取引法が銀行と証券の分離を打ち出したことによって、信託会社の併営業務の中で特に重要な業務であった社債の引受け、株式の募集・売出業務、有価証券の売買代理業務などの証券業務が規制されることとなってしまった。

このような信託会社の苦境を打開するための起死回生策として、連合軍総司令部（GHQ）の提案の形で考えられたのが、銀行業務の兼営だった。しかし、信託業法では信託会社が銀行業務を兼営することを認めていなかったことから、信託会社に銀行業務を認める法律上の手続きとして、信託会社が「銀行業を営むことを記載した再建整備計画書を提出し、大蔵大臣（総司令部）の認可を取得することとされた。この認可をもって信託会社は「銀行法上の銀行に転換し、その上で「兼営法＝普通銀行等ノ貯蓄銀行業務又ハ信託業務ノ兼営等ニ関スル法律」（昭和一八年）による信託業の兼営の認可を受けたものとみなされることになった。

信託会社の再建整備計画書は、昭和二三年六月末付で、同年三月末日にさかのぼって認可された。信託会社が「銀行」になることに伴い、名称を信託銀行に改めること、財閥色を払拭することなどが当局より勧奨されたことから、昭和二六年、信託各社はいっせいに社名変更の手続きをとった。

（三）貸付信託の創設

銀行業務を兼営することとなった信託銀行の銀行預金は、好調な伸びを示し、それまで信託会社の業務の中心となっていた金銭信託を上回るに至る。しかし、これによる資金力強化にはおのずから限界があった。

そうした中、信託の仕組みを活用しながら、一年未満の短期の大口資金の吸収を図ったのが指定単、すなわち単独運用指定金銭信託であった。ただ、指定単はかなりの盛況をみたものの、その高配当は普通銀行の不満を高めるとともに、信託銀行の経営の健全性を損なうことにもなりかねなかった。この為、信託銀行の間では、指定単に代わる信託制度を生かした新しい強力な商品開発の緊要性が認識され、当局もまた、他業態にも受け入れられる形での信託らしい新商品の開発とそれによる信託銀行の基盤強化の必要性を認識していた。一方で、戦後の復興需要に応えるために、長期金融機関の整備が金融行政上の重要課題とされてもいた。

このような事情を背景に、昭和二六年半ばからの検討と臨時金融制度懇談会の議論を経て、昭和二七年春に「貸付信託法案」が国会に提出され、同年五月二二日に可決成立、同年六月一四日に公布施行された。その後、高度成長のもとで、長期資金の需要がますます高まったことから、設備融資等長期資金の供給手段としての貸付信託の役割はきわめて大きいものとなり、貸付信託は、期待どおり信託銀行を代表する商品に成長し、高度成長期における産業界への長期安定資金の供給手段として、また、貯蓄手段として広く活用されるようになった。

（四）証券投資信託法の施行

昭和二七年（一九五二）貸付信託法が施行され、信託銀行の主力商品として成長して行くことに触れたところだが、実はその前年、その国民の馴染みとなる投資信託の根拠法である証券投資信託法が施行されている。

投資信託については、信託業界において、社会的要望が強いこと、信託会社の転換策として、また株式投資の健全化の観点を踏まえ、戦前から議論がなされていた。しかし、共同で受託会社を作り募集を始めるところまで行ったが、間もなく終戦を迎えて募集は停止された。戦時中に組み入れていた旧植民地会社、特殊法人、軍需会社等の証券が、大幅な評価減となり、連れて投資信託は大幅な元本割れのため、償還期限を延長せざるを得ず、終戦という歴史的異常事態の中、悪印象を残す結果となってしまった。その後株式市場が立ち直り、投信が額面を回復し償還できたのは、昭和三五年頃になってのことだった。

戦後はアメリカの制度が移入され、その一つ証券取引委員会が中心になって、米国一九四〇年投資会社法を模倣して「投資会社法」案が立案された。受託者は信託会社だが、顧客の注文に応じた証券会社がその運用を指図する仕組みであった。総司令部（GHQ）はこれを証券会社の信託兼業と呼び、原則的には投信の復活を容認しつつも、投信分離（独立の委託会社を作る）に固執し、実現しなかった。しかしながら、財閥解体、企業再建整備に伴う浮動株があふれ、株式市場がドッジ・デフレ政策下で喘いでいた当時、証券投資会社法案が頓挫したあとも、株式市場対策の一環として大衆資金を動員して浮動株の処理を図り、更に市場の活性化を図るため、証券会社を中心に投資信託復活希望は高まるばかりであった。

やがてGHQも、将来必ず分離し投信運用の独立性を図ること、ディスクロージャーを徹底すること、を条件として、妥協認容する態度に転換する。

そして政府は具体案としても、前述の証券投資会社法案の延長線上に、概要、（1）一般投資家に代わり（2）証券会社が自己の責任判断で株式を買入れ（3）買入資金調達のため受益証券を売り出して広範囲に資金を吸収（4）証券会社を委託者、信託会社を受託者として信託契約を結び運用管理保全を図る、という仕組みを証券業界の提案を受けて法案として提出することになった。

意見を求められた指図に従い受託者の機能は中小投資家

の利益の為、投資に関する専門的知識を提供するワキ役であり、結成にあたり技術的目的から登場するものに過ぎない。即ち投資信託の委託者は投資信託の実質的当事者ではなく、実体は受益者（投資家）と受託者である。この場合の『委託者』は擬制的なものに過ぎない。」「投資信託には信託法の予想する信託と符合しない点が多々ある。一方営業信託に関する信託業法が認める金銭信託、有価証券信託等の何れとも全面的に一致するものでない、その結果信託法、信託業法の既存の概念で之を律すれば絶えず不都合な事例に遭遇する。これは戦時中の投資信託に於いても困ったことであった。従って投資信託の健全な発展を図るにはその本質に即した実体法の制定が第一に考えられねばならない。」との意見書を提出した。これは言外に信託法制調整の下、信託業界が中心になって導入すべきものとの思いを述べたところである。また、信託業界の現場からも、「新法案の建前は飽くまで証券業者がイニシアティブをとり、受託会社は単に消極的に受託事務を行なうものです。規定上は証券業者が、投資信託による有価証券の引受けや自己所有株を投資信託に押し付けることの制限等、投資信託を悪用しないよう委託者の権限を制限していますが、実際問題としては大衆投資家の保護というよりも株価操作、抱込株の棚上げ等に利用される可能性は極めて大きく、永い目でみて投資信託の成功性には多大な疑念があります」といった声が上っている。

しかし、既に走り出した構想は証券優先に考えるGHQや証券委員会のアメリカ型の証券制度発想もあり、法案には反映されることはなかった。国会審議で同様な観点からの質疑も行なわれたが、この証券投資信託法案は、結局同年五月二六日成立し、六月四日公布・施行された。そして早速、各証券会社が投資信託を設定し、激しい競争が展開されることになった。

その後の展開をみると、予想外のこと予想した通りのことが相半ばして進展した。先ず予想外のことだが、国会審議過程で提案者が推測した年間三十億円程度という資金吸収見込みは見事に覆り、発足の昭和二十六年だけで設定額百三十三億円に達した。三二年には残存元本一千億円、三六年には一兆円を超えた。大衆資金の動員、日本再建への資本供給には時宜に適って役立ったといえるのかと思われる。結果として受身の立場で、主役証券会社と提携し有価証券の管理に任じた信託銀行の信託報酬収益源としてもかなりの比重を占めまるところとなった。

反面、懸念された証券会社による投資信託兼営の弊害が早速露呈し、証券会社から委託会社、更には販売会社が分離独立させられることに成った。戦後初めての元本割れ経験は昭和二九年だが、その前年八月、証券投資信託法を改正し、委託会社を登録制から免許制に切り替え、

大蔵省の監督強化をはかることとされた。それでも兼業の弊害は除去されず、昭和三〇年代の投資信託ブーム、そして証券恐慌を迎えることになる。昭和三四年に逢まきながら委託会社、販売会社の分離が着手され、証券会社・投資信託の体質改善が図られた。

貸付信託とともに投資信託は、この日本復興から高度成長の時期を金融面で支えた金融商品の一つとなったが、信託の側から見ると、正面と裏面といった二面史の様相を呈している。今日また、利用者保護の観点から、所謂フィデューシャリー・デューティー（受託者責任）を金融商品全体に貫徹すべきと論じられていることに鑑み、この問題を風景として振り返っておくことにしたところである。

（五）信託主業化の行政方針

昭和二九年一〇月、戦中・戦後の混乱した金融制度を再建するため、行政当局は信託銀行の信託主業化と、当時かなり残っていた信託兼営銀行の普通銀行から信託を分離する行政方針を打ち出した。この方針に対応して、先の再建整備計画書で信託会社から信託銀行になったうち、三井、三菱、住友、安田の四社は、ただちに信託主業化方針を明確にした。また元々銀行で信託兼営銀行になっていた中では、特に信託勘定のウェイトの比較的低かった兼営地方銀行七行が、次々と信託業務の新規受託の停止、信託勘定の閉鎖を決定した（昭和四一年の福井銀行を最後に、地方銀行の信託兼営は姿を消すことになる）。

他方、信託勘定のウェイトが比較的高い都市銀行四行については、三和銀行と神戸銀行（当時）が野村證券の参加を得て昭和三四年一〇月に東洋信託銀行を設立し、翌三五年四月、同社に信託勘定を譲渡することにより信託業務を廃止するところとなった。同時に、さきに銀行主業化方針をとってきた第一信託銀行は、中央信託銀行に信託勘定を譲渡するとともに、社名を朝日銀行と改称して普通銀行に転換した（同行はその後、昭和三九年に第一銀行と合併することになる）。

この間、大和銀行は当初から信託兼営をとり続けた（また、日本信託銀行は昭和四七年になって信託主業化方針を打ち出した。この結果、信託業務を行なう銀行は、七信託銀行と兼営銀行である大和銀行の八行となった）。

次回は、日本の旅の足を現代まで駆け足でのぼした上、これまでローマ―英―米―日と本流を辿ってきた旅から、別源流や枝分かれした流れの旅を風景として描けないか考えてみたいと思う。

つづく。

三流の風景（最終回）

葵　州　月

散ってゆくから　美しいのだ
毀れるから　愛おしいのだ
別れるから　深まるのだ
一切無常　（坂村真民詩集より）

追憶

（一）

天は紺碧に清みわたりこころおどらせ、晴れやかなあの日、あの幸せいっぱいのとき・・空を見ているうちに次ぎつぎに白い高積雲が現れてきたよ！清楚な秋空の雲たち。画聖が描いたみごとなバチカンの天井絵のように、天女が羽衣をなびかせてアポロ（太陽神）を慕う精麗な演技、その周辺では天使の翼のような純白の雲が舞っているようだった。

♪しあわせなお二人さん！もう夏が終ったよ、真夏のあの夢、この夢、永遠に忘れじ♪と、天女と天使が合唱しているようだったなあ。

あの天女や天使たちも間もなく秋のアポロン（芸術に堪能な男の太陽神）によって茜色に染まることになるのだが。まさしく秋空の一大スペクタクルショーに胸をときめかせながら彼女を待っていたんだよ・・・・あかねちゃ～ん！

野本修一郎、当時はしゅうちゃん！

欄干に凭れて現世を超越し、空想していた天空の古典物語を自画自賛しながらゆっくりと堂島川に目を移す。川面では水辺に沿って無数の水鳥が遊んでいる。

天地はまさに平穏真っただ中。

あの日、

修一郎は難波橋、北詰で恋人、山元あかねを待っていた。（デートの時間には遅れない）彼自身は厳格な性格だが、あかねちゃんには弱い。

かれこれ一時間は待ったか！

つい先刻まで最高だった気分は少しイラついて煙草を吸い重ねていた。

はやく会いたいなあ！計画は出来ている。転勤する東京でマンションを借りる。

東京へ旅立つ前にプロポーズしようと胸を膨らませていたから。

半ドンの土曜日（規則では午前中だけの就業時間を半ドンと言った）

しかし午前中キッカリで退社できる時代ではなかった。昭和四十五年。

平日と違って上司に遠慮をしながらも適当に仕事を切り上げても“今日は半ドンの日だからなあ”と大目に見て貰える程度の土曜日だった。（今日では考えられないだろうが、これが昭和の時代のひとコマなのです）

このとき修一郎は（新会社の愛織フアイナンス東京本社、審査課長）の辞令を受けていた。

転勤前の設立準備室から仕事を早々に片付けると「ライオン橋のいつものところで待っているね」あかねに内線電話をして、早々に会社を出て来たのだった。

土佐堀川・中之島公園・堂島川をまたがる堺筋に架けられている難波橋は南詰、北詰に、阿（あ）と吽（うん）それぞれ石造のライオン像が配置されていることから、「ライオン橋」の愛称でも親しまれていた。

「ごめんね！待った？」川面を眺めていた修一郎のまえにピョンと跳ねて嬉しそな表情をみせたあかねは修一郎の掌をとると身体を寄せる。

青い花柄のワンピースの彼女のギャザーの裾が妖くゆれている。

「これでも急いできたの！待たせてごめんなさい！」

「でもないさ！いまきたところさ！」

あかねの上気したつぶらな瞳が彼の顔の真の表情を見つめている。「ウソだわ！怒っていた顔よ、この顔は・・」白い人差し指で修一郎の頬を悪戯っ子のように突く。

「ゴメンね！」

（バレバレだ！待つことの大嫌いな性格の彼が一時間近く空や川面を見ながらイラついて待っていたのは事実だった）

「行こうか、怒ってなんかいないさ！」

（ウソも方便、これが男の美学さ！）あかねの笑顔と愛らしいしぐさに修一郎も途端にこころが弾む。彼女の腰に手を回して中之島公園へ歩きはじめる。

「課長がネ、また意地悪するのよ、急いでもいない庶務の棚卸の資料と計算を頼まれたのよ！またいつものサービス残業ってわけ！」

「ぼくのせいだろ！」

「そう言えば、そうね！修ちゃんって総務課長を無視して人事部へ辞表を出しに行ったんだもの」あかねが口を尖らせる。責任感の強い顔の表情にもどっている。

「よそうぜ、その話はさ！過去は帰らじというだろう・・僕らには未来こそが大事だし、自由なのだから・・」

「そうね！あのオジサンの齢になったら、イヤな性格変わらないよね！フフフ・・」

あかねは修一郎の前に立ち止まる。

「でも素敵だわ！修ちゃんカッコいい！村雲社長にスカウトされたんだもの！」

ふたたび無邪気な表情で彼の掌を握り歩き始めた。

「修ちゃんが東京へ行っちゃうと寂しいけど、応援してるね！」

（ボクも寂しいけど、しばらくの辛抱さ！すぐに迎えに来るよ！）秘めている言葉は、今は胸の内にたたみ込んだ。

戦後、目覚ましく変わり行く日本。各分野の法律が整備、自由と平等が憲法で保障され人間が等しく誠を尽くし努力すれば人も会社もそれぞれの分野で成長できる。理想とする精神を養い、正義を信じて活動せよ。修一郎が社会人としてスタートをしたときこの論理が原点となっていたのだが。

現実は人や社会に理解してもらえない、その理想は度々打ち壊されてきた。自己の描いてきた本来の面目は幻想だったのだ！と、彼は実社会に幻滅し将来の自己の在り方に悩み抜いてきたのだった。

株主総会の受付事件では総会屋の老人から屈辱を受けた。

彼は愛繊商事の社員であることに絶望もした。

同期入社の繊維部課長、崎口茂にも宗右衛門町の居酒屋で悩みを打ち明けた。

「今は耐える時代じゃて！正悪を見極めて体験を積み重ねて自分を鍛えろ、自分たちの時代がきたときその経験が肥しになるからのう！」何度も説得された言葉もその時は空しく聞こえていた。

出口が見つからない。

結局あの日、退職届を胸に人事部へ駆け込んで辞表を出した。

「社会的正義が通じない！こんなコンプライアンスのない会社にいることは僕には耐えられません！今日で会社を辞めます、これが辞表です！」株主総会の茶番劇！曽我総務部長の背任の事実！戎総務課長の優柔不断さを縷々述べたとき新社長、村雲権太がそこに居合わせたのだった。

山口市出身の村雲社長は野本の行動を見ていた時、まさに「男子須らく鹿俗の表に卓立せよ」という松陰語録を彼に当てはめていた。

（オヤッ？オウッ！面白いやつだ！この時代にタンカが切れる男こそ見込みがある！）

「人事部長！その辞表はオレに預からせてくれ！」

辞表を開いて

「野本修一郎君！はやまるなよ！キミの言ったイカサマ総会で選ばれた社長が今ここに居る、まあ、そこにかけなさい！」

修一郎は村雲社長の迫力に圧倒されていた。日で促された椅子に座る。

「当社はこれまでとは違うんだよ！経営陣が入れ替わった。これから経営の大改革をする！そのためにわたしが来たんだよ」

（若者はこのように高い志をもって世俗を超越して生きてゆかねばいかん）

彼の脳裏にひとつのポジションが閃いていた。

「わたしのところで特命の仕事をやれ！これから設立する新会社だ、キミが述べている社会的正義というやつをそこでわたしに見せてくれ！」

独断即決で愛繊フアイナンス東京本社へ愛繊商事から出向することが確定したのだった。

今夜はあかねにこの転勤後の計画も詳しく話さねばならないだろう、と、考えていた。

その頃、ふたりの恋仲は社内に知れ渡っていたようだ。同期入社の繊維部の崎口茂課長にも指摘されていた。

「恋人と早く結婚しろ！キミのヘッドストーン（石頭）も変わるじゃろう！」

と、あかねとの交際をあと押し。

あかねと結婚して家庭を持つ。なんと素晴らしいことだろう。

あかねと結んだ掌から伝わってくる優しくて暖かい感触が彼の全身を幸せにしていた。

ふたりは難波橋から中之島公園に降りてゆく。

コスモスの花の香りだろうか、甘い香りがほのかに漂っている。

風に吹かれたあかねの長い黒髪が修一郎の肩や頬に触れる。さらにいい匂いが香ってくる。あかねの香水だろうか。上品な素敵な匂いだな！こんなに幸せな時間が持てていることが幸せだったし緊張していた彼のこころを和らげる！

西空に傾いてゆく夕陽はふたりの影法師を敷き詰めた御影石の歩道に映し出している。

「見て！わたしたちの影！長いわね！むかし小学校の

校庭で遊んだ《かげ踏み遊び》を思い出すわ！修ちゃんたちも遊んでいた？」
「いや、知らないぜ・・どうするの？」
「鬼ごっこと同じように、鬼さんを決めてね、鬼に影を踏まれた子は負けて円周から退場！ってわけ」
「そうか！小学時代か・・・」
自分の過ごした小学校庭を思い出す。
夕陽の射す校庭で暗くなるまでベースボールで駆け回った懐かしい風景が蘇る。
あかねが修一郎の影に向かってピョンと跳ねた。
影がひとつに重なる。「ハイ！修ちゃん、退場！ってわけ」あかねが子供のように無邪気な表情で瞬間振りむく。
「分ったでしょう！単純なあそびなのよ！」
「うん！キミとボクの影がひとつになっているよ！そうだ！これは合体だ！あかねちゃんとぼくが合体している！」
「・・・」
夕陽を背にしたあかねの顔がポッと朱らんだ表情は修一郎には見えていない。
あかねの肩に両手を置いて、
「秋の陽はつるべ落とし、はやく、暗くな～れ！」
「どうして？いじわる！もっとステキな時間が続いて欲しいワ・・太陽さん！まだまだ行ってはダメよ！」
「だって・・はやくアレしたいんだ・・」
「アレって？」
「アレって・・・これさ！」
あかねの肩を更に引き寄せる。
「ダメよ・・恥ずかしい・・人に見えてるわよ」
「だから早く暗いカーテンが欲しいのさ」
「・・・」
あかねがまた跳ねて影を出る。
修一郎があかねの影を追いかけて踏む。
ふたりの影が離れ、離れてはひとつになってリズミカルにジルバを踊っているような感覚に浸る。
「影あそびって、幻想的だね！」
「こんなのどうかしら？」
あかねが手を頭に添えて指を開いて王冠を造る。並んで見る。
「うん！キミが王女様になった・・・」
あかねが修一郎の頭上に指を合わせた。
「こうすれば、修ちゃんはプリンス！」
「月の砂漠を♪はるばると・・・金と銀との鞍おいて、ふたつ並んでゆきました♪」
修一郎は椿のはっぱを唇へ当てる。草笛でメロディーを奏でる。
「素晴らしいわ！雰囲気でている！」
あかねが歌詞をなぞりながら草笛の伴奏を繋ぐ。
♪さきのくらには王子さま♪あとのくらにはお姫様♪

乗ったふたりはおそろいの・・・♪
「ハッハッハッ！そんなきれいな夕陽の砂漠にいるようだなあ・・」
夕陽がつくる影はふたりだけの御伽話の世界になっている。
いつまでもこのままでありたい幸福感に浸っているうちに・・・
中之島公園はうす紫いろに暮れてゆく。
やがて太陽は隠れて公園は暗いベールに包まれる。
そして薔薇の花壇の傍のベンチでふたりは愛しあう。
唇を重ね、彼の掌はあかねの身体をやさしく愛撫する。
指先が薔薇の芯に触れたとき
「ああっ！ダメ・・・・・」
息を止めて小さく喘ぐ声が修一郎のこころを震わせ、彼女を一生の伴侶としようと誓っていたのだった。
時間よ！止まれ！いつまでも・・・
ふたりだけの青春、蜜月は早送りのビデオテープのように過ぎ去っていった。

(二)

その悲劇の夜は突然修一郎を襲った。
「田舎の母の様子が悪いのでお休みをください。母を阪大病院に入院させて検査も受けさせます」
休暇願を提出したあかねは一旦兵庫の篠山の故郷へ帰っていった。
「しばらくの間、ご迷惑をおかけします。当座の業務は井出主任に引継ぎしておきました」
少し沈んだ様子で上司の戎課長にあかねは告げて故郷へ帰って行ったという。
かって、野本の部下のひとり、井出麻子庶務主任が野本の部屋へきて報告（あかねがかなり憔悴した表情だった）ことを告げた。
野本も最近、笑顔の消えたあかねの様子に不安を覚えていたが・・・
およそ三週間。
その間、修一郎は愛織フアイナンス設立準備室で様々な業務、古物商の許認可、不動産融資事業計画の策定、審査規定、愛織ハウジングの設立登記まで繁忙な時を過ごしていた。すでに愛織フアイナンス審査課長の辞令も受けていたから総務部とは無関係で彼は新しい仕事に精力を打ち込んでいる。
「キミに期待しているよ！」
報告と業務の許可を求めて社長室へ行くつど、村雲社長に激励されていた。
これが彼を変えた。
根底からやる気を出させて村雲を唯一の上司とし、励み尽そうと思っていた。
形ばかりの元総務部の送別会（野本修一郎のため）が終わった翌日、山元あかねは故郷から帰ってきた。

「阪大病院で検査を受けていた母の容態が良くなりました。お休みをいただいて有難うございました」
総務課で挨拶をおえた後、山盛りの書類に埋もれていた準備室の部屋にあかねが入ってきた。
修一郎に低調に腰を折って
「お久しぶりです」
少しやつれた様子に見えるが肌は透き通るように白くて美しい。
修一郎のこころはおどり、久し振りに会ったあかねがまぶしい。
〝綺麗になったなあ〟
内心燃えているがすぐに声が出ない。
「お仕事順調でまもなく東京ですね。ご栄転おめでとうございます！」
「ありがとう。それより、よかったね！お母さんが良くなられて・・・」
修一郎は嬉しかった。個室だったらいきなり抱きしめていたかも知れない。
東京へ行くまであと二日しかない。
ホッとした修一郎は小声で彼女をデートに誘った。
「仕事が溜まっているから・・」
責任感の強い性格であることは周知の事実だったが。
「でも、ボクも時間がないから」
粘って懇願。

「そうね、わかったわ」
硬い表情で部屋を出てゆく。
「少し変わったなあ、あかねちゃん、更にきれいになったみたいだし、大人っぽくなったなあ・・・」
出てゆく彼女の背中を見ながら修一郎のこころはうれしさで弾んでいた。
暫くすると、待合わせの時間を知らせてきた。
「いつものライオンのところでね！」
電話を置く。ライオンの石像のある難波橋。あかねと久し振りに会える喜びが彼の仕事の効率をあげた。
修一郎が東京へ赴任するまでの予定の業務は順次完了していった。

そして
あの夜、修一郎は彼女に結婚のプロポーズをしようと決断をしていたのだった。
いつものように、
薔薇園の白いベンチで彼女を抱き寄せていつものように口づけ。
その夜は、何故か、合わせた彼女の唇は冷たく、硬直していた。
彼の背中に回したあかねの手の指も、いつものような彼の情愛に反応する動きや力を感じなかった。
彼が彼女にやさしく伝らせる愛の掌にも反応すること

は無く、花唇に触れるまでもなく
「イヤ！もうやめて・・お願いだから」
やさしい愛撫を繰り返しても頑なに拒絶するのだった。
（どうしたんだろう・・・彼女はボクの愛に答えてくれていない・・）いつもと違う彼女の反応に対して不満だった。
手を彼女の腰から離した。熱い欲情に燃えている。今はいつものような愛の確証が欲しのだが。
半面、
（これ以上を求めてはいけないのかもしれない。結婚するまでは！）
混濁したこころの中で情欲と自制心が渦巻いていたが徐々に欲心は鎮めていった。

ボクは彼女を真から愛している。
彼女もボクを愛してくれていると確信している。
何度も
「好きだ！」
「愛してるわ！わたしも」
愛しいからこそ彼女の純情を傷つけてはならない。肉体的な欲情を自制してきたのはその純な彼女の愛を確信し、彼も男として、正義の美学を持っていたからだった。
薔薇の香りに包まれ満天に星が煌めく最高の夜だ。
さあ、プロポーズだ！

脳裏に用意した言葉を何回も繰り返している。いろいろの言葉を考えてみたが最後には単純な求婚の言葉を選んで決めていた。
誠実にまごころを込めて言おう。
そして、若干硬直した顔をあかねに向けた。
「東京へ一緒に行こう！ボクと結婚してください！社長から休暇を貰い、帰ってきてご両親に会いに行きたい。キミとの結婚をお願いしたい・・・」
修一郎はあかねの掌を握りしめて真剣にプロポーズをした。
「・・・・・」
彼女は俯いて修一郎の胸に顔を強く押し付けた。しばらく彼はあかねの肩を抱いていた。
当然、彼女も言葉を選んでいるのだろうと予測していたのだ。
「ありがとう！修ちゃん・・」
突然、あかねは修一郎から身体を離すとベンチから立ち上がった。
修一郎も立ち上がった。
あかねの答えが待ち遠しく修一郎は緊張していた。
沈黙がながれた。
「・・・・・」
長い時間がながれたように思うが修一郎の焦りのこころがそう思わせたのかも知れない。暫く俯いていた彼女

は顔を上げて、修一郎の目を見た。
「・・・・・」
目には涙が浮かんでは流れている。
「わたしたち・・もう・・終わりにしよう！・・・・」
あかねは掌で涙を拭きながら修一郎に声を詰まらせながら言った。
直にハンカチで目を押さえ、彼を振り切るように傍らにある楡の幹に顔を付けて声を押し殺して泣いている
「ウウッ・・・・」
声を殺し激しく背中が揺れている。
修一郎は呆然としてその背中を眺めていた。
「どういうこと？・・脅かさないでよ、冗談だろう！」
修一郎は立ち上がって行き、彼女を背後から抱いた。
すると、突然彼女は彼の手を解いて振り向いた。会社で見せる冷静な表情に変わっていった。
「ホントのことを言います！」
毅然として、山元あかねは彼から少し離れた。
「わたしはあなたと結婚する資格のない女です！ほんとうです！東京には行けない・・・」
「ウソだ、ウソだ・・・」
「これまでとても楽しかったわ・・・ありがとう・・ほんとうに・・」
「急に、何を言っているの？」
あかねはこわばった顔で口元を引き締める。
「わたしにはね、もともと故郷に許婚があったのよ。わたしはひとりっ子だし、父が養子にする予定で勝手に決めていたお相手。それでね、今度の休暇は母の病気と言ったことはウソだったの・・父が〝帰ってこい、会社もやめろ！〟とうるさく言うのでね、家に帰ったの・・」
「・・・・・」
「丹波篠山でその方と仮の祝言をして帰ってきました！許婚のお相手は田舎の父が大変お世話になっている会社の社長の三男！わたしとは同級生だけど・・」
修一郎の顔が蒼白に変わった。
冷静な思考回線が切れた。こころは動揺し、やがて呆けたようなうつろな目をしている。
「わたしはもう、むかしのわたしでは無くなったの・・ホント、悪い女だわ！わたし！そう！わたしは悪女だわ！」
あかねは両掌で顔を覆う。
「・・・・・」
絶望が修一郎を襲う。
悲劇の舞台劇を演じているようだ。
あかねの豹変ぶりはなんだ！ウソだろう！
いま、これは夢だろうか、夢であってほしい！
「もうわたし、汚れた身体・・もう、ダメなの！・・・」
ウウッ！今度は泣き声を忍んでいる様子を見せていた。
「そんなの有りなんだ・・信じられないぜ！」

何を確認し何を主張しどこを否定してよいか彼は混乱していた。
許婚の男に身体を任せたということなのだろうか！
瞬間、怒りに似た塊がのどに込み上げてくる。
最初からそんな不潔な女性だったら付き合っていないぜ！これまで彼女はそんなフリをしたこともないし、何かを隠している風にも見えなかった！
自分が未熟だったということか。
これまで愛を受け入れてくれていた彼女は純潔だと思っていたから、プロポーズをして幸せな家庭を築こうと夢見ていたのに。
「どうしてそれが今夜なのさ！何でこんな試練を僕にあたえるんだよ！」
天に向かって叫んだ。
「・・・・・」
本当に彼女は僕を騙してきたのだろうか。女は魔物だというが彼女の魔性が目覚めて丹波篠山で純潔を捨ててきたということか！
彼女は自分を責めるように
「あなたを不幸にしてしまったわ！・・ホントにごめんなさい！ごめんな・さい・・」
蹲ったあかねを見下ろしているだけで、彼は動けなかったし声をかける気持ちも失せていた。
草むらのなかではスズムシやマツムシの羽をする合唱が時折流れてくるが、今夜ほど哀しみに満ちて聞こえることはない。
山元あかねの背なかに向かって修一郎は叫んだ。
「もういい、行けよ・・バカヤロー・・」
押し殺した修一郎の声も震えていた。
こころとは真逆な言葉が口から出てゆくのを押さえられなかった。
（違うんだ！本音は違うんだ！まだ行かないでくれ！）
好きなんだよ！どうしても別れることはイヤだよ！愛しているよ！思っていても声がでない。
「・・・・・」
あかねは動かなかった。
一瞬救われた気がしたが絶望感までは救われなかった。
夜が更けて、冷え込んでいた。
すでに公園の人影は少なかった。
（も一度抱きしめたい！）
もう一度あの幸せ感を取り戻したい！
修一郎の胸の中では別の心が強烈に叫んでいる。
汚れていてもいい！他人に彼女を取られたくない！
いま目の前にいるあかねのすべてを取り戻したい！
しかし、
動けなかった。
椿の葉身が修一郎の目の前でひかっている。

一枚の葉っぱを毟り取った。
パサッと枝が震えた音がしてもあかねは振り返らなかった。
修一郎は葉を唇に当てて吹いた。
ふたりが過ごした幸せな時間を取り戻すことはできないのか。
「素敵だわ・・」
あかねもこれまで何度となく彼の草笛の音色を驚きながらこの公園で聴いてくれた。
「この葉っぱで吹いてみて？」
「いいよ」
多少の音の違いはあるが故郷を思いだしながら童謡を吹く。
ベンチで肩を寄せて聴いてくれた愛しい日々の情景が浮かんでは消えてゆく。

いま、愛しい人と別れなければならない。過ぎ去ったあの幸せな夜はもう帰ってはこないのだ。
今夜も〝月の砂漠〟を吹いている。
♪金と銀との鞍置いて二つ、並んで・・行きました♪・・・
空気を震わせながら草笛が響く。
風も今はふたりを悲しんで消えているようだ。
雲が切れて現れた宵の明星が泣いているように瞬いている。
プラタナスの枯れ葉が一枚、枝から離れて修一郎の足元へ落ちた。
カサッ！
愛はこんなに儚いものか。一枚の枯れ葉のように散ってゆくのか。
やがて唇が震えて音が霞む。
「・・・・」
修一郎は草笛を捨てて、公園をあとに歩き始めた。
「故郷に帰って新しい生活が始まれば、もう僕とのことは忘れなければいけないぜ！」
また、ウソがでる。
ウソの心が涙腺を刺激する。
涙を抑しとどめようと空を見た。
星空に一筋の淡い光が流れていった。
「過去は流れ星と同じさ！消えてしまえば何も残らないさ！」
修一郎は吐き捨てるように自分に言った。
そして
女の未練を消して、仕事一筋に生きてゆく！もう女なんか要らない！
野本修一郎はあかねとの別離を決意し、未練を残すまいとこころに刻んでいた。

人生の未熟さは真実を見失うことがある。
このとき、
修一郎はあかねの許婚の男が〝架空の男〟とは気がつかない。山元あかねが命をかけて演じた修一郎との最後の夜だった。

「本当にこれまでありがとう・・修一郎さん！」
去ってゆく修一郎の背中に、あかねは両掌を合わせて声を押さえて激しく泣いていた。
「新しい職場でがんばってね！東京でのご成功を祈ってるわ！」
止めどなく流れる涙を拭くこともなくあかねはたたずんで修一郎のが消えてゆく後姿を見ていた。自分が突然遭遇した不運を告げることはできない。
煩悶したが真実を告げることはできなかった。愛する人のために自分は身を引く！
決断は早かった。
街灯の下であかねの全身がまたさらに激しく揺れている。
修一郎は最後のあかねの苦悶する姿を見てはいない。

(二)

それから二年。
修一郎は東京へ転勤して新しい仕事に燃えていた。
失恋の痛みも今は癒えてきている。
時がこれを解決する。
実社会は自分が思うように泳いで行けるところではない。
経験すればするほど、この現実が分かってきた。
愛織商事は彼が考えていた正義が万事に通じるところではなかった。
その都度、繊維部の同窓生、崎口茂から言われた言葉を銘心している。
「耐えること、経験を積み重ねること、そしたら自ずから道は見えてくる」学んだ法律は単なる知識に過ぎない。世界では法律が無意味な事件や事故は毎日のように発生し悲劇が起きている。
これが現実なのだ。

日々が鍛錬の場所だと悟ったとき、野本修一郎の人生感まで変わっていた。
悪徳も背徳も飲み込んでやる。
田中角栄首相の登場は彼の励みになっていた。挫折を乗り越えて栄光をつかむ。
破滅した恋も彼を変えた。
いつまでも悔やんでみても始まらぬ。
すべては心の置きどころだ。
過去は帰らず。未来だけを見つめてプラス思考へ転換だ！
日々のどんな仕事にも楽しさ、やりがいを感じ始めてもいた。

この結果、愛繊ファイナンス東京本社では彼を審査部長に昇進させていた。
いまは正悪の判断が難しいグレー（灰色）の仕事も飲み込んで対応している。
何より、
村雲社長に認められていることが嬉しかった。自分を認めてくれた愛繊商事、村雲権太はすでに愛繊商事会社の会長、愛繊ファイナンス、愛繊ハウジングの社長と二足のわらじを履いて猛烈に働いている。
社長のバイタリティにも彼は傾倒していた。
村雲は東京、大阪はもとより全国を回る。
最近、頻繁に韓国へもチエン・シュウー氏と行っているという。（韓国では食欲と性欲を満たすためだと密かに噂が飛んでいるが）
東奔西走暇要らず！というところか。
定期的に東京へ来ると村雲は各担当者から業務報告を受けて叱ったり、大げさにほめたりしながら精力的に仕事をこなしていた。
「野本部長！東京の不動産と融資利益の伸び率は当社一番だぞ！さらに儲けろよ！期待しているぞ！」
ファイナンスの業績は順調に伸びていた。
利回りは抜群、融資事案に焦げ付きの事故もなく村雲会長はご満悦だ。
「どうだい！野本くん！東京の暮らしには慣れたかい！」
「はい！ありがとうございます。うどんやそばの味つけ以外は慣れてきました！」
「そうじゃろうのう！あの真っ黒いうどんの汁だけは耐えられんのう！」
「あの汁は毒みたいな色で、飲んでいるといつか癌になりそうです！」
「ハッハッハッ！大げさな！でもわれら大阪育ちはうどん好きだからのう！大阪で慣らされたダシの味は忘れられんからなあ・・・」
「はい！懐かしいです！あの味が」
「たまに大阪へ仕事を作って来たらよろしい！うどんを食べに来たらよろしいがね！」
「ありがとうございます」
「まあ、そのうち慣れるさ、東京の味にも・・住めば都というからなあ！」
村雲が出口へ向かう。野本は村雲の皮のカバンを持って、玄関の車寄せへ向かってゆく。
「ところで、ガンで思い出したが、キミは本社総務部にいたから、あの山元女史を知っているだろう！美人で仕事が良くできた女子社員だったがのう・・・」
「はい！」
知っているどころではない。山元あかねと破滅した愛の記憶でいまも時々胸が痛むのだ。

村雲社長は僕たちのことを知って言っているのだろうか。
「山元君が今年の春、亡くなったそうだ！」
「亡くなった?!」
「儚いねえ命ってものは！美人薄命というが・・故郷で静養していたらしいがね、会社を退職してから・・・」
修一郎は青ざめていた。さらに心臓の音が聞こえるのではないかと思うくらい胸が疼いている。
「どうしたのですか！」
無関心を装っていたが声は震えている。
「詳しいことは知らんが、退職前から分かっていたらしいがの、ガンだったそうだ！あの不治の病と言われた骨髄癌、白血病よ！」
村雲の声が野本の胸に雷神のように響いた。
「・・・はあ?!」
何度も何度も「癌」「ガン」という言葉が胸を突き刺していた。
白血病ってなんだ！死んだ！あかねさんが！死んでしまったとは！
野本は愕然とした。
足元から急に地面が無くなったような錯覚に襲われた。
膝が痙攣をおこしたようにがくがく震えている。
「同郷の山口から出た有名な俳優、夏目雅子さんと同じガンさ！・・・気の毒だった・・・よく気の利く娘だったがのう・・」
村雲は野本が直立して固まっていた理由に気が付くこともなく、野本の掌からカバンをもぎ取ると車へ乗り込んで行った。
修一郎はその車に向かっていつまでも深々と頭を垂れていた。
止めどなく涙が足元へこぼれ続けた。
そして自分を責めた。帰らない過去に慙愧の思いを馳せていた。
未熟だった！なんと自分がバカな男だったか！
失ったものの大きさを飲み込むことができない、まさに胸が張り裂けそうだった。

無念の帰阪

夕刻から低気圧が大阪沿岸を通過するので南東の風が強まり、ところによっては雨になるでしょう”
大阪管区、気象庁が出した予報の通り午後から大阪の空模様は急に変化して時が経つと共に周辺が荒れてきた。
野本修一郎は蒼白な顔で難波橋の欄干に凭れている。
土佐堀川から風が吹きあげて彼の顔を打つ。
ヒュー・・ヒュー・・ヒュールル・・
ブオー・・ゴォーン・・ヒュー・・
天神橋を抜けてきた強風が難波橋の橋桁や欄干を叩き、様々な物体を吹き抜けてゆく風の音なのだ。

彼の胸の中にも・・・・
いま痛烈な風が吹き抜けている。
山元あかねが病死した！
あの時、すでに不治の病、白血病に苦しみ悩んでいたとは！
愛し合っていたころの想い出が次々に胸に浮かび、修一郎の涙を誘う。
いまは〝後悔と無念の涙〟なのだ。
ふたりが過ごした中之島公園の木陰のベンチが涙の向こうに霞んでいる。
背後には、華麗なS銀行本社。黄土色の龍山岩のビルの外壁を叩いた風は舞い上がりゴォーゴォーンとこだましている。
あかねが号泣しているようだ、次ぎつぎに幻想を呼ぶ。切ない・・・
すると
「ガオー・・ガオーン・・」
突然声が飛んできた。
学校帰りの子供たちが両掌を口に丸めて吠えている。
難波橋、南詰で口を開いた石造のライオン像を見上げながら獅子の鳴き声を真似て遊んでいるのだった。
「子供たちは敏感だすなあ、確かに、なんや今日はあの獅子が空に向かって吠えているような景色でんな・・」
「雲行きもだんだんと怪しくなってきましたなあ、間もなく雨が降ってくるのと違いまっか」
「そうやねえ・・・気色の悪い雲でんなあ、雷もきそうなようすで・・・」
「お～い！子供たち！そこで遊んでおらんで早よ家に帰らにゃおえんよ！そうせんと雷さまにヘソを取られるでえ！」
通りで遊んでいる子供たちに大声で注意をしている。
修一郎には懐かしい岡山弁のオヤジさんの声に、獅子と雷を連想する。
まさしく今夕は難波橋、南口のライオン像（高欄の獅子像）が雷神に咆哮しているような景色に見えた。
堂島川と土佐掘川にはさまれ、浪花のオアシスと言われた、その夜の中之島公園は天候が荒れて人影も疎らだった。
白色街灯に灯が点る。
修一郎は公園へひとり降りてゆく。
ああー、オレは何という間抜けな男なんだ！どうしてあの夜、気が付かなかったのだろうか！いま、後悔してももう取り返しがはつかないが！不自然なあかねの豹変ぶりが想いだされる。
次ぎつぎに浮かんでくるあかねとの追憶に胸が押しつぶされ苦悶していた。

山元あかねの死を村雲社長に聞かされて知った日から彼は後悔と懺悔を繰り返してきた。
そしていま愛織フアイナンス東京本社から休暇をとって中之島公園へ帰ってきたのだった。
あかねちゃん！つらかっただろうな！
僕には分からなかった！許してください！
修一郎は吹きすさぶ空に向かって祈っている。
もう一度会いたいなあ！風よこのボクのこころを天にいる彼女のもとへ運んでくれ！
不治だと言われた病、白血病であることを知って隠していた！
どんなに辛かっただろうか！
阪大病院に入院検査で休みを取ったのは彼女自身のためだったのだ。
診断が下されたとき、彼女は死が間際であることを悟った。
その身体では修一郎と結婚はできない、
それが本当の愛と考え、あかねちゃんは苦悶のすえウソで固めたトリックを使ったのだろう・・・
いつも語り合い、抱き合った白いベンチが見えている。
慕情が激しく胸を突く。
〝影絵遊びをしよう！〟
あの明るいあの声が耳によみがえってくる。
夕陽がつくる彼の影に跳ねて飛んだ、あの愛らしいしぐさ。
〝合体だ！〟
いま、街灯が移す修一郎の影にそっと、片足を運んでみる。
舗道に写された淡い自分の足の影だけが小さく動くのが見えているが自分の影は踏めない。
アアッ！現実だ！
存在はあっても、自分の影はあっても踏めない。
自分が自分の影を踏むことはできない。
虚しいことをしている自分に気が付いたときふと笑いが込み上げてきた。
「ハハハッ！・・・」
これだ！すべてが超越して美しい思い出になっている。
毀れたものは元の姿には戻らないのだ。

これから、
命が散っていったあかねの記憶はいつまでも純で綺麗な表情を僕に見せてくれるだろう！
永遠に別れてもあかねと僕はいつまでもいとおしい愛の思い出に結ばれているだろう。
明日はあかねの故郷をひとり訪ねて行き、墓前で懺悔をしよう。
そして無知だった自分を恥じよう。あかねちゃん！
反省がさらに自分を磨くことになるだろう。忘れるこ

とも日々進歩。一切無常。
"別れるから深まるのだ" あの坂村真民先生の詩が強烈に胸に浮かんでいた。

絵画ビジネス狂奏曲

不動産市場はインフレーション街道を突っ走っている。
田中角栄首相時代の主要政策、日本列島改造論の影響は不動産ビジネスを画期的に発展させていた。
そして
誰もが疑う余地のない好景気。
新規事業として仕掛けられた関連ビジネス、(リゾート法による各地方の観光開発、ゴルフ場の開発、住宅分譲地、マンションの開発)はほとんどが将来性のある優良事業として展開していた。
そしてそれらの影響は、古物や絵画ビジネスに及び、文化や文明とかけ離れた領域で商社ビジネスとして企画展開され、やがてマネーゲームとなって人や企業へと伝染していった。
「天下のM商事が絵画を収集しているらしいぞ。また高価な美術品を担保に融資を始めたようだ・・・」
その話題はたちまち市場へ伝わっていった。
青山通りのプラタナスの葉が散り始めた初秋、愛織フアイナンス東京本社に村雲社長の姿があった。
定例の社長巡回の日だった。社長室で副社長から不在中の業務について報告を受け、決済書類を処理していた。
社長専用、直通電話が入る。
「これから伺いますわよ!」
電話はG宝飾代表、飯田加奈子だった。
有無を言わさない。
―また絵を売りに来るなー
美術品が不動産と並行して高騰している情報は愛織商事の村雲権太社長の耳にも当然入っていた。
予感は的中した。
「ロートレックを買ってくれません?」
紫色のおおきなエルメスの帽子をつけたまま、つばの下から飯田加奈子が、社長室のソファーから村雲へ強請(ねだ)るような甘い声を出して机で決済処理をしている村雲へ声をかけた。
「なんですか?その・・・ローソックとかいうのは!」
卓上の書類を片手に立ち上がった村雲はソファーへ歩きながら聴いた。
彼女は黒紫色のミニスカートの裾からはみ出た足を組みなおす。黒い網ストッキングの長い足に余程自信があるようだ。
「フフフッ・・・ロートレックよ!フランス、十八世紀末の代表的画家ですわよ、これがコレクションの写真集ですわ!ごらんあそばせ!」
「本物だろうね・・・」

「フランス政府の輸出許可証つき、鑑定書も当然ついているわ、間違いはない本物ですわ」
「なんぼ(いくら)です?」
「五十億です。五十八点丸ごとのおねだんですの。お安いお買い物ですわよ、やがて美術館をお創りになるときの目玉になると思うわ」
「ホウ!・・しかし変わった絵だね」
「印象派でドガの影響を受けているから繊細で大胆な構図なのよ、日本の浮世絵の影響も受けてこの線描ができたとも言われているわ」
ドアのノック音。
社長秘書の小城洋子が入室。
「コーヒー、入れ替えさせていただきます」
社長に小声で
「テーラー藤さまが、かなり前からお待ちになっています。出直していただきますか?」
「アラッ!ごめんなさい!わたし、アポ無しで・・・ご迷惑だったわね!」
加奈子は、電話で村雲の在社を確認して今日も秘書を通さず来社した。
S銀行、飯田頭取の愛娘(まなむすめ)であることは秘書室も承知していたから彼女に限ってフリーパスだった。
「でも、社長さんのスーツの見立てだったらわたしサポートしてさし上げてよ」
「そうかね!それは助かるな!アメリカンのセンスで見て貰おうか・・・」
「アラッ!紳士服はイギリスかイタリーのセンスよ!アメリカンは社長様の最近のお頭(つむ)じゃございませんか?」
「なんじゃ・・それ」
「薄いコーヒーの事よ」
「ハッハッハッ!まいったね!でも最近抜けてきたね、確かにアメリカンだ!おいらのおつむは・・・」
何を言われても彼女の親父はお金の水源だ。愛娘との友好関係は保たねばならない。
ロートレックコレクションも当然買わざるをえないだろう。別に問題はない。リスクはS銀行に振り替えればいい、と村雲は胸に秘めていた。
テーラー藤のスキンヘッドの親方と弟子が生地を担いで入ってくる。
生地を会議用テーブルへ置いて
「いつもありがとうございます、今日は冬用のアーサーハリソンとウイリアムハルステッドの生地を主体に持って参りました・・・国産のミユキテックスも少し持参しましたが・・・」
「イギリスの有名な生地よ、わたしが選んであげるわ!」
親方は、つるりとした頭部を撫ぜながら、加奈子の存

在に興味を示す。
「ありがとうございます。さすがお嬢様、お目がお高うございます」
「こちらのお嬢様ではございませんのよ、フフフッ・・」
親方に村雲は加奈子を紹介する。
「ワッ！それは失礼しました！今日はなんと良い日でしょう。お会いできて光栄です」
すぐに弟子と卓上に置いた生地を広げる。
加奈子は素早くブルー系ブラウン系アイボリー系それぞれにデザインされた縞模様の生地を次ぎつぎに村雲の肩にかけて見ている。
「社長さん！いくつつくるの？」
「三着のつもりだが」
「四着にしなさいな、これ、これ・・」
選び出した四系統の生地を示す。
「ま、それじゃあ、それにするか」
村雲は着るものにこだわる性格ではない。長い間、既製品を着てきた。不動産コンサルタントの相澤保次の紹介でオーダーメイドに変えたのだった。勿論年々、専横、豪奢に慣れ浸ってきた環境からだが。
今度のスーツはおよそ五百万円くらいの支払になるだろうと推測しながら葉巻に火をつける。
青い煙が流れてハバナの薫りが漂う。
「いかがですか！テーラーさん？」
加奈子が親方に評価を促す。
「さすがです！これらは、いずれも世界の一流品です！色合い、風格、品位、身に着ける方のモチベーションを随所で感じさせますよ。お嬢様のご見識に感服しました・・」
加奈子は親方のお世辞だと分かっていても虚栄心が疼く。
村雲社長の頷いている表情にも満足していた。
「それでは大至急カタを取らせて頂きまして、今度お見えになる・・・二週間後には仮縫いというスケジュールで参ります・・・」
加奈子は退出するテーラー藤、親方の満足した後ろ姿を見送りながらロートレックコレクションの仮契約書をバッグから取り出していた。
いま、真の誠意はどこへ消えたのだろうか！人はあの清純な少年のこころをどこに置いて来たのだろうか！
まさに誠、清、正義の三つの流れは悪流と混在して見極めることもできない。
この頃野本修一郎は大河の濁流に飲み込まれてゆく。
（この項　おわり）

これはフィクションです。記載された団体名・人名、事件は架空のものです。

世界の国旗から学ぶ（最終回）

（中米・カリブ諸国）

米村典紘

平成28年から連載の「世界の国旗から学ぶ」シリーズも、いよいよ「中米とカリブの国」ですべての国を紹介したことで最終回となります。今回の中米（7か国）・カリブ諸国（13か国）は、日本から遠い事もあり、余り知られていない様に思います。
また、今回執筆中に日本ではラグビー・ワールドカップ日本大会が開かれ、期待以上の盛り上がりで、一気に日本全体が一つになったような雰囲気に包まれました。この熱気が来年のトウキョウ2020五輪につながり、さらなる平和への「ノーサイド」になってゆくことを期待したいと思います。

【特集】盛り上がるラグビー・ワールドカップ日本大会
出場チームの旗

2019年9月上記大会がはじまり、予選を勝ち抜いた20チームが四ブロックに分かれリーグ戦を争い、日本チームはAグループで第一位通過をはたし、念願のトーナメント戦に進む事が出来ました。残念ながらトーナメント初戦で南アフリカに惨敗しましたが、その南アフリカは準決勝、決勝と勝ち進み11月2日宿敵イングランドと対戦、見事勝利し、三度目の優勝カップを手にしました。今回も、大会を通じて20チームの国旗がはためいた訳です。
今回参加20チームのうち英国は、イングランドチームが「白地に赤十字」のセントジョージ旗、スコットランドチームが「青地に白い✖サルタイアー旗（サルタイアーとは斜め十字の事）」のセントアンドリュー旗、ウエールズ＊チームは「横柄2色白・緑にドラゴン」のウエールズ旗、アイルランドチームは「アイルァンド島にある4地区の紋章を集合した」協会旗を使用していまし

た。（＊ウエールズとは「赤いドラゴン」の意味です。）

今回のワールドラグビー大会で、多くの方が疑問に持った事について二つお答えいたします。

一つは英国から「何故4チームもでているのか？」質問に対して。

英国のイングランド島には上記3つのラクビー協会がありその代表3チーム。また、アイルランド島にはアイルランド国と英国の北アイルランド地区があります。アイルランド国には3地区、北アイルランドは1地区としてアイルランド国のダブリンにある協会が参加しています。その為、掲げる旗もアイルランドの国旗ではなく、4地区の紋章を四隅に入れた協会旗となっているのです。

二つめの質問は「何故日本チームに外国人がいるのか？」確かに今大会の登録選手のうち日本出身選手は19人で外国出身選手が17人でした。

世界ラグビー協会の規約には、下記の条件を一つでも達成していれが、その国の代表になれると規定しています。

①日本でうまれた。②両親が日本人③祖父母が日本人④日本に3年以上居住している事（2020年の12月末からは5年以上）となっています。

例えば松島　幸太郎選手は南アフリカで生まれましたが、①の条件でパスリーチ　マイケル選手は④の条件でパスです。それよりも、彼らは、プロ野球の出稼ぎ選手と根本的に違うのは、報酬が比較にならない事と日本が好きだから、日本でプレイをしている正に「ONE TEAM」なのです。

【参考】

英国旗の「ユニオンフラッグ」は、セントジョージ旗、セントアンドリュー旗、セントパトリック旗を芸術的に組み合わせた最高傑作の国旗だと言われていますが、北アイルランドのセントパトリック旗は北アイルランド政府の公式の旗ではありません。

そもそも、それにはセントパトリック旗に自体に問題があった様なのです。中公新書の森　護氏による「ユニオン・ジャック物語」によれば、北アイルランド旗の白地に赤いサルタイアー（✖斜め十字）とセントパトリックとは全く関係がなく、北アイルランド旗も基本は「白地に赤十字で中央に紋章がある旗」でしたが、イングランドのセントジョージ旗が、白地に赤十字なので、「重なる事を嫌がった」事で、十字旗ではなく、赤いサルタイアー（✖斜め十字）をセントパトリック旗だとして作り上げてしまったそうなのです。

そういわれますと、ゴルフ全米ツアーで北アイルランド出身のロニー・マキロイ選手を表す旗は白地に赤十字の中央に紋章はよくみますね。UKの歴史、経緯が複雑なところから、英国の旗だけでも複雑な話になってしまいます。

話をワールドラグビー参加国に戻します。**ニュージーランド、豪州、フィジー**の3ケ国はカントン部分にユニオンフラッグ入っていますし、**南アフリカ、カナダ、ナミビア、トンガ、サモア**（サモアの国旗は赤地にカントン部分が青で黄色の南十字星を描いた旗ですが、以前使っていた赤と白の二色旗を使用する事もあります）の5ケ国は、英連邦加盟国です。それに、**日本、ロシア、イタリア、フランス、アルゼンチン、米国、ジョージア、ウルグアイ、アイルランド**、の9か国と**イングランド、ウエールズ、スコットランド**の3地区の計20チームによるチーム戦でした。

南米から、サッカーの強国　アルゼンチンとウルグアイが参加しています。この二か国の国旗にも類似性があるのです。アルゼンチンの国旗はブルー・白・ブルーの横ストライプの中央に太陽が笑っている「5月の太陽」が描かれています。ウルグアイの国旗にもカントン部分に五月の太陽があり旗地には白地に四本の横柄の青いボーダーとなっています。ウルグアイの独立には、最後まで支援を続けたアルゼンチンに敬意を示す為。「5月の太陽」が入った国旗となった訳です。

西アジアのジョージア（ロシア読みで旧グルジア）の国旗は国名通り、イングランドのセントジョージ旗に4個の赤十字に加えた国旗で、この国旗で、キリスト教の国家だと主張しています。

ラグビー・ワールドカップ東京大会の国旗などからも国にまつわる歴史と事情が分かってきます。国旗には「独立に際し、支援国に敬意を表わした国旗も多くみられます。その事から本誌のタイトルが「世界の国旗から学ぶ」といたしました。

東京2020五輪では、世界の国旗を知る事により、各国の事情を理解しお客様をお迎えする事も大切なホスピタリティーだと思っています。

中米諸国7か国

アメリカ大陸を北米、中米、南米に三区分する場合、中米と南米との境は、コロンビアとパナマである事は明白ですが、メキシコは北米なのか中米なのか、と迷ってしまう方は多いと思います。

地学的にはメキシコの南部ユカタン半島を含むテワンテペック地峡からパナマまでが中米ですが、プレートテクニクスでは、北米プレートにはユカタン半島より南のグアテマラ、ベリーズ迄入ります。その他5か国（ホンジュラス・エルサルバドル・ニカラブア・コスタリカ・パナマ）はカリブプレート上にあり、火山・地震の頻発地区でもあります。しかし一般的（地図帳など）には中米は、グアテマラ、ベリーズ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマの7カ国で、メ

キシコは北米に区分されています。
またコロンンビアから独立したパナマと英国から独立したベリーズを除き　5か国はいずれもスペインからの独立国です。
現在は、マヤ・インカなどの先住民族が主体で独立した国家はほとんどなく、スペイン占領後の独立である為、純粋な先住民族半数以上の独立国は皆無で、グアテマラ共和国がマヤ先住民族３９％を占めて一番多いく、メスチソと呼ばれるスペイン系との混血人種が６０％を占めています。その他中米諸国のメスチソの割合は　エルサルバドルが８６％、ホンジュラス８６％、ニカラガ６３％、パナマ５８％と純粋な先住民族の割合は１０％以下となっています。
逆にコスタリカという国は１８２１年非武装中立で独立し、スペインからみれば、最も安定した国家であった為　スペインからの移住者が多く、スペイン系白人が７７％を占める白人国家となっています。
中米７か国の国旗の特徴は、うち5か国が　１９世紀前半に中央アメリカ連邦を形成していましたので、ブルーと白を使用し、似たような国旗になっています。他の2か国はコロンビアから米国の後押しで独立したパナマと１９８１年英領ホンジュラスから独立したベリーズです。

中米７か国の紹介

①グアテマラ共和国（①スペインから１８２１年独立：②首都グアテマラシティー：③一人当たりのＧＤＰ３，７９０ドル④人口１，７２４万人）以下、①～④は数字のみにて表示します。
カリブ海と太平洋に面し　北西はメキシコ　南はエルサルバドル　東ベリーズ　南西ホンジュラスを国境とする。国土の3分の2は高原。火山国で中米の最高峰タハルムコ山（４，２２０ｍ）やイサバル湖、アテイトラン湖の火山湖があります。
経済はコーヒー、砂糖、バナナの輸出による農業国。原油の埋蔵もありますが、観光及び繊維加工業に力を入れています。（モラと呼ばれる伝統的手芸織物がある）民族はマヤ系先住民族３９％と中米では最大　やはりスペイン系白人と先住民との混血メスチソが６０％を占めている。
１５世紀までマヤ文明が栄えていましたが、スペインに占領され、その後メキシコに併合、１８２１年に独立宣言。１８２３年には中米諸州連合に加入したが１８３８年に単独独立国となった。テロ、クーデターなどの混乱期が続き、現在は立憲共和制を採っている。
「国旗はブルーと白の縦柄と世界で最も美しいといわれる鳥ケツアールを配置」
国旗は中央アメリカ連邦時代に使用していた、青・白・

青の縦2色旗で、中央の白に国章を配したもの。国章には、防衛の象徴としてライフル銃とサーベルをクロスさせ、その上に世界で最も美しい鳥と云われている国鳥ケツアールを自由のシンボルとして描き、１８２１年９月１５日と書かれた巻物を国鳥の下に、左右を丸く囲む様に勝利と栄冠の象徴である月桂樹を配した国旗。
＊中央アメリカ連邦は、グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカの五か国で構成され、連邦旗は横（青：白：青）の二色旗を使用していた。現在もホンジュラスはそのまま使用、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグアの三か国は青と白色を使用、コスタリカも、中央に赤は入るものの、やはり白と青を使った国旗となっている。

②ホンジュラス共和国（①スペインから１８３８年独立②テグシガルパ③２，１５０ドル④１２２．５万人）
西はグアテマラとエルサルバドル　東はニカラグア北はカリブ海に面する。１８２３年に中央アメリカ連邦共和国に加盟したが、解体後１８３８年に独立しました。政治体制は、立憲民主体制で住民の９０％弱は先住民と白人との混血メスチソ。
熱帯気候ですが、６５％が山岳地帯なので標高による気温差は大きい。首都のテグシガルパの一月の気温は２０度、７月の気温は２４度と温帯冬季少雨気候なので過ごしやすい。
３００年～９００年頃までマヤ文明として繁栄、１５０２年のコロンブス到着以降スペイン領、その後メキシコに併合されたが、中央アメリカ連邦に加わり、１８３８年他の連合国に加わり独立しました。
２０１６年の対外債務が６１億2千万ドルに至り、債務貧困国となっている。主要産品はバナナ、コーヒー豆などの農産物。
「国旗はブルーと白の横柄と真ん中の白い帯に青い五つ星」
国旗は中央アメリカ連邦時の青：白：青の横2色旗をそのまま使用し続けている。すなわち、中央白の部分に連邦を表す青い星を一つ（ホンジュラス）描き、その左側の二つ星はグアテマラ：エルサルバドルを、そして右側の星はニカラガ：コスタリカを意味して描いたものです。青は海と空と友愛、白は平和と国家統一を、青い星は近隣国との再統一の希望を象徴しているとのことです。

③ニカラグア共和国（①スペインから１８３８年独立②マナグア③２，１００ドル④６２８．５万人）
中米の中央に位置し、西はホンジュラス　南はコスタリカと接し　カリブ海と太平洋に面している。太平洋側には1，２９７ｍのモモトンボ山や、火山湖ニカラグア湖がある。レオン市には2つの世界遺産（レオン・ビエ

ホ遺跡群・レオン大聖堂）を持つ。

「国旗はブルートと白の横柄で中央の白い部分に黄色い丸と三角の複雑な国章」

国旗は中央アメリカ連邦旗の横柄青：白：青の三色旗を使用、白の中央に描かれている三角形の国章も当時のまま使用している。（中米5か国の連帯を示す5つの火山：太陽光線と虹は輝ける未来：フランス革命ゆかりのフリギア帽（エルサルバドルの国章にも使用）は自由、平等の象徴）、ただし、その周りに金色で円状に書かれた文字が「中央アメリカ連邦」から「中央アメリカ・ニカラグア共和国」に書き換えた国旗。

④コスタリカ共和国（①スペインから1821年独立②サンホセ③10，840ドル④495．3万人）

北はニカラグア　東はパナマと接する。最高峰チリボ山は3，819メートルと3，432mのイラス山がある。国名はスペイン語で「豊かな海岸」を意味した非戦宣言国。世界遺産も多く　豊かな自然は動植物の宝庫。気候は熱帯でありながら山地のサンホセは大変住みやすい為スペインからの移住者も多く77％が白人の豊な国。

「国旗は横柄の上から青1・白1・赤2・白1・青1で赤の中央やや左よりに国章」

国旗は中央アメリカ連邦旗の青と白を基本とし、中央に太い赤いボーダーを入れた。（タイ国旗とデザインは同じですが、配色の赤と青が逆の国旗です。上下の淵の青は　カリブ海の空と太平洋の空の青、中央には独立のために流された血の赤で白は平和を意味しています。

中央やや旗竿寄りに円で国章を描いたもの。国章には、上部から中央アメリカ、その下にコスタリカ共和国、コスタリカ7州を意味する7の金星、カリブ海からの日の出と1隻の帆船、バルバ、イラス、ボアスの3火山と太平洋に浮かぶ1隻の帆船が描かれています。しかし国章の使用は公式行事のみ使用。

⑤エルサルバドル共和国（①スペインから1821年独立②サンサルバドル③3，920ドル④641．2万人）

中央アメリカの中央部に位置し　太平洋に面する（カリブ海には面していない）　西はグアテマラ　北東部はホンジュラスに接し、中央アメリカ諸国では最も小さい国家。スペインンからグアテマラの一部として独立しました。

「国旗は横柄青1・白1・青1で白の中央に国章」

国旗は中央アメリカ連邦時代の国旗を名残として使用し、国章は複雑で、中央アメリカのエルサルバドルと金文字で囲み、その内側に月桂樹、更にその上に「神・統一・自由」と書き、三角形（フリーメイソンの平等）の中には、太平洋と中央アメリカ連邦を意味する5個

の火山・フランス革命のシンボル自由のフリビア帽と1821年9月15日の独立日が金文字で描かれている。

⑥パナマ共和国（①コロンビアから1903年独立②パナマシテイー③12，140ドル④416．3万人）

皆さんご存じのパナマ地峡部に位置し　東は南米コロンビア　西はコスタリカ　北はカリブ海　南は太平洋に接する。太平洋と大西洋を結ぶパナマ運河の国として名高く　国旗も赤と青の色使いから連想できそうな感があります。

パナマの経済の50％は観光収入によるものですが、登録船籍国として収入も大きいものがあります。観光客の多くは米国人で米国経済をバックにした最も豊な国の一つとなっています　しかし失業率は10％近くで白人と黒人との所得格差の問題も抱えています。

【参考：登録船籍】

船が一定の大きさ以上になると　船籍の登録が義務付けられ　船籍登録のない船は国境移動ができません。

我が国の保有船腹量はギリシャに次ぎ世界第2位なのですが、船籍は日本ではなく船籍の多くはパナマ船籍です　その理由として　①税金が安い事②ペーパーカンパニーが事務所なしで登録できるなど簡単③海技免許などの船員雇用が緩やかな事などがあげられる。

「国旗は、旗地を四分割し旗竿側上部が白地に青い星、下部は青色一色、右側上部は赤色一色で、下部は白地に赤い星」

大変わかりやすい国旗です。赤は自由党、青は保守党、白は国民の融和を表し、両党が一致団結して平和な国土を築く事を目指している。また、青い星は法の権威、赤い星は革命で流れた血、ブルーはカリブ海と太平洋、白は平和と国土を意味しています。

⑦ベリーズ国（①英国から1981年独立②ベルモバン③4，360ドル④382万人）

ユカタン半島の付け根に位置し　北西部をメキシコ南西をグアテマラに挟まれカリブ海に面した比較的新しい国家。国土の大半は熱帯雨林気候で沿岸部にはマングローブの湿地帯とサンゴ礁がある。

1973年　英領ホンジュラスからベリーズに改称　グアテマラと国境紛争の末　1991年独立しました。英連邦加盟国。

「青地に上下を赤く縁取り　中央に大きく白丸地に国章」

ベリーズの独立は中米7か国の中では最後の独立国で、以前は英領ホンジュラス。国旗は、旧中央アメリカ連邦とは無関係で、青地に上下に赤い縁取りをし、国章として、中央を大きな白抜きの円を描きその内側に月桂樹の葉を50枚（独立運動が開始された年1950年にちなんで）を円状に結び、中央に名産のマホガニーの樹木、

その左右に黒人とムラート（混血人）がノコギリや斧を担いでいる姿を絵画的に描いている。また二人の足元には、「繁栄は木陰にあり」との国家の標語が書かれています。

カリブ海諸国13か国

カリブ海諸国13カ国は、中米諸国と違ってドミニカ共和国とハイチ共和国の2か国だけが国章を使用していますが、国名自体が馴染みのない小さな島の名前が多い為　まず場所の特定を先に書かせていただきました。

産業は、農業、漁業、観光業が主なもので、米国はじめ西側諸国との関係が深い地域です。

カリブ海上の島々（島・岩礁・サンゴ礁）が700以上あり、**大アンテイル諸島**（キューバ島・ジャマイカ島・イスパニョーラ島・プエルトリコ島など）は、比較的大きな島々で構成され、**小アンテイル諸島**（ドミニカ島・セントルシア島・セントビンセント島・トリニダード島など）は小さな島々でこの海域に13か国の独立国と　フランス　イギリス　米国　オランダ　それぞれの植民地から構成されます。

①バハマ国②キューバ共和国③ジャマイカ④ハイチ共和国⑤ドミニカ共和国⑥アンテグア・バーブーダ⑦セントキッツ・ネイビス連邦⑧ドミニカ国⑨セントルシア⑩セントビンセント・グレナデイーン諸島⑪グレナダ⑫バルバドス⑬トリニダード・トバゴ共和国。

カリブ海諸国の位置は地図帳でも特に分かりにくいので、おもな島、群島に分けて、そこに存在する国をまず説明したいと思います。

また、アフリカのコンゴ民主共和国とコンゴ共和国があるように、カリブ海には、ドミニカ共和国とドミニカ国と類似した名前の国家が存在します。

大アンテイル諸島にある国（5か国）

バハマ諸島の国＝バハマ　キューバ島＝キューバ共和国　ジャマイカ島＝ジャマイカ　イスパニョーラ島＝ハイチ共和国・ドミニカ共和国

【参考】この大アンテイル諸島の国々は五輪のメダル国として、ジャマイカ（142号）キューバ（142号）バハマ（143号）で掲載済みです。ハイチ（150号）は大阪なおみ選手に関連し、またプエルトリコは米国の準州ですが143号で参考記載を致しました。

小アンテイル諸島にある国（8か国）

（小アンテイル諸島は大西洋にありますが、カリブ海諸国に含まれる）北から南へ

①セントキッツ・ネービス　②アンテグア・バーブーダ　③ドミニカ国　④セントルシア　⑤バルバドス　⑥セントビンセント・グレナデイーン諸島　⑦グレナダ

⑧トリニダード・トバゴ共和国

カリブ海の植民地

米国領：ヴァージン諸島　プエルトリコ（米国領コモンウエルス）

英国領：アンギラ　モントセラト　ケイマン諸島　タークス・カイコス諸島

仏領　：サンマルタン　サンバルテルミー　グアドループ　マルチニーク

オランダ領：シント・ユースタテイウス島とサバ　アルバ　キュラソー　ボネール

民族・経済力

民族はアフリカ系、白人系、インド系、中国系カリブ人で、総人口444百万人といわれている。国の言語としては、スペイン語が8か国、英語が11か国ですが、原住民の言語を国語としている国はハイチ共和国のクレオール語（フランス語併用）だけで、大航海時代の名残りとしてフランス語、オランダ語を使用する地域もあります。

経済力は、他の大陸・地域と比べても大変低い。2016年のGDPで比較すると、①キューバの885億ドル②ドミニカ共和国680億ドル③グアテマラ628億ドル④コスタリカ526億ドル⑤パナマ490億ドル⑥エルサルバドル248億ドル⑦トリニダード・トバゴ222億ドル⑧ホンジュラス196億ドル⑨ジャマイカ133億ドル⑩バハマ104億ドルとなっています。（参考：日本48，169億ドル：スリランカ801億ドル：ネパール210億ドル）

しかしながら、一人当たりの国民所得となると、①バハマの26，490ドル②トリニダードトバゴ16，240ドル③セントキッツ・ネービス15，690ドル④バルバドス15，210ドル⑤アンテグア・バーブーダ13，560ドル⑥パナマ12，140ドル⑦コスタリカ10，840ドルが一万ドル以上の国々で、比較的白人種の移住者が多い国家が上位を占める。因みにキューバは7，709ドル：グアテマラは3，790ドル：ハイチは最貧国で780ドルです。

【大アンティル諸島】

①バハマ国（①英国から1973年独立②ナッソー③26，490ドル④39．9万人）

フロリダ半島の南東80㎞にある約700の島の岩礁からの国ですが　そのうち約30の島が居住島　最大の島はアンドロス島ですが　首都のナッソーはニュープロビデンス島にあります。

今年（2019年）バハマはハリケーン・ドリアンが直撃し　過去に経験したことがない壊滅的被害を受けま

した。我が国でも台風15号が関東地方を通過　特に千葉県に大きな被害を受けました。他人事ではなく　地球温暖化の影響で海水温度の上昇が続けば　ハリケーン台風　サイクロンによる被害は　恐ろしいほど拡大していく傾向にあります。

バハマの英文名はCOMMONWEALTH OF BAHAMASなので、英国の自治領とおもわれますが、1973年英国から独立しました。英連邦に加盟している為英文名をそのままにしているのかもしれない。政治体制は立憲君主制をとっています。混血及び黒人85％：白人12％。

経済は米国経済の影響により　カリブ諸国の中では最も豊かで安定した国家。観光収入（26億ドル）とバハマ船籍の優遇制度、金融サービスなどが収入源となっています。

国旗は、黒い三角旗と横帯の上からマリンブルー：黄色：マリンブルー

カリブ海と大西洋を、黄色は黄金の砂浜と豊かな太陽光線を、旗竿から黒い三角は海の資源と国民の意欲と革新的な気質を表すもの。

②キューバ共和国（①スペインから1902年独立②ハバナ③7，709ドル④1，148．9万人）

西インド諸島最大の島キューバ島とフベントゥ島や1500の小島からなる共産主義国家。

キューバ島の南東部（グアンタナモ）に米軍基地がある事は　日本ではあまり知られていません。キューバはまんじ142号の111ページで記載いたしましたが、米国オバマ大統領からトランプ大統領に変わり　米国との関係が再度悪化してきました。

「国旗は星条旗モデル　横ストライプで青3本白2本と旗竿から赤い三角地に白抜きの一つ星」

キューバの国旗から連想される事は米国の星条旗と似て「星とストライプ」が使われている事です。しかし、政治体制は「資本主義」と「共産主義」でいがみ合ってきた歴史が長いのに何故なのでしょう？

1776年に英国から独立した米国を称えた独立運動家のナルシソ・ロペスの意向によるもので　当時　キューバはスペインからの独立運動中で独立運動旗に使用し、独立後も米国と真逆の体制が続いているにもかかわらず「ラ・エストレーラ・ソリタリア（一つ星）」を国旗として使い続けています。

デザインは3本の青いストライプ（東部、中部、西部の軍管地区を表す）と2本のストライプ（独立の純粋性と高い理想）を表し、旗竿からの赤い三角形はフリーメーソンのシンボル（自由・平等・博愛）と革命で流した血、同胞愛を、白い一つ星は主権国家を意味しています。

③ジャマイカ（①英国から1962年独立②キングストン③4，630ドル④290万人）

キューバの南方145kmに位置する島国（まんじ142号の111ページに記載）

（島の中央にはブルーマウンテン（2，256m）がそびえ、世界で最もおいしいとされるコーヒーが山岳で育つ。その下部で作られたコーヒーはハイマウンテンと呼ばれ　更にその下はジャマイカという一般的なコーヒー豆として売られている。）

「国旗は黄色い✖十字の上下に黄緑　左右に黒」

国旗は英国スコットランドのセントアンドリュー旗（青地に白い✖十字）にならったもの。

当初、公募で選んだ国旗が他国との差別化が曖昧なことから、✖十字にし、色彩だけを採用したもの。✖十字は黄色（太陽の輝きと天然資源）左右の黒（アフリカ系黒人と過去の苦難）を、上下の黄緑（農業と希望）を意味している。なおアフリカのブルンジも✖十字ですが中央に丸がある為、完全な✖十字の国旗はジャマイカだけなのです。（ウサイン・ボルトを抱える陸上競技短距離強国の国旗です）

④ハイチ共和国（①フランスから1804年独立②ポルドープランス③780ドル④1，111．3万人）

ハイチはカリブ海に浮かぶイスパニョーラ島の西3分の1を占める国で、東側はドミニカ共和国と接する。海峡を隔てて西はキューバ　南西にジャマイカがある。まんじ150号で、女子テニスプレーヤー大坂なおみ選手の父親の国として記載いたしました。

ハイチ人の90％はアフリカ系。アメリカ大陸で1804年の独立は米国に次ぐもので、世界初の黒人による共和制国家でした。しかし、地震など大規模災害と復興の遅れと混乱により、アメリカ大陸の中で一人当たりのGDPが最も低く、国民の80％は劣悪な貧困状態に置かれている。

「国旗は紫がかった青と赤の横2色旗　中央に白抜きで国章」

国旗は　宗主国フランスの三色旗から青（少し紫がかった青）と赤の横がら2色旗で、青は黒人を赤は白人と黒人の混血ムラートを表し　中央には長方形で白抜きにし、国章を加えたものです。国章は緑の大地の中央に大王ヤシ、ヤシの上部にはニカラグアやエルサルバドルの国章にも使われているフランス革命ゆかりのフリギア帽が乗り　緑の大地左右に黄金の大砲、三本のハイチ国旗と銃剣、ラッパと斧、錨がシンメトリーで描かれています。

⑤ドミニカ共和国（①スペインから1844年独立②サントドミンゴ③6，390ドル④1，088万人）

カリブ海のイスパニョーラ島の東3分の2を占め　隣国最貧国のハイチとは異なりGDPも高い。そのため、在留邦人も771人と隣国ハイチ32人と比較しても多い。しかし島の歴史は複雑で　1679年にイスパニョーラ島の西側がフランス領（現在のハイチ）となり　東側がスペイン領（現在のドミニカ共和国）でした。1844年ドミニカはスペインから独立しましたが1861年スペインに再び併合され1865年に再び独立　1916年～1924年までは米国が占領地となり内戦などの経過をたどり現在のドミニカ共和国となった。

カリブの小アンティル諸島にある、ドミニカ国と区別するため、Republica Dominicana と共和国をつけている。

「国旗は白十字で四分割その中央に国章　旗竿上を青下を赤　右上を赤　下を青」

ドミニカ国旗は中央に白い十字架で四等分にし、旗竿側上部を、青色下部を赤色とし、右側の上部は赤、下は青とわかりやすいデザインとなっています。白十字の中央には、国旗と十字架、聖書を組み合わせた国章が描かれています。

【小アンティル諸島】

①アンテグア・バーブーダ（①英国から1981年独立②セントジョンズ③13，560ドル④10万人）

カリブ海東部のリーワード諸島に位置し　西にセントクリストファー・ネービス　南にフランス領のグアドループがある。アンテグア島　バーブーダ島　レドンド島の三つの島からなる国。

国旗は3個の三角形で構成（左右を赤い直角三角形中央は逆二等辺三角形の下から白・青・黒と太陽のデザイン）

国旗は国旗コンテスト600の中から選ばれたものだけに、非常に独創的で印象的な国旗です。三等分された左右の部分は赤色の直角三角形ですが　中央の逆三角形には下から白い砂浜の白、次に青色の海を、その上にバックとして黒を置き、黒の真ん中を黄色の太陽光線を放つ日の出の太陽が昇るデザインとなっています。色の意味としては、黒は住民の大半を占める住民を、白は白人と希望、青はカリブ海、赤は未来に向けた活力、黄色い太陽は自由と新しい時代を意味しています。

②セントキッツ・ネービス連邦（①英国から1983年独立②バセテール③15，690④46万人）

小アンティル諸島のうちリーワード諸島に位置し、セントキッツ島とネービス島からなる　南北アメリカでもっとも面積の小さな国家。

「国旗は右肩たすき掛け（黒地に黄色い縁取り、そこに白い2つ星）で二分し　旗竿側緑　反対側赤」

国旗はアフリカコンゴ共和国の黄色のたすき部分を両

端は黄色を残し黒に塗りつぶし、そこに白抜きで2島と希望と自由を意味する星を描いたもの。デザインは国内公募の258点の中から選ばれました。上部の三角緑は豊かな国土と大地を下部の赤は解放闘争、たすきの黒はアフリカ系黒人、黄色は太陽の光と富を意味しています。

③ドミニカ国（①英国から1978年独立②ロゾー③7，110ドル④7．4万人）

小アンティル諸島のウインドワード諸島の北端に位置する

「緑地を3色（黄・黒・白）の十字で分け中央の赤丸中に国鳥のインコ」

国旗は豊な森林の活力を意味する緑色を下地とし、三色（黄・黒・白の十字クロスで中央から四分し、更に、その中央に赤い日の丸を描き、その中に10の行政府を表す黄色で縁取りした緑の星を、国鳥である「ミカドボウシインコ」の周りにちりばめた複雑な多色の国旗です。国鳥のミカドボウシインコは全長45センチで、インコ科では最大の鳥でドミニカ国にしか生息していません。国旗の色で特筆すべきは三色十字の黄色は先住民インデオを、黒はアフリカ系黒人、白はヨーロッパ系白人を表しています。

④セントルシア（①英国から1979年独立②カストリーズ③8，400ドル④18万人）

東カリブ海の小アンティル諸島のうちウインドワード諸島に属する火山島国。双子の山（プシピトン山とグロピトン山）がある。

「国旗はライトブロー地の中央に底辺を同じにした黄色・黒・白の三角形」

セントルシアの国旗は上記ドミニカ国旗と比較しても、非常にスマートな国旗となっています。旗地をカリブ海のライトブルーで中央に底辺を同じにした手前から黄色い二等辺三角形を、その上に黒い二等辺三角形、それを縁取るように白い二等辺三角形を配したデザインです。このデザインも公募によるものですが、2002年から修正を加えて美しい国旗となりました。この国にはピトンという「双子型の火山」がそびえ、それをデザインしたものです。ライトブルーはカリブ海と大西洋そして忠誠心を、黄金は太陽の光と富を、黒は黒人、白は白人を表し、その協調によって国を発展する事を表しています。

⑤セントビンセント・グレナディーン諸島（①英国1979年独立②キングスタウン③6，770ドル④11万人）

小アンティル諸島のうちウインドワード諸島に位置するセントビンセント島とグレナディーン諸島からなる。

「縦柄で青1・黄2・緑1の三色旗の中央にシンプルな国章」

１４９８年コロンブスにより発見され、１７８３年から英国領となり１９７９年に独立した立憲君主制国家。

国旗は旗地を縦に旗竿側から４分の１をカリブの海と空を表すブルーに、中央の４分の２を太陽と砂浜を表し、残りの４分の１を豊かな農作物と民衆を表しています。黄色地の中央には、１９７９年に制定した「平和と正義」をあらわす複雑なパンの葉に描かれた国章をデフォルメし緑の菱形を三つＶの字に配置しました。Ｖは Vincent のＶと、三つの島を意味しています。

⑥グレナダ（①英国１９７４年独立②セントジョージズ③９，１００ドル④１０．８万人）

ウインドワード諸島のグレナダ島と若干の小島からなる　北東にはバルバドス　南東にはトリニダードトバゴ共和国がある。

国旗には特産品の香辛料ナツメグが一つ描かれている

グレナダ国旗はユニークなもので、絵画手法のパニシングポイントに中に黄色い星を描いた赤い円を、左右には緑を上下した黄色を、更に国旗の淵には赤い帯を巻き、その帯の上下の中には黄色い星を３個づつ配したユニークな国旗です。また左右シンメトリーであるはずが、最後にナツメグ（香辛料の実）を旗竿側の緑の部分に小さく描いています。

⑦バルバドス（①英国１９６６年独立②ブリッジタウン③１５，２１０ドル④２８．６万人）

セントビンセント島の東約１７０㎞に位置し　西にグレナダ　南西にトリニダードトバゴ共和国がある。

国旗は三等分柄のシンプルな国旗、左右が青（ウルトラマリン）、中央が黄色その中央にはギリシャ神話のポセイドンの鉾を黒で描いたものです。ポセイドンの鉾のマークは、イタリアの名車マセラッティーのフロントマークに使用されていますので車好きの方にはわかりやすいと思います。左右のウルトラマリンは大西洋とカリブ海、黄色は二つの大海に挟まれたバルバドス島の黄金色の砂浜を意味しています。中央の黒い三又の鉾は「国民による国民とともに、国民のため」という民主主義の理念を意味しているそうです。

⑦トリニダード・トバゴ共和国（①英国１９６２年独立②ポートオブスペイン③１６，２４０ドル④１３７万人）

トリニダート島とドバゴ島からなる　カリブ海の西インド諸島南端に位置し　ベネズエラのオリノコ川の河口に近い。

英国から独立したカリブ海最大の産油国。英米重視の

うえ中国、北朝鮮、韓国、キューバとも外交関係をもつ立憲共和国。

赤地に旗竿上部から黒い左肩下たすきを持つ国旗

国旗は赤を旗地にした「白い縁取りした黒のたすき」を旗竿側上部から左に掛けたデザインです。たすき掛けのデザインは新興国でよく見られますが、ブルネイを除くほとんどの国が旗竿側下から右に上がってゆくデザインを採用しています。トリニダード・トバゴとブルネイだけが右肩下がりで、更に色も黒と白で共通しています。

色には色々な意味を持つが、赤・黒・白は、現在・過去・未来や火・土・水などの三要素と国民のエネルギー活力や人種の平等性、国土の豊かさ、トリニダート島とトバゴ島の協力関係などを表しているそうです。

今回で「世界の国旗から学ぶ」シリーズは終わりをむかえます。今となって振り返ると、大国である米国　中国　ロシアなどの紹介が少ないスペースであったと反省しきりです。

米国でいえば、５０州からなる合衆国で、それぞれの州に州旗があり自治州として特色ある運営を行っています。小生が行ったことがある州は全体の五分の一程度、大都市のニューヨーク（８５３万人）ロスアンゼルス（３９７万人）シカゴ（２７０万人）には行きましたが、第４位のヒューストン（１６１万人）第５位フェニックス（１６１万人）には行っていません。

米国５０州にはそれぞれ州旗があり、カルフォーニア州はグリスビー（黒熊）アリゾナ州（旭日旗）、南部では昔の南軍旗もあります。

また　中国の国土は　ヨーロッパ全体の国土とほぼ同様の広さで　４直轄地市（北京・天津・上海・重慶）２２省　５自治区（ウイグル・内モンゴル・チベット・寧夏回族）２特別行政区（香港・マカオ）に分けられた広大な国家です。中国の旗の歴史は　ギリシャの「ベルギナの星」と同様　歴史と趣を持ち　三国志など覇権争いにはそれぞれの軍旗がはためいていました。我が国の戦国時代における旗印のもとは中国から由来したものと思われます。

しかし　当初は　東京五輪で　世界から集まってくる選手・観客の方々の「国旗ぐらいは知っておこう」との思いが目的であったので　現代における未知の国旗紹介を重点的にしまいました。そのため　アフリカの５４か国　中央アジアの５か国（ウズベキスタン・カザフスタン・タジキスタン・トルクメニスタン・キルギス）メコン５（タイ・ミャンマー・ラオス・カンボジア・ベトナム）などに力が入ってしまったかもしれません。いずれもこれからの経済発展が期待される地域です。

秋のお彼岸に　小生の菩提寺である日蓮宗本山、谷中

の瑞輪寺でオランダ人の学生に出会いました。

盛んに鐘楼の写真を写していたので　一連の挨拶をし、オランダ国旗が最も歴史が古い事や、フランス・ロシアの国旗の基になっている事などを話し会話がはずみました。小生は「東京都おもてなしボランテイアの一環」として本堂の中を案内したところ、大変喜んでいただきました。国旗を知る事は友好を結ぶ懸け橋になるようです。まして　小国の観光客が小旗をもって東京五輪に来た場合　「赤地に白い縁取りの黒い右たすき」の国旗をみて　「ようこそ」「トリニダート・ドバゴ」「カリブ海の国」と話すだけで「おもてなしの心」は十分伝わるのではないでしょうか。

最後に「国旗はカラー」が当たり前で、いくら脳科学者が、文章から国旗をイメージする事は脳の活性化に大変良いといわれても、国旗を「ややこしく文字で表現した」筆者のわがままにお付き合い頂きました皆様に心から感謝致いたします。

ありがとうございました。

【参考】

・国旗の表示で、フランスやオランダの国旗は、青：白：赤の三色旗ですが、他の文献では　オーストリアの国旗も、赤：白：赤の三色旗と呼ぶ事があります。しかし　小生は柄が三分割でも、色が二色旗であれば、二色旗と書かせて頂いています。

・今回掲載したデータは「２０１９年世界各国要覧と最新統計」（二宮書店発行）を使用しています。

参考文献

明石書店「カリブ海世界を知るための７０章」国本伊代

回想　ベルリン再訪（一九九一年八月）

―「ベルリンの壁」崩壊とドイツ再統一―

山本鎭雄

一　ベルリン都市生誕七五十年祭のライブ・コンサート（八七年六月）

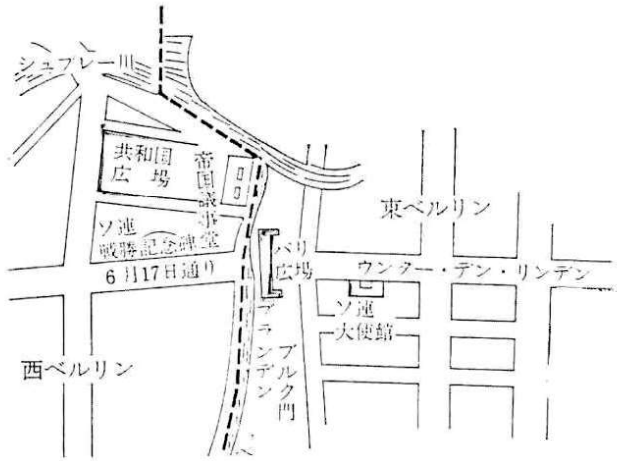
新聞を読み、テレビを見て、ベルリンの壁が崩壊して、もう三〇年も歳月が流れたのかと思うと感無量であるとともに、老いた我が身の来し方と行く末を自省させられた。八六年一〇月から一年間、私は家族とともに西ベルリンに「遊学」した。その西ベルリンは「赤い海に浮かぶ白い孤島」、東ドイツ（ドイツ人民共和国、以下、東独）にたいして「自由主義社会のショーウィンドー」と呼ばれ、東西ベルリンの壁は東西冷戦下のシンボルであった。

私のような外国人は、西ドイツ（ドイツ連邦共和国、以下、西独）の国民とは異なり、東ベルリンの検問所を自由に出入りすることが出来た。その際、入国料として一日分五マルク（西独のマルク）を支払い、さらに二五マルクを請求され、同額の東独マルクを受け取った。そのため、東ベルリンやその近郊を自由に見物することが出来た。ただ、警戒したのは東独の国家保安省のシュタージ（国家秘密警察）に尾行されていないか、どうかだった。

八六年一〇月、ベルリンは都市生誕七百五十年を迎え、西も東も国家を挙げて記念行事が挙行され、種々の行事や展示物を見物した。総じて、東ベルリンの展示は西ベルリンの展示よりもはるかに見劣りがした。とくに西ベルリンではヒトラー総統のナチス独裁政権のもとで盛大に七百年祭が挙行された。五〇年後の西ベルリンの展示では、ナチス時代の統制と弾圧を痛烈に批判し、工夫された展示では執拗にナチス批判を展示した。東ベルリンにはそのような展示はまったく見かけなかった。

七百五十年祭の一環として、ベルリンの壁に隣接する帝国議事堂の近くの共和国広場に特設ステージを設け、そこで世界的なロック・スターのデビット・ボウィのほ

か、組のロック・バンドが三夜連続のライブ・コンサートを行った。イギリス人のデビット・ボウィは西ベルリンの自由な雰囲気をこよなく愛し、「ベルリン三部作」のアルバムを制作した。また第一次世界大戦のベルリンを舞台にした映画『ジゴロ』に主演している（デビット・ボウイが逝去すると、ドイツ外務省は、「さよならボウイ、ベルリンの壁を崩してくれてありがとう」とツイートしたという）。



ブランデンブルグ門と共和国広場

このロック・コンサートは意外な政治的フェスティバルを結果した。ラジオやテレビの放送電波は国境やコンクリートの壁を越える。アメリカ駐留軍が管理するリアス・ラジオ放送（短波）は盛んにロック・コンサート開催のニュースを流した。それを聴取した東ベルリンの若いファン一〇〇〇名は、東ベルリン側の内壁の一番近くの「ウンター・デン・リンデン通り」（「菩提樹の下」の意味）に集まり、大音響のライブ・コンサートを聞こうとした（もっとも、スピーカー四台は初めから東ベルリン側に向けられていたという）。

新聞報道によれば、東ベルリンの人民警察が出動し、「ウンター・デン・リンデン通り」を封鎖して立ち入り禁止とし、三〇名を逮捕した。彼ら群衆は「壁をどけろ」、「我々に自由を与えよ」と叫び、革命歌「インターナショナル」を歌った。また彼らの一部は西ドイツの報道関係者のマイクとカメラに向かって、「壁をどけろ」と叫び、さらに大通りに面したソ連大使館に向かって「ゴルビー、ゴルビー（ゴルバチョフ）」（ソ連共産党中央委員会書記長）と叫んだ。西ベルリンの大衆新聞はこの突発的事件を東ベルリンの反ソ暴動（五三年六月）以来の大事件と誇張して報じた。

東ベルリンの若いロック・ファンの騒動と人民警察の応酬について、東ドイツ外務省は「怪しげな政治目的のために、若者のロック音楽への興味を悪用し、挑発した」

と批判した。それにたいして、西ベルリン市参事会のスポークスマンは、東ベルリンのロック・ファンの騒動は「音楽の人間性と壁の非人間性」を明らかにし、「ロック音楽は壁で閉じ込めることも、遮ることは出来ない」と反論した。私はロック・コンサートが政治的な事件となり、東西冷戦下の最前線都市ベルリンの過酷な現実を改めて認識した。

二　東独市民の大量脱出と民主化要求、その結果

私は帰朝して、新聞を読み、テレビを見ると、東独市民は同じ東欧社会主義國のハンガリーの国境に殺到した。ハンガリーは東独市民のために国境ゲートや柵を開いた。彼らは隣国のオーストリアを経由して西独へ大挙して亡命した。また東独の商工業都市ライプツィヒの月曜デモが最も有名であるが、東独各地の市民は教会堂に集まり、東独政府に民主化と旅行の自由を要求し、大規模な集会とデモを敢行した。さらに大規模なデモ隊は東ベルリンにある人民議会で政府に抗議した。

ソ連・東欧社会主義圏の最高の権力者のソ連の共産党書記長ゴルバチョフは、グラスノスチ（情報公開）、ペレストロイカ（立て直し）、新思考外交の路線を提唱した。ところが、経済的に東欧社会主義諸国のなかで「優等生」を自負する東独の国家評議会議長のホーネッカーは、思想的には教条主義のマルクス・レーニン主義を信奉し、あくまでも独裁主義と官僚統制を貫徹しようとした。しかし、国民は各地で民主化と自由化を要求する反政府デモがエスカレートした。さらに共産党幹部も一斉にホーネッカーに辞任を要求するようになった。

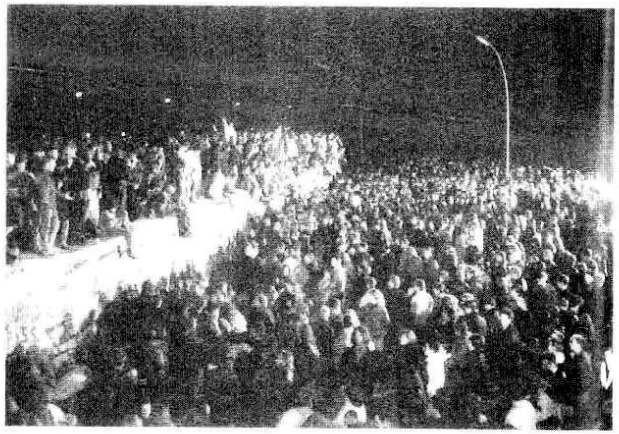
八九年一〇月七日、東独はソ連・東欧諸国の首脳を招待して、建国四〇年周年記念式典を実施した。東独政府に招かれたゴルバチョフはハグをして耳元でホーネッカーに「遅れて来る者は滅びる」と忠告したが、その真意を出来ないホーネッカーに愛想が尽き、見放した。その一〇日後、ホーネッカーは政治局会議で政治局員らの解職動議に賛成し、解任が決定された。

その後、東独政府幹部の曖昧な方針と共通理解の欠如、さらに国境検問所の国境警備隊の現場指揮官の独断が東西ベルリンを遮断する東ベルリンの検問所のゲートが開き、東ベルリンの市民はおずおずと西ベルリンの地を踏んだ。西ベルリン市民は短波放送で検問所の解放というニュースを聞き、大挙して検問所に殺到し、拍手と歓声で迎え、持参した花を贈り、熱烈大歓迎したという。

西ベルリンの若者はコンクリートの壁に登り、壁の天辺でベルリンの壁の崩壊にたいして、歓喜をもって祝福した。この壁は東ベルリンの地域内に敷設されていたのである。だから、彼ら若者は国境を不法に侵入したことになるが、東独の国境警備兵や東ベルリン当局者は彼らに警告し、行為を取り締まることはせず、東ドイツは国

家としていわばアナーキーな状態になった。官僚制国家は一時的にせよ、完全に機能マヒし、さらに国家として自壊した。

「ベルリンの壁」が崩壊し、その翌年の九〇年一〇月に正式に西独は東独を編入し、東部五州と都市州ベルリンを加盟させ、ドイツ再統一が実現し、その結果、東西ドイツの分断は終了した。私はドイツを含めて、ソ連・東欧の近来稀にみる急激、かつ大規模な歴史上の変革をまったく予想さえしていなかった。だが、資本主義の西独が社会主義の東独を編入したことによって、一気に経済的格差が解消したのではない。



ベルリンの壁（1989年11月10日、西側から）

私はドイツ社会学と都市社会学の研究のために西ベルリンに「遊学」した。帰国後の四年間、ベルリンの壁の崩壊、ドイツ再統一、ドイツ連邦議会におけるベルリンの首都移転という国家レベルで急ピッチに変革した。私はこのような一連の大変革に驚愕し、九一年八月に三週間の予定でベルリンを来訪した。

三　過渡期のドイツ東部地域（旧東独と旧東ベルリン）

四年前、私は西ベルリンで東独の国営テレビを良く見たものである。テレビでは盛んに西側世界の失業を「資本主義病」と宣伝し、週日に親子づれが商店街で買物する風景を放映し、彼らは失業中の家族だと説明し、しかもまったく失業者のいない社会主義の経済政策を説明していた。ところが、東独の国営企業は労働生産性を無視して過剰労働力を抱えていた。さらに生産装置は老朽化し、東独政府は過剰債務を抱えていた。市場経済下の国営企業の多くは、市場競争力を欠いていたため、そのまま民営化は困難であった。

ドイツ信託公社は旧東独の旧国営企業のスクラップ・アンド・ビルドを精査した結果、大量の失業者を排出した。市場経済に転換した旧国営企業をはじめ、企業は「資本主義の重病」に見舞われ、当分の間は回復する見込みはないとされた。旧東独市民は旧西独市民と同じく、物質的豊かさ、精神と移動の自由を期待して、東独国家を廃絶した。ところが、到来した現実は、皮肉にも失業と貧困という資本主義社会の「二重の自由」であり、「相対的窮乏化」である。

私はベルリンを再訪し、ドイツ東部のドイツとポーランドの国境のオーデル（川）・ナイセ（川）線を見物しようと、フランクフルト・アン・オーデルへ行った。残念ながら、その都市中心部はポーランド領に属しているため、見物出来なかった。私はオーデル川のフェンスに寄りかかっていると、職業専門学校の教員が声をかけてくれた。目前の朽ちかけた建築物を指して、「あれはナチス時代にユダヤ人の強制収容所だった」と説明を受けた。そのあと、自らの賃金は西独の同職の教員の平均賃金の六〇パーセントだと愚痴を聞かされた。同職の賃金の待遇は同額だと思っていたが、このような賃金格差には驚いた。

四　東西ドイツの克服されざる格差社会

東部地域の市民が直面したのが、このような過渡期の経済的困難に加え、アイデンティティーの喪失と心理的な先行き不安である。このようなクライストに乗じて、ネオナチの勢力が旧東独地域の若者を中心、エルベ川とオーデル川の流域一帯に浸透した。ドイツ再統一直前、ドレスデンも「民主化運動の首都」と言われたが、再統一後はネオナチの拠点となり、まさに不毛なパラドックスと言うべきであろう。

ヒトラーのナチスは国家主義と人種主義を信条とした。私は三週間のベルリン滞在中、外国人（難民）が人種的理由から集団で暴力を加えられたことを新聞で読んだことがある。しかもベルリンでは建物の壁、電車の外板、電柱などに良く見かけたのが、「外国人出て行け！」、「鉤十字！」のマークの落書きだった。それに対抗するかのように、「ネオナチ、失せろ！」、「ファシストに死を！」という落書きも見かけた。左右の過激派の角逐であろうか。

なぜ、東部地域の若者を中心にネオナチの勢力が急速に台頭したのであろうか。第一に、この地域では低賃金、失業や倒産などが蔓延した。一部の若者は経済的・精神的な不満と不安を解消するために、国家主義と人種主義を信奉したのであろう。第二に、これまで旧東独では、「社会主義的全体主義の抑圧」から解放され、それが「振り子の振動のように、左から右に激しく運動した」（ドイツ内務大臣・ヴォルフガング・ショイブレ）。こうしてこの地域ではとくに若者層にネオナチが浸透する基盤を形成したのであろう。第三に、彼らの活動家は頭部をスキンヘッドにして、むやみに「暴れ回る」ことに同調

することがまた彼らのアイデンティティーであろう。しかも地方議会選挙では共和党やドイツ民主同盟など極右政党が進出している。

私は路上で、電車のなかで、ロカール（居酒屋）で小耳にした言葉がヴェッシー Wessi とオッシー Ossi だった。早速、独和辞典を引いたが、該当する単語はなかった。新聞を読み、次のように書かれていた。

一九八九年一一月九日の「ベルリンの壁」崩壊では、たしかにドイツ人には相互の共感と共感感情があったが、ドイツ再統一後の今日では、「よりよいヴェッシー」と「嘆きのオッシー」という、決まり文句で表現される反感があった。

そこで理解出来したのは、ヴェッシーは西部住民、オッシーは東部住民を意味する。同じドイツ住民でも経済的・精神的には「異質な住民」だという生活上の実感から生じた。しかも東部住民は第二等の存在だとして「二流国民」とされ、両者の経済格差は歴然としていた。だが、そのことは「賢いヴェッシー」にたいして「愚かなオッシー」を決して意味しないのである（西部と東部の女性の間では「成功した姉と、愚かな妹」という図式で認識されていたようである）。

だが、総じて西部住民の「豊かなヴェッシー」は東部地域の経済的格差是正のために、所得税、復興税など各種の税金を増額納付することになり、その結果はガソリン価格、しかも生鮮野菜、ジャガイモ、果実などの消費者物価が上昇し、再統一のために「高いコスト」を支払うようになった。ドイツ再統一して二〇年を経過した今も、依然としてドイツの西部と東部の間には経済的格差が歴然としている。

五　ブランデンブルグ門二〇〇年の記念祭

九一年七月末、東ベルリン郊外（旧東独地域）にあるシェーネフェルト国際空港に着いた。早速タクシーに乗り、運転手からここに「ベルリンの壁」があったと言われなかったら、気付かなかった。「壁」は内壁と外壁で構築され、二重の壁の間にアスファルトの舗装道路があって、おそらく国境警備兵が装甲車に乗って監視していたであろう。今や、壁は跡形もなく撤去され、その舗装道路は遊歩道となり、子供たちは母親に見守られて自転車に乗って遊んでいた。当たり前とはいえ、平和な微笑ましい光景であった。

ベルリンの中心部にあるブランデンブルグ門は、東西ベルリン分断を象徴し、しかも東西ヨーロッパの戦争と平和の歴史を象徴した。「ベルリンの壁」が構築されて以来、東西冷戦の象徴でもあった。古代ギリシアのアテネのアクロポリス神殿の一部を模倣し、石柱に支えられた列柱門と、その門上にはギリシア神話「平和」の女神「エイレーネー」がクアドリガ（四頭立ての二輪馬車）で疾駆するブロンズ製の金属像からなる。この門は二〇〇年前の一九七一年八月に落成し、市民はこの門を誇りにし、自由に往来したであろう。

ブランデンブルグ門の落成後、ナポレオン一世が率いるフランス軍はプロイセン軍を撃破し、ベルリンに入城した。ナポレオン軍は女神像を戦利品としてパリに持ち帰った。その後、ドイツ統一をめざすプロイセン軍はナポレオン三世に勝利し（普仏戦争）、パリから取り返した女神像をブランデンブルグ門の門上に設置した。女神は「平和の女神」から鉄十字勲章とプロイセンの鷲の勲章を手にし、「勝利の女神」ヴィクトリアに変わり、戦勝のシンボルとなった。

第二次世界大戦末期、ベルリン大空襲で直撃弾が命中し、「勝利の女神」像は破壊され、ナチス第三帝国の常勝神話も崩壊した（戦後、東ドイツ政府は女神像を修復した。どのように改造したのか、その詳細はここでは省略する）。私がベルリンを再訪した八月六日、ブランデンブルグ門完成二〇〇年にあたる。その夜、記念行事としてベルリン放送交響楽団が高らかに演奏し、ブランデンブルグ門を、一〇〇基の照明でライト・アップし、盛大に花火を打ち上げた。その光景に観衆や旅行者は拍手喝采をした。私はこのブランデンブルグ門が東西緊張のシンボルから東西平和のシンボル、さらに「戦勝の門」、「分断の門」ではなく、永遠に「平和の門」であってほしいと心から念願した。

六　「ベルリンの壁」の犠牲者

私は八六年一〇月からベルリンに滞在した。深夜、鋭い銃声で目を覚ましたことがある。その日の朝刊の新聞には、ベルリンの壁に阻まれた犠牲者が銃殺されたと書かれていた。ヴィム・ヴェンダース監督作品の映画「ベルリン・天使の詩」（八九年九月公開、カンヌ国際映画祭、監督賞など受賞多数）のサーカスの舞姫マリオンは、「ベルリンはどこへ行っても壁の街」と話した。誤解されやすいが、東西ベルリンには頑丈なコンクリート製の壁があった。今から三〇年前の事である。

当然、西ベルリンは「陸の孤島」と比喩されていたように、東西ベルリンのコンクリート製の「壁」の他、西独に属する西ベルリンと東独国家の間には国境であり、そこには「壁」が建造されていた。ただ、河川（沼地を含む）には「壁」を建造することは出来ない。その代わり、西ベルリン側に国境を明らかにする警告板があった。西ベルリン側の国境に沿って歩くと、各所に十字架が記された様々な墓標が散見された。

それは西ベルリンに接する外側の壁に阻まれて国境警備兵に射殺された墓標だった。これらの墓標のなかにはドイツ語で umbekannt（氏名、年齢不詳）と記載されていた。その当時、東ベルリンから西ベルリンへ逃亡し

ようとして、「ベルリンの壁」で七九名、一〇八名が東独と西ベルリンの国境で落命し、さらに東独政府の報告では、逃亡しようとして東ドイツ人民軍兵士も落命したという。

「ベルリンの壁」崩壊以前、最後の犠牲者は東ベルリンの二〇歳の青年であった。八九年二月、彼は一人の友人を誘い、二人で壁を越えて逃亡しようとした。西側の壁を越えようとしたが、二人は国境警備兵に発見され、ともに銃撃されて重傷を負った。青年一人は友人を肩車して壁を乗り越えさせることにした。重傷の友人は何とかして壁を乗り越えることに成功し、西ベルリンで治療を受け、一命を取りとめることが出来た。肩車した青年は落命した。この事件は壁崩壊の八カ月前の悲劇である。

七　「ベルリンの壁」崩壊とドイツ再統一の結果

六一年八月の深夜、東独政府は東西ベルリンの国境線に有刺鉄線で「ベルリンの壁」を構築し、その後、「近代化」と称して高さ四メートルのコンクリート製の内壁と外壁で強化した。西ベルリン側のポツダム広場の高い見晴台から東ベルリンの荒地のポツダム広場一帯を眺めると、内壁と外壁の中間にアスファルトの舗装道路、二階建ての二六五棟の監視塔や装甲車、散弾銃を肩にかけた国境警備兵を眺望することが出来た。

なぜ、東独政府は「ベルリンの壁」を構築したのであろうか。東独政府は壁の構築は西側世界のファッシストの策動から平和と社会主義を防衛するために反ファッショの「守護の壁」と正当化した。八九年一一月、「ベルリンの壁」が崩壊し、ドイツが再統一した。歴史的に明らかになったことは、「守護」されたのは東独国民から拒否された共産主義「東独国家」の統治者だった。

しかし、東独の支配者はベルリンの壁構築以前、一七〇万人に達するほどの大量の逃亡者に苦慮していた。とりわけ、共産主義体制下の東独は基本的に生産、流通、分配の中央集権型の計画経済政策をソ連にならい国是とした。ところが、東独からの大量の「労働力」流失、熟練技術者や若者などの突然の欠員は計画経済政策の実施を困難した。もっとも、戦後の経済復興を急ぐ西独は労働力が不足していたので、東独からの労働力の増加を大歓迎した。

すでに触れたように、東独政府は突如「ベルリンの壁」を構築し、警備兵を常駐させた。東独政府は最初に暫定的な有刺鉄線で急造の内壁と外壁を設置し、東独からの逃亡を防止しようとした。東ベルリンの国境に検問所が設置され、国民の逃亡を厳重に防止し、労働力の流失を阻止した。戦後の日本は高度経済成長の時代に「金の卵」と言われ、農村からの中学・高校の新規学卒者の集団就職により、若年労働者の填補した点で、西独の労働力の補充と異なる。

私は「ベルリンの壁」が撤去され、自由に往来出来るようになった九一年七月、ベルリンを再訪した。ブランデンブルグ門はもとより、ポツダム広場を見物した。ベルリンを始点とする街道の終点がブランデンブルグ州の州都ポツダムである。それにちなんで名付けられたのが、その始点が広大なポツダム広場である。大戦末期、空襲で建物の多くは破壊され、戦後は空地のまま東ベルリンに属し、西ベルリン側から見ると、空地の向こうに国境警備兵と装甲車が待機していた。さらにその遠くには新築の高層集団住宅が見られた。

九一年八月、ベルリンを再訪すると、ポツダム広場はすでに区画整理され、荒地を造成されたらしく、高層ビルの建築中で何台ものクレーンが起動していた。ソニーセンター（ビル）が建設中だったが、のちに完成するとドーム状の屋根に富士山がガラスと鉄柱で建造され、LEDで照明された夜景は秀麗富士を再現し、内部にはソニー・ヨーロッパ本社、オフィスビル、商業施設、レストランなどからなる都市複合施設である。

さらにブランデンブルグ門を見物した。すでに「ベルリンの壁」はすべて撤去され、門の下は自由に往来出来るようになった。その夜はブランデンブルグ門落成二〇〇年にあたり、盛大に記念祭が挙行された。パリ広場とともにその周辺には、ポルトガル人やトルコ人が観光客相手に露店で、コンクリート壁の破片、旧東独兵やソ連兵の帽子、軍服、勲章、腕章などを売っていた。

ところが、ブランデンブルグ門は自動車やバスが排出する有害ガスのために、劣化するとの理由で、車は門の下を通行することが禁止されて、迂回した。そのため、かえって周辺の道路は渋滞し、ベルリン市内でも有数なネックとなっていた。西ベルリンに滞在した四・五年前とは実に信じ難い情景である。しかも、ドイツ再統一のシンボルとしてドイツの2ユーロ記念硬貨の裏面にはブランデンブルグ門が彫られているという。

私は東西冷戦下の現代史を象徴した「ベルリイの壁」解体、その後のドイツ再統一、首都ベルリンの実情を見物したいと絶えず思っていたが、もはや高齢化し、体力も気力も衰え、断腸の思いでベルリン見物を断念せざるを得なかった。

二〇一九年一一月二五日　脱稿

内田の国の諏訪信仰物語

横山正義

諏訪大社は長野県の中央、諏訪湖の畔にあり、諏訪湖は天竜川の水源です。天竜川は佐久間ダムを通り、静岡県西部、遠江を流れます。

内田の諏訪神社は応声教院の守護神として建立されています。応声教院の隣接する裏山にあります。現在は菊川市内田の杉森という集落で、「よりざね」「谷田」「辻」などという地名があります。大い御門頼実ゆかりの地か?。

杉森の東南の小字に現在、月岡という集落があります。応声教院は南に十キロほどの所にある遠州桜が池の奥の院です。桜が池にある池宮神社に瀬織津比命（せおりつひめのみこと、事代主命（ことしろぬしのみこと）、恵比寿神。商売繁盛、福の神）建御名方命（たけみなかたのみこと、信州諏訪大社に奉斎。風水の神、生活守護の神）が祀られています。

一、諏訪神社の信仰は龍蛇です。

「中世諏訪の狩猟神事―稲と鹿・葦とススキ―」永松敦によれば蛇が生餌を必要とするところから、狩猟の神です。勘文に「業尽有生、放不生、故宿人身、同承佛菓」寿命の尽きた生き物きものは放してやっても生きられないから、いっそ人の腹の中に入って、その功徳で成仏するのが良いということです。狩猟を正当化する教えです。（殺生功徳論）

狩猟神事の行われた場所の特定は、門外漢の著者の仮説です。

内田杉森の小字月岡にその昔、昭和八年辛兎二月吉日（一七七一）、以前、間（かん）と云われ、日は肉月です。丘の上で見晴らしがすばらしく、巻狩りの地、富士、粟が嶽、狩猟の神・杉森諏訪神社などに狩猟で得た動物の肉を神に捧げた場所ではないのだろうか。

現在、南に、約二百メートルほどのところにあった稲荷神社が移築され祀られています。

当地の平尾八幡宮神官・国学者・歌人、栗田土満元文二年～文化八年（一七三七～一八一一）の歌

「鹿」

＊秋さればをじか妻こふ阿波々山あはでやぬらむ長き此の夜を

＊遠方のしげき葉山のいほぎりややほ霧がくりさを鹿なくも

現在、当地で鹿を見られないが、昔、鹿がが生存したのです。

中世諏訪狩猟神事は年四回

①御狩押立神事　五月二～四日
②御作田御狩　六月二六～二九日
③御射山御狩　七月二六～二八日
④秋尾御狩　九月下

農耕のサイクルと云われています。

明治時代のはじめ、現在の稲荷神社の近辺は静岡県初代県知事関口隆吉（せきぐちたかよし）の屋敷があった場所です。そして桜が池のところにある池宮神社の神主佐倉豊麿が関口隆吉の祖父です。応声教院の別院阿闍梨堂は桜が池・池宮神社門前にあります。

二、諏訪神社は風の神、水の神でもありました。

桜が池の水は信州諏訪湖と底続きと云う。

神事、「御櫃（おひつ）納めの神事」が秋お彼岸の御中日に行われ、後日御櫃が諏訪湖に浮くという伝承があります。

三、そして祖先崇拝の神でありました。

＊皇円阿闍梨（日本歴史書扶桑略記全三十巻を著す）

近衛天皇御世、久寿二年（一一五五年）七月桜が池に大蛇に化身し入定したのは、釈迦入滅後五十六億七千万年後に出現すると伝えられる弥勒菩薩の龍華会にあい、仏道を極め、衆生の悩みを済度せんとの悲願からです。

＊法然（浄土宗開祖）

承安五年（一一七五年）浄土宗を開く。治承元年（一一七七年）法然上人、桜が池を訪れ、師と法話し、皇円阿闍梨の供養する。

＊熊谷直実（源平合戦の武将、平敦盛を討つ）

桜が池に来て、草庵を結び、皇円の供養をする。

この物語がどうして作られたのだろうか。

応声教院の所在地、内田が慈円青蓮院の荘園であったからであろう。

青蓮院門主の慈円が一芸あるものは下部（しもべ）までも召抱えたという記事が徒然草（第二百二十六段）にあります。

仏教浄土宗の宣伝のため、唱導安居院の活躍がありました。

安居院の唱導家は通憲（信西入道）―澄憲―聖覚と

奥の院と呼ばれるゆえんです。

以後、名僧感西上人、親鸞聖人、熊谷蓮生坊等が次々と訪れ、信仰の霊地であり、東海の名刹です。

『片葉の葦』は遠州七不思議のひとつです。

葦の芯は注連縄と同じで蛇であり、葉は紙垂れです。寺・神の守護をするのです。応声教院の前方は、湿地帯で葦が生い茂っていたのでしょう。

「中世諏訪狩猟神事―葦とススキ―」永松　敦によれば諏訪信仰において、葦とススキは貴重な素材とある。

『伝承』として、皇円阿闍梨、法然、親鸞聖人のお手植えの稚木の古木。熊谷蓮生坊、袈裟掛けの松などがあります。

『参考文献』

桜が池の伝説（皇円阿闍梨上人の櫻が池御入定（一一六九年）後八五〇年を奉祝して記す）
発行者　佐倉東武
発行所　櫻が池池宮神社社務所

応声教院案内
五十五代住職　浅井説音

諏訪信仰の歴史と伝承　二本松康宏編　三弥井書店

神道集　貴志正造　平凡社

国史大事典　発行者吉川圭三　吉川弘文館

方丈記・徒然草等（日本古典文学全集二十七）
校注・訳者　神田秀夫、永積安明、安良岡康作
発行所　小学館

続き、法然と聖覚は青蓮院慈円の下で旧知の仲であったのです。

『神道集』によれば、諏訪社の神主は滋賀県甲賀出であります。

安居院・聖覚は応声院、桜が池、池宮神社の関係をもとに物語を製作したのであろう。

この物語は応声院と青蓮院との関係を物語るものではないか。

『応声教院案内パンフレット』より

山緒

当山は、斉衡二年（八五五）千百余年前、比叡山の名僧慈覚大師が、文徳天皇（五十五代）の勅願所として、天台宗天岳院を創建す。

その後嘉応元年（一一六九）皇円阿闍梨が衆生済度のため、弥勒の出世を待ち、教を受けんがため、桜が池に大蛇とならんとの大願をたて、当池下検分の折当院を宿とされた、宿縁の寺です。

後承安五年阿闍梨の弟子、法然が浄土宗を開宗され、恩師皇円を慕い、桜が池を訪れた帰り途、当山に立ち寄られ、三枚半のうろこを始め、数々の宝物を残され、当山裏山山頂にて七日七夜の念仏を唱え、師皇円の冥福を祈られたのです。東海念仏初開道場を開かれ、時に、当山ご本尊に歯吹如来を安置され天台宗を浄土宗に天岳岳を応声教と改名され、以後皇円阿じゃ梨菩提所、桜が池

神武創業と物語日本史

浅野博文

一、清純な感激

一般に洋の東西の歴史を繙けば、その（文明）国の文化を構成する要素とは、「言語・宗教・科学」に存することは明らかである。

聖書にも「太初に言葉あり、言語は神なりき」とある様に、今日の欧米社会を中心に、世界的言語の代表格とされる英語とは、彼の社会に於ける文化の要素にして基礎であるといふ点は疑ひない。

加へて、欧米国家の大多数は、キリスト教社会であり、英語とは世界各国に布教を勧める上での、最も有益な言語として主要な地位を占めてきた。彼の近代印刷術の祖とされるグーテンベルクが最初に印刷した本格的な書物は聖書であつたが、その原本の所蔵国も、アメリカ・イギリスの英語国が最も多い。

言語と宗教が密接な関係にあることを欧米の歴史は示してゐる。

そして、文明社会に於ける科学の誕生とは、言語と宗教を基盤としてゐる。それは、古代ギリシアの偉大なる哲学者は、同時に偉大なる政治家や科学者であつた点や近代科学の先駆者であるガリレイやニュートン等の科学者が、他の誰よりもバイブルを尊び、神の実在を意識してゐた敬虔なる信徒であつた事実からも分かる。

一体、中世のルネッサンス期を皮切りに、大航海時代に獲得した知識や見聞は、西洋的理性の著しい発達を促し、信仰の世界に於けるキリスト教の神を観念的哲学の次元に転化させ、地球上の自然万物の生みの親こそが、キリスト教の神（god）であり、自らは神の使途であるとの認識を深めさせた。

即ち、神が創造した自然万物には普遍的な原理法則がある。それを極める唯一の方法が科学であり、神に近づく最良の手段にして、キリスト教徒としての正しい道であると信じ、その発見に邁進したのである。

現代とは理性全盛の時代である。ありのままを得やうとするだけの世の潮流からも、神の地位は完全に科学にとつて変はられたとする原理主義的見方が、先鋭化する物質文明が内包する合理主義や経済依存の姿として顕著に現れてゐる。

しかし、ヨーロッパの産業革命前夜、驚異的な集中力と探究心を以て自然万物と対峙した科学者達は、仮説と実験の反復の中で発見することになる原理法則を通じて、神の実在を感得した。

生産の向上飛躍、物質生活の進化発展、それに伴ひ新たに生み出された国家社会の組織や制度が世界に与へた影響、人間の認識と活動の場を根底より変化させたといふ意味に於いて、また連続性といふ部分で、現代社会に直接関係の深い点にあつては、実に歴史的に嚆矢であつた。

闇に包まれてゐた自然の法則。神の領域を求めて、持てる全ての才能を駆使し、遂に解明に至つた時、心魂を揺さぶる深遠にして荘厳なる精神的な感動は、神との一体感に浸ることを求めた彼らの心情を大いに満足させたのである。

古昔より西洋人にとりての聖書とは、宗教的といふ表現に加へて、物語的といふ形容を以て著されなければ、その精神生活に於いては不十分であつた。

彼の古雅にして荘重なる名文は、技術の華やかな商業化や経済活動への貢献ばかりに囚われ、「真」（ありのまま）を得やうとするだけの現代にあつては理解され難いのかもしれないが、近代以前の人には決してさうではなかつた。

聖書には、常に強い力をもつて自らの胸にせまり、心から突き動かして来る様な清純な感激を、神との一体感に浸る中で彼らは常に求め、その理想を現出して来たのであつた。

二、日本思想史の起点

昔時のパスカルは、人間とは正しく「考へる葦」であると賛賞した。考へるとは思想することである。「言語・宗教・科学」、その国の文化を構成する要素とは、それぞれが民族の思想史に他ならない。

小生の高校時代、当時クラス担任の物理が専門の先生に「国語・数学・英語」が、どうして重要とされるのかを尋ねたことがあつた。

先生は勉強とは全て（先人の）歴史であり思想であると考へれば楽しいと話された。但し（社会の）現状を正しく認識する上での土台となる科目（国語・数学・英語）は、その奥深さを実感するには、時間と忍耐力がかかることを付言された（その様な科目が実社会にて役に立たないと言ふ風説は、浅い認識から来る俗論として非難してゐた）。

今日の高度に発達した文明社会に生起する現実問題は複雑かつ重層的である。それを解決する上での現状認識力を涵養する最も重要な期間こそが、高校三年間なのであらう。

現状認識が周到かつ精緻である程、現実社会に於ける専門分野の位置付けは正確なものとなり、その問題解決する上での判断も正鵠を射たものとなるに違ひない。

ただ残念ながら、現代社会とは本来のあるべき姿（本質）を見失ひ、商用を目的とする各分野の華やか展開にこそ真実があるとし、聖も俗も還元主義といふ美名の前に屈してゐるかの如くである。

寺院の永代供養はその一つなのかもしれない。永代供養そのものを否定してゐるのではない。それ自体は尊いのであるが、問題は商売を全面的に押し出して積極的に奨めてゐる点である。本来の墓守であるべき者への信頼が無く、その義務を安易に放棄させるかの如き態度は、永代供養の本質から逸脱する。

先祖累代の墓は、その家の血が最も濃い者である子や孫が直接墓守をするのが道理である。菅公を祭る大宰府天満宮に観られる様に、国家の継承発展に貢献をなした歴史上の忠臣義士を祭る神社を、代々その子孫や縁者が神職として奉仕されて来たのは、その証左である。

それは子孫の義務であり、礼儀であり、古今東西の普遍的真理である。永代供養とは、ただでさえ希薄になつてゐる親子の関係を無視して「個人の御霊の救済」と偽り、道義の根本を完全に絶ち切るものにしか映らない。そもそも、文明を継承発展させる力とは人間であり、人間社会に於ける「孝」は百行の本である。『父母恩重経』を仏教者が知らないはずが無いであらう。

近年の、仏教教団を偽称したオウム真理教の事件には、秀才の誉れ高い優等生が教団の枢要を占めて居たことは世間を驚愕させ、学校の勉強の無味乾燥を強烈に印象付けた。

しかし、「禍福は人が招くものなり」の古人の至言にある如く、先人の歴史であり思想としての「国語・数学・英語」等の科目の本質に鑑みた時、それはやはり「高き精神作用の所産であり、人格あつて初めて存在し、自覚あつて初めて生ずるもの」（『国史学の骨髄』）とする尊い点は忘れてはならない。

加へて、机上のものだけに限らない人間の学びとは、先人の思想的苦闘の跡に対する同情心こそが基本である。その上で、優れた能力を持つた者には、その恩を知り徳に報いる責務がある。

改めて、個々の持つ知識や才能を考へた時、自己責任だけでは済まされない国の文教政策の誤りや、国益といふ点から観た損失の深刻さは計り知れない。

菅ての『教育勅語』とは、西洋の文物を採り入れるに熱中して、新奇を求め、功利を焦り、自分の権利ばかりを主張させる欧米流知育教育の弊害部分（侵略戦争や植民地政策はその発露）を御軫念あそばされた明治天皇の御諭しであつたが、今日その教えが公に於いて生きて居ないその将来とは、衰亡しかないのであらう。

先人の歴史や思想を学ぶ目的とは、精神の復活にある。現代人が、そこに生命を与へて、その殿堂に迎ふるものは認識の力以外にない。

昔日の西洋の科学者が、自然の原理を解明し、近代科学の扉を開いたのも、長年にわたり先祖の西洋人が信奉して来た、聖書に対する認識の力（清純な感激）であつた点は疑ふ余地がない。

その様に考へた時、日本民族の継承発展に於ける思想史の起点とは、必ず古典（古事記・日本書紀）に求めなければならない。

何故なら、神道が日本の国家原理であり、立国の基礎であるからだ。日本歴史は、外来文化受容の中で絶えず神道の本質を確認し、同時に神道を軸として、それ以上のものを現出して来たのである。言語の巣窟、往古の旧事、我が記紀とは正しく其の拠り所であつた。

子孫である日本人が、その中に描かれる国家の創建、その中心であらせられた、神武天皇の御即位を想ひ起こすことは必然である。

三、神武創業と物語日本史

日本人が昔日より、祖国の歴史に流れる精神（神道）から忠と孝（道徳）を知り、尊皇愛国に至つたことは真実であり、皇国日本は一貫して忠孝を嚆矢とし、かかる順序から政治経済産業文化を発展させて来たのは歴史的事実に他ならない。

古昔より我々日本人にとりて、全ての事物の根幹を成す伝統的思想とは、天壌無窮の神勅に奉答せられた、神武天皇の建国精神に存した。加へて、世界各国に比し、我が国に於いて民族性は即ち国民性である。日本国家の生成発展の中枢とは、今日も皇室であることに変はりない。

現に、践祚の本年に皇居内の大嘗宮にてとり行はれた

大嘗祭や遷年からの新嘗祭、そして神宮の神嘗祭が、天皇の最重の祭儀としてのみならず、言はば国家的行事として今日まで行はせたまふのは、本年の十一月二十二日から翌月の八日まで、一般公開された大嘗宮の拝観者が七十八万人（毎日新聞）であつたことが、その証明とも言へる。

国史上、「天皇」といふ御称号が使用せられる様になつたのは、推古天皇の御代が嚆矢とされる（法隆寺の金堂薬師像光背銘文）。それまでは、稲荷山古墳出土の鉄剣銘に代表される「大王」であつた様である。

「天皇」といふ言葉を、現実の君主の称呼として用ひた例はシナには無い。『日本書紀』が、皇位の神聖に対する固有の伝統的信念から、大化の頃の百済使や高句麗使への詔文に「明神御宇日本天皇」といふ表現を用ゐたことを記すのは特筆すべき点である。

そして、神武天皇以来、御歴代の天皇とは神事（祭祀）を第一とし、国民に祖霊（ancestor）崇拝の模範を示されて来たのである。我が国の神道の本質が祭祀にあり、その教典に代はるものとして、歴史書でもある記紀を神典として尊んで来た所以である。

殊に、『日本書紀』の内容に貫かれてゐるのは、事実を明らかにして是非善悪を隠す所なく直書してゐる点である。加へて、その主眼は、皇位継承の重大事件の直言に存す。正に真実が最も尊厳であるといふ立場であり、その憚る所無く、皇室に関する事でも筆を曲げない点は、編集総裁であらせられた舎人親王の御本意であり、それは『古事記』も同様である。

記紀の史料批判に於いては、年代や修辞等の末節に於いて信じがたい点があるのは事実であるが、根幹をなす史実の大局（神武天皇の建国事業）は、これを是認してよい事は、優れた学究の研究により実証されて来た。

故に、銅剣銅鉾の文化が九州から瀬戸内を経て畿内に遷つたから、神武天皇の東征を真実とするのは根拠として重要である。しかし一方で、本来歴史叙述とは如何なるものであつたのかといふ古代の人々の思考の本質に迫ることは、後世の日本人として決して見逃してはならない部分であると思ふ。

今日でもさうあるべきと信ずるが、本来歴史叙述とは何年に何があつたと言ふ様な、学校の教科書や役所の先例調査の如き事務的なものでは余り意味をなさなかつた。

奈良時代の書紀の編者は、事実の直叙の根本精神を保つた上で、国家としての壮大な目標や理想を欲したのである。彼の欧米人が精神的支柱とする聖書と同様に、神武天皇の建国事業を著すのに、物語や文学の形式を用ゐたのである。

それによつて、子孫の日本人は神武創業を回顧し、その系譜に連なる『神皇正統記』や『大日本史』が生まれ、日本国の重大なる危難に臨んでは、建武中興や明治維新へ導く光明となつたのであつた。

繁昌と閑寂は人の世の実相である。しかし、其々の立場に関わらず感謝と光栄の中での回想こそが、祖先（祖霊）崇拝の基本であり、先祖に最も近い子孫の果すべき義務である。

畢竟、我々の先祖が、その当時に残存する史料を根拠とし、歴史叙述に於けるあらゆる知識を綜合し、遼遠な太古の年代と時日を推定したといふ其のこと自体に、また其の喜びと感謝に充ちた豊かな物語性に、日本民族の精神的自覚と祖国意識の発露を感得する。

その偉大な文化業績である『古事記』『日本書紀』を日本最古の古典として尊重し、紀元節・神武天皇国家建設を記念する日を祝ひ、其の子孫である日本人として、有り難く皇恩を拝戴して、それぞれ家の祖神を祭りつつ、分に応じて業に励む事もまた、子孫のとるべき礼儀であり義務と信ずる。

参考文献

平泉澄博士著
『少年日本史』　皇學館大學出版部
『国史学の骨髄』　錦正社
『山彦』　勉誠出版
谷省吾著
『神道原論』　皇學館大學出版部
杉浦重剛著・所功解説
『昭和天皇の学ばれた教育勅語』　勉誠出版

性と化粧の物語（十八）

鈴木守

第三話　性と古代の化粧（二）

第三節　地中海文明（二）

先報では、ビーナスとトロイのヘレンがギリシャ化粧の幕を煌華やかに開きましたが、ホメロスの時代になると化粧風習が下火になった事を紹介し、更に斯様な化粧風習の低調期を導いたのは、ミケネ文明の崩壊要因であったと考察しました。今回は、その後の化粧史を引継いで、先ずは古代ギリシアの政治史を覗き見る事にします。

第一項　古代ギリシアの政治史

① ギリシア人：古代ギリシア文化を培い、且、支えて来たのはギリシア人である事に異論を挟む心算りはありませんが、彼等は印欧語族に属し、彼等の使用する方言によってアイオリス人、イオニア人、ドーリア人に分けるのが一般的ですが、この3部族以外にギリシア人の一派アカイア人も登場します。

研究社の『英和大辞典』には「アカイアはギリシア南部コリント湾を臨む地域の昔の地名」とあり、ホメロスの詩ではアカイア人をギリシア人の総称として扱い、ミケネの線文字を解読したヴェントリクスらはミケネ文明を作り上げたのはアカイア人である事を明らかにしました。

② 都市国家ポリスの成立：ミケネ文明が前一千年頃に崩壊し、古代ギリシア文明が発祥したのは、都市国家ポリスが誕生した事に基づきます。ミケネ文明が終

焉した後、ギリシア人は村落単位の氏族社会を営んでいましたが、鉄器使用により生産力が増大すると、有力者に土地財産が集まって戦士階級の貴族が出現し、貴族と平民間で差別が生じ、貴族は平民や奴隷を支配し、外敵と戦う必要により、地域の中心部に集住した結果、各地に都市国家が成立しました。

③ 植民市の建設：ギリシア人は古くからエーゲ海の島々や小アジア西岸に植民市を設け、前8～6世紀頃には、地中海や黒海沿岸にも植民市を建設。植民市は現イスタンブールのビザンチウム、現マルセイユのマッシリア、現ナポリのネアポリスが知られ、これらの植民市は現在でも地中海や黒海地域の主要な商業都市として繁栄しているように昔から商工業の重要な拠点でした。

④ 平民の政治参加：古代民主々義の標本にギリシアが取り上げられるのは、平民の政治参加が逸早く行われていた事によります。ギリシア各地にポリスが成立し始める頃になると、先述したように植民市の樹立や鉄器利用に基づく生産活動が活発になった為、武具の購入が容易になり、ポリス市民は戦争の際、財産に応じて武装し、参戦するのが慣習になり、前7世紀頃から中流市民は武具を自弁して重装歩兵となって出陣し、戦争の帰趨を果たす役割を勤め、中流市民の政治的地位を高めま

したが、その結果アテネでは前6世紀の初めに貴族と平民の険しい対立が生じました。

他方、ソロン（前六三八？～前五五九？）やクレイステネス（前6世紀後半）が一連の改革を行ない、戦時に重装歩兵となり市民達の政治参加の体制を確立しました。

⑤ ペルシア戦争とアテネの繁栄：ペルシア帝国はオリエント世界を統一すると勢力を小アジア西岸に伸ばし、ギリシア人の世界と接触。小アジアのイオニア人ポリスはペルシアに反抗。これをアテネが援助してペルシア戦争（前四九三～前四八〇）が始まり、マラトンとサラミスの海戦で勝利。前四〇年に和約が成立。

サラミス海戦後、エーゲ海周辺のポリスはアテネを中心に同盟を結び、アテネは同盟を通じて諸ポリスを統括する地位を得て、同盟資金を自国優利に活用。国内発展を進め、斯くしてアテネは民主的な政治が成長するに伴ない文化も栄えました。

アテネで行われていた古代民主政治を振り返りますと、アテネは参政権を有する市民の直接選挙に基づく民主政治でしたが、参政権は人口一割に充たない成人男子に限られ、女性には参政権はなく、剰え奴隷制度を採用していた為、アテネ人口の半数近くは奴隷達だったので、アリストテレス（前三八四～前三二二）は「奴隷と家畜の用途に大差なし」と云わしめていました。

⑥　ポリス衰退とマケドニアの抬頭：　アテネが繁栄し始めますと、スパルタ等のポリスとの対立が鮮明になり、アテネとスパルタ間でペロポネソス戦争（前四三一～前四〇四）が生じ、間もなくアテネは衆愚政治の弊害に陥り、船頭多くして舟が山へ登ってしまいスパルタに屈服。しかし、スパルタは経済力に欠け、貴族政治を行っていた為、他のポリスの反感を買い、ついには前三七一年、中部ギリシアのテーベに破れ、その後、テーベも衰え、ポリス間抗争が続いた為、ポリス社会は崩壊の方向へ進みましたが、マケドニアが抬頭。前三三八年にマケドニアは、アテネ・テーベ連合軍をケローニアの戦いで破り、ギリシアの支配権を入手しました。

⑦　アレキサンドロスの東征：　マケドニアでは、アリストテレスに帝王学を学んだアレキサンドロス大帝（以下、この項では大帝と略）が前三三六年に即位。前三三四年にペルシア遠征の途につき、最初にエジプトに侵出。後方防備の目的を兼ねて植民市アレキサンドリアを建設（完成前三三一年）。反転して前三三三年にペルシアとイッソスで戦い勝利し、アケメネス朝ペルシアは滅亡。

大帝は印度制覇の夢を追って、更に東征。前三二七年に印度北西部からインダス川を越えて、現イスラマバード近郊のタクシラに入る。この地で雨季を迎え、雨中行軍に意気萎えた兵を鼓舞し乍ら兵を進めるも、ついには笛吹けど踊らなくなってしまった為、大帝は印度制定の夢を諦め、軍を返す事にしました。

東征開始から11年目、前三二八年初頭の頃、バビロンに帰着。「同年6月1日、マラリアに罹患。10日夕刻に逝去」と記録されています。

⑧　ヘレニズム世界の成立：　ヘレニズム世界成立は大帝の抬頭なくして語る事は出来ません。大帝はペルシアと結着を付けると、東方に勢力を拡大、各地に植民市を設け、アレキサンドリアと名付け、更に東西民族の通婚を奨励し、ペルシア風の儀礼を採用し、広大な帝国の統括を円滑に運営していました。

大帝の死後、大帝直属の将軍達が帝国を分割統治する事になり、エジプトにプトレマイオス家、シリアにセレコウス家、マケドニアにアンティノゴス家が夫々王朝を樹立。シリアやエジプトのように、曽つてオリエント文明の栄えた地域をマケドニア人が統治。ギリシア人の往来が盛んになった事もあって、ギリシア風の文化が流布し、各地共通のギリシア文化が主流を占めるヘレニズム世界が成立しました。とは云え、東西文化の融合を治世の理念に据えていた大帝の想念も流れていたのではないでしょうか。さもなくば、ヘレニズム時代と云う特異で

高度な文化が培われたとは思えません。

第二項　古代ギリシアの文化史主として化粧文化

第一項では古代ギリシア文明期の政治史を中心に述べましたので、この項では同時代の文化史として、この時代の著名文化人をピックアップして文化史の変わりにし、化粧文化に関連する情報を中心に紹介する事にします。

①　古代ギリシアの文化人：　高等学校の歴史教科書を主たる参考資料として、古代ギリシアの名ある文化人名を拾い上げて古代ギリシア文化発展の様相を知る縁（よすが）にしたいと思います。

古代ギリシアでは、民主政治の行事として野外劇場で演劇が行われ、三大悲劇詩人にアイスキュロス（前五二五頃～前四五六）、ソフォクレス（前四九六頃～前四〇六）、エウリピデス（前四八五～前四〇六頃）が選ばれ、アリストファネスの喜劇も評判でした。

詩人ではホメロスを始め、ヘシオドス（前8世紀）、女流詩人のサッフォー（前六一二頃）らの名を挙げる事が出来ます。

歴史に関して、ヘロドトス（前四八四？～前四二五）がペルシア戦争、ツキディデス（前四六〇頃～四〇〇頃）がペロポネソス戦争の歴史を記し、ヘロドトスは「歴史の父」と呼称されていました。

往時の人達は自然現象を神話で語っていましたが、神話の呪縛から脱せんと欲して自然哲学が発祥し、前6～5世紀にタレースは万物の根元を水に、ヘラクレイトスは火に求めました。ヒポクラテス（前四六〇頃～前三七七頃）は医学書一三〇篇超を著し「医学の父」と称されていました。

数を万物の構成原理としたピタゴラス（前五八二頃～前四九三頃）は「直角三角形の斜辺の平方は他二辺の平方の和に等しい」とする定理を発見しました。中学生の頃、この公式の解を宿題とされ、悪戦苦闘した事を思い出します。

ギリシアと云えば、ソクラテス（前四七〇頃～前三九九）を筆頭に哲学者の名前を並べる人が多かろうと思います。ソクラテスは真理追究の対象を人間の行為に求め、衰退期に向かっているポリスに力を与える努力をしていましたが、その努力が仇となり、処刑される羽目に陥りました。ソクラテスの弟子にプラトン（前四二七～前三四七）は哲人政治を理想とし、プラトンの弟子、前出のアリストテレスは学問を体系的に集大成しました。

美術の場では、「アテナ女神像」を彫ったフェイディアス（前四九〇頃～前四三〇頃）や「円盤を投げる人」

を彫ったミュロン（前四八〇頃～前四四五頃）の名が有名です。

時代は下がりますが、エーゲ海ミロス島で発掘された、彼の有名な〝ミロのビーナス〟はヘレニズム期の作品とされ、女流詩人サッフォーは女神ビーナス事、アフロディテを彼女の詩作に屡々詠い込んでおり、彼女が属していた女性グループの守護神に祭り上げていました。

ヘレニズム文化期には、ポリスが衰微した為、コスモポリタニズムや個人主義の主張も聞かれましたが、この時代、アレキサンドリアに前二九七頃、王立学上院ムセイオンが設立。地中海各地から百人を越す学者が招かれ、研究と討論に従事。附属図書館では広く書物を集めて学問の進歩を促した為、自然科学の進歩が著しく、幾何学のユークリッド（前三〇〇頃）や浮力の法則を発見した数学、物理学のアルキメデス、地球の赤道下における周囲径四一〇〇〇キロメートルを算出したエラストテネス（前二七三頃～前一九二頃）が名を残していました。

② 黎明期のギリシアの化粧：前項では古代ギリシアの著名な文化人を拾い上げて見ました。流石優れた古代文明を創出した時代だけあって綺羅星の輝きを発していた著名の名が列挙されました。所がそれに引き換え、ギリシアの古代化粧文化たるや惨胆たる姿を曝すのみで、ビーナスが発見した化粧たるや、その歴史を辿っているとは思えません。従って、私が知り得た古代ギリシアの化粧の実態を書き留めておく事にします。

文献によりますと、ホメロスの詩が歌われていた前9～8世紀頃には、男女共に水浴した後に香油を塗る程度の化粧しか知らない牧歌的な生活をしていたようです。では、ホメロスの時代から数世紀の間、何故に化粧風習が低調だったか、その理由として、ギリシア人達は「女性は男性より能力が劣るとして、閨房に幽閉するような愚去をしでかし、女性が面して化粧が忘れ去られた時代が到来し、化粧するのはヘタイラ（本誌一四五号参照）だけで、化粧はヘタイラの専有品の観を呈し、ヘタイラ達は顔や手に化粧するだけでなく、全身に化粧を施し、乳首に紅い色をタッチし、紅と白粉を混ぜて丸いお尻を彩ったと文献に記されていますが、彼女達の職業を考察の対象に加えれば、股間部前面に性器強調の化粧を施して然るべきかと思います。

前9～8世紀頃、ホメロスの時代に前後して、ギリシア各地に都市国家ポリスが成立し始め、前4世紀頃には化粧品の使用が習慣化され、バラ色や白いメイクが見られるようになって暗黒の時代に曙光が射し始めました。

③ 白化粧と鉛白：メイク化粧の御三家は白粉による白化粧、頬紅、口紅の赤化粧並びに眉目に施す黒化粧です。

白粉に使用される主材は当然白粉即ち白色顔料で、穀物の粗粉、貝殻の胡粉が使用されていましたが、古代ギリシアの時代に鉛白（塩基性炭酸鉛）が登場しました。前3世紀頃、アテネの複数の墓から鉛白粉の塊が発掘されました。

所で鉛白の毒性はよく知られていますが、鉛白による鉛白粉は、化粧の乗りや化粧の付きがよいので、古代から近代に至る二千年の間、女性の体を蝕み続けて来ました。日本では昭和九年末日に販売禁止令が公布され、昭和十年初頭以降、鉛白粉は市場から姿を消しました。

④ 赤化粧と黒化粧：赤化粧を施す代表的な化粧料として頬紅と口紅があり、初期の頃の紅化粧には、海草、桑の実、地衣等の植物性色素や紫貝の色素を抽出して使用していましたが、これらの色素は水溶性の為、雨に会ったり、涙を流したりすると、化粧崩れします。斯様に水や油、即ち溶媒に可溶な色素類を染料、溶けない色素類を顔料に区分しています。

古代ギリシア当時の赤い色素は前述した植物染料や紫貝の染料だった為、化粧持ちが悪く、ギリシアの歴史家クセノフォン（前四三四？～前三五五？）は「彼女らが夏外出すると、その顔から汗が首にかけて赤いシワを作り、髪が顔に触れると白粉で白くなる」と風刺的に叙述していました。クセノフォンの記述は古代ギリシアの化粧品質は今一である事を示していました。

古代ギリシア時代にはクリーム状頬紅も登場し、頬骨の部分にほぼ丸形に塗り、頬紅と同時に口紅を指すのが一般的でした。

赤化粧には橙色を強調した場合、黄色色素を配しました。黄色顔料に硫黄（硫化水素）使用が文献に記されていました。硫黄は鉛白粉や辰砂同様に毒物でしたが、使用実績が少なかった為か毒性報告は稀少です。

黒化粧はアイ・メイクに見られ、この素材はランプや鍋釜の煤、消し墨の粗粉等、所謂カーボン・ブラックが用いられ、磁鉄鉱として産出する黒酸化鉄（四三酸化鉄）も黒色顔料として汎用されています。

小アジア西部エフィソスのアルテミス神殿に前五三〇頃のギリシア女性頭部彫造があります。この彫像には当時流行していたと思われる目と頬の化粧が残っています。眉は黒く塗られ、左右がかなり接近しています。目の化粧は、近年一九六〇年代後半の流行に酷似し、上瞼は赤茶色で、下瞼の目尻には翡翠色で影を付け、更に上瞼のみに同じ緑色でアイラインを目の幅より長く引いており、唇と頬は茶がかった赤で染められていました。

⑤ 香油等その他の化粧：これまでメーク・アップの化粧を中心に話を進めて来ましたが、⑤項では香油や基礎化粧等、化粧の四方山話に花を咲かせる事にしま

す。

古代ギリシアの化粧文化では、基礎化粧品の話題は稀で、唯一、ビューティー・マスクが登場しました。この化粧には穀物の粗粉を練って顔に当てがい、湿潤ミルクで洗い落とす化粧法で、現代のパック化粧の走りと云えます。前2世紀頃の医師ディオコリデスは「陶土に太陽で乾燥させた当量の樹脂をバラの軟膏に混ぜてマスクに用いると、雀卵斑や尋常性痤瘡の治療法になる」と記しています。特にこれは、泥パックの前身です。

香油はギリシアの化粧文化が低迷していた前9～8世紀のホメロスの時代でも使用されていたと云われています。そして、東方の香料がギリシアに直輸入されるようになったのがアレキサンドロス大帝以降の時代で、最も多かったのが香油類でした。香油は貴重品でしたからコリント産の細口陶器小瓶に詰めて販売されていました。コリントはヘタイラの多い事で有名な交易都市でした。リンメル著の『香水の本』にギリシア人入浴用具一式の中に香油瓶が描かれていました。

香油は使用する身体の部位によって種類を使い分け、顔と胸にパーム油、眉毛と髪には花薄荷、喉と膝に立麝香草、腕には薄荷、脛と足に没薬を使っていました。

油は化粧料以外にもマッサージや医療目的で様々な原料から採油し石臼で砕き、小枝細工の篩に果肉を入れて重石を乗せ、篩から滲出した油を別の容器に受け止めました。同様の方法で、胡麻、アーモンド、椰子等から採取し、油保存の為に塩、蜂蜜、茴香、樹脂、酢を加えます。

制汗剤として乳香を配合した香油、脱毛用に砒素と鉛を加えた香油、睫毛を煤で黒くし、卵白と樹液の混液で煤を固定。頬や唇を赤く塗るには鉛丹（四酸化三鉛）やアルカンナの根で製した絵具が使われていました。

香油使用について、頭隠して尻隠さずの見本のような話が残されています。前出アテネの政治家ソロンはアテネ男性に香油販売を禁止する法令を公布しました。その後、ローマ時代の作家プリニウスの後日譚が残され、彼の記述によると香油の熱狂的ファンが当局の目を逃れて、イタリア・サレルノに逃亡しましたが、彼独特の強烈な香りを官憲の鼻が嗅ぎつけ逮捕され、幕を閉じたとする後日譚です。将に頭隠して尻隠さずの諺通りの結着となりました。

本号で古代ギリシアとローマの歴史を通じて話を纏める予定でしたが、ギリシアの歴史に紙を割き過ぎましたので、次回に古代ローマの化粧史について話を進める事にします。

引用文献

J・パンセほか、化粧品の歴史、白水社、一九六一
R・コーソン、メークアップの歴史、ポーラ文化研究所、一九八二
春山行夫ら、西洋の化粧文化史、化粧品のすべて、国際商業出版、一九七八

参考文献

井上哲男、香粧品事典、広川書店、一九九二
鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九三
中屋健一ら、世界史、三省堂、一九八五
横山紘一ら、クロニック世界全史、講談社、一九九四

高山右近（五）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

自室に戻った右近は、父が帰った時にどのように迎え、父の仕事として何をしてもらおうかと考えたが、城主としての仕事は以前から右近の仕事になっており、教会関係は高槻教会定住神父が常駐してくれているので、特に父にお願いすることはない。お願いするとすれば高槻領北摂地域の領民との人間関係の構築がある。いづれにしても、家族・家臣で大歓迎をすることで、後のことは父の考えを聞いてからにすることとした。

天正十年（一五八二）七月二十五日、待っていた父が梶田達に伴われて元気に帰ってきた。

早速家族のみで城内の教会に集まり、高槻教会定住のフォルナレッティ神父の司式により、父ダリオが無事高槻へ戻れたことの感謝祈祷会を行い、この後の歓談のひとときでは、父が柴田勝家の黙認の下に日々行っていた

父　高山飛騨守　高槻城に戻る

目覚めた右近は、いつの間にか眠ってしまった自分に気がついた。雨戸の隙間から入ってくる外の明るさから、まだ卯の刻にはなっていないと思いながら、昨夜、武将としての立場が、キリスト教の教えを完全に護ることができないと悩み続けたが、「右近という一人の人間が双方に足を置いていることから、悩みになっている。現状通りで進むしかない」と改めて自分自身に言い聞かせた。立ち上がって、高槻城内に移転してくるセミナリヨが入る建物の建築を急ぐために自室に向かった。

妻のジェスタは右近の歩く音から右近が目覚めたことに気づき、奥向きの女中たちにいつもの朝食の準備を命じた。

越前北ノ庄でのキリスト教宣教活動について、楽しい思い出のように話してくれた。しかし、父がいなくなった後の信仰指導フォローについて、当面手段がないことを大変残念に思っていた。

夕食後、右近は父に父不在中の報告をする傍ら、今後高槻城で父がどのような活動を望んでいるのかを話し合った。

父は、右近が織田信長、荒木村重の争いの渦中、信長軍に高槻城正面迄攻められたとき、それを見事に乗り切って高山家の面目を施し、今では信長の後継を目指している秀吉傘下の有力武将に成長していることを賞讃すると同時に、併せて文字通りイエズス会日本宣教の柱石となっている右近の信仰と働きについて感謝した。そして、父は

① 高山家の当主は右近であり、高山家のことに関しては従来通りすべて右近にお願いする。

② 教会運営面では高槻教会定住のフォルナレッティ神父と相談しながら領民信徒への信仰支援と、まだキリシタンになっていない領民への伝道を中心に活動する。

③ 城主の父ではあるが、家臣は一人もいらない。付けて貰う必要はない。ジュスタの奥女中の一人に、食事と身辺の世話をお願いするだけで充分。

と、右近から見れば随分と遠慮した意見であったが

「では、父上、当面そうしてください。何かご要望があれば何なりとお申し付けください。それから城内の教会運営についてはいかがでしょうか」

と尋ねると、父は

「家臣信徒は高山家の動きに直結しているので右近が全て取り仕切るべきだ。領民信徒に対する対応は、フォルナレッティ神父と右近が手が回りかねるときはお手伝いさせていただく。未信徒家臣・領民については、機会ある毎に個別に伝道をする」

と話し合ってその日は終わった。

数日後の高槻城内教会での領民信徒集会のとき、ダリオが高槻に無事帰っていることを知った領民が多数押しかけてきて、午前も午後も教会内に入りきれず、更に一部の信徒はミサ終了後出口まで出てきたダリオを取り巻いた。遠くからも「ダリオ！」と叫びながら手を振る信徒もあった。ダリオは

「皆さん、お互いに元気でお目に掛かれましたね。これもデウス様のお恵みです。これからフォルナレッティ神父と領内二十箇所の教会にお伺いして、皆さんとご一緒に信徒の道を歩いてゆきます。これからも宜しくお願いします」

の挨拶に、割れるような拍手が長く続いていた。

石近の茶道

織田信長の継承者を巡っては秀吉主導で織田家継承者を信長長男で故信忠の遺児三法師とする考えと、信長の三男信孝を推して主導権を握ろうとする柴田勝家と秀吉の争いが熱くなっていた。

石近も秀吉からいつどこへの出陣命令が来るかと覚悟はしていたが、安土から高槻に移転してきたセミナリヨの活動を軌道に乗せることと、父による未信徒領民への伝道活動を石近なりに支援を続け、つかの間の平和を楽しみ、茶道では千利休の弟子として楽しんでいた。

五年前の天正五年（一五七八）、石近二十五歳のときに荒木村重の茶会で紹介された千利休を、津田宗及と共に高槻城内に設けた茶室に招き茶会を開いていた。（注①）

その後、石近は千利休に弟子入りして茶道を学んだ。千利休の主唱する「和敬静寂」の教えに基づき、石近は茶室、茶の諸道具はもとより自らの心をも清貧に保つよう心掛けていた。石近が、そのような文字通りの「清貧」の中で祈るときは、茶室での祈りのひとときが「神と石近だけの場」になっており、石近は何よりもこのひとときを大切にしていた。それとやはり千利休から教えられた、茶会での「一期一会のおもてなし」の心を、「点前」の全てに「この方とは二度とお会いすることはない」との思いで行った。茶会にお客をお招きする日は、自身朝早く起床して、茶室に向かう露地を点検して清め、躙り口から茶室に入るお客の目線を想定しながら自分も躙り口から入ってみて、清掃状況はもとより一輪の生花、掲げる文字、質素なりにお客の趣向に合わせた置物を置いているか、見直していた。

同じ千利休の弟子で親友の蒲生氏郷（石近の影響でキリシタンになり、洗礼時に石近が代父となった）から、石近が茶道具の棗（なつめ）その他各種茶器の清め方の清め方ではなかったので「石近の清め病」と言われていた。石近自身は茶室は自分が神様に祈る場であり、その場にある物は清めつくしていなければならない、と自分に言い聞かせていた。

禅宗から始まった茶道と、石近のキリスト教信仰は石近の心中で見事に均整を取って収まっており、石近は千利休の弟子七哲の一人と言われ、またその中でも一番に位すると評価する人もいた。

（注　①）高山石近と茶道について　内　津田宗及茶湯日記・・・から

賤ケ岳の戦い

天正十年（一五八二）年六月二十七日、信長の後継者を決める会議が、秀吉の発議で清州城で行われた。これには秀吉の他、柴田勝家、丹羽長秀、池田恒興等が集まり、柴田勝家は生存している信長の子どもから三男の織田信孝を押した。これに対し秀吉は嫡男からの系統を尊重して、本能寺の変で死亡した嫡男織田信忠の長男三法師を押した。種々議論されたが、出席している丹羽長秀、池田恒興が秀吉案に賛成したので、柴田勝家の筆頭家老としての意見は受け入れられず秀吉案に決定した。

柴田勝家はそれでは収まらず、水面下で秀吉との勢力争いは激しく展開されていた。遂に秀吉は柴田勝家が降雪時期には越前北ノ庄から大軍を率いて出陣出来ないことを見越して、十二月二日、勝家側の近江長浜城を攻撃、城将の柴田勝豊を降伏させ、同月二十日には岐阜城の織田信孝を攻めこれも降伏させた。

翌天正十一年（一五八三）二月一日、高槻城の石近のところに秀吉から、柴田勝家側の実力者で、美濃・伊勢の瀧川一益との戦いに参陣指示があり参陣した。秀吉は柴田勝家が、雪解けを待たないで京を目指して出陣してくる情報を得て、滝川一益の抑えは蒲生氏郷に二万の軍勢を預けて、秀吉自身は柴田勝家が京を目指してやってくる通路に当たる賤ケ岳に布陣することとして、三万に上る大軍を賤ケ岳に集結させた。石近もこの転戦に従った。

秀吉は賤ケ岳の与吾湖周辺の地形を自ら探索し、秀長本陣を与吾湖東下の田上山に構えることとし、秀長本陣の前方での攻防両面の布陣として、与吾湖東側の峰に並ぶ大岩山を中川清秀に、隣接する岩崎山を石近に、至急砦を構築し攻防両面の体制の強化を秀吉自ら指示した。

一方、柴田勝家は三万の軍勢で、三月十二日には近江柳ケ瀬に到着、秀吉陣営との睨み合いを続けたが、四月十九日、柴田陣営の佐久間盛政勢一万五千が、中川清秀の大岩山砦と高山右近の岩崎山砦を目指して侵攻してきた。石近は味方の兵力が中川勢と合わせても二千にも満たず、佐久間勢とは格段の差があり、構築した砦も形はできてはいるが未完成で十分の機能を発揮できない状態でもあることから、石近は中川清秀に「戦は今回だけではない。一旦田上山の秀長陣営迄引いて、出直して敵を攻略することが上策」と伝えたが、中川清秀は「引くは武士にあらず」と答えたのみでそのまま戦闘に入り、やむなく石近も大山砦目指して攻めてきた佐久間勢と戦闘に入った。いつの間にか中川勢と高山勢は一体となって押し寄せる敵を押し返していたが、常に新手を繰り出してくる佐久間勢に味方は疲労困憊し、三方を囲まれてしまった。石近は部下に田上山の秀長陣営迄退くように指示、石近もほんの数人の部下とともに退いたが、妻ジュスタの義父と兄二名が退却する石近勢の殿（しんがり）を務めてくれたので、石近勢は田上山に陣取っている秀長軍と合流

できた。しかしジュスタの義父と兄二名は戦死した。大岩山砦を死守していた中川清秀は大岩山砦で割腹し、中川勢は全滅した。

石近のこの退却を「キリシタンの意気地なし、戦わずして逃げ帰るとは。卑怯な奴」と非難する武将もいたが、石近の「戦いとは、無理な戦いをしてみすみす部下を殺すことなく、全力を次の決戦に備え最後の勝利を得る」という自己の信念を秀長にも話し、秀長衆下に入った。この直後に、柴田勝家側で秀吉攻略の布陣をしていた前田利家が、柴田勝家を裏切って秀吉側へ寝返ったことから、戦局は一方的に秀吉側に有利に展開し、石近も退却する佐久間盛政勢を追撃しながら越前北の庄城まで進み、柴田勝家は妻（信長の妹お市の方）と共に落城の炎の中で割腹した。

賤ケ岳の戦いが終わって、安土のセミナリヨと共にイエズス会日本本部が高槻城内に移ってきた超多忙の中で、石近は戦死者家臣家族への弔問、戦死したキリシタン信徒の家臣全員を教会で合同葬を行うなどと休む暇もなく、戦後処理に当たった。その中でもキリシタン信徒教育に手を抜くことなく、

① 人間の原罪への一人一人の認識の向上
② 人間のその罪を赦してくださる、神様の人に対する贖罪の限りない愛に感謝
③ 慈悲の所作十四か条（注②）の実行

等を信徒全員に求めてゆくことを考えていた。

注② まんじ一五二号 二〇四頁参照

高槻から明石六万石へ転封

石近の悩み

天正十一年（一五八三）後半には柴田勝家側の瀧川一益も秀吉に降り、秀吉による天下統一を目的とした戦は終わったかに見えた。ところが翌天正十二年（一五八四）織田信雄が家康と手を結んで秀吉に反し、秀吉と家康間の小牧・長久手の戦が始まったが、秀吉も家康も大人であり、勝敗をつけないまま、その年の年末には家康、織田信雄の両者が秀吉に臣従することで終わった。

その翌年、天正十三年（一五八五）、秀吉は三月に紀州の根来・雑賀一揆を鎮定、七月には四国の長宗我部を平定した。これにより秀吉の基盤は一層強固なものとなり、それに伴い、同年九月には秀吉の官位も最高位の関白となり、朝廷より「豊臣」の姓を賜った。

そこで秀吉は「関白」として信長死後の諸々の戦を総括し、九月三日に近江坂本城で軍功を賞するとともに、五畿内全城主の国替えを行った。この国替えにより石近は高槻から播磨明石六万石に転封となった。更に秀吉所有の二百艘の船を石近の配下に預かった。このようなことから石近はこの転封の秀吉の基本的施策は、大阪・京都間の要所である高槻を秀吉が直轄（秀吉の甥秀次が高槻城代となる）し、西国の九州平定と南蛮貿易の独占、そのための瀬戸内海賊を撲滅し瀬戸内海上権の把握にあると読んでいた。この明石への転封の人事要件としては、石近のキリシタン信仰については一切問題になっていないことに安心した。秀吉の基本的考えは、領主がどのような宗教を領内に広めようが、それはその領主の考え次第であるとしているので、高槻に築いてきたキリシタン信仰が、特に領民の信仰が、秀次の治世でどのようになるのかが不安であった。セミナリヨはそのまま高槻に置けるのか、高槻教会に常駐している神父や修道士たちはどうなるのか、今回の転封により高槻のことについて、秀吉の「大名の領地の宗教内政には干渉せず、それを領主の自由に任せる」方針が大きな不安の材料であった。

具体的には

① 高槻城内の教会、山間部にある二十の教会の存続。
② 新しく建築したセミナリヨと、教職側七名の神父および三十人に達する生徒。およびイエズス会の中心的機能、つまり教会に残している高槻教会定住の神父と修道士、同宿達がどうなるか。
③ 約三万人に上る領民信徒とそれら信徒への信仰的指導。

以上で、②が高槻からどこかへ移転して神父も分散した場合は、①と③が壊滅的状態になることを避けるためには、イエズス会が定期的に教会で信徒集会を開催することが必要になる。しかし、それは可能か？

更に加えて、石近の悩みとして、積極的に伝道した大きな成果の三万人に上る領民信徒たちが、石近に対して「自分（石近）が高槻にいるときにキリシタン転宗を勧めて、自分（石近）はさっさと出世して明石に行ってしまう。私たちをほったらかして。私たちはこれからどうすればいいのか」と、今はまだ聞こえてこない領民信徒の非難の声が石近の胸に疼いていた。

高槻教会で

昨夜、城に帰るのが遅かった石近は、翌朝、明石転封のことをまず父と妻ジュスタに話し、重臣の梶田・横瀬を呼び、先ずは今後明石への移転について、高槻城と教会が行わなければならないことを協議した。高槻城内には石近父子を初めとして城の転封移転経験者は一人もいない。先ずは高槻城として行わなければならないことを箇条書きにして、その次に高槻教会のこと、セミナリヨに関連したこと等を、高槻教会定住神父のフォルナレッティ神父とヴィセンテ修道士を交えて協議した。

まず高槻城としては

① 家臣・領民全員に転封を知らせる。

② 家臣は原則全員明石に転居。住居は城側で準備する。
③ 保管武器弾薬、食料は全て明石に持って行く。
④ 高槻城の明け渡しは、明石の枝吉城の明渡しとの関連があるので、枝吉城との打ち合わせは横瀬が担当する。
⑤ 高槻城の明渡しについては、右近が秀次を訪問して打ち合わせる。

高槻教会としては

① 領民信徒に転封を伝えるため、早急に信徒集会を開催する。
② 高槻は秀吉直轄とされ、城代として秀次が城に入る。残念ながら秀次はキリシタン信徒ではないので、セミナリヨと城内教会と墓地施設、神父の定住は、右近から秀次に一定期間置いてもらえるようにお願いするが、これはまず無理と考える。
③ セミナリヨ等の移転先は、オルガンティーノ神父と至急相談する。
④ 領民信徒に対する信仰指導・支援は、フォルナレッティ神父が高槻にいる間は神父と修道士にお願いする。

ここまで議事が進んできたところに、突然右近が話し始めた。それも涙声になって。全員驚いて右近を見つめると

『高槻でキリシタンになった人たちが「右近よ、キリシタン転宗を我々に勧めたのはお前だろ。それにもかかわらずキリシタンとして歩みだしたばかりの俺たちをほったらかしにして、右近一人だけが出世街道を歩いてゆくのか」と言った恨みの声が自分の胸に疼いている。キリシタン信仰を始めだした三万人を超える領民一人一人が叫んでいる』

集まっている誰からも声は出なかった。右近は続けて

「転封はいつかはあると言うことを事前に領民信徒たちに話しておかなければならなかった。そのとき各人一人一人の信仰の護り方について話しておくべきだった。領民信徒集会の冒頭で右近自身が、このような日が来ることを言ってなかったことを領民信徒一同に謝罪する。そして

① 信徒一人一人がキリスト再臨時によみがえり、神の国に入ることができるように、神様がキリシタンに約束された来世を信じ望み続けること。使徒信経（注③）を暗唱し一言一句を信ずること。
② 神様の教えを行うことに努めること。具体的には十戒（注④）十箇条を守り、教えられた慈悲の所作十四箇条を行うこと
③ ②を行わなかった場合は、神様に罪を犯すこととなるので、自分なりに罪（七つの大罪　注②参照）に

対して鋭敏になり、告解時には罪を告白して許しを求めなければならない。
④ 全ての信徒が以上述べた信仰の日々を送ることにより、その人がキリスト再臨時に復活し救われることを信じて信仰生活を送るように努めて欲しい。
⑤ 右近も、イエズス会の神父方も、皆さんと遠く離れていても、皆さんが信仰生活を続けられるように祈っています。日々顔を合わせることはできませんが、祈りと思いの中で皆さんと一緒にいます。

と、以上のことを自分の口から話したい」

と右近なりの考えを述べた。フォルナレッティ神父はそれを受けて

「右近様、仰る通りです。信仰はその人その人なりに個別に神様が時間をかけて成長させてくださるものであり、この時期にデウスの教えを聞いた人たちは、いつの日か信仰の花が咲くでしょう。信徒集会の折に、領民信徒に対して是非そのようにお話しください」

の発言でこの会は終わり、高槻城としてのスケジュールは梶田を、高槻教会としてのスケジュールはフォルナレッティ神父を総括実行責任者として行うこととした。ただしセミナリヨと実質的なイエズス会本部的機能の移転は、オルガンティーノ神父の高槻来訪を待って具体的に指示を仰ぐこととした。

注③　現代語訳どちりなきりしたん　七十五頁参照
注④　現代語訳どちりなきりしたん　九五頁参照

翌日、右近は朝早く家臣全員を集め、明石への転封を伝え、原則として家臣全員の明石転居を命じ、高槻城としての明渡し移転は全て梶田の指示に従うように話して終わった。

右近は何はともあれ高槻城城代となってやってくる秀次を訪ね、高槻城明け渡しの具体的日程を相談に行き、九月三十日に明け渡すこととした。

領民信徒集会

九月六日、先ずは第一回目の信徒集会を開いた。午前一回、巳の刻から、午後二回、未の刻と申の刻から各一回と掲示したが、午前の巳の刻から三百人収容できる城内教会が早くから満席になり、定刻には通路も立錐の余地もないほどであった。冒頭右近は「最初にお祈りします」と言って、「右近の明石転封に伴って、ここに集っている高槻領民信徒と右近が常に一緒に信仰の時を過ごすことはできなくなるが、信徒一人一人が日々信仰の道を歩むことができますように、一人一人をお導き下さい。アーメン」と祈った後

「皆さん、お忙しいところを集まってもらったのは、この度、右近が高槻から播州明石に国替えになりました。

これは過日関白となった豊臣秀吉様の下に、わが日本のさらなる発展のために大阪と西国の交流、加えて南蛮交易の活発化を図ることが必要で、この右近にそれらを安全に行うことができるように瀬戸内海交通の安全管理を目的として、明石に移って職務に精励せよ、という命令を頂きました。まあ、海賊の危険がない安全な瀬戸内を作れ、ということなのでしょう。秀吉様が持っている二百艘の船も右近の管理下に置きます」

ここまで言って集まっている人たちの一人一人を確認するように教会内を見渡し

「そこで、この明石への転封により右近は明石に行くが、キリシタン信仰面で、右近があなた方を置き去りにしてゆくわけではありません。信仰を勧めておいて、まだ一人立ちできない領民を置いてけぼりにするわけではありません。右近が明石に行っても、キリシタンになった領民一人一人が、日々しっかりした信仰の道を歩むことができるように祈り続けます。従って次のことを皆さんに守っていただくようお願いします。

① 神様がキリシタンの皆さんに約束された来世を信じ望み続け、使徒信経を暗記すること。

② 十戒を守り、教えられた慈悲の十四箇条を行うこと。

③ ①②を行わないことは神様に対して罪を犯すこととなるので、教えられた七つの大罪も含めて、自分の罪に鋭敏になること。

④ 今①②③で述べたことを行い続けた人が、キリスト再臨時によみがえり（注 ⑤）、神の国に入ることができるのです。

守っていただきたいことは以上の通りで、右近も、神父さん方も、領民皆さんと離れて暮らしても神様に領民一人一人のことを祈り続けていることをお約束して私の話とします」

右近が壇上を降りると、会場から

「ジュスト！」と叫びながら両手を挙げて左右に振っている領民が多く、それを見た右近も自席で両手を上に挙げて左右に振り続けた。

（注 ⑤）キリスト教聖書では、この世の終わりのとき、再びキリスト・イエスが私たちのところに現れ（再臨）、生きている限り信仰をしていた人たちを死から復活させ、神の国に導いてゆく、という教えがあります。

高槻城から明石へ

いよいよ全家臣と共に高槻城を去る日がやってきた。右近には走馬灯のようにいろいろな出来事が目に浮かんできた。和田惟長との後味の悪い戦いを始め、荒木村重の謀反では父のこともあり苦しかった信長との対応、その信長も既にこの世にはいない。嬉しかったのは、高槻がローマにも見られないようなキリシタン都市になっている、と仰ってくださった巡察師ヴァリニャーノ神父のお言葉、そして高槻に定住神父を置いていただいたこと、領民信徒挙げて復活祭を盛大に行うことができたこと、これらのことはイエズス会神父方の指導と家臣・領民たちがそれに素直に従ってくれたお陰と馬上で思い、分からないように袖で涙をぬぐった。

「ジュスト！」と歓声が聞こえた。見れば城門から右近の進行方向に多くの領民信徒がお別れに来てくれている。両手を上に挙げて左右に振っている。右近は声が出せなかった。声を出したら自分が馬上で崩れてしまいそうな思いがあり、右近も馬上から両手を挙げて左右に振り、群衆に別れを告げた。

心配していたセミナリヨ移転問題は、一昨日大阪に移転した。セミナリヨが高槻に置かれていた期間は二年半であったが、最初子どもだった生徒たちが、いつの間にか立派な神父を思わせるように成長したことが頼もしくもあり、嬉しかった。右近はセミナリヨで神父からポルトガル語を教えてもらって、ポルトガル語の聖書を多少読むことができるようになったことは、右近の信仰面で特筆に値する効果があった。高槻城内は秀次が城代として駐在する為、キリシタン関係の設備は全て取り払った。神父たちもそれぞれ立ち去った。ただ一つ有難かったのは、高槻領の山間部の二十教会は、右近の影響でキリシタンになっている、秀吉の祐筆安威了佐の管理に置かれたことであった。この関係を有効に活用して、高槻領内全信徒に対する信仰支援・指導の道がつくことを願っていた。

播州明石

右近が行く明石では、城主明石則実が右近と同じ日に但馬の国豊岡城に転封になった。明石の居城枝吉城は海辺ではなく、南に山陽道が走り、明石と三木を結ぶ三木街道が通る要所にあった。そこは内陸地であるため右近転封の目的が海上保安管理であることから、海辺に新たに船上城を築城することとし、梶田に出来るだけ詳細な海岸地域図面を作成するよう指示した。

明石僧侶の事前騒動

明石の寺院では、今回明石領主としてキリシタン大名の高山右近が来ると聞いて、寺院僧侶たちは、高槻での家臣・領民のキリシタン転宗や寺院の廃止状況から、明石でも神社・仏閣の取り壊しや仏像の破棄が行われるものと思った。そこで僧侶たちは神社仏閣への信仰心の篤い秀吉の母と秀吉の妻に嘆願して右近のその政策をやめてもらおうと、明石の寺院にある仏像を集め、一艘の船に乗せ、大阪に赴きその旨を嘆願した。このことを秀吉

の母や妻ねねから聞いた秀吉は
「領地内の内政は全て領主に任せているので、そのようなことは干渉できない」
と答えたため、秀吉の母や妻ねねも諦め、船で持ってきた仏像は秀吉の意向もあり、大阪天王寺の古寺で薪として燃やされてしまった。
これを明石入城後聴いた右近は、この動きに関係ない寺院はそのまま安堵し、関係していた僧侶の明石入国は認めなかった。

右近　枝吉城へ

天正十三年（一五八五）十月初め、右近は枝吉城に入城した。出迎えは一足先に準備のため来ている家臣たちのみで、大名行列とは程遠いこじんまりした行列集団であったが、途上行き交う領民たちは行列がその場を通り過ぎるまで道路脇に平伏していた。右近には領主と領民間がどのような状態にあるかが、分かるような気がした。
枝吉城内のことは全て横瀬が準備万端行っていたので、特に右近が指示することはなく、当地での新たな伝道関係はダリオが担当する教会建設は、船上城ができるまでは現在の枝吉城に隣接して建築することとした。領民伝道は、新たな明石領四万の領民を対象とする伝道であるだけに、イエズス会日本伝道トップのオルガンティーノ神父の肝いりで伝道に六名の神父体制を組み、フォルナレッティ神父の指導の下に領内を六地域に分けて、地域ごとに場所と人を決めて伝道することとした。この地域伝道は、領民達には新たな領主自らの組織で行っている伝道と理解され、物珍しさも手伝ってはいたが、話を聞きに来る人も多く、神父方も力を入れて行っていた。

船上城の新築

一方右近は新しい城を海岸に向けて築城するとともに、秀吉から預かった二百艘の船の管理も行わなければならないので、新たな城に近接した明石川河口に船の保管場所も構築することとした。
船上城の位置は、今の山陽電鉄本線西新町駅から徒歩十分程度の新明町から海に突き出していた様子で、着工が天正十三年（一五八五）で、竣工が天正十四年（一五八六）であったが、残念ながら元和二年（一六一六）に廃城となり、その後復元されていない。

右近は明石で、父ダリオとフォルナレッティ神父で進めている新教会建築と領民信徒への伝道の状況を確認しながら、自らは殆どの時間を船上城建築に向けていた。明石に着任して一カ月もたたない天正十四年（一五八六）六月初め、秀吉から大阪城築城協力指示があり、年が代わって天正十五年（一五八七）一月末には追っかけるように秀吉の九州征伐に兵壱千名をもって従軍せよとの命

令を受け、三月一日の秀吉出陣に間に合わせて従軍した。右近は明石での新しい明石領内の城下体制づくりを自分でできないことを残念に思っていたが、父が城内にいることで安心はしていた。

九州への従軍

九州では島津軍が九州全体を席捲しかねない勢いで各地に侵攻、天正十四年（一五八六）四月、豊後の大友宗麟が大阪城に出向き、秀吉に島津勢が豊後迄攻め入りかねない勢いのため援助を求めたことから、島津征伐が始まった。
その五日後、秀吉は毛利輝元に九州出陣準備を指示、毛利勢は八月に出陣し十月には豊前小倉城を落としている。翌天正十五年（一五八七）一月には石田三成・小西行長等に全国から兵二十五萬人の出陣準備を指示し、三月一日には自らその大軍を率いて九州へ向かった。
右近は秀吉本隊の三番隊として従軍、千利休門下の細川忠興・蒲生氏郷（右近の影響でキリスト教洗礼を受けた）、また前田利家が秀吉本隊の中に、秀長隊の方に黒田孝高（右近の影響でキリスト教洗礼を受けた）がいて、右近は折に触れて旧交を温めていた。
日和見をしていた島津方の在地勢力は、秀吉軍の連戦連勝を目の当たりに見て、戦わずして続々と秀吉に臣従し、薩摩国境まで攻められた島津義久は四月二十一日に秀長に和睦を申し出、五月八日には秀吉を訪れ降伏した。
右近の一隊が翻す十字架の幟は人目に付き、「あれがキリシタンの高山右近隊だ」と、敵からも味方からも識別されていた。

博多に凱旋

秀吉は島津征伐が終って博多に凱旋し、筥崎宮（現福岡市東区箱崎一丁目二十二―四）を陣所として逗留した。右近はじめ参陣した諸大名は、筥崎宮から遠くない寺に分散逗留し、秀吉からの九州国分令と従軍隊の解散に伴う帰国許可を待っていた。
六月十七日には島津・大友を始め九州全域の國分令が発せられ、後は帰国のみとなった日に、秀吉がカトリック教会日本管区準管区長コエリョと、ポルトガルのフェスタ船内で歓談したとの情報が右近の耳に入ってきた。コエリョが薩摩川内で秀吉に戦勝祝いを言上するつもりで出かけたが、秀吉に会えず、今日になったものであった。コエリョが秀吉に会えなかったことは、秀吉側が勝っている戦とはいえ、戦場でキリシタン神父と会うことを秀吉が避けたと感じている。それとコエリョが過去に大阪城で秀吉と会ったときに、秀吉から朝鮮経由でシナを攻める考えを聞いて、そのときコエリョは
「シナ攻めに際しては、マカオにいるポルトガルの軍船

を一艘お貸ししましょう」

また、

「高山右近以下キリシタン大名たちが、力を合わせてシナ攻略に協力するよう申し伝えましょう」

の申し出がコエリョから出たとき秀吉は黙って聞き流していたが、この言葉に秀吉がどのように感じていたかを、秀吉がその後秀吉側近の医師施薬院全宗に語った内容を、千利休がそっと右近に教えてくれた。それは

「コエリョはポルトガルの軍船を秀吉に貸与することで、ポルトガルの軍事力を秀吉に誇示しようと思っている」

「右近たちキリシタン大名はこの秀吉の部下であり、コエリョがキリシタン大名を、自分の命令一下動くコエリョの配下と思い込んでいるのではないか。そうとすればこの上もない無礼な奴で、日本に置いておくことは危険極まりない」

「それと、キリシタンの神は、何物よりも上位で、この秀吉よりも上位であるため、コエリョの呼び声には、キリシタンたちはこの儂の命令よりもそちらに従う危険もある」

「これだけでも、我が国にキリシタンを弘めるのは口実であって、最終目的は我が国への侵略ではないか」

と言っていたという。

イエズス会神父たちの中でも、コエリョ神父は日本人に対して一段上の優越的態度で接しており、この点をかねてから日本管区長のオルガンティーノ神父は心配していた。神父会でも直接の注意はしていなかったが、常に日本人の優秀さを認めて、近い将来日本のイエズス会は日本人の手ですべて運用されるように持って行くことが必要で、日本人を他のアジア諸国民と同等に扱ってはいけないと指導していた。

右近は、ポルトガルのフェスタ船は小型ながらも武器弾薬を積み込んでいて武装船としての機能を持ち、いざとなれば戦って神父たちの輸送船を防衛する役目も持っていることは知っている。そのフェスタ船の内部を秀吉が乗り込んで視察したとすると、秀吉の今日の行動目的はその辺にあったのではないか、そうとするとイエズス会の宣教そのものに何か影響が出るのではないか、と危惧していた。

右近へのキリシタン棄教命令

星空の下に篝火を炊いている右近陣営の入り口が騒がしくなっているので、何事かと思っていると、梶田が正装した武士を三人ともなって、右近のところにやってきた。

「殿、豊臣秀吉様からのご使者で、秀吉様からの直接の

殿宛の指示書をご持参なさったとのことです」

の梶田の言葉に、右近は何事か?と思ったが、すぐ

「書院として用意してある奥の部屋にお通ししなさい。茶菓の用意も」

と指示して、右近は着替えて書院に向かった。その部屋の上座に座布団が三枚用意してあることを確認した右近は、平伏して

「大変お待たせしました。手前が高山右近です。どうぞお座りください」

と着席を勧めたが、使者は立ったまま

「まず最初に秀吉様からの指示書をお受け取りください」

と指示書を差し出した。右近は立ち上がって一礼してその指示書を押し頂き、使者に着席を勧め、使者の着席を待って自分も座り、正座のまま

「有難うございます。ではこの場で拝見させていただきます」

と言って左脇に用意されていた座り机を正面に置いて、指示書に一礼して開いた。

一度目を通したが文章の意味が分からない。二度目に文章の一区切り毎に読み返してようやく意味が分かった。

右近は暫し沈黙の上、後ろの襖を開け

「ご使者にお茶のお代わりを」

と言った後、

「右近が使っている部屋に、墨と紙を用意しなさい。これから秀吉様に右近の返事を認めるので」

と指示した後、使者に

「これから右近は秀吉様に返書を認めますので、それを秀吉様にお渡しいただけますか」

とお願いすると、使者は

「秀吉様に必ずお渡しします」

「それでは別室で返書を認めてきますので、暫しの間ここでお待ちください」

と言って右近は立ち上がり、別室に向かった。

用意された返書用の紙と硯を前にして、指示書を読み直した。そこには要約すれば次の通りのことが書かれている。

一、キリシタンの掟は悪魔のものである。

二、右近が有力な兵士、一流の武将を感化してキリシタンを日本国内に弘めた。

三、これは予の大いに好まぬところであり、キリシタンの間には兄弟親子も及ばぬ不思議な親密さがあるから、それらは天下を悩ますおそれがあろう。

四、右近は高槻・明石の人民をキリシタンにし、かつ、同地の社寺を破壊しご神体を焼却したことは、堪忍しがたいことである。

五、右近が今後も予に仕えることを望むならば、自らの

信仰するキリスト教を棄教せよ。

これは右近にキリスト教を棄教するようにとの、関白豊臣秀吉からの直接の命令であり、臣下として絶対的に指示に従わなければならない。右近にはこの指示書が出された理由が分からない。直ちに秀吉のところに行き、膝詰めで問いただしたいところであるが、今はそれができない。

右近は暫し瞑目して

① 自分としては自分の命に代えても、信仰しているキリスト教の棄教はできない。

② すると、自分は直ちにこの場で死罪。家族全員も死罪。

③ 明石領は没収。家臣全員が流浪。

④ イエズス会が築き上げてきたわが国でのキリスト教信仰は全て瓦解する。

目を開けて返書を認める紙を机上に広げたところで小姓を呼び

「ご使者に、関白様宛の返書を認めているので、あと半刻程お待ち願いたい、とお伝えして、酒肴を差し上げるように」

と命じて返書を書き出した。

（続）

安芸門徒シルクロード紀行（6）

村上邦治

二五　ホータン探訪

ロンドンを出発して二か月後の明治三十五年（一九〇二）十月十四日タシュクルガンで渡邊哲信と堀賢雄の二人は、フンザ古道を通り印度に向かう光瑞ら三人と別れた。仏教東漸の道としていまだ西欧諸国が注目していない天山南路クチャ（古代亀茲国）の仏蹟探索を命じられたが、当初光瑞自身が赴く予定であったホータンの調査に向かうためヤルカンドに一旦戻ることにした。

ここからは哲信の「西域旅行日記」（『新西域記』収録）および賢雄の『西域旅行日記』により、一年半に及ぶ中央アジアから清国を横断した二人の探検紀行を追って行く。

この連載を始めるに当たり筆者の菩提寺住職から龍谷大学の同期生ということで、堀賢雄の孫にあたる豊田山蓮照寺住職堀恵雄師を紹介された。堀の日記は平成三十一年三月雪の残る富山市豊城町にある蓮照寺に取材で訪れた折、多くの史料や貴重な写真と共に筆者に寄贈されたものである。この日記のお蔭で渡邊哲信・堀賢雄の手記がそろい、かれらの探検紀行がより正確に辿れることになった。

蓮照寺は織田信長の小姓、豊臣秀吉の側近で越前十八万石北ノ庄城主となった堀秀政の伯父が創建したものである。秀政は秀吉の小田原攻めの折陣中で病死したが、熱心な真宗門徒であったことから菩提寺として本願寺から蓮照寺の寺号を許された名刹である。

賢雄はロンドンに滞在していた光瑞に呼び寄せられ、文学寮の卒業とともにオックスフォード大学に留学するが、渡航直前に蓮照寺住職堀家を継いだ。賢雄の長男定雄は同じ探検隊の仲間本多恵隆の娘雪子と結婚したので、

多くの示唆を戴いた恵雄（両親の父名一字をとり命名）師は本多家とも親戚になることを教わった。

タシュクルガンからヤルカンドへの帰途は、光瑞と共に進んだ古道は通らなかった。かれら二人は「同じ道程は取らずに見聞を広めるため新しい道を選ぶ」という目標を持っていたのであろう、あえて困難な別道によりヤルカンドへ向かった。以後一万キロに渉る二人の行程では一度通った道は使わなかった。

帰途は北に直線で向かうので距離は短いが、高さは光瑞らと一緒に向かったフンザ道最高のミンタカ峠よりもさらに五百メートル高いカンダル峠（一万六千六百尺約五千メートル）を越えなければならなかった。中国中央アジアの南端三千キロにおよぶ崑崙山脈の西端にあたり、途中第二の高峰コングール山（七六四九メートル）と秀峰ムスタグ・アタ（七五四六メートル）が望まれた。哲信はムスタグ・アタを眺めて「白雲山嶺を鎖し、雲や山か俄かに弁別し難き。雪嶺重畳、景光頗る雄壮」と記している。

別れて三日目五千メートルの峠に差し掛かる。ここで大吹雪に遭遇、馬からヤクに荷物を移した。「雪の深さ十二尺（四メートル弱）、岩角に破砕せし波の飛沫の其のまま凍結したるが如く、又巨龍その白鱗を逆立て、そのまま凍結したる如し」の道を、馬を曳きながらようやく峠頂に着いた。しかし峠を下る時はさらに難渋した。「一人が馬の口を取り、一人は馬尾を取って墜落を防ぐ」ことになり、この時馬は「厄介な荷物」となった。

峠を越えてからも、「両岸千仞の絶壁直立する小道」や「絶壁の中腹に幅二尺程の道があり、脚を失せば忽ち川底の鬼となる」所が続いた。また流れが早く深い河をヤクに乗り、馬は水中を泳がして何とか渡ることができた。

その後はさほどの難所は無く「樹木多く、霜葉黄紅相映じて故国の秋を懐かしむ」風景を楽しめた。小村に着くと羊、子牛それに鶏や卵を買い求めることができた。村民から牛乳や茶の歓待を受けながら高原を進みヤルカンドに戻った。

カシュガルとホータンの中間にあたるヤルカンドには半月余り滞在した。この地の仏蹟調査や若い二人ではあったが五千メートルの峠越えや吹雪の中の厳しい行軍などから若干の静養と、これから赴くホータンまでの行程調査やキャラバン隊の準備に費やした。

この地は玄奘が印度からの帰途佉沙国（カーシャ）（カシュガル）から立ち寄った『大唐西域記』にある斫句迦国（シャククカ）に比定される。この書の中で「大都城は険峻で守備は険固、人家は盛大である」とし、「篤く三宝を信じ伽藍は数十、僧徒は百余人、大乗教を学習している」と仏教の様子を記した。しかし多くの伽藍は「損壊したものが多い」とも指摘している。住民について「人々は粗暴で嘘いつわりのみで、大ぴらに盗みを行っている」とし、まさしく仏教の衰退による精神の荒廃を嘆いた。

二人は滞在中、この地には仏教徒は誰一人としておらず、住民はすべてイスラム教徒であり回教寺院しか存在しないことを改めて知った。西欧諸国の探検隊により砂の下から掘り出されたいくつかの仏教遺蹟では、目ぼしいものはすでに持ち去られていた。もはや二人には新たな発掘地さえ見出されなかった。

遺蹟探索に代わってこの地の風景や風俗について詳細に観察した。『新西域記』にはヤルカンド城やバザー風景と共に、親しくした宿舎の家族や音楽師・曲芸師・婦人音楽隊など住民の暮らしぶりが賢雄の撮った写真で残されている。さらに当地だけにみられる、珍しい風土病（のど下に垂れ下がった大きな瘤）に罹患している人物を写真に収めた。病因と思われるのは水質ではないかとの見解を述べるとともに、昔から発生しており瘤の伝承を紹介している。

十一月九日ヤルカンドを十六頭の馬で編成されたキャラバン隊で、西域南道のオアシス都市ホータンを目指し出発、十日余の行程が見込まれた。西域南道は哲信が「路は棗（ナツメ）や柳の樹陰におおわれ、中亜稀にみる爽快なる良道なり」と評したように、所々にあるオアシスの村落には樹木が多く家は生垣に囲まれ、街道はキャラバン隊や人の往来も多かった。その間砂漠の中に崩れかかったストゥーパを調査し、ホータンに着いたのは二十一日であった。

ホータン（和田現在の和闐）は嘗て于闐（ウテン）国と呼ばれたオアシス都市国家で西域南道の中間に位置している。崑崙山脈から豊かに流れ出る二つの川に挟まれた大都市である。玄奘は七世紀のこの地を次のように述べている。

「周囲四千余里、土壌は穀作に適し、いろいろ果実が多い。毛織物を産出し糸を紡ぎ織物も巧みである。また白玉や黒玉を産する。人々は富裕で家々は業に安んじている。住民はヤルカンドと違い、礼儀をわきまえ性格は温順で学芸を習うを好み博く技芸に達している。立ち振る舞いは礼節あり、慣習には紀律がある」

仏教については、

「篤く仏法を尊んでおり、伽藍は百余カ所、僧徒は五千余人、みな大乗の教えを学習している。王は篤く仏法を信じ自ら毘沙門天の後裔であると言っている」

と述べている。

ここでは農業・工業・鉱業などの産業が盛んで住民は裕福な暮らしをしており、玄奘は「王から住民まで大乗仏教を篤く敬う」ことから、仏陀が目指した「住民の幸せな現世」を実現していると称賛し、ヤルカンドとは真

逆の評価をしている。

『大唐西域記』からこの地の仏教興隆を読み取った光瑞は、早くから西域南道では于闐国ホータンに狙いを定めていた。

この地には『記』の中で多くの仏教逸話が詳細に紹介され、それらに由来する遺蹟があった。建国伝説（二大河流水伝説）、仏教渡来伝説（仏教をもたらした遍照阿羅漢にかかわる逸話）に基づき建立した伽藍、王城西南二十余里にある牛角山の精舎・阿羅漢が入定した石室、西南十余里の地迦婆縛那伽藍・乾漆立仏像、西三百余里の勃伽夷城・高さ七尺の仏坐像、西百五、六十里にある聖鼠伝説（鼠が匈奴から国を救ったとする逸話）の鼠塚、西五、六里の娑摩若僧伽藍・高さ百余尺のストゥーパ、東南五、六里にある桑蚕伝説または蚕種移入伝説（この国の王が中国の姫と婚礼する際姫が被る帽子の綿の中に桑の種子と蚕の卵を隠し持ち込ませ、この地で初めて絹が作れるようになった）の麻射僧伽藍、竜鼓池伝説または竜女伝説（この地の大河に水が途絶え竜女と部下である大臣との結婚により流れが回復した）の池のそばの伽藍などである。

七世紀の当地にはこれらにまつわる仏蹟があると記されていたが、二〇世紀初頭では、哲信が「漸次砂漠の砂の為に埋没していた」と記したように、すでに跡形もなかった。

一九〇〇年から二年にわたりホータンやニヤの砂漠に埋没した遺蹟を掘り起こし寺院跡を発掘、そこから数多くの仏典や仏教絵画・彫刻・用具などを採取したのが、大英博物館と印度政府に支援されたイギリス探検隊オーレル・スタインであった。ちょうどロンドンに滞在していた光瑞らは、すぐに報告書や調査資料を入手し歯ぎしりした。とくにホータン郊外に埋もれていたダンダン・ウイリクの寺院址から発見された板絵には、聖鼠伝説、桑蚕伝説、竜女伝説が鮮明に描かれており、欧州の東洋学会や探検家たちに衝撃を与えた。

光瑞が二大調査地の一つとしたホータンには、玄奘が称賛した仏教の繁栄をとどめる寺院・伽藍やストゥーパは何一残っていなかった。あれほど朝野とも盛んであった仏教はすでにはるか遠くに忘れ去られ、ヤルカンドと同様住民は熱心なイスラム教徒に改宗しており、回教寺院のモスクが立ち並んでいた。

住民は地下から砂金が採れたので砂地を掘り下げ採取していたが、無論天然のものではなく埋もれていた寺院の伽藍や仏像の金箔であった。仏典・仏画・彫刻・仏具や陶器類・古銭も同時に掘り出されたが、西欧の探検隊に売り渡された。

哲信と賢雄は回教寺院が営ての仏教寺院の墟址ではないかと考え、スタインが発見したバラサン遺蹟などを調査した。作業員を雇い発掘調査を行ったが、ほとんど目ぼしいものはなかった。それでもいくつかの貴重な絵画や彫刻・仏像を入手することができた。これらの中には明らかに西アジアやガンダーラの影響を受けた人物の木像があり、仏教伝来を辿たどる史料として現在上野の国立博物館に収蔵保管されている。

また如来が来られて天人のために教えの要点を略説され、「この土地は必ず国家を建設し、仏の遺法を信仰し大乗を伝習するであろう」と予言された牛角山に出向き、阿羅漢が入定したとする洞窟を写真やスケッチで記録した。

そのほか古代の中心地ヨートカンやスタインが発見した賛摩寺の跡とするマザール（墓）などを調査した。

この地の特産である崑崙玉採掘場も訪ねている。遙か古代より崑崙山脈を源流とする白玉河（ユルン河）と黒玉河（カラ河）では、雪解けの激流により山脈から流れ出た玉が多く採れた。漢の時代からこの玉をもとめて多くの人が西域南道を行き交った。その出発地の敦煌は栄え、裕福な商人により莫高窟が造られた。また国内に玉を持ち込むには税がかけられ、徴税するために玉門関が設けられた。

二十世紀の採取現場はただ河頼を掘り上げ、その頼中から玉を拾得するだけであった。あたりには礫石が累々と積みあがっていたが、この時代では滅多に玉は見つからず採取は難しかった。

四十日間の滞在中、名産のカーペット工場、バザーの参加、当地高官やイスラム教徒である現地人との交流、さらに駐留露国人とも交際した。十二月末のイスラム教の正月に清国州庁から招待され、哲信は剣舞を賢雄は尺八を披露した。この地の人々にとって初めての日本人として、伝統的武芸・音曲により日本という国を伝えたのであった。

ホータンに四十日という長期にわたり滞在したのは、仏蹟の調査のほかに、これからの旅程と探検計画を検討するためでもあった。光瑞と別れすでに二か月が経過しており、光瑞からの新しい指示、印度へ向かった光瑞一行の安否や行方、藤井・薗田ら印度班の動向、哲信の弟哲乗が加わる中国班の様子など、山ほど知りたい情報がこの地ではまったく得られなかった。次の探索地クチャに行く前に、予定通り一度カシュガルに戻らねばならなかった。

二六　タクラマカン砂漠縦断

ホータンからカシュガルに戻るには、西域南道を使い、来た道をそのままを戻る最短で慣れた街道があった。中国と中央アジアを結ぶ内陸の幹線道路としてキャラバン

隊の行き来が多く、その間のオアシスには宿泊できる施設が配置されるなど、整備された大道なので安全で楽な旅行が見込まれた。しかし南道を使いカシュガルへ向かうのでは、来た路を単に戻る安易な選択をすることになる。

一方多くの困難が予想されるものの、タクラマカン砂漠を北へ縦断、天山南路のアクスへ向かいそこからカシュガルに行くコースも一応存在した。しかし砂漠縦断については清国官吏が何度も中止を求めたように、多くの危険が予想された。一応街道はあるものの、雪や砂嵐で道を見失い遭難した旅人がおり、しかも隊列を組んだ追剥・強盗が出没、被害にあうと旅を続けられなくなる。しかもこの砂漠には虎や狼が潜んでおり、人間に危害を及ぼした。この街道に詳しい官吏から、何もわざわざ危険を冒すことはないとしつこく中止を勧告された。

しかしホータンで目立った収穫が得られなかったことで誰もできないことに挑戦したいとの思いや、安易な同じ来た道を戻ることは屈辱的に思えた。そして決断する決め手となったのは、哲信が述べるタクラマカン砂漠は「殊にこれまで二、三の西洋人が通って法螺を吹いている所」であるから、「我々日本人として是非とも通ってみたい」という探検家としての旺盛なライバル心であった。賢雄はユーモラスに「光瑞から西域に流罪とされた」と自虐的に記しているが、冒険意欲は一向に衰ろえず明治の青年らしく「日本人として西欧人に負けるものか」という対抗心は二人とも極めて強いものであった。

ホータンからアクスへの砂漠縦断は、調べてみると途中にはオアシスが何カ所かあり、ホータン川の河床は流れていない場所もあるが、その痕跡は認められ迷うことは少ないと思われた。ヘディンのキャラバン隊を苦しめた猛烈な暑さも、冬の一番気温の低い時期であり、逆に零下十度にもなることが分かった。この零下の寒さについては五千メートルのパミール高原踏破により既に体験済みで、装備も持ち合わせていた。また砂嵐も一番少ない時期であった。二人には十分な準備をすれば、それほど難しくはなく二週間でアクスに達すると予測できた。

二人の頭にあったのは留学中ロンドンで読んだスウェン・ヘディンの書いた本であった。発刊間もないこの本には、当時西欧探検家の間で話題となったヘディンのタクラマカン砂漠横断中に遭難した模様が赤裸々に記されていた。

すでに著名な中央アジア探検家であったヘディンは、一八九五年二月カシュガルからチベットへ探検に向かう行程に、安全な西域南道を利用せずに西欧人初のタクラマカン砂漠を東に横断する冒険を企てた。

カシュガルから東三百キロにある砂漠の真只中のオアシスメルケトまでは平穏な旅であった。この地で従者を入れ替え、ラクダ六頭、馬二頭、食料用の羊三頭、卵を得

るため鶏十一羽、そして缶詰・小麦粉などの食料と二十五日分の水四百五十五リットルの容器を準備した。

四月十日万全なキャラバン隊により、道のない砂漠を東に向けて出発した。ヘディンは露国探検家プルジェワルスキーが作成した地図を頼りに、まず砂漠を縦断するホータン川まで進む計画を立てた。まっすぐ東に行けば十五日程度の旅程であったので、充分すぎる装備を施したキャラバン隊であった。

出発後十日間は順調に進みどこでも砂が少し湿った地面を掘ると水が底にたまり補給できたので、水の不安はまったくなかった。鶏は新鮮な卵を産み、食料となる羊もよくついてきた。

問題は十三日目に生じていた。ここでも澄んだ水が地中から出たので、ヘディンは万一のことを考え、すべての容器に満杯まで補充しておくように指示した。しかしこれを確認しないまま出発、水の入った容器の音で少量に減ったことに気づいたのは二日後であった。従者はこれまで湿った砂地を掘れば水が出たので、満杯に入れるとラクダや馬の疲労を招くと勝手に思い込み、怠惰な性格だったこともありヘディンの指示を守らなかった。

水の不足が分かったこの日から水の節約をしながら東に進んだ。毎日湿った砂地を深く掘り下げるものの、これまで掘れば出ていた水はなぜか一滴も溜まらなかった。四月下旬の昼の砂漠はすでに灼熱の暑さとなっており、強風やほこりそれに高い砂丘を乗り越えて進むのには、何といっても水の欠乏は致命的であった。

大して必要でない野営用ベッド・絨毯はキャンプ地にそのまま置いてきた。数日後には三か月分の食料・食器類・毛皮なども捨てざるを得なかった。次にはチベットなどこれから先の地図や聖書も捨てた。三日分の食料以外シナの銀貨さえ捨てることも考えた。最後には弾薬・二台の写真機・薬品・衣料・靴も捨て、どうしても必要な羅針儀、記録用ノート、銀貨、護身用短銃、シャベルだけを携えることにした。絶望的となった状況を次のように記した。

「生命の痕跡はどこにもない。地平線上にぽつんと立つタマリスクさえ見当たらない。陸地が近いことを示すものはなにもなかった！

わたしはこの荒れ果てた砂の海の、底無しの深みに落ち込んだわれわれには救われる当てもなかった。双眼鏡で一つ一つ高い砂丘の峰を詳しく調べたがなにも見えなかった！」（『アジアの砂漠を越えて』横川文雄訳一部略）

四月三十日ついに水は空となり、人や動物は一滴の水も飲むことができなくなった。一日からは「死のキャンプ」となった。追い詰められたキャラバン隊は、水を与えられないラクダがまず動かなくなり、次々に死んでい

き、最後まで若くて元気だった一頭のみとなった。

ヘディンら五人の人間も、死に物狂いで生き残る道を試みた。炊事用シナの火酒、雄鶏の血、羊の血・濡れた肺臓、ラクダの尿など、水に代わり喉を潤すと思われるものはすべて試しに飲んでみた。しかし激しく吐くなど、かえって喉の痛みを増しただけであった。

体力を消耗した一行は過酷な昼間は留まり、夜間のみの歩行でなんとかこの砂漠を横断し、途中にあるホータン川にたどり着くことに最後の望みをつないだ。しかしほどなく従者二名が死んでしまう。もう一人の従者も動くことができなくなり、そのまま砂漠の中に置きざりするほかなかった。

水がまったく無くなってから六日目にはヘディンと従者一人のみとなり、その従者ももはや動けなくなった。ヘディンは一人で最後の力を振り絞り少しずつ前進を続け、ついに地図にあるホータン川に達しその水たまりを発見した。ヘディンはこの時の興奮と感動を次のように述懐した。

「わたしはコップを静かに、そっと唇に持ってゆくと、飽くことなく飲み続けた。

なんという喜び！

神の酒である高貴なぶどう酒も、これほどうまいものではなかった。希望はわたしを裏切らなかった。一〇分間に三リットル飲んだと言ってもこれはべつに誇張ではない。ブリキ缶を二十一回も飲み干したのだ。

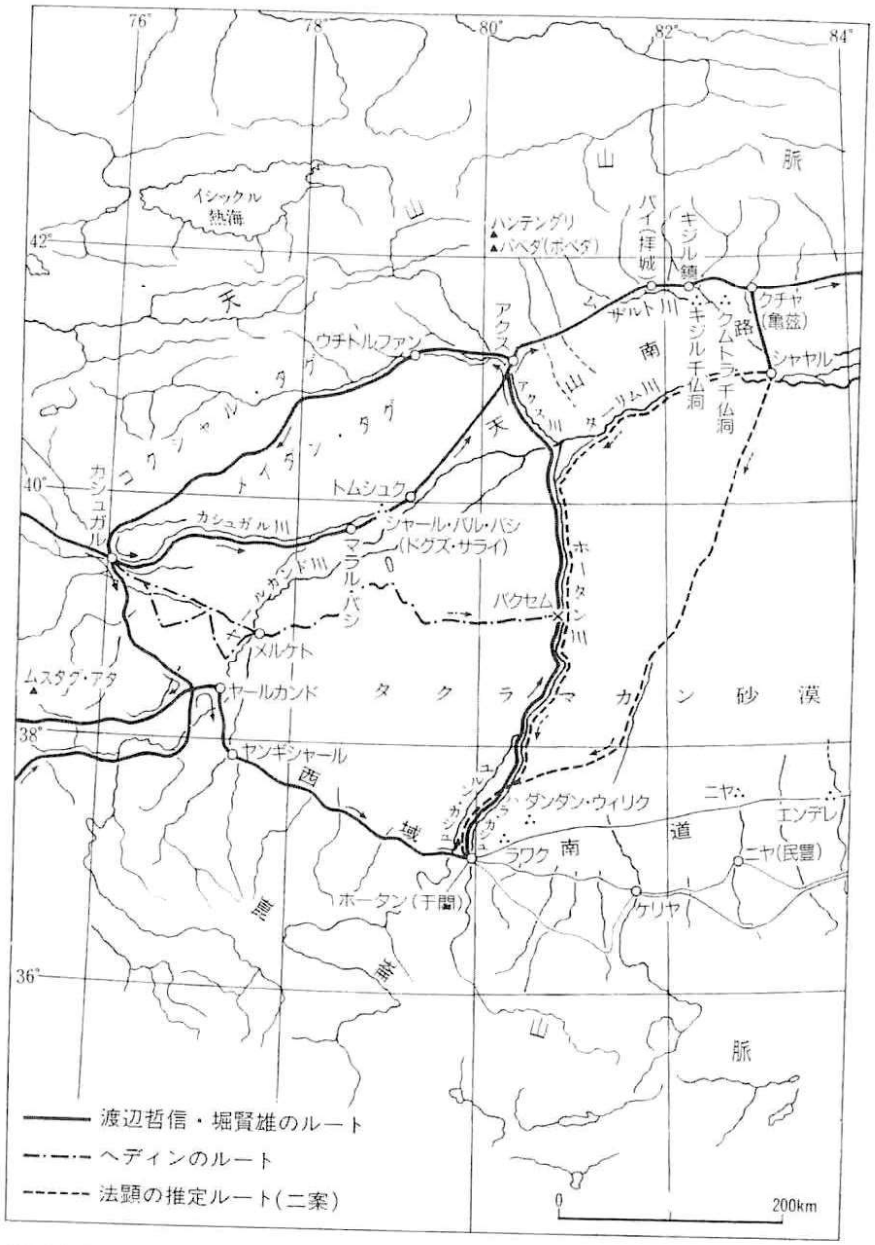
このすばらしい水のおかげで、生気がよみがえるのを感じたし、水が体のあらゆる血管や組織が、まるで渇ききった海綿のように命の水を吸い込んだのである」

こうして従者一人と共に九死に一生を得たのであった。

ヘディンのタクラマカン砂漠での遭難事件はすぐにホータンやカシュガルなどの西域南道や天山南路に広まった。かれはこの受難の詳細を『アジアの砂漠を越えて』と題し一八九八年母国ストックホルムで刊行した。英語版は同年ロンドンで出版され、光瑞達は滞在中に入手し読んでいた。この本が日本で『中央亜細亜探検記』として出版されるのは昭和十四年（一九三九）なので、かれらの留学はまさに時を得たものであった。

西欧の全面的な国家支援による探検隊に伍して、仏教の一宗派にすぎない二人の若き僧は、日本人の誇りを賭けてタクラマカン砂漠縦断を決意した。正月の賑わいが残る一九〇三年一月二日、この無謀ともいえる冒険はホータンの出発から始まった。

渡邊・堀の二人と従者四人（通事二人と猟師で護衛役二人）の六人、馬十四頭驢馬十頭で組まれたキャラバン隊は、食料・水にゆとりはなく途中で補給が可能と見込



渡辺哲信・堀賢雄、ヘディン、法顕のタクラマカン砂漠の縦・横断ルート

『忘れさられた明治の探検家　渡辺哲信』（白須浄眞著）

んでの旅路であった。

沿道には昨日の雪で一面真っ白であったが、家屋や田畑を見ながら進んだ。二日目からまわりは砂漠が多くなった。しかしところどころに小さな村落があり、街道にはみすぼらしいものの宿舎もあった。しかし七日目からはあたりは西一面に砂漠が広がり、東は森や林がところどころに見えるに過ぎなかった。この日からテントでの宿泊となったが、氷点下十度を超す寒さに悩まされた。

十日目から砂漠の地平線に並行した二つの山脈が見えてきた。マザール・タークである。以前露国探検家ブルジワルスキーが発見し、砂漠の中に北西から百キロ以上に及ぶ大山脈としたが、後でヘディンに北の山脈とはつながっておらず、まったく別物と反論されている。ともあれ変化のない砂漠に、目立つ山脈があるのは大きな目印になった。

このマザール・タークについての二人の観察が面白い。哲信は「マザール・タークは二山脈、両々相並び西北に延ぶ。その南にある脈は赤褐色の層にして、間々沈香木目様層を西北に延長する。北にある脈は其の層まったく異なる石灰の如き白褐色」と記している。

賢雄は「その南側の地質は赤砂質粘土で、丘陵の層をなしている。その北側は山形温容で、地質は砂および粘土のようで、一見してこの山脈は地質が異なることがわかる」と分析、オックスフォードで地理学を学んだ専門家らしい見解を記した。

次の日バクセムに着いた。

賢雄は「ここはヘディン博士が砂漠旅行の困難をまぬがれてホータン川に至り、南下して牧夫小屋に十数日を送ったあたりである」と簡略に記している。

しかし哲信は光瑞と別れた後は全責任を背負い、「彼のドクタースウェン・ヘディンの砂漠横断旅行中、水つきラクダを割きて胃の中水を吸り、ついにラクダの尿を吸うに至る。一行殆んど渇死、ヘディン博士と従者一人九死に一生を得て遂に横断旅行を思い止まる所は実に此地」と感慨深く記載し自らを戒めている。

かれの日記には、強盗などに備え護衛として二人の従者を雇ったが、その人物の性格や銃の腕前などについて子細に観察している。また河岸の森には虎や狼などが棲息しており、野獣の襲撃にも警戒している様子が幾度となく出てくる。ヘディンの本から得たと思われるキャラバン隊員の融和にも気を配った。従僕の小琴に皆で故歌を合唱し、また傷に薬を施すなど細かな配慮をしている。

村落の歓迎会にはキャラバンの隊長としてふるまうとともに、住民にとっては初めて会う日本人であり、威厳も保つとともに親しみをこめた交友に気を配った。賢雄とは六つ年上であり、尺八を吹いて皆を和ませる彼を弟のようにあたたかく見守った。

こうした細やかな観察・配慮および決断力を持ち合わせ、外国生活が長く豊富な折衝経験を持つ哲信と、快活で負けず嫌いな性格、地理・測量学の専門知識を持つ賢雄との組み合わせは、初のタクラマカン砂漠縦断を成功させる源となった。

一番苦労したのは十日過ぎからの一週間で、タリム河に至る間であった。冬の砂漠は氷点下十度の寒さになり、積もった雪で河床の氷上は滑りやすく砂を撒きながらの前進であった。雪のないところでは視界が遮られる砂塵に悩まされた。水の不安はなかったが、水の補給が数日間できないこともあった。

出発して十七日目にようやくタリム河の渡船場に着いたが、河は氷結しており船は使えず馬で渡った。ここからアクスまでは粗末だが宿舎があったので、テントは不要となった。

アクスに近づくにつれて人の往来やキャラバン隊が行き交い、道路の傍には家も多くなった。出発して三週間目の一月二十三日アクスに到着した。

彼らの挑戦は何一つ犠牲にすることなく、五百キロに及ぶタクラマカン砂漠縦断に成功した。

アクスは天山南路の交通要所で、クチャとカシュガルの中間地である。姑墨国（『記』では跋祿迦国（バールカー））と呼ばれ有力なオアシス国家であった。玄奘はここに立ち寄り、クチャと比較して都市の規模はほぼ半分の大きさであるが、同じ小乗の説一切有部を学習していることを記している。嘗ての西域六城（カシュガル、クチャ、アクス、ヤルカンド、ホータン、ケリア）の一つとして防衛の前線拠点であった。

二人は正装して漢城（アクス古城）にある清国州庁を表敬訪問し、州官（知事）にこの旅行の目的を説明した。二人とも中国語による会話はできなかったが、漢文に長けており、筆談で十分理解し合えた。

滞在中はホータンからアクスまで砂漠を縦断したキャラバン隊（馬、通事、護衛役の二従僕）の清算支払いを済ませた。今度はアクスからカシュガルへ行くため、新たに馬九頭によるキャラバン隊の準備などで十日間ほど留まった。

三週間前のホータンではイスラム教の正月を経験したが、アクスではちょうど清国の正月にあたり、店には新年を祝う豪華な飾りつけや聯句を書いた赤紙が貼られていた。客人が到着すると爆竹が鳴らされ、華やかな歓迎光景が見られた。

ここからカシュガルまで幹道の天山南路を通れば楽な旅となるが、新疆東トルキスタンに住むキリギス人の生活ぶりや風俗を視察するため、わざわざ天山山脈のすぐ

ほとりの街道を利用した。この道を選んだ理由は彼らの日記では明らかでないが、ホータンで砂漠縦断を決めた時の「同じ道は通らない」としたことから選択したものと思われる。

ちなみに七世紀玄奘はクチャから当時の幹道である塩水渓谷を通り、キジル鎮・拝城を経て跋禄迦国のアクスに着いている。そこからウチ・トルファンまで渡邊・堀と同じルートを歩き、北にある天山山脈ベデル峠を抜けた。そして大清池（イシク・クル）から天山北路を西へ進み、白水城、タシュケント、プハラを通り、バーミャン、ガンダーラから印度中心部に入っている。

二月初めにカシュガルに向かう二人は、新たなキャラバン隊によりウチ・トルファンから天山山脈の麓を通る道を南下した。この地で羊の放し飼いにより生活している遊牧民のキリギス人が、旅人向けに設営した天幕（アコイ）に泊まり旅を続けた。

この街道は山脈からの雪解け水が豊富に流れ、森や林とともに、畑などの耕地が見られた。途中では天山山脈の高峰ハン・テンリ（二万四千尺約七千五百㍍）が方角により山容が変わり、多様な姿に驚いた。平野には雪は解けていたが、いたるところに塩が地面に吹き出ており、遠くから見るとまるで雪が積もっているかのような風景であった。

キルギス人や官吏との交友を楽しみながら、二週間をかけて二度目となるカシュガルに着いた。

カシュガルでは四か月前、パミール高原を踏破の末着いたときに世話になったイギリス人大佐から歓待された。久しぶりにホークとナイフの食事を堪能し、そのあと入浴などの世話を受けた。西欧人同士と微妙な位置にあるカシュガルの地を考慮し、清国知事への表敬や露国駐在武官にも会い挨拶をした。

二人がもっとも気がかりであった光瑞一行の安否は、光瑞と印度に向かった本多恵隆からの手紙により、無事フンザを通りカシミールのスリナガルに到着されたことを知った。留学仲間の日野や井上、日本から印度に呼び寄せられた先輩上原芳太郎、カルカッタに私費留学中の清水黙示らの便りもあった。別れて二か月後には光瑞らはガンダーラ・ペシャーワルまで進み、予定通り印度巡拝探索旅行を続けられていることが分かった。しかし光瑞から新しい指示や便りはなく、これには二人とも少々落胆した。当地で少し古くなっていたが新聞やロンドンタイムスを入手、世界の出来事を知ることができた。

約二週間滞在したが、これまで撮った写真の現像作業、アクスからのキャラバン隊の清算、日本への荷物発送で暇はなかった。

さらに光瑞がタリム盆地のシルクロードで最も重視していたクチャの探索へ赴くのに備え、写真機の点検修理・

新たな写真機の購入、フィルム・マグネシュウムの補充、清国貨幣への両替、クチャまでの馬の手配などが重なり慌ただしい日々を送った。

二七　キジル千仏洞発見

三月五日カシュガルを出発、天山南路のクチャを目指した。ロンドンで作成した当初の計画では、光瑞自ら全員を率いて天山南路を東進、クチャに赴く予定であったので、二人はその行程を踏襲した。

天山南路は山脈の南側と砂漠の北縁を通る古くからの幹道で、人やキャラバン隊の通行が見られ賑わっていた。天山山脈からの雪解け水が豊富なところでは林や森があり、その街道沿いには村落が点在し旅人相手の飲食店が見られた。街道には電信柱が建てられているので、それを目印に進めば迷うことはなかった。

休憩所にはキャラバン隊向けの馬が食べる干草や水が用意されているので、荷物が多くなければキャラバン隊で行くこともなく、二人は自分たちが乗る馬と荷物を運ぶ二両の馬車および従僕二人だけの軽装な装備とした。

アクスまでの途中砂漠の中に、縦断中に見たマザール・タークという同名の山脈があった。これがホータン川までつながるとした露国探検家とまったく別物としたヘディンとの論争を思い出した。

哲信は日記でヘディンが無謀な砂漠横断を決行したのは、「タクラマカン砂漠には埋もれた都市があり、珍宝を探す者は死を賭しても冒険する」という原住民の話を聞き、「ヘディンは内心この埋もれた都市に向かった」のではないかと思える、と面白い推測をしている。

この旅程はちょうど春の穏やか季節にあたり、温暖で気持良く、馬上でもコートは不要であった。道中野鴨・羊・鹿・魚を買い求めることができたので食料に不自由はなかった。街道の大半は平道が続き、これまでの道中では一番楽であった。

カシュガルを出発して二週間で、砂漠縦断した時の終着地アクスに再び着いた。ここまでの旅垢を湯屋で落とし、久しぶりに散髪をした。馬を洗い休憩させこれからの旅に備えた。アクスには結局四日間滞在し、三十日クチャに向け出発した。

四月十日クチャ郊外の西五十㌔にあるムザルト川を渡り昼前キジル鎮に到着した。西側には樹林があるが、反対側の東崖には樹はなく山肌が現れた絶壁であった。

ここで住民から東北の地に古趾があるとの話を聞き込む。二人は早速案内させて現地に行くと、正方形となっており、四十間の長さの土で作られた壁に囲まれていた。壁には穴が多くハチの巣に似ていた。住民は粟・麦を貯蔵したところだと説明した。壁の内側には丸天井の如き

ものを作った跡があり、また壁の北側にはあたかもストゥーパの破損したようなものが残っていた。付近からは古銭を発見した。

哲信にはこの古趾はストゥーパと方形建物の趾であり、仏教に関係するものではないかと思われた。さらに住民からキジル鎮の東南にミンウィ（千戸の家または廃墟漢人では千仏洞の意味）村があり、そこの岩壁にたくさんの仏洞があることを聞き込んだ。先の古趾のことが頭に残り、手早く現地料理ポラ（羊肉を入れた炊き込み飯）の食事をとり、二人は急いでミンウィ村に赴こうとした。しかし急に曇り風が吹き荒れる天候に急変し、一間先も見えなくなった。案内する住民はこの天気では望見できないとか、そこまでは距離があり今からでは遅すぎるなど、案内することを渋った。

今まで西欧諸国の学会や探検家で噂にもならなかった住民の話すキジル鎮の仏洞について、先ほどの古址が仏洞と関わり合いがあるのではとの思いから、二人は何か引っかかるものを感じた。三時を過ぎていたが、村までの十キロを馬で行くことで案内をさせることができた。

砂礫を走り小坂を登り干河を渡るときには、幸いにも風は止み天候は回復してきた。現地には四時過ぎ到着、東を望むとムザルト川の南の折れる山腹に、

「あたかも蜂の巣」

に似た洞穴が確認できた。

これが住民の言うミンウィの千仏洞であった。

この千仏洞こそ、光瑞が予見した仏教東漸の証拠となる印度・西アジアの影響をうかがわせる仏洞であり、中国敦煌の莫高窟に次ぐ西域最大の千仏洞で、外国人として初めて見たものであった。

まさに光瑞が「仏教徒の手で仏蹟を探り当てる」として、門徒の中から心身とも優れた青年僧を選抜、莫大な費用を拠出した大谷探検隊にとって待ちに待った瞬間であった。

十メートル近い高さの一窟は「丹碧燦爛たる洞穴で、仏像は既に他に持ち去られて、壁画の羅漢等の顔面はことごとく毀損」していた。他の一つは「内部陰暗にして白骨累々」としており、この洞窟は刑場であったと住民は説明した。すでに薄暗くなり、この日は概観と二つの洞穴しか観ることができなかった。

しかし彼ら二人の鋭い直観によるこの素早い行動は、わずか二洞しか観ることができなかったが、極めて大きな意味を持つことがすぐに判明する。

翌日ドイツ探検隊のグリュンウェーデルら三人がトルファン、クチャの発掘調査の後帰途につき、キジル鎮に立ち寄った。昨日千仏洞を観た二人はこのドイツ隊に気

付かれないか危惧した。二人はこちらからドイツ隊を訪問し、トルファンやクチャでの成果を聞くことに努めた。

ドイツは西域南道（ホータン・ヤルカンド・ニヤ・ミーラン・桜蘭）におけるスタインやヘディンの発掘成果を見て、徹底して西域北道（天山南路）に絞り、トルファン、クチャに集中して四次まで探検隊を派遣した。最大の目的は砂に埋もれる仏蹟から壁画などを採取して国に持ち帰り、ベルリンの民族学博物館で展示することにより国力を誇示することであった。

一九〇二～三年にわたるドイツ第一次探検隊はトルファン地方の発掘・調査を実施、西欧諸国として初めてこの地を探索した。三か月間の滞在中カラホージョ古墳、センギム・アキズ石窟の遺跡を発掘、予期以上の成果を挙げていた。帰途クチャのクムトラ千仏洞でも六日間初調査してさらに収穫を得た模様であった。ドイツ隊はいずれの地でも外国人として初めての探索となり、既に十分な成果を手に入れていた。二人の僧侶がこれから行くクチャ、トルファンの仏蹟についても、余裕の態度で忌憚なく教えてくれた。ドイツ隊から「トルファン地方で三か月余を費やし、大いに得るところ多く、また発掘して収穫得た」との話を聞いて、賢雄は「われわれはこれからのトルファンにおける仕事について失望した」と記した。

二時間余りの官店（サライ・隊商宿）での話では、すぐにアクスを通りカシュガルから大谷隊と逆のコースでドイツに帰国するとのことであった。二人の方から訪問したことにより、キジル鎮の住民から新たな情報入手することを妨げることができた。こうして昨日訪れた千仏洞の秘密はドイツ隊に洩れなかったのである。

ドイツ隊がキジル鎮を離れたことを確認して、次の二日間かけて住民が岩壁に重要な碑文があると話す「ミン・ブラック」に行き実査した。ミンフィのこともあり期待して行ったものの、二人が共に「失望に帰した」ものであった。

キジル千仏洞の本格的調査は十五日から始めた。

哲信は修行する僧侶として、調査を前に次のような感慨から、経を唱えざるを得なかった。

「正法隠没して僅かに仏洞を存する千餘歳、時に牛舎と為り、時に避寒所に供せられ、絵画は煤煙に覆われ、あるいは水気浸徹等のために、荒廃の状真に断腸あらしむ。余等は無意識に洞底に座し、一偈を誦して感極り無く、更に一偈を誦する。

祖忌の迫夜と千仏洞の古仏を念とし、静かに小経（仏説阿弥陀経）一巻を誦す」

仏の子を自認する光瑞がシルクロード探検を決意したのは「仏蹟は（キリスト教徒ではなく）仏教徒のわれわれ手で自ら発掘する」と願ったからであった。浄土真宗本願寺派宗主の予てからの願いを、若き僧侶渡邊哲信と堀賢雄二人がまさにかなえようとしていた。

哲信は絶壁懸崖の中腹にある仏洞までよじ登り、洞内では壁と壁に縄を張り宙づりになりながら、筆紙、顔料を持って壁画の模写やスケッチをして調査を進めた。また日本での調査・研究のため史料として十数枚ほど壁画から小さく剥取した。洞内地下の発掘には住民を数名雇い、金箔の小片、古文字を記した木片や紙、古銭を採収した。

賢雄は主要な洞穴を撮影した。崖の中ほどにあるので外観は斜め下から撮らざるを得なかった。しかも太陽の位置により数日に分けて写した。仏洞内部はマグネシュウムを使用し撮影、記録に残した。一度に三枚しかスライドが入らないので暗室を必要とした入れ替えには蒸し暑い中、室を密閉しさらにベッドの中や黒い衣を被っての作業に辟易した。

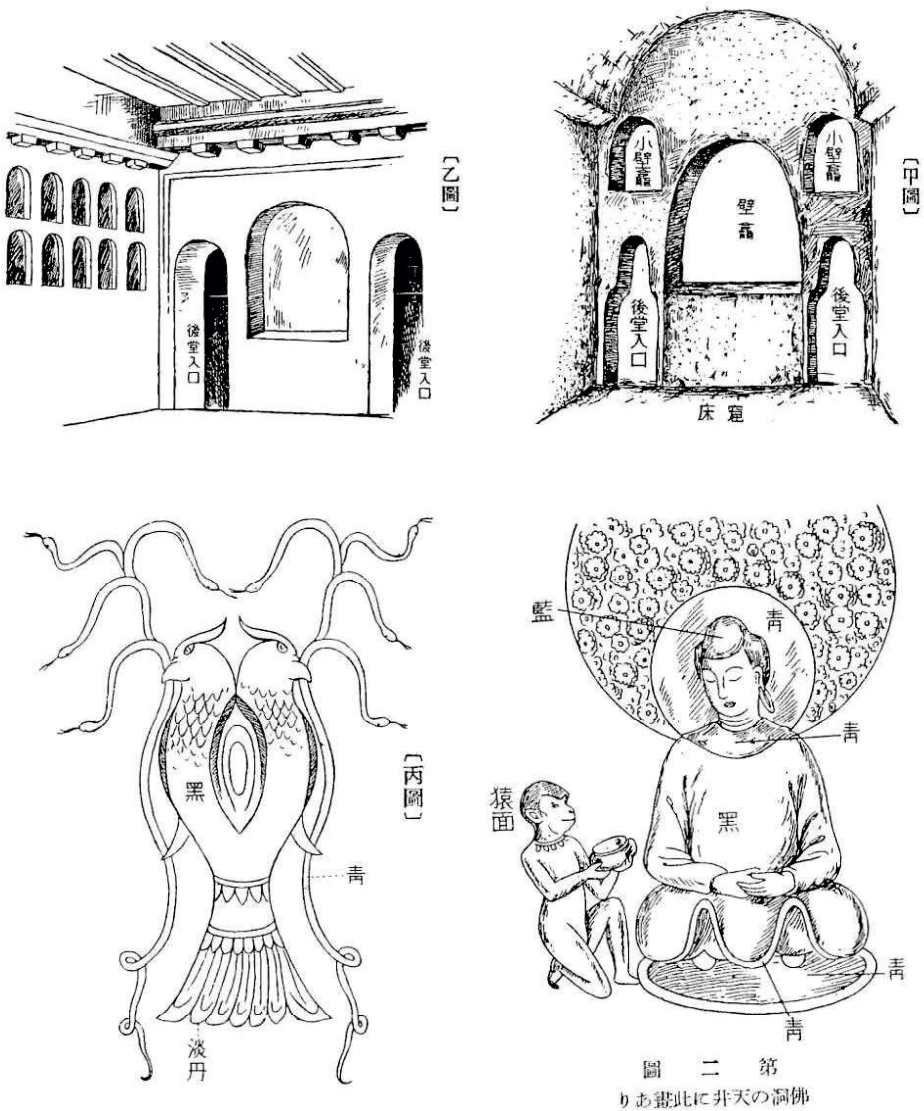
撮影が一段落するとプリズムコンパス測量に取り掛かった。標旗を立て基点を設け歩距離による作業の繰り返しであった。後で正確な地図を作成するためであった。

洞内の仏像は持ち去されるか壊されていた。壁に掘られた仏像や壁画に描かれた仏陀の顔面は、イスラム教徒により悉く毀損していた。しかし幸いにも仏陀の顔以外には手が加えられておらず、仏陀の生涯や説話を語る仏画や当時をしのばせる風俗が描かれた壁画には鮮やかな色彩が残されていた。

仏教の興隆ぶりをうかがわせる代表的な楽天窟（上段甲・乙図）と呼ばれる中心柱窟には、天井は雲模様、説話にある猿の奉密図（下段第二図）、日天・月天を描いた天象図やガルーダ（丙図）が描かれていた。この怪鳥の双方には顔は潰されているが右手に青玉捧げ左手は胸にあてた立仏像が華やかに残されていた。また洞名にもなった琵琶・横笛・手鼓などを持った伎楽天が描かれ、当地で音楽が盛んであった様子がうかがわれた。

このほか大きな仏像が安置されていた大像窟・方形窟・僧房窟に大別される洞窟があり、彼らの調査によると総数は一六〇弱（最近の中国調査では二六九窟）であった。そのうち大きくて保存の良い約三〇窟を調査した。

哲信は八日間を振り返り、「終日跣足にて春光を浴びつつ清泉柳緑の間古洞陰暗の間を往復し、或は仏洞に入りてその壁画を写し、或は僧房に入りて之を発掘し、空腹の時民家に帰りて羊飯に舌を鼓し、疲れては子犬と戯れて桃杏の花下に憩ふ」と辛かった調査や発掘の様子を記した。



第二圖
佛洞の天井に此畫あり

『新西域記』（上原芳太郎編）『西域旅行日記』（渡邊哲信著）

彼はこの地を去るにあたり、「千仏洞の山嶺に登りて観望せば、ムザルト河の流れは滔々として石を流して声あり。チェルタッグの山脈河南に聳えて赤色の長壁を築き、又遙かに北方を望めばカインの山脈或は淡く、或は黒く山紫水明の景ならざるも中亜特有の景観をなす」とこの地の豊かな風景を綴っている。

そして最後に、

「しかも其の所獲に於て、遂に人に誇るに足るものなしと雖も、自ら慰むるに適するものなきに非ず。但千古三宝隆昌の地を去るに臨み、感慨胸に充つ」

と控えめながら、外国人として初めて探索したことを改めて実感した。

賢雄は、

「ああどれくらいの時間がこの千仏洞をこのような寂寥なところに変えてしまったのだろうか。流水の浸食がこの洞を人が住むのに適さないようにした一因であろうが、この地方がイスラム圏に入ったのが最大原因であろう。砂層幾百尺の下にお隠れになった仏陀は、今われわれ二人がこの洞を拝して昔を思っているのをどう感じておられるのだろうか」（一部略）

と仏教徒として仏陀の嘆きを慮った。

この時二人はこの千仏洞が、クチャには古代新疆の仏教石窟が六割を占めるほど集中しており、その中でもキジル千仏洞は二七〇に及ぶ西域最大規模を誇り、トルファン、敦煌、河西回廊へ伝播した仏教東伝を示す重要な仏洞であることは知る由もなかった。洞内の壁画は鮮やかさが残り、イスラム教徒により顔面は毀損していたとはいえ、仏教芸術の精華と高く評価されるものであった。

玄奘の『大唐西域記』には屈支国（亀茲国）について詳しく述べているが、キジル鎮を通ったにもかかわらず、先を急いだためか三世紀から始まったこの千仏洞についてはまったく触れておらず、キジル千仏洞は西欧諸外国では知られていなかったのである。

西域最大の千仏洞最初の発見・発掘は、国家事業として西欧諸国が競い合った探検隊ではなかった。日本の一仏教宗派でしかない浄土真宗本願寺派の青年僧二人によって、キジル千仏洞は初めて調査されたのであった。

大谷光瑞の類いまれなる研究と執念から、惜しげもなく私費をつぎ込んだ。タリム盆地に二人を残し、存在すると信じるクチャの仏蹟探索に望みを託した。

二人はこれに応え、住民からの僅かな情報をもとに光瑞が念じてやまなかった、

「仏教遺蹟は仏教徒の手により自らの手で発掘調査する」

とする強い思いを叶えたのであった。

しかし大谷探検隊のキジル千仏洞発見は、まさに幸運に恵まれたものであった。

一日でも遅れていればドイツ第一次探検隊グリュンウェーデルに第一発見者の名誉を与えていたかもしれない。かれらが最初の発見者であれば躊躇なく大半の壁画をはぎ取り、ベルリンに持ち帰っていたはずである。その後に調査・発掘したとても、目ぼしいものは洞窟には残っていなかったであろう。

ホータンから砂漠縦断し、無謀とも思える日々を過ごしたものの、キジル鎮での機敏な行動により、結局砂漠縦断と千仏洞発見という二つの偉業を成し遂げることができたのであった。

大谷探検隊はこののち二次、三次と続いたが、最大の成果は外国人として初めてこのキジル千仏洞を発見・調査したことであるいっても過言ではない。

二人はキジル鎮を通算一週間滞在し、二十三日五〇キロ東のクチャに向けて出発した。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

私の伊達政宗像を訪ねて（その四－③）

安藤　剛

その一：伊達政宗のルーツ
　念西と朝宗と宗村
　福島に伊達氏発祥の地を訪ねて
その二：十七代政宗の誕生
　父輝宗の惨劇
　二本松の菜ノ須古戦場を訪ねて
その三：小田原陣の遅参
　弟小次郎の刺殺
　大悲願寺の白萩文書を訪ねて
その四：政宗と秀吉と家康
海外への夢か野望か
　遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて
その五：仙台城と瑞鳳殿
　政宗の逸話と書状
　日比谷に政宗終焉の地を訪ねて

【政宗の海外への夢か野望か】

①慶長遣欧使節出帆四〇〇年記念事業

伊達政宗の名を世界に知らしめた慶長遣欧使節派遣の出帆から四〇〇年の平成一五年（二〇一三年）、政宗の壮大な海外への夢を記念するイベントが郷里宮城を席巻していた。そして同年六月に、十二年前に歴史資料として初めて国宝に指定されていた慶長遣欧使節の持ち帰り資料の内二点が、ユネスコ世界記憶遺産に登録された。

翌二六年二月、在京宮城県出身者で組織する「みやぎ夢フォーラム」の一員として、ホテルニューオータニで開催された仙台市主催「二〇一四仙台の夕べ」に招待され、スペインで演奏活動をしている川上ミネさんのピアノ「サムライ支倉の大いなる旅」を拝聴する機会を得た。

その一〇日後には、在京宮城ふるさと協議会主催の慶長使節船ミュージアム館長濱田直嗣氏の講演「慶長遣欧使節出帆四〇〇年をめぐって」で勉強させていただいた。

そして八月二五日、慶長遣欧使節を題材に仙台市の委嘱で制作された三善晃作曲・高橋睦郎原作脚本のオペラ「遠い帆」の東京公演を、新国立劇場で鑑賞した。

支倉常長の栄光と失意の運命を描いた和製オペラで、仙台フィル管弦楽団とNHK仙台少年少女合唱隊など総勢二三〇人が、果てしない海上場面を軸に回想を織り込みながら、マドリッドでの洗礼、ローマ法王との接見など、ヨーロッパで翻弄される使節の長い旅と不幸なその後を描く壮大なドラマだったが、その時の感動と余韻がその後の私の常長を訪ねる旅の大きな原動力となった。

②岩倉具視使節団の発見

政宗の慶長遣欧使節派遣は、徳川幕府の禁教政策と鎖国政策の下で、歴史の闇に抹殺され、長く忘れ去られていた。明治新政府が明治四年に欧米に派遣した岩倉具視使節団が、イタリアのヴェネツィアで支倉常長の書状を偶然に発見したことから、政宗の偉業が二五〇年の時空を超えて日の目を見たのである。

大久保忠寶史官久米邦武編修『特命全権大使米欧回覧実記』（明治十一年刊行）に、ヴェネツィア文書館で常長の書状を発見した当時の様子が報告されている。

「此書庫ニ、本朝ノ大友氏ヨリ遣ハセシ使臣ヨリ送リタル書翰二枚ヲ蔵ス。其遣紙ヲ一見センヲ望ミシニ、挟紙ヨリ取出シテ示シタリ。皆西洋紙ニ羅甸文ニテ書セル書翰ニテ、末ニ本人直筆ノ署名アリ、鉄筆ニテ書セルモノナリ、岩倉大使、余ヲシテ模写セシム、左ノ如シ」

次行に「支倉六右衛門　長経」の署名と花押の写し書きが二つ、そしてそれぞれに一六一五年二月二四日と一六一六年の年号が付されていたという。

同文書館には、外に一五八五年に大友宗麟が送った天正遣欧少年使節の書翰五葉が保管されており、支倉六右衛門も、大友宗麟が派遣した使臣とみられていたらしい。

久米書記官は「支倉六右衛門は、是より二〇年も後れて至りたれば、大友家の使臣には非るべし、滅国した大友家の信に篤き遺臣か、豊臣家の遺党に非ざるか、或は仙台の伊達政宗の家臣なりと謂うが、伊達氏の西洋に交通せるは殆ど怪しむべきに似たり」と追書していた。

ヴェネツィアで支倉六右衛門の書状を発見した岩倉具視は、帰国するや仙台藩に調査を指示、仙台城内に隠匿していた常長の持帰遺物が開示された。明治九年六月、明治天皇の東北・北海道巡幸の際に、仙台博覧会に伊達家出物として出展され、天皇に叡覧されるとともに、江戸時代初期に使節団をヨーロッパに派遣して通商交渉を行った政宗の海外への夢が全国に知られることとなった。

③慶長遣欧使節団の行程

昨年（平成二一年）一月、仙台城本丸跡の青葉城資料展示館に展示されていた慶長使節出帆四〇〇年記念の特別展「写真で見る支倉常長の遣欧使節行」を、主任学芸員大沢慶尋氏にご案内いただいた。

掲示されていた一一〇点の写真パネルに沿って慶長遣欧使節団の行程を概観してみる。（〇番号はパネル番号）

【仙台藩石巻月の浦を出帆】

①サン・ファン・バウティスタ号（復元船）：一六一三年一〇月二八日（慶長十八年九月十五日）に伊達政宗建造の洋式帆船が出帆。

②総勢一八〇余名：内、日本人約一四〇名。その内、幕府船手奉行向井忠勝配下の者一〇名程。ソテロ、ビスカイノなど南蛮人四〇名。

③造船地・出帆地＝月の浦：造船者は、ビスカイノと部下、幕府船手奉行配下の大工たち。八百人の大工、七百人の鍛冶、石巻牡鹿地域の三千人の人夫。

⑥伊達政宗・ソテロ・支倉の図：使節行は、政宗とソテロ（サン・フランシスコ会宣教師）が基本立案。徳川家康の許可と幕府の協力・了承のもと実現。

⑦政宗とソテロの目的：

《政宗の希望》　仙台領とスペイン最大の植民地メキシコなどとの直接貿易を行いたい。キリスト教を領内に広めたい!?（ソテロの希望でもある）

当時の日本のキリスト教は、西日本の長崎に日本全体の司教が置かれ、ポルトガルと関係の深いイエズス会の大きな勢力の下にあった。

《ソテロの希望》　西日本とは別に東日本の奥州に独立した司教区を新設し自ら司教になり、スペインと関係の深いサン・フランシスコ会の勢力下にし、発展させたい。そのためにも日本のキリシタン信徒代表たちを伴ってローマまで赴きローマ教皇に謁見し、サン・フランシスコ会の日本での布教成果を認めてもらいたい。

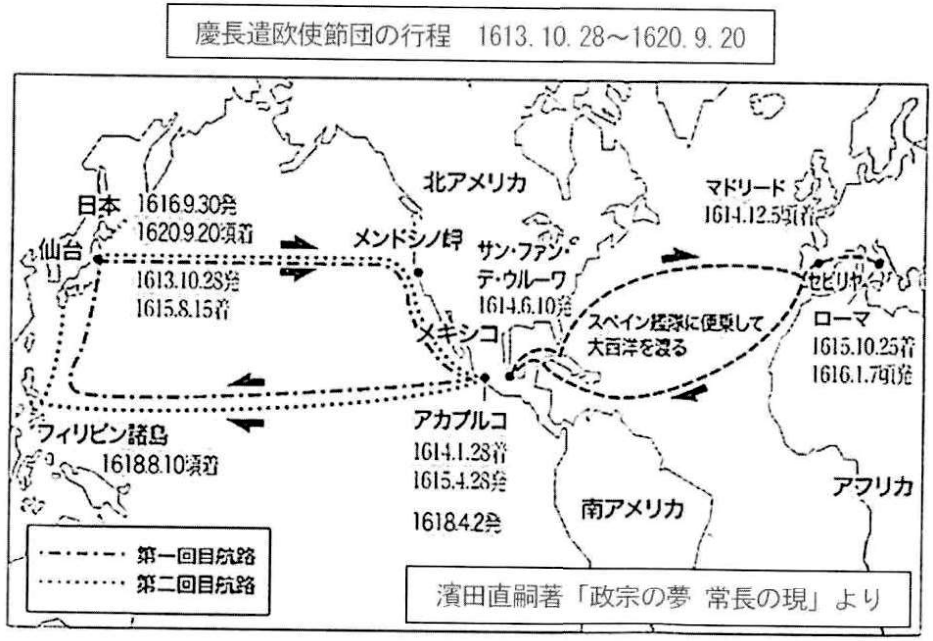
⑧支倉六右衛門像：約六〇〇石の中級家臣。四三歳。ソテロとともに政宗の大使に任命される。

⑨なぜ支倉が大使に抜擢?：政宗が父支倉飛騨の切腹と子六右衛門（常長）の追放を命じる茂庭綱元あて書状。

【メキシコ入国】

⑯支倉常長銅像：支倉使節一行がメキシコ・アカプルコに到着した一六一四年一月二八日、幕府は京都でキリシタン禁教令を発すべく大久保忠隣を派遣、二月一日家康は、金地院崇伝起草の「バテレン追放文」を公布。

⑱支倉本隊、メキシコシティ：三月二四日着：アカプルコに日本人は二〇程を残し、一二〇名程でメキシコシティへ、アカプルコから山岳地帯を一ヶ月程で到着。



⑳支倉、メキシコ副王グアダルカサール候に謁見：

《政宗の書状を呈す》書状内容：

◎政宗自身は障害がありキリスト教徒になっていないが、領国の民で望む者がキリスト教徒になることに異議はない。ソテロを使僧としてスペイン国王・ローマ教皇に遣わすが、家臣の侍一人を添え遣わす。

◎宣教師を政宗領国に遣使船で渡海させてほしい。

◎その船が帰る時メキシコから商品を積ませて下さい。今後船の往来に障害のないよう命じてください。

《徳川家康・秀忠の書状を呈す》家康書状のスペイン語訳文の内容：我が国ではキリスト教を尊ばない。

㉔サン・フランシスコ教会：四月九日に一行日本人中二〇名がこの教会で受洗。四月二〇日に二二名受洗。

㉘メトロポリタン大聖堂：四月二五日に日本人六四名が大司教より堅信礼授かる。

㉚メキシコ地図：五月二九日にメキシコシティ出発。日本人は二〇数名（全体で三〇名位）。六月一〇日に大西洋岸のベラクルスのウルーア港からスペインへ出港。

【スペイン入国：セビージャ・マドリッド入市】

㉛スペイン地図：一〇月五日にスペインのサン・ルカール・デ・バラメダ入港。一週間滞在後、船でコリアへ。

㉟コリア・デル・リオの街：ハポン姓の人がコリアと近郊に約八百人。一〇月二一日に馬車でセビージャへ。

㊲アルカサール宮殿：市長らに迎えられセビージャに入市、宮殿に入る。支倉一行の宿泊所。一ケ月強滞在。
㊴カテドラル大聖堂：スペイン最大の教会建築。支倉も聖庫内の宝物を見、音楽演奏と舞踏の歓迎を受ける。
㊵ヒラルダの塔：高さ九八m、支倉も登ったという。
㊶セビージャ市役所：一〇月二七日の特別市会に臨む。市長に政宗書状と贈物の刀を呈す。セビージャはソテロの出身地。兄は市の参事会員。日本出帆後一年経過。
㊸セビージャ市宛て政宗書状の内容：
◎政宗自身は止む無き事情によりキリスト教徒になっていないが、領民をキリスト教徒にしたいのでソテロに頼み支倉六右衛門と申す侍一人を指し添え渡す。
◎スペイン国王とローマ教皇のもとへ、ソテロと支倉が無事参着し望みが叶えられるよう協力を仰ぎたい。
◎すぐに日本よりセビージャに行くことについてご決断いただければ、今より毎年船で渡海したい。
※政宗は、自領とメキシコ間の直接貿易のみならず、スペイン本国とも直接貿易を行おうとしていた。
㊺スペイン地図：一一月二五日に大歓迎を受けたセビージャよりマドリッドへ出発。費用はセビージャ市負担。
㊻サン・フランシスコ・エル・グランデ教会：十二月五日頃マドリッド到着。入市式なく教会修道院が宿泊所。
㊿マドリッド王宮：一六一五年一月三〇日に国王フェリーペ三世に謁見。マドリッド到着後五五日程経過。
(52)スペイン国王宛て政宗書状の内容：
◎去る年（慶長十五年）ソテロを家康の使者としてスペイン国王のもとに渡すことが決まっていたが、病気のため別のバテレンを渡した。このたびソテロの病気も全快したので使者に頼んで渡したのである。
◎政宗自身は解決困難な支障でキリスト教徒になっていないが、キリスト教徒になるよう領国下々の者たちにすすめるので、サン・フランシスコ会のオブセルヴァント派のバテレン衆をお渡しくだされたい。
それで今後の申し合わせのため、このたび船を造りメキシコまで渡した。この船でバテレンをお渡しください。毎年渡海させます。
◎スペイン本国のみならず、メキシコ副王、フィリピン総督、マカオ地区司令官、モルッカ諸島長官へ、我らの船が行っても間違いのないようご命令下さり、渡航の許可状を下されたい。
◎協定の条項は別に一書をもって申し入れ、尚ソテロが申し上げる。万一旅の途上ソテロが死んだら、ソテロが指名するバテレンが申し上げる。使者として侍一人を渡す。日本の道具五種類を進上する。
(54)デスカルサス・レアレス女子修道院：二月十七日に支倉の洗礼式。当時国王の姉妹（内親王）が修道生活中。
(55)付属教会：フェリーペ三世、フランス王妃（国王の長女）、両内親王臨席。教父はスペイン政界並ぶ者なし

といわれた宰相レルマ公。授洗司祭は国王の侍僧長。異教徒の洗礼式としては当時最高のシチュエーション。
(56)「ドン・フェリーペ・フランシスコ」ハセクラの誕生：フェリーペは国王の名、フランシスコは宰相レルマ公の本名のフランシスコをいただいたものであろう。
(59)困難を極める交渉とローマ行の決定：
《マドリッドでの使節に不利な状況》
◎「徳川幕府のキリシタン禁制・迫害」情報の到達
◎日本のイエズス会の妨害報告
◎使節の目的や実態について情報収集し、使節の正体を疑ったインディアス顧問会議の阻止活動、
◎政宗が日本全国の皇帝ではなく、一分国の王にすぎないという資格の問題。
※ローマ行を認めるか否かの判断に八ケ月以上を要す。
《ローマ行きの決定》
スペイン国王の裁決で。「日本人たちがかの地において、福音の宣教と信仰を打ち立てていることを報告するために、かの地にいるカトリック教徒に代わって、教皇に臣従を示すためローマに赴くのを妨げることは、熟慮をもってすれば不都合があるように思われる。そして他に得られた良い結果の中には、異端者たちが教皇に臣従しないこの時に、彼らがかくも遠方から教皇の脚下に跪くために来たことが見られることである」
ローマへの旅費をスペインの国費で支出。
(60)スペイン地図：一六一五年八月二二日にマドリッドをローマへ向け馬車と荷車、騾馬で出発、十月二日頃バルセロナ着。バルセロナに少なくとも四泊五日は滞在。
(61)モンセラート聖母教会・ベネディクト会修道院：支倉は修道士達の聖なる生活、山に棲む隠者に感化受けた。
(65)バルセロナのカテドラル大聖堂：市庁舎訪問後に訪問。
(71)地中海の地図：十月上旬に支倉一行バルセロナを出帆。

【イタリア入国：ローマ入市】

(73)クィリナーレ宮殿（パウロ五世の離宮）：十月二五日ローマ到着すぐ教皇パウロ五世に内々に謁見。
(74)ローマ教皇パウロ五世肖像画：国宝、仙台市博物館所蔵、二〇一三年六月、世界記憶遺産に登録
(76)「王の間」のフレスコ画：ソテロ・支倉・伊丹宗味ほか日本人キリシタン信徒代表と思われる。日本のキリシタン代表達のローマへの巡礼＝宗教使節でもあった。
(77)ローマ入市式：十月二九日、非公式だが盛大。アンジェリカ門→サンピエトロ広場（祝砲）→サン・タンジェロ城→アラチェリ教会（ローマ約七〇日の宿泊所）
(83)サンピエトロ宮殿：十一月三日、ローマ教皇に謁見
(84)支倉が教皇に呈した政宗書状：ヴァチカン図書館所蔵。
(85)ローマ教皇宛て政宗書状の主な内容：
◎宣教師の派遣依頼。大司教の任命・派遣依頼。
◎政宗領国とメキシコ間の貿易のことで、スペイン国

王への働きかけを要請。

(94)支倉のローマ市公民権証書：十一月二三日に受ける。

小寺外記・伊丹宗味・野間半兵衛・滝野嘉兵衛も。

(95)アマーティ編「伊達政宗遣欧使節記」（一六一五年出版）：東洋の果てからきた使節のことはヨーロッパで広く知られブームとなる。支倉在欧中に出版。しかし、ローマ教皇からは、使節の請願は実質的な成果としての正式な回答を即座には得られず、貿易のことなど多くはスペイン国王の判断になるものとして回答なし。

【スペインから日本へ】

(105)地中海の地図：一六一六年一月七日にローマより帰路につく。四月十七日マドリッド到着。四月中にセビージャへ向け出発。六月二二日に先発の日本人十五名セビージャより帰国の途。支倉・ソテロと日本人随員五名はセビージャ近郊のロレト修道院にとどまる。

(108)ロレト修道院のパティオ：極めて困難となった使命達成のため、必死にソテロと共にスペイン国王への嘆願書をはじめ各方面へ手紙を出し働きかける（約一年間）。

(110)黄金の塔（セビージャ）：一六一七年七月四日追放に近い形で帰路につく。支倉・ソテロらここから乗船か。

(112)大西洋と太平洋の地図：一六一八年四月二日メキシコアカプルコから出帆。八月十日マニラ着。一六二〇年九月二〇日頃、支倉帰朝。六年十一ヶ月の旅は終わる。

④慶長遣欧使節派遣の目的

政宗は、メキシコとの交易を求め、支倉常長と宣教師ルイス・ソテロを使節にメキシコ、スペイン、ローマに派遣、仙台藩内での布教活動の容認と宣教師派遣の受け入れを条件に交渉を進めたが、幕府のキリシタン禁制令で信徒への迫害情報がヨーロッパに伝わり、常長一行が日本国の正式な代表ではないと疑われたこともあり、交渉は困難を極め、結局はなんの成果も上げることなく、国外追放同然に、七年後に禁教下の日本に帰国した。

常長は、スペイン国王フェリーペ三世に、政宗の親書と八ケ条の「申合条々（和平協定）」を提示していた。

①キリスト教の領内布教とフランススコ会宣教師の派遣、②交易船の建造とメキシコとの交易、③操船する航海士と水夫の派遣、④交易船の領内寄港と便宜供与、⑤造船の資材提供、⑥自由通商と関税免除、⑦スペイン人居留地提供と治外法権の保証、⑧スペインと敵対するイギリス人とオランダ人の領内追放。

その内容は、キリスト教と貿易を切り離す新教国イギリス・オランダと交易を進めている幕府の禁教政策に反しており幕府への謀反に等しい。この申合条々が日本に残っており、石母田家文書「南蛮への御案文」に収録されているが、慶長十八年九月四日付で出帆の十一日前、渡欧した使節団の自作自演でないことは明らかである。

ではなぜ政宗は、幕府が禁じるキリスト教の布教と宣教師の派遣を交易条件に容認したのだろうか。

青葉城資料展示館で写真パネル展をご案内いただいた主任学芸員の大沢慶尋氏から貴重な話をいただいた。

幕府が江戸でキリスト教弾圧を始めたばかりであり、かつ二年前の慶長三陸地震による甚大な津波被害からの復興対策の一環もあって、海外貿易による利益の創出を図り、領国をキリスト教布教特区、国際貿易特区にする構想でスペイン国王との協定が実現すれば、それを家康に認めさせることができると政宗は考えたのではないか。

そしてソテロ自身も、日本キリシタンの代表をスペイン国王とローマ教皇の下へ引き連れて謁見させ、フランシスコ会の布教成果として認めてもらい、新たなる司教区を東日本に設立し、ソテロ自ら司教となる希望を抱いていたのではないか、という。

当時のスペインは、世界に誇る無敵艦隊がイギリスに敗れて「太陽の沈まぬ国」の栄光も揺らぎ始めていた。太平洋航路を開拓してメキシコ経由でアジア進出を図りながら、インド洋経由でアジアに進出して禁教政策を採る家康に食い込んだオランダに遅れを取っており、そのスペインの焦りに付け込んだ政宗が、キリスト教容認を条件に直接交易を持ち掛けたのかもしれない。しかし政宗の狙いは、果たして交易の実利だけだったのだろうか。

⑤政宗の南蛮征討説

慶長遣欧使節派遣の目的に、政宗の南蛮征討説がある。使節派遣の九〇年後に編纂された『伊達治家記録』に「今度、公、南蛮へ船ヲ渡サル事、其地ノ様子ヲ検察セシメ、上意ヲ経テ攻取リ玉フヘキ御内存ナリト云々」と南蛮の実情を偵察し攻め取るためだったとある。

政宗の詩歌集「伊達の松陰」に『欲征南蛮時所作』と題した詩「邪法、邦を迷わし唱へて終まず、南蛮を征せんと欲して未だ功を成さず、図南の鵬翼　何れの時にか奮はん、久しく待つ扶揺萬里の風」が収められている。南蛮を征せんと欲してとは、尋常ではないが、政宗は本当に南蛮征討を目論んだのだろうか。

幕府の禁教策に反する布教容認と宣教師派遣を条件に海外交易を画策した遣欧使節派遣が失敗に終わり、盟友の家康が既にこの世を去っており、政宗は、幕府からの嫌疑に抗弁すべく、日本を脅かすキリスト教国征討の斥候を海外に遣わした、と方便したのではないだろうか。

欲征南蛮の詩歌も、禁教の幕府を憚った誰かが政宗の名を騙って歌集に追録したとは考えられないだろうか。

日本最初の国語辞典『玄海』の編纂者大槻文彦が、祖父玄澤の著作『金城秘韞』の補綴に「熟ら、公（政宗）が此の擧の發意を察するに」と、次のように書いていた。

「公、少壮より四鄰と戦ひ、天正十七年、遂に会津四郡仙道七郡を併せ、凡百二三十萬石なりしなるべく、公が二三歳の時なり。然るに其の明年、豊公の為に地を削られ、又移封せられ、尋で、海内一統して、復た雄飛すること能わず、其れ何ぞ、咄々髀肉の歎に堪へん。征韓の役も徒爲なりき、石田の乱にも、寸地を得たりしのみ。然るに、慶長十四年に至りて、島津氏、琉球を取れり、公、豊欽羨に堪へんや。然るに、恰も此の時に當て、徳川氏、西班牙と交通せんとするに會せり、乃ち、機に乗じて、意を海外に注ぎ、先づ此の擧を試みられしこと、疑ふべくもあらず。」

若くして天下への野望を抱きながら、秀吉の奥州仕置で屈辱的な減移封を受け、関ヶ原で家康の天下がほぼ決まり、戦乱の世が終息に向かい、奥州制覇の夢も果たせぬまま、閉塞感に囚われていた政宗が、薩摩島津氏の琉球への侵略と家康の海外交易への進出という新しい潮流に触発されて、萎えかけていた戦国武将の血潮を、南蛮征討の野望に掻き立てられたのかもしれない。

晩年の政宗が小姓に語った言行録『木村宇右衛門覚書』に「我一年黒舟を作らせ南蛮へ渡す、国の重宝求めにあらず、異国への聞こへのため成」とあるが、海外への野望に燃えた往年を懐かしむ政宗が、戦国武将の生き残りとしての気概を吐露していたのだろうか。

⑥政宗の幕府転覆野望説

平成三〇年六月のテレビ番組「世界ふしぎ発見！伊達政宗の野望、海を渡ったサムライの密命を追う」に、小中学時代の学友で、現在青森中央学院大学大学院教授の大泉光一君がゲスト出演、常長は政宗の討幕目的の密命を帯びて派遣されたと持論を展開していた。

彼が支倉常長を研究していたことは、四〇年ほど前に城山三郎の小説「望郷のとき」の中で偶然に知った。

小説の主人公は、遣欧使節団一八〇人の一員として太平洋を渡った仙台藩士荻野仲介（仮名）、スペイン・ローマに向けて大西洋を渡った常長一行の三〇人から外されてメキシコに残り、交渉に難航する常長の帰りを待つこと三年半、祖国日本は禁教となり帰国も難しく、望郷の念に駆られる仲介の瞼に浮かぶ郷里が、大河原と白石川と蔵王、なんと私の郷里ではないか。なぜ城山三郎が私の田舎の地名を知っているのか不思議に思っていた。

その疑問は、小説後半の第二部で解けた。そこに同郷の彼の名前が出てきたのである。城山三郎がメキシコに遣欧使節団の末裔を尋ねる第二部に、大使館の職員から「あなたと同じようなことを調べている若い人が居ます」と紹介された「オオイズミ・コウイチ」という青年が、父が仙台の郷土史家、一家がカソリック信者、中学時代

から支倉に興味を持っていた、とあった。なんと小学中学時代に同学年だった大泉光一君ではないか。

城山三郎は、彼のことを「商社でアルバイトしながらメキシコ大学で勉強している学生で、支倉一行の資料を求めてかなりこまめに歩き回っており、ラテンアメリカの経済を勉強しながら、この先、スペインからイタリアへと支倉の足跡を廻ってみたいと本腰を入れていた、飽きっぽいとか功利的とかいわれる若者の多い中で、こういう人も居たのかという思いもした」と書いていた。

そんな彼に城山三郎がメキシコの古文書館などを案内してもらったというから、小説「望郷のとき」の主人公の荻野仲介が望郷する風景が、私と彼の郷里だったのは、彼が城山三郎を案内しながら、常長の故郷の宮城県川崎町支倉に近い私らの郷里の風景を話していたのだろう。

彼が上智大学学長で郷里大河原町名誉町民の大泉孝先生の親戚だということは同級生の間で知られていたが、厄年の同窓会で再会した時には日本大学国際関係学部教授になっており、九・一一同時多発テロ直後に危機管理と国際テロ対策の専門家としてテレビによく出ていた。

二〇〇六年に著書「支倉常長慶長遣欧使節の真相」の和辻哲郎文化賞受賞記念パーティに招待され、久方ぶりに旧交を温めたが、支倉常長遣欧使節研究をライフワークに半世紀に亘り取り組んでいたことを改めて知った。

テレビ番組「世界ふしぎ発見！伊達政宗の野望」の中で、俳優の前川泰之さんが、ローマ教皇庁のヴァチカン図書館を訪ね、保管されているローマ教皇宛て政宗の親書を閲覧して、仙台領内へのキリスト教布教のため教皇が推薦する宣教師の派遣とスペイン領メキシコとの交易の後押しなどを政宗が請願したと説明、その後にゲスト出演した大泉光一氏は、その政宗の親書にある「六右衛門尉口上ニ而可申上候（常長が口頭で申し上げることがある）」という一文に注目して、政宗は表立って言えない事を常長に口頭で請願させていた、と指摘した。

そしてヴァチカン機密文書館に保管されている「ローマ教皇の回答書」の中に「剣と帽子の叙任」という文言があり、政宗親書に書かれていないことに対する回答であることから、これぞ常長に口頭で教皇に請願させた政宗の密命に対する答えではないかと推論したのである。

この「剣と帽子」について大泉氏は、定説はただ直訳していただけだが、剣は王座、帽子は王冠を意味し、王としての権威を象徴的に示す言葉であり、「カトリック王への叙任」の意味であると、反論した。そして、自分を「カトリック王」に叙任し「カトリック騎士団」の創設を認めてもらえば、日本国内の三〇万のキリスト教徒を味方に、幕府を倒して日本をカトリック王国にすると政宗は常長に口頭申立てさせたというのである。

しかし教皇の回答書には「剣と帽子に叙任する」に続いて「私たちは、主が許すならば、貴下（政宗）が請願した司教の任命と騎士団の創設に関する貴下たちの望みを解決するために努力するようにします」とあり、政宗がキリスト教徒になるなら請願は認めるが、ならないなら請願を認めることはできない、と教皇は答えていた。

騎士団とは、イスラムから聖地防衛と巡礼者保護を目的とした十字軍のこと、かつてイベリア半島にも派遣されており、入団はカトリック教徒が最低条件である。

しかし政宗は「自分は事情があってまだ洗礼を受けることが出来ないが、家臣や領民下々までキリシタンにする所存である」と、自分はキリシタンにならずに対価の叙任と交易の利を求めた政宗の策略は、教皇に見透かされて、請願は認められず、政宗の野望は失敗に終わった、と大泉氏は番組を締め括っていた。

歴史の定説を覆す大胆な論考に、同郷の学友を応援したいところだが、素朴な疑問が浮かんできた。

常長が口頭でカトリック王の叙任とカトリック騎士団の創設を請願していたことは、状況証拠から類推できるとしても、その請願が本当に政宗の本意であり、政宗の指示だったとする物的証拠はあるのだろうか。

番組の中で大泉氏は、幕府転覆の野望を幕府に悟られないよう政宗は文書でなく口頭で申立てさせたと答えていたが、通常、書状末尾に書かれる使者口上云々は、補足説明か、出状後に事情急変した場合の臨機応変な対応を指示する場合だろう。本文にない重要な秘密案件まで使者に口頭で申し立てさせるものだろうか。二人が呢懇な間柄ならともかく、異邦人が初見の教皇相手にである。

幕府による禁教と迫害の実情が伝わり、政宗が一地方領主に過ぎず日本の正式な代表ではないことが相手側に知られて難航する交易交渉を打開するため、政宗はローマ教皇とスペイン国王の助力でカトリック王として幕府転覆を狙っていると、ソテロと常長が独断で虚言を弄し方便を重ねて申し立てたとは考えられないだろうか。

政宗の海外への夢を開き、遣欧使節派遣を提案し政宗を説得し実現させたのはソテロである。政宗の抱く夢以上のものをソテロが描いていたにちがいない。ソテロの夢実現に邁進するあまり、暴走していたかもしれない。

政宗に絶大に信頼されて使節となり、太平洋から大西洋を渡海してスペイン国王とローマ教皇の謁見まで実現したソテロだが、政宗の教皇宛て和文書状をラテン語文に自分に都合よく翻訳していなかったとしても、恣意的に拡大解釈して通訳していた可能性は無いとは言えまい。

交渉が難航し追い詰められていた彼らの焦燥と挫折はいかばかりだったろう。主君の夢実現に翻弄され徒労な交渉を続けざるを得なかった二人こそ悲劇ではないか。

懐かしい東北弁に久方ぶりにメールすると、近刊著書『暴かれた伊達政宗「幕府転覆計画」』と平成二九年一月にテレビ放映された『歴史ミステリー「不屈の独眼竜伊達政宗　野望実現の城」のＤＶＤを送ってきた。

彼は、慶長遣欧使節に関する国内史料が極めて少なく、海外の一次史料を調べるには原文解読力を身に付けなければならないと、東京オリンピックの年にメキシコに留学して難解な古典ロマンス語（古典スペイン語と古典ラテン語等の総称）の習得に努力した行動家である。

その後スペイン、イタリアに渡り、半生を掛けて常長研究に関わる未発見の原史料を発掘して、従来の定説を覆す持論の政宗幕府転覆野望説に至ったと言っていた。

そして歴史研究の基本作業は、研究素材としての史料の収集と正確な解読であり、資料の信憑性と信頼性を検討する史料批判にあるが、我が国では、客観的な信憑性のある史料が存在しなくても、状況証拠だけで平然と歴史が創られ、公的機関や学者に後押しされていつの間にか通説となって定着している、と痛烈に批判していた。

送られてきた著書『暴かれた伊達政宗』の第二章「幕府転覆計画への転換」は、まさに彼の面目躍如である。

使節団の当初の目的地はメキシコだったが、ある事件が切っ掛けで渡航先がスペイン・ローマに変更、政宗の計画も幕府転覆計画へ舵を切ったのではと力説していた。

慶長十八年三月に使節船の建造が着手された時点ではまだ政宗の通商使節派遣の目的は家康と一致していたのだが、六月四日に江戸で大掛かりなキリシタン狩りがあり、三千人以上が棄教させられ、棄教を拒んだソテロ主宰の勢数多講に所属するキリシタン指導者二八人が処刑される事件が起きた。

主宰のソテロも逮捕され火炙り処刑執行直前だったが、幕府と進めていたメキシコ通商使節団の通訳兼案内役として政宗の陳情により釈放され、ソテロは仙台に逃れた。

しかし勢数多講のキリシタン二八人の斬首と自身の火炙り刑直前という体験で、徳川政権下での布教活動に絶望感を抱いたソテロは、キリシタンに寛容で未だ天下への野望を棄て切れていない政宗を説得、ローマ教皇の力を借りてスペインと軍事同盟を結び、徳川政権を倒すしかないと考えを変えたに違いない、と論じていた。

幕府の迫害で仙台に逃れてきた畿内キリシタン代表の瀧野嘉兵衛・伊丹宗巳・野間半兵衛三人も、ローマ教皇宛て畿内キリシタン四〇名の連署状を持参して使節団に加わり、サン・ファン・バウティスタ号に乗り組んだ。

そしてメキシコ訪問を終えた使節団は、伊達藩の一部と幕府の随行員ら大半が帰国する中、支倉一行二〇余名がひっそりメキシコからスペイン・ローマに向けて出発、ここから伊達藩単独の秘密外交が始まったのだという。

大泉君が送ってきた「歴史ミステリー：不屈の独眼竜伊達政宗」のDVDから彼の論拠を探ってみた。

○　使節団の通訳として同行したイタリア歴史家アマーティが、著書「伊達政宗の遣欧使節記」に、常長がスペイン国王に「我らの王国全てにおいて軍事力を備えておりますので、陛下のお役に立つ機会があれば力を尽くしたいと望んでいます」と軍事力提供を申し出たとある。

○　セビリア文化芸術院に、政宗のセビリア宛て親書が保管されており「キリスト教の聖なる教えの優れていることを拝聴し、それが神聖で正しい救いの教えであり、真の後世の道であることを知りました」と、幕府が禁じるキリスト教を賛美、理解していると伝えていた。

○　仙台藩で布教活動をしていた宣教師アンジェリスが、ローマのイエズス会本部宛てに日本の国内事情を書き送った書簡が、イエズス会本部文書館に保管されている。「天下殿（家康）は政宗がスペイン国王に遣わした使節のことを知っており、政宗は天下に対して謀反を起す気であると考えていた」と伝えており、当時の日本国内に政宗の幕府転覆の野望が噂されていたようである。

○　ソテロがスペインを国外追放同然にメキシコに渡ってから、スペイン帝国の植民地を統括するインディアス顧問会議宛てに「皇帝はキリシタンを迫害するが、政宗は依然これを保護している。そして政宗は自分の家臣たちにキリスト教徒になることを勧めて自ら洗礼を受ける考えがある。政宗は多くのキリシタンが日本に三〇万人位いることもよく承知している。幕府によって迫害を受けている者、彼らと手を結んで帝国（幕府）を攻撃することを希望していた」と書き送っていた。

この書状は常長一行をメキシコに迎えにきたサン・フアン・バウティスタ号の船長横澤将監に託した政宗の書状と横澤からの話を聞いて認めたというが、横沢が日本を出帆した元和二年八月は、大阪夏の陣が終わり、徳川の天下が盤石となり、政宗の盟友家康がこの世を去り、秀忠によるキリシタン迫害が更に激化した時期である。

それでもなお政宗の野望が健在だったとは、使節団の交渉が絶望的な現実を、政宗に伝えていなかったのだろうか。ソテロはまだ一縷の望みを抱いていたのだろうか。

政宗の遣欧使節派遣が討幕目的だったとは、あまりに荒唐無稽な話だと思うが、そういえばNHK大河ドラマ「独眼竜政宗」で見たことがあるとネット視聴してみた。

大河ドラマ第四一話「海外雄飛」で、渡辺謙扮する政宗が、さとう宗幸扮する常長に、スペイン無敵艦隊来援要請の密命を口頭で命じるシーンが、確かにあった。

大河ドラマの原作となった山岡荘八の小説「伊達政宗」にも、大阪湾にスペイン艦隊の来援を要請、混乱に乗じて大坂城内の切支丹勢力と呼応、娘婿で家康の六男松平忠輝を擁して天下を取る野望が書かれていた。

⑦箕作元八の政宗討幕説

政宗の討幕説は、明治後期に既に流布されていた。岡山県津山出身の西洋史学者箕作元八が、明治三四年にドイツの史学時報へ「彼（政宗）は日本の耶蘇教徒、西班牙並に羅馬法王の援助によりて、全日本を掌握せんと欲せしなり」と論文を発表、歴史学会で注目を浴びた。

箕作元八は、ヴァチカン古文書館で、日本耶蘇教信徒の羅馬法王パウル五世に呈した願書を見て、此研究の念を起したと云い、その論文要旨を、大正三年出版の「南亭史説集」の「伊達政宗羅馬遣使の目的」に書いている。

○　日本キリシタンの代表として遣欧使節団に加わっていた瀧野嘉兵衛・伊丹宗已・野間半兵衛の三人がローマ教皇に謁見した際に奉呈したローマ教皇宛て「畿内キリシタン四〇名の連署状（同年八月十五日付）」がヴァチカン機密文書館に所蔵されており、そこに「此人（政宗）日本にて一番之大名、知恵深き人にて御座候へは、日本之王（将軍）になり申との取沙汰御座候間」と、日本のキリシタンは政宗の日本王を望んでいると訴えていた。

○　日本基督信者の願書中に「大いなる門戸は既に開きぬ。上帝は上述の奥州の主を照耀したまひぬ。王（政宗）は其勢力の大なるに於いて、何人をも凌駕す。而して予等は王が出来得る限り早く、皇帝とならんことを期待すればなり」そして「當時日本の耶蘇教徒は政宗を日するに、未来の彼等の君主を以てし、政宗自らも其地に立たんことを厭はざりしは確かなり」と書いている。

○　常長が、スペイン国王に政宗書状で申合条々を呈して宣教師の派遣と同盟を申し入れ、更に常長が口頭で「彼（政宗）の身體、彼の領国並に彼の有する一切の者を陛下の保護の下に置き、而して彼の親誼と彼の忠勤とを捧げんことを欲す」と奏したとある。

○　ヴェニス公使の政府あて報告に、使節中のソテロの発言に「彼の王（政宗）は今後幾くもなく、今より一層高き冠（将軍）を戴くべく、其時に及べば、彼自ら濾馬教会の基督教信者となるのみならず、併せて一切の他の者をも之に引き入るべし」と確信せりとあったという。

確かに政宗はキリシタンに寛容で、仙台領内に教会の建設や宣教師の招致を勧奨しており、家臣後藤寿庵の水沢福原地区は、奥州キリシタンの聖地として、幕府の迫害から逃れるキリシタンが全国から流入していた。

弾圧されるキリシタンの救世主として期待され、政宗も意識してそう思わせてきた節があったかもしれないが果たして本当に政宗は討幕まで考えていたのだろうか。

父輝宗以来家康と蜜月な関係にあり、仮に天下への野望はあったとしても、秀吉との確執に幾度も救いの手を差し伸べてきた家康の信頼を裏切ってまで、政宗が徳川幕府の転覆を画策していたとはとても思えない。

⑧高橋富雄の奥州王主権外交論

手元に東北古代史研究の第一人者といわれる高橋富雄編「伊達政宗のすべて（昭和五九年発行）」がある。

奥州藤原氏のルーツに興味を抱いていた二〇年程前に古本屋で偶然見つけた文庫本「奥州藤原氏四代（昭和三三年）」で、著者高橋富雄の名を初めて知ったが、その後、東北古代史講演会の講師の先生方が、高橋富雄ゼミだったことを誇らしげに語られることから、東北古代史専門の高橋富雄先生が、近世の伊達政宗について何を語るのか、興味があり買い求めていた。

冒頭の項「伊達政宗とその時代」で、小田原遅参の秀吉謁見、葛西大崎一揆と和賀一揆の煽動、家康発病時の政宗謀反騒動、秀忠の政宗邸での饗応騒動など、なぜ政宗はかくもしばしば無謀としか言いようのない冒険を繰り返すのか、そこに「政宗の戦国主張」があったという。

戦国大名は、夫々の領国を独立国家として支配統治する主権的な存在であり、秀吉と家康の天下人支配の統一主権体制が確立してなお、政宗は、その体制内に独立大名の主張を持ち続けた、最後の独立戦国大名であった。

戦国は主権と主権の戦いであり、前田も毛利も上杉も島津も、一度は戦国の主張に賭け、失敗すると二度と冒険に賭けようとしなかったが、政宗は生涯、戦国の道を体制の中で追い続けて、比類ない個性と政治家の素質が、いつも破局から救ってきたという。政宗の冒険は、すべて徒労に終わったが、それだけの冒険にもかかわらず、伊達六二万石は厳然として残ることが出来た。

曽祖父稙宗が陸奥国守護職に任命されて秀衡以来と称された。それは伊達に平泉時代相当の半独立公権が政治的に付与されたことを意味しており、政宗はこの東北天下人の論理を主張、奥州に自治が許される正義を信じ、後に奥州にキリシタン王国創設を夢見たのであろうか。

次の項「慶長遣欧使節」で、慶長遣欧使節は重い国家的使命を帯びた外交使節であり、徳川の統一封建制のもと、一切の国家的外交権が否定されていた大名に、外交自治権・領邦国家主権が復権する事になる山々しき国家問題であり、政宗はかなり危険な賭けをしていたという。

政宗は皇帝（将軍）の委任を受けて外交権を代行する形態をとっていたが、これは隠れ蓑で偽装に外ならず、実際は皇帝権（幕権）の白紙委任、奥州王の主権外交であり、国家間交渉を平和通商条約という形で締結する近代の国際感覚を、既に政宗は身に付けていた。

条約内容も皇帝（将軍）の外交とは正反対で、切支丹の積極拡大と旧教国との締結を進め、更に奥州国王権の上にスペイン皇帝権を宗主権として承認する主権移譲の同盟条約で、幕府への反逆になるのは明らかである、と古代東北史研究の権威は、政宗の野望を指摘していた。

⑨消えた常長の道中記

慶長遣欧使節に関する一次史料は、禁教と弾圧の日本国内には一切残っておらず、全て海外史料だけ、と言われていたが、実は常長の道中記らしき書物十九冊が、仙台藩評定所の切支丹所に保管されていたという。

その常長道中記は、明治の廃藩置県で藩から県に引き継がれたが、明治十二年頃に県庁から持ち出され、以来所在不明になってしまったらしい。誰かが私欲で持ち去ったのか、仙台藩にとって不都合なことが書かれてあるとして隠匿あるいは抹殺されてしまったのか。

この消えた常長道中記の中身を見て記録に残した人物がいた。蘭学者で仙台藩侍医の大槻玄澤である。

大槻玄澤は、二二歳で江戸に遊学、解体新書で有名な杉田玄白に医術を、前野良澤にオランダ語を学び、二人の師の一字をもらい玄澤を通称に、二六歳でオランダ語の入門書を著し、後に長崎に遊学、江戸に日本最初の蘭学塾「芝蘭堂」を開き、仙台藩の侍医に抜擢されていた。

その子大槻磐溪は開国論者で、戊辰戦争で薩長新政府に対抗する奥羽越列藩同盟を提唱して謹慎幽閉され、教え子の但木土佐と玉虫左太夫は、仙台藩の主戦派指導者として斬首刑に処された。磐溪の子大槻文彦は、日本初の近代的国語辞典「言海」を編纂した国語学者で、後に仙台市北山の光明寺で支倉常長の墓を発見している。

大槻玄澤は、文化九年（一八一二年）仙台に下った折、藩侯に請い、仙台城の切支丹評定所に収められている支倉南蛮将来の諸道具の一覧を許されて、その調査記録を『金城秘韞』上下二巻に著した（次頁右参照）。

玄澤は、切支丹所で調べ上げた常長持帰器具を下巻に図解を交えて記録、天帝御影、支倉六右衛門畫像、打掛、合羽、鞍、鐙などを列記するなか「切支丹諸道具入箱」の中に「書物大小拾九冊」あったと記していた。

以前その書物を見た旧藩士一條彌三郎が「六右衛門が手帳の如きもの、十余冊ありき、その中に、暦の如く、日本西洋の月日を対照するよう記したるあり、又、道中記の如きもありし」と語ったと大槻文彦の金城秘韞補遺にあり、常長の遣欧日誌だったようである。

玄澤はこの常長の書物について「三〇有余品の諸器物が初めて目に触れる物多く、かつ初冬の短景の僅かに未申二時（夕方四時間）草卒に（慌ただしく）見過ごす所にして審らかに弁別するに及ばず、細視熟覧する事をえず遺憾なり」と言いながら「日本紙へ認たるものなり、これは六右衛門等覚書聞書と見ゆるかな本なり、法教の事にや、草卒の際、取りあげ読みても見ず、尤も読みても解すべきものにもあるまじ、併に熟覧しなば、廻歴せし国々の事等の荒増は知るべきか。奇怪の事書き集めしものとも見へず」と添書きしていた（次頁左参照）。

玄澤は藩から事前に貰った伊達治家記録の抜き書に「今度呂宗よりの便船に帰朝す。南蛮国の事物六右衛門物語の趣奇怪尤多し」とあり、伊達氏正史の治家記録に常長の書物類が奇怪多しとあることを承知で、敢えて「奇怪の事書き集めしものとも見へず」と記していた。

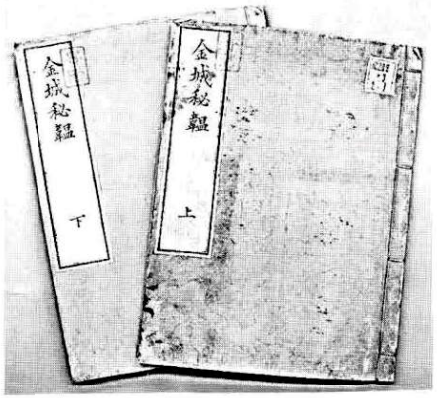
時間が足りず細かく調べられなかったと言いながら、常長の書物をよく読まなければ、治家記録の記述を否定するようなことは書けないだろう。しっかり読んでいたからこそ、奇怪ではなかったと書けたのではないか。玄澤の最大の関心事は、常長道中記だったにちがいない。

治家記録は、切支丹禁制を布く幕府を憚り、常長の書物類を奇怪多し、と書かせたのだろうが、和蘭の学に通じた幕末の玄澤は「今は分明なる海外の事情も、当時にありて不審なりしは、論なき事」と、鎖国当時では奇怪な書物と評したのもやむを得ないと書いていた。

常長道中記の現物が所在不明な現在、その道中記を読んだ玄澤の記述は、遣欧使節の真の目的を知る貴重な手懸りであり、玄澤が使節派遣は決して奇怪なものではなかったと、後世の我々に発信しているようである。

今年（二〇二〇年）は、常長の帰国四〇〇年である。所在不明になっている常長の道中記が現れない限り、慶長遣欧使節の派遣が政宗の夢だったのか、野望だったのか、永遠に謎のままである。

大槻玄澤著「金城秘韞」上下巻



一切支丹諸道具入箱　壹ツ
　内一御影板金　壹枚
　　これ聖母の像なり側に人物あり
一かけ絵　四ツ
　これは日本表具なり其中一ツはマリアの像なり
一書物　大小拾九冊
日本紙へ認たるものなりこれは六右衛門等覚書聞書と見ゆるかな本なり法教の事にや草卒の際取りあけ讀みても見すぐよみても解すべきものにもあるまじ併熟覧しなば廻歴せし國々の事等の荒増は知るべきか奇怪の事書あつめしものとも見へず

明治時代の著述者
渋江保の一生（その二十）

山本勉

第十期　大学館時代から晩年③（東京）一九〇三年（明治三十六年）～一九三〇年（昭和五年）四月

漢訳『万国戦史』を彩る清末中国人留学生と出版社

一　漢訳『万国戦史』の概要

渋江保の代表作とも言える『万国戦史』は、別表『万国戦史概要』にあるように、今わかっているものだけでも全二十四冊のうち十四冊が中国語に翻訳され出版されている。このうち十一冊は渋江が執筆したものである。国立国会図書館では、九九八年（平成十年）に「国立国会図書館電子図書館構想」を策定し古典籍資料の画像提供に着手、二〇〇一年（平成十三年）に明治期刊行図書のデジタル化を始めた。渋江保の『万国戦史』も二〇一一年（平成二十三年）にデジタル化されているが、中国においても少なくとも五冊がデジタル化されていることがわかっている。その中には、日本のデジタル化に先駆けて復刻デジタル化されている『万国戦史』もある。これは隣国中国において渋江の『万国戦史』が今なお高い評価を得ている証左と言える。

二　『万国戦史』の漢訳の訳者と出版社

渋江保が清末の革命家たちと交遊を深めていたことは前号で触れたが、漢訳『万国戦史』には日本とかかわりの深い訳者や出版社が存在している。以下に現時点でわかっている訳者、出版社を記載する。

（一）訳者　括弧内は漢訳万国戦史名

○『英清鴉片戦史（英人強賣鴉片記）』湯叡訳

○『露土戦史（露土戦紀）』湯叡訳

○『波蘭衰亡戦史（波蘭遺史一巻・波蘭遺史）』陳濬然訳

○『波蘭衰亡戦史（波蘭衰亡史）』薛公侠訳

○『普墺戦史（普奥戦史七編附録一編）』趙大驥訳

○『英國革命戦史（英國革命戦史）』薩憂敵訳
○『英國革命戦史（英國革命戦史）』薩夏敵訳
○『佛國革命戦史（佛國革命戦史）』蔣維喬訳
○『印度蚕食戦史』汪郁年訳

（二）出版社

出版社名、所在地、創設年度、創設者、出版された万国戦史名（数字は巻数）の順で記載する。調査中でもあり現時点で不明な項目もある。

○商務印書館
（上海、一八九七年、夏瑞芳・鮑咸恩・鮑咸昌・高凤池等、⑧普墺戦史・⑨ナイル海戦史・⑭伊太利独立戦史・⑮米國独立戦史・⑱佛國革命戦史）
○作新社図書局
（上海、一九〇二年、戢翼翬・卞田歌子、⑭伊太利独立戦史・⑮米國独立戦史・⑰英國革命戦史）
○廣智書局
（上海、一九〇〇年代初頭、梁啓超・康有為、⑭伊太利独立戦史）
○開明書店
（上海、一九二六年、章錫琛・章錫珊、⑫印度蚕食戦史・⑰英國革命戦史）
○人演訳社
（上海、創設年度不明、創設者不明、⑱佛國革命戦史）
○大同譯書局
（上海、一八九七年、康廣仁、②英清鴉片戦史・③拿破崙戦史・⑥露土戦史・⑦米國南北戦史・⑩波蘭衰亡戦史・⑬英米海戦史）
○京師五道廟售書處
（所在地不明、創設年度不明、創設者不明、⑥露土戦史）
○東京譯書彙編社
（東京、一九〇〇年、戢翼翬、⑩波蘭衰亡戦史）
○上海鏡今書局
（上海、一九〇三年、陳養源、⑩波蘭衰亡戦史）
○励学社
（蘇州、一九〇一年、包天笑・汪郁年・戴昌熙、⑫印度蚕食戦史）
○支那翻訳社
（所在地不明、創設年度不明、創設者不明、⑰英國革命戦史）

三　漢訳『万国戦史』の意義

漢訳された『万国戦史』は二十四冊中限られた戦史であり、同じ巻数の『万国戦史』が複数の出版社から刊行されていることがわかる。当時『万国戦史』が漢訳出版されたことは、訳者や出版社が如何に渋江の著作をとおして当時の世界の状況をいち早く国民に知らせ、列強による瓜分の危機に直面していた清末中国に警鐘を鳴らそうとしていたかが伺える。次号からは漢訳『万国戦史』の訳者、出版社について述べてみたい。

万　国　戦　史　概　要（渋江保　代表作）

巻数	書　名（上段） 総頁数（下段）	掲載執筆者（上段） 実質執筆者（下段）	出版年月日（西暦）〈上段〉 出版年月日（元号）〈下段〉	漢訳	マイクロ化	戦史テーマ
1	独佛戦史 322頁（広告掲載頁　14頁含）	川崎三郎 （川崎三郎）	1894年9月28日 （明治27年9月28日）			列強間覇権争い
2	英清　鴉片戦史 305頁（広告掲載頁　24頁含）	松井廣吉 （渋江保）	1894年10月27日 （明治27年10月27日）	○	○	植民地獲得戦争
3	拿破崙戦史 506頁（広告掲載頁　0頁）	野々村金五郎 （野々村金五郎）	1894年12月4日 （明治27年12月4日）	○		列強間覇権争い
4	英佛聯合征清戦史 315頁（広告掲載頁　5頁含）	松井廣吉 （渋江保）	1894年12月31日 （明治27年12月31日）			植民地獲得戦争
5	トラファルガー海戦史 304頁（広告掲載頁　12頁含）	越山平三郎 （越山平三郎）	1895年1月31日 （明治28年1月31日）			海戦
6	露土戦史 318頁（広告掲載頁　7頁含）	松井廣吉 （渋江保）	1895年2月28日 （明治28年2月28日）	○		植民地獲得戦争
7	米國南北戦史 320頁（広告掲載頁　7頁含）	松井廣吉 （渋江保）	1895年3月26日 （明治28年3月26日）	○		人権戦争
8	普墺戦史 336頁（広告掲載頁　3頁含）	渋江保 （羽化生　渋江保）	1895年5月15日 （明治28年5月15日）	○		列強間覇権争い
9	ナイル海戦史 302頁（広告掲載頁　5頁含）	越山平三郎 （越山平三郎）	1895年6月18日 （明治28年6月18日）	○		海戦
10	波蘭衰亡戦史 329頁（広告掲載頁　3頁含）	渋江保 （羽化生　渋江保）	1895年7月16日 （明治28年7月16日）	○	○	植民地獲得戦争
11	クリミア戦史 329頁（広告掲載頁　7頁含）	松井廣吉 （渋江保）	1895年8月18日 （明治28年8月18日）			植民地獲得戦争
12	印度蚕食戦史 356頁（広告掲載頁　3頁含）	渋江保 （渋江保）	1895年9月20日 （明治28年9月20日）	○		植民地獲得戦争
13	英米海戦史 314頁（広告掲載頁　9頁含）	越山平三郎 （越山平三郎）	1895年10月17日 （明治28年10月17日）	○		海戦
14	伊太利独立戦史 334頁（広告掲載頁　3頁含）	松井廣吉 （渋江保）	1895年11月19日 （明治28年11月19日）	○	○	独立戦争
15	米國独立戦史 331頁（広告掲載頁　4頁含）	渋江保 （渋江保）	1895年12月19日 （明治28年12月19日）	○	○	独立戦争
16	希臘独立戦史 308頁（広告掲載頁　10頁含）	柳井録太郎 （渋江保）	1896年1月23日 （明治29年1月23日）	○		独立戦争
17	英國革命戦史 328頁（広告掲載頁　7頁含）	渋江保 （羽化生　渋江保）	1896年2月17日 （明治29年2月17日）	○	○	革命戦争
18	佛國革命戦史 336頁（広告掲載頁　6頁含）	渋江保 （渋江保）	1896年3月20日 （明治29年3月20日）	○		革命戦争
19	三十年戦史 338頁（広告掲載頁　8頁含）	国府犀東 （国府犀東）	1896年4月24日 （明治29年4月24日）			古代戦史
20	フレデリック大王七年戦史 352頁（広告掲載頁　4頁含）	渋江保 （渋江保）	1896年5月18日 （明治29年5月18日）			国内統一戦争
21	シーサルボンペー　羅馬戦史 334頁（広告掲載頁　8頁含）	岸上質軒 （岸上質軒一部を渋江保）	1896年6月26日 （明治29年6月26日）			古代戦史
22	羅馬、加達額爾　ピュニック戦史 333頁（広告掲載頁　4頁含）	渋江保 （渋江保）	1896年7月19日 （明治29年7月19日）			古代戦史
23	歴山大王一統戦史 326頁（広告掲載頁　9頁含）	渋江保 （渋江保）	1896年8月17日 （明治29年8月17日）			古代戦史
24	希臘波斯戦史 325頁（広告掲載頁　9頁含）	渋江保 （渋江保）	1896年9月24日 （明治29年9月24日）			古代戦史

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）（五）

匠　克仁

〈時系列〉

一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年三月三十一日　良香、東西信販を退職
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット入社
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証が東西信販から京亜クレジットへ全株株式譲渡
二〇一八年三月一日　良香・御木アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇一八年四月一日　エリア総合職制度の導入
二〇一九年一月三十一日　システム課長への退職勧奨
二〇一九年四月一日　エキスパート制度の導入
二〇一九年五月二日　懲罰委員会の設置
二〇一九年九月二日　セクハラホットライン設置
二〇一九年十月一日　リウォード制度の導入
二〇一九年十一月一日　第一〇回懲罰委員会
二〇二〇年一月二日　リウォード制度授賞式

〈登場人物〉

弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
東西信販から京亜クレジットを経て転籍
御木武利　アサヒ信用保証会長
京亜クレジット常務から転籍
細丸義男　アサヒ信用保証前人事部長
東西信販から出向・転籍
猪本進一　アサヒ信用保証前会長（創業社長）
東西信販から社内ベンチャーで創業
立花豊　アサヒ信用保証社長（二代目）
東西信販から創業時に出向・転籍
高畑巌　アサヒ信用保証法務担当マネージャー

5　リウォード（報酬）制度

二〇二〇年二月三日月曜日に全国マネージャー会議が開かれた。札幌支店から福岡支店までの各支店長と本部のマネージャー職より上の職位の全員が本店の会議室に集まる。

その最後にリウォード制度の社内論文制度の表彰式が行われた。

二〇一九年十月一日に自己啓発を奨励するためにリウォード制度という名前で弓本良香が新設した。リウォードというのは報酬・報いという意味である。

懲罰委員会が賞罰委員会とならなかったことで、良香は別に報酬制度を設けたのであった。

東西信販グループ時代から資格取得制度と社内論文制度があった。しかし、資格取得しても社内論文を提出しても報われないという不満があった。資格を取得する社員は少なく、社内論文は提出する人がいなかった。

資格の方は家賃保証会社に関係のある資格として宅建士（宅地建物取引士）など難易度に合わせて、報奨金が貰えるようにした。宅建士の報奨金は七万円である。

良香自身が二〇一九年十月二十日に宅建士の試験を受けて、十二月四日に合格の発表があった。十月のリウォード制度の新設だったので、七月末に申込みの締め切りの宅建士試験を他に受験した人はいなかった。宅建士の合格者は良香一人だけであった。

最初から自分が宅建士に合格するつもりでリウォード制度を決めていた。その点は良香は抜け目が無く、報奨金対象の第一号になったのである。

もっとも他の社員に不公平感を持つといけないので、報奨金を辞退するという慎ましい態度を取った。

リウォード制度のもう一つは社内論文である。これは報奨金と人事異動でも報われる制度である。論文の内容が優れていれば、内容に相応しい部署に異動ができるようにした。実質的に人事異動についての自己申告制度にもなっていた。

報奨金については資格と論文で総額で最大百万円の予算をつけている。会長賞・優秀賞・佳作などで論文の評価に応じて分配される。

これは単に論文で提案するだけでなく、その内容が実現しないと貰えないので、かなり基準は高くなっている。

最優秀の論文は会長賞としていた。これはリウォード制度を新設したのが御木武利会長ということに建前上でなったからである。

部下の功績は全て自分の手柄にして自分の失敗は全て部下に押し付ける会長らしいやり方である。

「それでは第一回リウォードの優秀論文の会長賞を発表します」

良香が司会役を務めていた。

「第一回の会長賞は『民法改正と組織改革』です。管理部で法務グループの高畑巌マネージャーが受賞者です。今回は会長賞のみで優秀賞・佳作は残念ながらありませんでした。審査員の協議の結果、報奨金は三十万円が受賞者に与えられることになります」

会場から大きな拍手が鳴った。これは高畑マネージャーの人望かも知れないと良香は思った。高畑は上司には不遜な態度を取るが、面倒見がよく、同期や後輩に好かれている。

「今回の報奨金については論文の内容というよりも、社内制度の革新に寄与することの対価となっています。そのため、報奨金の支給については組織変更を実施後になります」

報奨金を一人で総取りになったが、それに対して会場では非難がましい声はなかった。

高畑が全員の前に立って一礼した。御木会長が賞状を読み上げて手渡すと、また会場で拍手が鳴った。会長は苦々しい顔つきである。

会長賞だから、御木会長が賞状を渡すのが当然といえた。しかし、この二人が敵対している事実は社内に知れ渡っている。

会長賞を高畑マネージャーが受賞するのは運命のいたずらだと良香は感じた。

審査員の一人である会長が高畑の受賞に猛反対していた。しかし、高畑の論文の内容は社長を含めた他の審査員全員が絶賛するものであった。

そして現実に論文の指摘に基づき、三月二日月曜日付けで社内組織を大きく編成することが決まっている。

良香は高畑に論文の内容説明を事前に依頼していた。良香がうながすと、高畑が話し始めた。

「二〇一七年六月二日に民法が制定以来百二十一年ぶりという大改正の公布がされました。公布後三年以内の施行になっていましたが、二〇二〇年四月一日の施行となりました。

改正民法の施行まで、あと二ケ月しか残されていません。私は会社の現状に危機感を抱いたため、上司宛にあてに直訴しようと思いました。しかし、それで経営陣に届く前に握りつぶされそうな気がしたので…」

高畑には珍しく微笑んだ。

「握りつぶされないように社内論文制度に応募したのです。ちょうど十月にリウォード制度が始まったので、タイミングが良かった」

それから続けた高畑の説明を要約すると、次の内容になる。

民法の債権法に関しては今まで百二十年以上も大きく変わっておらず、現在の社会に対応できていなかった。民法の債権法が施行後に初めて大改正となる。特に大きく変わるのが第一に保証のルール、第二に賃貸借のルールである。しかもこの賃貸借は不動産を対象としたものが大きく変わる。

この民法改正で最も影響を受けるのが、家賃保証会社かもしれない。不動産の賃貸借の保証を主な業務とする我が社（アサヒ信用保証）にとっては甚大な不利な影響を受ける。

広範囲に多くの改正があるが、それを論文を読んでもらうとする。一例を挙げると、極度額という保証の最大限度額がある。個人保証においては極度額を設定しないと保証そのものが無効になることに改正される。

ただし、我が社のような保証会社がする保証は極度額は無い。

現在の組織体制では現場で管理できる状況でない。

本論文では、第一部で具体的な法改正が各部門に与える影響を詳述している。第二部で法改正に対応する会社組織の変更を提案した。現在の営業と審査が完全に分離できていない点は新しい民法のもとでは対応できない。

地方支店では人手不足により営業と審査を兼任している場合がある。これは良くないので、地方支店の審査をする第二審査部など提案した。事務・審査なども含めて完全に分離した組織体制とした。

リーガルつまり法的チェックするのは現在は管理部の一部門になっている。つまり、私（高畑）の所属する法務グループだが、現場で疑念のある場合に私のところへ相談するのが現状である。

そもそも営業の現場で疑念すらなければ、法律上、問題のある案件が見逃されるケースがあるかもしれない。これは従来から私が指摘したことである。

組織横断的にするため、部と別の独立した組織体制とした。論文ではコンプライアンス室としている。基本的に全業務の内、事前に決めた対象外の業務以外はコンプライアンス室を通すことにした。

稟議であれば、通常決裁ラインと並行してコンプライアンス室にも稟議を上げ、両方の決裁が必要とする。

以上のような話を高畑が説明し終わると、会場から三度目の拍手が起こった。

これで会長賞の水準ができたと良香は安堵した。リウォード制度として新設しても、第一回目の受賞作が平凡なものであれば、二回目以降の受賞作もレベルが低くなる。まして、受賞作が無いのでは、制度として続かないと不安を感じていた。

最後に立花社長が話した。

「民法改正については企画部でもプロジェクトを組んで対応していた。しかし、高畑君が個人的に先回りして社内論文で提案してくれた。

結果として企画部での案は否定され、高畑君の論文に

基づく組織変更で企画部で進めるように変更された。企画部全体が高畑君一個人に負けたわけだ」

（表彰の場で企画部の悪口を言わなくても）

良香は眉をしかめた。企画部長が京亜クレジットからの出向なので、チームワークがまとまっていないとの話は良香も聞いていた。

そのこともあり、民法改正に対応する準備が進んでいなかったのは事実である。

（これでは表彰された高畑が恨まれる）

人望がある高畑であるが、嫉妬を買うかもしれない発言であった。

「東西信販の時から法律に強いということで有名だった。今回の論文で新設を主張しているコンプライアンス室長にふさわしい人物だと思う」

立花社長の言葉に良香は唖然とした。

公の場でほめ言葉や冗談でも社長の立場で人事の話をするものでない。実現しても、しなくても何らかの禍根を残す。社長が昇進人事をリークしているようであった。マネージャー以上の出席する場で言う言葉でなかった。

（相変わらず昔と変わっていない）

立花社長は、良香が東西信販を退職したときの直属の上司である。当時から人事の空手形を連発していたのを良香は思い出した。

『君は東西信販の女性として最速昇進だな』

良香自身が東西信販時代に当時の立花からその様に言われていた。

しかし、実際に第一次選抜と言われた昇格人事が発表されたときに良香の名は無かった。良香よりも営業成績も昇進試験も悪い同期の男性は昇格していた。

『どうせ女は辞めるからな』

当時の昇格人事の後に立花がそう言ったということを複数の同僚から聞いた。

二〇〇〇年の話で二十年も前なのに昨日のことのように良香は覚えていた。その時のことを思い出して、良香は唇を噛んだ。

社長が不用意な発言を続けそうだったので、司会役の良香が割って入った。

「論文は四百字詰原稿用紙に換算して百枚にも及ぶ大論文になっています。文字数はあえて制限を設けませんでしたが、忙しい業務の合間にこんな長い論文を書いただけでも驚嘆に値します。社内ネットに掲載しますので、自分の関係する部門のところだけでも読んで下さい」

それからマネージャー会議の終了予定時間が大幅に過ぎていることを口実に表彰式の終わりを告げた。

表彰式からの四日後の二月七日金曜日、ミニ取締役会を終えた会長から良香は呼ばれた。

「今月末で高畑を解雇しろ。ミニ取締役会で決まった」

唐突に会長は良香に告げた。突然で良香は戸惑った。

ABCDE……Z

匠　克仁

ＡＢＯ式等の血液型について書く。血液型はＡ・Ｂ・ＡＢ・Ｏ型の四種類と言われているが、もともとＡ・Ｂ・Ｃ型の発見で、ノーベル賞を受賞した。Ｒｈ式血液型はＤ抗原が有るのが＋で、無いのが－である。さらにＣとＥ抗原の組合せで分類する。動物にも血液型が発見されＦ抗原と発見者フォルスマンの頭文字が付けられた。

Ｇｌｏｂ式血液型は糖脂質のグロボシドで分類する。

Ｈ式血液型のＨはヒト＝Ｈｕｍａｎの頭文字である。

Ｉｎｄｉａｎ式血液型というインド人特有のもある。

Ｊｋ抗原による血液型もあり抗体が発見された女性名のＫｉｄｄ式血液型である。白血球にも血液型があり、ＨＬＡ（ヒト白血球型抗原）という。抗原を作る遺伝子がＭＨＣ（主要組織適合遺伝子群）である。赤血球ではＭＮＳ（ＭＮＳｓとも）式血液型が二番目に発見された。

Ｏ型というが、ヨーロッパでは０（ゼロ）型ともいう。

Ｐ式血液型が三番目に発見された。後になって日本人がＱ式血液型を発見したが、Ｐ式と同じと統一された。

Ｒｈ式血液型がアカゲザルから四番目に発見された。

Ｓ型は豚と牛にはある。（馬と羊と山羊にはない）

Ｔ型は馬と牛にはある。（豚と羊と山羊にはない）

Ｕ型は馬にはある。（牛と豚と羊と山羊にはない）

ＶｌＷ式は山羊にある。人間のＡ型Ｂ型のようにＶ型とＷ型の組み合わせになっている。

ＸｌＺ式は羊にある。Ｘ型とＺ型の組み合わせである。

Ｙ型の動物っているかと思ったら、なんと鰹にあった。

Ｚ型は牛にある。（豚と馬と山羊にはない）

ＡＢＯ式やＲｈ式以外も血液型がある。国際輸血学会（ＩＳＢＴ）には37種類が認定されている。

「ＡＢＯ」　エービーオー
「ＭＮＳ」　エムエヌエス（ＭＮＳｓともいう）
「Ｐ１ＰＫ」　ピーワンピーケー（Ｐ式の現在の名）
「Ｒｈ」　アールエイチ
「Ｌｕｔｈｅｒａｎ」　ルセラン
「Ｋｅｌｌ」　ケル
「Ｌｅｗｉｓ」　ルイス
「Ｄｕｆｆｙ」　ダッフィー
「Ｋｉｄｄ」　キッド
「Ｄｉｅｇｏ」　ディエゴ
「Ｙｔ」　ワイティー
「Ｘｇ」　エックスジー
「Ｓｃｉａｎｎａ」　シアンナ
「Ｄｏｍｂｒｏｃｋ」　ドンブロック
「Ｃｏｌｔｏｎ」　コルトン
「Ｌａｎｄｓｔｅｉｎｅｒ／Ｗｉｅｎｅｒ」（ＬＷともいう）　ラントシュタイナー／ヴィーナー
「Ｃｈｉｄｏ／Ｒｏｄｇｅｒｓ」　シド／ロジャーズ
「Ｈ」　エイチ（Ｈｈともいう）
「Ｋｘ」　ケーエックス
「Ｇｅｒｂｉｃｈ」　ジェルビッチ
「Ｃｒｏｍｅｒ」　クロマー
「Ｋｎｏｐｓ」　ノップス
「Ｉｎｄｉａｎ」　インディアン
「Ｏｋ」　オーケー
「Ｒａｐｈ」　ラフ
「Ｊｏｈｎ　Ｍｉｌｔｏｎ　Ｈａｇｅｎ」（ＪＭＨ）　ジョン・ミルトン・ハーゲン
「Ｉ」　アイ（Ｉｉともいう）
「Ｇｌｏｂｏｓｉｄｅ」　グロボシド（Ｇｌｏｂｏともいう）
「Ｇｉｌｌ」　ギル
「ＲＨａｓｓｏｃｉａｔｅｄｇｌｙｃｏｐｒｏｔｅｉｎ」（ＲＨＡＧ）　アールエイチアソシエイティッドグリコプロテイン
「ＦＯＲＳ」　フォルス
「ＪＲ」　ジェーアール
「ＬＡＮ」　ラン
「Ｖｅｌ」　ベル
「ＣＤ５９」　シーディーフィフティナイン
「Ａｕｇｕｓｔｉｎｅ」　オーガスティン
「ＫＡＮＮＯ」　カノ

ＫＡＮＮＯは令和元年八月に日本医療研究開発機構（ＡＭＥＤ）の支援で日本人が発見したものが認定された。ＫＡＮＮＯ（カノ）は、日本人患者のカンノさんである。ＰＰ（プライバシーポリシー）は問題ないのかな。ぼくがＫＡＮＮＯ（カンノ）さんの立場であれば、自分の名のＫＡＮＮＯ（カノ）を付けられるのは嫌だ。この人は

ＡＢＯ式等36種類の血液型に適合しても輸血できないとＩＢＳＴを通じて、公表しているようである。ＫＡＮＮＯさんが40代に子宮筋腫摘出を受けた女性というのはＰＰに反する情報と思う。（ただし手術は28年前）

ＫＡＮＮＯと同様にＫｉｄｄ・Ｄｉｅｇｏ・Ｋｅｌｌ・Ｄｕｆｆｙ・Ｌｅｗｉｓも患者・血液提供者名である。

Ｋｉｄｄ式血液型でＪｋ抗原について述べたが、これはＫｉｄｄ夫人が第6子Ｊｏｈｎ君を出産した際に発見しＪｏｈｎＫｉｄｄからＪｋ抗原と名付けた。ＫｉｄｄのＫｉｄ（子）の名前を付けてもよいだろうか。赤ん坊のＪｏｈｎちゃんが名前を使われるのを拒否できない。

「Ｊｏｈｎ！お前は他の人と違う血が流れているだろ」とＪｏｈｎちゃんがいじめられたかもしれないでないか。

ＡＢＯ（Ｃ）式血液型を発見したラントシュタイナー（Ｌａｎｄｓｔｅｉｎｅｒ）博士はＡＢＯ式だけでなくＭＮ式（現在のＭＮＳ（ｓ）式）も発見している。さらにＰ式（研究が進みＰ１ＰＫ式）も発見している。さらにＲｈも弟子のヴィーナーと発見しているのである。ＡＢＯ（Ｃ）の発見が１９００年であるが、その40年後にＲｈを発見した。実験中に心臓麻痺で亡くなった。彼はＡＢＣ型でノーベル賞を貰ったが。その後に別の学者がＡＢ型を発見した。それでＣ型はＡでもＢでもないのでＯ型にした。当初は０（ゼロ）型である。次に発見したＭＮ式のＭは「免疫の」という形容詞のｉｍｍｕｎｅのＭを付けたという。そしてＮの方も同じｉｍｍｕｎｅのＮを付けたという。さらにその次に発見したＰ式はＭＮＯを使ったので。意味なく、次の文字Ｐを使った。このＭＮＳ式のＳは別の研究者が発見したＳｓ式である。ＭＮ式とＳｓ式の抗原が４番染色体に近接しているためＭＮＳ（ｓ）式として統合したのである。ちなみに、ＳはＳｙｄｎｅｙ（オーストラリアの都市）のＳである。

Ｓｓ式というが小文字ｓもＳとは別の抗原なので例えばＴなど大文字の別の字を当てないと誤解する。実際にはＳ遺伝子とｓ遺伝子は優劣関係がないのである。ｓではＳ抗原がないだけと誤解しそうである。ＩＳＢＴではＭＮＳ式となっているが、３つでなく４つ抗原があるのでＭＮＳｓ式の方がいいとぼくは個人的には思う。さらにＵ抗原が関連するということでＭＮＳｓＵ式ともいう。

ＬＷ（ラントシュタイナー／ヴィーナー）式の血液型のＬＷはＲｈ式を共同発見した二人である。しかしながらＬＷ式はＬ氏とＷ氏が名付けたのでない。当初、ＲｈとＬＷの抗原が一緒だと思われていた。後に研究が進んでＬＷとＲｈの遺伝子は別と分った。Ｒｈは１番染色体でＬＷは１９番染色体である。アカゲザルの抗原が実際はＬＷ式でＲｈ式でなかったのである。Ｒｈをそのままでは式を作りＬ氏とＷ氏の名前を冠した。どう考えてもＬＷ式とすると混乱してしまい、別の名が良いと思う。

ＩＳＢＴの血液型の番号は、ＡＢＯ＝１・ＭＮＳ＝２

・P1PK＝3・Rh＝4・LW＝16となっている。

ABOのように他の血液型も抗原名で統一してほしい。

ABO式血液型はABの抗原で決まる。Rh式ではCDE抗原で決まるので、CDE式が分かりやすいと思う。

Rh式血液型の名前は上述した通り、アカゲサル（英名Rhesus monkey）から付けられた。つまりRhは実験動物であり、発見対象の名が多いようだ。

Rhだけなぜアカゲザル式なのか。アカゲザルの抗原がRhではなかったことが後で分かり意味がなくなった。

MN式はウサギの実験から発見されたが、ウサギつまりRabbit（Ra）式とはなっていないでないか。

P式は馬の実験から発見されたが馬つまりHorse（Ho）式となっていないでないか。全く統一性がない。

Q式がP式と同じと書いたが、実は日本人が豚の実験でQ抗原を発見したのである。その後に馬から発見されたP抗原と同じだったと分かり、今はQ式は使われない。

Xgは X染色体に遺伝子があり、発見された病院のあるGrandRapids市のgを使っている。それだとXを付けるのは意味がある。XY型の男性にもあるが、XX型の女性に多くあるからである。しかし、GrandRapids市は病院がある場所で意味がない。それにX染色体にはXgだけでなく、Kx式の遺伝子もある。

Y染色体には血液型の遺伝子は未だ見つかっていおらずYt式の遺伝子はY染色体になく、7番染色体にある。

AやBの血液型は動物にもある。A型・B型というのはA抗原・B抗原を持つことである。例でアヒルの場合はA・B・C・D・Eの5種類である。なお北京ダックはA・Bが無い。ニワトリではA・B・C・D・E・H・I・J・K・L・P・R・Hi・Thの14種類。馬はA・C・D・K・P・Q・T・Uの8種類。山羊はA・B・C・M・R・O・VWの6種類。羊はA・B・C・D・M・R・O・X・Zの7種類。豚はA・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Sの17種類。牛はA・B・C・F・V・J・L・M・N・S・Z・R・Sの12種類。兎はH1・H2・K・G・g・K1・K2・Hgの5種類。鼠はEa1から8までの8種類。犬の血液型は特別でDEA（イヌ赤血球抗原）と呼ばれ数十種類。猫は人間のABO式血液型とは全く別で、AB式血液型であり、A・B・ABの3種類に分けられる。A型は95%であるがB型は5%で、AB型はほとんどいない。霊長類はほぼABO式である。遺伝子が見つかっているのが、ゴリラB・ニホンザルB・チンパンジーAO・オランウータンABO・カニクイザルABO・コモンリスザルABO。

Y型で鰹を挙げたが、魚はほとんど全てA型である。

AやBの血液型抗原と同じ成分をもつ植物がある。このAやB型物質を植物性血球凝集素（レクチン）という。

A型の植物はアオキ・ヒサカキ・キブシなどである。

B型の植物はツルマサキ・イヌツゲなどがある。

H抗原を持つのでO型とするのは、ブドウとサトイモ。

AB型はソバなどがある。あの食べる麺の蕎麦である。

B型の赤血球とソバ抽出液を混ぜると凝集する。しかしA型の赤血球とソバ抽出液を混ぜても凝集しない。ではA型かというと抗原抗体反応をしないレクチンもあってAB型なのである。B型は蕎麦を食べて大丈夫かな。

B抗原も持つ細菌もある。サルモネラ菌である。ただしO型A型のサルモネラ菌もあるので、全部Bではない。

B型を例にあげて、仕組みを説明する。B型の人は、抗B抗体を持たない。B型サルモネラ菌の増殖を抑える抗B抗体が無いので、当然に食中毒になりやすくなる。

A型にも同様の仕組みがある。後で病気別に説明する。

A型は赤血球にA抗原と血漿に抗B抗体を持つ。そしてA遺伝子を一つか二つ持ち、B遺伝子を持たない。

B型は赤血球にB抗原と血漿に抗A抗体を持つ。そしてB遺伝子を一つか二つ持ち、A遺伝子を持たない。

O型は赤血球にA抗原とB抗原の両方を持たず血漿に抗A抗体と抗B抗体を持つ。そしてO遺伝子を二つ持つ。

AB型は赤血球にA抗原とB抗原の両方を持ち血漿に抗A抗体と抗B抗体を持たない。そしてA遺伝子を一つとB遺伝子を一つ持つ。これも後述するが、例外もある、

AOの遺伝子型がAAと同様にA型の表現型になる。

BOの遺伝子型がBBと同様にB型の表現型になる。

A・Bが顕性遺伝子であり、Oが潜性遺伝子である。

A型とB型を混ぜると、A抗原と抗A抗体、B抗原と抗B抗体とが抗原抗体反応を起こし、凝集・溶血する。

O型も抗A抗体と抗B抗体を持っているため、緊急以外A・B・AB型の人に輸血しないようになっている。

H式血液型で後述するがO型はH抗原を持つ。H抗原にN-アセチルガラクトサミンがつくと、血液型はO型がA型になる。H抗原にガラクトースがつくと、血液型はB型になる。もともと人類は全てO型だったのである。

O型から農耕民族にA型が発生し、O型から遊牧民族にB型が発生した。AB型はA型とB型の混血で、実際にAB型は千年前の遺体から見つかっていない。日本人はA・O・B・ABの比率が4・3・2・1になる。逆にO型100%があり、南半球の先住民がそうである。

AB型は一つの染色体上にA遺伝子もう一つの染色体にB遺伝子を持つが、一つの染色体上遺伝子にABを持つCisAB型がある。一万人に一人の割合である。このCisAB型は香川県と徳島県の出身者に多いという。

H式血液型について説明する。Hは前述したように人＝Humanである。人である以上は血液中に持っているH抗原があるからである。A型の人のA抗原はもともとH抗原が変化したのである。B型とAB型も同様でありH抗原だけをO型は持つというのが正しい。O型には（H型）と書かれていることも多い。ところが、ごく稀

にH抗原を持たない人がいる。通常検査でO型とされるがH抗原を持つO型の輸血ができない。この様な血液型をH式血液型でOh型と呼んでいる。インドのボンベイにOh型が多いことからボンベイ型とも呼ぶ。Oh型はAB抗原が無いのでO型の亜種とされているが、A遺伝子B遺伝子が無いわけでない。ただAB遺伝子があってもH抗原が無ければAB抗原が作れないのである。しかしOh型と呼ぶとO型が輸血できるみたいである。O型＝H型だからh型としたら読みだと分からないし、H＋とH－だとRhと混乱する。H式を発見したときにO型＝H型とせずに、Oh型をH型にしていればと思う。

Rh式のD抗原は1種類である。RH＋は遺伝型DD・Ddで、Rh－は遺伝型ddで表している。

C抗原はCかcの2種類である。遺伝子型CC・cc・Ccの3パターンが存在する。遺伝子型Ccも表現型はCCにならずCcと別になる。

E抗原もEかeの2種類である。遺伝子型EE・ee・Eeの3パターンが存在し、表現型も同じである。

CDEの組み合わせで3×2×3で18通りである。

C抗原もE抗原も存在しないまれな血液型があり、バールDバー型という。(-D-)と表記する)

C抗原もE抗原だけでなくD抗原も無いRh式血液型がRh null型、またはバーバーバー(-/-)型というがRh null型は世界で40例ほど見つかっている。

Rh式はCE抗原は無視して、D抗原だけ検査する。

D抗原がないRh－の日本人はたった0・5%である。(Rh－の欧米人は15%である)そのためサスペンスのTVドラマでRH－AB型の人が登場する設定が多い。

ABO式に戻り、病気のかかりやすさを記したい。

A型は胃がんにかかりやすい。

「A型はO型に比べ1・20倍胃がんのリスクが高い」注A(注は研究発表機関と発表年。最終ページに記載)

「AA型はBO型に比べて1・89倍の胃がんの危険」注B

B型は膵臓がんにかかりやすい。

「O型を1とすると、B型は1・72倍」注C

O型は皮膚がんにかかりやすい。

「O型は有棘細胞の皮膚がんが非O型と比べ1・14倍でO型は基底細胞の皮膚がんが非O型と比べ1・04倍」注D

A型は前立腺がんにかかりやすい。

「O型はA型と比べて再発率が35%低い」注E

B型とAB型は卵巣がんにかかりやすい。

「O型と比べてB型とAB型は1・41倍」注F

AB型は心臓病にかかりやすい。

「O型と比べると心臓病になるリスクはAB型が20%・B型が11%・A型が8%高い」注G

B型とAB型は脳梗塞にかかりやすい。

「B遺伝子が脳梗塞に関与しており、O型と比べてB型・AB型は1・59倍リスクが高い」注H

AB型は認知障害になりやすい。

「AB型はO型に比べて1・82倍の認知障害リスク」注I

A型とO型は貧血になりやすい。

「A型とO型の女性と比較して、貧血のリスクはB型とAB型の女性が約21%低い」注J

B型は高血圧になりやすい。

「B型の高血圧発症リスクは48・5%・A型は30%・AB型13・8%・O型7・2%」注K

A型は脂質異常症になりやすい。

「A型の脂質異常症発症リスクは37%・B型は33%・O型18%・AB型12%」注L

B型は糖尿病になりやすい。

「O型の糖尿病発症率(女性のみ対象)を1とした場合にB型は1・21・AB型は1・17・A型は1・1」注M

O型以外は肺塞栓症になりやすい。肺塞栓症はいわゆるEconomyclass Syndromeのこと。

「O型に比べて、非O型の発症率は1・8倍高かった」注N

O型はO157大腸菌にかかりやすい。

「O型が全患者186人の内63・4%で死亡した患者はO型が87・5%」注O

O157のOはO抗原である。人の抗原と別の大腸菌のO抗原であり、大腸菌は抗原OとHとで分類する。そのO抗原を持つ大腸菌で157番目に発見された。人間のO型に相当する大腸菌もある。O27とO128でありO6がA型で、O28とO86がB型である。O抗原のOはOhne「…がない」のドイツ語であり同心円状(Hではじまるドイツ語単語)がない意味である。大腸菌H型は鞭毛があり同心円状に広がり、O型は鞭毛がなくOの字のように固まったままである。偶然だが。血液型Oは0ゼロからと言われるが、発見者がドイツ人なのでOhneのOを付けたという説もある。つまり大腸菌のO型は同心円状の広がり＝鞭毛がないで、人間のO型はA抗原もB抗原もないということである。また大腸菌のH型は同心円状の広がり＝鞭毛があるで、人間のH型はHumanであり、H式のH型はABOのO型である。

A型はノロウィルスにかかりやすい(感染して発症)

(O型の方が感染しやすいが、発症しにくい)

「O型は26人中17人が発症で8人が無症状感染でありA型は18人中12人が発症で2人が無症状感染」注P(人にノロウィルスを飲ませた実験)

O型はピロリ菌にかかりやすい。

「O型抗原とピロリ菌(インディオ)が60%結合するがA型抗原には結合しにくい」注Q

AB型はインフルエンザにかかりやすい。
「O型が発症率で最も低く42%であり、最も高いのがAB型で59%」注R
O型はコレラにかかりやすい。注S
B型はマラリアにかかりやすい。
「O型と比較して、B型は重症感染症のリスクが4倍」
注T
AB型はデング熱にかかりやすい。注U
B型以外は細菌性髄膜炎にかかりやすい。
「B型の抗A抗体が細菌に対し天然の抗体として働く」
注V
B型は肺炎にかかりやすい。
「B型抗原を持つ肺炎球菌が多く、B型は感染し易い」
注W
B型は結核にかかりやすい。
「B型はO型に比べて10%も感染するリスクが高い」
注X
B型は淋病にかかりやすい。
「B抗原を持つ淋病病原体はB型に感染しやすい」注Y
O型以外は梅毒にかかりやすい。
「A・B・AB型はO型に比べて、1・7倍感染する」
注Z
注A　スウェーデン　カロリンスカ研究所　2010年
注B　日本の研究チーム　2011年
注C　アメリカ　国立がん研究センター　2009年
注D　アメリカ　ハーバード大学　2010年
注E　東京医科大学大野教授　2014年
注F　アメリカ　ハーバード大学　2010年
注G　アメリカ　ハーバード公衆衛生大学院2012年
注H　アメリカ　ワシントン大学　2009年
注I　アメリカ　パーモント大学　2014年
注J　理化学研究所・東京大学　2010年
注K　エジプト　ヘルワン大学　2015年
注L　エジプト　ヘルワン大学　2015年
注M　フランス　国立衛生医学研究所　2014年
注N　スウェーデン　カロリンスカ研究所　2016年
注O　イギリス　エジンバラ大学　2002年
注P　アメリカの研究チーム　2002年
注Q　スウェーデン　ウメオ大学　2004年
注R　1977年ソ連のHJNIインフルエンザの研究
注S　1970年代から複数の研究論文
注T　インドの研究チーム　2011年
注U　タイで発表された論文　2007年
注V　イギリス　エジンバラ大学　1989年
注W　アメリカ　赤十字血液サービス論文　2000年
注X　『人類遺伝学』1988年出版
注Y　アメリカ　赤十字血液サービス論文　2000年
注Z　『ヒト遺伝子の歴史と地理』1994年出版

編集後記

本号から令和二年最初の発行になりますので、田寺先生のご協力により表紙絵を新しくしました。意図するところは「文明は変われど真理は変わらず」です。世の中でAIを駆使して私たちの想像もつかない最先端の世界が出来上がっていても、人間世界にあるべき真理は悠久不変であるという考えを、実にほのぼのとした絵で表現してくださっています。いかにも「まんじ誌」にふさわしく、心から感謝申し上げる次第です。

本号から編集事務を同人安藤剛氏がお忙しい中を担当してくださいました。感謝してここに報告させていただきます。

皆様にお願いがあります。今まで「まんじ誌」の維持会員として二十名位の方が参加して、毎号ご愛読を頂いていました。高齢の方々が多く、「活字が読めない」ということから退会者が続出して、五月には二十三名になります。維持会員には年会費六千円を負担していただいて、まんじ誌発行の都度一冊をお送りし、合評会にも出席できることになっています。同人皆様のお知り合いの方を維持会員としてお誘いいただきますようお願いします。ご紹介いただければ編集担当から参加申込書を送らせていただきます。

本号に特別寄稿された田寺先生の「スペイン旅行記」は、女性一人の愉快な旅の状況を大変面白く読ませていただきました。また続く次号も楽しみにしています。

寒さもまだ続きますが、同人皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。

(鍋)

まんじ第155号

令和2年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺2055-29　安藤剛方
TEL・FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町7-1

表紙の絵について
「文明は変われど　真理は変わらず」
田寺怜華（たでられいか）画

まんじ

No.156

2020.5.1

まんじ第百五十六号　目次

掛川城の思い出 …… 三戸岡道夫 … 4
ロマンの本郷青木堂 …… 水谷房江 … 7
武田信玄の子孫たち …… 千坂精一 … 18
公訴も可能になった「著作権侵害罪」 …… 新井宏 … 24
漢詩 潮汐錄（九十八）《漢詩の流れ86》 …… 鯨游海 … 32
漢詩 汲深録（二十） …… 松井秀人 … 35
古い物・遠い夢 名品歴々（茶道史余滴） …… 忠内正之 … 37
信託 英―米―日 歴史の旅 …… 永田俊一 … 48
その三（日 その2）
青雲の彼方（八） …… 太田精一 … 69
私の「昭和20年」（1） …… 山田嘉久 … 83
―敗戦から75年―
スペイン・ポルトガル弥次喜多道中（後編） …… 田寺怜葦 … 92
『目耕録―定年退職後の晴耕雨読―』最終章 …… 山本鎭雄 … 105
村田廸雄著『ムラは亡ぶ』を読む
楠公精神と報徳思想 …… 浅野博文 … 119
内田の国の権現物語1 …… 横山正義 … 129
安芸門徒シルクロード紀行（7） …… 村上邦治 … 134
高山右近（六） …… 鍋屋次郎 … 161
…信仰に生きた生涯…
私の伊達政宗像を訪ねて（その四－④） …… 安藤剛 … 177
明治時代の著述者 渋江保の一生（その二十一） … 山本勉 … 202
人事部長 首切り姫（トゥーランドット）（六） …… 匠克仁 … 204
アイウエオ……ン …… 匠克仁 … 209
編集後記 …… 編集子 … 218

掛川城の思い出

三戸岡　道夫

今から三十年ほど前、掛川城の天守閣復元工事が進んでいる頃であった。時々新幹線で掛川を通ると、駅のホームから山上に据付けられた巨大なクレーンが見えた。

私は昭和二十年三月に旧制掛川中学校（現在掛川西高等学校）を卒業したので、学校のあった掛川城周辺はことさらなつかしい。それで掛川へ行ったときには、必ず掛川西高校のあたりをぶらついたり、また掛川城の天守台へ登った。しかしその時は天守閣の、復元工事中で、天守台へと登ることは禁止されていたので、下から巨大なクレーンを仰ぎ見るしかなかった。

（復元工事が終ったらどんな天守閣が現れるのか）

と想像を逞しうすると同時に、

（この巨大なクレーンが横たわっている天守台を見られるのは、今しかない。いま写真をとっておかないと、永久にこの姿は見られない）

という思いが私の中に走った。

私はクレーンが一番よく見える逆川の堤防まで走った。眞夏なので、堤防には、うすピンク色の大輪の芙蓉の花が咲き乱れていた。私はその芙蓉の花ごしに、天守台に横たわる怪獣のような巨大クレーンにむかって、四、五枚、シャッターを切った。今になってはもう撮せない貴重なクレーンの写真は、今も大切に私のアルバムに貼ってある。

その頃、私は「男たちの藩」という時代小説を書いていた。江戸時代のある藩の藩政改革の物語である。

これは当初、米沢藩上杉鷹山の藩政改革の、歴史小説の予定であった。しかし上杉鷹山の話だけでは面白くない、堅すぎるというので、少し面白い要素を入れることにした。

思いついたのがM資金である。M資金というのは、戦後の経済困乱時代に、アメリカ駐留軍にからんで一千億円とか二千億円とかいう単位で動く、噂のアンダーグランド秘密資金であった。本当にあるのか、ないのか、それは不明なのであるが、戦後多くの人々が、それを信じて暗躍し、振り廻されたことは事実である。このM資金を藩財政改革にからませれば面白いと考えたのである。

しかし江戸時代にM資金のような金が本当にあったのか、それはわからない。あったかもしれないし、無かったとは言い切れない。そこで歴史小説なので、M資金というわけにはいかず、太閤資金という名前をつけた。太閤秀吉の残した厖大な黄金が、大坂城落城でも戦火をのがれ、江戸時代に入ってもアングラマネーとして流れていたというわけである。これなら、あってもおかしくはないという想定である。

ところが太閤資金は架空の話なので、これを実在の上杉鷹山と直接結びつけるわけにはいかなかった。

そこで藩も米沢藩ではなく、美春藩という架空の藩の物語とし、歴史小説ではなく、時代小説に仕立て直したのである。

私が掛川城の復元工事のクレーンを見たのは、ちょうどそんな時であった。私の頭の中には、掛川城の完成した姿が輝やくばかりにそびえ立っていて、

（この掛川城の天守閣のイメージを小説の中に入れてやろう）

と思った。

藩財政再建の内容は米沢藩の財政再建を基本にしたが、その城、地域の風景、殖産振興の内容はすべて掛川を中心としたものに置きかえ、私の頭の中ではあたかも掛川藩財政再建のようなイメージで、物語が書き進められていった。

書く途中で、時々、私は空想の中で、出来上った天守閣に登って、その高みから、広い掛川の町や、遠い遠州灘を眺めてみたりした。そしてそんな思いが、小説「男たちの藩」の中では次のように描写されている。

その国名が示すように、美春藩には美しい自然があった。いつも真十郎（小説の中の副人物）の頭の中から離れないのは、すすき野台地から見下した美春の光景だった。

すすきの台地の西側には広い畑や田圃がひろがり、その緑のなかを美春川がゆっくり海にむかって流れていた。右手の遠くには美春城の天守閣が光り、その周囲に町家の屋根がかすんで見えた。はるか奥手には、美春富士とよばれる高い山が、形のよい姿を晴れた空の下に横たえている。

視線をずっと左に転ずると、そこは海で、美春灘が

鏡のようにきらめいていた。

美春藩は、いつも春のように暖かで、美しく明るい国であるというイメージから作り出した名前なので、私は美春藩という名前が気に入っていた。

しかし書くにつれて、どこかに掛川にゆかりのある名前を使いたいという思いが強くなった。すると、一つのヒントが見つかった。それは美春藩の藩主の美川修身は、他藩からの養子である。その出身藩の名前を、掛川をイメージした名前にすればいい。そこで修身出身の藩名を（菊掛藩）としたのである。「掛」はもちろん掛川の掛であり、「菊」は、私が掛川中学校に通っていたころ、隣町の菊川町に住んでいたので、その菊である。いわば掛川と菊川を合成したわけであった。

そんな名前もつけたりしてみると、「男たちの藩」の物語は、遠い東北の米沢の話ではなくて、掛川の話だというような気持にますますなっていった。

さて、財政再建策の柱は「入るをはかって、出ずるを制す」である。すなわち殖産振興と倹約である。

倹約には人件費と物件費の二種類があるが、上杉鷹山は人間を減らす人件費節減はやらなかったから、主として物件費節約である。しかし物件費節約には限度があるので、上杉鷹山は殖産振興にも力を注いだ。米の増産のほかに、桑や楮や漆も増産して、農家の副業を増やし、それによって農家を豊かにすることであった。桑によって蚕を飼い、絹織物を生産し、楮は和紙の原料であり、漆は漆器の生産である。そのため鷹山は、桑、楮、漆の木をそれぞれ百万本ずつ藩内に殖えさせるという、大事業を展開した。

小説の美春藩においても、もちろん殖産振興が行われるのであるが、私は、桑や楮や漆よりも、もっと掛川らしいイメージの木の方がいいと思った。思いついたのは、静岡県の名産の茶と蜜柑であった。

茶畑と蜜柑が野山に拡がれば、緑とオレンジの混合で色彩的に美しく、南国の明るい感じが出る。それに幼い頃から見慣れた風景でもあるので、書き易い。それで美春藩では、藩主美川修身の指示によって、茶の苗木百万本、蜜柑の苗木百万本を植える殖産興業が展開され、成功するのであった。

こうして私の小説「男たちの藩」は出来上ったのであるが、今でも掛川城を見るたびに、「男たちの藩」を書いた時のことを思い出す。そして山上に横たわっていた巨大な赤いクレーンが瞼の裏に浮かんでくる。そして、（あのクレーンはもう二度と見ることは出来ない）のだと思うと、あの時逆川の堤防から、芙蓉の花群ごしに写した山上のクレーンの写真が、貴重な宝物のように思えてくるのである。

（終）

ロマンの本郷青木堂

水谷房江

一、青木堂の由来

明治時代に東京本郷に青木堂を起こした私の祖父水谷五兵衛は、岐阜県安八郡福東の生まれである。

生家は、輪中がいくつか点在する中の一軒の庄家である。

水谷家の長男として生まれた五兵衛は、若いうちから家の財力に任せて、まれにみる遊び人であった。

そのため、先代の五兵衛の名を継ぐ家系、長男の放蕩ぶりに頭を悩ませたあげく、思い切って長男を廃嫡することに決め、妹の「とら」に家を継がせた。

その結果、水谷家の財産の半分（当時としてはかなりの大金）を背負った五兵衛は、生まれた福東の地を追われてしまった。

家を追われた五兵衛は、先ず岐阜市内の柳ヶ瀬で金をばらまいた後、江戸に上り、吉原で遊び始めた。

しかし、ここで五兵衛ははからずも僧侶青木日深氏に会い、思いがけぬ有り難い教えを受けた。（この青木日深氏との出会いについての詳細は不明）

青木日深氏は、おそらく、五兵衛の中に、並々ならぬ商才の芽を見つけたのではないかと思われる。

青木日深氏は五兵衛に、

「近々、本郷に帝国大学が設けられる。その近くに店を構えてみないか」

と示唆してくれた。

その当時は（本郷も、かねやすまでは江戸の内）といわれ、帝国大学（現在の東京大学）を設置する辺りは、まだ江戸の外の田舎であった。

そこで五兵衛はさっそく本郷に行き、前田家の江戸屋

敷赤門（現在の東京大学）に隣接して、住居兼用の間口十間の店を設けて、「青木堂」を出発させたのである。
そして、店の名前は青木日深の名前をいただいて、「青木堂」としてスタートしたのである。

二、歩み始めた青木堂

こうして本郷で、かなりの大店の雑貨商として出発した五兵衛だが、当初は自分も荷車を曳いて配達に歩いた。
しかし時代はどんどん様変わりしてきた。
まずは帝国大学に招聘された外国の先生方（当時はお雇い外人と呼んでいた）が多くなると、その先生方の生活に必要な品々をそれぞれの故国に発注する仕事が多くなってきた。
（例えば、チーズ・ハムの缶詰・ウイスキー・ワイン・石けん・バター・チョコレート・香水等々）
すると、送られてきた荷はとりあえず横浜の港止まりとなる。そこから手元まで荷を届けさせると、仲介者の口銭が必要となり、おまけに日数がかかる。
そこで、「青木堂で直接、輸入の荷受けをしたらどうか」という話を青木先生方からいただいた。
そうなると英語、フランス語など読めない番頭さんや丁稚どんたちは、大あわてである。初めのうちは、先生たちから手とり足とりで教えてもらったが、次第に慣れると、発注・入荷・販売の手順がうまくいくようになった。しかも、商品の数々が製造元から直接届くので、商品を安価で売ることができた。そのため、御贔屓さんはどんどん拡がっていった。
先生方は品物をダース毎に注文される。そのため、その数の二倍、三倍と注文し、先生方の分は原価でお渡しし、残りの分は青木堂が自由に販売してよいということになった。横浜の港まで商品を受け取りに行くことも、当時として大仕事であった。小僧さんが、大八車を曳いて朝は暗いうちに店を出て、ようやく夕刻に戻ってくるといった状態であった。
そのうちに、帝国大学の先生方ばかりか国内の外遊・留学を終えた人々も、客としてどんどん増えてきた。青木堂はそういう人々にとってもたいへん便利で重宝な店ということになってきて、青木堂はどんどん繁盛の一途をたどった。
こういうところが五兵衛の豪胆なところであったろうと思われる。
とりもなおさず、青木日深の示唆通りということで、有難い限りである。

三、店頭に並ぶ商品

一階に並んだフランスやイギリスからの商品の数々は、

当時のハイカラさんにとって、たいへん魅力的な品々であったようである。

- ウイスキー（オールドパー、ジョニウォカー、ブランデー等々）
- ワイン・ビール・ベルモット
- チーズ・バター・ハム（缶詰）
- ソース・胡椒
- コーヒー・紅茶・ココア・ジャム
- 香水・石けん
- ビスケット・マカロン・チョコレート・キャンディ・クッキー（いろいろ）
- 和洋煙草（タバコ）

これらの中でも、クッキーのようなマカロンが、一番人気があったようである。
まだ義母が元気なころ、小川軒のレーズンウイッチを口にした時、
「かに屋のガルバルジーのような味で、うちの店のクッキーを思い出します。フランスの乾葡萄が入っていましたよ。」
と言っていたことを思い出す。また古川緑波（ふるかわろっぱ）も、
「バターのこってりとした味が、ほろほろと甘えてきたことを思い出す」
と記している。
その当時、フランスから取り寄せたブドーやイチジクなどの乾物は、実に甘く、香り高いもので、口にした人々を幸せな気分にしたことであろうと思う。
また、年の暮に近づくと、店の隅には、鮭の薫製（よく乾いていて、棒のように固くて、叩けば痛いようなもの）や、たくさんの缶詰が積まれた。年の暮れにどっと増える注文に応ずるためである。この鮭の薫製は「固いけれどおいしくて味が深かった」と、私の夫（水谷秀夫）は少年の頃から言っていた。

四、風変りな二階のカフェー

一階に並ぶ舶来品に対して、二階には実に素朴な感じの喫茶室があった。
ミルクセーキや、濃いコーヒーや、ブラウンケーキなどが魅力的で、当時のしゃれた人たちがやって来て楽しんでいた。
しかし、白エプロンの女給もいなければ、白いズボンのボーイもいなかった。とりあえず、店の小僧さんたちが片手間仕事にサービスをしていた。
そのため素朴な板敷の床は、ろくに掃除もしていなく、栗色に塗った大きなテーブル（六人掛け）が、三、四卓あるだけだった。
そのため、よれよれの手拭いを下げた一高生や、帝大の学生たちの集う素朴な雰囲気だったので、田舎より上

京した学生の親御さんたちは安心して帰ったようである。

しかし同時にここは、当時の心のおしゃれな人たちにとっても、気軽な憩いの場であった。

その証拠に、壁の落書にその寄せ書きがあった。未来の首相や文豪が、それぞれの主張や所感を、壁に処せましと落書きしていたのである。

主な落書きの主は、夏目漱石・森鴎外・木下杢太郎・吉田茂・東三兄弟（ボートの選手）など、多くの方たちであった。その落書きは気軽に書き遊んだものであろうが、後になると、貴重で集まった人々の言葉遊び（コミュニケーション）になったのである。それらを一切、空襲で一瞬の間に燃やし盡くしてしまったことは、何といっても残念である。わずかに木村荘八の描くところの「パンの会」の絵の中にだけ、ひそかに生き続けているという。（観たことはない）

また、当時の青木堂のホットチョコレートを沼波瓊音（ぬなみけいおん）がリズミックな新体詩で書き遊んでいる（抜粋）

チョコレートの歌　　沼波瓊音

とろりとろとろチョコレート
熱帯の濃き味
肉汁如して浮く脂
どっしり重い甘み
癲れる程熱く煮立てた
チョコレートのとろとろと

舌の用心して
そろそろと
とろりとろとろと
チョコレートを君と飲む
青木堂の二階
六年ぶりの會合嬉しく

お互いに角帽つけし昔の
その昔ながらの味かな
アマゾンの川辺のカカオか
種を炒られて碎かれ練られて
ここで煮られたチョコレート
昔でいう「ラブリー・ポエム」である

また、三好達治や梶井基次郎などの同人雑誌の執筆者たちが、青木堂の二階に漱石先生をお誘いして、雑誌放談を度々していたことも書き残している。（残念ながら、内容のほどはわからない）

さらに、鴎外の娘、茉莉さん、杏奴さんたちは、次のように書き残している。

「帝大前の銀杏並木が黄色に染まるころは、特に昔からある青木堂の二階には、一種の異国情緒のようなものが深くなる。汚れた床、旧式ながっちりとした大きな卓、等身大の鐘、そして一杯の香り高いココアは、何か横浜あたりの古い商店を思わしめた」

優しく、楽しく当時を表現してくれた二人でしたが、すべて東京大空襲のあとは、「昔物語り」となってしまった。

五、ケーキは青木堂から——

明治十年ごろには、ケーキが店に登場した。当時、宮中で召し上がるケーキは麹町一番町の「村上開進堂」が専門に作っていたが、青木堂は菓子職人二名をそこに出張させて、ケーキ作りの本格的な指導を受けた。

その結果、一般の人々の間では「ケーキを求めるには青木堂」ということになり、次第に当店でケーキを楽しむ客が増えてきた。

更に、一時期、青木堂に限って開進堂がケーキを卸していた時期もあったという。その頃のおもしろい話が残っている。

新渡戸稲造博士は開進堂の主人と親しかったが、ある時、「先日、青木堂で、馬の草履のような大きなシュークリームを食べたが、君のところのシュークリームよりおいしかったよ。」

と言われた。すると開進堂の主人は。

「いやあ、あの特大シュークリームは、私の店から青木堂さんに卸したものですよ」

と言って、二人で大笑いしたということがあった。

六、青木堂を楽しんだハイカラさんたち

㈠夏目漱石

青木堂を贔屓にしてくださった方々の中では、なんといっても夏目漱石が筆頭にあげられる。

漱石は胃病の持ち主であったので、どちらかというと、バター傾向のお菓子よりも、和菓子を好んだようである。帝国大学（現在の東京大学）の近くにある藤村和菓子店の羊羹を好んだようである。

しかし、小説「三四郎」には青木堂を六回も登場させたりして、青木堂の存在を気に入っていたことも確かである。

また、谷崎潤一郎は、

「漱石は帝国大学での授業の後、青木堂の前に人力車を止め、りゅうとした大島の対（つい）の和服姿で葉巻を求めている様子をよく思い出す」

と書いていた。和服と葉巻と人力車の三点は、確かに

漱石には似合いの組合せになったであろう。三四郎池は今でもうっそうとした当時の姿で、学生や、近隣の幼い子供たちを遊ばせている。

恐らくここが、「それから」の風景を、一番残しているように思う。

㈡子煩悩な森鴎外

鴎外は当時、軍医総監であったので、千駄木の自宅（現在の観潮楼・鴎外記念本郷図書館）から、陸軍省まで通っていた。

当時は市電が、本郷三丁目から湯島の方に曲がっていた。帝国大学理工学部の機械が、振動のため誤作動が起きるといけないという理由で、本郷通りを直進させなかったらしい。それゆえ、鴎外は本郷三丁目で下車し、そこから馬に乗り換えて千駄木の自宅に向かった。

千駄木の自宅には馬丁と馬二頭（赤馬と黒馬）が控えていて、毎朝、馬は交代で本郷三丁目まで御主人を送っていた。

のどかな春の日の夕方、鴎外は、幼い水谷吾平（水谷五兵衛の子供・二代目）に、

「坊、馬に乗るか？」

と声をかけてくれた。そして吾平を抱えて馬に乗り、湯島辺りを散歩させてくれたそうである。馬はおとなしいので、時々、散歩がてら好物を求めて青木堂に現れた。

その時は、二人は必ず手をつないで店に来たので、若い丁稚たちが、

「蓼食う虫も好き好きだ」

と言った。それから二人がみえると、「蓼食う虫さんがおいでですよ」と誰かが言うので、叱られたり、くすんと笑ったりしたそうである。二人は好みが合っていて、甘い物・チョコレート・ビスキュー・シアラクレームなどを、よく買ってくれた。智恵子さんが元気だったから、結婚したばかりの頃だったであろう。

㈣鴎迅と周兄弟

青木堂のファンと自他共に認めた、魯迅と周兄弟の存在も、忘れ難い。

二人は順天堂の二号館の辺りに住んでいて、特に魯迅は尊敬する弟子たちを多くもっていた。

しかし、震災にあい、厳しい住まい条件で苦労していた。血気盛んな青年たちが二人を慕ってよく集まってきたようである。

そんな時魯迅はよく、下宿の婆さんの出す丸いがんもどきの中に、青木堂の牛肉の缶詰の肉を加えて味つけをして出していたようである。なぜなら、三日にあげずに出す婆さんの丸いがんもどきは塩味なので、まずくてかなわん。そこで青木堂の缶詰を買い、その砂糖と醤油で少し煮直したのを出したようである（気のどくに……）。

また、魯迅は青木堂が好きで、時々、二階でチョコレートやコーヒーを口にして、寛いでいたようである。

㈤大杉栄の登場

お客人の中に異色の人物として、アナーキストの大杉栄が出入りしていた。

大杉はフランスに渡った後、コーヒーの味が気に入ったらしく、帰国後は時々青木堂の二階のレストランにコーヒーを楽しみに来ていた。

しかし伊藤野枝を連れてきたことはなかったという。

大杉栄が現れると必ず特高が二人現われ、二階へ昇る階段の、上段に一人、それに中段に一人と特高が腰かけて、警戒していたそうである。

そのため、彼が現れると、必ず特高のためのコーヒー二杯が必要だと、丁稚どんが番頭にこぼしていたようである。（コーヒーの価値がその当時と今とでは、大変違うからである）。

その後、大杉栄は大正十二年九月一日に、甘粕正彦（当時憲兵大尉）によって、妻の野枝と息子の宗とともに厳しい最後を遂げた。大杉栄にとってはコーヒー一杯が、唯一くつろぎの一刻であったのであろう。

い赤馬なので、こわくなく、吾平は嬉しくて、よく覚えていて、度々話してくれた。

したがって青木堂の舶来品好みの第一号は鴎外一家であろうと思われる。鴎外はよく夕方に、お嬢さん方の大好きな、マカロンや、干し葡萄入りのビスキュー（ビスケット）などを買って帰られた。

森茉莉さんが「私の美の世界」という随筆の中の一部で、

「私の幼児期は本郷の青木堂の西洋菓子で育っている」

と書いていることも、うれしい。

また、鴎外は、時々、夕食後の散歩に、杏奴さんと茉莉さんを誘って歩いたという。行く先はどこでもいい。

二人は幸福な気分で、駒下駄をはいて、茶褐色のステッキを軽く引く父親について歩いたであろう。

その父親は、曙町から肴町、更に一高の寮へと歩き、その間にある書店の全部に寄った。そして、本の配達を書店に頼んで帰った。と、二人の娘は父親に、

「パパ、これだけ？」

と言うので、パパはポンチコという顔をして、青木堂の舶来のチョコレートを買ってくれたという。

㈢高村光太郎・智恵子夫妻

二人は、千駄木の高村光雲のお宅の近くに住んでいた

㈥おはなはん登場

テレビで日本中の女性の人気を集めた朝ドラに「おはなはん」というのがあった。

その日は、おはなはんの御主人が、

「日本一おいしくて、大きいシュークリームを食べさせてあげよう。」

と、おはなはんを青木堂の二階に連れて現れるテレビのシーンがあった。

その時、私は両親と一緒に目を皿のようにしてテレビを見つめ、セリフにも一言ももらさぬよう耳を傾けていた。

おはなはんは大きめのシュークリームを食べ、

「ほんとうにおいしいっ」

とこぼれそうな笑顔で言った、ように記憶している。

その時義父は、

「昔のままの青木堂の二階がテレビに再現されている……」

と感慨ぶかげにつぶやいた。

「あの舞台はどうして作ったのですか?」

「あれは、吉村公三郎という映画監督から、『青木堂の二階の雰囲気がわかる写真を欲しい』と頼まれ、一枚渡したことがあった。それを使ったのであろう。」

「返してくれたのですか。」

「いや、先方さんも忙しい方だったからなくしてしまったのだろう。惜しいことをしたけれど……。」

当時であるから、ビデオも手元にない当時、「おはなはんをもう一度……」と青木堂の二階風景と共に会いたい父母だったが、まぼろしと終わってしまった。

七、入江侍従長との再びの巡り逢いは……

ある日、山田槙子さんからＴＥＬがあり、週刊新潮の尋ね人のページに、

「入江侍従長が、本郷にあった青木堂のご主人は健在かどうかしりませんか—と、問うておられますよ」

ということであった。

さっそく、新潮社に連絡をとったら、侍従長の方から電話があり、

「いやぁ……懐かしい。青木堂の二階で、またいろいろな方とお会いし、いろいろな話をいたしましょう。私の方から青木堂へ出向きましょう。」

と、侍従長の方からこちらへ来て下さる日まで決まった。しかし、その数日後、入江侍従長は、青森の植樹祭にいらっしゃることが急に決まり、改めて我が家にみえる日を別に決めることにした。

それを聞くと義父は大変喜び、以来お目にかかる日を

楽しみにしていた。義父は中尉の時、中隊長となり、秩父宮様の少尉と同じ隊であり、その時の思い出をたくさん大事にしていたので、侍従長のおいでになる日を、それはそれは楽しみに待っていた。

しかし、その後、植樹祭が終わって暫くした時、侍従長は突然お亡くなりになってしまった。その時の義父の残念な言葉や表情は、気のどくで、今でも忘れられない。

八、初代水谷五兵衛の旅立ち

青木堂を起こした水谷五兵衛は、一九二七年十二月十日（昭和二年）に死去した。

次男簗平夫妻のねんごろな世話を受けながら、安らかに旅立っていった。

青木堂は一代で大きく羽ばたいたわけで、青木堂で扱った商品は、東北にも北海道にも広がった。例えば酒田の本間家（本間様には及びもないが、せめてなりたやお殿様に……と子どもたちがうたい遊んだ酒田の大地主）には、ウィルキンソン炭酸を列車で運んだり、北海道の小樽の商社との交流、そして、十勝の晩成社に「マルセイバター」を一度に十樽（九〇キロ分）も注文し、シュークリームを作りケーキを作って、当時の口のおしゃれな人々を楽しませたと想像する。

葬儀は浅草の本願寺で、立派にとり行われた。福東の水谷五三の次男として生まれた水谷五策は、「水谷吾平」と名を改め、青木堂の二代目を継いだ。

九、二代目水谷吾平のくぐった時代の大きな波

水谷吾平は十歳で青木堂の後継ぎとして、福東から父親の五三によってつれられてきた。が、とりあえず、仕事の主は番頭が商売を行った。

二十歳で徴兵検査を受けて麻布の三連隊に入隊した。ここで大変細かく厳しい身元検査を受けた結果、秩父宮様と同じ隊となり、水谷は中隊長、宮様は小隊長に任命され、様々な訓練を行い、苦楽を共にした。どちらかというと吾平は商店の主というより、兵役の方が性格上気に入っていたが、役が解かれた後は、再び青木堂の店主となって、頑張った。

スタートは順調であったが、大正十二年九月一日に関東大震災に見まわれた。この時、「下駄の歯が欠けてしまうほどの急いで家に戻った」と、後日、時々話していた。

午前十一時五十八分の地震は、当時薪や炭を使っての炊事をしている各家々を襲ったので、炎はたちまち広がり、江戸を嘗め始めた。炎は隅田区か上野あたりまで迫ってきたが、不忍池・湯島天神・岩崎邸・東京大学などの緑地に遮られて、本郷までは昇ってこなかった。

吾平は直ちに軍服に着替えて家を発ち、神戸の商社へ

と急ぎ、缶詰や瓶物の商品をたくさん買いつけた。この時のとっさの行動は、当時これらの外国製品を生活上必要としていた外国のお客様にはたいへん喜ばれた。

しかし、昭和に入り、戦争が始まると、外国製品は止められ、輸入は一切できなくなってしまった。

青木堂の勢いも下向きになり、ついに東京大空襲という惨事に見舞われて、すべての人々との交流も物質も消されてしまった。

まさに、夢か幻か、の青木堂であった。

そして、晩年は長女千恵子の親友のご好意で、坪井正五郎先生（人類学）の隠居所を譲ってもらって、静かに暮らすことができた。

毎年、一月二日（新年会）と、二月十一日（吾平の誕生日）には、身内全員（都合のつく二十五人ほど）で、祝いの膳を囲んだ。

厳しい時を通った水谷家は、どんなに忙しくても店屋物をとることをしなかった。そのため私が一手に引き受けて作った食事を、賑やかに全員が楽しんでくれた思い出を、私は大事にしている。

昭和五十三年十二月三十日に、六人の子どもを育て、吾平を支え続けた妻の水谷満佐は、突然、大動脈瘤破裂で、この世を去り、寂しい想いをした。

その後は、時々訪れる孫正美の土産の貴重な日本酒を楽しんだり、次女佐喜子の賑やかな家族を迎えて、会食したりして楽しんだ。

が、吾平は昭和六十年五月三日四月からの風邪をこじらせて、肺炎を併発、九十歳で安らかに永眠した。

十、水谷策平の誕生

初代水谷五兵衛には策平という息子があったが、その時はすでに吾平が青木堂を継いでいたので、策平は早稲田の理工学部に進学して「理化学」を収めた。

たいへん頭の秀れた心優しい人物で、かわいい女の子二人に恵まれ、小岩に住んでいた。

そして、奥さんもさらに優しく穏やかな方だったので、水谷の息子四人はよく招かれて遊びに行き、近くの小川で魚釣りをして遊んだ思い出を大事にしている。そして、呑むと魚釣りで楽しんだ話をくり返していた。

策平は理化学に秀れ、当時では数少ないカメラを楽しんでいた。水谷家四人の息子たちは、小岩の田や小川を背景に、不動の姿勢で、叔父さんの、

「ハイ、じっとして！」

に従い、目も動かさずにポーズをとっていた、楽しい写真もたくさんあった。しかし東京大空襲はそれらを奪っていってしまったという。

四人の息子の中に千恵子という女の子が居て、策平叔父さんはとても可愛がってくれた。

叔父さん夫妻の晩年は、相変わらず仲良く穏やかで、時々、千駄木の日本医大に通っていて、病院の帰りには、千駄木の私共のマンションに寄ってくれた。そして、お昼をあがってゆっくりされ、お茶を楽しんだりされておられた。

（終り）

あとがき

昭和二十年三月十日の東京大空襲は、この「青木堂」を焼き尽くしてしまった。青木堂をこよなく愛した夏目漱石や、森鴎外、当時のお雇い外人の先生方、また多くの洋行帰りのハイカラさんたちが楽しみ応援してくださった「青木堂」は、ひと握りの灰となってしまった。

しかし、私は明治から大正の初期にかけての甘い香りの「青木堂」を消してしまいたくないと、大ぜいの方が少しずつ書き残した「青木堂」の思い出や、両親からぽつりぽつりと聞いた話を思い出して、綴ってみたものである。

武田信玄の子孫たち

千坂精一

して絶滅させてしまうからである。

ところが、幹は倒れても小さな根は残っていたのだ。

私は鎌倉時代から江戸時代にいたる上杉氏の歴史を中心にした歴史物を書いているので、武田氏の庶流が生き延びていたことは承知していた。

その人は信玄の七男で、勝頼の末弟にあたる信清である。

上杉家所蔵の『御家中諸氏略系譜』に記載されている歿年から逆算すると永禄六年（一五六三）生まれになるから、織田軍に攻め込まれて武田一族が滅亡したといわれている天正十年（一五八二）は二十歳になっていたはずである。

生母は禰津甚平の女で、五歳のとき武田氏の始祖信義の弟加賀美遠光の館跡（南アルプス市）に建てられた眞言宗法善寺に入り出家して玄龍となった。

これはまえに書いた『勝頼哀れ』の後日譚である。

一

天下取りを狙って西上していった甲斐の武田信玄が、途中三河の野田城（新城市）を陥としたところで持病の労咳（肺結核）を悪化させてしまい、雄図虚しく挫折していったん帰国する途中の天正元年四月十二日に信濃伊那駒場（下伊那郡阿智村）で死歿してから九年目の天正十年、織田、徳川連合軍に攻め込まれた勝頼、信勝父子は、新府城（韮山市）を捨てて郡内（都留郡）の小山田信茂を頼って敗走する途中、信玄の将瀧川一益隊に田野（甲州市大和町）で追い詰められて斃されたことにより戦国最強と謳われた武田軍団は消滅し、信玄の一族は根絶やしにされたと思われていた。

信長は敵対する者を容赦せず、完膚無きまで叩きのめし、その後、還俗して安田三郎を名告り海野（東御市）に所領を与えられた。

織田軍に攻め込まれたときは法善寺に隠れていたが、様子をみて甲斐を脱出すると遠路遙々総本山の高野山へ落ち延び、僧になって潜んだ。

その後、戦渦が終息した頃合を見て異母姉於菊の嫁ぎ先を頼り、越後の春日山城（上越市）へ行って上杉家に庇護された。

於菊は上杉景勝と武田勝頼が和睦したときの条件のひとつとして嫁いできていたのである。

景勝は、信清を受け入れると無役のままで三千三百石を与えた。

その後會津から米澤へ国替えのあと景勝は、直江兼續をもって武田家再興の慶賀を祝わせ、武田家累代の家名大膳大夫に改めさせて諸役御免の高家に据えた。

信清は寛永十九年（一六四二）八十歳で卒した。

二代勝信は上杉家が百二十万石から三十万石に減知されて出羽（山形県）米澤に転封されたので、三千三百石から千石に減知されたが、諸役御免の高家はそのまま与えられた。

そのあと武田家は信秀、信安、信全、信久、信福、信順、信明、信篤とつづき信篤が家督相続した翌明治二年（一八六六）の版籍奉還により門閥が廃止されたので上士一之大隊に入った。

こうして武田一族は一人だけ滅亡を免れ、上杉氏の庇護を受けて廃藩置県まで十代つづいた。

とそう思っていた。

ところが、最近ほかのことで取材調査していたときに、武田氏がもう一家それも正系がつづいていたということがわかった。

二

それは信玄の二男信親の系であった。

天正十年、織田信長の嫡男信忠率いる軍勢が伊那路から攻め込んできたとき、甲府に残っていた武田一族は、信玄の弟信廉、宗智、信龍、甥信豊、信光、それに信玄の二男信親、四男勝頼と嫡孫信勝、五男盛信、北条氏綱の弟氏堯の葛山家を嗣いだ六男信貞、七男信清の十一名であった。

では、あらためてこれらの人たちの消息を辿ってみよう。

逍遙軒信廉のことはまえにも書いたが、織田軍の侵攻を阻止しようとして日向玄徳齋の守城大島城（長野県下伊那郡松川町）の救援に出向いたが、伊那路へ入ってきた織田軍が松尾城を陥として飯田城（飯田市）に迫ると戦うまえに城を脱出して、上原城の勝頼に会うこともせず一目散に甲府へ戻ってしまっていた。

天正十年三月、勝頼が天目山麓田野（甲州市大和町）で最期を遂げたとの報が入ると、部下たちに、

「奥秩父への山道沿いに逃げ延びるよう」

下知しておいて、みずからは二、三人の供侍を従えて山を下り、二十一日朝府中の西を流れる鮎川（相川）左岸の塔の岩までおりてきたところを見つかって捕らえられ、翌日信長の将河尻秀隆の検死立ち合いのもと古府中に近い立石（甲府市塚本町）の鮎川原で斬首された。五十四歳だった。

宗智は甲斐随一の名刹で武田氏の菩提寺であり信玄の牌所でもある臨済宗乾徳山恵林寺（塩山市）の僧になっていたといわれているから、四月三日織田軍によって焼かれたとき住職快川紹喜とともに山門楼上で焼死したであろう。

信龍は一族一條家の名跡を継ぎ一條右衛門大夫と称した。

老臣山縣昌景が、

「伊達者にて花麗（美女）を好む性質なりし」

と評した人物である。

三月に侵入してきた徳川軍に甲府市川で討たれた。

甥の信豊は父典厩信繁の死により手勢二百騎を受け継ぎ、長篠の合戦では生き残ったが、甲州崩れのとき木曽義昌の離叛に激怒した勝頼に討伐を命じられて出兵したが、信豊率いる武田軍に昔日の勢威はなく、鳥居峠で木曽軍に迎え撃たれて敢えなく敗れ、二十騎ばかりに護られて小諸城（小諸市）に後退していたが、三月に勝頼の死を知った城将下曽禰覺雲（賢範）に討たれた。

覺雲は信豊の首を信長に献じたが、信長は覺雲の不義を怒り、追放したといわれる。

もう一人の甥信光は長篠で生き残ったが、甲州崩れのとき妻の父小山田信茂に与して勝頼を捨てた。

その行為を信長に疎まれ、勝頼歿後甲府善光寺で殺された。

あとは信玄の直系でまえに述べた二男信親、四男勝頼、五男盛信、六男信貞、七男信清と勝頼の嫡男信勝の六人である。

二男信親はあとで述べることにして、四男勝頼と嫡男信勝、それに七男信清はすでに述べたから、五男盛信、六男信貞について述べることにする。

盛信の生母は油川氏、永禄四年（一五六一）六歳のとき父信玄によって信濃北安曇郡（大町市）の仁科氏に無理矢理養子入りさせられた。

というのは当主盛政はもともと武田方であったが、家臣団のなかで歓迎しない者が多く出てきてそれらの有力家臣たちが上杉方に属したため信玄に攻められる破目になり、盛政は甲府へ連行されて殺された。

そして、その跡を五男盛信に継がせたのである。

盛信は二十三歳のとき城代秋山信友のあとを受けて高遠城主になった。そして四年後、織田信忠五万の大軍に攻められて、この山本勘助築城の城に千人あまりの軍勢で立て籠もり徹底抗戦したが、ついに力尽きて三月二日に討死した。

六男信貞は、駿河の名家で葛山城主（裾野市）葛山氏元の養子になった。

甲州崩れのとき兄勝頼の一行から脱出して甲府善光寺に匿れていたところを捕らえられて斬首された。

さて、二男信親についてである。

この人は信玄の正室三條夫人の二男に生まれた。

躑躅ヶ崎の武田館の北側に居所があったという。

生来の盲目だったので半僧半俗の生活をおくっていたが、民衆への愛が深かったので〝お聖導様〟とよばれて慕われていたという。

永禄四年、二十一歳のころ父信玄が信濃会田の虚空蔵山城（松本市）を攻略したとき海野下野守の家督を継がせて海野二郎信親となったというのだが、この海野氏がどの系であるのか定かではない。

その後の信親は、父信玄が出陣中の留守の固めを任せるほどのなかなかの人物だったという。

甲州崩れのときに織田軍の乱入で南に逃れて郊外の浄土宗入明寺（甲府市住吉町）に潜んでいたが、翌三月十一日の夜勝頼の最期をきいて自害した。四十二歳であったという。

この寺は甲府から身延線に乗車して三つ目の南甲府駅の近くにある。

駅前の道路をすこし南へ歩いて行くと左手に踏切がある。その踏切を渡ればほどなく門前に出る。

入明時は鉄筋コンクリート造りの本堂で、その前にある五輪塔が信親の墓だという。

〈浄居寺院殿龍寶離潭大居士〉とあるから間違いなくこの系も絶えたと思っていた。

ところが、あるときあるところで思い掛けない話を耳にした。

「武田の正系は断絶したのではなくつづいていた」

というのである。

そのときいた話によると、こうである。

大正四年（一九一五）十一月十日の大正天皇即位式の際に、

「国家に功労があってまだ表彰されていない人々に対し

と判定して県庁へ回答した。
これにより県庁では、
「高家武田氏の系が正統」
として、昭和元年（一九二六）に恵林寺の信玄牌所前で当時の当主武田信保に『位記宣命書』を手渡したという。
信親は入明寺で自害してこの系は断絶したとばかり思い込んでいたのに、子供がいたということにおどろかされた。
そうなるとそのことが気になって仕方がない。
いつまでも頭の隅に引っ掛かっているので取材のおりに関連史料を断片的に探りつづけていった。
なん年かかったか定かではないが、いちおうつながったのでほっとした。
信親の系がつづいたのはこうである。

信親が入明寺で自害したとき、子の信道は九歳だったが家臣に匿われて生き延びた。
家康が入国して甲斐を所領にすると、信道は僧になり甲府の一向宗長延寺に住まった。
道名は顯了道快、信玄の孫なので〈道快御坊〉と称ばれて尊敬されたという。
武田の遺臣で家康に仕え、八王子千人同心を支配する千人頭や、代官を統轄する代官頭から甲州郡代、関東郡

て贈位する」
達しがあった。
そのおりに武田信玄は〈勤皇、治山治水、税法等〉に見るべきものがありとして従三位に叙せられた。
連絡を受けた山梨県庁では伝達する信玄の正統な子孫が判らず新聞などに広告を出した。
かなりの人たちが名告り出てきたので、県庁は判定を東京帝國大學（東京大学）史料編纂所へ依頼したが、同所の三上参次、田中義成両博士とも判定に苦しみ、
「材料不足のため判定不可能」
と県庁に回答した。
県庁では困り果ててその『位記宣明書』を信玄の菩提寺である臨済宗乾徳山恵林寺に預けた。
その後も県民や子孫と称する人たちからの要請がやまず、やむなく県庁はふたたび東京帝國大學に協力を求めた。
編纂係はこんどは渡邊世祐博士に判定を一任した。
渡邊博士は、幕府に高家として仕えてきていたという武田氏の子孫を探し出して、これとさきに触れた上杉景勝に庇護されたという信清の子孫の両系統を比較検討した結果、高家武田氏の系は信親（龍寶）の子孫であるから信玄正室の系であり、上杉氏に庇護された信清の子孫は側室の系と判明したので『民法』により、
「高家武田氏が正統」

代と出世し、大久保忠隣のもとで金山奉行を勤めて金銀山開発の功をあげ、老中にまで伸し上がって権勢を振るった大久保石見守長安と親しくつき合っていたが、長安が歿後不正蓄財、汚職の罪に問われて罪人に一転すると信道も嫌疑を受けて子信正とともに遠島刑に処されて伊豆大島へ流された。
このとき、武田の旧臣九人が従ったという。
悶々とした日々を送った信道は、寛永二十年（一六四三）三月五日七十歳で歿した。
慶長五年（一六〇〇）甲府長延寺で生まれた嫡男信正はこのとき四十四歳になっていたが赦免されず、上野寛永寺毘沙門堂門跡公海に仕えて信頼されていた坂井干齋こと武田の遺臣貫井藤兵衛が公海を通じて信正の釈放を老中に嘆願した。
寛文三年（一六六三）、三代将軍家光十三回忌の恩赦で江戸へ戻った信正は六十四歳になっていた。
旧臣内藤家長の孫で陸奥平三万五千石の藩主忠興の江戸屋敷に迎えられ、十七歳の忠興の女を妻にした。
貞享四年（一六八七）信正の嫡男信興が十六歳で元服した。
武田の庶流で祖父信俊が信玄、勝頼に仕えた将軍綱吉の側用人柳澤吉保が自邸に迎えて保護した。
柳澤吉保の引立てがあってのことと思うが、この武田氏はやがて江戸幕府の高家旗本五百石で寄合席に列せら

れ、官位も代々信玄とおなじ大膳大夫従四位下を与えられた。
こうして信親（龍寶）の系は、信道（道快）、信正、信興、信安、信明、護信、信典、信之、崇信、信任、信保、と十一代つづいて、版籍奉還を迎えた。

つまり清和源氏系の名門武田氏は、戦国乱世のなかにあって織田信長と覇権を争い、当主勝頼が斃されて領国甲斐をうしなってしまったものの、その血統は絶えることなくつづいていったのである。
こういうことはよくある。
歴史物を書いていて留意しなければならないのは、当主が斃されたからといってかならずしも血統が断絶したとか滅亡したと決め付けることは早計で危険だということである。
そのへんのところを正確に探り当てていれば断定してもいいが、わからなければ触れずに曖昧にしておいたほうがいいと思う。

（了）

公訴も可能になった「著作権侵害罪」

新井宏

『まんじ』同人各位も、執筆時にこのような雑多な問題を気にされているかも知れない。そこで、一度自分の考えを整理して紹介して見ようと思い立った。あくまで「私論」であるが、そのキッカケは『史遊会』同人の諸橋奏様の『資料集・外山脩造らの後裔に繋がる私』の編集を手伝ったことからである。

昨年の八月初旬だった。諸橋奏様より、膨大な「参考資料」のコピーを頂戴した。

それと言うのは、そもそも私が小学校二年生から五年生まで新潟県古志郡高島村・十日町村（現長岡市）に戦中・戦後の四年間、縁故疎開をしていたことを『まんじ』一五二号に「ストリートビュー紀行」と題して紹介したことからである。

諸橋様は新潟県長岡市のご出身、地元名門長岡高校を卒業されて、地域の歴史、文化などに極めて造詣が深い。

本誌『まんじ』には二十年間休まず原稿を提出して八十編を越えた。一度は小説風なものを書いてみたいと思いながら、結局、雑多な評論、エッセイ、論考を書き連ねている。

同様に「史遊会」や『バウンダリー』などに約百編、多少学術的な書き物として歴史考古学や金属工学の「論文誌」に九十編、関連した「著書」や「新聞記事」もほぼ同分量ある。我ながら、ずいぶん書きまくったものだと思う。

しかも、このところそれにも飽きずに、他人様の著書出版のお手伝いなど十件以上も楽しんでいる。

そんな執筆活動の中で、意外に気を遣っていたのが「著作権問題」や「盗用・引用問題」などである。それは自説を主張するに際し「無断引用不可」などと注釈された資料でさえも、必要なら平気で「無断引用」してきた経歴とも関係がある。

雑談の折、疎開時のことを思い出しながら「ストリートビュー紀行」をご覧頂いた。その中に、現在の「新井家」があるのは、母方の実家「星野家」と父の友人「川上家」のお陰であると書いた。

その結果、思いがけず諸橋様から、膨大な関連資料が送られてきたのである。主題は「星野家」と「川上家」に関すること。たまたま、諸橋様の伯母ヒデ様が栃尾の大庄屋「川上家」から嫁入りして来たのが越後滝谷の庄屋「星野家」だというのである。越後滝谷は我が疎開先の「星野家」から一キロほどしか離れていない隣村である。

資料は、いわば諸橋様に連なる栃尾の名家「川上家」を中心とした関連記録であり、北越戊辰戦争の際、長岡藩の仮本陣、野戦病院が置かれたとか、その当時八歳であった伯母ヒデ様の記憶、また河井継之助やその従僕の寅太（後に財界で活躍する川上一族の外山脩造）に関する記録などの他に、司馬遼太郎の『峠』など小説類を含めて広く収集したコピー集で大封筒に入れられていた。

そのまま仕舞い込んでしまうには惜しい。散逸を防ぐためにも、種々雑多なサイズのコピーをある程度整え、小冊子とすると良いと思った。そして、諸橋奏編著『北越戊辰戦争と栃尾の大庄屋川上家・外山脩造らの後裔に繋がる私』の編集が始まった。

しかし、資料集の名の通り、それは雑多なコピーの集合なので、その出典を明示するのは当然として、「著作権問題」が発生するかも知れない。私的な目的にだけ使用する分には問題ないが、資料集として活用してもらうためには、ある程度の公開も考えなければならない。複写物を不特定多数の関係者に配布するとなると著作権者の許可が必要である。

もっとも、個々の著作権者に連絡することなど実際には困難なので、通常、公益社団法人日本複製権センターに連絡して許諾を受ける便法が用いられる。しかし、資料の性質上、複写権センターに登録されていない書き物が多い。

そこで考えたのは、「引用権」を広く利用することであった。学術的な研究調査のためなら、出典を明記さえすれば、資料として引用しても著作権法の規定には触れない。しかし、それが営利目的の出版物と見做される場合には、著作権侵害となるかも知れない。

まあ、感覚的に言えば、学術的、非営利的で私的な要素が強ければ、著作権者の応諾がなくとも、個人の責任で複写転載できるが、趣味的、営利的で公開性が高いなら、許諾を得たほうが無難ということである。

著作権とは主として「著作財産権」のことである。その他に「著作者人格権」という規定もあるが、まずは問題を単純化するため、著作財産権侵害の代表的な事例、

すなわち著作物の複製問題からはじめよう。

著作権法では、著作物に対して、その権利者（著作権者）に無断で、著作物を複製した場合は、《原則》として著作権の侵害であるとしている。すなわち、無断複製は《原則》有罪なのである。もちろん、著作権の存続期間が終了している場合はこの限りではないが、個人の著作権は死後七十年、団体名義の場合でも公表時から七十年存続期間がある。

さあ、大変である。私のように書架に複写文献のファイルを数百冊も飾っている者は枕を高くして眠れない。著作権侵害の時効は二十年もある。しかし有り難いことに、著作権法では無断複製を行っても著作権侵害にならない《例外》を規定している。

例えば、個人的・家庭的目的で、著作物の無断複製を行うことはできるが、市販の映画ＤＶＤなどでコピーガード（コピー防止策）を外してのコピーは認められない。さらに学校の授業で使う補助教材として著作物を無断複製することができるが、配布する生徒の数を大きく超えた枚数のコピーまでは認められない。

また、情報（データ）、アイディア、事実の報道、公的な通達・判決などの資料は著作権法上の保護対象にならないので自由に使える。

それでは、同人誌のような非営利出版物に、著作物からの複製部分を無断で紹介するとか、著作物をパロディ化して二次創作物として載せたらどうなるであろうか。パロディとは原著作物を、揶揄や風刺、批判する目的で模倣した作品で、まんがの世界では欠くことができない分野である。

もちろん日本では《原則》著作権侵害にあたる。しかし、フランスのように二次的な創作物のパロディを合法と認めている国もある。まんが大国の日本なので、ぎりぎりの便法が数多く工夫されているにちがいない。

それでは小規模な同人誌に個人的・家庭的な目的であれば複写物転載が許されるであろうか。

世界中に公開されているユーチューブには、家族や友人、特定同好者に限定した非公開や限定公開が許容されている。書き物の場合でも公開前の「原稿」段階であれば何を書いても著作権侵害にはならない。だから同人誌でも「非公開」と銘打てば、著作物の複写掲載は許容されるはずである。

しかし、同人誌にはパスワードもなく、公民館の書架にでも置けば誰でも読めるし、実は部外者に極力読んで貰いたいのが本音である。マル秘扱いなどなじまない。

他に救済方法はないだろうか。

そこに登場するのが「引用権」なのである。調査研究等の著作物の場合には、「引用の必然性」があり、出典を明記さえすれば、著作権者に無断で「引用」できる。

ただし著作権法では「引用の必然性」について解説も例示もしていない。

その点で参考となるのが国会図書館における複写許容基準である。

まず複写の目的は、原則として「調査研究」と記さなければならない。引用として使用する場合、著作権法では「引用の必然性」を要求しているからであるが、漠然としているので「調査研究のため」と無難な目的を記入させているのであろう。

複写範囲は「著作物の一部」、「一人につき一部」である。その上、新聞、週刊誌、月刊誌、季刊・年刊誌などの定期刊行物は、次号が発行されるまで複写できない。最新号の著作財産権の価値は高いがバックナンバーとなるとほとんど書店から消えてしまうからであろう。

「一人につき一部」との規定は、明文化はされていないが、「再複写」を禁止する意を含むのであろう。実際問題として、同人誌などの著作物に「転載」することなど《原則》不可である。

かくして、再び枕を高くして眠れなくなる。

しかし、著作権法には、著作権侵害は《原則》として「親告罪」という規定がある。いわば著作権者が文句を言わなければ「著作権侵害」の行為があっても「著作権侵害」は成立しないのである。

著作権法では、対象とする権利のほとんどが「著作財産権」であり、「著作者人格権」も規定されているが、それは一般民法上の規定の名誉毀損に近い内容である。

すなわち、著作権者が経済的な損失を被った時だけ、自ら訴え出ることのできる権利、すなわち「親告罪」であって、著作権者が「経済的な損害を被った」ことを主張しなければ成立しない。簡単に言えば、著作権者に軽微な経済的損失を与えていても、『まんじ』のような非営利の同人誌では、よほどのことがない限り何を書いても、著作権侵害問題は発生しないのである。

これが一見厳しい規定にもかかわらず、何も問題が起きなかった理由であるが、最近になって、すこし事情が変わった。環太平洋パートナーシップ協定（ＴＰＰ）が発効したことで、平成三十一年から日本の著作権法にも「非親告罪」すなわち「公訴権」や「第三者の告訴権」が許容されたのである。著作権者が「何も言わなくとも」それに替わって「公訴」される怖れが生まれたのである。

情報技術革命の時代である。一気に流布する「類似作品」や「海賊版」については「親告罪」では対応できない。検察等が自由に「追訴」できるようにしないと、故意の著作権違反を取り締まるのは難しい。ここまでは判りやすい。

ところが、もう一点、論文等を対象とした「引用の際

のことによって、学生が提出する「宿題」などのコピペも、著作権者以外の者が「告訴」できる。今日では、修士論文や博士論文、いや教授級の論文にまで「コピペ」が蔓延しているので、公権力による「公訴」もあり得るであろう。

そうなると、「盗用」は著作財産権侵害としてよりも社会的な制裁が主となる。社会的な制裁効果は、その人がどんな社会的な境遇にあるかによって大きく異なるが、日本のように名誉を重んじる国では、大きな影響をもたらす。

韓国の例であるが、文在寅大統領が強引に司法大臣に任命した超側近・曺国の一家は、いまや「不正と犯罪の百貨店」といわれている。

その渦中、ソウル大学の法学教授であった曺国の修士論文が、三十パーセントほどの分量にわたって日本の四人の学者の論文からの「盗用」で成り立っているとの報道が現れた。日本なら大変なことであるが、韓国で厳しく追求されていないところを見ると、社会的な制裁が弱いように感じる。

もっとも、最近、日韓両国でベストセラーとなった李栄薫編著『反日種族主義』によれば、その冒頭から「韓国の偽証罪は日本の四百三十倍、虚偽に基づいた告訴、すなわち誣告は千二百五十倍」と衝撃的な事実の紹介か

の出所の明示義務違反」という項目も「非親告罪」となったのである。それは出典を明示しない「引用」は定義上「引用」ではなく「盗用」「剽窃」だからである。

学生達が宿題の回答に「コピペ」をもっぱら使っている時代である。インターネット上の著作物の一部をコピーして貼り付ける（ペーストする）と宿題ばかりでなく、研究論文さえ出来上がってしまう。かつて情報や電気は「物」と見做すことが難しく、その盗用を取り締まるのに苦労したが、個々の軽微な著作財産権であっても、故意とか悪質と認識されれば、公訴あるいは第三者の告訴によって「盗用」を取り締まることが出来るようになったのである。

かくして、著作権侵害に「非親告罪」が導入されたことで、「親告罪」に甘えてばかりはいられなくなった。もっと大幅に「引用権」に頼っておいた方が無難である。

現実的な問題として、著作財産権が侵害されても、著作権者が事実を知り得なければ当然「親告」することができない。しかも現代社会では「コピペ」と称する方法で、特定個人が不特定多数の著作権者から同時に「盗用」する場合が非常に多い。だから「親告罪」が形骸化していたのであろう。

そこに「非親告罪」が導入されたことで、著作権法上でも実質的に「盗用」を取り締まれるようになった。ここから始まっている。

ソウル大学名誉教授で韓国経済史専攻の李栄薫は、著書の副題に「歴史に嘘をつくことはできない」と付けて、慰安婦問題、徴用工問題、竹島問題などについて、実証的な歴史研究に基づいて論証、韓国にはびこる「嘘の歴史」を暴いている。「盗用」などを通り越して韓国では集団で歴史を「捏造」しているというのである。

日本でも考古学の世界では「旧石器捏造事件」のように「捏造」が後を絶たない。他の学問分野と異なり、考古学的な発掘調査は「追試」が困難なため、自説に沿った虚偽の発表がはびこる。

関連して、非常に不愉快に思った事例がある。平成十五年、歴史民俗博物館は、炭素十四年代測定法で北部九州出土の土器付着炭化物などを調べた結果、弥生時代の開始は、定説より約五百年古くなり、紀元前十世紀ごろになるとする「研究成果」を新聞に発表した。

驚くべきことは、「研究成果」を新聞発表した行為である。研究者共通の理解で言えば、研究成果は審査のある学術誌にまず発表すべきものである。

しかも、その時の新聞発表は、試料の明細や測定結果も伏せたままであった。一週間後に関連学会が開催されるのを待てずに新聞発表した背景には、極めて高額な「科学研究費」の申請を控えていた事情があったと思われる。内容を伏せたのは、土器試料を提供してくれた地方自治体の了解が未了だったからだという。

その流れが続くのは、始めて公表された炭素年代測定値の資料にも無断引用不可の注釈がついたことである。研究目的等があれば許諾なく無断で引用できるのが「引用権」である。無断引用不可の期間も書かれていないので、それでは永久に引用できない。

歴史民俗博物館の論考に反論するために、あえて無断引用を敢行した。一部の知人から、無断引用不可との註釈がついていると注意されたが、もちろん歴博からは何のおとがめもなかった。

そもそも国の公共機関が公表した資料に「無断引用不可」などと書くのがまちがっているのである。しかも、著作権法では、情報（データ）、アイディア、事実の報道、公的な通達・判決などは保護対象にならない。土器に付着した炭素十四年代値などは誰がみても「データ」であり、公表した以上、誰でも無断で利用できる。

なお、「引用」は学術論文では必須であり全く問題ないが、その論文内容を自分の著書あるいは他の商業誌に転載する時に苦労したことがある。まさか自分の書いた「論文」を他雑誌に転載することや、インターネット上に公開することが著作権侵害になるとは思ってもみなかった。

それは、ほとんどの学会誌が論文を掲載する段階で、

「著作権は学会に帰属する」と規定しているからである。そう言えば、論文掲載が認められた時に、いつも「著作権の譲渡」が求められた。これは何も学会誌に限られたことではなく、一般著書でも出版すると著作権は出版社に帰属する。著作権とは英語でコピーライトと称されるよう一般には複写権と理解されているからである。したがって、自己の論文であろうと勝手に複写することも、転載することもできないのである。

もちろん、原稿の著作権は著者に残されている。だからと言って、学会や出版社に許可を得ないと著作権侵害になるのである。

そのことで困ったのは、自分の論文を自分のホームページに載せた時である。厳密に言えば、自分の論文であろうと、学会あるいは出版社に著作権（コピーライト）が委譲されているので転載の許可を受けなければならない。変な話だ。面倒なので、「引用」の体裁を採って済ませている。

同様な問題は、自分のホームページに、勝手に『まんじ』と『史遊会』の紹介ページを載せた際にもあった。さすがに『まんじ』の場合は、創刊号から現在までの全作品二千余件の著者名とかタイトルを載せるに留めたが、それでも著作権法には抵触する可能性がある。

しかしどこからも「親告（文句）」は出まいと高をくくっている。『史遊会』の場合はもっと大胆に、全ページ、全作品をそのままホームページに掲載している。会員からは喜んで頂けるという心証があったからである。

このように、著者本人が保有する著作権は、ほとんど学会や出版社に委譲されていて、本人に残されているのは、「原稿著作権」と「著作者人格権」だけと言ってもよい。

「著作者人格権侵害」は、著作物を引用してその論拠を否定しても学問的な記述であれば問題ないが、「罵詈雑言、悪態」などを含むと名誉毀損となる。名誉毀損は「民法・刑法」の規定であり、著作者人格権が絡むのは、「引用権」と「名誉毀損」の境界領域のような場合である。

「原稿著作権」と「出版著作権」のように権利が分断されている例に、写真、イラスト、絵画、図版などの問題がある。出版物の転載の許可を出版社に求めると、多くの場合は無料であるが、写真やイラストについては、出版社を経由して制作者に支払いが求められることがある。音楽や映像と同様に、写真やイラスト、図版については、著作権を守るのが困難な面もあるので、むしろ著作権意識が高く、ちょっとした写真やイラストでも対価を求められるので要注意である。特に私家版の出版物であっても、表紙に載せる場合は、引用の要件である「必然性」を満たせない場合が多い。無料で提供されている

写真やイラストを利用するか、自ら写真等を準備するのが無難である。

「著作権侵害」を避けるためには、「親告罪」であることをうまく利用することや出典等を明示して「引用権」を主張できるように準備するのが良いと書いた。しかし、ジャンルによっては「引用」がなじまない「小説」のような例もある。

小説に一々注釈を付けていたら、堅くてとても読めないだろう。そこで、良く見られるのが、巻末に参考文献（参考とした文献）の一覧を載せて、「盗作」の意図がないことを示すことが一般的である。しかし、そのような場合でも、類似した文章の使用は用心して避けることである。

そもそも時代小説の場合、誰が最初に「創作」したのかなど明瞭でないストーリーが次々に登場する。それらは「赤信号みんなで渡れば怖くない」の類いではあるが、類似した表現が多いと、「盗作」扱いされかねない。しかも、著者の境遇によっては「盗用」は社会的な制裁として大きなダメージを受ける。

ついでに「引用権」の原則として述べられていることを整理しておこう。

1　公表されている著作物であること

2　研究調査、批評、報道など、引用を行う「必然性」があること

3　「正当な範囲内」であること

4　引用部分が主ではなく従であること

5　引用部分が明確なこと

6　出典が明示されていること

これらの原則も文章表示であり、面倒な問題になるとグレーゾーンが広い。だから同人誌などでは、著作権者の財産権侵害が軽微で「親告」される可能性が低いことを第一の歯止めとして、更に念のため「引用権」の原則を守っておくことで、ひとまず安心することになる。

さて、ここまで著作権問題について、専門家でもないのに、現状について気ままに「私論」を述べたが、最後に今後の課題についても触れておきたい。

TPPを機として、著作権侵害に対して、公訴権が導入されたことで、運用次第では「検閲」が強化され、著作人の「表現の自由」が萎縮されるかも知れない。

また著作権法では「アイディア」は保護対象にならないとしているが、「特許法」ではアイディアだけでも特許が成立する。もちろん特許法は、認可されて始めて有効であるが、著作権法は原稿段階でも保護の対象になる。その辺の整合性がいずれは問題となる予感がする。

令和二年二月二十二日記す

漢詩

潮汐錄（九十八）

鯨游海

日産汽車公司加婁呂須權元會長　令和二年一月

蘇生日産賭心身
馘首斷行如鬼神
盛者必衰世通例
破門遁走異邦人

押韻・身神人

〈日産汽車公司加婁呂須權元会長〉

日産を蘇生せしめんと　心身を賭し
馘首断行すること　鬼神の如し
盛者必衰は　世の通例なれど
門を破り遁走したる　異邦の人

〔注　解〕

汽車＝自動車。公司＝会社。斷＝断の正字。
盛者必衰＝（平家物語）この世は無常で盛んな者も必らず衰える。ジョウシャと訓む。生者必滅　會者定離（佛典）とは別。なお彼の経営手法はコストカットだった。
破門＝掟を犯した者（信徒）を宗門から除去すること。師弟の縁を断ち門人から追放すること。
遁走＝①逃れる②隠れる。異邦人＝別世界の人。

〔口語訳〕

業績低迷に呻吟していた名門「日産自動車」を蘇生させようと心身を賭して尽力したものの（その手法は）社員の首を切り下請のコストをカットする鬼神だった。「盛者必衰」奢るる者久しからずが世の通例のことではあるけれど、
何と無常なことであろうか。門を破り国法を犯し遁走したとは……欲深い厚顔無恥の所詮は別世界の人だった。

☆颯爽と大見得切りし救世主
　足るを知らざる欲深き人

波斯對亞美利加　令和二年一月

波斯歷史幾春秋
電腦文明是美州
異質梟雄雖不戰
誰防誤射核彈頭

押韻・秋州頭

〈波斯対亜美利加〉

波斯の歴史は　幾春秋ぞ
電脳文明は　是れぞ美州
異質の梟雄　あひたたかはずと雖も
誰か防がん誤射を　核弾頭の

〔注　解〕

波斯＝ペルシア。現代名イランの旧名。春秋＝年月。
美州＝亞美利加（中国語の表記）。梟雄＝悪党の親玉。
誰防＝ここでは反語。誰も防げない。防ぐ者は居ない。

〔口語訳〕

数千年の歴史を誇る回教シーア派の大国イラン。石油権益を巡り美国と敵対した。一方美国はＡＩ文明の旗手。
この両大国の悪がしこい両巨頭は戦争こそしないが、核弾頭の誤射を防ぐことが出来る者は誰一人いない。

☆軍事力世界制覇のアメリカも
　核の誤作動防ぐ術なし

哀悼野村克也名監督　令和二年二月

一投一打賭青春
電腦棒球創世神
毒舌有情辯有笑
生涯捕手自稱人

押韻・春神人

〈野村克也名監督を哀悼す〉

一投一打に　青春を賭けたる
電脳棒球を　創世せる神
毒舌には情あり　弁には笑あり
「生涯捕手」と　自称せる人

〔注　解〕

昭和、平成を生きた大打者名監督野村克也氏が堕ちた。往時、南海ホークスのファンだった小生の追憶は尽きない。嗚呼、已矣乎……！　指導者、評論家としても超一級。
一投一打＝「一挙手一投足」も併せて連想。
電腦棒球＝ＩＤ野球（Important data）。

〔口語訳〕

一投一打、一挙手一投足に青春を傾注したＩＤ野球の創世神。毒舌に情、弁に笑。「生涯一捕手」と謙遜したが…

☆人の行く裏に道あり月見草
　その毒舌に篤き情あり

八村塁選手　　令和元年六月

衝雲怪物越中生
筋骨隆隆紺碧晴
一騎當千不知退
籠球日本漸黎明

押韻・生晴明

〈八村塁選手〉
雲衝く怪物は　越中の生まれ
筋骨隆々として　紺碧の晴
一騎当千　退くを知らず
籠球日本　漸やく黎明

〔注　解〕
富山生まれのハーフ八村塁選手がＮＢＡの華府に本拠を置く名門チームから九番目に指名を受け入団した。年一回のドラフト会議に於て一桁の指名は極めて名誉なことという。勿論日本人としては初めての快挙。
父はアフリカ北西部のベナンの人。母は日本人で、身長２ｍ３㎝の巨躯。今後の大活躍が期待される。
長らく低迷した日本バスケット界にも漸やく光が射し始めたと思われるが……。黎明＝夜明け。黎＝黒い。

☆全米を震撼せしむおおおとこ
　いよよハーフぞ今盛りなる

《漢詩の流れ86》戦国時代①武田信玄

幼少時から読書を強制された信玄は持って生まれた才能に恵まれ、良く理解し修養に励んだ。当時の学問とは漢籍であった。彼は四書五経を読了すると兵書にも挑み孫子、呉子、三略を好んだという。
師は甲斐の禅僧であった。この結果戦国武将の中では最も学識の高い人となった。「風林火山」の旗さしものは師の一人快州和尚の筆という。漢詩も創作した。

偶　作　　（ぐうさく）

鏖殺江南十萬兵　おう殺す　江南十万の兵
腰間一劍血猶腥　腰間の一剣　血なお腥し
豎僧不識山川主　豎僧は識らず　山川の主
向我慇懃問姓名　我れに向かって慇懃に　姓名を問う

鏖殺＝みな殺し。全てを殺す。
豎僧＝小坊主。豎は小僧（人を侮って用いる語）

（口語訳）
俺は江南の地で敵軍の兵隊十万人を皆殺しにしたぞ。
腰の剣は、今なお血にぬれて生ぐさいのだ。
然るに眼前の小坊主めは、俺が天下の国主とも知らないで姓名を尋ねるとは全く笑止千万というものだ。

漢詩

汲深録（二十）

松井秀人

關東甲信越居合道大會（関東甲信越居合道大会）　　令和元年十一月

二千劍士絶幽音　二千の剣士　幽音を絶つ
武技研磨理自深　武技の研磨　理　自から深し
利刃含霜閃光發　利刃霜を含み　閃光発す
納刀虛靜學無心　刀を納めるに虚静　無心を学ぶ

押韻・音　深　心

〔注　解〕
研磨＝とぎ磨く。深く研究する。
理＝ことわり。
利刃＝するどい刃。
霜＝鋭いもののたとえ。
納刀＝刀を鞘に納める。
虚静＝何も考えないで心を落ち着けていること。

〔口語訳〕
会場の二千の剣士は物音一つたてない。日頃の武技の研究にあたり、その理合いは奥が深い。
一旦抜かれた鋭い刃は閃光を発し、刀を納めるのには何も考えずに心を落ちつけており、自然のままの心の持ちようを学ぶことになる。

市廛歲晚　　（市廛歳晩）　　令和元年十二月

歲晚街頭避市廛　歳晩の街頭　市廛を避け
求閒偶到酒旗前　閒を求め　偶たま到る酒旗の前
如今商販非吾事　如今　商販は吾事に非ず
守拙傾杯又一年　守拙して杯を傾け　又一年

押韻・廛　前　年

〔注　解〕
歳晩＝年末。
市廛＝商店街。
閒＝のんびりしている。しずか。
如今＝いま。現今。
商販＝商売する。また商人。
守拙＝うまく立ち回らず愚直さを堅持する。

〔口語訳〕
年末の街頭で、人ごみの多い商店街を避け静かさを求めていたら、偶々酒屋の前に来た。
今の自分には、もう商売などとは関係がなくうまく立ち回ろうなどとはせずに酒を飲み、又一つ年を取る。

元朝對酒　（元朝対酒）　令和二年一月

清新元旦麗初陽　清新の元旦　初陽麗し
瑞氣祥風滿草堂　瑞気　祥風　草堂に満つ
椒酒一杯延壽藥　椒酒一杯　延寿の薬
偏欣老健意軒昂　偏えに欣ぶ老健　意軒昂たり
押韻・陽　堂　昂

〔注　解〕
瑞気＝めでたい雲気。
祥風＝めでたい風。
椒酒＝香しい酒。
延壽藥＝長生きする薬。
老健＝年をとってなお身体が健康なこと。

〔口語訳〕
清新の元旦は初陽が麗しく、瑞気や祥風が草堂に満ちている。
正月の香しい酒は長生きの薬であり、年をとっても健康であることの欣こびを噛みしめ、まだまだ意気盛んである。

庭梅早信　（庭梅早信）　令和二年一月

峭寒漸去動春天　峭寒漸く去り　春を動かすの天
珠蕾蕭然籬落邊　珠蕾蕭然　籬落の辺
鄉里故人梅信早　郷里の故人　梅信早し
窗前佇待一枝妍　窓前に佇待す　一枝の妍
押韻・天　邊　妍

〔注　解〕
珠蕾＝美しい蕾。
梅信＝梅の便り。
佇待＝佇み待つ。
一枝妍＝一枝が美しい。

〔口語訳〕
厳しい寒さもだんだんと去っていき、空も春めいてきたがわが家の垣根の美しい蕾はもの寂しげである。
郷里の旧友からは早くも梅の便りが届いたのに、まだかと思いながら窓に佇んで、美しい梅の一枝を待っている。

南窓曝背　（南窓曝背）　令和二年二月

開盡南窗花氣傳　開き尽す南窓　花気伝う
時聞啼鳥一聲妍　時に聞く啼鳥　一声妍なり
陽光曝背閑煎茗　陽光に背を曝し　閑かに茗を煎る
白髮方知只樂天　白髪方に知る　只楽天
押韻・傳　妍　天

〔注　解〕
花氣＝花の香。
曝背＝背中を日に曝す。
煎茗＝茗を煎ずる。
樂天＝天命を楽しむ。自分の境遇を安んずること。気楽。

〔口語訳〕
南窓を大きく開くと花の香りが伝わってきて、時々聞こえる鳥の一声は清らかである。
陽光に背を曝して閑かに茶を飲んでいると、老人にはまさに気楽な境遇であることが実感できる。

古い物・遠い夢

忠内正之

名品歴々（茶道史余滴）〈五〉

三英傑を巡る三肩衝

ここで言う三英傑とは、戦国の世を平和へと導いた信長、秀吉、家康の三者のことである。

三肩衝とは彼等が活躍した安土桃山時代、天下の三肩衝と称された、肩衝茶入「初花」、「新田」、「楢柴」のことを言う。

この三つの肩衝茶入はいずれも東山御物（足利義政が収集愛玩した、書画、香炉、茶碗、茶壺など唐物道具の中から名品を選定したもの）であり時の茶人たちの垂涎の的となっていた。

「勇」の信長、「智恵」の秀吉、「待ち」の家康、夫々が天下を制するため国取りに励んだのであるが、同時にかれらは三者三様の遣り方により、室町幕府の崩壊によって散逸した東山御物の収集、収奪に励んだのである。

名物を持つことが天下人たる者の象徴であるかの如くであると同時に、天下は集めた名物の数によって決まるとしたのである。

名物が数多ある中でも、これら三つの肩衝は特に天下に知られた名品であり、自らの権力を誇示するためにも、躍起となって求めたのである。

（一）

永禄十一年（一五六八）九月、足利義昭を奉じて上洛した織田信長は、義昭を将軍職に就任させ、みずから畿内の制圧に乗り出した。そして山城・攝津・和泉などを支配下に組入れると、茶道具を強制的に買収する、いわ

ゆる「名物狩り」を行なった。

永禄十二年、京都上京区の豪商大文字屋が所持する「初花」肩衝茶入を召し上げ、また武将で茶人であった三好宗三から「新田」肩衝茶入を買収している。

信長はこれらの名物道具を用いしばしば茶会を行っている。召し上げた戦利品で、もてなすことで制圧した支配関係を強固なものにすると共に自らの力を顕示しようとしたものである。

信長はまた茶会や名物道具を効果的に使っていた。それは功績のあった配下の武将たちに名物道具を下賜したり、茶会を行うことに許可制をとっていたのである。のちに秀吉はこれを「御茶湯御政道」と呼んでいる。

しかしながら信長はまだ不満足であった。天下の三肩衝のうち「初花」と「新田」は既に手中にあったが、天下人たることを立証するためには、残る一つ、「楢柴」を是が非でも手に入れなくてはならなかった。

天正十年（一五八二）六月二日早暁、明智光秀は、軍勢一万三千をもって、四条西洞院の本能寺を急襲した。謀反である。

七十人ほどの馬廻小姓だけをつれて宿泊していた信長は、ひとたまりもなく燃え盛る火災の中で自害し果てた。

当時の明智光秀は、柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益、羽柴秀吉らと並ぶ織田家の重臣である。

それがなにゆえ信長に謀反に及んだのか、しかも主君に対して直接行動をとった程の激しさである。怨恨説、天下取の野望説など様々な意見が交わされている。

今回の「NHK」の大河ドラマ「麒麟がくる」では、そのあたりを如何に説明するか、今から楽しみにしている処であるが、私は光秀や重臣たちをも動かした、大きな陰の力が存在したものと考えている。

しかし原因追求は「NHK」に任せて、今はなぜ信長が、わずかな供廻りしかつれずに本能寺に宿泊していたのかを追っていきたい。

この日、信長は「本能寺名物開き」と呼ばれる名物披露の茶会を催していた。これまで狩り集めた三十八種の名物茶道具をわざわざ安土城から運び込み、いったい誰を正客として招いたのか。さぞや高貴な人物、または、有力な武将かと思いきや、正客の座についたのは、博多の豪商で茶人の島井宗室（？―一六一五）であった。相客は同じく博多の豪商で茶人の神谷宗湛（一五五一―一六三五）のほかに、近衛前久（一五三六―一六一二）を筆頭とした四十数名の堂上公家たちであった。

宗湛は宗室が信長の茶会に出ると知って急遽上洛し、信長に出席を許された。宗湛の狙いは、信長の茶会に出ることにより、博多の一豪商から天下の豪商として宗室と共に名を馳せることであったのであろう。

大勢の公家たちを招いた信長の意図は、おのれの権勢を彼等に知らしめることであったと思われる。

さて、名物披露の正客に島井宗室がなぜ選ばれたのか、その理由は色々な資料を探ってみても不明である。

ここで察せられることは、当時、宗室が所持していた「楢柴肩衝」である。信長は、それを喉から手が出るほど欲しがっていた。

前述する通り、天下の三肩衝のうち「初花」と「新田」は既に手に入れていた。残る一つ「楢柴」を是が非でも手に入れて天下人たることを示したかったのである。

当日並べられた三十八種の名物道具―つくも茄子、珠光小茄子、円座肩衝、勢高肩衝、珠光茶碗、小玉澗の絵、千鳥の香炉など、当代の逸品が披露されたが、「初花」と「新田」の両方共、加えられていなかった。

「宗室、そのほうが「楢柴」を余に譲ってくれれば、天下の三肩衝が揃うわけだ、見事に勢揃いしたあかつきに、「初花」と「新田」を見せてやる」

信長はこの様に宗室に暗示したのであろうと察せられる。

一方で宗室は本能寺の茶会に招かれたとき、既に腹を決めていた。地方の一商人から天下の豪商としてのレッテルと交換に、「楢柴」を手放そうかと考えた。しかしなんとか言い逃れをして信長の要求をかわす方法はないものかとためらっていた。

ところが、本能寺の変が起きたことで、万事が急転回したのである。「楢柴の肩衝」を手放さずに済んだのである。

「楢柴の肩衝」とはどれほどの名品であったのか。

その銘の起源としては、「御狩する狩場の小野の楢柴の汝はまさらで恋ぞまされる」という万葉の歌意を、茶入の釉色の濃さにかけて銘したと伝えられる風雅に富んだ茶入である。足利義政から村田珠光に下賜され、ついで珠光の高弟、鳥居引拙の手に渡った。引拙の死後、堺の数寄者の間を転々としたあと、天王寺宗伯（津田宗及の叔父）が買い取り、更にそれを弟子である博多の豪商・神谷宗白（宗湛の叔父）に千貫文で譲り渡した。だが宗白はこれをもちこたえられなくなった。

そのころ信長や大友宗麟が目をつけ出したと云われ、数寄大名に渡ることを恐れて、弟子である島井宗室に買い取るようにすすめた。

宗室は元値の倍額で、宗白から買取っていたのである。

話は戻る。当夜本能寺に宿泊していた島井宗室と神谷宗湛は無事であったであろうか。

博多の豪商は強か者であった。本堂に火の手があがったとき、二人は茶会のあった書院に駈けこみ、壁に掛け

たままの掛軸を外し取ってから脱出したという。

みすみす、名物が灰になるのを見捨ててはおけない。持ち出すのは数寄者としてのつとめだと思ったのであろう。

宗室が手にしたものは「弘法大師真蹟の千字文」、宗湛の方は玉澗筆の「枯木絵」であった。

更に島井宗室は、このどさくさにまぎれて一つでも多くの名物を手に入れたいと考え、安土城を占拠した明智光秀のもとを訪ね、本能寺に持ち出されなかったために難をまぬがれた「新田肩衝」を譲ってもらったものと思われる。島井宗室は呢懇である堺の津田宗及の伝手で、光秀とはすでに茶会を共にする知合いであった。

折しも光秀は、安土城にあった信長の金品財宝を、朝廷をはじめ、京都五山や大徳寺などへ寄進していた。

「危うく、わたしも一命を落すところでした。この機会に「新田肩衝」を拝領願えませんか。叶えて下されば家宝として、この身に替えても終生、守りとおす覚悟でございます」と、言葉巧みに頼みこんだのではないだろうか。

但し光秀のおかげで「楢柴」を信長に奪われずにすんだとは一切言わなかったようである。

まんまと「新田」を手に入れた宗室は、後に大友宗麟に譲ることになる。「楢柴」を欲しがる宗麟をなだめるやむを得ない手段であった。

「初花」は坂本城に持ち込まれたものと思われるが、杳としてその後の消息を絶った。

次は秀吉の登場となる。

（二）

信長に代わって、秀吉が中央政権を担う時代に移る。信長が完成させた「茶の湯ご政道」のさらなる発展と、信長が中途で挫折してしまった「天下布武」の完遂は秀吉に課せられた責務でもある。

秀吉は「茶の湯ご政道」のもとになる名物収集に対しては信長に勝るとも劣らぬ情熱を傾けた。しかし一方では世間を驚かせる新機軸を打ち出した。「黄金の茶室」である。

信長は安土城を金箔ずくめに飾って人心を魅了したが、秀吉の智恵は更にこれを茶の湯に応用したのである。

当時の茶事は、詫び数寄への傾向があり、茶室も簡素なのが好まれた。それを、あえて、茶道具もすべて（皆具と言う）金ピカに仕立て直してしまった。更に金の茶室を持ち運びのできる折りたたみ方式に考案したのである。

古い名物を尊ぶことは当然のこととして、秀吉自身が新しい名物を創ろうとする意欲があったと思われる。

「茶の湯ご政道」の発展を期する秀吉は、茶頭の増員と充実策を図った。茶頭とは茶の湯の指南役である。トップには千宗易（後、利休と改称）を起用して、津田宗及と今井宗久を下位に据えて、更に山上宗二をはじめ、宗易の息のかかった重宗甫、住吉屋宗無、万代屋宗安、千紹安を加え、八人編成とした。「茶の湯ご政道」をあまねく天下に周知徹底をさせるための布石である。その一方で、かつて信長が狩り集めた名物の再収集にも力をそそいだ。

明智光秀の謀反により安土城から散逸したもの、また生前、信長が誰かに下賜したものを独り占めしようとしたのである。おどしたりすかしたりして秀吉流の名物狩りによって着々と成果が上ってきた。

しかし天下の「三大肩衝」すべてを手に入れることは容易ではなかった。ではその成行きを追ってみよう。

「楢柴の肩衝」は、博多の島井宗室が所有しているが、九洲の大名、大友宗麟と筑前の大名秋月種実が隙あらばと狙っている。

「新田肩衝」は光秀から島井宗室に旨く渡ったものの、宗室は大友宗麟に脅されて、今は宗麟の手に入っている。

「初花肩衝」は本能寺の変のあと光秀の手によって坂本城に移されたものと思われるが、今では行方知れずになっている。

この様な状態から早急に三つを獲得して、天下に誇示することは、勝ち将軍である秀吉としてもかなり困難であると予測された。

ところが、思いがけず「初花」が向うから秀吉の懐へとび込んで来たのである。

本能寺の変の翌年（天正十一年）秀吉が賤ケ岳の合戦で柴田勝家を打ち滅ぼしたところ、その戦勝祝いとして、家康から「初花」が贈られたのである。

秀吉は度肝を抜かれて驚いた。

行方も知れず、諦めかけていたものが、家康の掌中にあったとは！

安土城から散逸したあと、どの様な経緯をとったものか、三河の長沢松平家の支族・松平念誓の手に渡ったあと、徳川家康に献上された。その賞として諸役免除の朱印を得た由。

これが大名物であり、信長が珍重していたことは、家康もとくと承知のはずである。それを惜しげもなく、戦勝祝いとして手放す度量の大きさはどうだ。いやそれほどまでに家康は自分に対して好意を持ってくれているのかと喜んだのである。

この時の家康の心境はどの様に解釈されるべきであろうか。この後の家康の行動から推して、誰もが出し惜し

むはずの、信長ゆかりの「初花」を秀吉に贈ることの効果は前以て計算ずみだったと思われる。更に言えば、天下を狙うための布石であったのだ。

信長亡きあと、秀吉は信長の嫡孫・三法師を擁して天下に立とうとした。それを不服とした信長の二男・信雄は、父の盟友・家康に訴えた。

盟友の遺子の危急を救うと言う名分があり、秀吉には、主君筋に弓をひくと言う弱点がある。家康は信雄の訴えをいれ、反秀吉勢力の結集をはかった。これが、小牧・長久手の戦いである。

「初花」を贈ってまで好意を示した秀吉を対手にせざるを得ないのも、大義故であることを天下に知らしめることができる。また急成長する秀吉の力を抑えることができるとも考へ、更に、「初花」を贈ったのは臣下の礼をつくしたものではないと示したかったのであろう。

家康の読みは当たった。

小牧から長久手へと移った戦いは膠着状態となり、家康側が局地戦で勝利するおまけもあった。しかし信雄は秀吉と単独講和をしてしまった。これで信雄を支援する名分は消えた。

家康は自信をもって軍勢を退いたのである。天下のことはひとまず秀吉にまかせておけばよい。鳴くまで待てばよいのだ。いったん手離した「初花」は、いずれ必ずひとりでに、吾手に戻ってくるに違いないときめこんだ。

家康の深謀をよそに、秀吉は天下人への道をひた走った。

天正十三年（一五八五）七月、秀吉は豊臣姓を賜わり、従一位太政大臣に就任、ついに関白の座を射とめた。その二ヵ月あまり後、関白拝賀のための禁中茶会を催した。天皇に茶を献上するなど空前のことである。この時、宗易を同伴し、居士号を賜わり利休と号することになるのである。

帝の御前で茶を点てた。この一事によって「千利休」の名声が天下にとどろいた。関白秀吉による「茶の湯ご政道」は見事な第一歩をしるした。

翌年一月には、完成したばかりの「黄金の茶室」を大坂城から禁中に運びこみ、黄金の茶事で、正親町天皇はじめとする皇族らを驚かせた。

そのころ秀吉を喜ばせる事が生じた。

安土城から消え失せていた、天下三肩衝の一つ「新田」が、思いがけなく、秀吉の懐にもたらされたのである。

黄金の茶事の三ヵ月後、豊後の大友宗麟が上坂して、「新田」を差し出しながら島津義久の豊後への侵入を訴え、秀吉に九州出兵を願ったのである。

義久の行為は、さきごろ秀吉が発した「惣無事令」（大名同志の私戦禁止令）に違反するものであった。

宗麟の訴えは妥当であった。

秀吉にとって、九州平定は緊急の課題である。しかも「新田」を贈られたとなれば、迷う理由はない。

秀吉は、自ら宗麟を案内させて大坂城内をくまなく見物させた。天守に上がり、黄金の茶室を見せ、名物道具を飾りたてた座敷を披露した。そこにはすでに、「初花」と並んで、今回宗麟が献納した「新田」が座っていた。

宗麟は黄金の茶室への賛辞を述べたあと、秀吉に早急に九州遠征を決断させる言葉、「九州には「柄柴」もござりますれば」と言いそえることを忘れなかった。

「天下に三肩衝を持つ者は、天下を我がものにする」を意味する言葉は、秀吉の耳に快くひびく。かの信長でさえ、それを望み、叶えられなかった夢である。

さらに宗麟は「柄柴」が現在、島井宗室のもとを離れ、築前秋月城主、秋月種実の手にあることを強調した。

宗室が所持していたころ、まっ先に食指を伸ばしたのが宗麟であったが、それをまんまと種実に横取りされてしまっていたのである。宗麟の恨みは深い。

いっそのこと、秀吉が奪ってくれれば、種実への腹いせにもなる。また、秀吉の心証をよくすることは、大友家の安泰につながると言うものである。

余談であるが、この頃利休の活躍ぶりはめざましくて、秀吉の弟豊臣秀長が、大阪城中で、大友宗麟に対して「内々の儀は宗易、公儀の事は宰相存じ候」（宰相とは自分のこと）と述べたと言う。

翌天正十五年正月、年賀のため大坂城に参集した諸大名を前にして、秀吉は九州出兵を宣言した。

天正十五年三月一日、秀吉は、兵二万五千を率いて大坂城を出陣した。名分は九州平定、島津征伐であるが、「柄柴の茶入」を目指したのは当然である。

秀吉は、お気に入りの「新田茶入」を携行し、茶頭津田宗及をも従わせ、随所で茶の湯をたのしむ余裕をもちながら九州へ乗りこんだ。

三月二十八日、秀吉本隊は豊前小倉城に到着、ただちに、薩摩進軍への部署を定めた。

毛利輝元、黒田官兵衛らを加える秀長を、将とする先遣隊を豊後から日向へと進撃させた。

四月中旬、先遣隊は日向に入り、島津義久の軍勢と激突、これを大敗せしめた。

一方秀吉本隊は、出迎えた島井宗室と神谷宗湛を案内役として筑前に入り、更に、参陣して来た筑前の立花宗茂、肥前の竜造寺政家らを従え、肥後へと兵を進めた。

その途中で立ちはだかったのが、種実、種長父子が籠る秋月城である。しかし大軍勢をほこる秀吉の敵ではあり得ない。

「城に火を放つな」と秀吉は厳命した。「柄柴」を焼失させてはならない。

降伏した種実は、金子百両と米二千石、それに娘を人質に出すことで和を請うたが、秀吉は許す筈がない。待っていたとばかりに、「楢柴」を要求した。

「楢柴」に対する種実の思い入れは、かつて信長に奪われるのを惜しんで、「平蜘蛛」の茶釜もろとも爆死した松永久秀のそれにひとしい、だが種実は、久秀になりきれなかった。

わが身と秋月家を守るために、泣く泣く秀吉の要求を呑んでしまったのである。

余談であるが、秋月家は後に日向高鍋藩二万七千石に定着し幕末迄続いた。なお上杉鷹山はこの秋月家から養子に出ている。

「楢柴」の肩から、なだらかな腰のあたりを指でなぜながら秀吉は悦にいった。

「ついに天下は、わが手に落ちたわい」と。

翌月三日、島津義久は降伏した。

「島津征伐なる」の報を待っていた千利休は、新茶をたずさえて、博多におもむいた。

箱崎宮に陣取った秀吉は、博多を発つまでの一ヵ月間、連日、利休と宗及を相手に茶の湯を楽しんだ。この間秀吉はぬかりなく、荒廃した博多の復興を、島井宗室と神谷宗湛に命じたと言う。

(三)

凱旋して、二ヶ月後の天正十五年（一五八七）十月一日、京都の北野神社でかつての大徳寺茶会を上まわる大茶会が催された。

もはや、かくれもない天下人である。それを誇示するためであることは明らかで、かつて誰一人として三つ揃ったところを見たこともない天下の三肩衝をはじめ、これまでに集めた名物のすべてを見物させようというのである。

北野神社の拝殿中央には黄金の茶室が据えられ、南側に作られた四つの茶屋では、秀吉、利休、津田宗及、今井宗久が、三肩衝をはじめ名物道具で多勢の参加者に茶を点てた。

こうした、のびやかな風情のなかを、豊臣秀長と連れだって、悠然と歩む家康の姿があった。家康が瞠目していたのは、もちろん天下の三肩衝である。

いまでこそ、秀吉に恭順の意を表しているが、はたして家康の胸中はどのようであったであろうか。

関白秀吉、いかにも天下を制圧したかを装っているが、まだ早いのではないか。これから越えねばならぬおおきな山が残っているぞ。最後の苦労をよくよく拝見しようではないか。「初花」が「楢柴」と「新田」をつれて、

わが手に戻る時が必ず来るに違いない。その日が待ち遠しいわい。

家康はそんなことを思いながらも、愛想のよい笑みを絶やさなかったことであろう。

秀吉が晴れて天下人を名乗るためには、関東（小田原）と奥羽（仙台）を平らげなければならなかった。

話が早くなる。慶長三年（一五九八）八月、秀吉が他界すると、待っていたばかりと家康の横暴さが一気に噴出する。

豊臣を奉ずる石田三成には許せぬことである。秀吉恩顧の武将たちと語らって、家康と事をかまえるべきだと考えた。

しかし「賤ケ岳七本槍」と称された加藤清正や福島正則ら、秀吉恩顧の武将のほとんどは、家康方になびいてしまった。清正たち、いわゆる「武勲派」連中は、「奉行派」の官僚の筆頭である三成に対して、かねて悪感情を抱いており、反家康の勢力結集がままならなかったのである。

私見だが、この場面で、政所「ねね」の本音が大きく作用していたのではなかろうか。

こうした状況下で、徳川家康（東軍）と石田三成（西軍）が激突することとなる。関ケ原の合戦である。慶長五年（一六〇〇）九月十五日まる一日で西軍は壊滅してしまった。

家康の戦勝気分を増幅させてくれたものは、久々に対面した「初花肩衝」であった。

かつて秀吉の戦勝祝いに贈った「初花」は、秀吉の没後遺品として、秀吉の養子となった宇喜多秀家に譲られていた。ところが、今度の関ケ原合戦で西軍に属していた秀家は捕らえられ、八丈島へ流された。流罪に処するまえに、家康は秀家から奪い返していたのである。

秀吉をして「天下はわが手におちたわ」と言わしめた天下三肩衝のうち「楢柴」と「初花」の二つまでを今や掌中にした。「楢柴」は、臨終の床にあった秀吉から、「秀頼をよろしく頼む」と請われたとき、ひきかえに、たくみにせしめていたのである。

しかし秀吉が最も愛玩したと言う「新田」だけは、今も大坂城にある。

天下の三肩衝が揃わぬ限りは、名実ともに徳川の天下とは言い難い。問題なのは大坂城である。そこは存在する金銀財宝はさることながら秀吉の残した名物をすべて手に入れるまでは、心から満足することができないのだ。

そのために、大坂城をそのまま明け渡させようと、好条件を呈示して、どれほど苦労してきたことか。しかし、相手のあまりの頑迷さにしびれを切らし、大坂夏の陣で

は大坂城に火をかけてしまった。

幸いにして、「新田」は、家康の命で焼け跡より他の名品と共に、藤重藤元が掘り出しに成功して復元させた。しかし家康は悔いを残していた。

いずれひとりでにわが物となる筈であった秀吉自慢の「黄金の茶室」（現在、熱海のMOA美術館に模造品が展示してある）を跡形もなく焼失させてしまったことである。黄金の茶室に天下の三大肩衝を並べて、大勝利を祝ってみたかったのである。もう少し待てば良かったのであろうか。

家康は、大坂夏の陣の翌年、元和二年（一六一六）、七十五歳でこの世を去った。

（四）

三肩衝の現在の所在を追ってみたい。

「栖柴の肩衝」

「栖柴の肩衝」は、天下の政権と共に徳川家康の手に渡り、柳営御物として伝わった。

明歴三年（一六五七）江戸城本丸まで焼いたと言われる大火に遭う。修復されたとも言われるが、全く行方不明のまま今日に至っている。

従って写真が無いため、幻の名器として、優美な姿を偲ぶばかりである。

「初花肩衝」



肩衝　銘 初花肩衝　徳川記念財団　高さ8.8cm
重要文化財

「初花肩衝」は、関ケ原の勝利後、家康の手に戻った。後、大坂夏の陣に於いて、抜群の戦功を挙げた孫の松平忠直に貞宗の佩刀と共に与えられた。

その後、久しく行方不明となっていたが、元禄十一年（一六九八）上総大多喜藩主松平備前守から、徳川五代将軍綱吉に献上された。

綱吉は大いに喜び、即日、金四万両を下賜した。

その後、代々柳営御物として、徳川将軍家に伝来して現在に至っている。

写真は、カラーでないのが残念である。

「新田肩衝」



肩衝　銘 新田肩衝　水府明徳会徳川博物館
高さ8.6cm　重要美術品

「新田肩衝」は、秀吉が最も愛玩していたことで知られている。秀吉の死後なお、大坂城にあり、元和元年（一六一五）五月、大坂落城の際、家康の命を受けて、藤重藤元・藤厳親子が灰燼のなかより探し出し、破損した部分を漆で継いで、家康に献上した。

その恩賞として、百石二十人扶養持を賜わったことは有名である。

後に、水戸徳川家の初代頼房に、駿府御分物として授けられ、水戸徳川家の重宝として門外不出とされている。

終

参考資料

桑田忠親著　茶道と茶人（八）　秋田書店
三宅孝太郎著　戦国茶闘伝　洋泉社
田中健夫著　島井宗室　吉川弘文館
高柳光寿著　明智光秀　吉川弘文館
鑑賞シリーズ　唐物茶入　根津美術館
高橋義雄編纂　大正名器鑑第一編　茶道美術鑑賞辞典淡文社
角川茶道大事典角川書店
茶の湯美術館（東京・関東）　角川書店
その他

信託　英―米―日　歴史の旅
その三（日　その2）

永田俊一

前回は、海を渡って日本に上陸した信託が、妥用性の評価から信託会社の設立、信託法制の制定から展開そして第二次大戦期の試練を経て、戦後焼け跡の中再スタートを切り復興とともに発展。昭和の二十年代末には信託銀行の信託主業化と、当時かなり残っていた信託兼営銀行の普通銀行から信託を分離する行政方針が打ち出され路線も定まってきた処までの旅であった。即ち太平洋を渡った信託が日本でも社会的に根付くことになり、戦後復興期経済社会のシステム再生を共に乗り切り発展の途に就いたところまでを見てきたことになる。

今回は、この日本の旅の足を現代まで駆け足でのばしたいと思う。その上でのことはやや気が早いが、これまでのローマ―英―米―日の旅の流れを比較軸として、別源流や枝分かれした流れの旅を風景として描き、信託の世界風景を歴史的に描けないか試してみたいと思っている。まあ風呂敷を拡げるのは次回以降にして、今回の本題に取り掛かろう。

日本の信託は採り入れられた歴史的経緯や社会文化的背景もあって、金融の世界に閉じ込められて発展してきたと思われる。そして今こそ欧米のように広く社会全般の公器としての位置づけに戻すべきと考えられる。その意味で逆説的に、上陸してこれまでの日本における歴史の旅は金融の流れとの絡みで語ることが分かり易い。そして金融は勿論経済の動きと関連している。

そこで今回は、昭和三六年（1956）の経済白書が「もはや戦後ではない」としたところから始めたい。

一、昭和三〇年（1955）～四〇年（1965）代初め、高度成長期

経済白書（昭和三一年の）は結語を次のように締めくくっている。

「回復を通じての成長は終わった。今後の成長は近代化によって支えられる。そして近代化の進歩も速やかにしてかつ安定的な経済の成長によって初めて可能となるのである。新しきものの摂取は常に抵抗を伴う。経済社会の遅れた部面は、一時的には近代化によってかえってその矛盾が激成される如くに感ずるかもしれない。しかし長期的には中小企業、労働、農業などの各部面が抱く諸矛盾は経済の発展によってのみ吸収される。．．．

戦後一〇年我々が主として生産量の回復に努めていた間に、先進国の復興の目標は生産性の向上にあった。．．このような世界の動向にてらしてみるならば、幸運の巡り合わせによる数量景気の成果に酔うことなく、世界技術革新の波に乗って、日本の新しい国造りに出発することが当面喫緊の必要事ではなかろうか。」

白書は、経済の成長を鈍化させず日本の経済構造を世界の技術革命の波に遅れないように改造してゆくため、安全とスピードを調和させる長期経済計画を示唆しており、昭和三五年（1960）誕生の池田内閣は「国民所得倍増計画」を発表、向こう一〇年で平均実質成長率を、当時その後の白書が唱えた転型期論を踏まえ予想されていた七％ではなく九％台とし、国民所得を倍増すると発表した。現に高度成長期とされる（1956~1972）は平均九％強の成長を遂げた。

この間金融面では、家計の所得や資産の増加に伴う金融ニーズの拡大、国際金融を含む金融市場の拡大や価格・金利等市場機能の高まりや正常化圧力の増大が進展して行く。

昭和三〇年（1955）以降における信託銀行の動きをみると、貸付信託により長期金融機関として大きな発展をとげ、高度成長期にかけ家計や企業の資産蓄積が進む中、専門的な財産管理サービスへの需要顕在化を捉え、財産管理機関としても、信託の仕組みを活用した新種信託の開拓にも鋭意努力したと言える。

その最たるものが年金信託で、業界あげての研究が三〇年代に入って始まった。そして経済界を中心に税制上の優遇措置を具備した企業年金制度の導入を求める声の強まりとも相俟って、動きは強まった。昭和三七年（1962）には、社外積立金の企業年金として適格退職年金制度が誕生し、更に年金制度の拡充の動きは加速し、昭和四〇年（1965）には厚生年金保険法の一部改正が行なわれ、国の厚生年金保険の一部を代行するとともに企業独自の年金を上乗せ給付することにより老後所得保障の充実を図る厚生年金基金制度が発足した。併せて翌四一年から厚生年金基金信託の取扱いが開始され、所謂国民年金・厚生年金基金、三階建ての企業年

金制度が走り出すことになった。

ところが、昭和三八年（1963）ドル防衛に走る所謂米国のケネディー・ショックによる株価急落が日本経済を痛撃、所謂昭和四〇年証券不況の序章となった。東京オリンピック（1964）後の更なる証券市場低迷、病状悪化で年末池田内閣は退陣、佐藤内閣が発足する。

二、昭和四〇年（1965）～五〇年（1975）安定成長志向の高度成長期

東京オリンピック（昭和三九年 1964）後の景気後退で、山陽特殊鋼の倒産、山一證券の破綻（昭和四〇年 1965）・救済等が続き、そのため政府も均衡財政方針を転換し国債発行を行って財政支出を拡大した。景気回復力はまだ強いものがあったが、一方では為替・貿易取引・関税等開放体制化は一段と進み、国際経済関係緊密化に伴い国際経済競争は一層激しさを増した。最早や育成・保護の時代ではないと海外からの、貿易・為替・資本自由化圧力が一段と高まる。

そんな中、所得倍増計画を推進した池田内閣の後を受けた佐藤内閣は、昭和四二年（1967）、経済構造の変化を強く意識して、「経済社会発展計画」を策定する。今後の経済社会の一層の発展と充実のための重点諸施策を挙げ、その軸として、「物価の安定」「社会開発の推進」と並んで「経済の効率化」を掲げた。

この経済の効率化の課題を実現して行く上でも、金融構造も大きな変革を迫られており、そのために金融効率化行政が推進されることになった。基本的には適正な競争原理の導入と金利機能の活用を通じて、景気変動に対して適時適切な調節効果を発揮するとともに、国民経済的に必要とされる分野に良質、即ち低利の安定した資金を適正に供給し得るよう、金融政策や金融制度そして金融機関経営の改善に努めて行くことが目指された。これ迄の育成・保護的な金融システムの転換が進められて行くことになる。制度的側面としては、第一には各種業態間の競争促進、第二には金融機関相互間の競争促進、第三には金融制度全体の効率化のための環境づくりの三つで、例えば第一については金融商品の多様化等、第二については店舗設置数制限の緩和等、第三については、四三年「金融機関の合併及び転換に関する法律」（通称「合転法」）が公布施行され、合併・転換による合理化が促進された。

「経済社会発展計画」は実質年平均八・二%の成長率を前提としていたが、四〇年代半ばまでは、これを超える成長であったこともあり、改定され「新経済社会発展計画」（1970～1975）が策定される。成長率前提は一〇・六%の高さであったが、均衡がとれた経済発展を通じる住みよい日本の建設がうたわれ、人間性豊かな経済社会が目指された。課題も前計画同様、国際的視点に立つ経済の効率化、物価の安定、社会開発の推進、適正な経済成長の維持と発展基盤の培養が挙げられた。

実際、四〇年代の後半に入ると経済成長のパターンは、はっきり高度成長型から安定成長型へと大きく変化し、政策の重点も産業優先から国民福祉向上へと転換することとなり、こうした産業構造の変化、資金需要の多様化に対応した動きが強まってくる。

四五年七月の金融制度調査会答申中には、預金保険制度導入や信託銀行の本来の財務管理機能の充実といった項目がみられ、前者は翌年導入が図られた。

また後者に関しては、昭和四六年貸付信託の運用先の拡大と運用対象に有価証券を加えることを内容とする貸付（1971）信託法の一部改正がなされた。また同年、「貯蓄の優遇と持家の推進」を柱とする勤労者財産形成促進制度が発足し、翌四七年から財産形成信託の取扱いが開始された。財産形成信託は次々と充実が図られ、従来の年金信託や従業員持株信託などと併せて、さらに勤労者福祉の向上に寄与することになった。

三、昭和五〇年（1975）～昭和六〇年（1985）経済大国として振舞った時代

昭和四六年のニクソンショックや昭和四八年の第一次オイルショックを受けた世界経済の変動・低迷で日本も物価高騰、昭和四九年には実質マイナス成長に落ち込み、翌五〇年度補正予算では赤字補填の大量国債発行に陥った。ショック乗り切り後の成長率も、以前の半減四～五%に減速。しかし、先進国中では相対的に高成長であったため、G7等国際場裏では、ドイツと並び所謂機関車の役割を求められ、財政赤字を拡大させつつ成長率アップに努めた面も否めない。この間計数自体は昭和四二年（1967）GDP世界二位になっていたものの、世界経済低迷もあって、ここへ来て経済大国の意識が強まってくると同時に大国の振る舞いを求められる時代にもなった。

金融一般をみると、昭和四八年（1973）の第一次オイルショック後の物価高騰期に一部企業と銀行に対する批判・非難の世論が高まり、これがきっかけで法制度論となり、昭和五〇年五月から金融制度調査会で「普通銀行のあり方」審議が開始された。昭和五四年答申が取り纏められ、昭和五六年（1981）「新銀行法」、「銀行法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」（いわゆる「整備法」で信託の兼営法などが改正対象）、「証券取引法の

中、昭和五八年国土利用白書での土地信託活用期待の表明が呼び水になり、翌年三月第一号が誕生した。土地信託は受託者が委託者から土地を信託財産として受け入れ、信託目的に従ってその土地の有効利用計画または分譲計画を策定し、工事の発注、資金調達更にはテナントの募集、建物・テナントの管理等の不動産賃貸業または分譲事業を一貫して行うものである。これが国公有地の信託活用による活性化論にも繋がり、六一年には国有財産法及び地方自治法の一部を改正する法律が成立し、具体化することになった。

これは昭和五〇年代に入ってからではあるが、相続税法の一部改正により特別障害者に対する贈与税の非課税制度が創設され、昭和五〇年（1975）から特定贈与信託の取扱いを開始した。

また、昭和五二年からは公益信託の取扱いを開始した。この公益信託は、信託法制定時から同法に明文化されていながら半世紀以上もの間実用化されなかったもので、福祉に対する国民の関心が高まるにつれてその利用可能性が見直された結果、ついに実現をみるに至ったものである。

この公益信託第一号を設立し、以後日本における公益信託の開発と普及に尽された今井保太郎氏に、平成一〇年（1998）社団法人日本フィランソロピー協会から、私財を社会のために供した市井の人として、「第一回まち

一部改正法」、それに「中小企業金融制度整備法」（相互銀行法、信用金庫法等の一部改正）が成立をみた。

その後、国債の大量発行と国際化（いわゆる二つのコクサイ化）という日本経済を取り巻く金融・経済環境の更なる変化は、通信・情報処理技術の発達とその金融面への応用という技術的条件の変化と相まって、金融革新の契機を芽生えさせ、金融自由化への動きをもたらし、新銀行法制定後各種の金融自由化・弾力化措置が逐次進展を見る。こうした動きに呼応して、対外経済不均衡が拡大する中で、海外からの金融資本市場の開放要求が次第に強まり、具体的に米国の要求で協議の場が設けられ、その議論・検討の結果が昭和五九年（1984）「日米円・ドル委員会報告書」に纏められた。同時にこの報告書項目も含めた「金融の自由化及び円の国際化についての現状と展望」が大蔵省から公表され、金融自由化はここに盛り込まれた自由化措置によって裏打ちされ、より本格的に進められることになって行く。

信託の関連でみると、その具体的な項目の一つとして、年金信託業務の将来性に着目した海外からの信託業務への外国系銀行参入要請がなされ、別に信託業務を主業とする信託銀行を日本国内に設立する形で、最終的に申請した全九行が認められるところとなった。

都市開発の分野で民間活力導入の議論が盛んになるかどのフィランソロピスト賞」が授与された。前回述べたようにこの公益信託は、今では「公益信託の父」と呼ばれる江木衷博士が孤軍奮闘ともいえる主張で、法案に形を留めたものであり、今井さんの第一号から増加が始まり、平成三一年三月現在受託件数は四三八件受託残高五七一億円に上っている。谷中の墓地に眠る江木博士はどのように思っておいでであろうか。

四、昭和六〇年（1985）～平成七年（1995）　バブルの生成と崩壊の時代

世界経済の減速と日本の相対的経済大国としての振る舞いは、国債赤字を増大させつつ機関車の役割を果たさせたが、その先進国間の経済優位調整が本来の為替調整に帰結したのが、プラザ合意による大幅円高調整であった（1985）。

その後日本経済は円高不況防止のための公共事業中心の財政出動でさらなる国債赤字拡大とそれまでの流入資金の増大が過剰流動性となって国内外に収益性や再生産性を無視した不動産投資を拡大させ、生産性向上投資やあるべき社会資本充実を等閑視したため、水膨れのバブル経済の膨張を許すことになる。見かけの成長に気づきブレーキを踏み始めたときは既に手遅れで、日経平均株価が史上最高の高値三万八九一五円のピーク（1989 末）をつけると、以降釣瓶落としのバブル崩壊が始まった。

この時期の金融におけるトピックスは、前半に金融制度改革法の制定、後半にバブル崩壊と金融破綻処理の開始ということになる。

（一）金融制度改革法の制定

ここ迄の推移を金融制度という切り口で簡単に見ておくと、次の通りである。

分業主義・専門金融機関制度に基づくわが国の金融制度は、戦後経済復興、高度成長を金融面から支えてきたが、昭和四五年（1970）以降の安定経済成長とその後の経済の成熟化に伴う資金循環構造の変化を背景に、棲み分け的あり方が崩れ金融機関の同質化が進んだ。特に、昭和五五年（1980）以降急速に進展した金融の自由化、国際化、証券化という金融機関を取り巻く環境の変化により、この傾向はより一層顕著となり、金融制度そのものの見直し議論・検討に発展した。

昭和六〇年（1985）以降、金融制度調査会の専門委員会（制度問題研究会）で、専門金融機関制度を巡る諸問題が研究・検討された。そして昭和六二年、金融の証券化現象、金融機械化の進展、ユニバーサルバンキング等重要な論点と共に、長期信用銀行制度、信託銀行制度、外国為替専門銀行制度等について具体的な問題点を整理した報告書「専門金融機関制度のあり方について」が取

り纏められた。

その後この報告を受け「金融制度第二委員会」で、利用者の立場、国際性および金融秩序の維持の三つの視点から検討が行われ、金融制度の見直し（相互参入自由化と方式）が必要であるとする「第一次中間報告」が纏められ（平成元年、1989）た。更に同調査会「制度問題専門委員会」の審議により、平成三年六月に報告書「新しい金融制度について」が取り纏められ、同日そのまま同調査会答申として了承された。

この答申で、相互参入形態としては、①業態別子会社方式が適当、②業態別子会社としては、銀行子会社、信託銀行子会社及び証券子会社を基本とすることが適当とされ、業態別子会社の業務範囲、弊害防止措置等については、金融制度改革実施後の状況、市場の状況、証券会社及び金融機関の経営に与える影響等を勘案し、法施行後2年ないし3年を目途に見直しを行う、こととされた。

これを受け、平成四年（1992）六月、関係十六法律の改正を盛り込んだ所謂金融制度改革法案が成立、実施の具体的な細目（業態別子会社の業務範囲、弊害防止措置、諸規制・諸慣行の見直し等）と共に、翌年四月施行された。

信託関連事項を取り出して述べれば、次のとおりになっている。

・信託銀行子会社の当初の業務範囲は、銀行法により認められる全ての業務、金銭（かね）の信託［金銭で引受けを行う］のうち、金銭信託［終了時換金の上金銭で交付される］である特定贈与信託、証券投資信託、金外信［終了時現状有姿のまま交付される金銭信託以外の金銭の信託］である従業員持株信託、金信託、単独運用指定金外信託（ファンドトラスト：専属ファンドマネージャー付き）と、金銭以外（もの）の信託［金銭以外で引き受けを行う］有価証券の信託、金銭債権の信託、動産の信託等（不動産の信託のうち信託財産の処分を信託目的の全部又は一部とするものは除く）及び公益信託とする。従って、金銭の信託のうち金銭信託である貸付信託、合同金銭信託、年金信託、特定金銭信託（特金）や金外信である指定単（単独運用指定金銭信託でファンドトラスト以外）は後回しとされた。

・信託銀行子会社に関しては、親子間で受益権の利益が損なわれる取引等が行われること等を防止する観点から、弊害防止措置を講ずる。

・地域金融機関が本体で行なう信託業務の範囲は、特定贈与信託、動産の信託、土地信託及び公益信託とする。（なお、・銀行子会社は、銀行法により認められる全ての業務とする。証券子会社は、当面流通市場での株式ブローカー業務等を除く。）

（二）バブル崩壊と金融破綻処理（～金融システム改革［ビッグ・バン］迄）

金融の安定と改革は、不断に達成・確保されるべきものだが、現実はあざなえる縄の如く不安定化の萌芽の中改革が行われるという皮肉な関係にもなる。

この時も、平成元年末（1989）の株価、平成三年央（1991）の地価の崩落そしてこの平成四年（1992）八月の株価急落でバブル崩壊が決定的になり、皮肉にも政策モードは金融安定化対策そして破綻処理対策へとベクトルの向きを転換してゆく。ある意味この金融制度改革法は、株式市場が危機に直面、損失補填不祥事対応で揺れる中、関係者努力でギリギリの時期に成立したとも言える。

この間、景気後退・低迷に相次ぐ経済対策が打たれ、金融市場でも証券会社の経営危機対応ややがて平成六（1994）、七年と信用組合、住宅専門金融会社等の破綻処理が行われ、平成八年（1996）前半の公的資金注入の住専処理法審議が住専国会として揉めたことを記憶している人も多いかと思われる。七年初（1995）の阪神淡路大震災、オウム真理教の地下鉄サリン事件などいたましい事変も社会の空気を重く暗いものにしていった。勿論この間にも保険業法改正や、日本パッシングに対応した日本金融市場の国際化検討等金融システム改革の動きはあったが、ビッグバン改革入りは住専国会後であり、金融破綻処理本格化への動きもそこから始まる。

五、平成八年（1996）～平成一〇年（1998）踊り場の改革

自社さ政権で村山内閣が退陣橋本内閣になった平成八年前半は所謂住専国会で揺れたが、後半から金融安定化に心しながらも、構造変化に対応する前向きな政策を打ち出している。平成七・八年の三%～四%と高い実質成長で明るさを取戻したかに思われたこともあり、行政・財政構造・金融システム・社会保障制度・経済構造・教育の分野で思い切った六大改革政策が採られた。

中でも金融システム改革は、明確な改革の工程表を提示し、迅速・大規模に規制緩和メニューを一気に実行し進められ、六大改革の目玉でもあった。

（一）日本版ビッグバンの提唱

平成八年（1996）十一月、総理により、「我が国金融システムの改革～2001年東京市場の再生に向けて～」が公表される。Free（市場原理が働く自由な市場）、Fair（透明で信頼できる市場）、Global（国際的で時代を先取りする市場）の三原則に則り、抜本的な金融・証券市場の改革（いわゆる日本版ビッグバン）を平成十三年（2001）までに完了させるプランの具体的検討が、金融制度調査会、証券取引審議会、保険審議会、企業会計審議会、

外国為替等審議会及び各審議会の代表者からなる「連絡協議会」で年末から開始されることになった。

各審議会の答申を受けて翌九年（1997）に順次具体化されたものは、

①「外国為替及び外国貿易管理法」の改正（五月、翌一〇年四月施行）

事前認可・届出制度の廃止等内外資本取引の自由化、所謂為銀主義の廃止、常時持高規制の廃止、事後報告制度の整備等外国為替制度の抜本的見直し。

②「金融システム改革のプラン～改革の早期実現に向けて～」（六月）

改革に向けての具体的措置のタイムスケジュールが明示された。

③銀行持株会社等の解禁

かねて懸案の持株会社の設立・転換が「独占禁止法改正法案」で実現（六月）。これを受けて、金融業の業態間の垣根を超えた相互参入を促進する日本版ビッグバンの大きな柱とされた銀行持株会社等の解禁が、「金融持株会社整備法」および「銀行持株会社の創設のための銀行等に係る合併手続の特例等に関する法律」の成立（十二月、一〇年三月実施）で実現。

この（一）②の中で、業態別子会社の業務範囲等に関し、証券子会社、信託銀行子会社に係る残余の業務制限について、一一年度（1999）下期中までに解禁することが示された。

なお、信託子会社の単独運用指定金銭信託、特定金銭信託、貸付信託については「規制緩和推進計画の再改定」（三月）の中で、九年度下期より解禁。更に「金融関係の規制緩和等について」を公表、その中で地域金融機関が本体で行うことができる信託業務の範囲について、不動産管理信託及び自行が受託した特定贈与信託又は公益信託に係る受託財産の合同運用が同年十月から解禁とされた。

また「金融・証券関係の規制の撤廃等について」を公表（七月）、平成九年度中に実施する金融・証券分野の諸施策（主に証券分野）のスケジュール等を明示。その中で「業態別子会社の見直し」として、信託銀行子会社の合同運用指定金銭信託（除く貸付信託）、年金信託を除く全ての金銭の信託業務を十月から解禁するとされた。

（二）金融システム改革法の制定

前記の先行改定されたものに加え、改革の全体像を総仕上げ的に明らかにするため、二十三本の法律改正を一括して提案する「金融システム改革のための関係法律の整備等に関する法律案」が平成一〇年（1998）六月に国会成立・公布された（一部を除き、平成一〇年一二月一日から施行）。なお、同時にSPC法（特定目的会社による特定資産の流動化に関する法律」・証券投資信託及び証券投資法人に関する法律などが成立している。

金融システム改革法は金融市場機能の活性化を中心にしたもので、改正骨子は次の四つに纏められる。

①会社型投信・私募投信や銀行の投信窓口販売導入等資産運用手段の充実

②ラップ口座導入や株式売買委託手数料完全自由化など活力ある仲介活動を通じた魅力あるサービスの提供（証券会社の業務の多角化等）

③取引所集中義務撤廃や店頭登録市場の機能強化等多様な市場と資金調達チャネル整備

④ディスクロージャーの充実と公正取引ルールの整備など利用者が安心して取引を行うための枠組の構築

また、信託関連では、次の手当がなされた。

①大量かつ機動的売買の為の信託の公示に関する特例、

②証券会社が破綻しても確実に返還されるよう顧客分別金信託の義務付け、

（三）新しい金融の流れ

「新しい金融の流れに関する懇談会」設置等の動きもあった。これは、金融システム改革の環境整備として、新たに必要な新金融サービス提供だけではなく、利用者保護の横断的金融サービス法制が必要であり、その検討が始められたものだが、後述するその実現への動きとして重要な一歩であった。

（四）橋本内閣の金融システム改革等その後

しかしその後、金融関連不祥事の続出、アジア通貨危機、消費税率引き上げの影響、大型金融機関の破綻続出などの逆風に見舞われ六大改革の道行きは必ずしも順調ではなかった。その中では日本版ビッグバンの施策自体は着実に進められ、制度的にはある意味ほぼ制約のない状況が輩出することになった。

ただ皮肉なことにはその時には金融機関がよって立つ日本経済がその制度を十分活用するだけの体力を失ってしまい、逆に潜在していた金融機関の脆弱性が経営危機という形で顕在化し、その対応に追われることになる。

このように平成初年代（1990年代）半ば以降の金融制度改革は、所謂自由化・弾力化・国際化という金融制度改革の流れの集大成というべきものであったが、日本経済の構造変化と競争・市場原理への転換に伴う新たな均衡を模索するには、経済社会環境、金融機関自身の体力・体勢そして政策対応に力を欠いたといわざるを得ない。その後当分の間、金融当局は金融機関の破綻処理に追われ、金融安定化のための制度模索が続き、経済・財

政・金融政策各当局は経済デフレ対策に挙げて取り組むこととなって行く。

六、平成一〇年（1998）～二〇年（2008）　平成不況（リーマンショック迄）

短期踊り場の後平成一〇年に入ると経済は、実質・名目ともにマイナス成長に転じ、ようやく金融破綻処理の山場を越えた平成一五年（2003）頃から上向きに転じ始める。そしてリーマンショックで再びマイナスに転じる。

この間金融は、前半は金融破綻処理に追われ、それが経済の足も引っ張ったが、後半にかけては金融制度改革的な動きも次第にでてくるようになった。

（一）金融破綻処理

平成八年（1996）六月に成立した所謂住専処理法・健全性維持法・更生特例法・預金保険法改正等金融六法の金融安定化措置の背景をなす金融不安の流れが、顕在化してくる。九年（1997）に入って夏前は金融監督庁設置法や早期是正措置の翌年四月実施決定　等と並んで改正日銀法、改正独禁法・金融システム改革一括法と関連三法案（SPC法・証券投資信託及び証券投資法人に関する法律、証券取引法改正）、信託業法改正、新しい金融の流れに関する懇談会発足等制度改革の動きもあった。しかし夏を過ぎると再建努力が続いていた三洋証券会社の更生法申請や北海道拓殖銀行・山一証券の自主再建断念と破綻が顕わになる。

一〇年（1998）に入ると動きが加速し、二月　金融安定化二法（金融システム安定化の制度整備と三〇兆円の公的資金確保）、六月　金融監督庁発足、一〇月　金融再生関連法・金融機能早期健全化緊急措置法成立、日長銀の特別公的管理決定、一一月　過去最大の緊急経済対策（二四兆円）と続く。そして一二月　金融システム改革法及び関連法施行と改革事項は予定通り実行に移されるが、同月日債銀の特別公的管理決定と、金融危機対応で破綻処理や再生措置等が相つぎ、後にデフレや金融破綻処理で失われた十年と言われるようになった。

（二）新しい金融の流れ対応

前述の「新しい金融の流れ」懇談会の論点整理を受けて、金融審議会で平成一二年（2000）六月、答申「二一世紀を支える金融の新しい枠組みについて」が取りまとめられた。その前年十二月に部会で纏められた「中間報告」を踏まえ、「日本版金融サービス法」の第一歩として、集団投資スキームおよび販売・勧誘ルールについて、当面、法制化が進められる。そして、投資者から資金を集めて市場で専門家が管理・運用する集団的な投資の仕組

み（いわゆる集団投資スキーム）については、先行したSPC法（「特定目的会社による特定資産の流動化に関する法律」）が改正され、同年五月公布された。

一つは「資産の流動化に関する法律」として改正され、特定目的会社制度（SPC）の改善、特定目的信託制度の創設などが行われ、もう一つは、「資産運用型スキーム」として、「証券投資信託及び証券投資法人に関する法律」が「投資信託及び投資法人に関する法律」として改正され、委託者非指図型投資信託が創設されるとともに不動産を含めた幅広い資産への投資運用が可能とされた。

また、金融商品の販売・勧誘ルールの整備については、金融商品の販売に際して、販売業者に一定の説明義務を課し、これに違反した場合に損害賠償責任が生じることを明確にするとともに、販売業者に対し勧誘に関する社内規定の整備・遵守および同規定の基本的な方針の公表等を義務付けた「金融商品の販売等に関する法律」が、同日に公布された。この間、自由化・弾力化・国際化により銀行中心から金融市場全体を横断的にみる重要性が増してきており、金融庁の創設や強まる利用者保護の観点から金融市場サービス法で金融商品・金融サービスのカテゴリーに分けて、規制や免許区分けを行う法制導入は時代の要請でもあった。その一歩を踏み出したと言える。

（三）制度改革の動き

平成一〇年代半ばになると、制度改革的動きが活発化する。

一六年（2004）には四月　日本振興銀行免許、七月　三菱東京フィナンシャルグループとUFJフィナンシャルグループの経営統合の発表がされるが、一〇月にはUFJ銀役員刑事告発・一部業務停止命令と後始末の動きも続くものの、一一月には新紙幣発行開始、改正信託業法成立（受託財産範囲拡大等）、一二月には金融改革プログラム（「金融サービス立国への挑戦」）の公表と制度改革の動きが表面にもあらわれてくる。

そして、一七年に入ると三月　金融改革プログラム工程表公表、地域密着型金融の機能強化の推進に関するアクションプログラム公表、四月に金融危機は脱したとの表明にも当たるペイオフ解禁完了が宣され、新たな新銀行東京の業務開始も行われ、更に十二月には投資サービス法に向けて検討が表明される。一八年（2006）になると、一月　日本郵政発足、三月　日銀の量的緩和策解除、六月には金融商品取引法成立（証取法全面改正）、そして七月　日銀ゼロ金利政策解除、九月　第一次安倍内閣発足の後一〇月には、信託法の改正施行に伴う関係法律の整備等に関する法律が成立する。

（四）信託業法・信託法大改正

平成一六年（2004）三月、改正信託業法案が通常国会

に提出され、追って「規制改革・民間開放推進3か年計画」が閣議決定され、「信託会社の参入基準や行為規則を整備し、信託会社を解禁する。また信託銀行同様、信託会社にも信託代理店を認めるとともに、その範囲を現行の金融機関及び商工中金にとどまらず、幅広く認める。六か月内に実施する。」とされた。

なお、金融庁は、平成一六年一一月、「金融改革プログラム」を公表し、「金融サービス立国」の実現に向け今後二年の「重点強化期間」に実行すべき改革の道筋を五つの視点で提示した。すなわち、①利用者ニーズの重視と利用者保護ルールの徹底、②ＩＴの戦略的活用等による金融機関の競争力強化及び金融市場インフラの整備、③国際的に開かれた金融システムの構築と金融行政の国際化、④地域経済への貢献、⑤信頼される金融行政の確立、の五つである。①の具体策として、「投資サービス法（仮称）」の制定が盛り込まれた。

このように信託業法について先行して第一弾の見直しが行われ、次に信託法とそれに伴う第二弾の信託業法見直しが行われ、平成一八年一二月には、八十余年振りに信託二法が抜本改正されることになった。

先ず先行（2004）した信託業法の改正のポイントは二つの自由化とそれに合わせた受益者の保護規定の整備であった。二つの自由化とは、一つは、受託可能財産の制限の取り外しで知的財産権等も対象とすること。二つ目は、金融機関以外の者（信託会社）でも信託業の担い手になれることである。

金融経済的には金融自由化の仕上げ段階にあり、国民金融資産の増大に伴う資産形成多様化、不良債権処理等のための流動化、消費者保護等安心機能の強化、といった金融自由化に伴う制度面の機能アップが求められ、それが先ず第一弾の信託業法改正に結実したということである。

その意味で、信託の持つ財産管理機能（財産の管理・処分権が受託者に与えられること）、転換機能（信託財産が信託受益権という抽象的な権利となり、信託の目的に応じた形に転換できる）、倒産隔離機能（信託財産が委託者及び受託者の倒産の影響を受けない）、といった機能が注目された。信託業法の改正を提案した金融審議会の報告書（平成15年夏）でも、信託機能の意義を「高齢化社会やストック経済化、経済の高付加価値化が進展する中において、我国金融システムの基本的インフラ」と位置付け、「各種の金融商品を仕組む器として有用であり、投資家の様々なニーズに対応した金融技術のイノベーションや新たな金融の流れの構築に資する」としている。

そして引続き入った、信託法及び第二弾の信託業法の改正作業では、自由設計機能と消費者保護機能を併せ持

つ信頼の器である信託本来の原点に返って、基本法・業法併せて新たなものとするという抜本的改正であった。これも金融自由化の仕上げ、新たな社会システムの構築と、新時代への取組みの位相にあるが故であり、この辺の背景を信託に絡めて改めて整理すると次のようになる。

①流動化・証券化と市場型間接金融

今回改正の背景のひとつになった流動化・証券化型信託の伸張は、主に転換機能と倒産隔離機能に着目したもので、金融機関等の持つ貸付債権や売掛債権を選択し、まとめて受益権化した金銭債権等の信託である。信託や他の集団投資スキーム（所謂ファンド）が相対型の金融債権を市場型の証券等に転換することを通じて、市場の金利機能が間接金融商品にも広がり、マクロ的に言えば市場型間接金融の拡大、即ち市場機能の一衣帯水化という意味での金融自由化の仕上げと考えられる。

②利用者と業者の間に構築される横断的・統一的ルールとの共鳴

金融投資サービスを、勧誘・販売、助言、管理・運用、仕組と分けると、信託は運用・管理、仕組のサービスを中心として全般に関わっている。各金融サービスに関わる市場・取引法や業法の自由化が進んできたが、一方で利用者保護の強化が求められる中、本来その両者が相俟った信託の法整備の意義は大きなものと考えられた。金融投資サービス全体を包摂する横断的・統一的投資家保護ルールへの動きと共鳴して、改正が後押しされたと思われる。

③世界における信託法規の革新

英国では、九〇年（平成二年）代末から金融サービス庁の創設や金融サービス業を包括し市場取引をも包括した金融サービス市場法の成立等総仕上げが行なわれ、七十五年振りに受託者法も新たになった。米国では、九九年（平成一一）末に金融サービス現代化法（GLB法）が成立、金融業の相互乗入れが実現するとともに、ビジネスや生活の著しい環境変化に対応するため信託規制の包括的な見直しが進み、信託法の現代化、各州の信託法の統一を働きかける統一信託法典の採用や判例統一化のための信託法第三次リステイトメント策定作業も進行した。ＥＵでは九九年ヨーロッパ信託法原則が取り纏められ、各国法制度の中へ調和的に受け入れられるべき信託原則が提示され、フランスやルクセンブルグ等では、こうした潮流の中、法改正が行なわれた。このように欧米でも金融自由化の仕上げが金融サービス法的制度構築と、形影相伴って信託法規の革新の動きにつながったところである。

また改正信託法は既述の如く、自由設計機能と消費者保護機能を持つ信頼の器として、原点返りをした法制整

備であり、そのポイントは次の通りである。

①受託者義務の合理化

（イ）受益者の利益を害さないことが明らかな場合、裁量的な定めを許す等強行規定の任意規定化。

（ロ）忠実義務について利益相反行為等を具体的に列挙し、義務違反の扱いについても明確にする等受託者義務や義務違反規定の明確化や整備。

（ハ）旧法の自己執行義務を弾力化、第三者への信託事務の処理委託容認。

②受益者保護制度整備（権利行使の実効性と意志決定の弾力性を高める為）

（イ）信託違反行為の予防的救済の為受益者の受託者行為差止請求権創設。

（ロ）高齢や多数の場合にも受益者に代り権利行使する者を選任し得るよう信託管理人・信託監督人・受益者代理人の制度を導入し信託管理人制度強化。

（ハ）帳簿等書類及び信託財産等状況書類の作成・保存・閲覧等規定整備。

（ニ）多数決制や受益者集会導入等受益者複数の場合の意思決定方法整備。

③多様な信託制度の整備（消費者保護を兼備えた自由設計機能を持つ器だが、これまで認められていなかったり、制約が強くて出来なかったもの等については、具体的な仕組み、他の法令との関係、過渡的な許容範囲や経過措置を定め、誤解やトラブルを予防することが企図されている）。

（イ）信託の併合及び分割制度の創設。

（ロ）信託設定方法に契約及び遺言信託に加え自己信託創設（実施は一年後）。

（ハ）受益者の定めのない信託（存続年限を二十年に制限する等）。

（ニ）限定責任信託の創設（受託者の責任が信託財産に属する財産の範囲に限定される有限責任信託であり、従前の受託者・債権者間で結ばれていた責任財産限定特約の効力が当事者間にしか及ばないのに比べ、不法行為等がなければ第三者にも及ぶ）。

（ホ）受益証券発行信託の特例（信託行為で有価証券発行の選択を可能に）。

（ヘ）受益証券発行限定責任信託の特例（（ニ）（ホ）の合成、株式会社に性格が似てくるので、会計監査人等受益者保護を強める規定を追加）。

（ト）事業の信託（消極財産［負債等］についても委託者から受託者が信託財産を引当てに引き受けることが可能になったので信託行為で定めれば可に）。

（チ）担保権の信託（債権者とは別の第三者に担保権を信託設定することが明示され、シンジケート・ローン等複数の債権者対応に便利に）。

（リ）後継ぎ遺贈型の受益者連続信託（受益者の死亡により順次他の者が受益権を取得していける予め定めた跡継ぎ遺贈が可能に。しかし、信託設定から三十年の時の受益権の受益者が死亡するまで或いはその受益権が消滅するまでと年数制限）。

（ヌ）遺言代用の信託（委託者が受益者を変更する権利を有することが明示され、民法の死因贈与と整合的になる）。

（五）金融商品取引法

一八年六月に成立した金融商品取引法は、勧誘・販売・助言行為を対象にした金融販売法を管理・運用や仕組の分野にも拡充、消費者・利用者・投資者の立場に立って公正・妥当な金融行為確保の為の横断的・統一的ルールとして、証券取引法を改正、新法として制定された。信託の関係部分もそれによることとなった。

しかし、当初目指した「投資サービス法（仮称）」に相応しい管理・運用や仕組の分野の統一までは行かなかった（投資信託法・資産流動化法等商事信託特例法として作られたものは信託法改正でその次元では統一化された）。

言葉の誤解を恐れず譬えて言えば、勧誘・販売・助言という金融サービスの枝の部分が中心になって、管理・運用という幹、仕組という根も動かすような規制の姿である（現に幹・根を律する業法側からみると枝に振り回されて、サービスにより金商法直接適用・準用・非適用と複雑な規制体系になっている）。

更に消費者保護法が出来てその分野と金融分野との調整や、投資サービス（証券・ファンド・投資銀行・信託）だけでなく銀行・保険も含めた「金融サービス法（仮称）」といった横断的・統一的な取り組等により広範囲な利用者保護の法体系の構築が、課題として残されている。基本的な利用者保護のキーワードとして通底するものは、まさに信託でいう信頼であり信認の確保（フィデューシャリー・デューティーに通じる）であると考えられる。根に当る商品を仕組む部分で問題が起こると被害は木全体を揺さぶり甚大であることから、自然界のように、仕組みや運用行為等根や幹が下で支え勧誘・販売・助言行為等枝や葉が上でそよぐしっかりした法体系に戻すべきである。またその後のリーマンショックを挟み、ネット金融化も急進展し業態業務の横断化や自由な統・結合の動きも活発化してきているが、その辺り、更なる利用者保護の法体系構築課題についての動きについては、後に触れたい。

七、平成二〇年（2008）～二一年（2019）　平成不況（リーマンショック後）

リーマンショック（2008）対策として大規模な金融支援や積極的な財政政策が米欧や中国を中心にとられ世界経済が支えられ回復、更に中国を中心としてアジア経済の発展が世界景気を牽引した。相対的に被害の軽かった日本経済は輸出回復を起爆剤として立ち直ってきたが、その後の東北大地震・津波・原発事故（2011）で腰を折られた。民主党政権に代わった第二次安倍内閣が誕生（2013）、デフレ不況対策として、金融政策・財政政策・成長政策三本の矢からなるアベノミクスを打ち出した。

大規模異次元緩和のバズーカ金融緩和が先兵となり、円安・株高を齎し、持ち直した世界経済に助けられデフレ脱却はしたものの、人口減や石油価格の下落や平成終盤にかけての貿易摩擦等により成長政策の効果が表れず日標の三％の持続成長・二％の物価上昇日標が未達のまま、低位水準の経済に留まり低迷が続いて、平成を終え令和を迎えた。

金融では、金融サービス市場法的制度構築（金融商品取引法に留まったが）と信託法規の革新の動きが日本まで伝播したところで、皮肉なことにリーマン・ショック（2008）が起こった。世界的に非伝統的金融政策と財政出動も伴う破綻処理が行われ、金融システムの再生・規制強化が国際的レベルで進められるところとなった。その中で一旦持ち直した世界経済であったが、その後の地政学的リスクの顕在化や格差拡大や貿易摩擦の発生で、世界的金融緩和政策からの出口を求めるいわゆる出口戦略も頓挫するところとなった。

日本でも一方で経済低迷とゼロからマイナス金利の超金融緩和政策の持続で、経営不振が広まりを見せ金融機関の再編圧力が強まっている。と同時に引き続き金融の国際化やネット化は急速に進展し、業態業務の横断化や自由な統・結合の動きを活発化させ金融システムの将来像が見通せない不安定さが再編化圧力の不安を強めている。

他方で、将来不安を抱える高齢化社会と正面から向き合うに相応しい金融サービスや金融資産の在り方を探るとともに、更なる利用者保護の法体系構築の必要性が強く意識されてきており、利用者・消費者保護の全体的統一法制の検討も行われている。そしてこの間金融経営側にフィデューシャリー・ディユーティーを、顧客本位の業務指針として行政が具体的に求めることにもなった。

（一）フィデューシャリー・デューティー（以下FD）

資産運用とその提供業務は様々な仕組み・器・組織

で、また様々なサービスの形及び組み合わせで行われ、多様化して来ている。平成二八年（2016）の日本再興戦略改訂でも、質の高い個人向け投資商品の提供促進およびNISAの利用拡大が唱えられると同時に、金融庁のモニタリング等を通じて、販売業者・投資運用業者の双方に対し、「その役割・責任（FD「他者の信認を得て、一定の任務を遂行すべき者が負っている幅広い様々な役割・責任の総称」）を果たし、真に投資家のニーズに適うより質の高い商品の提供」が求められた。その後、FDを言い改め「顧客本位の業務運営」として、各金融機関にその方針の設定公表が求められ、それに基づくモニタリングで行政の指導が行われている。

原点にかえれば、信託の受託者責任の善管注意義務と忠実義務等がベースとなっている信認義務が、歴史的にも国際的にもフィデューシャリー・デューティー（FD）である。金融商品・サービスが一層高度化し、資産運用や販売にあたる取扱者も多様化して、利用者には選択の幅が広がると同時に、高度化するリスクに対応した規制や保護が必要となる中で、様々な金融サービスを提供する者の義務を統一的に把握するための概念として注目されてきたといえよう。それは関連金融法制のあり方も大きく左右する要因にもなると思われる。

（二）フィン・テックの進展

二一世紀入り後日本でもネット・バンキング、ノンバンクの為替・決済の動きが進展してきているように、近年ITの進展等により金融サービスを個別の機能に分解して提供（アンバンドリング）する動きや、複数の金融・非金融のサービスを組み合わせて提供（リバンドリング）する動きが一段と広がりつつある。例えばIT企業等の新たなプレイヤーが、リテール分野の決済サービスなどに特化してサービスを提供したり、金融機関や金融グループにおいても、IT発展等の成果の独自ないし提携による、より広い活用が進展している。

また付加価値通信網（VAN）による電子決済の普及は、以前の前払式証票規制法のプリペイドカードに加え、為替取引については銀行以外で送金も含む決済業務を行う資金移動業者を登録業者として規定する資金決済法を成立させた（2009）。更に平成二九年（2017）には折からの世界的な仮想通貨規制論を受けて、資金決済法の対象に仮想通貨交換業者を加える形で改正が行われた。

その後、登録開始直前に起こった交換業者の手元から仮想通貨が詐取される事故やその急速で投機的な拡大が、仮想通貨性より投機金融商品性を顕わにし、その取り扱い対応の厳格化や再検討を促した。

更には世界的な仮想通貨への対応議論や国際機構及び各国の取扱い検討が進む中、世界的商圏を持つフェイスブックがよりデジタル通貨に近い汎用的暗号通貨案（リ

ブラ）を提示、大きな一石を投じたことが、各国通貨当局の警戒感とデジタル法定通貨の検討につながり、世界貨幣や中央銀行貨幣を頂点とする決済金融システムの今後の在り方論を大きく動かした感がある。このような進行する金融システムの世界的変化の波は、仮想通貨が法定通貨そのもののデジタル化を促し現に検討を進める国も出ており、同じくマネー供給の銀行システムにも変化を齎し、ひいては銀行原理は変わらぬとしても、金融の姿・形に大きな変革の潮流を予感させるところである。

デジタル化の下、一方でグローバリゼーションが浸透するとともに他方で世界経済のきしみや格差が拡大する中、先行き不安やポピュリズムにも突き動かされ、自己利益優先の国家摩擦や不寛容、力の行使等が強まっている。自然や人的災害等の偶然の契機からの可能性も含め、世界の金融覇権や経済覇権を巡る争いに転化しないとも限らず、金融構造変革が健全で進歩的発展に帰結するよう努めてゆくことが求められる。

（三）総合的な金融法制や金融システム変革への動きと信託

以上、高度化する様々な金融サービス提供を試みて止まないフィンテックの進展と、ネット情報化でそれら全てに同時に向き合い選択を迫られる利用者保護法制の高度化は、世界的広がりの中で表裏一体のものとして調えられて行く必要がある。それも情報通信機能の革新につき動かされているものゆえスピード感が大切である。

為替の壁を潜って国際的効率ネット決済として躍進した仮想通貨が、極度に投機商品化している現状から、これを金商法の対象として規制する必要性も高まっているが、金商法を、投資関連業のみならずより広く銀行・保険等も含んだ総合的に金融商品・金融業を対象とする全たき金融サービス市場法のようなしかもデジタル版も含む利用者保護法制への改正が喫緊の課題である。

金融サービス市場法の世界では、ＩＴ利用の安全・安心は勿論のこと、全体統一的な保護概念としては顧客本位（ＦＤ）の下、現在基本的に業態別となっている金融規制体系をより機能別・横断的なものとし、同一の機能・同一のリスクには同一のルールを適用する形での保護規定が必要であると思われる。しかもそれらサービスの組み合わせで行われる各種の業規制も整合的になっている必要がある。

ＦＤは元を問えば信託の受託者責任から発生した概念である。信託は本来、金融のみならず広く事をなす際適用される広い社会的法概念であり、会社とならんで事業を行う社会的公器である。即ち信託会社の運営の場合は金融の顧客本位（ＦＤ）の一般論が適用されることは勿論だが、更にそれを包み込んで信託固有の受託者責任が求められることになる。金融サービス市場法との関係で

いえば、全金融サービスに網をかけて適用されるＦＤの統一基準を提供するとともに、金融の外側も入れ広く事業一般に使われる信託業務を行う場合に適用されるより重い受託者責任準則として適用されるものという位置づけになるのが自然と考えられる。

制度・法理として説明する信託という器とクラウドとして現にネット上で作用する信託の器の重なりが、ＩＴ化の進展でやっと感じてもらえるようになってきたのではないかと思う。そこでそれに関しこでこれまで言ってきたことを、より近時に引き寄せて改めて説明し、今回の旅を締めくくろうと思う。

八、デジタル化でより広がる信託クラウド

信託は委託者―受託者―受益者が作る信頼の三角形の容器であり、デジタル用語でいえば信託の三角形のクラウドである。これは信託法理という安心で誠実履行のクラウドの中に、あらゆる財・サービスを取り込み、あまねく財・サービスを提供し得る。社会全体が歴史的構造変化の時代にある今、この自由設計と安全・安心のクラウドの果たす役割はまことに大と考えられる。

十年も前からデジタル化進む新時代の信託を表す言葉として信託クラウドが相応しいと言っている。ＩＴ化の急速な進展でやっと多くの人がそう感じるようになったのではないか。信託法理に裏打ちされた制度・仕組みとしての信託を信託クラウドとすると、具体的な信託商品は信託プラットフォームといえよう。

信託商品がモノ・サービスのアンバンドル（分解）やリバンドル（統合）作用を活かして自由設計機能を発揮し、受託者責任に基づき安全・安心の役割を果たすことに変わりはない。それ故デジタル化においても、幅広く高度に進化する誠実なデータのやり取りや対話を通じて、信託プラットフォームは顧客が真に望む将に多種多様なソリューション需要に、最適解を提供するだろう。

ところでモノとカネはその顕れ方・絡み方は時代とともに変わろうとも、その存在・機能は人間の経済生活に二つながら常に不可欠である。今変化の方向はＩＴ活用生産であり、ＩＴ活用市場取引であり、キャッシュレス化である。

現金・銀行預金・中央銀行預金・国際通貨基金といった人々の信認を法的背景とする通貨勘定の間のネットワークで重層的に果たされているのが、カネの決済機能である。キャッシュレス化とはそれら通貨勘定のデジタル化が人々の信認を得て進んでいるということである。ある意味このシステムは世界の人々に委任され通貨機能を果たすカネの信託クラウドといえる。因みにこの法定

の信託クラウドに、非法定のカネのクラウドで挑んでいるのが仮想通貨である。そして信託プラットフォームは、カネとモノを合わせ、安全安心の自由設計機能で転換・増殖・転形・創造等を果たし、信託商品・サービスを提供する。

デジタル化に伴う信託クラウドの視点からは、銀行、証券、保険等と信託プラットフォームの距離感・親和性がより増すということでもある。信託クラウドの傘の下に、銀行・証券・保険・信託がプラットフォームを共有しながら金融商品・サービスが提供され、それに対応する安全・安心の新たな金融市場サービス法といった利用者保護の枠組が胃の腑に入りやすい時代を迎えているのではないか。

パンデミックは歴史的に、世界の経済・政治・社会に画期的な構造変革を結果してきた。今はその一刻も早い終息に向け、世界がそれに負けず打ち克つ為の最適政策総動員の時期だが、構造的にはデジタル化が加速度的に進む兆しが見て取れる。不安・不信先行の中、安全安心・信頼の信託クラウドの支え・寄添いが再新生の命運を握っていると言っても過言ではない。（この回了）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

青雲の彼方（八）

太田精一

八．広東総領事

（一）広東政府とその政治的意味

大正十二年（一九二三）年初、久しぶりに正月らしい正月が、迎えられると期待していた天羽英二に緊急の仕事が入った。

日中郵便約定諮詢問題について枢密院が政府を攻撃した。外務省は、その弁明のため、中国側との交渉責任者である天羽英二に同約定の成立の経緯を説明する文書の起案を命じたのである。そのため英二は折角の正月休みを返上して文書の作成に当たったのだ。

日中郵便約定諮詢問題の残務整理を終えた英二は、一月七日（日）妻美代、長男大平など家族と共に鎌倉に転居した。ワシントン条約締結以来、相次ぐ外交案件の処理に疲れ、せめて休日には、自然に囲まれた環境の中で、ゆっくりと過ごしたいとかねてから思っていたためである。

外務本省まで通勤は大変であったが、温暖で海に近く風光明媚な鎌倉は、居住地としては快適であった。休日には、古刹巡り、小高い山へのハイキング、海岸散歩などをして、一週間の勤務の疲れをいやした。

鎌倉に転居してわずか四ヶ月足らずの三月二十四日、英二に転勤命令が出た。中国広東領事館の総領事に任じられたのである。中国は、最初の赴任地であり、対中問題は、今後の日本の命運を左右するものと考えていた英二には、願ってもないポストであった。

（南方の孫文を中心とする革新勢力がやがて北洋軍閥を制するであろう）と予想していた英二にとってやりがいはあるが、多難も予想される勤務である。

その前途を予見するかのように、咲き揃いかけた桜の

花に、寒さ交じりの風が吹き付けていた。

英二は、早速鎌倉を引き上げ、東京青山高樹町に移り、広東（広州市）赴任の準備を始めた。赴任の前に、日本の鉱工業の実態を把握しておく必要があると感じた英二は、わが国の重要産業の一端を担っている九州、東海地方に重点を置いた視察旅行を計画した。

四月九日（月）東京を発ち、九州の炭鉱、築港、製鉄所、染料工場、製紙工場、ガラス工場を見学、帰路名古屋に立寄り、織機、陶器、楽器工場などを見学して、同月十七日東京に戻った。帰京した後も二十一日には横浜に出向き、ビール工場と電線工場を見学している。

また、関係各省庁との人脈の維持と拡大のため辞任挨拶を兼ね、農商務省、逓信省、日銀、横浜正金、鉄道省、専売局、陸海軍と五月二日から四日にかけて挨拶回りを行った。四日夜、いよいよ東京を後にし、大阪、神戸に向かった。

五月五日神戸を発ち、長崎経由で上海に向い、八日上海、十二日香港、広東へは五月十三日（日）に到着した。妊娠中の妻美代と長男の大平を残しての単身赴任であった。

日本領事館は、英仏共同租界地の沙面の一角にある。広東領事館及び領事官邸は、欧米の領事館や領事官邸に比べずいぶん見劣りする。欧州列強の領事館は、租界地のなかにあって、長年にわたり植民地的支配を続けた権力の象徴ともいうべき存在であったのだ。

五月半ばであるにもかかわらず、広東は連日猛暑が続き、まるで熱帯地方の瘴癘（しょうれい）の地にいるような感じであった。

着任した翌週の五月十六日（水）から英二は、精力的な外交活動を始めた。

まず広東省長寥仲愷、広東政府参議胡漢民、広東市長孫科（孫文の息子）、公安局長伍鉄城、外交部長伍朝枢などを訪問、着任の挨拶をした。すると同日午後広東政府大統領孫文が、寥仲愷広東省長を同行して、日本領事館に来訪、天羽英二総領事と会談、「日本独立外交の必要性」を諄々と説いた。

清朝滅亡後、十年余りしか経っていない当時の中国は、各地に軍閥政府が覇を競い抗争を繰り返していた。北京にはいわゆる「直隷派」といわれる一派が政府を形成し、曹錕が大統領で、呉佩孚、馮玉祥がこれを支えていた。天津には段祺瑞派、奉天には張作霖、広東には孫文がいてこれら三派が連携して北京政府に対抗していた。

孫文大統領は、大元帥として軍を掌握していて、その下に汪精衛、胡漢民が参議としてこれを支え、寥仲愷が広東省長、孫文の子、孫科が広東市長、呉鉄城が公安局長、伍朝枢が外交部長といった顔ぶれであった。

一方、蔣介石はモスクワ留学を終え帰国し、英二の着任した翌年の大正十三年（一九二四）には、黄埔で軍官学校を創設した。この学校の卒業生が、後に蔣介石軍の中核となり、国民政府軍を構成し、対日戦を第二次世界大戦の終結まで戦い抜くのである。

孫文の広東政府要人は意気盛んで民族意識に燃え、北京政府を倒すいわゆる北伐に力を入れていた。広東省内でも北京政府を擁護する欧米の外交団に対して強気の姿勢で臨み、交渉も一筋縄ではいかなかった。

だが、その広東政府にも悩みはあった。財政難で、外国から借款を必要としていたのである。そこで寥仲愷一派が日本に借款を申し入れた。

日本と良好な関係を維持することによって、日本の力を利用しようとしたのである。日本でも孫文という人物は高く評価され、彼の顧問となった井上健吉、山田順三郎などが孫文を支援していた。

英二にとって最大の関心事は、この広東にある政府とソ連共産党との関係であった。

ソ連共産党は、大正六年（一九一七）の十月革命に成功した後、世界に共産主義革命を広げようとして、各国に筋金入りの共産党員を送り込んだ。

大正十年（一九二一）頃から中国にはカラハン、ボロジン、ブルーベルなどを派遣し、そのうち広東には、ボロジンが広東政府に共産主義化を働きかけていた。

その二年前の大正八年（一九一九）に、中国国民党が結成されたが、同党内では、共産党員を国民党の中に入れるかどうかの非常に激しい党内争いが起き、その結果、容共派が勝利し、国民党とソ連との連携が成立している。

（二）関東大震災への同情

広東に着任一ヵ月後、英二は、台湾及び厦門、香港へ出張した。

大正十二年（一九二三）六月十日より厦門、台湾、香港と巡り、同月二十四日帰任している。

厦門については、英二はあまり良い印象は持たなかったようである。当時の厦門は、不潔でごみごみしていて、道がどこにあるかわからない状態であった。

台湾は、日本が統治しており、広東とは大いに異なっていた。基隆、台北と訪問した英二は、病院、専売局、樟脳製造所を訪れ、田健治郎（でん）台湾総督に表敬訪問。台北高等商業学校で「国際間における日本の地位」と題する講演を行った。さらに、高雄に出て、市内見学後台南神社を参拝。台中から台北に移動、台湾日々新聞社主催の講演会で「欧州大戦後の国際関係」と題する講演をしている。

大正十二年九月三日、日本から関東大震災の知らせが入った。東京は壊滅的な打撃を受け、首都機能は麻痺状

関東大震災によって焦土と化した東京から、十月二十日、長女広子が誕生したとの知らせが英二に届いた。震災で家を焼かれ、命の危険にさらされたにもかかわらず無事出産を終えた妻美代の労苦をねぎらい、東京に向かって英二は手を合わせ「有難う」と思わず呟いていた。

十月から年末にかけて、外交問題となる事件が起こった。日清汽船所属の宣陽丸が、雲南派の四川第一軍に略奪された事件である。

十一月になって奪還のために派遣された日本の第二十三駆逐艦隊の三隻が広東に停泊することになった。だが、そのうちの一隻は座礁して動けなくなっていた。駆逐艦の停泊を見た中国側の砲台が、威嚇の意味を込め発砲した。これに対して駆逐艦からも応射したため、緊張が走ったが、双方の外交的努力によって解決を見た。

これに加えて、山下汽船の大図丸が、十一月十四日、黄埔下流七哩半のところで海賊に遭遇、外国船一隻と扇洋丸が救出に向かい事なきを得たという事件があった。

こうした安全を脅かす相次ぐ事件を憂慮した欧米諸国は、十二月初旬、海賊対策と広東政府への治安強化を促すため、英国は四隻、仏、米各二隻、日本一隻の駆逐艦を港に停泊させ監視に当たった。

このころ広東政府は、財政上の問題により、北京政府が借款の担保として差し出している塩税、及び関税の徴

態であると伝えられた。横浜、鎌倉、横須賀、大磯、国府津、箱根、熱海、千葉、甲府も被害甚大で死傷者も東京、横浜各十万人と報ぜられた。

それを聞いて、四日、五日と中国人、欧米人の見舞客がひっきりなしに領事館に来訪し、応接にいとまのないほどであった。

孫文は、早速湖南米四万俵を義援として寄贈したいと広東日本領事館に申し出た。その時に、日本の友人である頭山満、犬養毅、久原房之介、犬塚信太郎などの安否の確認を英二に依頼した。

また、広東では、官民合同で広東人による日災救援会が形成され、園遊会を催したり、募金活動を行ったりして義援金を集め、日本に送金している。

英二は、日本に残してきた家族のことが気になっていたが、通信網が寸断され、連絡できない。心配していたところ、九月九日になって、外務大臣から「家族全員無事との電報が届いた。だが、その後、家は焼失、外国で集めた骨董や貴重な資料も跡かたなく灰燼に帰したことが分かった。

見舞客も少なくなって落ち着きを取り戻してきた九月十六日、英二は、孫文に義援米のお礼に伺った。孫文は寥広東省長と伍広東政府外交部長を随伴して応接、彼の提唱する三民主義について熱弁をふるい、中国の未来について熱く語った。

税権を取り上げ、直接徴税をしようとしていた。ところが、北京政府を公式に認め、支持している英、仏両国をはじめとする欧州諸国の外交団が、これを拒否した。広東政府は、執拗にこれら諸税を同政府の収入とするよう交渉を続けたが、欧米諸国の領事団は、その要求に応じなかったため、広東政府と欧米諸国領事団の関係は悪化するばかりであった。

(三) 仏領インドシナ総督暗殺未遂事件

緊張の続いた大正十二年も暮れ、大正十三年（一九二四）の正月を迎えた。

停泊中の軍艦の海軍軍人たちの遥拝式に出席した後、英二は小学校の式典に参加、最後に一般在留民を領事館に招き、遥拝式を行った。

英二は、遥拝中に今年は、波乱の多い年になりそうだとの予感がしてならなかった。民族意識の強まる中国の中でも孫文のいる広東は、欧米の干渉を嫌う傾向が強く、民族自立を掲げ、共産主義のソ連と手を組んででも中国の統一を図り、中華民族の偉大な国家を建設しようとしていた。

こうした動きを敏感に察知した欧米諸国の在広東外交団は、一月六日、広東に来訪した米国公使を囲んで英、仏、葡、伊、日の各領事が集まり、時局談を中心に、広東政府との今後の対応を協議した。

翌日の七日、孫文の支援者井上健吉が英二のもとを訪れた。

英二は先日の欧米領事との話し合いを踏まえ井上に、孫文がどこまで本気で外交団に対し、関税及び塩税の徴収を主張しようとしているか聞いてみた。

「孫文は、外交団と喧嘩してまで、関税と塩税の徴収をしようとしているのかね。そんなに広東政府の財政は苦しいのかね」

「広東政府の財政は確かに苦しいことは間違いない。だが、欧米諸国と一戦を交えても徴収しようとするまでの意思はなさそうです。今、戦争すれば不利なことは、賢明な彼にはわかっている。そこで、米国に仲介役になってもらいたいと思っているようだ。この件は、米国公使が何とか丸く収めてくれるだろう」

井上健吉は、孫文が、柔軟性のある現実的な政治家であることに期待しているようであった。

皇太子殿下の御成婚式が一月二十六日（土）東京で行われた。広東でもそれを祝って、小学校、領事館、海軍、居留民がそれぞれの場所で万歳を三唱し、日本の国威が、あまねく大陸の隅々まで届くことを願い、新しい時代の到来を期待するのであった。

一方、広東の治安は、年が改まるとともに悪くなるばかりであった。

二月二十三日、米国のミッション系経営学校学生が海賊に連れ去られる事件が起きた。二十六日までに、学校関係者のラムソンなる人物を引き渡さなければ、学校を焼き討ちするという脅迫状が同校に届いたのである。

また、デンマーク婦人アンダーソンさんが、強盗事件に遭遇したという事件も報じられた。

こうした治安の悪化を心配した米国領事は、英国領事とともに、広東政府に対し警察隊の派遣を申し入れた。孫文は、李福林に二百人の軍隊をもって海賊討伐に当たるよう命じ、鎮圧することができた。

四月になって、英二は台湾で開催される台湾総督府事務官及び外務省南中国領事会議出席のため、五日から二十四日まで出張した。

英二は、広東総領事であるとともに、台湾総督府の事務官も兼務していたのである。当時台湾は、日本の統治下にあったため、広東とは違い、外国人としてふるまう必要もなく、リラックスした雰囲気で過ごすことができた。

帰路、香港にて妻の美代、長男大平を迎え、広東に帯同した。単身赴任に疲れた英二にとって、家族と共に過ごせることは精神的な安定感をもたらすことになったに違いない。日記にも「尽きざる嬉しさ」と書いてある。

五月にまた出張が続いた。十三日から天津、北京、漢口、南京、杭州、と歴訪して六月七日に広東に帰任している。

五月十九日には、天津で吉田総領事と会談、中国での再会を喜びながら難局を迎えつつある中国問題に対応するため、お互いに協力を誓い合った。

翌二十日北京に到着、郵務総局を訪問し、日中郵便約定締結問題で交渉相手となった劉符誠氏らと面談、お互いに取りまとめの労苦をねぎらいあった。

英二は、それぞれの訪問地で、領事を始め領事館員を交え、中国の現状と今後の見通しを語り合い、広東での孫文の動きが将来の中国を左右する鍵となることを強調して帰任の途に就いたのである。

広東への帰任後、しばらくして、大事件が起きた。フランス領インドシナ総督メルラン爆破事件である。総督は、大正十三年六月、日本を正式訪問した後、広東に立寄ることになっていて六月十九日、総督は広東の領事団主催のレセプションに出席した。その会場に夜八時半頃、何者かによって爆弾が投げ込まれ、即死者五人、負傷者五人の大惨事となったのだ。

英二が、現場に急行するとあちこちに人が倒れて血が、天井や壁に飛び散っていた。だが、幸いにしてメルラン総督は無事であった。

租界地沙面では、大騒ぎとなり、租界の警官は犯人を追跡したが、広東市内に逃げ込んだとしか情報は得られなかった。翌日広東政府の機関紙は、犯人は珠江に飛び

込んで、溺死したベトナム人だと発表した。

当時ベトナムのホーチミン一派が、広東や南中国一帯で暗躍していることを広東省長の寥仲愷や公安局長の伍鉄城から英二は聞いていた。

また、広東では、朝鮮独立運動も盛んで、李承晩、金元鳳が潜伏していて、日本の代表である英二を狙っているというううわさもあり、彼としては、十分警戒していた矢先の事件である。それに加えて、英二は、広東政府の要人と親しくしており、狙われやすい立場にあった。そのため、呉鉄城公安局長も英二の身辺には十分気を使ってくれていたのである。

英二は、呉公安局長に会い犯人の目星について聞いてみた。

「今度の爆破事件については、領事団の間でもいろいろな憶測が飛び交わっているが真犯人についての目星はついていますか」

呉公安局長は、そっと英二に耳打ちした。

「犯人は方范鴻泰といってホーチミンの一派であると確証を握っています」

英二は、このことを通して、当時のインドシナ半島のフランスからの独立運動の実態を同局長から聞き出すことができたのである。

しかし、欧米の外交団や外国人はなかなか信じなかった。犯人は、共産主義に肩入れする中国人の容共派の一派であると思い込んでいたようである。

当時孫文の広東政府は、反帝国主義、不平等条約廃止を標榜していた。

このため、広東市内を流れる珠江の河中にある小島、沙面を租借地としている英、仏への反発は強かった。ことに容共派が、主導権を握り、ソ連からボロジンが工作員として広東に来て以来、英、仏との関係はますます険悪なものとなって行ったのである。

英二が、帰国した英国総領事サー・ジェームズ・ジャミソン氏の後任として、広東総領事団を取りまとめる団長となったのはこの頃である。英、仏を中心とする西欧諸国の領事と広東政府の狭間に立って、日本の国益を考慮しながら調整を図ることは容易なことではない。だが、外交官としては、やりがいのある立場に身を置いたことを改めて自覚するのであった。

(四) 租界地での警官及び労働者のストライキ

七月になり、広東では、ソ連の工作員ボロジンなどの扇動により、労働者の大規模なゼネストが起きた。外国企業の労働者はもとより、租界地の警察官、領事館の中国人館員から使用人までゼネストに参加したのである。英、仏領事館では、領事館の当局者と中国側労働者が話し合ったが、交渉は決裂した。米国総領事も使用人のストライキのため、館内の清掃ができず困っていると英二

に訴えたので、英二は、領事団を代表して寥仲愷広東省長に、解決を依頼した。

特に、大小便の始末は、斜面租界地の外国人を困らせた。斜面には、水洗はなかった。中国人の使用人が汲み取りを行っていたのだ。この汲み取りがなくなったため、領事館員が毎夜、溜まった汚物を担いで、珠江に捨てに行くという始末である。

寥省長は、「ストライキ陰謀者の仕業である」と英二に答え、解決に向けて全力を尽くすことを約束した。だが、その約束は簡単には守れなかった。

七月十五日に始まった斜面の領事館における中国人使用人のストライキは、予想以上に長引き、いったん解決はした。が、再度話がこじれ、八月の末まで続いた。

もともとこのストライキは、広東政府と英仏租界当局側の感情のもつれから起こったものであるが、次第に英仏対広東政府の問題に発展していった。

この問題に関しては、日本は中立的立場であった。だが、英仏総領事から調停を頼まれたので、英二は領事団の団長の立場からそれを受け、八月五日、孫文に会いに行った。孫文は、その調停案を受け入れ一旦は解決した。

しかし、八月十日、広東政府がノルウェー船ハヴ号で武器を広東港に運び込んだことが要因となり、再び同政府と英仏領事とが対立し、ストライキ問題が再燃した。武器の陸揚げを北京政府の直轄にある税関が禁じ、その北京政府を後押ししている英、仏両国への対抗手段としてこのストライキを利用したのである。

その後、ストライキ問題は、双方の妥協により何とか解決したが、十月になって、広東政府と英仏領事館が再び対立する問題が発生した。

十月十日、ソ連船アストラカン号が、第一次大戦中シベリアに進駐していたチェッコスロバキア軍援助のため日本が送った日本製小銃を満載して、黄埔に入港した。

この兵器はウラジオストックに残っていたものを広東政府が、蒋介石の軍官学校に渡すためにソ連政府と交渉して購入したものである。それを北京政府の直轄にある税関が、陸揚げ禁止したのである。

エドワーズ税関長（北京政府）は、英二に陸揚げ禁止の理由を広東政府に説明するよう依頼し、広東政府は、税関を説得するよう英二に頼んだ。英二は、その両者の主張に板挟みになっていたところ、英国総領事が、公式に広東政府を非難した。それに対し孫文は、英国首相に直接抗議文を発状したことから、英国政府と広東政府とは、ますます険悪な関係となったのである。

英国と広東政府との対立が、広東省の内外に緊張関係をもたらした。

十月十四日、米国は軍艦ヘレナ号を派遣し、広東港の

治安維持に当たらせた。同艦艦長が米国領事と共に日本領事館を訪れ、広東の緊張緩和のために協力を約束した。英二は各国の領事を集め事態の収拾を図るための協議を行った。その間に英二のところにロシア人から脅迫状が届いた。しかし、直接命の危険にさらされることなく済んだのは、孫文を始めとする広東政府の特別な配慮があったものと推察される。

さらに、翌日の十五日には、政府軍と広東市民の自警団（商団）が衝突、小競り合いのあげく火災が起きている。領事団は、治安維持に努めるよう政府と商団に警告を発した。十六日に英二は、ヘレナ号を訪問、艦長と会談、日本領事館に英、仏、米の領事を招請、再度事態の打開について話し合った。

一方、広東市民は、騒乱による財産の略奪を恐れ、租界地に逃げ込むもの出るほどであった。

こうした事態に対処するため、英二は日章旗を掲げ、領事館員と新聞記者を伴い広東政府の伍鉄城公安局長と会い騒乱の鎮圧と外国人の保護について何度も訴え、解決できなければ、広東政府が国際的な信頼を失い、経済的、政治的支援が得られなくなるおそれがあることを強調し、治安の回復維持に全力を挙げて取り組むよう説得した。

事態の深刻さを痛感した広東政府は、英二の説得に応じ全力を挙げて治安対策に取り組み騒乱の沈静化に成功したのである。このことが、広東省の内外に報道され、日本総領事天羽英二の評価は、国際的に高まった。

そもそも事の起こりは、前にも説明した通り、財政難にある広東政府が、北京政府の取り決めた外国からの借款の担保になっている関税と塩税を差し押さえ、広東政府の税収にしようとしたところにある。

領事団長の英二は、中立的な立場で呉対外部長と再三にわたる交渉を行なった。だが、この問題は複雑な政治的問題が絡み、容易には解決しなかった。

この他、広東政府は日本に対し、造幣廠の創設に対する借款を申し込んできた。英二は、広東政府のみに肩入れすることができないと日本の立場を理解していたので、在広東日本実業団に話を持ち込んだが、日本の実業団はこれを引き受けなかった。ところが、西沙島の経営の利権を得たある日本の実業家が、そのコミッションの一部を供与した。そんなこともあって広東政府は日本に対して好感を抱いており、日本の祝祭日に行う英二のレセプションには、いつも広東政府の要人が多数集まったのである。

さらに英二は、日本の文化事業を広東及び中国南部地方で行うことが、大切であると考えていた。

こうした文化事業は、台湾総督府の事務官でもあった英二は、総督府と連携して行うことが得策と考え、しば

しば台湾に出張、日本から文化人を招く場合、広東まで足を延ばして活動することを提案し、実現している。

外務本省も英二の意見には賛同し、日本から文化人を招き広東大学、嶺南大学などで、講演会を行うときには、外務本省も協力を惜しまなかった。

（五）孫文と天羽英二

英二は、広東在任中、孫文との交流を通じ、彼の人物像を次のようにとらえている。

（孫文という人物は、奥が深く、じっくり付き合ってその良さを引き出すことが大切である。食物に例えるならば、じっくりと付き合うとウマ味を出す味の素のようなものであるが、栄養素とはならない）

この栄養素とはならないという意味は、覇権国家を志向する日本の国益にとってという意味ではないかと考えられる。

広東総領事として着任した天羽英二は、広東政府の大統領である孫文と国の利益を背負った公式の立場で会う機会が多かった。その回を重ねるごとに、お互いの思想や感情が共感と衝突を繰り返し、人間的な信頼関係が、培われていったのである。英二にとって孫文という人物は、中華民族の繁栄と誇りを取り戻し「眠れる獅子」を目覚めさせる愛国心に富んだ数少ない中国人であるとの思いが強くなっていった。それだけに、将来の日本を脅かすことになりかねないという警戒心も心の片隅から拭い去ることはできなかった。

そんな英二の孫文との交流を見透かすように、当時の民国極東新信社の記者漠南生氏は、大正十三年発行の北京週報第一二一号にて「支那及支那関係の人人」と題し、次のように天羽英二総領事の紹介をしている。

「天羽総領事は、孫文を鵜呑みにもせず食わず嫌いもしていない。だが、もう少し孫文そのものにだけの親しみを持ってほしい」と。

孫文は、英二と会うたびに口癖のように「大アジア主義」を主張した。

「日本は、アジアの一国でありながら欧米にならって帝国主義の政策を行うのは怪しからん。日本は、進んで不平等条約を廃止し、真に日中提携の実を上げなければならない。中国もまた、国内を改造し、真に自主独立の国家とならなければならない」

そしてこうも述べた。

「一歩広東を出て米国、カナダ、豪州などに行けば、そこには中国人も日本人も何ら区別なく排斥される。という事実に目覚めるべきである」と。

それに対して、英二は次のように答えている。

「日本は、中国の立場をよく理解している。日本も以前には外国の圧迫に苦しみ、不平等条約の下に悩んでいたが、自力奮闘の結果、自主独立の対面を保つようになった」

さらに英二は次のように反論した。

「中国の現状は、胃病に苦しんでいる患者が、その前に治外法権撤廃とか租借地還付とかいわゆる不平等条約廃止というたくさんの御馳走を並べているようなものである。それでまず国内を改造して胃痛を治してからご馳走を食べるかまたは、国内を改造せず胃痛のままでこれを食べるかいずれが正しいか考えねばならぬ。胃病を治さずして馳走を食べればかえって不消化を起こしはしないか。だから早く国内を改造してこれらの御馳走を食べられるようになることを希望している」

孫文は、常に楽天的であった。名利に淡白であったことも、英二の印象に強く残っている。

だが、主義主張については、妥協を許さず、身を捨ててただひたすら国を思い、国事に励んだ人物であったことは衆目の一致するところであった。

孫文との交流の中で、英二の最も印象に残った出来事は、孫文の上海行きの助力をしたことである。

大正十三年（一九二四）十月二十三日、天津の吉田総領事から広東総領事の天羽英二宛電報があった。その電報の内容は、奉天派閥の張作霖と第二奉直戦争をやっていた北京直隷派の馮玉祥が山海関付近で寝返りして同直隷派の呉佩孚軍が大敗したとの情報である。英二は、これを蔡仲愷の後任の広東省長胡漢民に内報した。すると胡省長は早速市内の電柱にこのことを貼り出し、広東市内は、祝賀の大騒ぎとなった。

当時孫文は、北伐のために広東の北部に出向き軍隊を指揮していたが、直ちに広東へ引き返し、会議を開いて上海に行くことを決定した。

十月三十一日、汪兆銘が、孫文の上海渡航に当たって、英二に日本船の斡旋を依頼してきた。

「孫文大統領が近々上海に行くことになるので、日本船を利用したいと考えています。三十人ほど随行するのでしかるべき船を斡旋願います。また三十人が一度に下船し上陸したいので、艀も用意するよう船会社に頼んでください」

「孫先生が乗船するとあれば、日本の船会社に当たって、何とかしなければなりませんね」

日本船を利用したいというのは、おそらく広東政府にとって日本が、最も信頼おける友邦国と考えていたからであろう。

そこで英二は、香港発の日本汽船の日程を調べてみた。十一月十四日に東洋汽船の春洋丸があることが分かったので、同社の堤香港支店長に話をした。

ところが、堤支店長が本社に連絡すると本社の返事は次のような理由で否定的であった。

「香港での反孫の機運が高く、広東政府に反対する勢力

がはびこっているので、香港での乗り込みと船中の警戒を厳重にしなければならない。万一毒でも盛られるようなことがあれば大変だから、中国人コックを全部入れ替えなければならない。また、上海入港の場合、広東側の要求するような艀で上陸するとなると特別な打ち合わせをしなければならない」

こうした返事に対し、堤支店長は粘り強い話し合いを続け、やっと本社から承諾を取り付けることができた。

孫文は、準備を整え、十二日広東政府軍艦永豊号に乗って広東を出発することになった。だが、ちょうどその朝上海の矢田総領事より、上海の英字新聞に掲載された内容を電報で次のように伝えてきた。

（かねてから孫文の上陸につき議論されていたが、最近領事館会議で彼の上海上陸問題が取り上げられ、賛否が分かれた。その旨北京の外交団に請訓した）というものである。

そこで、英二は、北京の吉澤公使に、日中の関係と孫文一派と日本の関係を考慮すれば、外交団において孫文の上海上陸に対して異議を唱えるのはよくない、北京の外交団を説得して、無事上陸できるようご斡旋いただきたいという電報を打った。

ところが、その翌日、吉澤公使から外交団では、孫文が上海租界において政治活動をしないという条件で上陸に反対しないということに決定したとの電報が入った。

この時すでに孫文は、広東を出発していたので、香港の高橋総領事にこのことを打電し、孫文に伝えてもらった。それを承知で、孫文は、上海に向かったのである。

後で聞いたところによると孫文は、船中で盛んに揮毫に応じられて船長はじめ、船員は大喜びであったという。

このようにして孫文一行は、大正十三年十一月十七日春洋丸にて、上海に入港した。孫文は三日ほど上海に滞在した後、同月二十一日、日本に向かった。日本のオピニオン・リーダーたちとの交友関係を通じ、彼の提唱する「大アジア主義」への理解を深め、中国国民党及び広東政府への支援を求めての日本への旅であったのだ。

（六）惜しまれた離任

十二月になって、広東もようやく秋めいてきた。英二は、かねてから考えていた文化事業に力を入れることにして、広東大学市村博士にお願いし、大学はもとより、日本人会、商工会議所などで、歴史、文化などを中心とした講演をお願いした。ちなみにテーマは「環境と文化との関係を論じて儒教の体系に及ぶ」とか「中国史上より見た広東省」など比較的身の周りに関係のある問題や日中友好に資するような課題が選ばれた。

二十二日暮れも押し迫った頃、米、仏の領事が日本領事館を訪れ、英二に、かねてから懸案であった広東港の改修について相談をした。この問題は、特に英国商業会

議所が乗り気で、ぜひ実現させたいと広東在住の各国領事館、外国人代表機関などに働きかけていたものである。

広東政府との交渉、領事団の団長としての仕事に明け暮れているうちに、大正十四年（一九二五）の正月を迎えることになった。遥拝式、新年の祝賀が終了するとすぐ領事館に来客が詰めかけ、多忙を極めた。広東政府要人、地元の有力者、それに米艦ヘレナ号の館長、台湾からの商工学校生徒六十人も加わって館内は大賑わいであった。

正月明けの五日（月）には、広東港改修と周辺の珠江の浚渫を早急に行う必要に迫られているため、諸外国の領事を集め、領事会議を開いてその対応を協議した。この問題は、広東における日本の経済貿易活動に大きな影響をもたらすことから英二も真剣に取り組み、日本人倶楽部において一月十七日、広東港浚渫事業経緯を説明し、協力を呼び掛けた。

一月二十四日、中国正月を迎えた。広東の混乱は一段落したようである。前日夜から爆竹の音が賑やかで、夜も眠れないほどであったが、その音は、新年を祝う広東人の平和の鐘のように英二には聞こえるのであった。

眠い目をこすりながら、居間に足を踏み入れ、机の上を見ると帰国命令の電報が届いていた。

英二は、広東での二年間を振り返ってみた。思い起こせばこれまでの在外勤務の中で、最も気候条件が悪く、治安も良くなかったが、仕事の面では、最も充実していてやりがいがあった。一領事館の館長として、限られた権限の範囲内ではあるが、責任を持ち裁量権を発揮できたのは、英二にとって有り難いことであった。

しかもたまたまではあるが、広東での外国領事団の代表となり、あらゆる重要な問題に関与し、広東の行政府と交渉する窓口として、それなりの権限を発揮できたのである。それに加えて中国が、軍閥によって分裂し、北京政府の意のままにならず、それぞれ地方が独立した国家であるかのような状況であったので、各地方にある外国領事館は、一国を代表する大使館のような役割を果たさなければならなかった。

それだけに、独自の判断で決断を迫られることも多く、苦悩する日も少なくなかった。

英二は、常に国益とはなにかということを考え行動した。日本国民の誇りと繁栄をもたらす要素を外国との交流を通じて、感得しようと努力してきたつもりである。広東はそうした意味で絶好の学習の場であった。孫文という英傑と幾多の交渉を通じて、国益の何たるかを学ぶことができた。新中国は、孫文の思想と行動を引き継ぐものの中から生まれるのではないかとの思いがこの二年間で強まった。この地を去るにあたって、改めて孫文の存在の大きさを感じたのである。

余談になるが、孫文は、英二の帰国した年の大正十四年（一九二五）三月、北京のロックフェラー病院で波乱に富んだ五十九年の幕を閉じた。

彼が、もう二十年長く生きていれば、日中の関係も今日とは違ったものとなっていたのではなかろうか。

二月一日、英二は、香港に出張、山縣公爵の香港特使一行を出迎えた。その時、クローデルフランス大使と会い、同大使からメルラン総督事件では大変世話になったと礼を述べられた。

天羽総領事の帰国命令が出たとの噂が広まるにつれ、留任を要請する声が地元の民会や総商会より上がった。

二月四日、天羽総領事の広東留任の要請電報が、民会及び中国総商会から外務次官当て打電された。これに対して外務省は、留任不可能と返電したことは言うまでもない。

その後出発まで、在留邦人、在広東外国領事館、広東政府の要人などによる送別会がそれぞれ開催された。英二もその返礼を兼ねて在任中お世話になった方々に対する答礼の会が連日続いたので、プライベートの時間を過ごす余裕がなかった。

いよいよ広東を去る日が来た。二月二十日（金）朝八時、河南から香港まで船で出た。見送り人で埠頭が埋まり、人の波は船が港を離れ顔が見えなくなるまで消えることはなかった。

英二の広東での業績をたたえ、在留邦人の河南互助会は、浪花節まで作り、送別会の席で余興にそれを演じる者もいたほどである。

また、次のような短歌の投稿もあった。

「天駆ける羽の衣を身にまとう君のかどでの幸祈るかも」

香港で一泊した後、英二夫妻は、二月二十四日に上海に着いた。翌二十五日、上海を出航、大正十四年（一九二五）二月二十八日神戸に到着し、日本の土を踏んだ。

大正十二年（一九二三）五月七日長崎を発ってから、わずか二年足らずの広東勤務であったが、英二には思い出深い充実した時間であった。

（つづく）

私の「昭和20年」（1）
―敗戦から75年―

山田嘉久

令和2年（2020）は昭和20年（1945）「終戦の年」から丁度75年に当たる。

「昭和20年」―数千年を誇る日本歴史のなかでも、もっとも大きな意味をもった1年であったであろう。わずか1年間でこれほど大きく世の中が変わったことも初めてであったし、その変動の幅は我々先祖が経験した「明治維新」を遥かに超えていた。

しかも私自身にとっても丁度15才、昔流にいえば「元服」―子供から大人への脱皮の多感な年頃であったから生涯決して忘れることのできない年となっている。

思えば、私たちはそれまで純粋培養の「軍国少年」として育てられた。生まれた年の翌年（昭和6年）に満州事変が起きた。そして支那事変が始まったのは小学校入学の年（昭和12年）だった。ついで小学5年の時、太平洋戦争に拡大したが、その結果が悲惨な終戦（昭和20年）だった。私は既に中学3年生になっていた。

つまり、私の少年時代は全く「戦争の時代」だったといっていい。それが、この年の8月15日を境にして、それまでの価値観がすべて崩壊した。われわれもそれまでの筋金入りの「軍国少年」から一転して「民主少年」になることを強いられたのである。

大げさに云えば、この年の1ケ月はほかの年の1年に相当するほどにこの年の出来事は今でも鮮明に記憶している。

以下、私なりの「昭和20年」を綴ってみた。

一　昭和20年1月―兄の戦死

○　9日　米軍、ルソン島に上陸

○　20日　本土決戦のための「帝国陸海軍作戦計画大綱」を天皇裁可

昭和20年はアメリカ軍のフィリッピン・ルソン島への上陸で幕が開いた。今、手元にこの年元旦の朝日新聞朝刊がある。それによると一面トップは天皇陛下が「最高戦争指導会議」に臨席する大型の写真だが、その横に「比島戦局まさに危急」とある。

思えば、すでにこの半年前のサイパンの日本軍玉砕によって日本の敗北は決定的だったようで、この年に入って「敗戦への道」が加速度的に増していったのであろう。

昭和20年が明けて早々の寒い明け方、私は悪い夢を見た。どこか知らない広い海原で、ぽつんと一人の日本軍人がうつ伏せになり浮いていた。その姿から私の兄純孝に違いなかった。はっとして起きた時には寒い冬なのに汗びっしょりだった。

当時、連日の頻繁な空襲に備えて、我が家では全員が10畳の居間に一緒に寝ていたが、夢のことは父母は勿論、兄弟の誰にも言えなかった。しかし正夢だった。

実兄純孝はこの頃、フイリッピン戦線に赴く途中で戦死。享年わずか19才だった。

だが正式な「戦死公報」が届いたのは戦争が終わって3年近く経った昭和23年夏だった。私はすでに大学生になっていた。

それまで一日千秋の思いで兄の帰還を待っていた両親の悲嘆は大きかった。

その葬儀の日、遺骨箱を首から下げた私に向かって参列者の一人が「どうせ箱の中は遺骨ではなく小石だよ」と囁いたことに無性に腹が立った。

「戦死公報」が届く直前に、私は千葉市稲毛にあった「復員局」でアルバイトをした経験がある。この地は偶然にも兄が卒業した「陸軍高射学校」の跡地であった。（現県立千葉女子高）

戦後、すぐに始まった復員業務は第一復員省（陸軍）、第二復員省（海軍）を経て、昭和21年には統合され復員局となり、さらにこの年、陸軍関係は厚生省復員局に引き継がれていた。

此処で、未だ生死不明だった兄の消息を少しでも知ろうしたのだが無駄だった。私の大学生活で唯一のアルバイト経験も失敗に終わった。

戦死が確定してからも、その詳細は全く分からなかった。そこで、戦後50年以上も経った平成に入ってから、私も定年退職して暇を持て余すことになったので兄の戦死事情を調べてみようと思い立った。

友人の力などを借りて、兄と共通の母校長生中学（現長生高校）を始め、実家のある茂原市役所（市民課）や千葉県庁（援護恩給室　こんな部署がまだ残っているとは驚きだった）などを訪ねて兄の戦死当時の模様を可能の限り調べた。自衛隊下志津駐屯地史料館や靖国神社（社務所、偕行文庫）にも何度も足を運んだ。

以下は現在まで判明した報告である。

1　陸軍防空学校へ入学（昭和18年秋）

当時、千葉県立長生中学5年生だった兄は、卒業を間近に控えた昭和18年秋、千葉陸軍防空学校に入学した。（ただし、「長生中学卒業者名簿」には昭和19年3月卒業として兄の名前が載っている。）

長生中学野球部の花形選手だった兄は多少目立ちがり屋の性格もあって、人後に落ちない典型的な軍国少年だった。そのため率先して開校間もない千葉陸軍防空学校に入学した。

このことは長中野球部の先輩でもあり、当時関東軍将校として防空学校に派遣されてきた義兄の影響も大きかったと思われる。

（この当時、後に台湾総統となる李登輝が見習士官として防空学校に赴任していたことは最近知った。）

陸軍防空学校の前身は明治9年に千葉県習志野に開校された陸軍砲兵射撃学校まで遡ることができるが、太平洋戦争開戦後の昭和17年、近代戦に備えて千葉市小仲台に新たに陸軍防空学校として開校された。

したがって昭和18年に入校した兄は第2期生に当たる。翌19年4月には校名も千葉陸軍高射学校に改称され、同時に浜松分教所が併設された。

そのとき、兄も浜松に転校したと思われ、靖国神社の資料によると戦死時の所属部隊は「浜松高射学校」となっている。（末弟は父母に連れられて浜松まで面会に行ったことを覚えている。）

昭和19年11月5日、第2期生４００名のうち3割に当たる１２０名が選ばれて繰り上げ卒業となり、直ちに南方方面に派遣されることになった。兄もこの中に選抜されたが、残りの２８０名は翌20年3月に卒業しているので、もし1選抜に選ばれなければ、戦死の確率はずっと低かったはずである。

2　出陣まで

繰り上げ卒業組１２０名は卒業直前から特別訓練を受けた。そして2カ月後、出発の日（昭和19年11月14日）の2、3日前には家族との交信は禁じられた。同時に自習室にて遺書を書かされたと云う。（現在、茂原の実家にある兄の遺書かどうか判然としない。）

書き終えた彼らはさすがに目を赤くしていた。中には目頭を抑えていた者もいたし、声を殺して泣いていた者もいたという。

いよいよ出発の日、軍服に兵長の階級章をつけ（戦死後、伍長に昇進）背負袋を背に国鉄浜松駅に向かい軍用列車に乗り込んだ。列車の中では、無理にはしゃごうとしていた者もいたができなかった。

まもなく下関に到着、関門海峡を望む岸壁で輸送船の乗船区分の命令を受けた。卒業生１２０名はあきつ丸、摩耶山丸、神州丸の３隻に分乗することになった。兄はあきつ丸に乗ったものと思われるが、その後、あきつ丸のみ撃沈されたことを思えば、２番目の運命の分かれ目はこの時にあった。

以上は別の船（神州丸）に乗って一命を取り留めた同級生佐久間信夫氏の手記に依った。

3　あきつ丸の運命

出港後のあきつ丸の動向については「輸送船団かく闘えり」（偕行文庫編）に依る。

19・11・14　午前6時　伊万里港（佐賀県）出港
行き先　マニラ、昭南（19年12月4日到着予定）
搭乗部隊　ヒ81（主体は第23師団）
輸送船団　みりい丸、ありた丸、橋立丸、聖川丸
吉備津丸、音羽山丸、東亜丸、あきつ丸、
神州丸、摩耶山丸（以上10隻）
護衛船　海防艦6隻のほか、空母神鷹

比島増強兵力として主力の第23師団をもって編成した17ノットの高速船団のため、特に空母神鷹（１７５００トン）を配した。（しかし護衛にあたる海防艦が鈍足のため止むなく12ノットで進んだため却って敵潜水艦から容易に攻撃されたのは皮肉だった。）

船団は玄界灘を接岸航行し、上海に向かったところ、正午すぎ先頭の護衛艦が早くも敵潜を探知したため、船団は反転し五島列島宇久島水道に避泊、護衛艦昭南が掃討戦を開始した。

そのころ、敵潜水艦群はヒ81の出撃を補促し攻撃体制を整えていた。五島列島の島影で手ぐすねを引いていたのである。

翌15日6時半、水道をでた船団は進撃を開始した。冬の空は澄みわたり視界は極めて良好だった。空母から哨戒機が飛びあがり、艦船に整備された探信機は作動し、さらに甲板上からの監視の眼が光り防潜はほぼ万全と思われた。

とその矢先、11時50分頃、北緯３３、１７　東緯１２８、１１（五島列島福江島北西40キロ）において突如、あきつ丸が雷撃を受けた。

魚雷が命中したのは船体後部の食糧庫、弾薬庫付近で爆発の衝撃で次々に誘爆し死傷者が続出した。船体は刻々に傾斜し、2、3分後には裏返しの状態で全没した。本船は９１８６総トン、２５７６名が乗船していたが、遭難により２０４６名が戦死した。

その中に兄もいたものと思われるが、前記別の船（神州丸）に乗船していた同僚はあきつ丸撃沈の様子を次のように語っている。

正午少し前、食事の準備に上甲板にでたとき、左舷を航海していたあきつ丸が目の前で大爆発とともに船体が

真ん中から真二つに割れて、みるみるうちに沈んでいった。後には重油がどろどろと海面を覆い、その中に船体の破片や戦死者の肉片や遺体が波間に漂い、救助収容することもできなかった。何人かは救助されたが、我々の船には誰も乗ってこなかった。

大部分が戦死したあきつ丸の乗組員にも少数ながら救助された兵士もいた。その一人神頭伍長（第23師団）は次のように語っている。

パニック状態になったあきつ丸の中では切腹する兵士も出てきた。救命胴衣は全員には渡らなかった。泳ぎに自信のある者はつけなかった。（泳ぎが得意の兄は多分、着けなかったと思われる）

海に飛び込んだ同氏は重油が流れる海に6時間も漂流したが、その間にも海に没した者が続出した。同氏はその後、護衛艦に救助された。

なお、兄が乗船したあきつ丸は「艦船名簿」には次のように記されている。

９１８６総トン。日本海運所属。飛行甲板を備えた陸軍特殊船であるが飛行機の発着は行なわず、もっぱら兵員と飛行機の輸送を担当していた。しかし航空母艦型の船型であるため、設計では97式戦闘機13機と88式高射砲4基を搭載されていたと記録されているので、高射砲担当だった兄はそのための要員だったかも知れないとは、靖国神社で調べてくれた人（防衛大卒）の話だった。

また、あきつ丸は伊万里港出港に先立ち、その前の宇品港でそれまで搭載していた艦載機を降ろし、その代わりに戦後、有名となった「㋹」（マルレ）と呼ばれた体当たり攻撃用の小型高速艇百隻を積みこんでいる。

「あきつ丸乗船部隊戦死者一覧」の中に海上挺身20戦隊33名、基地設営隊53名とあるのは「㋹」関係者であり、また「教総関係卒業者２２３名」とは兄を含む防空学校繰り上げ卒業組のことと推察される。

4　輸送船団のその後

あきつ丸の撃沈後の当輸送船団については、兄の戦死後であるので詳細は避けるが、簡単に記す。

あきつ丸撃沈の2日後、17日午後6時過ぎ、遼船摩耶山丸（９４３３総トン）が済州島西方で沈没した。乗組員４５００人のうち３１８７名が戦死した。その5時間後には空母神鷹（１７５００トン）が被雷、沈没した。

翌18日、船団は薄氷を踏む思いでようやく大陸岸の浅海面へと避航して、やっと四礁山錨地に錨を降ろした。船団は此処でしばらく待機して、21日に抜錨、以後も浅海面を縫航、26日ようやく高雄入港、整備ののち12月2日に無事、比島北サンヘルナンドに到着した。また昭南向けの船団は12月4日に到着した。

しかしその後の戦争末期の激戦を考えれば、そのうち何人が再び祖国の土を踏むことができたであろうか。

私はこの年、千葉県立長生中学2年の3学期を迎えていた。しかしその3学期の始業式には上級生（4、5年生）の姿は一人もなかった。皆、前年から日立飛行機蘇我工場、日立製作所茂原工場、茂原真空管工場などの軍需工場に学徒動員されていたためである。

先生方にとっては上級生の抜けた校内は何となく淋しく気の抜けた雰囲気だったようだが、「鬼より怖い上級生」のいなくなった我々下級生にとっては解放感に浸っていた。

そのうえ、我々のクラス—2年5組は大多数の疎開組と少数の土地っ子組とのユニークな混成新設のクラスだったので、余計、新鮮味が感じられた。

当時、疎開には、小学生を対象にした「集団疎開」と中学生を対象とした「縁故疎開」の2種類があった。前年（昭和19年）の米軍サイパン上陸によりB29による本土空襲が激化してくると、「集団疎開」は昭和19年4月から制度化されていた。幼い児童たちが親元を離れて集団で地方に疎開していった。東京都だけでも19万人に達したという。

一方、中学生は縁者、知人を頼っての「縁故疎開」だったが強制的ではなかったものの、日を追って増加していった。特に東京に近い千葉県では、その傾向が強く、わが校でも瞬く間に一組50名の定員が破られ1学級4組では飽和状態になったため新学期を機に1クラス増設されることになったのである。

この当時、少数派の土地っ子である私は、毎日大勢の疎開組に囲まれていると、彼らに対して一種の羨望の念を抱かざるを得なかった。

通常は「郷に入れば郷に従え」だが、わがクラスは違っていた。「郷に入る」方が大多数なのである。第一、当然のことだが、彼らは我々と違って田舎弁（方言）の全くない標準語（江戸弁）を喋っていること。それに都会っ子らしい振る舞いは田舎者の我々に比べてずっと大人に見えた。今から思えば、彼らは我々よりは少しマセていたにすぎないが、当時の私にとっては偽らざる気持ちだった。

その代表が横浜から来たI君。父親が貿易商ということで英語が得意。それに我々の知らない映画や落語の知識が豊富で都会っ子の典型だった。私が子供時代から見た映画といえば、今記憶を辿っても「綴り方教室」「馬」「燃ゆる大空」それに「西住戦車隊長」など、中学に入ってからは「ハワイ、マレー沖海戦」「海軍」「加藤隼戦闘隊」などだが、その殆どが学校推薦の戦意高揚映画だった。

それを彼は遥かに超えて洋画の話までに及ぶに至ってド肝を抜かれた。（彼の影響を受けて戦後の私はすっかり「映画狂」となった。昭和27年（大学3年）には年間観た映画71本という記録がある。）

同じ疎開組でもE君は下町浅草育ちらしく色白のハンサムボーイだったが、逆に英語が全く駄目だった。独協中学から来た彼は独逸語しか知らず英語は初めてということで、逆に皆から珍しがられた。

英語といえば副級長のH君は入学時より酷い吃音だったが、英語の時間となると生き生きとしていた。日本語と違って流暢な読み方には今でも不思議に思っている。彼は戦後、特技を生かしてチェスマンハッタン銀行を経て英会話教室を開いていると聞いた。

肝心の英語の授業だが、この年に入って全く行われなくなった。戦争が始まった頃には「敵を知れ」ということで重要視されていたが、戦局が不利になるに従って「敵性語」として敬遠されてきた。

しかし、当時の時間割を見ると外国語、週4時間と載っている。

昭和19年度時間割（2年）

修身1　国語5　歴史地理3　数学4　物理生物4
教練3　体操武道4　音楽1　書道1　図画工作2
外国語4　修練4　計35　（「長高百年史」より）

実態は、英語の時間は当時盛んだった「勤労奉仕」に費やされていたのではなかろうか。

そのため英語担当の先生方は他の科目（国語や地理など）の担当を余儀なくされた。中にはH先生の如く「化学」の担当となることもあった。英語と化学は結び付かないが生来病弱であった先生は薬の知識に詳しかったからということだったが真偽のほどは分からない。

（当時、不本意だった英語の先生方が復活するのは戦後すぐに巻き起こった英語ブームの頃である）

都会からの疎開はなにも生徒に限らなかった。先生の中にも疎開組が多かったため、田舎の中学には勿体ないような多士済々の陣容だった。

「図工」の渡辺包夫先生は横山大観の高弟として知られていたが、当時の「美術」は不急不要の科目だったため、仕方なくゼロ戦の設計図などを教えていた。（そのため綽名は「デパイダ」）

先生の実家は代々、大多喜藩の御用商人で明治維新の際には大多喜藩を接収に来た官軍の東海道鎮撫副総督柳原前光の本陣が置かれた名家である（現、国重文）。その実家から先生は毎日、通勤していた。

先生は昭和の終わりには民放「なんでも鑑定団」の鑑定人として全国的に有名になった。亡くなる直前、吾々のクラス会にお招きしたが実現しなかったのは残念だった。

「英語」の増田和宣先生。当時、殆どの男性が丸坊主だったのに対して髪を綺麗に七、三に分け、ネクタイを締めた先生は典型的なジェントルマンだった。戦争が終わる

とすぐに母校上智大の研究室に戻り、後にドイツ文学の泰斗となった。

疎開組ではないが、地元生れの「書道」の板倉花巻先生は大正末期に長生中学の前身大成中学を卒業するとそのまま母校の教師となり、定年まで平教師を貫いた。（戦前にはこのような先生が多かった。）

我々が教わる頃には、既に日本の書道界を代表するような大家となっていたが、性はあくまで自由奔放、授業中に小さな米粒に字を書いては、我々を煙に巻いていた。現在でも茂原市立美術館では先生の作品展示会を催している。

「国語」の高木忠昌先生。一見、村子然たる風貌のため綽名は「オッツアン」だが、れっきとした一高、東大出。現代文学に詳しく教え子に文学部志望が多かったのは先生の影響か。

東条鳳平教頭は幕末の著名な儒学者東条一堂の子孫。一堂には時の老中首座阿部正弘を始め藩主の多くが教えを請い、その塾（遥池塾）からは清河八郎、頼三樹三郎など多くの幕末の志士が出た。

隣地が千葉周作の塾（玄武館）だったため、当時の江戸の若者の間では「文は遥池塾、武は玄武館」が流行ったという。現在、神田お玉が池跡地近くに「右文尚武」（文武両道の意）の碑が立っている。

なお、一堂については、周作を主人公とした司馬遼太郎著「北斗の人」に詳しい。

戦時中、東条先生は実家近くに一堂碑を建てること計画、その実現に奔走した。その結果、現在、茂原公園内に高さ3メートル余の立派な顕彰碑を見ることができる。建設委員長は長生中学の創立者千葉弥次馬氏。こちらは周作と同じ千葉一族である。

Y校長は東京高師出の優秀な先生という評判だったが、生徒間の人気は今一つだった。その校長については思い出がある。

我々が入学した昭和18年には野球部、庭球部などが敵性スポーツという理由で廃部となったが、代わりに新設されたのが「滑空部」（グライダー部）」であった。

時代を見るに敏な校長はこの部の育成に力を入れ広い校庭を利用して「県内中学滑空部大会」を実施した。その功績により朝日新聞から「全国優良校」として表彰され滑空機1機が寄贈されることになった。

「長中朝日号」と命名されたが、その命名式の当日、校長は自ら試乗を買って出た。しかし離陸後なぜか失速してドスンと前のめりに墜落してしまった。

幸いにして高さ2、3メートルだったため校長に怪我はなかったが、日ごろ強直でなる校長もこのときばかりは青くなって機体の下から這い出てきた。

「百年史」は事故の原因を「どうした手違いか」と胡麻化して書いているが、実情はロープを引いていた上級生

の部員数名が一斉に故意にロープから手を放してしまったとは、一年生の私でさえ知っていた。

いつの同期会でも真っ先に話題に上るし、現在、稲毛浜にある「民間航空機記念館」（日本初の民間航空発祥地）に展示してある同型の「朝日号」（同じ昭和18年製）を見るたびに思い出す。

私の嫌いな授業は「工作」と「教練」だった。

担任のS先生は大の軍国主義者。自宅（一宮町）に茂原海軍飛行基地のゼロ戦パイロットを数名下宿させているのが自慢で、授業の教材は常にゼロ戦の模型だった。

生来、手先の不器用な私は「工作」は苦手だったが、さらに先生から左手で鋸を引くことを禁じられたのは極端な左利きの私にとってはお手上げだった。もしこの禁を破るとすぐにピンタが飛んできた。

更に苦手が必修科目の「教練」。

戦前の中学以上の学校には必ず「配属将校」がいた。陸軍から派遣された軍事教練の指導官である。（中学は尉官クラス、大学は佐官クラスが多かった。）この制度は大正末期から始まったようだが、法規にははっきりと「陸軍現役将校」と明記されている。しかし戦争末期となると、そんな余裕もなくなり、わが長中でも50歳近くの予備役少尉であった。さらにこの年にはこの小尉殿も応招され、後任は「配属将校」ならぬ「配属下士官」となったしまった。いかに人材不足であったことが分かる。

教練の時間には「手旗信号」の訓練が頻繁にあった。右手に赤旗、左手に白旗の小旗を持ち、これを振り動かして遠くの相手に通信するものだが、何の遮りもなく広い校庭が格好の訓練場所だった。

しかし既に近視眼になりかけていた私には、相手の小旗が殆ど見えなかった。

その頃、同期の中では「陸幼」（陸軍幼年学校）に合格する者も出ていたが、私には軍人は全く無理だと諦めた時期だった。

（続く）

スペイン・ポルトガル弥次喜多道中（後編）

田寺怜葦

リスボン

セビリアのホテルが問題ありだったので不安でしたが、ここはごく普通のビジネス・ホテルといった感じで安心しました。ベッドもシングルが二つ、くっついてはいましたが自力で動かして隙間を作れました。今日のメイン・イベントは二十時に予約してあるファドの店です。観光客向きのファド・レストランですが、歴史ある店なので期待できるでしょう。場所は、ロシオ駅近くのバイロ・アルト地区というファド・レストランが多く点在する地域です。ポルトガルの国民歌謡であるファドは、運命や宿命をテーマにした哀愁溢れる曲が多いということなので、未知の歌に期待がふくらみます。

ロシオ駅へは地下鉄を利用するつもりです。リスボンの地下鉄は分かりやすく出来ていて、レッド線、ブルー線、グリーン線、イエロー線に色分けされています。とは言え、右も左も分からない二人には謎の迷路ではあります。ホテルに近いカンポ・ペケーノ駅はオレンジ線にあるので、グリーン線のロシオ駅に行くには、オレンジ線からブルー線、グリーン線と乗り換えなければなりません。初体験の地下鉄で二回の乗り換えは不安大なので、事前調査で一回乗換えにしました。ホテルから一キロ程歩いた所に、ブルー線のサン・セバスチャン駅があるのです。ここからならブルー線とグリーン線だけで行けます。道も、グルベンキアン美術館という大きな庭園のある美術館沿いに歩けば辿り着けそうです。サン・セバスチャン駅からロシオ駅までは全部で六駅ですから多少迷ったとしても三十分とかからないでしょう。ロシオ駅はリスボンの中心的なターミナル駅です。一八九〇年

に完成した美しいネオ・マヌエル様式の駅舎は、ポルトガル王国鉄道によって発注されたものだということです。街の散策も考えて五時過ぎにはホテルを出発しました。サン・セバスチャン駅までは順調に歩きました…が、駅ではとんでもない難問が待ち受けていました。

切符が買えない！　現金投入もカード購入も上手く出来ません。一応ネットで調べてはきたのですが甘すぎました。仕方が無いので購入する人を観察することにしました。小さな駅なので駅員も見当たりませんし、人もそれほど多くありません。券売機の前に人が立つと、私たちはすかさず近付いて操作を凝視します。ところが不運は続くもので、来る人の誰もが操作不能で諦めて去っていくのです。たまたま観光客だったのでしょうか。まるで悪夢です。時間だけが容赦なく過ぎていきます。「もうタクシーで行く？」「でも、明日も明後日もタクシー使ってたらとんでもないわよ。」節約旅行の二人にとって、毎日のタクシー移動など正気の沙汰ではありません。

その時、賑やかな話し声と共に十七、八才位の女の子たちのグループがやって来て、楽しそうに券売機の前にたむろしました。私は勇気を出して彼女たちに接近。ポルトガル語はまるで分からないので片言の英語で話しかけると、彼女たちはとてもフレンドリーな笑顔で協力してくれました。それでも、この券売機はややこしいらしく、彼女たちがあれこれ試してもなかなか上手くいきません。しばらく試して他の券売機に移動。まるで楽しんでいるように明るい彼女たちに救われる思いです。試行錯誤を繰り返して時間が過ぎていきます。私たちのために時間を費やしてくれる彼女たちに申し訳なさを感じるばかりでした。努力の結果、無事に「Viva Viagem」という日本のスイカのようなカードを入手できました。このカードでトラム（路面電車）も乗れます。ありがとうポルトガルの天使たち。美しい天使たちに手を振りながら、唯一覚えたポルトガル語で「オブリガード！」

六時過ぎには地下鉄ロシオ駅に到着。賑やかですが、歴史が混在した美しい駅前広場です。色々なお店を覗きながらバイロ・アルト地区のファド・レストラン「アデガ・ド・マシャド」を探します。小さなケーキ屋さんでお日当てのエッグタルトを二個購入したり、お土産屋さんを覗いたりと楽しい街歩きです。ところが、すぐに行き着けるはずだったバイロ・アルト地区へなかなか行き着けません。もちろんグーグルマップをお供にしているのですが、使い方が悪いのでしょう。この辺りは坂道が多くかなり疲れます。次第に焦りと不安が頭をもたげます。時間はもう七時半、八時までには三十分しかありません。

バイロ・アルトは、高い場所という意味だけあって上り坂を進みますが、高い地域と言ったとて広いのです。だんだん近付いている気はするのですが…サンタ・

ジュスタのリフトが見えました。観光客が並んでいます。「サンタ・ジュスタのエレベーターよ。」私が指差すと、「乗りたい。」とKちゃん。どこまでも意欲的な人です。

近い筈なのに見つからない。セビリアの闘牛場と同じです。闘牛場は広々した場所で大きな建物を探しましたが、今夜は広大な繁華街で一軒の店を探しています。「地図上では分かりやすい場所のはずだったのに。」と嘆く私を尻目に、ひたすら歩き続けるKちゃん。時間は八時を過ぎています。ほぼ諦めかけた私を引っ張って彼女は果敢に進みます。八時十五分「アデガ・ド・マシャド」発見。Kちゃんの根性には頭が下がりました。

店内は広めでしたが、テーブルは割りと詰められています。私たちの隣り席は感じの良いベルギー人の御夫婦でした。今夜の食事は、この旅行で初めてのフルコースです。魚介類の前菜からメインの肉料理まで、どれも想像以上に美味しいものでした。ファドは前座の若い女性の歌が今ひとつでしたが、メインの中年男性の歌は声量もテクニックもとても素晴らしく感動しました。運命や宿命と言った重いテーマを歌い上げるファドは女性が歌うことが多いらしいのですが、こんな素晴らしい男性のファドを聴けて、諦めずに来た甲斐があったというものです。Kちゃんの根性に感謝。

最高の歌と食事に満たされてロシオ駅へ向かっていると、ある洋品店のショーウインドゥの前で、初老の男性がアコーディオンを弾いていました。観客は誰もいません。何とも風情のある佇まいとメロディーです。私たちはしばし聞き惚れて、僅かですが心付けを入れました。スペインもポルトガルも、街のあちこちで演奏される音楽がその街を彩っています。音も街を形成する要素のひとつでしょう。日夜、大音量の雑音が垂れ流されている、経済大国日本の現状を残念に思わずにはいられません。

地下鉄が少し理解できてきたので、帰路はホテルに近いカンポ・ペケーノ駅に行くことにしました。遅い時間にグルベンキアン美術館の周りを歩くのは少々怖い気がしたからです。天使たちに買ってもらったカードで難なくカンポ・ペケーノ駅へ帰着。もうホテルまでは歩いて五分です。ところが、ところが、その五分が膨張して何十倍にもなってしまうとは考えも及びませんでした。

理由は方向音痴と強い思い込み、そして迂闊さが迷子の決定打となりました。結局は馬鹿者ということです。ファドの感激もどこへやら、ホテルを探して夜の街をさ迷い歩くうちに足も重く、投げやりな気分になりました。「この公園で野宿してもいいかも。寒くないから凍死することもないし。」と座り込む私に、さすがのKちゃんも笑い出してしまう。再び軌道修正してホテルへ帰れたのは二十五時を回っていました。翌日はブルー線で二駅目のジャルディン・ズーロジッコ駅まで行き、駅前バス・ターミナルから九時半発のエヴォラ行きバスに乗る予定をしています。「もうエヴォラに行かなくてもいいかなって気がする。すごく疲れて気力ない。ホテルでまったりしたい。」諦めの良い私の言葉にKちゃんの顔色が変わる。「ハアァーッ！　エヴォラに行きたいって言ったのは誰よ。そのためにスケジュール立てたんでしょ。」Kちゃんの「ハアァーッ！」は無敵です。

エヴォラ

昨夜へとへとの二人が早朝に起きられるはずもなく、目が覚めたのは八時過ぎでした。本来は十一時までにエヴォラに着いて、ネット上の人気ランキング一位の食堂(Botequim da Mouraria)に並ぶ予定でした。その為には七時半起きが限界です。「もうランチはどうでもいいから、ゆっくり十時半のバスで行こう。」「うん、そうしよう。」Kちゃんも素直です。身支度と朝食を済ませて、悪夢のカンポ・ペケーノ駅へ。今日は道順をしっかりと頭に入れて歩きます。駅に着いて昨夜の悪夢の原因が判明しました。出口を間違えたのです。二つある出口の、ホテル側でない方に出てしまったのです。ホテル側の出口の壁には牛の壁画あるので、これを目印にすれば間違えなかったでしょうに。だからと言って、あそこまで迷う人間は少ないでしょうが。

「昨日も二万歩歩いてる。」ケータイの万歩計を見ながら嬉しそうに呟くKちゃんに、憎しみの眼差しを向ける私。

今日はロシオ駅とは反対方向で、二つ先のジャルディン・ズーロジッコ駅へ行き、駅前のセッテ・リオス・ターミナルから「REDE EXPRES」というバスでエヴォラへ向かう。エヴォラも古い歴史の町で、町そのものが世界遺産になっている。スペイン・ポルトガルはどこに行っても世界遺産だらけです。セッテ・リオスのバスターミナルは、地下鉄駅から地上に出て、オレンジ色の「REDE EXPRES」の看板を探せばすぐに見つかるはずでした、普通は…。でも普通とは言えない私たちは当然の如く出口を間違え、いつものように散々歩き回るのです。今日も恒例の歩け歩け行進が始まりましたが、「REDE EXPRES」のオレンジ色の看板は、私たち的には許容範囲内の距離で見つかりました。

約一時間半でバスはエヴォラに到着。バス・ターミナルから町の中心であるジラルド広場までは歩けない距離ではないが、登り勾配の道なのでタクシーに乗りました。実際にタクシーから見た道程はかなりきつそうだったし、日差しも強いです。ジラルド広場に着くと、先ずは広場の石畳に並んでいるパラソルのテーブル席に腰を下ろしました。中世の雰囲気を残した静かで素朴な町です。ランチを終える頃、七、八才の痩せた女の子が私たちのテーブルにやってきました。どうやら何か食べ物をくれ

と言っているようです。旅行案内の注意事項が頭に浮かび、きっぱり「NO」と拒絶する。女の子は恨めしそうに見ていたが、やがて他のパラソルの客の席へ移動して行った。

誰もあまり相手にしてくれないと、今度は広場沿いの店に入って行く。暫くしてまた広場に戻って来た女の子は、飲み物が入った紙コップを手にしていた。何処かの店の人がくれたのだろう。用心し過ぎて何だか可哀想なことをした気がする。Kちゃんのバッグに日本から持ってきたお菓子が一袋あったので、その子に渡すと、じっと私の眼を見つめた。虚ろで、幼くて、ほんの少しの喜びが宿った瞳だった。ポルトガルの負の部分を見たようで悲しい。

広場を後にしてエヴォラ大聖堂へ。十二～十三世紀に建てられたこの大聖堂は荘厳で静謐な雰囲気に包まれています。一五八四年、日本からやって来た天正遣欧使節団の伊東マンショと千々石ミゲルが演奏したというパイプオルガンが、当時のままの姿で遺されていて、おまけに現在でも演奏できる状態だというのには感激でした。五世紀も昔の日本とポルトガルの交流に思いを馳せ、改めて日本人の能力の高さに誇らしさを感じるのでした。カテドラルの次は、私の一番の目的であるサン・フランシスコ教会です。この旅行を計画した当初は知らなかった教会ですが、その頃たまたま読んでいた養老猛司氏の「身体巡礼」という本で知りました。人間の骸骨で壁や柱、天井を装飾してある骸骨堂と言うものがヨーロッパには幾つかあるようです。その中のひとつがエヴォラのサン・フランシスコ教会でした。

こういう物が創られた要因のひとつとしては、ヨーロッパはアルカリ性の土壌が多く、埋葬した骨が溶けずに残ってしまうので、長い年月の間に骨だらけになってしまうということです。日本の場合は酸性土壌が多いので骨は長い年月の間に溶けてしまいます。もちろん宗教的な要素もあるでしょう。ラテン語の［Memento mori］「死を忘れるな」という戒めの言葉を示すための場所であるのかもしれません。その証拠に、この骸骨堂は修道士たちの瞑想のための部屋であったということです。他の教会の骸骨堂は、災害や戦争、疫病で亡くなった人々の骨が用いられている場合もあるようですが、このサン・フランシスコ教会で使われている約五千体の骨のほとんどが歴代修道士の物であり、一部、金持ちの住民が寄付をして納骨してもらった物もあるようです。ですから堂内に重苦しい空気は無く、むしろ、優しく安らかな気配さえあります。当初嫌がっていたKちゃんも気軽に写真を撮り捲っていました。現代の日本社会では、死は忌み嫌うべき悪として社会から隔離されています。しかし、死は全ての生物の隣にいつでもあるものです。だからこそ生きることに意味があるのではないでしょうか。人生

というジグゾーパズルは、死のピースが無ければ完成しないのですから。

サン・フランシスコ教会は骸骨堂だけでなく、キリスト教に関するユニークなアート作品を展示した美術館も併設されていて、とても興味深い教会でした。やっぱり来て良かった。Kちゃんありがとう。

五時半のバスでエヴォラを後にして、ホテルには戻らずそのままロシオ駅に行きました。Kちゃんが絶対に乗りたいというトラムに乗る予定です。地下鉄にもだいぶ慣れてきました。昨夜散々歩き回ったロシオ駅周辺なので、トラムが走っている地域にもすぐに行けました……が、停留所が分かりません！　トラムは路線も多いので、行き先によっては困った方向へ連れて行かれてしまいます。12番系統のトラムなら一周二十分位の循環線なので、出来ればこれに乗りたいのです。しかし、乗り場が分からなければどうしようもありません。時々姿を現すトラムを見つけては駆け出す二人。路面の線路を追いながら歩きますが、停留所が見つからない。また今夜も歩き回る羽目になりそうな予感。道路下方にケーブルカー型のトラムが見えました。「あ、トラムだ。」と言って階段を駆け降りるKちゃん。子供か！　どう見てもボロボロのトラムは、観光用にそこに置かれているだけの物でした。がっかりして再びトラムを追います。何種類かのトラムがこれ見よがしに私たちの目の前を通り過ぎて行きます。と、少し先でトラムが停まり、数人が乗り込んでいます。ダッシュするKちゃん、追いかける私。「しかし、これは何番系統のトラムなんだろう。」と躊躇する私に構わず、Kちゃんは飛び乗ってしまいました。もちろん私も乗らない訳にはいきません。「やっと乗れた。」とKちゃんは嬉しそうです。「良かったね、これで満足でしょ。」「え～、これだけじゃ嫌よ。昼間のトラムにも乗りたいじゃない。」もうトラム病だ。暫くすると車窓の町並みがだんだん寂しくなってきた。

「これって、たぶん28番系統だと思うな。終点まで行くと、確か共和国会議場って所で、帰るの大変よ。ネットの個人ブログで、一時間かけて歩いて帰ったって記事があったもの。次で降りよう。」Kちゃんも心配になってきたのか同意した。「そうね、タクシーだって拾えないかも知れないし。」私たちはトラムを降りて、元来た道を戻り始めた。暫く歩いた先の広場に、異なる機種のトラムが停車している。すると再びKちゃんの目が輝き、「あれに乗れば戻れるかもしれない。」何の根拠も無い彼女の言葉に私も一緒に走り出す。ビュンビュン走る車を縫いながら、動き出したトラムにすがりつく。

「ロシオ駅行く？」「ノー、ダウンタウン」がっかりして気が抜けた途端、自分たちの無鉄砲さに背筋が寒くなった。ポルトガルでの交通事故なんて御免こうむりたい。「疲れたらタクシー拾えばいいんだから。」そう励ま

し合いながら歩き続けたが、タクシーは一台も来ない。トラムの線路を追いながらとぼとぼ歩いていると、来ましたトラム！　が、しかし、またもや停留所が見当たらない。あたふたしていると、近くにいた人が「あそこだよ！」と少し先を指差してくれた。再び全速力で駆け出す二人。何とか無事に乗れました。しかし、歩くだけならまだしも、全速力で走るという苦行を果たした私はもう死にそうに疲れて、心臓ばふばふ頭は朦朧、お腹もぺこぺこでやっとロシオ駅に帰り着きました。近くのバルを探して、とにかくトラムに乗れたことに乾杯しましたが、お腹が空きすぎて食欲は余りありません。時間はもう十時を回っていますが、今夜こそはカンポ・ペケーノ駅に着いたら五分でホテルに戻れるはずです。明日は早起きして、レッド線でオリエンテ駅まで行き、オリエンテからポルトガル国鉄の特急列車でポルトへ行きます。ロシオ駅へ向かって歩いていると、昨夜と同じ洋品店の前で、あの初老の男性がまたアコーディオンを弾いていました。

ポルト

リスボン万博に合わせて一九九八年に開設されたというオリエンテ駅は、メトロ・レッド線やポルトガル鉄道の近郊列車、長距離列車の拠点となるポルトガル最大のターミナル駅です。この駅は植物の葉脈を思わせるユニークなデザインの屋根が特徴的で、今後はスペイン鉄道等の乗り入れも予定されているとのことです。無料トイレとカフェもあるということなので利用することにしました。現代的なデザインのアート感覚溢れる駅です。ここから、ポルトの玄関口カンパーニャ駅までは三時間余りで着きます。カンパーニャ駅に着いたら近郊線に乗り換えて、一駅でポルトの中心サン・ベント駅に行きます。サン・ベント駅はアズレージョの壁画が有名で、世界一美しい駅と呼ばれているのです。アズレージョとは、白地にブルーの彩色で様々な絵が描かれたポルトガル特産のタイルのことです。

のどかな田園風景の中を走るポルトガル国鉄は快適で、三時間はあっという間に過ぎてしまいました。カンパーニャ駅から約五分、期待のサン・ベント駅構内に着くと、大勢の観光客が周りの壁画にカメラを向けていました。本当に美しいアズレージョの作品です。約二万枚のタイルが使われているとのことです。中でも「アルコス・デ・ヴァルデヴェスの激戦」の図は壮大で迫力があり、正に芸術作品といえるものでした。ここからは歩いてドウロ川を目指し、川沿いのレストランでのランチを予定しています。ポルトガルの旧首都であるポルトも坂の多い街ですが、歴史がそのまま現代に生きている街並みはとても美しく魅力的です。

ドウロ川の岸には沢山のレストランやお土産屋さんが並んでいて賑やかです。私たちは有名なドン・ルイス一世橋に近いレストランに入りました。もちろんメニュー写真がある店。食後には歩いて橋を渡るつもりです。喉が渇いたので、今日はワインをやめてサングリアを注文。顔くらい大きな丸いグラスに入ったサングリアはさすがに美味しい。海老の唐揚げ風とポテトフライを摘まみながらメイン・メニューを探す。ポルトガルのポテトもやっぱりスペインと同じく美味です。ヨーロッパのアルカリ性地質のせいなのでしょうか。メインは魚介のリゾットにしました。サングリアで良い気分になっていると、リゾットが来ました…洗面器くらい大きな土鍋風の器に入った、馬並みのリゾットが！「これは何？」と絶句する二人。こんなの二人だけで食べられる訳が無いでしょ。言葉が分からないから馬鹿にされたのだと憤慨しながらも、抗議する能力も無い。仕方なく食べ始めると、これが美味しいので、「頑張って食べよう。」と健気な二人でした。しかし、いくら頑張っても湧いてくるように減らないリゾット。前代未聞にまずいパエリアと美味しいけれど食べ切れないリゾットは、忘れられない旅の思い出となるでしょう。

川沿いのお土産屋さんに並んだ可愛いポルトガル土産を楽しみながら、ドン・ルイス一世橋に向かいます。この橋の設計者は、かの有名なエッフェル塔の設計者ギュスターヴ・エッフェルの弟子の一人である、テオフィロ・セイリングという人だそうです。幅八メートルの橋は2層構造になっていて、上層はメトロ、下層は自動車用となっていますが、人はどちらも歩くことができます。私たちはまず下層の道を渡りました。橋の中頃まで来ると、鉄橋の欄干に十五、六才の男の子…髪が長くてまるで女の子みたいに可愛い子が、海パン姿で立っていました。どうやら、これから川に飛び込むらしい様子。男の子は川向こうの公園に居る仲間たちと呼びかけ合って、お金がある額まで集まった段階で飛び込むらしいのです。私たちは人混みを掻き分けながら急いで公園を目指しました。公園は見物しようという人でいっぱいでしたが、お金を集めている人を見つけて、私たちも少しばかり寄付しました。暫くしてオーケーの合図。男の子はまるで鳥のように冴え渡る口笛を吹きながら飛び込みの準備です。ドウロ川は船も走っている大きな川なので、見物人には期待と不安が広がります。男の子が平均台のように細い欄干を走り出したかと思うと、飛び込みました！一斉に上がった歓声は、着水と同時に可笑しいくらいにフェイドアウト。人間の反応というのは、人種、国籍を問わずに同じものです。それにしても楽しいパフォーマンスでした。

橋の反対岸にはワインセラーが多くあるのですが、私たちは川沿いの道を楽しむだけで、ワインセラーには行

きません。あちら岸とはまた違った雰囲気の川沿いの道には色々な出店も多く出ています。私の興味を引いたのはオルゴールを回している初老の男性でした。手押し車のようなオルゴールの上に、鶏?のようなもふもふとした小ぶりの鳥が四羽じっとしています。よく見れば、おじさんの膝の上にも黒いのがもう一羽。帽子をかぶったおじさんの風情とオルゴールのメロディーに、私のハートは完全にいかれてしまいました。

ケータイでビデオを撮り続ける私に、「あの鳥本物なの?」と無粋な言葉を投げるKちゃん。「本物よ!動いてるじゃない。」このビデオは、この旅行で一番の私の宝物となりました。もちろん、心付けはちゃんと入れました。

ポルトで行ってみたい場所は幾つかあったのですが、先ずはポルト大聖堂に行くこととしました。大聖堂に行くには、また坂道を登らなければなりません。「ロープウェイ乗れば、向こう側の上まで行けるから楽よ。」Kちゃんの機転で、きつい坂や階段を回避できたと感謝したのですが、もしかして乗り物好きの彼女は、ただ単にロープウェイに乗りたかっただけ? とにかく楽をして大聖堂へ到着。高台の大聖堂から見るポルトの街は、ため息が出るくらい美しかった。

大聖堂前の石畳(何処も石畳だらけで足が疲れるのです)に並んだパラソルのテーブルに惹きつけられる私。もっと先まで行きたいと言うKちゃん。「ここで待ってるから、一人で行って来てよ。」彼女もこのパターンに慣れてきたのか、異議を唱えることなく去って行った。暫くして、このテーブルを出している店の人が来たので、懲りもせずにアイスコーヒーを注文。ポルトガルでは「With ice cube」でないと通じないことを知る。疲れた足を休めながら、気持ちの良いひと時が流れていく。Kちゃんは三十分もしないで戻ってきたが、時間はもう五時近かった。帰りの列車は、カンパーニャ駅発十八時四十分なので、サン・ベン、駅での乗換えを考慮するとあまり余裕は無い。しかし、オリエンテ着までは三時間余りかかるので、このテーブルを出している店に入って軽めの食事をすることにした。案の定メニューはポルトガル語ーわからないんですよ~、と泣きたくなるのを我慢して文字を睨み付ける‥神のご加護か「Bacalhau」の文字が。バカリャウ、鱈です!私がポルトガル語で唯一覚えていた魚の名前です。ワインを飲みながら、どんなバカリャウが出てくるのかと待っていると、店の小さな入り口には行列が出来始めていました。幸運なことに、どうもこの店は地元の老舗食堂のようでした。出てきたバカリャウは唐揚で、さっぱり味のリゾットが添えられていました。二人でシェアしてちょうど良い量です。周りを見ると、ほとんどの客がこのバカリャウか鰯の塩焼きを食べていたので、おそらく、この店の名物料理だったのでしょう。神のお導きに感謝しながら、熱々のバカ

リャウをいただきました。やっぱりポルトは素敵な街です。

十八時四十分発のリスボン行き特急列車に乗り、オリエンテ駅への帰路を楽しみます。オリエンテ駅からは、またレッド線の地下鉄でロシオ駅に戻る予定です。カンパーニャ駅を出た時に明るかった車窓の風景も、オリエンテ駅が近付く頃にはすっかり夜になっていました。オリエンテ駅に着く前の車内放送で、この列車が、オリエンテ駅の後、終点のサンタ・アポローニャ駅まで行くということが判明しました。サンタ・アポローニャ駅からロシオ駅までは地下鉄に乗れば三駅です。「終点まで行こう。」Kちゃんが愉快そうに言いました。

サンタ・アポローニャ駅の近くには港があり、たくさんの灯りを点した大きな船が停泊しているのが見えました。港の広い通りには人影も疎らでしたが、イルミネーションの美しい船の近くまで行ってみることにしました。近付いてみると本当に大きな船です。何枚か写真を撮り、帰国後に調べてみたところ、イタリアの客船、コスタ・ヴィクトリア号だということが分かりました。カジュアル客船だと記されていましたが、どちらにしても私たちとは縁が無さそうです。

サンタ・アポローニャ駅から地下鉄に乗り、二つ目のバイシャ・チアード駅でグリーン線に乗り換えれば次がロシオです。さすがにロシオ駅前は三回目なので安心感があります。最後の夜だから多少酔いたいという気持ちで付近の店を捜しますが、もう開いている店も数少ない。遠くまで足を延ばす気力もなく、結局、駅前のバルのパラソルのテーブルに落ち着きました。

ウエィターが見せたメニューの写真で、海老のアヒージョ風みたいなのと、ワインをデキャンタで注文。旅行中はずっとグラス・ワイン一、二杯しか飲まなかったのに、最後の夜だから多めに飲もうという気持ちでした。ところが事もあろうに、このワインがまずい!

落ち込んだ気分で乾杯しながら、「とうとう蛸も食べなかったね。」と呟いた私の言葉に反応したKちゃんが、メニューの写真の中に蛸を発見した。「あ、蛸がある。蛸が食べたい。さっきの取り消して蛸に変えてもらって来て。」「変えてもらって来て。」って私の仕事と断定している。Kちゃんのナイトよろしく店内に駆け込む私。謝りながら注文の変更を頼む私に注がれるウエィターの冷たい視線。それでも何とかキッチンの方へ声をかけてくれた。

テーブルに戻り、まずいワインを飲みながら辺りを見回すと、客は酔っ払い風の男が一人、二人居るだけ。H夫妻が今の私たちを見たら呆れ果てるに違いない。ワインはなかなか減らないけれど、とにかく蛸だけは食べて帰るのです。やっと待望の蛸が現れた。オリーブ・オイルに塗れた蛸のぶつ切りと生の玉ねぎ粗微塵。ポルトガ

ルの蛸は美味しい筈と口に運ぶ。「うわっ、何これ！」二人同時に声を上げた。歯応えもない、ぐにゅぐにゅの塊はタコのタの字も感じられない。「百回くらい解凍、冷凍を繰り返した蛸みたい。」と、泣きそうな顔のKちゃん。それでも私は、わざわざ注文変更までしたのだからと、根性で三切れは食べた。「今夜は酔いたかったのにね。」と残念そうなKちゃん「じゃあ、ホテルに帰って飲もう。冷蔵庫にビール一缶とウィスキーのミニボトルがあったから。」

ホテルに着いたのは十二時を回っていたが、翌日はリスボン空港発十八時四十分のエアーフランス便に乗る以外特に予定は無い。ポルトの屋台で買った焼き栗を摘まみながら、しょぼくれた酒盛りが始まった。これまでも何度か一緒に旅行をしたが、せいぜい二泊か三泊の国内旅行だった。それに、いつもはもう一人の友人が加わった三人だったので各人の我儘も緩和される。寝ても覚めても二人顔を突き合わせて過ごす十日間は、画期的な経験だったのです。

「何とか喧嘩もしなかったね。」メーカー不明の缶ビールを飲みながら、Kちゃんがしみじみと言う。「そうね、夫婦でもないのにダブルベッドはきつかったけど。」「でも、いびきかいてよく寝てたわよ。」「えー、そっちこそ。」ここで、二人とも夫々にいびきをかいていたことが判明。「まるで学生旅行よね。」「うん、楽しい。やっぱり、旅行は貧乏旅行が楽しいね。」「て言うか、貧乏旅行しかできな～い。」他愛無い会話を交わしながら少し酔いが回る。「でも、私の我儘によく付き合ってくれたと思って、感謝してます。」珍しく殊勝な言葉を口にするKちゃん。「ほんと、Kちゃんの我儘さが良くわかったわよ。自分が意外とお母さん的性格なんだと思ったもの。」「ハアァーッ！」出た。「我儘なのはお互い様でしょ。」そうです、そうです、貴女も私も負けず劣らず我儘なのでした。

翌二十七日は、目が覚めるに任せてゆっくりの朝を迎えた。ホテルで朝食を済ませてから、帰国に向けて荷造りをする。チェックアウト後は荷物をフロントに預けて、ロシオ駅辺りでリスボン最後の時間を過ごし、十六時までにホテルへ戻る。もはや特に行きたい場所も無いので、のんびり気楽な街歩きになるでしょう。

通いなれたロシオ駅周辺ですが、まだ歩いていない場所は幾らでもあります。目的もなくうろついていると、思いがけない物を発見。トラムのチケット売り場でした。そして、そのすぐ傍にはケーブルカー・タイプのトラムが停車しています。必死に捜し求めていた時にはちっとも見つからなかったトラムの乗り場。昼間のトラムに乗りたいと言っていたKちゃんの夢が実現です。このトラムは上の街と下の町を行き来するタイプの短い路線でしたが、車両も可愛くて楽しめるものでした。「放下着だ

ね。」晴れやかな顔のKちゃんを見ていて、思わずそんな言葉が出た。「え、何それ。」「いや、聞きかじりの禅の言葉なんだけど、すべての執着を捨て去ってしまえという教え。昨日まではトラムに乗りたい、乗りたいって思ってたけど、今日はもう、そんなこと忘れていたじゃない。」「そうだね。」「これは私の勝手な解釈だけど、欲しい欲しいとしがみ付いているとなかなか手に入らない。諦めて無心になった時に、向こうから飛び込んでくるってこと。たかがトラムだけど、人生もそんなものよ。」

トラムを降りた上の街は駅前辺りとは少し趣が異なり、所々にブランド・ショップが並ぶお洒落な街並みでした。見晴らしの良い公園もあります。売店で飲み物を買って休んでいると、友人たちに囲まれた花嫁花婿さんの姿が見えました。「この旅で二度目の新婚カップル！」「この近くに教会があるのかな。私たちついてる気がしない？」「そうね、地下鉄では天使ちゃんたちに助けられたし、トラムもちゃんと乗れたし。ポルトガルの空には神様がいるのかもね。」「試練の後のお恵みね。」「確かに、試練は山ほどあったね。身から出た錆の試練だけど。」街を見晴らす高台の公園をさらりとした風が渡り、汗ばんだ頬を静めてくれる。昨日までの忙しなさが嘘のような優雅な散歩と買い物を楽しんだ後、今度は下りのトラムで再び下の街へ戻る。

ホテルへは四時までに戻れば大丈夫なので、時間的にはまだ余裕だ。「何か食べる？」「そうね、あんまりお腹は空いてないけど。Kちゃんはどう。」「うん、私もあんまり。」

駅前広場に来ると昨夜のまずい蛸の店が目に入り、食欲はよけいに低下した。それでもまだ地下鉄に乗る気にはなれず、結局、広場前のマクドナルドへ。ポルトガルまで来てマックというのも残念な選択ですが、妙な安心感があるのも事実です。心ならずも世界のグローバリズム化に屈した自分に涙。人間とは勝手な生き物です。

こちらのマックのテーマ・カラーは赤ではなく、グリーンで、看板からスタッフの制服までグリーンで統一されています。商品もかなり違うようです。私たちは結局ソフトクリームだけを購入して、少しばかり親しみを感じ始めたロシオ駅前で甘いひと時を過ごしたのでした。今日も夜になったら、あのアコーディオン弾きのおじさんは洋品店の前に立つのでしょうか。

ホテルでタクシーを呼んでもらい、リスボン空港には出発時刻の三時間前には到着しました。絶対に乗り遅れてはいけないというプレッシャーはもちろんでしたが、買い足りなかったお土産を物色したり、食事をする時間も必要です。私はもう大して買物はありませんでしたが、Kちゃんは「会社の人たちに配るお菓子何にしよう。」とか言っては焦りまくっています。「これでいいかな。」と、エッグタルトの袋詰めパックを沢山買い込みました。

エッグタルトって焼きたてが信条のお菓子なんじゃないの。大丈夫なんでしょうかKちゃん。

ひと通りの買物を終えてロビーのテーブル席に腰を下ろしましたが、Kちゃんはまだそわそわと落ち着きません。「やっぱり、もう一回行ってくる。頼まれた物がいまいちで。」出発時刻まではまだ一時間近くあります。「わかった、三十分前には戻ってきてね。」

時刻は十八時を過ぎた。周りのテーブルを見渡すと、居眠りをしている人、仲間でトランプゲームに熱中する人、楽しそうに笑い合う恋人たち。だが、荷物だけを置いたまま私の友人はまだ戻ってこない。

時間だけが過ぎて焦りだす私。万が一の場合、Kちゃんを置いて帰国なんて出来ないし、とうとう最後のミッションで大ポカするのかと視線をキョロキョロさせる。十八時十分を過ぎた頃、息を切らせたKちゃんが小走りに帰ってきた。「買えたの?」「う~ん、もう良くわからないから適当に決めた。」忘れ物の無いように夫々の荷物を確認し、出発ゲートに急ぐ。身軽で気楽な（見方を変えれば孤独な）私と違い、仕事関係や家族、親類等へのお土産が多い彼女の苦労が身にしみます。どちらが幸せなのかは神のみぞ知るですが。

AF1195便に無事搭乗。この後はシャルル・ドゴール空港での一時間十五分のトランジットで、いよいよ日本に帰国です。

羽田が近付く頃、Kちゃんがしょんぼりしていた。「どうしたの、何か元気ないじゃない。」「うん、明日一日休んだら、翌日からまた仕事だと思うとね。急に気が重くなってきちゃった。」「そうか…仕方ないね。また行こう。来年でも、再来年でも、行ける内にいっぱい。」「そうだね。そのためにも仕事頑張らなきゃ。それと、英語も勉強するわ。実感したもの。話せたらもっと楽しかっただろうなって。」

横文字を見ると頭が痛くなると言っていた彼女の誓いはあまり信用できないので、せめて、私がもう少し英語力アップに努めようと、秘かに決意するのでした。

おわり

『目耕録―定年退職後の晴耕雨読―』最終章

村田迪雄著『ムラは亡ぶ』を読む（日本経済評論社、一九七八年）

山本鎭雄

退職後、しばらくして同人雑誌『まんじ』に入会し、「目耕録」と題し、一年四編を寄稿し、連載して頂いた。目耕とは「目で紙田を耕すこと」、つまり読書することをいう（『世説新語』言語下）。徳富蘆花の『みみずのたはこと』、山川菊栄「『わが住む村』、深沢七郎『百姓志願』、井上ひさし『井上ひさしと考える　日本の農業』など、一七冊の「食と農」についての著書をいわば「雨読」し、いずれも感想文らしき拙文を書き、それに「晴耕」した野良仕事について書き添えた。何とか一七編を書き上げ、『目耕録』と題して出版した（二〇一五年七月、時潮社）。

残念なことに、今や老いて体力も気力も衰え、昨年の異常気象もあって、野良仕事を続けることを諦めた。それとともに、記憶力と集中力も衰え、なんとか最後の一編を書き上げ、ここに「目耕録」最終章を寄稿することになったことはまったくなかった。

老いて体力と気力が衰える

定年退職後、妻が相続した山梨県東部の大月市梁川町の実家と農地に通い、週一回（一泊二日）悠々自適の晴耕雨読の生活を始めた。都市に生まれ、都市で暮らした私には野良仕事は初めての体験のため、最初はどうして良いのやら、まったく五里霧中だった。畑にスマートフォンを持ち込み、検索すれば、この時期、どのように野良仕事をしたら良いのか、容易に知識を得ることが出来る。今や、随分と便利になったものだ。

その当時、私は畑に野菜作りのマニュアル本と種苗メーカーのガイドブックを持ち込み、それに従い、野菜作りをした。次第に野菜作りについてカン（勘）とコツ（骨）が身についてきた。豊作の年もあったが、不作の年もあった。ただ、昨年と今年のように秋冬野菜が凶作

にした。思えば、教壇に立ち、ただ座学で研究に励んだ日々とはまったく異なり、未知な自然の営みに感銘し、身体を動かし、野菜作りを享受した貴重な体験だった。

異常気象下の野菜の収穫

一昨年（二〇一八年）夏、キュウリ、ナス、ピーマン、トマトの春夏野菜は不十分ながらも、収穫した。畑でもいだキュウリに塩を振りかけ、トマトはそのまま齧りついた。鮮度充分の野菜を賞味し、旬穫間食だった。それに気を良くして、秋冬野菜の大根、カブ、ニンジンの種を撒いた。だが、異常気象に見舞われ、周囲に雑草が茂り、ニンジンは全滅、大根は中ぐらい、カブは何とか生育したが、これまで経験したことのない惨状だった。異常気象下で根菜類の生育にそれぞれ影響が異なるのだろうか。

小松菜、ほうれん草、青梗菜、野良坊菜などの葉菜類は間引きをしなかったためか、収穫出来たのは小さな葉っぱだった。撒いた肥料は雑草の肥料になったのであろう。ビタミン、ミネラル、鉄分、食物繊維などの補給は医食同源だと思い、湯掻いて食べたが、露地栽培で出来た野菜特有の甘味を堪能することは出来なかった。

私は重度の脊柱管狭窄症のため、歩くと腰に痛みを覚え、間欠性跛行となり、すぐに何処かに座りたくなる。しかも、中腰で鍬（くわ）、鋤（すき）、シャベル、三角ホーを使うと、腰に負担がかかり、腰や膝が痛み出し、すぐにへたばってしまう。そのため小椅子に座り、種を撒き、苗を植え、手の届く狭い範囲に鎌（かま）で草刈りをした。「よっこらしょ」と気合いを入れて立ち上がり、移動した小椅子に座り、同じ作業を繰り返す。こんな野良仕事は極めてスローモーで非効率的だが、ウォーキング、ゲートボール、テニスなどのように、老いた我が身の健康のための運動だと思い、無理を承知して続けることにした。

昨年冬、久しぶりに梁川町の畑に出かけた。春菊は何故か枯れてしまったが、貧弱な小松菜、ほうれん草、白菜、キャベツの葉菜類を収穫することが出来た。翌日の午後三時に野菜をダンボール一箱に詰めた。ダンボール箱を一輪車に載せ、押して近くの郵便局に運んだ。ところが、当日の集配車は郵便局を出発した後だった。郵便局は暖房が良く効き、しばし休憩していたら、いつものように、郵便局長が熱いお茶を出してくれたので、有り難く頂戴した。

私が野菜作りに「通う」畑は山梨県東部の大月市梁川町にある。簗（やな）とは、川瀬の水面に竹で造った梁簀（やなす）を仕掛け、落ち鮎を捕獲する伝統的な漁法である。梁川の地名の由来は、梁を打って、鮎を捕獲する川の周囲の地域をいうのであろう。この周辺の桂川では鮎の解禁日には、太公望は明け方から来て、場所取りをする。解禁の時間が来ると、一斉に釣り糸を川に投げる。しばらくして「やった」、「やった」と盛んに歓声が上がる。


太公望の梁川

梁川の下流に鹽津という地名がある。鹽津は海運業者が上り舟で必需品の食塩を荷揚げした舟泊りだったのであろうか。そして、鹽津に集まった農産物や名産の郡内織物を下り舟で輸送したのであろうか。のちに述べる三島由紀夫の『奔馬』では、新宿駅で待ち合わせ、中央線の列車に乗り、鹽津駅（現在、四方津駅）で降り、桂川沿いの甲州街道を一時間ほど歩き、取材地の梁川に到着した（その当時、今のように梁川駅は開設していなかった）。

私は野良仕事を始めた頃、「蒔かざる種は生えぬ」ということわざを思い出し、草刈りを後回しにして、種を撒き、苗を植えたため、のちに生い茂る雑草の草刈りには大変往生した。種が発芽し、苗が生育し、水を撒き、追肥し、害虫を防除するなどの作業は見事に収穫したいという思いがあって懸命に励んだ。枯れ草と落ち葉で堆肥（たいひ）を作れば良いのだが、一泊二日の「通い」の野良仕事ではとても対応出来ない。雑草を燃やして出来た草木灰は、白給肥料でリン酸、カリウム、石灰（カルシウム）が含まれる最も身近な自給肥料の一つである。都市の宅地の庭で枯れ葉や落ち葉を燃やすことは、防火上禁止されているのは了解出来る。だが、農山村の畑でも乾燥した枯れ葉や落ち葉をドラム缶で燃やすことさえ厳禁されている。たまたま聞いた話だが、ドラム缶で枯れ葉や落ち葉を盛大に燃やしたら、パトカーがやって来て、警察官から厳重に注意されたという。

三島由紀夫が現地取材に訪れた

六六年一一月、小説家の三島由紀夫は『奔馬』（『豊饒

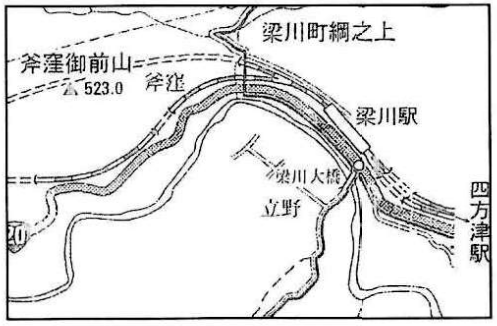
の海』第二巻、六九年二月）を執筆するため、現地取材で何の変哲もない農山村の甲斐國都留郡梁川（旧地名）を訪れた。『奔馬』の時代的背景は、三一（昭和六）年からその翌年にかけて、未遂に終わった三月事件や十月事件、さらに右翼テロリスト集団の指導者の井上日招が提唱した一人一殺主義によって暗殺が実行された血盟団事件、さらに過激な陸海軍青年将校を中心とした五・一五事件など、右翼や軍人によるクーデター事件が頻発した。その後の三六年二月、陸軍皇道派青年将校によって帝都東京における最大のクーデター事件が勃発した（二・二六事件）。

本書は弱冠一九歳の右翼学生の飯沼勲が昭和神風連を組織した。同志二〇名が桂川の梁川の築山のような巨岩の裏の草地に車座になり、テロ決行の日時（三二〔昭和七〕年一二月三日）を決め、帝都東京の治安攪乱のために東電変電所六ケ所の爆破、金融業界の要人三名の暗殺、日本銀行の放火を謀議し、それに必要な物品の購入計画を綿密に検討した（勲の父・茂之の密告によって、このクーデター事件は未遂に終わった）。

梁川のクーデター謀議の一節を引用すれば……。

一同は黙々と勲に従い、田の南端の巨岩の杜のかげへ来て車座を作った。見下ろす瀬はあたかも桂川が直角に曲るところで、瀬音は高くさやいでゐる。對岸の俊険な断崖は、灰白色の岩肌が歯噛みをしゐるような強い忍耐を泛べ、そこからさしのべた紅葉の枝々も、早くから日陰に入って暗鬱な色をしてゐるが、はるか見上げる頂の木立の空だけが、光りかがやく夕雲の亂れを覗かせてゐる。（二十四章二三九頁）

「桂川」は水源地の山中湖から山梨県北部を流れ、大月市周辺で東部を流れ、両岸には険しい河岸段丘を形成し、平坦地に集落と田畑が点在している。その下流は神奈川県の相模川である。桂川の中流の北端が丹沢山地であり、南端は秩父山地で、桂川両岸は厳しい岸壁がある。その両岸の大月市梁川町では急峻な二段の河岸段丘がある。梁川町の綱本、立野、丹沢、斧窪御前山は『奔馬』二二章以下に登場する舞台である。



現在の梁川町立野付近

神道の平田篤胤を崇拝する真杉海堂は梁川の河岸段丘の下段で右翼の練成会を主宰し、二反五畝の田畑を所有

し、塾生に耕作させている。他に塾生が寝泊まりの出来る道場、神社、桂川の清浄な水で沐浴する禊所と小屋を設けている。海堂は塾生にたいして心霊から勇猛果敢な荒御魂（あらみたま）を除き、柔和で温順な和御魂（にぎみたま）を招くように講話し、修行させている。

ところが、荒御魂を抱き、テロを謀議する飯沼勲は昭和神風連の同志とともに、その日の練成会の課業を終え、帝都東京のクーデター計画を謀議した。晩秋、私は新潮文庫版を携え、雑草の生い茂る畦道を歩き、三島が描写した桂川とその急峻な南崖を眺望した。清らかな瀬音と激しく岩走る音を聞きながら、対岸の急峻な岸壁の月尾根沢を見上げた。三島の綿密な観察力と巧緻な表現力にただ感嘆する以外になかった（『決定版　三島由紀夫全集』第一四巻に「『奔馬』創作ノート」が収録されている。おそらくこの地に詳しい警察官が案内したのであろう）。

七〇年一一月、三島事件が勃発した。三島は自ら組織した右翼学生のおもちゃの兵隊「楯の会」の制服を着用した幹部四名を同行し、計画どおり陸上自衛隊東部方面総監を脅迫し、集合させた自衛隊員に向けてバルコニーから演説したが、自衛隊員は激しくヤジを飛ばして応酬した。その直後、三島は同行した「楯の会」会長とともに古式にのっとり割腹自殺した。

私はたまたま理髪店で鏡に映るテレビの実況中継を見たが、制服を着た三島の演説は上空を飛行するヘリコプターの騒音で聞き取ることは出来なかった。その翌朝の新聞を見て、三島の演説の内容を知った。私はこの無謀としか思えない三島事件についてただ唖然とした。今でも、この事件を思い出すと、戦慄を覚え、忌まわしい時代の到来を憂慮している。

早春の農山村

桂川の河岸段丘の上段にはＪＲ中央線と甲州街道（国道二〇号線）が平行している。場所により、上段と下段には急峻な岸壁があるが、その地を整地して市道や農道に整備され、歩行者と自動車が通行することが出来る。ところが、連日の豪雨や台風に見舞われると、崩れた土砂が道にも堆積し、通行不能になる。農道はそれを利用する村人一同がシャベルで整地し、市道は大月市が整地用のブルトザーで整地し、土砂崩れを補強した。

私は自家用車で中央自動車道を利用すれば、大変便利だが、自損事故を恐れ、ゴールド運転免許証を返上した。そのため、自宅の最寄り駅でＪＲ中央線の快速電車に乗り、終点の高尾駅で乗り換え、神奈川県内の二つの駅を通過し、山梨県東部の最初の無人駅の梁川駅で下車する。妻が相続した実家でしばらく休憩し、野良着に着替え、地下足袋を履き、竹籠を背負って畑に行く。一週間おきの一泊二日の「通い」のため、野良仕事には自ずとハン

ディキャップがあることは当然である。

昨年春三月、梁川の畑に出掛け、石灰と有機肥料を撒き、耕転機を操作しながら、これから何を、何時、何処に種を撒き、苗を植えるか思案した。午前中から始め、昼になり、小椅子に座り、畑に持参したおにぎりをほおばり、早春の対岸の連山を眺めた。春の到来を実感した。

落葉樹は明るく薄緑に色づき始めていた。それと対照的に戦後の分収育林事業により造林された杉、黒松などの常緑針葉樹林は、下草刈り、間伐などの作業がほったらかしされているため、薄暗く密生した樹木林になり、樹木の葉は枯れることなく、ダークな橙色と濃緑色を呈し、落葉林の新鮮な若葉と奇妙にアシンメトリーな景観が観察された。だが、急峻な対岸の落葉樹林の若葉が爽やかに映え、春山が笑っているように見えた。

山笑ふ春三月

早春、私は畑に耕転機を操作して整地して疲労した。気を取り直し、かまぼこ型の畝（うね）に植えたイチゴを観察した。イチゴは地面をはって茎を伸ばす、その走り茎をランナーといい、越冬し、ランナーのそれぞれの節に根を下ろして発芽し、小さな複葉をつけた。これから白い花が咲いたら、その下に藁を敷き、大きな赤い実を収穫できたら、孫を畑に同行させ、そのイチゴの実を堪能させたいと願った。

梁川の瀬音爽やか山笑ふ
山笑ふ学童の鳴らす鼓笛隊
握り飯ほおばる我に山笑ふ

今後、キュウリ、ナス、ピーマンなどの苗を植えるために、レーキで畝を立てた。収穫した小ぶりの小松菜とほうれん草、畑小屋に保存したジャガイモと里芋を竹籠に背負い、夕やみ迫る農道をとぼとぼと歩いた。その時、これまで懸命に生きて来た我が人生の断片を回想したが、帰り道の農道で足と腰が痛み、切り株に座って、我が人生も帰り道だと自覚した。

今後、我が人生の帰り道をどのように過ごしたら良いのかと、いろいろと考えたが、満足する回答は得られず、やっとの思いで家にたどり着いた。家では遅い夕食を支度し、着替えた野良着を洗濯し、沸かした風呂につかり、遅い晩食を食べ、布団に寝込み、その日が終わった。

その翌日、枯れ葉を拾って、ドラム缶の近くに山のように積んだ。完全に乾いたら、晴れた無風の朝にドラム缶で燃やそうと考えた。さらに太い枯れ枝を拾い、畑小屋の直ぐ外に積んだ。野良仕事として草刈り、枯れ枝、落ち葉、枯れ枝の処理は必要不可欠だが、それには大層難儀する。重い草払い機を左肩に掛け、注意深く雑草を刈った。その雑草を拾い、乾燥させて、枯れ葉にする。積み重ねた雑草の表面は天日で乾いて枯れ草になるが、その下の雑草は水分を含んで生乾きである。

当地では、枯れ葉や落ち葉をドラム缶に入れて燃焼することが禁止されている。しかし穴を掘って埋めることは大変難儀だ。農業用の四輪トラクターがあれば、草刈りと枯れ草の処理は簡単だが、トラクターを所有するには新規登録に伴い、ナンバープレートをつける必要がある。隣の畑ではトラクターで草刈りと枯れ草を処理し、さっさと畑を後にする。その作業を見て、除草と枯れ草の処理に難儀する私は、何とも情けない思いがした。

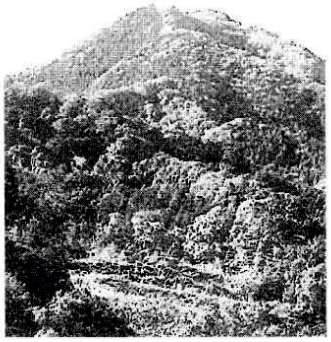
その一週間後、自宅近くのホームセンターで購入したナスとキュウリの苗三株、ピーマンの苗二株をリュックサックに背負い、梁川の家で竹籠に入れ替えて畑に運んだ。元肥を撒き、植えた苗の周りに有機肥料と米ぬかを撒いた。育苗と防風のために、苗の直ぐそばに枯れ枝を挿し、苗と枝を紐で緩めに縛った。さらに苗の周囲に枯れ枝を四角形の頂角に挿し、空っぽのビニール肥料袋の真ん中をハサミで横に切り、そのビニール袋を挿した枝にしっかりと囲った。この作業が終わり、空腹を感じ、小椅子に座り、畑に持参したおにぎりを食べ、お茶を飲み、青空にくっきりした対岸の連山を爽やかな気分で眺めた。

この連山の山頂の倉岳山は絶好のハイキングコースである。ハイカーは梁川駅で下車し、梁川大橋を渡り、急峻な月屋根沢沿いの登山道を登ると、倉岳山（標高九九〇m）に着く。

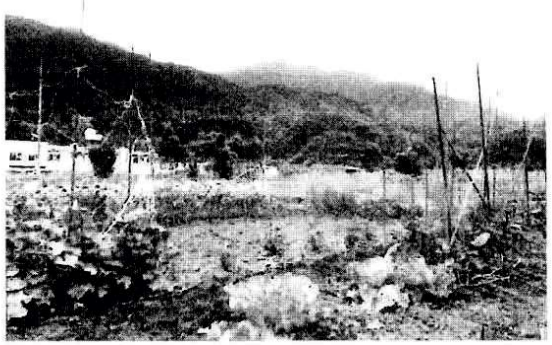
山頂から秀麗富士を眺望することが出来る。天候に恵まれると、望遠鏡で都心の高層ビルを遠望することも出来る。倉岳山から西へ尾根道を縦走すると、高畑山の山頂（九八二m）に着き、再び秀麗富士を眺望することが出来る。

ついに野菜作りを諦める

地球温暖化によるのか、昨年四月以降は異常気象をもろに経験した。



倉岳山



耕作した畑

四月は長雨に見舞われ、畑に出掛けることは出来なかった。やっと五月初旬に晴れ、しめたと思い、畑に出掛けた。ところが、畑は泥濘でいたが、雑草が茂っていたので、除草のために耕転機を操作した。耕転機を無理に方向転換しようとして、左足を踏ん張り、左膝に激痛を覚えた。跛行して歩行が困難になり、何とか耕転機を小屋に収納し、野良仕事を止め、畑の畦道（あぜみち）を歩き、畑の出入口に行こうとした。途中、深く掘った穴の表面は雑草に覆われ、足がずぶずぶと沈み、両膝が泥まみれになり、ほうほうの態で畑を後にした。

以後、いつも跛行し、左右の脚力も衰え、ますます鈍足となった。立ち居振る舞いの妨げとなり、日常生活では横着を決め込むようになった。板蒲鉾のように、木製の机にへばりつき、だらだらと座ってパソコンに向かって原稿を作成している姿は、我が身にほかならない。しかも記憶力と集中力が衰え、板蒲鉾の生活で物書きもまったく成果は上がらない。

長梅雨が小休止した晴れ間に、トマト、大玉と小玉のカボチャの苗、検査済みのジャガイモの種イモを植えた。すでに作った畝に敷いた黒色マルチに三〇m間隔に小穴を開け、その穴に薩摩芋の挿し穂（苗）を船底形に植えた。だが、雨が本格的に振り出したため、野良仕事を続けることは出来なくなった。長梅雨が明けると、すぐ真夏日になった。昨年の春、夏、秋の悪天候は初めての経験だった。

以前、真夏の日中に、汗をかきながら、野良仕事をしていると、めまい、けいれん、頭痛を覚えたことがある。ところが、水を飲んでも、発汗せず、直ぐ排尿して、軽い熱中症の症状を経験したことがある。今夏は熱中症を恐れて、畑に行くことを躊躇した。とまれ、「好きこそ者の上手なれ」と気楽に考え、野菜作りを始めたが、ついに「下手の横好き」に終わった。まことに慙愧に堪えない。「年寄りの冷や水」とはこのことか。

自宅と近くに畑のある自給農家（第二種兼業農家）であれば、大雨の晴れ間に、畑の様子を見ることができるであろう。真夏日に朝早く、まだ涼しい時間に野良仕事をして、暑くなる前にさっさと切り上げて自宅に戻る。遅い朝食を食べ、テレビを見て昼寝し、夕方に涼しくなれば、畑で野良仕事をする。要するに、田畑と自宅が近ければ、たとえ異常気象でも何とか野菜作りを続け、立派な収穫を得ることが出来るだろう。

老いた私が長時間電車に乗って畑に「通い」、しかし異常気象下では決定的なハンディキャップがあることは否めない。都市住民は土弄りに憧れ、退職後の高齢者、専業主婦、休日の専業サラリーマンもまた市民農園の二坪程の畑で自家消費用の野菜作りに生き甲斐を感じることであろう。もっとも、都市の市民農園の場合は、利用者が徒歩か、自転車で通える範囲にあることが必要な要

件であろう。

私のように週一回一泊二日、電車で「通い」の野良仕事は時間に余裕があれば、なんとか野菜作りが出来た。ところが、老いて体力と気力が衰えた我が身には過酷な野菜仕事となった、しかも記憶力や集中力もすでに衰え、『まんじ』の原稿作成もままならなくなった。

大阪府から島根県東部の農山村へ移住

村田廸雄は大阪教育大学教育学部教授を退職すると、島根県東部の農山村に移住し、当地の現状、自らの農作業の経験、村人からの聞き書きをもとに、『ムラは亡ぶ』（日本経済評論社、一九七八年）と同時に『イナカ再建運動――百姓の独立宣言』（日本経済評論社、七八年、島根大学講師の乗本吉郎と共著）を出版した。

一九〇六年、彼は大阪市船場の商家に生まれ、三五年に二九歳で東洋大学哲学科を卒業した。四二年に東北帝大法文学部（社会学専攻）に入学した。新明正道教授は八歳年下の彼を「ムラタ君、ムラタ君」と親しく呼び、四六年に卒業論文を提出し、四〇歳で卒業した。新明教授は「綜合社会学」を提唱していた。村田はすでに東洋大学で新明社会学とは対照的な高田保馬の「形式社会学」に感銘を受け、その方法を応用し、戦前の「国体明徴」を強い、（限りなき）「忠誠」に反発する大部な卒業論文を提出し、卒業した。

のちに、村田は「忠誠論」の標題で『中央公論』の懸賞論文に応募し、准当選した（五七年八月号）。それを読んだ新明教授は、「この論文は高田博士が読んだら、多分よろこばれることでしょうね」と感想を語ったという。（村田廸雄「師とある卒論の思い出――一人の異端者として――」『社会学研究・新明正道先生追悼特別号――新明社会学とその周辺』東北社会学研究会、一九八五年）。

新明教授はいわば職親として、村田が「異端」の弟子であることを承知して、大阪教育大学講師（当時、学芸大学）の教職を斡旋した。村田は教育社会学を担当し、学生にたいする教育の国家統制の強化、教育の画一化など官僚制化を批判し、学校教員による生徒にたいする学校教育の体制順応的な管理教育を告発した。彼は教育社会学の講義でも「異端者」として本領を発揮した。

大学退職後、直ちに島根県東部の安来市赤屋の農山村に移住し、廃校となった小学校の教員宿舎を修繕し、校庭の樹木を伐採し、農地に整地して農作業に励んだ（のちに。鳥取県西部の大山町香取に移住）。

村田は農作業に励みながら、過疎化のムラの現実を克明に観察し、ムラびとと懇意となり、聞き書きノートは七九冊に達した。農林中央金庫センターから委託を受けた農業組織研究会は、島根県東部に住む村田に農山村調査を再委託した。それに応じて、衝撃的な『ムラは亡

ぶ』を出版した。そこでは、村田はもっぱらムラの崩壊という現実を克明に記述しただけではない。それと同時に、高度成長経済政策に抗して「ムラの自治」を確立するために、如何にあるべきかと課題提起し、『イナカの再建運動――百姓の独立宣言――』を出版した。

ムラ崩壊過程の考察

第二次大戦後、日本農業は寄生地主制から自作農制へと農地改革が実施された。ところが、六一年の農業基本法は生産性の向上、生産の選択的拡大、中核的自立農家の育成などの農業経営の変革を提唱した。八〇年代に入って、農産物の過剰生産傾向や保護農業政策が批判され、従来の農業政策の転換を迫られるようになった。五〇年代後半以降の高度成長経済政策のもとで工業化のために財政投融資の拡大や低賃金の維持などを実施するとともに、社会問題として都市地域における人口集中による過密化、農山村地域における人口の減少による過疎化の地域問題が深刻化した。

農山村の過疎化過程では、農家の中・高校の新規学卒を契機に次三男・若い女子労働力の都市への大量流出、農業専従者の出稼ぎと農家世帯の兼業化、農外所得の増加のために第二種兼業農家が増大するとともに、農業労働力が高齢化し、後継者が欠如し、それにともない耕作放棄地の増大などを結果した。とくに京阪神、それらを含む近畿圏から僻遠の島根県や鳥取県の農山村は、高度成長経済期に労働力の供給源となり、農家の次三男を中心に人口は急激に減少し、深刻な過疎問題が発生した。村田は七八年の時点で「アト一〇～一五年にしてムラは亡ぶ」と予測し、その形相を「野馬の如く亡ぶ」と分析・記述した。

考古学研究によって明らかにされたことだが、後期旧石器時代にフランスのリヨン北部の狩猟民たちは、野生の馬の群を取りまき、乾いた草を集めて火に燃やした。もうもうたる煙や狩猟民の叫び声に驚いた野生の馬は先を争って丘に駆け上がり、逃げ場を失い、急峻な断崖に落ちて絶命した。村田は「ムラの亡びはその本質において、この『野馬の死』と同じであろう」と考察した（三頁）。

「野馬」とは、僻遠農山村で高度経済成長のために追い込まれたムラびとであり、「狩猟民」とは、中央都市の資本とそれを財政的に支援する国家財政、それに依存する地方都市、地方自治体と経済諸団体であろう。そのため、農山村の中・高卒者を臨時列車に乗せて、都市の工場や商店に集団就職する現象であろう。村田は島根県と鳥取県の農山村とそのムラびと、とくに老人の精神的苦悩、「生きる屍（しかばね）」となった精神の喪失状態とともに、無人化し、荒廃したゴースト・ビレッジ、「奥山」の状態を、村田はムラの第一次崩壊と見なした。

ムラは農村社会として機能を失う

村田は島根県の農山村の第一次崩壊が「いわば劇的な嵐と雷鳴を伴った崩壊」にたいして、第二次崩壊は「砂が崩れるように、音もなく進行する」と比喩的に分析した（一六頁）。もっとも、第二次崩壊は第一次崩壊の継続である。農家の長男がUターンしても、「帰農」するのではなく、郵便局、市町村、農協、商店、工場などで働き、精神的には離農者に過ぎない。そこで、「ムラが農村社会でなくなる」、「遺棄されたムラ（ブラク）を作り出した」と、村田は把握した。

ムラの第一次・第二次崩壊の共通点は、三反百姓、新来住者、本家の庇護のもとで新規創設された零細な分家からなる奥山のムラである。本格的な第二次崩壊は本家、本百姓、親方層にも見られ、里山、平地のムラである。とくにオヤが本百姓で「専業農家」であっても、長男のムスコが帰村することに確信を得られなければ、オヤは「百姓はオレたち一代限り」と決め、耕地の縮小を考えるようになる。

第三次崩壊は「没落はブラクの崩壊に決定的な役割をする」という。しかもブラクは葬式、火事、災害などの相互扶助というムラ特有の機能を果せず、バス、スクールバスも来なくなり、農道、水利の維持が出来なくなった。さらに猪、鹿、鼠、野鳥などの有害鳥獣の打撃を受ける。そのため、「ムラ（ブラク）がその精神的エートスを失ってバラバラに分解する最後の日となる」（二九頁）。こうして「ムラはやがて死ぬ」と断言した。

しかも、村田は「国家権力、農林行政による農業いじり、農民いじり――農民の六割切り捨ての農基法農政、地域の自然条件、伝統を無視した『近代化農法のおしつけ、減反、減産政策』の結果である」と告発し、「惨憺たる近代化の実験」であると酷評した。それは「ムラ・農民を外的に翻弄し、破壊したのみではなく、内的に健康な農民精神の破壊、その回復しえない荒廃をもたらした」と糾弾した（三六頁）。

百姓の独立宣言

すでに触れたように、村田は島根大学農学部講師の乗本吉郎とともに、『イナカ再建運動』を出版した。本来、イナカはムラであり、そこに住む人は百姓である。しかし、イナカ再建とは、ムラだけではなく、マチも考慮し、むしろ地方都市はイナカマチであって、なにも中央都市に追従する必要はない。中央都市の住民も、理想的には、イナカモノであるべきであり、農民はイナカ再建運動の外部に立つべきではなく、内発的にイナカ再建に向かうべきである。

本書で、ムラが亡びれば、マチも亡びるという前提に立ち、「都市敵視のかつての農本主義思想の轍を踏もうとするものではない」と強調した。しかし、村田は従来

の「農は国の本」という農本主義に固執したものではなく、ムラの農家が補助金などの外的な農業の保護政策に依存するよりも、農家自身が農業経営のあり方、内発的に生産や生活、自然と人間を志向する「ネオ農本主義」を提唱したものであろう。

農業経営学者の守田志郎は稲作を中心にして畑作と、乳牛か和牛、養鶏を飼育する農家の「複合的経営」を推奨した。守田の提唱に共鳴したのが、稲作地帯の東北農村の自立農家だった。ところが、彼は農村経済学者から一斉に「ネオ農本主義者」と批判された（山本鎮雄著『目耕録』第七章参照）。東北地方の稲作地帯とは異なり、村田が都市僻遠の島根県と鳥取県の農山村を参与観察し、「ネオ農本主義」を提唱したのは理解できないことではないと、私は思う。

村田は本書では出雲神話で有名な斐伊川の河川敷で開催され、多彩な「島根青年農業祭り」を丹念に紹介している。当県の農業青年千数百人が参加し、七七年八月六日午後から翌日の午前中にかけて「農業祭」を開催した。「ムラは俺達が守る／ムラをこわす奴は何びとであろうとようしゃはしない／俺達は二一世紀にも／百姓をしていくために」という「百姓宣言」をした。一八艘の斐伊川の筏下り、祭り太鼓と奉納神楽の実演などは農業青年の農魂を呼び覚まし、鼓舞したという（二九頁以下）。

さらに、本書でイナカ再建運動として島根県東部の安来市広瀬町（現在の地名）の地域協同組合研究委員会の構想と報告書を紹介している。広瀬町は九〇％が山林で、良質な木炭と和牛の産地だったが、木材の需要は輸入した安い外材に変わり、木材の産地として衰退した。また老人には肉牛の飼育にはあまりにも手間がかかり過ぎた。そこで、ムラびとは離農し、ムラ（ブラク）の機能は衰退し、農山村も荒廃した。農協組合員は従来の地域農協の運営と事業に疑問を懐き、農協自身も組合員と危機意識を共有し、生活研究委員会を発足させた。村田は「都市先進・農村後進」という農民観、後進地コンプレックスから解放されるべきであると、指摘した。ところが、日本の経済は「自律性を失い、すでに人工呼吸の段階に入っている」。それから脱却するには、「イナカ再建運動は、路線・方向・理念の変革運動である」（二一三頁）。

政府の農業政策とは異なり、「権力や補助金、あるいは札束にモノをいわせてやる運動ではない」。ただ、村田はイナカ再生運動には「思想や理念があるが、何をどうすればいいのか、具体的な事業についての指摘がまったくない」という批判に顧みず、イナカ再建運動は「いわば意識の変革運動である」と批判した。

最後に

明治大学農学部教授の小田切徳美は、農山村（とくに限界集落）の三つの空洞化として、①人の空洞化（社会

減少から自然減少へ）、②土地の空洞化（農村業の荒廃）、③むらの空洞化（集落機能の脆弱化）を指摘し、それらの空洞化の深層では「誇りの空洞化」とともに、農山村の「奥山」に止まらず、「里山や農山村全体にもひろがっている」と指摘した。すでに、村田が『ムラが亡ぶ』で強調したことは、農山村の農民の「誇りの空洞化」である（小田切徳美『農山村再生――「限界集落」問題を超えて――』、岩波ブックレット、二〇〇九年）。島根大学教授の保母武彦は農山村における内発的発展論を提示し（『内発的発展論と日本の農山村』、岩波書店、一九九六年）。宮本憲一は地域政策の目的として地域独自の経済の発展と同時に政治の民主化と社会の近代化、地域福祉の向上を提唱し、農山村の内発的発展論を定式化した。さらに、小田切徳美は「農山村の空洞化」と「強靭な農山村集落」の両義性が「農山村の実態」であると指摘し、各地の農山村の多様な「地域づくり」の事例を紹介している。都市住民の農山村への関心、国民の「田園回帰」の志向を指摘している（『農山村は消滅しない』、岩波新書、二〇一四年）。村田が「ムラは亡ぶ」と断言し、政治や経済・文化・生活が変化した今日、農山村は新たに変貌したのであろう。

すでに触れたように、私は退職後、妻が相続した山梨県東部の農地と実家へ出掛け、野菜作りを始めた。都市に生まれ、都市に暮らしてきた私には、野良仕事で、正直に応える野菜の生育の程度に感心した。しかも、絶えず変化する周辺の農山村の景観は、私にはまさに退職後の新鮮な人生経験だった。周囲の農地で働く人びと、農道で出会う人びとと会話したりして、大都市近郊の農山村の生活を多少は理解することが出来た。

当地では、年金で暮らす第二種兼業農家が大勢を占め、少子高齢化が顕著である。高齢者が一人で畑を耕し、日曜日か休日以外の週日には畑で青壮年をほとんど見かけない。畑を耕す高齢者が亡くなれば、その畑も耕作放棄地になるのであろうか。少子化の影響で小・中学校はすでに閉校した。国道沿いの雑貨や駄菓子を売る商店は閉店し、最近は酒屋も煙草屋も閉店し、農協支所とそのATMも閉鎖した。豆腐屋、煙草屋、鍛冶屋、醤油屋などの屋号だけは残っているが、家業として製造はしていないし、商店も営業していない。将来、山梨県東部のような都市近郊の農山村はどのような変貌になるのであろうか。昨年、私自身は季節外れの長梅雨、連日の真夏日と大雨、さらに大型台風に見舞われ、老いて体力と気力も衰えたので、野菜作りを止めた。記憶力と集中力と葛藤しながら、拙い体験談として『日耕録』最終章を執筆した。

［補遺］

私は「日耕録」を連載中、村田廸雄氏の『ムラは亡

ぶ』と『イナカ再建運動』について何度か書評というよりも感想文なるものを書こうと試みたが、私には難解でいつも挫折した。通勤可能な中央都市や地方都市の近郊の農山村は、都市僻遠の農山村と同じように、「ムラは亡びる」ことはないとしても、人、土地、村の「三つの空洞化」は確実に進行し、耕作放置地の増加と集落機能の衰退は確実である。

閉校した中学校の校庭は周囲の広い農地と比較し、土地面積は少しも遜色はない。村人や卒業生が親しむ校庭の数本の桜木を、生木を切り裂くようにして伐採された。校庭に砂利を敷き、四面のゲートボールのグラウンドが新設された。私は妻の実家と畑を行き来し、ゲートボールに興じる高齢者たちを見かける。午前と午後の二回、一〇人二組になって競技していたが、次第に常連のメンバーは参加せず、静かにゲームに興じていることを目にするようになった。ただ、そこには野菜作りに励む高齢者を見かけない。ゲートボールに興じる高齢者は畑では見かけない。高齢者がゲートボールの運動と野良仕事の作業を行いことは、さぞ過酷なのであろう。

私は記憶力も集中力も衰え、やっとの思いで拙文「目耕録最終章」を書き上げ、この世か、あの世への石碑ではなく、いわば「紙碑」として本誌に寄稿させて頂いた。

脱稿　二〇二〇年三月一〇日

楠公精神と報徳思想

浅野博文

一、革命の否定

髪を去り骨を削つて、簡潔を主とする。本誌に掲げてきた拙文は、そのことを意識しながらの、自らの国家観や歴史観であり、人生観であつた。

誠に十分に意を尽くし得ず、憾みを残す事は毎回であり、所詮は象を撫でる群盲の一人であることにすぎないのだが、国史（先哲偉人の精神）を調べ、国體を考える所から、妄説や俗説を否定する力が生み出されると言ふ事を示し、その最も重要とする点として、革命（王朝交替）を承認しない自らの立場を一貫して著すことに努めて来た。

二、忠孝一致の国柄

「孝子之情有終身喪、忠臣之心無革命時」とは江戸時代の尊皇家・蒲生君平先生の言葉であるが、古来より我が国の先哲偉人として称賛される人とは、その一生を通じて忠孝（道徳）を貫徹したかどうかにより決せられた。それは、家系図を遡れば各々の日本人が、皇室の分家であり、別家であるといふ認識に因んでゐる。

一体、祖国開闢以来その間代々の人名が今日まで明白に分かる《家系と血系（男系）》のは、皇室と記紀神話に登場する古代の国造や氏族（出雲大社の千家氏・丹後籠神社の海部氏・隠岐の玉若酢神社の億岐氏等）、皇室より臣籍降下した一部の家に限られる。

周知の如く大化改新以降、源氏の嫡流である足利幕府が滅びるまでの間、政治に於ける主導的立場にあつたのは、臣籍降下した源平橘と天智天皇の重臣・藤原鎌足公

翻つて、今日は生産年齢人口の減少により、外人の受け入れが一層加速して居り、それに伴い血系上の同化が進むことが避けられない状況下にある。

確かに『日本書紀』や『続日本紀』には、歴史上大陸から戦乱により故国を失つた外人を受け入れた先例を確認出来る（埼玉の高麗神社の祭神は朝鮮王族であり、今日も高麗氏の子孫が祭主をつとめてゐる）が、帰化人の血は有史以来僅かである。飽くまで先祖から続く日本民族の血に流れる本来的な性質と独自の教育の威力を以て、今日の日本人が構成されてゐるのは真実である。かつて、法医学の権威であつた古畑種基博士の血液の研究はそのことを科学的に裏付ける。今後の政治的コストを理由とした安易な同化は、日本人の本来的な性質を失はせる可能性が高いと言へやう。

世界各国に比し、我が国に於いて民族性は即ち国民性である事を思ふ時、『孝経』の「身体髪膚、之ヲ父母ニ受ク、敢テ毀傷セザルハ、孝ノ始メナリ」とある言葉は極めて深刻である。その身を修め、家を斉え（ととの）、国を治め、天下を平らかにせん。古代より伝統とされ、近世に道徳の第一とされた「修身斉家治国平天下」が、血縁上から来る我が国の一家に於ける子の親に対する孝行が、本家である皇室への忠義に連なると言ふ忠孝一致の国柄と結びつき、日本人の祖国愛を強固なものとし、現代日本の

を始祖とする藤家であつた。

官撰の六国史や新撰姓氏録、そして尊卑分脈等を播けば、揺籃期から成熟期を迎へた律令国家体制下に於いて、かつての古代氏族も源平藤橘の諸家と姻戚を結んだり、養子縁組を経て、公卿として宮中に奉仕した事実を確認することが出来る。

しかし、律令体制の崩壊と武士の世の到来が導いた下克上の乱世は、特に応仁の大乱による劫火が、京の都の邸宅を焼き払ひ、多くの公卿の収入源を失はせた。それにより彼らは縁故を頼つて地方へ広がつて行き、その土地の有力者と直接契りを籠む事となつた。中央から地方へ、貴種の血脈は広がつて行つたのである。

更に、戦乱の治まつた江戸時代になると文治主義の本、「修身斉家治国平天下」（『大学』）を善とし、道徳上から血系よりも家系の存続が一層重視された。早くに絶えた直系に代はり、紀州や水戸と言つた遠戚が宗家の跡をついで家系を存続させた徳川将軍家の歴史とは、それを象徴して居ると言へるが、以上の様に観て来ると、日本人が誰でも立派な人の後裔だと言ひ得る素質がある事は、最早明らかである。

日本人全体が四海同胞にして、一切が皇室の赤子であり分家であると言つても何ら問題は無いのである。

文明社会の土台とされる明治近代国家を誕生させたことは、多くの知識人の認める所である。東洋で唯一の「富国強兵・殖産興業」の成就も、詮ずる所、この独自の国柄に立脚してゐることは真実であらう。

三、大日本興隆の根源

枝葉である日本人は家系図を遡れば、皇室といふ幹に連なつてゐることが分り、更に遡れば、皇祖神であられる天照大神に行き着く。古来より伊勢の神宮にお祭りしてゐる天照大神が日本人の総氏神と称せられる所以である。

故に「敬神崇祖・尊皇愛国」の精神とは、ごく自然な発露であり、日本及び日本人が興る上で、依つて立つべき道であるといふ理解は、歴史的事実に鑑みても穏当と言へる。

しかし、この尊い本質を理解しやうとせずに妄説を真実と信じてゐる者が一方で存在する。一例として同和を叫び、同じ日本人でありながら、徒に特定の地域の部落解放を吹聴する者（個人的見解としてマルキストと同義）がそれであらう。

それは彼らが正義と信ずる人権の尊重とは程遠く、却つて個人の尊厳を貶める。その金科玉条とする階級闘争史観は根拠に乏しい《西洋やシナの支配と搾取の図式は機会の不平等に依拠したものであり、我が国に於ける機会の平等は、高い識字率に観られる様に外国に比して高い水準にあつた》。それは、単に結果の不平等から、祖国に対する反抗反発の心を植え付け、人を革命へと煽動するものである。

民族国家の歴史に於いて、重要なのは本質であり大局である。細部や枝葉を斟酌すれば、有象無象の個人的煩悶は落ち着く所が無い。

さうであるが故に、我が国最古の史書である『古事記』や『日本書紀』も根幹をなす史実の大局に関しては事実の直叙に徹しながらも、一方で繁昌と閑寂といふ世の摂理を見失ふこと無く、感謝と光栄の中での回想に帰着したのである。

その伝統的思想が自ずと血となり肉となり、我が国の先哲偉人とは、家格や職掌に関係なく輩出された。各々が自らの生きる場所で誠実に勤めて来た結果である。

足軽から太閤になり戦国乱世を治め、太平の世へ導く先鞭をつけた豊太閤（豊臣秀吉）の立身出世は、後世の者への心強い先達となつた。

或ひは、一百姓でありながら、自然万物との対峙により宇宙の原理と、その中にて構成されてゐる人間社会の

摂理を感得し、江戸幕藩体制の限界の中にあつて、六百余村の財政を復興させるだけに止まらず、道徳と経済の一致を国家の正しい姿である事を証明した二宮尊徳先生の一生は、百代の国師として今も信奉される。

そして、明治近代国家建設への道を開拓した、若き維新の群像の希望と情熱は、後代の日本人をして思慕憧憬の対象となつたのである。

昔日より、一度限りの人生の貴さと、不屈の精神に対する感激は、常に精神と富の向上を求める人間の努力に対し、希望と信頼を与へ、逆境を生き抜く日本人の一生を大いに励まし、大いに鼓舞して来たのである。

人の万物の霊長たる所以は、その徳性にあるが、その徳性の最たるものとは、「孝は百行の本」にあると信ずる。歴史の第一歩は、親子の間にある。愛情も礼儀もすべて親子に始まる。それは一切人倫の基本であり、先哲偉人に孝子でない人はゐない。

加へて、昔から日本人が一旦国に緩急あれば、家を捨て、皇室への忠義に徹して来たのは、遡れば一家の親に対する孝が、賜苗の御親である皇室（天皇は氏姓を持たない）への忠に帰着するといふ事実、即ち君民の血の繋がりを尊厳としたからであつた。

くりかへし、「忠孝一本」とは我が国特有の国柄である。それは君民一致の言葉と共に、ここに祖国弥栄の原動力が表れてゐるのであり、それは、神武天皇建国以来、皇位の男系継承によりて今日まで担保されて来たのである。革命（王朝交替）を否定する根拠とは、この一点に集約される。

儒教の根本経典である四書五経の一つである『春秋』の注釈書『春秋左氏伝』を典拠とした「大義には親を滅す」の言葉も、父として不忠の子を殺すは理である事を説くもので、父が不忠であつても、子として殺すと言ふ道理は無い事を道破してゐるのであり、罪としての不孝は絶対に免れないと言ふことである。「忠臣は孝子の門に出づ」とは古人の至言である。

『神皇正統記』が、天皇方と上皇方とで分かれ、源氏と平氏も親子兄弟相対し、上下共々干戈を交へた揚句、戦後の処分で、勅命とは言へ、源義朝が父の首を斬つた保元の乱を以て、我が国は乱世に入つたと喝破したのは、忠孝の道の衰微が一国の存亡を決するとの確信からであつた。

忠孝は、歴史の風雪（大化改新・建武中興・明治維新）に耐え、学問と実践を通した慣習が伝統となり、伝統が慣習を裏打ちし、流行に右顧左眄しない、興国の根幹を成す不易の思想となつた。今日、国家社会の不安や動揺が尽きないのは、歴史の中に生き続ける忠孝の道が消えかかつてゐるから、日本人の根本精神への感謝と光栄を見失つてゐるから、心の煩悶が絶えないのである。

特に、明治維新から敗戦に至るまで振り返れば明らかである。当時の、日本の周囲を取り巻く状況は、他民族の人権や尊厳を認めない白人国家が侵略の機会を狙つてゐた。他方、国内に於いても海外通商の失敗で大量の金が流出し、経済も破たん寸前であつた。

しかし、その様な苦しい状況にあつても、国際法を遵守し、自らの立場を受け入れ、学を修め、業を習ひ、日清日露の二大戦役に勝利を収め、近代国家としての独立を守つたのである。無論、国民には年金や保険などの国家による十分な社会保障制度も無い中での、言はば、祖国愛による力、詰まる所、忠孝一致への信仰の威力を以て、国際社会に於ける独立自尊を達成した事例は日本以外に無い。

当時に於いては、各々日本人は立場の違ひはあつたにせよ、皆等しく陛下の赤子として拘泥せず、唯国家の独立を守り、国力を充実させるといふ気概だけであつた。だからこそ、明治以来の「富国強兵・殖産興業」を達成し、余力が生まれた時、「恭シミテ宝位ニ臨ミ、元兄（国民）ヲ鎮ムベシ…然ル後六合ヲ兼ネテ都ヲ開キ、八紘（天下）ヲ掩ヒテ宇ト為サンコト、マタヨカラズヤ」（『日本書紀』）の理想に帰り、それを敷衍して世界平和（八紘為宇）へ向かつたのは、極自然の流れであつた。

敗戦後の東京裁判の判決結果や処刑された東條大将以下の七名の遺骨を遺族に引き渡さず、その灰を海中に棄て、その遺書も焼き捨てた行為からも分かる様に、欧米こそ正に真の侵略国家だつたのである。

今日、占領政策により忠孝の道を第一に説く『教育勅語』は等閑とせられてゐるが、実に大日本興隆の根源を知る時、その復活を何よりも切望する次第である。

四、真の文明国家

この世の中で、人間を主体とし、人間を最尊とする西洋的理性を象徴した「我思ふ故に我あり」といふデカルトの言葉を想起する時、人の歴史が、出来事の時間的推移に止まらない事は言ふまでもない。人間が、変化推移の自然科学的な時間軸の中より、自らの意志と努力を以て精神と富の充実を図つて来たことは真実である。

我が国の歴史もまた、日本民族としての自覚に始まり（神武天皇建国）、君民一致と忠孝一致の醇風美俗を以て開展して来たのは疑ひ様の無い真実である。その歴史に於ける常住性を実現し、不易不滅の精神が幾千年の歴史を一貫してゐるものとは、古今東西の中で日本の歴史以

外ない。

例へば、洋の東西を代表する思想を省みた時、それを至上とする意味に於いては、どうしても道徳的矛盾点が目を刺す。

日本の文化財には仏教関係のものが多いことからも、仏教が我が国の政治経済教育文化にもたらした恩恵は計り知れないが、仏教とは親を捨て、家族を捨て、道を求める事（出家）を容認する。

儒教の根本経典である四書五経の一つである『孟子』が、「民ヲ重シト為ス、社稷之ニ次グ、君ヲ軽シト為ス」として、人民全体の都合によつては君といふものは何時換えても差し支へないとする点も見逃してはならない。事実孔子は放浪を繰り返して主君を変えて来たし、漢王朝の胤とはいへ、既に一民間人として野にあつた仁徳の士・劉備玄徳が、蜀王の初代皇帝として即位した事実は、仁徳とは正反対の野心家・革命家の行為と言へる。

或ひは、西洋民主主義思想は、ユダヤ国王ピラトの、法を曲げてでも大衆（ユダヤ民衆）の喝采こそが正義であるとし、罪の無いイエス・キリストを磔刑に処した冤罪事件に端緒がある。正しいのは正義（公論）そのものであり、只多数決にあるのではないことは、五箇条の御誓文にも「広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ」と示されてゐる。

現に、偉大なる民族遺産として子孫に継承せられるべき寺も孔子廟もインドやシナには、ごく限られた場所にしかなく、民主主義最大の欠点は、恩を忘れ、おのれの権利ばかりを主張する部分にある。実に、思想は風俗となつて現れ、風俗は思想を象徴するのである。

踵を返して日本とは、神道（自らの先祖を神として祭る・祖先崇拝）を立国の基盤とし、儒仏や西洋思想を単に受容するに止まらず、それを換骨奪胎して、それ以上のものを現出して来た。

延喜式祝詞（大祓詞）には、「高天原ニ神留リ坐ス 皇親神漏岐神漏美ノ命以チテ、八百萬神等ヲ神集へニ集へ賜ヒ、神議リニ議リ賜ヒテ、我ガ皇御孫命ハ、豊葦原水穂国ヲ、安国ト平ケク知ロシ食セト、事依ザシマツリキ」とある様に、我が国では古来より、天津神・国津神（天神地祇）をはじめ八百万神（蕃神を含む）が祭られ祈られ、その目的とは、神々は全て君国の根本を守護し給ふものとする所にあつた。

我が国の父祖は、外来の儒教や仏教やキリスト教を受け容れると同時に、皆その目的の本、各々の教義が理想とする姿を、日の本の地にて現出して来たのであり、その最たる成果こそ、唯一系の天皇が建国以来万世に亘つて日本国を統治して居る姿である。

「君臨すれども統治せず」とは、既に日没した昔時の

大英帝国の傀儡王政を表した言葉であるが、日出る大日本帝国に於いては、祭政一致を基本とした古代の姿からも伺へる様に、天皇親政が本来の姿ではあるが、律令体制以降、非常時を除いては、摂関政治や幕府政治、そして議会政治と言つた政体を裁可し、その執政者を任命せられたのである。今日の我が国の天皇は、「統治すれども親裁せず」と形容してよい。

従つて、封建社会・革命・近代社会といふ流れが進化でないことは、フランスやソ連の革命の実態が流血の惨状以外無かつた点や、現在の中共や北朝鮮等の革命国家の現状を観れば、それが正しい解釈でないことが直ぐ理解出来る。

昔時の二宮尊徳先生は、封建社会の貧しい農民社会を発展させる道を「勤・倹・譲」と説き、実践し、成功を収められた。翻つて「怠・奢・奪」を実践し、滅亡した代表が、社会主義国家ソ連邦と言へる。

畢竟、革命とは伝統の切断であり、人間を革命思想に進ませることは、人間の尊厳を認めない行為なのである。流血や伝統文化の断絶破壊とは、文明国家が最も忌むべき姿である。日本とは、革命の無い、真の文明国家として道徳的に正しい国であり、その正しい道徳の基準を示したものこそ神道に他ならないのである。

五、楠公精神と報徳思想　上

フランス革命とマルキシズムは、現代の世界を惑乱し、人々をして生きながら地獄に落とした罪悪の根源であり、当然そこに道徳はない。共通するのは、道徳を契約と理解し、社会といふものを契約として理解する所から生まれ出たものである。

ルソーの『民約論』には「人間は自由なものとして生まれた。しかし、いたる所で鎖に繋がれてゐる」とある。家族でさへ、子供が父親の結び付けられてゐるのは、自分達を保存するのに父親を必要とする間だけであつて、その後は互ひに独立だと言つてゐる。故に、「家族そのものも、約束によつて維持されてゐる」とする。

これは、我が国の血族関係の中心に位置せられる天皇と国民の関係からは考えられないものである。今日の日本社会とは、ルソーの言葉の体現であり、それが民主主義や個人主義の実態である。

以前の拙稿に於いて、所謂日本国憲法と称されるものを講和条約の性質を有する占領基本法と位置付けた上で、帝国憲法（明治憲法）が今も生きてゐる事を述べた。加へて、それは飽くまで暫定的なものでありながらも、それを有効とする根拠が、天壌無窮の神勅（即ち「国體」であり御歴代天皇は、その下に御在りになる）と三種の

神器と共に即位せられた、皇位の男系男子継承の一点に存し、天皇の御在位により、現今の日本社会の秩序が何とか維持出来てゐる事も論じた。

果して、今日の日本が存在する上での土台となつてゐる忠孝一致・忠君愛国と言つた精神を省みる時、それと相反する思想的潮流と社会制度が、国の将来の行き着く所として、伝統文化の破壊断絶、即ち革命（王朝交代）であることは最早疑ひなく、今その方向に確実に進んでゐる。

ネットがインフラとなつた現代社会にあつては、バーチャルなネットワークを流言飛語（俗論）の舞台とし、憶測が憶測を呼ぶ悪循環が後を絶たないが、遡れば日本古代の精神生活に於いては讖緯説、動乱の中世には、末法思想や白王説と言つた根拠に乏しい悲観論や運命論が本気で信じられてゐた。親鸞や日蓮の様な優れた高僧であつてもその俗論を破ることが出来なかつた点からも、その心の動揺は深刻で、戦乱の世を招き、社会を混乱に向はせた。

特に、文化の基礎である国語の正しい形までも忘失せられ、記紀に記される我が国の尊き原理に対する認識は弊履の如き扱ひで、個人は私利私欲に迷ふ世の中が中世日本の実態であつた。「兵は神速を尊ぶ」とは古人の言であるが、中世戦乱の世の極端な崩し字文書からも、風流とは無縁、簡素で冷淡、事務的な戦略文字にして、武士の世の非情さが感じられてならない。

しかし、日本歴史は動乱の中世にあつても「復古と革新」が正常に機能した。皇国日本の原理の持続が非常に困難とされた中、彼の建武中興とは、鎌倉の北条執権体制から天皇親政の古に復し、本来の姿を以て統一せられたのである。

大楠公（楠木正成）の純忠至誠の奉公とは、日本を正常な位置に帰させた上で、忘れてはならない国史上の画期であつた。

「好事魔多し」と言ふが、これが数年ならずして崩壊したのは、足利高氏（祖父である足利家時は、三代後の子孫に天下を取らせよ、と八幡大菩薩に祈願し、自害してゐる）を筆頭に、馳せ参じた武士の多くが、我が国の万世一系の歴史を理解しやうとせず、国威盛んな時代の良風美俗を思ふことなく、名利私欲などの個人原理に起つてゐたことに原因したからである。

『太平記』には「昨日迄金剛山に北条軍と闘つた楠軍は田園を耕し、或は商工業に活躍し、或は領民の戦禍に苦んで貢米の不納を知るや之れを救済して摂・河・泉・三州は楠正成を父と仰ぎ、さながら一身同体である」と、戦略の英将のみにあらずして、治国の英主としても称賛

してゐる。

そして、二宮尊徳先生が分度を重んじたのも、「天下の命令があれば身を捨て家を捨て、百萬の敵たりとも一歩もひかず、これに当つて奮戦をつくし、忠孝の大義を踏まんためではないか」（『報徳記』）との一点に他ならなかつた。祖国の痩せ地を転じて沃土となし、衰貧転じて富栄をなさんとしたのも、楠公と同様に、一旦緩急あらば、忠孝の大義を踏まんためであつた。

建武中興の枝葉を批評する史論書には、『梅松論』や『難太平記』等もあるが、我が国に於いて、臣下（分家）の身でありながら自らの都合により君主（本家）を放伐するといふ皇国の根幹を無視した道理は通らないのである。事実、純忠一貫の人にして何等私心無く、忠義の規範として、楠木正成・正行父子は最期まで後醍醐天皇の建武中興に殉じた。

根も幹も枝も残らず朽ち果てし
楠の香りの高くもあるかな

源平藤橘の橘氏の流れである楠氏の家系は、建武中興の蹉跌と共にに絶えたのであつたが、国家の柱石として、或ひは忠孝の道を体現した代表的日本人として、特に後世の憂国の士（特に江戸時代、草莽の学者として幕志の志士を鼓舞することになつた山崎闇斎先生の崎門学派はその代表）は全て大楠公を崇拝した。乃木大将の詠まれた歌の如く、皇国日本はその美風が生き続ける限り、安泰であることを皆確信したのであつた。

六、楠公精神と報徳思想　下

非は利に勝つこと能はず、利は法に勝つこと能はず、法は権に勝つこと能はず、権は天に勝つこと能はず、天は明かにして私なし。有名な「非利法権天」の旗文は、大楠公の精神が圧縮せられたものである。

その本義とは、人間社会に於いては、知力にても、弁舌にでも、威権にても通らば押し通されることも、天だけはさうはいかないと言ふことである。

そして、この「非利法権天」に感激し、当時の政策上（徳川幕府は、幕府政治の先達である源氏や足利氏の後継を自任してゐた）から楠公を評価していなかつた幕吏を前にして、この道理を堂々と説いた人物こそ、報徳二宮金次郎先生であつた。

即ち、世間の強欲者が、この道理を知らずに際限なく身代の拡大を欲し、奸智を振ひ腕を振ふと雖も、必ず手違ひが起りて進むこと能はず。また、権謀威力を頼んで専ら利を計るも、同じく失敗のみありて志を遂ぐること

能はざる。畢竟、皆天あるが故であることを指摘する。

加へて、止まる所を知れとは『大学』の教へである。且つ天は明らかにして私無しと言ふ。私無ければ誠である。『中庸』にも誠なれば明らかであるとし、明らかなれば誠であると教へる。

誠は天の道である。これを誠にするは人の成すべき道である。これを誠にするとは私を去るを言ふので、即ち己に克つと言ふことである。大楠公の精神に対する二宮先生の解釈である。事実、二宮尊徳先生は、六百余の農村を復興させ、私財は全く残さなかつた。大楠公同様に「身を殺して仁を成し」たのである。

尊徳先生の功業を想起する時、小生は先づ第一に、大楠公の忠孝と重ね合はせる。その忠孝とは、当然ながら万世一系の皇室への尊崇に帰着するのだが、詰まる所、日本精神の純粋性を求め、その本源の姿に帰らうとする精神の現れでもあつた。

天地と君と親とのめぐみにて
　身をやすらはん徳を報えや
天地の神と皇との恵みにて
　世をやすくふる徳に報えや

昔時の日本人が、明治維新を回顧する時、建武中興から大化改新に遡り、更には、神武天皇創業から天照大神の神勅（天壌無窮の神勅）にまで思ひを致したのは何故か、それは、日本人が一貫した国史の流れの中で、日本人としての自らの存在を認識し、自らの生きる場所にて勤め、次の世代に繋ぐと言ふ、極めて平凡な答えを確認することに如くはなかつたからであらう。

改めて、その様に思へてならないし、感謝と光栄の中、先哲の一生に習ひ、歴史の正しい流れに沿つて生き、そして死にたいと思ふ。それは、自らの変はることのない素直な感情である。

参考文献
平泉澄博士著　『少年日本史』　皇學館大學出版部
『山　彦』　勉誠出版
谷省吾著　『神道原論』　皇學館大學出版部
杉浦重剛著・所功解説　『昭和天皇の学ばれた教育勅語』　勉誠出版
三戸岡道夫著　『二宮金次郎の一生』　栄光出版社

内田の国の権現物語1

横山正義

私の住む集落の鎮守は矢多神社で、氏子は約八十軒ほどです。

由緒

創建不明、慶安元年、戊子年再建、宝永元申年十二月、元文二巳年八月、宝暦六子年九月、寛政四子年九月、文化十二亥九月。創建不明。

造営の棟札『若一王子権現』と称す。

矢多神社の矢は、矢田という山に囲まれた細い田の水源が神社の裏手にありますので地名に由来します。

若一王子権現とはなにか。熊野信仰の話として『神道集』があります。

役（えん）の行者・婆羅門僧正この二人は熊野権現の本地を信仰されました。

熊野には十二所権現があります。最初の三所権現が証誠権現（本宮）本地は阿弥陀如来、中の御前（新宮、熊野速玉神社）は薬師如来、西の御前（熊野那智神社）は観音です。つぎに五所王子とは最初に若一王子（熊野王子の第一）で十一面観音です。

当地で十一面観音を祀るのは大蔵寺です。矢多神社より北に約五百メートル北にあります。

大蔵寺の十一面観音が人間救済のために仮に矢多神社の神の姿をとってこの世に現れる垂迹です。

神道集の著者は誰であったか。何時の話であろうか。時代は南北朝、後光厳院の文和・延文年間（一三五二～一三六〇）。著者は安居院であったという記録があるが、安居院何世であったか記録は不明という。

鎌倉時代のはじめ、当地、内田は青蓮院の荘園でした。慈円の下、安居院家聖覚では。という説があります。

矢多神社のある場所を権現原とか補陀落浄土とか住民は云っています。集落の中にお堂があり、昭和二十年よ

り以前「六部」という修験者が宿泊し、若一王子権現・矢多神社を参拝にきました。「六部」によって熊野権現の話しは伝えられたのでしょう。

「六部」とは国史大辞典によれば（六十六部廻国聖のこと。日本回国大乗妙典六十六部経聖といい、江戸時代に六十六部、六部とも省略された。『法華経』を六十六部書き写し、全国を巡って六十六ヶ所の霊者霊仏に一部づつ納経する廻国の修行者を指す。

「法華経」書写の作善と廻国の苦行とによって、滅罪の功徳を沢山得ようとした。）

当地の矢多神社の東、約五十メートルの所に経塚があります。

戦後（一九四五以降）、住宅の不足から、お堂に一般人が住居するようになりました。昭和の終わりを告げるころ、お堂は倒壊して取り払われてしまいました。

『神道集』より

一、インドの昔話

昔々大昔、インドの摩カ陀国に六万の国があり、国王は善財王と云いました。王は大きな王宮に住んでいて、王には千人の妃がいました。

妃は一人ずつ都をもって、住んでいました。一番西に住んでいる妃は源中将の娘で五衰殿と悪く言われ、一、衣装が垢で汚れ、二、頭上の花がしおれ、三、体は臭く、汚れ、四、腋の下から汗を出し悪臭があり、五、暗い表情だと言われていました。

千人の妃の中で、一番醜い女性で、大王は眼中に無く、通うことはありませんでした。

しかし、醜い妃は観音を祀って、祈りました。観音のご利益はあらたかで、光り輝く、大変美人でやさしい女性に変身しました。噂を聞きつけた大王は西の妃のところに通うようになり、すると妃は妊娠しました。これに九百九十九人の妃はやきもちを焼き、いやがらせを相談しました。

①占い師に子供が悪い子であることを妃達は吹き込みました。そして王に占い師に生まれてくる子供がどんな子か、占って貰う事を薦めました。

しかし、王はとりあうことはありませんでした。失敗した妃達は次の手を考えました。

②背の高い、年寄りを九百九十九人集め足が九つ、顔が八つあり鬼に扮装させ、体を五色に塗り、太鼓をもって西の女御の宮のなかに毎晩太鼓をたたいて、嫌がらせをしました。

王はしょうがない好きにするが良いとあきらめてしまいました。

妃達は喜び、殺し屋を雇い、妊娠した妃を殺すことを依頼しました。

殺し屋は八日をかけて処刑される鬼谷山の鬼持ガ谷へ妊娠した西の妃を連れて行きました。道は茨の道で、

妃は血みどろになり、殺し屋、妃はたどりつきました。

妃は観音経を読むと産気づき、子供が五カ月で生まれてしまいました。

そして妃は雇われた殺し屋によって、一刀のもと首を落とされ、殺害されてしまいました。この妃は後に、善法女御になり、観音になり、熊野那智大社に祀られます。

子供は首の無い死んだ母の乳房を吸っていました。すると見かねた十二頭の虎たちがどこからか出て来て、赤子を守護し始めました。猛獣の虎がなぜ守護するのか、それは観音の守護です。王子がただのお方ではない、後光がさしていたのです。この王子こそ、後の若一王子なのです。

二、喜見上人の話

三十里ほど離れた怨商山（おんしょうざん）という山奥に喜見上人という聖が住んでいました。上人はこの山に籠もって法華経を読誦し、仏道を修行していたのです。ある時、山の中で上人が蜘蛛を見ていると、糸で字を表し、子供のことを知らされ、王子のことを知るところとなりました。喜見上人は後の証誠殿（本宮）の阿弥陀仏になる人です。

「鬼街ガ谷に善財王の王子が十二頭の虎に育てられている。引き取って大王にさしあげよ」。上人が行ってみると、確かに、虎が子供を育てていました。上人は子供をひきとり、子供を三年育て、大王に子供をお返し、経過を話すと大王は大変感激しました。

この恐ろしい女たちの顔を二度と見たくないと、黄金の車に大王（善財王）、上人（喜見）、子（後の若一王子）等と三人で乗り、倉庫から取り出した五本の剣を取り出し落ちたところに行こうと、決めました。

剣は日本に飛んできて、第一の剣は紀伊の国、第二の剣は筑紫の彦山、第三の剣は陸奥の中宮山、第四ノ剣は淡路の国の和、第五は伯耆の大山にささりました。

三、千代包（ちよかね）

熊野権現というのは、神が八尺の熊の姿になって新宮市の東方に神となって現れたのに起因するのです。

千代包は猟師です。猪を追っているとき、人跡が途絶えて通行できずに難儀していると、どこからか、八咫烏が表れ案内してくれました。八咫烏の跡を追うと、烏は黒から黄金の色に変化しました。識者に経験を話すとそれは金色の日輪だと教えられました。

その烏について曾那恵（そなえ）と言うところまで来ると、空に光るものが見えました。自分の命を狙われていると感じ、とっさに弓を構えた。「私は今まで、なぞの物体に不覚をとったことはない。」光る物体は、「私は三枚の鏡である。私は熊野の帝王と万人を守る神だ。」と言いました。

「猟師は恐れ入りました。まことに失礼なことをしまし

た。お詫びのしるしに鏡の数と同じ三軒の社（やしろ）を創り提供します」

仏が神となって人々を救いましたので、人々は楽しく、村は繁栄しました。

社は本宮、熊野大社、速玉神社で熊野三山です。

四、権現信仰

三所権現のうち、証誠殿（本宮・熊野座神社）、本字は阿弥陀仏で喜見上人です。西の宮（結宮・熊野那智大社）は本字、観音で五衰殿の善法女御です。中の宮（新宮・熊野速玉神社）というのは善財王の御子が若一王子です。証誠殿の左に一所建立され、善財王のことです。証誠殿の左に一所建立され、善財王の御子が若一王子です。

諸国に疫病が大流行しました。天皇は驚いて日本に三千七百四十二所鎮守の神をまつりました。

今度、火の雨になる。命の欲しいと思う者は、岩屋を作って、そこに篭って助かるが良い。当地でも矢多神社のある、権現原の東に約百メートルに前方後円墳があります。

インドで花開いた仏教が胎蔵界・金剛会を経て、日本に上陸し、神となり、民衆を救うのです。

胎蔵界は万物を宿し育てる仏の大慈悲を表し、金剛界は、あらゆる生命を悟りに導くホトケの叡智の徳をあらわすとされ、宇宙はこの胎蔵・金剛の両界曼荼羅が織り合わさって成り立っている。

『大須賀町史』より

三熊野神社　西大渕（東本町）五六三

（九月乃九日乃夜大神平仮宮興里正殿爾鎮里令座奉支。又五柱の御伴神等波若一王子、千勝、布留楠、若宮、今駒止五所爾鎮める奉止）

矢多神社のご神体は北にある水源です。古来、農耕を守護する水分神（みくまりかみ）でした。

内田は青蓮院の荘園で、座主が慈円から朝仁親王（後醍醐天皇御子）に代わりました。内田氏が承久の乱に鎌倉方につき戦う中、後醍醐天皇は隠岐の島に亡命しました。それに伴って、内田は園城寺の荘園になりました。この頃、矢多神社が創建したのではないかだろうか。園城寺は自然界で修業し、験を得て、民衆の治病、除災などおこない人々を修験者と言い統括いたしました。

修験者はお日待ち、月待ち、荒神、庚申などの祭りの導師、加持祈祷、調伏、憑き物落としなどを行いました。修験者を地元の人達は「六部」と呼んでいました。

懺悔懺悔　六根清浄　大峰八大金剛童子

刑部大日大竜権現　帰命頂礼　南無浅間大菩薩

夏祭りに唱える文言で『六部』の伝えたものです。菊川市無形文化財承認第一号です。

『参考文献』

内田のさと　郷土史　昭和五十年九月十五日発行

静岡県小笠郡菊川町内田郷土誌編纂委員会

神道集　訳者　貴志正造　東洋文庫94　平凡社

一九六七・七・一〇発行

大須賀町誌　編纂　大須賀町誌編纂委員会

発行　大須賀町

国史大辞典　第十四巻

編纂　国史大辞典編集委員会

発行者　吉川圭三

発行所　吉川弘文館

四十二代文武天皇の御世、藤原鎌足の孫娘（父藤原不比等）は幼少の頃より熊野三社を深くご信仰になられ、一日として礼拝を怠ったことはなかった。

姫が文武天皇の皇居になられてご懐妊の時、「安産にて皇子が誕生せば、東に三つのお社を建て、日夜お敬い申し上げる」と神前に誓われた。丹精こめた皇后の願望には天道神明も感応したのか、皇子が安らかにご誕生あらせられた。（この皇子は後に聖武天皇となる）ご願が叶ったからには、一日も早く東方の国に三つの社を建てて勧請申しあげなければと心をくだいてその土地を物色された。

幸いにも当時間違いなく貢物を納めて良く治まった平和な遠江国があることを知り、天皇はこの国こそ社を建てて勧請できる国だとお考えになった。

大宝元年（七〇一）八月四日にご正体幣帛と補佐五件の神が船で、本町雨垂に到着しました。九月九日に本殿、幣殿、拝殿、鳥居が完成したので、お移し申しあげました。当地から三里（十二キロメートル）東の高松の地に熊野速玉神社（御前崎市高松神社）即ち新宮とし、北に小笠山を熊野那智神社（現掛川市土方小笠神社）とした。

修験者が小笠神社から高松神社に参拝する途中の内田に、若一王子を祀る矢多神社があります。道は山の尾根に沿った山道です。

熊野神社の由緒の中。

安芸門徒シルクロード紀行（7）

村上邦治

二八　古代亀茲国と鳩摩羅什

シルクロード西域北道（天山南路）の中間に位置するクチャ（屈支現庫車）は、前漢時代から唐に滅ばされるまで亀茲国（屈支国）として栄えたオアシス国家である。七世紀初め玄奘は『大唐西域記』の中で、印度に入る前に仏教が興隆している国として詳細に記述したのが、この地とバーミヤン（梵衍那国）、カブール（迦畢試国）の三国である。

亀茲国の概要についてまず東西千余里南北六百余里、大都城は周囲十七、八里とその威容について記した。気候は穏やかであり、天山山脈からの雪解け水を利用した農業が盛んで、きび・麦・うるち稲、葡萄・石榴・梨・桃・杏などの果実が採れる。古くから馳鳥・孔雀にいたるまで畜産も盛んである。天山山脈の麓から鉱産物の金・銅・鉄・鉛・錫さらに石炭が産出する。住みやすく、農・牧畜・鉱産物が豊かなので皆満足に暮らしており、人々の風俗は素直である。文字は手本を印度にとり少し改変している。この地の管弦伎楽（亀茲楽）は諸国に名高い。貨幣は金銭・銀銭・小銅銭を使用している。

屈支種族である国王は智略に乏しく、強力な家臣に抑えられている。伽藍百余ヵ所僧徒は五千余人で、小乗の説一切有部を学習している。教義の基準は手本を印度にとり、その読みならうものは印度文である。いまだ小乗にとどまり、大乗に至っていない。人々は清らかに楽しみつとめ、教えに励み功徳を競って積んでいる。

玄奘はこのオアシス都市国家は産業が盛んで人々の暮らしは裕福であり、仏教が興隆したことから功徳を競い性格も清らかな様子を記した。その繁栄をもたらしたのは地理的に恵まれていたからである。

天山山脈南麓海抜千百メートルの高原に位置しており、タクラマカン砂漠に接しているものの温暖であり、農業が盛んで果実も豊富に収穫できた。シルクロードの都市を最も悩ませる水不足は、六千メートルを越える天山山脈からの雪解け水が、豊富に流れ出て川となり潤した。近くの天山山脈には活火山があり、硫黄や鉄・銅、石炭などの鉱産物にも恵まれた。しかも西域北道の中間点に位置しカシュガルへの拠点であり、法顕が利用したタリム河・ホータン河の川沿いを行きタクラマカン砂漠を縦断して西域南道のホータンにつながる交通の要所として交易・商業が盛んであった。

気候や水に恵まれた住みやすい環境と繁栄した経済を背景に、各地から多くの民族が集まった。当初出身地であるヨーロッパ（キリスト教）・アラビア（ゾロアスター教）・インド（ヒンドゥー教・仏教）・中国（儒教・道教）の教えを各々信仰したものの、五世紀頃より包容性豊かな仏教がこの地を席巻した。

玄奘が記載した仏教施設や遺蹟・説話はつぎの四つであった。

竜池

国の東荒城の天祠前の大きい池
竜が形をかえ牝馬と交わり竜駒を産ませた。竜は人に姿を変え婦人と会し勇敢で足の速い子供を産せた。武により命に従わなくなり王は突厥の力により滅ぼす。今は荒れ果て人煙途絶える

昭怙釐伽藍

荒城の北四十余里河を隔てた二伽藍
仏像の荘厳は人工とは思えない
僧徒は持戒甚だ清くよく精勤している

無遮会行像

大城西の外路左右の高さ九十尺の像
五年毎無遮会開催僧・君主・兵士・庶民が集まり仏像を輿に乗せ見せる（行像）

阿奢理貳伽藍無遮会会場の西北で河を渡ったところ
王の留守中弟が潔白を示すため男根を切って王に忠誠をあらわした（唐奇特）
美談を表彰した伽藍

『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』によると国に入るとき、国王自らが群臣や大徳僧らと並んで迎え、さらに近辺の僧侶数千人が待機していた。国を挙げて盛大な歓迎をした様子と仏教興隆の模様を記した。

クチャがホータンとともに仏教の繁栄を示したのは、西域から中国五胡十六国にいたるまで、当代随一の高僧と名声を博したクマーラジーヴァ（漢訳鳩摩羅什）の存在が大きい。彼の生涯は梁の慧皎『高僧伝』と同じく梁の僧祐『出三蔵記集』に詳しい。

鳩摩家は祖父の代まで印度の代々宰相を務める家柄で

あったが父鳩摩炎は出家し、パミールを越え仏教を重んじる亀茲国に迎えられた。熱心な仏教徒であった王は妹耆婆の強い願いを聞き入れ、嫌がる炎と強引に結婚させた。その二人の間に生まれたのが羅什である。

印度貴族の血を引き亀茲国の王子として生まれた羅什は、母耆婆の熱心な教育により早くから仏教の教えを学び修行した。七歳で母とともに出家、一日一千偈（一偈三十二字三万二千語）を諳誦しその意味を理解したと伝えられる。

九歳になると母とともに印度ガンダーラに赴き、三蔵（経・律・論蔵）九部（本生・ジャータカなど九群よりの教え）のすべてに習熟し、高僧（盤頭達多）から四百万語を授かった。師からその天才ぶりを認められ、評判は広く及びその名声は西域諸国に知れ渡った。

十二歳になり沙勒国（カシュガル）で大乗仏教の根本理念である「空」を理論的に論じた龍樹の中観思想に出会い、これまで修行してきた小乗を捨て大乗の教えに専念することになった。この転機により羅什は小乗・大乗双方の教えを会得することになった。三十歳になるころにはその仏道は西域のみならずに中国関中にまで流布し、仏教に熱心な国王から招聘の誘いが多くもたらされた。

中国では四世紀から百三十年間異民族が次々に建国した五胡十六国時代が到来、関中を支配したのはチベット系氏族の前秦（三五一―九四）で、二代目荷堅（在位三五七―八五）の時最も栄えた。漢民族東晋との「淝水（淮河支流）の戦い」（三八三）で敗北したとはいえ、この時代稀にみる英明な君主で仏教を奨励、漢人を重用して国力を充実繁栄させた。

荷堅のもとに西域のトルファン、クチャの王弟や桜蘭王が来朝し、西域を平定するように願い出た。西域のオアシス国家は群雄割拠の情勢から、荷堅による秦の統一による平和を望んだ。この求めに応じ西域遠征軍（将軍呂光）を派遣、クチャ・トルファン・桜蘭を平定傘下にした。この時仏教を敬う荷堅は高僧として名高いクチャの鳩摩羅什を、長安に送り届けるよう呂光に命じた。

西域を平定、鳩摩羅什を帯同して遠征軍が河西回廊涼州（武威）まで戻ったとき、荷堅は部下の姚萇（三三〇―九三）に滅ぼされた。羌族出身の姚萇は後秦（三八四―四一七）を樹立する。

還る所を失った呂光は、やむを得ず涼州で後涼（三八六―四〇三）を建国する。羅什もそのまま政治顧問格として十五年にわたりこの地で暮らすことになった。しかし呂光父子は仏道を弘布せず、羅什は冷遇され布教はできなかった。羅什にとって一番苦しい時期であった。だがこの十五年は無駄ではなかった。羅什はこの間、中国語による会話、漢字の理解、漢文を完全に身に着けた。

安成高から始まる印度・西域から布教に来た支婁迦讖、厳仏調、支謙、竺法護（敦煌）は漢字・漢文に苦労

し、中国人の朱子行、仏図澄、道安は梵語の理解に困難を極めた。印度僧は中国語には堪能といえず、翻訳した経典は意味がずれたものや不明確で時には主旨を取り違え、梵語のテキストと食い違うものがみられた。鳩摩羅什が初めて梵語と中国語の双方に堪能、しかも上座部と大乗のいずれも修得した訳僧となった。

姚萇の死後子の姚興が継ぎ、後涼を降伏させ四〇一年羅什を長安に迎い入れた。羅什は国師の礼遇を受け、布教と仏典の漢訳に従事することになった。

中国に仏教が伝えられたのは紀元六七年後漢の二代皇帝明帝時、印度から竺法蘭と迦葉摩騰が白馬に乗り中国に入り、洛陽の白馬寺で漢訳と布教を始めたとされる。

四世紀初め五胡十六国の時代、漢族は後漢から広まった道教や儒教を信奉したのに対し、異民族の国々は仏教を取り入れた。漢民族南朝（東晋）に対し、華北の少数異民族国家群にとっては国内の漢民族を統率するため、仏教の流布を図った。そのためには梵語を正確に分かりやすく漢訳した経典が何より必要であった。

羅什の長安招聘は前秦符堅から実に二十年を費やし後秦姚興が四〇一年実現させた。羌族出身の姚興は若くして三宝（仏・法・僧）を崇め、講経会に熱心であった。羅什以前の「古訳」である支謙や竺法護が訳したものは文章がすっきりせず意味のつかえるところが散見された。（羅什以前の翻訳を古訳、羅什以降は「旧訳」、玄奘以後は「新訳」と呼ばれる）

後秦国王姚興の指示により鳩摩羅什の訳経事業は、莫大な費用を投じる国家事業として開始された。まず後秦の高僧八百余人を長安に集め、羅什から経の主旨について教えを受けさせた。一連の講習・訳経事業により、十年間で三千人の弟子を育てたと謳われ、高僧を輩出した。その中では四哲（什門四聖とも呼ばれる道融・僧叡・僧肇・道生）、四英（曇影・慧観・道恒・曇済）が著名である。

作業場所は王自ら造った西明閣と逍遙園を与えた。皇帝自身が進んで羅什の講義を受けるとともに、二人でお互い話し合い徹底的に仏教の深遠な哲理を極め、経典の翻訳に参加した。皇帝の羅什への接し方を身近で見た文武百官もそれを真似た。羅什が滞在した後秦姚興の時代、仏教は関中長安で空前ともいうべき盛り上がりをみせた。

羅什が長安に滞在した十年余で、三十五部三百巻を翻訳したといわれる。彼の漢訳経典が朝鮮を経て六世紀に日本へ伝来、仏教の興隆に大きな影響を与えた。

羅什の漢訳した経典としては『大品般若経』『小般若経』『法華経』『阿弥陀経』『維摩経』、律では『十誦律』、論は『中論』『百論』『十二門論』『大智度論』『成実論』がある。

浄土真宗正衣の経典で、門徒に馴染み深く諳んじる『仏説阿弥陀経』（小経）は、

「如是我聞。一時、仏在舎衛国、祇樹給孤独園、与大比

丘衆、千二百五十人俱。
皆是大阿羅漢、衆所知識。長老舎利弗、摩訶目犍連、摩訶迦葉・・・」

で始まるが、そこには「姚秦三蔵法師鳩摩羅什奉詔訳」と記されている。五世紀初め鳩摩羅什によって漢訳された経典が千六百年経た今日、浄土真宗僧侶や門徒により日々読経されている。

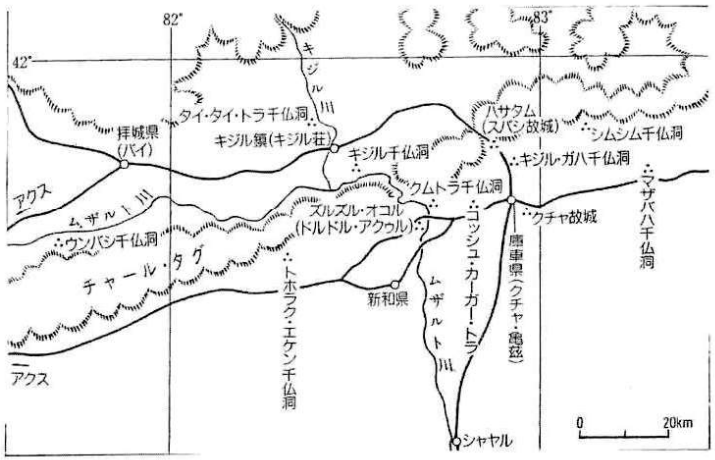
また天台宗の中心経典でかつ日蓮宗の法華三部経でもある鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』は、現在でも読誦される。

宗祖親鸞の血が流れ、「仏の子」を自認する光瑞は、毎日諳んじて誦える『仏説阿弥陀経』を漢訳した鳩摩羅什を敬った。仏教王国で鳩摩羅什の生誕・修行地でもあるクチャを、探検隊の最重要探索地に指示したのは当然であった。しかもまだ西欧諸国の探検隊は調査していなかった。

二九　クチャ長期調査

四月二十三日朝二人はキジル鎮を出発、五十キロ離れたクチャに到着したのはその日の夜であった。当地には足掛け四か月滞在し、光瑞の指示によるクチャおよびその郊外の千仏洞、古址の探索発掘に勤しんだ。

最初に大掛かりな調査発掘に取り組んだのは、南西に位置するクムトラ千仏洞であった。『西域水道記』に記



クチャ周辺の千仏洞と遺蹟（上）
『忘れさられた明治の探検家　渡辺哲信』（白須浄眞著）



クチャからトルファン・ウルムチへの行程（下）
『西域旅行日記』（堀　賢雄著）

載されており、この千仏洞を精査することは以前から決めていた。しかしキジル鎮で出会ったドイツ探検隊グリュンウェーデル教授が、すでに一週間滞在、その成果を自慢していた。かれらも『水道記』を読んでいたのだ。

クムトラでもキジル千仏洞の時と同様渡邊は懸崖にある洞内調査と発掘、堀は測量と写真撮影を担当した。

ドイツ隊の発掘から遅れたものの、渡邊は住民五人を雇い、仏洞内の発掘に着手した。ドイツ隊により目ぼしいものは採取されていたが、それでも初日からいくつかの仏具・仏典片・壁画を掘り出した。

二日目は最大石窟「五大窟」に入り発掘を続けたが、ドイツ隊に持ち去られ何一つ収穫はなかった。昼食後渓谷を隔てた洞窟を発掘、見逃したのかこの洞からは、菩薩、「天女の如き顔面」、腕・足などが採取できた。

余談ながらこの項を書くにあたり、渡邊のいう「天女」に会いに出かけた。上野にある東京国立博物館の東洋館二階オアシスコーナーに、大谷探検隊将来品として渡邊がホータンで掘り出した「如来像（銅製）頭部」と敦煌莫高窟から三次探検隊が持ち帰った「菩薩立像幡」の間に、「女性供養者像（木製）頭部」と表題がつけられ、まっすぐ前を向いている彼女がいた。

ガラスケースに囲まれた像の下には、大谷探検隊渡邊哲信がクムトラ石窟で採取した旨の添え書きがあり、「顔は白く白粉で化粧され、眉はきりりとした弧状に黒く引

いて口唇は赤い」と説明されていた。奇跡的に顔面は傷もなく髪は頭部上で二つにまとめられ、細長の目は少し遠くを見ているようであった。気品あるそのふくよかな顔は髪形から侍女と思われるが、まさに天女といっても過言ではない上品な顔立ちであった。

彼女は筆者が会いに来る時を待っていたように思えた。博物館では貴重なシルクロード美術品として、至宝の扱いであることがなんとも私には嬉しかった。館内には数組しかおらずもの音一つしない中、記憶にとどめるため彼女を遠慮もなくじっと見つめた。しばらくして彼女に別れを告げ、後ろ髪をひかれる思いで東洋館を後にした。

三日目五人の住民を雇いドイツ隊に発掘されておらずしかもイスラム教徒に毀損されていない洞窟を発見、直ちに調査に着手した。ドイツ隊やイスラム教徒が見逃した洞窟は両壁相向き合って崩落したもので、土砂に埋もれた洞内には何もないかの有様であった。しだいに土砂が埋積し、長らく馬羊駱駝の小屋として使われていた。そのため剥落した壁土がそのまま底に埋まり、次に糞堆そして土砂が侵入していた。異教徒の侵入に会わず、仏菩薩像は両側の壁に安置したものの如く埋まっていた。

乾燥した洞内で空気にも触れずにいたので、

「色彩の絢爛たるよりを察すれば、往古その荘厳の厳麗なりしを知る」

と驚かすほど鮮やかなものであった。

渡邊によって掘り出されたこの完全な菩薩頭部は阿弥陀経巻き軸の断片とともに国立博物館に所蔵されている。

この菩薩は新疆大学『シルクロード新疆仏教芸術』に掲載されていた。「菩薩頭部泥塑像」と名付けられ「七世紀頃。高い髷、湾曲した眉、細い目、端正な鼻、赤い唇で精美に作られている。高さ二〇cm（日本探検隊発掘）」の説明とともにその均整の取れた顔面が紹介されている。

六日目の五月十四日は父聞信の十四回忌の命日であることから、発掘前に雇入れた七人をつれて『阿弥陀経』を誦した。亡父に通じたのか、はたまた阿弥陀如来のご慈悲だろうか、釈迦牟尼仏と記された洞を調査した後近くの一洞で、王舎城の悲劇を説く『観無量寿経』にある「韋提希夫人（王舎城王の妻太子阿闍世の母）の一代」を描いた壁画を発見した。

この壁画を哲信はスケッチで記録したが、その後第四次ドイツ探検隊ル・コックによって剥取され、ベルリンに持ち帰られた。新疆大学本には経変画の一部として「西峰に沈む夕日に祈る韋提希夫人」を掲載している。

五世紀半ば曇良耶舎（きょうりょうやしゃ）が漢訳した観無量寿経の中で、

「教我思惟　教我正受」（我に思惟と正受を教えたまえ）

思惟　浄土を憶念して観想をなすための準備的方便行

正受　金剛の真心　真意の他力の一心　と夫人の必死

の願いに応えて、心統一して浄土を観想する十三の方法を仏陀は説いた。その第一（初観）として日想観を教えた。すなわち、

「正坐西向　諦観於日」（正坐し西に向いて日を諦観せよ）

と説いた。

まさにこの光景が色鮮やかに描かれていた。

沈まんとする夕日は赤色となり山々は緑に染まり、そこに夕日を見上げてひたすら祈る夫人の姿があった。

浄土真宗僧侶として日々阿弥陀如来に唱えてきた観経の教えが、中国奥地クチャにある岩壁の一洞の中に再現されていた。それを真宗門徒自らが発見したのであった。

クムトラ千仏洞で予期した以上の成果を挙げたが、休む暇なく次の日から下流の仏蹟趾の調査を開始した。地元では「ヴルヴルオコル」または「ドルドルオコル」と呼ばれる伽藍の跡で、方角から『大唐西域記』に載る奇特伝説の「阿奢理貳大伽藍」とみた。記のいう「庭宇顯敞」（庭・建物は広く堂々とした様子）四字を見逃さなかった。かれらは自信をもって四日間をかけ、十人の住民を雇い日によってはさらに増員して発掘調査を行った。

成果は仏龕（仏像をおさめる厨子）を飾る菩薩面と漢字で書かれた紙片などを採取したものの、「大いに誇るに足るもの無し」と自己評価した。

しかし玄奘の阿奢理貳大伽藍を、方向と遺蹟からヴルヴルオコル古址に比定した。これは初めての事で漢文に強い僧侶であるかれらでなくては難しいことであった。

六月末にはコツシュ・カーガー・トラの廃墟を調査した。形状を模索することができないほど破滅状態であった。しかし玄奘の記述する大城西門の外路左右に九十余尺の高さがあったという立像を調査、両塔とも「毀損甚だし」状態であったが、仏塔趾であり規模の大きさから比定ができた。次の日測量を行い撮影し記録した。

七月からは一か月かけてクチャの東北方面を探索、その最大の目的はスバシ故城遺蹟群（東・西ハサタム）の調査であった。玄奘がいう「荒城の北四十余里、山の入り込みに接し一つの河をへだてて二つの伽藍がある。東昭怙釐・西昭怙釐と位置に従って称している」の記述そのままの方角・距離・河を挟んだ二伽藍の配置からみて、東・西ハサタムこそ昭怙釐伽藍に間違いないと確信した。玄奘は伽藍内を「人工とは思えない荘厳さの仏像・面の広さが二尺余、黄白色、その上にある長さ一尺八寸・広さ六寸の仏陀の足裏の跡」があるとした。発掘を進めると地下から仏具などが採取され、東西廃墟には伽藍趾が認められた。

発掘には多い時には十数人の人夫を雇い、東・西で並行して作業を進めた。昔から名高い遺蹟であるだけに、

遺品の多くは住民により勝手に持ち出され売り払われていた。それだけに目ぼしいものはなかなか発見できなかった。

発掘から三日目、東部で地獄を描いた壁画を発見した。そこには地獄に落ちた悪人が手を伸ばし必死に助けを求め、更には臼の中に死体となって放り込まれている図であった。周辺では小刀・鋏も掘り上げた。写真で記録したが地獄絵は明瞭でよく写っている。

六日目からは西部に重点を移した。塔趾から木製の金箔を押し付けた舎利容器を発掘した。よくぞ残っていたもので、国立博物館に収蔵されている。

三日間で古くから盗掘されていた昭怙釐伽藍跡で、地獄絵、木製舎利容器を思いがけなく採取できた。

終了後伽藍北方を探索した。小規模な千仏洞を二カ所で発見したが、いずれも完存洞窟はなく得るものはなかった。これら千仏洞の調査の途上で「清泉湧出して、銀鱗溌剌、水辺土潤いて緑苔氈の如く、数百の牛馬驢を牧す」湖を見つけた。方角からみて玄奘が記した「城北天祠の前なる一大竜池」と断定した。周辺には天祠と思われる趾やストゥーパも残っていたからであった。

大唐西域記に記されていないトングス・バシーの寺院跡・崩れた大塑像、拓関（西に向かう最初の関所）趾を調査、キジル・カルガー千仏洞（完存四十四窟）、シミ・シミ・シャール千仏洞（三十五窟）、アチガラック千仏洞（二十四窟）、ヤンギ・カーン千仏洞（十八窟）を発見した。多くは崩れ完存しているものは少なかった。

哲信・賢雄の二人は玄奘が屈支国（亀茲国）で記載した二伽藍、城と立像・池すべてを特定できた。光瑞が予見したように周辺には多くの石窟・千仏洞があり、「伽藍百余ヵ所」は誇張ではなかった。

三〇　郵便・通信事情

クチャに到着した翌日から『中央公論』（浄土真宗本願寺派の内部改革を目指した『反省会雑誌』が前身）から依頼されていた紀行文を、「中央亜細亜探検記」としてキジル千仏洞調査体験の執筆に取り掛かった。発掘・調査の合間を使い何とか仕上げ、日本に原稿を郵送した。

また周辺の調査を終えた八月、哲信は光瑞に「庫車地方探索報告」を開申するため起草した。この報告書もこの地から郵送した。

一八七五年から実施された万国郵便連合に日本は一八七七年（明治十年）加入したので、国際郵便制度の利用が開始された。西欧滞在中自坊あてに当時珍しい外国風景の絵葉書を多く送ったが、着実に届いた。

そして一九〇二年万国郵便小包交換条約に加入、小包の利用も実現し、中国奥地クチャから日本への原稿郵送が可能となった。

クチャに滞在中、光瑞から電報による連絡があった。当時国内から海外との連絡は、急ぐ場合は電信（電報）が利用された。早くて着実に届くのは電信であった。

訪問地に公使館・領事館があればそこへ、また民間会社（三井物産や日本郵船など）の出先があればそこに、「気付」として打電して旅行者の方から着信を問い合わせる。いずれも存しない所ではその地の電信所（局）留めとし、名宛人が電信所に行き受け取る。未着の時には、滞在場所を告げ着電次第連絡してもらえた。途中多くの手を経ないので費用は高いが、格段に早く安全に連絡が取れた。

光瑞は二人と別れてから二―三か月後にはクチャに赴くことを予測し、クチャの知事あてに局留めで電信した。

「庫車直隷庁署、日本学士渡邊等、着其地否、上海滙中伯爵大谷、二月七日上海来」

父光尊死去のため、ビルマから中国奥地に向かう中国仏教調査計画を中止して、急遽カルカッタから船で帰国途上の上海から打電したものであった。むろん光瑞は二人がタクラマカン砂漠縦断やカシュガルで準備のため長期滞在となり、クチャ到着が遅れていることは知らない。電報は三月に届いていたが、電信局の間違いで五月初め二人が到着してさらに十日後に配達されたものであった。

電報の二月三日は陽暦では三月三日にあたり、カシュガルにいたころにクチャに届いたものであった。カシュガルでは光瑞一行は十一月末印度ガンダーラに向かうまで予定通りの日程で進んでいることが知らされていた。ロンドンでの計画ではその後一月下旬ビルマに入り中国班五人とともに中国大理へ向かい、成都・重慶・漢口を経て、上海には五月中旬に到着する予定であった。

電報をみた二人の疑念は深まるばかりであった。光瑞猊下が上海に着いておられるのはどう見ても二か月早く、「中国旅程を早められたのか、或は京都本利に一大事変が発生し海路で帰国されようとされている」のか、「懸摩憶測を逞しうする」がこの一片の電報以外に何ら判断する材料なしとして、初めて二人の方から京都西本願寺宛漢文で次のような打電した。

「今日看上海来電、此地住一箇月、到廸化州（ウルムチ）七月、到漢口十一月、若有特命打電、庫車渡邊、堀」

電信所では誤電の虞ありとして、英文を勧められた。漢文では漢字を決められたコードに置き換えて打電するが、数千におよぶコードから選ぶ事になり、誤選択が発生し易かった。英文だと二十六字であり大小文字等を入れても六十字ほどの変換で済んだ。

この電報はクチャからトルファン、ウルムチ、敦煌、酒泉、西安を経て天津に送られ、海外発信地上海から日本に打電された。

京都の光瑞はクチャに二人が間違いなく滞在している

ことが確かめられると、五月二十二日神戸から次のような英文による電報を打った。

「マイケル中佐（英国カシュガル駐在武官）の手を経て一千五百送金す」

電報は即日クチャに届いたが、クムトラ千仏洞調査のため不在で、一週間後戻った時受け取った。

この電報の感想が二人の性格を反映していて面白い。

哲信は、

「余等は何ら請求せしに非ざるに、この大金を恵送せらる猊下の宏慈に感涙するとともに、余等の旅行を重視せらるるは忖度するに余りあり。

この鴻恩に対して如何にして酬ゆべき責任の重大なるを痛感すると共に勇気百倍す」

とこの地の調査探索に死力を尽くすことを改めて誓った。

しかし仏蹟は千古に湮滅し、しかも西欧の探検隊がすでにこの地を訪れており、それを想えば、

「肌に粟が生ず」

と、成果を得る自信のないことに背筋が寒くなった。

一方賢雄は、

「喜びと同時に反面疑惑も感じた。何のための送金だろうか。旅行の延引のため旅費に窮するのを察して送られたものか、この旅行の主要部分にいる二人に一層せよというのか」

と疑念は尽きなかった。

結局二人とも光瑞の思し召しの厚いことに、

「感涙再々」

となり、祝杯を挙げて床に就いた。

その夜は「万感胸に塡ち」、眠ることができなかった。

しかし当時の金融機関の取り決めをもってしても、クチャで日本からの送金を受け取ること容易ではなかった。

新疆省にある金融機関は露国系銀行しかなかったので、カシュガルの英国駐在武官宛に千五百ルーブル送られた。その資金はカシュガルの清国長官に一段預け、長官同士の送金に形を変えてクチャ長官に送金された。そしてクチャ長官から二人に手渡したのであった。

露国とは開戦前の時期であった。清国とは日清戦争を経て「同文同種」（日本語が漢字の使用など中国語に近いこと）や一九〇〇年義和団鎮圧における日本軍の対応などから、一時日本を手本とする風潮であったことで二長官の協力を得られた。英国武官とはカシュガルで親交を重ねており、露・清・英三国にまたがる連携により実現できた稀な事であった。

八月初め次のような電報が配達された。

「庫局鑑、請告日本遊歴渡、乃弟（中国班哲信弟渡邊哲乗）廿一、由陝、赴京、蘭叩」

哲信・賢雄の二人がクチャに滞在することが判明したので、光瑞は中国班の渡邊哲乗を西安から蘭州に迎えに行かせたが、二人が大幅に遅れていた為一旦北京に引き返させたことを、二人に知らせた。

クチャに長期滞在していたことで、電信を利用して日本から送金や光瑞からの指示・連絡が可能であった。

四月下旬から八月上旬までクチャに滞在、近郊の仏蹟や石窟を調査した三か月半を次のように総括した。

「猊下の鴻恩を担い、一意之に酬いんとせし奮励せしも、天運必ずしも利あらず。意に満たざるもの頗る多し。

ただ何の幸ぞ、当年三宝昌隆の古亀茲国に来たり、遙かに三蔵玄奘の芳躅（個人の立派な足跡）を尋討し、且若干の考古資料を得たるは聊か以て自慰するに足る」

哲信は光瑞が最も期待したクチャについて玄奘の『大唐西域記』に記述された伽藍や故事の古蹟についてすべて比定できたことと、クムトラではグリュンウェーデルドイツ探検隊の後であったが得難い仏像や人物頭部、壁画を採取できたことに少し安堵した。

三一　トルファン・ウルムチ訪問

八月十一日次の調査地トルファンへ向けて出発した。

西域北道（天山南道）を東にオアシスのブグル、コーラを経てカラシャールについた。ここは『西域記』の記す阿耆尼国で、玄奘が高昌国（トルファン）を出て印度に向かう最初のオアシス都市国家である。嘗ては西域南道から桜蘭を経て北道を結ぶ交通の要所であった。

途中には千仏洞があったが特に興味を示さず通過した。そこから一日でトルファンに着いた。

高昌国（トルファン現吐魯番）は中華と西域（匈奴）との国境に位置する大オアシス国家であったが、常に両勢力の狭間で不安定な国家でもあった。

玄奘が通った七世紀初めは唐の支配下にあり、華内として記では省略されている。しかし『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』には、高昌国王から手厚く迎えられた様子が詳しい。玉門を出て伊吾国に滞在中から、高昌国王の度重なる招聘にやむなく応じることにした。城に着くと、真夜中にも関わらず王と王妃、侍臣達が燭を並べ拝問・礼拝して出迎えた。

次の日からは王自ら王妃重臣を引き連れ礼問し、講義・講座には大テントが張られ王を始め王室、大臣、導師・僧侶が学習した。玄奘に国師を依頼するが、天竺求法の大志は揺るがなかった。仕方なく天竺から帰還するとき、この地に三年滞在し教えを乞うことを約束させた。

そして莫大な金銀銭・絹・法服などを贈り、また四人の少年僧をつけやっと送り出した。

この書の中で王自ら深く仏教に敬信しており、数千人の僧と多くの伽藍を持つ興隆した仏教国であると記した。

天山北路と南路の起点として経済が豊かで、高昌城・交河城を抱える大都市国家である様子を述べている。

光瑞は無論のこと、哲信・賢雄二人も読んでおり、クチャに劣らない仏教遺蹟が砂漠に埋もれていることは事前にわかっていた。しかし光瑞の指示はクチャを重視、トルファンの地については言及されていなかった。しかもキジル鎮でグリュンウェーデルドイツ第一探検隊の成果を聞かされ、もはや調査意欲は萎えたのであろう。トルファンでの二人の行動は、クチャとは比較にならない至って淡泊な十日間を過ごした。

トルファン盆地は天山山脈南麓に広がり、雨は降らず昼は五十度に達する灼熱の地である。天山の雪解け水を引いた「カレーズ」（地下灌漑水路）により葡萄を栽培、二人は名産の干葡萄・葡萄酒の栽培・作業所を視察した。

盆地内のカラ・ホージャにある高昌故城を訪れた。中国トルキスタンにおける最大趾で、その廃墟にはストゥーパや大塔・小塔、伽藍の煉瓦壁が残り、二人とも大仏寺の跡との感想を記している。

ドイツ隊は三か月間発掘調査し大きな収穫を得たと団長は話したが、「毎日四、五人の人夫を用い発掘したというが、それでは大海の水を杓子で汲むのと同じだ」と賢雄は見抜いた。確かにその後でもドイツ隊、英国スタインが成果を挙げており、的確な見通しであった。しかし二人はここでも調査・発掘に着手しなかった。

近くのトヨク（吐峪）でドイツ隊は千仏洞を発見発掘、多くの仏教美術物を得ていた。二人は住民からこの地の山中から、少し大きい男の高さの完全な仏像の存在を知らされ実査したが、写真に記録しただけであった。

最後の日交河故城を訪れた。古城跡が残り、崩れた仏寺・ストゥーパが広く散在し、哲信は千古三宝の隆昌を追懐したが、それ以上は何もしなかった。

二人の探検目的地はクチャであり、トルファンは帰途の一束漸の地しか映らなかった。賢雄が「一日千里の速力で飛び帰ろう」と記したように、トルファンの遺跡には熱意を示さなかった。

この地は火焔山が示す通り、高温・乾燥・極少雨なので千五百年以上の遺物もよく保存されていた。火焔山の南麓にはクチャ・クムトラ千仏洞に匹敵するベゼクリク千仏洞（七十七窟）がある。また近くのアスターナ古墳群（西晋から唐時代の貴族・役人・庶民の墓群）には仏画や儒教聖人画、当時の役人・庶民の風俗、戦の様子などが描かれた絵画、庶民の生活ぶりを示す契約書、ミイラ、絹・綿・麻等織物、色彩陶器、死者に使われた紙製棺や副葬品等が、西欧と三次大谷探検隊により発掘され持ち帰られている。

堀賢雄の『日記』収録はここで終わる。これからは哲信の日記のみで辿ることにする。

九月中旬ウルムチ（現烏魯木斉廸化府）に着く。

天山山脈から豊富な雪解け水の恵みを受けた大オアシス都市で、古くから天山北路の要所であり、モンゴル・ロシアからの入り口でもあった。住民は早くからウイグル・モンゴル・カザフ・回・漢各族が混在し一体化した。常に北の遊牧民族と漢族の支配争いが繰り返された。中国王朝は前漢時代に都護府を置き西域の最前線基地とした。クチャやトルファンを経由して仏教が東伝したはずであるが、多民族で絶えず戦地でもあったことで、目立った仏教遺蹟は残っていなかった。

十九世紀末シベリア鉄道を起工して東アジアに進出する露国に対抗するため、清朝政府は新疆省の省都と定め軍事拠点とした。

二人がウルムチに赴いたのは政治の中心地で郵便・通信の拠点であり、光瑞からの連絡や日露の情報を入手したいからであった。到着後すぐに清省庁、露国領事館、電信所に問い合わせたが、親書も電報も来ていなかった。

露国は居留地を設け、ロシア正教寺院、商店、宿・サライを有し、清朝の弱体化と露国東進が認められた。日・露両国はこの時すでに満州でにらみ合っていたが、北清事変での共同出兵により、幸運にも中国奥地では平穏を保っていた。日本人の扱いは敵意もなく親切で、二人は露国店で買い物ができた。

結局一カ月弱滞在、主に蘭州、西安への車馬の手配に費やした。哲信は「当地一か月の滞在は真に無要不快の事なり」と振り返った。

ちょうど一年前光瑞とタシュクルガンで別れた十月十四日蘭州に向けて出発した。この度の道程も同じ道は通らないという定めからトルファンへ引き返さず、遠回りとなる天山山脈北麓を通る天山北道を選んだ。

山脈の北部は反対側の南麓に広がる砂漠地帯と異なり、ステップと言われる大草原地帯で、樹木も多く街道には湖や湿地帯があり穏やかな農村風景が続いた。このステップ地帯は中央アジアを横断し東欧まで続く。十三世紀この草原を利用してチンギス・ハンとその子孫は、中国から神聖ローマ帝国までの歴史上嘗てない広大な地域に、モンゴル大帝国を創り上げた。

荷馬車二両に荷物を積み、二人は馬に乗り進んだ。東部天山山脈の連山に屹立し雪を戴いた主峰ボダ峰（約五千五百㍍）の雄姿を観ながらの旅であった。

道中では、

「路傍樹木繁茂し、恰も公園の林下を行くの趣あり」

「樹林畝畴（畑）の間を行く」

「一面の窪地にして数株の樹木の傍らに蟹の如き家」

の記述がみられ、夜は寒いものの苦労なく進んだ。

「我が郷里の備後三原奥地の牛馬市に似たり」

「街路の河橋の光景は我が京都の通天橋に類する」

「チャングル（大根の丁子漬）は意外にもお茶漬けの味」など、望郷の念を思い起こさせる表現が多くなる。寒さと不潔で不便な宿舎に苦痛を感じながらも天山山脈東淵を南下しタリム砂漠に出た。南側は砂漠が続き十月末哈密（ハミ）に着いた。二週間の旅程であった。

哈密（七世紀伊吾国）は玄奘が国王から王宮に招かれ歓待された。高昌国の使者がたまたま滞在しており、高昌国で一か月の長期滞在するきっかけとなった処である。

二人はこの地の支配者哈密王と会見、産出する無煙石炭を贈られる。市内を歩いていると電信員から呼び止められ、蘭州から来電があり「二人の日本人は何処より何処に向かうか」との問い合わせが来ている旨聞かされた。明日哈密を出発蘭州に向かう旨返電した。蘭州で舎弟哲乗が二人を待っていることが分かった。

三日間滞在の後安西に向けて出発、途中宿舎のある砂泉子では「敦煌に向かう駱駝隊此の駅に留まるを見る」、苦水では「敦煌に至る小道があり。水を得るも家無し。駱駝のみを通じ車（馬車）は行かず」、柳園では「敦煌は安西より四天走と云う」など盛んに敦煌（莫高窟）に関する記述が出てくる。かれらは仏教美術最高の精華と謳われる莫高窟寺院の至近距離に来ていた。

三二　敦煌文書

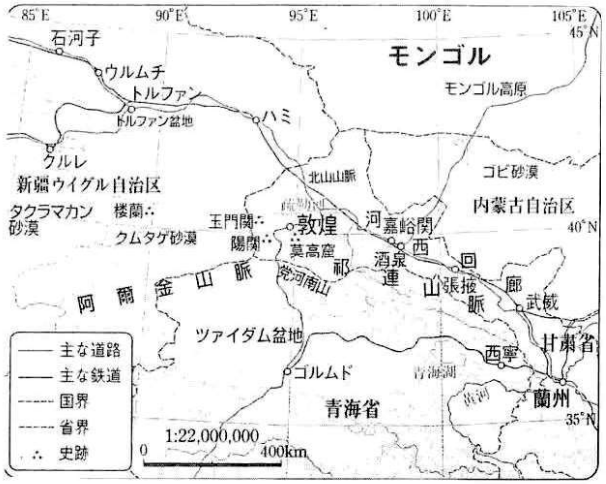
敦煌（沙州）は南に阿爾金・祁連山脈、北には北山山脈東に三危山、西にタクラマカン砂漠の東端（クムタゲ砂漠）に囲まれた砂漠の中の盆地にあるオアシス都市である。囲まれた山々からの豊富な雪解け水で、穀物、果実、綿花が豊富に採れる。

敦煌は前漢武帝の紀元前一一一年西域進出の基地として設けられた、河西四郡（武威・張掖・酒泉・敦煌）の一つである。漢代に造られた長城に守られる最前線の軍事基地であった。

何度も西夏、吐蕃などの異民族支配下になったが、西の中央アジアと東の中華中原を結ぶ交通の要所としての交易・商業都市の重要性は変わらなかった。

印度を源流とする仏教は、仏陀の死後根本・枝末分裂し、般若経・浄土系経典を核とする大衆部仏教は大乗（北伝）仏教としてガンダーラ・バーミヤンで興隆し、中央アジアに伝播したのち、東西交通路のシルクロードを通り東漸した。

敦煌の商人はローマ帝国・ペルシャ・中央アジアとの交易によりは莫大な財産を築き、街は繁栄・拡大した。同時に大乗仏教が伝来、異宗教を広く包括し平穏な生活を希求する仏教に帰依する者が増加した。四世紀より彼らは祖先を敬い一族の繁栄を願うため、二十五キロ郊外鳴沙山の東端断崖に石窟を造営し始めた。



（上）ウルムチから蘭州まで（西域北道・河西回廊）
『週間朝日百科　世界100都市　敦煌』（朝日新聞社）



（下）敦煌周辺
『グランド新世界大地図』（全教出版）

七百を超える石窟を持つ莫高窟はその形態から、初期四―六世紀（北涼・北魏・西魏・北周）、中期六―十世紀（隋・唐）、後期十―十四世紀（五代・宋・西夏・元）に分けられる。黄金期の中期唐時代では、西のビザンツ帝国ペルシャサザン朝との交易が発達、富を蓄積した商人たちの依頼により、莫高窟には各地から工人が集まり、多くの仏像・壁画が造られた。その後も途切れることなく宋・元の時代まで建造された。大量に運ぶことのできる海路が中心となるとシルクロードはしだいに衰退、敦煌は輝きを失い莫高窟も諸外国から忘れられた。

しかし千年間にわたり中国の皇帝・高官・役人・将校・商人や外国高官、地元支配者、僧侶などが造り続けた莫高窟は、仏教芸術の粋を極めた大石窟寺院として古くから書物に取り上げられた。七世紀玄奘の『三蔵法師伝』にもみられ、日本ではよく知られた存在であった。

西欧では十九世紀半より探検隊が訪れ始め、その調査報告が発表され次第にその名は西欧でも浸透した。

十九世紀最後の年、莫高窟で考古学における二十世紀最大の文化遺産発見が起きていた。

清国の兵士であった王圓籙は、道教の修行僧（道士）となりさびれた莫高窟寺院に管理人を自任して住み込んだ。たまに来る巡礼者からお布施をもらいまた敦煌街で寄付を募るなどして、石窟に積もる流砂を掃き出しまた修復するなど細々とくらしていた。

一九〇〇年五月発見の端緒となったのは、王と写経生の二人が第十六窟の主室に入る通路で煙草を吸っていると煙が壁に向かって流れた、別説では写経生がキセルで壁を叩いたところ空洞のような響きがしたという。二人が夜更けにその壁を壊してみると隠し部屋と思われる小窟（第十七窟蔵経洞）が現れ、その中に天井まで山積みされた経典類があった。

漢字が読めなかった王はそれでも昔の貴重な経典ぐらいはわかり、とりあえず外部には秘密にすることにした。しかし時間の経過とともに徐々に漏れ始め、敦煌の人々の間に噂が広まった。

ホータン郊外ダンダン・ウイリク寺院の発掘で世界を驚かした英国探検家オーレル・スタインは、一九〇六年西域南道をさらに東に進みチェルチェン・ミーラン・桜蘭を調査後、七年三月敦煌に入った。莫高窟千仏洞内部の仏像・壁画を詳細に調査していた五月末漠然としていたが、

「洞窟寺院の一つに隠されていた膨大な古代文書が、数年前偶然発見された」（スタイン『中央アジア踏査記』）

という噂を聞いた。

この話をスタインは見逃さなかった。粘り強く王道士に掛け合い、遂に仏教も漢字もわからない王道士から寺

院への寄付（買取）を条件に選別取得し、いわゆる「敦煌文書」（敦煌文献・敦煌遺書ともいわれる）数千件の古文書二十四箱、絵画・刺繍・美術品五箱を大英博物館に送り届けた。

その翌年スタインの成果を聞きつけた仏ポール・ペリオはウルムチから敦煌に入り王道士と交渉した。東洋学者であり中国語に堪能で漢字も読めたことから残る文書すべてを三週間かけて鑑定・選別、史料的・美術価値の高いもの数千点を厳選し購入、パリ国立図書館に送った。

二人の発表に驚いた清国の学者は、残る一万余点を北京に運ばせ政府の管轄下に置き京師図書館に収蔵した。しかし重要と思われるものは既に二人に持ち帰られ、精華が乏しくまた価値の低いものしか残っていなかった。清の研究者は、「敦煌文書は中国学術の傷心史なり」と嘆かざるを得なかった。

清国政府の処置により、莫高窟蔵経洞に保蔵されていた古文書等は何一つ残っていないはずであった。しかしその後第三次大谷探検隊橘瑞超が六百三十点、露国オルデンブルグが二万弱、再訪したスタインがさらに相当数、米国ハーバード大学隊も持ち帰った。狭い蔵経洞に千年間眠っていた四万点と思われた敦煌文書は、こうして史料価値の高い文書や精華な美術品は英・仏両国に集められ、そのほかは中・日・露・米・韓（旧日本）に分散し今日に至る。

膨大な古文献・美術品が世界各国に四散したことで多くの東洋・仏教・言語・美術・書道各学の相互研究が活発となり、分類・目録作成や文献の研究が進み、いわゆる「敦煌学」と呼ばれる研究分野が確立することになった。

六万点に上る文書については、作成年代は四―十一世紀初頭、内容的には過半は経典など仏教関係、そのほか道教・儒教関係書、典籍、寺院記録、行政文書、私的契約書等が含まれていた。手書きの写本や印刷本も存在した。言語は漢語が八割、チベット・ウイグル・サンスクリット・コータン・ソグドの各語があった。形態別には巻子装が多く、一枚もの・折本・冊子・貝葉装などである。支持体は大半が紙で、綿帛・ヤシ葉・樹皮・獣皮・木片もあった。

これまでなぜ収蔵されたかについて、一〇三六年西夏の占領に備え、貴重な仏教寺院の経典などを隠したとの説、十一世紀カシュガル・ホータンの仏教寺院を破壊し中央アジアに建国されたイスラム系カラハン朝の侵略に備えたとの説も有力であった。しかし発見された文物の内容は仏教寺院に必須な経典はそろっておらず、しかも寺宝と言えるものは少ない。逆に用済みになった使い物にならない端本、写経の書き損じ、寺院の僧尼名簿・資材帳・収支簿、公文書で破棄された使い古しの紙を利用した住民の戸籍・徴収簿・学習・練習用のものなど含まれていた。そのほか当時住民間の売買・貸借・雇用など

の契約書、離婚・養子・奴隷解放などの証書、住民間で組まれていた相互扶助会の宴会・香奠・葬儀歳時の供養連絡回章（社司転帖）など当時の庶民生活を彷彿させるものがあった。

これらの事から他国の占領から重要で貴重な書類を後世に残すためではなく、用済み不要となった書類の退蔵との説が有力になっている。しかしなぜ壁で密閉し壁画を描かせる必要があったのかなど論争は決着していない。

六万点の分類研究が進むなかで、日本人学者から各国で敦煌文書といわれるものの中に、相当数の蔵経洞から持ち出されていない、いわゆる偽造文書が紛れていることが指摘された。最初のスタインとペリオおよび北京に持ち込まれたものには作成日付が入っており、書体も年代により隷書から楷書に変わっていた。しかしそれ以外では明らかに材質・書体・写本内容など、疑念があるものが散見されることが判明した。

王道士はすべて北京に運んだのではなく一部は隠し持っていた。また運ぶ途中官吏に抜き取られてもいた。しかしいみじくも第三次大谷探検隊吉川小一郎が書き残したように、

「値段を値切ると偽物を混ぜる」

ことが平然と行われていた。

漢字も分からない西欧の探検隊がいくらでも買い込む事につけ込むみ、偽造した古文書を売りつけたのである。

敦煌文書は、「敦煌学」の研究が各国で進みその成果が発表されるに従い、当時の敦煌における寺院での修行や運営振り、官史の業務内容、商人・農民などの生活が明かされる古文書、芸術性の高い絵画・幡・塑像が含まれた第一級の一大史料群の大発見であるとの評価が定着した。

このまさに「宝の山」に当時最も近くにいたのが、ウルムチから河西回廊へ急ぐ渡邊哲信・堀賢雄の大谷探検隊であった。オアシス中継地哈密には一九〇三（明治三十六）年十一月一日から三日間滞在、敦煌に通じる苦水には六日、次の砂泉子では敦煌に向かう駱駝隊を見届けていた。現在の鉄道での入り口柳園には十一日、そして幹道でむすばれ旅程四日間の最も近い安西には十三日から三日間滞在した。

歴史にＩＦはないことは承知しているが、この時こそ大谷探検隊がその名を世界に轟かせ、後世に輝やかす最大の機会であった。王道士が発見して三年半、オーレル・スタインが王道士と交渉する三年半前のこの時期列強各国の探検隊に先駆けて、敦煌文書を持ち帰る絶好の時であった。

もし二人が莫高窟見学のため敦煌に赴き噂を耳にしていたなら、感受性の強い二人だけにただちに話に興味を

持ち、王道士に掛け合ったことは間違いない。

気難しい王道士も西欧人とは違う「同文同種」の仏教僧二人に心を許すに時間はかからず、程なく蔵経洞を案内したであろう。積み重ねられた古文書は、仏教を修行し多くの経を諳んじ漢文・漢字に強い二人であれば、文書の重要性や単なる書き損じに過ぎないものかも即座に選別したであろう。スタインやペリオが英・仏両国に持ち帰り世界中の学者を驚嘆させた文化遺産が、わが国にもたらされていたかもしれなかった。

しかし彼ら二人を責めるのは的外れである。何より王道士が大量の古文書を発見した噂は、スタインがロンドンで発表するまで敦煌市内にとどまっていた。すべての外国探検隊は当時一切知ることができないことであった。

後年光瑞の探検隊による多額の資金使用について、全国の末寺の住職から非難された。

「西域探検隊。これかて光瑞はんでのうても、際限なしに使える資金があったら、誰にでもできることや。

いっそやるなら、京大あたりの専門学者を行かしたらんかい。

漢文もろくに読めんような、はたちやそこらの若造を次々にやったかて、宝の山へ入っても、ろくな探検もようせんと、手をつかねて帰ってくるばっかりや。

敦煌でかて、あとからきた外国の学者に宝をかっさわられたやろ。何万という金をつかうばっかりで、するこ となすことあほらしゅうて仕方ない」（津本陽『大谷光瑞の生涯』）

よく事情の知らないもの者からいわれのない非難をうけた。この中傷は光瑞の浪費に対する一つの事例を取り上げたものであったが、彼ら二人自身も後から悔しい思いも持ったことは間違いない。

国立博物館で天女に会ったとき、クムトラ千仏洞の天女の左側に、橘瑞超が敦煌文書として蔵経洞から将来した絹帛が展示されていた。色鮮やかな帛の幟は、千年間洞内に保蔵されていたとはとても思えない色彩であった。

三三　河西回廊から西安へ

安西を出てから七日で西域への前線軍事基地嘉峪関に着いた。二人は早速「天下の雄関万里に長城」を視察した。まだ十一月であったが「路辺水凍りて草上白布を晒すが如し」の光景であった。嘉峪「関は嘉峪山の西麓に建ち、門甍空に聳えたり」と目を見張る城構えであった。ここで哲信は砂糖茶か白飴により、腹痛と下痢を来した。すでに薬は使い切っており、車両に横たわり必死で苦痛に耐えながらの旅となった。

二十二日粛州（現酒泉）で四日間滞在する羽目になっ

た。従僕同士の諍いが原因であった。出発して道中は雪が降り続いたが、六日で甘州（現張掖）に着いた。

祁連山脈の北麓にある甘州では、電報局に行き、着電がないか問い合わせるものの何もなかった。一頭の馬が病に倒れ、この地で死んだため結局二日間滞在した。

十二月十一日涼州（現武威）に着く。この地に四世紀末後涼を建国した呂光により亀茲国から連れてこられた鳩摩羅什が、長安に招致されるまで十五年年間忍従した。この間ひたすら中国語と漢文の習得に励んだ。また七世紀玄奘は天竺に行くため長安を出発、ここ涼州で求めに応じ一か月滞在、商人や住民へ最初の経典講義をしている。二大訳僧ゆかりの地であった

涼州に着くとすぐに電報局に行った。その日には着信はなかったが、次の日哲信宛小包を電報局が誤って粛州に転送したことが分かり、その返送を待つことにした。

その間まず大雲寺にいった。伽藍のない寺には「西夏（一〇三八―一二二七）チベット系李氏建国都興慶府）の碑」といわれるものがあり、表には西夏文字（西夏で漢字をもとに考案された文字）で、裏にはその訳文が漢字で刻まれた石碑（正式名「重修護国寺観応塔碑」）であった。着く前から武威ではこの碑文の拓本を採りたかった。すでに西夏文字は使用されておらず幻の文字であったが、この碑文の発見により西夏文字の解読が可能となった。哲信・賢雄も大英博物館で見た古代エジプト象形文字（ヒエログリフ）解読の手掛かりとなったロゼッタストーンの中国版といえるものであった。西夏研究には欠くことのできない重要なもので、幸いにも一本（一両か）出し、三張を得ることができた。

次に大雲寺の大鐘楼を見学した。寺は「元末兵焚に罹り、その重修募主は日本沙門志満である」旨が碑に見られ、日本人僧が関わり明代に建てられた鐘楼のみが残っていた。

次の日長安に行くまで後涼国王呂光によりこの地に留め置かれた鳩摩羅什が、八角十二層の塔前で経典を講じたとされる羅什寺に赴いた。寺は修復され丹青鮮やかであった。

二人の浄土真宗僧は「鳩摩羅什三蔵訳経処と伝ふ」とされるこの塔の前にたたずみ、遥か五胡十六国時代の鳩摩羅什に思いはせた。この寺の本尊は浄土真宗と同じ「弥陀」であった。

宿に帰ると誤って粛州に届けられた舎弟哲乗からの小包が届いていた。

哲信は、

「喜び極まりて未だ縅を開かずして手自ら震ふ」

とその嬉しさを表した。

この中には四通の書信と時計二個、鏡、英文電信コード、地図が同封されていた。

開封劈頭先ず知ったのは、一月十七日明如上人が還化されたことであった。思い起こせばホータンからタクラマカン砂漠縦断を企て、タリム河の渡船場に着く二日前で久々に人家を見た日であった。

「京都の報恩講に参集せし諸国の門信徒は如何に悲嘆せしか。想をこの時に馳せば腸九廻せんとす」

と一月十七日のことを思い出し、ただただ長嘆するばかりであった。クチャで受け取った光瑞からの電報を、上海から予定より二カ月早く打たれたことを訝ったが、哲信と賢雄はこれでようやく納得できた。

光瑞からの親書が入っていた。哲信は、

「真に一年有余にして懇命を蒙る。感激曷ぞ堪へん」

と具体的には明らかにしていないが、新たな指示に感涙した。

先輩上原芳太郎からの書も入っていた。光瑞の印度探遊の様子が書き留められていた。

探検の仲間本多恵隆からの書状もあった。インドで光瑞一行と離れオランダ領ジャワ・スマトラに赴いたが、熱病に罹りカルカッタで一か月療養したことや印度班の様子が記されていた。内容は光瑞がカルカッタを出発するまでの事であるが、二人にとっては「最大新聞なり」と最も知りたい情報であった。

弟の書にはこれから訪ねる蘭州の状況やそこから西安までの諸駅の事情が詳細に記され、「謝するに余りあり」と感謝するしかなかった。

また故郷三原の慈母や兄弟などの近況について無事を知らせる書状も入っており、「恰も郷信に接するの想ひあり」と、遠く離れた河西回廊から望郷の思いに浸った。

薄々考えることもあった明如法主の死には茫然自失の態であったが、五、六回再読し、「万感胸臆を攪破せん」とするのであった。

涼州武威を十四日出発して蘭州に向かった。一週間の旅程であった。河西回廊主要都市を含む甘粛州の省都で、嘗て金城と呼ばれ繁栄した。黄河に沿って細長く開け、長安から河西回廊や青海方面に通ずる要衝都市である。

十二月二十一日到着、正月と旧正月（中国の正月）をはさみ二月六日まで一か月半と長期滞在した。日記に記したように光瑞から送金された残りの露国貨幣を清の銀塊に両替することと、西安までの馬・車両の手配に手間取ったからである。また西安にいる哲乗から次のような電報を受け取った。

「蘭州洋務局、日本人渡邊、堀、有過貴地否回電」

この電報以降哲乗とは書信や電報により煩瑣に連絡を取り合うことができた。それでも哲信は「帰心矢の如く一日千秋の思いあるに、一か月有余を徒消せし遺憾は筆舌の外に在り」とその胸中を明かした。

二十一日には「すでに書信を発す。七日の後着せん」との報の通り、光瑞をはじめ多くの書状が同封されていた。

光瑞は親書の中で前年八月盆に京都を出発して中国上海に上陸、二十四日には漢口、九月末には西安にいることが記され、哲乗はそのまま兄を迎えるため西安に滞在させるとのことであった。

手紙の中に同じ探検隊として英・仏で一緒に旅行し、文学寮の恩師でもある藤井宣正が印度の調査を終え、渡航中マルセイユにて客死した知らせが入っていた。藤井は留学生の中では最年長であり、すでに仏教学者として著名であった。かれの学識に敬服していた哲信は、この報に接し「公私の上において哀惜痛悼に堪えず」と悲しみは大きかった。行李の中には宣正の書き上げた「支那歴代に於ける西域諸国情の抜粋」の草稿が入れてあり、これを「尊号前安置して焚香読経」して弔った。「嗚呼哀し」とその時の心情を記した。

この地に滞在した一か月半露国通の哲信は、日本との関係悪化に関心を払った。

年末の甘粛省総督への表敬訪問の折には「日露既に干戈を交えしか」と尋ねている。総督は「否。露国は満州に蟠居して中国に返還せず。英米日三国は不平を鳴らすも未だ戦端を開かず」と答えた。総督は最初横柄な態度で日本の若い僧侶に応対したが、二人の西欧留学、その後の中央アジア探検談を聞いて態度を改めた。日露の話になると知識が豊富で的確な哲信に敬服し、「頗る慇懃な礼を以てし、自ら送りて第一門に至る」と記した。若い二人ではあったが、日本国を代表する立派な外交官でもあった。

当地で二カ月遅れた十一月「タイムス」の報道を読んで「日露の関係は切迫」しており、この形勢より推し測ると七十日経過した今日、「開戦せる時期」に当たるのではと記している。情報の少ない中国奥地で正確な推測をしていることには驚かされる。事実開戦はそのわずか一週間後のことである。

また電報局員とも親しくなり、お別れ会まで開いた。後で局員との親交が役に立つことになる。

二月七日旅程三週間を見込む西安へ、二人は馬に乗り向かった。人通りも多いが米肉・馬糧を買い入れた。蘭州と西安を結ぶこの幹道では、西に向かう駱駝のキャラバンに出会ったが、皆「茶と布」を積み込んでいた。ちょうど中間にあたる道教の聖地といわれる平涼に十一日目の十八日に着いた。宿では日露開戦の風聞があった。

次の日電報局に赴き着信があるか尋ねたが、否であった。仕方なく帰るとすぐに着電ある旨使いが来訪、二人は馬に乗り急いで局に出向いた。そこには蘭州で親しくしていた局員が気を利かし、緊急に二人に知らせるものであった。「密行日本渡堀鑑、一路福星、貴国興俄二十三、二十七両次交戦、大獲勝」との電報で、遂に日露は開戦、初戦で日本が勝利したことを知らせるものであった。

渡邊はこの電報に接し、

「二月八日と十二日に我らは大勝を獲たるものの、おそらくは海戦なるべし。海戦は我らに利なるは欧人もつとに予想せる処。開戦の理由は満州問題ならん。

而して真に勝負を決するのは、満州西北の野の陸戦に在らん。前途遼遠、国民は一朝の勝利に酔わず、大いに堅忍奮起の要あらん」

と露国をよく知る渡邊ならでの、感想と今後の見通しを記している。哲信は冷静に両国の戦力から情報の極端に少ない中、両国決戦の地まで見事に予測していた。

涼州を出て三日目にこの街道を選んだ理由の一つ彬県（現咸陽市）大仏寺石窟を訪れた。唐の太宗が創建した大仏寺と百三十の石窟が集まり威容を放っている。

この石窟群は唐初期から盛唐期のものでは最も大きく精美と言われ、特に高さ二十㍍の大仏像は仏面と同じ高さで拝むことができ、「仏眼巨大なる為、人をして畏怖せしむる」の観ありと評した。これを写真で記録した。

二十八日秦の始皇帝が都とした咸陽に着いた。西安まであと一日の距離である。店で二人が夕飯を食べ終えた時、「舎弟哲乗が突如入り来て五年来の久潤を叙す。喜び甚し」と突然の再会に驚くとともに、その時の嬉しさを言い表した。哲乗は西安で後一日が待ちきれず、咸陽まで出向いて来たのであった。

別の店に移り、哲乗からまず故郷三原の慈母の手書を渡され拝した。ロンドンからの書信や日本・英国の雑誌新聞など次々に読んだ。また光瑞猊下のこと、探検隊のその後、本願寺、郷里等々聞きたいことは山ほどあった。

哲信の日記は次の日到着した西安に三週間滞在したが、その間の記載は欠いているので、詳細は不明である。

西安滞在中哲信・哲乗・賢雄の三人は、夜も眠らず語り合ったことは間違いない。三人の会話は途切れることはなかったので記録できなかったのであろう。

西安では玄奘が印度から将来した経典を漢訳した慈恩寺を三人で訪ねたことは確かであろう。そこでは玄奘が持ち帰った梵語の経典や仏像など収蔵するため建立された六十㍍余の大雁塔や翻訳場であった翻経院を視察したことであろう。唐代の高僧義浄ゆかりの小雁塔（薦福寺）や市街の鐘楼、太鼓で時刻を告げた鼓楼を視察、さらに中心部を取り巻く城壁にも上ったことだろう。

また今後のことについて三人で熱心に議論し合ったことも間違いない。光瑞からの新しい指示は「哲信は中央アジアからの将来品を日本に持ち帰ること。賢雄と哲乗

は中国に残り北京に赴け」という非情ともいえるものであった。三人はやっと一緒に帰国することができると思っていたが、日露開戦がそれを許さなかった。

日露両国はまず対馬海峡の制海権をめぐる戦となった。二月下旬から日本海軍は露国旅順艦隊を港内に封鎖する「旅順港口閉塞作戦」を敢行するが失敗、多くの将兵を失った。陸軍は満州における露国陸軍との会戦に備え、三個師団からなる第一軍を開戦と同時に仁川に上陸させ、鴨緑江、満州を目指し進軍中であった。五月には第二軍は中国遼東半島上陸を目指していた。

開戦後いち早く動いたのは、浄土真宗本願寺派であった。法主光瑞は満韓をめぐる日露の争いが起きることを早くから予想していた。哲信や足利瑞義を露国サンクトペテルブルクに留学を命じたのもこのためであった。日露は陸では満州で、海では日本海・東シナ海で会戦すると予測された。日本最大の門徒を抱える浄土真宗本願寺派はこれまで嘗てない多くの死者を出すことは必定であった。満州・中国北東部への僧侶派遣は待ったなしの緊急課題であった。外地が戦場であることから、語学のできる僧侶は不可欠であった。これまで多くの苦労を重ねた賢雄や哲乗の二人をこのまま中国で働かせることに躊躇はなかった。彼らは若くて頑強であった。一方大金を使いその末の将来品を捨ておくわけにはいかなかった。

とにかく哲信一人で日本に持ち帰らせ、その後に哲信も再び中国に派遣することにしたのである。

三人は三月二十二日西安を出立した。

三四　帰国

哲信は七頭の騾馬に荷物を積み、漢口に向かう幹道を西安から一日の行程の藍田関で二人に見送くられた。弟哲乗との別れもつらいが、パミール高原から西域南道、タクラマカン砂漠、北道そして河西回廊、西安まで一年半の間一緒だった堀賢雄との別れはひとしおであった。哲信は日記には賢雄の事についてはほとんど記していないが、さすがにここでは「別に望みて感頗る深し」と記した。これからは一人で日本まで荷物を運ばねばならない。

この要道は黄河と長江の分水嶺をなす泰嶺山脈を越え、乾燥する黄土の畑作地帯から、雨量の多い緑豊かな稲作地帯の長江側に出ることになる。人々の往来も頻瑣で駱駝の隊商も多くみられるので不安のない街道であった。山頂からは「眺望頗る雄大、四山は霞中に筍立周遍」する、中国らしい大陸の壮大の風景に出会った。商州（現商洛）から一山越えて竜駒寨に着いた。ここは漢江の上流丹江が流れる船着場として商業が盛んな活気のある街であった。ここで従僕一人とともに舟を利用する旅とした。

三月末の両岸は緑樹が続き川底は浅く、浅瀬に出会えば舟夫がおりて引っ張り、急瀬では陸に上がり操縦して激突を回避する、中国ならでは舟旅であった。

十日で漢江につながる老河口（現光化）に寝ている間に到着、港に帆柱林立し商店は櫛の如き並んでいる大港町であった。そこから漢江の本流を下る漢口（現武漢）行の大船に乗り換えた。途中湖北省第三の都市襄陽を経由、漢口に着いたのは四月十八日であった。ここで長江と合流する。次の日上陸日本領事館に行き、西安からの電報を受け取った。まだ二人は「本命に接せず」としてそのまま滞在していることがわかった。

漢口から長江で上海に行くため、商船会社に赴き大行李の保管を依頼した。ここには日本人が多く居住しており、トランクを携え日本旅館に投じた。

九巻を重ねた哲信の日記は四月十九日で終わっている。最後の記載は「暫く旅装を解く」と記載されている。

漢口から長江を使い南京を経由して上海に行ったのは間違いなかろう。数日乗船待ちをして上海から神戸行きの商船で帰国したものと思われる。神戸に着いたのは明治三十七年（一九〇四）五月四日であった。

哲信にとって足掛け五年ぶりの懐かしい日本であった。

しかし渡邊哲信の帰国を報じた新聞は何処にもなく、まことにさびしいものであった。

一年前の三月光瑞が長崎に着き京都西本願寺に帰山したときには、真宗門徒が日夜を問わず沿線に並び、京都では門徒だけでなく洛中の人々から大歓迎された。京都駅から馬車に乗り本願寺までの間は立錐の余地のない人で埋め尽くされた。新聞各紙は西欧留学、中央アジア・印度探検、帰国歓迎ぶりを大々的に報じた。

無論印度の仏教聖地を探索し終えた直後カルカッタで父二十一世光尊を亡くし、外国で法主に就任するという悲劇の新法主帰国という話題性だけではなかった。ロンドンからベルギーに船で渡り、鉄道を乗り継ぎロシアから中央アジアに入った。そしてパミール高原を踏破してタリム盆地に出てカシュガル・ヤルカンドを経て、新門という立場にありながら危険極まりないフンザ道を日本人として初めて通り抜けた。印度ではガンダーラ・仏教聖地特に王舎城を調査、霊鷲山の発見は大きな成果であった。

こうした大探検を最大宗派浄土真宗本願寺派門主であり、明治天皇の皇太子嘉仁親王の義兄にあたる高貴な人が、命を顧みず西欧列強諸国の探検隊に伍して成果を上げた。多くの人が驚きと大胆な行動に賛辞を贈った。

しかし学術的に大谷探検隊を世界にそして後世に伝えることになったのは、三十歳に満たない若き渡邊哲信と堀賢雄二人の、無謀ともいえる中央アジア探検という大紀行があったればこそのものであった。

特にキジル千仏洞の発見は特筆に値するものであった。またホータンやクチャから発掘、将来した人物頭部像は仏教東漸の道をはっきり残すシルクロードの至宝と言える芸術性の高い史料であった。

これだけ大きな成果を残した日本初の中央アジア探検は、明治のこの時代誰も考えは及ばなかった。光瑞の「埋もれた仏教遺蹟は仏教徒のわれわれの手で発掘する」ことを実現した渡邊・堀二人の偉業は、今日でも光輝き続けている。

光瑞が帰国した一九〇三年春は露国と次第に緊張状況に至りつつあったが、明治の日本人が背伸びしてでも西欧列強諸国と肩を並べることに躍起となっていた時期であった。光瑞自身の探検はその成果内容より、話題性と西欧列強諸国に仲間入りしたいという願望が背景にあった。

一方寂しいものとなった哲信の帰国は、既に露国と開戦、日本国民は戦局に一喜一憂している時であった。

開戦後日本海軍連合艦隊による露国旅順太平洋艦隊封鎖のための旅順港口閉塞作戦は失敗、三月下旬の第二回も再び完遂できなかった。

日本の新聞や民衆の興味は大国露国との戦争以外には何もなかった。大きな足跡を残した渡邊の帰国を報じた新聞が一つもなかったのもやむを得なかった。

戦争が二人の偉業を日本人に忘れさせた。

一足先に帰国した哲信であったが数か月日本で過ごしただけで、激戦の満州遼陽に従征、従軍布教や門徒の戦死者を弔った。会戦が終わる秋には北京に赴き数年間滞在した。

堀賢雄は哲信と西安で別れた後北京に赴いた。住職となる蓮照寺の編纂する略歴には「一九〇四年帰朝」としている。

はたして二人は北京で再会できたのであろうか。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

高山右近（六）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

瞬時の決断

右近は再び秀吉からのキリスト教棄教指示書に目を通した。冷静に読み直してみると、キリスト教の本質には何も触れず、伝道結果のみを悪と指摘しており、これでは議論にならない。問答無用の「棄教指示」に他ならない。その内容は

① キリシタンの掟は悪魔である。
② 有力な武将や兵士、また高槻等の領民に伝道したことは好まない。
③ 神社を破壊したことは堪忍しがたい。
④ 今後も秀吉に仕えることを希望するならばキリシタンを信仰を棄教せよ。

というものであり、秀吉の言ってきている内容に対して、右近は死を覚悟して自分の主張をそのまま「返書」として簡潔明確に記載した。その要旨は

① 自分は、何時いかなる時も、関白殿下に無礼な振る舞いをしたことはない。
② 高槻・明石の領民をキリシタンにしたことは、キリシタンの神に対する右近の信仰上の手柄である。
③ 自分はいかなる代償をもってしても、キリシタン信仰、キリシタンの神デウスによる霊魂の救いの教理とを捨てる意思はない。従って即時関白殿下に明石六万石の所領を返上する。

と認めて花押を押して白紙に包み、使者の前に行き「大変お待たせ申し上げた。失礼をお許しいただきたい。恐れながら関白様にこの返書をお渡し頂きたい」と言って渡した。

自室に戻った右近は、自分の返書の控えを見直して、

明石領の返上を自分から言ってしまったことは、自分から秀吉への決別を宣言したことになる。これに対して秀吉がどのように出てくるか。死罪＝切腹、明石領没収となれば、家臣全員が路頭に迷うこととなるので、家臣にいつ伝えるべきか、また、現在明石にいる妻、父、子ども達にいつ伝えるべきか、何れにしても秀吉の出方が分からなければ対応の仕様がない。最悪の場合、家臣にも、家族にも何も言えないまま死罪になるかもわからない。秀吉からの指示書と、自分が書いた返書の要点を書いて懐に入れておくか、などと考えているときに、また陣所の入り口が騒がしくなってきた。時刻は酉の刻（現在の午後六時）近くになっているが秀吉からの返書としては早すぎる、と思っているときに梶田が顔面蒼白なルイス・フロイス師を連れてきた。人払いした後、フロイス師は座ると同時に

「今夕申の刻（現在の午後四時）過ぎに関白殿下の使者がコエリョ師が乗船しているフェスタ船にやってきて、関白秀吉からの書状を置いて帰った。丁度そこに私がいたので、私がその書状を読んでコエリョ師に伝えました」

そこまで聞いた右近は、兼ねて自分が懸念していたことが現実化したかと驚いて、座りなおしてフロイス師の説明を急かすように

「その内容は？」

と言った。それに対してフロイス師は関白秀吉からの書状の内容（注 ①）を次のように説明した。

① 日本は神国である。宣教師は日本国内で邪法を弘めていることはよくない。

② 日本は神国であるにもかかわらず、キリシタンが神社・仏閣を壊していることは不届きである。罰せられるべきであり、今後は全て秀吉の命に従うことを命ずる。

③ バテレンは全員二十日以内に日本から立ち去れ。

④ 商船は商売のためであるから、キリシタンとは別問題である。

⑤ 今後、神と仏の教えを妨害しなければ、日本に来ることは自由である。

と書かれていたと右近に伝えた。それを聞いた右近は「同じ時刻頃、関白殿下の使者がここに来て、右近はキリシタンを棄教せよ、との指示が伝えられた。私は返書で以ってきっぱりとお断りして、更に明石領を即座に関白殿下にお返しする、とも書いた」

右近はさらに続けて

「そのほかのことでフロイス師がご存知のことはないか」

と、少しでも早く関白秀吉の動きの全貌を掴まなければとの思いでフロイス師に質問したが

「コエリョ師は関白殿下の指示書の内容を聞くと同時に、私に高山様のところにすぐ行け、と指示され、自らは小西行長様を訪ねられました」

「コエリョ師は関白殿下の島津征伐では、キリシタン諸大名の協力のもとに島津勢を薩摩に押し込め、博多に凱旋されました。夕方前には関白殿下御自ら、コエリョ師が乗船しているフェスタ船をお訪ねになられ、ご機嫌でお帰りになられたました。その関白殿下が、同じ日で何刻もかからないうちに、バテレンは二十日以内に日本を去れ、という正反対になられたのか全く理解できないとおっしゃっていました」

「今回の関白殿下の動きの全貌が分からないと対応方法が出てこない。右近としては右近の返書に関白殿下がどのように対応なさるかを待つしかない。即座に死を迫ってくるかもわからない」

「高山様、高山様のところに来た指示書の筆跡はわかりますか」

とのフロイス師の質問に、右近は我ながらまだそこまで頭が回っていないことに気づき、改めて秀吉からの指示書を広げて

「フロイス師、この筆跡は関白殿下の侍医、施薬院全宗の筆跡ですね。キリシタン嫌いの施薬院全宗が絡んでいるのですね。施薬院全宗は現在では関白殿下の外交交渉も行うほど信頼され、噂では島津征伐中に、関白殿下の寝所が代わる都度、女性調達も役目になっていたとか」

「高山様、いろいろと有難うございました。コエリョ師と共に情報を集め、分かり次第高山様にお伝えします」

と言って、コエリョ師のフェスタ船に戻って行った。

（注 ①）吉利支丹伴天連追放令（松浦博物館蔵　海老沢有道著高山右近　一三五頁より引用）

定

一　日本は神国たる處、きりしたん国より邪法を授候儀、太以不可然候事。

二　其國郡之者を近附、門徒になし、神社佛閣を打破らせ、前代未聞候。國郡在所知行等給人に被下候儀者、當座之事候。天下よりの御法度を相守諸事可得其意處、下々として猥義曲事事。

三　伴天連其智恵之法を以、心さし次第ニ檀那を持候と被思召候へバ、如右日域之佛法を相破事曲事候條、伴天連儀日本之地ニハおかせられ間敷候間、今日より廿日之間ニ用意仕可替帰國候。其中に下々伴天連に不謂族申懸もの在之ハ、曲事たるへき事。

四　黒船の儀ハ商買之事候間、格別に候之條、年月を経諸事売買いたすべき事。

五　自今以後佛法のさまたけを不成輩ハ、商人之儀ハ不及申、いつれにてもきりしたん國より往還くるしからす候條、可成其意事。

巳　上

天正十五年六月十九日

丁度この頃、秀吉は筥崎宮の奥まった一室で、施薬院全宗に右近からの返書を読ませ、聴き終わって一瞬言葉が無かった。秀吉も右近を忠実無比な臣下と信頼していただけに、臣下として謝るどころか、自ら明石領返上と秀吉への決別を宣言しているこの回答には驚いていた。秀吉のその瞬間の表情をチラと見た施薬院全宗は、秀吉の口から「死罪、切腹」の言葉が出るのではないかと恐れていた。秀吉は怒り狂った声で

「利休を呼べ！」

と怒声を発したので、控えの間にいた茶坊主が廊下に飛び出した。間もなく茶坊主の後を早足でやってきた千利休は、秀吉の部屋の前の廊下に平伏して

「利休、お呼びで参りました」

と言うと、まだ怒りが収まらない秀吉の声は高く

「利休！　右近はそなたの茶の弟子だな。キリシタンをやめよ、という予の命令にこんな返事をよこした。予の家臣であることを忘れ、ましてや関白からの直接の命令を恐れることもなく、身の程知らずというか、不届き極まりない。ここへきてこれに目を通せ」

との秀吉の言葉に、座敷の入り口に座ると、秀吉が右近からの返書を放り投げてよこした。拾い上げて眼を通した利休は

「拝見させていただきました」

と言って返書を秀吉の膝元に戻すと

「明日にでも右近のところに行き、そなたが予の考えを説明して右近を説得せよ。それでも右近が聞き入れないのであれば、バテレン同様に直ちに追放だ」

の怒声に利休は

「はっ。明日朝右近殿の陣屋に赴き、関白様のご意向を伝え説得してまいりましょう」

と言って立ち上がり、自室に戻った。利休は秀吉の部屋で立ちあがったとき、偶然秀吉の顔が利休の目の端に入った。それはうつむいたまま、他人にはわからないように涙を拭っていた秀吉の顔だった。それは、今の時点で最も信頼し、将来を期待していた家臣に、秀吉としては裏切られたというか、自分の言うことを聞かないどころか逆に右近からの決別宣言に、己の孤独を強烈に感じていたのではなかろうかと利休は思ったが、このことは誰にも言うまいと口を堅く結んで廊下を静かに歩いていた。

利休は右近の「信仰」が右近の命（いのち）そのものであることをよく承知していたので、右近の返書に書かれていることについて分かりすぎるほど良く分かっていた。秀吉の命令なので右近のところに行くが、説得の自信は全くなかった。

丁度この頃、コエリョ師からバテレンは二十日以内に

日本を去れとの秀吉の命令を聞いた小西行長が右近の陣屋に来た。右近から秀吉の「キリシタン棄教」の指示書を見せられて驚いた行長は

「それで貴公はどのような返事をしたのか」

と質問したので、右近が返書の下書きを見せると、さっと目を通した行長は

「驚いた。貴公、これでは関白との喧嘩ではないか。切腹の命令が出るかもわからない。何故、表向きだけでもキリシタンを捨てる形にしなかったのだ。関白もこれから十年も生きることはない。それまでの我慢ではないか」

「ご親切は有難い。しかし吾輩はデウスとの誓いを破ることは命に代えてもできない。キリシタン信仰に関する家族との誓い、家臣との誓い、領民との誓いはいずれも命を取られても替え難い誓いだ。貴公の言う表向きだけでもキリシタンを捨てろ、という便法はデウスにも、家臣にも、領民に対してもできないのだ。拙者は殺される前に家臣、領民には自分の思いを良く話すつもりだ。もし、追放になれば明石六万石を捨てて、流浪の民となるが信仰は捨てない。デウスの教えにある通り、人は神と富の両方に仕えることはできないのだ」

それを聞いた小西行長は、同じキリシタンとして言葉はなかった。暫くお互いに沈黙の後、行長は、

「筥崎宮には、施薬院全宗、石田三成、千利休等が関白様のお傍に侍っているようであるが、何も知らなかったことにして、明日、関白様にご挨拶かたがた様子を見て来よう」

と言って帰って行った。

茶室で

自室で一人になった右近は、裏庭に面した奥の一室に自分だけの「仮の」というにふさわしい点前だけが何とかできる茶室を作っていたのでそこに向かった。右近は一人茶室にいるときが、気持ちが静穏になり、正しい思考と正しい感情でいることができることをわきまえていた。

そこで、一人沈思黙考のときが過ぎていた。今夕からのわが身に振りかかってきた大問題について、自分の返書に対する秀吉の回答は、まだ来ていないが「死罪＝切腹」か、軽くて追放・明石領召し上げということになることは覚悟するが、それを家臣や妻ジュスタ、父ダリオにいつ話すか、秀吉からの最後通告があるまでは誰にも話すことはできない。もしこれが漏れれば、家臣の中には勝手にここ筥崎陣営から抜き出て明石の自分の家族の下に帰り、右近処分後の自分の生きる道を探し始める者が出るかもわからない。となると風説は乱れ飛び、明石領内は収集がつかなくなるであろう。従って秀吉からの最終通告を待って速やかに公表し、家族にもそのとき連

絡するしかない。
そして今回の秀吉の動きについて考えてみた。小西行長にキリシタン棄教命令が来ていないことは、他のキリシタン大名の蒲生氏郷にも棄教命令は行っていないだろう。とすると今回の秀吉の自分に対するキリシタン棄教命令は、全面的にキリシタンを弾圧することではなく、命がけでキリシタン布教に来ているイエズス会バテレンを我国から追放して布教を根絶し、国内的には、バテレン布教の柱石的実力者で多くの信徒を持っている右近に、キリシタンをやめさせることに目的があったのではないか。
それと、秀吉はイエズス会に大きな二つの不信を持ったのではないかと思った。一つは、コエリョの秀吉への言葉が、ポルトガルの軍事力を見せつける目的で、マカオにいるポルトガルの他国侵略も可能な軍船の秀吉への協力を申し出たこと、更にコエリョの乗船しているフェスタ船の銃装備を見たことにより、秀吉はコエリョの衣の下に「鎧」を見たのではなかろうか。その鎧とは、バテレンを先鋒としてその国に上陸させ、その後、キリシタン布教状況を見て、バテレン保護を口実に我が国にも侵略を開始する危険を感じたのではなかろうか。
二つ目は、ポルトガルが日本に敬意を表しているのは表向きだけで、日本を奴隷市場と見ているのではないか。現にポルトガル船が日本人奴隷の搬送事実があったことである。それは、例えば九州内部の相次ぐ戦乱で農作物は獲れず疲弊しきっている足軽や農民は、戦に参加することを収入のチャンスとばかりに自国の軍勢に多数参加して、攻め入った国の住民を家族ごと拉致して、それをポルトガル船に奴隷として売渡してその対価を収入としていた。その事実をこの島津討伐戦中に聞いた秀吉は、ポルトガル船による日本人奴隷売買を禁止するとともに、バテレンがこの一端に加担しているのではないかと疑った。(これについてオルガンティーノ師はポルトガル本国に、ポルトガル船の日本人奴隷搬送の禁止指示を出すよう本国に要請した)
右近は茶室で朝を迎えた。昨夜来、秀吉への返書の内容について、自分自身の気持ちに何度も確認していた。
秀吉のキリシタン棄教命令に従わない、先ほどの小西行長の言ではないが、関白に喧嘩を売るような返書を認めたわけであるから、死の覚悟は十分にできている。ただ、キリシタンは自殺が禁じられているので、死の立会人等にその旨を話して、死に装束で畳に座り、梶田に介錯してもらうことを考えていた。
キリシタン禁教命令に、表向きだけ従ってこの場をつくろうことは、デウスへの誓いを破ることとなり、右近に従ってキリシタンになって信仰生活を始めている家臣・領民をも裏切ることになるので絶対に出来ない。何

よりも自分を裏切ることはできない。
茶室から出て自室に戻るときに、一睡もしていない右近を心配して見ている小姓たちの姿があったが、右近は無言で自室に入った。
妻や父に一言も話すことができないまま、捕えられて死罪になる事を思い、妻ジュスタと父ダリオ宛に「関白秀吉からキリシタン棄教を命ぜられたが、死をもってお断りした」とのみ記載して、この二人であれば、この簡単な記載ですべてわかってくれる、と思いながら夫々のあて名を記載して文箱に入れた。
暫くすると家臣の梶田が部屋の外から
「殿、蒲生氏郷様がお見えです」
の声が終るか終わらないうちに、蒲生氏郷が部屋に入ってきた。座ると同時に
「貴公、どうなっているんだ。関白のキリシタン棄教の指示に、高山右近がピシャリと断ったと大変な噂になっている。心配してやってきたんだ」
の言葉に右近は友情に感謝しながら、小西行長に話した自分の譲れない気持ちを語った。予想される「死罪」「明石領没収」などに右近としてそれらへの対応は考えているのか、などの質問をした後
「拙者が関白のところに一緒に行って詫びるから、返書は心得違いをいたしました、と言えないか」
と、何とかこの問題を収拾しようとしたが、右近が前言を繰り返すのみであったので
「千利休が茶の師匠として、関白の依頼を受けて貴公を説得に来るらしい」
との情報を右近に伝えて帰って行った。
右近は自分を落ち着かせようと思って、再び茶室に向かった。利休が来たら二人だけの時を過ごしたいと思い、点前の支度をした。炉を掘ることも、躙り口も作ることもできないので、躙り口は庭に面した引き戸を二尺位しか開かないように工夫していた。炉はないので炭火と灰を入れた容器の上に釜を置き、その右側に、濃い茶色の布を敷いて、そこに茶碗、棗、茶杓、茶筅などを並べた。茶碗はその形が意志強固を感じさせる半筒形の高麗茶碗を用意した。
部屋の飾りは、寺の裏庭にあった枯れた細い竹筒を花入れにして、名も知らない小さな野の花を一輪だけ活け、掲げた書は自分の好みでたまたま持ってきていた、細川忠興から譲られた扇面の書だけにした。
茶室内は、裏庭に面した障子から入ってくる光だけで、昼間でも薄暗く、茶室の落ち着きには丁度良い具合になっている。
右近はここで祈っている時は「神デウスと右近を隔て

るものが何もない」状態を感じていた。

巳の刻を少し回った頃、小姓が利休の来訪を知らせた。右近は出迎えに出て、茶室の露地に見立てた裏庭にまわり、躙り口に見立てた二尺しか開かない扉から茶室に案内した。

利休は茶室に入ると立ったまま

「高山殿、見事な茶室を作られましたな。この部屋には高山殿が、誰が何と言おうと自分の考えは変わらない、と主張される思いが漲っています。この古くて細い竹筒に活けられた野の花の置き方から、高山殿の訴えがこちらに響いてきます。あの半筒形の高麗茶碗と言い、枯れた細い竹筒の花入れ、高山殿の心に秘めた厳しさが感じられ、空いていた部屋を茶室として急拵えしたものとは言え、究極の美と侘び・寂の世界のあり方を見事に表しています。右近殿、流石！習得なされましたな」

と言ってから正客用の座布団に座った。右近は

「陣中の仮住まい、師がお越しになると聞き、あり合わせの急拵えの仮茶室でございます。お褒めに預かり恐悦に存じます」

「高山殿、あの扇面の書、『辿りつけどいまだ山麓』は高山殿らしい奢りへの戒めですな」

と言って再度茶室を見まわした後

「高山殿、少し教えていただきたいが、茶の世界とキリシタンの教えとの共通するところはありますか」

右近は、覚悟していた関白秀吉からの叱責の言葉が出てこないのを不思議に思いながら

「大変難しい質問でございます。いつも師がお作りになっておられる茶室から教えられることは、人は己の心を飾ってはいけないということです。間違っていたらご教授ください。師の茶室は簡素を極める中に、簡素ならではの究極の美を感じます。それは、人間にとっても同じこと、人の心も日常の過ごし方も簡素であるべきと存じます。キリシタンの神デウスは、人は他者＝隣人に仕えること、他者＝隣人に欲するものを与えよと命じています。自分だけが贅沢な暮らしをすることを戒めています。その思いの底に茶の侘び・寂の世界との共通するところがあるかと存じます」

「ところで高山殿が高槻で、御父上と共に領民、確か農民の棺を担いだとか有名なお話も伝わっていますが」

「はい、キリシタンの神デウスは、金持ちや身分の高いものが、貧乏人や身分の低い人たちを蔑むことを禁じています。むしろその人たちと共に喜び、共に悲しむ生活を要求しています。ですから、農民の棺を領民と共に担いだわけで、キリシタンの世界では当然のことです」

利休が大きく頷いたのを見て

「お茶を差し上げたいと思いますが、いかがでしょうか」

「はい、この素晴らしい茶室で、遠慮なく頂戴しましょう」

の答えに、炭火も、釜の湯も、使用する各種茶器も前もって用意していたので、右近は直ちに作法通りの御点前に移った。

作法通りの静かな時間が過ぎてから、利休は

「高山殿は、関白様が何故一夜にして貴殿に対するキリシタン棄教命令と、バテレン全員の追放令を出したのかお分かりか」

「その点が全く分からなく、一時は関白様のところにお伺いしてお聞きしたいと思った次第です。それはできないことですが」

「まず、この九州平定に大阪をお立ちになるときに、関白様がどのような備えをなさったかを良くお考え下さい。関白様不在中に、京阪で何事かしでかす危険のある人物、つまり一向宗の顕如と足利将軍家を九州に伴われましたな。それはご存知でしょう。それで関白様は今回の九州平定が終った段階で、まだ関白様に臣従していない小田原の北条、仙台の伊達対策の戦を起こすでしょう」

利休はここまで言って右近を見た。右近は利休の次の言葉を待っている。これから利休が言おうとすることについて、右近が分かっていないことを感じて

「関白様は大阪にお戻りになって、直ぐにも北条攻めに向われる。小田原北条家は難攻不落の城を誇っている。更に仙台の伊達が関白様に恭順の意を示すかどうか。伊達の動向次第では北条攻めも長期化する可能性もある」

右近は

「それらがどうして右近へのキリシタン棄教命令や、バテレン全員の国外追放に繋がるのですか」

利休は出されている煎茶を一口飲んで

「そこなんですよ。今回の九州平定では、キリシタン大名が、高山殿を筆頭に十字架の旗を翻して見事な戦いぶりを見せられました。戦闘の時以外でも、キリシタン大名は高山殿を中心に後方で常に協調して同じ行動をとっておられた。それをつぶさにご覧になっておられた関白様は、キリシタンの間では親子兄弟よりも結びつきが固いとお感じになられた」

それは当然ではないか、と言いたげな右近の顔を見つめて

「関白様にはポルトガルの小型武装船のフェスタ船に自らお乗りになって、隅々までご覧になった。あの小型武装船はキリシタン布教には不要のものだ。バテレン達にはいつでも戦闘できる準備ができている。それと船内でのコエリョの態度は尊大であった。これは、キリシタン宣教が進んだ段階で、キリシタン大名に国内で蜂起させて、コエリョ等は海からキリシタン大名を支援すれば、九州平定は可能だ。その間にマカオからスペイン・ポルトガルの艦隊を呼び寄せることもできる。そうすれば我

が国はスペイン・ポルトガルに占領されるであろう」
驚いて聞いている右近を見つめ利休はさらに続けて
「だから、関白様が九州を去るにあたって、そのような危険のあるバテレン全員を国外に追放して、キリシタン大名の中で最も影響力のある高山殿にキリシタンをやめさせることが必要とお考えになられた。そうすれば他のキリシタン大名は動きが取れなくなるとお考えのようです」
利休は一息ついて
「今まで利休が申し上げたことは関白様のご意向であり、それによって高山殿が先の返書の考えを変えないのであれば、明石六万石は没収する。行き先が困るであろうから、先に肥後の大名にした佐々成正の与力として仕えることは許す、と仰っていますがお受けになりますか」
「関白様のお考えを詳しくお教えいただき有難うございました。関白様がそのようにお考えになっておられることは存じ上げませんでした。お教え戴きまことに有難うございました。しかし、勝手とお思いになられるでしょうが、例え一家が流浪しても右近はキリシタン信仰はやめません。佐々成正殿への与力として仕えることも辞退いたします」
と答えてから
「この右近の考えを関白様に返書として認めますので、関白様にお届けください」
と言って自室に戻り、認め終わった返書を利休に渡した。
この後二人は茶道の師弟に戻り、侘び寂の世界と人間の生き方など久しぶりにお互いの考えを話し合ったが、利休が最後に
「高山殿、今の世では全ての大名は上を向いていて、自分の俸禄を増やす、地位を上げる、領土の拡張を図るなどに全力を出し切っています。そこに高山殿はご自分の生き方・信念を曲げないで、相手が関白であろうと自己主張を貫いてゆかれる、俸禄とか領土とかには全く目をくれない。人として最高の生き方ではないでしょうか」
と一言言って秀吉のもとに戻って行った。

秀吉　右近の返書への対応

利休が宮崎宮にいる秀吉のところに戻ると、利休の帰りが遅いと秀吉はいらいらしていた。渡された右近の返書を開くや否や
「馬鹿者！　右近は追放だ。追放の命令書を持って行け！」
と大声を上げた。
怒鳴り終わって後ろを向いている秀吉を、利休が盗み見るようにチラッと見ると、肩を落として項垂れて、右手のこぶしを額に当てていた。秀吉が利休を右近のところにやったのは、師弟関係から右近を詫びに連れてくることを期待していたがそれが叶わなかった無念さをこらえているのではないかと思った。

秀吉の近くに侍っていた施薬院全宗は、直ちに別室に下がって追放命令書を書き上げて秀吉に見せた後、自分の従者に
「関白秀吉様から高山右近への命令書だ。高山右近に直接渡すように」
と命じた。

秀吉は、部屋を出ようとする利休に
「近こう参れ」
と扇子で利休を招き
「右近はどうして予の気持ちが分からないのだ。並の扱いであれば、最初の返書で切腹ものだ。更に右近が考える時間を置いて、茶の湯の師匠であるそなたを差し向けて考え直すように仕向け、その上佐々成正に預ける道まで用意してやったものを、すべて断ってくるとは・・・。予は佐々成正に預けても時機を見て予のところに戻す考えであることが右近にはわからなかったのか」
「はい、関白様。私の説得努力が至らないばかりに、関白様の高山様への暖かい思いを伝えきれなかったことをお詫びします」
「そなたが悪いのではない。キリシタンではデウスとかいうキリシタンの神が絶対者で、この世の最高権力者である予よりも偉いのじゃ。だから、キリシタンを野放しにすると、予の命令にも背く反乱がおこる危険性がある。加えてキリシタンの間には親子兄弟より硬い結びつきと信頼関係があり、それにバテレンの力が加わったとき、どのようなことが起きるかを考えると、今回のバテレン追放と右近のキリシタン棄教命令は仕方がなかったのだ」
と自分の心の内を述懐した。

千利休は自室に戻り、障子を開けると外から心地よい風が入ってきた。風を肌に感じ、セミの声を耳で聞きながら目を閉じると、天下を支配する関白秀吉ではあるが、孤独で淋しい秀吉の姿が目に浮かんできた。秀吉には譜代の有力な家臣は少ない。高山右近という人物を高く評価し、その忠勤ぶりに、秀吉としては数少ない譜代の家臣並に育ててゆく気持ちが強かった。そこに、利休まで説得に行かせた結果も、高山右近から秀吉は見限られたというか、明石領返上という縁切りを突き付けられたショックは大きく、秀吉としては誰にも言えずにこらえている。それでもなお切腹＝死罪を言わなかったことは、まだ、将来どこかで近臣として仕えさせることを考えているのか、そんなことが頭に浮かんできた。

返書を認めたときから、心の中ではこの時を待っていた。

追放！　これでキリストへの証しができた。城を没収され追放になる。この時代、これは武士社会では「死」よりも屈辱的なことであったが、自分にはキリスト以外ない。神と富の両者に仕える信仰的矛盾からの解放、これからキリストへの愛と奉仕のみをもって生きることができること、また、独裁者関白秀吉から信仰と自らの心の自由を勝ち取ったこと、これらの解放感は、内心ではむしろ勝利感に等しかった。

然し、これから予想される茨の道程を思う時、その苦難は自分がキリストに従うが故の殉教者の道程であり、その道を歩んでゆくことにより、さらに自分の信仰が深まるであろうことをデウスに感謝した。

時刻は酉の刻（現在の午後六時）となっている。家臣等を避けて右近は一人茶室に籠り、妻ジュスタ、父ダリオ、明石船上城留守居役の家老安藤勘解由などそれぞれに手紙を書いた。妻ジュスタと父ダリオ宛には事の経緯を知らせると共に、これからの行き先は別途早馬をもって連絡するので、もう帰ることのない覚悟の支度をして待っているように、また明石船上城留守居役家老の安藤勘解由には、明日、ここにいる全員を明石に帰す。城にある金子は、城明渡しに必要な費用を除いて、全て予に仕えてくれた者たちに配分せよ。委細は家老にお任せする。後のことは明日の飛脚で連絡する。等を認め終わった後、明石の教会の定住神父プレネスティーノ神父と日本宣教の指導者オルガンティーノ神父にも事の次第を知らせる手紙を書いた。

書きながら右近はそれらの手紙に「これから自分はどこに行き何をする」かを具体的に何も書けない自分が無責任のように思えたが、今のところ如何ともしがたい。短い文面にも自分の新たな出発に、少なくとも自分が落ち込んではいないことが理解されることを祈りながら書いていった。追って二便・三便と出すことが必要であり、連絡通知用の紙と硯と筆は多めに用意することとした。

書き終えた手紙を明石に届けるため、重臣の横瀬に昨日来の経緯を簡単に話して、それぞれに手紙を届けてもらうように依頼し、右近追放で明石領内外が騒然とすることのないように、安藤勘解由家老と共に留守を守っている家臣を指揮して、船上城受取の使者に城引き渡しの対応をするよう指示して、茶室から自室に移った。

自室に入った右近は重臣の梶田を呼び、明日朝卯の刻（午前六時）に家臣を全員集合させるよう指示した。梶田も昨夜来の秀吉の使者を始め来訪者が多く、何れも厳しい表情をしていたため「何かあったな」とは感じていたが、右近に聞くわけにはいかなかった。

家臣たちに

翌朝卯の刻には全員が寺の本堂に集まり、右近が来るのを緊張して待っていた。昨夜来の秀吉の使者の来訪などから、やはり全員ただ事ではないと思っていた。

右近は話し始めた。

「朝早くから集めたのはほかでもない。昨夜来関白の使者が来たことで、皆に何事がが起こったのかと心配をかけていると思う。実は関白から予にキリシタン信仰を棄教せよ、という命令と、いま日本にいるバテレン全員に二十日以内に日本から退去するよう国外追放の命令が出た。その上に棄教を断った予は、明石領没収、更に予は追放となった」

ここまで言うと、全員「えっ！」と驚いて右近を見つめた。右近はその反応を見て

「予は今まで皆と共に関白には誠心誠意尽してきた。その限りでは明石領没収の上追放などの処分を受けるいわれは全くない。ではどうしてこうなったか。その原因は関白の必要以上の用心深さにある。関白は九州が平定できたので、いよいよ日本全土の平定を考えて、まだ関白に臣従していない小田原北条氏の征伐に出向き、さらにその先の仙台伊達氏攻めも考えている。それらの戦で関白が大阪を留守にしている間に、バテレンがキリシタン大名と手を組んで蜂起する危険がある、などと全くあり得ないことを考えた結果の命令である」

申の刻（現在の午後四時）になろうとしている時刻に、昨日に引続き関白秀吉の使者が、厳しい面持ちで右近に直接会いたいと言って木戸を通り、梶田に案内されて右近のところにやってきた。

右近は使者から関白の命令書を受け取り一読した後、記載してある明石領没収、右近は追放、陣所は明日中に引き払へ、明石の船上城及び枝吉城は追って没収に行くので、家老等が受け渡し可能の状況で控えること、などの記載事項を再確認して

「関白様に全て承知仕った、とお伝えください」

と言って使者を帰した。

右近　心中ひそかな勝利感

右近は昨夕関白秀吉からキリシタン棄教命令を受け、

右近は座りなおして、一同の顔を一人づつ見渡して
「先ず結論から話そう。予は関白のキリシタン棄教命令を即座に文書で拒絶した。その時点では死＝切腹を覚悟していたが、結果として明石六万石の没収と予の追放処分が下された。予は己の信仰を守り通すために関白の棄教命令を断ったものであることは皆も分かってくれると思う。これから己の人生を、キリシタンの一人として我らの主なるデウスの栄光のために活動したいと思っている。ただ、この際最も気がかりなのは汝らのことである。汝らは予と共に関白に仕え、いとも大いなる危険の中に身命を捧げて予に尽してくれた。汝らは戦場において勇気ある活動を常に行い、それによって『十字架の旗を翻す高山軍団』という少なからぬ名声と栄誉を獲得した。予が遺憾に思うことは、汝らの獲得した名声と栄誉に対して、予自らが何ら報いることができないことである。しかし、汝らここに集まっている全員はキリシタンであるので、予がこの世に生ある限りデウスに汝らのことを祈り続ける。このことをこの場で汝らにはっきり約束しよう。汝らが信仰を守り続けるかぎり、デウスは来世においては現世における信仰の報いとして、無限の栄光をお与え下さるであろう」
再度一人づつの顔を見渡した右近は
「私の家臣であり、キリシタンである汝らに願いたいことは、予と離れても勇気をもって信仰に踏みとどまり、良きキリシタンとして生き続けていただきたい。キリシタンの信仰生活は、①神を信仰すること　②神を信頼すること　③神の定めた務めを行うこと、この三つのことに極まる。予はそれを期待し、どこにいても汝らのことは祈り続けている。その為に、かねて予が書いて渡した十戒と慈悲の十四ヶ条の務めを日々実行をするようにして頂きたい。それにキリシタンの基本的に守るべき道が記載されている。予と離れていても、汝らが勇気をもって信仰の道を歩み続けることを切に望む」
右近は湯呑茶碗を取り、のどを潤して
「これからの汝たちのことであるが、汝らが妻子や家族のため、生活の糧と保護を容易に求められるところに赴かれるが良いと言わざるを得ない。天下の武将である予の友人たちに、汝らのことについてのお願い状を書く。その武将たちの中には予に対する好意から、汝らを喜んで召し抱え、汝らにふさわしい封禄を付与してくれる武将たちも少なくはないと思う」
続けて
「最後に一言だけ申し添える。世の武士道では、予のように所領没収、追放の処分は恥辱の最たるものであって、どうして男らしく潔く腹を切って処分に対抗しないのか、という輩もいるであろう。汝らも承知の通り、キリシタンの神ゼウスは自刃行為を禁止している。神父方の説教にもあったように、主イエス・キリストがご在世

の時、弟子たちに告げられた最も大切なこと、『すべての人間が来世に救われるまことの道を弘めよ』の御言葉に生ある限り従ってゆくことが、デウスが予に命じていることと確信したからである。長い話になったが、予は今夕旅の一歩を踏み出す。汝らも元気で頑張ってほしい。世話になったことを改めて礼を申す」
と話し終わると、席上は
「殿、どこまでも殿についてゆきます。是非ご一緒させていただきたい」
「我も」
「我も」
という声が飛び交った。重臣の梶田が立ち上がって
「皆、静かにしてくれ。殿のお気持ちが分からないのか。あまりにも突然の話で、皆の混乱は良く分かる。皆の気持ちもわかるが、ここは殿に全てお任せすべきだ。殿こそどれだけお辛い思いをされてきたのか、察してもあまりある。我々は今日の夕方までにこの陣屋を全て片付けて、元の通りの状態にしてお寺に返さなければならない。午の刻までに片づけを終わり、羊の刻には、いや遅くも申の刻には全員明石に向かいたいと思う。お寺への陣屋返却の挨拶等は全て梶田が行う」
の指示で、家臣たちは散会した。

右近は小姓篠田伊織ほか二人に自分の荷物をまとめさせ、まとまったところで三人に
「予はこれから室津（注　②）に行き、そこからの先は安全なところで暫く隠れる。勿論家族は一緒になる。予は主に予の手伝いというか、隠れていても関係する諸大名への連絡などを手伝ってくれる供が必要となる。その連絡内容は全て秘密事項となる。汝ら三名は予と行動を共にしてくれないか」
と、命令ではなく相談するような口調で話したところ三人とも
「有難うございます。是非お供させていただきたいと思っていました」
と考えるまでもない、と言いたげな即答があったので、右近は
「今夕予と四人で出かけるときは、他の者には船まで荷物持ちと言いつくろうように」
と指示した後、篠田伊織に
「今から、この宮崎宮から遠くないところの漁村に行き、今夕酉の刻に博多湾内の能古島迄四人を送ってくれる漁師を見つけてきてくれ。明日朝、能小島に小西行長の家臣が迎えに来てくれることになっている。船を出してくれる漁師への謝礼は十分にするように」
と指示して篠田伊織を使いに出した。

今夕いよいよ流浪の一歩を踏み出すに当たって、小西行長から
「瀬戸内海は海賊が横行しているから、単独でどこにも行くな。明日朝、能古島に家臣が小西家の旗を立てた船で迎えに行く。何はともあれ室津まで小西家の船で送ろう。小西家の旗が立っていれば海賊は手を出さない」
と密かに連絡してきてくれた。それ以外は、自分のことは勿論のこと、高山一家がこれからどうするということが何も決まっていないことを一瞬不安に感じたが、すべて神の御心のままにと祈ることで不安は消えた。

（註 ②） 室津は兵庫県たつの市にあり、赤穂と姫路の中間に位置し、播磨灘に面した瀬戸内海の重要な港町で、一三〇〇年の歴史を持つ。当時は小西行長領であった。

（続く）

参考文献
完訳ルイス・フロイス日本史1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社
茶の湯の心で聖書を読めば　高橋敏夫　フォレストブックス

高山右近　海老沢有道　吉川弘文館
高山右近　加賀乙彦　講談社
キリシタン大名高山右近　谷　真介　パウロ文庫
キリシタン千利休　山田無庵　河出書房新社
利休にたずねよ　山本兼一　文芸文庫
キリシタン史の新発見　岸野久・村井早苗　雄山閣
千利休「侘びの創造者」　平凡社別冊太陽
茶　利休と今をつなぐ　千　宗屋　同右
武士道　新渡戸稲造　新潮社
茶の本　岡倉天心　岩波文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　講談社学術文庫
日本史年表　歴史学研究会編　岩波書店
日本キリシタン史　海老沢有道　塙書房
高山右近　北国新聞社
どちりなきりしたん　水野　聡訳　能文社
どちりなきりしたん　海老沢有道校註　岩波書店
人身売買・奴隷・拉致の日本史　渡邊大門　柏書房
悠遠の人高山右近　塩見弘子　ドン・ボスコ社

私の伊達政宗像を訪ねて（その四－④）

安藤　剛

その一：伊達政宗のルーツ
　念西と朝宗と宗村
　福島に伊達氏発祥の地を訪ねて
その二：十七代政宗の誕生
　父輝宗の惨劇
　二本松の粟ノ須古戦場を訪ねて
その三：小田原陣の遅参
　弟小次郎の刺殺
　大悲願寺の白萩文書を訪ねて
その四：政宗と秀吉と家康
　海外への夢か野望か
　遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて
その五：仙台城と瑞鳳殿
　政宗の逸話と書状
　日比谷に政宗終焉の地を訪ねて

【慶長遣欧使節を訪ねて】

①仙台市博物館に常長持帰資料を訪ねて

二〇一五年七月、東日本大震災の津波に襲われた被災地沿岸一〇〇〇キロをリレーで走る復興支援イベントに参加した翌日、二年前にユネスコ世界記憶遺産に登録された慶長遣欧使節持ち帰り資料を見学すべく、青葉山麓の仙台城三の丸跡に建つ仙台市博物館を訪ねた。

正面玄関前のモニュメント「遥―昨日・今日・明日―」は、藤原吉志子の作、三人の郵便配達員が手紙を手に岩山を攀じ登って受け渡す巨大な彫刻で『今日は昨日を丸ごとしっかり受け止めること、そして明日へ宛てて便りすること、こうして二一世紀へ、もっと未来へと遺言の配達は続いて行く』の意、博物館に相応しい造形である。

常設展の政宗所用黒漆塗五枚胴具足は、目玉展示物である。主君政宗に殉死した菅野重成が拝領した具足で、政宗の墓所・瑞鳳殿から出土したものと同形式だという。

兜銘に天文四年とあり、政宗が生まれる三〇年前に造られた兜に弦月形の前立を取り付けたのだろう。シンプルで斬新なデザインは、政宗の美的センスを伝えている。

慶長遣欧使節資料展示室で「仙台市史・特別編8」に全文が紹介されているアマーティ著「伊達政宗遣欧使節記（一六一五年イタリア語版）」を拝観した。

著者のアマーティは、ローマの歴史学者で、マドリードからローマまで常長一行の通訳として行動を共にしており、宣教師ソテロの日本での布教活動と政宗との出会いから使節派遣に至る経緯、使節団の出帆からスペイン国王やローマ教皇との謁見までが詳細に記されている。

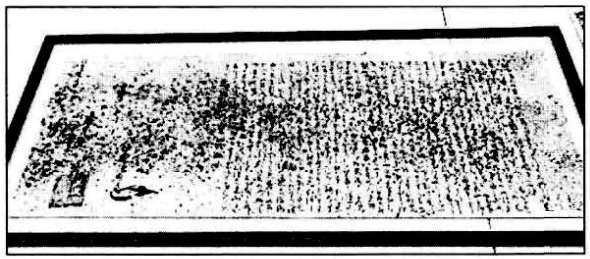
アマーティは、使節団がローマ滞在中の一六一五年に教皇パウロ五世に「遣欧使節記」を献上して褒美に七五ドゥカートを拝領し、ボルゲーゼ枢機卿に「日本略記」を献呈してその功績でローマ市民権が授与されている。

ローマ教皇側が、スペイン国王に謁見してローマに向かう使節団の動向や日本の国内情勢を探る目的でアマーティを随行させ報告させたといわれており、ソテロはそんな事情を承知で、自分たち使節団にとって都合のいい情報をアマーティに提供して書かせていたようである。

「遣欧使節記」は、奥州王国の広大さ肥沃さ、奥州国王の家柄や歴史の古さ、政宗の有能さ卓越さ、ソテロ自身の日本での活躍と政宗との交誼の経緯、ソテロがいかに政宗にカトリック教理を説いたか、政宗がキリスト教を理解していかに領内への洗礼の触れを出したかなど、遣欧使節を派遣した政宗をしきりに持ち上げていたが、第九章「政宗が瑞巌寺の仏像を破壊させてキリスト教を支援した」の下りには、虚言を弄するソテロが見えてくる。

遣欧使節が持参した政宗書状の前に直行した。「セビリァ市宛て書状」には、ソテロの出身地であるセビリァと友好親善を図りたい、スペイン国王とローマ教皇のもとに使節を遣わすので力添えを願いたい、とあるという。

「ローマ教皇宛て書状」の和文（下写真）とラテン語訳文の二通には、仙台領内の布教を許可するのでフランシスコ会宣教師を派遣して欲しい、そしてメキシコと交易したいのでスペイン国王への仲介の労をとって欲しい、と書かれているという。



これら三点の政宗書状は、いずれも長さ一メートル幅三六センチの大きな料紙に、金銀箔が撒らされ、和文やラテン語が美しく墨書され、政宗の署名と花押と大型朱印が押捺された、格調高い高級美術工芸品である。

地球の裏側からやって来た日本の侍が持参する、金銀に煌めく豪華絢爛で高度な文化の香り高い大判の書状を受け取ったローマ教皇の感嘆は、如何ばかりだったろう。

相手の御肝を抜くのが得意なダテ男、政宗ならではのパフォーマンスではないだろうか。

黄変してなお煌びやかなローマ教皇宛て政宗書状を前に、政宗の署名と花押が一体でないことに疑問を抱いた。

博物館内の情報資料センターで購入した「伊達政宗文書（仙台市博物館収蔵資料図録9）」に掲載されている七五点の政宗文書と見比べてみても、やはりおかしい。

セキレイで有名な花押が、政宗と書かれた署名の下ではなく、官位の伊達陸奥守の下に描かれていたことである。図録に収録されている政宗文書の花押は、四一点の全てが政宗の署名のすぐ下に描かれている。

教皇宛て書状の署名の下には、花押でなく印章が捺されていた。印章が署名の下に捺された文書は、図録収録の慶長以降の九点中一点のみで、八点は日付の下である。しかも花押と印章の両方がある政宗文書は、図録に一枚もなく、花押と印章は使い分けされていたようである。

資料図録に収録されている「59伝馬黒印状」の解説に興味深い記事があった。「本資料に捺された印章は、慶長六年から寛永八年まで使用が認められ、その多くが伝馬状である。ただし、特異な例として慶長遣欧使節が携えた政宗の親書に朱印として用いられたことがある」

なんと宿駅に酒を運ぶための伝馬を出すように命じる伝馬状に捺された格の低い黒印が、南蛮国宛ての国書ともいうべき公式文書に捺されていたのである。

この伝馬状用印章は、五九×五五ミリの大判印章で、印文が「藤原氏」、朱印が使われたのは天正期だけで、以降の藩政文書は全て黒印だったというが、ここでは伝馬状用の黒印に朱肉を付けて、朱印に転用されていた。

長さ一メートルの大きな書状に、伊達氏ルーツの日本最高氏族藤原氏の名が刻印された伝馬状用の大型黒印を色鮮やかな朱印に転用して、さらに使用目的が違うはずの花押と印章を並べてしまう。破天荒で何でもありの無造作というか大胆さは、伊達政宗の面目躍如ではないか。

ローマ教皇宛てラテン語訳文の書状（次頁写真）も、花押の右余白が狭く全体の構図がアンバランスである。

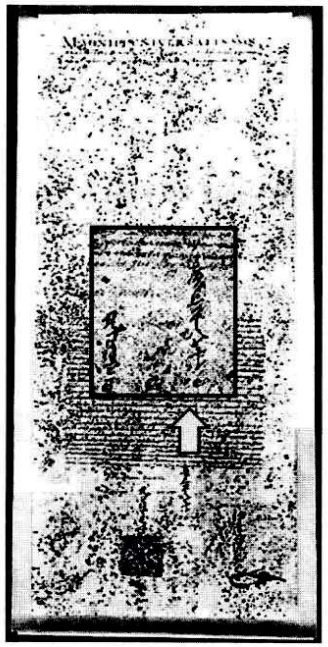
左から署名・印章と年号と官位・花押の配列は、和文書状と同じだが、全体の位置が右に寄り過ぎている。政宗の花押が書かれた後に、和文書状と同じ大きさに揃えるため、料紙の右側を縦に裁断したようにみえる。

ラテン語本文が、縦型料紙の中央に収まっているのは、政宗の署名や花押など和文字が書かれて右側を裁断した後に、中央の白地部分に本文が書かれたからだろう。

更によく見ると、横文字のラテン語本文の最終行が、その下に縦書きされた年号の慶の頭と被っており、最後五行の行間が少し詰まっているようにみえる（左写真）。どうみても本文の後に年号が書かれたとは思えない。

拙い仮説だが、署名朱印と年号と官位花押が、本文より先に書かれ、右端を詰めた後、二つ折りの下半分にラテン語の本文を書き込んでいったため、年号の慶の字と被り、行間が狭くなってしまったのではないだろうか。

政宗が後から書き込まれた本文内容を確認していなかった可能性は高い。政宗はソテロに全幅の信頼を寄せており、メキシコとの交易さえうまくいけばと、本文の書き込み内容は一任していたのかもしれない。



アマーティの「遣欧使節記」に「有名な寺院で坊主たちが偶像に対する敬意を捨てることを拒んだので、怒った政宗は坊主ごと地面に火を放てと命じた。この時、国王の命令を実行したのが今回の大使として来た支倉である」とあったが、信長の比叡山焼き討ちの話ではないか。

かかる虚言をアマーティに書かせたソテロである。政宗が内容を確認できる和文の書状には書かれていない、交渉を有利に進めるためだけでなく、ソテロ個人に有利になるような請願などを、ラテン語で捏造・改竄・加筆はなかったのだろうか。この書状をローマ教皇に手渡したのは常長だが、常長がソテロの書いたラテン語を読めるはずもなく、ソテロへの疑惑は広がるばかりである。

後日「仙台市史・特別編8」に掲載されているローマ教皇宛て政宗書状の和文とラテン語文を比較してみた。

教皇にスペイン国王との交易交渉の仲介を依頼する下りについて、和文書状に「某の国とのひすはんにや之あひた近国に而御座候条、向後ゑすはんやの大帝皇とんひりつへ様と可申談候、如其、其元被相調可被下候」とあり、東京大学史料編纂所の現代語訳に「私の国とメキシコの間はお互いに近い国ですので、この先、さらにスペインの国王フェリペ様とも対談するつもりでおります。そうすることができるように、あなた様が準備をととのえてください（金井圓・五野井隆史共訳）」とあった。

ラテン語書状は「スペイン国王の権能と支配下にあるメキシコ諸国が我が領国から遠くないので、その王とキリスト教諸国との交わりを熱望し、その友誼関係を持つことを願望している。聖下の権威の介入があれば、このことが成功すると私は固く信じています。最高権威者である聖下が以上のことに着手して目的を達成させて下さるようへりくだって懇願いたします」と訳されていた。

和文書状の文面は、石母田家に現存している「南蛮への御条文」とほぼ同文であり、ラテン語文も和文とほぼ同一内容で、より丁寧な語調で綴られており、ソテロへの捏造と改竄の疑惑は、私の考え過ぎだったようだが、改めて政宗書状を読み直して新たな疑問が湧いてきた。

和文書状の冒頭に「パウロ様之御足を、奥州之屋形伊達政宗、謹而奉吸申上候」とあった。教皇の御足に接吻して申上げるとは、キリスト教界の書状の常套句なのだろうが、どうみても政宗が書かせた文章とは思えない。

いくら政宗がキリスト教に理解を示していたとはいえ天下に野望を抱いていた政宗である。しかも大坂の陣前夜の緊迫していた時に、御足に接吻してと、そこまでへり下った柔な文面を承知で署名するものだろうか。

セビリァ市とローマ教皇宛ての政宗書状だけでなく、メキシ副王宛書状と和平協定、聖フランシスコ会メキシコ宗務総取締宛、同修道会管区長宛、スペイン国王宛書状と協約案、インディアス宗務総長宛て政宗書状の出状日（作成日）は、すべて慶長十八年九月四日である。

政宗はこの一〇通近い書状内容を、一日で吟味できたのだろうか。政宗は概要説明を受けて署名しただけで、後は信頼する家臣に任せていたのではないだろうか。

石母田家に政宗書状の案文が現存しており、キリシタンの良き理解者でもあった重臣石母田大膳がソテロと協議して本文を書き上げたのだろう。政宗の夢と野望を手玉に取ったソテロの力量に改めて畏敬の念を抱いた。

展示室内に展示されている常長持帰り資料のうち国宝「ローマ教皇パウロ五世像」は、短剣類と共に常長が政宗に直接献上した物として伊達家で大切に保管されてきたが、その他の「支倉常長像」「ロザリオの聖母像」「洗礼者聖ヨハネ像メダイ残欠」「ロザリオ」「十字架及びメダイ」「祭服」等は、いずれも政宗の死の四年後に、常長の嫡男常頼が家人にキリシタンが発覚したことで切腹となり、支倉家が断絶された際に、常頼の自宅から没収された物といわれている。

これら没収品は、政宗の命で渡欧して国禁の宣教師派遣を要請し、自ら洗礼を受けてキリシタンとなった常長の個人的な持ち帰り品ではあるが、政宗の幕府への反逆の証拠になりうる品でもある。なぜ仙台藩はこれら危険な没収品を速やかに破棄処分しなかったのだろうか。

江戸後期の仙台藩医大槻玄澤の著書「金城秘韞」に、常長の持ち帰り資料について「往事ハ、一年ニ一度ノ蟲干ノ外ハ、厳封シテアリシモノナリ」と、評定所内に大切に保管されていた様子が記されている。

常頼の切腹で断絶された支倉家が再興された一六七〇年は、仙台藩二代藩主忠宗の十三回忌の年である。もし回忌法要の恩赦で再興が許されたのだとしたら、幕府のキリシタン禁制下で、なお慶長遣欧使節派遣は、藩祖政宗の偉業として仙台藩の密かな誇りだったに違いない。

最後に展示室に隣接するミニシアターで「支倉常長―光と影」を視聴した。客もまばらで、貸切り同然だった。キリシタン禁制令が発布される中、ヨーロッパに渡って、宣教師の派遣とメキシコとの交易を交渉する常長の苦悩と挫折が、二〇分の放映によく纏められていた。

マドリードに八ケ月半、ローマに二ケ月半、容易に進展しない交渉に明け暮れ、セルビァに戻りスペイン国王の政宗宛返書を待つこと一年二ケ月、虚しくスペインとメキシコを追われるようにマニラに渡った常長は、代船を得て帰国するまでさらに二年、帰国後はキリシタン弾圧の日本で幽閉の身となり、二年後に病死したという。

題名に「常長の光と影」とあったが、ソテロに踊らされた政宗の夢と野望に翻弄された常長の旅は「招かざる客人の光と影」だったのかもしれない。

②石巻にサン・ファン・バウティスタ号を訪ねて

慶長遣欧使節団を乗せて太平洋を送迎したサン・ファン・バウティスタ号の復元船が、一九九三年に常長出帆三八〇周年を記念して建造され、石巻市渡波に係留展示されており、仙台市博物館を訪ねたあと、仙台駅からJR仙石線で石巻に向かった。

松島湾沿岸は、東日本大震災の大津波の勢いが湾内の島々に減衰されて大きな被害はなかったが、日本三景の景観を隠すようにコンクリート防潮堤が続いていた。

昼過ぎに石巻駅に到着、レンタサイクルを四時間契約で借り、太平洋を見下ろす日和山に向かった。かなりの急勾配に途中から自転車を押してようやく登り切った。

石巻は、東北最大の北上川の河口に位置し、奥州藤原氏が平泉と京との交流・交易の起点にした良港で、源頼朝の奥州合戦で、御家人葛西清重が武功を挙げて奥州惣奉行に任ぜられると、石巻の日和山に本拠城を構えた。

秀吉の奥州仕置で葛西氏が廃絶され政宗の所領になると、米沢から移封された政宗は、大坂や江戸に倣って水運の拠点となる石巻を新城造営の候補地に考えたという。

日和山の山頂から一望する景観に呆然とした。石巻港から太平洋へ広がる石巻市街地が、大津波に全てが流されてまさに原野と化していた。押し寄せる大津波の映像で何度も見た大屋根のお寺が一軒、ポツンと残っていた。

海岸に下ると、枯れた松の巨木が数本、柱だけの廃家が一軒、廃車二〇数台が原っぱに取り残されたまま、被災から四年経って、この復旧の遅れはどうしたのか。

川幅の広い北上川を渡り六キロほど、石巻線の渡波駅前から牡鹿半島へ右折してサン・ファントンネルを潜るとモダンなサン・ファン館が現れ、眼下に太平洋が広がり復元船サン・ファン・バウティスタ号が覗いて見えた。

サン・ファン館からエスカレーターで高低差三〇メートルの海岸まで下りると、ドック棟に係留された復元船サン・ファン・バウティスタ号が、頭上に迫っていた。

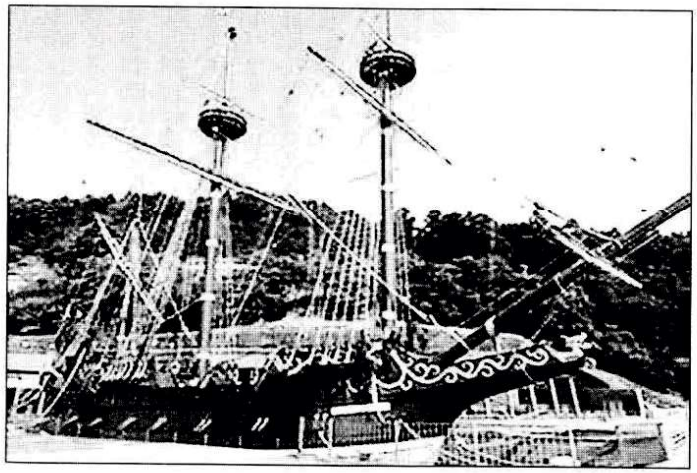
全長五五m、高さ四八m、型幅十一m、総トン数五〇〇トンの木造の大型洋式帆船である（下の写真）。

当時の図面が残っておらず「ボルゲーゼ宮の支倉常長像」の背景に描かれたガレオン船と「貞山公治家記録」に記された使節船の寸法から復元像を推定、木造船工法の船大工を招集して石巻市造船場で建造されたという。

大量の人員と物資を積み込む船倉と外洋の高波に耐える頑強な船体で、船首に阿吽の龍が付けられ、船尾に九曜紋が描かれ、高さ三〇mの三本マストを持つ勇壮な姿は、七つの海を制覇したスペイン無敵艦隊を彷彿させる。

船内の高い船尾楼甲板に腰高壁で仕切られたビスカイノと常長の部屋、グレートキャビンに船長ソテロの部屋が、遮浪甲板には大砲が積まれて海賊対応だったらしい。

サン・ファン・バウティスタ号　復元船
宮城県慶長使節船ミュージアム（石巻市）



上甲板は、乗組員の寝起き場所で、最下層の船艙に食料や貨物が積み込まれ、使節団一八〇人が乗船するにはあまりに狭隘である。さぞ劣悪な居住環境だったろう。

一六一三年一〇月に石巻月ノ浦を出帆、翌一六一四年一月にメキシコのアカプルコに到着、スペインに向かう常長一行を下ろし、翌一六一五年八月に日本へ帰国した。

一六一六年九月に常長を迎えに浦賀を出帆、翌一六一七年三月にアカプルコ到着、翌一六一八年四月にスペインから戻った常長らを乗せてアカプルコを出航、同年八月にマニラに到着したが、翌一六一九年にスペイン艦隊に船体は売却され、その後の消息は不明だという。

サン・ファン・バウティスタ号の船名の由来はなんだったのだろうか。史料にその名が出てくるのは、一六一七年三月十三日付で、メキシコ副王がスペイン国王フェリペ三世宛てに、常長一行を迎えに到着したサン・ファン・バウティスタ号への対応を問い合わせた書簡である。

サンファンは、聖ヨハネのスペイン語表記 San Juan で、旧スペイン領国で地名や人名によく使われるという。では、バウティスタは、どこからきたのだろうか。長崎で殉教した日本二十六聖人にそれらしい名前があった。

秀吉が朝鮮出兵した文禄の役の前年一五九一年に秀吉がフィリピンに入貢を要求すると、翌年にマニラ総督が秀吉に使節を派遣、翌々年に派遣してきた第二次使節の代表が、スペイン人宣教師ペドロ・バウティスタである。

ペドロ・バウティスタは、肥前名護屋で秀吉に謁見、マニラ総督使節として京に住むことが許され、京都・大坂で修道院と病院を開設、一五八七年の秀吉の禁教令でザビエル以来日本布教の先駆けだったイエズス会が布教活動を自粛するなか、遅れて日本にやって来たフランシスコ会の中心人物として、禁教下の日本の国情を無視した布教活動を積極的に展開していたという。

一五九六年のサン・フェリペ号事件で、スペインがキリスト教を利用して日本征服を狙っていると秀吉に疑念を抱かせ、翌年に日本最初の大規模な殉教が行われた。その殉教の中心人物が、ペドロ・バウティスタだった。

京都と大坂でバウティスタら六人のフランシスコ会宣教師と日本人信徒二〇人が捕縛され、耳をそがれて素足で大坂から長崎まで引廻され、西坂の丘で十字架に架けられて、群衆が見守る中、槍で刺し抜かれて殉教した。

この凄惨な受難が、マニラからメキシコ、ヨーロッパに伝わると、禁教下の日本で信仰に命を捧げた殉教が美徳として熱狂的に迎えられ、メキシコ中部のクエルナバカ聖堂に二十六聖人の殉教壁画が描かれて、聖職者の間で異教地日本を目指す布教熱が大いに高まったという。

政宗は、メキシコとの交易交渉を有利に進めるため、使節団が乗船する船名に、当時殉教者として熱狂的に崇められていた日本二十六聖人の中心人物スペイン人バウティスタの名を利用したのではないだろうか。

青葉城資料展示館の主任学芸員大澤慶尋氏が、自身の個人的ブログで興味深い見解を述べられていた。

「常長一行に同行した日本キリシタン代表の伊丹、滝野、野間三人が持参したローマ教皇宛て連署状の中で、処刑

された二十六人の列聖を請願しており、また常長が洗礼を受けた教会のデルカルサス・レアレス修道院の『聖遺物の間』に日本漆器の洋櫃が保管されていたことから、この洋櫃が常長一行の持参したもので、中に日本二十六聖人の聖遺骨、もしかしたらペドロ・バウティスタの聖遺骨が収められていたかもしれない」

この洋櫃は、桃山時代の花樹鳥獣蒔絵螺鈿細工の輸出用漆器で、確かに聖人の骨が収められていたという。

もしスペイン人の歓心を買ってメキシコとの交易交渉を有利に進めるため、使節船に殉教した日本二十六聖人の中心人物バウティスタの名を付け、更に殉教した彼の遺骨を祖国スペインに運ぶ聖者の船に仕組んだのだとしたら、政宗は稀代のエンターテイナーではないだろうか。

二〇一一年三月十一日、東日本大震災の大津波にドック棟に係留展示されていたサン・ファン・バウティスタ号も襲われた。大津波で海底が露わになる強い引き波と押し寄せる高さ六メートルの波に翻弄されて浮き沈みを繰り返す姿は、四〇〇年前に太平洋を横断する姿を彷彿させるものだったという。

津波で一階展示室が全滅し、流失を免れた船も、翌月の強風でマスト二本が折損、二年八ケ月後にようやく修復されたが、大津波に懸命に立ち向かうバウティスタ号のパネルが掲示され、復興のシンボルになっていた。

実は、遣欧使節出帆の二年前、一六一一年十二月二日に太平洋沿岸が慶長三陸地震の大津波に襲われていた。マグニチュード8を超える規模で、津波の高さが一〇～二〇メートル、仙台平野の内陸二・五キロに達しており、伊達治家記録に領内で溺死者一七八三人、駿府記に溺死者五千人とあり、仙台藩は甚大な被害を受けていた。

政宗の海外貿易を目指した遣欧使節派遣は、この震災復興プロジェクトの面を持っていたといわれている。

青葉城資料展示館の大澤慶尋氏から、慶長三陸地震と慶長遣欧使節派遣の関連について貴重なお話を頂いた。

「三陸沿岸測量のためやってきたビスカイノに対し、仙台城で政宗は「スペインの船が自領にやってきてくれたらうれしい」とただ受け身で待つという「受動的な姿勢」で述べています。しかし、その後に三陸沿岸測量中の越喜来で津波に遭遇したビスカイノに、すぐ仙台へ戻ってくるよう呼び戻そうとし、「自ら船を作り、この船でスペイン国王とメキシコ総督に進物を贈り、領内でキリスト教を説く宣教師を求めたい」と言うように自ら求めて動く「能動的な姿勢に」一変しています。この姿勢の一八〇度の突然の変化は、何に起因するのか？『慶長三陸津波』だと思います」

そして「政宗は一六一一年に発生した三陸地震・津波からの復興策の一環としての気持ちも込めて、かねてか

ら希望していたメキシコと仙台領との太平洋貿易を一気に実現させようと、自ら船をつくり震災の一年十一ヶ月後、支倉常長ら慶長遣欧使節を派遣しました。国の存亡の危機に直面した時、決して後ろ向きにならず、積極策を打ち出し、不屈の精神で乗り越えようとした政宗、支倉の思いは、現在東日本大震災から九年を迎えた現代の私たちに、大きな勇気と希望を能えてくれます」と。

二〇一一年の東日本大震災が発生するまで、慶長遣欧使節の研究者の誰ひとり、四〇〇年前に起きた慶長三陸地震に着目することはなかったという。

政宗が仙台に入府して城郭と寺社を建立、城下町の建設と領内の整備を一段落させた時期である。三陸地震津波で甚大な被害を受け、海外との通商により領内の経済を活性させ復興の大きな柱にしようとしたのだろう。

昨年（二〇一九年）二月、現在の復元船の老朽化に伴い、二〇二一年以降に解体して新たな復元船を製作すると宮城県が発表した。大きさは四分の一の繊維強化プラスチック（ＦＲＰ）になるという。

維持管理や費用を考慮したというが、四分の一の大きさでは本物感がない。海に浮かぶ復元船でなくていい、陸上に据え置く模型船でいい、原寸大の木造船であれば十分、政宗と常長の偉業を乗せた歴史の証人として在りし日の姿を後世に残して欲しいものである。

③スペイン旅行：支倉常長の足跡を訪ねて

年号が平成から令和に変わった二〇一九年五月の一〇連休明けに、支倉常長の足跡を訪ねてスペインを旅行してきた。数ある旅行業者とツアーコースの中から、ソテロの故郷であるセビリァがコースに入っているＫ社の「情熱のスペイン八日間」を選んだ。

ツアーコースは、常長一行が辿ったセビリァ→マドリード→バルセロナとは逆回りのバルセロナ→セビリァ→マドリードである。（次頁ツアー図）

成田からブリュッセル乗継でバルセロナまでの飛行時間延べ十四時間は、七五才の老体にはさすがに堪えた。四〇〇年前の常長使節団は、太平洋を三ケ月、大西洋を二ケ月、荒れ狂う大海原を帆船で地球を半周する延べ五ケ月の航海は、さぞ艱難辛苦の連続だったろう。

バルセロナ空港に到着すると、空港ロビーの電飾看板に、世界のメッシ擁する欧州サッカー名門ＦＣバルセロナの九蕃スアレスの雄姿が映し出され、胸にメインパートナー Rakuten のロゴが描かれていた。

楽天の三木谷社長は、仙台のプロ野球球団「楽天イーグルス」のオーナーでもあり、四〇〇年前に常長が結んだ仙台とスペインの絆を今に繋いでいるようである。

バルセロナは、地中海に面したスペイン第二の都市である。常長一行は、首都マドリードでスペイン国王からメキシコとの交易について「かの地ですべてこの協定どおりになされるか見極めた後、認め得るような形で考えていく」と曖昧に回答され、国王諮問機関のインディアス顧問会議からは早期帰国を求められたが、国王の好意で辛うじてローマ行きが許され、バルセロナでローマへの船便を待ちながら、半月ほど滞在していた。先の見えない不安に、常長の心境は如何だったろう。

初日のバルセロナ観光は、おとぎの国のようなグエル公園の後、スペイン観光定番のサグラダ・ファミリアである。十九世紀の天才建築家アントニ・ガウディがその建築に情熱を注いで、その死後もなお建築が続いている壮大な未完の教会寺院である。

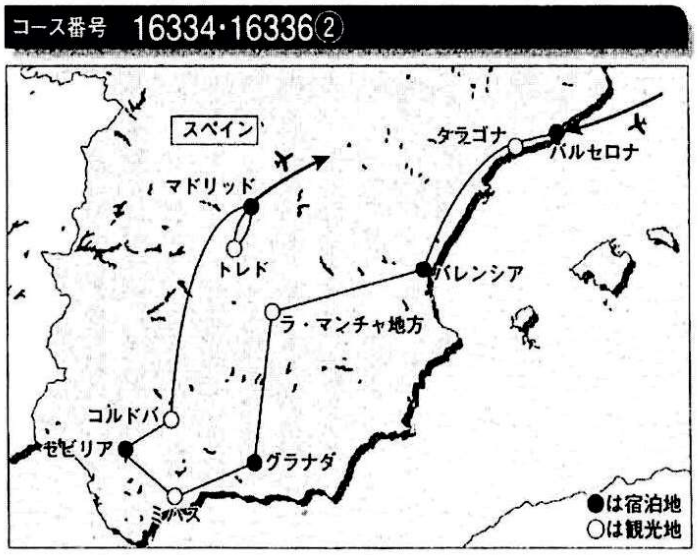
近世と現代の建築思想が混在する巨大な尖塔が建ち並ぶ迫力には圧倒された。東側の泥の尖塔四塔にキリストの生誕が、西側の白い尖塔四塔にキリストの受難が彫刻で装飾され、聖堂内部は、ヤシをモチーフにした白い柱が無数に天井高く林立し、四面に配した多彩色のステンドガラスから差し込む光のシャワーの中に、天蓋の十字架像が神々しくキリストの栄光を表していた。

スペインブランド店の並ぶグラシア通りを散策、地中海をイメージしたガウディ設計のカサ・ミラで、ツアー仲間三三人と初めて乾杯、スペイン料理を堪能して、イベリア半島南西のバレンシアへ向かった。

バレンシアまで延べ三六五キロをひたすら走るバスの車窓に、石灰質の岩山の荒涼とした山野が迫ってきた。

ツアー添乗員さんが、この山岳地帯の裏側にキリスト教の聖地モンセラートがあると案内していた。常長一行

「情熱のスペイン８日間」（２０１９年５月）



が往路に騎馬で立ち寄っており、岩山の中腹にあるベネディクト修道院で、アラブ人の侵略から守り切ったとして有名な奇跡の黒聖母子像に巡礼者に倣って拝礼したという。常長一行の外交交渉の旅は、同時にキリスト教の聖地を巡礼する旅でもあったようだ。

モンセラートについて、マドリードから常長一行に同行していたアマーティが「伊達政宗遣欧使節記」の第九章に「国王（政宗）は日本の七大礼拝所の一つである松島を訪れたが、ここはカタルニアにあるモンセラートのような所で、神々の愛顧を得るため、また罪の許しを乞うために、無数の巡礼者が集まってくる」と書いていた。

常長は、松島瑞巌寺の古くから霊場として信仰を集めていた洞窟群に遠く思いを馳せながら、モンセラートの山岳に棲む修道士たちの聖なる生活に触れて、マドリードで洗礼を受けてきた常長も、改めてキリスト教への信仰を深めていったに違いない。

車窓に流れる荒涼とした世界に生まれたイスラム教とキリスト教の歴史を語る添乗員さんの話に眠気を催しながら、四〇〇年前にこの荒野を馬車と荷車を連ねて黙々と歩んで行く常長一行の姿が、平山郁夫の「シルクロードを行くキャラバン」の絵画のように浮かんできた。

マドリードでスペイン国王に謁見して国王臨席で洗礼まで受けながら、メキシコ交易交渉が進展せず、ローマでは教皇パウロ五世に謁見してローマ市民権証書まで授けられながら、スペイン国王への仲介の明確な回答が得られず、マドリードとバルセロナの荒野六百キロを虚しく往復する常長の焦燥と落胆は如何ばかりだったろう。

二日目は、バレンシアから更にイベリア半島南部のアンダルシア地方へ四八七キロを走ること約七時間、薄茶色の岩山の裾野に、見渡す限りオリーブなど柑橘類が格子模様に植えられ、美しい景観が広がっていた。

オリーブは渇いた痩せた土地でも陽の光さえあれば育つらしく、ここ地中海沿岸が原産地、そのオイルはイスラム教やキリスト教の儀式の聖油に用いられるという。

突然前方に残雪を頂く山並みが現れた。みるみるその美しい山容が迫ってきた。積雪の山脈という意味の名がついたシエラ・ネバダ山脈は、三千メートル級の連峰である。地中海沿岸で雪山を見るとは、想定外の景色の展開に、目は釘づけになっていた。

シエラ・ネバダ山脈の北側山麓に位置するアンダルシアの県都グラナダは、雪解け水を源流にした肥沃な山麓に紀元前八世紀から拓かれた歴史ある都市である。八世紀に北アフリカから侵攻してイベリア半島を支配したイスラム勢力の最後のナスル王朝の首都となり、一四九二年にようやくキリスト教徒軍が奪還したのだという。

五百キロ近いバス旅行で、ようやくグラナダに着いた。

スペイン観光の目玉であるアルハンブラ宮殿に直行、広大な城塞と美しい庭園を二時間余り散策した。

イスラム教徒軍との一〇年に亘るグラナダ攻防戦の末に無血開城されたアルハンブラ宮殿は、スペインにおけるイスラム建築の最高峰といわれ、後にモスクは教会に改築され、イスラム教とキリスト教の建築が融合する宮殿が、イスラム王朝八百年の栄枯盛衰を今に伝えている。

常長はこのアルハンブラ宮殿に寄ってはいないが、八世紀に亘るキリスト教徒の失地回復の宗教戦争の歴史を旅の間に幾たびか聞かされたに違いない。そして相入れない二つの宗教の文化が融合したスペイン独特の文化に触れてどんな感慨を抱いたことだろう。

土地を求めて国盗り合戦を繰り返す日本の戦国武将には到底考えられない、数世紀に亘って信仰のために戦い続けた宗教の力を思い知らされたにちがいない。

夕刻にライトアップされたアルハンブラ宮殿の美しい夜景を遠望、洞窟タブラオでスペイン本場の情熱的で哀愁漂うフラメンコの踊りにしばし酔い痴れた。

ツアー三日目は、グラナダから更に南西へ一七五キロ、メルヘンチックで白壁に花の鉢植えが飾られた白い村ミハスを散策、可愛い洋服やアクセサリーの土産屋でショッピングを楽しみ、親しくなったM夫妻と幌付馬車に相乗りで市内遊覧、遥かに地中海の青い海が望めていた。

ミハスから北へ二四〇キロ、ひまわり畑が広がり、まもなくアンダルシアの州都でスペイン第四の都市セビリァに入った。スペインに行くならぜひセビリァに行ってみたいと、K社のこのツアーを選んだセビリァである。

セビリァは、宣教師ルイス・ソテロの故郷、スペインの代名詞といえるフラメンコと闘牛士の本場で、オペラ「カルメン」「セビリアの理髪師」の舞台でもある。

イベリア半島の南端に位置し、ジブラルタル海峡を挟んだ対岸が北アフリカのモロッコ、地中海航路と大西洋航路の中継地として繁栄し、大航海時代にはスペイン最大の貿易拠点として新大陸との貿易を独占、慶長遣欧使節団のヨーロッパ最初の訪問都市でもある。

ルイス・ソテロは、このセビリァに生まれ、貴族の身分と安穏な生活を捨て、東洋伝道のいばらの道を志してマニラから日本に入り、家康と秀忠に謁見して、江戸で布教と医療活動を精力的に活動していた。

縁あって政宗に出会い、海外への夢を抱かせて、遣欧使節団を率いて故郷セビリァに凱旋帰郷したが、ローマ教皇に謁見して日本での司教就任を願い出るも果たせず、国外追放同然にスペインを追われ、禁教の日本へ密入国するも捕えられ、火炙りの刑で波乱の生涯を閉じた。

セビリァ市街に入ると、薄紫の花を満開に咲かせた街路樹ジャカランダが迎えてくれた。世界三大花木といわ

れ、満開の桜並木を彷彿させる見事な紫色の世界に、誰もがバスの車窓に張り付いてシャッターを切っていた。

バスを下車してスペイン広場に向かった。一九二九年の万博会場に造られたアンダルシア特有の建築様式で、壮大な宮殿の前面に柱廊が半円形に延び、回廊の壁面に歴史的出来事を描いたタイル絵は素晴らしい。アラビアのロレンスやスターウオーズのロケ地になったという。

気温三五度は、さすがに陽射しが強い。セビリァはスペインのフライパンと呼ばれると添乗員さんも悲鳴をあげていた。ジブラルタル海峡を挟んで対岸のサハラ砂漠からの熱風がシエラネバタ山脈に遮られ、五三度の日もあったらしい。まさに情熱の国スペインの暑さである。

セビリァ市街の中心にある大聖堂カテドラルは、ゴシック様式とルネサンス様式が混合するスペイン最大の大聖堂で、ローマのサンピエトロ大聖堂、ロンドンのセントポール寺院に次ぐ規模といわれている。

大聖堂内は見学コースになかったが、四人のスペイン王が棺を担ぐコロンブスの墓があり、探険家コロンブスの晩年の不遇な人生と墓の流転の話は面白かった。

常長一行は、セビリァに約一ケ月滞在したが、この大聖堂で音楽と舞踏の大歓迎を受け、大司教が東方三博士の再来と評したという。いかに歓待されたかが知れる。

大聖堂に付設する高さ九四メートルのヒラルダの塔はセビリァのシンボルで、正気の沙汰ではないかと思うほど美しいという。イスラム教のモスクの尖塔にキリスト教の鐘楼が増築され、塔の先端にヒラルダ（風見）のブロンズ女神像が見えていた（左の写真）。

常長も塔の階段を上ったというが、展望台からの眺望の感慨は如何ばかりだったろう。日本の木造家屋の町並

セビリァ大聖堂とヒラルダの塔
「後世の人々が我々を正気の沙汰ではないかと思うほど美しく壮大な教会を建てよう」（参事会決議のコンセプト）



みとは異次元の石造りの色鮮やかな街並みに、はるばるヨーロッパにやって来た実感を味わったことだろう。

大聖堂に隣接するアルカサル宮殿は、キリスト教と混在するといいながらイスラム様式が強く感じられる城郭で、常長一行の宿泊場所に当てられ、国賓級の待遇だったという。セビリァの名家出身のソテロにとって、東洋の果ての日本から使節団を引き連れての凱旋帰郷でもあり、これからのマドリードでのスペイン国王との交渉に手応えを感じて、得意絶頂だったにちがいない。

アルカサル宮殿に隣接するインディアス古文書館の前で、添乗員さんが「ここですよ」と目配せしてきた。家康と秀忠の宰相レルマ公宛て書状が保管されており、私が支倉常長の足跡を訪ねる目的でこのツアーに参加していることを、覚えてくれていた。

ここに保管されている家康と秀忠の書状は、メキシコとの通商を認めて交渉開始を伝える朱印状で、房総沖に漂着したフィリピン前総督ビベロを幕府船でメキシコに送り届けた際にスペイン側にもたらされたものである。

スペイン国王の返書がキリスト教の容認を求めたため禁教策を採る家康はメキシコ交易を断念、政宗が交渉を引き継いで常長派遣に至った経緯に思いを馳せていた。

家康と秀忠のレルマ公宛て書状の外、常長とソテロのスペイン国王宛て書状や使節団への対応の会議記録などが保管されており、これら書状九四件が日本側のローマ教皇と常長の肖像画とローマ市公民権証書の三件と合わせて、慶長遣欧使節関係資料として日本スペイン共同推薦で、二〇一三年に世界記憶遺産に登録されている。我々の見学コースには入っておらず残念だが致し方ない。

セビリァ観光の最後は、夕暮れのグアダルキビール川沿いに建つ黄金の塔である。正十二角形四階建の城塞で十三世紀に川に沿って街を囲った城壁の守りとして建てられ、かつては外壁のタイルが黄金色に塗られ、大西洋に繋がる出入口の検問や防衛の役を担っていたという。

月の浦を出帆して一年後の一六一四年一〇月にメキシコ経由で大西洋を横断してスペインに到着した常長一行を、この黄金の塔はどんな思いで迎えたのだろう。

そしてその三年後の一六一七年七月に政宗の夢実現を果たせぬまま、国外追放同然にスペインを発つ傷心の常長の船出を、どんな思いで見送ったことだろう。歴史の証人たる黄金の塔は、黙して語らず。

ツアー四日目は、セビリァを後に北へ一四〇キロ、古都コルドバに向かった。広大な緩やかな丘陵地帯に小麦畑が果てしなく続いている。大歓迎を受けたセビリァに約一ヶ月滞在した常長一行は、今後のスペイン国王との通商交渉に大きな手応えと自信を抱いて、セビリァからコルドバ経由で首都マドリードに向かったに違いない。

コルドバは、八世紀にイスラムに征服され、後ウマイヤ朝の首都として世界最大の人口だったという。スペインに現存する唯一の巨大モスクのメスキータは、イスラムの祈りの空間として、赤白縞模様の馬蹄形アーチを支える円柱が約八五〇本立ち並び、二万五千人の信者を収容した。十三世紀にキリスト教勢力に奪還されたが、幻想的なイスラム教とキリスト教が融合する聖堂内に立つと同じ砂漠に生まれた同じ宗教のように思えてくる。

セビリァからマドリードに向かう常長一行もコルドバで大歓迎を受けて、数日の滞在を求められたというが、イスラム教の巨大モスクとキリスト教の大聖堂が融合する世界に常長は何を思っただろう。

コルドバから更に北へ三九五キロ、ラ・マンチャ地方に向かった。マンチャは、アラブ語で乾いた土地の意味、文字通り赤土の平原である。小高い丘に白い円筒状の風車が並ぶ美しい風景をバックに、ドン・キホーテのおじさんとツーショット、爽やかな風の中をしばし散策した。

スペインの文豪セルバンテスが小説「ドン・キホーテ」を出版したのは一六〇五年、たちまちベストラーとなり常長一行がマドリードに入った頃には海賊版が出回っていたという。常長も滑稽な文学に触れて、騎士道精神とスペイン人気質を学び、風車を巨人と思い戦いを挑んだドン・キホーテに自分を重ね合わせていたかもしれない。

いよいよスペイン旅行最後の都市マドリードである。イベリア半島の中央部に位置して、ヨーロッパの首都の中で最も高地にあり、寒暖の差が大きく、また感情の起伏も激しく、マドリード人はイベリア半島南部のセビリァ人と気性が合わないと添乗員さんが話していた。

イスラムから奪還したスペイン王国の首都の住民としての誇りと保守的な気質が、イスラムと共存する海洋国家的な南国の自由な気質のセビリァ人とは、自然環境だけでなく歴史的成り立ちも違っていたのだろう。

常長一行を引率するソテロはセビリァ人、国王側近のマドリード人との気質の違いが、後々国王側との交渉が難航する要因の一つになったのかもしれない。

ツアー最終日のマドリード観光は、王宮広場で始まった。日の沈まぬ帝国を自称したハプスブルグ家の居城で十八世紀に焼失再建された壮麗な白亜の殿堂である。

マドリードは、古都トレドの要塞だったが、常長が訪れる五三年前に、前帝フェリペ二世がトレドから王宮を遷して首都に定めたという。国土の中央に位置して水が豊富で気候が温暖だったからといわれている。

常長一行がマドリードに着いたのは、十二月五日頃だったが、クリスマスのミサに参加もできず、国王に謁見するまで五五日も待たされたという。宿泊場所もセビリァではアルカサル宮殿だったが、マドリードでは聖フランシスコ修道院、宿泊の待遇まで格下げされ、セビリァのようには歓迎されなかった。なぜマドリードでは厳しい対応になったのだろうか。

「仙台市史」に、常長一行が日本を出帆する二五日前にイエズス会日本司教がマドリードのイエズス会総会長へ政宗の使節について報告した書簡が掲載されていた。

「彼（ソテロ）は、日本国王（家康）に臣従しているものの、広大な領土の所有者である政宗と称する日本の異教徒の領主の使節の使命を帯びているとのことです。それは同修道士（ソテロ）によって仕組まれたことで、スペイン国王陛下と教皇聖下に対して、彼の領内に福音を宣べ伝える修道士の派遣を依頼していますが、実は領内の港にスペイン船を来航させることによって得られる世俗的な利益を求めているだけです」

「天下の君主とその子である太子（秀忠）は修道士たちが関東に教会を持つことを望んでいない」「もしこの使節の成果によって修道士たちが来ることが確かに懸念されることですので、彼らと政宗に対して国王（家康）は憤慨するであろうということです」「彼（家康）は合図一つで領土と共に政宗の命をも奪うことができる」

遣欧使節団の目的について、ソテロの属するフランシスコ会に対立するイエズス会から、悪意の込められた報告書が既にスペイン国王側に届けられていたのである。

もう一つ、常長一行に同行してメキシコに帰国した答礼使ビスカイノがスペイン国王に宛てた書簡がある。出状日は、常長一行がスペインに向けてメキシコシティを出発した十二日後の一六一四年五月二〇日である。

「彼（政宗）は有力な日本人で一修道士（ソテロ）の依頼で船を造り、教皇と国王の御許へ真実であるかのように使節を派遣するとの口実で渡来させましたが、その実は商品の利益のためです」「新しい教えと慣習の採用は、皇帝と太子（家康と秀忠）の最も忌み嫌うところで、私たちの信仰とキリスト教界は（日本には）少しも根づいていない」「宣教師たちを実際に連れてくることになれば、その国は許容しようとしないことは確実で、その国に残っている少数の宣教師たちとキリスト教徒たちの上に何らかの大きな災難と最悪の結果が待ち受けている」

「（修道士派遣の請願は）修道士の謀で黄金色に色づけされたものであり、すべては虚偽にすぎないことは時の経過とともに明らかになりましょう」

答礼使として来日していたビスカイノは、破損したサン・フランシスコ号の修繕を妨害され、答礼使の栄誉を奪われ、常長一行の使節船を操船して帰国せざるを得なくされたソテロへの憎悪が伝わってくる。

ツアー添乗員さんが、マドリード人はセビリァ人に対抗意識を持っていると話していたが、日本の使節団を引

き連れて故郷のセビリァに錦を飾って得意満面だったソテロも、マドリードではスタンドプレーの傲慢で鼻持ちならないセビリァ人と蔑まれていたのではないだろうか。

そこには特権意識のお高いマドリード人の、商魂逞しいセビリァ人に対する反感があったのかもしれない。

マドリードに入ったソテロは、日本国内の情勢やイエズス会の妨害や自分への讒言もあり、自分がセビリァ人ゆえの、今後の交渉の限界を感じたのかもしれない。

そして、東洋の果てから大海原を渡って遥々やってきた日本人侍の支倉常長を前面に押し出して正面突破を図るしかないと悟ったに違いない。ここで政宗家臣常長を使節団の主役に据えて国王との謁見に臨み、更に国王臨席での常長の受洗を申し出て、交渉の行き詰まりの打開を図ろうとしたのではないだろうか。

それまでの遣欧使節団の主役は、ソテロだった。政宗のメキシコ副王宛て書状に「曾天呂を使僧ニ相頼、同侍三人相添差越候、此内一人ハ奥国迄指遣候」とあり、セビリァ市宛て政宗書状に「ハか（我が）分国、御宗門可申ために、此度ふらいそてろを頼、支倉六右衛門与申侍一人指添、相渡申候」とあった。

メキシコからセビリァまで、ソテロは政宗の遣わした使節団の正使として外交手腕を振るい、同道する常長は大使とはいえ同行する客人でありゲストだったのだろう。

ソテロは、マドリードから常長を前面に押し立てた。急遽正使の大役を任された常長は、フェリペ三世の前で主君名代としての役割を堂々と演じきったのである。

王宮の内部見学はなかったが、壮麗な白亜の殿堂を背景に写真を撮り合いながら、国王の前に起立して大使口上を朗々と上申、膝をついて国王の御足に接吻して政宗からの書状を恭しく頭上に掲げて国王に直々に呈する、サムライ支倉常長の毅然とした姿を思い浮かべていた。

王宮前からバスで郊外のプラド美術館に向かった。ヨーロッパ三大美術館の一つで、所蔵品は大英やルーブルのような略奪品ではなく、スペイン王家が収集したコレクションです、と現地ガイドが誇らしげに語っていた。

開館二〇〇周年の看板が立ち、二グループに分けられ、プラド三大巨匠のヴェラスケスの宮廷の侍女たち、エル・グレコの聖三位一体、ゴヤの裸のマハ、名画を急ぎ足で回ったが、その中にフェリペ三世の肖像画を見付けた。

フェリペ三世は、政治に無関心で怠惰王・斜陽王といわれたという。父フェリペ二世は、スペイン帝国の最盛期に君臨した偉大な王で、イベリア半島を統一してポルトガル国王も兼ねて「太陽の沈まない国」と呼ばれたが、息子三世は、幼少時から病弱で、宰相のレルマ公爵が実権を握っており、遣欧使節団が訪問した頃には、財政も逼迫してスペイン帝国の威光も陰り始めていたという。

日本国内の禁教と迫害が伝わり、政宗が奥州王に過ぎないとして、インディアス顧問会議が、使節団に速やかにセビリァに戻り帰国するよう求めていたが、フェリペ三世は、常長一行のローマ行きを認めてくれた。

フェリペ三世がローマ駐在のスペイン大使宛てに「当地で拒否された幾つかの件を、教皇の全権をもってそれらが許されれば、多大な不都合が生じかねない。慎重な方法で阻止するように、そなたを信頼して任せる」としながら「かくも遠い地方から来た異邦人として彼らを保護し援助すること、このために、また当地で我らの聖なる信仰に帰依し洗礼を受けたことによって余は彼らを尊重し恩恵を施したものである」と、常長が洗礼を受けたことによりローマ行きを裁可したことを伝えている。

自ら受洗した常長の敬虔で善良な人となりが、国王の優しさに訴えて、ローマへの道を開いたのかもしれない。

プラド美術館から南に約九〇キロ、古都トレドに向かった。展望台からタホ川の対岸に広がるトレド旧市街の美しい景観は、中世にタイムスリップしたようである。

紀元前のローマ帝国の支配から西ゴード王国の都となり、八世紀にイスラム教徒に支配され、十一世紀にレコンキスタでキリスト教徒が奪還、十六世紀にスペイン帝国の都となった。イスラム教徒はユダヤ教徒とキリスト教徒に寛大で自分らの宗教を守りながら共存したという。

トレド大聖堂は、ゴシック様式の塔が聳えるスペインカトリック教会の総本山である。常長一行がセビリァからマドリードに入る前にトレドに立ち寄っているが、事前に連絡をしていなかったにもかかわらず、トレド大聖堂で枢機卿でもある大司教に接見して使節団の任務を報告すると、大司教が非常に喜んで客人になってくれと懇請してきたという。この枢機卿の好意と大歓待が、このあと常長がマドリードで国王に直接自身の洗礼を申し出た勇気に繋がったのかもしれない。

トレド観光からマドリード市街に戻り、免税店のショッピング自由時間を利用して、現地ガイド河田氏に、常長が洗礼を受けたデスカルサス・レアレス修道院付属教会への道案内を個人的にお願いすると快諾してくれた。

ツアー仲間のM氏と三人、雑踏の中を縫うように急ぎ足で一〇分程、閑静な裏通りに出ると、灰色の石造りで装飾感のない建物を「あれですよ」と指差した。

小さな窓の並ぶ堅牢な倉庫のような外観に、現地ガイドがいなければ、気付かずに通り過ぎていただろう。荘厳な教会を期待していただけに、少し拍子抜けした。

デスカルサス・レアレス修道院の日本語名・王立跣足会女子修道院の跣足とは、素足のこと、使徒の生活に倣い清貧の実践修業のため世俗を意味する靴を履くことを避けるという意味で、教会の建物も文字通り質素である。

堅牢な石造りの修道院に連なる建物の屋根に十字架が掲げられ、正面壁面のスペイン王室紋章レリーフが辛うじて王立教会であることを教えていた。

教会をバックに記念撮影していると、黒い鉄扉が開いて人の出入りが見えた。同行していたM氏が「入ってみましょう」と躊躇する私の背を押してくれた。

開いたままの鉄扉からそっと教会内に入ると、倉庫のような外観からは想像できない、バロック風の白を基調にした豪華で荘厳な教会ではないか。清貧で質素を旨とする跣足会と言いながら、やはり王侯子女の教会である。

天井を覆うフレスコ画は、ドイツのヴィース巡礼教会で見たキリストの復活を思わせる美しい色彩である。中央祭壇は、両側に濃緑の蛇紋大理石の柱を配し、厨子に聖母子の絵が収められ、その上に掲げられた大理石のレリーフは、キリストの昇天と聖母の被昇天図だろうか。

格調高い祭壇にしばし対峙していると、四〇〇年前に国王フェリペ三世やルイ十三世王妃になる長女ら王侯貴族が隣席するなか、宰相レルマ公爵が代父となり、常長に国王と宰相の名を頂くドン・フェリペ・フランシスコ・ハセクラの霊名を授けた荘厳な洗礼式が浮かんできた。

両側の壁面に据えられたパイプオルガンの黒パイプがラッパのように水平に張り出して、今にも荘厳な宗教音楽が奏でられそうである。当時はイタリアオペラが誕生した初期バロック音楽の時代、合唱席から聖歌隊の讃美歌が、オルガンに合わせて厳かに響き渡ったに違いない。

受洗した常長を祝福するスペイン国王との心の繋がりが、ローマ行きと教皇謁見への道を開いたのだろう。

「常長さん、あなたの故郷の宮城県から、洗礼を受けた教会を探し出して来ましたよ」心の中で十字を切った。

常長受洗教会：王立跣足会女子修道院付属教会
(デスカルサス・レアレス教会)



セビリァ探訪がコースに入ったツアーを選んではいたが、常長が洗礼を受けた教会に立ち寄る予定がなく諦めていただけに、まさに大いなるサプライズだった。私の個人的希望を叶えてくれた現地ガイド河田氏と付き合ってくれたツアー仲間のM氏に心から感謝したい。

④スペイン旅行の残影（常長の洗礼）

期せずして待望のデスカルサス・レアレス修道院付属教会を、それも内部まで見学することが出来たが、常長が何故この教会で洗礼を受けたのか、メキシコで使節団の四二名が集団洗礼を受けていたが、なぜその時に受けなかったのか、なぜここだったのか。外交交渉を有利に進めるためとも言われているが、免税店に急ぎ足で戻りながら、その問答が頭の中を駆け巡っていた。

スペイン旅行から帰り、観光資料や写真類を整理しながら、改めて常長の洗礼について考えてみた。

メキシコで使節団から四二名の集団洗礼があった理由について、アマーティが著書「遣欧使節記」第十七章に「大使がメキシコ市に到着したのは、キリスト教の実例を教示するのに非常に好都合な時期だった。聖週間の神聖なお勤めが行われる時で、行列や聖体安置所を見学し、受洗したいという願望を募らせたのに便利がよかった」と書いていたが、ローマ教皇に使節団の信仰心を訴えたいソテロの思惑がアマーティにそう書かせたのだろう。

同郷で同級生の青森中央学院大学・大学院の教授大泉光一氏が著書「伊達政宗の密使」の中で「日本人随行員が集団受洗したのは、禁教の日本へ帰国するつもりがなかったとか、現地で商談を有利に進めるための方便などではなかった。一五四二年に発布されたメキシコの『インディアス法』によって「信仰は能力を制限する原則の一つであり（カトリック教以外の）異端の信仰を有する者は法的能力を有せず、栄誉およびその財産を剥奪される」と厳しく規定されており、異教徒であった日本人随行員は、この不利な条件を取り除くため、自らの意思に反してでもカトリック教の洗礼を受けざるを得なかったのである」と書いていた。インディアス法とは、いかなる法なのだろうか。

コロンブスが発見した新世界は無主物であり、教皇アレクサンデル六世の贈与大勅書により、スペインが新世界の支配権を取得し、スペインに新世界における布教を義務付けたが、スペインの侵略者たちは、先住民が野蛮な人種であり、信仰より武力で服従させるのが先決だとして先住民を犠牲に新世界の開拓を遂行したという。

カトリック司祭ラス・カサスは、新世界での略奪や暴虐の実態に、武力でなく布教の力で平和的に先住民の権利を保障しながら先住民を教会と王室の支配下に置く運動を訴えて成立させたのが、インディアス法である。

幕府の迫害から逃れて同行してきた日本キリシタンたちが、真のキリスト者となり平穏な信仰の世界を求めるため、そして異教徒の日本人商人たちがインディアス法制下のメキシコで交易商売をするため、法的能力が認められる洗礼を我先に受けていったのであろう。

メキシコ先住民「チマルパインの日記」の四月九日条に「特派大使（常長）は当地で洗礼を受けることを欲しなかった。伝えられるところによると、彼はスペインにおいて洗礼を受けるであろう」と記されている。

マドリードから同行したアマーティも「遣欧使節記」に「（メキシコで）大使もキリスト教徒になる決心をしたが、大司教と総管区長から思い止まるよう説得されて、この聖なる秘跡を受けるのをスペインまで延期した」と書いているが、これはソテロの思惑だったのだろう。常長自身は、洗礼についてどう考えていたのだろうか。

常長がメキシコで洗礼を受けなかったのは、キリシタンや商売人のようには、メキシコでの自身の洗礼の必要性に迫られていなかったからではないだろうか。

自分は、政宗に外交交渉の全権を託された仙台藩の大使であり、相手国と対等に交渉する立場にあって、スペイン側に有利な「八ヶ条の申合条々」で和平通商条約の妥結に自信を持っており、洗礼を受けてまで相手にへつらう必要はないと考えていたに違いない。

戦国大名が武力で国盗り合戦する世界しか知らない常長にとって、ローマ教皇が精神界と世俗界の主権者たるキリストの代理人であり、教皇の下にスペイン国王の権威があるキリスト教国の在り方や、キリスト教が征服地を統治していく法整備は、全くの未知の世界だったろう。

そしてメキシコでインディアス法の存在と政治に優先するキリスト教の信仰と教会の力を目の当たりにした常長は、異教徒に法的能力を認めない世界での政宗の使命を果たす困難と限界を薄々感じていたに違いない。

外交交渉の正念場となるスペインでは、自分も洗礼を受けて法的能力を有するキリスト教徒にならなければ、国王側と対等の外交交渉はできない、ローマ教皇に会うことさえ出来ない、と覚悟していたのではないだろうか。

マドリードに入った使節団は、日本皇帝（将軍）と奥州王（政宗）に派遣されたと装っていたが、日本国内の禁教と迫害が伝わり、政宗が一領国の王に過ぎないことを知ったスペイン側が、幕府の禁教政策に反する「八ケ条の申合条々」の実効性に懐疑的になるのも当然である。

政宗がスペイン国王宛て書状で、自身の洗礼は事情で受けられないが、キリスト教の領内布教を認めて家臣にも洗礼を受けさせるので、メキシコとの交易を認めて欲しいと主張していたが、この逃げ腰で見え透いた言い分が、スペイン側に通用するはずもなかった。

政宗が領内の家臣に洗礼を受けさせると云いながら、使節の常長が洗礼を受けていないのでは、政宗の申し分が説得力のない詭弁で、信用されないのも当然である。

ここに至って常長は、政宗の申し出の正当性を、身をもって立証しなければならなかった。かくして自らの受洗を決断した。単なる交渉のための受洗ではなく、主君政宗のための受洗だったのではないだろうか。

政宗と事前にそこまでの打ち合せはしていなかったろう。キリスト教国に足を踏み入れて知ったキリスト教の大きな壁と政宗が洗礼を受けていないハンディを乗越えるべく帰国後の断罪覚悟の苦渋の決断だったに違いない。

一六一五年一月三〇日、マドリード王宮での国王謁見の場で、大使口上に続いて自身の受洗を申し出た。

「かようにして幾多の困難を乗り越えてのち光を求めてきている者は、光に出合って歓びの極みにあります」と始まり、聖職者の派遣と国王の庇護を請願し、最後に「国王の御手により私がキリスト教徒となることを許してくださいますように請願申し上げます」と結んだ。

国王は「かくも遠方より我らが国まで教えを求めてこられたことを高く評価する」「彼が請願していることはかくも正当なことで我らが応じるにふさわしい事柄である。協定に関しては折を見計らい検討の機会を与えよう。キリスト教徒になりたいとの願いは我らを大いに喜ばせるもので、我らの立ち合いで願いどおりの手配をしてすぐにでも最も適切な指示を下すつもり」と即答した。

かくして請願交渉に進展は見られなかったが、常長の受洗申し出は受け入れられ、国王側の態度も軟化して、インディアス顧問会議が反対していたローマ行きが国王の決断で承認され、その費用の拠出まで認められた。常長一世一代の駆け引きに勝ったのである。

さすが政宗の常長を使節に抜擢した目は確かだった。もし伊達家の重臣だったら、禁制の受洗という駆け引きはとても出来なかったろう。幾多の修羅場を潜り抜け、先見性と洞察力と交渉力と決断力に秀でた中級家臣の常長だったから出来た決断だったのではないだろうか。

常長は、政宗家臣として洗礼を受け、主君政宗の逃げ腰で見え透いた言い分の疑惑を払拭しただけでなく、帰国したら必ず主君政宗に受洗させて、奥州にキリシタン王国を立国させるので、ぜひメキシコとの交易の承認を、と国王に訴え続けたに違いない。

⑤スペイン旅行の残影（キリスト者の常長）

スペイン旅行から帰って新たな疑問が頭を駆け巡っていた。ローマからスペインに戻った常長は、国外追放同然に扱われながら、一年余りセビリァに居座り続け、マニラに渡って更に二年余り、報われることのない交渉をし続けられたのは何故なのだろう、という疑問である。

自らの受洗でローマへの道を開き、入市式で盛大な歓迎を受け、ローマ教皇に謁見してローマ市の公民権まで贈られながら、請願事項の具体的な進展はなかった。

フェリペ三世がローマ駐在スペイン大使に常長一行のローマ行き裁可を伝える書簡の前段で「当地で拒否された幾つかの件を、教皇の全権をもってそれらが許されれば、多大な不都合が生じかねない。慎重な方法で阻止するように」と指示しており、ローマ行きは認められたが、常長の請願事項が、逃げ腰のスペイン国王に受け入れられる素地は初めからなかったのである。

一六一六年一月七日にローマを発った常長一行に対して、インディアス顧問会議は、マドリードに入らずに、セビリァへ直行するよう命じ、同年六月に出航予定のメキシコ艦隊に同乗するよう求めてきた。

ローマからの帰途に、イタリアのジェノヴァで常長が三日熱にかかり現地療養、セビリァに入る前にソテロが脚を骨折、セビリァに着くと二人とも病に倒れたが、落胆と苦難の旅に心身とも疲労困憊していたのだろう。

随行員十五人が乗船して帰国するなか、二人は国王からの返書を得るまで帰国できないと退去命令に抵抗して残留したが、乗船しないための仮病だったのだろうか。

五人の随員とセビリァに居残って三カ月後に届いた政宗宛てフェリペ三世の書簡は「常長とソテロが参内して、貴国において我らが主、イエス・キリストの神聖にして真実の教えを選び、これを信奉しようとする称えるべき意向についての報告があり、心から歓待して、スペイン滞在中、ローマ教皇庁への往復を支援した。余は貴諸国に住む人々の霊魂の救いを望むものであり、貴地に居る宣教師たちとキリスト教徒が厚遇されるように願う」と述べて、政宗の請願事項に具体的な言及はなかった。

常長は国王の書簡に納得せず、体調を崩して下血したこともあり、セビリァ近郊のロレート修道院に居座り、イエズス会の執拗な妨害に抗しながら、ひたすら宣教師の派遣と司教の任命を国王と教皇に請願し続けていた。

一六一七年三月二二日付け、ローマのボルゲーゼ枢機卿がマドリード駐在教皇大使宛てた書簡で「使節の請願に関する決定は、スペインの政府の意見に任せることにした。出来るだけ速やかにこの問題を処理して教皇聖下の肩より重荷を除くよう努めることを教皇聖下はお望みである」そして「使節の指導者でもあるソテロ神父に対して教皇聖下の好意を悟らせるように」と追記、もはや常長一行は迷惑な招かざる客になっていたのである。

しかし常長は、同年四月二四日付けフェリペ三世宛て書状で「去る五月に到着した日本からの書簡によると、我が主君は誠意と献身をもってキリスト教界を庇護し、領内にあった教会とキリスト教徒たちを護ったのみならず、何の恐れもなく堅く信仰を守るように助言し、彼のもとに逃れてきた者たちを保護しております」「その善き意図を実行に移すための修道士たちと高位聖職者と共に、この使節に関する良き通信を待ち望んでいます」と政宗の真意を訴えて国王の慈悲にすがり続けていた。

常長は、なぜかくも絶望的な交渉を続けられたのだろうか。主君政宗への忠誠心なのか、使命感なのか。それともキリスト者としての信仰心からだったのだろうか。

帰国後に政宗の説得で棄教したともいわれるが、常長の死後に、嫡男常頼が家人のキリシタン容疑で処刑されて家名断絶となり、自宅から典礼用祭服など宗教器具が多数押収されていたことから、帰国して棄教する仲間がいるなか、常長は真のキリスト者となって、帰国後も家族と共に信仰を守り続けていたことは明らかである。

太平洋から大西洋をスペインへ向けた延べ七カ月もの間、日夜、神に祈りを捧げる神父ルイス・ソテロ、荒れ狂う大海原に神に救いを求めて祈るスペイン人船員たち、禁教下で迫害されるキリシタンの救済をローマ教皇に請願する日本キリシタン代表の三人、そして信仰の自由を求めて日本を脱出したキリシタンたちと寝食を共にしてキリスト教の信仰について自問自答したに違いない。

初めて異国の地を踏んだメキシコは、僅か百年前にスペイン人探検家に先住民のアステカ帝国が征服され略奪されてスペイン帝国の植民地になった国である。メキシコ全土に教会が建てられ、先住民に神の救いを授けんとキリスト教が広められていく現実は、外国から侵略される危機に直面することのなかった日本列島に安住してきた常長にとって異次元の世界だったのだろう。

大西洋へ向けてメキシコの嶮しい山岳地帯と広大な砂漠の中を横断しながら、豊かな緑と水と美しい四季に恵まれた日本では想像出来ない過酷な大自然の中に育まれるキリスト教の逞しさに畏敬の念さえ抱いたに違いない。

スペインに渡った常長は、そこでイスラム教国との八百年に亘る戦いの末に、イベリア半島を奪還したレコンキスタの歴史と宗教の力を、改めて学んだことだろう。

そしてセビリァ、マドリード、ローマで三年近く、キリスト教の気高い精神と重厚な教会での荘厳な祈りと讃美歌の世界に生活して、世界帝国の覇王とキリスト教国の教皇に謁見するなか、常長はキリストの愛に教化され信仰を深め、真のキリスト者になっていったに違いない。

そして宣教師が国外追放された日本で、主の導きから路頭に迷う多くのキリシタンを救いたい使命感が支えとなって、新たな宣教師の派遣を懇願し続けたのだろう。

政宗の抱いたキリシタン王国の夢と野望は、常長の崇高な夢に昇華、政宗からの使命ではなく、神からの主命として救世使たらんとしていったのではないだろうか。

明治時代の著述者　渋江保の一生（その二十一）

山本　勉

第十期　大学館時代から晩年④（東京）一九〇三年（明治三十六年）～一九三〇年（昭和五年）四月

漢訳『万国戦史』と訳者（その一）

一　湯叡（一八七八年～一九一六年）

（一）湯叡について

湯叡、（字は覚頓）は、万国戦史第二巻『英清鴉片戦史』（英人強賣鴉片記）、万国戦史第六巻『露土戦史』（露土戦紀）の翻訳者である。湯叡は、若い頃、維新変法思想を宣伝し人材を養成する根拠地の万木草堂で康有為に師事し戊戌変法に参画している。戊戌変法後、日本に渡り、一八九八年、孫文や馮鏡如らが開校し清朝改革派の拠点となった横浜大同学校（現、横浜山手中華学校）で教員を務めている。一九〇〇年中国に密かに帰国し反清武装蜂起である「自立軍起義」に参加したが、武装蜂起失敗後再び日本に亡命する。一九一二年（民国元年）中華民国成立後、財政部顧問・中国銀行総裁を歴任する。一九一六年四月十二日、広州海珠の警察署内で連絡会議に出席時襲撃を受けて命を落とした。

（二）湯叡と横浜大同学校

日本における湯叡の動向は現時点ではわかっていないが、深澤秀男の『変法運動と日本横浜中国大同学校』や于海英の『清議報及びその周辺』の論文等から、湯叡は横浜大同学校の創設に関わっていたことがわかる。

『変法運動と日本横浜中国大同学校』には「日本横浜中国大同学校は、光緒二四年（一八九八年）二月上旬、横浜居留地一四〇番地に、中国の華僑の子弟の教育と中国を救う人材の養成を目標として創設された。」(1)とある。

る。『清議報及びその周辺』に「一八九六年の冬、横浜の華僑鄺汝磐、馮鏡如らは、華僑の子弟のために、学校（はじめは「中西学校」と命名する）を創設することを考え、孫文に相談した。孫文はもともと梁啓超を推薦して、教員とすることを欲したが、康有為は、梁が『時務報』の主筆に任ぜられていたので、梁の代わりに徐勤を推薦した。そして、康有為は徐勤を推薦しただけでなく、弟子の陳黙庵（陳汝成）、陳蘊農（陳和沢）、湯覚頓（湯叡）三人を派遣し、中西の二字は雅ではないといって、校名も大同学校と改め、大同学校の四字の門額を親書して送った。」(2)とある。こうした経緯から、湯叡は教習として横浜中国大同学校に勤務したのであろう。『変法運動と日本横浜中国大同学校』掲載の「日本横浜中国大同学校の参加者」には、湯叡が湯覚頓として掲載されており、学校における役割には「教習」とあるほか、「官職又は派別等」には「変法派」とある。この表には、湯叡の他に、馮自由、馮鏡如、孫文、康有為、梁啓超の名前が散見できる他、名誉校長として犬養毅、賛成者として、宮崎寅蔵や大隈重信も名を連ねている。犬養毅が参加者の中に見られるのは、孫文ら革命派と康有為ら変法派の提携のためによる。『清議報及びその周辺』に「一八九九年晩春から初夏にかけて、犬養毅は早稲田の私邸に孫文と陳少白、梁啓超、宮崎寅蔵、柏原文太郎ら数人を招待し、康孫両派が連合し、ともに国事にあたるよう幹旋したという。」(3)とある。

二　湯叡と漢訳『万国戦史』

万国戦史第二巻『英清鴉片戦史』（英人強賣鴉片記）と万国戦史第六巻『露土戦史』（露土戦紀）の序文は梁啓超によるものである。万国戦史第六巻『露土戦史』の序文で、梁啓超は次のように訳者である湯叡を紹介している。「ああ、湯覚頓がロシアとトルコのことを翻訳し終えたので、諸国一門に知らせ、我が四万の人民に告げたいと思う。」原文は以下の通りである。「嗚呼吾願取湯君覚頓筆譯俄土之事懸諸國門以為我四萬萬人告也」(4)

万国戦史第二巻『英清鴉片戦史』の序文においても、同様に湯叡のことを紹介している。

次号においても漢訳『万国戦史』の訳者について、引き続き述べてみたい。

注記

（一）深澤秀男の『変法運動と日本横浜中国大同学校』（岩手大学 ArtesLiberales No. 42）五十二頁

（二）于海英『清議報及びその周辺』（山口大学異文化研究10巻　二〇一六年三月三一日）五十・五十一頁

（三）于海英『清議報及びその周辺』（山口大学異文化研究10巻　二〇一六年三月三一日）五十一頁

（四）梁啓超『露土戦紀序文』（飲冰室文集之三）三十四頁

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）（六）

匠　克仁

〈時系列〉

一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年三月三十一日　良香、東西信販を退職
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット入社
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証が東西信販から京亜クレジットへ全株株式譲渡
二〇一八年三月一日　良香・御木アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇一八年四月一日　エリア総合職制度の導入
二〇一九年四月一日　エキスパート制度の導入
二〇一九年五月二日　懲罰委員会の設置
二〇一九年十月一日　リウォード（報酬）制度の導入
二〇二〇年二月三日　リウォード制度授賞式
二〇二〇年二月七日　テレワーク制度の導入
二〇二〇年三月二日　アサヒ信用保証組織改革
二〇二〇年四月一日　民法改正施行

〈登場人物〉

弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
　東西信販から京亜クレジットを経て転籍
御木武利　アサヒ信用保証会長
　京亜クレジット常務から転籍
猪本進一　アサヒ信用保証前会長（創業社長）
　東西信販から社内ベンチャーで創業
立花豊　アサヒ信用保証社長（二代目）
　東西信販から創業時に出向・転籍
高畑巌　アサヒ信用保証法務担当マネージャー

6　整理解雇

御木武利会長の高畑解雇の命令に弓本良香は反発した。
（ゴキブリ会長が私怨で解雇を命じるなんて…）
ミキタケトシ会長を良香はゴキブリと読んでいたが、内心でその名前で反発した。
「解雇する理由はありません。高畑マネージャーは人事考課も二期連続でA評価ですし、今週も社内論文で会長賞を受けたばかりです」
良香は人事部長として公平な評価を伝えた。
「解雇理由はある。整理解雇だ。彼のいる部署が無くなるからだよ」
御木会長は世間話のような調子で語る。
「それは管理部の一部の法務グループが無くなるということですか。今回の彼の論文を受けて、コンプライアンス室として独立するのですから」
「計画が変更になって、コンプライアンス室が無くなったんだよ」
「彼の論文に基づいて組織変更するのではないのですか」
「営業部門と審査・管理部門を完全分離するということで、ほぼ彼の論文通りに組織変更をする。しかし、コンプライアンス室は設置しない。企画部からの稟議で決裁して、今日のミニ取締役会で決定した」
会長は決裁済の稟議書を良香に投げた。
「それでは誰がリーガルチェックをするのですか」
受け取った稟議書を読みながら、良香が質問した。
「アウトソーシングをする。弁護士法人との契約も進めている」
岩倉顧問弁護士が所属する弁護士法人の名前を出した。
そして、会長が癒着しているという噂の弁護士法人であった。
「大量の外注はコスト増加を招きます。アウトソーシングするといっても、間に入って調整する社内の人間が必要です」
「そんな中途半端なつなぎ役は人件費の無駄だ」
会長は良香の意見を否定する。
「高畑が法律に詳しいといっても弁護士資格は無い。無資格者がいくら正論をいっても、会社として信用できる根拠が無い。医者でもない素人がいいかげんな健康情報を伝えるのと変わらない」
「しかし、コンプライアンスを丸投げするのは反対です」
「丸投げではないコンプライアンス担当の取締役は残している。コンプライアンス実務をプロの弁護士に任せる」
ここでも会長は不敵な笑いをして続ける。
「仮に、社内で法律上のリスクが発生しても、社内で責任を取らない。全て弁護士に責任転嫁するだけだ」

顧問弁護士まで裏切るつもりでいるようであった。
「高畑はコンプライアンス室長でなくても、将来は管理部長を任せてもよい人材です。それに今回の論文でも分かるように企画部長も務まる人材です」
良香は高畑個人に焦点をあてて反論を試みた。
「ウチがせっかく奪った企画部長のポストを手放すわけないだろう。それに管理部長もそのうちウチから出向させる予定だ」
会長がウチと言うのはアサヒ信用保証でなく、京亜クレジットである。
「Tの出向・転籍者は家賃保証の素人ぞろいだ」
会長は東西信販をTと、京亜クレジットをKと呼ぶ。
「みんな元の会社に戻りたい一心で、まともに覚えようとすらしていなかった。今さら戻れないからと慌てて仕事を覚えている状況だ。以前の人事はまともな採用をせず、Tからの人材を受け入れていた」
自分も会長も家賃保証に関しては素人だと良香は思ったが、口にしなかった。良香自身も人事のエキスパートであり、営業・企画の実績はあると自負しているが、家賃保証自体の経験はない。
そのことと別に会長の東西信販に対する評価は事実であると良香は認めていた。
「前の懲罰委員会でも回収チームの解雇があったな。回収チームにもTは未経験者を入れていた。ウチ…Kは分野は違うが、回収のベテランを送った。営業・管理もKの出向はその分野の経験の長いものを出向させている」
会長に言われなくても、京亜クレジットの出向受け入れはその職種の経験者しか、良香は応諾していない。
東西信販と違い、京亜クレジットの人件費削減のための受け皿になるつもりはない。
「管理部長の座はTではだめだ。Kに変える。部長職は人事、企画の中核は買収後すぐに奪ったが、その後はTの抵抗で進んでいない。次は管理部長にKを入れる。そのためにも高畑の存在は邪魔なんだよ」
「それでも……第一回目のリウォード制度の会長賞で表彰されたばかりの人間を解雇するなんて、二回目以降の応募者はいなくなります。それに会社の方針を疑われます。他の社員のモチベーションが低下します」
「会長賞は一回で良いだろう。確かにあの論文は評価してもよい。しかし、今後にあのレベルの論文が出てくる可能性があるか。賭けてもよい。来期に社内論文をまともに応募する奴はいなくなる。過去の受賞作を見たら、自分のレベルでないと早々に応募を諦めるさ」
良香自身は授賞式でリウォード制度のレベルが維持できたと喜んでいた。しかし、今回の内容が優秀すぎて、次回以降の挑戦者がいなくなるのでないかと考え直した。
「立花社長が表彰式でコンプライアンス室長にふさわしいなんて言いました」

「あれは立花社長の失言だ」
たしかに失言であったが、それで済む問題でない。
「社長が軽はずみな発言をしたばかりだからこそ、良いタイミングなんだよ」
会長は悪だくみを考えるときの独特の笑いをした。
「たしかに高畑はTの人間としては優秀と言われているようだな。ここで高畑を切れば、Tの人間はいくら優秀でも部長になれないというアナウンスになるじゃないか。最終的には部長職はTの人間を全て切り捨てて、Kに入れ替える。まあ、優秀なPならやらせてもよいがな」
アサヒ信用保証が独自で採用した社員はプロパー（生え抜き）の頭文字でPと呼んでいる。
「社長は高畑に授賞式でコンプライアンス室長という空手形を切ったばかりだ。その高畑を守れないようでは立花社長には真の能力も実力もないことをアピールできる。こんなバカ社長についていったらお終いだと思うだろう。これで一挙にTの牙城は崩れる」
良香は黙り込んでしまった。権謀術策でのし上がった会長らしいと思った。しかし、あまりに下劣な手段に二の句がつげなかったのである。
この人事を押し付ける会長に対して激しい怒りを良香は抱いた。
「残念かね。お気に入りの人がいなくなるなんて。東西信販時代に君と高畑はお互いに好意を持っているという噂があったな」
どこでそんな情報を仕入れたのかと良香はあきれた。たしかに会長は昔から地獄耳と呼ばれているほど、情報収集力にたけていた。
東西信販時代にそんな噂があったが、事実無根である。二人とも突出して優秀とみられており、二人が釣り合う異性が社内にいないということで勝手に周囲が結び付けたデマである。
高畑が社外の女性と結婚して、噂は無くなった。良香にとっては振られたみたいで、不愉快な経験である。
「そんなデマを信じているんですか。東西信販での同期入社で、同じ大学の同じ学部出身という関係に過ぎません」
「いずれにせよ、人事部長は人事判断に私情を持ってはいかん。高畑の首切りは君が私情を挟まずに処理できるか。実験台にするいい機会だ」
解雇することを実験台と呼ぶとことが会長らしいと良香は思った。
「それと退職日は今月末の二月二十九日だ」
「今月末では三十日を切ってしまいます。労働基準法で三十日前に通知をしないといけないことをご存知だと思いますが」
「三十日に不足分の給与を支払えば済むだけだ。その代わり、会長賞の報奨金の三十万円は取り消しだ。報奨金

の条件は組織改正が伴うことだ。三月二日月曜日に組織改正で、二月末日で退職なのだから、報奨金を貰う資格はないだろう。経費削減だよ。社長には話がついてある。君が人事稟議を書けば、何も言わずすぐに決裁する」

御木会長と立花社長との間には会長優位の圧倒的なパワーバランスが存在していた。御木会長は京亜クレジットの常務取締役からの転籍したのに対して、立花は東西信販の出身の設立メンバーで、課長から社内昇格で社長になっている。

立花社長は猪本前会長の操り人形と言われていたが、そのまま御木会長の操り人形となった。年齢は御木会長が五十九才で、立花社長は五十六才である。

二人とも同じ大学の同じ体育会出身で、会長が四年生のときの社長は新入生であった。二人は卒業後もOB会でつながっている。会長はこのような人間関係を利用する能力にたけていた。

御木会長は入社前から立花社長を自分の言いなりにしようとしていた。その魂胆があったからこそ、社内政治を使って、御木は自ら会長職として就任したのである。

「君の得意なセリフを盗ませてもらおう。君には二つの選択肢がある。一つ目は高畑の首を切ること。二つ目は君が首を切られることだ。二者択一でどちらを選ぶか君の自由だ」

悪だくみを考えているときには特殊なホルモンがでるのであろう。また、加齢臭というか獣のような不快な臭いがした。

今までも不条理な人事を強いてきたが、今回は高畑憎しの私怨である。

「人事部長の人事権は会長と社長が握っている。社長は私の操り人形だ。つまり、私の意に反すれば、君の首を切って別の首にすげ替えることができる。そのことは心しておけ」

ゴキブリ会長に自分の生殺与奪の権限が握られていると思うと良香は吐き気がした。

しかし、良香自身は思い切った人事政策ができるのは会長の存在であることは自覚していた。

会長と別れた後に良香は一瞬だけ迷った。しかし、自分で自分の首を切る選択肢は選ぶ訳が無かった。

良香は外線電話をした後、高畑マネージャーに内線電話を入れようとしたが、手を止めた。

二〇二〇年二月七日現在は中国武漢で発生した新型コロナウィルスの対応で日本でも混乱していた。人事部でも急きょテレワーク（在宅勤務）制度を導入した。

接客が必要な営業係や書類の原本を扱う事務係などは無理である。しかし、法務グループはテレワークが可能であり、本日から開始を指示していた。法務グループは高畑マネージャーを含む四名全員が自宅に会社のノートパソコンを持ち帰り、在宅業務を行っている。

アイウエオ……ン

匠　克仁

アスペルガー症候群（注ア）と診断をされた。これがメイン傷病で診断書は広汎性発達障害（注イ）と書かれてウツ病も診断された。診断書に書かれたのは軽症うつ病エピソード（注ウ）である。信頼しているのでセカンドオピニオンの必要はない。診断書には書かれなかったがカルテ上ではＡＤＨＤ（注エ）も記録がされている。パキシル（注オ）と同じパロキセチン（注カ）ジェネリック（注キ）を服用している。これはＳＳＲＩ（注ク）でケミファ社製もあるが、ぼくのは明治である。薬をアルコールと一緒に飲むと意識を失って危険だった。ウツはサポートが必要である。薬だけでは生活できない。パキシルを服用する前からずっとＡＤＨＤを抑える薬であるストラテラ（注ケ）も飲んでる。後発医薬品のアトモキセチン（注コ）ができて替えた。こんな文を書いてるとソウ病を疑われそうだが、ソウとウツを繰り返す二極性タイプではない。抗不安薬デパス（注サ）や睡眠薬ブロチゾラム（注シ）も処方された。仕事を休んでから、ウツの状態が落ち着き、最近は使わず済んでいる。ウツはテストステロン（注ス）低下でも発病するが原因はセロトニン（注セ）が脳内で減少したのであろう。食事でもナイアシン（ビタミンＢ３・注ソ）が少ないと、セロトニンが合成されない。ナイアシンはマイタケ・シメジ・ヌメリスギタケ等キノコに多い。ＮＰＯに日本発達障害ネットワーク（注タ）がある。ぼくの脳はセロトニンとノルアドレナリン（注チ）が不足している。障害者専用ハローワークの窓口に相談しよう。障害者を受け入れるヒューマニズム精神が広がっている。ぼくは不快体験がフラッシュバック（注ツ）する。障害者と判らない人

のヘルプマーク（注テ）がある。発達障害者向けグループホーム（注ト）という共同生活もある。アスペルガーはマルチタスク（二つの行為を同時にする）ができない。コミュニケーション下手は、ASを含む自閉症スペクトラム（ADHDやLD・注ナ）の特徴である。電話中にはメモが取れない、つまり聞くと書くを同時にできない。メモも取れないようでは仕事に支障がでる。聴覚過敏でイヤーマフで遮断している人もいる。発達障害者のためのユニバーサルデザイン（UD注ニ）がある。UDにコクヨが注力して製品を作成している。話は替わるが、ストラテラはシナプスの再取り込みを阻害してノルアドレナリンの脳内濃度を高める。ADHDの薬であってアスペルガー症候群の薬でない。最近ウツ病の薬でもノルアドレナリン濃度も高めるSNRI（注ヌ）が使用される。パロキセチン（パキシル）のSSRIを改良したものだ。サワイなどでもジェネリックが発売されている。ところでヲタク（注ネ）という人間はアスペルガーが多い。カサンドラ症候群（注ノ）というのは、結婚相手がアスペルガーだった場合に発症する。ぼくは光過敏（注ハ）の為ギラギラした太陽が苦手である。日差しが強いと、サングラスが必需品である。どれくらい眩しいか、というとゲレンデで滑走するスキー選手が目の光焼けを防ぐためゴーグルを付けるのと同じくらいの感覚である。著名をザ・アスペルガー匠と改名しよう。アの語頭はザでなくジだろうとツッコミを入れてくれると嬉しい。最近はバズルリボン（注ヒ）で支援を表明する人がいる。偏見がゼロの社会になるのをぼくは望んでいる。睡眠薬ブロチゾラムやデパスやストラテラやパキシルの副作用なのかダイエットのせいか便潜血検査が陽性だったが、ぼくはヂ（注フ）でない。ところでアスペルガーは社会とのキヅナ（注ヘ）が必要だが絆で不安にもなる。抗不安薬のデパスの一般名はエチゾラムでありブロチゾラム（グッドミン等の睡眠薬）と似て睡眠薬にも使用される。ギャバ受容体（注ホ）に作用する。副作用は肝機能障害等（ビリルビン（注マ）上昇等）である。ギャバ受容体のサブユニット（注ミ）に作用し、抗不安のギャバを取込むベンゾジアゼピン系（注ム）に分類される。禁忌はフルボキサミンマレイン酸塩（注メ）と併用処方である。デパスは日本人が開発した薬で、記述の通りベンゾジアゼピン系抗不安剤では代表的な薬である。アスペルガーのプロのぼくからのアドバイスがある。あなたの夫がアスペルガーかどうかを見分ける方法である。見分けるキーポイントは脳の回線や脳内物質が普通でない点で、チェックする方法がある。わかり易いのは会話と外見で、シャレとオシャレが分からず、童顔（注モ）である。コミュニケーションに関心が無いのでない。コミュニケーションの方法が一般的な人と異なるだけである。これはサヴァン症候群（注ヤ）になると不可能なレベルである。

注ア　アスペルガー症候群

アスペルガー症候群（以下の文章では症候群を省略してアスペルガーと単に表現する）が消えつつある。つまりアスペルガーとして診断されなくなっている。ぼく自身アスペルガーと初診で説明をされた。ぼくのカルテにはアスペルガーと書かれている。しかし、現実の診断書はアスペルガーでなく広汎性発達障害と書かれた。現在はアスペルガーを医学的に読み替えしている。さらに最近アスペルガーはASDの一部とする様になった。ぼくはアスペルガーとして脳や性格は一生同じなのに、ぼくもアスペルガーからASDとされるだろう。なおASDはアスペルガー症候群のASのようであるが、違う。Aはアスペルガーでなくオーティズム＝自閉症である。Sはアスペルガーのシンドロームでなくスペクトラムでありアスペルガーはスペクトラム（連続体）とされた。さてアスペルガーの定義の一つは発達障害である、ところがアスペルガーの二つ目の定義は知的障害が無い。むしろアスペルガーは理数系の知能が高い人物が多い。つまりアスペルガーはけっして全体的に能力が低いのでなくてアスペルガーは能力のバランスが悪いのである。さらにアスペルガーの特徴は常同行動である。例えば最寄駅にアスペルガーは同じ道を通る。他にも目立つ特徴がありアスペルガーは異常な拘りを持つのである。この文章もアスペルガーという文字の位置に拘りがある。それからアスペルガーには聴覚や光等の知覚過敏もある。そんなアスペルガーはこれだけ特異な病状があるにも拘わらずアスペルガーを区別せずASDで一括りされた。理由はアスペルガーも他の発達障害も知能は個人差があるのでアスペルガーだけ区別する必要はないからという。さてアスペルガーの有名人にアインシュタインがいる。他にアスペルガーはゲイツやジョブズの起業家もいる。このアスペルガーの人達まで自閉症の一部とするのだろうかアスペルガーのぼくは疑問に思う。といえ差別語としてアスペルガーを使うような人がいるので、アスペルガーアスペルガーとあまり言わない方が良いかもしれない。とアスペルガーをカミングアウトしたぼくは思う。たぶんアスペルガーを診断名から外すのはフリーメイソン等のアスペルガーに対する世界的な陰謀があるのだ。現実にアスペルガーは世界から抹殺されようとしている。我がアスペルガー民族には絶滅の危機が迫っている。ぼくはアスペルガー独立宣言を表明する。全世界に住んでいるアスペルガー諸君よ、武器を持って立ち上がれ。そしてアスペルガー共和国といった独立国家を築く。そうしてアスペルガーのアスペルガーによるアスペルガーの為のアスペルガー政治をするのである。こんなことを書いてアスペルガー以外を差別するのでない。ぼくにとってはアスペルガーも、非アスペルガーも平等である。ぼくはアスペルガー文学を世界に広げようと思うのである。

注イ　広汎性発達障害

アスペルガー自体が診断名に付かなくなったが、自閉症スペクトラムや広汎性発達障害が代りに付けられる。スペクトラムとは連続体であって、症状や日常生活のスキル等が人それぞれ別のところにある。さてアスペルガーガールという造語があるくらいで、女性の方が少ない。ガールつまり女性の男性に対する比率は8分の1である。

注ウ　エピソード

エピソードというと、ウツ病で失敗した逸話のようだがエピソードは精神医学上での特別の意味がある。それはエピソードがつくと病状が継続した状態となる。辞書でエピソード＝発症とあった。発症から完治までの状態をエピソードと呼ぶこともある。また、状態でなく期間もエピソードを使うことがある。百科事典での記述では『エピソード（病相）』とあった。ソウウツ病の場合はにエピソードはソウとウツの各一周期を指す。ドラマではエピソードを第○話で使うが、アメリカの医療ドラマのエピソード○で、医者と医者との会話の中で「心臓発作エピソード」という訳語が出てくるらしい。心臓発作のエピソードつまり体験でなく発症から完治までの期間でエピソードを使っていると思う。インターネット記事のエピソードで紹介されていた。ところで、医学用語ではエピソードは大脳生理学でも使われ、長期記憶の分類でエピソード記憶がある。宣言（陳述）記憶が意味記憶とエピソード記憶との二つに分けられる。アスペルガーはエピソード記憶が苦手で意味記憶が得意である。ぼくのエピソード（個人的経験）でも痛感している。具体的なエピソード（些細な逸話）を四十年記憶しても、直前のエピソード（些細な逸話）を全く記憶していない。このエピソードが意味化（言語化）していれば、おそらくはエピソードを一生覚えている。だが、意味化してないとエピソードを瞬間で忘れていると自分で分析している。

注エ　ＡＤＨＤ

アテンション・デフィシット・ハイパーアクティビティー・ディスオーダー（注意欠如多動症）。ＡＤ／ＨＤとスラッシュを入れる場合がある。ＡＤ＋ＨＤではなく、ディスオーダーはＡＤとＨの両方にかかる。もともとはアテンション・デフィシット・ディスオーダーとハイパーアクティビティ・ディスオーダーと別々の診断名をアテンション・デフィシット・ハイパーアクティビティー・ディスオーダーとくっつけて一つにしたのである。ぼくはハイパーアクティビティー・ディスオーダーが無いのにアテンション・デフィシット・ディスオーダーだけで、アテンション・デフィシット・ハイパーアクティビティ・ディスオーダーと診断された訳である。

注オ　パキシル

注カ　パロキセチン

パキシルは抗うつ薬の商品名。本文で書いた様に成分

はパロキセチンである。パロキセチンというが、正式にはパロキセチン塩酸塩である。セロトニンを増やす。ヨッパライの状態で薬を飲んだら、気分が悪くなって、心がパキッと折れたような感覚になって、記憶を失ったシッパイがある。思い出したくないエピソードである。さてパキシルの副作用は『太る』ことで有名である。実際のパキシルの添付文書に体重増加とある。抗うつ薬の中でパキシルは発作的な過食の誘発を起こす。食欲の不振でパクパク食べられなかったのが解消する。目の前の霧がパーッと晴れるというが、劇的な効果はなかった。あとパキシルは２４才以下の自殺リスクが指摘された。勿論パキシルの添付文書にも自殺念慮・自殺企図についてはパッと見て分かるよう冒頭に赤字で書いている。こんなパキシルのような自殺注意の薬を飲んでいて、クルクルパーにならないかと落ち込んだ。落ち込みを治すためにパキシルを飲んでいるのである。

注キ　ジェネリック

ジェネリックは後発医薬品。特許切れを他社が製造。

ジェネリックは成分名がそのまま商品名になっている。

ジェネリックが発売できるのは新商品の十年後である。

ジェネリックは一般的には『一般的な』という形容詞でジェネラルと同じ語源である。どうして後発品のことをジェネリックと呼ぶのか。この理由は、後発品の名前がジェネリック名（一般名）つまり成分名だからである。

ジェネリックの中でもぼくが処方されたグッドミンなどジェネリック名でないものがあった。今はグッドミンはジェネリック名に変更された。この理由は厚生労働省がジェネリックは成分名にするとの通達のためである。

ジェネティックは遺伝子のという意味で、語源が同じくジェネシス（ギリシア語、英語では創世記）である。

注ク　ＳＳＲＩ

セロトニンは脳内に放出したものが再取り込みされるがセレクトし阻害するのがＳＳＲＩである。一番目のＳはセロトニンの頭文字に思うかもしれないが、そうでなくセレクティブ（選択的）である。その次の二番目のＳがセロトニンである。Ｒがリアップテイク（再取り込み）（リが再、アップテイクが取り込み）で、Ｉがインヒビターズ（阻害薬）である。

注ケ　ストラテラ

ストラテラはＡＤＨＤの薬の商品である。神経伝達物質ノルアドレナリンの脳内濃度を上げる。薬種類は選択的ノルアドレナリン再取り込み阻害薬である。前頭前野のドーパミンの濃度も上げる。

ストラテラの副作用は『痩せる』ことである。実際にもストラテラの添付文書に体重減少・食欲減退とある。

ストラテラとパキシルは併用注意なので、ぼくは午前にストラテラを午後にパキシルを分けて飲んでいる。さてストラテラで痩せて、パキシルで太る。ぼくの体験で

はストラテラだけを飲んで53キロから47キロに痩せてパキシルも飲むと47キロから53キロに戻った。

注コ　アトモキセチン

アトモキセチンはストラテラの成分名である。正式名はアトモキセチン塩酸塩である。パロキセチンのところでパロキセチン塩酸塩が正式名といったのと同じである。

アトモキセチンに塩酸塩を付ける理由は水に溶けるときアトモキセチンに塩酸塩が付くと溶けやすくなるため。

アトモキセチンの塩酸塩は塩酸（塩化水素の水溶液）のイオン化合物という意味である。塩基（アルカリ）の＋イオンと酸の－イオンが結合した物質のことを化学ではエンと定義し、塩という漢字を当てている。なお英語でソルト（salt）が塩とイオン化合物を意味する。

注サ　デパス

デパスは基本的に抗不安薬として処方される。成分はエチゾラムである。抗不安薬なので朝昼夜と飲むのだがエチゾラムは睡眠薬代りもなる。朝や昼に飲むと副作用でマイクロスリープという一瞬の睡眠がぼくはあった。オーバードース（大量服用）で睡眠薬は自殺ができないがデパスはオーバードースによる自殺が可能という。実にオーバードース自殺での三番目に多い薬なのである。デパス（エチゾラム）について書いたら、不安になった。デパスを飲んで、不安を抑えることにしよう。

注シ　プロチゾラム

プロチゾラムを後発品や成分名で書いていて先ほどのデパスを商品名で書いているが、処方箋そのままである。デパスが普及して一般的になったからもしれない。同様にプロチゾラムよりもレンドルミンの方が、ぼくとってはピンとくる。精神医がプロチゾラム・アトモキセチン・パロキセチンと言っているのに、ぼくがレンドルミン・パキシル・ストラテラと答え会話が成り立っている。（パキシルとストラテラの順番を間違えた）不思議だがデパスだけ精神医もぼくも同じである。ジェネリックもデパスだけはジェネリック優先でも処方されていない。デパス1mgの薬価11円でジェネリックは9・8円とデパスとほとんど変わらないからであろう。参考であるがパキシル10mg薬価78・8円に対しジェネリックのパロキセチンは27・5円である。それよりもストラテラ40mgでは、薬価450・4円に対してジェネリックは159・5円である。最初はストラテラジェネリックが無かったので、1日3錠の3割負担で月12千円がパーッと一薬（処方で倍）で消えて落ち込んだ。それでパキシルやデパスを飲んでいたような気がする。

注ス　テストステロン

テストステロンは男性ホルモンである。五十才を超えてテストステロンの分泌が減って、男性更年期障害（レイト・オンセット・ヒポゴナディズム）を発症するのでウツ状態になるということが発表されている。

注セ　セロトニン

セロトニンのセと注セのセが並んで幸せである。前注のスでテストステロンのスと注スのスが微妙に一字ずれてストレスを感じていたのである。この様な些細なことでストレスを感じるのはセロトニンが少ないのだろう。

セロトニンは脳内三大神経伝達物質の一つである。他はノルアドレナリンとドーパミンである。別名で『幸せホルモン』と呼ばれる。幸せを感じるのに薬や金を使いホルモンを増やすなんてと不幸せに感じて悪循環で益々ホルモンを増やすためにパキシルを飲んでしまう。

注ソ　ナイアシン（ビタミンB3）

ビタミンB群にはB1・B2・B6・B12の他にナイアシン（B3）パントテン酸（B5）ビオチン（B7）等カタカナ表記と葉酸（B9）の漢字表記がある。

注タ　日本発達障害ネットワーク

ジェイディネット（JDDnet）は発達障害関係ネットとして最大の団体で、一般社団法人である。

注チ　ノルアドレナリン

ノルアドレナリンは神経伝達物質であり、『怒りのホルモン』と言われる。ストラテラの注釈で書いていないがノルアドレナリンが増えると怒ることが多い。ストラテラの副作用に怒りの感情は書かないといけないと思う。イライラしたときは飲まないようにしている。飲むときイライラが増幅するのを経験しているからである。

アドレナリンはノルアドレナリンから生成される。

アドレナリンは闘争逃走反応（ファイト・オア・フライト反応）を引き起こすホルモンである。

注ツ　フラッシュバック

フラッシュバックは過去の記憶を鮮明に思い出すことでトラウマ（心的外傷）経験が多い。

フラッシュバックは幻覚剤の体験を再現するにも使う。

注テ　ヘルプマーク

ヘルプマークは赤地に白の十字とハートを組み合わせたデザインのもの。外見から障害者と判らない人が使用。

注ト　グループホーム

グループホームは正式名が共同生活支援で、福祉サービスの一つ。サポートを受けて自立して共同生活をする。

注ナ　LD

ラーニング・ディスアビリティ（学習障害）。多いのはディスレクシア（失読症・読字障害）である。芸能人でディスレクシアを公表しているのは、トム・クルーズ、キアヌ・リーブス。スティーブン・スピルバーグである。

注ニ　ユニバーサルデザイン

バリアフリーが身体障害者の障害を排除するのに対してユニバーサルデザインは発達障害者や健常者等を含めたユニバーサルつまり普遍的に全て人の障害を排除する。

注ヌ　SNRI

セロトニン・ノルアドレナリン再取込み阻害薬（選択

的ノルアドレナリン再取込み阻害薬ではない）ＳＳＲＩのセレクティブでなく、セロトニンのＳである。ノルアドレナリンの影響か、抗うつ薬の太る副作用は少ない。パキシル）パキシル除くＳＳＲＩ）ＳＮＲＩの順に太る。

注ネ　ヲタク

ヲタクとヲで表記するのは漫画（映画化・ＴＶアニメ）『ヲタクに恋は難しい』の影響かもしれない。

注ノ　カサンドラ症候群

カサンドラ症候群はアスペルガーの妻の精神疾患。

カサンドラとは神話で予知能力を理解されない王女。

カサンドラ症候群は正式な診断名にはなっていない。

注ハ　光過敏

アスペルガーは光過敏だけでなく五感に過敏症がある。

注ヒ　パズルリボン

パズルリボンのリボンは実際のリボンではなく、輪状のパズルリボンの絵をバッジにして衣服にピン留めする。

パズルリボンというが、なぜだろうか。しかもジグソーパズルである。これは、自閉症スペクトラムがジグソーパズルの能力が高い為と言われている。ぼくはジグソーパズルをしたことがない。しかし、振り返るとジグソーパズルのように文章を書いている。この文章もジグソーパズルの空白にピースを埋め作成しているのでジグソーパズルを解くときと同じ脳の回線が働いているだろう。

パズルというなら、ジグソーパズルよりもクロスワードパズルの方が得意かもしれない。もっともクロスワードパズルもほとんど解いたことがないのだがクロスワードパズルを作るように横に意識して文章を書いている。

パズルリボンは発達障害者への理解と支援を示すアウェアネスリボンの一種である。パズルリボンを自閉症でシルバーリボンを発達障害全般とする場合もある。他にはピンクリボン（乳がん）が一般に普及していると思う。ゴールドリボンは小児がん、レッドリボンがエイズ、レインボーリボンがＬＧＢＴＱ、ホワイトリボンが平和、グリーンリボンが環境保護又は臓器移植、ブルーアンドイエローリボンがダウン症、オレンジリボンが人種差別。オレンジリボンを付けているのは推進でなく反対である。パープルリボンは特殊で、付けている本人しか判らない。パープルリボンは動物愛護、ＡＤＨＤ等二十以上もある。

注フ　ヂ

ヂの濁音は現代の日本語表記ではない。例外が連濁（レンダク）である。二語を連ねると後の語が濁ることでハナヂ（鼻＋血×ハナジ）等がある。肛門＋血ではコウモンヂとなり、コウモンジとはならないのである。

ヂの濁音で痔を思い浮かぶのは、痔専門の製薬会社が『ヂ』と（看板は平仮名）を使用しているからである。『ヂ』と表記するのは製薬会社創業時の歴史的仮名遣い。

注ヘ　キヅナ

ヅの濁音もヂの濁音と同じ様に連濁しか使われない。

キヅナは例外で、絆はキズナでもキヅナでも可である。キヅナの語源が引綱などのツナの連濁だったからである。キヅナの表記は現代政治でも『新党きづな』で使われた。

注ホ　ギャバ受容体

ギャバ（ＧＡＢＡ）は興奮を抑える神経伝達物質で、ガンマアミノ酪酸の略である。脳内のギャバ受容体はベンゾジアゼピン受容体と複合体になっており、ベンゾジアゼピン系薬がベンゾジアゼピン受容体と結合することでギャバ受容体にもギャバが結合し増加する。

注マ　ビリルビン

ビリルビンは、赤血球に含まれる黄色い色素。黄疸とはビリルビン色が血管を通して全身が黄色くなる病気。

注ミ　サブユニット

サブユニットは脳の受容体の結合部位のことである。

注ム　ベンゾジアゼピン系

デパスはベンゾジアゼピン系ともチエノトリアゾロジアゼピン系とも書かれている。脳内にあるベンゾジアゼピン受容体に結合する意味では前者であり、構造上ではベンゼン環（六角形の構造）が無いので後者である

注メ　フルボキサミンマレイン酸塩

フルボキサミンマレイン酸塩は抗うつ薬（ＳＳＲＩ）。ルボックスやデプロメールが商品名である。

注モ　シャレとオシャレが分からず、童顔

アスペルガー症候群の特徴であるが、補足説明する。

シャレと書いたが文献で冗談が通じないと書いていた。オシャレは外見を気にしない人が多い。外見に拘る人はオシャレが過剰になる。童顔とか顔つきが幼いというのはアスペルガー博士からも他の研究者からも指摘がある。非アスペルガーの弟とは似ていないぼくも血縁関係がないアスペルガーの人に似ている。ダウン症候群とも違ってアスペルガーは脳が原因で顔が似てくる気がする。なおダウン症候群は２１染色体が３本あることで、２１トリソミーとも言われ、染色体の影響で顔が似るのである。

注ヤ　サヴァン症候群

サヴァン症候群はアスペルガーの究極みたいなもの。

サヴァン症候群の人は驚異的な記憶力や計算力を持つ。

サヴァンはフランス語で賢人・学者の意味。イディオ・サヴァン（白痴の賢人）とダウン博士が名付けたのだがサヴァンだけ残って差別のイディオが無くなった。このサヴァン症候群を主人公にした映画が『レインマン』でサヴァン症候群を演じたのはダスティン・ホフマン。

サヴァンの名付け親のダウン博士はダウン症候群の名前ダウン本人である。ちなみにダウン博士が名付けたのはダウン症候群でなくモンゴリアンイディオシィ（白痴のモンゴル人）である。日本でも蒙古痴呆症と訳された。

モンゴル人民共和国の抗議により蒙古痴呆症は発見したダウン博士の名前に世界保健機関で変更された。恐らくダウン博士も自分の名前になると思わなかっただろう。

編集後記

新型コロナウイルスが世界を振動させています。今日のニュースでは、アメリカで感染者が五十万人を超え、死亡者一万八千人を超えたとか。日本も今日の段階では感染者が逐日増加して先行きが不安です。この新型コロナの脅威が、直ちに全世界で収まって欲しいと願うのみです。

まんじ合評会はコロナの関係で二月は中止し、五月二十三日に一五五号・一五六号を合同で行う予定ですが、少なくともそれまでにコロナ脅威が収束することを願っています。

このような中でも、まんじ誌の不思議なご縁で、本号に水谷房江様のご寄稿を掲載することができました。水谷様はまんじ誌九九号に掲載の、伊治哲氏（前同人・現維持会員）の「わたしたちは、スタインベルク三姉妹：よみがえった七十年前の音色：」をお読みになって、水谷様もこの三姉妹の一つのピアノを弾かれたことがあることから今回の寄稿になった次第です。掛川市にお住まいで、三戸岡氏の知人から紹介されてまんじ誌九九号をご覧になられたとのことです。

本号で同人新井宏氏の公訴も可能になった「著作権侵害罪」は大変興味を持って読ませていただきました。同人にとって日常気になる複雑な著作権問題がこれですっきりとはいきませんが、使用する参考文献からの参考・引用等の取扱い方法が見えてきた感じです。

また、新井宏氏がご自身のホームページで、まんじ誌全巻の著者名、執筆タイトルを一覧で掲載して下さっていることも、バックナンバーを探すときに便利させていただいています。併せて御礼申し上げます。

同人の皆様、くれぐれもコロナに気を付けて下さい。

（鍋）

まんじ第156号

令和２年５月１日発行（非売）

発 行 人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編 集 長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL･FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について

「文明は変われど　真理は変わらず」

田寺（たでら）怜葦（れい）　画

まんじ

No.157

2020.8.1

まんじ第百五十七号　目次

ラプソディイン コロナウイルス……新井　宏……4
戊辰東北戦争①　国家危急存亡の秋……千坂精一……22
令和これからの思春期……亜木陽一……39
漢詩　潮汐録（九十九）《漢詩の流れ87》……鯨（くじら）游海（ゆうかい）……41
漢詩　汲深録（二十一）……松井秀人……44
ロボット雑考（その十五）……三戸岡（みとおか）道夫（みちお）……46
古い物・遠い夢　名品歴々（茶道史余滴）……忠内正之……50
青雲の彼方（九）……太田精一……56
信託の歴史世界旅　その一……永田俊一……68
私の「昭和20年」（2）……山田嘉久……92
―終戦から75年―

回想　アウシュビッツ強制収容所と
ビルケナウ絶滅収容所―一九八七年八月六日―……山本鎭雄……101
性と化粧の物語（十九）……鈴木　守……111
禅語『随処作主』（内田の国の権現物語2）……横山正義……115
積小為大の精神……浅野博文……119
高山右近（七）……鍋屋次郎……127
…信仰に生きた生涯…
安芸門徒シルクロード紀行（8）……村上邦治……142
私の伊達政宗像を訪ねて（その四―⑤）……安藤　剛……167
明治時代の著述者　渋江保の一生（その二十二）……山本　勉……191
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）（七）……匠　克仁……193
塩塩塩……酸塩……匠　克仁……200
編集後記……編集　子……207

ラプソディ イン コロナウイルス

新井　宏

序奏

まず、最初に書いておきたいことは、「緊急事態宣言」が発令された四月七日の時点で、筆者は既に新型コロナウイルス感染は終息に向かっていると結論付けていた。

しかし安倍首相は記者会見で

東京都では感染者の累計が千人を越え、足下では五日間で二倍になるペースで感染者が増加しており、……このペースで増加が続けば二週間後（四月二十一日）には一万人、一ヶ月後（五月八日）には八万人を越える

とのべている。（　）内は筆者の補筆。

この解説を聞いて、新聞記者の中には「一万人、八万人」を全国ベースの感染者と誤解した者が多かった。一国の首相がまさか都の代弁をするとは思うまい。しかし文章を正しく読んでみれば、これは全て東京都の話なのである。

すなわち、四月六日東京都の感染者を一一九四人とすると、十五日後の四月二十一日には八倍の一万人、そのまた十五日後の五月六日には更に八倍の八万人という計算が成り立っているのである。

どうやら、小池知事に耳打ちされた情報らしいが、いくら仮の計算としても正気の沙汰ではない。

筆者は、数多くの理由から実質的には四月七日頃から終息に向かうと思っていた。その落差はあまりにも大きい。

気持ちが悪いのは、そこに当局者の意図的な「詐術」を感じるからである。

単純に言えば、オリンピック延期決定日（三月二十四日）の直前の三週間は、感染者数が増えるのを警戒してPCR検査を一日平均八百人に制限していた。そのため国際社会から検査数が一桁少ないと批判されていた。当然のことながら、検査待ちの「滞貨」が大量に市中に溜まっていたに違いない。

しかし、オリンピックの延期が決まると突如、当局者はコロナウイルス問題に目を向け始める。PCR検査を一日平均八百人から、千七百人、三千三百人へと毎週倍増させたのである。その結果、感染者数が四十人から九十人、二百二十人、四百九十人へと大幅に増えた。「五日間で二倍のペース」とはその過程で生まれた話である。

なぜ、PCR検査を一気に五倍まで増やしたのか。それはコロナ問題が政治の主題となり検査待ちの「滞貨」を一掃する必要が生じたからである。検査数に比例して感染者が増えるのは理の当然である。

馬鹿馬鹿しい。何たることか！

本当の感染者数が急増したのではなく、積み残し「滞貨分」が数字になって現れただけの一時的な現象なのではないか。そうであれば、あと二、三週間もして「滞貨」が一掃されると、新規感染者数が元の水準に戻るはずだ。

そういう結果になると、為政者は、おそらく「緊急事態宣言」の成果だと「自画自賛」するに違いない。

いわば、オリンピック対策としてPCR検査の増大を制限したために起こした「失策」を逆に利用して、「滞貨一掃」の過程で起きた見かけの感染者の大幅増により国民を威嚇し、「緊急事態宣言」に結びつけて権力を掌握、数字だけでも減少すれば、全て「宣言」の成果であると大合唱するシナリオなのである。あたかもマッチ・ポンプの連鎖のような「詐術」である。

そうだ！

ぜひともこのことを『まんじ』に書こう。

しかし、次号の原稿締切りは六月末、発行は八月初旬になる。その頃になってから載せてもらっても「後出しジャンケン」で面白くない。

ともあれ、さっそく原稿を書き始めるが、新型コロナウイルスの進展によって、我が見解にとって思わしくない変化が生じても、この冒頭部分だけは書き換えまい。そう宣言してから、あとはゆっくり書く。

令和二年四月九日。

提示部

筆者はかなり初期の段階から新型コロナウイルス問題にのめり込んでいた。ひとつは、中国の武漢コロナウイルス大惨事が終息に向かった二月二十日に、韓国の大邱で新興宗教団体の集団感染事件が起こったことである。これはイランが感染制御不能に陥る一週間ほど前のことで、世界的な大ニュースであった。大邱は筆者のいた慶尚大学のいわばテリトリー内にある。日本の状況との比

較の意味でもとにかく興味深い。

もうひとつは、新型コロナウイルスと筆者の専攻した金属学の間に、実に良く似た現象があり、それを応用すると、面白い議論ができるように感じていたことである。

そんなことで、武漢コロナウイルス問題の当初から、朝に晩に、関連資料の収集に余念がなかった。既にかなり膨大なデータベースを整備し、勉強もしていたので、新型コロナウイルス感染のピークは「桜の頃」、その後、急速に終息に向かうとの見解に到達していた。

何故オリンピック延期後に感染者が激増したか

すでに序奏で声高らかに歌いあげたが、ロンド形式のつもりで、その後の情報も加味して再論する。

オリンピック延期決定前の日本のＰＣＲ検査数が異様に少なかった事は既に述べた。外国メディアからも厳しく指摘されたように、その頃すでに韓国では三十万人の検査を終えていたのに日本では二万人にも手が届かなかった。人口比を考慮すれば韓国の五十分の一の検査水準であった。

なぜ、日本のＰＣＲ検査が少なかったのか。序奏では、オリンピック開催のために、感染者数の増大が目立つのを避けるためだったと述べた。もちろんその要素が大きく作用したであろうが、別の原因もある。

日本の感染症実務を取り仕切る医務官僚は、むやみに検査範囲を拡げると、元気な患者、陽性無症状者ばかりが激増し、肝心の重篤患者の治療に重大な支障をきたすと考えていた。

陽性判定を受ければ、無症状者であっても、立派な患者である。しかし無症状者に保健所が対処できることはあまりない。せいぜい隔離するしか方法がないが、縦割り行政の中、医療関係者がそんなことまでやっていては、肝心の感染患者に対応できない。重篤者の救命に注力するだけでも精一杯なのである。だから、ＰＣＲ検査を拡げて大量の陽性無症状者が発生することを怖れていた。ちなみに医療関係者は、ＰＣＲ検査の陽性者の中には無症状者や軽症者が八十パーセントくらいはいると想定していた。

ＰＣＲ検査が遅れたもうひとつの理由は、検査に慎重を期したためである。韓国のような検査キット方式ではＷＨＯの規定の精度は出せないと考えていた。精度の悪い検査によって、健常者を感染者と誤るとか、逆に感染者を健常者と誤ることは、個人を対象とする限り、極めて厄介な問題を生じさせる。だから官僚は動けなかった。

しかし疫学的な見地からは、たとえ個々の検査精度が落ちても、大量データを利用して感染防止を策定する方が、はるかに事態を正確に把握できる。

こんな時にこそ、人口知能（ＡＩ）がお出ましする絶好な機会なのに、さっぱりニュースにならない。意味もわからず、おまじないのようにＡＩ（人工知能）を唱えているだけだったのか。

ところで、隣の国の文在寅大統領は、親愛なる中国には何も言えず、中国人の入国阻止に踏み切らず大失敗を起こした。はじめから決然として、中国からの入国を拒否したベトナムや台湾が、いまだに完璧に感染者発生を押さえ込んでいるのと正反対で、いきなり大邸において新型コロナウイルス感染症のブレークアウトを起こしてしまった。

そのため、もはや政権の座には留まれない状況が生まれていた。何かせざるを得ない状況のなかで、信頼性の確認も出来ていなかった「キット方式」に走ったのである。

それが成功して、怪我の功名をもたらした。いまや世界のコロナ感染対策の「第一人者」として意気軒昂たるものがある。そのため四月十五日には失墜していた支持率を回復、国政選挙で文在寅与党が大勝を収めた。

韓国の文在寅が「失政」を利用して大逆転をはかったかのように、安倍首相もオリンピックの失政を、コロナ問題で回復する必要があった。

オリンピック延期前後のＰＣＲ検査からわかること

ここでオリンピック延期を決めた前後のＰＣＲ検査数、陽性者発生数、その中の有症状者数と無症状者数などについて週間単位にまとめて表１に示す。単位は全て日々の平均値である。

以下、後の記述に便利なように、二月十日～十六日の週を第Ⅰ週とし、四月二十七日～五月二日の週を第Ⅻ週とする一連の週番号をつける。

表１を見れば明らかなように、オリンピック延期決定前の第Ⅳ週から第Ⅵ週までの三週間は、ＰＣＲ検査数が一日平均八百人ほどであった。それが延期直後から増えはじめ、第Ⅷ週千七百人、第Ⅸ週三千三百人、第Ⅹ週四千百人と膨れ上がる。

その過程で、延期前の「滞貨」が解消されたことは疑いない。その証拠に、延期前には陽性でありながら無症状の者が一日平均四人しか検出されなかったのに第Ⅷ週には百人、第Ⅸ週には二百人に達するのである。明らかに従来の検査とは異なるグループであった。それが延期前の「滞貨」であったことは容易に推測できる。

そうなのである。オリンピック延期後のＰＣＲ検査の急増は、新たに患者が増大したのではなく、延期前の「滞貨一掃」によるものだった。このことは図１に示す日本

表1 PCR検査と陽性者判定の関係(日平均表示)

五輪	週番号と期間		PCR検査結果(日平均)				対検査数比(%)		
			検査数	陽性	有症	無症	陽性	有症	無症
延期決定前	Ⅰ	2:10 ～ 2:16	8	1	1	0	9	9	0
	Ⅱ	2:17 ～ 2:23	83	13	12	2	16	14	2
	Ⅲ	2:24 ～ 3:01	116	16	15	1	14	13	1
	Ⅳ	3:02 ～ 3:08	809	31	27	3	4	3	0
	Ⅴ	3:09 ～ 3:15	693	46	41	6	7	6	1
	Ⅵ	3:16 ～ 3:22	861	36	32	4	4	4	0
境	Ⅶ	3:23 ～ 3:29	1168	90	64	27	8	5	2
延期決定後	Ⅷ	3:30 ～ 4:05	1707	221	122	99	13	7	6
	Ⅸ	4:06 ～ 4:12	3267	489	283	206	15	9	6
	Ⅹ	4:13 ～ 4:19	4080	515	293	222	13	7	5
	Ⅺ	4:20 ～ 4:26	4563	402	227	175	9	5	4
	Ⅻ	4:27 ～ 5:03	4202	235	130	94	6	3	2
	13	5:04 ～ 5:10	3919	129	62	68	3	2	2

毎日新聞電子版「新型コロナウイルス・国内感染状況」より
12時の集計、PCR検査数を載せているのは毎日新聞のみ

全国の陽性者発生数の内の東京都の割合を見ると一日瞭然である。

点線で示すラインが本来の姿であろうが、2月末頃から検査を抑制していたらしくオリンピック延期決定が話題に上がる3月中旬まで比率が急激に下がっている。それがオリンピック延期を決定した三月二十四日から急上昇するのである。このような異常現象は隣接する神奈川県や埼玉県、千葉県には全く見られない。都の意図的な行為とみてよいだろう。

「滞貨一掃」のため検査対象を市中まで拡げれば、危惧していた元気な陽性無症状者が急増するのは当然である。

つい最近明らかになったことであるが、武漢の感染者数にはPCR検査で陽性と出ても無症状の者は含めなかったという。明らかに国際規定に違反しているが、陽性無症状者まで含めると、患者数があまりにも膨大になってしまうので誤魔化していたわけである。しかし、

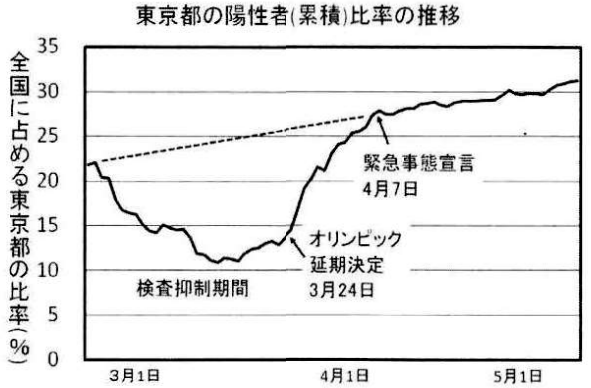


図1 全国の感染者数に占める東京都感染者の比率

その根っこでは日本の医療陣と同じように、無症状者は、感染力も弱く治療の必要もないと認識して隠していたのである。

その中国でも四月一日以降になって、陽性無症状者の人数も発表するようになった。そのお陰で、武漢における陽性者の内に無症状者の占める割合を八十二パーセントと計算できた。

最近、ニューヨーク州でも「知らないうちに感染して治ってしまった者」、すなわちウイルス抗体者の割合が既に人口の六～七パーセントもいることが判った。ニューヨーク州だけで百万人ほどになる。当局が掌握している感染者数は三十万人ほどである。感染者の大部分が掌握されていなかったことは、日本、中国ばかりのことではない。

だから日本におけるPCR検査数が国際水準から大きくかけ離れていたとしても、充分にあり得る話なのである。検査数を増やせば、それに比例して、まだまだ陽性者が出て来る。

この原稿を書き始めて、第Ⅺ週に入ってからもPCR検査数は増大し一日平均五千人を越えた。

ここで注目して欲しいことは、検査数を増やしたにもかかわらず、新規陽性者が五百人から四百人に減少していることである。筆者の予測通り、もう既に新規感染者は減少していたのである。再度言うが、検査数さえ増やせば、感染者数はいくらでも増やせる時期があった。そんな仕組みのもとで、「緊急事態宣言」は出されたのである。

世界の感染状況の推移

なぜ筆者が日本の感染者発生は「桜の季節」を過ぎると減少に向かうはずだと思ったのか。

それにはいくつか理由があるが、まずは世界二百か国の感染者推移をみてみよう。読み物の資料としては細かすぎて恐縮であるが、何とか大幅に単純化して一頁にして表2に示す。

表は東アジア・東南アジア（以下簡略に「東アジア」という場合もある）から十三か国、ヨーロッパから二十五か国を選んでいるが、その他の地域については大幅に簡略化して、国連地域分類に基づき代表的な国を例示するに留めた。各国の状況については、まずは信頼性の高い死亡者数（四月三十日付け資料）を重視する。

新型コロナウイルスの前にも、コロナウイルスによる感染症大流行はあった。二〇〇三年の中国広東省SARS（重症急性呼吸器症候群）では八百人、二〇一三年のMERS（中東呼吸器症候群）でも九百人の死者を出している。しかし、今回の新型コロナウイルスは四月三十日現在で二百倍以上の二十三万人の死者を出している。

表2　東南アジアとヨーロッパ諸国のコロナウイルス感染者発生状況（厚生労働省報道資料より）

死亡率は人口百万人あたりの累積死亡人数。感染率は人口一万人あたりの累積感染者数

日々の感染者発生者数は一週間単位でまとめ一日当たりの平均で示す。ピーク時を強調表示

中国の資料は実質的な地域としては武漢のみが対象。武漢都市圏の人口はほぼ3000万人。

国連の地域名	国名	人口	感染者数		死亡者数		各週番号の平均感染者数推移（一日当たり）								
							V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	13
		（万人）	1/30 現在	感染率	1/30 現在	死亡率	3/09～3/15	3/16～3/22	3/23～3/29	3/30～4/05	4/06～4/12	4/13～4/19	4/20～4/26	4/27～5/03	5/04～5/10
東アジア	中国	134933	82862	0.6	4633	3.2	21	30	55	33	55	98	13	7	2
東アジア	日本	12654	14088	1.1	415	3.3	42	38	92	225	497	516	403	237	132
東アジア	韓国	4818	10765	2.1	247	4.8	147	105	98	93	39	21	10	9	8
東アジア	香港	739	1038	1.4	4	0.5	5	19	44	40	20	3	2	0	1
東アジア	台湾	2379	429	0.2	6	0.3	1	14	19	10	4	2	4	0	1
東南アジア	インドネシア	26400	9771	0.4	773	2.9	13	51	101	134	250	344	337	319	378
東南アジア	フィリピン	10490	8212	0.8	558	5.2	15	28	110	288	191	237	172	233	256
東南アジア	タイ	6904	2947	0.4	54	0.8	5	47	119	117	64	31	25	8	6
東南アジア	ベトナム	9554	270	0.0	0	0.0	5	6	11	9	3	1	0	0	3
東南アジア	ミャンマー	5337	150	0.0	5	0.1	0	0	1	2	2	9	7	1	4
東南アジア	シンガポール	561	15641	27	14	2.4	11	31	53	55	159	528	957	694	693
東南アジア	マレーシア	3162	5945	1.9	100	3.1	21	113	184	166	150	111	62	62	60
東南アジア	カンボジア	1601	122	0.1	0	0.0	1	6	7	2	1	0	0	0	0
南アジア	インド	133900	31787	0.2	1008	0.7	7	23	106	298	637	1038	1450	1833	3094
北アジア	ロシア	14450	99243	6.8	972	6.7	6	28	144	492	1263	3313	5395	7052	10618
中央アジア	ウズベキスタン	3239	2002	0.6	8	0.2	0	6	9	23	72	103	53	37	35
西アジア	トルコ	8081	117589	14	3081	37	1	135	922	2362	4033	4309	3635	2372	1866
西アジア	イラン	7397	93657	11	5957	72	987	1126	2114	2905	2041	1548	1209	1017	1374
北欧	英国	6204	165221	24	26097	386	137	554	1724	3429	5414	5032	4880	4840	4851
北欧	アイルランド	483	20253	42	1159	238	10	85	247	313	618	833	543	374	228
北欧	スウェーデン	938	20302	20	2462	245	112	117	243	428	530	524	622	558	531
北欧	デンマーク	555	7437	13	336	61	116	83	135	272	275	178	172	137	135
北欧	ノルウェー	488	7710	14	195	36	109	146	274	238	128	90	65	45	41
北欧	フィンランド	551	4906	9	199	36	20	42	102	102	146	111	113	100	94
北欧	エストニア	133	1666	13	50	38	15	27	48	56	38	30	18	9	4
北欧	ラトビア	192	849	4	13	7	4	14	26	29	17	12	13	10	10
北欧	リトアニア	289	1375	5	44	16	1	11	44	54	36	30	27	-3	5
西欧	ドイツ	8230	143160	17	4459	54	429	1838	5862	5417	4263	2530	1894	1221	937
西欧	フランス	6279	129859	20	24087	370	507	1423	3302	4433	3598	2576	1756	981	1240
西欧	オランダ	1718	38802	23	4711	276	110	382	876	981	1112	1025	800	435	310
西欧	ベルギー	1071	47859	42	7501	651	74	304	903	1328	1370	1309	1163	599	416
西欧	オーストリア	839	15352	17	580	65	82	308	740	524	302	123	69	56	44
西欧	スイス	766	29325	34	1407	164	137	704	1014	998	660	358	213	132	65
東欧	ポーランド	3828	12640	3	596	16	9	51	173	284	390	341	362	300	332
東欧	チェコ	1049	7579	7	227	21	23	102	250	244	220	101	104	60	52
東欧	スロバキア	545	1391	3	20	4	6	19	16	26	37	52	41	5	8
東欧	ハンガリー	977	2727	3	300	31	4	10	34	48	90	75	87	71	39
東欧	ブルガリア	705	1447	2	58	8	6	17	24	25	23	31	53	50	46
東欧	ルーマニア	1953	11978	6	650	34	16	35	155	309	340	347	317	300	347
東欧	ウクライナ	4222	9866	2	250	6	0	6	44	124	184	371	431	469	464
東欧	ベラルーシ	951	13181	14	79	8	3	7	3	49	255	365	687	891	879
南欧	イタリア	6055	203591	34	27682	457	1695	5118	5556	4594	3948	3379	2775	1997	1310
南欧	スペイン	4608	236899	51	24275	519	860	2729	6820	7357	5302	4268	4576	-1025	1046
南欧	ポルトガル	1062	24505	24	973	95	21	159	556	765	780	528	530	257	346
南欧	ギリシャ	1074	2576	2	136	13	26	38	81	87	58	22	39	16	12
北アフリカ	エジプト	9755	5268	1	359	4	14	26	40	71	124	156	184	268	381
中アフリカ	カメルーン	2405	1832	1	58	2	0	4	9	66	38	28	72	80	32
西アフリカ	ナイジェリア	19090	1728	0	40	0	0	3	11	17	15	25	86	185	190
南アフリカ	南アフリカ	5672	5350	1	93	2	5	29	135	57	63	144	190	282	427
大洋州	豪州	2460	6738	3	88	3	19	97	394	273	108	35	20	11	22
北米	米国	31038	1038451	32	60876	185	373	3220	13882	26552	31225	28505	29613	28026	25315
中米	メキシコ	12920	17799	1	1434	11	3	25	73	139	308	433	857	1124	1480
南米	ブラジル	20930	78162	4	5466	26	20	140	397	911	1493	2267	3130	5436	8128

東アジアは欧米より死亡率が二桁低い

こんな状況下にあってもWHOは大スポンサーの中国に気を遣い、パンデミックを宣言したのは、三月十一日、既に百十か国、感染者十二万人、死亡者五千人という数字が出てからであった。

以下、表2は気になった時に見て貰えばよいが、最初に注目してほしいのは、欧米と東アジアの死亡率の間に大差があることである。

「東アジア」の人口五百万以上の十二か国（中国、日本、韓国、香港、台湾、インドネシア、フィリッピン、ベトナム、タイ、ミャンマー、シンガポール、マレーシア、カンボジア）の内で、総合成績の最も悪い国は韓国で、死亡率は百万人当たり四・八人、感染率は一万人当たり二・一人である。

あれ！　何かの間違いではないか。韓国政府は、世界で最もうまく新型コロナウイルスを制御していると自画自賛して、四月十五日の国政選挙に圧勝したはずではないのか。

しかし数字は冷酷である。

それにしても、今回の武漢コロナウイルス事件の主人公、中国はどこにいったのか。死亡率は百万人当たり三・二人、感染率は一万人当たり〇・六人で、韓国よりも成績が良い。そんな馬鹿な話はあるはずもないが、由は簡単で、武漢コロナウイルス事件と言われているように、中国では強権を発動してウイルスを武漢に閉じ込め、その他の地域に感染させなかった。ちなみに武漢都市圏の人口は三二〇〇万人なので、死亡率は一気に百万人当たり百五十人に跳ね上がり、ヨーロッパや米国なみとなる。

日本は死亡率百万人当たり三・三人で「東アジア」の中位である。それではヨーロッパ主要国はどうか。

死亡率で見ると、ベルギー、スペイン、イタリアが百万人当たり四百～六百人、英国、フランスが三百八十人、オランダ、スウェーデンが二百人～三百人と続いている。米国や中国武漢はスイス並みで二百人弱、ポルトガル、デンマーク、ドイツ、オーストリアが五十～百人である。

ヨーロッパ主要国の内で、百万人当たり十名の死亡率を下回る国は東欧のブルガリア、ベラルーシ、ウクライナしかない。「東アジア」で中位の日本の三・三人より成績の良い国など皆無なのである。

それでは、「東アジア」の成績が良いのは、政治がうまく感染を制御したからであろうか。そんなことは信じない。

しいて言えば、「東アジア」諸国はヨーロッパ諸国よりも温かく、湿度も高いということである。ヨーロッパ諸国の中で、東京の北緯三十五・五度よりも南の国はひ

とつもない。こじつければ、「東アジア」で最も死亡率の高い韓国が最も北にあり、ヨーロッパで死亡率の最も低いブルガリア、ギリシアが最も南にある。

今度の新型コロナウイルス感染は、アフリカにも拡がっているが、総じて「東アジア」並みである。第一次近似として、気温の高い地域はコロナウイルスに対して有利なのであるが、一方で乾燥地域という弱点もある。

コロナウイルスは温度と湿度に弱い

一般的なコロナウイルスの話としては「温度や湿度が高くなると死滅するのが早い」といわれている。単純には言えないにしても、一般のインフルエンザは「温度、湿度の低い冬期に流行し、春になると収まる」のである。

そう思って、今度の新型コロナウイルス症について、世界を見回してみよう。

香港大学の研究陣がコロナウイルスの生存期間に及ぼす温度の影響を測定したというニュースがあった。数値が公表されているので、放射能の半減期のように数式化してみた。

結果だけ示すと、半減期は温度が五度上がると半分になる。十度上がれば四分の一に、二十度上がれば、十六分の一になるのである。だから気温が十五度上がれば浮遊するコロナウイルス等は八倍速く死滅するのである。

表3　世界各国の新型コロナウイルス感染者発生数ピーク期

	Ⅰ～Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ
国連分類	2月10日～2月16日	3月16日～3月22日	3月23日～3月29日	3月30日～4月5日	4月06日～4月12日	4月13日～4月19日	4月20日～4月26日	4月27日～
東アジア	中国 韓国	台湾	香港			日本		
東南アジア			タイ ベトナム マレーシア カンボジア	フィリピン		ミャンマー	シンガポール	インドネシア
西欧			オーストリア スイス	ドイツ フランス	オランダ ベルギー			
南欧			イタリア	スペイン ギリシャ	ポルトガル			
北欧			ノルウェー	エストニア ラトビア リトアニア	英国 デンマーク フィンランド	アイルランド	スウェーデン	
東欧			チェコ		ポーランド ハンガリー	スロバキア	ブルガリア	ルーマニア ウクライナ ベラルーシ
アフリカ								南アフリカ ナイジェリア エジプト カメルーン
西南アジア				イラン		ウズベキスタン トルコ		インド ロシア
豪州・米州			豪州		米国			ブラジル メキシコ

低温でコロナウイルスが生存し続けるのは、精子の長期冷凍保存と同じ原理であろう。

次に湿度の問題であるが、新型コロナウイルスの場合、湿気の極度に低い高温地帯で感染がひろがっている。東南アジアでも、モンスーン気候帯で三月頃から乾期の始まるシンガポールやインドネシアが、感染も多く、他国に比較してコロナの「終息」が遅れている。

注目すべきことは、日本や韓国では気温が高い時期ほど湿度も高いが、アジアモンスーン気候帯の東南アジアでは、逆に三月頃になると厳しい乾期がはじまる。ヨーロッパも大部分の国で暖かくなるほど湿度がさがる。

日本は春になると気温も湿度もあがるので、二重の意味でコロナウイルスには生存し難く、コロナウイルスにとっては将に「天敵」とも言うべき国なのである。

「東アジア」は既に終息にむかっている

さて、ここで各国の週間単位でみた感染者発生数の推移を見てみよう。表2には発生数がピークを示した週にマークをつけているので、それを参照してほしいが、全体を整理すると表3のようになる。東アジア十三か国の内、日本よりも終息が遅れているのはシンガポールとインドネシアであるが、いずれもアジアモンスーン気候帯に属して、三～四月になると一気に乾期を迎える。コロナウイルスは湿度の低い乾期に盛行する。偶然の一致とは言えないようなのだ。

ヨーロッパの場合も、猛威を振るっていた西欧・南欧・北欧の十九か国の内、十八か国が三月後半から減少に向かっている。それに反し、三月後半まで感染者の発生がほとんど見られなかった東欧は全般的に終息に向かうのが遅れている。

特に、ブルガリア、ウクライナ、ベラルーシの三国は、ロシアと共に感染者が未だ増加中である。ユーラシア大陸の中でも典型的な内陸型気候を示す地域であり、海洋性の気候を持つ日本とは正反対である。

これらの比較を通して日本の立ち位置を評価すると四月初旬、「緊急事態宣言」を出した頃から終息に向かうとの予想は極めて妥当な見解だったと思う。コロナウイルスの天敵の国の日本が、未だ終息に向かっていないとすれば、日本の対応が極めて杜撰であったということになる。

実は、そのとおりであり、オリンピックにばかり目を向け、新型コロナウイルス症など、暖かくなれば自然に治まると楽観していたようなのである。

その上、日本は最初から、PCR検査に積極的でなかった。検査精度にこだわったため、大量検査に対応出来なかった。オリンピックを控え、感染者数の増大は避ける必要があった当局者とは阿吽の呼吸で「忖度」しあっていたのである。

しかしオリンピックが延期になり、にわかにコロナウイルス対策のため「滞貨一掃」に乗りだし、一気に感染者数を増加させてしまった。そのツケが結局、いまだ終息への展望を持てず、焦って「緊急事態宣言」につながったというのがストーリーである。

首相宣言の予測はどうなったか

さて、それでは「緊急事態宣言」の首相の予測はどうなったであろうか。「このまま行けば、四月二十一日には東京都の感染者が一万人に達する」という予測のことである。

「このまま行けば」などと人ごとのように言っているが、「宣言」の効果が出はじめるのは二週間以降になると言っていたので、記者会見では「いったん二週間後に一万人に達してから超急速に減少する」図を示していた。

「宣言」の効果が遅れるのは、タイムラグがあるからである。すなわち、四月七日の夕刻に宣言を出しても、実行体勢が整うのが十一日、その日に感染を受けた者が発症するのが早くて十五日、さっそく検査申請をして検査して結果報告がでるのが七日後の二十二日、集計され発表されるのが二十三日という具合である。

したがって、四月七日の七都府県に対する「緊急宣言」の効果は四月二十一日以降に、四月十六日の「対象地域拡大」の効果は五月一日以降にならないと現れない。このことを厳格に見て行かないと、都合の良い説明をされるので、注意して欲しい。

さて、首相宣言に示された東京都の四月二十一日の累積感染者数の予測一万人に対して実績はどう出たかのであろうか。

まず首相宣言の数値と東京都の実績を対比して表4の上欄に示す。首相宣言の数値は四月二十一日に一万人、五月六日に八万人としているので、これをモデル式にして、各週末の累積感染者の数を表に記入し、それに対して実績を示す。

四月十九日の累積感染者数を見ると、首相は七五二九人と予想したが、実際は三〇七七人で二・五倍、四月二十六日で比較すれば、二万人と四千人の大差になり、まじめに議論するのが馬鹿馬鹿しい。

そういえば、「宣言」の二週間ほど前に、大阪府知事と兵庫県知事の間で通勤論争があった。

その時、厚生労働省が示した資料によれば、大阪府・兵庫県合わせて三月十九日現在、七八人の感染者がいるが、三月二十七日には五八六人、四月三日には三三七四人になると威嚇している。しかし実績を見れば、四月三日に四四一人で信じがたい大差である。

表4「緊急事態宣言」の実績評価表　数値は人口百万人当たりの感染者発生数／日
(4.7対策の効果は4.21から、4.16対策の効果は5.1から反映される)

項目別に比較している		人口(万人)	3/09・3/15	3/16・3/22	3/23・3/29	3/30・4/05	4/06・4/12	4/13・4/19	4/20・4/26	4/27・5/03	5/04・5/10	5/11・5/17
都感染者累計人数予測(安部首相)						1033	2627	7529	20334	51760		
都感染者累計人数実績			90	138	401	1033	2158	3077	3908	4568		
宣言対策別	4.7「緊急宣言」東京	1,391	0.3	0.5	2.7	6.5	11.5	9.4	8.5	6.8	3.1	1.9
		指数	2	4	23	56	100	82	74	59	27	17
	4.7「緊急宣言」埼玉・千葉	4,221	0.6	0.4	1.3	2.3	5.4	4.4	3.2	1.8	0.9	0.6
	神奈川・大阪・兵庫・福岡	指数	12	7	25	42	100	82	60	34	16	11
	4.16「特定警戒」北海道	525	1.4	0.4	0.3	0.5	2.1	4.3	5.1	6.3	2.9	1.6
		指数	21	6	5	9	33	67	80	100	45	26
	4.16「特定警戒」茨城・	1,613	0.5	0.3	0.7	2.3	3.3	2.0	1.8	0.8	0.4	0.2
	石川・岐阜・愛知・京都	指数			21	68	100	60	54	23	13	6
	その他　34県	4,883	0.1	0.2	0.2	0.9	1.8	1.4	1.0	0.4	0.1	0.1
		指数	6	9	13	48	100	80	53	22	7	5
地域別	北海道	525	1.4	0.4	0.3	0.5	2.1	4.3	5.1	6.3	2.9	1.6
	本州北(中部以北)	7,344	0.3	0.3	1.1	2.6	4.9	3.8	3.2	2.1	1.0	0.7
	本州南(近畿以南)	2,961	0.7	0.4	1.1	1.5	4.0	3.5	2.4	1.5	0.6	0.2
	四国+九州	1,806	0.0	0.2	0.3	1.8	2.8	1.9	1.4	0.4	0.1	0.2
東南アジア	台湾	2377	0.3	4.2	5.5	3.0	1.3	0.5	1.3	0.1	0.1	0.4
	香港	743	4.3	17.8	41.6	37.7	18.7	3.1	1.9	0.3	0.3	0.8
	マカオ	3195	0.0	14.1	28.1	10.9	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ベトナム	6962	0.3	0.4	0.8	0.7	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2
	ラオス	716	0.0	0.0	1.1	0.3	1.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	タイ	6962	0.5	4.7	12.0	11.8	6.5	3.1	2.5	0.8	0.8	0.6
	マレーシア	3195	4.5	24.8	40.4	36.4	32.8	24.3	13.7	13.6	13.6	13.1

これが、関係者の実状認識ということなのか。いや、そんなことが有るはずがない。官僚達は、政治家の望む形の数値を出しただけなのだと思う。

さて、東京都の場合、首相の例示に大差があったが、その他の地域はどうであったろうか。東京都と共に、「緊急事態宣言」に含められた東京近辺の三県や大阪・兵庫などの感染者発生状況を比較して見る。これが、なんと全て東京都と同じカーブを示しているのである。

くどくなるが、どんなに素晴らしい対策を採ったとしても、タイムラグがあるので、二週間は数字に表れない。それにもかかわらず、四月十三日の週から各地一斉に新規感染者が減少し始めている。

しかも、最も早く終息にむかっているのが「その他三十四県」であり、それにつづくのが、追加対策の「特定警戒」地域で、最も成績が悪いのが東京都であり、続いてその他の「緊急事態宣言」の六府県である。

重点を置いたところほど改善が進まないとはなんたることか。だから各地で一斉に新規感染者が減少しはじめたのは、「宣言」の効果ではあり得ない。コロナウイルスの天敵、高温多湿の日本の気候が効果を上げ始めたのである。

しかも表4の地域別を見ると、北海道から九州に向かって南に行くほど、新規感染者の減少が早くすすんで

いる。その関係の続きとして、東アジア・東南アジアの諸国の状況を示すが、当然のことであるが、日本は東アジアの一員として位置付けられている。

統計と言うのは恐ろしい。日本全国で感染者発生の経時分布が全く同じカーブを示しているばかりか、天候の影響さえも東アジアとの連続性を明瞭に示している。

したがって、感染者発生が減少に転じたのは、春が来て温度・湿度が上昇したことによるものであって、安倍首相が力説したからではない。

おそらく、この気候の効果だけでも今後数週間の間に、新規感染者数を全国ベースで一日当たり数十名以下に下がると確信している。その上、四月二十一日以降は「宣言」の本当の効果が加わるはずであり、五月一日以降には六道府県を加えた「特別警戒十三都道府県」の効果も加わる。まもなく「終息」を迎えるであろう。

その日になれば安倍首相も、文在寅大統領と同様に、わが政策の成果だと自画自賛するのであろう。

筆者は「緊急事態宣言」の主旨には賛成出来ても、休業補償などで膨大な負担がかかる。学校を休校にしてどんな効果があるのか。

「負担」と「効果」と兼ね合いを考えて対応するのが「政治」である。日本よりも百倍も犠牲者を出している欧米と同じように対応するのは、強迫観念によるのではないか。

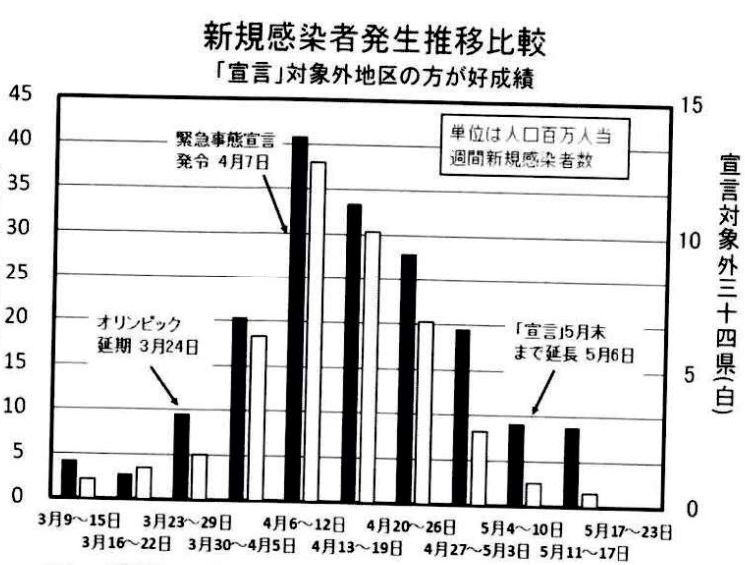


図2「緊急事態宣言」対象地域と非対象地域の比較

有りもしない「危機的な状況」を掲げて国民を威嚇し、うまく行けば自らの手柄にする方式はポピュリズムの典型である。

さて、ここまで、書き進んだところで一休みする。

四月十六日に「緊急事態宣言」を六道府県に拡大した効果は、五月一日以降にならないと現れない。新たな実績を毎日毎日追いかけていても、結局は待つしかないからだ。なお表4には、随時、新たなデータを追記して行く。

その間に予告した「コロナウイルスと金属学」の奇妙な類似とそれに基づく「風変りな提案」について書くつもりである。

令和二年四月二十九日。

展開部

一休みしている内に、また展開があった。

安倍首相は五月一日、新型コロナウイルス対策を検討する政府の専門家会議の提言を踏まえ、緊急事態宣言の延長を「四日に決定したい」と表明した。

えっ！　何だって！

最初の発表では、「宣言」二週間後の四月二十一日頃には、東京都で新規感染者が毎日千四百人ほど発生することになると脅かしていた。しかし実際は百三十人から百五十人へ微増したものの予想の十分の一の水準に留まった。大成果のはずであるが、要は予測を誤っただけのことなので、それをあからさまには言えない。そうすると四月末の新規感染者が毎日百人程度では、大号令を出した立場ではまことに物足りない。

そもそも、「宣言」を継続する理由は、「効果があったから」なのか「効果が無かったから」なのかさえ明快には言わない。四月十六日には対象を六道府県増やし十三都道府県としたが、今度は全国を対象にしたいという。まさかと思った。

さすがに五月四日の安倍首相の説明ではトーンダウンしていたが、全国適用を取り消さなかった。

図2の実績図をみれば誰でも判るが、緊急宣言の「特別警戒」の対象十三都道府県の方が対象としなかった地域三十四県にくらべ、圧倒的に成績が悪かったのである。改善度でみれば、「宣言」対象地域は五分の一なのに非対象地域は二十分の一、感染者発生率で言えば、宣言対象地域の方が二十倍も悪い成績なのである。

要は数字の上では「緊急宣言」など何の役にも立たなかったと言うことなのである。

そもそも安倍首相は、日本におけるコロナ事態を国際的な視野でみたことがあったのであろうか。

比較対象国としては、経済環境の似ているＯＥＣＤ（経済協力開発機構）の三十七か国を採る。

日本の成績順位は四月末基準で次の通りである。

百万人当たりの死者数　三・三人　第一位
一万人当たりの感染者　一・一人　第一位

韓国、オーストラリア、ニュージーランドなどが理想的な対応をしたと言われているが、これら三国は数字で見れば日本より劣っている。

日本における百万人当たりの死亡率は登山事故死三人、インフルエンザ死者二十五人、交通事故死三十人、自殺者百六十人である。新型コロナウイルス死者の五十倍も自殺者がいる国である。過度な規制を受けて経営不振のために自殺者が何人増えるだろうか。一九九八年のバブル崩壊の時には、日本の自殺者数が一万人も増えた。何事もバランス感覚が重要だ。

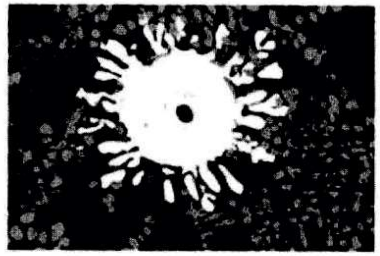
ここまで書いたところで、安倍首相の記者会見が始まった。原稿丸読み、陳腐で聞いていられない。

なぜ、対コロナ実績で最優秀成績の日本で既に先が見えているのに、歓楽街、飲食街からスポーツ界の規制、休校にいたるまで、規制を続けるのか。拗ぐれば、これを機会に交付金等で地方に影響力を高めたいからではなかろうか。地方に人気のある某元幹事長に対する牽制なのかとも疑りたくなる。パチンコ業界タタキも度が過ぎている。カジノなどＩＲ整備推進が順調に進まないための腹いせなのか。

せっかく、観光立国を唱え、観光業界を育成してきたのに、今度の規制で壊滅してしまう怖れがある。コロナウイルス問題さえ解決すれば、オリンピックも観光客も戻ってくると楽観しているのかも知れないが、観光業界の活力を削ぎインフラを破壊したら、その回復は極めて困難になるだろう。

それにしても、せっかく、コロナウイルスと金属学の関係を述べたいと張り切っていたのに水をさされた。では始める。

まず、写真を見てほしい。これは、日本の古代製鉄において、時々みられる製鉄スラグ（鉄滓）中に浮遊した鉄の微粒子である。大きさは〇・〇二ミリほどでコロナウイルスの百倍近くあるが、形が似ている。



形が似ているということは、出来る過程にも共通点があるということだが、専門家に説明しても難しいことなので省略する。

ただ、一般に金属の内部には、不純物粒子が電子顕微鏡でも見えないレベルから巨大な析出物まで色々な形で存在している。これを制御するのが熱処理であるが、ここでは粒子をコロナの

クラスターに見立てようというわけだ。

熱処理のように微粒子を、より大きなクラスターに吸い込ませるような方法はないのだろうか。直径を十倍にできれば千倍の感染者を吸収して周辺のクラスター数を千分の一に減らせる。

クラスター粒子のような高濃度部は濃度の低い周辺に向かって拡散して行くのが自然法則である。しかし、物理学の世界では、粒子の表面エネルギー差を利用して、大きなクラスターが小さなクラスターを次々に吸収する「逆転の世界」も存在している。

その「逆転の世界」を作るためには、感染者を強制的に収容するのではなく、自主的・自発的に集まってくるような仕組み、すなわち参集者に「高給手当を支給する」のはどうだろうか。

クラスターも社宅レベルから団地レベル、小都市レベルまで多様なものとし、規模にもよるが、工場、流通倉庫、スーパー、コンビニ、レストランからスポーツジム、クリニックまで併設する。いずれも管理者を含め、従業員は全て感染者かその治癒者とする。だからクラスター内の感染を心配する必要はない。希望すれば、長期滞在も出来るし、陽性者以外の健常者も入所できる。

感染症研究者によれば、感染者や抗体維持者の比率が一定のレベルに達すると「集団免疫」が起こり、もはや感染は起こらなくなるという。だからクラスターの中に健常者が入っても安全を確保する方法があるのだ。

このような方法は、感染者を借り上げホテルの個室に収容し、隔離して管理するより安上がりである。

いまや隠れ感染者はかなりの比率になる。陽性者として認定された人数の数倍はいるというのが有力な見解である。だから感染者が隠れたがる仕組みを変えなければならない。感染者がアルバイト感覚でクラスターに入り、稼げれば、国の負担も減り、感染防止にも役立つ。

ここで過去の大型クラスターの例を見てみよう。

武漢ではその都市圏の人口三千万人として感染者八十万人（二％）、死者三千人（一万人当たり一名）。

イタリア中部の観光都市国家サンマリノでは人口二万六千人に感染者五六〇人（二％）、死者四十一人（一万人当たり十五人）。

ダイヤモンド・プリンセス号では乗員乗客三千七百人に対し感染者七百人（二〇％）、死者十五人（一万人当たり四十人）。

しばしば見られる院内感染では、もともと病身者が多いことにも原因があり死者発生が多いようだ。そこから一般法則を導くのは危険であるが、おそらく人為的なクラスターも規模を大きくする方が有利だと思う。

今回の新型コロナウイルス症は来年オリンピック時にどうなっているか判らない。しかし、来年も流行するとの見方も根強いようだ。欧米に較べ感染者が二桁も少な

い日本は、その時、抗体者が非常に少なく処女地のようなものである。それまでに、ワクチンの開発に成功して、免疫抗体者を充分に揃えなければ大変なことになる。

韓国のように、初期に大感染事件を犯したお陰で、隠れ感染者、すなわち無症状な陽性者を大量に発掘し、世界でもいち早くコロナ症を終息させるのに成功した例がある。

完璧ばかりが良いわけではない。金属学のイメージをもっとお伝えしたいがもう止める。

令和二年四月二十九日。

終奏

まもなくこの演奏会も終える。

序奏でムキになって述べたことは、本日までの実績値で完全に証明されたと信ずる。

ガーシュインの「ラプソディ イン ブルー」はなんといってもトランペットが素晴らしい。吹けないトランペットを高らかに奏でよう。

四月七日「緊急事態宣言」が発令された時、筆者と同じ意見を持った者が数多くいたに違いない。しかし「緊急事態宣言」に対する「翼賛会」的な意見に流され、寡聞にして「同様な意見」を見かけなかった。大多数が体制に同調している中で、結果を見ずして、「強硬に異を唱える」のは孤独である。

毎日、実績を見て一喜一憂する日々が続いた。それに対する最大の「ご褒美」は、やはり「実績」であった。

だから、くどくなるが、前出の表4に現時点までの実績を記入して終りにしたい。どうしても数字で示したいのが心境なのである。

1　表4では四月六日に始まる週の感染者発生数を指数100として各グループの感染者低減の成績を評価している。その結果、どの時点をとっても最も成績が悪いのが「緊急事態」が発令された東京都であり、続いて首都圏の三県や大阪・兵庫である。それに続くのが四月十六日に追加指定された五府県であり、最も成績の良いのがその他の三十四県である。

2　そもそも、四月十六日に新しく指定されたグループは、感染判明までのタイムラグが二週間もあるため、五月一日時点では新施策の効果が反映されていない。それなのに、北海道を除く「特定警戒五府県」も「その他三十四県」も既に五分の一まで順調に指数が下がっている。最重点の東京都や六府県が既に効果を反映しているにも係わらず、二分の一～三分の一の改善段階に留まっているのと対照的である。

3　何もしなければ、感染者は五日間で二倍、十日間で四倍、十五日間で八倍になるというのが安倍首相の認識だったはずである。それが「緊急事態宣言」七地域と北海道を除いた「その他四十一県」では特定警戒の効果が出る前に、いわば「緊急事態対策をしなくとも」五分の一に下がっていた。

4　「緊急事態対策をしなくとも」五分の一にさがっていたのは、気象環境（温度・湿度）の影響が大きかったことを意味する。日本では北海道を除き、四月六日の週に感染者発生のピークが集中しているが、東アジアの主要国ではその二週間前にピークを迎えていた。北海道のピークが三週間遅れているのは「遅い春」のせいであろう。再論しないが、日本国内を見ても回復が早かった順に並べると四国・九州、本州南部、本州北部、北海道と完全に気候順なのである。

5　筆者は繰り返し述べたように、「緊急事態宣言」の日に感染者発生がピークとなり、以降順調にさがって行くと予測していた。拘りすぎだとは思うが、そのことをデータで確認できたと思っている。

東京都はオリンピック開催に拘り、PCR検査を意識的に制限し、その回復過程で感染者数を急増させ、五日で二倍、十五日で八倍、一ヶ月で六十四倍というとんでもない認識をしてしまった。もっと穏やかな対応でも、東アジアの気候圏にあったことで、東アジア諸国と同じようにブレークアウトは免れたはずである。

五月に入り順調に新規感染者は減少し、「宣言解除」の基準としている「直近一週間で人口十万人あたり〇・六人以下」が達成されつつある（表4では一日当たり人口百万人あたりの感染者数）。その中で目立ってきたのが、「院内感染」の比率である。東京都でも神奈川県でも大阪府でも石川県でも愛媛県でも「院内感染」関連の感染者ばかりがニュースに上がっている。

「緊急事態宣言」の主対象は「人と人との接触八割減」であったが、医療スタッフや医療施設の不足による「医療崩壊」を防止することこそ、政府主導で行う必要があった。

まもなく安倍首相も小池知事も「緊急事態宣言」の成果を「自画自賛」するであろう。

すべて序奏で予想したシナリオ通りに進んでいる。

令和二年五月十七日。

追記　東京都の感染者発生ピークは四月十七日と発表されていたが、それは誤りで四月九日だったと訂正された。序奏において「既に終息に向かっている」と言い切ったのに、一～二週間遅れのデータが出て来て意外であったが、実は筆者の予測の方が正しかったわけである。

戊辰東北戦争①
国家危急存亡の秋

千坂精一

一

いまから一五〇年ほどまえの話である。

慶應三年（一八六七）十月三日、幕府の独裁政治の基盤が修復不可能なまでに追い詰められていることを憂えた土佐の山内容堂は、政局を打開するため将軍慶喜に大政を奉還するようすすめる建白書を提出し、慶喜もこれを諒承して十四日に突然政権奉還するという奇策にうって出た。

これによって家康が江戸幕府を創設して以来二六五年つづいた武家政権は終わりを告げたのである。

幕閣のなかには大政奉還に反撥する者もいて慶喜に翻意を迫ったが、幕閣だけではなく倒幕を謀っていた薩摩や長州も慶喜の奉還に反対で、彼らはあくまでも幕府を武力で潰滅させようと決行を企てていたのである。

薩長の意を体した倒幕派の公卿たちが勅命を得ようと強力に働きかけていて、ついに慶喜が大政奉還を上奏したその日に幼帝から倒幕の密勅が下されたのだが、翌日朝廷は慶喜の大政奉還を承諾してしまった。

だが、京にはすでに薩摩、長州、安藝の軍勢が進出してきていて倒幕決戦の布陣をととのえていた。

その不穏な動きを察知した幕府側も會津、桑名の兵に新撰組なども加わり一万を越える軍勢が集結した。

その最中の十一月十五日に土佐の坂本龍馬と中岡慎太郎が河原町の寓居近江屋で暗殺され、新撰組の伊藤甲子太郎も七條油小路で暗殺された。

慶喜は大政奉還して将軍職を辞任しても、朝廷には政権を担当する能力のある人物がいないから、政権運営は任せてくれるにちがいないと多寡を括っていたのだ。

ところがその思惑がはずれて十二月九日に王政復古の大号令が発せられ、慶喜は辞官納地を命ぜられてしまった。

これは慶喜や會津にとっては思いもかけぬまさに寝耳に水のことであり、幕臣や會津の家臣たちから一斉に怒号が乱れ飛んだ。

このまますすめば両者のあいだは武力行使の闘争になってしまうことを避けたい慶喜は、旗本や會津、桑名の幕府軍を大坂城に退かせた。

これで一触即発が回避できると慶喜は考えたのであろうが、このまま鎮静させてはならじと危機感を抱いた薩摩の西郷隆盛はなんとしても内乱を起こして一気に武力制圧に踏み切ろうと謀って益満休之助に幕府の膝元江戸市中の攪乱を命じた。

益満は相樂總三を唆して江戸へ下り、芝三田の薩摩屋敷を根城にしてただちに浪人や無頼の徒を集めて徒党を組ませ、富豪商人宅に押し入って金品を奪わせたり、市中で暴行、掠奪、放火などを繰り返させて幕府を挑発した。

幕府の勘定奉行小栗上野介忠順は一斉検挙に蹶起になり、十二月二十五日の夜明けに庄内兵を主力にした二千の軍勢で薩摩屋敷を包囲すると砲撃を加えて焼き払った。益満らは捕らえられ相樂らは品川にいた薩摩の翔鳳丸に乗って逃れた。

これを知った慶喜は薩摩の仕業に激昂した大坂駐留の旗本や會津、桑名の兵たちを抑えることができず、ついに倒薩に踏み切った。

慶喜は西郷の策に嵌まってしまったのである。

幕府軍は正月二日朝大坂城を出陣して北上した。伏見まですすんだ主力は伏見奉行所駐留の幕臣と新撰組を加えて一万に膨れ上がり、別働隊五千は淀まできて宿営した。

そして三日に薩摩、長州軍と洛南赤池あたりの鳥羽街道で衝突した。

その砲声をきいた伏見街道の別働隊でも同様の小競り合いがはじまり、ついに戦端がひらかれた。

薩摩軍は僅か五千ほどの兵だったので幕府軍先頭集団の旗本隊を引率していた大目付瀧川具擧は情況を甘く見て強行突破を命じた。

ところがいざ戦端が開かれると、幕府軍は薩摩軍の新兵器の威力に圧倒されて敢えなく敗走してしまった。

徳川は、島津と毛利に關ヶ原以来積年の遺恨を晴らされてしまったのである。

翌四日、朝廷は伏見宮邦家親王の第七子仁和寺宮（のち小松宮から東伏見宮）彰仁親王を軍事総裁に据えると征夷大将軍に就任させて幼帝から錦旗と節刀を授けた。

これで薩長は徳川との衝突が私闘ではなく

〈官軍が朝敵を討つ〉

大義名分を成立させた。

幕府軍はこの衝突でたいした打撃を蒙ったわけではな

いので、大坂で再起することは可能であった。

ところが肝心の当主慶喜本人が弱気になってしまい、六日夜半に京都守護職松平容保、所司代松平定敬兄弟、それに老中酒井忠惇、板倉勝静をはじめその他幕閣数人を伴って密かに大坂城を脱出すると安治川河口へ向かい、大坂湾の天保山沖に停泊している幕府海軍副総裁榎本武揚率いる艦隊開陽、富士山、蟠龍、それに輸送船翔鶴のうちの旗艦開陽に乗船すると、江戸城へ帰ってしまった。

慶喜の逃亡を知った大坂城の幕臣たちは大混乱に陥り、われさきにと勝手に大坂城を捨てて江戸へ落ちていった。

これでますます賊徒の幕府軍を征討する官軍の地位が確固たるものになってしまった。

慶喜はこの内乱は尊王攘夷派を弾圧した京都守護職の松平容保や所司代の松平定敬兄弟、それに主戦強硬派の幕閣らの仕業だとして彼らにその責任を負わせようとしていた。

だが朝廷は慶喜追討令につづいて慶喜はじめ松平容保、板倉勝静ら二十七名の官位を剥奪すると、京の屋敷を没収した。

新政府樹立を目指す薩長は王政復古を世界各国の代表に通告して外国との和親を国内に布告した。

ついで薩長は天皇親征の詔を発表して大總督府を設置すると、軍事總督に仁和寺宮（小松宮）彰仁親王を任命して、

東征大總督　有栖川宮熾仁親王
参　謀　公卿　正親町公董
同　〃　西四辻公業
下　参　謀　長州　廣澤　眞臣

を据えた。

ところが、廣澤が辞退してしまったので、やむなく薩摩の西郷隆盛と宇和島の林通顯にかえた。

下参謀になった西郷はただちに慶喜討伐軍を組織して、東海、東山、北陸の三道からそれぞれ江戸へ向かって進軍を開始させた。

このとき慶喜は江戸城を出て上野寛永寺大慈院に謹慎し、松平容保は弟の定敬を伴って會津へ帰っていたが、京都守護職、所司代として新撰組や浪士集団を動員して勤皇の志士たちを徹底的に粛清した二人をもゆるすことができない西郷らは、別に奥羽鎮撫軍を組織して、

總　督　公卿従三位　澤　爲量
副總督　〃　従四位少将醍醐　忠敬
参　謀　長州　品川彌二郎
〃　薩摩　黒田　了介

を据えた。

ところが、總督は象徴だから公卿で身分の高い大物をということになり、五攝家の一家で左大臣の従一位九條道孝に変えた。

これにより澤が副總督に、醍醐が参謀に格下げになった。

いかに格式を重んずるといっても、軍事に疎い公卿が参謀では戦闘の指揮がとれないので、品川と黒田をそのまま下参謀につけた。

品川彌二郎は萩生まれで足軽の出身。十四歳で松下村塾に入門し吉田松陰に愛された。

安政六年（一八五九）十月二十七日に安政の大獄で松陰が刑死したのちは脱国して江戸へ走り、久坂玄瑞、高杉晋作らと尊王攘夷を唱えた。

元治元年（一八六四）七月十九日の蛤御門（禁門）の変では八幡隊を率いて突入し、久坂玄瑞らが戦死して敗れたあとは重囲を脱して帰国した。

このとき薩摩、會津の兵に大敗したことから、下駄に〈薩賊會奸〉と書いて歩くほどの薩摩、會津嫌いになった。

だが薩長同盟後はやむなく両国の連絡係を努めた。

このたびの戊辰戦争では錦旗を掲げ、戦意昂揚の進軍歌として『都風トコトンヤレ節』を作詩して志気を鼓舞した。

作曲は村田藏六（のちの大村益次郎）だといわれている。

いっぽう黒田了介は薩摩では西洋兵学とくに砲術にすぐれ、文久三年（一八六三）七月二日の薩英戦争でその技能を発揮した。

慶應元年（一八六五）には薩長提携の使者として長州に潜行し使命を達成した。

品川も黒田も公卿参謀につく下参謀ではやりにくいと思っていたのであろうが、會津は鎮撫であるはずなのに怨恨骨髄に徹している薩長幹部はいつのまにか鎮撫を討伐に擦り替えていることに異議を申し立てて辞任してしまった。

總督府はやむなく後任に品川や黒田よりひとクラス下になる長州の世良修藏と薩摩の大山格之助（綱良）を据えた。

世良は漁師の子で、月性、安井息軒に学んだ。

長州奇兵隊の書記から高杉晋作らの挙兵にあたり同志と第二奇兵隊をつくって軍監になった。

大山は島津家の茶坊主だったが、示現流の剣にすぐれていたので島津久光に従って上洛、寺田屋事件では急進派の同志を上意討ちする活躍をしている。

二人はたとえ下参謀であろうと、上司の参謀が軍事に疎い公卿ではいないも同然で、勝手気儘に振る舞えると意気込んでいた。

このとき、奥羽鎮撫軍のほかに越後も抑えるために北陸道鎮撫軍が結成されていた。

松平容保が越後へ逃げることも考えられたのである。

その編成は、

總督　公卿　高倉永祐
参謀　薩摩　黒田清隆
　　長州　山縣有朋

軍監　土佐　岩村精一郎

で参謀に据えた黒田、山縣は奥羽鎮撫軍の世良、大山よりははるかに格上の大物であった。

さて、軍団を整えた朝廷軍は、江戸を目指して進軍を開始した。

公武合体論の犠牲になって有栖川宮熾仁親王との婚約を破棄され、徳川家茂将軍に降嫁させられた孝明天皇の異母妹静寛院宮（和宮）親子内親王や伏見宮家出身で徳川家の菩提寺上野寛永寺の住職になった輪王寺宮公現法親王が江戸へ向かってくる東征大總督有栖川宮熾仁親王に面会して徳川家一門の助命と江戸総攻撃を中止にしてくれるよう嘆願したが一蹴されてしまったことを伝えきいた幕府講武所剣術心得の山岡鉄太郎（鉄舟）は、このまま手を拱いていては江戸は戦火に巻込まれ潰滅状態に陥ってしまうことを憂えていたたまれず、伝手を求めて若年寄の大久保忠寛（一翁）に会いおなじ若年寄仲間で陸軍総裁の勝安房（海舟）を紹介してもらい、勝と面談して朝廷軍の参謀西郷隆盛への〈慶喜恭順の使者〉を買って出た。

面会した勝は、山岡が己れの死を賭してまで慶喜と江戸市中の安泰を考えていることを察知して深く感じ入り、（そこまでやるか。ならばひょっとして瓢箪から駒が出るかも知れんな。ひとつこの男に賭けてみるか）

そう考えて使者に立つことを承諾し、西郷宛に書状を書いて渡した。

山岡が帰ったあとで勝は、

（待てよ）

と考えた。

西郷のいる本営はまだ駿府（静岡市）にいるそうだが先鋒はすでに神奈川宿まできているという。朝廷軍で溢れている東海道を幕臣が単身で通り抜けて行くことは不可能である。途中で捕縛されれば西郷に会うことなどできない。

（さて、どうしたものか）

勝は思案投げ首であった。長いあいだ沈思黙考をつづけた勝の脳裏に突然浮かび上がった男がいた。

（そうだ。益満休之助がいた）

昨年西郷の命を受けて江戸の治安を攪乱して捕らえられ、勝に預けられたので幽閉しておいた。

山岡が朝廷軍の陣営を突破して西郷に会うのに役立つ男だった。

山岡を西郷に会わせるのと引き換えに釈放して薩摩へ返してやると因果を含めて、山岡の駿府行きの護衛を命じた。

翌日、さっそく二人は江戸を発って駿府に向かった。

途中、各所に駐屯している朝廷軍に益満が応待して、無事駿府へ到着したことはいうまでもない。

益満が大總督府のおかれている駿府城に出向いて西郷

の居場所を聴き出してきた。

その宿所を訪ねて益満が西郷に会い山岡を同行してきた経緯を伝えた。

西郷は益満釈放の交換条件の山岡と渋々ながら会見することにした。

西郷は山岡と擦った揉んだの押問答を繰り返しているうちに、

（こいつ、身の危険も省みず単身で乗り込んでくるだけあって肝が据わっているわい）

そう感じ入り、己の生命を賭けての忠誠心に惚れ込んだ西郷は、山岡の申し入れを受けて大總督に取りつぐことにした。

「貴殿の使者としての趣はあいわかった。大總督宮殿下におうかがいをたててみよう。しばらく待たれよ」

西郷はそう言って席を立った。

山岡は随分待たされた。

ようやくもどってきた西郷は、

「大總督宮殿下よりの御指示である」

そう言って山岡に書付を手渡した。

そこには条件として、

一、江戸城を明け渡す事。

一、城中の家臣たちを向島へ移す事。

一、兵器を渡す事。

一、軍艦を渡す事。

一、徳川慶喜を備前へ預ける事。

が書かれていた。

西郷は山岡に、

「この五箇条が実行されれば寛大な御処置があると思う」

そうつけ加えた。

山岡は頷くとあらためて一箇条ずつ確認していった。

江戸城明け渡しは、すでに慶喜は二月十二日に城を出て現在上野寛永寺大慈院葵の間で謹慎しているから問題はない。

家臣たちを向島屋敷に移すのは水戸の下屋敷（現在の向島側の隅田公園）であるから否やはない。

兵器、軍艦を渡すのは武装解除であるから敗者として当然である。

だが、慶喜を備前へ預けることはもってのほかで断じて承服できなかった。

備前とは岡山三十一万五千石池田茂政のことであろうが、織田、豊臣に仕えた外様でありながら関ヶ原の戦いで家康に属して功績をあげたことで厚遇されながら幕末にいたって長州と結んで備中松山（岡山県高梁市）の幕府老中板倉勝静追討に出陣して恭順させた。

そんなところへ慶喜を預けるわけにはいかなかった。

「主君の備前預けだけは断じて承服できません」

山岡はそう異議を唱えた。

「これは大總督宮殿下のご命令である」

「たとえ殿下のご命令であろうとも、臣下としてこれだけはお受けできません。幕臣として不承知でござる」
「ご命令であるぞ」
西郷のほうも一歩も退かなかった。
「ならば西郷殿が私の立場になってお考えになって下さい。貴殿の主君島津侯がひたすら恭順の意を表して謹慎しておられるものを、さらに他家へ預けよと言われてふたつ返事で承諾なさいますか。とくとお考え下さい」
山岡は西郷にそう迫った。
西郷は山岡の言葉にたじろぎ、腕組して沈思黙考した。
二人のあいだに険悪な空気がながれた。
山岡の懸命な様相が西郷の胸を搏った。
西郷はやがて目をひらくと、
「貴殿のご心情相解り申した。慶喜公のこと西郷がお引き受け申そう」
意外な西郷の言葉に山岡は思わずその場に平伏した。
会談のあと、西郷は酒を用意させて盃を交わした。
帰路は単身になる山岡に、西郷は用心のため検問所の通行手形を渡してくれた。
山岡は西郷の好情に感謝して江戸への道中を急いだ。
西郷は大總督府の武家参謀に就任したとき、慶喜を切腹させて江戸城を焼却すると息巻いていたのになぜ急変したのか。
このころ朝廷軍上層部の公卿たちのあいだでさきに大總督の有栖川宮が徳川家茂将軍に降嫁した和宮と東叡山主輪王寺宮元両皇族の慶喜助命嘆願を無下に却下したことへの反省があって嘆願を受け入れるべきだったとする雰囲気になってきていた。
だから西郷の独断で穏便に済まそうとしたわけでもなく、また山岡の努力だったのでもなく、山岡が運がよかったにすぎなかったのであるが、そうはいってもこの西郷、山岡会談がおこなわれていなければ三月十三日と十四日の西郷、勝会談が順調にすすんだかどうかわからないのだから、山岡のこの事前交渉の成果は大きいといえる。
こうして江戸は、慶喜が城を出て上野寛永寺大慈院に謹慎蟄居したのを護衛しようとする旧幕臣らによって彰義隊が結成されたが、慶喜が水戸の実家へ去ってしまったので徳川将軍家霊廟のある寛永寺を護ることにして籠もっていた東叡山で五月十五日雨の中で激戦があったものの僅か一日の戦闘で彰義隊は潰滅してしまった。
こうして江戸は彰義隊の抵抗はあったものの、ほとんど無血で開城に漕ぎつけたので、江戸庶民の被害は僅少ですんだ。
ところが、奥羽や越後のほうはそうはいかなかった。
西郷たち薩長出身の幹部たちは、京都守護職として薩長をはじめとする尊王攘夷派の志士たちを徹底的に弾圧し粛正した會津の松平容保をどうしても赦せず、誅伐して仇を討とうと目論んでいた。

二

東征大總督府ははじめ仙台の伊達慶邦に〈會津追討〉を命じたにもかかわらず動きが鈍いのに業を煮やして奥羽鎮撫總督に錦旗を預けて出陣を命じた。
總督九條道孝は五百余の軍勢を率いて三月十一日に大坂の淀川下流安治川河口の天保山沖から乗船して十八日に仙台湾入口の寒風沢に錨を下ろして東名浜に上陸し仙台入りすると、学問所の養賢堂を本陣にした。
仙台では一行を丁重に持て成し、二十六日には總督、参謀らを桜の名所榴ケ岡に花見に招いたりして會津討伐の方針に従いながらも、なんとか〈會津赦免〉にもっていこうとしていた。
だが、この花見のときに下参謀世良修蔵が詠んだ和歌がのこっていて、それは、

陸奥に桜狩りして思うかな
花散らぬ間に軍せばやと

というのだが、この和歌が會津討伐を逸る世良の胸中を如実に露わしていて、仙台の思惑どおりにはことは運ばなかった。
いっぽう江戸の上野の山で朝廷軍と戦って大敗を喫した彰義隊と新撰組の残党らは山主の輪王寺宮を奉じて脱出すると、江戸湾の品川沖に碇泊していた榎本艦隊を頼った。
榎本武揚は宮の希望を容れて武装した輸送船の長鯨を艦隊から切り放して逸早く奥羽へ送ることにした。
宮の一行を乗せた輸送船長鯨は五月二十八日無事常陸国平潟港（北茨城市）に着いた。
この輪王寺宮を奉じて逃亡した彰義隊と新撰組の残党を追って薩摩兵を中心にした朝廷軍の別軍が六月十六日に軍艦三隻で平潟に上陸し、ここに總督府を置いた。
總督は四條隆謌、参謀は渡邊清左衛門であった。
白河城攻めの援軍となったこの朝廷軍は強かった。というよりこの地域は小国が多く兵力も僅少であった。
奥羽の玄関口といえば、陸奥国白河（福島県白河市）である。
會津攻めの朝廷軍にとっても、受けて立つ會津軍にとっても白河は要衝であった。
西は長沼町の勢至堂峠を越えて會津に通じ、東は棚倉から浜通りの磐城平へ達し、北の中通りをすすめば須賀川、郡山、二本松、福島を経て米澤、仙台に至るから、白河はまさに奥羽を制する軍略上の拠点であった。
勿来（福島県いわき市）、鼠（山形県鶴岡市）とともに古代大和政権の北方辺境基地であった白河は江戸時代になっても奥羽の関門として幕府の重視するところとなり、領主は代々譜代によって占められてきていたのだが、このときは事情があって領主不在の天領になっていた。

以前白河の領主であった二本松の丹羽氏が幕府から支配を委任されていたので、統治する家臣を派遣して領国同様の固めをしていた。

いよいよ朝廷軍が攻めてくるとの情報を得て會津からは白河口總督となった家老西郷頼母と副總督の領主松平容保側近の横山主税らが、仙台からは參謀坂本大炊以下瀬ノ上主膳、佐藤宮内がそれぞれ軍勢を率いて入城してきた。

白河口の攻防戦は五月朔日仏暁に火蓋が切られた。

朝廷軍は、宇都宮から北上して那須の大田原に集結していた伊地知正治參謀の軍が進撃してきた。

そこへ江戸の總督府から続々と援軍が到着した。

そして、五月朔日を迎えたのである。

要衝白河をめぐっての攻防戦がはじまった。

朝廷軍は三方から攻め寄せてきた。

右翼は薩摩の川村與十郎（純義）率いる隊を先鋒として雷神山を占拠した。

中央は奥羽街道白坂口から侵入してきて小丸山を占拠したので、會津の一柳四郎左衛門や新撰組の山口次郎（齋藤一）らが迎え撃って善戦したがついに破られ、陣頭指揮にあたった會津軍副總督横山主税が銃弾を受けて戦死したがその屍を引き取る余裕もない集中砲火のなかで従者の板倉和泉が横山の首を掻き切って持ち帰った。

白河城の守兵は混成軍の弱味で指揮命令系統が徹底せず、訓練も儘ならぬ状態のうえ劣勢だったので総攻撃を受けて持ち堪えられずついに城を陥とされ市中は戦火で焼かれてしまった。

朝廷軍は、白河城を會津攻めの拠点にした。

六月十六日に平潟口へ来攻した別軍は海岸線を固めていた混成守備隊を苦もなく撤退させると泉、湯長谷陣屋を奪い平城（いわき市）を陥として北上してきた。

この時点で白河に隣接する棚倉が陥ち、守山（郡山市）も三春（田村郡三春町）も降伏していた。

仙台抜こうか會津をとろうか
明日の朝飯や二本松

そう戯れ唄に浮かれるほど朝廷軍の威勢は盛り上がっていた。

二本松では守山の守備や三春の救援にかなりの人数を出していて、本領の守備は手薄だった。

土佐出身の參謀板垣退助率いる朝廷軍は本宮（本宮市）まで迫ってきた。

この大軍を目前にして二本松ではなんの策もなかった。

守山や三春のように戦わずして降伏するか、徹底抗戦するかのふたつにひとつしかなく、論議は割れた。

当主の丹羽長國は病身だったことから、国政は家老の丹羽一學が取り仕切っていたので、決断は一學に任された。

一學は、一同を見渡して、

「死を致して信を守ろうぞ」

そう最後の断を下した。徹底抗戦をする決議である。

一戦も交えずして降伏することは二本松の武士道が許さなかったし、仙台や米澤をはじめ奥羽友好国との信義にも悖ることになる。

行き着くさきは死しかなかったが、それまでいかに潔く戦って朝廷軍に一泡吹かすかであった。

だが、それにしても留守を預かっている人数があまりにも寡すぎた。

家臣の精兵たちの大半を奥羽入口の要衝白河口の防衛に送り出していた。

ところが平潟口に上陸して浜通りを進撃してきた板垣退助の別働軍が迫ってくると、三春は戦わずして降伏してしまったので、いっきに二本松へ殺到してきたのである。

二本松にしてみればつい先日まで支援してきた三春が、こともあろうに地理不案内の朝廷軍の先導役をつとめて早々に迫ってきたのであるから、なんとも口惜しく遣り切れない思いだったであろう。

二本松城（別名霞ケ城）は四囲に城壁がなく、『智恵子抄』でお馴染の安達太良山を背負った天険を利用している。

二本松側は、西方すなわち岳温泉側の長橋から東北の榎戸にいたる約一里（四キロ）の高地に防衛戦を布いた。

正面入口の大壇に砲兵隊を加えて据え、東南の高田口と東方の供中口を固めて攻め寄せてくる朝廷軍を迎え撃つ態勢をとった。

といっても余裕綽々で待っていたわけではなかった。

とにかく主力は大半が近隣諸国へ応援に出向いていて残留しているのは老人が多かった。

それもたいした人数ではない。

やむなく年端もいかぬ少年たちを動員した。

江戸で西洋流の砲術を学び、帰国して砲術師範になった二十二歳の木村銃太郎は、まだ元服まえの十二歳から十四歳の少年たちを預かって砲術を教えていた。

この少年たち三十名ほどを動員して銃砲隊を組織した。

まだ成長まえの子供に重い砲車の取扱いは容易ではなかったし、銃の取扱いも実戦経験がなかったから役に立たず、長刀などは腰に差しても抜けず無用の長物であった。

だが、父や兄に代わっての出陣ということで留守を預かる母や祖母から斬るより躰ごとぶつけて刺す捨て身の方法を教えられた。

そして少年たちは若い木村隊長の指揮のもとに勇躍出陣したのだが、この攻防戦でもっとも激戦になってしまった大壇口の守備につかされたのである。

開戦間もなくどの口も破られ、大壇口も支え切れずに退いた二本松兵は町中へ出たところで朝廷軍の兵士と出

会い白兵戦になった。
少年たちも躰ごとぶつけて刺す捨て身の方法で戦ったが所詮敵せず、斬られたり撃たれたりしてあたら蕾のまま散ってしまった。
このときの少年兵のなかでこんな話がのこっている。
成田才次郎という十四歳の少年は、大壇口で敗れたあと放心状態で西谷門をくだっていた。
大壇口には少年兵も二十五名が出陣していたが、二時間あまりにわたる激戦で木村隊長以下半数近くが戦死し、生き残った少年達は満身創痍の躰に鞭打って死場所を求めて城下を彷徨していた。
そのとき、前方から隊列を組んで進んでくる朝廷軍の一隊と出会った。
彼らは成田少年を乱心者と見て道を譲ってやった。
すると成田少年はふらつきながら隊列の中程にいた赤熊を冠った隊長らしき武士を見て、擦れ違いざまに渾身の力を振り絞って腹部目がけて躰ごと突いていった。赤熊はその場に倒れ成田も折り重なるようにして倒れた。
近くにいた部下たちが成田少年を斬殺しようとしたが、赤熊が苦しい息の下から、
「刺されたのは己れの不覚、少年を殺すな」
そういって息を引き取ったという。
刺された隊長は長州の白井小四郎政法（三十一歳）であった。

敵ながら天晴れな武士道ということで、二本松城下の眞行寺に葬られ、成田才次郎の遺族が四季おりおりの花を墓前に供えて白井小四郎の霊を慰めていたという美談が残っている。
また、のちの話になるがこのとき薩摩の六番隊を指揮していた猛将野津道貫（のちの元帥）に、
「予も幾多の戦場に臨みたるも真に逃げたのはこの時のみであった」
と述懐させているというが、これこそ少年隊を含む二本松兵に対しての絶大の讃辞であろう。
徹底抗戦を主張した家老丹羽一學は、当主丹羽長國を米澤へ、丹羽夫人を會津へおとしたあとで城代の服部久左衛門や一族の丹羽和左衛門らとともに城へ火を放ち自刃して果てそれに従う者も多かったという。
少年たちの奮闘も虚しく、二本松城は七月二十九日に陥落した。

三

朝廷軍は、いよいよ會津に迫っていった。
長州は禁門の変（蛤御門）以来の幕府の弾圧に対して怨み骨髄に徹していた。
粛清された者の怨念はおそろしい。
やったほうは当然のこととして気に留めていなくとも、やられたほうは無念を根に持つからおそろしいのだ。

それがたとえ幕命であっても、命じた者より実行した者への怨みのほうが深い。
つまり、命じた将軍よりも、実行した京都守護職松平容保への怨みのほうが根深いのだ。
だから天下を取った長州らの朝廷軍は、會津を叩きのめさなければ承服できないのだ。
京都守護職を受ければ攘夷派の薩長らと対峙せねばならず、そんな重荷を背負わされることになることを充分承知していた松平容保はその大任を、
（とても引き受ける器ではない）
そう賢明に判断して固辞した。
重臣のなかにも筆頭家老の西郷頼母や次席家老の田中土佐などはその奉命に猛反対した。
だが、政治総裁松平慶永（春嶽）や将軍後見職一橋慶喜に説得されて拒絶できない立場に追い込まれてしまった。
三代将軍家光の異母弟保科正之を祖とする會津松平家は将軍家の縁戚であり、容保自身は養子の身であっても御三家筆頭尾張徳川家の分家美濃高須松平家の出身であるから連枝であることに変わりはなく、奉命せざるを得ない立場にあった。
こうして容保は、六年前の文久二年（一八六二）閏八月朔日薪を背負って火中に飛び込むにひとしい京都守護職を引き受けたのである。

主戦論が圧倒的だった會津家中でも帰順を唱える者もいた。家老の西郷頼母をはじめ神保修理、河原善左衛門、山本覺馬、井深元治、外島機兵衛、木村熊之進、廣澤富次郎らである。
このうち軍事奉行添役の神保修理は、恭順を進言したために三月十三日に切腹を仰せつけられてしまった。
慶喜が寛永寺大慈院に謹慎したあと、會津へ帰国した容保はさっそく軍制改革にとりかかった。
容保は、天明八年（一七八八）以来の長沼流刀槍では薩長の洋式兵法に歯が立たないことを鳥羽・伏見の衝突で思い知らされていた。
容保は軍団を再編成するにあたりまず年齢を大別して四隊に分け、それに天界の四方を司る神の名を冠して、
白虎隊　十六歳から十七歳まで。
朱雀隊　十八歳から三十五歳まで。
青龍隊　三十六歳から四十九歳まで。
玄武隊　五十歳以上。
とし、それぞれの隊をさらに士中（上級）、寄合（中級）、足軽（下級）の家格に分けた。
これに砲兵隊や遊撃隊などを加えて正規軍は約三千、それに農民、猟師、力士などの補助隊がつくから総勢八千人内外の軍団といわれている。
さらに旧幕臣や他国を脱出した者たちが加わったから兵力は一万数千人にもなったという。

そこへ大鳥圭介率いる一隊も到着した。

幕府開成所洋学教授で歩兵奉行だった大鳥圭介は、四月十一日に慶喜が江戸城を開城して実家の水戸へ帰ると、伝習隊の残党を率いて下総市川の国府台へ向かい、すでに集結していた新撰組の生き残りの隊士を率いる土方歳三と合流して脱走軍の総督となり、土方を参謀にした。

大鳥隊は下総結城を目指して小山で東山道軍を撃破し、結城城につぎ宇都宮城をも攻略して領主戸田忠恕を一旦は館林へ逐ったが、東山道軍に結城城につづいて宇都宮城も奪還されてしまい、大鳥隊は板倉勝静父子を擁して日光をまわり會津へ到着したのであった。

容保は、周辺諸国から會津へ入る街道の日光、越後、白河、大平、米澤の五口にそれぞれ防衛軍を配置した。そして、

日光口には大鳥圭介率いる旧幕府軍を置いて總督大鳥圭介、副總督は會津の山川大藏。

越後口には總督一ノ瀬要人、砲兵隊隊長市岡守衛。

白河口は總督西郷頼母、副總督横山主税。

大平口は總督原田對馬。

米澤口には青龍士中二番隊長有泉壽彦。

を据えた。

玄武と白虎の老人と少年の諸隊は予備隊として若松城に待機することになった。銃後の守りを任せられたのである。

八月十九日、朝廷軍白河口總督府（總督岩倉具視、参謀板垣退助、伊知地正治）は二本松を陥とした余勢を駆っていっきに會津を攻略しようと軍議を決した。

そのころ、朝廷軍のあいだで流行った戯れ唄があるときたいので、調べてみた。

それは、

會津肥後守に上げたきものは

白木三方に九寸五分

というもので、白木の三方も九寸五分の小刀のいずれも切腹のときの道具であるから、朝廷軍ことに薩長ははじめから容保を勝手に死罪にすると決め込んでいたのであろう。

ともあれ、参謀の板垣退助と伊知地正治は八月二十日二本松を攻略した軍勢を率いて石筵口（郡山市熱海町）から進撃を開始し、この主力に合わせて他の支隊が中山口からそれぞれ出撃した。

翌日、沼尻高原へ向かう途中の母成峠で會津軍は朝廷軍を迎え撃った。

天与の要塞と誇っていたはずの母成峠であったが、ここに布陣していた大鳥圭介の軍勢は標高九百メートルの山上が平坦で樹木が少ない不利を狙われて正面から大砲の猛射を浴び、白兵戦に持ち込めずじりじり後退してそのまま敗走した。

二十二日は朝廷軍が母成峠から怒濤の勢いで猪苗代へ

殺到した。

會津軍は火を放って防ぎながら、湖に流入する日橋川に架かる十六橋を破却して城下への侵入を防ごうとした。

これを見た薩摩川村與十郎の先鋒隊が急遽駆けつけて一斉射撃で追い払い、本隊の進路を確保した。

中山口、御霊櫃口、中地口、勢至堂口の守りについていた會津軍は、みな十六橋での戦火を望見して、退路を断たれる懸念から一斉に市中への退却に転じた。

いっぽう母成峠の敗報を知った城内の驚愕は大きく、大混乱になった。

會津軍の精兵はほとんど出兵していて、城内はまったく手薄状態であった。

二十二日に容保は、家臣団の士気を鼓舞するため弟の桑名領主松平定敬とともに城北の滝沢村まで出陣した。

だが、翌日十六橋を支え切れずに敗走したので容保も城中に退き、弟定敬は會津へ避難してきていた長岡の牧野忠訓とともに米澤へ向かった。

白虎隊士中の二番中隊三十七名が潰滅してしまったのもこの日のことである。

十六、七歳で結成されたこの少年隊は家中で戦闘隊とは認められていなかった。

だが、国の危機に直面して少年たちの血は滾り安達藤三郎と篠田儀三郎の両名が代表して非常の時にあたり軍奉行を兼ねた家老萱野權兵衛に出陣を乞う嘆願書を提出した。

萱野は死を覚悟した少年たちの潔い態度に感服したが、その場では出陣を許さなかった。

だが、主君容保が滝沢村へ出陣することに決まると、白虎隊二番中隊三十七名が護衛することになった。

一番中隊は養子入りした慶喜の弟喜徳警護で城中に残留となった。

八月二十二日は朝から小雨が降っていた。

この日、十六橋を突破した朝廷軍が押し寄せてきたので、白虎隊は滝沢村の本陣から戸ノ口原へ出張った。

八ツ半（午後三時）頃から雨は本降りになってきた。

白虎隊の少年たちは夕暮れ近い降り頻る雨の中を白刃を振り翳して敵中へ斬り込んでいき、十七人が斃された。

生き残った二十人は滝沢山中で食糧調達に出掛けた隊長日向内記に置き去りにされてしまい、空腹と寒さに震えて朝を迎えた。

主君容保の存否は不明のままだったし、城もどうなっているか判らなかった。

「すべてを見極めてから事を決しよう」

そう衆議一決した隊員たちは重い足を引摺って下滝沢の山麓から新堀の洞門を潜り抜けて飯盛山中腹の弁天神社に辿り着いた。

すでに城下は市街戦で修羅場と化していた。

若松城は市中の火災による黒煙に包まれていて、少年

たちには城そのものが炎上しているかのように見えた。
「社稷亡びたり。以て止むべし」
そう叫んだ白虎隊の少年たちは、若松城に向かって遙拝したのちに打ち揃って自刃を遂げた。安達藤三郎ら十七歳の少年が十名、西村勝太郎ら十六歳の少年が九名、あと一名の飯沼貞吉はたまたま通りかかった村人に助けられて奇蹟的に蘇生し、昭和六年（一九三一）に仙台で歿したという。

四

戊辰東北戦争の悲劇は、二本松少年隊や會津白虎隊だけにとどまらなかった。
若松城落城の日、危急を知らせる警鐘が連打された。それは屋敷の中で鳴りを潜めている家臣たち家族の入城を促す合図でもあった。
だが城中へ避難しようとする家族は寡く、鐘の乱打を會津敗亡の弔鐘と判断して果てた家族が二百数十名にのぼったという。
筆頭家老西郷頼母の家族もそうであった。
頼母の妻千恵子は鳴り響く鐘の音をきくとすぐさま母律子の部屋を訪ねて最期のときがきたことを告げると、律子は八十六歳の姑冬子とともに自刃して果てた。
千恵子は自室へ戻るとまず三女田鶴子（八歳）を刺し、驚いて怯む四女常磐子（四歳）と無心に微笑う五女季子（二歳）を刺したあと、長女細布子、次女瀑布子の自刃を見届けてから最後に自らの命を絶った。
これを義妹の眉壽子と由布子が追う。
西郷屋敷ではほかに律子の実家の小森一貫齋一家や分家親族の一同も最期を遂げた。
その西郷屋敷へ踏み込んできたのは土佐の兵であった。まだ息のあった細布子が辛うじて身を起こすと、
「敵か、味方か」
そうきいた。なかの一人が、
「味方だ」
と答えると、細布子は懐剣を差し出して介錯を求めた。その姿を直視できず、顔を背けて辛うじて介錯したのはのちの衆議院議員中島信行（男爵）だったという。
いっぽう背炙峠冬坂の守備から城へとって返した西郷頼母は、黒金門の采配所で養子喜徳を伴った容保に久々の対面をした。
容保の傷つき憔悴しきった哀れなすがたに接した頼母は思わず落涙すると、ここまで主君を追い詰めた居並ぶ主戦派の重臣たちに腹が立って悲憤の思いを叩きつけた。
はじめから恭順を唱えつづけてきた頼母は説得できなかった己れの力不足にも腹を立てていたのであろう。
いまさらなんだと頼母の言動を避難する声が高まり、その場は一触即発の険悪な雰囲気になった。
容保は、頼母の身を案じて城に留め置かずその場で越

後口の陣将を命じた。
その夜、頼母は幼いわが子吉十郎をつれて會津を脱出した。
また會津には自刃より戦闘を希んだ婦人たちがいた。中野竹子、神保雪子、水島菊子ら二十余人である。
「會津はついに戦力尽きて婦女子を恃むか」
そう嘲笑される恥辱を避けたい重臣は、出陣を許さなかった。
「さらば枕を並べて自刃いたしまするぞ」
そこまで言われて困惑した重臣は、やむなく防衛軍への参加を許した。
よころび勇んだ婦人たちは古屋作左衛門の衝鋒隊に加えられて若松西郊の涙橋へ出陣し、断ち切った黒髪を白羽二重の鉢巻で結び、襷掛けした雄々しい出立ちで習い覚えた薙刀を振るって奮戦したが、所詮敵わずして中野竹子が銃弾に斃れ、神保雪子も斃されてさきに切腹させられた夫修理のあとを追い二十三歳の若さで戦場の露と消えた。
白虎隊の少年たちや婦女子軍の奮闘も虚しく、最早支え切れぬと覚った容保は、九月二十二日に大手門に降伏の白旗を掲げた。
その白旗たるや城中にあった白木綿はすべて戦傷者の包帯に使い果たしていたので、白布の切れ端を集めて婦人たちが落涙とともに縫い合わせたものであった。
容保、喜徳父子は滝沢村の妙国寺に移されて一時謹慎した。
当主に代わって反逆の責めを一身に受け止めた生き残りの家老萱野權兵衛が、東京三田の慶應義塾大学裏の會津下屋敷で切腹して果てたのは明治二年（一八六九）五月十八日であった。
會津を脱走した家老西郷頼母は仙台へ行って榎本武揚軍に投じ、箱館戦争に加わったそうだがその詳細は定かでないものの、のちに容保が日光東照宮の宮司になっているところへひょっこり現れて旧主と対面し、禰宜になって仕えたという。
国家危急存亡の秋には二本松に代表されるように年端も行かぬ少年や少女までもが動員される。率先してというより参加しなければならない窮地に追い込まれてしまっているからだ。
このことは近代国家幕開けの戊辰戦争に限らず、それから八十年近くも経った昭和二十年にも同様のことが起こっている。
それは世界の超大国アメリカとの太平洋戦争のときのことである。
三年のあいだの消耗戦ですっかり人材と資材不足に陥ってしまい、少年少女を動員して増産を奨励し、はたまた少年を戦力に活用すべく少年飛行兵の増員に蹶起に

なった。
結果、即成を急ぐあまり伎倆未熟な少年に一人前の仕事をさせる破目になり、成果が上がらぬからといって二本松少年隊が長刀を持て余すことから斬るのではなく躰ごとぶつけて突き刺させたのと同様に、伎倆未熟な少年飛行兵に空戦は疎か爆撃の成果も期待できないからといって爆弾を抱いたまま搭乗機もろとも体当たりさせる〈特攻戦法〉を強制したのだ。
住民をも巻込んだ沖縄での地上戦では、女学生や師範女子部の生徒、職員が看護要員として動員され、悲劇的な最期を遂げている。
戦争は勝っても負けても犠牲は大きい。
なんとしても外交努力で平和を保つことに徹しなくてはならない。

（了）

令和これからの思春期

亜木陽一

私は12歳の女の子。
小学生の時から同級生の特定の彼氏がいました。
だけど、卒業したら別れちゃったよ——。
中学に入りましたので、スマホで学校の勉強を頑張ってまーす。
部活はダンス部。
友達がいっぱいできたけど、選んでます。
パパはマッサージ師。
細マッチョ☆
ママは元・ギャル。
ホームヘルパーをしながら、外で働いてまーす。
私の顔はメッチャ可愛いいよ。
ママには負けない。
エヘヘヘヘ。
もてますよ。

だから、理想は高いの。
タイプはキンプリの平野君。
一人娘です。
でも、不良ではありません。

この前、ファッションビルで超素敵なカップルに出会いました。
それを話しますので、聞いてください。

金髪に染めたミュージシャンみたいな大人の男が、私に話し掛けて来ました。
近寄って来て目を見つめながら、
いい女だ！
エッー！
視線は短いスカートからさらに下に…。

脚がきれい！
ナンパされちゃおうかな！
その時、八頭身のモデル風の女が…。
ヤバイ
彼女がいるのか
と思ったら、その女の人が私の洋服のセンスを認めた。
女同士だから、ビビィーッときた。
うれしかった。
と言っても、私はその場から一目散に逃げ出しました。

今度こんなパパよりカッコイイ男の人に声を掛けられたら、抱かれちゃおうかな。
だけど、うそ・うそ。
本心は違います。
私は犯罪や危険には決して近づかない。
マジメで賢いから。
これが究極のプラトニックエロスなの。
高級な遊び。
あぶなくなったら、いつでも逃げればいい。

漢詩

潮汐錄（九十九）

鯨游海（くじらゆうかい）

婆瑠斗海周航其一丁抹・甲片巴玄

令和元年七月

幾千萬里徹宵翔
北歐舊都童話鄉
櫛比高樓誇固陋
八方水路夏猶涼

押韻・翔郷涼

〈婆瑠斗海周航（バルトかいしゅうこう）その一丁抹（デンマーク）・甲片巴玄（コーペンハーゲン）〉

幾千万里　宵（よ）を徹して翔び
北欧の旧都　童話の郷（ふるさと）に
櫛比（しっぴ）する高楼は　固陋（ころう）を誇り
八方の水路は　夏なお涼し

〔注　解〕

瑠＝瑠の正字。徹宵（てっしょう）＝宵を通して。夜通しで。
童話郷＝童話作家アンデルセンの故郷。
櫛比（しっぴ）＝櫛の歯のように隙間なく並び立つ。固陋（ころう）＝頑固。

成田→甲片巴玄（コーペンハーゲン）間は約九千キロ。ＳＡＳ便11時間の遠距離に在る。東京との時差はマイナス８時間。甲片巴玄（コーペンハーゲン）は北欧の玄関、バルト海西南の港湾都市で情緒豊かな街。

〔口語訳〕

幾千万里を翔んだのであろうか。航空機（SAS）は夜通し休みなく飛び続け私を運んでくれた。
北欧の玄関、旧い港町。あの有名なアンデルセンが生まれ暮らしていた甲片巴玄（コーペンハーゲン）にやっと到着した。
街路や水路に面してびっしりと、個性豊に立ち並んだビル群。ビルとビルの間は隙間がなく、色とりどりに彩られた姿形が美しい。モザイク模様を見せ由緒あり氣だ。
四方八方に伸びる水路は大阪の道頓堀を想わせ、眞夏だけれどもどこか冷んやりとした涼しさが漂う。

☆水辺の土産ショップのアンデルセン
　腰かがめつつ我れにほほえむ

又・其二露西亞・聖白帝城

令和元年七月

白亞街衢巴里空
樓臺壯麗伯林風
英明大帝解閑雅
別業不凌金閣宮

押韻・空風宮

〈又・その二露西亜・聖白帝城〉

白亜の街衢　巴里の空
楼台は壮麗にして　伯林風
英明なる大帝は　閑雅を解せば
別業も　金閣宮を凌ぐことなし

〔注　解〕

聖白帝城はロシア第二の大都市。以前はペトログラード、レーニングラードとも呼ばれた革命の中心地。

一七〇三年、ロマノフ王朝の全盛期、中興の祖白帝大帝が築いた冬宮と呼ばれるエルミタージュ美術博物館は絢爛豪華。しかも風雅を解す人でもあった。

郊外に造営された離宮も豪華で、広大な庭園を含め黄金を惜しみなく用いた絢爛さには圧倒される。結句の別業＝別荘とはこの離宮。我が金閣寺には及ばずと結ぶ。

☆北のパリ三千丈の地の底の
宮殿と紛うメトロの駅舎

又・其三粤土尼亞・太林

令和元年八月

何爲隣接虎與驢
遺蹟雖奇訪客疏
巷里荒涼民不笑
人知壓政莫由書

押韻・驢疏書

〈又・その三粤土尼亜・太林〉

何為ぞ隣接せしめたるや　虎と驢と
遺蹟奇と雖も　訪客疎なり
巷里荒涼として　民笑わず
人は知る圧政を　書に由ること莫く

〔注　解〕

何爲ぞ＝何故か。どうしてか。太林＝粤土尼亜の首都。疏＝疎の正字。①まばら②うとい。疏の字のみの意として③切り開く（疏水）。

遺蹟や景物に恵まれたバルト海沿岸の小国。

〔口語訳〕

何故に虎と驢を隣り合せにしたのか。遺蹟、景色は面白いけれど訪客はまばらだ。貧しく荒れた市街、人々は笑わない。人は歴史書に由らず大国ロシアの圧政を知る。

☆大国の圧政受くる小国は
民罪なくも貧しく暗し

又・其四芬蘭・扁婁森基

令和元年八月

深山幽谷雪冰城
溫水道巡煖氣盈
夏尙袖長涼爽地
有信而立育文明

押韻・城盈明

〈又・その四芬蘭・扁婁森基〉

深山　幽国　雪氷の城
温水道めぐりて　暖気盈つ
夏なお袖長き　涼爽の地
「信有て立つ」が　文明を育めり

〔注　解〕

北欧、即ちスカンジナビア半島の瑞典、諾威、芬蘭、丁抹の諸国は世界の一等国である。種々の統計が何れも世界最高の水準にある。ユネスコの算数共通テストでも毎回の如く一位は芬蘭という。亜細亜の新嘉坡や新西蘭等を加えた小国の平均地が常に上位に位置するとはいえ、この事実は注目すべきである。高福祉を実現した一等国。

「暑熱の弛緩」ではなく「寒冷の緊張」と、孔子の説く「無信不立＝有信而立」の信頼とが文明を育んだのだ。

☆算数のテスト今年も世界一
文明つくる冷気と信頼

《漢詩の流れ87》戦国時代②足利義昭

織田信長により後年将軍の座に据えられたが、無用となって弊履の如く捨てられた悲運の貴族。

三好義継、松永久秀ら梟雄に迫害され、出家して近江に逃れた折の作。

避亂泛舟江州湖上（乱を避け舟を江州湖上に泛かぶ）
落魄江湖暗結愁　江湖に落魄して暗に愁を結ぶ
孤舟一夜思悠悠　孤舟一夜　思い悠々
天公亦怜吾生否　天公亦た吾が生を怜れむや否や
月白蘆花淺水秋　月は白し蘆花浅水の秋

（口語訳）

野心を持った梟雄らに迫害され、都落ちして近江に逃れ落ちぶれた。心中愁いに閉ざされている。

語り合う相手も誰一人なく湖上に舟を浮かべて果てしない思いにくれている。

さて、天は私を哀れに思ってくれているのか否か。

月は皓々と照り、蘆花の白さが極立つびわ湖の秋だ。

転句の「天公、吾が生を哀れむや否や」等と、名門の出自を捨て切れぬ弱さ、甘さがかい間見えるが、これだけの正格の七言絶句を詠めるだけの文学的教養は十分に持っていたことが判るセンス有る詩ではある。

漢詩

汲深録（二十一）

松井秀人

江邊柳眼

（江辺柳眼）
令和二年三月

晴江送友渡津邊
新染鵝黄纖朶妍
離別作環言絕處
映波白髪共衰年

晴江　友を送る渡津の辺
新たに染める鵝黄　繊朶に妍なり
離別に環を作り　言絶つ処
波に映ずる白髪　共に衰年

押韻・邊　妍　年

〔注　解〕

渡津＝渡し場。
鵝黄＝鵞鳥の雛の羽毛が黄色で美しいことから、黄色で美しいもののたとえ。柳・酒・菊の色などの形容。
纖朶＝しなやかな枝。
衰年＝年老いること。老年。

〔口語訳〕

晴れた河の渡し場のあたりで、友を見送ろうとしていると
新たに色づいた鵝黄のしなやかな枝が美しい。
枝で離別の環を作るだけで、言葉が出てこない。
波に映じた髪も白くなり、共に年老いてしまった。
また元気で再会できるだろうか。

江邊惜別

（江辺に別れを惜しむ）
令和二年三月

江畔垂楊掩釣舟
斜陽岸上嫩芽稠
異鄉舊友別離處
漸老流年憶昔游

江畔の垂楊　釣舟を掩う
斜陽の岸上　嫩芽稠し
異郷の旧友　別離の処
漸く老いて流年　昔游を憶う

押韻・舟　稠　游

〔注　解〕

垂柳＝しだれ柳。
嫩芽＝草や木の柔らかい若い芽。新芽。
流年＝流れ去る年月。杜甫・「雨」
昔游＝以前に遊んだこと。

〔口語訳〕

河辺のしだれ柳は釣り舟を掩っていて
夕日が照らす岸のあたりは、草や木の新芽が稠っている。
異郷にいる旧友と、かつて別れた処だ。
だんだんに老いて流れ去る年月に
旧友との釣り舟での以前の遊びをなつかしく思う。

隱者避大禍

（隠者大禍を避く）
令和二年三月

猛威悪疫蓋春天
爛漫櫻雲逸酒筵
禁足貧居鎖門戸
無端得暇樂高眠

猛威の悪疫　春天を蓋う
爛漫の桜雲　酒筵を逸す
禁足の貧居　門戸を鎖す
端無くも暇を得て　高眠を楽しむ

押韻・天　筵　眠

〔注　解〕

悪疫＝たちの悪い流行病。ここでは新型コロナウイルスのこと。
爛漫＝花が咲き乱れているさま。
櫻雲＝桜の花の形容。
禁足＝家の中や一定の地域から外に出ぬこと。
無端＝思いがけなく。
高眠＝世俗を離れて暮らす。

〔口語訳〕

猛威を揮う新型コロナウイルスは、春の世の中を蓋てしまい
折角咲き乱れている桜は、酒宴を楽しめなかった。
外出自粛で閉じこもり、思いがけない休暇を得て隠者の暮らしを楽しんでいる。

書室聽鵑

（書室に鵑を聴く）
令和二年五月

齋舍窗風吹老顔
鄉書散亂幾時還
一聲裂帛催歸去
心意乘鵑夢故山

斎舎の窓風　老顔を吹く
郷書散乱　幾時にか還る
一声裂帛　帰去を催す
心意　鵑に乗じて　故山を夢む

押韻・顔　還　山

〔注　解〕

齋舍＝書斎。
鄉書＝ふるさとからの手紙。
幾時還＝いつになったら帰ることができるだろうか。
裂帛＝きぬを裂く。ほととぎすの鳴き声の形容。
心意＝こころ。思い。

〔口語訳〕

書斎の窓からの風は、老いた顔に吹き
故郷からの手紙も散乱して、いつになったら帰ることができるだろうか。
突如、ほととぎすの鳴く声が、故郷に帰ることを促していて
帰心の思いは、ほととぎすの声に便乗して、故郷の夢を見る。

山蹊觀瀑

（山蹊観瀑）
令和二年六月

晴天蹊路翠屏環
俗客疑雷樹影間
相對前山千尺瀑
飛流一洗得清閑

晴天の蹊路　翠屏環る
俗客　雷を疑う樹影の間
相対す前山　千尺の瀑
飛流一洗　清閑を得たり

押韻・環　間　閑

〔注　解〕

蹊路＝こみち。
翠屏＝連なり立つ緑の山々の形容。
俗客＝やくざな人。
千尺瀑＝高い滝。
飛流＝速い流れ。
一洗＝暑気などを洗う。
得清閑＝清らかで静かである。避暑をさしていう。

〔口語訳〕

晴天のこみちは、緑の山々が取り巻いていて
俗人は、樹々の間からの音に、雷かと疑ってしまう。
谷を挟んで向かい合う前の山には、千尺かと思われる滝が見える。
速い流れで洗い清められた気分で、一遍に涼しくなった。

ロボット雑考（その十五）
（量子コンピューターについて）

三戸岡　道夫

最近は世界中、どこでもＡＩ（人工知能）の時代に入り、今後どこまでＡＩ時代になっていくかわからないが、ＡＩを作り、それを発達させてきたのはコンピューターである。地球上にコンピューターがなかったら、ＡＩは生まれなかったであろう。

ところが更に昨年（二〇一九）、現在のコンピューターより約十五億倍もはやく計算できる「量子コンピューター」が誕生したのを、米グーグル社が発表し、世界に衝撃を与えた。

量子コンピューターは、極微の世界の物理法則である量子力学の特性を利用した、次世代の計算機である。これまでスパコンをしのぐ計算速度を発揮すると期待されてきたが、実証したの初めてであった。

グーグルの実験結果によると、同社の量子コンピューターの試作機は、計算速度の世界ランキングで首位に立つ米ＩＢＭのスパコン「サミット」でも、一万年のかかる計算をわずか三分二十秒で完了するという。計算速度は実に十五億七六八十万倍で、量子コンピューターの性能が、これまでのコンピューターを上回ることを示す「量子超越」を達成したのであった。

これはコンピューターの世界だけではなく、人類の科学史上でも、大きな一歩である。量子コンピューターが実現すれば、ＡＩ（人工知能）や、新薬などの開発が飛躍的に加速するほか、光合成における電子の振舞いなど、スパコンでは扱えなかった極微の自然現象を、解明できる可能性がある。

このように量子コンピューターは将来の情報技術の本命であり、米中の研究機関や、巨大ＩＴ企業が、開発にしのぎを削っている。グーグルがその先頭を走っているわけである。しかしそれと競合するＩＢＭが即座に、

「グーグルが主張するほど、スパコンとの性能差はない」

と反論したことからも、競争の激しさがうかがえる。

たしかに今回のグーグルの実験では、量子コンピューターに有利な特定の計算問題を使って実験しており、あらゆる計算ができる実用的な量子コンピューターが出来ているわけではない。

しかし、これから二十年～三十年先には、本格的な量子コンピューターが実現することは、間違いないと思われる。グーグルは量子計算という新しい科学の手段を、人間にもたらしたのである。

以上のように量子コンピューターの開発が進むと、企業の間でも活用の可能性を研究する動きが拡がってくる。

スーパーコンピューターをはるかに上廻る計算能力や、膨大な選択肢の中から、一瞬で最適なものを取り出す性能には、化学品から金融、ＩＴ、自動車、その他あらゆる業種の企業が注目している。

その量子コンピューターの活用例を左記してみると、次のようである（想定も含む）。

○素材――三菱ケミカルのリチウム空気材料
　ＪＳＲの半導体・ディスプレー材料
○金融――みずほファイナンシャルグループと、三菱ＵＦＪ銀行の金融サービス開発
○ＩＴ――メルカリの効率的な商品配送
○電機――ＯＫＩの工場での部品製造装置配信
○自動車―デンソーの渋滞回避経路の検証
　独フォルクスワーゲンの電気自動車用バッテリー研究開発

量子コンピューターの活用で、早期の実用化が期待されているのが、素材開発である。

化学最大手の三菱ケミカルは、米ニューヨーク州にある米ＩＢＭの量子コンピューターを、慶応大学のキャンパス（横浜市）の拠点から利用する。そして横浜市の拠点から遠隔で利用し、次世代電池の「リチウム空気電池」の開発などをテーマに挙げている。

化学大手ではＪＳＲもＩＢＭと慶大のプロジェクトに参加しており、半導体材料やディスプレーの開発に生かす考えである。同じくプロジェクトに参加する、みずほファイナンシャルグループと三菱ＵＦＪ銀行は、金融サービスの開発や、市場取引に役立てようとしている。

ＩＴ企業の関心も深いメルカリは、研究機関内に量子技術の専門チームを設置した。そして量子コンピューターの高い計算能力で、東北大などとロボット技術を開発しているほか、効率的な商品配送をはじめとする、自

社サービスへの活用も視野に入れている。

すでに一定の成果を収めている企業もある。ＯＫＩが子会社のプリンター工場を対象にシミュレーションした結果、部品などを製造する装置の配置を工夫することで、作業員の移動距離を平均で二十八パーセント減らせた。

自動車部品大手のデンソーでは、カナダのディー・ウエーブ・システムズの量子コンピューターをクラウド経由で利用。豊田通商とともにタイで行った交通情報配信サービスの実証実験で、約十三万台の車の位置データから、渋滞回避経路を検証したほか、自社工場内の部品搬送車の運行実験では、実際に稼働率が十五パーセント向上したという。

ただ、本格的な量子コンピューターの実現には、技術的な課題も多い。計算には精密な制御が必要で、現状では多くの計算ミスが生じる。回路を大規模化すればミスを訂正できるとされるが、装置の巨大化をどう抑えるのかが課題である。超電導物質などを使うため、装置を極低温や真空と言った特殊な環境に置く必要があることも、実用化をはばむ。

一方、量子コンピューターが実現すると、通信などに使われている暗号が解読され、インターネットや金融取引、安全保障などが脅かされる恐れもあり、新たな対策が求められる。

量子コンピューターは、あらゆる計算が可能な万能型と、膨大な選択肢から最適解を探す計算に特化した簡易型、に大別される。

アメリカなどが開発しているのは万能型で、実用化は数十年後の見込であるが、情報技術の世界を一新する可能性を秘めている。日本では基礎研究で先行したが、製品化で出遅れが目立つ。

万能型では、グーグルの試作機や、ＩＢＭが発表した商用機は、いずれも心臓部の材料に超電導物質を使っているが、この方式はＮＥＣが一九九〇年代に世界に先駆けて、実証していた。

一方、簡易型は「量子アニー」と呼ばれ、東京工業大の研究者が理論を提唱した。しかし二〇一一年に初の商用機を発売したのは、カナダのベンチャー企業だった。

米国や中国が万能型の開発に力を注ぐのに対し、日本企業では技術的なめどが立っている簡易型の応用を目指す企業が多く、本流への乗り遅れを危惧する声もある。

科学技術振興機構（ＪＳＴ）の調べによると、米中は量子コンピューターの関連研究に、五年間で一千億円以上を投資する国家戦略を進めており、巨大ＩＴ企業のベンチャー企業の動きも活発である。

量子コンピューターはさまざまな手法が提唱されており、どれが実用化の決め手になるかは見逃せない。しかし、光を使う万能型や、既存の半導体技術を応用する方式などの研究では、日本が先行している。

〈御参考〉

（量子とは何ですか）

物質を構成する原子や電子、光の粒である光子などの総称である。ボール投げなど、人が日常的に経験できる物理的法則とはかけ離れた、「量子力学」という不思議な法則に従っている。

（量子コンピューターとは何ですか）

量子力学に基づいて計算するコンピューターです。一九八〇年代に開発提案された。古典力学に基づく現在のコンピューターとは全く異なる方法を使って、はるかに高速で計算を行う。

（計算方法はどう違うのか）

従来のコンピューターは情報を「０」とか「１」の組み合わせで計算するのに対し、量子コンピューターは「０」でも「１」でもある、「重ね合わせ」という量子の特殊な性質を使って、計算する。

（なぜ計算が速くなるのか）

たとえば従来のコンピューターが「００」「０１」「１０」「１１」の四つの基本単位で表していた情報を、一つの基本単位で表せる。この差は情報量が多くなるほど、爆発的に広がる。多くの計算をまとめて行えるため、複雑な計算を超高速で実行できるのである。

（つづく）

古い物・遠い夢

名品歴々（茶道史余滴）〈六〉

万代屋肩衝（もずやかたつき）―三肩衝のこぼれ話―

忠内正之

〝まんじ〟前回誌（一五六号）に、三英傑を巡る三肩衝の話を載せて戴いた。そのこぼれ話として、万代屋肩衝の物語を追加、お届けしたい。

名物万代屋肩衝にまつわる、石田三成と万代屋宗安との間に交わされた、男同志の真情あふるる話である。

（一）

石田三成（一五六〇―一六〇〇）は、永禄三年、近江の豪族京極氏に仕える下級武士の家に生まれた。父は隠岐守正継（おきのかみまさつぐ）、兄は木工頭正澄（もくのかみまさすみ）という。初め佐吉と称し、三也（みつなり）とも言った。

天正十三年（一五八五）七月、秀吉が関白職に任じられたとき、自身も、従五位下治部少輔に叙任された。秀吉に仕えることになるいきさつは次の様に伝えられている。

秀吉が長浜城主の頃である。

ある日、秀吉は鷹狩りに出かけた。

のどが渇いたので、とある寺に立ち寄り、茶を所望した。一人の小僧が、ぬるく点てた茶を、おおぶりの茶碗にたっぷり満たして運んできた。

これを飲み干すと、秀吉は「いま一服」と命じた。小僧が次に点ててきた茶は、最初のものより少し熱く、やや少なめだった。

（この小僧め、なかなか気がきくわい）

秀吉は、更に一服所望した。すると今度は、熱いのを少量、小さな茶碗に点てて差し出した。この機転のきいた振舞に、秀吉は、いたく感服して、さっそく住職に懇願して、小僧をもらい受けた。これが後の石田三成である。

これは「武将感状記」による、三成の才気煥発さを伝える有名なエピソードだが、彼のその先の人生も、茶とは無関係では無かったと言えるのではなかろうか。

千利休の権勢拡大を嫌い「茶の湯ご政道」に対して批判的であり続けた三成であったが、茶の湯そのものへの執心は決して人後に落ちなかった。

利休に対しては、一人の茶人として敬しながらも、そこにまとわりつく権勢を憎まざるを得なかったのであろう。資料によれば、天正十八年霜月十二日、利休の茶会に、佐竹左京太夫、万代屋宗安とともに三成が招かれているし、利休が住吉にある田地のことで三成の世話になり、その謝意を述べている十二月二十日付け三成宛書状が存在すること、更に後で述べるが、三成とごく深い交流のあった宗安が利休の女婿であることなど考え合せると、利休との間に確執があるとは、断じ難いところである。

他の武将たちと異って、若年から秀吉に仕えて頭角をあらわすまで、茶の湯に親しむ暇などなかった。茶の湯は、常に憧れの対象でしかなかった。そこから生じた鬱屈（うっくつ）した思いが、三成をして「茶の湯ご政道」批判へと心ならずも向かわせた、要因となったのであろう。

もともと三成は、武勇の人ではない。才気ばしった、殊に計数にすぐれた能吏（のうり）である。

天正十一年（一五八三）、二十三歳のとき、賤ヶ岳（しずがたけ）の合戦で果たした活躍ぶりを見ても、能吏としての特徴は顕著である。

武勇を誇りとする加藤清正や福島正則らが、いわゆる「賤ヶ岳七本槍」として活躍するのに反して、三成の任務は兵站（へいたん）奉行という裏方である。

しかし戦国時代でも、このころになると、戦闘は様変わりしていた。大軍勢による、長距離移動、長期対峙ともなれば、兵站奉行の才覚ひとつで戦況が左右されかねない事態となる。秀吉は兵站奉行の重要性にいち早く着目していた。そしてその責任者は三成をおいて他にないと見定めていた。

賤ヶ岳の合戦で見せた、三成のめざましい働きは、大垣から木之本までの約五十四キロの夜道を、秀吉本隊一万五千が約五時間で駆け抜けたことに見られる。胴丸を着け、槍を持った足軽たちが、これほど短時間で走るのは不可能だが、三成の機転がこれを可能にしたのである。

あらかじめ道筋の村々に手配りして握り飯と松明（たいまつ）を用意させたうえに、足軽たちの武具は長浜城から新たに運

び出したものを木之本に準備した。足軽たちは、手ぶらで駆け続けることができたのである。

天正十年（一五八二）六月、本能寺の変の際、秀吉は備中高松城から大返しを行ない、早々に信長の仇を討って天下取りに繋げた戦略も、同様、三成の献策が実を結んだものと考えられる。

兵站奉行としてばかりではなく、敵状偵察にも長け、その分析力にも非凡な才を示していた。

その後の秀吉政権を縁の下で支えつづけもした。「惣無事令」「バテレン追放令」「刀狩令」のほか、千利休を窮地に追い込むことになった「身分統制令」（茶人が政治に介入できなくなる）などを立案推進した。

三成は、自分の才をいかんなく発揮することで、秀吉の恩義に報いようとした。秀吉がもっとも信頼する忠僕の一人となったのである。

（二）

三成の名が「茶会記」に出てくるのは、天正十四年（一五八六）以降である。

この年、堺政所（奉行と同義）を兼任したことで、堺の茶匠、津田宗及や万代屋宗安らと親しく交わる機会を得た。

万代屋宗安（生没年不詳）は、堺の商人で茶人。姓は渡辺、通称新太郎。号は竹渓。茶の湯を利休に学び、その娘を妻とした。のち秀吉に仕えて御伽衆に列し、茶頭八人衆の中に加えられた。宗安肩衝、九重の茶壺、牧谿の布袋の絵などを所持していた。

余談となるが、宗安が没し、その妻（利休の娘）が後家になった時、あまりに美貌であったため秀吉に見染められ、側室にと強く望まれたが、之を拒絶したという。このことで、利休が失脚する一因となった。というまことしやかな説が残っているが、眞実かどうか疑わしい。

三成はとくに、万代屋宗安に就いて、本格的に茶の湯を学ぶうちに、宗安が所持していた唐物茶入「万代屋肩衝」を金子三百両で譲りうけた。初めて手に入れた名物である。

その後、ひとかどの茶人らしく数種の名物を持ったが、いちばんのお気に入りは、この唐物肩衝であった。

三成の茶会記録から拾う。

天正十五年（一五八七）の正月三日には、大坂城において秀吉の大茶会が催され、博多の豪商神谷宗湛もこの茶会に加わったのであるが、翌日、正月四日の昼、やはり、大坂城の石田三成の屋敷で茶事が行われ宗湛が招かれた。博多の復興をはかる町割奉行の筆頭に任命されたばかりの三成と地元有力者の談合の場でもあった。相客は津田宗及と、その子宗凡であった。

茶は大海に一つ、棗に三つ、中次に一つ、都合、五つの茶入れて出した。これは五種の茶を飲み分ける遊びで、かぶき茶といった。

石田三成と聞けば、秀吉の忠僕で、謹厳実直、融通のきかぬ人物と思われがちだが、遊び心も持ち合わせていたのである。

この後の茶会記に記録される三成の招待客は、茶人と数寄大名に限定されており、あまり交際が広がった形跡に乏しい様である。

殊に「賤ヶ岳七本槍」と称された加藤清正や福島正則ら秀吉恩顧の武将たちとの茶席での交流は見られなかった。

とくに清正は三成を毛嫌いしたようだ。「清正記」は次の様に伝えている。

三成は、朝鮮出兵を終えて博多に帰還した将士の労をねぎらい「来秋に上洛されたおりには茶会を催して諸将を慰労したい」と挨拶した。

これを聞いた清正は、「諸将は治部（三成）どのの茶会に列せられるがよろしかろう。それがしは七年もの間、海の向こうで骨身をくだき、兵糧もなく、茶や酒も持ち合わせぬゆえ稗粥で諸将をもてなして進ぜよう」と、三成に言葉を返したという。

三成の後援者である秀吉は既に没しており茶会は成立しなかったものと思われる。

秀吉が没すると家康の横暴さが目立って来た。秀吉の遺言を無視する様々な言動が見られる様になり、豊家を一途に護ろうとする三成は、あらゆる智略を働かせて、之の排除に当った。家康は三成を青二歳と見くびっていたものの、いつしか実力の対勢は略五分と見られる程になった。

そこで家康も懼れざる得なくなり、遂に慶長五年、徳川家康（東軍）石田三成（西軍）が激突することになる。関ヶ原の合戦である。

慶長五年（一六〇〇）九月、決戦を数日後にひかえた大垣城（西軍の拠点）に、三成に対して陣中見舞の客が訪ねてきた。万代屋宗安であった。（実際は宗安の嫡子であり、千利休の外孫でもある万代屋宗貫だったのではないかと考えるが、宗安が定説とされるので之に従う）

三成は、宗安と見ると非常によろこび、以前に宗安から金子三百枚で買った、宗安ゆかりの肩衝茶入をとり出して言った。

「武運つたなく、このたびの合戦で、わが身が滅んでは、この天下の名物もむなしくなり果てるであろう。惜しみてもあまりあることだ。宗安どの、もしそれがしが戦死したと伝え聞いたならば、この肩衝を用いて茶を点てて回向していただきたい。だが、もし佛の加護を得て、一戦に勝利したあかつきには、再度、これを買い戻させて

欲しい」

「縁起でもないことを申されますな。ひとまず、私めがお預かりいたしますほどに、戦勝祝いの茶席で、お返しいたしとう存じます」

宗安は、ご武運をお祈り申し上げておりますと言いのこして、城をあとにした。

九月十五日、まる一日を要さずして、西軍は壊滅した。当初は五分の戦いと見られていたが、老獪な家康の勝利であった。

戦死こそまぬがれた三成であったが捕らえられた。京都六条河原の刑場に引かれていくとき、三成は紺の帷子を着ていたが、小袖を許された。三成は、それを持参した者が「上様からの下され物だ、着替なされ」と言うと「上様とよばれる方は、先年他界された太閤殿下をおいて他にいないはずだ」と言って、その小袖を突き返したという。

三成が斬首されたと伝え聞いた宗安は、その日のうちに堺の町から姿を消した。

（三）

家康は、戦勝気分を満喫していた。一度は手離した「初花肩衝」と新しく「楢柴肩衝」の名物が揃って手に入ったのである。

両肩衝の感触を快く楽しんでいたものの、宿敵だった石田三成秘蔵の「万代屋肩衝」の行方が気になり出した。天下をとったあかしとして、どうしても欲しくなった。そこで三成秘蔵の肩衝を捜し出せと下命した。

いまや、家康の威光は天下にとどろいているだけに、反応は早い。さして時はかからず、筑前の大名・黒田長政から連絡が入った。

長政の家来が、茶人とおぼしき茶筅髷の男を見つけ、長政の前に引き出したところ、男は自分が宗安だと認め、所持していた肩衝を差し出したという。

宗安は、三成と交わした約束の一部始終の述べたあと、「亡き人のあとを弔うのも、もはや、これまでといたしましょう。ただし、一つだけ、私の願いをお聞きとどけ願いたい。この肩衝の銘を〝形見の肩衝〟として末長く伝えて下さるようお願い致します」と懇願した。

長政は、茶の湯で結ばれた男同士の美談だと称賛した。そして、この肩衝を家康のもとへ送りとどけるとき、添状に〝形見の肩衝〟と明記することを忘れなかった。

家康は、三成の〝形見〟を手にして頬をゆるめたが、それは束の間の満足にすぎなかったようで、次の欲望に向かって働き進もうとしていたのであった。

むすび

万代屋肩衝〝形見の肩衝〟は誠に残念乍ら、現在のところ全く所在不明である。本来ならば、柳営御物として、永く所蔵されて当然であると思われるが、敵将の遺品として家康自身が忌み嫌ったものか、その後の消息は全く消えてしまい、美談だけがひとり、語り継がれているのみである。

従って秀れて優美だった万代屋肩衝の姿を写真でお示しできないのが至極残念である。

日本における茶の湯文化の集積の懐は、限りなく広く奥深い。かつての安国寺肩衝のように、ひょっこり現代に姿を表わすこともあろうかと期待するのである。

終

その他

参考資料

戦国茶闘伝　三宅孝太郎　洋泉社
茶道と茶人（一）　桑田忠親　秋田書房
利休大事典　千宗佐他　淡交社
茶道人名辞典　桑田忠親編　東京堂出版
角川茶道大辞典　角川書店
千　道安　齋藤史子　鳥影社
人物逸話大事典　角川書店

青雲の彼方（九）

太田精一

九、満洲、渦巻く軍閥と日ソの勢力圏争い

（一）ハルビン総領事として再び中国へ

広東から帰国した天羽英二は、大正十四年（一九二五）三月四日、幣原外務大臣へ「中国の将来における広東政府の役割の重要性と日本の対中政策」についての私見を述べた。

ところが、幣原外務大臣は、南満州鉄道とそれを護衛する関東軍の設置された中国東北部（満洲）の動向により高い関心があり、その成り行きを注視しているようであった。満州には、日露戦争勝利の結果、ロシアの持っていた利権を日本が引き継ぐ形で確保した有形無形の財産があり、日本の政財界及び陸軍は、満州を重要視していた。満州を拠点として日本の勢力圏の拡大を図ろうとする考え方が主力を占めていたのである。

そのため、わが国の中国への関心は、まず中国東北部の満州に向けられていた。奉天の張作霖、直隷派といわれる北京の馮玉祥などの動静を常に把握し、懐柔することによって、反日活動の動きを未然に抑え、満州での経済活動を活発化することが日本の在中国公館の重要な課題であったのだ。

「天羽君、帰国してすぐこんなことを言って申し訳ないが、ハルビンに総領事として赴任してくれないか。現在、中国情勢は、予断を許さない状況にある。中国では、民族意識が高まり、諸外国の利権を排斥し、独立国家としての尊厳を回復しようとして、各国に条約の改定などを迫っている。わが国に対しても例外ではない。また、北満は、ロシアの権益を引き継いだソ連が、中国を懐柔し、再び南満州にまでその勢力圏を広げ、わが国の権益を脅かそうとしている。それに加えて、中国を共産主義国家にすることによって共産主義勢力の拡張を図り、日本の満州での経済活動を弱め、中国をソ連の防波堤としようとしていると思えてならないのだ。君は、広東では中国の政治勢力ともうまくやり、日本の国益にかなった活動をした実績がある。今度は、ソ連、中国、日本の利害関係が錯綜するハルビンにおいてその手腕を発揮してほしい」

幣原外務大臣は、今や中国通となった英二の説得に当たった。

彼としても中国外交は、日本にとって英米と並んで重要と考え、やりがいのあるポストだと思っていた。帰国直後で心身とも疲れはあったが、赴任を決意したのはそう考えたから他ならない。

「分かりました。どの程度役に立つか分かりませんが、全力を尽くして日本の国益のために頑張ってみます」

赴任が決まった英二は、四月になるとすぐ満州に関係の深い省庁へ情報収集を兼ねて挨拶周りをした。その挨拶回りにほぼ二週間費やしている。

内務省警保局長、朝鮮総督府政務総監、朝鮮総監、日露協会、満鉄総局、陸軍省、商工省、農林省、海軍省、など関係官庁はもとより、日露貿易関係者及び元満鉄総裁の後藤新平子爵などからもハルビンに関する情報を聴取し赴任に備えた。

英二の赴任一週間前の四月十七日、天羽家に女子が誕生、和子と名付けた。平和がずっと続くように願いを込めての命名である。桜も散り、東京周辺はすっかり新緑の季節となっていた。

いよいよ家族を残して東京を離れる日が来た。英二は、四月二十四日東京を発ち、四月二十六日神戸からハルビン丸に乗船、大連に二十九日到着、大連で税関長、逓信局長、朝鮮銀行、満鉄理事、大連市長、三井物産の要人と会合、翌日は旅順へ出向き白川大将、松坂中佐を訪問、大連に戻り夜行列車で奉天に向かった。

五月一日朝、奉天に到着した英二は早速、奉天総領事館を訪問、松岡洋右満鉄副総裁の招待で菊池少将を交え昼食を共にした。その席で松岡副総裁は、満州における鉄道政策について持論を展開した。午後には交通総長葉恭綽、張作霖、奉天省長王永江、張作霖の息子張学良など奉天の中国要人を訪問、赴任の挨拶をした。

英二は、五月三日、朝ハルビンに到着した。ハルビンは、最も良い気候で快適に過ごすことができると期待していたが、その日は特別であったのか意外と暑く、上着が邪魔なほどであった。到着して初めての夜を市内のホテル過ごした英二は、南京虫の、襲来に悩まされた。南京虫には慣れているつもりであったが、しばらく日本で縁がない夜を過ごしていた英二には、眠れない一夜となった。

ハルビンは中、ソ、日の政治勢力が入り乱れる複雑な

都市であった。それにアジア、ヨーロッパに通じる幹線の主要都市でもあったので、東西文化の接点を思わせる要素も持っていた。英二は、赴任してすぐハルビンにおける日、中、ソの政治、経済、軍事、文化を代表する機関との交流を深めるため、赴任当初の二週間をかけ精力的に各機関を訪問し、これら機関の要人との人脈の形成に努めた。

満鉄、特務機関、内務省の出先機関の主要人物、英、独、仏、ソ、伊の各領事、ハルビン市長、張煥相護路軍長総司令、趙金麟参謀長、馬忠駿東省特別区市政管理局長、金栄桂警察庁長、劉哲東支鉄道理事などと積極的に接触し、情報収集にあたったのである。

話は前後するが、四月二十五日、英二はハルビンに赴任する途中、母校の神戸高商で一日時間を取り講演を行っている。

演題は、「国際政局における日本の地位」と題するものであった。その講演要旨は次の通りである。

日本外交を展開するにあたっての今日的課題は、国民が日本の国際的地位に対して正当な判断を持っていなければならないということである。日本の言論界でも一部の人は、自国の実力を過大評価し、軍国主義、侵略主義の議論をなし、また一部の人は自国の実力を卑下し過ぎ退嬰的な見方をしている。現在世界には外交上低気圧といわれる地域が三つある。欧州に二つ、アジアに一つである。いいかえれば欧州は、バルカン半島と北海で、残りは太平洋である。

戦前の欧州の平和は、バランス・オブ・パワーで支えられていた。英・仏・ロによる三国協商と独・伊・墺による三国同盟の力の拮抗の上に成り立ってきた。これまで英国の外交政策は、欧州に強い国家を創らない。という方針で臨んできた。欧州大陸には、同等の勢力と国家が存在するのが都合良く、それらの国家が互いに相争い片方の力が、相手を圧倒しそうになると第三者である英国は、他の国と結んで対抗し、強大な国家の形成を阻止してきた。

ドイツは、優秀な民族国家であるが、自国の国際的な地位を正当に見ていない。ドイツ民族は、常に自国のみを見て、ただ自分は、世界唯一の優れた民族と思いこんでいたような側面があった。これが、世界の同情を失って世界を相手として戦わなければならないような破目になってしまったのである。

米国は、近東各方面において大躍進を遂げている。特に経済的躍進は、著しい。英米両国は、国際政局の強国で、提携すれば平和。両国が戦えば全世界が戦場と化す。さらに国際間の鍵は、ロシア、中國にある。

ロシアは、欧州の強国であったが、革命によって共産主義国家が誕生し、ソ連となった。だが、国民の賛同を

得たものではなく、またその政体も世界の承認を得ていない。中国は、強国であり、文明も栄えたが、アヘン戦争以来国力も衰え、外国の干渉を受け、国内は混乱状態となっている。孫文の国民党一派の反帝国主義運動で侵略主義、帝国主義を排除しつつある。不平等条約の廃止、治外法権撤廃、税関回収、租借地回収を標榜している。

日本は、世界で最も優越する英米を前にして、後に国際上謎とされる中ロ両国の影響を受けつつある。日本は、久しく日英同盟を基調として極東の平和を維持してきた。それに露英仏と協商を結んできた。だが、日英同盟はワシントン会議で撤廃、四ヵ国条約がこれに代わった。

四ヵ国条約は、同盟ではなく太平洋を中心としてこれら諸国が国際同盟を平和的に解決しようとするものである。日清、日露で世界の強国の仲間入りをし、ワシントン会議で三大国の列に入り、加藤全権は、三大巨頭会議の一人に列せられた。しかし、日本の国力は弱い。経済的地位を考えると列強に見劣りがする。その一つは、国土が狭く天与の資源にともしい。次いで物質文明が遅く輸入されたため、産業上の組織が欧米に比べ劣っていることである。日本は、経済界の不振が目立つ。これを補うためには、各人の努力をおいて他にない。

各人奮闘して国際上の地位を向上し、名実ともに強大国に列することが私の希望であると結んでいる。

(二) 赴任当時の満州

英二の着任当時の満州は、中国の一部であるものの日本、ソ連、欧州列強の進出により各国の利害が錯綜し、混沌としていた。

日露戦争の結果、満州全域に勢力を伸ばしつつあった帝政ロシアの勢いは、押し止められ、戦争に勝利した日本が南満州に勢力を伸ばし、帝政ロシアは北満への勢力を残すのみとなった。だが、革命によって帝政ロシアから政権を奪取したソ連が、前政権の権益を引き継ぎ北満に勢力を保持し、さらにその拡大を狙っていた。

一方、中国は、清朝当時奪われた諸外国の利権を回収し、独立国としての尊厳を保つことに腐心している。

こうしたことから中国の基盤の上に、北満はソ連、南満は日本が権益を重ね三つ巴になって互いに抗争を繰り広げ、ハルビンはその渦中にあった。

それに加え大正十四年（一九二五）一月、日ソ間に基本条約が調印され、ロシア帝国滅亡後、日ソ間に外交関係が樹立されることになったのである。

大正十四年五月三日にハルビンに着任した英二は、複雑な外交上の案件の処理に追われ、妻も出産したばかりであったのでしばらく単身赴任で過ごした。

満州の政治状況は予想通り複雑であった。中国は、奉天に張作霖がいて満州一帯に実権を握っていた。ハルビンにはその配下の張煥相護路軍長総司令（張煥相将軍）

が責任者として行政を担当していた。

ソ連は、東支鉄道を中心として北満一帯を抑えていた。ハルビンには、ソ連人も鉄道従業員を始め多数いた。また、ハルビン周辺には白系ロシア人も少なくなかった。元アムール総督ゴンダッチ将軍、元北満行政長官ホルワット将軍など帝政ロシア時代の大物政治家が亡命していたのだ。

白系ロシア人の亡命者とソ連要人とは、同じロシア人でありながらハルビンでは熾烈な抗争を繰り返していた。

日本は、南満の関東庁と満鉄が勢力を北部に延ばしつつあり、満鉄は北満にも新鉄道線を敷設していた。また陸軍は、北満主要地に特務機関を置いていて、内務省および朝鮮総督府もハルビンに代表者を駐在させていた。

外国人は、欧米人が多く、商工業を営んでいたが、日本の進出に押され、次第にその勢いが失われつつあった。

日本の在留民は、本土はもとより、北海道、台湾出身者も散見された。

当時のハルビンの人口は、約四十万人。アジア、ヨーロッパを結ぶ幹線鉄道の中核都市であったので、日本、欧州、中国人の往来も激しかった。朝鮮人もたくさんいて、東支鉄道沿線の水田耕作に従事していた。

領事としての英二の仕事は、ソ連及び中国との関係と日本人の在留民に関する仕事が主なもので、知事、警察署長、裁判長を兼ねるような地位にあった。

日ソの国交はすでに開始されていて、ソ連の初代日本大使は、コップ氏で、大正十四年（一九二五）四月に日本に着任している。

日本の初代ソ連大使は、田中都吉で、七月にモスクワに赴任した。彼はモスクワ赴任の途中ハルビンに立寄り、数日ハルビンに滞在、対ソ問題について天羽総領事と念入りな打ち合わせを行った。

六月四日、下岡政務総務監及び三矢警備局長一行がハルビン視察に来訪した。張作霖政権下の張作相、王永幹、黒竜江省鉄路交渉局局長馬忠駿、交渉員蔡道尹を歴訪、北満の行政及び満鉄東支鉄道間の問題等についての話し合いを行った。次いで六月八日には、鉄道省運輸局長種田虎雄、満鉄長春事務所長羽田広司等がハルビンを訪問、中国及びソ連の鉄道関係者と運賃問題について話し合っている

東支鉄道は、日清戦争後の明治二十九年（一八九六）に、ロシアが中国の清朝と結んだ露支同盟条約に基づき設立されたものである。同鉄道は、両国の共同経営鉄道として発足しているが、経営権は、ロシアにあった。

ロシア革命後ロシア側権利はソ連に引き継がれた。この東支鉄道と日本の満鉄との運賃が、大きく異なるため、その違いを巡って論争が絶えなかった。この運賃問題については、後に詳しく述べることにしたい。

ハルビン日本領事館は、八月になっても来客が絶えず、多忙な日が続いた。三日には、駐日イタリア大使トルレ伯爵が、モスクワより飛行機でハルビンに来着したので、英二は、飛行場に出迎え、翌朝五時に日本に向けて出発する同大使を飛行場まで見送った。

その翌日の五日には、英二は日本への一時帰国をすることになっていた。彼は、長春、奉天、京城、釜山と列車を乗り継ぎ八月八日夕刻下関に到着、十日の夜行で大阪から東京に向かったのだ。

英二は、二週間ほど東京に滞在、家族と共に過ごすかたわら、陸軍参謀本部員畑俊六、建川軍務局長、内務省川崎警保局長、長岡社会局長官、日露協会、外務大臣等と精力的に会談、満州におけるソ連、及び張作霖の軍事、経済、政治動向についての情報を交換している。

友人、近親者の見送りを受け、英二は八月二十五日午後七時発の夜行列車で東京を発ち神戸に向かった。東京を離れる列車の窓の外は、朝から降り続く雨に濡れた街燈の光が尾を曳くように現れては消え、彼の心に名残をとどめていた。

翌日朝八時五〇分、三宮駅に着いた英二は、神戸港からバイカル丸に乗船、門司に一泊、八月二十九日大連、奉天、長春を経て九月一日、ハルビンに帰任した。

ハルビンは、短い夏も終わり、秋風の吹く九月半ばとなった。人の動きも活発となり、領事館には、来客が多く館員一同、手分けして接客に当たった。

秋は、さわやかで、からっとした天気が続く。だが、冬の訪れが早い。

ハルビンは、九月末から十月初旬にかけて最も過ごしやすい。体を動かすには最適な季節である。そんなこともあってか九月二十日には、ハルビンで始めての第一回陸上運動大会が開催された。

英二は、もともとスポーツ好きでもあったので、その大会を見物し、出場者には声援を惜しまなかった。また、十月二日に行われた朝鮮人運動会にも参列し、スポーツの振興を大いに奨励している。

十月二十日には、早くも冬将軍が顔を出し、初雪が降った。宗谷岬よりやや北に位置するハルビンは日暮れが早い。午後四時には、薄暮となり冷たい風が吹きつける。

十一月になった。矢吹外務次官が奉天、長春、ハルビンの満鉄沿線の主要都市の情勢を把握するために日本から出張してきた。吉田奉天総領事、天羽ハルビン総領事と領事館員を交えての会議を奉天で開催、併せて矢吹外務次官から各地の在留民との意見交換会を開きたいとの申し出があったので、英二は、川越、栗原館員と共に奉天、長春に出張十一月十一日まで、矢吹次官と行動を共にした。

矢吹次官がハルビンを発ち帰国の途についたすぐ後で、

南満では大事件が起きた。張作霖の驍将郭松齢が謀反を起こし、鉾先を張作霖に向けたという事件である。

張は、直ちに全軍を挙げて郭と戦ったが、郭軍も手強く黒竜江省の呉俊陞軍を南下させ十二月下旬にやっと郭軍を破って内乱は収まったのである。

郭は、蒋介石派の外交部長王正廷と連絡、またソ連との人脈もあり、呉軍がチチハルからハルビンを通って南下する時も輸送上の問題を起こし、呉軍の南下は大分遅れ、そのため、謀反の鎮圧に予想以上の苦戦を強いられたと伝えられている。

乱が収まって呉軍が再び黒竜江省に帰る翌年の大正十五年一月半ば、長春、ハルビン間の輸送にまた問題が起こった。東支鉄道長官イワノフの命令で急に長春、ハルビン間を不通としたのである。このことは張作霖にとっても、日本にとっても重大な問題で、特に日本は、満鉄との連絡が遮断されてしまったのである。

英二は、その時領事団長として直ちにハルビン領事館内に各国領事を招集して、英、米、仏、伊、その他代表者と協議した。その結果、張煥相護路軍長総司令官がイワノフ東支鉄道長官を招請して事情を聴くことにした。だが、いざ招請の日になると張は出席し説明したが、イワノフは出席しなかった。

するとその二日後に張司令官は官憲を発動して、イワノフを逮捕したのである。これは北満きっての大事件となった。元来東支鉄道長官は、北満におけるソ連最高の地位にあるもので、帝政ロシア時代ほどではなかったが、その勢いは隆々たるものであり、その最高実力者を中国側が逮捕したことは、ソ連の威信を傷つけるものであった。結局イワノフは、三日ばかり留置されただけで釈放されることになった。だが、東支鉄道は再開せざるを得ない状況に追い込まれたのである。

この事件によって、自信を得た中国の排外運動は、ますます盛んになり、満州だけではなく中国全土に広がるのであった。

(三) 満州を巡る日ソの利権争い

大正十五年(一九二六)、ハルビンの正月は穏やかであった。三ガ日は、気候はやや暖かく快晴の日が続いた。英二は、領事館内での祝賀を終えた後、在留民による祝賀会、満鉄の祝賀会を巡り、次いで護路軍長総司令張煥相の祝賀会に出席した。一息ついて領事館に戻ってみると多くの在留民が日、中、ソ関係の今後見通しについて、天羽総領事の見解を質しに領事館に集まっていた。

張作霖は、郭松齢の反乱を抑えたものの、満州での支配力に衰えが見えた。半面、蒋介石が次第に力をつけ、その影響力が満州へも徐々に浸透しつつある。一方、ソ連は国内の革命を成就し、隣国中国の共産化を図るために東支鉄道を中心に、満州に触手を伸ばしてきた。日本

は、日露戦争によって勝ち取った中国における権益を侵されまいと躍起になっていて、あわよくばさらにその権益を拡大しようとつとめていたのである。

しかし、第一次大戦後、世界の各地で、帝国主義、植民地主義に反対し、民族自立を目指す運動が起こりつつあった。

満州の日本人居留民にとっては、こうした日ソの動向と中国軍閥や民族自立運動がどのように絡み合い、今後の満州がどうなるのか、その行方は、彼等の死活問題であるだけに、特に関心の深いところであったのだ。

ハルビン総領事としての英二は、立場上、南満よりも北満に関わり合いが深く、北方のソ連、蒙古、及び中国国内の張作霖一派の動きに特に関心を寄せていた。彼は、大正十五年一月三十一日付けで、北満におけるソ連の動きを東支鉄道に絡めて後藤新平子爵宛に、次のような内容の手紙を書き送っている。

北満におけるソ連の地位は、南満における日本の地位と同様である。ソ連は、東支鉄道をもって単なる商業機関たるに満足せず、これを中心として北満における政治的、経済的勢力の挽回と扶植とに腐心し、すでに東支鉄道を赤化し有力な共産党の宣伝機関となし、労農協力推進の中枢機関としている。したがって、日ソ両国当局間に十分な了解を必要とするのは、ソ連が果たしてソ中間で結んだソ東協定を忠実に遵守し、東支鉄道をもって純然たる商業機関とするかどうかの点にかかっている。最後に、北満で現実に起こる日ソ利害の衝突は、鉄道問題である。鉄道問題は、一つは新設鉄道、もう一つは東支鉄道と満鉄との運賃競争問題である。

特にイワノフ氏が東支管理局長官になって以来、次々と運賃改正をしてますます露骨な挑戦的な政策を行い始めた。ことに東支沿線に住む本邦商人に対しては、大連行き貨物の場合は、貨車の配車をしないという極端な政策をとるようになった。東支と満鉄の運賃競争が、緩和しなければ両社の競争も緩和しないし、両社の競争が緩和しなければ北満における日ソ関係が平静になることはない。したがって、この際東支及び満鉄両鉄道の間に公平な運賃の協定が必要である。

ソ連は、国内世論が強硬になるに従い、対外的に強硬策を取り発展しようとする。北満においてもソ連の真意は、勢力の挽回を図ろうとするものであり、その主役を、東支鉄道が担っている。

しかし、ソ連がいかに焦ろうとも時代の変遷は、容易にその勢力の挽回を許さない。中国全土にみなぎる利権回収熱の勃興、北満における日本勢力の進展、及び平和を標榜しこれを武器として中国において反帝国主義を扇動するソ連自身の声明書、など勢力の拡張を阻む要因が枚挙にいとまないほど存在している。

ソ連は、あせればあせるほど北満において中国と衝突し、日本の政策に邪推をするに至る。したがって、日ソ両国当局間でこれら根本諸問題に隔意なき話し合いを行い、お互いに了解に至ることが必要である。

長春・ハルビン間の不通問題が解決し、正常な運行となった路線状態を確かめ、奉天の吉田総領事、張作霖などと会合するため、英二は、二月三日ハルビンを発ち奉天に向かった。奉天では、吉田総領事が英二を出迎え、ちょうど視察に来ていた松岡洋石満鉄副総裁、梅津美治郎大佐、阿南惟幾中佐などと合流し、満州問題に関する協議を行った。

さらに英二は、二月六日午後、張作霖、北京政府奉天派の楊宇霆と会見した。また翌々日の八日には、松岡洋石、吉田茂、陸軍第五師団司令部付菊地武夫、梅津美治郎、阿南惟幾等と共に北満のハイラルに向かい鉄橋を見学、さらにチチハルまで視察して二月十日ハルビンに戻った。

吉田、松岡、菊地など一行は、ハルビンで英二と昼食を共にし、北満視察の感想を語り合った。また、二月十一日には、張煥相から招待を受け、翌日には張煥相に対する答礼をして、それぞれ帰任した。

厳寒の二月が過ぎ、北のハルビンにも春の兆しが見えた三月十五日、英二は雪解けでぬかるむ道をハルビン行政府に向けて馬車を走らせた。張煥相の長官昇任を祝うためである。張は、張作霖の一方面軍総司令からハルビン地方を統治する行政長官に昇格したのである。

遅い春が訪れ、草花が一斉に花開く頃が過ぎ、ハルビンの街は、早くも夏の気配を感じさせる五月となった。この季節には、例年日本人居留民による運動会が行われる。

今年の運動会は、二十三日（日）松花江岸と決定された。家族ずれの参加者が多い。居留民は、これまで寒気に閉じ込められ、鬱屈した感情を一挙に爆発させるように、青空のもとに思いっきり体を動かし、解放感に浸っていた。

さらにそれに飲食が拍車をかけた。特に酒は、えてして自制心を失わせる。したたかに飲んで酔っ払った一人の日本人男性が、何が気に入らなかったのか、突如狂ったように怒りだし、中国人の婦人をしたたかに打ち据えたのだ。婦人はただ身をかがめながら、暴力をやめるよう懇願し、周りの人に助けを求めた。何故謝らなければならないか分からないまま、ひたすら謝っている。

周りを取り囲んだ中国人たちは、怒り狂った男を取り押さえ殴りつけたい思いに駆られながら、後難を恐れて、手出しできない屈辱を味わっていた。

通報を受けたハルビンの警察官は重い腰を上げ、男を取り押さえ連行したが、酒の上の出来事として処理され、軽い刑罰を受けただけで、国際問題とはならなかった。

英二は、国際問題にならず、邦人も大した咎を受けずに済んだことは一安心であったが、人種差別的言動をとる日本人が在留邦人の中にいることを恥ずかしく思った。

（四）競合する満鉄と東支鉄道

六月になって急に夏らしい暑い日が続いた。晴天が続き水不足に悩まされていたが、ようやく二十日になって慈雨が降り、二十二日には、再びかなりの降雨があって、農家は天の恵みを感謝した。

六月二十七日、大蔵満鉄理事がハルビンに来て、英二と満鉄及び東支鉄道問題を中心に会談を行い、今後のソ連、中国との交渉の準備をした。

東支鉄道はソ連シベリアのチタから中ソ国境を超え中国東北部満州に入り、満州里、海拉爾（ハイラル）、ハルビンを経由してウラジオストックに抜ける鉄道である。中ソ両国の合弁鉄道であるが鉄道の管理はソ連が行っていた。

一方、満鉄は、旅順から大連、奉天、長春、ハルビンをつなぐ線で、日露戦争の勝利により帝政ロシアから中国における利権を譲渡させたものである。利権譲渡後、同鉄道は日本の資本による日本が管理運営する鉄道となった。

両鉄道は、ハルビンが中継基地となっていて、ハルビンから奉天、大連に西南方面に向かう場合は満鉄。ハルビンから牡丹江を経てウラジオストックまで東南方面に向かう場合は東支鉄道を利用することになっていた。

だが、そこにかねてから大きな問題が横たわっていた。それは運賃問題である。東支鉄道は満鉄よりも常に運賃が安く、値引き競争を意図的に満鉄に仕掛けてきていた。

同じ中国内の鉄道でありながら、東支鉄道は、旅客、貨物運賃とも満鉄とは異なった運賃体系を取っていたのである。

満鉄側は、過度な競争を避けるための運賃協定の話し合いの必要性を呼び掛けていた。ただ、それには日ソ両国の話し合いだけでなく、中国を交えた日ソ中の三者会談による合意が必要であると英二は主張していた。

「中国を外した日ソ両国の協調は良好な結果を生むことはないであろう。排外主義の盛んになりつつある中国の領土の中を通る鉄道の運賃を両国が協定を結んで勝手に決めてしまうとなると後になって、中国から鉄道管理運営権を取り返したいという意見も出かねないので、初めから話し合いの段階で中國を入れた会談が望ましい」

かねてから大蔵満鉄理事は、英二と同じ考えを持っていたので、東支鉄道との会談にあたっては、常にソ連側に中国の代表者も交えた話し合いを行うよう働きかけていた。

七月になって、暑さが増し、ハルビンにも盛夏の季節

がやってきた。

四日から五日にかけて日本から衆議院議員団一行十六名がハルビンを訪れ、行政府長官張煥相から満州の現状についてレクチュアーを受けた。昼は、松花江を航行するハルビン号船内で同氏から昼食の招待を受けている。衆議院議員団一行もその答礼として張煥相を始めとする中国側行政府の関係者一同を晩餐会に招待した。

また、ソ連のコップ日本大使が二等書記官クラコベツキーと共に七月十一日ハルビンに立寄り、一週間ほどハルビンで過ごした。その間に前奉天総領事の赤塚正助公使が、ハルビンを訪れコップ大使と会談している。さらに七月には、ベルリンオリンピックの銀メダリスト人見絹江選手がハルビンを訪れた。同選手は、ハルビン滞在期間中、茶話会に出席したり、日本人の運動会を見学したりして在留邦人たちとの親睦を深めた。

大正十五年（一九二六）七月は、中国近代史の中でも特筆すべき出来事が起った。蒋介石が、国民革命軍総司令官として北伐を開始したのだ。少し後になるが、これに対抗するため、張作霖は、同年十二月、本拠を奉天から北京に移している。

ハルビンは、極東にありながら、帝政ロシア時代ロシア人によって造られた都市であるため、ヨーロッパの匂いの色濃く残る街であった。そうした街の雰囲気に包みこまれ、外国領事団の間では、西洋流の社交が盛んであった。ロシア人は、白系ロシア人の亡命者とソ連系のロシア人がお互いに反目し合っていて、交際する外国人も異なっていた。ただ、西洋流の社交に関しては、白系ロシア人の方が一日の長があった。だが、白系ロシア人の収入は限られていたので、中には、宝石などの貴金属類を売り食いしてまで、社交に没頭する者までいたほどであった。東支鉄道クラブでは、宴会、ダンスパーティを頻繁に行っていた。

テニス、スケート、ゴルフも盛んである。当初、ハルビンのゴルフクラブは、日本人は入会できなかったが、天羽総領事がこのクラブの会長に選ばれてから日本人をどんどん入れるようになった。

中国側が、鉄道用地の回収を行うため、ゴルフクラブが撤収されるのではないかとの噂が立った。それを阻止する苦肉の策として、ハルビンの社交界は、日本代表で領事団長の英二を担ぎ出すことを考えたのではないかと推測される。

九月になった。天候が不順となり、朝晩はめっきり涼しく、時には寒くさえ感ずる日もみられるようになった。

毎年、九月二十一日になると、ハルビンの日本の居留民だった沖、横川両氏の招魂祭が行われる。この二人は日露戦争の時、蒙古人に化け、満州の奥深く潜入して、敵情を視察していたが、ある朝、顔の洗い方が異なるところを見られ、日本人であることが発覚、ロシア軍に捕らえられ銃殺された。その忠君愛国精神を讃えて、ハルビンの日本居留民の有志が主催して始めたものである。

貴族院議員徳川圀順候一行が、十月三日（日）、ハルビン視察に訪れた。それに満州委員の飯田愛之助、満鉄職員の鈴木二郎、朝鮮本部主幹の大橋次郎などが随行していた。風の強い日であった。その日は張煥相の招宴で晩餐会が行われ、英二も出席した。翌日、十月四日、徳川候一行は、後に満州国創設に加わった奉天派の政治家干沖漢を表敬訪問している。

十一月九日、冷え込みが厳しく朝から曇空であった。夜には、霙が雪に変わり、長い冬の到来を英二に予感させた。和子夫人は風邪で発熱し昨日から床に臥せっている。相変わらず来客は多いが、九月、十月のにぎわいはない。

いよいよ師走、大正十五年の暮れも近い。十二月七日は、寒気激しく零下三十度に下がった。十四日、大正天皇御病気のため、ハルビン領事館でも平癒祈願が行われた。十六日には、小学校でも天皇陛下平癒祈願式が行われ、英二も総領事として列席した。

十二月二十五日、朝二時頃、大正天皇午前一時二十五分御崩御の入電があった。古沢居留民会長、庄司商業会議所会頭他居留民が多数来館、張煥相、干沖漢も領事館に弔問に来た。

午後二時正式に本省より大正天皇御崩御の公電を受け、直ちに中国側、外国領事その他に通知した。翌日二十六日午後一時の御尊影遥拝式には、約二百名の来館者があった。

遥拝式の五日後の大晦日に、張煥相は突如として翌年一月一日から中国の銀行券である大洋票を擁護するため、日本通貨の金票での取引を禁止すると発表した。

これによってハルビンの経済界は大混乱し、恐慌をきたしかねない状況となったのである。

そこで英二は、張煥相と数回にわたる交渉をした。その結果、中国側は、ようやく話し合いに応じ、混乱は収まったが、これも排日運動の一環としてとられた措置で、独立国としての尊厳を内外に誇示しようとする表れであったのだ。

こうして大正十五年（一九二六）の十二月二十六日をもって、昭和と年号が改まり、翌年はすぐ昭和二年として、日本は新時代を迎えた。この昭和の時代に日本は、高揚した国家意識が求めた富国強兵の道を歩み、戦争という大きな代償を払ってその栄光と挫折を味わいながら、民主主義国家へと変容を遂げることになった。

天羽英二は、その歴史の渦の中に飛び込んで、自らその歴史の一端を担う役割を果たすことになるのである。

（つづく）

信託の歴史世界旅　その一

永田俊一

前回、『信託　英―米―日　歴史の旅　その三（日その2）』で、「今回は、この日本の旅の足を現代まで駆け足でのばしたいと思う。その上でのことはやや気が早いが、これまでのローマ―英―米―日の旅の流れを比較軸として、別源流や枝分かれした流れの旅を風景として描き、信託の世界風景を歴史的に描けないか試してみたいと思っている。まあ風呂敷を拡げるのは次回以降にして、今回の本題に取り掛かろう。」と述べた。

これまで信託の歴史に就いて、先ず「信託の起源1　信託遺贈―ザルマン―ユース、同2　ユース―トラスト―信託」でローマ、ゲルマン、イングランド、アメリカ、日本と歴史の流れの中で信託がどのように発展してきたかを説明した。次に、信託の萌芽である空海の作った院を題材にした「綜芸種智院異聞」、ローマの信託遺贈をキケロに語らせた「或る日のキケロ」、ヘンリー八世とトマス・モアの関係を通してユースを眺めた「ユース禁止のユース法」といった歴史上の人物との絡みで、いわば信託の歴史夜話を叙述した。更に「信託　英―米―日歴史の旅　その一～三」で、信託の制度が確立した英から米、米から日を本流の流れとして、人やエピソードにも光をあてながら叙述してみた。

ところで、現代からみてみると、世界の各地域、各国に於いて信託は語られている。夫々の形で普及しており、「世界の信託　あれこれ」とも言える。同時にグローバル化の中で同質性が強まり夫々の流れの融合・合流して来ていることにも気付かされる。

そこで今回はその「世界の信託　あれこれ」に到った流れを別流・傍流・支流という形で世界に拡げた歴史の流れとして。次のように描いてみようと思う。

旅の内容としては、紀元前一八～一九世紀に垣間見られる信託の原始的萌芽であるエジプトのウーアの遺言やメリーの譲渡証書、メソポタミアのハムラビ法典に見られるサマラム（代理人）等は別とする。法制度の中に信託について明確で十分な資料も残るローマの世界から出発する。東西帝国に分かれ西ローマ帝国の滅亡後、東ローマのユスティヌアヌス帝による法典化をローマ法の頂点として、比較軸にしている本流（英―米―日）への出発点を置く。その後の東ローマ帝国（ビザンツ帝国）から所謂東欧世界への流れを見つつ、その頃から形成される中東イスラム世界に発達したワクフの制度を別流として旅してみる。

翻って西ローマ帝国滅亡後の西ヨーロッパにおいてはゲルマンの世界が形成され、信託類似のザルマンの制度が発展する。そして、フランク王国分裂後大陸諸国の分立形成が進むが、ノルマン・コンクェスト後のイングランドはこれら所謂大陸法諸国とは違った所謂英米法の法域（コモン・ロー）を形成する。信託の流れとしては原始ザルマンが主流だった頃の大陸ゲルマン世界と独自のユースから信託へと制度発展させたイングランドに出発点を置き、その後の流れを次のように分けて描く。先ず大西洋、太平洋を英―米―日と東に渡った既述の流れを前記のように本流と位置付け比較軸とし、概説とする。

西ヨーロッパでフランク王国が分裂後、蘇って来たローマ法の影響を受けて形成された大陸法の世界における信託要素の変容を傍流として描く。

イングランドから大英帝国を形成した植民地や後にタックスヘイブン国となるカリブ諸国等への流れを支流として辿る。

植民地興亡で生じた大陸法・コモン・ローの混合法体系国家、あるいは大陸法で出発したラテンアメリカのように主として米国の影響で信託法制が生まれた地域、更には日本の影響が窺われる東アジア等については夫々傍流・支流として描いて行くこととする。

そして旅の構成としては、先ずは通底するローマ法の信託要素の変遷をざっと概観し、次に一旦視点を手元に戻し今の「世界の信託　あれこれ」を点描、その上で夫々の流れを周りの眺めにも目をやりながら叙述していきたい。目次的には次のようになろう。

目次

一、ローマ法の信託要素からみた信託の歴史世界旅

（一）ローマで

（二）西ローマ帝国滅亡（AC395）に伴うヨーロッパ世界

（三）イスラム世界で生まれ発達したワクフ

（四）西ヨーロッパにローマ法が蘇る
（五）ラテンアメリカ
二、現代世界の信託あれこれ
三、夫々の流れ毎に描く、信託の歴史世界旅
（一）ローマ
（二）東ローマ（ビザンツ）帝国・東欧世界
（三）イスラムのワクフ
（四）西ヨーロッパに蘇るローマ法、大陸法の世界（独・仏）
（五）西ヨーロッパ、大陸法の世界その後
（六）英連邦形成と信託の伝播
（七）東アジアへ
（八）南米ラテンアメリカへ
（九）東欧の世界、その後
（一〇）河口で出会う流れ
一、ローマ法の信託要素からみた信託の歴史世界旅
（一）ローマで

○先ず古代からのものとしてfiducia（フィドゥーシア）がある。

当事者の一方が相手方に握取行為又は法廷譲渡の手続によって物又は人を供与すると共に、相手方が同一の物または人を返還し又は是を特定の第三者に供与し又はその他の処分を為すべきことを約する合意であった。斯かる信託は、先ず父権の免除や奴隷の開放など家族法上利用された。

しかし重要なのは財産法上のものであって、友人との信託（fiducia cum amico）と債権者との信託（fiducia cum creditore）の二つに分かれる。前者は例えば或家長が不在になる場合に、その財産の全部又はその特定の一部を友人知己に譲渡すると共に、帰還する時はこれを返還すべきことを約するもので、後世でいえば寄託に相当する。債権者との信託は、債務の履行を担保するために、債務が履行せられたときはこれを返還すべきことを約し、債務者がその所有物を債権者に譲渡するものであって、後世でいえば質に相当する。いずれにせよ原則、生存者間の契約である。

○次にfideicommissum（信託遺贈）がある。

ローマの拡大・発展とともに、ローマ市民に適用される相続上の遺贈が受けられぬ市民外とされる人々が増大する。信託遺贈は、これら相続能力のない者が、遺贈と同様の目的を達するために用いられた遺贈の代替手段として、（市民）法の外で機能していた。それは、「財産が

受益者に移転されるよう、遺言者が仲介者（多くは相続人）の信義（fides）に委託（committere）」する方法であり、たとえば、ウォコニウス法に反して女子に財産を信託遺贈で遺すとか、認められた人数以上の奴隷を信託遺贈で解放するとか、外国人などローマ市民以外の者に財産を信託遺贈で遺すとかいった具合である。ただし、信託遺贈には法的な拘束力はなく、信託遺贈の受託者は、習俗上の義務を負うのみで、履行はもっぱら受託者の信義（fides）に委ねられていた。したがって、受託者に引渡しを依頼した財産をそのまま着服されたとしても、法廷で争う術はなかった。キケロはそうした例を挙げている。

○ユスティニアヌス帝法学提要が伝えるところによると、信託遺贈は、ローマ初代皇帝アウグストゥス帝（在位BC27-AC14）によってはじめて、法的拘束力が認められたという。またアウグストゥスは執政官をして、信託のあった場合に個別的にその信託の実行を承認すべきか否かを審査せしめることとし、次いでクラディウス帝の時には審査の為に特別の法務官（praetores fideicommissarius）が設置され、信託遺贈は次第に法律上の制度となった。西ローマ帝国滅亡（AC395）後の東ローマ帝国のユステュニアヌス帝（在位AC537-565）は、先ず遺贈が如何なる方式を以っても行われ得ることを確認（形式の壁をなくす）、次第に混同されるようになった遺贈と信託遺贈とを統一して、これに関して共通の規定化を図った。即ち、ローマ市民の外が増えると相続面で信託遺贈（fideicommissum）が市民法の枠外でワーク、次第に遺贈・信託遺贈の幅寄せ（外人の市民同等化）、相続人と受遺者の幅寄せ（債務を除く部分承継→包括承継化）が進み、ユスティヌアヌスで両者が融合したと言える。

（二）西ローマ帝国滅亡（AC395）に伴うヨーロッパ世界

○東ヨーロッパでは、ユステュニアヌス帝が前述のように法典集大成を行った東ローマ帝国（ビザンツ帝国）が、東欧世界に影響力を及ぼし、やがてイスラム世界と覇を競うことになる。

西ヨーロッパでユスティニアヌスの権威はイタリア半島やイベリア半島の一部までしか及ばなかったが、東ゴート王国を滅ぼし僅かな間イタリアを制圧したことで、ローマ・カトリック教会がユスティニアヌス法典の保存者となる。

その他の地域ではローマ法が見失われる。ゲルマン諸王が独自に法典を公布し、かなり長い間ゲルマン諸部族には彼ら独自の法が適用された。なお、ローマ市民の末裔には卑俗法（ゲルマン化したローマ法）が適用されて

いた。それらの中に東ローマの法典の影響を見て取れるが、中世初期には影響力はわずかであった。よってローマ法は、教会法（カノン法）に影響を与えることにより細々と生き続けていたといえる。

○サリカ法典によれば、フランク人には、既に土地の一時的信託とも言うべきザルマンの制度があった。当時被相続人に相続人がいないとその相続財産は国王に帰属、それを避けるため委託者が後日その指定する者に財産権を移転することを条件に、受託者たる第三者ザルマンにその財産権を移転した場合は、ザルマンは委託者の死亡後十二ヶ月以内にそれを移転する義務を負った。

これが次第に広く利用されてゆくことになる。例えば、宗教・慈善その他公益の為、疫病その他の事由が発生した場合の為、妻の嫁資保護のため、借地能力を持たぬ者の借地契約代替の為等である。

○比較的ローマ法の影響が残ったイタリアも、六世紀半ば過ぎ北から侵入したランゴバルトに支配されたので同様ゲルマン化したが、フランクの侵攻（774）前の八世紀において、相続人（受益者）がザルマンに証書引渡しの形で公示を求め、土地の引渡しを確実にする終意信託の制度が発展していた。

終意信託は、財産目的物を教会および聖職者、貧者、公益的な組織・宿泊所・病院に捧げることで魂に関してその責任を果たすという需要を満たすために発展した。曰く「信用できる者、多くの場合においては聖職者に、財産の一部分または構成部分、多くは全財産が割り当てられ、それは、聖職者がそれを寄付者の魂の救済のために、敬虔な目的で、最上の知識と良心を持って活用するためになされた」とされる。

しかしながら、地理的な関係もあり（東ローマや教皇領との隣接）ランゴバルトの法の推移をみると、後にはローマ法の遺言の影響を受けて、他地域に比べ早期にザルマン（受託者）が遺言執行人の性格をもつものに変化して行ったと考えられている。すなわち遺言者の死亡後その趣旨に従い夫々財産の処分をする受託者は、遺言者またはその相続人の所有に属す財産の上に或物権を有するか又は当該財産に一定の解除条件が附加された所有権を有したが、次第にその物権的権限を弱め、執行・処分の性格を強め、遺言執行者となっていった。

（三）イスラム世界で生まれ発達したワクフ

この間、マホメットがアラビア半島でイスラム教を起こし、イスラム教国が急速に勢力を拡大、信託類似のワクフの制度が発展する（これは別流故、ここでは指摘するに留め内容は後述する）。

（四）西ヨーロッパに蘇るローマ法、大陸法の世界

○西ヨーロッパでもユスティニアヌス法典のうち勅法彙纂と法学提要は知られていたが、勅法彙纂は雑多な法の集合にすぎず、法学提要は初心者向けの内容にすぎなかった。それでも当時のゲルマンの法律家にとってはその内容は難解で十分に理解できるものではなかったといわれる。学説彙纂は何世紀もの間おおむね無視されていたが、その理由はあまりに大部で理論的に難解であったこともある。十字軍をきっかけにヘレニズム文化がイスラムを通じて伝播されることによりようやくその真の価値が再発見される下準備も整った。

○一〇七〇年頃、イタリアで学説彙纂の写本（いわゆるフィレンツェ写本）が再発見された。この時から、古代ローマの法律文献を研究する学者が現れ、研究の中心となったのはボローニャで、ボローニャの法学校は次第にヨーロッパ最初の大学の一つへと発展する。中世ローマ法学の祖であるイルネリウスが註釈学派を起し、ボローニャ大学でローマ法を教えられた学生達は、皆ラテン語を共通言語に、後にパリ大学、オクスフォード大学、ケンブリッジ大学等でローマ法を広め、西欧諸国に共通する法実務の基礎を築いた。

○一四世紀から一五世紀にかけて、バルトールス・デ・サクソフェラート（1314-57）を代表とする註解学派と呼ばれる一派がおこり、ローマ法の多くの規範が、ヨーロッパで適用されていた慣習的な規範よりも、複雑な経済取引を規律するのに適していることに着目し、推論によって抽象的な原理を導き、当時の経済状況に合わせた自由な解釈を行なった。こうして、ローマ帝国の滅亡から何世紀も経て、ローマ法や、そこから借用した条項が、再び法実務に導入され始める。多くの君主や諸侯がこの過程を支援し、大学の法学部で訓練を受けた法律家を顧問や裁判担当官として雇い入れ、例えば、有名な「元首は法に拘束されない」といった法格言を通じて自らの利益を追求したりする。

○中世においてローマ法が選好された理由がいくつか考えられる。それは、ローマ法の財産権の保護や、法主体及びその意思の対等性（強者の意思が弱者に優越するというものではないというイメージ）を規定していたことや、遺言によって法主体が財産を随意に処分し得る可能性を規定していたことが挙げられる。このように発展してきたローマ法が教会法やゲルマンの慣習、特にレーン法と呼ばれる封建法の要素と混交された結果、ある法制度が出現する。

その法制度は、大陸ヨーロッパ全域（及びスコットランド）に共通のものであり、ユス・コムーネと呼ばれた。

このユス・コムーネやこれに基礎をおく法制度は、通常、大陸法（英語圏の国では civil law）として言及される。

○一六世紀中葉までに、再発見されたローマ法はほとんどの西欧諸国における法実務を支配する形で継受され、教会法とローマ法の博士をとったものは「両法博士」と呼ばれ大きな影響力を持った。一七世紀になると、ドイツでは、ローマ法が自国内の各領邦に共通に適用される普通法として強い影響を与えると共に、各領邦の社会情勢に応じて自由にローマ法を解釈するようになる。

フランスでは、一六世紀になると、ルネッサンス・人文主義を思想的背景に、文献学的・歴史学的にローマ法大全の古典古代の法文を厳密に探求することを掲げる人文主義法学と呼ばれる一派がおき、バルトールス学派を批判する。また、神聖ローマ帝国に対抗するという政治的な理由から早くからローマ法の影響を脱し、独自のフランス法が発展をみていた。

○イングランドだけは、ローマ法を部分的に継受する。その理由の一つは、ローマ法が再発見された当時、イングランドでは既にコモン・ローが成立し、発展を始めていたという事実である。ローマ法が神聖ローマ帝国やカトリック教会、絶対主義を連想させるというのも一つの理由にあげることができる。

英国法の歴史から明らかなように、スコットランドがイングランドに対抗し大陸法を継受したという事実もイングランドにとってローマ法をますます受け入れ難いものとした。

この結果、イングランドの制度であるコモン・ローは、ローマ法を基礎とする大陸法と並立して発展した。とはいえ、「先例拘束の原則」のようにローマ法由来の概念もコモン・ローに入って来ている。特に一九世紀初頭、ウィリアム・ブラックストンのように、イングランドの法律家や裁判官は意識的にヨーロッパ大陸の法律家や直接ローマ法から規則や発想を借用しようと努めた。また、イングランドの「海事裁判所」はコモン・ローを使わず、ユス・コムーネを使用していた。

○ローマ法の継受により、大陸法制度はイギリスで発展するコモン・ロー制度に比べより古い伝統を有することになった。そして大陸法制度の家族法及び相続法は概して継受したローマ私法および地方慣習法を混合したものであった。明らかに地方的諸要素の影響に加え、ルネッサンス後の国家主義およびそれぞれの大陸法諸国における法典化により法制度は地域固有のものになって行く。それにもかかわらず、ローマ法の普遍性というその本質の大部分がまだ残されていることは、これらの法典から明らかとされる。

信託との関連で言うと、大陸法はローマ法上の概念であるフィドゥーシア（fiducia）及び信託遺贈（fideicommissum）双方の影響を受けているということである。

ドイツでは前者に当たるフィドゥーキア（fiduzia）と後者に当たるザルマンがフィドゥーキア的信託行為として融合発展し、後年トロイハントと呼ばれる信託類似制度として認識されるようになる。

フランスでは信託遺贈要素について、当初遺言慣習のあるなし及びローマ法の影響のあるなしで、南の成文法地方と北の慣習法地方で歩みが違ったが、やがて遺贈と信託遺贈が並列的なものとなる中で同質化していった。

しかし仏革命に際し、信託遺贈は封建的相続に使われてきたとして民法典からその名を消すことになる。

なお、一八〇四年、フランス民法典が施行されると、一九世紀のうちに、多くのヨーロッパ諸国では、フランス法を模範として採用するか、自国固有の法典を起草するかのどちらかになって国家が法典化に乗り出したので、ローマ法を実際に適用する動きなど西欧流のユス・コムーネの時代は終わりを迎えた。

（五）ラテンアメリカ

ローマ法の信託要素の継受という点では、一九世紀独立したラテンアメリカ諸国が、丁度その時期法整備に当たって影響のあったのがナポレオン法典であったので信託要素は例外的にしか引き継げなかった、というエピソードがある。

○植民地時代（一五～一九世紀）には大陸法系の旧宗主国の影響を受け（地域の広さでいえば圧倒的にスペインついでポルトガル）、各国独立後はフランス民法典の影響を幅広く受けた。英法承継の米国が強勢となりその影響を大きく受けるのは二〇世紀に入ってからになる。

法域的には、植民地時代（一五～一九世紀）には旧宗主国であるスペイン、ポルトガルの影響を受け、独立後（一九世紀）はフランス民法の影響を受け、二〇世紀初には米国のコモン・ローの影響を大きく受けるようになる。信託に関してはアメリカの影響を強く受けたものが現代の fideicomiso となっている。

○既述のようにフランス民法典には、ローマ法から受け継いだ fiduciae がなく、すなわち fiduciary の言葉がなかった。古代フランス法では、ローマ法の fiducia が長子相続を確保する為という違った目的で、fiduciary substitution として使われていたとして、仏革命中法律

そこで、ローマ法の要素に着目しつつ信託の世界風景を、様々な流れに乗りながら歴史旅を具体的に描写するに当たって、到達点の現代の「世界の信託　あれこれ」を見ておくことにしよう。

私は一昨年夏から、東京丸の内の日本工業倶楽部会館内にある三菱UFJ信託銀行信託博物館の館長を勤めている。この、世界でもユニークな信託博物館及び付属資料室のめざす処は「広く社会の皆様に信頼の三角形である信託の魅力に触れて頂き、信託をより身近なものと感じていただこう」というもの。

本誌でも触れて来たローマの信託遺贈から現代にいたるまで歴史的な流れの説明や資料が常設で展示紹介されている。また年に二度企画展を行い、より深い関心に応えている。昨年は「世界の信託　あれこれ」展を行った。

世界二〇か国の信託の利用状況やユニークな事例を紹介したが、タッチパネルで夫々に説明すると共に、世界地図のジオラマ上に各国のユニークな信託を中心に紹介した展示台を設置したりもした。タッチパネルの「信託で世界旅行を」という初期画面では、掲載国を次のようにグループ化したところである。

①英米法（コモン・ロー）系の国で信託が社会に浸透している国々として、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、米、英。信託は英米からだが、同時に独自性をも持つ国として、南アと日本を別途挙げている。

②大陸法系で信託に類似制度のある国として、フランス、ドイツ。なお、全く独自に発展したワクフの制度を持つトルコも便宜ここに入れている。

③英ー米ー日の本流との絡みで信託導入のアジアの国で、インド、韓国、中国、香港、シンガポール、台湾。

④オショア信託のように海外から利用が多い国々としてルクセンブルグ、リヒテンシュタイン、アイルランド、ケイマン。

例えば各グループについて、どんな記述があるか一～二ご紹介しよう。

先ず①英米法グループでは、英・米は別にしてカナダを見るとこんなである。

「加もコモン・ローの国で、家族のための民事信託、商事信託ともに広く利用されています。また、自然保護、歴史的建造物等保護のためのナショナル・トラストも盛んに利用されています。商事では年金信託や合同運用信託であるユニット・トラストが広く利用されているが、信託を使ったミューチュアル・ファンド等も利用されています。家族の為の信託では‘Henson Trust と呼ばれる障碍者の為の信託があり、受託者に比較的広い裁量権を与えて、税制その他の環境の変化に臨機応変に対応できるような仕組みが広く利用されています。」

次に②信託類似制度のあるグループのドイツを見ると、こうある。

「独の信託会社の歴史は、意外に古く、一八九〇年の米国債投資のための信託会社設立がはじめと言われています。しかし定着せず代りに古くから存在していた信託類似のトロイハントが利用されました。ドイツのトロイハントは、英米のトラストより広い概念で、投資会社法のような法律を制定、特定の分野で利用されています。一九五七年制定の投資会社法は、受託者（トロイハンデル）が特別財産として分別管理する仕組みが商事の分野で認められています。現在では、不動産の投資信託中心に利用されています。また都市再開発では、例えばハーメルンの旧市街地再開発事業など特別法を制定して受託者の機能を活用する例があります。さらに東西ドイツ統一の際の旧ドイツ企業民営化では、トロイハント・アンシュタルト（信託公社）が中心的役割を果たしました。」

さて、このグループには、トルコのワクフの記載がある。「ワクフとは、イスラム法で定められた財産寄進制度のことです。アラビア語で『停止』を意味し、私財そのものの所有権の移転を永久に停止し、ワクフ管財人に委ね

二、現代世界の信託あれこれ

委員会で禁止された（1792）。そしてナポレオン法典では包括的信託遺贈を採用しなかったためフランス民法典を模した多くのラテン諸国で信託が採用にならなかったということである。

○ただ、仏民法典（1804）の後、丁度それを受けてチリ（1855）とコロンビア（1887）で起草したアンドレ・ベローがアングロサクソンの制度にも通じていたため、信託fideicomiso（fiduciary）と、完全な所有者ではないとしつつも受託者（fiduciary ownership）を定義し、ラテンアメリカの信託である fideicomiso を民法上に先ず実現した。因みにチリではその後独立した信託法は制定していないが、民法上に今の姿に完成させている。

○そしてラテンアメリカに信託法で fideicomiso を広く伝播させる旅の出発は、米国からパナマ・メキシコルート（1925～）でということになる（後述）。

○なお、英ー米ー日の主流と並走する、英ー英連邦諸国（スコットランド、旧植民地、タックスヘイブン諸島）、米ーラテンアメリカ、日ー中国・台湾・朝鮮など支流の流れは、三、で後述する。

ることで、信託に類似した仕組みと言えます。そこから得られる用益・収益は、特定の慈善目的のために利用されます。これが、様々な形で応用され、キャラバンサライ（隊商宿）やハマム（浴場）などがワクフとなっています。首都イスタンブールにあるファティマ・ジャミィ寺院は、スレイマン二世が残したワクフの代表例です。」

更に、③アジアで成長している中国を見ると、こう述べられている。

「中国では、二〇世紀前半頃から信託の利用例が見られましたが、本格的利用は、二〇〇一年の信託法制定以降です。その後、投資信託、信託会社、集団基金等に関し、個別の規則が発出され、規制・監督体制が整備されたため、商事の分野で急速に発展しました。信託財産は二〇一六年現在、三四三兆円に上りますが、金銭信託がほとんどを占めています。『理財商品』は、中国において取引される高利回りの資産運用商品です。商事の信託が急成長する過程で、二〇一〇年代前半、銀行が貸出の代替として信託を使った理財商品を発売し、利用が加速されました。その後景気の減速と融資規制の強化に伴い、損失を被る事例が相次ぎ、理財商品に関する規制が整備・強化されました」

そして、④海外からの利用の多い国からは、ケイマンを取り上げている。

「ケイマンはオフショア信託の設定地として有名です。信託を利用するメリットとして、①債権者の手から資産を守ることが出来る、②世代間・家族間での資産移転や相続において有効なタックス・プランニングが柔軟に行える、といったことがありますが、ケイマンは、証券化スキーム等の組成に必要なインフラが整っているため、証券化商品の受け皿として使われるＳＰＶ（特別目的会社）がチャリタブル・トラストの形で沢山設定されています。」

以上、今信託がそこでどんな特徴を示しているか、利用の切り口で説明している。これを歴史の流れの中で捉えるには、何か通底する要素に注目して流れを見ることが理解しやすい。しかもいきなり夫々の流れに的を絞って述べると、全体の流れを俯瞰しにくい。そこで、先ず一旦流れの通底要素に焦点をあてつつ全体観をもって貰おうと、一、から入ったところである。また、そのまま深掘りに入って行くと、疲労感も出ようから、少し目先を変え、時代をとんで現代の点描ということで、二を挟んでみた次第である。そしてここからは三として、夫々の流れに沿った歴史旅を叙述して行きたい。

三、夫々の流れ毎に描く、信託の歴史世界旅

（一）ローマ

（1）フィドゥーシア

fiducia については「当事者の一方が相手方に握取行為又は法廷譲渡の手続によって物又は人を供与すると共に、相手方が同一の物または人を返還し又は是を特定の第三者に供与し又はその他の処分を為すべきことを約する合意であった。斯かる信託は、先ず父権の免除や奴隷の開放など家族法上利用せられた。」と一、で述べたが、もう少し敷衍すると、第一に家長がその子に対する父権を免除しようとする時は三回売却する要があり、家長は買主と買い受けた子を解放するという合意を結んで行った。また、婦女がその後見人を変更するには、その後見人の助成を得て、自ら第三者の家長権に服しその第三者が直ちに解放を為すべきことを約した。競売又は実行による厳格婚姻を為した婦女が離婚して自主権者となろうとする時第三者が直ちに解放すべきことを約してその家父長権に服した。また或者がその奴隷を解放する為に特定の期間内に解放することを約して他の者に引き渡した。

第二に遺言相続の目的でも使われ、相続財産の全部を相手方に譲渡し更にその相手が特定の者に譲渡することを約することが行われた。同様にして、遺贈の目的で或者に遺贈の目的物を譲渡しその或者が更に受遺者に譲渡すべきことが約された。そして同様な手続きは、嫁資の設定や贈与に就いても行われた。

しかし一、では「けれども、信託の最も重要な作用は財産法上のものであって、友人との信託（fiducia cum amico）と債権者との信託（fiducia cum creditore）の二つに分かれる。前者は例えば或家長が不在になる場合に、その財産の全部又はその特定の一部を友人知己に譲渡すると共に、帰還する時はこれを返還すべきことを約するもので、後世でいえば寄託に相当する。債権者との信託は、債務の履行を担保するために、債務が履行せられたときはこれを返還すべきことを約し、債務者がその所有物を債権者に譲渡するものであって、後世でいえば質に相当する。いずれにせよ原則、生存者間の契約である。」と述べたところである。

このような信託を伴う目的物の供与は、握取行為または法廷譲渡によって行われるものであった。従って、これらの要式行為が次第に用いられなくなるにつれて、不使用に帰した。そして家族法上は解放の義務を伴う奴隷の贈与や遺贈や更に離婚の際の返還を約する約款付の嫁資設定等が漸次独立の契約と認められて、特に信託の用いられる必要がなくなり、また財産法上も寄託や使用貸借や質が次第に独立の契約となって、目的物を供与して

所有権を引き渡す形になる信託は使われぬことが多くなった。

（2）信託遺贈

次にfideicommissum（信託遺贈）については「ローマの拡大・発展とともに、ローマ市民に適用される相続上の遺贈が受けられぬ市民外とされる人々が増大する。信託遺贈は、これら相続能力のない者が、遺贈と同様の目的を達するために用いられた遺贈の代替手段として、（市民）法の外で機能していた。」と一、で述べたが、敷衍すると、

ローマ最初の法典十二表法（公表BC450）の内容は多岐に渡っており、分類すると、民事訴訟、債務、家族、相続、財産、不動産、葬儀、結婚、不法行為、犯罪などに関する法や規則が定められている。そこでは遺言が認められ、法定相続人（卑属及び男系血族）以外の公民を相続人にすることも、その際財産を贈与することも可能になった。こうした遺言が一般的になるのは前三～二世紀頃からと言われる。

まず、遺贈は、市民法上の制度ゆえに、ローマ市民のみが利用可能であった。

また、遺言者には遺言作成能力、相続人や受遺者には相続能力も必要とされた。

そして相続、遺贈を制限する法も多数あった。たとえば、紀元前169年のウォコニウス法は、基本的に女性を相続人とすることを禁じていた。

さらに、遺贈は、遺言または遺言で確認された小書付によってのみ設定可能なため、遺言が有効であることが前提であった。遺言は、その行為の重要性から、古くから特別厳格な形式に拘束されていた。方式に瑕疵があれば、遺言は直ちに無効になった。遺贈はこのように硬直的な制度であったが、反面、明快でもあった。これらの形式要件を充足しさえすれば、ほとんどの内容は履行できたからである。これは形式主義のある意味利点でもある。

これに対して、信託遺贈は、遺贈の代用手段として、遺贈の規格に合わない処分に利用されていた。それには脱法的利用も含まれた。たとえば、先のウォコニウス法に反して女子に財産を信託遺贈で遺す、フーフィウス・カニーニウス法（BC2年）で認められた人数以上の奴隷を信託遺贈で解放する、外国人などローマ市民以外の者に財産を信託遺贈で遺す、といった具合に、「財産が受益者に移転されるよう、遺言者が仲介者（多くは相続人）の信義（fides）に委託（committere）」した。ただし、信託遺贈には法的な拘束力はなく、信託遺贈の受託者は、習俗上の義務を負うのみで、履行はもっぱら受託者の信義（fides）に委ねられていた。したがって、受託者に引渡を依頼した財産をそのまま着服されたとしても、法廷で争う術はなかった。キケロはそうした例を挙げている。

遺贈と信託遺贈は、このようにして市民法の表と裏で棲み分けていた。キケロが語るように、裏の事情は、表に出ると正当性に潰されてしまうが、強い紐帯のある社会で、仲間を裏切らないことfidesは重要な社会規範であり、故人の最後の懇願はいつもすべてが反故にされたわけではない。信託遺贈は、法を画一的・厳格に適用しなければならないときに、個別の事情を考慮して具体的妥当性を確保する要請に応えるためのひとつの対応策として法の外に用意されていたわけで、これはこれで安定した形態だったといえる。

そして、一、で述べたように、信託遺贈（fideicommissum）は、ローマ市民の外延が拡大すると、相続面で法の枠外でワークし、アウグストゥス帝によってはじめて、法的拘束力が認められた。そして次第に遺贈・信託遺贈の幅寄せ（外人の市民同等化）、相続人と受遺者の幅寄せ（部分承継→債務も含む包括承継化）が進み、ユスティニアヌス帝は、先ず遺贈が如何なる方式を以っても行われ得ることを確認（形式の壁をなくす）、次第に混同せられ来たった遺贈と信託遺贈とを統一して、これに関して共通の規定化図った。ユスティヌアヌスで両者が融合したと言える。

（二）東ローマ（ビザンツ）帝国・東欧世界

一、で述べたように西ローマ帝国滅亡に伴い西ヨーロッパではローマ法は見失われ、信託の流れではゲルマンのザルマンの制度が主流であった。ザルマンについては、以前に詳述しており、一、でも纏めてある。

東ローマ帝国（ビザンツ帝国）における流れの風景も、「ユステュニアヌス帝が前述のように法典集大成を行った東ローマ帝国（ビザンチン帝国）が、東欧世界に影響力を及ぼし、やがてイスラム世界と覇を競うことになる。」と述べたように、ローマ法の信託要素そのものの流れである。既述のように東ローマ皇帝ユスティニアヌスは遺贈と信託遺贈の融合をはかり、男性と女性の間、女系の血族と男系の血族との間のいかなる区別もなしに、三つの相続人の順位、卑属、尊属、傍系親を定め、統合的な相続法制を確立した。

ユスティニアヌス法成立後東ローマ帝国においては、ユスティニアヌス法典が法実務の基礎となり、レオーン三世は、八世紀前半にエクロゲーという新たな法典を公布する。九世紀には、バシレイオス一世とレオーン六世がユスティニアヌス法典中の勅法彙纂と学説彙纂を総合

的にギリシャ語に翻訳させ、バシリカ法典として知られるようになる。ユスティニアヌス法典やバシリカ法典に記録されたローマ法は、東ローマ帝国の滅亡とオスマン帝国による征服の後でさえギリシャ正教の法廷やギリシャにおいては法実務の基礎となり続けた。

東にイスラムの国、西にゲルマン等諸国に対峙、東ローマ（ビザンツ）帝国は、攻防・盛衰を繰り返しながらも一四五三年まで続いた。法的にはその影響を受けていた北のスラブ系等諸国も含め、この間特に顕著な信託法制化的動きは、この東欧的世界ではなかったと推察される。

そこで、（二）は切り上げて、地域的にも文化的にも別地域で発生したイスラム世界のワクフ制度という別流の流れに移ることとしよう。

（三）イスラムのワクフ

（1）草創期

ワクフの制度とは、イスラム世界に独特の、イスラム法によって規定された宗教寄進制度である。寄進者は、店舗等の物件を組み込みワクフを設定し（ワクフ財産）、その収益、元本等を、イスラムの名のもとに公的な目的（モスクや市場や浴場等のワクフ対象施設の建設・管理等）の為に使う。イスラム世界の都市では、このワクフの制度によりインフラが自主的に整備された。また、君主等の大規模なワクフ設定が都市機能の大幅な発展を促した。

その仕組みは、設定者がワクフに組み込んだ撤回不能の物件からの収益等が対象施設の建設・管理等に充当されるが、管理はワクフ管理人（管財人）によって管理される。管理人の権限と義務は、ワクフ財産を預かり、不法行為から財産を守り、財産を修繕し、税を収め、地代や収益を徴収し、対象施設等受益者に収益を分配することである。適正な管理から派生する債務は、ワクフ財産から支払われるが、ワクフ管理人の固有財産に及ぶことはない。また、公益を目的とする慈善ワクフから、公益性を建前としながらも実質的には私益を目的とする家族ワクフまであり、ワクフ目的の対象物は永続性を要するので、ワクフ設定の物件（ワクフ財産）は永続的に収益を生むものでなくてはならず、主として不動産が使われる。そのワクフ財産は設定時に特定・現存していることを要し、設定には設定者の明確な意思表示を必要とする。

改めて、伝統的なワクフ成立の主な有効要件を整理すると、撤回不能性（裁判官も常に撤回不能の判決を下した）、永続性（ワクフを終了させる権限は誰にもない）、非要物性（設定者の意志により成立）、無条件・即時性（設定者の死亡を除き効力発生の延期条件をつけてはいけない）、になるかと思われる。

時代を追うと、ムハンマド（マホメット）の建国は西暦六二二年だが、引継いだ四人のカリフの時代のジハード（聖戦）、コーラン（聖典）完成等でアラブ帝国の基礎が築かれた。ワクフは、ムハンマドの伝承・言行録であるハディースの記述の中にその起源が求められるが、その発展は四代カリフ、アリーが暗殺されシーア派が退けられスンニ派のウマイア朝（661~750）が成立してからである。シーア派の武力蜂起平定、ジハードを再開、西はイベリア半島、東はパキスタンにいたる大帝国になった。征服地に軍営都市（ミスル）を建設、カリフ派遣の総督が統治、堅固な城壁内にモスクを中心に総督官舎、軍事施設、官庁、広場、市場等が計画的に配置された。モスクや戦争孤児の救済施設や給水施設などの公益施設の管理・維持は不動産及び不動産から生ずる収益或いは用益権の寄進である慈善目的のワクフ設定を通して行われた。

このアラビア語を共通言語とする一大文化圏・経済圏の出現は、やがて非アラブ人ムスリム（イスラム教徒）のイスラム共同体帰属意識を高め、税制度等アラブの特権や改宗者の身分差別への不満に繋がり、全てのムスリムの平等を求める大運動・革命へと発展、アッバース朝の時代（750~1258）となり、民族性を超えたインターナショナルな国家建設と行政・官僚機構を発達させた。

国家理念の達成に法的規範の統一が不可欠になり、各地方色のある前期法学派のスンニの概念を批判・論破、スンニ（規範的行為・行為原則）をハディースとして記録されたものに限定、神意にかなうものとして絶対的権威を与え、イスラム法の法源を、シャリーア（コーラン）、ハディースのスンニ、イジュマー（合意）、キャース（法的類推）に限定、スンニ派四大法学派が成立した。このアッバース朝初期の時代に、家族ワクフも法学的に初めて認められる。

軍人政権の時代（10c~14c）に入ると、前半は急進的シーア派政権であるファティーマ朝（909~1171 エジプト）と対峙・対抗しつつ、バクダッド等主要都市にマドラサ（大学、高等教育機関）を建設、スンニ派振興と人材育成を図り、コーラン学校（寺小屋）からマドラサまでイスラム教育システムが完成。宗教・法律・教育を司るウラマーが担い手になる。これら教育施設の維持・管理及び質量充実の為、ワクフが積極的に活用された。

そしてモンゴルのバグダット攻略（1258）でカイロに逃れマムルーク朝となった後半は、シリア残存の十字軍を駆逐、モンゴル軍からシリア、エジプトを防衛し紅海

を制した。強力な騎馬軍団を経済的に支えるため、スルタンが軍人にイクター（分与地）を授与し、軍人に土地の直接管理と徴税権を委ねる見返りに軍事奉仕を義務付けた。スルタンや大イクター保有の高級軍人、東方交易で莫大な富を蓄積した大商人は、富を都市に集中させるとともに、モスクやマドラサを競って建設しワクフを設定した。東西貿易ルートのキャラバンサライ（隊商宿）や都市の生産物の集荷・取引施設の設置と旅人・商人への無料開放にもワクフが設定された。このようにワクフは、九世紀前後に一般化し、軍人政権時代のマムルーク朝（1250~1517）とオスマン帝国（1299~1922）において広範に普及することになる。

（2）オスマン・トルコ帝国における発展

オスマン・トルコ帝国（1299~1922）の時代に入りたい。スンニ派のハナフィー学派を奉ずる同帝国は、モンゴル高原を故地とするトルコ人が西進し、トルコ系一部族の長オスマンがイスラムの辺境アナトリアに入り始祖として建国したのが一三世紀末。ムスリム諸王朝の統治システムを取り入れつつ次第に勢力を拡大、一四世紀にはバルカンに進出、一五世紀にはメフメト二世治下コンスタンティノープルを陥落させ（1453）、ビザンツ帝国を滅亡に追い込み、バルカン半島を制覇。一六世紀にエジプトのマムルーク朝を滅ぼすとともにメッカとメディナの保護権を獲得しスルタンとカリフの両位を獲得、第十代スルタンスレイマン一世（1494~1566）治世下全盛期を迎えた。

その後一七、一八世紀と、スルタン権力が一定の掣肘を受け、帝都イスタンブールの有力者達の党派による国政の様相を呈し、前半は派閥争いの混乱が見られたが、後半一八世紀は安定し概して繁栄が見られた。しかし、産業革命に劣後し、周囲欧州諸国の急速な経済発展や帝国主義化に押され、次第に停滞・劣勢化し、第一次世界大戦での敗北を契機とする、ケマル・パシャ（アタチュルク）のトルコ革命によって滅亡するところとなった。

国内全ての住民に宗教・民族の違いにかかわらず同等の権利を与えることで帝国の一体性を図るというオスマン主義を国家理念とし、シャリーアの精神を忠実に実践したもっとも完成されたイスラム国家といわれる。資産の細分化を防ぐ観点から家族ワクフを推奨したこともあり、ワクフはオスマン帝国で非常に普及したともいわれる。ここでは、慈善ワクフと家族ワクフとして記録に残る典型的な具体例を紹介しておこう。

（慈善ワクフ）復興事業の内容を伝えるメフメト二世のワクフ文書がある。

一四五三年、コンスタンティノープルに入城を果たすと、メフメト二世はイスタンブールと改名、オスマン帝国の首都として本格的な復興に着手した。人口増加と都市機能整備が二本柱であった。後者については、スルタンと宰相によって大モスクと大市場が建設され、これらを中核として都市の中心部が形成された。また、高級軍人やウラマーが建設した小モスクを中心に、都市の最小単位であり地区共同体である街区（マハッレ）が作られる。更に、モスクやマドラサ・救貧院・コーラン学校等宗教・教育施設と市場・キャラバンサライ（隊商宿）・共同浴場（トルコ風呂）等商業施設が計画的に集中して建設された。そして、市場等の商業施設にワクフが設定され、モスクなどの宗教・教育施設に寄進された。このような宗教・教育施設と商業施設などからなる一種の複合体をイマーレットと呼び、建前としてワクフの所有者はアッラーであり、何人もそれをおかすことは出来ないとされたので、イマーレットは運営面でも財政面でも一個の独立した存在として扱われた。

設定者が寄進の際に作成する文書は通例次のような項目を含んでいる。

①序：神への賛辞と設定理由の後、管理される諸施設即ちワクフの目的の名称、所在地、用途が説明される。ここではモスク3、マドラサ8、学生寮8、コーラン学校、付属図書館、救貧院、病院が目的列挙され、これら施設永続のため多数の建物と周辺35か村からワクフ財産が寄進された。

②ワクフ財産：農地、市場、キャラバンサライ、浴場、建物等が列挙され、例えば市内建物総数3900件、内店舗2357、家屋1043、部屋258、倉庫163等となっている。

③ワクフ条項：ワクフ目的の各施設の管理・運営の条件を定めており、ここでは、ウラマーや一般職員の資質・職務・俸給などが詳細に規定され、ワクフ機構全体の運営に係わるワクフ管理人、書記等についても規定されている。

④結語：ワクフの永続を期し、再度ワクフ施設の確認と文書違反者への最後の審判の日の裁きのこと等が述べられている。

（家族ワクフ）ガラオスマンオウル家のワクフ文書が有名である。一八世紀半から徴税請負と大農場経営で力を持った豪農の家で、略述箇条書きすると、

①序：アッラー賛辞やワクフ設定目的・理由省略。設定を裁判官に申請略述し、ワクフ施設（寄進目的）、モスク、マドラサ、道路等公共・公益施設列挙。

②ワクフ財産：ワクフ財産種類別・都市別一覧。床屋・雑貨店・製パン所等。

③ワクフ条項：同家の文書は例外なく、生前は設定者が、死後は子供が子々孫々まで管理人を兼ねる定めであるところから、自益と他益の混在型でかつ慈善ワクフと

家族ワクフの中間型。これが当時一般的であった。

ところで、多様なムスリムを包摂しつつ版図を広げたオスマン帝国は、多様化に対応した弾力的なシステムも許容している面もある。例えばワクフで言えば、現金ワクフの合法化などは典型であろうと思われる。

コーランは利子を固く禁じているので、現金ワクフは本来違法行為。しかし帝国の慣習に深く根付き社会経済に重要な役割を果たしておりその廃止は現実的でなく、矛盾を解決する必要に迫られたエビュッスウード（スレイマン治下のイスラム長老）は合法化の判断をした。このようにオスマン帝国において運用されるイスラム法は「柔らかいイスラム法」と呼びうるものであった。

（3）ワクフと信託

以上説明した通り、ワクフは、イスラム法によって規定された宗教寄進制度である。寄進者は、店舗等主に不動産物件を組み込みワクフを設定し（ワクフ財産）、その収益、元本等を、管理人（管財人）の管理により、原則公的な目的（モスクや市場や浴場等のワクフ対象施設の建設・管理等）の為に使う。イスラムの都市では、このワクフの制度によりインフラが自主的に整備され、また、君主等の大規模なワクフ設定が都市機能の大幅な発展を促した。なお、イスラム世界の発展過程で、公益性を建前としながらも実質的には私益を目的とする家族ワクフやワクフ財産に現金も含む等弾力化が図られたところである。

ここで、信託との比較でワクフの特性を整理し、その上でオスマン帝国以降の変化をみて、ワクフへの旅の筆をおきたいと思う。

信託は信頼の三角形と繰り返し説明してきたところである。その委託者に当たるのがワクフでは当初の設定行為をするワキフである。そして受託者に当たるのがワクフ財産の管理をするムタワッリになる。そして果実を受け取る受益者がワクフにもおり、それはワクフ施設や家族ワクフの享受者に当たる。

ワクフの形は大きく分けて二つ、宗教や公益の目的に使われるワクフハイリーと家族の利益の為に使われるワクフアハリーである。ただ後者は予定の卑属が利益を受けた後最終的には慈善目的に使われ、究極的な目的は同じになる。成立の有効要件として、撤回不能性、永続性、譲渡不能性等が挙げられる。

そこでワクフと信託の比較を簡単にまとめると、当事者はワキフ（委託者）、ムタワッリ（受託者）、受益者と三者の構図は類似である。しかし、ワクフは財産の利用や収益が特定の個人または公益の為に使われ、撤回や譲渡ができず、相続とは無関係に受託者（管財人のムタワッリ）が指名されることで連続性・永続性が確保されるといった点で信託と相違している。

信託は、ノルマン・コンクェスト後の英国で生み出されたユースが発展したものだが、ワクフがユース誕生あるいは発展に影響を与えたという説がある。曰く「1095~1291 十字軍の指導者達が、征服しようとした土地の社会・経済関係について知り、信託の基本的アイディアを西ヨーロッパ特にイングランドに持ち帰り、それを自分たちの必要に応じ発展させたと推測することは、あながち馬鹿げたことではなかろう」とし、幾つかの傍証を挙げている。

例えば一三世紀、人々が彼等修道僧の生活基盤を寄進することが、ユースのイングランド本格導入の大きな要因になったフランシスコ修道会は、中東で活動を続けており、聖フランシスコ自身もイスラエルの地で活動していたことがあること。イスラエルはイングランドとイスラム世界が接触した地としても重要で、ロンドンに本部を置いたテンプル騎士団やホスピタル騎士団がイスラエルに滞在しており、彼等騎士団は一四世紀におけるイングランドに於けるインズ・オブ・コート（法曹学院）の発展に大きな影響を与えている。何故ならこの法学校は、モスクの中にあったイスラムの法学校にならったものであるからである。因みにユートピアの著者であり大法官としてユース発展に尽くしたトマス・モアもインズ・オブ・コートで学んでいる。

さて、イスラム世界で発展したワクフだが、オスマン帝国の最盛期ともなると、すべての土地の半分にもあたるものが、ワクフ関連の土地になったと言われる。こうなると、ワクフの永続性が土地の流通・利用の阻害要因であるという声が強まってくる。そこで法学者達がイジャーラ・タインといった法技術を使い弾力的措置を考案した。例えば、先ずワクフ財を一定額支払って賃借することに始まり、やがて修理・維持費を前払いし、その資産価値の一定率を毎年支払う人に対しては、その一年賃借の制限を取り払い、永久賃借権が認められた。この観点からするとワクフは厳格なシャリーア規定にもかかわらず、歴史的にみると非常に柔軟に運営されてきたとも言える。

しかし、イスラム社会経済の近現代化や西欧化が進むに従い、イスラム諸国ではワクフ財の非流動性、ワクフ運営の非効率性などが問題視され、特に家族ワクフに対する批判が高まった。一次大戦後オスマン帝国にとって代わったトルコ共和国では、家族ワクフの廃止と慈善ワクフの国有化が実施された（1926）。エジプトでは長期に亘る議会中心の改革議論が行われた末、ワクフ法が成立（1946/5）、新設の家族ワクフには信託同様、永久拘

束禁止則が適用になったり、ワクフの変更・取消が可能になったり、管財人の注意義務の明記がされたりした。ただ、エジプトではこの後まもなくナセル政権が王政にとって代わり、家族ワクフの廃止と慈善ワクフの国有化が断行され、ワクフ制度は衰退した。エジプトの他シリア（1952）、チュニジア（1963）、リビア（1973）、アラブ首長国連邦（1980）等でも家族ワクフは廃止された。インド、パキスタン、マレーシア、シンガポール、インドネシアなどでは家族ワクフは存続するが課税対象となっている。また慈善ワクフは、エジプト同様多くのイスラム諸国で国有化された。

今日のワクフ全般の知見は持ち合わせないが、イスラム世界では無利子制約を克服して銀行や投資会社中心に所謂イスラム金融が発展している。家族ワクフの存続したアジア等ではワクフに即した投融資分野でイスラム投資ファンドといった手法が模索されているといったことは仄聞するところである。

（四）西ヨーロッパに蘇るローマ法、大陸法の世界（独・仏）

（1）ドイツ

大陸法はローマ法上の概念であるフィドゥーシア（fiducia）に倣ったフィドゥーキア（fiduzia）及び信託遺贈の双方を十分知っている。まさしく、紀元前一世紀から紀元後六世紀のビザンティウムに至るまでのローマ法の遺産は、義務を履行する際の bona fides（すなわち誠実）という概念につき豊富であった。

フィドゥーキアとは、ある財産を他人に委譲し、譲受人が当該財産の完全な所有者となるが、ある特定の状況において当該財産を譲渡人に再譲渡する義務に服するという制度であった。ローマ法におけるかなり早期からの概念であり、主として借金返済に係る担保を提供するために用いられた。所有権の移転を受けた貸主は合意に従って所有権を再譲渡するとの合意を行った。しかしその一方で、貸主は完全な所有者であり、当該担保を管理し、当該合意に従って当該財産を再譲渡する義務は単なる個人的な義務に過ぎなかった。

信託遺贈の系譜にあるザルマンの制度で、ザルマン（受託者）が少なくとも中世から遺言執行者ともよばれていたことは既述した。フランク時代の農奴解放の為の仲介人、中世の未成年の後見人、代理がなかった中世においてその抜け道として用いられた不動産譲渡における仲介人等が受託者とされている。グリムの用語辞典によれば、「法律用語として受託者は後見人と同義に用いられる」とされている。

このような経緯の中、ドイツにおける信託は、所有権は受託者に移転しないが、機能的に見てコモン・ロー法域のコモン・ロー信託に類似する要素を含んで発展してきた。

ドイツ法において、信託が独立した制度へと発展したのは、判例および学説がこのような一定の事実関係をフィドゥーキアまたはトロイハントと呼ばれる法律関係へと発展させたことに起因する。ドイツ法における信託は、判例と学説によって発展してきた制度と言える。後にフィドゥーキア的法律行為と呼ばれるこの行為によって形成される法律関係は、動産譲渡担保、債権譲渡担保・取り立ての為の債権譲渡、隠れた取立委任裏書、寄託担保手形等である。

少しややこしくなるのをお許し願いたい。西ローマ帝国崩壊後の西ヨーロッパのゲルマン諸国に信託遺贈に似たザルマンの制度があった訳だが、後年ドイツでは「トロイハント」の法理を論ずるとき、フィドゥーキアと信託遺贈ではなく、ローマ法的信託（主としてフィドゥーキア念頭）とゲルマン法的信託（ザルマン系列）という対比で論じられるようになる。そこでは、「トロイハント」の発展が「ローマ法的信託（フィドゥーキア）とゲルマン法的信託という二つの軸が存在し続けて影響し合ってきた」といった言い方で整理されることになった。

即ちローマ法的信託とゲルマン法的信託という二つの軸が存在し続けて影響し合ってきたといえる。両者の相違は、ローマ法的信託が所有権の絶対性を維持し、債務法的な制限を認めるのに留まるのに対して、ゲルマン的信託は、物の実際の物的な権利状態は第三者との関係で公示されている範囲でのみ決定的であるので、所有権を物権的に制限することが可能であることを前提としている。即ち物権法に対する思想的対立を基盤とした違いなのだが、必ずしも互いに排斥するわけではなく、両者が並立しながら比重変化を遂げたといえよう。

ドイツ法においてはやがて、判例および学説が動産譲渡担保、債権譲渡担保・取り立ての為の債権譲渡、隠れた取立委任裏書、寄託担保手形といった分野の一定の法律関係を形成する行為をフィドゥーキア的法律行為と呼ぶことになる。そしてこの。フィドゥーキア的法律行為が発展した「トロイハント」として、大陸法独自の信託概念になる。

ドイツ法学の泰斗レーゲルスベルガーによれば、フィドゥーキア的法律行為は、ある目的を達成するために、目的以上の権能を与える法形式のことであり、それは、古代ローマにおいてなされていた同様の制度（fiducia）にならって、フィドゥーキア的法律行為と名付けられた

(19世紀後半)。そして信託遺贈については、時代の流れの中でフィドゥーキア的法律行為としての性質が失われたものとして位置づけ、「トロイハント」に入るものではないと確認された。

この「トロイハント」の発展変化をローマ法的信託とゲルマン法的信託の概念区別が生じ、中身の変遷と同時に発生した用語の変遷問題として、ドイツ法における信託用語の整理を行うと、道行の理解に繋がりやすいかもしれない。

学説はローマ法的信託を示す用語として、ラテン語の「fiducia」と、それをドイツ語化した「fiduzia」を用いた。それに対して物権的効力を基礎づけたゲルマン法的信託の学説は、ローマ法的信託との区別を明らかにするため、「Treuhand」という用語を用いた。少なくとも初期の学説においては、ローマ法的信託とゲルマン法的信託は用語上も区別されていた。しかし一般的には、「Treuhand」という用語は、ゲルマン法的信託をのみをさすのではなく、ローマ法的信託も含めた信託をさして使われていた。そして、やがては内容実態もゲルマン法的信託（信託遺贈系列）が薄まって、fiducia と Treuhand は用語上も真に一体化・一般化したと言えよう。

すなわち近現代において、ドイツ法における信託の基礎をなすのは、フィドゥーキア的法律行為、すなわちローマ法的信託である。これは動産譲渡担保、債権譲渡担保・取立のための債権譲渡、隠れた取立委任裏書、寄託手形等においてその形成の端を発したものであった。レーゲルスベルガーは、「法律行為の意思表示において外観が示す法律効果をもたらすことを当事者は意図するけれども、それによって一定の法的効力が与えられる者がその地位を、それによって可能となるあらゆる目的ではなく一定の目的でのみ行使する行為」をフィドゥーキア的法律行為、それにより生じる法律関係をローマ法的信託と呼び、完全権の移転とその債務法的な拘束という構成をとって一般的定義を行っている。

(2) フランス

成文法地方では遺贈と信託遺贈、相続人と包括受遺者が融合統一されたユスティヌアヌスの法迄は行かず、信託遺贈受益者は相続人に準ずる包括承継人たる地位には立ったが、包括的信託遺贈と相続人指定の間には何らかの差異が置かれ峻別され、これら二つの遺言処分の方法が維持された。

ゲルマン法を承継した慣習法地方では、当初にあっては、遺言の慣行は存在せず、遺言は一二世紀になって、ローマ法継受の影響と教会にたいする終意処分としての寄進の勧奨によって導入されるにいたった。そして法定相続に加えて遺言相続が漸次慣習として定着するとともに、包括遺贈が出現するようになり、やがて包括受遺者の地位は指定相続人の地位に接近するようになった。

こうした慣習法地方での包括受遺者と指定相続人の同等の条文化（1580）とともに成文法地方でも相続人指定と包括的信託遺贈の対立解消が規定され（1735）、一八世紀になると、両地方の規範上の差は無くなって来た。なお、この同等化の進む過程で用語としては包括的信託遺贈より包括遺贈が使われるようになる。

以上、ローマ法とフランス古代法の包括遺贈の歴史比較から、包括遺贈はローマ法の包括的信託遺贈から発して、成文法地方で特に継受されてきたが、その間、終始、相続人指定と厳格に区別されてきたこと、そしてフランス慣習法地方でも、包括受遺者には、ローマ法と同様に、「相続人に準ずる地位」loco heredis が与えられたが、包括受遺者には saisine（法定占有）は認められず、遂に、相続人との全面的同一視は実現されなかったと、言われている。

このような歴史的系譜を持つ包括遺贈に関して、前述したようにナポレオン民法典編纂者は、信託遺贈が封建的相続に使われてきたとしてローマ法における包括的信託遺贈の語を採用せずに、フランス古代法の包括遺贈を民法典に定着せしめ、条文化したとされる。

（以下次号）

私の「昭和20年」(2)
—終戦から75年—

山田嘉久

2　昭和20年2月—風船爆弾

16日　アメリカ軍マニラ湾コレヒドール島上陸
　　日本隊6千人玉砕
18日　新兵器　風船爆弾出現
19日　アメリカ軍硫黄島上陸、摺鉢山に星条旗

「風船爆弾出現」の新聞記事には小踊りした記憶がある。

風船爆弾は我が軍が米本土攻撃用に開発した兵器である。直径10メートルの和紙製の気球にこんにゃくの汁を何度も塗布して気密性を高め、気球内に水素ガスを充填、時限性の爆弾と焼夷弾を吊るして、ジェット気流に乗せて飛ばすと云う、なんともチャチな兵器だった。

今から考えると、戦争前期に開発されたドイツの新兵器V2号に比べても、かなりの見劣りがするし、ましてや同じ頃ようやく完成をみた米軍の新型爆弾（原子爆弾）とは比べくもない子供だましの兵器であった。

だが、敗戦の様相濃く、景気のいいニュースの乏しかった当時にあっては朗報であったことには間違いなかった。

風船爆弾については既に記述したことがあるので（「まんじ」134号）、簡略にとどめるが、その2年後に風船爆弾を開発した「登戸研究所」（正式名称「旧第9陸軍技術研究所」。現明治大学生田キャンパス）を見学する機会があったので、これを追記したい。

まず研究所の第1展示室では当研究所の全容と歴史を知ることができた。前身は第一次大戦後（大正8年）に設立された「陸軍科学研究所」（科研）である。

（組織図）第1科　電波兵器、**風船爆弾**の研究開発
　　第2科　生物化学兵器の研究開発
　　第3科　中国偽札の製造

　　第4科　中野学校の指導

次いで第2展示室では電波兵器（く号兵器）と問題の風船爆弾（ふ号兵器）について紹介されていた。当時の設計図を基に作成した実物10分の1の風船爆弾が展示されていたし、風船爆弾用の専用和紙も見ることができた。

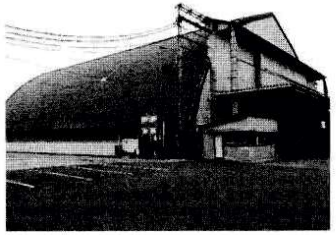
第3展示室は生物兵器、時限爆弾などを開発した第2科の紹介。戦後、暴露されたような外地（特に中国）における毒物の人体実験や細菌の散布実験が本当に行われたのだろうか。（戦後、有名となった731部隊のように）その研究の成果に対して東条英機陸相から授与された表彰状も展示されていた。

第4展示室は第3科が行っていた偽札製造と中国における偽札使用の実態を知ることができた。製造途中の偽札の実物が展示されていた。

同研究所で開発された風船爆弾は主に都心の映画館（日本劇場、東京宝塚劇場、有楽座など）で組み立てられた。前述の通り直径10メートルの大型であるので、天井の高い建物が必要とされたからである。それには当時の映画館はすべて休業中だったので格好の場所となった。

そして、その組み立てには主に付近の高等女学校の生徒が駆り出された。男子中学生は他の軍需工場に動員中だったし、なによりも風船ののり付けには若い女性の手が最適だったからである。女子の手先が軟らかく、作業中に和紙の気球に疵（きず）がつかないという理由であった。

風船につめる水素ガスは昭和電工で作られたが、このように組み立てられた風船爆弾は、千葉市天台にあった「気球連隊」（同部隊は陸軍唯一の気球部隊であるため連隊番号はない）によって同連隊の格納庫に運ばれた。格納庫は3棟あったようだが、現在は1棟だけが残っている。私の散歩コースになっており、「川光倉庫」として現在も営業中、備蓄米の倉庫となっている。貴重な戦時遺跡である。（写真参照）



風船爆弾格納庫
千葉市稲毛区（陸軍気球連隊）
現　川光倉庫㈱　筆者撮影

いよいよ、昭和19年2月に千葉県一宮海岸から風船爆弾のアメリカ本土向け試射実験が行われた。

それより前、昭和18年春ごろから上総一宮駅から海岸まで鉄道の引込線が敷設され、陸軍兵器廠が設置された。千葉市天台にあった気球部隊から新たに「ふ号」要員が再編成されたのである。

私が子供時代に海水浴に通った懐かしい道

であるが、それ以降、一般人は立ち入り禁止とされたので、なんのための基地なのか誰も知らなかった。

発射場所は一宮海岸お台場跡付近と決まった。

この場所は天保年間、外敵に備えて加納藩により築かれた場所で、14代一宮藩主加納久徴が高島秋帆の指導を受け作らせた大砲を設置した。あの江戸湾の「お台場」よりも9年も前である。

このお台場跡には風船爆弾発射跡が13ケ所あったと云われるが、今ではほとんどが草に覆われ分からなくなっている。

数年前、その基地となった一宮町でドキュメンタリー映画「陸軍登戸研究所」を見る機会があった。この映画を作る動機が戦争を全く知らない高校生たちだったとの監督の話を聞いて、日本の若者も捨てたものではないと感じたことだった。

最初の実験から翌年（昭和20年）4月まで6ケ月に亙って、一宮海岸をはじめ勿来（福島県）、大津（茨城県）から発射された。これら3基地から発射された風船爆弾は総計9500発に達したが、そのうち1割ほどが米本土に到達したといわれる。

此の爆弾により米本土ではオレゴン州住民6名が爆死している。今でも現地にはその記念碑が建っているという。

「この地は第2次大戦のさ中、アメリカ大陸で敵の攻撃を受け死者を生じた唯一の場所である」

（かってアメリカ旅行の時、これを確認したく単独行ってみたが迷子になり目的を達しなかった。）

被害こそ笑い話ほどの軽微なものだったが、米政府が受けたショックは相当なものであったらしく、そのうち風船爆弾に日本兵が搭乗して米本土に侵入するのではないかの危惧が米軍部内にもあった。

なにしろ攻撃側の日本軍でさえどこに飛んでゆくか予測できない。文字通り風任せで飛来する。レーダーでは一切捕捉できず、しかも無音で接近するのである。

そのため米政府は日本のどこから発射されたのかやっ気になって調査したそうだが、意外なところからその基地が発覚した。米国本土に到着した風船爆弾の表面に「玉前神社」のお札が貼られていた。玉前神社は香取神宮（下総）、鹿島神宮（常陸）と並んで上総一宮所在の官幣大社であるので米政府は風船爆弾基地を容易に探し出すことができた。

3　昭和20年3月―空襲

9日　B29、東京を空襲、死者十数万人　これより本土空襲激化　11日名古屋、13日大阪

15日　閣議、「大都市における疎開強化要綱」決定

春近くなると、米軍機による本土空襲は日増しに激しくなっていった。

本土初空襲は昭和17年4月18日、太平洋上を米軍空母から発進したドウリットル爆撃隊（B25）で東京、名古屋、神戸を空襲して中国の飛行場に飛び去った。この被害は軽微であったが開戦半年たらずであったため、軍部は非常な衝撃を受けた。

2年後の19年6月の北九州（八幡製鉄所）の空襲にはB29が初登場するのである。愛称は「Super fortress（超要塞）」だが日本では「超空の要塞」と呼ばれた。

この頃、米軍は中国成都に替わる発進基地を求めてマリアナ作戦を展開、同年8月初旬までにマリアナ諸島の3島（サイパン、テニアン、グアム）の占領を終えた。これにより日本本土はそこを発進基地としたB29爆撃範囲内に入ったのである。

作家山田風太郎は1月31日の日記にこう記した。「最近極めて突忽として厭戦気分一帯に瀰漫せるように感ず。（略）これ余が病みて気力衰えたるためもあらん。先日の大空襲のためもあるべし」（「戦中派不戦日記」）

かくして20年3月9日夕方から10日未明にかけての東京大空襲。マリアナの各基地を発進したB29約300機は東京下町への爆撃を敢行した。その被害は死者10万人、焼失家屋27万戸に及んだ。

以後、東京、名古屋、大阪、神戸、川崎には繰り返し空襲が実施され、更に地方都市にも及んだ。県下では千葉、銚子が被害を受けたが、小都市茂原までには及ばなかった。

そのため、毎晩のように発せられる「空襲警報」でもB29の場合は比較的気が楽だった。

3月9日の晩は西の空が一晩中、真昼のように明るかったことを覚えている。「七夕空襲」の千葉市の場合は、40キロ離れた茂原の上空まで燃えカスが飛んできた。

郷土の偉人石井菊次郎（元外務大臣）が行方不明となったのはたしか5月25日の東京空襲の時だったと思う。石井は茂原（旧日吉村）出身で大正7年、特命全権大使として中国を巡って、時の米国国務大臣ランシングと結んだ「石井・ランシング協定」で有名となった。

空襲時、彼は枢密顧問官であったが行方不明のまま後任（外務顧問芳沢謙吉）が発令されている。

この頃、茂原郊外でB29一機が撃墜される事件があった。市内道表山麓に備えられた高射砲により撃墜されたもので、めったに当たる代物ではなかったのでまさに「事件」であった。搭乗員のうち4名が死亡、5名が捕虜となった。

その捕虜を茂原駅から東京方面に列車で護送する光景を私は駅前の自宅2階から恐る恐る覗き見していた。後ろ手に縛られて項垂れて歩く大男たちは揃って茶髪で鷲鼻。生まれて初めて見るアメリカ人だったが、当時、宣伝ポスターでよく見た「洋鬼」そのものだった。

なお、戦後、この捕虜を巡っての取り扱いが問題視され、所謂「BC級裁判」によって当事者は死刑となっている。

なお、BC級裁判とは、極東国際軍事裁判における戦犯類型B型（通例の戦争犯罪）とC型（人道に対する罪）に該当する戦争犯罪人を対象にした裁判で、横浜、マニラなど世界49の軍事法廷で裁かれた。被告人5700人のうち約1000名が死刑となっている。

それに対してA型（平和に対する罪）で訴追された者（28名）が「A級戦犯」（東京裁判）である。

余談だが、「南京事件」の松井石根大将はA級では無罪となったがB級で有罪となった。またC級該当者は日本人にはいない。

B29に比べて厄介だったのは、艦上戦闘機グラマンF6F（愛称 Hellcat「地獄の猫」）による機銃掃射だった。

グラマン機（当初はF4F）は緒戦において我が零戦機に散々悩まし続けられた米軍が、その対抗機として開発した最新式の艦上戦闘機で、この頃になると質量ともに零戦機に勝っていた。

この頃、既に九十九里沖には敵空母が接近しており、艦上から飛来する艦載機が毎日のように襲来してきた。目的は中学に隣接した茂原海軍飛行基地の爆撃だった。

なにしろ、茂原から九十九里浜までは二十キロ弱、敵機が上陸すると瞬時にして茂原上空に達するので何時も抜き打ち的な空襲だった。時には敵機が空襲を終え帰り去った後に、ようやく空襲警報が出るということがしばしばあった。

空襲警報は学期末試験の最中にもよく鳴った。

そんな時には当然、試験は中止。我々は喜んで校庭に我々が作った一人用防空壕（「タコ壺」と呼んだ）に飛び込むのだが、ある時には悪童の一人が空襲警報のサイレンの真似をしたため、試験監督の先生が慌てて試験を中止して、真っ先に避難したという笑い話もあった。

グラマン機の攻撃は執拗だった。一度ならず二度、三度と旋回してきて我々を狙った。その都度、我々は敵機の飛来方向により、狭い壕内でどちらに身を寄せたら安全かのコツをすぐに覚えた。誰から教わったわけでなかったが、身の軽い若者の特権であったであろう。

避難したタコ壺の中からは、低空飛行で機銃掃射するグラマンのパイロットの顔がはっきり認識できた。ということは先方からも同じであったであろう。なにか彼らは逃げ惑う我々を狙い撃ちするのを楽しんでいるようだった。

この機銃掃射により多数の市民が死亡したとの記録が残っている。（「茂原市史」）また、近くの成東駅では停車中の列車が狙われ10数名が犠牲となった。

平成に入ってベストセラーとなり映画化もされた「零戦燃ゆ」（柳田邦男著）にも茂原基地の零戦機とグラマン機との空中戦を描いている。それによると2月17日、茂原基地を飛び立った第252航空隊所属の零戦45機は房総半島上空で敵F6F30機と交戦、うち24機を撃墜した。当方の損害は9機であった。勿論、成果は「大本営発表」であろうからあまり信用できないが、派手な空中戦が展開されたのは事実であろう。

その「大本営発表」だが、（3月23日）付

「敵空母5隻、巡洋艦3隻を撃沈、敵機180機撃墜。わが方の損害150機以内」

こんな「大本営発表」を信じるだろうか。しかし当時、我々中学生は身震いする思いで聞き入ったものだ。特に戦争初期の「軍艦マーチ」や「敵は幾万」などの景気のいい音楽で始まる大本営発表を心待ちにした。発表する海軍報道部長平出大佐は我々にとってはスター的存在だった。

それが山本連合艦隊司令長官の戦死（昭和18年4月18日）を契機に玉砕が相続くと、凶報の時には導入曲は悲壮な「海ゆかば」に変わった。

その後も大本営は虚報を発表し続けた。それでも「わが方の損害150機以内」の殆どが敵艦体あたりの特攻機であることは、中学生でも薄々知っていた。

なお、参考までに当時のラジオ番組を朝日新聞から拾ってみた。

ラジオ番組（20・1・23）

07・00　戦時随想
09・45　「雪やこんこん」ほか
11・00　音楽「軍犬利根」ほか
00・15　職場のうた「ありがとう、ほんとにご苦労さん」　ジャワ民謡ほか
01・00　香川綾「最近の食生活の工夫」
01・30　落語「電車風景」（柳亭痴楽）
　　マンドリン独奏
05・30　朝鮮、台湾だより
06・00　唱歌集、物語「銀の分銅」（野村胡堂）
06・50　国民合唱「勝ちぬく僕等少国民」
07・00　報道、講話、軍艦歌謡「あ、神風特攻隊」ほか

（しかし4月1日からはラジオは「報道（ニュース）」の

みとなった。）

4　昭和20年4月―学校工場

1日　米軍、沖縄本島に上陸
5日　小磯内閣総辞職、鈴木内閣成立
7日　戦艦大和、九州南方で撃沈される

4月新学期に入ると組編成があり、私は3年2組となった。しかし肝心の授業は全く行われなくなった。

前月（3月）18日の閣議で「国民学校（小学校）を除く全ての学校は4月1日から1年間の授業停止」が決定されたからである。

時の小磯内閣は「決戦教育措置要綱」の精神を強調し、お達しを発表している。国家存亡の危機である。学業は後回しとされた。

「学徒ヲシテ国民防衛ノ一翼タラシム」の精神を強調し軍需産業や食糧増産に総動員したのである。

そこで我々新3年生も上級生と同様に「学徒動員」となったが、行き先はなんと「学校工場」だった。

学校内の武道館を始め幾つかの教室が改造されて「日立航空機」の分工場に早変わりしていたのである。「長高百年史」によると、この計画は前年春から進んでいたらしく空襲激化にともない政府は軍需工場の地方分散の一環として学校工場化の早期実施を薦めていた。

そこで工場完成とともに我々3年生2百名が初めて動員されることになったが、そこで何の作業をしたのか、とんと記憶が無い。「百年史」によると同工場の設備として旋盤10台、ターレット盤57台、フライス盤16台などとなっているので、多分、旋盤を回していたのであろう。

ただ記憶しているのは旋盤を廻しながら皆でこっそり玩具の指輪を作っているのを監督の先生に見つかってしまい、一列に並ばされて往復ビンタを食らったことだ。

（注1）「百年史」によると「学校工場史料」は終戦時の米軍進駐を前にして焼却された戦争関係書類の一つだが奇跡的に焼却を免れて物置の一隅から発見されたという。こんな物まで急いで焼却した戦後の混乱ぶりを窺い知ることができる。

（注2）戦後になって学校工場で働いた給料6ケ月分を一括して貰った。生れて初めて貰った給料だが、その金で母親と映画を観に行った。こんなクダラナイことは不思議に覚えている。因みにその時みた映画は戦前封切りの「秀子の応援団長」だった。

5　昭和20年5月―茂原海軍航空基地

9日　政府、ドイツが降伏しても日本の戦争目的は不変と声明
24日　B29東京を空襲、以後横浜、大阪と空襲激化
27日　（朝日新聞）

「B29約250機　帝都を無差別爆撃　宮城、大宮御所に被害　三陛下、賢所はご安泰」

前月から「学校工場」に通い出した我々だが、なぜかそれまで実施されていた隣接の「茂原海軍航空基地」への勤労奉仕は引き続き隔日毎に続いていた。

多分、当局の強制で「学校工場」を作ってみたものの（校長はそのために「感謝状」までもらっている）、期待ほどの成果が上がらなかったためだろう。

「茂原海軍航空基地」の正式名は「第252海軍航空隊茂原基地」だが、首都圏における有力な特攻基地の一つであった。

（注）終戦時兵力3932名　保有艦上機90機
　　司令榊原海軍中佐　（詳細8章）

米軍の九十九里上陸に備えて急遽作られた海軍飛行場で昭和18年春にオープンした。昭和18年春といえば、我々が中学入学した年である。

従って、大げさにいえば、この基地の歴史は我々の中学生活の歴史と一致する。何しろ飛行基地と学校との距離は僅か1キロ足らず。我々にとっては格好の勤労奉仕の場であった。そのため入学早々から頻繁に造成作業に狩り出されていた。

時には日曜日に動員されることもあった。当時「月月火水木金金」という軍歌が流行っていた。「前線の兵隊さんたちは一年中、休みもなくお国のために戦っている。お前らもたまには休日返上で働いてみたらどうだ。」という論法だった。

整地のための草刈りやモッコ担ぎと単調な作業だったが、広い山林が伐採されたあとの根っこ堀り作業はなかなかの重労働であった。

掘り起こした木の根は学校に持って帰り「製炭班」がこれを木炭にするのである。そのため校庭には2基の専用竈があった。

木炭が配給統制になったのは昭和15年からだが、中学にも県からの出炭割当があったとは驚きだった。その割当表を見ると、農学校関係が多いことは頷けるが、千葉中や当校など普通中学にまで及んでいる。

そういえば当時の乗合自動車（バス）はすべて木炭車だった。戦後も燃料不足のわが国では昭和30年頃までその姿を見ることができた。

木炭と関連して、当時話題となった燃料に「松根油」がある。松の切り株や松脂（まつやに）を乾溜してガソリンの原料としての試みだったが、実用には至らなかった。

話題が逸れたので茂原飛行基地に戻す。

滑走路からは毎日のように若い予科練出の少年兵の乗った零戦が頻繁に飛び立っていたが、不思議なことに本職の軍人たちは帽子を振って彼らを見送っていたもの

の、我々中学生は特攻機が飛び立つ時には彼らを見ないよう全員が後向きにさせられることであった。特攻機の向かう先を民間人には知らせたくない方策だったと思われるが、馬鹿げたことだった。

神風特攻隊は当時の第一航空艦隊司令長官大西滝二郎海軍中将の発案といわれるが、米艦隊への体当たり攻撃を始めたのは半年前のレイテ沖海戦からであった。丁度、その頃がピークだったと思われるが、これ以降は特攻基地から飛び立つ回数が急速に減ってきた。

また、九十九里沖から襲来するグラマン機を迎え撃って、大空で派手な空中戦を展開していた零戦もめっきり少なくなってきた。

零戦そのものの絶対数が減ってきたことと、これを操縦するパイロットが底をついてきたからであろう。現に、この頃には予科練よりも更に若い「予備予科練」を募集していた。

この頃になると我々が予想もしなかった、しかも張り合いのある新しい仕事が出てきた。

空襲警報が発令されると、今までだと滑走路に並んだ零戦機はこれを迎え撃つために一斉に大空に向かって飛び立つのだが、この頃になると逆に一斉に掩体壕に運び入れられるのだ。そして代わりに滑走路に実物と等身大の木製模型の零戦を並べる作業を我々は手伝った。

今考えると、かなり危険な作業だが草むしりなど単調な仕事に飽きていた我々は喜んで参加した。

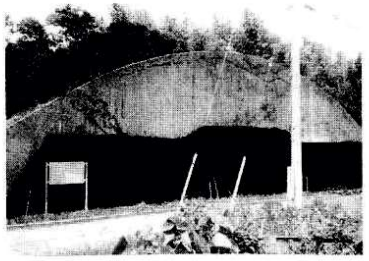
その「掩体壕」だが、敵機の空襲から人命を守るのが「防空壕」、零戦機や爆撃機を格納して守る為の有蓋掩体の施設が「掩体壕」と区別していた。その掩体壕は茂原基地近辺には20基近くあり、その半数以上が75年経った現在でも、市当局により遺構番号を付され大事に保管されている。

これだけの掩体壕を保存しているのは全国的にも珍しいとされるが、特にその中の「遺構番号3号」掩体壕は「市重要文化財」に指定されている。貴重な「戦時遺産」である。（写真参照）

壕内面積286平方メートル、高さ7メートルに及ぶ大型なので多分、零戦用ではなく爆撃機用であろう。

壕の前に立つ表示板には当時の人手不足から長生中学生や茂原農業生を動員して作ったと記されている。

（続く）



掩体壕
茂原市本小轡（第252海軍基地）
現　茂原市重文　筆者撮影

回想 アウシュビッツ強制収容所と ビルケナウ絶滅収容所

―一九八七年八月六日―

山本鎭雄

一　はじめに

一九八六年一〇月から一年間、海外研修（留学）の機会が与えられ、西ドイツ（西独）の「壁の街」西ベルリンに滞在した。滞在中、西独のフランクフルト、ハンブルク、ニュルンベルク、ミュンヘン、ハイデルベルク、デュッセルドルフ、ビーレフェルト、東ドイツ（東独）の東ベルリン、ポツダム、ライプチヒ、イギリスのロンドン、フランスのパリなどの諸都市を見物した。西ベルリンからの帰路、キール、アムステルダム、パリなどの諸都市を見物した。とくにポーランドのアウシュビッツ強制収容所とビルケナウ絶滅収容所の見学は今でもなお記憶に新しい。

私の妻の友人で高校教員が夏季休暇を利用して、平和教育のテーマとしてアウシュビッツ強制収容所を見学したい、是非同行してほしいという手紙を西ベルリンで貰った。そこで、西ベルリンにある東欧地域専門の旅行代理店でポーランド行きの切符を購入し、妻と娘を含めて一行六名による三泊四日の予定でアウシュビッツ強制収容所の見学ツアーに出発した。

私たちは西ベルリンから東ベルリンのバスに乗り、「ベルリンの壁」に付設された東独の検問所でパスポートを厳重にチェックされた。東ベルリン郊外のシェーネフェルト空港を離陸し、ワルシャワ空港に着陸した。ワルシャワ駅の売店で英文か独文の地図を買うことにした。ワルシャワ市街の大通りを散策し、大聖堂に入った。パイプオルガンの演奏を聞き、その堂内に小さな個室があり、女性がその個室に向かって何か小声で話しているようだった。これがカソリック教会の聴聞室かと推測した

（おそらく聴聞室のなかに神父がいて、信者の話を聞き、相談にのっていたのであろう）。

私たちは予約したホテルに着いた。驚いたことにポーランドの青年が部屋に訪ねてきた。おそらく、ワルシャワ駅で私たちを見かけたのであろう。彼は日本に留学したいと言い、どんな方法があるのかと熱心に質問した。私は意外な質問を受け、ポーランドの駐在日本大使館を訪ねて、日本留学について聞いてみたらと返答した。ポーランドのワルシャワでこのような経験をすることにいささか戸惑った。音楽愛好者はポーランドを「ピアノの詩人」として憧憬されている。日本とポーランドの緊密な関係が「草の根」レベルで充実することを密かに願って、その日は眠りについた（アウシュビッツからの帰路、ショパンの生家に立ち寄った）。

その翌早朝、ワルシャワ駅から列車とタクシーを乗り継ぎ、アウシュビッツ強制収容所に到着した（アウシュビッツはドイツ語読み、ポーランド語読みはオシフィエンチム）。

二　ミュンヘン郊外と東ベルリン郊外のナチス強制収容所の見学

ナチス強制収容所と言えば、今から四五年前の七五年晩秋、ミュンヘンに滞在した時、その郊外にあるダッハウ強制収容所を見学したことがある。途中、車中の座席でアメリカの青年に何処に行くのかと聞かれ、ダッハウだと答えた。彼もダッハウへ行くと言うので、同行し、荒涼とした強制収容所を見学した。すでに夕闇が迫り、彼が手配してくれたタクシーに同乗した。彼はアルプス山地に行くということで、最寄りの駅で別れた。

そのダッハウ強制収容所がつくられた直接の事件は、三三年一月にヒトラーがワイマール共和国の首相に就任した直後、ナチス政権は国会を解散し、国会議員総選挙を実施した。大方の予想では、ナチスは議員数を大幅に減らすだろうと観測されていた。そこで、巧妙に仕掛けたのが前代未聞の国会議事堂放火事件である。ナチス・ドイツが公然とワイマール憲法の議会主義の象徴を抹殺する最大の暴挙である。

ナチス政府はこの事件を国際共産主義者の策謀だとキャンペーンを張り、共産党員、社会民主党員、労働組合幹部などを威喝した。国会議長のゲーリングによって組織されたゲシュタポ（国会秘密警察、非合法のテロ組織）がナチスの反対派幹部を一斉に拘束した。その結果、ナチスは国会で絶対多数派を占め、全権委任法（「民族および国家の危機を除去するための法律」）を可決し、ナチスの一党独裁体制を確立し、それと同時にワイマール・ドイツは完全に崩壊し、第三帝国が成立した。

最初、ゲシュタポ（のちに親衛隊の管轄下におかれた）はミュンヘン郊外のダッハウ強制収容所に「抵抗分子」を拘留した。その後、予防拘禁として常習犯罪者・暴行傷害者、さらに乞食、浮浪者、売春婦、アルコール中毒者、同性愛者、ロマ（ジプシー）、兵役を拒否する絶対平和主義の「エホバの証人」などを「反社会的分子」と称して、一方的に拘束し、抑留所に拘禁した。ナチスは各地の収容所の管理体制を整備し、とくに「親衛隊どくろ部隊」を配置し、警備させた。さらに若者を親衛隊に入隊させ、彼らにたいして人間性を抹殺する「非情教育の練兵場」として、ナチスのイデオロギーを徹底的に洗脳し、抑留所を警備させた。

さらに、ダッハウ強制収容所では軍事的目的から抑留者にたいして非人間的な生体実験も行われた。例えば、抑留者を低気圧室に入れ、どの程度、気圧を下げれば、意識を喪失するかと実験した。それは戦闘機の操縦士がどの程度の高度の上空を飛行したら、意識を喪失するかという人体実験である。この高高度実験は戦闘機の空中戦で、敵戦闘機よりもより上空を飛行すれば、空中戦を有利に攻撃出来る。他に、抑留者を氷漬けにして、どの程度の低温で生きていられるかという人体実験をした。ドイツ海軍が誇る潜水艦（Uボート）が北極圏で撃沈された時、乗組員が氷海でどの程度の低温で生きられるかという生体実験である。

ドイツ社会学の創立者の一人、ゲオルク・ジンメル（ユダヤ系）の子息ハンス・ジンメルは、医学を学び、優秀な医師になった。彼は「水晶の夜」の直後、ダッハウ強制収容所に拘留された。負傷した拘留者をナイフ一本と、ローソクの明かりで巧みに手術に成功した。そのため、彼らから「ヒーロー」と見なされたという。その後、「身体的・精神的に重い疾患のために釈放された。……釈放された理由は明らかにされていない」。彼はついにアメリカに亡命し、市立病院の医師に任命されたが、結核で死亡した。おそらく、彼はダッハウ収容所で結核を罹患したが、快癒した。ところが、過酷な人生を送ったために結核が再発したのだろうか（ディルク・ケスラー著・山本鎭雄訳『社会学的冒険』、二〇〇三年、恒星社厚生閣、エピローグ第三節）。

それから一〇余年後の八六年一〇月、再び西独に留学し、今度は西ベルリンに滞在した。翌年七月、知人のドイツ社会学研究教授の子息が東京から現地調査のためにロンドンに来たついでに、西ベルリンの私の下宿に立ち寄ってくれた。そこで、カトリック教徒の彼を案内して東ベルリンの大聖堂で日曜礼拝し、その足で東ベルリン郊外のザクセンハウゼン強制収容所を見学した。この収容所はダッハウ収容所を「モデル」にして建設されたという。国会議事堂放火事件の直後、主にナチスに反対する共産党員、社会民主党員、労働組合幹部などを「抵抗分子」と称して、この強制収容所に拘留した。

この収容所には、広大な敷地に抑留者を拘留する木造

の収容棟、抑留者の逃亡を妨害するために高電圧の鉄条網とコンクリートの壁、警備のための監視塔と巡視路があった。さらに反抗的な抑留者を制裁するために、足を吊し上げ、腕をねじ上げて体罰を与える三本の「木の柱」を見た。

さらに博物館の説明では、抑留者に軍靴を履かせ、ただ長距離を歩かせた。それは兵士の長距離の行軍で、何キロ歩いたら軍靴がどの程度損傷するのか、それを測定する人体実験である。その他、抑留者にわざわざ素手で深い穴を掘らせ、そこに大きな石を埋めさせたあと、今度はその石を掘らせて穴を埋めさせるという意味のない単純作業を命じ、厳重に監視したという。

三　アウシュビッツ強制収容所で

私たちがアウシュビッツを訪問したのが、奇しくも同じ八月六日だった。四二余年前の四五年のこの日、広島の上空を飛行するB29爆撃機から「リトルボーイ」と称された一発の原子爆弾が投下された。一瞬にして死者数二〇万人以上の人命を奪い、被爆地・広島を地獄図に変え、瓦礫の山と化した。しかも被爆者は原爆による放射能後遺症に苦しみ、死亡した。六〇年代後半から一〇余年間、広島で過ごした私は、第二次世界大戦のドイツ占領地ポーランドのアウシュビッツ強制収容所の惨劇の舞台を訪問することは、かねてからの念願だった。

アウシュビッツ強制収容所に入ると、赤レンガ造りの堅牢な建物が並んでいた。三八年八月、独ソ不可侵条約が締結されたその翌月、ナチス・ドイツ軍はポーランドに侵攻し、ポーランド軍を撃破した。ポーランド南西部のオシフィエンチムの陸軍砲兵隊の兵舎を占拠し、ナチス強制収容所に転用した。その当初、ドイツ親衛隊はポーランド軍の捕虜、ナチス・ドイツを批判するポーランド国民を拘束したのであろう。

受付のインフォメーションで案内書を入手しようとしたら、受付の女性は私たち一行が日本人と見て、日本語の案内書を貸してくれた。それは英語からの訳書『アウシュビッツの悲劇』（K・スコーレン著）だった。訳者は広島で知己を得た広島大学政経学部で国際法を専攻する小谷鶴次教授だった。小谷教授は国際平和の観点から日本にアウシュビッツ強制収容所の惨劇を紹介し、それと同時に爆心地広島の悲劇も英文で紹介した。国際法研究者の信念は原子爆弾が投下された広島の惨事と、ナチス・ドイツが横暴を極めたアウシュビッツの悲劇が繋がっていたのであろう。

受付の建物から外に出て、中央出入口ゲートの鉄で張り巡らされたアーチを見上げた。ARBEIT MACHT FREI（働けば、自由になれる）というスローガンが貼り付けられていた。ナチスはこのゲートをくぐった抑留者に「働け」、死ぬまでただ従順に「働け」



アウシュビッツ強制収容所入口

と指示したのであろう。しかし、収容所が解放され、ごく少数の抑留者だけが奇跡的に「自由」の身になった。抑留者は親衛隊員や監視兵のもとで長時間の肉体労働に耐え、粗末な食事で飢え、不潔な寝床で生活し、ただ過酷に「働く」ことを強要された。ナチスは占領地で無償かつ長時間の労働力を確保することを主要な目的とした。

元ポーランド軍の兵舎だけあって、赤レンガ造りで、整然と二列二八棟が目に付いた。すでに展示館として整備され、収容棟の各室には抑留者のトランク、メガネ、靴、義足・義肢、衣類、さらに女性の髪の毛（ドイツ・ババリアの工場に送られ、洋服の肩パットやカーペットに加工されたという）がそれぞれ分類され、乱雑に展示されていた。さすが、高級な金貨や宝石は展示されていなかったが、これらの展示物はすべてそれぞれの抑留者から身ぐるみ剥いだ証しだろう。さらに空気に触れると、有毒ガスが発生するチクロンBの空き缶が山積されていた。この展示物は抑留者を大量に殺戮するために使用されたことは明らかだ。

「死のブロック棟」と称された第一一号棟を見物した。ポーランドの聖職者コルベ神父は来日して長崎で伝道に努め、養護施設などを設立した。そのコルベ神父はポーランドに帰り、カトリック教を伝道した。その後、コルベ神父はアウシュビッツ強制収容所に拘束され、処刑者の身代わりになると申し出た。処刑者には妻と子供がいる。彼は「自分は独身だ」申し出た動機だった。彼は直ちに餓死を命じられ、餓死棟の窓を板で遮蔽され、暗闇の「死の地下室」で一心に祈りを捧げて餓死した。「アウシュビッツの聖者」と呼ばれた。

餓死棟と隣の第一一号棟との間に「死の壁」と称する処刑場があった。一一号棟に拘留された抑留者は目隠しされ、木製の部厚い壁の前に立たされた。親衛隊員数名が一列に並び、鉄砲を構えて一斉に射撃し、抑留者は射殺された。私は「死の壁」に打ち込まれた弾痕と、銃殺された人々のために供花が捧げられていたのを思うと何

とも痛々しい。

すでに触れたように、その当初、アウシュビッツ収容所はドイツ軍に抵抗する多くのポーランド人、軍人や知識人、さらにユダヤ系ポーランド人を拘留した。ドイツ国内の収容所は多数の抑留者で拘留しきれなくなった。そこで、ナチスは占領地ポーランドそのほかヨーロッパ各地の抑留所から、広大な低湿地帯のビルケナウ絶滅収容所などに移送し、大量虐殺した。このビルケナウ絶滅収容所の中央監視塔本館を始め、収容棟、ガス棟、死体焼却棟のすべては拘留者によって建設された。そのために、労働能力があると見なされ、一時的に生存を許された。

四　ビルケナウ絶滅収容所の見学

抑留者の死体は焼却される前に、死体から金歯・白金歯（入れ歯）は抜き取られ、軍備費を調達するためにドイツの宝石商を経て、スイスの宝石商に売られたという。この強制収容所から三キロ北の広大なビルケナウ絶滅収容所（第二アウシュビッツ強制収容所とも言われている）ではナチス・ドイツの狂気と蛮行と同時に、抑留者の苦難と悲劇の明らかな状況証拠を見学した。絶滅収容所に到着した多くの抑留者は労働能力なしと判定されると、シャワー室と偽り、その棟は頑丈に密閉され、屋上からチクロンBを投下され、殺害された。私はその死体を処理した焼却炉（クレマトリウム）の跡を見て、身の毛がよだつほどの寒気と戦慄を覚えた。

ビルケナウ絶滅収容所はユダヤ系オーストリアの精神医学者のE・フランクルが収容された「夜と霧」の舞台である（『夜と霧―ドイツ強制収容所における一心理学者の体験―』、新訳、一九八五年）。フランクルは貨物列車に乗せられ、ビルケナウ収容所の監視塔本館の中央入口（「死の門」と言われた）を過ぎ、引込線の降車場で降ろされた。彼はその時の心理的反応を「恩赦妄想」と考えた。それは、死刑囚が死刑を執行される直前まで、必ず恩赦されるだろうと空想する精神医学の病像である。



ビルケナウ絶滅収容所
中央入口は「死の門」

彼は監視兵の命令により「選抜」「消毒」「剃髪」「着脱」などを体験した。そこで、彼の身辺に起こった非人間的な状況は彼の一切の妄想や空想を打ち消した。彼はここで生きるために、「今までの生活に棒を引いた」。だが、彼は三日後にテュルクハイム収容所に移送されたが、そこでは、収容所で拘留された人々を心理学的に観察した。彼は収容所生活に適応するとともに、自ら案出した暗号で自らの体験と考察を密かに記録した。彼が収容所の生活で納得したことは、「人間はすべてに慣れ得るものだ」というロシアの作家ドストエフスキーの命題だった（『夜の家の記録』、一八六〇年）。

さて、ナチス・ドイツ政権は一貫して反ユダヤ主義の人種主義イデオロギーを強行した。ドイツ軍は占領したポーランド南西部に大規模な絶滅収容所を建設した。私たちはそのうちの一つ、ビルケナウ絶滅収容所（一九四一年一〇月、建設）を見学した。それ以前、ドイツ・ベルリン郊外でヴァンゼー会議が行われた。ヒトラー政権の高官一五名が出席し、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅をテーマにして「ユダヤ人問題の最終的解決」を決定した。すでに数一〇万人近いユダヤ人が迫害され、殺害されていたが、この会議の決定によってますますユダヤ人の大量虐殺（ホロコースト）が実行された。

私はこの絶滅収容所で一五歳頃の見学グループを見た。引率した先生が中腰になり、土のなかから小さな白い固形物を拾い、生徒に「これは人骨の破片だ」と説明した。生徒はゾッとしたような表情をしていた。私はおぞましくなって、そこに立っていられなかったことを、今でも鮮明に思い出し、戦慄を覚える。

抑留者の焼死体の処理は、生かされた抑留者の仕事だったのであろう。用済みになった抑留者もいずれ抹殺され、どのように焼死体となるのか、おそらく恐怖にかられながら、カポーは少しでも生き延びるために焼死体の処理にあたっていたのであろう。カポーはこのような焼死体などを処理するために親衛隊幹部によって「選抜」された抑留者である。その多くは、抑留所に移送されたドイツの常習犯罪者が任命され、彼らは監視兵に迎合し、監視兵以上に抑留者に厳しく命令し、気分次第で過酷に殴打したという。

私の見学の順序をもとに戻すと、この収容所に着き、抑留者から「死の門」と呼ばれた監視塔本館、その二階の監視室から所内を眺望した。広大な平地のはるかかなたに展示用に老朽化した木造の収容棟が見えた（この収容棟はドイツ軍の馬小屋をモデルにして造られた）。各収容棟には木製の粗末な三段の蚕棚状のベッドがおかれ、この狭い空間に七〇〇人から一〇〇〇人の抑留者が寝泊まりしたという。使用されたこともない赤レンガ造りの暖炉があり、そこには死者を慰霊する花束が供えられていた。

とではない。ドイツ社会哲学者のアドルノ（ユダヤ系）は、ヒトラー・ナチスが政権を掌握すると、フランクフルト大学の公職を追放され、アメリカへ亡命した。戦後、西ドイツに帰国してフランクフルト大学で研究と教育に尽力し、フランクフルト学派を主宰した。その彼は「アウシュビッツ以後の教育」としてナチス・ドイツの人種主義と権威主義の克服を提唱した。

戦争末期、ユダヤ系のイタリア人作家レーヴィはアウシュビッツ強制収容所に抑留され、奇跡的に救出された。彼は「世界のどこであろうとも、『人間』の根本的自由と平等を否認し始める国があったら、その国は強制収容所体制に向かう」と警告し、現在もなおファシズムはまだ死にたえていないと断言した。彼は抑圧され、支配されたアウシュビッツ体制を拒否し、「人間」の自由と平等を希求したのである（邦訳、レーヴィ『アウシュビッツは終わらない―あるイタリア人生存者の考察』、一九七六年）。

一九八五年五月八日、ドイツ連邦共和国の元フォン・ヴァイツゼッカー大統領は、ドイツ敗戦四〇周年に「荒れ野の四〇年」と題して、ドイツ連邦議会で記念講演を行った。彼は国民にドイツ敗戦の五月八日こそが誠実かつ純粋に心に刻むための日であり、歴史の歩みに思いをこらす日であると提唱した。

ヴァイツゼッカー大統領は演説で「問題なのは過去を



ビルケナウ絶滅収容所
1987年8月6日

広大な平地に数多くの古びた暖炉と細長い煙突を見た。そこにはすでに朽ちて撤去された収容棟が林立されていたのであろう。戦争末期、ソ連軍の到着直前、ドイツ親衛隊員はガス殺棟と死体焼却棟を爆破して撤退したという。私たちが見たのは戦後に復元されたガス棟と死体焼却棟だった。

五　戦後世界の「原点」だ

誰もが指摘するように、アウシュビッツ強制収容所とビルケナウ絶滅収容所は人間がどこまで非人間的になり得るかという狂気と頽廃の象徴であろう。ここで、あの収容所はドイツ人のみがなし得た極限状況などというこ

克服することではない」。「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも目を閉ざすことになる。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすい」からだと警告した。ヴァイツゼッカー大統領は演説で、ドイツ国民にナチス・ドイツの「過去に目を閉ざす」ことなく、「非人間的な行為を心に刻め」と警告した。彼の高潔な倫理と敬虔な宗教心にたいして、世界的に注目され、共感を得た。

今や、私はボケ込み、過去の見聞などは忘却のかなたに消えようとしている。だが、過去のアウシュビッツと広島、そして南京大虐殺に「目を閉ざす」ことは出来ないでいる。私が認知症になれば、これらの非人間的な惨劇を忘却するであろう。そこで、完全に忘却する前に、本誌に寄稿することにした。残念ながら、一時期とはいえ、如何に冷酷で無慈悲な収容所と絶滅収容所を成立させた「支配と服従」の社会構造に言及することは出来なかった。

補遺　映画「ショアー」を鑑賞する

フランスのクロード・ランズマン監督作品「ショアー」（一九八五年）は、世界第二次大戦末期のナチス・ドイツの絶滅収容所のホロコースト（ユダヤ人大虐殺）をテーマにした。絶滅収容所から奇跡的に生還した生存者や目撃者が証言するインタビューの映像記録であり、上映時間九時間三〇分におよぶ劇場用映画である。

ところが、登場人物が語る言語はポーランド語、ヘブライ語、イディシュ語（中欧、東欧のユダヤ人の共通語）、ドイツ語など多種多様である。それを字幕に翻訳するには多額な経費と上映時間の長さからして、商業的に成り立つ劇場向きの映画ではない。この映画が封切りされると、ベルリン映画祭でカリガリ賞を受賞し、さらにフランスをはじめ世界的に衝撃を与えた。

日本では封切後、一〇年目にやっと放映された。私は衛星放送テレビで三夜連続三時間半、何時になく緊張して鑑賞した。なお、これまでユダヤ人大虐殺をロシア語で「ポグロム」、ギリシャ語で「ホロコースト」と表現されてきたが、ランズマンはヘブライ語をラテン文字にして「ショアー」と表現した。以後、フランスでは「ホロコースト」ではなく、「ラ・ショアー」と表現されるようになったという。

ランズマンは映像を現在の時点から再構成すること、つまり、生存者を収容所とその周辺で過去の体験の記憶をよみがえらせて証言させた。要するに、「証言者の過去を現在形で生き直した」のである。そこで、ナチス強制収容所とは異なり、拘束したユダヤ人を対象に絶滅収容所の抑留者の他、その収容所の元親衛隊員（隠し撮り）、列車のダイヤを編成したドイツ人国鉄職員、移送したポーランド人の列車運転手を登場させている。以下

では登場人物のうち、二人の生存者の証言を紹介する。

ポーランドのヘウムノ絶滅収容所の生存者の一人は、ユダヤ人が殺害された出来事を克明に証言している。彼は「特別労務班」(〈Sonderkommando〉と言われていた)の一員として生存を許された。彼は親衛隊員の指示に従い、ガス殺されることを知りながら、抑留者を鋼鉄製の装甲トラックに乗せた。さらに彼はガスで殺害された死体の処理、死体をすり状に掘った穴に埋める作業に従事した。その作業中、妻と子供の死体を見て、ともに死にたいと親衛隊員に申し出たが、拒否された。それ以後も、死体の処理を強制的に従事させられた。

もう一人のユダヤ系チェコ人は、アウシュビッツ強制収容所から生還した。彼は「特別労務班」の一員として死体焼却棟で焼死体の処理に従事させられた。同じユダヤ系チェコ人の抑留者がガス室で殺害の準備が進められていることを知った。彼はガス室の近くで親衛隊によって殴打され、脱衣場と称するガス室に追い立てられ、脱衣することを拒否した。彼らは一斉に「チェコの国歌」と「希望の歌」(のちに、イスラエルの国歌)を合唱した。

「特別労務隊」の彼は同郷人・同国人と一緒に死ぬことを決意し、ガス室に入ろうとした。すでにガス室にいた女性から彼に「一緒に死ぬことは無意味だ」、「私たちのなめた苦しみ、私たちの受けた不正を……、証言してくれなければだめだ」と忠告された。彼は奇跡的に生還し、絶滅収容所で目撃し、体験したことを克明に証言した(だが、特別労務班の脱出はほとんど不可能であった。なお、特別労務班は一般にカポー〔Kapo〕と称された)。

私がランズマン監督の映画を見て理解したことは、ユダヤ人絶滅収容所はナチス強制収容所の延長線上に建設され、機能したのではないということである。私が見学した限りでは、アウシュビッツ強制収容所(第一)とビルケナウ絶滅収容所(第二)のガス室と死体焼却室(クレマトリウム、火葬場)の規模があまりにも相違していることだった。後者の絶滅収容所のガス殺棟と死体焼却棟は貨物列車で移送された抑留者をもっぱら殺害する目的で建設されたのだと推測した。

フランクルは戦後の自己の臨床経験から「強制収容所は人間世界の縮図以外の何ものでもなかった」し、「強制収容所の体験から得たものは、そのまま現在の社会状況に適応出来る」と言う。なぜなら、人生において「生きる意志」の確証出来ない欲求不満、「実存的欲求不満」が観察され、それは抑留所が直面した精神的に認められるからである(フランクル、訳書、『〈生きる意味〉を求めて』、六七年)。ナチス強制収容所は人間が生きるための「極限状況」である。私たちはこの種の極限状況を生きて体験した彼らを忘れることは出来ない。

二〇二〇年四月二〇日　脱稿

性と化粧の物語(十九)

鈴木守

第三話　性と古代の化粧(三)

本誌一五四号の合評会に際し、会員諸氏から貴重な御意見を賜り感謝しております。さて、本号では皆様方の御意見を踏まえ、著者なりに、草創期のギリシア化粧史に焦点を当てて、再考する事にしました。

第三項　古代ギリシアの草創期の化粧史

ギリシアでは神話の中で、「化粧を発見したのはアフロディテ、その使用を広めたのは、トロイのヘレン」と物語っていたが、当然、実話とは思えません。しかし、神話以外に古代ギリシア草創期の化粧を記した資料が不在故、神話を採用して、アフロディテとヘレンの時代を古代ギリシア発祥の時代と仮定して話を進めます。

①　ヘレンとトロイ戦争：　ヘレンはオリンポス山頂の神々の主座ゼウス(別称ジュピター)とレダの間に出来た娘で、スパルタ王メネラウスの妃になったが、彼女の美貌に魅せられたトロイの王子パリスが、彼女を誘拐した事に端を発し、ギリシアとトロイの間で10年に及ぶ戦戈(せんか)を交えたとされ、トロイ戦争は前12世紀年代の出来事でした。

②　シュリーマンの業績：　トロイ戦役と云えば、ドイツの考古学者シュリーマンの業績に触れざるを得ません。彼は少年時代にホメロスの詩に感動し、長じてもその感動を忘れ難く、職を転々と変え乍ら蓄財し、私費を投じて、トロイ戦跡発掘に専心。ついに一八七一年に小アジア北西部トロイの地で、戦跡を発見し、トロイ戦争の実在を証明。彼のこの発見以前のトロイ戦役は、伝

説上の戦いと見做されていたが、彼の業績により一躍、歴史学上実在の戦役に格付けされた。

③　浴後の香油化粧：　古い話だが、現役の頃ポーラ文化研究所の図書室で、セールスマン教育用に化粧文化に関する書を漁っていると、おしゃれの文化史の中で、著者春山行夫氏は「ホメロスの時代（前9世紀頃）には化粧と云う事は殆ど知られておらず、男女とも入浴後に香油を塗る程度の化粧しか知らなかった」と云う。

その後、パンセ・デランドル共著の美容の歴史を入手。目を通すと、その書にも「ホメロスの詩に歌われた時代のギリシアは男も女も、水浴の後で身体に香油を塗る事しか知らなかった」と記述していた。

この両書を対比すると、共通して、古代ギリシアの人達は、化粧を殆ど知らなかったが、唯一、水浴後に香油を塗布する化粧（以下、浴後の香油化粧と略称）を施していたが、この化粧様式を採用していた時代は、美容の歴史では「ホメロスの詩に歌われたいた時代」と記述していたが、おしゃれの文化史には「ホメロスの時代（前9世紀頃）には化粧と云う事は殆ど知られていなかった」と述べていた。

尚、美容の歴史には具体的な年代が記述されていなかった為、調べると、ホメロスの詩イリアスにトロイ戦争末期のエビデンスが歌われているので、美容の歴史に「ホメロスの詩に歌われた時代」と記されている時代はトロイ戦争末期に該当する。

④　ミケーネ文明の歴史：　おしゃれの文化史には「ホメロスの時代、前九〇〇年頃には、化粧と云う事は殆ど知られていなかった」と記されていた。と云う事は前九〇〇年頃は化粧風習の低迷期が想定され、その原因探索をすると、高等学校の歴史教科書に「ミケーネ文明は前一〇〇〇年頃、ドーリア人によって破壊」と云う衝撃的な記事が記載されていた。咄嗟の判断で、ミケーネ文明の歴史を辿る事にした。

ミケーネ文明は、クレタ文明と共にエーゲ文明を構成し、この文明は前二〇〇〇年頃から、南下して定住したアカイア人が培った文明と云われ、前15世紀頃から全盛期を迎えて一時期、エーゲ海一帯を配した。しかし、前一二〇〇年頃になると、ドーリア人が抬頭し、ミケーネ、チリンスを攻略し、前一〇〇年には前述したように、ミケーネ文明を破壊炎上させて、ミケーネ文明の命脈を断ち、歴史はミケーネの時代から古代ギリシア文明の時代へ移行した。ギリシアでは、ミケーネ文明解体後、新しい動きが芽生えるまで、約3世紀が経過したが、その間、前9～8世紀にはアクロポリスを中心に人々の集住が行われ、各地に都市国家ポリスが成立した。

尚、世界美術全集には、チリンス出土の壁画に『箱を持つ宮女』が描かれ、ミケネ出土の漆喰製男子頭部が掲載され、宮女は髪を手入れし、顔面には化粧を施していた。男性像には額、顎部、左右両頬に点状の化粧を施していた。従って、ミケーネの男女は浴後の香油化粧とは別の化粧を施していたが、ドーリア人にミケーネの民諸共化粧風習も葬り去ったのである。

斯くして、美容の歴史が述べているように、ホメロスの詩に歌われた時代、理解り易く云えば、ミケーネが消滅した前一〇〇〇年以後のギリシア人は水浴後に香油を塗る程度の化粧しか残していなかった。

⑤　アテネ・アクロポリスの若き乙女像：　前6世紀末頃、アテネで活躍していた彫刻家の遺品に一群の若き乙女像があった。現在、それらの乙女像はアテネのアクロポリス美術館で見る事ができる。これらの乙女像のモデルは前6世紀頃、女神アテナに奉仕していた貴族の娘達の全身像である。女神アテナはギリシア神話におけるアテネの守護神で、知恵、芸術、工芸、戦術の女神であった。

若き乙女像は、ミケネ時代の壁画『箱を持つ宮女図』の様に、頭髪を編み、側頭部や後頭部から腰部附近まで垂らし、顔容には化粧の跡を見る事が出来た。乙女達の化粧姿を見て、前12世紀頃、ヘレンと共に化粧風習を拡めようとしたアフロディテの計画がドーリア人によって阻まれた事を思い、今はなきヘレンの代りに選ばれた美麗な貴族の乙女達にアフロディテが発見した化粧料でメーク・アップさせ、化粧文化の再生を祈願したのではなかろうかと想像した。

⑥　ギリシア神話とサッフォー：　「化粧品を発見したのはアフロディテ、その使用を広めたのはトロイのヘレン」と云うギリシア神話を冒頭で紹介した。しかし、この神話は史実に基づく実話とは思えない事も述べた。従って、本項を再考している間、常に腑ない事と思いつつ、頭の片隅で稔り少ないテーマ「創作者は誰だ」を考えていた。すると、その創作者としてサッフォーの名が掠めた。

サッフォーは前7世紀末にエーゲ海北東部レスボス島の貴族の家に美人娘として出生した。サッフォーは美の女神アフロディテを崇拝し、アフロディテはサッフォーが属する女性集団の守護神とされ、サッフォーの詩にはアフロディテの名が屢々登場した。

サッフォーの詩は素直で正直な表現で、尚且つ美しい言葉に満ち、ホメロスと名聲を競う程と評価されていた。彼女の書いた詩は現在、9巻程残っているようである。

斯様にサッフォーの履歴や資質を知るに及んで、彼女が10年早くアテネで出生していれば、確実にアテネ・アクロポリスの若き乙女の一人として選ばれている筈だと

思うとともに、何の脈絡がないままに、もしかして「化粧品を発見したのはアフロディテ、化粧を広めたのはヘレン」の神話物語を創作したのは、サッフォーではないかと想像した。

又、それとは別に、アフロディテもサッフォーの生い立ちや美質を知るに及んで、「化粧の本質は美の演出にあり」と教示したのではないかと想像した。アフロディテの教示に敏感に反応したサッフォーは「ギリシアの化粧は美神アフロディテが発見し、美女ヘレンが、その使用を広めた」と応答した様子が窺えたので、サッフォーの言を結論として草を閉じる事にする。

引用文献

J・パンセ、I・デランドル共著、青山典子訳、美容の歴史、白水社、一九六一

春山行夫著、おしゃれの文化史、平凡社、一九七六

参考文献

世界美術全集5巻、ギリシアI、平凡社、一九五六

人名大辞典縮刷版、むさし野書房、一九六五

高橋秀ほか、高等世界史、帝国書院、一九八四

鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九三

クロニック世界全史、講談社、一九九四

鈴木守、古代ヨーロッパの化粧文化、本誌一一四号、二〇〇九

禅語『随処作主』

（内田の国の権現物語（2））

横山正義

遠州地方に報徳を伝えたのは、安居院（あぐい）庄七です。庄七は修験道の家に生まれ、安居院家に養子となったという。もともと、安居院家は比叡山東塔の竹林院の里坊である。今の西法寺（さいほうじ）がその跡だと言われています。

安居院家は平安時代の終わりに、関東武士に仏教を布教するために、送り込まれた家柄です。

安居院家の初代は信西の子・澄憲です。澄憲は唱導家即ち演説家でした。関東に行ったのは澄憲の子・賢聖です。

最初に話を進めたのは熊谷直実です。青蓮院門主慈円は、徒然草（二二六段）によれば一芸あるものは下部までも召置きて抱えたと言う。青蓮門院に法然、聖覚等も身を寄せていました。慈円は「武士の世」が来たと判断しました。慈円、寿永二（一一八三）年より建久九（一一九八）年。

吾妻鏡は史実に基づき、真実であると、歴史上一級の資料ですが、熊谷直実が法然の弟子に成る、下りは作文（第十五　建久六年八月十日西暦一一九五）で、史実と違うという説があります。次の文です。

熊谷二郎直実法師、京都より参向す（鎌倉に）。往日の武道を辞し、来世の仏縁を求めてよりこのかた、ひとえに心を西刹に繋（か）け、つひに跡を東山にくらうす。今度将軍家御在京（源頼朝）の間、所存あるひとによって参せず、追って千程の剣難を凌ぎ、泣く泣く五内の蓄懐を述ぶ。よって御前に召すに、（直実は）まづ穢土に厭離し、浄土を欣求するの旨趣を申す。次に兵法の用意、干（くわ）の故実等を談じたてまつる。（直実は）身今法体すといへども、心なほ真俗を兼ぬ。聞く者感嘆せずいふことなし。今日すなわち武蔵国に下向すと云々。しきりにこれを留めしめられたまふといへども、「後日参

上します」と称して退出すると云々。

以上、賢聖は吾妻鏡の編纂にも加わり、熊谷直実が法然の弟子になる下りを作文したというのです。

平家物語によれば、熊谷直実は源平の戦い（一一八五）で十五歳の平敦盛を殺害し先陣をきりました。これが評価され、領土を熊谷に承認されます。そして武士とは云え、人を殺害すれば、心を病むのです。京都の慈円は関東の武士への布教を試み、賢聖に託したのです。

当地、菊川市内田は慈円門主青蓮院の荘園でした。応声教院には法然、熊谷直実の逸話が残されています。安居院でまとめられた、諏訪大明神が応声教院の守護神であります。

安居院家の系図です。

信西入道（藤原通憲、保元の乱で活躍）―澄憲―聖覚―隆昌―憲実―憲基―憲守―親憲‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐庄七

以上『尊卑分脈』による。

安居院家はその後、神道集（南北朝、後光厳院の文和・延文年間、一三五二～一三六二）をまとめます。当時、神道には「教え」というものはありませんでした。安居院家は仏教の教えを神道の教えとし、庶民を救うのは神としたのです。権現、明神、大菩薩のシステムです。

二宮尊徳の物語では、尊徳は桜町の財政再建改革に取り組み、部下に厳しく批判され、逃げ帰ります。

二宮尊徳は成田山新勝寺に参禅します。ここで安居院家の目的、仏教が出てきます。尊徳は何時までも桜町に行きません。仕方なく、部下は自分で尊徳の仕法で財政再建をはじめます。尊徳は帰り、伴に協力し、成功していきます。

安居院家の「窮したら仏教」、二宮尊徳、熊谷直実と同じです。

禅の言葉に『随処作主』（ずいしょに主となる）という言葉があります。『臨済録（りんざいろく）』にある「随処に主と作れば、立処皆真なり」の前半部である。主とは主人公とも真人とも言い得るが、要するに真実の自己のことである。自分以外のものに使われるのではなく、本来の自己が現前しているのであれば、その場その時が全て真実であるということ。

二宮尊徳は幼少の頃から『論語』、『五経』、『知致』など独学で学んでいたが、挫折以後、仏教を学び、協力者との上下関係が師と師弟の関係になり、財政再建を目的に取り込んで、報徳という独自の世界を切り開きます。

日本経済新聞（平成四年四月二十六日　日曜日四面）参照。

『随処作主』、この言葉は菊川市内田、ご出身で「未来脂考」、「バイオから宇宙まで」東証一部日本油脂㈱の創業に参画され、社長会長を勤められた岡本甲子男氏の座右の銘でした。

当地、菊川市内田の武将、内田氏はこの権現思想をもって、承久の乱（一二二一）の恩賞の地として、獲得した石見横田（島根県）の地で、権現のシステムを伝承し、豊田神社を創建します。

一、特別神社豊田神社由緒概略

御祭神　天津大神多祁阿久豆魂命

天津大神多祁阿久豆魂命は神皇産霊尊の神子で第八代孝元天皇の御代皇紀四八五年（紀元前一七五）に御鎮座と伝えられ霊験まことにあらたかであったが何時の頃からか神威力荒振る神となられたので、皇紀一六九五年（一〇三五）三井寺の僧正此の地に下向して九ケの壷に酒を入れ祭器と共に地中に封じ奉りました。

その後、領主豊田致親は皇紀一九一九年（一二五九）神宮寺を建て育王山石塔寺第権現と尊号を改め崇め奉りました。

それから約四百年の後、世の中は乱れ国民の苦しみがひどくなった皇紀二三六六年（一七〇六）時の神主山根権太夫晴栄は聖夢に「世に出て氏子の守りもとたるべし」とのお告げを受け、領主亀井慈親に現上　命をうけてご神体と九ケの壷を掘り出しお祭り申し上げました。

明治三年豊田神社と改名になり

明治七年郷社に定められましたが

明治四十四年御山から現在地に移されました。

さらに大正元年大境の剣王神社上野の天満宮が合祀されました。

又昭和五十年には特別神社に指定される。

二、松洞山　長虎寺　略縁記（島根県横田町一三八六）

当寺は、室町時代　文和元年（一三五二年）に、豊田郷地頭職石見庄内　七人の旗頭　内田三郎左衛門尉致忠が国家安寧の祈願と、石州合戦南朝方で戦った　内田弥八郎致景や、その戦死者、そして、貞松（三本松）に豊田城を築いた　内田左衛門三郎致茂以下の菩薩をともら（葬式）うため　光外士明神大禅師を開祖として、忠臣勇士の墓の傍らに館を創建し松洞庵と号した。

その後、室町時代享禄三年（一五三〇）益田の医光寺第六世実際士誠大禅師を迎えて仏殿を再興し、松洞山長寿寺と改称する。

江戸時代にはいり、元文四年に仏殿不慮の火災にあい、その後、また、寛政十一年にも不孝にして火災にあうが、檀信徒の熱意により再建なる。

明治十二年六月二十一日東福寺の直末となる。

大正二年二月六日　夜九時　不幸にしてまた火災にあい、瞬時にして殿堂は焦土化する。壮観変じて、観るもの痛嘆悲観し霊蹟を惜しむ。

当時の住職　住職二十四世　参要宗和尚再建を発願し、大正七年四月に立派な本堂を再建する。

本寺は、再三罹災するも、その当時の住職や檀信徒の篤志や念力の厚さにより、町内随一の伽藍の建設をみる。

その後、平成十二年七月　本堂の屋根のふき替えを完成して、今日に至る。

賢聖の著と云われる「神道集」の内容です。

「熊野権現の事、二所権現の事、諏訪大明神の秋山祭の事、諏訪大明神の五月会の事、三島大明神の事、児持山大明神の事、蟻通し明神の事、橋姫明神の事、赤城大明神の事、伊香保大明神の事、葦刈明神の事、覚満大菩薩の事、鏡の宮の事、釜神の事、富士浅間大菩薩の事、八ケ権現の事、那波八郎大明神の事、北野天神の事、諏訪縁起の事。」等です。

『参考文献』

二宮金次郎の一生　三戸岡道夫　栄光出版社
神道集　訳者　貴志正造　平凡社
徒然草　吉田兼好　永積安明　小学館
日本経済新聞　（平成四年四月二十六日日曜日四面）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

積小為大の精神

浅野博文

一、神やぶれたまふ

「神やぶれたまふ」。神道の神がキリスト教の神に敗れたとの悲嘆を詩に込めたのは、折口信夫博士であつた。アメリカとの戦争により自身も御子息を亡くし、終戦の詔書の渙発から天皇の人間宣言と価値観が一変してゆく失意の中でのものであつた。

特に、大東亜戦争での死者の魂が鎮まる依り代については大きな課題で、戦没者が生前に殉じた皇国の概念は、天皇陛下の人間宣言とともに潰え果てた点は、柳田国男博士も問題意識を共有していた。

かつて、小泉八雲（ラフカディオ＝ハーン）が感嘆した様に、我が国の伝統として、君国の安泰に命を捨てた人は最高の名誉として、陛下より位階が与へられ、自らも神々の末座末席に連なり得る。今日も治安維持や安全保障の職に務めてゐた公人が殉職した場合、追贈といふ形で叙勲せられたり、全国の護国神社には、必ず殉職自衛官や警察官等が合祀されてゐる。

その事は、神職が神前にて唱へられる延喜式祝詞（大祓詞）にも記されてゐる様に、神々は全て君国に貢献し、君国を守護するものであり、日本人が神に祈り、神に願ふ所は、玉體の安寧と皇国の繁栄である所に由来する。

人間が信じるから神が存在するのではなくて、そこに神々が在らせられるが故に、天地が活動し、その中で我々もまた生かされてゐるといふのが、日本人の本来的精神である。

この「感恩報謝」に基づく「つつしみ」と「うやまひ」の心が、日本に於ける舶来の仏教やキリスト教にも継承され、社会に根を張り、それは特定の宗教を信仰しない人に対しても思想的影響を及ぼし、その思想が日本の文

化風俗となつて現れ、今日の国家社会を形成してゐると理解する。

戦後の外交問題への配慮から靖国神社に代わる参拝施設として国立の追悼施設建設の運動は既に有名である。これは、柳田・折口博士が危惧された問題が実際に表れたものと捉へるが、全国の護国神社の代表である靖国神社の役割が、産業革命の変化と同次元で論じられてはならない。

その時こそ「神やぶれたまふ」であり、皇国存立の基盤を失ふ時であり、動揺の危機に直面するものと認識する。

二、国民の責務

我が国を立憲民主国家と呼称するのは憲法学や歴史学から観ても正しくはないが、マスコミは相変はらず何の疑ひもなく使つてゐる。心ある人は分かつてはゐるが、国の安全保障をアメリカに委ねてゐる以上、政治経済教育文化に於いて、その干渉や検閲から逃れられないのかもしれないし、その事は色々な人から聞いたり、本で観たりもした（余談ではあるが、小生の出身大学である皇學館も、戦前は国立大学であつたが、敗戦による神道指令で廃学された。そして戦後有力政治家の支援の本で、立国の基盤にして、国家原理である神道の復活を目指し、国立大学としての再興を模索してゐたが、占領政策の残滓の根深い事を憂慮して断念した事情がある）。

特に、今日の情報化社会を支えるパソコンのOS（パソコンの頭脳に当たるもの）は、アップルやマイクロソフト社のものが市場を支配してゐるが、かつて国産OSとして有望であつたトロンが退けられ、マイクロソフト社のウィンドウズを採用する様になり、それを皮切りとして、日本のデジタル産業が振るはずに米国依存になつてしまつたのも、詰まる所は、国防の米国依存にあると考へる。

立憲民主国家としての我が国の実態が張りぼてであることは、国民の選挙権が十八歳以上から与へられてゐるにも拘らず、投票率に占める若者の割合が相当低い事である。これは新聞の無読者率とも比例するが、立憲民主国家であるならば、国民の政治参加の第一は選挙であり、本来それは国民の重要な義務である。

そして、選挙で選ばれた政治家は、国益を基礎にして外交を展開するのは戦前も戦後も同じである。もし、自分の国が損をするようなことを政府がしたら国民は黙つていない。現代は、人類を破滅させる強力な軍事力を持つ国が多いためさうはならないが、外交で折り合ひが着かなければ、必ず戦争になる。

まして、中朝の領海侵犯や不法占拠は、武力による侵略行為に当たるのだから、主権国家であるならば自衛のための武力を行使するのが普通であるのに、日本は警察や海上保安庁が動くのだから異常と言わざるを得ない。現行憲法の第一章・第一条に「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、日本国民の総意に基づく」とあるが、天皇が日本国民統合の象徴である以上、皇居の警備とは国防に相当するものだが、その重責を装備の軽い警察が担つているのもよく分からない。

個人的には、今後何らかの形で、戦争の危機に直面する可能性は高いと考へる。一見すると憲法にそのような条文は見当たらないが、もし戦争が始まつたら国民は命を賭けて戦ふのは義務なのであり、主権国家であるならば、そこは今日も変はることはない。「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼」出来なくなつた日が来た時、干戈をとつて戦ふのは古今東西変はることのない国民の責務である。

三、植民地支配の爪痕と精神のリカバリー

我が国を含め欧米列強による植民地支配の爪痕は深刻である。周知の如く、ヨーロッパ人の世界進出は彼らが自画自賛する十五世紀半ばの大航海時代が嚆矢である。日本に於いては応仁の乱の混乱期である。

一体、後の史家により「マホメットなくしてカール大帝なし」と評せられて、西洋中世の起点を八世紀に定めた時、十三世紀のルネッサンスとは合理主義精神を復活させた意味で近代の幕開けと考へるが、当時は古代以来最低水準にあつた自然科学のおかげで、軍事力も四海を制圧するどころか、十三世紀のモンゴル帝国のヨーロッパ侵攻に戦々恐々とした程で、銃砲火器の威力は東洋が西洋を圧倒してゐた。

ルネッサンスの三大発明と豪語する火薬と羅針盤も実際はシナが起源であり、しかも八世紀以降から地中海を抑えていたイスラム教徒を通じてヨーロッパに伝へられ、彼らはこれに手を加へたに過ぎなかつた。ともかくキリスト教の権威にすがるだけの中世ヨーロッパは文弱といふイメージしかない。十一世紀から十三世紀にかけて度々パレスチナに送つた十字軍も、壁のように立ちはだかるイスラム教徒の力には苦戦した。当時のイスラム勢力は学問に於いても軍事力に於いても中世ヨーロッパのそれを凌駕してゐたのである。

それでも、マルコポーロの『東方見聞録』により知り得たアジアへの関心は、地中海経由を避け、大西洋を西に向かつてでも布教と交易、世界制覇のためには何としても必要であつた。原理主義者の脳裏には、「産めよ、増えよ、地に満ちよ。地のすべての獣と空のすべての鳥は、地を這うすべてのものと海のすべての魚と共に、あなたたちの前に恐れおののき、あなたたちの手にゆだね

られる。動いている命あるものはすべてあなたたちの食料とするがよい。私はこれらすべてのものを、青草と同じようにあなたたちに与える」との旧約聖書の創世記の言葉が想起された。

旧教カトリックの大本山であるローマ教皇庁は、ポルトガル国王に対し、アフリカ南端（喜望峰）を巡つて東回りでインドに至る航海の途上で到達したすべての陸地を、永久に所領とする許可を与へた。一方、スペイン国王も、コロンブスが北アメリカ大陸への到達に成功すると、領有の承認をローマ教皇に求めたのである。

西洋人が自画自賛する大航海時代とは、ヨーロッパが世界の非白人国家以外の国を、単なる原料供給（奴隷も含む）地と製品市場とみなし、世界の民族祭祀を悉く根絶させてきた恐るべき人間破壊の宗教としてのキリスト教の誕生という意味で、エポックメーキングであつた。

一四九四年、大西洋上に南北に走る一本の直線が引かれた。線から東方で発見されるものは全てポルトガル王に属し、西方で発見されるものは全てスペイン王に属するというトルデシリヤス条約が、両国の間で結ばれた。当時のヨーロッパ人は、地球を分割し、全て自分達の領土とみなしたのであつた。その後のコルテスやピサロ等の略奪と発展の阻害は、原住民の人格（自尊心）を完全に破壊した。それは、欧米植民地支配の基軸として新教プロテスタントも続き、アメリカ、オセアニア、アジア、アフリカへと広がつて行つた。

人は精神と肉体が健全でなければ、事を成すことは出来ない。今や世界文明の進化発展は日進月歩である。アフリカ大陸に多く観られる植民地時代の人為的に形成された上置境界を原因とする民族紛争などは、元々文字を持たない地域であつたことも災ひし、失われた精神のリカバリーを遅らせてゐる。

今日も中南アメリカやアフリカ等で、自立が遅れ、資本や技術を外国に仰がなければならない問題は、かつて外国の暴力により歪められた民族の霊魂が鎮まらない点にあるのではないか、特に中南アメリカにはマヤやアステカ、インカの諸文明が隆盛を誇つていた。その先祖の霊魂と一体になる努力をせず、無批判にキリスト教国を自任し、目先の甘い利益（アマゾンの乱開発）に走るところに原因があるのではないか。

日本の明治維新は、君民一体となり建国の始祖にまで遡つて忠臣義士を祭り、また逆臣の魂が眠る寺院さえも保護をした。それは幽明一致の認識であり、それにより驚異的な発展飛躍が生み出された。これは、地球環境問題や経済問題を解決する上でも見逃してはならない部分であると思はれる。既に血縁上の同化が浸透し、解決は難しいが、今のグローバル（欧米化）体制の中で少しずつ、自らの依つて立つべきもの見定め、国家国民の拠り所として確立させてゆく努力以外に方法はないと思ふ。

四、帝国日本の自衛戦争

大東亜戦争とは本を糺せば、つくづく自衛戦争であつたと思ふ。『世界最終戦論』で東西文明の雄として日本とアメリカが戦ふことは運命であることを論じたのは石原莞爾陸軍中将であつた。実際、東京裁判の臨時法廷で証言してゐるやうに、その布石として満州事変を画策し、軍の満州建国の立案は石原の手になつたものであつた。

石原中将をはじめとして、アメリカと干戈を交へること自体が如何に無謀であるかは、当時の日本として共通の認識であつた。軍事力や産業資本力の面からも、国際社会に置かれてゐる日本の状況を考へれば当然の判断であつたし、日露戦争時に軍費調達や講和条約の面で助けられた恩義もあつた。したがつて、近代国家としての日本の発言力はとても欧米列強と対等に渡り合へるものではなかつたのが現実であつた。

特に、非白人・非キリスト教国への差別意識から侵略戦争や植民地政策を着々と進めて来た欧米列強は、一九一四年の第一次世界大戦が始まつたころには、既に地球の陸地の八十四パーセント（極地を除く）を支配してゐた。一方で、この欧米国家によるアンシャンレジームに対抗して構想されたのが、日本の大東亜共栄圏であつた。しかし、米英のような強固な同族意識もなければ、広く欧米人としての帰属意識を高められる古代ギリシア・ローマ時代の思想遺産やキリスト教といふ精神的支柱も欠いてゐた。東西に於ける彼我の相違を克服するには余りにも時間が足りなく、寂寥を禁じえなかつたと思ふ。いずれにせよ、機会純熟し時節到来するまでは、志を胸に秘め、今はただ列強の作り上げたシステムの中で、力を蓄えていくしかないとの意識だけは共通してゐた。省みて、日清日露の大戦で勝利した明治の外交は、そのことを痛切に感じてゐたが故に、極めて手堅く、用意は周到であつて、態度は謹慎であつた。その姿勢が、相手の隙に乗じて自らの版図を広げてきた欧米人に対し、却つて尊敬と信用を与へ、成功を勝ち得る結果を導いたのであつた。

しかし、その後は国民の浮華を戒める戊申詔書が度々発せられた点からも伺へる様に、日本のわずかな油断をアメリカだけは見逃さなかつた。日英の同盟関係を解消させ、日本を仮想敵国としてマークし、戦端を開く機会を伺つてゐた。そもそも、当時の欧米人の本質的性格とは金箔つきの人種差別主義であり、有色人種の建てた国など国として認めていなかつたことは周知の事実である。

とりわけアメリカ人とは、イギリス本国に居場所がなく、腹をすかして出稼ぎに来た開拓者の子孫である。戦略的には、一層の注意を必要としなければならなかつた

が、様々な条件を鑑みても限界は禁じ得なかつた。必勝を確信してゐたアメリカは、どう戦争に持ち込むかを謀略の柱とし、世界情勢を洞察してゐた。ハルノートを突きつけた時、戦後の占領政策の計画は既に用意済みであつた。帝国日本の神は、遂に白人の神に敗れたのであつた。

五、積小為大の精神

今日、海外から食料・原材料を輸入して工業製品を輸出する貿易構造は、明治維新以来、生糸輸出から始まり、低賃金による労働集約的な軽工業製品の輸出が行われ、国内向けとして重工業は軍需産業を中心として発展した。

戦前の最大の貿易相手国であつたアメリカとの輸出入対比表を観ても分かる様に、工業製品の国際競争力は低く、本格的に世界に認められ、輸出されるようになるのは敗戦後である。戦前からの重厚長大産業（鉄鋼業・造船業・化学工業）は高度経済成長の達成をピークに、軽薄短小へ転換し、今日のITを中心としたイノベーションに至つてゐる。

一体、日本の工業生産とは、農村から供給された低賃金の労働者が大量生産を支へる重要な担ひ手であつた。しかし、高度経済成長期の後に減少傾向に転じ、一九八〇年代後半のプラザ合意による円高を背景とした国内工場移転が進められた。さらに、二〇〇〇年代には、コスト削減（材料調達・輸送費や人件費の削減）を名目に、WTO加盟を契機に「世界の工場」として急速に台頭する中国など、グローバル化による新興国へ国内工場を移転した。

所謂、開発途上国への工場移転は、国内に於ける工業の空洞化も指摘されたが、資本主義は常に空洞化の痛みを技術革新による産業構造の転換によつて解消して来た。現に日本に於いては、知識集約型（ファインケミカル、機能性高分子、医薬品の開発やソフトウェアの開発、集積回路の設計などが知識集約型産業とされてゐる。知識集約型産業は一般的に高付加価値で先端的な設備を要し、特許法など、知的財産権の保護がなければ存続し得ないため、先進国に多く見られる。専門的な知識、技能を有する人材を要するため、一種の労働集約型産業ともいへる）の先端工業に活路を見出そうとしてゐる。

やはり、そのためにも第一に教育の充実であり、これは国を興す上での不易の原理である。加へて、情報の公開と集積及びセキュリティ対策が益々必要となつて来る。殊に明治維新以来、我が国の学校教育に於いては、欧米の大学と極端に異なつて、外国語（英語）教育に多くの時間を取られるが、英語教育の重視が富国政策に他ならないからである。

実際、自然科学分野で世界的権威のある『ネイチャー』『サイエンス』は英米の出版社により発行され、世界中から優秀な頭脳が集まる大学トップランキングには、英米の大学が占める（オックスフォード・ケンブリッジ・ハーバード・MITなど）。また、第一次世界大戦以前は、収奪した植民地の富を背景として、世界の工場として名を馳せてゐたイギリスのポンドが世界の基軸通貨として機能し、それ以降は同族国家アメリカのドルが世界経済の中心となり今日に至つてゐる。ニューヨークにはドルの力を背景に、世界の金融の中心地として世界銀行（国際復興開発銀行）の本部が置かれ、ワシントンには国際通貨基金（IMF）の本部が置かれてゐる。これらの現実を無視して、英語から離れては、これからの日本の興隆はあり得ない。

かつて、職人や商人にを中心として、近代ヨーロッパで誕生した産業革命と資本主義（商業簿記など）は、後に大学や研究機関の学問と深く結び付き、発展飛躍を遂げ今日に至つてゐるが、自然科学分野や経済学分野のノーベル賞受賞者を欧米人が占めることはその証左である。科学技術などの研究が英語・フランス語・ドイツ語など、ヨーロッパ系言語によつて行はれ、学問のグローバル化は、事実上、欧米語化を意味してゐる。世界の高度な研究成果は外国語で発表され、非欧米語の日本語は紛れもなく不利である（自動翻訳機の進歩で言葉の壁は解消されつつある）。しかし、欧米人によつて構築されたシステムを変へるのは容易なことではない。月並みだが、やはりこの仕組みの中で成長して力を蓄え、少しづつ世界を変えていくしかない。小を積みて大と為す精神でやるしかない。

デジタルデバイド（情報格差）の言葉に象徴される様に、世代間の認識と活動の場に於いて、隔世の感を禁じ得ない部分もあるが、一方で、ユビキタス（ネットの恩恵に与る）社会に奢り、自分が神様にでもなつたかのやうに、大きくて楽なことばかり考へる人間を観ると実に滑稽に感じる。それよりも、個人は身近な習慣として最低限、新聞だけは読んで情報を収集し、現実社会の本質を掴む意志と努力だけは忘れてはならないと思ふし、その効力はかなり大きいと確信する。

（了）

訂正

前回の拙稿にて、治国（摂・河・泉）の英主としての大楠公の姿が太平記に描かれてゐるとしたが、実際はそんな記事は存在しない。それは太平記のみならず、他の史料にあつても忠臣の鏡や武人の典型としては書かれてはゐても、牧民官としての実際を知る事は殆ど出来ない。しかし、勤倹譲の二宮先生の報徳仕法が、国家の防貧（富

有）を目的とし、常に防貧がなされてこそ治安維持や安全保障も厳然となる事を示されてきた事績からも分かる様に、あの足利の勢力強大の中にあつて、それに抗した楠公への絶賛の辞を惜しまなかつた作者の「平時の準備の周到であつたことは言ふに及ばず」との想ひを敢えて汲み取つたのである。それは、成文憲法を有し、議会政治を自画自賛する西洋人を向ふに廻して堂々と「国體ありて国體論なき姿が我国の美風」であつたと論じた愛国者の気持と同様である。心ある士は、嘗て謀反の嫌疑をかけられ、我が鶺鴒の花押には目があるとして、堂々と身の潔白を示した若き政宗公の勇気と才知を、度量を以て認め、敢へて不問とされた豊太閤の先例に倣はれるであらう。

高山右近（七）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

関白秀吉から、高山右近が、昨十九日、明石六万石の没収と右近自身の追放処分を受けた博多筥崎の高山陣営は、今日中の陣営撤去を命ぜられていた。撤去に当たり、筥崎宮から借りて使用していた建物や敷地の清掃は終わって、家臣が帰り支度を整えている中を、高山右近は小姓三名を伴って、行き先は誰にも告げず博多湾の船着き場に向かった。

船着き場には右近の小姓篠田伊織が依頼した、博多湾内の能古島迄渡る船を出してくれる漁師が、漁船を用意して待っていた。四人が乗りこむと、漁船は静かに無風の夏の宵の海に、能古島を目指して進み始めた。漁師にも高山右近と知れないように、船中ではお互いに話をしない、船頭との話はすべて篠田伊織がすることにしていた。半刻（はんこく）もしないうちに、船は能古島についた。船頭が

「お侍さん方、寝るところはあるのかね」

と聞いたので、篠田伊織は

「そこに建っている古い建物だよ。大分昔、使っていた建物と聞いているが、何とかなると思うよ」

と言うと、船頭は

「もう何年も人が入っていないと聞いている。中がどうなっているかわからないよ」

「今夜は横になれるところがあればそれで十分だ。明日の昼に片付けてみよう」

と、いかにも暫くここに住むようなニュアンスで答えると、船頭は何ら不審に思わず、十分に貰った手当の礼を言って船に乗り込み博多へ戻って行った。

十年くらい前であろうか、イエズス会宣教師が、当時

無人島にも等しかったこの島に、宣教事務の拠点として建築したと言われている平屋の建物である。蝋燭の灯りの下で、小姓たちは雑然としている床の物を端に寄せ、四人が横になることができるだけのスペースを作ってそこに座り、右近が短く食前の祈りをした後、持参した簡単な夕食を食べ始めた。右近は

「野戦で野宿することを考えれば、今夜、ここで横になることができれば十分だ。皆も我慢してくれ」

というと、篠田が

「殿の寝所を用意することが出来なくて申し訳ありません」

というと、右近は

「そのようなことは気にする必要はない。これからもこのようなことがあるかもわからないが、この四人のこのような場では、殿も小姓もない。みな同じ神様の子どもじゃないか」

というと、小姓たち三人は

「はっ！」

と同時に答えて、黙々と箸を動かし始めた。

夕食後、右近は小姓たちに明日朝、小西行長から回される船で小西領の播州室津に向かうことなどを話した後、右近は一人浜辺に出た。時刻は亥の刻（現在の午後十時）になろうとしている。博多湾内の海は静かで、風もなく、見上げるとこんなに多くの星があるのかと思うほど、満天に星がきらめいていた。月は出ていない。足元の、寄せては返す波も静かに音もなくうち返している。

右近は今宵、流浪の一歩を踏み出したが、これからどうするか、全く決めていない。決めるだけの時間がなかった。寝る時間もなく、妻・父・城の留守番家老、城内教会の主任司祭などに用件のみの手紙を書くのが精一杯であった。

小西行長が心配して、明日朝、右近を自領の播州室津へ送ろう、その上で、関白に見つからないような隠棲場所も考えておく、と言ってくれたので先ずはお願いすることにした。

秀吉の右近へのキリシタン棄教命令とバテレン全員の国外追放は、宗教としてのキリシタンを禁教しているわけではない。今後、バテレンの国外追放と右近への禁教が、キリシタンの国内全面禁教に繋がるのか、今はわからない。しかし、秀吉から咎を受けて秀吉が追放した者を、秀吉傘下の大名等が匿うことはできない。当面、小西行長の支配地内に身を隠すとしても、人目に触れることや、ましてや小西行長が設立した教会に出向くことはできない。小西行長が匿っていることが秀吉の耳に入るような行動はとることはできない。とすると何処へ行く？　バテレンが実質的に関与している教会はあるが、今回の全バテレンの国外追放では、既にそれは叶わない。堺では目につきやすい。当面、小西行長支配地のどこかで、こ

れからの秀吉のキリシタンに対する姿勢を眺めて、誰にも迷惑を掛けないで自分が生きてゆくことができる場があるかどうかしっかり見極めるしかない。今はキリシタン小西行長の好意にお願いするしかない。右近一家が枕するところがない現況も、右近自身の信仰を深めるために神が与えられた信仰的試練の場と感謝して、今ある教会と、信徒の信仰的安泰を祈り、そして高山一族と我が身のあり方を考えてゆかざるを得ないことを改めて反芻していた。

建物内に戻って、蝋燭を灯している室内に入ってゆくと小姓三人はまだ起きていたので、右近は

「明日からのことで分かっているのは小西家の船で、播州室津港に行くことだけだ。いろいろと不安があると思うが、全てを神デウスにお任せして、心配しないで寝ろ」

と言って、右近は右近用に広げた場所に横になった。

翌朝辰の刻（午前八時）には、船の舳先に小西家の旗をなびかせた帆船が船着き場に着いていた。それに気がついた篠田は外に出て船に向かい、船からこちらにくる二人の男に、

「失礼とは思うが、小西家の方々か」

と問うと

「いかにも小西行長の家臣村井安之助と申します。高山様のご一行でしょうか」

「身どもは高山右近家臣篠田伊織と申します。いろいろとお世話になりますが宜しくお願いします」

と挨拶して、昨夜寝た建物に向かった。建物の中は、雑然とした中に何はともあれ寝るだけの広さを空けて、一晩過ごしたことが明らかな状態を見た村井は、右近に「高山様、小西家の家臣村井安之助と申します。室津につくのは明日の巳の刻（午前十時）頃かと思います。差し出がましいようですが、船の中には布団も用意してありますので、ごゆっくりお休みください」

と挨拶した。

右近たちは感謝した後、案内に従って、帆船の甲板下の座敷にくつろいだ。船が出ると、ゆったりした気持ちの良い船内設備と、迷うことなく流浪の一歩を踏み出した決定的事実が、積もっている心身の疲れを癒していった。

丁度この頃、筥崎の秀吉の陣屋では大騒ぎになっていた。秀吉が高山右近の陣屋を、昨日中に引き払えと命令したが、それが実行されているかどうか見に行った家臣が戻って来て

「大変です。高山陣営は綺麗に掃除され、誰一人陣屋にはいません。神社側に聞きますと昨夕家臣の代表が挨拶に来て、その後、ご家来衆は皆さんお揃いでお発ちになられました。高山右近様はそのときはお姿を見ていない

と言っています」
と報告したことから、秀吉は
「右近はどこへ行った！誰か知らないのか！」
と大声を上げたので、施薬院全宗は自分の部下を小西行長と蒲生氏郷の陣屋に走らせた。結果は右近が何時どこに行ったのかを誰も知らず、逆にそのことを聞いて驚きの声を上げていた。
博多湾に面した漁村にも「姿を見かけなかったか」と聞きまわったが、誰も右近の姿を見た者はいなかった。
秀吉も行方が分からない右近のことにいつまでも関わっているわけにもいかず、小田原征伐を実行に移す準備もあり、この日、九州征伐隊の解散と参加している全大名の自領への帰陣を命じた。

右近は帆船の甲板に出て、瀬戸内風景の美しさを海上から眺めながら、蒲生氏郷などの親しい大名やバテレンの誰にも、右近が筥崎から室津に向かっていることは伝えてなく、船を出してくれた小西行長のその後の連絡もなく、自分が室津に着いても、行長がいつ室津に来てくれるのか分かっていない。当面、室津のどこか人目に付かないところに隠棲できればいいが、などと思っていた。更に今は、自分が室津に向かっているだけに、妻たちがいつ室津に来てくれるかが心配で、筥崎陣営から妻宛に出した「この書状が届いたら直ちに、父ダリヨと共に家族一同で小西行長領の室津に代官を訪ねて行くように。詳しくは室津で会ったときに」とだけ書いて送ったが、果たしてその書状が妻のところに届いているかも確かめようがなかった。

右近を乗せた船は、風向きの関係で、二十三日の巳の刻（現在の午前十時）には室津に到着する予定がその日の申の刻（現在の午後四時）少し前になった。到着後村井安之助は右近たち四人を、小西行長が室津に来たときに使う屋敷の離れに案内した。右近は室津に教会があることは知っていたので行きたかったが、行くことによって小西行長が博多から右近を連れ出したことが秀吉の知るところとなり、行長に迷惑をかけることを懸念して、案内された屋敷内で疲れを癒すこととした。

オルガンチーノ師の決意

秀吉から七月十九日に発せられた「バテレンは二十日以内に国外退去」の命令に対して、オルガンチーノ師は、秀吉の指令はキリスト教の禁教ではない。キリシタン棄教命令を見事に断った高山右近を追放にしたこと、バテレンの国外追放の二点のみである。今、散発的に行われている各地域の教会の閉鎖・破壊は、秀吉の指令を忖度した反キリシタン勢力が行っているものに過ぎない。バテレンがいなくなった場合、教会・信徒に対して、誰が信仰指導をして導いてゆくのか、これがなければ、教会も、それに連なる信徒も、信仰を見失うことになろう。この各教会・信徒の不安を除去できる人材は、高山右近が追放になった今はアゴスチーノ（小西行長の霊名）しかいない。まずはアゴスチーノと会って、彼がその職務を引き受けることをはっきり約束させたい。この問題がオルガンチーノ師にとっては、バテレン、教会、信徒のために真っ先に解決しなければならない緊急課題であった。
オルガンチーノ師はこのような切迫した思いで二十二日夜遅く室津にやってきたが、アゴスチーノは秀吉の供をして京都に来た後、秀吉と別れて堺にいると聞き、直ちに日本人修道士を堺に差し向け、小西行長に大至急室津に来るように伝えた。
翌々日七月二十四日朝、アゴスチーノは船で室津に着いた。オルガンチーノ師は一緒にいた高山右近に
「アゴスチーノに先ず話をしたいので、離れで待っていてくれ。話が終わり次第、離れに向かうから」
と言って、直ちにアゴスチーノを別室に伴い次のように話した。
「秀吉の命令でバテレンは二十日以内に国外追放、高山右近が所領没収・追放となったが、キリスト教は禁教されていない。従って、今は、キリシタン大名所領地域にある教会を守り、さらにそこに所属している信徒の信仰指導を行うことが今すぐ必要なことだ。全バテレンの国外退去命令に対応して、自分は京阪地域にいる全バテレンとセミナリヨの学生に直ちに平戸に集結せよと指令は出した。しかし、自分は二名の日本人修道士を伴って、秀吉がこれからキリシタン禁教を、更にどのように進めてゆくのかを見定めながら、京阪各地の教会と信徒の信仰指導に当たる。信徒一人一人を勇気づけたい。自分が秀吉のめぐらす探索の網を隠れてどのように活動するかはこれからのことで、早急に隠れ場所を探すこととする。万一の場合、秀吉が発令した二十日以内の国外追放命令違反で捕縛されることも覚悟の上だ。ついては高山右近の代わりというわけではないが、当面教会と信徒に対して信仰指導と信徒の勇気づけを行う日本人はアゴスチーノしかいない。今後、私と情報を共有しながら一緒に活動して欲しい。それとバテレン国外追放についても、秀吉の考えがどのように変化してゆくかも情報を提供して欲しい」
オルガンチーノ師がかって見せたことのない厳しい表情と、口から出てくる言葉の迫力に、アゴスチーノはしばし沈黙の後、緊張した口調で
「オルガンチーノ師、過日、関白秀吉様のバテレン国外追放、高山右近殿の明石六万石所領没収・追放発令後、直ちにオルガンチーノ師に連絡を取らなかったことは申し訳ない。今、オルガンチーノ師の殉教覚悟のお考えを

お聞きして、私は高山右近殿と同様にはいきませんが、出来るかぎり、オルガンチーノ師のご意向に沿えるように動きます。関白様に対しても、自分のキリシタンとしてのあるべき態度の是々非々をはっきりさせてゆきます」

ここまで言ったとき、ドアがノックされ

「殿、小豆島の代官、マンショ三箇様が室津にお着きになり、代官屋敷の離れにご案内していると連絡がありました」

と小西行長に伝えられた。行長の

「わかった。直ぐそちらに行くのでそこで待つように言ってくれ」

との返答が終わるや否や、オルガンチーノ師は小西行長の両手をしっかり握りしめ

「アゴスチーノ、よく決心してくれた。我々にできることは何でもするから、遠慮なく連絡してくれ。これで安心しました。ところでジュスト右近、アゴスチーノ、マンショ三箇が揃うとは驚きましたな。まさに神様のお手配としか言いようがありません。ここでは多くの人目につくので、すぐ代官屋敷の離れに行きましょう」

と、決心を伝えてまだ緊張気味の小西行長と一緒に、代官屋敷の離れに向かった。

小西行長とオルガンチーノ師が代官屋敷の離れまでくると、小豆島の代官マンショ三箇が気配で気がついたのか玄関先まで出てきて、そこに殿（小西行長）がオルガンチーノ師と共に来たことに驚いたが、声を出す前に小西行長が

「ここに高山右近殿がお見えになっていると聞いたが」

「はい、奥座敷にご案内しています」

の返事が終らないうちに、小西行長とオルガンチーノ師は奥座敷に向った。

奥座敷に入ったオルガンチーノ師は、高山右近とマンショ三箇の顔を見ると同時に挨拶も抜きで興奮気味に

「秀吉の国外退去命令に対して、先ずはバテレンとセミナリヨの学生は長崎平戸に集結するよう指令を出した。しかし、考えなければならない大切なことは、キリシタン全体の禁教令が出たわけではないので、キリシタン大名所領地にある教会と信徒への信仰指導と信徒支援をどうやって行うかだ。バテレン全員は平戸に行かせるが、自分は日本人修道士二人を連れて、捕えられての殉教を覚悟して、バテレンと高山殿不在の間、アゴスチーノとともに教会と信徒の信仰指導・支援に回る。その為の情報提供を、今、室津の教会にもお願いしてきた」

ここまで聞いた小西行長は

「ここに高山殿の前であえて小生の覚悟のほどをお示ししたい。それは、どこまでできるかわからないが、バテレン皆様と、教会と信徒一同への働きを、高山殿に代わってその務めを果たしてゆきたい」

と言って、右近、オルガンチーノ、マンショ三箇と目を合わせた。右近が

「小西殿、よくぞ言ってくれた。よろしく頼みます」

と言うと、アゴスチーノは言葉を続けて

「小豆島の代官で、教会も管理しているマンショ三箇がここに来てくれている。オルガンチーノ師と高山右近殿ご一家の隠れての生活場所は、小豆島に用意してあります。マンショ三個はこれからすぐ小豆島に戻って、お住まいになられる皆さんが暮らすことができるように、明日中に準備して、明後日午前中には、お迎えに上がらせましょう。マンショ三箇、大丈夫だな」

「はい、高山様にはお初にお目に掛かります小豆島代官のマンショ三箇です。既に殿から指示を頂いていますので、家は確保してあります。今日と明日で日々の暮らしができるように、布団、鍋釜、食器と米、野菜、夜の灯り等も準備しておきます」

そこで小西行長が引き取って

「用意した家での生活上の不自由さ、不便さがおありでしたら、代官の下に担当をつけますので何なりとご用命ください。あらかじめ申し上げておきますが、誰にもわからない隠れ家を考えていますので、山の中の一軒家とお考え下さい」

「小西殿、何から何までご配慮を頂きありがとうございます。隠棲生活は初めてです。よろしくお願いします」

と、右近の挨拶に引き続き、オルガンチーノ師が

「アゴスチーノ、ジュストの働きの後継をすることを覚悟されたことは、大変嬉しい。関白秀吉のもとにいて、いろいろとやりにくいことが出てくると思うが、何かにつけて緊密な連絡をお願いします。なお加えて、関白のキリシタン抑圧に関した新しい情報があれば、それもその都度お伝えいただきたい。」

小西行長が

「オルガンチーノ師、了解しました。何かと宜しくお願いします。さて、これからのことですが」

と切り出し

「右近殿ご一家とオルガンチーノ師の隠れ家と言うか隠棲場所は小豆島に用意したことは、今、マンショ三箇が申し上げた通りです。明後日の二十六日にはお移りいただけますので、その間、ここにいてください。ご承知の通り小豆島は瀬戸内海賊が隠れ家として、また近隣諸大名が罪を犯した者の島流しなどに利用していた島です。拙者が小豆島を領有したのは二年前（天正十三年　一五八五）で、その時からキリスト教を宣教し、ここにいるマンショ三箇を代官として宣教の実をあげ、昨年には大阪セミナリヨから宣教師を招き、教会も作って、今現在の信徒数は千四百人程度です」

と小豆島の現況について説明し、しばし雑談の後、オルガンチーノ師は

「五畿内（現代の首都圏に当たる。当時の大和・山城・河内・和泉・摂津の五ヵ国）の教会、バテレン、信徒等からの私宛の手紙の宛先は隠棲場所にするわけにはいかないので、どうすればよいか」

の質問を聞いたマンショ三箇は

「仰せの通りです。五畿内のバテレン、教会、信徒からの手紙等の連絡先は、小豆島教会としてください。手紙等が来ればその日のうちに隠れ家にお届けし、オルガンチーノ師からお送りする書状は、毎日食物等必要なものをお届けする担当者を伺わせますので、その者に教会に届けるようにお申し付けください」

しばらく雑談の後、小西行長と右近・オルガンチーノ師の三人はこの場で、今後の教会・信徒対応をどのようにしたらよいかの打ち合わせに入った。信徒の信仰指導・育成を行うために、教会単位で集まりを行うことができないか、が話の焦点であった。しかし、とても現段階で結論を出せる問題ではなく、今後の秀吉と各地域の領主の姿勢を見ながら、オルガンチーノと小西行長で対応することとした。バテレン全員が五畿内から退去した場合、個別教会内をまとめる指導者がいないことが現段階での最大の課題であった。右近は自身が追放の身であり、個別教会の救済・支援に、自分自身が何も動けないことの申し訳なさとともに、「切歯扼腕」の思いを抑えていることが精一杯であった。

小豆島へ

翌二十五日、夕刻前に右近の父ダリヨと妻ジュスタと子どもたちが室津に着いた。右近は安心するとともに、薩摩征伐に従軍して以来四ヵ月ぶりであるが、追放という生死も不確かな状況の中からこうして家族一同に無事会えたことを神に感謝した。

右近が父に

「この度は突然のことでご迷惑ご心配をおかけしました」

と挨拶し、次の言葉を言おうとする右近を、父ダリヨは両手を前に出して発言を制し

「右近、よくやった。明石六万石の没収、大名の追放に負けずキリスト教信仰を守り通したことは、高山家として誇りに思う。これからいろいろと苦労はあると思うが、高山家の当主である右近のこの信仰ついてゆく。心配するな」

の父の声に、妻ジュスタに目を注ぐと

「私も同じです。どこまでもついてゆきます」

の一言を聞いた右近は自身の目頭が熱くなるのを覚えた。

翌二十六日、朝、マンショ三箇が迎えに来て、オルガンチーノ師は日本人修道士と同宿各一人を、高山右近は右近の小姓三人、妻ジュスタと子供たちと召使二人を、父ダリヨはジュスタが使っていた召使の内一人、のすべてを載せて小豆島へ向かった。

船が小豆島に近づくと右近は

「これがこれから隠棲する島か」

の思いで小豆島を見ていたが、船着き場は閑散としていて、人の往来も少ない島だと思った。

マンショ三箇が、自分の家臣でキリシタン信徒の桜井新兵衛を紹介し、これから桜井新兵衛をオルガンチーノ、ダリヨ、右近とその家族の所に毎日伺わせ、食糧その他生活に不自由のないように取り計らうと説明した。

船着き場から、まず最初にオルガンチーノ師の住む家に行き、その次に父ダリヨの住む家、最後に右近一家の住む家と順番に連れて行ってくれた。島に入ってみてわかったことは、島はどこも山が海岸近くまで来ており、人が住めるような平坦地は少なく、島の発展も海岸沿いの奥行きの少ない平地が中心になっていて、交通手段はその間を結ぶ船しかない。船着き場から山に向かう道は人一人が歩ける程度の道しかなく、山に入ってゆくと人家は全く見当たらなかった。

右近は海岸から遠くないところに山を切り崩したところがあったので、桜井新兵衛に聞けば、大阪城築城の時に、築城に使う石を切り出した跡と説明があった。

オルガンチーノ師の住まいは、海岸から四キロくらい離れたところで、ダリヨの住まいはそこから東へ二キロくらい離れていて、右近一家の住まいは、オルガンチーノ師の住まいから更に五キロくらい山奥に入っていた。どこも近くに谷川が流れており、そこから飲用水等必要な水は汲めるように配慮されていたが、周りには人家は全くなく、道を歩いていてもそれぞれの住まいは樹木で日線がさえぎられていた。



右近の隠棲した場所

小豆島での右近の日常は、祈りと霊操（注①）、バテレンから戴いた「どちりなキリシタン」日本語訳（注

②）の学びが一日の中心であった。右近はローマカトリック教会で行われている霊操が、神との霊的交流を深め、それが信仰を霊的に深めることをバテレンから教えられ、右近も実行するうちに霊操により神との霊的交流が深められている自分を感じていた。信仰に刺激を得たいときは、オルガンチーノ師を訪ね、時には三～四日泊まってくるときもあった。その他毎日散歩も欠かすことなく、雨の日等は一室に茶道具を並べ、一人で点前もしていた。オルガンチーノ師は手紙の連絡場所を小豆島教会として五畿内の教会情報も得ており、右近はその情報を教えてもらい、今現在、教会と信徒の置かれている現状を把握していた。

（注　①）霊操

霊操とは、イグナチオ・デ・ロヨラ（日本に派遣されている宣教団体イエズス会の創立者）によって始められたイエズス会の霊的修行。霊操は霊魂を鍛えることを目的とし、修行の到達点においては、神と深い人格的交わりを持って、神の御意志を見出すことが目的とされる。霊操は一回一時間を毎日五回、これを四週間行う。（岩波文庫「霊操」翻訳解説者門脇佳吉氏は、霊操は禅体験と非常に似たものである、と言っている）

（注　②）どちりなキリシタン

「どちりなキリシタン」は、天文一八年（一五四九）にフランシスコ・ザビエルが日本に宣教に来て以来、歴代神父が日本人にキリスト教教理を分かりやすく説明するために作成した問答形式のテキストで、ポルトガル語で作成されている。宣教開始からキリスト教の教理を日本人に伝えるための言葉の問題が大きな課題だった。代々の神父がこの課題に取り組み、来日十年後（一五五九）位までに問答形式での日本語説明書が出来上がって、以後逐年日本人に分かりやすく修正されていた。神父の母国から持ち込まれた印刷機で、一五九〇年と一六〇〇年にこのテキストが長崎で印刷されている。その内容は現在のカトリック教会の教理と全く同じものである。（右近の筆写については、まんじ誌一五二号一九八頁以降参照）

加賀行き決意

天正一六年（一五八八）七月八日、肥後一国の領主佐々成正が治世不始末から改易となり（その後切腹）、小西行長がその後の肥後南半分三十二万石（北半分は加藤清正）の大名として転封になった。そこで、小豆島が小西行長の所領でなくなったため、そこに右近達は隠棲することは出来ず、右近一家と父ダリヨは肥後宇土に移らざるを得なかった。このため右近の小豆島隠棲生活は一年で終わった。

肥後・宇土に行った右近は、バテレン全員が平戸に集結していると思っていたが、何人かのバテレンが長崎にいる情報を得て、宇土から長崎に行き、準管区長コエリョその他神父に久方ぶりに会うことができた。その時の右近のことを、コエリョは一五八九年二月二十四日付の書簡で、明石六万石という大きな俸禄を失ったにもかかわらず不満に思うこともなく、従えている家臣は少なく、しかも右近の家臣への態度は主従でなく対等であった、と伝えている。コエリョは、右近が殿様から一信徒になったことを不満に思うことなく、また、家臣にも謙虚に接している右近に感銘を受けたのであろう。

また、右近は、宇土から有明海を渡った島原の有家にあるイエズス会員教育機関の修練院に行き、そこで数日間を過ごしたが、毎日修練生とおなじ清掃等の日課を果たし、自分の時間はもっぱら霊操に当てて、神の人への愛と教えについて思いを深くしていた。

何日かぶりで自宅に戻ると、黒田官兵衛・蒲生氏郷から宇土城気付にした右近宛の手紙が届いていた。二人の手紙の趣旨は同じで、要約すると次のように書かれていた。

一、関白の右近に対する感情が軟化し、「右近は今どうしているのか。都（みやこ）に来ればいい」と言いだした。

二、これを聞いて、前田利家が関白に「高山右近は武勇の外、茶道・連歌・俳諧等にも達せし有為な人材である」と前置きした後、「今までの右近の労を考え、少ない知行ででも召し抱えたい」と言上して許された。（注　③混見摘写）

三、その陰には、この前田利家の関白への言上に合わせて、関白の弟秀長が「右近の前田家での召し抱え条件として、右近とその一族を畿内追放（畿内以外は往来自由）とする」案を関白に示して、関白が前田利家の申し入れを受諾し易くした。このように、前田家での右近召し抱えについて、関白・秀長・前田利家三者の合意がわかり易く書かれていた。

と記載され、前田家での右近召し抱えについて、関白・秀長・前田利家三者が積極的に合意したと判断できる内容であった。

これを目にした右近は、今まで何度も反芻したことであるが、今の自分の立場と、これからの自分が是非ありたい生き方と、その実現の可能性の条件を考えてみると、

一、自分の立場は、秀吉の勘気を蒙っている身であり、前田家に召し抱えられても、秀吉の勘気が解けたわけではない。

二、勘気を蒙っているわが身を、現在、秀吉の許可なく庇護している小西行長については、秀吉の感情の動き方次第で「キリシタン同志が結束しての秀吉への

反抗」ととらえられた場合、秀吉から取り返しがつかない処分を受ける可能性がある。更にその処分が今ある教会と信徒への禁教と糾弾に発展する可能性もある。自分としては小西行長に迷惑をかけること、並びに今ある教会と信徒がこれ以上窮地に陥ることは、絶対に避けなければならない。

三、自分は俸禄の多寡には全くこだわらず、なんとしてでも、一つの教会を持ち、または教会に属し、地域へのキリスト教宣教を専らにしながら、神と信徒への奉仕がしたい。それ以外には何も望まない。これが神への誓いであり、また、自分を信じて入信したすべての信徒との誓いであり、これを破ることはできない。

四、ただし、それを実現するためには、秀吉が右近保護を許可した人の所で、と言う条件は必須である。

ここまで思いをまとめた右近は、これから自分が歩む道は、黒田官兵衛・蒲生氏郷の手紙で教えてくれた前田利家の所しかない。そこで教会を作ってキリスト教宣教をしたい。今の段階では、秀吉はキリスト教を禁じてはいない。秀吉の右近への棄教指示書、コエリョへのバテレン国外追放指示書等の記載内容から、キリスト教宣教をするにあたっては、国内既存宗教を破壊することなく、共存が条件になる。共存は自分の基本的考えであるから、自分にとっては何ら問題ない。

更に考えてゆくと、秀吉と前田利家の二人はお互いに若いころから、織田信長の家臣として恰も兄弟を思わせるような密接な交友があった二人である。たまたま賤ケ岳の戦いは、利家が織田信長命令で柴田勝家傘下の戦闘体制の中にあったとき、秀吉と勝家の戦いが始まってしまったことから、秀吉と利家の関係からすれば利家が勝家傘下から離反して秀吉側に就くのは、時間の問題だった。賤ケ岳戦は終盤に利家が勝家を離反して秀吉側に就いたことで、柴田勝家の敗北が決定的になり、そこから秀吉の天下がもたらされている。このような秀吉と利家の関係を考えてゆくと、右近にとっては、秀吉からの勘気中の生活場所として、前田利家の庇護に優る生活場所はない。

（注　③）混見摘写　著者は加賀金沢藩士吉田守尚で、織田・豊臣・徳川・前田家の武事・逸話等を記載したもの。全部で十九巻ある。石川県立図書館蔵

右近　加賀行きへ活動開始

右近は熟考した上で、都へ前田利家を訪ね、直接お願いすることが本筋であると考え、早速、宇土城に小西行長を訪ね、前田利家に会って、蒲生氏郷などが知らせてくれたことが事実であれば、前田利家にお世話になりたい、と率直に申し出た。小西行長はしばし沈黙の後

「高山殿、自分も今は三十二万石を領する大名になった。些少ではありますが、肥後宇土で二万石を差し上げるので、肥後にとどまるようになさらないか」

と引き留めを図った。さらにこれを聞いた教会関係者は「高山様を都に招くのは、秀吉流の策略で、高山様を捕えるための策略ではないでしょうか。小西様のお考え通り、肥後におられるのが安全だと思います」

と全面的に都行きに反対した。しかし、右近は

「いろいろとご心配やご配慮を有難うございます」

程度の返事にとどめていた。

帰宅後、右近は前田利家宛ての「ご挨拶にお伺いさせていただきたい」の手紙の中に「お目にかかるご都合の良い日程と場所をご指示いただきたい」の旨を記載した手紙を小姓の篠田伊織に持たせて、船便ルートの宇土―長崎―堺ルートで、大阪の前田屋敷に前田利家を訪ねさせた。

篠田伊織が宇土を出てから二十日を経過した九月上旬、海の荒れる時期で心配ではあったが、往復とも風に恵まれて、待ちに待っていた篠田伊織が戻ってきた。

旅の塵を落として着替えた伊織は、右近に

「ただ今戻りました。前田利家様に直にお目にかかり、殿への書状をお預かりしてまいりました」

と書状を右近に渡した。右近はそれに目を通すと

「前田様が直接会って下さり、書状まで頂いてきたのはご苦労であった。この手紙の内容は、十月上旬～中旬に、高山家一家全員で大阪の前田邸に来るように。その後加賀に行ってもらうが詳しくは会ってから話そう。高山を加賀でお引き受けすることは、関白秀吉様もご了承の上のことであるから心配しないように、とのことだ。篠田もご苦労であった。しばし休息するがよい。このことは右近が言うまで、皆には言わないように。では下がってゆっくり休め」

と、篠田伊織を下がらせた後、これからの加賀移転には、九月末日をもって一家全員で肥後・宇土を発って堺に行き、家族は、キリシタンでもあり堺の大商人でもある、かねてから昵懇の日比谷了慶の下で旅の疲れを休めさせて貰い、その間に右近は篠田を伴って前田利家のところに挨拶に行くこととした。

翌日、宇土城に小西行長を訪ね、右近に二万石の禄を給してまで肥後に引き留めてくださるとのご厚意を謝すとともに、今まで世話になった礼を言い、更に関白秀吉が天下を治めている間は自分は秀吉からの斧人でありいつ自分を匿ってくださっている小西殿にご迷惑をお掛けするかわからない。そうなれば現況何とか残されている

教会と信徒にもさらにご迷惑をお掛けすることになるかもしれない。そのようなことは絶対あってはならない、等の話をした後、改めて

「小西殿、実は黒田官兵衛様と蒲生氏郷様から伝えられた諸情報について、小姓を前田利家様のところに差し向け、前田様が関白秀吉様からこの高山を客将として召し抱えることの了解をおとりになられたことの確認ができました。前田様のご厚意に甘えることが、自分のことでキリシタン関係の皆様にご迷惑をお掛けしない、自分が生きるための唯一の方策と確信出来ましたので、九月末日に宇土から加賀へ参る所存です。今日は今までのお礼と、この報告に参りました。いろいろと有難うございました。この宇土でも世間のいろいろな耳目が有るかと存じますので、このことは当日まで小西殿限りとして頂きたい」

「それが高山殿におかれて、最も安心できることでしょう。了解しました。お元気にお過ごしください」

と小西行長が加賀行きを納得してくれて、右近も安堵した。オルガンチーノ師等には、加賀に落ち着いてから連絡することにした。

たまたま小西行長から、宇土に来ているポルトガル商船が商用で堺まで行くと言う情報を得ていたので、高山一家はそれに乗船させてもらい、十月十二日には無事堺について。高山一家は、予ねて連絡しておいた旧知の堺のキリシタン商人、日比谷了慶の自宅を訪問、日比谷了慶は高山一家の訪問を大変喜び、お互いの無事と右近一家の加賀行きを祝した。

右近　前田利家に会う

右近は翌日二頭の馬を借り、小姓篠田と共に大阪の前田邸に赴いた。邸は加賀百二十万石の大名邸であるだけに広く大きい。門前の守衛に高山右近と伝えると直ちに門は開けられ、守衛に二頭の馬を預けると、両側には手入れされた植栽、中央には平らな自然石を敷いた通路を案内されて屋敷の玄関へ。玄関左側には年輪を経た見事な松の盆栽を置いている。そこから廊下伝いに奥座敷に案内された。前田利家は秀吉の弟秀長の病気見舞いに行って居り、屋敷から「右近来訪」の使いが出され、右近たちは通された座敷でしばし待つ間に帰ってきた。

奥女中から「主人帰宅」の知らせを受けた右近と篠田は下座に座り直し、利家が座敷に入るのを平伏して待った。

利家が部屋に入ると、右近の形通りの挨拶を受けた後、秀吉から追放以来今日までの苦労を労ってから

「先に書状で知らせた通り、関白秀吉様の了承のもとに、些少ではあるが高山殿の俸禄を二万七千石として、我が加賀前田家の客将としてお迎えしたい。如何」

と切り出され、右近は

「前田様と関白様の暖かいご配慮に心から感謝申し上げます。有難うございます。これから何卒宜しくお願い申し上げます」

と言って一呼吸後に

「つきましてはお願いがございます。一つだけお願いしてもよろしいでしょうか」

の右近の発言に、右近が何を言い出すのか言った表情で

「どうぞ」

と利家が頷いたので

「では申し上げます。身どもがお世話になるにあたって、ひとつだけお願いがございます。それは加賀のご領内に南蛮寺を一ヵ寺建立賜りたいことです。場所は日常的に利用できる場所であればどこでも構いません」

と右近が言い終わって利家を見ると、利家は脇息にもたれ天井を見つめていた。左手には湯飲み茶碗を持ったまま。

（続）

参考文献
完訳ルイス・フロイス日本史1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社
茶の湯の心で聖書を読めば　高橋敏夫　フォレストブックス
高山右近　海老沢有道　吉川弘文館
高山右近　加賀乙彦　講談社
キリシタン大名高山右近　谷　真介　パウロ文庫
キリシタン千利休　山田無庵　河出書房新社
利休にたずねよ　山本兼一　文芸文庫
キリシタン史の新発見　岸野久・村井早苗　雄山閣
武士道　新渡戸稲造　岩波文庫
茶の本　岡倉天心　講談社学術文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　宮帯出版社
日本史年表　歴史学研究会編　岩波書店
日本キリシタン史　海老沢有道　塙書房
加賀百万石異聞　高山右近　北国新聞社
どちりなきりしたん　水野　聡訳　能文社
どちりなきりしたん　海老沢有道校註　岩波書店
人身売買・奴隷・拉致の日本史　渡邊大門　柏書房
悠遠の人　高山右近　塩見弘子　ドン・ボスコ社
小豆島のキリシタンと高山右近の足跡　小豆島キリシタンの足跡をたどる会　編

安芸門徒シルクロード紀行（8）

村上邦治

三五　中国浄土教の進展

一九〇二年春ロンドン滞在中の新門光瑞が日本への帰途を利用し調査する目的地は、シルクロードオアシス都市で嘗ての仏教王国亀茲国クチャ（西域北道）と于闐国ホータン（西域南道）、大乗仏教が確立した印度西北ガンダーラおよび東部の仏教聖地であった。その後印度から航路で帰国する旅程を変更して、貪欲にも緬甸北部から中国奥地に入り仏教民間信仰の聖地俄眉山や浄土教の発祥地廬山を視察し、中国仏教の現状を調査することにした。

四川省にある三千百㍍の峨眉山は中国三大霊山（五台山・天台山）及び仏教四大名山（五台山文殊菩薩・九華山地蔵菩薩・普陀山観音菩薩）で、古くから普賢菩薩の霊場として知られ、多くの民間信仰の巡礼者を集めた。後漢時代から仏教寺院が造られ始め、東晋（三一七―四二〇）時代創建（四二〇年）の萬年寺を始め七十近くの寺院が山頂まで続き、その歴史と規模を誇る中国仏教最大の聖地である。

中国仏教寺院は名山と結びつき、民衆は登山を兼ねて巡礼（朝山）し、香を焚（進香）いた。寺院には仏像だけなく、女性の姿をした碧霞元君・媽祖、関羽など歴史上の英雄が祀られている。古来の儒教や道教そして歴史上の英雄や女性の姿をした神々と中国仏教がどのように同居ないし結合しているのかに関心を抱いていた。

江西省にある廬山は高さ千五百㍍弱だが、古くから断崖絶壁に囲まれる峰々の雄大・秀麗・奇絶で知られた名山であり、古来詩人・山水画家などがこの山を詠いまた描くため訪れる文化の中心地であった。一方宗教においては中国浄土教を創教し広めた慧遠がこの山に東林寺を

創建、その拠点となったところである。結成された白蓮社は後世白蓮教を生み、元・清王朝に多大な影響を与えた。

十三世紀浄土真宗を開教した親鸞は、高僧として七人の師を掲げた。印度龍樹・世親、中国曇鸞・道綽・善導、わが国では恵心僧都源信・法然房源空である。

源信は極楽浄土に往生し成仏するために、念仏（称名念仏・観相念仏）が大切と説いた。さらにこれを発展させ専修念仏（一心に「南無阿弥陀仏」と唱えれば来世で阿弥陀仏の極楽浄土に往生できる）・称名念仏を説いたのが浄土宗開祖法然であった。

法然の弟子であった親鸞は浄土教の究極といえる「絶対他力」（一切を阿弥陀如来にお任せする）に行き着き、大切なのは「信心異為本」（大事なものは阿弥陀如来への信心なのである）と説いた。

日本の浄土教は源信・法然・親鸞に連なり、中国から将来した浄土教を日本独自に発展させたものである。その中国浄土教発祥の地が廬山であった。

初期の中国仏教は二世紀以降中央アジアからシルクロードを辿り、印度・西域から訳僧・布教僧として安世高（安息）支婁迦讖（月氏）竺法護（敦煌）らが入国、経典を漢訳・布教した。

四世紀群雄割拠する五胡十六国時代に入り、モンゴル系羯族後趙（三一九―五二）石勒（在位三三〇―三三三）石虎（三三五―四九）は漢民族を重んじた融和策をとり、その統率のため印度から伝来した仏教を重んじた。

こうした折西域（亀茲国）から来たのが仏図澄（？―三四八）であった。種々の宗教的霊験や予言に深く帰依した石二人は、後趙国内の布教を支援した。仏図澄はしばしば神通力を発揮したといわれ、九百近い寺院を建立仏教を広めた。彼は人目を惹く神異の力だけでなく、自ら持戒するとともに君主に対しても五戒を求めた。また漢人住民に出家を認めさせるなど仏教布教の基盤を整え、門下一万人ともいわれる弟子を養成した。その中の一人道安を始め多くの有力な門人が輩出した。仏図澄は「中国仏教の祖」といわれる。

仏図澄の高弟道安（三一四―八五）は、『般若経』を生涯研究した漢人僧で、師を継ぎ長安仏教界の指導者となり、仏教を敬う前秦符堅の信任厚く支援を得た。

道安は三百年にわたり多くの印度・西域僧により漢訳された経典（般若経・法華経・無量寿経など）・律・論を見直し、これからの仏教研究の新しい道を明確に示した人物として「中国仏教の確立者」とされる。

当時仏教（般若の空思想）と中国特有の老荘思想（無の思想）とが合致するところがあり、また中国人になじむ教え（親孝行・一族の繁栄など）を交えた偽経が説か

れ、老荘思想を媒介にした仏教（格義仏教）が広まった。道安はこれを排除、仏教は仏典によってのみで理解し布教するとした。

また梵語原本から漢訳経典に翻訳するとき「五失本三不易」（原本の形を失しても可とする五項目と決して改変してはならない三項目）を提唱した。彼自身は漢訳していないが多くの訳経に序文を書いており、漢人に真意が分かりやすい経典の必要性を痛感したことからである。とくに大乗仏典の中核をなす『般若経』はこれまでの漢訳では真意が伝わらなかった。道安が国王符堅に亀茲国の鳩摩羅什を、長安へ招聘することを懇願したのはこのためであった。羅什はこの期待に応え、最も多く漢訳をしたのは『大品』『小品』などの『般若経』であった。

道安は多くの経典を研究、経典の翻訳事情、経論の訳年、訳者、書名等を確定し、『綜理衆経目録』を編纂した。これは最古の総合的経録である。

また戒律をまとめた「律」を研究、僧徒の日常の行儀を正し僧団の日常生活や修行方法を明示した。

四世紀末これまで中国にもたらされた仏教を総括した道安により、仏教の正しい研究のあり方や修行方法が明らかになり、五世紀が始まるとともに長安に招かれた鳩摩羅什の新しい経論の翻訳が揃い、仏教は飛躍的発展をすることになる。

こうした中国仏教発展期に頭角を現したのが、「中国浄土教の始祖」と言われる道安の弟子慧遠（三三四―四一六）である。

師道安は大乗の根本を形成する『般若経』を研究したが、慧遠は浄土三部経（『無量寿経』・『観無量寿経』・『阿弥陀経』）に先立つ最初期の『般舟三昧経』（訳支婁迦讖）を重視、ここで説く念仏（観相念仏）三昧により見仏（阿弥陀仏が現前する）を実践修行する念仏結社「白蓮社」を廬山東林寺に結成した。弟子百余名とともに阿弥陀如来が住まわれる西方極楽浄土を期して禅観（心想を統一して不動寂一）をならしめる禅定を修行した。

この白蓮社は中国最初の仏教結社であり、結社に参集した僧は、観相念仏により自らの極楽浄土を願う（他利でなく）自利的な念仏結社であった。結集した僧は実現できる能力と経済的に恵まれた人であり、自らのための浄土教であった。そのため団結心は強く、彼らの思想は長く引き継がれた。

元末期河北・南一帯で「天下大乱　弥勒仏下生」を唱え、慧遠が始めた白蓮社を理想とする「白蓮教」教主韓山童が反乱を起した。その配下の紅巾軍が勢力を拡大し、白蓮集団の蜂起（紅巾の乱）を契機に各地で反乱が勃発する。明朝初代皇帝となる朱元璋は初め紅巾軍に投じ白蓮教団を基盤として台頭、遂に元軍を破り建国を果たし洪武帝になった。

清朝の十八世紀末から十九世紀初頭にかけて湖北・四川で「嘉慶白蓮教徒の反乱」が起きた。白蓮教の説く「無生老母・真空家郷」（宇宙万物を創造した老母を本来の家に帰し老母と会って長生不死になる）と書かれた旗印に結集し、約十年にわたり清朝に反旗を翻した。この鎮圧に正規軍は手を焼き、軍事力の弱体が露見するとともに財政は一気に悪化した。

この内乱後英国とのアエン戦争・ベトナムをめぐる清仏・朝鮮をめぐる清日の三大対外戦争にいずれも敗北、国内ではその間五十年に及ぶ「太平天国の乱」が発生、二百六十年間続いた清朝は実質的に幕を閉じることになった。巨大な教団ではなかったが、王朝にも真っ向から立ち向かう団結と行動力を持つ秘めた教団であった。

中国最初の浄土教（宗派）となった白蓮社の経典『般舟三昧経』は、『法華経』を根本経典とした「中国天台宗の祖」といわれる智顗（五三八―九七）に引き継がれた。龍樹の中観思想である一切の現象を空（即空）・仮（即仮）・中（中観）とし、このような体験に進む実践行として「四種三昧」を説いた。その一つが「常行三昧」（歩々、声々、念々、唯阿弥陀仏にある）であり、これこそが般舟三昧経の説く念仏三昧である。慧遠の浄土教の一部を継承した天台教団は隋煬帝となる晋王広の保護を受け天台山に国清寺を建立、一時は仏教各派の中で最高の栄華を誇った。

龍樹（空思想）、世親・無著（唯識思想）の「論」がそろった六世紀半ば、五台山近くの出身で出家した曇鸞（四七六―五四二）は神仙術（不老長寿の法）を修行していたが、親鸞が『正信念仏偈』や『高僧和讃』で紹介したように、印度から来ていた菩提流支（中国名道希）に出会い、輪廻転生を説かれ浄土教を授かった。以後修行してきた神仙術を捨て、生死を解脱して永遠の不死永生を得るとする『観無量寿経』を学んだ。

無量寿仏の浄土教に帰依した曇鸞は山西省石壁山玄中寺にこもり教義を研究、流支が漢訳した世親の『浄土論』を注釈した。鳩摩羅什が漢訳した龍樹系（空思想）浄土経の研究と合わせ、慧遠が拠り所とした『般舟三昧経』ではなく浄土三部経を聖典として、空の思想により往生浄土の教義・信仰の実践を行い、ここを道場とした。

曇鸞は慧遠の自力念仏に対抗し、

「（無間地獄に落とされる者でも）信仏の因縁をもって皆往生を得せしめる」

とする新たな浄土教を一般大衆に幅広く説いた。

また龍樹と世親の論述から、難行道ではなく誰にでも行える易行道を勧めた。死後玄中寺にかれの行蹟を記した石碑が建てられた。

この石碑に感動したのが曇鸞の死から二十年後に生まれた道綽（五六二―六四五）である。生まれ育った山西省は南北朝時代道教を保護し仏教弾圧（法難）した鮮卑族の北魏（三八六―五三四）は、五三四年東魏（都鄴）・西魏（都長安）に分裂した。その十五年後内部抗争により東魏は北斉（都鄴）、西魏は北周（都長安）に代わり建国された。その間南朝は三十～五十年ごとに、宋（倭五王通交）・斉・梁・陳（いずれも都建康）が建国された。三世紀江南の呉から始まり東晋と四南朝を加え六朝と呼ばれる。結局後漢以来三国・五胡十六国・南北朝時代を経て中国を統一するのが隋文帝である。

目まぐるしく短期間で王朝が倒れ、次々に建国されたが、内乱・戦争により亡国、住民は逃亡・離散・流浪し、街は略奪が横行荒廃した。そうした時代に「悉有仏性」の思想が中国人に受け入れられた。『涅槃経』の講宣者であった道綽は、六〇九年五十才を前に玄中寺で曇鸞の行蹟碑をみて浄土専修の信仰に回心した。

玄中寺に住み込み曇鸞教学を継承、鳩摩羅什の訳した龍樹と新たにもたらされた真諦（四九九―五六九）の訳した世親二人の論・義疏を研究した。そして当時末法時代の到来を救済する仏教として、社会の底辺で苦しむ庶民に一仏専念の信仰特に『観無量寿経』の王舎城の悲劇を各地で説いて回った。この道綽の民衆布教は、後の空也・親鸞・一遍ら「念仏聖」と称される日本の宗教活動者の先駆をなすものであった。

道綽の生きた隋・唐初期は終末観である末法思想の時代であった。釈迦が入滅（仏滅）して五百年間は正しく理解され実践される「正法」時代、ついで五百年間（日本では千年間）は各部派の対立論争が続き僧たちは私利私欲に流れる混迷の「像法」時代が訪れ、それ以降仏教は衰退、人は劣悪化し遂に仏教は滅尽する「末法」の時代が到来するというものである。六世紀印度で成立したとされ、すぐに中国にもたらされた。

その末法第一年が北斉五五二年にあたり、北斉のちの北周（五五六―八一）武帝は五七四年儒教による統一を目指し仏教・道教を廃毀、第二回目の廃仏（周武の法難）を断行した。ちなみに初回は四四六年仏教王国北涼を滅ぼした北魏の太武帝による漢化政策からの仏教弾圧（魏武の法難）である。中国皇帝による弾圧として、「三武（唐武宗）一宗（後周世宗）の法難」と呼ばれる。

武帝の弾圧は仏像・天尊像を壊し沙門・道士を還俗させ、儒教古典にない祭祀は禁止するなど徹底したものであった。武帝の弾圧は仏教僧徒に大きな衝撃を与え、まさに末法時代の到来を思わせた。

親鸞が『正信念仏偈』で道綽について語った箇所で、末法の劣機（像末法滅）の時には、

「決聖道難証　唯明浄土可通入」

（聖道の証しがたきことを決し、唯浄土の通入すべきことを明らかにする）

「萬善自力貶勤修　圓満徳號勤専称」

（聖道自力の諸行を止め万徳円満した名号を専称せよ）

と末法の時代観に立脚し、仏の教えを聖道門（難行道）と浄土門（易行道）に分かつことを唱えた。時代に即した「我らの仏教」「末法仏教」を掲げた道綽は玄中寺で実践修道者となり、この末法時代だからこそ阿弥陀仏を専称することで浄土の世界に往生できると説いた。

道綽は曇鸞の他力本願に加え末法時代にふさわしい仏教を確立、多くの僧を引き付け、「宗派」（教団）が形成された。隋・唐時代は浄土教の外に、天台宗（智顗）三論宗（吉蔵）三階教（信行）律宗（道宣）法相宗（玄奘）華厳宗（法蔵）密教真言宗（不空）など新しい宗派が興きた。

道綽の弟子善導（六一三―八一）を親鸞は、「独明仏正意」（独り仏の正意を明らかにせり）

と『正信念仏偈』で「中国浄土教の大成者」として高く評価した。

彼はこれまでの正法、像法時代の仏教は選ばれた賢者のみを救うための仏教であったと結論づけた。仏は「一切衆生に悉く仏性あり」と説き、この末法の時代に困窮した人々を救えることができるのは浄土教のみであるとの確信を得た。

その教義はまず浄土信仰者の安心として、「三心」（経文に対する至誠心・深心・回向発願心）を説く。

末法五濁悪世の時代、自らを罪悪の凡夫人との自覚を決定深心し、阿弥陀仏の本誓願に依ることのみ往生できると決定深心する、とする「二種深心」を力説した。そして多くの仏教絵画に描かれた「二河白道の譬喩」すなわち「火の川（瞋り憎しみ）と水河（貪愛）の狭い間を通る細い白道には、無人の曠野（悪友に満ちたこの世）に群賊・悪獣（迷い・悩み）が立ち塞がり、水・火河の波が巻き起こる中でも、人は微ではあるが善心を持っており、深く決定すれば釈迦仏と阿弥陀仏の励みと勧めによりこの白道を進み得る」との説話から、念仏行によるほかないとした。

一心に阿弥陀を信ずべきことを説き、実践行として「五種正行」（読誦・観察・礼拝・称名・讃歎）を示し、「称名」を正定行、礼拝・読誦は助行とし、称名以外を雑行とした。

所依の経典として「三経一論」すなわち『無量寿経』・『観無量寿経』・『阿弥陀経』と世親の『浄土論』とした。ここに「称名念仏」による浄土教の教理が確立した。

曇鸞・道綽・善導による中国浄土教は日本の法然・親鸞に繋がっていく。

三六　平安浄土教の盛衰

日本における浄土教の起源は比叡山延暦寺である。中国天台宗は隋智顗（五三八―九七）によって大成した。大蔵経（経・律・論の三蔵と正統と認められる注釈書）の中には矛盾するものがあり、これらを「五時（五つの時期）八教（八つの教え）」に分けて統合整理（教判）し、すべての人が救われる一条思想を説く『法華経』を最高経典とした。そして止観（静と動）を中心とする修行実践である「常行三昧」（「四種三昧」常坐・常行・半行半坐・非行非坐の一つ）の典拠は『般舟三昧経』拠るもので、廬山慧遠の浄土教を受け継ぐものであった。

智顗以降の天台宗はさらに広く浄土思想を取り入れ、阿弥陀仏と諸仏を同等に置きまた融合させ礼拝の対象とする天台浄土教が展開された。

最初に天台宗を日本に将来したのは八〇四年、還学生として入唐した伝教大師最澄（七六七―八二二）で、天台山で「中興の祖」湛然（七一一―七八）の弟子道邃から天台教を、順暁から密教を直接伝授されて帰国した。

平安期の仏教は奈良期から続く「鎮護国家の仏教」で祈祷を主としたが、最澄、弘法大師空海が将来した真言密教は朝野の要求に合致したものであった。密教の加持祈祷は国家の行事や皇室・上流貴族に普及した。最澄の将来した天台宗の中には「常行三昧」にある浄土思想が含まれていたが、空海との密教論争、南都仏教との「三一権実諍論」（法相宗徳一の法華経批判に対する二人の著作による論戦）や大乗戒壇設立（東大寺小乗戒壇から独立）に奔走したことから、密教も浄土教も深まらなかった。

最澄の弟子円仁（七九四―八六四）は九年間におよぶ在唐で密教とともに五台山竹林寺において音楽を応用した「五会念仏」（後善導と言われる法照の創作）を会得、これによる念仏三昧を常行三昧に取り入れた。比叡山で不断念仏が流布、日本浄土教の源流となった。

この行は念仏とともに阿弥陀経を読誦し滅罪懺悔をする行で、極楽浄土に往生することを念じる浄土教的要素を備えていた。これにより浄土往生信仰が広まり、臨終の時だけでなく日常でも念仏を唱える僧侶が増えた。

その後浄土教を発展させたのが恵心僧都源信（九四二―一〇一七）である。経論から浄土往生に関する要文を集めた『往生要集』の中で、「厭離穢土」・「欣求浄土」で凄惨な地獄と極楽浄土の世界を説き、「正修念仏」では五つの行により阿弥陀如来に会えると教え、「別事念仏」の中で臨終の際に行う儀式を説いた。源信の著書は文人貴族に広まり、十世紀には皇室・摂関家など王朝貴族に及んだ。

源信の天台浄土教は、「観相念仏」を主とするため、永承七年（一〇五二）に末法時代に入るとした「末法思想」に影響され、死後極楽浄土を願う支配者階級は莫大な資金を投入して浄土を模した寺院や庭園（平等院鳳凰堂・法界寺阿弥陀堂・中尊寺金色堂・白水阿弥陀堂・富貴寺大堂）を造り、その中に金色の仏像（鳳凰堂阿弥陀如来像・浄瑠璃寺九体阿弥陀如来坐像・三千院阿弥陀三尊像）や絵画（高野山聖衆来迎図・神護寺釈迦如来像）を寄進した。また対極の苦界地獄について詳細に論じられ、生々しく地獄世界を描く「地獄草紙」・「餓鬼草紙」が広まった。

源信の説く天台浄土教は中国浄土教開祖慧遠の流れをくむ観相念仏を説くもので、選ばれた支配階級層の経済的に恵まれた限られた人のものであったといえる。しかし財力も修行の時間もまた学問のない一般庶民には、「称名念仏」で足りるともした。この称名念仏のあり方は、同じ比叡山で修行する法然や親鸞に多大な示唆を与えた。

親鸞は『正信念仏偈』の中で、

「極重悪人唯称仏」（極重の悪人は唯仏を称すべし）

と源信が称名念仏の重要性を説いたことで、七高僧の一人とし高く評価した。

源信と同時代、「市聖」と言われた空也（九〇三―七二）が京都街中で念仏（踊念仏といわれその創始者）を唱え勧進をする念仏勧進により信者を集め、阿弥陀信仰と念仏を普及させた。同じ聖と言われ踊念仏により全国を遊行した時宗の開祖一遍（一二三九―八九）から三百年早いものであった。

源信より百年後叡山の堂僧良忍（一〇七二―一一三二）は、「一人の念仏が万人に融通し万人の念仏が一人に融通する」と説き融通念仏宗を開いている。

平安期叡山僧円仁・源信・良忍や聖空也（後叡山で得度）ら天台系平安浄土教は、仏の姿を思い浮かべる観相念仏と南無阿弥陀仏を唱える称名念仏との明確な区別がないまま、念仏は一般大衆に広がった。

三七　絶対他力本願の誕生

支配階級は貴族から武家に移り末法の世に入る前後から、園城寺戒壇設立をめぐる天台宗僧徒騒動、前九年（安倍氏追討）・後三年の役（清原氏追討）、火災（相次ぐ内裏や興福寺）などが起き、民衆は末法到来を実感した。その後も南都（興福寺・春日大社）北嶺（延暦寺・日吉神社）の強訴、保元・平治の乱、源平の争乱が次々に起きた。さらに病の流行（羊病一一七一・大疫一一〇六・疱瘡一一七七）、異常天候（長雨による洪水・つむじ風・雷・雹）、富士山（一〇八三）・浅間山（一一〇八）噴火、旱魃による全国的飢饉（一一八二）が発生、末法に入っ

明が紫雲のたなびくようで来迎の音楽が流れ奇異な香りが発ち込み、僧俗男女から公卿・殿上人まで法然のもとに集まり、仏陀入滅と同じ儀式で浄土に帰られたとする伝説が残された。

弟子の親鸞は法然を国家仏教の既成教団と一線を画す武士や民衆の為に、中国唐の善導が説いた「一心に専ら弥陀の名号を念じる」本願念仏による他力往生を説いたとして、「日本浄土教の祖」として称えた。

見真大師親鸞は下級貴族の父の出家に伴い、九歳で慈円の下比叡山支院青蓮院で得度した。二十年間比叡山の常行三昧堂で修行と学問に専念したが何ら悟りを得ることなく、二十九歳の時山を下り京六角堂（頂法寺）に参篭した。九十五日目聖徳太子の示現を得て、東山吉水で法然の他力本願専修念仏の門に入った。三十五歳の時「承元の法難」（一二〇七）により、師法然（土佐）とともに流罪（越後）となった。

その四年後放免され、親鸞は新天地を越後から関東に求めた。六十歳過ぎて京都に戻るまでの二十五年間、下野国（稲田）や常陸国で家族とともに暮らした。その間下層武士や農民・民衆を相手に念仏布教を行い、あわせ自身の信仰を深め、「絶対他力本願」に行き着く。主著『教行信証』の草稿はこの地でなした。非僧非俗の立場を貫き、弟子は一人も持たず同朋同行を信念とした。し

た平安中期より民衆は困窮した。

こうした苦境を背景に多くの人々に受け入れられる画期的な教説により立教を成し遂げたのが、二人の叡山僧法然房源空（一一三三―一二一二）とその弟子親鸞（一一七三―一二六二）である。

円光大師法然について親鸞は『高僧和讃』で次のように簡潔に述べている。

「源空聖人は浄土の真宗（浄土宗）を開き、本願の念仏を宣布せられ、日本全土に浄土教をあまねく広められた。善導は浄土門を開いたが中国唐朝におられ、源信は日本におられたが天台宗あってその傍らで念仏を広めた。しかし二人がおられても、師源空の弘通がなかったなら、真宗の本願をさとることは出来なかたし、人生は空しいものになったであろう」

源空は一五才で無の道理を悟り、仏道に入り智行（知恵と行）兼備し、多くの天台高僧や関白藤原兼実が帰依した。人々は源空を日本に浄土教を広める仮の姿（垂迹）であり、本身は中国の道綽とも善導とも語った。生存中は勢至菩薩として仰がれ、後白河上皇や後高倉院（後堀河天皇父）、公卿・大臣、僧侶や学者から地方の農民まで敬い仰いだ。

源空は曇鸞・道綽・善鸞から得た専修念仏の大切さを説き浄土宗を創教、これを弘め阿弥陀如来を全国に教化したので浄土に往生されたといわれた。臨終のときは光

かしいつしか親鸞の教えに同調する人々が増え、教団的な集団が形成され、後に二十四輩と称された有力門弟が活躍し各々が開基した寺が地域の拠点となった。

京都に戻ったのは六十二歳頃といわれる。帰京後は、「三帖和讃」と言われる『浄土和讃』『浄土高僧和讃』『正像末和讃』、『唯信抄文意』そして浄土真宗の根本聖典『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）の推敲を続けた。また関東に残した弟子たちからの手紙による質問や疑問にも丁寧に分かりやすく説き返信した。『末燈鈔』『御消息集』などに収録）

親鸞の到達した教義は印度龍樹・世親から始まり、中国浄土教で発展を遂げ、九世紀日本にもたらされた天台浄土教や源信・法然につながる浄土教教義の到達点ともいえるものであった。

親鸞が関東の下級武士や庶民との同朋同行を通じて会得したもので、支配階級となった武士から無学な農民に至るまであまねく人々に受け入れられる究極的なものであった。師法然の専修念仏による「他力往生」から、さらに推し進めた「絶対他力」の教えである。

親鸞自身の信仰の変遷は、主著で「三願転入」とするその過程を述べている。第一は二十年にわたる比叡山での双樹林下の往生（難思往生）を願う万行諸善の修行修学（仮門）である。次に二十九歳の時山を下り善本徳本の真門（法然）のもとに通い専修念仏称えるが自力により行っていた。最後に阿弥陀仏の本願に浄土往生のすべてを任せて念仏を称える絶対他力に到達した。

親鸞自身は「絶対他力」という言葉はどこにも使用していないが、浄土真宗の根本経典である『教行信証』末尾の「正信念仏偈」で次のように述べている。

弥陀佛本願念佛　弥陀仏の本願念仏は
邪見憍慢悪衆住　邪見憍慢悪衆住
信楽受持甚以難　信楽受持すること甚だ以て難し
難中之難無過斯　難の中の難これに過たるは無し

（本願に背く邪見と憍慢のわれわれ悪衆生は、本願の念仏を信受することは甚だ難しい。それは難信中の難信でそれ以上に難しいことはない）

そして印度龍樹・天親、中国曇鸞・道綽・善鸞、日本の源信・源空の教えを説き最後に次ぎの言葉で結ぶ。

唯可信斯高僧説　唯斯の七高僧の説を信ずべし

親鸞は『仏説無量寿経』（曹魏時代二五二年天竺康僧鎧訳）の中に、阿弥陀仏がまだ法蔵菩薩と名乗っていた時四十八願が成就するまでは仏にならないと世自在王仏に誓った願の中で、第十八願こそが自らの正法「絶対他力」であることを読み取った。

第十八願、（念仏往生の願）
設我得仏、　たとえわれ仏となるをえんとき、
十方衆生、　十方の衆生、

至心信楽、三信（至心、信楽、欲生）に信楽して、欲生我国、わが国に生れんと欲して、乃至十念、ないし十念（十回名号を称える）せん。若不生者、もし、生れずんば、不取正覚。正覚を取らじ。

唯除五逆誹謗正法。ただ五逆（の罪を犯すもの）と正法を誹謗するものを除かん。

この第十八願を中村元・早島鏡正・紀野一義は次の如く和訳した。

「もしも、わたくしが覚りを得た後に、他の諸々の世界にいる生ける者どもが、〈この上ない正しい覚り〉を得たいという心をおこし、わたしの名を聞いて、きよく澄んだ心（信ずる心）を以てわたくしを念いつづけていたとしよう。ところでもしも、かれらの臨終の時節がやって来たときに、その心が散乱しないように、わたくしが修行僧たちの集いに囲まれて尊敬され、かれらの前に立つということがないようであったら、その間はわたくしは、〈この上ない正しい覚り〉を現に覚ることがありませんように」（『浄土三部経上』「無量寿経」岩波文庫）

渋谷治美の現代語訳はさらに理解しやすい。

「たとい私が成仏する資格を得たとしても、（過去現在未来にわたる）十方の（すべての）生きとし生けるものが心をつくして（浄土に生まれ変わることを）信じ楽しみにして、（死んだら）私の国（西方浄土）に生まれ変わりたいと願って、（私を讃えて）一回から十回念仏を称えたのに、もし（一人でも）生まれ変われない（ものが残った）としたら、（私は）悟り（成仏する資格）を返上する。ただし（救済対象から）五逆の者たちと誹謗する者たちは除く」（「親鸞思想の絶対他力の秘密」）

中村らは註の中で次のように解説した。

「第十七願（諸仏称揚『不悉咨嗟　称我名者』の願）に誓われた諸仏称讃するところの名号を聞き、願成就文（親鸞独自の解釈で如来より衆生に廻向された三心とする）にいう如来廻向の三心の起るとき往生は決定すると解して、称名念仏はそれ以後の仏恩報謝の行であるとする。

真宗では第十七願を信心の体たる名号を成就した願であるから「名号成就の願」という。第十八願は「信心成就の願」とも名づけている。十七願所信の行十八願を能信の信を明かす願として、行と信とは不離という」

なお「無量寿経の三心（本願の三心）」（至心、信楽、欲生）と「観無量寿経の三心」（至誠心、深心、廻向発願心）とは後者の三心が念仏以外の善根を積んで往生しようとするものだから両者は異なるが、親鸞は裏から言えば同じ意味とした。

唯除条項については、中村らによると親鸞は五逆と誹謗の二罪を犯すと救われないのであって、一罪（単罪）だけであれば救われると解釈して『大経』と『小経』の矛盾を会通したとする。この解釈は親鸞の「悪人正機説」

に関与してくる。

この有名な説は『歎異抄』の三番に記している、

「善人なおもつて往生をとぐ、いわんや悪人をや」

しかるを世の人常に曰く、

「悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや」と。

この真意は「善人は自分の力で往生するための努力をするので阿弥陀の本願（他力）を頼む心が欠けている。悪人は善を積む努力もできず、宿世の罪業の深さに気づいているので、他力（阿弥陀の本願）をたのむしかなく、悪人こそ最も正しく往生できる」と読み説いた。（名畑・多尾校注日本古典文学大系『親鸞集』）

平川彰は『仏教通史』の中で「絶対他力」について、親鸞の徹底した自己批判、罪障の自覚による自己の無において、如来の大悲の世界に甦った姿とした。

すなわち凡夫が厳しく自己を反省するならば、自力で真実心を持ちうることはあり得ない。そして至誠心・深心・廻向発願心の三心は、すべて如来の廻向によってはじめて成立することを説くものとした。「廻向発願心」を「決定して真実心の中に廻向たまえる願をもらう」と説き、弥陀諸善を衆生に廻向されるその善に基づいて衆生は浄土に往生しうるとするのである。一般には「廻向」とは、衆生が自己の作した諸善を廻向して、浄土に往生することを願ずるのであるが、親鸞の場合は、「弥陀が積聚した諸善を衆生に廻向してくださり、衆生はそれに乗托して浄土に往生できる」となすのである。これが「絶対他力」の立場から理解された「三心」である。

したがって信も行も凡夫のなしうるものではなく、如来廻向による行と信である。『高僧和讃』で「信は願より生ずれば念仏成仏自然すなわち報土なり。証大涅槃うたがわず」とした。

親鸞はここに出てくる「自然」、「自然法爾」という概念を使い絶対他力についてわかりやすく門弟たちに説いている。親鸞は三帖和讃や消息文といわれる『末燈鈔』・『御消息集』などで幾度も説明を繰り返した。

八十六歳の時に門弟に次のように語っている。

「自然というは、自は自力ではなくおのずからといい、しからしむという言葉である。然は、如来の誓願であるゆえにしからしむという。法爾というのは、この如来の誓願なるがゆえに、（おのずから）しからしむを法爾という」

また手紙の返事の中で「まことの信心の人をば、諸仏とひとしと申なり」と述べ「他力と申ことは、義なきを義とす（自力のはからいのないのを本義とする）と申なり」とし、はからいなきを他力というと記している。

親鸞は晩年一切のはからいを捨てた自然法爾の世界に入った。そこは『浄土和讃』でいう「無碍光仏のひかり」に満ちたものであった。一二六二年十一月二十八日九十歳で往生し、遺骨は京都東山大谷に祀られた。

大谷本廟は親鸞の末娘覚信尼や関東の門弟によって六角堂が建てられ遺骨が安置された。この墓所を大谷留守職が務めることとし、覚信尼のあとを子の覚恵が継ぎ、のちの本願寺は血脈相続されることになった。

その子の覚如（本願寺第三代宗主一二七〇―一三五一）のとき、血脈による留守職と親鸞の子で義絶された善鸞の子如信（第二代宗主）から直接親鸞の教えを受けた秘授口伝とにより、大谷本廟を寺として独立させ本願寺建立の基礎を固め浄土真宗として教団が形成された。

以後第八代蓮如（一四一五―九九）の登場前の間、東国門徒集団の高田門徒による別派（高田派・仏光寺派・興正寺派・三門徒派・山元派・誠照寺派）、横曽根門徒による木辺派、覚如の門弟が分派した出雲路派などが活動し、本願寺十派といわれる萌芽・分派独立が続き、本願寺自体は不振が続き劣勢であった。

中興の祖蓮如は思い切った儀式の簡素化を図る内部改革と宗祖と同じくひざを交えて話し合う談合を重ねた。比叡山の衆徒により本山は焼き討ちされたが、近江、越前吉崎に拠点を移し「御文章」と呼ばれる書面での伝道や「南無阿弥陀仏」六字名号を墨書し与えることで、門徒を団結させ本願寺の隆盛をみることになった。

その後十一代顕如（一五四三―九二）の時大坂石山本願寺をめぐって織田信長と十年にわたる抗争を続け、門徒の団結とその力を誇った。和睦をめぐり長男嗣法教如（一五五八―一六一四）が袂を離れ徳川家康により一六〇二年東本願寺を建立し真宗大谷派となった。西本願寺は第四子准如（一五七七―一六三〇）が顕如の跡を継ぎ、浄土真宗本願寺派となり分流することになった。

江戸期二百六十年間寺院は寺院法度・諸宗寺院法度により幕藩体制に組み込まれ、統制寺請制度により民衆を檀家として登録する宗門改帳を作成、一戸ごとに宗旨・檀那寺・家族氏名、続柄・年齢を書き記し、末端の民衆統制の役目を担った。この制度により、各宗派は経済的に安定した。

明治維新になると「王政復古の大号令」に始まる祭政一致をめざす神道国教化政策により、これまでの神仏習合による仏教優位を打破するため明治元年「神仏分離令」を発令し寺社を神道と仏教に分離させた。この分離令は長きにわたる仏教上位に不満を持つ神官を中心に「廃仏毀釈」の風潮が全国に拡大し、仏教各派は大打撃を受け一気に苦境に陥った。

この宗教政策に反対し政教分離を働きかけたのが長州周防出身の島地黙雷・大洲鉄然や赤松連城ら気鋭の真宗本願寺派僧侶であった。長州出身の新政府高官に働きかけ神道中心の政策を変更させるとともに、宗門の内部改革を進め寺法の制定、宗会の創設など教団の近代化を進めた。この時期宗主として若手僧侶を動かしたのが二十

一代明如（光尊一八五〇―一九〇三）であった。

まさにこの激動期に生まれ育ったのが光瑞（後二十二代鏡如一八七六―一九四八）である。明治日本が先進西欧諸国に追いつくため、国内では経済成長を優先する殖産興業政策を推進、国力の強化により東アジア進出を目論んだ対外（朝鮮・清国）政策を進めた時期と重なる。

幼い時から一門の僧侶や門徒に蓮如の再来と思わせた大谷光瑞は、世界的視野でかつ数十年先を見通すことのできた当時の日本では桁違いの人物に成長した。一般の学校教育にはなじめず、もっぱら宗門の僧職から一対一の秀才教育を受けた。宗祖親鸞の著作は無論のこと浄土真宗の教義や歴史、仏陀から始まる経典や仏教史、中国・日本浄土教の変遷、中国史および漢文・漢詩などを修得研究するとともに英会話や世界史にまで及んだ。

三八　中国調査の意図

大谷光瑞は明治三十二年（一八九九）十二月長期欧州留学に旅発った。

西欧への船旅の途中仏陀由来の地を訪れたものの、釈尊が悟りを開いた仏陀成道の地仏陀伽耶、初めて教えを説いた初転法輪の鹿野苑（サールナート）は、無残にもただ雑草が茂り荒廃した野原が広がるだけであった。日本仏教徒のためにも仏陀の聖地を精査したいとの思いを抱いた。

ロンドン滞在中精力的に各国を歴訪、政治とキリスト教との結びつき、教会や信者による日常活動の実情について直に触れることができた。同時に仏教研究の先端を走っていた欧州の東洋学・仏教学の学者らと意見交換を続けた。そこで分かったのは欧州では「大乗の教えは仏陀の直説ではなく後代の捏造であり、仏陀や仏教の研究対象は上座部である」とする大乗仏教非仏説であり、浄土真宗自体の根幹を否定しかねないものであった。

光瑞がロンドン滞在中に驚きを以て発表されたのが、オーレル・スタインの西域南道ホータン郊外で砂漠に埋もれたダンダン・ウイリク古寺院の発掘と仏教絵画彫刻・古文書の発見であった。この発見に触発され「仏の子」を自認する光瑞は欧州に根強く残る「大乗仏教非仏説」を反証するため、そしてタリム盆地に埋もれた仏教遺蹟を「仏教徒のわれわれが自らの手で発見・発掘する」ことを決意する。

もう一つは日本最大の門徒を抱える浄土真宗本願寺派宗主の就任が迫っており、二十世紀の布教を考慮すると き、彼の眼は国内ではなく海外就中中国に注がれていた。日清戦争中大本営の許可を得て戦地に従軍僧を派遣、い

ち早く従軍布教を始めた。戦争終結直後には海外布教の準備として「清韓語学研究所」を設置した。台湾総督府が置かれると半年後の二十九年一月には台湾開教を開始した。十二月には本部の開教事務局と真宗教会本部を廃し「布教局」を設置し強化する。

先を見通して海外語学研修派遣を開始、二十九年渡邊哲信（二十二歳）・足利瑞義（二十五歳二人は広島県備後末寺出身）を露国へ、翌年本多恵隆（二十一歳）ら二人を米国へ派遣した。自らは明治三十二年（一八九九）山東省で義和団蜂起の中上海、香港、漢口・武昌（現武漢）、北京を初めて巡った。中国国内における清国統治の実情、経済状況、民衆の生活ぶりなどを視察したが、同時に宗教とりわけ仏教の実情に注意を払った。

中国の内政は対外戦争に敗退続け、もはや「眠れる獅子」の威厳は失われ、国内統制は弱体化していた。十八世紀末白蓮教徒の反乱と十九世紀初めの天理教徒（白蓮教の分派）の反乱そしてキリスト教的結社の蜂起が続き、その鎮圧に苦労している様子が見て取れた。「三民主義」の旗頭孫文らの動向も無視できなかった。

こうした国内事情に対し、仏教宗派はただ寺院に閉じこもるだけであり、民衆は二千年の歴史をもつ仏教に信を置くことができなかった。光瑞の眼には国内統治能力を欠く政府に対し、この国の仏教は民衆をまとめさらに改革に立ち向かう気力も行動力も感じさせない脆弱な集団に見えた。「仏の子」を自負する光瑞は中国の仏教再興を目指し、われら浄土真宗の布教を強く感じた。

中国の布教のカギは露国の動静にも掛かっていた。大国露国は満州の権益を巡り、日本と対峙していた。光瑞は露国との衝突を日清戦争終結直後からすでに予期しており、渡邊足利の二人をサンクト・ペテルブルクに語学留学させていた。

露国は大国であっても帝政による軍事優先から、国内外いずれも多くの問題を抱えていることが、西欧諸国に長期滞在したことで光瑞にはより明確に認識できた。帰途露国を縦・横断することで露国の国内事情を確認したかったのかもしれない。光瑞には日本が露国と一線交えることになっても、内外に多くの問題を抱え中央から遠く離れた満州の僻地戦になる以上、日露戦争は「長期になることはない」と見通したのではなかろうか。

光瑞は中国での本格的布教をずっと秘め続けていた。

三八　中国調査敢行の奇跡

「仏の子」を自認する日本仏教界の頂点に立つ光瑞としては、大乗仏教東漸の仏教遺蹟をキリスト教徒により発掘されることは見逃せないことであった。理想に燃える光瑞は、中央アジアシルクロード都市での発掘と印度の荒れ果てた聖地の調査はなんとしても仏教徒のわれわれの手でかなえるとの思いが強かった。

一方、浄土真宗本願寺派宗主に間もなく就任する光瑞にとって、布教に力を入れ門徒の増加を実現するという現実的な問題についても直面していた。そのために帰途印度から直接海路で帰国する安易な旅程を選ばず、緬甸北部の山地から中国奥地に入ることを決断した。民衆信仰の中心俄眉山と浄土教発祥の地であり歴史の節目で国家の運命を左右した白蓮社の牙城廬山に足を踏み入れ、中国仏教の現状を探ることであった。これから本格的な布教を目論む浄土真宗次期宗主光瑞にとって、この調査結果はすぐにでも欲しいものであった。

中国調査班として急遽選ばれたのは吉見圓蔵、渡邊哲乗、野村禮譲、茂野純一、前田徳水の若僧五人であった。ここからは前田が書き残した「手記」と渡邊の「緬甸より蘭州に至る旅程表」（いずれも『新西域記』収録）から追っていきたい。前田の手記は簡潔に要点を記述している。一方渡邊の旅程表は、雲南から蘭州までの宿駅地・通過村落地毎に、月日・里数・道路の様子（平路・山路・水路）・気圧（高度）・方角・所要時間・気候（気温）・備考として北緯・東経、人戸数、商業の様子、特産物、宿泊設備の状況、電信郵便設備、河・湖・山、水質、名所旧跡など実に詳細に記録しており、陸軍の進軍には重宝される代物である。

明治三十五年十二月三十日五人は神戸で乗船、翌年一月二十日緬甸ラングーンに上陸予定であった。門司に立ち寄り新年は船中で迎えた。上海、香港を経て十七日にはシンガポールに到着した。ここで明如上人危篤、次いで遷化の報が届いた。

五人は印度首都カルカッタにいるに光瑞に今後の旅程について問い合わせたが、光瑞からは「緬甸に来るべし」との指示があり予定通りラングーンに上陸した。しかしかれら五人の胸中は複雑であった。緬甸までは来たものの、計画では光瑞が隊長として中国班を引率し、緬甸北部から中国西南の山間大理を目指すのだが、その後の中国での調査地・調査目的・旅程など詳しく教えられていなかった。

明如宗主逝去の報により、間違いなく新門光瑞は直ちにカルカッタから日本行に乗船し京都西本願寺に帰山せねばならない。京都では明如上人の葬儀から始まり、新宗主就任の数多くの儀式が待っていることは真宗僧侶ならずともだれにでも想像できた。五人の中国班は光瑞と緬甸では対面できず、空しく帰国せざるを得ないものと覚悟した。

この時奇跡が起きた。

前年夏英国王戴冠式が国王の盲腸炎で一か月半遅れた

ことにより、光瑞自身強く望んだクチャとホータンを訪れることができなかった。今度は印度皇帝を兼務する英国王の印度国王戴冠式が一月一日から延々一週間続き、終わると各国から参列者は首都カルカッタで印度政府高官に挨拶・面談したうえで帰国した。そのためカルカッタから乗船帰国する人々で数カ月先まで予約で埋まっていたのである。

しかしことが事だけに、日本政府領事館が威信をかけて日本行き乗船の確保に動いた。何といっても明治天皇皇太子の義兄にあたる方である。それでも空席を見つけることができなかった。慌てた光瑞・政府は民間の三井物産や日本郵船の荷主・船主としての強い立場と情報網に頼り、僅か四人の乗船確保に動いた。だが日本を代表する二社と雖も「空き」を見つけることはできなかった。式典には欠席したが世界に冠たるエドワード七世の印度皇帝就任式には各国の王侯・貴族や大統領・首相・大臣・将校それに政府高官などの随行員であり、わけを話しても譲り渡してくれることは全くなかった。

光瑞と随行者連枝日野・上原・升巴の四人は、やむなく何とか切符が入手できた緬甸ラングーンまでまず行くことに決めた。それ以東は沿岸を通う近距離船に乗り継ぎながら、シンガポール、上海へと日本に近づき、とにかく少しでも早く帰国できる船を見つけざるを得なかった。

エドワード七世の戴冠式ではロンドン、カルカッタと二度までも多大な影響をうけた光瑞であったが、今回は中国派遣班にとってはまさに奇跡としか言いようのない幸運をもたらした。

就任したばかりの鏡如上人光瑞新宗主が、直接日本に帰国できず、やむなくラングーンにやって来ることになった。しかも新たに入手できたペナン行きの貨物船出航は十三日であり、緬甸で一週間の乗船待ちのため滞在することになった。

この思いがけない展開に若僧五人は欣喜雀躍した。本山では対面などもってのほかで尊顔すら遠くでしか見られない宗主から、この度の中国探索について直々に指示・指導を受ける事がかなうのである。しかも一度はあきらめたにもかかわらず、当初の計画通り中国内陸の調査に赴くことができることになった。この時かれらは緬甸到着後、中部古都マンダレーで緬甸・中国の奥地について調査研究を始めていた。

光瑞一行が二月二日印度を発ち、五日ラングーン到着予定を知らされると、代表して渡邊・吉見の二人を出迎えのため港に待機させた。

光瑞は上陸後すぐにこの国で興隆している緬甸仏教の総本山シュダゴン・パゴダを視察、そのあと列車で北上、六日午後「ひたすら猊下の御到着」を待っていた三人と

の感激の対面が実現した。

十一日までの五日間は光瑞も五人の中国隊員も必死であった。前田はこの時の様子を「我等に今後の旅程に就き詳細御命令あり」と簡潔に振り返っているが、中国仏教なかんずく慧遠から始まる中国浄土教の歴史については詳細な説明を受けたことは間違いない。そしてわれら真宗本願寺派の中国布教計画ついても語ったはずである。中国仏教の復活を浄土真宗本願寺派の手で成し遂げたいと語る新宗主の「仏の子にしてアジア人」と心得る意気込みに、光瑞の同行はかなわなかったがかれら一行を大いに奮い立たせた。

光瑞の持てる中国仏教の知識はすべては理解できなかったと思われるが、この調査行の目的が中国内陸部の布教拡大にかかわるもので、中国人の現代仏教事情を物語る俄眉山信仰と元や清に反抗し内乱を起こした白蓮教徒の故郷たる慧遠の創った白蓮社の調査についてその目的も調査項目も明確に指示されたはずである。もはや光瑞に頼れない五人は、門主の指示や説明を一言たりとも逃さない真剣な面持ちで聞いた。

五人は緬甸北部から中国大理に入り、街道を使い雲南を目指す。そこから野村と茂野は廬山を、前田と吉見は俄眉山を、渡邊は峨眉山に行く二人と叙州（現宜賓）まで同行しそこから成都を経由して蘭州に行き、六～七月ごろ到着が予想される渡邊哲信・堀賢雄の中央アジア探検班をそこで出迎えることが指示された。

光瑞は無念にも当初の計画を断念したが、日本行き直行便が取れないという思いがけない事態が幸いし、マンダレーでのまる四日間確かめたいと思っていた中国仏教の現状について五人に詳細に指示・説明、調査の思いをしっかり伝えることができた。

光瑞新宗主から直々に指示を賜るという栄によくした彼らは、これまでの不安は一挙に解消、これから赴く中国への思いを強くした。

三九　中国調査行

明治三十六年紀元節光瑞らは十三日のペナン行乗船のため南下してラングーンに向い、光瑞一行をマンダレー駅で見送りした五人は、北上して中国への入り口バーモへと旅発った。緬甸の中央を流れる大河イワラジ河にそってバーモまで三日の旅であった。四十年後の太平洋戦争時米英連合国の主要「援蒋ルート」として、南京・漢口・重慶など内陸部を転都する蒋介石国民党政府に支援物資を搬入した街道が古くから存在した。両国の国境は山脈で仕切られているが、イワラジ河の支流が中国高地から流れる渓谷を利用した幹道であった。

バーモ出発後十日で国境を越え、清国永昌府に入り、

二十六日永昌（現保山）そしてこの地の中心大理に着いたのは三月八日であった。

大理は大湖洱海の沿岸にあり、府庁のある大都市で背後の黙蒼山（現蒼山・苍山）がそびえる眺望絶佳で名所古蹟が多い。この地に三日間滞在し、清大理府庁を表敬した。日英同盟締結直後であり、緬甸で厚遇された英領事館がありこれも訪問した。バーモから山路が続き旅の疲れをしばし癒した。

二十三日雲南省都（現昆明）に着く。この地に一週間滞在した。ここから東の貴州へ行く野村と茂野に資金を渡し、また本部へ電報で雲南到着を知らせた。

雲南の郊外楊林で野村・茂野の二人と別れた三人は、幹道を北上し長江最初の都市叙州（現宜賓）に着いたのは四月二十五日だった。ここから前田と吉見は北西に進み成都の南西に聳える峨眉山を訪れ、渡邊は成都に直行、さらに北に進みシルクロードを調査している渡邊哲信・堀賢雄二人を迎えるため蘭州を目指した。

哲乗と別れた前田・吉見の二人が嘉定府に着いたのは三十日であった。そこから高さ一萬二千尺（現在の標高三〇九九㍍）の「常に千年の雪を戴き、白雲皚々として天に冲す」と四月末にもかかわらず頂上には雪が輝きそびえたつ雄姿が望まれ、想像以上の展望に驚いた。二つの山（大峨眉・小峨眉）が向かい合う形が人の美しい眉のようなことから峨眉といわれた。

そして「古来華厳経所説の普賢菩薩示現（法華三昧を行ずると普賢菩薩が六牙の白象に乗り現れる）霊場として、衆庶の崇敬すること恰も邦人の叡山高野に於けるが如し。堂宇七十余、多く輪奐（壮大で光り輝く）の美を極む」と記し、優雅な名山、壮大美麗な寺院、そして普賢菩薩の霊験を求めて中国民間信仰の中心として古くから多くの人々が登った。

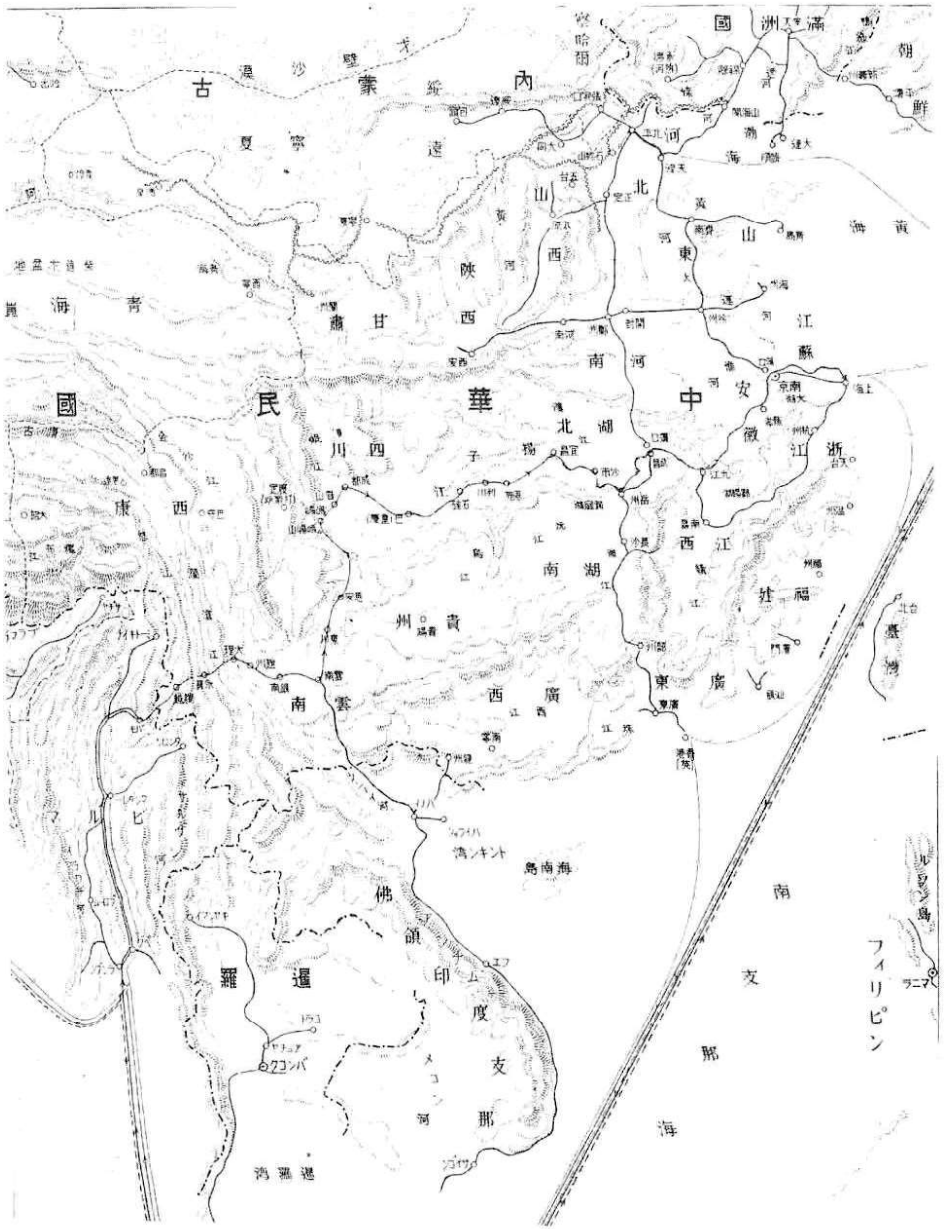
わが国では華厳宗は南都六宗東大寺（開祖良弁）が本山。普賢菩薩（釈迦の慈悲）は釈迦如来（法華経）・毘盧遮那仏（華厳経）の左側脇侍。右側の文殊菩薩（釈迦の智恵）と合わせて釈迦三尊とする。釈迦は浄仏国土（現実の世界を清めてできる浄土）に住まうとされる。

同地に二日滞在し、府庁に出向き挨拶をするとともに登山の状況を尋ね準備を整えた。

五月二日嘉定府を出立、一日目は山麓の峨眉県城内の旅舎に泊まった。次の日早朝から登山に出立した。

伽藍壮大僧徒多し記した「興聖寺」、堂宇四五あり宏壮で本殿に普賢菩薩象に乗ずる大銅像を安置している「聖蹟寺」、釈迦如来と関帝を祀る「保甯寺」を経て、十時半本格的な登山口に着く。ここには「殿宇宏壮華麗な前殿普賢菩薩大像・後殿弥勒菩薩大像を安んじ僧徒八十余人」と頗る大寺「報国寺」に参った。

大いに登ったところに峨山第一の「伏虎寺」に着く。



緬甸ラングーンから上海への行程
『新西域記』（上原芳太郎編）

寺名は宋紹興年間虎による大きな被害をうけたので、この地で幟旗を立てて鎮めたことに由来する。「渓流岩石に激し、新緑欝として翠滴るが如く風景絶雅」な処に「殿宇宏壮にして古色蒼然、俄山第一の大観なり」と記す「三則寺」（伏虎寺）には、前殿普賢菩薩中殿布袋後殿釈迦仏と十六羅漢が安置されていた。二人は「大堂厳然輪奐の美を極める」寺に自然と崇敬の念が起きた。しかし寺僧は五十余いるのだが、

「悲哉僧徒不肖、皆愚昧にして事を弁ぜず、為に仏教を興隆するに能わず、吁」

と僧徒の無学を悲しみ嘆いた。

昼から三寺を経て険阻の急坂を登ると「閣下清流滾々として流れる」神水閣に着く。ここは特に風光明媚な処であり、天台智者大師の遺蹟があった。三時ごろこの日の宿泊予定の「大峨寺」に着く。門前に古碑があり、宋蘇東坡（蘇軾）の大書「福壽」や唐の道士で文人であった呂純陽の大書が刻まれていた。大堂には普賢菩薩大像が祀られ殿堂客殿方丈頗る宏壮美麗でありここで宿泊した。これまで宿は「不潔なること実に言語に絶し」であったが、「今初めて清潔、心身頗る快し」と安堵した。

寺僧とは筆談したが、僧侶は「大人亦た能く中華の文字を書す」と言って二人の漢文に驚いた。夜寺僧が普賢菩薩像の前で「阿弥陀経」を誦していたが、儀式は総じて同じであり故郷を思い出させた。

三日目早朝二人は像の前で小経を誦し前途の加護を乞うて出発した。二寺前を通り龍昇岡に着きその後清音閣に着く。楼閣は天に聳え閣下には渓流があり、遙か山下に落ちるさまは「風光絶佳名状すべからず」と記した。

昼前東晋時代創建の名刹「聖壽萬年寺」に入った。門から順番に布袋・普賢両脇に諸天像・釈迦三尊像を祀っていた。ここで栗飯の昼食をとり再び一時間急坂を登り峰の頂上息心所、さらに一時間登るとまた峰の頂上の華厳頂に着いた。いずれも「四辺を瞰下すれば白雲山腹に懸かりて山下を望むべからず、風景頗る佳なり」と評した。夕方になり疲労困憊して華厳頂「蓮花石寺」で宿泊した。

四日目は朝からいくつかの寺を通り、普賢菩薩がこの池で乗っている象を水浴させたとのいわれのある洗象池や人に似た仙人石、梵鐘に似た巨岩の聖鐘をみながら二時半に俄眉山の絶頂にたどり着いた。登り始めて四日間を要した。頂上は広くしかも平坦であった。十余の「華厳寺」大堂が甍を列していた。この金頂正殿が大峨眉の山頂で一万二千尺の高さになり、

「満山悉く脚下に朝し、千里の景物尽く双眸の内にあり」

さらに、

「断崖絶壁之を望むに瞠目して熟視すべからず。冷風常に足下より来り、雲霧亦朦朧として常に眼下の諸山を閉

す。風光変幻名状すべからず。蓋し天下の偉観なり」

と名山の頂上での光景に驚くばかりであった。

頂の南に千仏頂さらに南に萬仏正頂があり、ここが俄眉の最高峰で三千九十九㍍の高さである。やはり普賢菩薩の大像が安置されていた。ここからの見晴らしは金頂と同じく「風景絶佳」であった。

夕刻金頂に戻り金堂の客殿で宿泊した。頗る清潔で稀にみる処とした。王義之の書がありこれを摺刷しようとするが寒くて上手くいかなかった。

寺僧三十五名が住んでおり夜筆談したが、禮仏誦経の外は一人として禅学を志す者はいなかった。

「噫、この霊場に居し、この霊仏に侍して、尚一句の法門志なき、支那仏教の衰うる亦所以ある哉」

と真宗僧とのあまりの違いに嘆いた。しかし寺僧は二人に帰国した後大日本大蔵経を寄贈せよと要求し、欲の深さに驚かされた。「無学で自宗の法義も解せない者が、大蔵経を得て何のためか」と言うと、黙って退いた。

三千㍍のこの寺は日没後濃霧に覆われ、「寒気凛烈肌に徹す」寒さになり、炭火を山の如く積み暖を取り眠りについた。

五日目朝から下山の途に就いた。「或は下り或は登り」ながら、途中で一泊、二日がかりでようやく麓に着いた。

俄眉山による中国仏教の現状を調査した二人は、

「大俄全山住僧千余人を越ゆると雖も、憐れべし、皆是れ愚僧にして、自宗の何たるを解せず」

と総括した。

俄眉山の調査を終え再度叙州に戻り、水路で重慶に下った。ここから宜昌まで長江の水路三峡を下れば数日で着くのだが、光瑞から「英国鉄道敷設の計画あり。依って特に陸路をとるべし」との命を受けていた。

この間の陸路は悉く山道で嶮悪、しかも六月の雨季にあたり、降雨の時は十度以下に日射の時は四十度近くになるので、気温の激変に疲労困憊し、遂にマラリアの熱病に罹った。五日間昏睡しながら駕籠に乗り、危険な山路を進んだ。転落し川に墜落する事故が何度も起きており、

「困苦を嘗め尽くして尚生命を全うせしは寧ろ不思議の感あり」と山路・降雨・気温激変・病気の四重苦に堪えることができたのは、仏の加護として感謝した。

余談だがこのくだりを記していて、二十年前の三峡下り旅行を思い出した。

山崎豊子の『大地の子』は『文芸春秋』に八十年代後半から四年にわたり連載され、まだバブル経済の余韻が残る九十一年に単行本が出版された。連載中から評判が高く読みたいと思っていたが、ＮＨＫでテレビドラマ化された。日中共同制作の力編で全編欠かさずみて感激、

その後文庫本を読み再び感動した。

主人公は満州でソ連侵攻の際、生き延びるため中国人教師夫婦に委ねられる。文化大革命を進める紅衛兵の横暴に苦しみながらも技術者として成長する。日中合作プロジェクトである上海製鉄所建設の中国側技術責任者が実の息子、日本側の製鉄所幹部が実の父で、二人は激論を交わしながらも理解し合い完成にこぎつける。最後の別れの時実の父から日本に帰り跡を継いでほしいと頼まれるが、主人公は帰国しないで「大地の子」として日中の架け橋として生きると告げる、その舞台が重慶からの長江下りの船の中であった。

この長江の中流にある宜昌に世界最大の水力発電ダムが九四年に着工され、工期は十二年程度かかり二〇〇六年完成予定であった。しかし完成の三年前には貯水が開始され水位は百三十メートルまで上昇するとの報道が盛んにされた。天下の渓谷美を誇る長江三峡もこれだけ水位が上がればただの山間に変わってしまう。李白が釈放されたときの喜びの詩「早発白帝城」（朝辞白帝彩雲間）の城や後漢末曹操と孫権・劉備連合軍が激突した「赤壁の戦い」の跡も失われるのではとの思いが募り、二〇〇一年盆休みに五泊六日の長江三峡下り旅行に出発した。

重慶・観光船二泊・武漢・上海に泊まった。なんといっても五千屯の船旅は個室しかも冷房シャワー完備で快適であった。船中では朝から食べきれないほどの四川料理が出された。ガイドから重慶・南京・北京の夏は四十度になりストーヴと言われることを教わった。蒸し暑いので冷房の効いた涼しい部屋で沿岸をみながら過ごすのだが、旧所名跡や風景の素晴らしいところでは船内放送で知らせるので船上に出て鑑賞できた。渓谷美・中国歴史文化（古戦場・漢詩の舞台）・四川料理・船旅と堪能した旅であった。この三峡下りクルーズを経験したことで前田らの苦難が分かる。

前田・吉見二人は辛苦を重ねながら、宜昌に着いたのは六月末であった。そこから漢口に行きマラリアの治療を受けたと記しているので、そののち上海に向かい、帰国したのは七月末頃であったと思われる。

野村・茂野二人は光瑞から廬山特に東林寺の調査を命じられた。その足跡を記した調査報告書を提出したことは間違いないが、散逸して残されていないので正確には辿れない。昆明まで五人は一緒であったが、二人はそこから東の貴州（貴陽）に向けて進み、北東の長沙を経由して長江に向かって進めば廬山へは最短となり、この道を選んだものと思われる。昆明から貴陽までは山路であるが、貴陽からは平坦な地形であり長江支流の川や湖が多く平易な幹道であった。雲南（昆明）郊外楊林で別れたのが四月三日なので、四月中には廬山に着いたものと思われる。

廬山は周囲を大河や湖に接しているが、周りは断崖絶壁に囲まれている。最高峰でも千五百メートルに満たないが雲や霧が漂い渓流が流れ美観の神聖な名山と知られ、多くの「廬山図」が山水画で残されている。

李白が何度も訪れ詩歌を残しており代表的な「望廬山瀑布」で山中の風景が語られるが、廬山の山容を蘇東坡が「題西林壁」で見事に描写している。

横看成嶺側成峰　横に看れば嶺に　側には峰と成る
遠近高低無一同　遠近　高低　一も同じきは無し
不識廬山真面目　廬山の真面目（真の姿）を識ざるは
只縁身在此山中　只だ身の此の山中に在るに縁る

多様な廬山の姿を簡潔に記しているこの詩を、「弁証哲理の満ちたもの」としてとらえる学者も少なくない。

廬山では中国浄土教の祖慧遠が創建した東林寺で白蓮社について調査したことは間違いない。慧遠は「沙門不敬王者論」を説き、沙門を国王に礼拝させることを拒絶した。真宗も顕如の時石山本願寺で織田信長に真っ向から対抗した。

白蓮社の流れをくむ白蓮教は元の末期反乱し、ついに明朝の建国につながる。清時代にも各地で反乱し清朝衰退の契機となった。唐以降仏教の衰退が続くなかで民衆を抱き込み旧勢力（元・清）に対抗したその根源は何処にあるのか、光瑞の知りたかったことは多かったはずである。新宗主に就任した直後であっただけに、これらの調査指示はしっかりなされたことであろう。

野村と茂野は廬山の調査を五月初めには終えて、上海経由でその月に帰国したものと思われる。

渡邊哲乗が蘭州に着くのは六月二十日頃であり、兄哲信と堀賢雄はまだ西域北道クチャで遺蹟の発掘調査中であった。二人と西安郊外で再会するのは半年以上先の翌年二月末であった。哲乗は光瑞の命で堀とともに日露戦争の最中北京に赴き、そのまましばらく中国にとどまり、忙殺する戦中・戦後の処理に携わった。

五人による中国仏教調査は、中央アジアや印度の古蹟探査に比して、経典や仏具・絵画の新発見といった耳目を引く目新しいものではなく、浄土真宗本願寺派が必要とする中国仏教の調査であった。

しかし二十世紀初頭緬甸奥地から雲南の大理昆明に入ることなど誰も予想もしたことのない未踏な行程であった。中国奥地から成都や重慶を経由、しかも陸路で宜昌まで、また貴陽や長沙を経由して上海まで、いずれも徒歩による踏破も初めてであろう。

だが何よりも中国大陸に照準を定めていた新宗主光瑞にとっては、中国仏教の現状や衰退の原因を突き止めることはすぐにも要るものであった。かれらの調査報告は光瑞の中国布教計画に活用されたものと思われる。

光瑞は宗主になったのち、日露戦争終結の次年教線拡

大を実行すべく自ら清国巡察に赴く。この時は父の死により行くことがかなわなかった廬山に立ち寄り、中国浄土教の開祖慧遠の東林寺視察が実現した。

浄土真宗本願寺派は北京（北京本願寺）大連（本願寺関東別院）に次ぐ南部の拠点を漢口に定めた。辛亥革命が武昌で始まった明治四十四年には上海の清国開教総監の臨時部を漢口本願寺出張所に設け、在留邦人や門徒の保護・慰問・葬儀に備えた。

振り返ってみればこの中国調査行は、帝国日本の中国進展に歩調を合わせ否先んじる形で、浄土真宗本願寺派の教勢伸長を図り、あわせ中国仏教再興を目指す第二十二代鏡如上人大谷光瑞の厚い思いからであった。

（つづく）

参考文献は最後に記します

私の伊達政宗像を訪ねて（その四－⑤）

安藤剛

その一：伊達政宗のルーツ
念西と朝宗と宗村
福島に伊達氏発祥の地を訪ねて
その二：十七代政宗の誕生
父輝宗の惨劇
二本松の粟ノ須古戦場を訪ねて
その三：小田原陣の遅参
弟小次郎の刺殺
大悲願寺の白萩文書を訪ねて
その四：政宗と秀吉と家康
海外への夢か野望か
遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて
その五：仙台城と瑞鳳殿
政宗の逸話と書状
日比谷に政宗終焉の地を訪ねて

【慶長遣欧使節を訪ねて】

〈1〉支倉常長への憧憬

支倉常長の名は、小学生の頃から知っていた。郷里の宮城県南部の大河原町から北へ十四キロ、バスで三〇分ほど山に入った支倉という村落が、政宗がローマに派遣した常長の故郷だということは、病弱のため二階で寝た切りの叔父にイエスキリストの話をよく聞かされていたので、その叔父に教えられていたのかもしれない。

支倉村は、母の勤めていた沼辺小学校の少し先で、日直の母のところに遊びに行っては、いつか足を延ばしてみたいと思いながら、果たせぬまま歳月は過ぎていた。

二〇一三年に慶長遣欧使節出帆四〇〇年を迎え、寒村の川崎町支倉は、常長の故郷として脚光を浴びた。

〈2〉支倉常長の出自

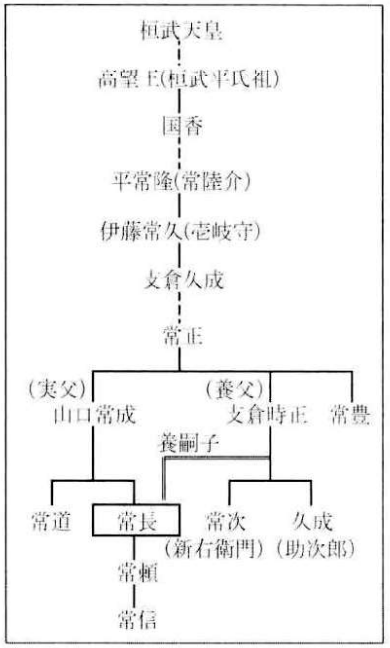
五年前に東北のキリシタン殉教地を訪ねて、福島県の会津若松市から山形県の米沢市に入ると「支倉常長生誕の地」の幟が、駅前通りにはためいていた。

なぜ米沢に常長が、川崎の支倉ではないのか、という思いだったが、政宗の祖父晴宗が天文の乱で父稙宗を倒して福島県伊達郡桑折西山城から米沢城に移り、政宗が秀吉の奥州仕置で岩出山城に転封されるまでの四〇余年、米沢は伊達家の本拠地だったのだから、伊達家の家臣常長が米沢に生まれたのも考えてみれば当然なのだろう。

支倉氏は、桓武平氏の祖高望王の嫡子平国香の九世の孫、従五位下常陸介常隆の次男伊藤常久を祖とする。

常久は、承安元年に平清盛に仕え従六位下壱岐守に任ぜられ、治承三年八月に常州西方目代となり下向、翌四年に平家打倒の旗揚げした源頼朝が鎌倉に入り政事を執るを知り浪散して五年、文治元年に伊達氏始祖朝宗となる中村常陸介念西の幕下となり常陸国筑波郡中村に住む。

文治五年の頼朝の奥州合戦に、念西父子の参陣に従い、福島県信夫郡で平泉方武将佐藤庄司基治を討ち取る先陣を務め、その武功により信夫郡山口村（福島市）と伊達郡梁川村（福島県伊達市）と柴田郡支倉村（宮城県川崎町）に五百町を賜わり、柴田郡支倉に住んで、その子久成が、伊達氏三代義廣の命で支倉氏を名乗る。



久成の子常頼が伊達氏四代政依に、その子定常が伊達氏四代・五代宗綱に仕えて以降、その子孫代々、伊達家家臣として、幾多の戦陣で軍功をあげていく。

伊達氏十四・十五代の稙宗・晴宗二代に仕えた支倉常正は、千二百石の禄を賜わり、支倉村に城を築き、天文十四年の二本松の役に戦功を挙げ、父子相克の天文の乱に勝利した晴宗の馬廻役として米沢城に出仕した。

常正の次男で山口城主山口時正は、十六代輝宗に仕えて、天正四年の相馬攻めに第十番備の部将として出陣、武功を上げて梁川城に入り、信夫山口城を譲られた弟常成が山口飛騨常成を名乗り、常長の実父である。

支倉城主常正の長男常豊が早世したため、梁川城主の時正が、天正七年に支倉本家を継いで柴田郡支倉に移り住み、支倉紀伊時正を名乗る。

支倉常長は、元亀二年（一五七一年）常正の三男山口常成の子として出生、父常成は、輝宗の近習として、長井庄に領地五〇町を賜わり、同郡立石村に居住していた。

天正五年（一五七七年）常長は、子のない伯父時正の養嗣子となり本苗支倉に復し、翌々年に柴田郡支倉に移り住み、十七代政宗に仕える。

慶長元年（一五九六年）に後妻を娶った養父時正に実子久成と常次が生まれたため、常長は政宗の命により長子紀伊久成と家禄を二分し、六百石の分家となる。

〈3〉支倉常長の経歴

常長は、慶長遣欧使節に選ばれて歴史の舞台に出るまで一介の中級家臣に過ぎず、現存する経歴記録は少ない。「仙台市史・特別編8」第二章に掲載された資料から常長の経歴を抜粋する。○数字は、資料番号です。

⑥　伊達天正日記の天正十六年（一五八八年）四月一〇日条に「最上衆首二討捕候て（中略）其後、御西舘江御越候、支倉五郎左衛門尉まいり申候」とあり、常長が米沢城西館に伺候する記述が、常長史料の初見である。

天正十六年一月に宮城県北部の大崎氏家中で内紛があり、当主義隆が義兄の最上義光に、重臣の氏家吉継が政宗に援軍を要請して、大崎・最上連合軍と伊達軍の大崎合戦に発展、常長十八才、初陣だったのかもしれない。

⑦　翌十七年正月の伊達氏家臣等献上物日記に、支倉五郎さへ門尉が、鮒、昆布、根深を献上する、とある。

⑧　同年四月二〇日付原田旧拙斎宛て政宗書状に「支五（支倉五郎左衛門）到着候、神名之儀、氏（氏家）富日（富沢日向）無異義候、可心安候、氏自身出仕之事ハ、云々」とあり、伊達氏と大崎氏の間で、大崎氏が最上氏と縁切りして伊達氏に与力すること、氏家一統を保障することを条件に和議が成立、更に大崎氏に叛いて苦境に立つ氏家吉継と富沢日向に起請文を提出させて、吉継に政宗の元へ出仕するよう求める交渉を常長が担っていた。

⑨　同年一〇月十四日付政宗書状で「氏弾・鳥島間、于今無擇之候由候、依之支倉五郎左衛門指下候、其元馳走之上、彼間如前々入魂候様、任置候」とあり、親伊達派の氏家吉継と大崎家臣鳥島氏との対立の調停を氏家氏一族の鴨目豊前守に取り成す使者を常長に命じていた。

⑩　天正十九年一月の伊達政宗初上洛の供衆一三八人中七六番目に、はせくら六右衛門尉の名がある。

⑪⑫　伊達治家記録の天正十九年六月二四日条に「公（政宗）宮崎城へ押寄セラル、城主ヲ笠原民部卜称ス、大崎殿旧臣ナリ、爰ニ真山式部継重、馬上四十余騎・足軽三百余人ヲ引連レ、御先ニ宮崎へ参陣ス、公御覧有テ、支倉五郎左衛門ヲ御使トシテ、式部ハ城主民部ニ親類タル由聞召サレ、城下ヲ引退キ、罷在ヘキ旨、仰付ラル、云々」

前年九月の葛西大崎一揆煽動疑惑のため一月に上洛、秀吉の許しを得た政宗は、五月に帰国して直ちに一揆討伐戦に再出陣、宮崎城を攻撃したが、城主笠原民部の親類真山式部の参陣を見て、常長を遣わし軍を引き退かせた。

⑬ 仙台人物志の「屋代勘解由兵衛伝」に、「与山岸修理・支倉飛騨（常成）・支倉六右衛門（常長）等、師兵往深谷、襲葛西之賊、修理設伏兵、而殺多少賊」とあり、天正十九年七月に、葛西一揆で投降してきた武頭二〇余人を深谷に集めて謀殺した刺客団に常成・常長親子が加わり、景頼の一揆掃討の悪どい仕事を請け負っていた。

⑭ 同年七月十五日付政宗書状で、亡き氏家吉継の父鉄心斎宛てに支倉五郎左衛門を派遣する旨を伝えた。

⑮⑯ 同年七月二三日付政宗書状と伊達治家記録同日条に、南部大膳太夫信直から九戸政実叛乱の注進があり、九戸城中と道筋見分のため支倉与市と白石七郎を南部に派遣しその案内を後の稗貫一揆の稗貫重綱に頼んでいた。

⑰ 伊達治家記録の文禄元年（一五九二年）正月五日条に、秀吉の朝鮮征伐に伴う朝鮮御陣御供三〇人の中に支倉紀伊（時正）、御手明衆二〇人の中に支倉六右衛門の名があり、政宗の朝鮮出兵に養父時正と従軍していた。

⑱ 文禄二年から慶長五年の間と思われる御使番之衆五六人の中に支倉六右衛門尉の名があり、少壮気鋭な得難い使役として重用されていた。

〈4〉常長の使節抜擢理由（常長追放文書の発見）

僅か六〇〇石取りの中級藩士支倉常長が、なぜ遣欧使節団の使節に抜擢されたのだろうか。

前項の経歴をみると、宿敵会津蘆名氏との決戦を控えて、背後の大崎氏との大事な交渉役を政宗に託されており、小田原合戦後には、政宗の命取りになりかねない葛西大崎一揆や九戸一揆の後処理など、危険な汚れ役を成し遂げて、常長の無類な折衝力と実行力と忠誠心は、政宗に大いに評価され頼りにされていたに違いない。

しかし、裏方としての秀でた実績と信頼だけで、藩の命運を賭けた海外での大役を一任されるものだろうか。

昭和六一年、謎とされる常長の使節抜擢理由を決定付ける史料が、仙台市博物館内で発見された。実父常成の切腹と常長の追放を命じた政宗の書状（次頁）である。

「支倉飛騨事、去年以来召籠分に而指置候、然者、此内弥以不届義候条、唯今申付候て腹をきらせ可申候（中略）子ニ候六右衛門尉事も、親子之義ニ候間、命ハたすけ、追失可申候、八月十二日　政宗（花押）茂石見殿」

主旨は「昨年以来、不届きの罪を犯して幽閉を命じていた常成が、さらに罪を重ねたため、本日ただいま、切腹を決定する。子息の六右衛門常長は、本家の養子となってはいるものの実子であるため追放を命ずる」という。

常成の犯した罪は不明だが、奉行を二人立てて斬罪でなく切腹を、政宗が重臣茂庭綱元に直々に命じるとは、よほどの重罪だったのだろう。しかも養子に出ていた常長までが縁座制で追放処分にされたのである。

この常長追放文書は、一六一九年十一月三〇日にイエズス会宣教師アンジェリスがローマのイエズス会総務会長宛てに報告していた内容を裏付けるものだった。

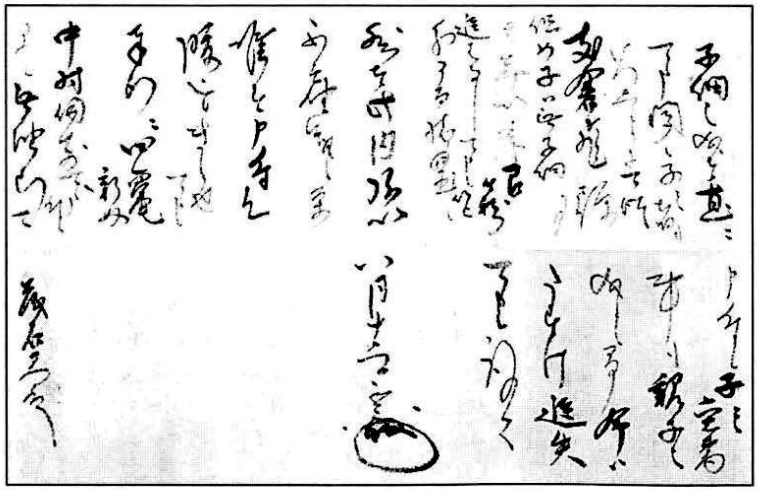
「彼は大使としてあまり有力でない一家臣を遣わしました。彼はその父を幾つかの詐欺のため数か月前に斬首することを命じました。今、大使として指名した彼の息子もまた日本の習慣に従い斬首するつもりで、彼が所有していた僅かな知行を既に没収していました。政宗はその死をスペインおよびローマまで行って経験する難儀と引き換えるほうが良いだろうと判断し、彼が航海の途中で死んでしまうであろうと考え、彼を大使に決定しました」

政宗が二度と日本には帰れないと考えて死罪に代えて大使役に任じた、と報じていたが、ザビエル以来、日本での布教の主導権を握ってきたイエズス会が、遅れて日本に進出してきたフランシスコ会の宣教師ソテロが政宗に働きかけて始めた遣欧使節派遣の成功を妨害するために、大使に任ぜられた常長の人格と身分を貶めようとする悪意が感じられ、その信憑性が疑問視されてきただけに、追放文書発見の衝撃は如何ばかりだったろう。

手元にある黄色に変色した「歴史読本」の昭和六二年新年号に、発見当時の仙台市博物館学芸室長で現慶長使節船ミュージアム館長の濱田直嗣氏が「政宗最新情報：新発見！支倉常長追放文書」と題して投稿されていた。

茂庭石見守綱元宛書状（常長追放文書）

仙台市博物館所蔵資料図録より



濱田氏は、追放文書発見の経緯に続いて「常成の犯した罪の内容は分からないが、切腹であるから政治犯に結びつく重く深いものかもしれない」「支倉家に所蔵される平姓伊藤一家支倉氏系図の常成の条に、没年を慶長五年八月十二日卒、年六十一とあり、月日が合致することから、この書状は慶長五年と考えられる」と書いていた。

そして地元紙の河北新聞が「常長は罪人の子だった」と衝撃的な見出しで報道したことに対して「常長追放文書の出現で、常長の人物像が決して軽んじられるのではなく、かえって重さを増すという点である。確かに切腹者の実子であることは判明しても、その内容は政治的軍事的色彩の濃いことが予測できる。そのような痛みを内面に持つ彼をあえて使節に選ぶ伊達政宗の心情も、一部で安易に説かれるような、みせしめ・いけにえに通じたり、野望の失敗を見越してという単純な理由では言い尽くせない」と述べていた。

追放文書の発見当時、追放文書の年代は、平姓伊藤一家支倉氏系図の実父常成の没年から慶長五年と見られ、常長は慶長五年に実父の罪に縁座して追放され、慶長十三年の下伊沢小山の知行によって復活を果たし、慶長十八年の遣欧使節に抜擢されたと考えられていたが、その後の研究で、政宗が屋代景頼に代えて茂庭綱元を奉行として諸用を命ずるのは、仙台築城後の慶長六年以降であること、そして政宗の花押の形と政宗の在仙時期などから、追放文書は慶長十七年か十八年とされている。

しかし、マドリードからローマまで常長一行に同行したイタリア人通訳アマーティの著書「伊達政宗遣欧使節記」第十一章に「皇帝（家康）はソテロ神父をスペイン国王のもとに派遣し、メキシコとの交流および条約を成就させようと船を一隻建造させた。奥州国王（政宗）はこれを知ると、ソテロに二人の武士を随行させた」とあり、「東藩史稿」の支倉常長の条に「公（政宗）其事ヲ聞テ幕府ニ請ヒテ、常長等ヲ使トシテ、之ニ差添ヘタリ、此船同年出帆セシニ、港口ノ暗礁ニ触レテ砕ケタリ」とあり、もし慶長十七年九月九日に座礁した幕府の建造船サン・セバスチャン号に、常長が乗船していたとしたら、追放文書は、慶長十七年より前だったことになる。

濱田氏は前掲の歴史読本の追放文書発見の後段で「筆跡・花押の分析でも慶長の後半にも認められる特徴が含まれもする。あるいは十五年の十を抜いて誤写したのではないか」と慶長十五年の可能性を記されていた。

歴史の一次史料に誤写の可能性を考える危うさを感じるが、もし十五年とすると、十三年に知行された下伊沢小山が、十五年の追放で取り上げられ、十七年に幕府建造船に乗船して座礁し、十八年に仙台藩建造船の遣欧使節に抜擢されたことになり、時系列的に説得力がある。

〈5〉常長の使節抜擢理由（常長追放文書の背景）

常長は如何なる事件で追放されたのだろうか。追放文書の発見を報じた濱田氏は「切腹であるから政治犯に結びつく重く深いものかもしれない」と語られていた。

伊達治家記録の慶長十五年から十七年までを見るも、これといった事件の記録がない。慶長の初めまで遡るとそれらしい不穏な出来事が三件あった。

【①慶長三年：伊達成実の出奔事件】

伊達治家記録の慶長三年に「此年、石川大和守昭光へ伊具郡角田へ在所替仰付られ、角田は元、伊達藤五郎成実在所なり、これより前、成実故ありて伏見に於て出奔し、相州小田原の内、糠谷邑に退居せらる」とあった。

伊達成実は、父が稙宗の三男、母が晴宗の二女で政宗の一才年少の従弟、政宗の側近中の側近で伊達軍の主力として軍事貢献度ナンバーワンである。政宗の小田原陣遅参では、会津黒川城に残って、政宗にもしものことがあった場合の伊達家の後事を託された。その成実が朝鮮出兵から帰朝すると伏見で突然出奔、高野山に入った。

出奔理由は不明だが「東藩史稿」に「功諸将の冠たるに、位禄之が上たる能はず、故に不平積りて此に至る」とあり、叔父とはいえ外様大名の留守政景と石川昭光を上位に待遇する政宗の人事が許せなかったのだろう。

新たに服属してきた外様家臣とこれまで政宗を支えてきた譜代家臣との確執は、勢力拡大時の宿命である。

成実の出奔に政宗は「この謀、豊公に仕え、我と比肩する謂いなり」と居城角田を召上げ、接収した屋代景頼が抵抗する成実の家臣三〇余人を打ち果たしており、成実出奔は伊達家中を二分する大事件だったようである。

出奔時期は、秀次事件のあった文禄四年から石川昭光が角田に在所替する慶長三年の間とされるが、奇しくも支倉常長が、慶長四年六月三〇日に高野山観音院で先祖の供養と自身と妻の逆修供養をしていた。高野山に出奔した成実と行動を共にしており、主君政宗に叛いた不義不忠への恐れから生前供養をしていたのであろうか。

【②慶長六年：和賀一揆の煽動始末事件】

伊達治家記録の慶長五年一〇月に「奥州南部領和賀先主和賀主馬、和賀郡岩崎の古城に楯籠り一揆を企つ」そして翌六年五月二四日に「和賀主馬自殺す」とあった。

慶長五年六月に家康が会津征伐令を発し、政宗は六月に伏見を発駕、七月に名取郡北目城に到着、上杉領白石城を攻略した。上方の石田三成挙兵に家康が八月に反転西上すると、九月に上杉の直江兼継が山形の最上義光を攻撃、最上からの救援要請に政宗は最上に加勢しながら、最上の要請に派兵して手薄になっていた南部領への侵攻を企て、和賀主馬（忠親）に一揆を扇動したという。

和賀忠親は、秀吉の奥羽仕置による所領没収に抵抗した葛西・大崎一揆に協調して蜂起した和賀・稗貫一揆の首謀者和賀義忠の子で、父が戦死、所領（北上市）が南部領に組み込まれ、政宗を頼り仙台藩胆沢に住んでいた。

かねて南部領へ領土拡大を狙っていた政宗は、失地回復を願う和賀忠親を扇動して南部領の花巻城を攻撃させたが敗退、一揆勢は岩崎城に籠城した。翌年四月に更に水沢城主白石宗直に支援させたが南部軍に鎮圧された。

南部藩主利直からの訴えで、家康は和賀忠親の上洛を命じたが、慶長六年五月二四日に仙台の国分尼寺で自害した。一揆煽動の発覚を恐れた政宗が、白石宗直に切腹を強要させたとも、殺害させたともいわれる。

和賀忠親が自害した直後に、屋代景頼が、岩出山から仙台への居城移転に伴い、留守居役の任を茂庭綱元に引き継いでいる。景頼は、大崎一揆の首謀者を集めて支倉常成・常長父子に謀殺させた屋代勘解由兵衛である。今回も景頼が常成・常長父子に一揆煽動発覚の口封じをさせたのだろうか。自害させるつもりだった政宗は、殺害してしまった景頼を更迭したのかもしれない。

余談だが、和賀忠親に殉死した家老毒沢藤森の孫娘が後に政宗の側室となり、十男宗勝を生んだ於勝の方である。そして政宗が血判誓詞を認めて衆道（男色）の契りを交わした小姓の只野作十郎が、於勝の方の弟である。

【③慶長十二年：屋代景頼の改易事件】

伊達治家記録の慶長十二年正月五日の条に「屋代勘由景頼、罪アリ、御改易仰付ラレ御国ヲ払ハル」とある。

成田一平が年貢を納めない知行内百姓の処分を屋代景頼に伺い「其身ニ下サレタル百姓ナリ存分ニ計フヘシ」との挨拶に百姓を斬殺した。元知行主が奉行奥山出羽に上訴して「百姓ヲ成敗スル事、甚タ不法ナリ」と御意あり、一平は国払いとなったが、景頼が一平を知行地に隠して政宗の意に従わず、遂に一平は片倉屋敷前で成敗された。一平の父中嶋宗求が江戸に上がり言上、景頼に対する尋問が行われ、景頼は改易となり追放されたという。

屋代景頼は、若く家督を相続した政宗の側近として武功を挙げ、天正十四年に白石城主、天正十九年の奥州仕置で蒲生氏郷の領地になると名取郡北目城主となり、文禄元年に政宗が朝鮮出兵で上洛すると岩出山城の留守居役に任ぜられ、慶長六年の仙台城移転まで勤めていた。

長く京に住む政宗の留守を預かり政事を驕る景頼への家中の反発や、角田城接収や一揆首謀者を謀殺する悪どい所業への批判が景頼告発の背景にあったかもしれない。

事件を訴え出た元知行主が、支倉紀伊久満である。景頼の改易事件に支倉一族が関わり、常成と常長が連座させられたのだろうか。もし常長追放文書の発出が、屋代改易の慶長十二年だとしたら、常成の没年は、十と二を重ね書きして五と誤写した可能性があるかもしれない。

〈6〉常長の使節抜擢理由（常長の能力評価）

元仙台市博物館長佐藤憲一氏は、著著「伊達政宗 謎解き散歩」に「問題は、いったん追放した支倉を大使に任命した政宗の意図である。旅路の危険性を想定した贖罪的人選との見方もあるが、莫大な経費と労力を費やして派遣する重要な使節の大使を、それだけの理由で決定したとは考えにくい。支倉の能力を高く評価していた政宗が、異国での交渉という困難な任務を命ずることと引き換えに、追放の刑を取り消し、支倉に再生のチャンスを与えたもの、と考えられる。支倉も父と自身の名誉回復のため、全力を尽くすことを決意し、これを受け入れたのだろう」と述べられていた。

前掲のアンジェリスが、追放を免じる代わりに危険な航海を命じたと言っていたが、果たして太平洋を横断する航路は、それほど命がけの航海だったのだろうか。

北太平洋航路は、一五六五年にフェリペ二世の命令でフィリピンを征服したレガスピ艦隊のウルダネータが、メキシコへの帰路に黒潮に乗って開拓した航路である。

一五七二年からメキシコ・マニラ間のガレオン貿易の定期航路となり、一六一〇年には、日本に漂着したフィリピン前総督ビベロを幕府の建造船でメキシコに送還して帰国した実績もあり、死に値するほど危険な航路だったとは言い切れない。

実父常成の切腹と常長の追放という特殊な背景があったにせよ、未だ戦国の慶長期にあって、常長の葛西大崎一揆以来の卓越した折衝能力と柔軟な思考力と忠誠心、そして渡海した朝鮮の地で見せた頑健な肉体と精神力を政宗が身近に高く評価していたに違いない。

そして政宗の全幅の信頼を受けて、地球の裏側まで渡海すること七年、日本国内のキリシタン禁制と弾圧が伝わり、イエズス会の妨害活動のなか、スペイン国王とローマ教皇を相手に、決して怯むことなく威厳を保ち、幕府の禁ずる宣教師派遣を条件に、リスクある政宗の夢の実現のため、粘り強く交渉を続けていた常長の生き様こそ、使節抜擢理由の答えではないだろうか。

〈7〉常長の使節抜擢理由（政宗のリスク回避）

学友の青森中央学院大学・大学院教授大泉光一氏の著書『暴かれた伊達政宗「幕府転覆計画」』に「使節の大使に伊達家の一門や家老級の家臣、あるいはキリシタンを選んだ場合、順調に目的が果たされれば何の問題もなく、むしろ好都合であるが、失敗した場合には幕府に対して申し開きができない。身分の低い家臣であれば、末輩が勝手にしでかしたことにして、腹でも切らせればそれで済むと政宗は考えていたのだろう」と書いていた。

政宗の常長抜擢の理由に、幕府の禁教政策に反した海外交渉のリスクを回避する狙いがあったのだろうか。

ここで、以前に仙台市博物館でローマ教皇宛て政宗書状を前に抱いた疑問が改めて思い起こされる。

一つは、政宗書状に格下の木製印章が使用されていたことである。歴史学者小林清治氏が、著書『伊達政宗の研究』の中で「政宗は、さほど重要でない伝馬徴発等の木製黒印を、スペイン・ローマあての国書ともいうべき書状に朱印として転用した」と指摘されていた。

当時の政宗が用いた最も重要な印章は、藤原政宗と刻字された楕円形象牙印で、奉行（他藩の家老）宛て命令や家臣への知行宛行等、重要文書に押捺されていた。

なぜ南蛮宛て国書というべき重要文書に、最も重要な象牙印ではなく、格下の伝馬状に押される木製黒印を朱印に転用したのだろうか。

派手好みの政宗が、見た目重視で、金銀箔を散り嵌められた大型料紙に相応しい印章に、手元の印章箱から一番大きい印章を選び出して押したのだろうか。

しかし重要印章の楕円形象牙印も、五九×五六ミリで伝馬状黒印と同じ大きさ、しかも印文に政宗の名まで入っている。政宗があえて楕円形象牙印ではない木製印判を押印した理由が別にあったのではないだろうか。

小林清治氏は、朱印についてもう一点指摘されていた。

「このラテン文の書状の印色がやや黒ずんだ朱であるのに対して、和文書状の朱印はきれいな朱です。おそらく、これまで黒印に用いられてきたこの印判をまずラテン文の書状に押し、次に和文書状に押したのでしょう。驚くべきことに、この二つの文書の日付が同じ日付です。無造作というべきか。大胆不敵というべきか。政宗の大物ぶりを示す一コマといえましょう」とあった。

仙台市博物館で撮影してきたラテン語書状を見ると、確かに印影が黒ずんでいた。伝馬状に使った黒印の墨を拭わずに朱肉を付けてラテン語文書状に押し、次いで朱肉を付け直して和文書状に押したのは確かなようである。

小林清治氏は大胆不敵と言っていたが、あまりに無造作な所作であり、実はこれこそ幕府の禁教政策に反する政宗の書状が後日幕府に露見した場合のリスクを考えて、敢えて政宗の名が入らない格下の伝馬用黒印が朱印に無断使用されたように装っていたのかもしれない。

かつて葛西大崎一揆煽動の嫌疑で、秀吉に証拠の檄文を面前で追及された時、花押の鶺鴒の目に針の穴がなく偽造だと白を切った政宗なら、ありそうな手口である。

政宗の署名の下にあるはずの花押が、伊達陸奥守と書かれた下に描いていたことも、後日都合が悪くなった時に、白を切る擬装工作だったのではないだろうか。

もう一つの疑問は、常長が海外で自署した書状の全てに、常長の名が使われておらず、あえて常長の名前を隠していたように思えることである。

「仙台市史：特別編8」に収録されている書状一〇通の全てが海外で自署した書状で、三通が支倉六右衛門の名、六通が支倉六右衛門長経の名、残るルソンから日本に居る嫡男勘三郎（常頼）に宛てた一通も、支倉六右衛門長経の名で署名されており、常長の名での署名がない。

「仙台市史」に収録されている書状以外の支倉常長に関する資料を見ると、天正年間の史料には支倉五郎左衛門の名が、文禄・慶長年間の史料には支倉六右衛門の名が登場、遣欧使節から帰国した八〇年後に編纂された伊達治家記録に初めて支倉六右衛門常長の名が登場してくるが、長経の名は、どこにも出てこない。

安永二年（一七七三年）に作成された支倉家家譜を見ると、常長の名の下に六右衛門、始与市、中五左衛門と添書きがあり、始めに与市、そして五左衛門又は五郎左衛門（平姓伊藤一家支倉氏系図）から六右衛門常長と改名したようだが、長経の名はやはりない。

系図を作成した後世の子孫が、先祖がキリシタンであったことを隠すため、長経の使用を忌避して、常長と偽って記録した可能性がある、とされている。

しかし、支倉氏系図を見ると、始祖の常久以来、祖父が常正、実父が常成、養父時正の始めの実名が常国、子息が常頼と常道、孫が常信である。支倉氏は代々「常」を通字にしており、常長の名こそ本名だったに違いない。

それではなぜ海外でだけ長経と名乗っていたのだろうか。長経の名が、常長の二文字を転倒させ、常を経に代えた偽名のようにみえるが、遣欧使節の間だけ使用した理由が特別にあったのだろうか。

幕府の禁教政策に反するキリスト教を容認してイギリス・オランダ排除を謳った申合条々で、メキシコとの交易を企てた裏工作が幕府に露見した場合、主君政宗と仙台藩に責任が及ぶリスクを回避するため、政宗の側近や重臣でもキリシタン家臣でもなく、切腹された父の縁罪で一度追放された中級藩士を使節に登用して、その名も藩籍にない長経を使わせて派遣したのではないだろうか。

あるいは常長が主君や支倉家に累が及ぶのを慮り、独断で長経を名乗っていたのかもしれない。常長の使節抜擢の背景に複雑な事情が隠されていたのは確かである。

〈8〉帰路のメキシコとマニラでの常長

幕府の禁教政策によるキリシタン迫害の日本国内情勢と政宗が一地方領主に過ぎないこと、そして政宗の使節派遣の真意が、キリスト教の領内布教と宣教師派遣要請ではなくメキシコとの交易が目的だったとスペイン側に伝わり、常長の交渉は挫折、一六一七年七月に国外追放同然にスペインを発ち、失意の帰途についたが、日本の土を踏むまでに、それから更に四年を要していた。

なぜ常長一行はすぐ日本へ帰らなかったのだろうか。

スペインからメキシコに戻った常長一行を日本から迎えに来たサン・ファン・バウティスタ号の船長横澤将監が、政宗からメキシコ副王宛て書状を持参していた。

石母田家文書にその書状案が残っている。

「日本将軍より黒印給、此度船相渡申、先年舟渡申候刻、奥南蛮之帝王様へ、伴天連曽天呂ニ使者相添進上申候、当年其許迄、可罷帰候間、此舟ヲ堅渡申様ニと、曽天呂より申来候条、其首尾と申、相渡申候、究而奥之帝王様より、御朱印可相調候間、自今已後ハ、年々渡海させ可申候条、万事可然様ニ奉頼候」そして「此便舟ニ商人荷物つミ候て、相渡申候間、帰朝前道具共仕廻申様ニ、被加御詞、御裁判奉頼候」

現代語訳では「日本の将軍から許可を得て今回船を差し向ける。先年に船を派遣した時、スペイン国王へソテロに使節（常長）を同行させていた。今年になって自分に宛てて、帰れるようになったので、迎えの船を差し向けるようにソテロより知らせてきた。首尾よく達成されたというので、船を派遣することにした。従って、スペイン国王の許可状が整っているので、今後は毎年渡海させることについて、万事そのようにお願いしたい」そして「今回の船に、商人と荷物を積んで渡航させたが、日本に帰る船に積み込む品物の手配に指示を出され、裁許されるようお願いしたい」という内容だった。

政宗は、常長の交易交渉が順調に整ったものと思い込み、常長を迎えに行く船にメキシコとの交易品を積み込ませていたのである。常長は、交易交渉がうまくいっていないことを政宗に報告していなかったのだろうか。

横澤将監が持参した政宗書状の出状日は、元和二年七月二四日（一六一六年九月五日）、ソテロが政宗に迎えの船を要請した時期を逆算すると、セビリァから大西洋を渡りメキシコを横断して太平洋を渡り日本に到着するまで一年かかるとして一六一五年八月頃になる。常長一行がマドリードからローマへ向けて出立する頃に、政宗へ迎えの船を手配するよう出状していたことになる。

その頃は、常長がスペイン国王の謁見に成功し、国王臨席で洗礼を受け、国王にローマ行きが許可された段階であり、ローマ教皇の仲介による外交交渉の進捗に、楽観的な内容で政宗に報告していたのかもしれない。

常長が日本を出帆してから政宗の出状までの三年間の日本国内情勢を概観すると、出帆三カ月後の十二月に幕府が伴天連追放令を全国に公布、翌慶長十九年九月にキリシタン大名の高山右近・内藤如安らがマニラに追放され、翌二〇年五月に大坂夏の陣で徳川政権が盤石となり、翌元和二年五月に政宗の盟友家康が死去、八月に秀忠が長崎と平戸の二港制限令を発し、キリスト教の布教を条件に求めない新教国オランダとの交易を進めていた。

西国中心のオランダ交易と接点を持たない北国の政宗にとって、オランダに敵対する旧教国スペインが進める北太平洋航路は、自領の港湾を利用して南蛮交易に参画できるラストチャンスと考えたに違いない。

メキシコとの交易交渉の成功を信じて迎えの船に荷物を積載させてきた船長横澤将監の報告に、常長の心境は如何ばかりだったろう。タイムラグがあったとはいえ、主命を果たせずスペインを国外追放同然にメキシコに戻ってきたとはとても言えなかったのではないだろうか。

常長がメキシコに向けてセビリァを発つ二ヵ月半前の一六一七年四月二四日にフェリペ三世宛て書状で「もしメキシコから日本への交易を認めることが不可能ならば、陛下がスペインとの直接の交易を認めてくださいますよう、そしてフィリピン諸島への交易についてはその総督に我が君なる王と特別な友好関係を持つよう命じていただけるよう、重ねて請願いたします」と訴えていた。

スペインと直接交易したいとは非現実な話だが、このまま手ぶらでは日本に帰れない、最悪マニラとの交易を土産に帰国したい、常長はスペイン出国間際まで、藁をも掴む思いで絶望的な交渉を続けていたようである。

常長一行は一六一八年四月二日、迎えに来たサン・ファン・バウティスタ号に乗船して、メキシコのアカプルコを出帆、日本ではなくマニラに直行した。

スペイン国王フェリペ三世が、常長一行がセビリァを出立する直前の一六一七年六月二〇日にメキシコ副王に宛てた書状で「（日本国では）スペイン人はキリスト教徒ゆえに殺害される危険があるので誰も行かせるべきでもないし、渡航を許可するべきでもない。彼らがかの国に直航するのが適切か、あるいはフィリピン経由の航海をするのが相応しいかを検討されよ」と命じていた。

太平洋を航海する操船技術は、日本人にはまだなかった。スペイン人船員の協力なくして船は動かない。彼らの身の安全のため、日本への直行は忌避されたのである。

ソテロがメキシコからインディアス顧問会議長に宛てた一六一八年二月三日付け書簡で「大使（常長）はフィリピン総督に自分のナオ船の提供を申し出ました。彼はその申し出に感謝し、また彼の王と友好と通商を結び、オランダ人たちと手を切るために、そのナオ船を用いることにしています」「彼（総督）を助力したいとの希望を持ってフィリピン諸島に行くのです。王の政宗自身もまた、オランダ人たちを倒すために助力したいとのことです」と報告していた。

メキシコからルソンへ赴任するフィリピン新総督から大勢の兵士を運ぶ船がないため、サン・ファン・バウティスタ号の提供を求められ、マニラとの交易に最後の望みを繋ぐ常長は、この申し出を受け入れたのだろう。

一六一八年八月一〇日（元和四年六月二〇日）にマニラ到着、二日後に常長が嫡男勘三郎宛てに「ふねなとこしらへ申候へハ、日まへ御さなく候而不参候、来年之六月ハ、かならすかならすきちよ可申候」と、太平洋航海で損傷したバウティスタ号の修理もあり、今年は帰朝出来ないが、来年六月には必ず帰りたいと書き送っていた。

伊達治家記録の元和四年八月二一日条に「南蛮人楚天呂ヨリ書状進上ス、志如呂大広間ニ於テ御目見、蝋燭十五挺、葡萄酒一壺進献ス」とあり、マニラに着いた二ケ月後に、ソテロの書状が政宗の許に届けられている。

常長も長男宛て書状と一緒に政宗宛て書状も志如呂に託していたに違いない。常長が、政宗に如何ように報告したか、何も残っていないが、損傷した船の修理などですぐには帰朝できないと報告していたのだろう。しかし常長の帰国は、二年後の一六二〇年九月二二日である。

メキシコとの交易交渉が順調に進んでいると思い、迎えの船に交易品を積み込ませてきた政宗に、実は不首尾でしたとはとても報告出来なかったろう。船の修理は、マニラとの交易交渉の時間稼ぎだったかもしれない。

マニラに着いた一年後の一六一九年七月二八日、フィリピン諸島高等法務の財務官がフェリペ三世宛てに「オランダ人が当諸島を襲撃するため十四隻からなる艦隊を率いてくる準備をしているとの情報があり、日本大使の船を艦隊に加えるため、戦闘に備えて直ちに修繕に着手、非常に強靭な良い仕上がりとなり、国王陛下のために大変手ごろな価格で購入いたしました」と報告している。

常長が長男宛て書状で伝えた船の修理は、単なる航海の損傷ではなく、対オランダ戦を見据えた軍用船に転用するための大砲等の艤装工事だったのかもしれない。

仙台藩の建造した自前の船ではあるが、スペイン人の航海士と船員の協力がなければ、もはやただの箱船である。そのスペイン人は、迫害される日本への航行を拒否していた。フィリピン総督との交易交渉を有利に進める上でも、船の売却はやむを得ない決断だったのだろう。

船を手放した常長の帰国は、南西から季節風が吹く翌年の夏まで、待たなければならなかった。

マニラには、常長日本出帆翌年の一六一四年十一月に家康のキリシタン追放令で、キリシタン大名の高山右近や内藤如安ら三五〇人が国外追放されていた。

右近はその翌年に病没したが、如安はマニラ近郊に日本人町サンミゲルを築き、一六二六年まで生存しており、常長もマニラで交易交渉を続けながら、如安の情報網を通じて日本国内事情を見聞していたに違いない。

スペイン国王から期待する内容の返書が得られるはずもなく、バウティスタ号を売却してまで進めたマニラとの交易交渉も、元々ソテロが政宗に勧めてきたメキシコとの直接交易が、華僑を中心としたマニラ商人の交易利権を脅かすものだっただけに、彼らに好意的に受け入れられるはずはなかったのだろう。

マニラで二年、ようやく帰国できる季節風の時期を迎えて、主命の交易交渉を断念せざるを得なかった常長の心情は如何だったろう。そして日本の禁教の国情を知れば知るほど、洗礼まで受けてしまった自分の身の処し方、そしてこのまま帰朝した場合に主君に災いを及ぼすことへの不安と苦悩を募らせたに違いない。

〈9〉帰国後の常長と政宗

月浦を出帆して七年後の元和六年（一六二〇年）常長は仙台に帰着した。伊達治家記録の元和六年八月二六日の条に常長帰国の様子が簡潔に記されている。

「今日支倉六右衛門常長等南蛮国ヨリ帰朝ス。是去ル慶長十八年ニ向井将監殿忠勝ト御談合有テ渡海セシメラル。南蛮ノ都ヘ到リ、国王波阿波ニ謁シテ、数年逗留ス。今度呂宗ヨリノ便船ニ帰朝ス。南蛮国王ノ画像并ニ其身ノ画像等持参ス。是南蛮人図画シテ授ル所ナリ。南蛮国ノ事物、六右衛門物語ノ趣、奇怪最多シ」

政宗は、同年九月二三日付書状で、幕閣の土井利勝に常長の帰国とソテロの入国希望を伝えて判断を仰いだ。「先年南蛮（メキシコ）へ向井将監（幕府船奉行）と相談して船を派遣し、江戸に数年逗留したソテロも同行、公方様（将軍）も南蛮に音信を為し、具足・屏風などを遣わされたが、その際に拙者の身内の者（常長）も遣わして奥南蛮（ヨーロッパ）まで行かせて七・八年逗留、漸く今秋にルソンより船で帰朝した。ソテロは切支丹の御法度で、ルソンに逗留させ南蛮からの返書（交易の諾否）があれば来年にも帰朝させたいが如何しますか」

さすが政宗である。国禁を犯す宣教師の派遣と旧教国との交易を画策した己の野望を棚に上げて、幕府と共同事業だったとうそぶき、他人事のようにお伺いを立てる役者ぶりである。

遣欧使節出帆の翌年に、大坂の陣で豊臣の時代が終焉、徳川の天下が盤石となり、切支丹禁制と弾圧が日本中を席巻して、今さら教商一致主義のスペインとの交易交渉から帰りましたとは言えないご時世に変わっていた。

共にメキシコ交易を夢見た盟友の家康も既に逝って四年、さしもの政宗も、藩のため、自己保身のため、かかる書状を幕府に送るしかなかったのだろう。

それにしても、ソテロと政宗の遠大な夢と野望に翻弄され、主君の使命を果たせぬまま、七年ぶりに仙台に帰った失意の常長を、政宗はどのように迎えたのだろうか。

七年振りに帰国した常長が政宗に接見したという記録はない。常長が帰国した元和六年（一六二〇年）の政宗の動静を、伊達治家記録から抜粋してみた。

四月十六日：下国ノ途に就キ、二四日仙台城ニ入ル。
七月十一日：松島瑞巌寺ニ赴ク。
八月二六日：支倉六右衛門常長等南蛮国ヨリ皈朝ス。
九月二一日：越後少将忠輝朝臣ノ北御方（五郎八姫）
　江戸ヨリ御下着、御城山西ノ麓ニ居宅ヲ営マレ
　住シ玉フ、因テ西館と称ス、後天麟院ト号ス。
九月二三日：土井大炊助殿へ御書ヲ以テ、当秋支倉六
　右衛門等南蛮ヨリ皈朝ニ就テ、品々御進セラル。
元和七年正月十三日：刈田郡白石ニ出猟ス
八月二〇日：江戸参府ノ途に就キ、二八日到着ス。

例年の参勤日程と比較すると、仙台への下向が例年二月か三月なのが元和六年は四月、江戸への出府は例年三月か五月なのが元和七年は八月である。

政宗は、常長の帰国に合わせるように仙台へ下向して常長の死（支倉家系図に元和八年七月一日とあるが、イエズス会日本管区長パシェコとソテロの書簡には元和七年とある）を見届けてからのように江戸へ発っていた。

四年前に家康六男忠輝に離縁されていた長女五郎八姫も、常長の帰朝を待っていたように江戸から帰郷しており、キリシタンとして再婚しない娘に常長の土産話を聞かせてあげようとしたのだろうか。やはり政宗は、常長を温かく迎えていた。八〇年後の伊達治家記録の編纂者は、幕府を憚って、そうとは書けなかったのだろう。

常長が主命遂行のためとはいえ、マドリッドで洗礼を受けてきたことは、政宗にとって想定外だったに違いない。スペイン側に有利な「申合条々」を提示した交渉締結に、絶対的自信を抱いていた政宗は、常長がそこまで追い込まれていたとは思いもしなかったろう。

洗礼を受けて帰国した常長に、政宗はキリスト教の棄教を迫ったといわれる。常長が政宗の申し出に応じたかどうかはわからない。政宗は、常長の帰国を待って領内に教禁令を布告した。もし幕府に言われるまま、先に禁教令を発していたら、常長を捕縛しなければならなくなる。政宗に出来るぎりぎりの選択だったに違いない。

寛永十三年（一六三六年）五月に政宗が没すると、十七年三月一日、嫡男常頼がキリシタンに関連したとして斬罪され、召使夫婦も釣殺されて支倉家は改易となった。

幕府に一日置かれていた政宗の死後を継いだ忠宗は、さすがに幕府の禁教圧力に抗しきれなかったのだろう。

常長の死から常頼の斬罪までの一連の顛末から、常長が棄教せずに、家族や召使らと信仰を守り続けていたことは明らかである。主君の夢実現のため身命を賭した七年に亘る海外での労苦に報いるべく、キリスト教の世界で育まれた常長の篤い信仰に、政宗はそれ以上、棄教を求めなかったのだろう。心身とも憔悴し切った常長の姿に、政宗は贖罪の気持ちさえ抱いていたに違いない。

国宝に指定された使節持帰り品のうち、祭服・十字架・ロザリオ・聖母像などの聖具や聖画は、密かに支倉家で隠し持たれ、支倉家改易の際に藩に没収されたものだが、病身の常長に、政宗がキリシタンとしての安穏な信仰生活と細やかな教会活動を暗に赦していた証しであろう。

政宗は、常長の帰国直後に領内に禁教令を布告、一〇月十二日に水沢福原で六人が処刑されて仙台藩最初の殉教となったが、まだ本格的な迫害には至っていなかった。

政宗は、常長をメキシコへ迎えに行って洗礼を受けて帰国した船長の横澤将監に対しても寛容だった。

将監は、帰国翌年の元和七年八月十四日付「ローマ教皇パウロ五世宛出羽奥州キリシタン奉答書」に連署十七人の筆頭後藤寿庵の次に署名、政宗が領内のキリシタン取締りを始めたことをローマ教皇に訴えていた。

ローマ教皇宛ての連署人に常長の名がないのは、その時すでに常長は亡くなっていたのかもしれない。もし存命中だったとしたら、常長は主君のキリシタン弾圧を訴える奉答書に連署しただろうか。政宗の海外への夢を知る常長は、静かな信仰の世界を送っていたに違いない。

後に政宗の説得で棄教した将監は、寛永二年に、政宗の棄教命令を拒絶して追放された後藤寿庵の没収地の管理者となり、のちに後藤寿庵の治水工事に倣って灌漑用水の堤を築き、将監堤の名で仙台市泉区に現存している。

帰国した常長と別れてマニラに残ったソテロは、その後どうしたのだろうか。

ローマ教皇に授かった日本司教、教皇使節の肩書を利用して日本での新布教区設立と神学校での修道士養成に努めていたが、日本での布教活動を混乱させて新たな迫害を招く危険人物として、インディアス顧問会議からその名称使用を差し止められ、メキシコへ強制送還されたが、嵐に難破して辛うじてマニラに戻った。

マニラ総督に日本渡航を妨げられるなか、常長の帰国の二年後の元和八年八月、ソテロは俗人に変装して、日本人神父らと中国人商人のジャンクに乗船、禁教下の日本に密入国を強行、長崎で捕縛された。

翌九年七月二四日に、仙台藩奉行石母田宗頼が、肥前国大村獄中のソテロから書簡を受けて、幕府への復命の機会を実現できるよう年寄土井利勝へ取り次ぐ旨の書状を発していたが、翌寛永元年七月十二日、ソテロは、長崎の大村放虎原で火刑に処せられ殉教した。

なぜソテロは、殉教覚悟で迫害の嵐吹き荒ぶ日本に戻ったのだろうか。初代ローマ教皇となった使徒ペトロの殉教の話『ペトロ行伝』が思い起こされる。

『キリストの十二使徒のリーダーであるペトロが、皇帝ネロによる迫害の激化したローマから逃れて、アッピア

街道を行くと、師のイエスが反対側から歩いてきた。ペテロが「主よ、どこへいかれるのですか」と問うと、イエスは「あなたが私の民を見捨てるのなら、私はもう一度十字架にかけられるためにローマへ」と答えた。ペテロはそれを聞いて悟り殉教を覚悟してローマへ戻った』という。逆さ十字架で磔刑にされたペトロの墓所の上に、後に常長が教皇パウロ五世に謁見したカトリック教会の総本山サン・ピエトロ大聖堂が建てられている。

ソテロは、メキシコに強制送還され、故郷セビリァに帰ることもできただろうに、弾圧と迫害の日本に戻ってあえてペトロの辿った殉教の道を選択したのである。

政宗に海外への遠大な夢を開き、遣欧使節団をローマにまで引率、結果的に支倉常長の人生を翻弄してしまったソテロだが、敵対するイエズス会から東日本司教就任を企んだ野心家と侮蔑されながら、あえて禁教の日本に密入国して殉教した生き様こそ、日本の民の救済に身命を捧げた真のキリスト者だった証しではないだろうか。

波乱で数奇な生涯を自ら閉じたソテロの骨と灰は、孤に入れて無残にも海に棄てられたという。

〈10〉支倉家の改易

常長は帰国の翌元和七年に病没、その十九年後の寛永十七年（一六四〇年）嫡男常頼がキリシタンに関連したとして斬罪され、支倉家は改易された。

仙台藩のキリシタン取締りは、政宗が没した寛永十三年（一六三六年）の翌年から厳しさを増していた。

寛永十四年七月に常長の嫡男常頼宅に出入りしていたキリシタン大窪太郎兵衛と養女の調査が提出され、常頼の召使い与五右衛門と妻きりが釣殺の刑に処された。

同年一〇月に島原の乱が勃発、翌十五年十二月に幕府は全国諸大名に領内のキリシタン取締りを命じた。

当時仙台領内に潜伏していた宣教師は四人、まず宣教師ポルロ神父が病気に衰弱して奉行所に出頭、翌十六年二月にペトロ岐部神父が水沢で、マルチノ式見神父が仙台で密告により捕縛された。三人は江戸に送られ、伝馬町牢獄に繋がれて、老中らによる連日の詮議と将軍家光による直接尋問を受け、転び伴天連フェレイラ神父の背教の説得と苛酷な拷問が続けられた。

ペトロ岐部は、単身でマカオからエルサレム経由でローマに入り神父に叙階され「日本のマルコポーロ」といわれた遠藤周作著「銃と十字架」の主人公である。ポルロと式見が苦痛で転んだ穴吊りにも耐えて、火炙り刑に腸を露わに「わが事なり終れり」と叫び息を引き取った。

ポルロ神父は、大目付井上政重の苛酷な拷問に六四才の老体が失神して棄教したと見做され、更なる訊問に背教してしまった呵責と絶望から、問われるまま匿ってくれた信徒の名を漏らしその中に常頼の名があったという。

支倉家が幕府の詮議を受けて仙台藩が調査報告した資料が「仙台市史：特別編8」にある（資料372）。

寛永十六年一〇月二三日付、江戸留守居役久世九左衛門が幕府の指示を受け、常頼の口書と田村長門子二人と富塚弥平次子二人の宗旨に関する資料を提出する旨、仙台の石母田大膳と古内主膳に書き送った書状である。

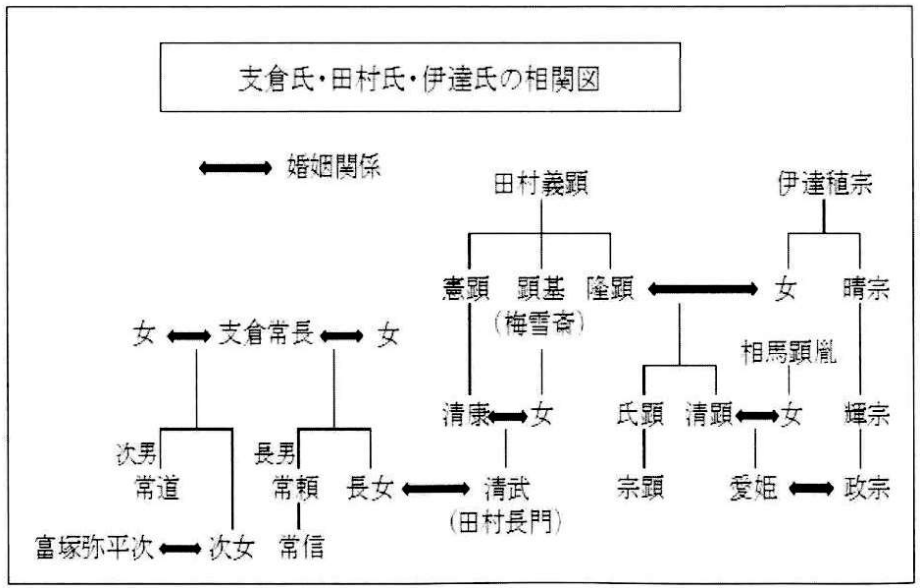
伴天連寿庵（ポルロ神父）の自白で、常頼らの宗旨が疑われ、老中阿部忠秋が直々に仙台藩に調査報告を指示したというが、常長の子女は、左程に大物だったのだろうか。しかも宗旨を提出したのは著名な竜宝寺である。

竜宝寺は、政宗が造営した国宝大崎八幡神社の別当寺で、伊達家初代朝宗が伊達家祈願寺として建立、政宗が仙台に移した由緒ある寺である。その隠居からの書付を求めるとは、常長の娘二人の夫は一体何者なのだろうか。

常長に、長女：田村長門白久妻、長男：常頼、次女：富塚弥平次源重頼妻、次男：常道の四人の子女がいた。

歴史研究家佐々木和博氏の「国宝慶長遣欧使節関係資料の壁掛―その入手意図を探る―（二〇一九）」によると、長女の夫田村長門白久は、支倉系図と田村家系図と伊達世臣家譜から、田村長門顕久（清武）としている。

田村氏は、坂上田村麻呂の末裔で福島県田村郡の戦国大名、政宗の正室愛姫の祖父田村隆顕と清武の祖父顕基（梅雪斎）が兄弟で、清武は愛姫と又従姉弟に当たる。



愛姫の父清顕の急死で田村家が親伊達と親相馬に分裂、政宗が愛姫の従弟宗顕を擁して親相馬派を排除するが、後に秀吉の奥州仕置で田村家は改易され、清武は浪人するが、慶長三年に十一才で伊達家家臣となる。

常長が帰国途中のマニラから常頼に宛てた書状に「小野長門殿始め誰衆に宜しく」と追伸していたが、田村家の内紛に敗れた祖父梅雪斎と父清康が、岩城氏を頼り三春から小野に退いた天正十六年に清武が誕生しており、常長の書状にある小野長門は、長女の夫で愛姫の又従弟の田村長門清武に違いないと佐々木和博氏は語っていた。

常長の長女の年令は、常頼が没年と享年から慶長四年生れとすると、常長が遣欧使節に出立した慶長十八年には十六才以上、結婚して早くはない歳である。実家の田村家が奥州仕置で改易され下野していたとはいえ、愛姫が田村家再興を宿願にしていたのだから、又従弟の清武が中級家臣の常長の婿殿となり、常長の留守を守っていたとは驚きである。

常長の次女の夫富塚弥平次も、政宗の代の大御番組で仙台藩宿老の富塚氏一族といわれる。「仙台市史：特別編8」の資料381と382の没年と享年から弥平次が慶長五年生れ、次女が慶長一〇年生まれとすると、常長が遣欧使節に出立する前に婚約だけでも済ませ、常長の帰国を待って祝言を挙げたのかもしれない。

アマーティの著書「伊達政宗遣欧使節記」に「国王（政宗）は大使として高貴で非常に由緒ある家柄の武士、支倉六右衛門を指名し任命した。国王は、支倉の妻と子供たちに宮廷から三ミリオ離れた所に屋敷と二つの村落を与え、そこで好きなように暮らせるようにした」とある。

政宗は、常長の二人娘に、六〇〇石の中級家臣には不相応な、正室愛姫と伊達家宿老の縁者を縁組させて大使役に相応しい格に引き上げただけでなく、妻子に新しい屋敷と所領を与え、海外へ長期出張する常長に心置きなく使命達成に専念させる配慮をしていたのだろう。

この政宗の破格ともいうべき常長への配慮が、後に幕府が常長の子女へのキリシタン嫌疑の詮議に慎重にならざるを得なかった理由だったのかもしれない。

仙台藩が幕府の詮議に常頼と縁者（田村氏と富塚氏）の宗旨を報告した二か月後、常頼が匿っていたフランシスコ・バラハス神父が捕縛され江戸に送られた。スペイン人ながら日本名・孫右衛門を名乗り、三〇〇人を超す大殉教地になった大籠・米川地区で、十九年潜伏して布教活動を続けていた仙台藩に残る最後の宣教師である。

翌寛永十七年三月一日、常頼がキリシタンに関係して斬罪に処せられ、仙台光明寺で火葬され、支倉家は改易された。同じ月、常頼の召使い太郎左衛門とその妻子を含めた四三人のキリシタンが仙台藩で処刑された。

〈11〉支倉家の再興とその背景（私的考察）

常頼の斬罪と支倉家の改易から三〇年後の寛文一〇年（一六七〇年）七月九日、常頼の嫡男常信が、黒川郡川内村に五一石の知行地を宛行われ、支倉家は再興された。

常信から支倉家再興の請願がなされた記録がある。

「仙台市史：特別編8」資料1「侍衆御知行被下置御牒巻四七」の支倉又兵衛（常信）の条に「寛永十七年（一六四〇年）三月朔日、右六右衛門（常頼）ニ切腹被仰付、進退被召上候、私儀六右衛門実子、其節四歳ニ罷成候キ、身命御免、母方之伯父馬場斎兵衛・同彦兵衛ニ被預置候、明暦四年（一六五八年）義山様（忠宗）へ古内古主膳（重広）を以親類共願申上、同年四月二三日、御勘気御免被成下候、御当代（綱基）寛文七年（一六六七年）ニ右之品申上、同八年六月三日、古内志摩（義如）を以、御知行五貫一六七文被下置、御黒印頂戴仕候」とある。

請願相手の古内家は、仙台藩奉行職の家柄で、古内主膳は伊達晴宗五男国分盛重の末子で政宗と従兄弟、古内志摩は主膳が養子に入った岩沼古内家の三代目で後に寛文事件の酒井大老邸刃傷事件で唯一の生き残りとなる。

常頼の遺族の請願により、支倉家改易の十八年後の明暦四年に勘気が解かれ、その一〇年後の寛文八年に五貫一六七文の知行が下され、更に二年後の寛文一〇年に黒川郡大谷川内村に知行地が常信に宛行われた。

幕府の査問を受けて慎重に下された支倉家の改易処分を撤回することは、仙台藩として容易なことではなかったろう。果たして請願を受けた奉行（他藩の家老）の権限だけで、支倉家の再興が決断できるものなのだろうか。

仙台藩は、家格という家臣の序列制度があり、最上位の一門は、藩主にとって家臣とも客人ともつかない存在で、藩政を担う役職に就くことはないが、その発言力は大きく、しばしば奉行の担う政務や人事に介入していた。

藩主綱村はまだ十二才の幼君である。支倉家再興の裏に、何かもっと大きな力が働いたのではないだろうか。

支倉家に対する勘気が解けた明暦四年四月は、仙台藩二代藩主忠宗死去の三カ月前、そして支倉家に知行が下され知行地が宛がわれた寛文八年と一〇年は、伊達家当主が未だ幼き仙台藩四代綱基（後の綱村）で、藩祖政宗と二代忠宗が築きあげた仙台藩の屋台骨を大きく揺るがせた伊達騒動のまさに前夜である。

万治元年（一六五八年）七月に忠宗が死去、忠宗の六男綱宗が三代藩主を継ぐと、藩祖政宗の十男宗勝が、綱宗の庶兄・田村宗良と共に、若き藩主を支えた。

万治三年に遊興放蕩を理由に、綱宗が二一才の若さで幕命により隠居させられたが、嫡子亀千代（後の綱基・綱村）はまだ二歳、幕府は伊達宗勝と田村宗良を後見人に命じ、年長の宗勝が後見政治の実権を掌握していく。

寛文十一年（一六七一年）藩内の反宗勝派が、藩政を専横する宗勝を幕府に上訴、幕府の評定場となった大老酒井忠清邸で、伊達家重臣原田甲斐が原告の伊達安芸を斬殺する刃傷事件を起こし、渦中の宗勝は改易された。

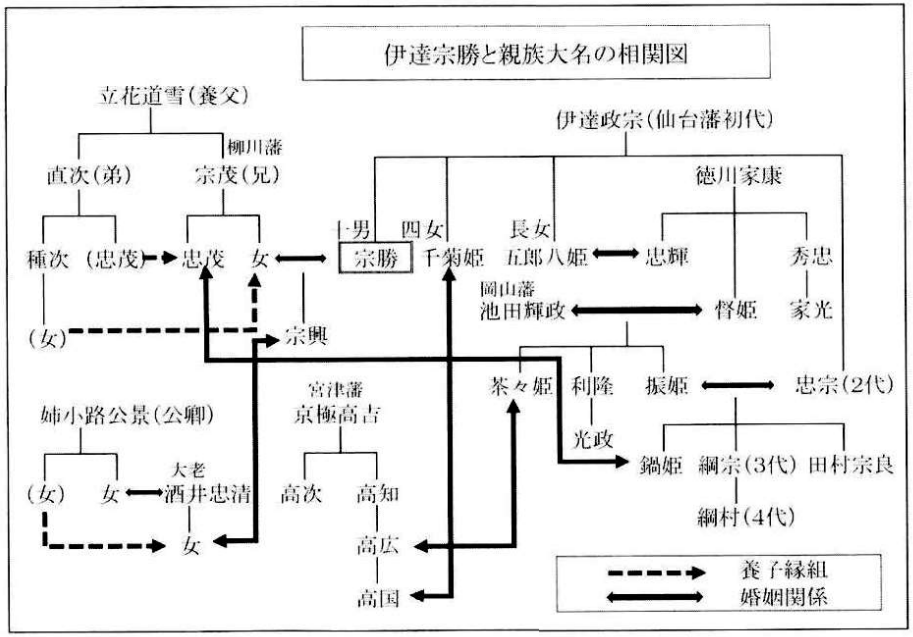
この寛文事件の前年に、支倉家は再興された。四代藩主綱村はまだ十二才、再興の裏に、当時の仙台藩の実権を掌握していた伊達宗勝の存在が見えてくる。

伊達宗勝は、政宗の十男に生まれた。長男宗興の正室に大老酒井忠清の養女（忠清の継室の妹）を迎え、幕府を牛耳る酒井忠清の権勢を利用して、宗興を伊達藩主に据えんとしたことが寛文事件の真相ともいわれている。

宗興は、宗勝が継室に迎えた柳川藩立花宗茂の養女（宗茂の弟直次の孫娘）との子、宗茂の養嗣子忠茂（直次の四男）の継室に宗勝の姪鍋姫（忠宗の娘）が嫁いでいる。

宗勝の妹千菊姫（政宗四女）も、丹後宮津藩京極高国の正室に嫁いでおり、宗勝の兄忠宗の正室は、家康の孫娘で岡山藩池田輝政の娘振姫である。

宗勝を取り巻く親族大名を相関図（下図）に描くと、立花宗茂の主君大友宗麟は天正少年使節をローマに派遣したキリシタン大名、京極高吉・高知親子もキリシタン大名といわれ、池田輝政の重臣四人もキリシタン、まさにキリシタンの世界である。そして宗勝と立花忠茂と京極高国と池田光政と酒井忠清は、伊達騒動五人組である。



宗勝は、和賀一族の於勝の方を母に仙台城内で生まれ育ったが、家康六男忠輝の改易で離縁され、キリスト教の信仰を守り続けて再婚せず仙台城に移り住んでいた姉の五郎八姫に可愛がられていたに違いない。

万治三年（一六六〇年）に一関藩三万石藩主となるが、北隣の水沢福原は、かつて政宗家臣でキリシタンの後藤寿庵が一二〇〇石を領して奥州のキリシタン聖地といわれ、二〇年前に東隣の藤沢町大籠で三〇〇余人のキリシタン大虐殺があったことは、宗勝も承知していただろう。

こうした宗勝の血縁地縁を俯瞰すると、キリスト教が様々な形で宗勝を取り巻いているように見えてくる。

伊達騒動の悪役とされる宗勝は、いかなる人物だったのだろうか。元仙台市博物館長佐藤憲一氏の著書「伊達政宗の手紙」に、政宗が宗勝に宛てた書状が載っている。「雨で今日予定していた能が延期になり残念だ。しかし、演能の途中で振り出されては大変だったが、夜中より雨になって却ってよかった。きっと明日は晴れると思う」

追伸で「この返事、ぜひとも自筆で認めるように。上手でなくても、ちょくちょく自分で手紙を書くようにしないと、ますます上手にはならないよ」と注意していた。

宛名が兵部大輔となっており、政宗六七歳、宗勝は元服間もない十三歳とみられている。老いた政宗の父親として思いやりある厳しくも愛情溢れた手紙である。

政宗は男子を十人儲けたが、晩年までに五人を早世させており、五五才で授かった末子の十男宗勝に公家の出で禁裏と徳川家の侍医竹田定宣の娘を縁組させ、宗勝の身体を案じていたのであろうか。宗勝の誕生は、奇しくも前年に遣欧から帰国した支倉常長が死去した元和七年である。宗勝は、晩年の父から、遣欧使節に賭けた海外への夢と野望、洗礼を受けて帰国した忠臣常長への贖罪の思いなどを、夜話に聞かされていたに違いない。

そして末子の自分に吐露する父政宗の常長への想いを知る宗勝は、後に幼君綱村の後見人となって伊達家の実権を握ると、幕府のキリシタン弾圧が沈静化した頃を見計らい、幕府の威嚇に屈して心ならずも常長の息子を斬罪させてしまった兄忠宗が、果たそうとして果たせなかった支倉家の復権に動いたのではないだろうか。

伊達騒動といわれる寛文事件は、二代忠宗の五男伊達宗倫と涌谷伊達家二代伊達安芸の領地争いが発端だった。

伊達安芸は、政宗の曽祖父稙宗の十二男元宗を養嗣子に迎えた亘理氏の曾孫、仙台藩一門第四席の涌谷伊達氏当主である。伊達氏に属しながら二万二千石の知行地を領し、伊達宗家に対し半独立した権勢を保持していた。

父綱宗の強制隠居で家督を継いだ幼君綱村の後見役を担っていた政宗十男宗勝は、甥の宗倫に加担して、宗倫と安芸の領地争いは、宗家と一門の権力抗争に発展した。

仙台藩は、家臣に直接土地と百姓を与えて領地を支配させる地方知行制を採っており、仙台藩の家臣、特に親類一門の藩主に対する自主独立心が強かったといわれる。宗勝は、幕府の力で三万石の一関藩を立藩したが、仙台藩の内分分知大名として曖昧に位置付けられており、兄忠宗亡き後に跋扈する親戚一門の旧勢力を抑え、綱宗の強制隠居で弱体化した宗家の威光を復活させるため、仙台藩が藩祖政宗の勲功に依って立って居ることを改めて周知すべく、政宗時代の旧例を復古させ、父政宗の偉業の象徴といえる遣欧使節派遣の再評価と改易された支倉家の再興に強権を出動したのではないだろうか。

常長の孫常信が知行地を宛がわれた寛文一〇年七月九日の三日後の伊達治家記録（七月十二日条）に「仙臺松嶋瑞岩寺ニ於テ、去ル十日ヨリ此日に至テ、義山公十三回忌御法事執行セラル」とあった。

支倉家の再興は、常長の嫡男常頼の切腹改易を命じた義山公（二代忠宗）の十三回忌法要日の前日である。伊達家の実権を握る宗勝は、兄忠宗の十三回忌法要の恩赦を利用して支倉家の再興を沙汰したに違いない。

昨年一〇月に支倉常長の墓を仙台市北仙台の光明寺に訪ねた帰りに、支倉の名が付く支倉町を散策してみた。西公園通から北一番町を左折すると、広瀬川の河岸段丘に突き当る角に「支倉丁・支倉通」の道標が立っていた。道標に「北一番町西端から広瀬川の崖にそって西北に進み、細い瀧にそって急坂を電光型に南に下り、支倉橋で広瀬川を渡り、川内の元支倉丁に通じた幹線道路であった。元禄七年夏洪水で橋が流れ」と辛うじて読めた。

幕末に常長持帰資料を調査した大槻玄沢の孫大槻文彦が金城秘韞補遺に「仙台ノ北一番町ノ西端ニ、支倉通リト云フ通街アリ、其交叉ノ東北角ハ、支倉氏ノ邸ナリキ、街ヲ支倉通リト云フモ此邸アリシニ起ル」とあり、その交叉する東北角地には、ペットショップが建っていた。

仙台城下最古の絵図といわれる正保二年（一六四五年）絵図を見ると、この支倉屋敷場所から河岸段丘を広瀬川に下りる急坂に「支倉坂」の文字が書き込まれていた。

国立国会図書館オンラインの「寛文八年・九年仙台城下絵図所載人名簿」に、支倉新右衛門（義弟常次）の名があり、常頼が切腹した五年後には、支倉本家筋が広瀬川左岸のこの界隈に既に住んでいたのかもしれない。

「寛文八年・九年仙台城下絵図」の支倉屋敷場所に「大内備前」の屋敷が、支倉通りを挟んだ西隣に「伊達兵部様」の屋敷があった。宗勝は、この界隈に住む支倉本家と既に隣組だったのだろう。寛文一〇年（一六七〇年）に再興させた支倉常信一家を、自宅に隣接する武家屋敷町に住まわせ、町名を支倉丁と呼ばせたのかもしれない。やはり宗勝と支倉は繋がっていたようである。

明治時代の著述者
渋江保の一生（その二十二）

山本勉

第十期　大学館時代から晩年⑤（東京）一九〇三年（明治三十六年）～一九三〇年（昭和五年）四月

一　漢訳『万国戦史』と訳者（その二）

漢訳『万国戦史』の訳者については、前号で紹介した湯叡の他に現時点で以下の訳者がわかっている。訳者名と『万国戦史』（漢訳万国戦史）を列挙する。

①陳瀅然（一八五九～一九三〇）
万国戦史第十巻『波蘭衰亡戦史』（波蘭遺史一巻・波蘭遺史）
②汪郁年
万国戦史第十二巻『印度蚕食戦史』（印度蚕食戦史）
③蒋維喬（一八七三～一九五八）
万国戦史第十八巻『佛國革命戦史』（佛國革命戦史）
④薛塾龍（薛公侠）
万国戦史第十巻『波蘭衰亡戦史』（波蘭衰亡史）
⑤趙夫驥
万国戦史第八巻『普墺戦史』（普奥戦史七編附録一編）
⑥薩憂敵
万国戦史第十七巻『英國革命戦史』（英國革命戦史）
⑦薩夏厳
万国戦史第十七巻『英國革命戦史』（英國革命戦史）

二　大学館と渋江保

藤元直樹の『文芸翻訳家としての渋江保』に出版社大学館と大学館時代の渋江の著作について詳述されており、現時点で大学館時代の渋江を知る貴重な資料である。本号は藤元の論文とは視点を変え、博文館以降の渋江が、何故これまでとは全くジャンルの異なる冒険小説への転身を図ったのか、心霊術関係の著作に何故傾倒していったのか、博文館以降の渋江を探る足がかりとしたい。

（一）出版社、大学館

「大学館は明治三〇年から大正時代にかけて、東京で活動していた出版社である。同社の活動にふれた資料を見出すことは困難で」(1)と藤元が同論文で指摘しているように大学館についてはその存在がわかっていない。藤元も既に論文で触れているが、岡落葉（一八九七～一九六二）が日本古書通信二〇巻四号において『大学館のころ』と題して、次のように述べている。「明治卅三年から卅五年に至る足かけ三年間、大学館に入って画の方面の仕事をやらせて貰った。当時の私はまだ修行中で、経験も自信もありはしなかったのだが、国許からの学資が来なくなった為、已むを得ずこんな方法を講ずることになったのである。紹介者は生田葵山と黒田湖山とであった。大学館と云ったところで、今日では余り記憶されてゐないかも知れぬが、主人は岩崎鉄次郎といふ紀州の人で、一風変った気概のある男であった。（中略）その頃の出版屋は今と違ひ、多少の著作家を抱へてゐたもので、博文館などは大橋乙羽の時代で巌谷小波、石橋思案、江見水蔭と云ったやうな、硯友社の有力な人達が轡を並べてゐる外に、野崎左文岸上質軒、渋江保の如き古豪が控へてゐたから、若い人達は容易に割込めなかった。」(2)日本古書通信が岡落葉の文章を掲載したのは、岡が他界する七年ほど前のことで、往事を振り返り大学館時代を中心に書き留めた回顧録である。渋江についても博文館の古豪として書き留めているだけで大学館時代の渋江については一切触れられていない。岡落葉は、明治から大正、昭和にかけての画家で、装幀や挿絵を手がけた人物である。

（二）藤元論文から渋江の晩年を探る

論文には渋江について幾つかの評価がなされているが、渋江の晩年を考える上で藤元が提示している文がある。「明治四一（一九〇八）年一一月二〇日に発行された渋江不鳴名義の『裸体旅行』を最後に渋江の（大学館での：引用者）小説執筆が突如として始まった理由」、そして、「突如として終わった理由」、「一切不明」と言ったこの背景にある渋江を貫く思想について探っていきたいと思う。

注記

（一）藤元直樹『文芸翻訳家としての渋江保』（図説翻訳文学総合事典全5巻二〇〇九年十一月）三九九頁

（二）岡落葉『大学館のころ』（日本古書通信二〇巻四号一九五五年四月十五日）二頁

（三）藤元直樹『文芸翻訳家としての渋江保』（図説翻訳文学総合事典全5巻二〇〇九年十一月）四〇八頁

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）（七）

匠　克仁

〈登場人物〉

弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
　東西信販から京亜クレジットを経て転籍
御木武利　アサヒ信用保証会長
　京亜クレジット常務から転籍
猪本進一　アサヒ信用保証前会長（創業社長）
　東西信販から社内ベンチャーで創業
立花豊　アサヒ信用保証社長（二代目）
　東西信販から創業時に出向・転籍
高畑巌　アサヒ信用保証
　法務担当マネージャー
佐野義文　京亜クレジット人事部長

〈時系列〉

一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年三月三十一日　良香、東西信販退職
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット入社
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証が東西信販から京亜クレジットへ全株株式譲渡
二〇一八年三月一日　良香・御木アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇一八年四月一日　エリア総合職制度の導入
二〇一九年四月一日　エキスパート制度の導入
二〇一九年五月二日　懲罰委員会の設置
二〇一九年九月二日　セクハラホットライン設置
二〇一九年十月一日　リウォード（報酬）制度の導入
二〇二〇年二月一日　リウォード制度授賞式
二〇二〇年二月七日　テレワーク制度の導入
二〇二〇年三月二日　アサヒ信用保証組織改革
二〇二〇年四月一日　民法改正施行

7　解雇通知

二〇二〇年二月七日、弓本良香は御木会長から高畑マネージャーの解雇を命じられた。良香は高畑のスマホに直接電話を架けた。

新型コロナ対策で高畑はこの日から自宅でのテレワークを実施している。スマホもそのために会社から支給したものである。

日本のコロナ危機がどうなるか分からないので、暫定的に一ヶ月とした。三月六日までで、七日が土曜日なので三月九日月曜日からの出勤の予定である。一ケ月後の状況によりテレワークを続けるか解除するか判断する。

それまでの自宅勤務を人事部として命じたばかりである。それが三月七日を待たずに二月二十九日での解雇を通知することになる。

高畑にとって予測できない事態で、耐えられない話であろうと良香は悩んだ。

良香は高畑に緊急で直接面談したいことを告げた。

高畑は来週の月曜日か明日土曜日に会社へ行くと主張したが、良香は強引に説き伏せた。高畑も何か緊急事態と感じたようで、最後に応諾した。

残業時間にあたる午後六時以降にする訳にいかないので、午後五時から六時までとした。場所は高畑の通勤の最寄り駅の喫茶店で会うことにした。

片道で二時間かかるという高畑の自宅は埼玉県北部であり、栃木との県境に近い。駅から徒歩二分というが、かなりの長距離通勤である。

通常の勤務であれば、フロア一階しか違わないので、直接に面談するの数十秒後で済むはずであった。新型コロナでのテレワークの実施が裏目に出た。

しかし、直接面談もせず、解雇通知をするべきではないと良香は考えている。

午後三時には会社を出ることにし、部長会議もキャンセルした。

毎日往復の通勤に四時間を費やしていた高畑にとってテレワークは望むべき環境が到来したかもしれなかった。

システム部門もテレワーク環境を構築するために三名が高畑の自宅に二時間かけて訪問したはずである。

約束の午後五時の十分前に指定した喫茶店に良香が到着した。既に高畑が座って待っていた。

ネクタイは不要と伝えていたが、スーツ姿にネクタイと会社にいるときと同じ姿であった。

ライオンのたてがみに例えられる髪もオールバックできれいに撫でつけられていた。黒髪が無い完全に総白髪である。

顔つきは四十九才の年相応なので、生まれつき銀髪の西洋人のようである。

高畑と良香は一九九四年に同じ大学の法学部を卒業して、新卒で東西信販に同期入社した。

高畑は司法試験のためゼミの単位だけわざと落として、大学は五年間在籍していた。司法試験に不合格だったので東西信販に入社した。

二十六年前入社時に、高畑に対して若白髪が多いという印象を持ったのを良香は思い出した。

良香が二〇〇〇年に東西信販を退職し、京亜クレジットに転職してから、二〇一八年にアサヒ信用保証に入社するまで疎遠であった。

人事部長として良香は高畑の家族構成は把握している。高畑には専業主婦の妻と娘二人がいる。

なかなか本題を切り出さない良香に対して、高畑の方から話し出した。

「今月十五日は娘の大学入試です」

照れくさそうに笑う高畑の表情を良香は初めて見た。

受験するのは上の娘の話だと良香はすぐに分かった。

「娘が合格したら、弓本部長と僕と同じ法学部の後輩になります。本人は司法試験も受けるつもりでいます」

受験前から合格前提の話ができるのは、それだけ自信があるのだろうと良香は思った。

「リウォード制度の報奨金三十万円は本当に助かりました。報奨金が無かったら、娘を大学へ行かせるのも大変でした」

「それが…」

無くなったと良香が言おうとする前に高畑が続ける。

「最近は支出が多くて、困っていたのです。娘が合格したら入学金と授業料にあてるつもりです。入学金二十万円と初年度の授業料九十六万円もかかります。どうやって捻出しようか悩んでいたから、本当にありがたい」

生活に余裕が無いことも高畑の総白髪に表れているかもしれないと良香は感じた。

「報奨金について事情が変わったので、後で説明します」

「事情が変わったというと…」

「今回の面談で説明しますが、その前にまず伝えるべき内容があります」

「弓本部長らしくありません。いつもは雑談なしに最初に結論を告げていますが、今日に限ってそれもない。刑事裁判の判決のようです。死刑判決だけ主文を最後にするように」

高畑らしい表現だと良香は思った。

「今朝の電話の時から面談目的も告げませんでした。それに今日の夕方は部長会議の予定が入っていたはずですが、それをキャンセルしてまで僕と面談する内容は何ですか。今日は金曜日でミニ取締役会の日ですが、そこで何かあったのですか」

いつものように高畑の感は鋭かった。

「まず三月二日の組織変更ですが、高畑マネージャーの論文内容から大幅に変更になりました。企画部が主管な

ので、実は私も今朝、会長から知らされたところです」
　良香は順序立てて説明しようと考え直した。
「もちろん組織変更は企画部の仕事です。論文の新組織体制はあくまでも叩き台の私案に過ぎません。僕はあくまでも今の組織では四月の民法大改正に対応できないと指摘しただけです。特に今の営業と審査を分離していないのは問題でした。リーガルチェックなしで勝手に保証を決めていましたし。しかし…」
　高畑は首をひねって続ける。
「そのことを伝えるために、わざわざこんな田舎まで来たのでないでしょう」
「それが高畑マネージャー個人の人事にも影響が出てくるのです。順番に話をしていきます」
　どう話せばショックをやわらげるかと良香は考えながら進めた。
「地方支店での審査・管理は止めて、本店に第二審査部や第二管理部を作るのは、高畑マネージャーの計画通りです。私も新しい組織で人事異動を決めています」
　実際に三月二日で組織変更するが、三月末までは移行時期で、実際は四月から本格な運用になる。地方支店の審査業務を本店に持ってくるのであるから、人事もかなり異動になる。
「それで、どこを修正したのですか」
「実は、コンプライアンス室を作る計画は無くなります」
　高畑が天を仰いだ。今回の論文では高畑が最も強調していた部分であった。
　しばらく二人の間に沈黙が流れた。
「すると、僕は法務グループで今の立場を続けるわけですか」
「いいえ。法務グループも残りません」
　良香も言いづらかったが、ごまかすことはできない。
「それではリーガルチェックは誰がするのですか」
「法務部門はアウトソーシングします。他社でも法務をアウトソーシング会社が増えています」
　法務をアウトソーシングする会社が増えているのは事実である。アサヒ信用保証がその選択肢を決定するのは不合理でない。
「アサヒ信用保証もその経営戦略を採用することになりました。それが正式に決まったのが今朝のミニ取締役会です」
　組織に関する決定は企画部と取締役以上の経営陣であって、人事部ではない。
「岩倉弁護士が所属している弁護士法人に依頼します」
　弁護士事務所でも企業の法務のアウトソーシングを業務とすることが増えてきている。
「あの顧問弁護士の法人か。だいたい岩倉弁護士と御本会長は癒着しているだろう」
　高畑の言葉使いも荒くなった。

「癒着云々は別として、高畑さんが現在している仕事は弁護士法人のパラリーガルに引き継ぐことになります」
　パラリーガルというのは弁護士資格は無いが、弁護士事務所で法律の定型的な業務を担当する人を指す。
「組織変更と同時に現在の高畑さんが担当していた業務は無くなります」
「それで僕はどこに異動になるんだ」
　高畑も苛立ちを見せ始めた。
「あなたは東西信販のときから今まで法務で一筋に仕事をしていたから、新しい部署への異動はありません」
「異動がないって、どういう意味だ」
「リストラによる部署の統廃合に伴う整理解雇になります」
　いつも鋭く切り返す高畑も絶句した。
「今回は地方店舗で審査担当していた社員も整理解雇になります。整理解雇は高畑さんだけでありません」
「地方勤務者は今回の第二審査への異動や地方店での営業など選択肢がある。それができない人だけが整理解雇の対象だろう。それに、僕だって法務以外にも企画もできる自信はある」
「企画は高畑さんクラスのマネージャー以上のポストの空きはありません」
「Kが手放さないというわけか。どうせ会長がたくらんだ人事だろう。よほど僕は会長に嫌われたらしいな」
　良香は答えなかったが、認めたものと高畑はとらえたようだった。
「それで、高畑マネージャーは今月末までの雇用となります」
「組織変更は三月だから、二月末で僕の首を切るというのか。今日はもう二月七日だ。事前の解雇予告の日数も不足している」
「それは解雇の一ヶ月に満たない分の給与を支払うことで、二月二十九日付の解雇になります」
　よく解雇通知は一ケ月前というが、これは間違いで正しくは三十日である。
「一ヶ月前じゃない、三十日前だ。二月二十九日付解雇なら一月三十一日でなく一月三十日までにすべきだ」
　高畑は良香のミスを指摘した。良香も当然に知っていたが、良香らしくなく言い間違えたのである。
「今回は整理解雇で、従業員側の事情でなく、会社側の事情による解雇です」
「それで整理解雇の四要件は無視か」
　法務に強い高畑には納得できないようだった。事業部を廃業したり、支店を閉鎖する場合など整理解雇は使われるが、厳しい条件がある。
「一、人員整理の必要性。二、解雇回避努力義務の履行。三、被解雇者選定の合理性。四、手続の妥当性。四要件を満たさないと、不当解雇で無効だ」

法務を担当していただけに高畑の口から専門用語がよどみなく出てきた。
「といっても、いつも不当解雇を繰り返している人事部長に正当性を主張しても無駄か」
高畑は力なく肩を落とした。
「社内論文の報奨金三十万円が手切れ金ですか」
「それが会長賞の報奨金は受給資格が無くなってしまいます。組織変更が受給の条件で、それが三月二日…」
「それで僕の解雇を二月二十九日付けにするのか。会長はどこまで汚いんだ」
高畑は良香に対してでなく、会長に悪態をついた。
「いつものお得意のセリフは僕にはないのですか。あなたには二つの選択肢があります。一つ目は退職を受け入れるか。二つ目は…というセリフですよ」
「残念ながら、今回は退職について他に選択肢はありません。会社の方針なので、決定事項です」
良香は自分でなく会長が決めたことだと言いたかったが、高畑も気付いていると思った。
「これが第一回リウォード制度の会長賞とった僕に対するあなたの報酬ですか。こんな結果になるなら、最初から論文なんて書かなかった方がよかった」
「リウォードについては別の形で用意しています」
良香は即答して、さらに続ける。
「退職の他の選択肢はないと言いました。退職後に高畑さんが京亜クレジットで勤務する可能性があります」
「京亜クレジットへ出向というのか」
高畑が首をかしげた。退職したら出向はできない。
「いいえ。出向ではありません。アサヒ信用保証で退職して、当社と全く関係なく京亜クレジットに中途入社の面接を受けるのです」
良香の話に高畑は当惑していた。
「京亜クレジットは私が在籍したときから法務に強い人材を求めているのですが、未だに採用に至っていません。現在も法務担当の中途採用を募集しています」
京亜クレジットでは、かつて正社員として弁護士を雇用していた。社員弁護士を雇用する上場企業は少ないながらも存在する。
その人が五年前に定年退職した後も顧問弁護士をしているが、後任が現われるまでの臨時ということである。
「高畑さんはアサヒ信用保証と関係なく、個人の意志で京亜クレジットの中途採用に応募していただきます。そういうことなので、採用が１００％確実ではありません。私の推薦状を出しますし、京亜の人事部長にはここへ来る前に既に話をしました」
良香が高畑に電話を架ける前に、別の電話をしていた。相手は京亜クレジット人事部長の佐野義文である。佐野は京亜クレジット時代の良香の上司である。
良香が今回の件の事情を説明すると、佐野は良香の提

案に好意的な反応を示した。
「佐野部長から高畑さんのキャリアなら、本人が望むなら面接するとの前向きな意見をいただいています。もし、私が佐野部長にアサヒから京亜へ逆方向の出向の要請をしたら受け入れてもらえる関係は築いています」
会長の命令に従い、なおかつ、高畑に活躍の場を与える唯一の方法であると良香は確信していた。
「出向と違い、中途採用ですから、京亜クレジットの採用基準を満たさないと合格しません。雇用条件も今と同じという訳にいきません。採用される保証はないと言いましたが、採用されても、試用期間終了後で継続されないこともあります」
念のため良香は予防策を張っているが、上手くいくだろうと思っていた。
アサヒ信用保証から京亜クレジットへの出向は『逆出向』と呼んで、その話は以前から良香と京亜クレジット人事部との間で検討されていた。
買収した会社をグループ企業にふさわしくするには一方的な人事でなく双方向の人事が必要と経営陣でも判断していたのである。
御木会長と関係の悪い高畑について、かつては良香はその候補者として打診していた。そして、京亜クレジットでも内密で応諾を得ていた。
良香は以前から高畑を京亜クレジットへ逆出向させる計画は立てていたのである。もっとも逆出向の人事をしようしても、御木会長に妨害されるのは明らかであった。
しかも、高畑がアサヒ信用保証の中では「余人をもって替えがたい」という評価のため、動かせなかった。
会長が高畑を排除しようとして整理解雇という手段に出たので、良香は対抗手段を講じたのであった。
高畑を逆出向できなくなり、正社員としての採用を検討して欲しいと良香は佐野部長に依頼したのである。
佐野はもともと反御木派であるので、事情を話すとすぐに理解してもらった。
高畑が京亜クレジットに入社して、その事実がいずれ会長の耳に入ることになっても、良香は構わないと思っていた。
会長の命令に反した訳ではないから、開き直るつもりであった。
「正直言って、急な話で当惑しています」
高畑の立場だったら当然だろうと、良香は思った。
コロナ対策のテレワークで自宅勤務をした初日である。突然、人事部長が訪問して、今月末での解雇通知をする。その場で買収した側の親会社への転職を勧める。
自分が高畑の立場なら、すぐ決断できないと良香は思っていたので、一週間ほど検討期間を考えていた。
「弓本部長の提案に挑戦してみます」
良香の予想に反して、高畑はその場で決断して答えた。

塩塩塩……酸塩

匠　克仁

塩酸塩について、まんじ前号で書いた。アトモキセチン塩酸塩（ストラテラ・ＡＤＨＤ治療薬）やパロキセチン塩酸塩（パキシル・うつ病治療薬）である。このような塩酸塩という物質に疑問に思った。この薬だけでなくて塩酸塩は多くの薬に付いている。最初に見たときぼくは塩と酸と塩はどう区切るのかなと思ったのだが、塩酸と塩で分けると見当をつけた。硫酸塩や硝酸塩や安息香酸塩などを知っていたからである。ちなみに塩酸塩の下の塩はイオン化合物という意味で塩（しお）でない。なお塩基（アルカリ）と酸が結合した物質のことを化学では塩（エン）と定義している。参考に英語ではｓａｌｔが塩（しお）とイオン化合物＝塩（エン）を指す。ただの塩酸かと思ったが、ちょっと待てよ、塩酸という液体は塩化水素の水溶液で劇薬である。毎日、飲んでいるけど塩酸は人肉を溶かすものではないかと心配になる。毎日塩酸を口に入れたら内臓が溶けてしまう。昔のドラマで塩酸を犯人が被害者にかける場面を想像しながら、塩酸塩の薬を飲んでいる。と不安になってしまったが、実は塩酸はそんなに特別に心配するものでない。そういえば塩酸は胃液の成分だから、気にすることないと思った し塩酸が胃の消化を助けてくれる、と考え直した。実際に塩酸ベタインというサプリがある。胃の消化が弱い人に塩酸化合物を配合したサプリである。現実にこのように塩酸塩を付ける理由は水溶性を高めるためである。なぜ塩酸塩の水溶性が必要かというと薬は単体で結晶化して塩酸塩等で結合としないと吸収されないからある。○○塩と、塩が付くものは食品成分表によくある。もっとも塩の代りにナトリウムかＮａとも表記している。亜硫酸塩はワインの酸化防止剤として使用されている。亜硝酸塩はハム・タラコ等の発色剤で使われている。安息香酸塩は清涼飲料水の防腐剤である。ぼくは過敏症で亜硫酸塩のワインを飲むと、頭痛がする。また、同様に亜硝酸塩入りのハムやタラコ等で腹痛がする。ハムの中には無塩漬ハムがある。これはハム製造に発色剤である亜硝酸塩を使用していないものである。ムシオヅケでなく、無塩せきと表示することが多く、ムエンセキと読む。この塩漬（エンセキ）は、食品の原材料に発色剤・調味料・食塩を入れることである。最近はハム等だけでなく亜硝酸塩を鮭の切身にも塗る。また、コンビニの野菜は亜硝酸塩の水に漬かっている。ハウスで栽培する野菜は亜硝酸塩入りの肥料が残留する、ぼくは吐き気のため安息香酸塩入りのジュースは飲めない。市販ジュースは安息香酸塩が入っているので飲めない。アスペルガーは安息香酸塩等の食品添加物過敏症がいる。硫酸塩ではなく亜硫酸塩と亜が付いているが、亜というのは硫酸塩より亜硫酸塩は酸素が一つ少ないことを意味する。なお、次亜硫酸塩の次は亜よりさらに酸素が一つ少ないことを指す。過塩素酸塩の過は酸素が一つ多いことを指す。つまり、過塩素酸塩から酸素を一つ取ると塩素酸塩であり、塩素酸塩から酸素を一つ取ると亜塩素酸塩であって、亜塩素酸塩から酸素を一つ取ると次亜塩素酸塩になり次亜塩素酸塩から酸素を一つ取ると次は何かと調べたが次亜塩素酸塩が酸素は一つしかないので、酸素は無くなってしまい塩素化合物である。ちなみに、塩酸のトイレ洗剤と次亜塩素酸塩水溶液の漂白剤を混ぜると、死亡事故に繋がる塩素ガスが発生して大変危険である。除菌消臭剤で次亜塩素酸水があるが、次亜塩素酸塩とは別物である。次亜塩素酸水を空中噴霧することでコロナ対策となる。次亜塩素酸水は弱酸性で人体に安全であるのに対して、次亜塩素酸塩は強アルカリ性で人体に有害である。今は次亜塩素酸塩をコロナ対策で空中噴霧する情報があるが次亜塩素酸塩を吸ったりしたらコロナ以上に危険であり次亜塩素酸塩は人間の粘膜を溶かしてしまうのである。次亜塩素酸水は食品添加物にもなっているので心配ない。過塩素酸塩の話に戻ることにする。次亜の次の次に過硫酸塩でなく、過塩素酸塩として、過の例を挙げた。過硫酸塩でなく過塩素酸塩としたのは、塩素酸塩としたら次亜塩素酸塩の水溶液漂白剤で塩酸のトイレ洗剤と混ぜると塩素ガスの発生の話が書けると思ったからである。次亜塩素酸塩は消毒のため水道水に添加されている。ぼくは塩酸塩の薬を次亜塩素酸塩の水道水で飲む。ぼくの中で塩酸であるトイレ洗剤に似た成分と漂白剤の次亜塩素酸塩水溶液の薄い液を混ぜている。ということは、体内で塩素ガスが発生している。このことを心配したが、塩酸塩を薬として飲んでいるぼくと同じ様に普通の人も次亜塩素酸塩入りの水道水を飲んでいる。人間は胃酸つまり塩酸を分泌するのである。そこまで考えてやっと体内の塩素ガスの不安が消えるのである。アスペルガーなの

で塩素ガスをここまで考えないと不安解消できない。更に塩素ガスについて言及したい。最近は自殺の手段として塩素ガスが使われる。この自殺は大変迷惑で、救助者も塩素ガスの中毒死に巻き込まれる事例がある。さらには塩素ガスは空気よりも重いので、マンション等であれば塩素ガスが階下の住民も巻添えにするのである。一人の塩素ガス自殺者でマンション全体の封鎖もある。こんな塩について書いていたら、ぼくは中学生のときの理科で塩を作る実験を思い出した。アスペルガーは四十年前の塩の実験をも覚えているのである。水酸化ナトリウムと塩酸とを反応させて、塩（食塩）を作った。ぼくはこの塩の実験って正しく理解されているか疑問に思う。この塩の文字や塩が入った単語が無闇に出てきて混乱するが塩の実験で塩を使った言葉について一つ一つ整理する。

塩①

塩（しお）・食塩

塩化ナトリウム

塩素とナトリウムの化合物

塩②

塩（エン）塩基性と酸性の物質のイオン化合物　塩基性塩でも酸性塩でもない正塩　金属と非金属との原子の錯塩（錯体ともいう）

塩③

塩素　元素記号Ｃｌ　最初は原語の黄緑素と訳された塩素の原語に塩素と訳せる候補名があったが採用されず塩素はおかしく黄緑素という訳語が原語に忠実である

塩④

塩基（アルカリ）性の水酸化ナトリウム（アルカリ性は塩基性と同義に使われるが、正しくない。アルカリ性は塩基性の一部で、水溶液のみに使用するのが正しい）

塩⑤

塩酸（酸性物質の例として使用）

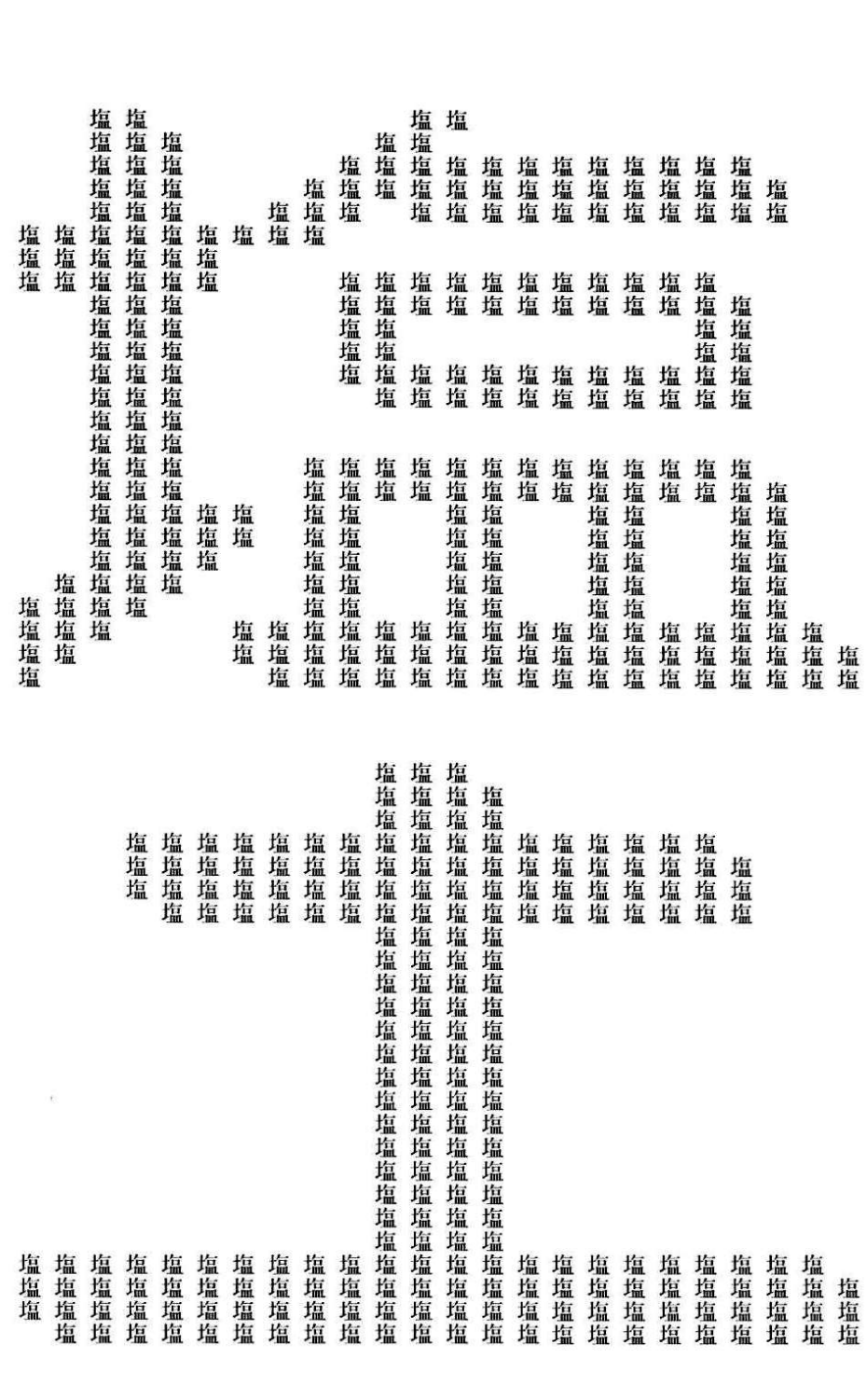
塩化水素の水溶液

塩素と水素の化合物

「塩（エン）＝塩基性と酸性の化合物」が混乱するためか塩（エン）の概念の説明もせずに実験していた。ぼくは塩の実験って今でもおかしいと思う。この実験の目的は塩（エン＝イオン化合物）を作ることであって、単なる塩（しお）を作るための実験でないのである。それなら塩（しお＝塩化ナトリウム）のような物質を、化合物の塩（エン）の例とすることを避けるべきである。それに塩基の例にナトリウムを持ち出すべきでない。さらには塩酸を酸の例に出すのはナンセンスである。単なる塩と塩（しお・エン）のダジャレに過ぎない。実際に現在も塩の実験をずっと中学校でしている。中学生が混乱する塩の実験を今すぐ中止すべきだ、とぼくは思う。もしも塩の実験を変更できるなら以下のように提案する。まず塩（イオン化合物）を合成する実験には酸性物質としては塩基では水酸化ナトリウムなどナトリウムという食塩の塩の成分の無いものを使う。そうしないと従来の実験は塩の素と塩の基を混ぜたら塩になりました、となるから塩の実験は字面だけみると非常に間抜けである。実験で塩（しお）ができたのは混ぜた物質が原因であり、もし塩（しお）と全く別物質ができても塩（エン）と呼ぶと塩の実験では教える。そのような実験をするのであれば塩酸と別の○○酸を使用し、水酸化ナトリウムと別の塩基として水酸化○○を使用すれば問題ない。ところで塩の実験について四十年も覚えて不満に思うぼくの脳は塩梅（あんばい＝バランス）が悪いアスペルガーであり塩梅よく脳細胞を活用して普通に生きていけたとしたら塩を踏む（世の中で苦労する）ことはなかった。青菜に塩のようにしおれた心境でこの文を書いている。蛞蝓に塩のようにしおれた心境でこの文を書いている。ぼくは塩梅という言葉は塩（アルカリ性）と梅（酸性）という塩基と酸のバランスの良い単語と思う。ｐＨ＝７であり塩基性でも酸性でもない中性を表している。それならば塩（エン）とｓａｌｔ（イオン化合物）を翻訳しないで塩梅と翻訳した方が混乱しなかったと思う。塩（エン）は塩基と酸（梅の様な）の化合物だからである。ところで塩梅は案配という字を使っているのを見ることがあるが塩梅はもともとエンバイであったが、良い具合の案配と塩梅が混同してアンバイとなった。良い具合アンバイは塩梅・案配の他に按配・案排・按排と表記する。今まで塩（エン）と書いたが、説明をさらにすると正確には正塩（セイエン）である。塩（広義のエン）に三つあり正塩（狭義のエン）と塩基性塩と酸性塩とがある。しかし塩基性塩とは塩基性（アルカリ性）の塩ではない。酸性塩も酸性の塩ではないから、とても混乱する。正確には塩基性塩はＯＨ（水酸基＝酸素＋水素）が含まれている塩である。対の酸性塩はＨ（水素）だけが含まれている塩である。例えば、酸性塩である炭酸水素ナトリウムは塩基性の水溶液であるから、ややこしくなっている。錯塩とは金属原子と非金属原子の分子である。最近は、錯塩は錯体に変わってきていようで、理科で色々な意味の塩がでてこないようになってよかったと思う。因みに錯塩はｃｏｍｐｌｅｘ　ｓａｌｔ訳語である。それでも錯塩でなく、錯体とすると、イオン化合物という意味での塩の一種であることが認識されなくなる。だから錯塩の塩だけ別の文字に変えてもあまり意味がない。ところで塩基というとアルカリ以外に遺伝子でも使う。遺伝子の塩基はＤＮＡやＲＮＡを構成する要素である。ＤＮＡの塩基はアデニン・グアニン・シトシン・チミン。ＲＮＡ塩基はチミンの代わりにウラシルの四つである。ここの塩基は核酸塩基の略である。つまり、核酸の構成成分が塩基でできている。塩基の原語はｂａｓｅである。核

酸塩基の原語はｎｕｃｌｅｏ ｂａｓｅ核の基である。また塩基のｂａｓｅは基礎・基盤・基地・基部である。この塩基をｂａｓｅの訳語にするなら共通する基の字だけで塩を付け無い方が原語に近い。しかし簡単な話でなくて塩基でなく基は化学用語では原子団を意味する。こんな塩という文字は化学分野で頻出する。塩基の他に例えば塩折がある。たんぱく質が溶液に溶けず沈殿することを塩析という（ｓａｌｔｉｎｇ ｏｕｔの翻訳語）。この塩析の例は、にがりを使う豆腐の製造である。にがり＝塩化マグネシウムを使用して、大豆の中のたんぱく質を塩折することで製造する。ここでにがり（漢字で苦汁）＝塩化マグネシウムとしたが合成である。天然は海水から塩化ナトリウムだけを除き製造する。天然のにがりには塩化カリウムも除いて製造する商品もある。にがりには塩化カルシウムを含むのが天然で、含まないのが合成で塩化していない亜鉛・鉄なども天然に含まれる。亜鉛は塩化亜鉛としてにがりに存在しない。人工で合成された塩化亜鉛はメッキとかハンダなどに使われている。鉄は塩化鉄でなく、鉄単体で、にがりに含まれる。ところで塩化鉄は塩化第一鉄と塩化第二鉄がある。別の名前では塩化第一鉄は塩化二価鉄である。それから塩化第二鉄は塩化三価鉄である。一二三を間違えているのではなくて塩化第一鉄は鉄が二価つまり電子が二つ少なく、二つの塩素と結合している。塩化第二鉄は鉄が三価で、三つの塩素と結合している。鉄について後で記述する。こんな塩のエッセイを書いていて、ぼくは実は船酔いの病状で塩の潮に悩まされた。ぼくの文章作法は追加挿入なので塩の字が潮の様に揺れるのである。文字入力の度に後の塩の字の位置が波打って脳を揺らす。ドミノ倒しの様に塩の字か倒れるというか後の方にずれてしまう。ぼくも塩のエッセイで船酔いになると思わなかった。今までは塩の字の一字でない二字目にＡＢＣやアイウエオ等では塩の一文字と違って気にはならない。二という文字でも塩と違い画数が少ないので、気にはならない。ところが塩の場合は二よりも画数が多いため塊となって認識して塩の文字の位置がずれると脳を揺さぶるのである。さて塩基性の話をしたので塩梅（バランス）を良くするため酸性の話をしばらく書いて、また、塩の話に戻る。この酸性は酸素と関係がある。酸素原子の発見時にｏｘｙ（酸）ｇｅｎ（生む）と名付けられた。その理由は酸素が酸性の物質に含まれていると考えたからである。それで酸素と日本で直訳された。しかし、これは誤りで酸性に酸素が全てに含まれるわけでない。実は他の原子であり酸性の物質は水溶液にして水素（イオン）があるもので酸素ではない。水素があるというと説明が不十分で、水酸基（酸素と水素の基）でない水素がある。塩基性では酸素が入っている（水酸基であるが）。だから、水素は酸性の物質にイオンとして必ず入っているので、水素

が酸素と呼ぶ方が理屈に合っていて正しそうである。逆に酸素は水酸基（ＯＨ）として塩基性の物質に入っており酸素でなく、塩素といった方が実態にあっている。次に酸化鉄について説明する。塩化鉄でも説明したと同様に酸化第一鉄と酸化第二鉄とがある。塩化鉄と同じように酸化第一鉄は酸化二価鉄と言われている。酸化第二鉄は酸化三価鉄である。鉄原子は一番外側に電子が二個あり酸素は二個電子を奪いやすいので、酸化二価鉄は鉄一つ酸素一つで結合するのである。化学式で表すとＦｅＯと酸化二価鉄がなる。一方、酸化三価鉄は鉄が二つに対し酸素が三つになり化学式はＦｅ２Ｏ３である。他にも四酸化三鉄というのがありＦｅ３Ｏ４である、別名で四三酸化鉄ともいう。化学式から想像できるところだが、四酸化三鉄は酸化二価鉄と酸化三価鉄が結合している。四酸化三鉄は、いわゆる黒錆のことである。対して赤錆は酸化三価鉄である。酸化二価鉄は結晶である。ところで酸化とは電子が無くなることも別に意味する。二価鉄が酸化（電子一価失う）すると、三価鉄になる。三価鉄を酸化鉄とも書くのである。酸化鉄は二つの意味があり①酸素と結合した鉄②電子が一価少ない鉄である。だから酸化三価鉄は酸化酸化鉄と理論の上では書ける。普通は酸化酸化鉄と書くと、誤植みたいで使わないのだろうが酸化酸化鉄の上の酸化は酸素と結合する意味であり下の酸化が電子一価少いという意味と考えると正しい。さて塩のエッセイもそろそろ塩時…いや潮時である。因みに塩時…いや潮時は終わりの意味で使われているが本当は塩時…いや潮時は良い時期である。関係ない話であるが塩時鮭というものがある。これは二時鮭（ときしらず）の塩漬（エンセキでなく、しおづけ）のことである。もし塩時鮭の塩漬（しおづけでなく、エンセキ）なら亜硝酸塩で化学的に発色させていることになる。本文の最後は塩土（エンド）の話をしたい。字面だけみると、単純に塩を混ぜた土かと思うかもしれないが、そうではなくて塩度（塩分濃度）の誤字でもない。意外かもしれないが塩土とはインコのエサである。お灸の様な形をしていて塩とボレー粉と赤土を硫酸カルシウムで固める。また黒塩土といって、炭を混ぜたものもある。インコのエサに塩土を与えたのは野生のインコが土を食べるので土から塩などミネラルを補給すると思われたからである。今は塩の補給でなくナッツの毒性を解毒するためを分かって塩土をエサに与えない飼育が推奨される。インコ体内の塩分過剰になるのと内臓に土が溜まるからである。さて塩土化という言葉がある。世界史中世史の用語であって塩土化とは戦争などで征服した土地を人が住めない様に塩を大量にまくことである。ローマ帝国はカルタゴ市を塩土化した。最後は日本史古代史の話で、日本書紀には塩土老翁（シオツチノオジ）という神が登場する。さて塩土の話で今回の塩と酸のエッセイもエンドにする。



編集後記

新型コロナウイルスが今年初めから三～四ヵ月の間に地球全土を覆い、人命を奪い、社会を麻痺させ、更に感染者の増加から医療麻痺迄起こしている現状を、誰が予想していたでしょうか。毎日の新聞テレビのニュースを見て、我が身を引き締めておられるのではないでしょうか。

本号では新井宏氏さんが、行政等のコロナウイルス対応を解説寄稿してくださいました。私たちは、行政説明に何らかの疑問を持ったまま日を過ごしていますが、新井説を読ませていただき、「なるほど」と思う点もあり、時宜に叶った寄稿に感謝します。

三戸岡さんの「ロボット雑考」では、私たちの想像をはるかに超える「量子コンピューター」の実現により、今後のＡＩが人間を超えた想像を絶する機能を持つことになるのではないかと、期待と不安が入り交じっています。

山本鎭雄さんの「アウシュビッツ強制収容所」では、「人間がどこまで非人間的になり得るかという狂気と頽廃の象徴」と述べられ、そこに山本さんの思いとして、広島原爆が加わっていることを読ませていただいて、全人類は永遠に戦争を放棄すべきとの思いが高まってきました。

十数年前に同人を去られた「亜木陽一」さんが、久しぶりに短編を寄稿されました。

コロナで合評会も開催が不能になっています。開催される日を望み、引続きご健筆を揮われることを祈ります。

皆さん、絶対にコロナに感染されませんように！

（鍋）

まんじ第157号

令和２年８月１日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL･FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について

「文明は変われど　真理は変わらず」

田寺（たでら）怜葦（れい）画

まんじ

No.158

2020.11.1

まんじ第百五十八号　目次

ある手紙……三戸岡道夫……4
戊辰東北戦争②　輪王寺宮公現法親王……千坂精一……6
愁想の「シルクロード」……新井宏……24
漢詩　潮汐錄（百）《漢詩の流れ88》……鯨游海……33
漢詩　汲深録（二十二）……松井秀人……36
古い物・遠い夢　我家の一品……忠内正之……38
信託の歴史世界旅　その二……永田俊一……49
青雲の彼方（十）……太田精一……71
私の「昭和20年」（3）……山田嘉久……82
　―終戦から75年―

回想　目白通りと神田川周辺の空間観察……山本鎭雄……92
　都市は「ふるさと」か
神儒仏正味一粒丸……浅野博文……101
米　価……横山正義……110
安芸門徒シルクロード紀行（9）……村上邦治……114
高山右近（八）……鍋屋次郎……137
　…信仰に生きた生涯…
私の伊達政宗像を訪ねて（その四－⑥）……安藤剛……145
明治時代の著述者　渋江保の一生（その二十三）……山本勉……174
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）（八）……匠克仁……181
1・2・3・4・5……0……匠克仁……189
編集後記……編集子……198

ある手紙

三戸岡　道夫

今から二～三十年前のことであるが、昔の中学校時代の友人から手紙をもらった。しかしそのことをすっかり忘れていたが、最近、古い書類を整理していたら、その手紙に対する返事の下書きが出てきた。ちょっと読んでみると、今の時代にも通用しそうな点もあるので、「まんじ」の紙面をお借りすることにした。

以下はその返事の文面である。

毎日、寒い日がつづきます。

二回にわたり御手重な御手紙、ありがとうございました。郷土歴史研究会をはじめ、いろいろと広範囲な御活動、感動いたします。

私はそれほど歴史にくわしいわけではありませんが、二十一世紀に入ってからは、世界各地にいろいろな事件が起こり、世界的に政治、経済、道徳、宗教、民族問題と、混乱してきました。ポイントは民族と国家の在り方かと思います。

あまり複雑に考えると、反って本質がわからなくなってしまいますので、

「国家とは何か」

もう少しくだけて、

「国家がやらなければならない仕事は何か」

と考えますと、次の二点です。

一、国を守ること

二、国民の食糧を確保すること

の二点に限定されると、いつか本で読んだことがありますが、たしかにその通りだと思います。

「国を守る」とは、すなわち外交です。外交がうまくいかないと戦争になるわけで、戦争は外交の一部です。従ってどの国も、外交に死力を尽しています。

しかし外交は、ただ強ければいいというわけではなく、「うまい外交」をやらなければならない。しかし「うまい外交」とは、「よい外交」ではなく、外交をうまくやることである。

外交は、内と外との関係である。

外が羊ならば、内（自国）も羊になっていればいい。しかし外が虎や狼だったら、自分も虎や狼にならなくては、国民を守ることは出来ません。

そしていったん戦争になると、情報や行動も、内と外、表と裏、本当と嘘、善と悪、とが混乱して、何が本当か嘘なのか、わからなくなってしまいます。また、わざとわからなくするのです。

その虚と実の中をすり抜ける者が、戦争に勝つのです。そして勝てば官軍。

したがって大東亜戦争も、その通りになったのです。誰が賛成した、反対したということもさる事ながら、要はアメリカのオレンジ計画の罠に日本は引っかかったのです。

だから、外が平和主義なら日本も平和主義でいいが、外が軍国主義なら日本も軍国主義にならざるをえない。そうでなければ、国家ではない。軍国主義には、右翼も左翼もありません。右翼が軍国主義なら、左翼も軍国主義です。いや、左翼の方が、右翼以上に軍国主義になっているではありませんか。

そういう意味において、二十一世紀はすでに、第三次世界大戦の時代に入っているのかもしれませんね。

しかし二十一世紀の戦争は、ＩＴ革命によって、その戦争形態が、これまでのものと違ったものになっていくのではないでしょうか。人間の兵士の代わりに、ロボットが兵士として登場してくるでしょう。いや、もうその初期の動きが始っています。

そうなると民族問題なども、イスラム族のほかに、

ロボット族、

死なない兵士、

兵士のいない戦争

など、二十一世紀の、政治、外交、戦争、経済……は見当もつかない世界へ、展開していくのではないでしょうか。

かって地球上の動物は、大古から類人猿から人間へと変ったように、二十一世紀は、人間からロボットへ変ったーという、歴史になるのではないでしょうか。

これは人類の歴史というよりも、地球の歴史ですね。地球自身から言えば、地球の上には必ずしも「人間」が住んでいる必要はないわけです。また、太古のように巨龍でも、またロボットでも何でもいいわけです。これからの歴史は過去と同時に未来への予測が必要です。

以上駄文を弄しましたが、ますますの御活躍をお祈りいたします。

戊辰東北戦争②
輪王寺宮公現法親王

千坂精一

一、

慶応四年（一九六八）二月十二日、すでに政権を朝廷に奉還し将軍職を辞任した徳川慶喜が江戸城を出て徳川家菩提寺の上野東叡山寛永寺に入り、大慈院葵の間で謹慎したときの管領者は輪王寺宮公現法親王であった。輪王寺宮というのは四代将軍家綱の代の明暦元年（一六五五）ごろここ東叡山寛永寺にいた後水尾天皇の皇子守澄法親王に賜った称号である。

輪王寺は下野国（栃木県）日光と江戸上野にある天台宗の寺で、守澄法親王はこの東叡、日光両山の総轄者になった。

その後十代から十二代の三代はみな有栖川宮家出身の親王が法親王になっている。

輪王寺宮公現法親王は弘化四年（一八四七）二月十六日伏見宮邦家親王の第八子に生まれた。

生母は女房堀内信子だが鷹司景子を義母とした。

翌年二月に明治天皇の祖父仁孝天皇の猶子（養子）になると同時に青蓮院宮の御付弟（弟子）になった。

その後、嘉永五年（一八五二）六歳のときにこんどは梶井宮の御付弟になり、八歳から菜食精進をはじめた。

八歳になった安政元年（一八五四）こんどは輪王寺宮の御付弟になり、親王宣下があって名を能久と命名したが、同時に勅命により得度して法諱を公現と改めた。

元治元年（一八六四）十二月、十八歳のとき親王の位の第一等を授けられ、天台宗の寺の中心比叡、東叡、日光三山を総轄する輪王寺宮になった。

それから三年後の慶応三年（一八六七）二十一歳のとき、長らく病臥していた十二代の慈性法親王が引退したので五月に公現法親王が輪王寺宮十三代を継承した。

そして、戊辰戦争に巻き込まれてしまったのである。

江戸幕府の棟梁十五代将軍徳川慶喜が大政を奉還して将軍職を辞任しているのに朝廷は有栖川宮熾仁親王を東征大総督に任命して錦旗を与え、兵を率いて京を逢発させた。

旧幕府側はこの朝廷側というより薩摩と長州の強引な出方におどろき慌てて、恭順して謹慎している慶喜が蒙った朝敵の汚名を雪ぐべく前将軍家茂に降嫁した仁孝天皇の第八皇女和宮親子内親王に縋って征討取り止めを嘆願してもらったが、降嫁まえまで宮の婚約者であった有栖川宮は申し入れを承服しなかった。

あとは皇族の血筋といえば輪王寺宮だけであった。

徳川家一門の御三卿田安徳川慶頼をはじめ一橋、清水家の当主が入れ替わり立ち替わり寛永寺へ赴いて懇願したが、宮の意を汲んだ側近の執当職覺王院義観がいずれからの申し入れも素っ気なく拒絶した。

寛永寺は徳川将軍家の菩提寺であるから慶喜が江戸城を出て大慈院で謹慎することについて否やは言えなかったが、宮は慶喜を嫌っていた。

それというのは、これまで将軍家は代々墓所である寛永寺に礼を尽くしてきていたのに、慶喜は水戸の出身であるからか軽んじているように思っていた。

また慶喜の父徳川齊昭は、領内に廃仏令を布いて多くの寺院を破却し、僧侶を追放したともきいている。

だから慶喜にもその傾向があるのだろうと不信感を抱いていて、心よく思っていなかったのだ。

しかし宮は、朝廷軍が江戸に侵攻すれば多くの町民たちが戦火に巻き込まれて犠牲になるだろうことを憂慮していた。

慶喜の恭順が確認されれば朝廷軍は名分を喪い江戸攻略ができなくなるはずである。

（朝廷に慶喜の謝罪を認めさせれば、江戸城と市民たちを救うことができるのだ）

そう考え直した宮は、私情を捨てて京へ行くことを決心した。

（よし、行こう）

宮はそう決意すると、二月二十一日に京へ出発した。

途中、駿府（静岡県）で朝廷の東征軍と出会った宮は、駿府城で有栖川宮大総督と公卿参謀正親町公董に面会した。

その席で宮は、徳川慶喜の助命と江戸の攻撃中止を朝廷へ直訴に出向くことを伝え、有栖川宮にも協力してくれるよう懇願した。

しかし、有栖川宮は、

「慶喜の朝廷に対する叛逆は明白である。その大罪に対して追討の勅命が下され兵を江戸へ向けている。いまごろになって助命嘆願されてもどうにもならない」

そう冷ややかに言うと、

「上洛は愚かである。即刻江戸へ戻られよ」
それは有無を言わせぬ命令口調であった。宮はすげなく言われてやむなく席を立ったが、
（おなじ皇族同士であるのにあの非礼はなんだ）
そう有栖川宮の傲岸な態度に立腹すると同時に屈辱を感じた。
（あの態度はゆるせぬ）
そう心のうちで叫んだ。
宮は惨めな思いを抱きつづけたまま江戸へ戻ったが、有栖川宮の冷淡な態度が口惜しく、
（あの屈辱は生涯忘れまい）
そう固く心に誓った。

二、

三月十三日の西郷隆盛と勝安房との会談で江戸開城の諒解が成立すると、四月十一日に慶喜は蟄居していた上野寛永寺奥の間を出て常陸（茨城県）水戸の生家へ退去した。
同時に歩兵奉行だった大鳥圭介は旧幕府軍を率いて江戸を去り、海軍副総裁だった榎本武揚ら海軍は安房（千葉県）館山方面へ脱出した。
この時点で江戸に残っていたのは二月に結成された彰義隊だけであった。
彰義隊は急造の集団である。
二月十二日に慶喜は謹慎の意を表するために江戸城を出て上野の東叡山寛永寺に向かった。
朝廷軍が三月十五日を江戸城総攻撃の日と定めて東上してくると伝えきいて、
「慶喜公と江戸城を守らなければならない」
そう決意した御三卿一橋家の家臣や幕臣たちが家康の生母於大の方の墓所小石川の傳通院で会合した。
そして二月二十三日、浅草本願寺（現東本願寺東京別院）に百数十名が参集して、
「慶喜公は長年尊王の志を持っていたが君側の奸のために朝廷の怒りを得て上野寛永寺において恭順中である。その冤罪を晴らそう」
そう一致団結して結成された。
そして隊名は義を彰すとでもいう趣旨であろうか〈彰義隊〉と命名された。
つづいて組織づくりに入り、幹部は、
頭取　澁澤成一郎
副頭取　天野八郎
幹事　本多敏三郎
伴門五郎
須永於菟之輔
に決まった。
頭取になった澁澤成一郎は幕府の陸軍奉行支配調役で文久三年（一八六三）従弟の榮一とともに御三卿一橋家の家臣になり、水戸徳川家から養子入りした慶喜に仕えた。
榮一は失敗したものの尊王攘夷運動に加わり高崎城攻略を企てた熱血漢であったから、成一郎に同意して彰義隊に入り従兄を補佐して副頭取ぐらいにはなったであろうが、じつは前年慶喜の実弟でおなじ御三卿の清水家に養子入りした徳川昭武に随行して欧州へ出掛けていて不在だった。
彰義隊結成の噂をきいて参加しようと馳せ参じた者が多数いて日毎に増えていった。
そして三月中旬、恭順中の慶喜を直接守護すべく浅草本願寺から上野東叡山に集結した。
寛永寺の寺域は本願寺よりかなり広いし、それに上野の山の上にあるので、立て籠もるにはうってつけの地形であった。
ところが三月十三日の勝、西郷の会談で江戸開城が諒解され、四月十一日に開城されると寛永寺に蟄居していた慶喜は実家の水戸徳川家へ帰ってしまったので、慶喜警護を意図して結成された彰義隊は必要がなくなったとして澁澤らの一橋家臣を中心とした派は解散を主張したが、将軍家の墓所寛永寺を護ると主張する天野らと対立し、結局両者は澁澤の
「決して彰義隊と敵対しない」
ことを条件にして分裂し、澁澤成一郎は新たに〈振武軍〉を結成した。
この振武軍は、
「江戸を戦火に晒してはならない」
とする澁澤の主張で遠く離れた飯能（埼玉県）まで退いたところで朝廷軍と出会い、合戦に敗れて四散してしまった。
いっぽう天野八郎らの彰義隊は慶喜が水戸へ去ったあとは将軍家の墓所寛永寺を護衛することにしたのだが、ということはつまり東叡山を管領する輪王寺宮公現法親王を警護することにほかならず、宮が彰義隊を指揮しているかのような恰好になってしまったのだが、宮は将軍家に忠誠を誓うその彰義隊と命運をともにしても悔いはないと思うようになっていった。
そこには立場は違ってもおなじ皇族であるはずなのに、傲慢な態度で朝廷軍の東征大総督であることをひけらかして屈辱を与えた有栖川宮熾仁親王のとった非礼への深い憎しみが潜在していた。

三、

大総督府では彰義隊が寛永寺と輪王寺宮の警護を目的としているからには、輪王寺宮を東叡山から去らせなければ彰義隊は解散しないだろうと踏んで武家の下参謀や公卿の参謀が宮を京へ行かせようとして入れ替わり立ち替わり説得に出向いたが、宮は、

（いまさらなんだ）

と頑なに拒んで動かなかった。

宮が東叡山を去らなければ彰義隊は解散しない。

江戸城を掌中にしたものの市中を完全占拠するためには彰義隊を消滅させてしまう以外に方法はなかった。

総督府内では連日協議がつづけられた。

そして、ついに

「武力をもって殲滅する以外に方法はない」

とする結論にいたった。

西郷ト参謀は、たまたま総督府にきていた幕府の第二次長州征討のおりに非凡な才能を発揮して有名を馳せた兵術家の長州藩士大村益次郎（村田藏六）に彰義隊討伐を任せた。

この当時上野の山の周辺には八つの門があった。

入口の表門にあたる正門は、江戸城から将軍が寛永寺に詣でるときに通る御成街道（現在の中央通り）をきて、不忍池を左にして上野公園へ入って行くところ（現在西郷隆盛の銅像があるあたり）にあった黒門を中心にして、浅草方面の東側に向いて新黒門、車坂門、屏風坂門、坂本門、そして西側の不忍池に面して穴稲荷門、清水門、谷中門である。

五月十三日、彰義隊は大監察の山岡鐵太郎に文書で、

「われわれは朝廷軍に抵抗する考えはないが朝廷軍が敢えて攻撃してくる場合はやむなく断乎としてこれに応ずる決意である」

ことを伝えて、徹底抗戦の構えを固めた。

いっぽう朝廷軍のほうは、彰義隊をこのままにしておいて手を焼いているように思われては奥羽や越後の諸侯に対し示しがつかないということになって、ついに大村は討伐に踏み切ることに決意を固めた。

この年は梅雨期とはいえそれにしても雨の日が多く、それも豪雨がつづいて河川が増水し堤防が決壊する災害が起こっていた。

大村が戦闘開始を定めた五月十五日は早朝から激しい雨が降りつづき、それに風も加わるという最悪の天候になった。

八ツ半（午前三時）大村は攻撃軍を江戸城大手門前に集結させた。

上野の山に立て籠もる彰義隊を正面から攻撃するため御成街道を表門の黒門へ向かったのは西郷隆盛が指揮する薩摩兵であった。

黒門口の彰義隊は保塁を築き、砲を据えて守りを固めていた。

広小路の前を横切っている不忍池から流れ出た忍川に架かっている三橋（三つ架かっていたのでそうよんだ）を渡り黒門口に到着した朝廷軍とのあいだで六ツ半（午前七時）に戦闘の火蓋がきられた。

朝廷軍が上野広小路の松坂屋付近に据えたアームストロング砲は射程距離が長く、対する彰義隊の旧式砲は射程距離が短かいので、双方の威力に格段の差があった。

大村は上野の山を包囲するときわざわざ彰義隊にわかるように根岸、日暮里方面をあけておいた。

かならず勝つ自信があったので、完全包囲すれば逃げ口のない彰義隊は窮鼠猫を噛むの譬えどおり必死に抵抗するだろうからこちらの被害も大きくなってしまうと考えてのことであった。

表門の黒門口が陥ちたのは九ツ半（午後一時）すぎであった。

踏み堪えられず総崩れになって正門の黒門口を突破されたことは、彰義隊の敗北を意味していた。

黒門口の攻防は双方の主力同士の交戦であったから、彰義隊にしてみれば死闘のすえに突破されて敗北を喫したことになる。

七ツ半（午後五時）、十時間に及ぶ戦闘は事実上終了した。

彰義隊と朝廷軍とのあいだで戦闘が開始されたころ輪王寺宮公現法親王はいつものように寛永寺の本堂で勤行の読経をしていた。

午後になると周辺が騒がしくなってきた。

戦闘に敗れた彰義隊員たちが犇き合って大村があけておいた根岸口方面へ落ちて行くのだ。

そんな惨状を目の当たりにした側近の竹林坊光映たちが宮に一刻も早く寛永寺を離れることをすすめた。

京へ避難せず上野の山に止まったことから彰義隊に担がれた恰好になってしまい、朝敵の棟梁と見做されて処罰される対象になってしまっていた。

だからといって、いまさら東征大総督の有栖川宮に降って受けるであろう屈辱にはとても堪えられない。

宮の大総督への恨みは骨髄に徹していた。

（東征軍の探索を晦まして安穏な地へ参ろう）

そう決断すると側近のすすめを受けることにした。

安穏の地といっても江戸以南はすべて朝廷軍の支配下にあり、北方も常陸の水戸まではすでに支配されていてそれより以北にしか身のおきどころはなかった。

輪王寺宮は新天地を求めて行動を開始した。

彰義隊が勝手に上野の山に立て籠もったばっかりに隊を取り仕切る棟梁と見做されて朝敵にされてしまい、逃避しなければならなくなった矛盾に悩まされながら、宮は側近たちに急かされて出奔の準備を急いだ。

法衣を木綿の衣服に着替えて網代笠を被った姿に変装して寛永寺を出た宮は、取り敢えず筆頭家臣麻生將監の中根岸の居宅に案内された。

その途次で宮の一行と気づいた彰義隊員たちからたびたび護衛を申し出られたが、そのたびに寺僧の浄門院邦仙と常應院守慶が目立つことを理由に断りつづけた。

麻生宅で休息しているあいだに竹林坊たちが逃避経路

をあれこれ検討して、とりあえず三河島の出入りの植木職人宅へ行き昼食をとって休憩し、その日のうちに梅雨期の長雨による出水で冠水してしまった田圃を小舟を仕立てて上尾久村の名主江川佐十郎宅まで行き、そこで休息して様子を探らせた。

翌十六日、長雨は上がった。

探索の結果浅草方面は異常なしとのことだったので急いで出立し、根岸、箕輪、入谷を経て合羽橋の東光院（西浅草三丁目）の院主幸宥を頼った。

幸宥は宮が着くまえに種々取り計らってくれていて、万事自証院の亮榮院主に一任するようすすめてくれた。

東光院に一泊した宮の一行は、翌朝東征総督府の詮議厳しいなかを潜り抜けて市ヶ谷の自證院（別名瘤寺）へ辿り着いた。

ここは尾張徳川家の祈禱寺であった。

宮が休息を終えたころを見計らって挨拶に出た亮榮院主は、宮を護衛する人物として榎本武揚を名指しした。

榎本は旧幕府の海軍副総裁で、江戸開城のとき武装解除に応ぜず軍艦八隻を率いて脱走し、現在品川沖に碇泊させているが、薩長の海軍力では歯が立たず放任されているという。

宮としては確かに庇護してくれさえすれば誰であろうと異存はなく、ましてや朝廷側は手も足も出ないときけば頼もしい限りであった。

宮の承諾を得た亮榮院主はさっそく伝を求めて榎本との交渉を開始した。

榎本にしても幕臣の身である立場からして将軍家の菩提寺を管領する高貴な宮を匿う役目に異存はなく、申し入れをふたつ返事で引き受けてくれた。話はとんとん拍子にすすんだものの、さて品川沖に碇泊している艦船までどうやって行くかで躓いてしまった。

あれこれ思案投げ首の末に到達した結論というのはこうであった。

品川沖の艦船まで回船問屋に伝馬船で送ってもらおうというのである。

回船問屋の伝馬船なら沖の船まで乗客を送るのに不思議はない。

数ある回船問屋の中から選び出されたのが鉄砲洲で紀州徳川家の御用を勤めている松坂屋の星野長兵衛であった。

自證院へ呼び出して事情を説明し快諾を得たあと、長兵衛を交えて実行の具体的相談のなかで、万一検察などがあった場合を考慮して身分を隠して変装してもらうことになった。

だが、これがまたあれこれと案が出て選択するのに手間どった。

結局、星野長兵衛が懇意にしていて紀州徳川家へも出入りを許されている医師西川玄仲が信用できる人物として選択され、その門弟になりすますことに決定した。

二十五日の夕刻、宮はかねての打ち合わせどおり帷子羽織に角帯を締め雪駄履きの出立ちで玄仲の門弟になりすまし、師玄仲の供をして自證院を出ると途中なにごともなく鉄砲洲の松坂屋に到着した。

そして、用意された伝馬船に乗って品川沖に行き碇泊中の輸送船長鯨に無事乗船した。

その夜、挨拶にきた榎本武揚から行程の説明を受けた。

二十六日朝、長鯨は錨を上げ旗艦開陽に曳航されて品川沖を離れた。

木更津沖を過ぎて浦賀水道をすすみ湾口を出た長鯨は館山沖で停止した。

ここで曳航索が解かれて開陽に見送られ、長鯨は自力で外洋を北上していった。

輪王時宮公現法親王は、こうして無事に江戸を脱出した。

四、

五月二十八日朝、長鯨は常陸国平潟港（北茨城市平潟町）に着いた。

平潟というのは茨城県の北端福島県との境にあって、当時東廻り航路の重要な寄港地として栄えていたので、幕府は陸奥棚倉（福島県東白河郡棚倉町）十万石の譜代大名阿部氏の所領に含ませて陣屋をおかせ、廻船の取り締まりをおこなわせていた。

輪王寺宮がこの平潟へ上陸したとき、棚倉領の飛び地で手薄ということで仙臺、米澤、中村、泉、湯長谷・平など近隣諸国からの派兵をたのんで海岸線を固めていた。

そこへ報らせを受けた肥前（佐賀県）唐津領主小笠原長行の子息繁之助が家臣とともに兵を引き連れて駆け付け、宮は小笠原が泉から用意してきた駕籠に乗って海岸沿いに北へ向かった。

長鯨に同乗してきた彰義隊の残党たちも随行した。

奥羽の諸侯は江戸以西の諸侯が朝廷軍の支配下におかれているのとは対照的にそれぞれが思いのままに行動していたのでもはや危険はなく、西川玄仲の門弟を装っている必要はなくなったが巷間に宮の上陸の噂が広がらぬよう配慮して念のため医師すがたのまま将軍の御典医ということにした。

江戸からずっと随行している家臣は鈴木安藝守、關右京、それに安藤直記の三人だけであり、それに寛永寺の僧邦仙と守慶であった。

執当の覺王院義觀は追っ付け現れるであろうがまだ到着していなかった。

宮の一行は海岸線に沿って北上して行き、關田村、中田村、植田、新田を経て釜戸川を渡り泉領の甘露寺村（玉露）に入って宿所の慈眼院に到着した。

そこには泉の領主本多忠紀の家臣たちが待っていて身

辺の世話をしてくれ、その夜は慈眼院で江戸からの長旅の疲れを癒した。

翌日は泉領主から贈られた引戸つきで座布団が敷かれている駕籠に乗って出発した。

警護についた泉領の家臣たちに村はずれからは湯長谷領の家臣たちも加わって厳重に宮を守り、内陸に向かって藤原川を渡り湯本村へ入った。

平潟港へ上陸してからの近隣諸国の扱いは好意に満ちたものであった。

ここで昼食休憩をしてから尼子橋を渡り、胡摩澤を経て夕刻磐城平に入り、飯野八幡宮に宿泊した。

ここで老中を罷免されて隠居し、永蟄居中の安藤對馬守信正と対面した。

そのあと會津を目指して出立し、好間川沿いに北上して合戸村、渡戸村を経て山道を辿り、長澤峠を越えて上三坂村に入り、夕刻田村郡の新町に宿泊した。

六月二日にはふたたび険しい山道をすすみ、上大越、船引を経て夕刻ようやく三春に着いた。

翌三日はまたまた山間部を行き、土棚で昼食して阿武隈川を渡り、夕刻安達郡本宮に到着した。

いつ着くとも判らぬのに仙臺の伊達慶邦の家老片平大丞が兵を率いて待ちつづけ出迎えてくれた。

これは仙臺があげて宮を歓迎していることの証であって、宮は当主伊達慶邦の厚情に感謝した。

四日はさらに西へ向かい、横川からは山道が険しくなりようやく中山峠を越えて道が下りになってきたころ遙か前方に湖水が見えてきた。會津への入口にある猪苗代湖である。

湖畔へ下りた一行は湖に沿って進み、夕刻湖畔の壺下宿へ入った。

そこには元老中の二人備中松山の板倉伊賀守勝靜と肥前唐津の小笠原壹岐守長行が待っていて拝謁を願い出た。

ここまでくると平潟港上陸以来通り道の各国領主の家臣が宮の護衛に立ってその数が千人にも垂んとしてきた。

宮はここで護衛の必要なしと告げてそれぞれの国許へ帰させた。

五日は湖面を左に見て長瀬川を渡り猪苗代に到着した。

宮は城代家老の出迎えを受けて猪苗代城に入った。

壺下宿から同行した板倉、小笠原も入城し、會津領主松平容保の使者も到着して夜具や身の廻りの品々の献納があった。

平潟に上陸してから七日が経っていて、明日は愈々會津若松の鶴ヶ城到着であった。

六月六日、宮の一行はさらに西へ進み、會津若松に近い蚕養町の蚕養神社で昼食を摂った。

宮はその日の午後領主松平容保をはじめ家臣たちの出迎えを受けて鶴ヶ城に到着した。

容保との対面の席には板倉、小笠原も正装して着座した。

対面のあと、宮は邦仙、守慶と別室へ移って休憩した。

そこへ寛永寺を出るとき姿を晦ました執当の覺王院義觀が姿を現わした。

義觀は、大総督府から輪王寺宮の江戸城登城要請や彰義隊の解散命令などを宮に相談せず独断で拒否したことが宮の意志と誤解されて、

（最早話し合いの余地なし）

と総攻撃される結果を招いてしまい、宮の立場を悪くした責任をとって宮の周辺から姿を消したのであった。

宮から離れた義觀は日光へ行き、僧功徳院とともに會津へ逃れてきたのだった。

宮は義觀の立場を考えてその所業を宥免した。

赦された義觀は以前のように隣室に控え、邦仙と守慶は義觀を執当と仰いで仕えた。

輪王時宮は會津に十日ほど滞在していたが、そのあいだに大変なことが起こった。

六月十六日平潟港に軍艦三隻が入港して薩摩を中心とする朝廷軍が上陸してきたという急報が届いた。

さきに仙臺へ上陸した朝廷軍の応援部隊で彰義隊の残党狩りを兼ねてやってきたのである。

十九日夜には二次の軍勢が上陸してきて兵力は千五百になった。

さらに三、四、五、六次とつづいて上陸してきて続々兵力を増強していった。

そして平潟に奥羽征討総督府をおいた。総督四條隆謌、参謀は渡邊清左衛門である。

応援部隊は泉、湯長谷、平、守山、三春、二本松、中村と各国を次々に征服していった。

いよいよ會津へ迫ってきた朝廷軍を回避するため、宮の一行は六月十八日に二週間ほど滞在した會津を発って米澤へ向かった。

宮は領主松平容保進呈の駕籠に乗り、数十名の會津家臣に警護されて若松を出立した。

塩川（喜多方市）で昼食を摂り熊倉を経てその日は大塩で宿泊した。

翌十九日は山道をすすみ、樋峠を越えて国境の檜原峠で米澤の家臣たちが警護を交替し夕刻綱木（米澤市）に入り宿泊した。

二十日に綱木から關村を経て船坂峠を越え米澤の城下へ入った。

照陽寺（米澤市城南五丁目）で病中の領主齊憲の代理として嫡子茂憲と上杉の家老たちの出迎えの挨拶を受けて休息をとったのち、茂憲の先導で米澤城へ入った。

二十一日に仙臺から大立目徳衛が米澤に到着し、翌二十日仙臺から朽木五左衛門と横田官平、會津から小野權之丞、安部井政治が到着し、米澤の片山仁一郎、木滑要

人の使者が拝謁して、輪王寺宮に蔵王山麓の白石城（宮城県白石市）へ赴かれるよう要請した。

白石城には仙臺から移した奥羽越諸侯の会議所があり、そこへ宮を迎えることで大義名分が立つという計略であった。

承諾した宮は六月二十七日に米澤を出立、糠野目をすぎて高畠で昼食をとり、二井宿に入って宿泊した。

翌日は二井宿峠を越えて湯原に着き宿泊した。ここが白石へ通ずる七ヶ宿街道（現国道一一三号線）の入口である。

二十九日、湯原から渡瀬、下戸澤を経て夕刻白石に着いた。

城主片倉小十郎邦憲が迎えに出ていて城内へ案内した。

七月一日、宮は仙臺からの迎えの家臣の案内で出立すると奥州街道を北上していった。

大河原を経て夕刻岩沼へ到着し宿泊した。

翌朝仙臺の家臣たちに護衛されて増田を経て中田に入ると、そこに領主伊達慶邦と養子宗敦が待っていて家臣たちと出迎えた。

仙臺城下に入った宮の一行は宮町の東照宮別当寺眺海山仙岳院に入り宿泊した。

さきに仙臺へ上陸していた奥羽鎮撫軍は二手に分かれ、澤副総督と大山下参謀は庄内領（山形県鶴岡市）の酒井忠篤討伐のため奥羽街道と陸前浜街道が分岐する宿場町岩沼（宮城県岩沼市）から新庄（山形県新庄市）にいったし、九條総督も伊達慶邦の留意を退けて盛岡領主（岩手県盛岡市）南部利剛討伐に出陣して仙臺を留守にしていた。

宮家の仙臺入りははじめてのことだったので丁重に迎えると、異例ながら家老の但木土佐を接待役に当てた。

宮が仙岳院で休息しているところへ領主伊達慶邦が家老たちを引き連れて訪れ、神妙な態度で思いも寄らぬ上申をした。

「現在奥羽地方に進撃してきている朝廷軍は薩摩、長州が幼帝（明治天皇）の御名をかりて兵を起こしたもので、幕府を倒して政権を握ろうとする野望を抱いている。われら奥羽列国は朝廷から薩摩、長州勢を追い払うため一致団結して徹底抗戦の意志を固めております。思い起こされまするのは源平の合戦で後白河天皇の皇子以仁王が平家追討の令旨を発し、これを得た源頼朝が挙兵して平家を滅亡に追い込んだ故事に倣い宮より薩長を追討せよとの令旨を戴きますれば奥羽諸国は挙って抗戦いたしますゆえ何卒御令旨を御下しなされますようお願い申し上げ奉りまする」

長広舌のあと慶邦と家老たちは平伏するとそのまま退出した。

宮は慶邦らが下がると、奥座敷に籠もりながいあいだあれこれ考えをめぐらせた。

このごろ届いた寛永寺宿坊からの飛脚によれば、江戸を脱出するときに世話になった浅草合羽橋東光院の幸宥院主や、市ヶ谷自證院の亮榮院主、それに鉄砲洲の廻船問屋松坂屋の星野長兵衛などが大総督府の執拗な追求を受けているという。匿ったであろう嫌疑で苛酷な取調べを受けてのことで、最早脱出径路はわかってしまっているようである。

それに奥羽へ向けた朝廷軍の後続部隊が平潟港に上陸しているから、會津、米澤、仙臺へ向かった足取りも把握しているであろう。

これらのことから宮は自分に対する捜索が徹底していることを思い知らされると同時に、最早この奥羽の地以外に身の置き所がなくなってしまったことをあらためて自覚した。

皇女和宮と自分に対する有栖川宮のとったあの高慢で威丈高な態度は断じて許せないし、たとえ猶子であろうとも幼帝の叔父にあたる身として宮家出身の親王に屈服することなど無礼であり断じてできない。

それに引きかえ奥羽の諸侯はいずれもあたたかく迎えてくれている。

宮はあれこれ思案したすえに、奥羽の諸侯が望むなら列国同盟の盟主になってもいいという結論になっていった。

そう決断すると、宮は覺王院義觀を呼び出して伊達慶邦から頻りに使者がきて要請している『令旨』の草案つくりを命じ、義觀は宮の意を汲んで文案をつくった。

宮はそれに加筆訂正して『令旨』を書き上げた。

そこには薩摩を薩賊と非難し、幼帝を欺き公卿を脅して幕府を威圧させ、江戸の神社仏閣を破却したその暴挙に対して痛撃を与えるとの憤懣遣る方ない思いが籠められていた。

宮は署名して書き上げると、その『令旨』を持って十日に仙岳院を出て青葉城に入り、領主伊達慶邦に与えた。

別室にさがって披見した慶邦は、涙を流さんばかりに感激した。

五、

宮は十二日に仙岳院を出立すると、途中岩沼の竹駒寺で一泊して翌日阿武隈川、白石川沿いに船迫、大河原を経て夕刻白石に到着し、奥羽越諸国同盟の各国重臣たちが列座して迎えた席で幹事役を努める仙臺の筆頭家老が宮より『令旨』が下賜されたことを告げて読み上げ、一同平伏して拝聴した。

これで宮が軍事を総括する同盟軍の盟主に就任されることを承諾された『令旨』により同盟側は薩長攻撃の大義名分を得て徹底抗戦の決意を固めた。

幼帝の叔父にあたる宮を盟主に戴いたことで朝廷側に立ったことになり、刃向かう者は皆朝敵という論理が成

立した。
だが、米澤の上杉が軍勢を長岡の救援に向けて一旦は城を奪回したものの再度奪われてしまい撤退を余儀なくされたのを契機にして、土佐の山内容堂をはじめとする西国の姻戚衆から盛んに恭順を勧められてついに同盟を離脱すると当主齊憲が謹慎してしまった。
宮を盟主に戴いた仙臺の伊達にとって米澤の上杉は正に無二の盟友であり、その上杉が同盟を離脱したことは青天の霹靂であった。
上杉に離脱された伊達もこれ以上の抗戦は無益と悟って九月十五日に謝罪降伏に踏み切った。
そうなると、伊達、上杉あっての奥羽諸国同盟の盟主である輪王寺宮にとっても単独では如何ともしがたく、伊達慶邦のすすめを受けてついに九月二十二日陸前亘理（宮城県亘理郡亘理町）にいる平潟口総督府の四條隆謌総督宛に『帰順書』を届けさせた。
奇しくもこの日、最後の砦だった會津鶴ヶ城も陥ちて当主松平容保が謝罪降伏した。
奥羽越諸国同盟は奥羽二十五箇国、越後六箇国から成る三十一箇国の結束であったが、広範囲に散在していてせいぜい二、三箇国しか連携できず、『孫子の兵法』で戒めている戦力の逐次投入状態になってしまい、敢えなく敗北を喫してしまったのである。
十月四日、総督府から宮の行先について指示があった。
大総督府のある東京へ行き、麹町山王社別当所の觀理院を指示された。
随行者は側近の寺侍、寺僧、医師、中間ら三十名ほどに決められた。
乗物は八人で担ぐ輿と交代要員、それに長持などで行列を組む質素なものであった。
五日、仙臺から宮に三千両が献上された。
そして十二日、宮の一行は仙臺を出立して東京へ向かった。
家老が十名ほどの家臣を連れて青葉城下のはずれまで見送りにきた。
その日は岩沼を経て槻木の宿で泊まった。
十三日は阿武隈川に流入している白石川沿いに進んで船迫、大河原を経て夕刻白石にいたり宿泊した。
奥羽越列国同盟の盟主として在城した思い出がのこる白石城に別れを告げた宮の一行は齊川、越河を経て夕刻桑折の宿場に入り、本陣に宿泊した。
この先は北上してくる朝廷軍でどの宿場も埋まっている状態だと知らされて、三日間足止めされた。
十七日になってようやく出立し、摺上川を舟で渡って瀬上に入りその日は福島の本陣に泊る。
翌日は雨になって足止めさせられた。
十九日はちょうど二本松で昼食休憩になった。
ここはまだ戦塵に塗れたままのすがたが残っていて、

少年隊の悲惨な最期が思い起こされた。
城は天守閣まで黒く煤けていて、落城のあとが生々しく残っていた。
夕刻本宮に入り本陣に宿泊したが、またも北上の朝廷軍に阻まれて逗留を余儀なくされた。
二日目にようやく出立できて、郡山、笹川を経て夕刻須賀川に辿り着いた。
すすむにつれて北上して行く朝廷軍の兵が多くなっていき、各地の旅籠はほとんどが占められていて一行は進むことができずに逗留することが多くなっていった。
須賀川で長逗留させられ、三十日にようやく出立できたので急ぎ白河を過ぎて宇都宮、雀宮を通り抜けてようやく小金井宿にいたり宿泊した。
月があらたまって十一月朔日、小山、間々田を経て夕刻古河に着いた。
そこには先行させた寺僧らが宮の到着を待ち侘びていた。
その寺僧の報告が宮をおどろかせた。
「大総督府は宮の東京入りを許さない」
と通告してきたというのだ。
宮の麹町山王社別当所觀理院入りを大総督有栖川宮が許可しないということだ。
寛永寺の再建も許されないというどこまでも執拗な仕打ちであった。
どうなるかはわからぬが、とにかく東京へ入る千住までは行こうということにして古河を出立すると、中田宿を過ぎて舟で利根川を渡り、栗橋の関所を通って幸手で休息し、さらにすすんで杉戸、粕壁を経て夜になって越谷宿に入り本陣に宿泊した。
三日、越谷宿を出立すると草加を経てその日の午後に東京の入口千住宿に着いた。
待っていた大総督の使者に、
「この地にとどまり指示を待て」
と言われて千住宿に逗留させられた。
翌十一月四日、大総督府の軍監が従兵を伴ってやってきて宮と面接し、
「朝廷よりの命令を伝える」
そう前置きして、
「輪王寺宮、大義を喪いし廉により伏見宮家預けとする。よって直ちに京へ赴き謹慎なさるべし」
と通告した。
宮は否応なく承諾するより仕方なかった。
こうして宮は生家で謹慎することになった。
ただし、京へ赴くのは勾留されている囚われ人を護送するということであるから華美な行列は許されず、随伴は筆頭家臣の麻生將監と鈴木安房守病死の後任で側役の山本主膳の二名と小者一人という寂しい供回りで、乗物も八人で担ぐ贅沢な輿などは謹慎者の身で以ての外と二

人担ぎの普通の駕籠に変えられてしまった。
皇族であり、寛永寺の管領に対してあまりにも惨めで非礼な扱いであったが、宮は有栖川宮の恥辱命令に堪え忍ばねばならなかった。
大総督府の兵十名が駕籠の周囲を固める行列をつくると、軍監の先導で一路京を目指して急ぎ出立した。
箕輪、日暮里、根岸、金杉あたりまでくると、上野の山が望見されたが、戦火で焼け落ちた寛永寺の宿坊は見えなかった。
日本橋から東海道へ入り、品川をすぎて川崎宿で泊まった。
翌日は小田原を経て箱根の山を越えた。
軍監が宮に、
「有栖川宮が六日に東京城を出て京に向かっている」
ことを告げた。
奥羽越を鎮定した有栖川宮は、東征大総督の任を解かれて京へ戻る凱旋の旅であった。戦犯の宮とおなじ東海道を意気揚々と進んできているのである。
有栖川宮がまた追い掛けてきているような気がして、宮はその執拗さに思わず唸った。
宮の駕籠は恰で有栖川大総督に追われるようにして富士の高嶺を右に見ながら九日には駿府を過ぎた。
そして、十五日には宮宿（熱田）から舟で七里の海を渡って伊勢国桑名に着いた。
桑名は會津松平容保の実弟で兄京都守護職を援けた所司代松平定敬の所領地であった。
會津落城後は榎本武揚の軍艦に同乗して箱館へ行ったという定敬のことが思い出された。
翌日も早朝に出立して四日市、石薬師、庄野、亀山、関、坂下、土山、水口、石部、草津の宿々を通り越して通常二十日以上かかるといわれているところを十五日間で京へ三里と迫った大津に着いた。
大津で暫時休息して夕食をすませるとすぐさま出立することになり、夜道を急いで蹴上（京都市東山区）から住民たちがすでに寝静まっている京の町へ入っていった。
宮の駕籠が御所に近い今出川下ル（上京区）の伏見宮邸に着いたのは九ツ（午前零時）であった。
すでに連絡を受けていたらしく、真夜中というのに家令が待っていて宮と麻生、山本の三人を屋敷内に入れてくれた。
家令は事情をきかされているのであろう無言で深く一礼しただけで提灯をかざして先導すると、屋敷内へ案内していった。
広い庭の奥へと導いて、母屋からかなり離れて孤立している小さな家に招じ入れると、家令はそこでまた無言で一礼し踵を返して去っていった。
部屋にはすでに寝具が調えられていた。
宮は麻生と山本が別室へさがると寝衣に着替えるのももどかしく床に就いた。
柔らかい蒲団に身を横たえると、長旅の疲れがどっと出て深い眠りに落ちていった。

六、

翌日は宮が到着したことがわかっているはずなのに父君はともかく家令すら顔を見せなかった。
慶喜の助命嘆願はまだいいとしても、寛永寺に籠もって彰義隊と行動を共にしたことや、奥羽越の列国同盟の盟主として反抗の構えを示したことは朝敵の行為にほかならなかった。
皇族でありながら獅子身中の虫になった子の親として申し訳が立たぬ父君の苦悩を思うと、宮は居ても立ってもいられずひたすら謹慎をつづけた。
一年ほど経った明治二年（一八六九）十月四日、めずらしく家令がやってきて、
「お屋敷のほうへお出で下さるように」
伝えられて、はじめて謹慎所を出た。
座敷には隠居して剃髪し仏門に入った父君の禅楽親王が待っていて徐ろに朝廷の『御沙汰書』を読み上げた。
そこには、
「謹慎を解き、伏見宮に復帰し、廩米三百石を賜う」
旨が書かれていた。
朝敵輪王寺宮公現法親王から親王宣下のときに命名された能久親王に戻ることができたのである。
宮は涙が溢れて嗚咽を抑え切れず、顔を上げることができなかった。
宮の謹慎が解かれたことを知った東京在住の兄君東伏見宮嘉彰親王が、宮が京にいては肩身が狭かろうと案じて上京をすすめてくれた。
宮は父君の許可を得るとさっそく東京へ行き濱町の東伏見宮邸を訪ねた。
嘉彰親王は戊辰戦争の軍事総督になった仁和寺宮で、その後東伏見宮になっていた。
そして、新政府が創設されると陸海軍を統率する兵部卿に就任していたのだ。
宮が浜町屋敷に居候をはじめてまもなく嘉彰親王は戊辰戦争の功績によりイギリス留学が与えられて出発してしまったので、宮は後任の兵部卿の有栖川宮邸に移ることになった。
太政官から伝えられた宮は一瞬耳を疑った。
いちど朝敵となった宮を飽くまでも赦せずまだ不信の念を抱きつづけていて手許に置き懺悔させようというのか。いずれにしてもこれは有栖川宮の意向であろうがその執拗な怨念に戦慄した。
宮は居心地の悪い有栖川邸から脱出するため海外遊学を志して太政官からプロシャ（ドイツ）留学が許可された。軍人になることが国家に忠誠を尽くす最善の道だと

考えていた。

明治三年（一八七〇）十二月三日、宮は横濱からアメリカ商船グレート・ルエベブリック号に乗船して母国を離れ、サンフランシスコ、ニューヨーク、ワシントン、ロンドンを経て年があらたまった二月八日にプロシャのベルリンに入った。

一箇月後、北白川宮家を創設した弟君の智成親王が死去したので、宮が北白川宮家を継承することになった。

九月には父君邦家親王が死歿した。

プロシャでは宮を皇族として礼遇してくれたので皇帝、皇后、皇太子に謁見できた。

明治八年（一八七五）二十九歳の年に宮は陸軍大学校第一期生になり、日本から歩兵少佐に任じられた。

明治十年（一八七七）四月九日陸軍大学校を卒業した宮はただちに帰国の途に就いた。

七月二日横濱港に着いた宮は下賜されていた赤坂門内紀尾井町の元紀州徳川家の中屋敷跡地（現清水谷公園）の邸宅に入った。

翌年二月、戸山ケ原（新宿区中央部）の陸軍戸山学校に入学し、十二月には天皇直属の近衛局に出仕し勲一等に叙されて旭日大綬章を授けられた。

三十二歳で陸軍歩兵中佐に進級していた宮はこの年元土佐領主山内豊範の妹光子と結婚した。

だが七年後陸軍少将歩兵第一旅団長のとき神経衰弱にかかっていた光子と離婚して、翌年元宇和島領主伊達宗徳の娘富子と再婚した。

その年の暮れに大勲位に叙され菊花大綬章を授けられた。

六年後に陸軍中将第六師団長になり、翌年第四師団長になって大阪に赴任した。

翌年八月日清戦争が勃発した。宮は従軍を願い出たが有栖川参謀総長によって握り潰された。忠節を尽くすを本分とする軍人になったのに有栖川宮にはまだ信用されていないのかとその執拗さに腹が立った。

九月に東京の大本営が広島に移された。

その年の暮近くに有栖川宮が病気療養に入ったので、東伏見宮から小松宮になった兄君の彰仁親王が代行になった。

年が明けて正月十五日、有栖川宮熾仁親王が逝去した。享年六十一歳であった。

宮は漸く長年の呪縛から解放された。

後任には宮の兄君小松宮が就任した。

その兄君の参謀総長から宮は近衛師団長に補されたので大阪から東京へ戻って任に着いたが、すぐさま大本営のおかれた広島行を命ぜられたので、三月二十五日師団を率いて移動した。

五月十七日、参謀本部から講和会議で日本領になった臺灣に不穏な動きがあって武力抗争の様相を呈してきたので鎮定を命ぜられた。

宮はようやく身を持って国に忠誠を尽くすときがきたことに勇躍して壮途に就いた。

五月二十九日、大輸送船団を率いて臺灣に向かい、北東端の三貂角に上陸した。

宮は司令部に留まって後方指揮にあたる前例を破り、先頭に立って指揮し天幕を張って野営をつづけた。

基隆、臺北を攻略して南下していった頃から風土病の瘧（マラリア）が蔓延しはじめた。

十月に入ると流行はようやく下火になってきたのでさらに進んで嘉義を占領した。

そして、最後の拠点臺南を目指して進軍の途中宮が発熱し瘧の徴候が出たので幕僚たちが後方に退避して治療をすすめたが、宮は臺南を目前にして士気に影響すると拒絶し、進軍をつづけさせた。

宮は急造の担架に身を横たえて指揮し、辛うじて臺南に入った。

そこで病状が悪化し、十月二十八日の明け方近くに意識朦朧となって息を引き取り、戊辰の激動に翻弄された波乱の生涯を閉じた。

歩兵第二旅団長の弟君伏見宮貞愛親王をはじめ、第二師団長の乃木希典らの諸将が次々に訪れて宮の遺体に別れを告げた。

宮の柩は諸将の見送るなかを商船の乗せられて十一月四日横須賀港に着岸した。

柩はそこから汽車に移され、日付がかわったころに新橋駅に着いた。

待機していた近衛師団の兵が柩を担ぎ、真夜中の道を急いで霞ヶ関の官邸に到着した。

北白川宮能久親王の葬儀は国葬に決まった。

明治二十八年（一八九五）十一月十一日午前九時、官邸を出棺した宮の柩は国葬に相応しい行列を組み沿道に居並ぶ人々の見送りを受けて葬祭場の豊島岡（文京区大塚五丁目）に着き葬場祭のあと柩は埋葬された。

宮は国家に忠節を尽くす軍人として軍務に精励し、懸命に国家のために尽くしてきた。その努力が報いられ、国葬になったことで輪王寺宮公現法親王時代の汚名を晴らしたのであるが、最後まで一時期朝敵となったことを生涯悔いつづけた悲運の貴公子であった。

（了）

愁想の「シルクロード」

新井宏

高校生の頃からあこがれていた「シルクロード」を一度も訪れることもなくこの世を去ることになりそうである。しかし、そもそも実際にシルクロードに行けることなど、想像も出来なかった世代なので残念だという気持ちもない。ただ、数多くの歴史エッセイを書き散らしているのに、なぜか「シルクロード」を主題としたものは記憶にないのが、我ながらやや不満である。

定年前後から妻と一緒にもっぱらヨーロッパ諸国を廻っていた。そして、やっとトルコまでたどり着いたのに、中東や中国、印度は安全やトイレ事情等でなかなか同意が得られなかった。その内に、家庭内の健康事情もあり、ますます「シルクロード」が遠くなり、友人達が楽しく語る「西域」に対しても、段々心弾まなくなっていた。

そこに登場したのが『まんじ』連載の村上邦治氏「安芸門徒シルクロード紀行」である。

最初は、村上氏が友人達と廻った旅行記だと思っていた。村上氏の友人が書いた蘊蓄あるエッセイも既に読んでいたので、軽く流して読みはじめた。

しかし様子が異なる。大谷光瑞等の評伝を通して明治維新の一側面を見事に描いているのである。

村上氏の前作「千家尊福伝」も、書き進むにつれて、単なる「千家尊福伝」を越えて、明治維新の一側面を深く描くようになっていた。そのような作風が好みの私は、単行本として世に問うことを薦め、余計なお手伝いもした。そう思ってみると、今度の「大谷光瑞伝」も同じ趣向なのである。

日本の「大乗仏教」はすべて中国で一度漢訳され導入されたものなので、ヨーロッパのように、パーリ語や梵語（サンスクリット語）の仏典から直接仏教の研究を深めた「小乗仏教」に較べ後ろめたさがあったという。

明治初期、廃仏毀釈やキリスト教解禁の流れに、危機意識をもった真宗本願寺派の大谷光尊（光瑞の父）は、岩倉遣欧使節団に自ら同行する計画を立てていたが、二十世門主大谷広如の急逝により門主を継ぐことになり果たせなかった。その志を継いで、次期門主の新門大谷光瑞は、「大乗非仏教説」を打破することを心に秘めて、折からの中央アジア探検ブームに自らも乗り出すことを決心していた。

再び描く明治維新の一側面である。しかも舞台は「未知、夢、謎、冒険」のシルクロードである。

「安芸門徒シルクロード紀行」はすでに八回の掲載を終えている。しかし、その間にコロナ禍によって、合評会が三回流れてしまった。いつも新たな刺激を求め、合評会の直前には各同人の作品を精読して臨んでいるが、流会が決まると、惰性で読みやすいものを斜め読みし、すこし手強いものは後回しにしてしまう。

そのためこの稿が載る次回は、同人各位の作品について、一年分をまとめて読んで合評会に臨まねばならないので気が重い。そんな中にあっても村上氏の「シルクロード」だけは各回精読している。

それと共に、私としては、次回は何を書いたら良いだろうか迷っていた。コロナウイルスの続編も書きたいが、まともにとりあげるのは気分的に重い。

そこで思いついたのが、村上氏の「シルクロード紀行」を下敷きに、わが「シルクロードへの追想」を語ってみることである。

我々の世代、シルクロードといえば朝日新聞に昭和四十三年から四十四年にかけて連載された井上靖の『西域物語』を想うであろう。私はまだ単行本も出てない時に、畏友杉本正勝氏から、その新聞切抜きファイルをお借りして読んだ。

畏友などと気軽にいうが、一回り年上の会社の大先輩。その杉本氏が蛍光エックス線分析を日本で初めて工業用分析に導入しようと悪戦苦闘していた際に、エックス線や統計学になじんでいた新入社員の私が職場も異なるのに勝手にお手伝いをしていた。それは氏がその成果を「博士論文」にまとめ上げる頃まで続いた。

その間に、博学多識な杉本氏から戦前の知識人の教養とも言うべきものを幅広く学んだ。いつも「歴史」は共通の話題であり、そのなかでも「シルクロード」を語り合うのは心躍る瞬間であった。私の「趣味の骨格」が定まったのは、全く杉本氏のおかげである。

井上靖は昭和三十三年に短編『楼蘭』、三十四年に長編『敦煌』を発表し、まさにシルクロードブームの先駆者であった。まだ学生であった私は、その頃に両書ともに読んでいる。

それが判るのは、昭和三十五年、東京宝塚劇場の菊田一夫演出『敦煌』において初演直前に、主演の池部良が長台詞をこなせず、急遽無名の新人井上孝雄に替えられる事件があったからである。映画人の池部良にとっては、開演日ぎりぎりまで脚本が出来ず、稽古中に台詞を書き直すのが常の演劇には馴染めなかったのであろうが気の毒に思った。その後、池部良は篠田正浩監督の『乾いた花』で復活する。

『楼蘭』も『敦煌』も東トルキスタンすなわち今の中国の新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠周辺が舞台で、いわばシルクロード中国側の入り口付近の物語である。それが当時のシルクロードのイメージであった。

しかしシルクロードブームを決定付けた井上靖の『西域物語』は、西トルキスタンすなわち現ウズベキスタンのサマルカンド等が主舞台である。当時、中国領であった東トルキスタンには入国できなかったが、西トルキスタンはソ連領で井上靖は昭和四十年と四十三年の二回にわたり旅している。だから楼蘭や敦煌を期待して読み始めると、やや雰囲気が異なる。

物語は前漢の武帝や張騫で知られる汗血馬の大苑（フェルガーナ）から始まる。大苑は東西千キロメートルのウズベキスタンの最東端、中国圏に近く、戦前の教養人にとっては馴染みの物語で、ここまでが敦煌、楼蘭に続くシルクロードであった。しかし『西域物語』の大半は波乱のウズベキスタンの歴史とも言うべき内容なのである。詩情豊かな井上靖の物語を期待して読むとちょっと手強い。

仮にシルクロードを長安からイスタンブールまでとすれば、その中間点はサマルカンドである。中国史として見るならいざ知らず、世界史のシルクロードの中心地はサマルカンドなのである。しかもウズベキスタンには、サマルカンド・ブハラ・ヒワ・タシケント等の世界遺産のオアシス都市がある。

その地はかつてソグディアナと呼ばれ、謎のソグド人が住み、シルクロードの東西交易を支配していた。

彼らは紀元前六世紀頃から既に交易に従事し、アレクサンダー大王遠征軍に征服されながらも、その後のグレコ・バクトリア王国、クシャーナ朝、エフタル、突厥などの遊牧国家の支配下でも、侯国として独自の文化を築いていた。

しかし七世紀後半になるとアラブ帝国（初期イスラム帝国）の侵略軍による圧政が始まり、ソグド人達の反抗や集団逃亡が相次ぐ悲惨な状態に陥った。

ソグド人達が復活したのは、アラブ帝国がサマルカンドにイラン系サマン王朝を認めた頃からである。その頃になるとソグド人も他の民族との同化が進み、交易国際語のソグド語もだんだん死語と化していった。

近代になって、ソグド文字やソグド語の解読が進んだのは、インド・ヨーロッパ系言語であることに加えシルクロードからソグド語文書が多量に発見されたからである。

かくしてソグド人やソグド語は消え去ったが、サマルカンドは、イスラム連合国家とも言うべき強国ホラズム王国の「花咲ける都」となり、未曾有の繁栄時代を迎える。

しかし一二二〇年、西遼を滅ぼしてホラズムと国境を接するようになったモンゴル帝国が大兵団で攻め込んでくる。兵員数で勝っていたホラズムであるが、防御施設を持つオアシス都市で個別に迎え撃つ作戦を採った。しかしモンゴルは焦らず初戦のオラクルを五ヶ月の包囲の末に陥落させ、続いて周辺都市を各個撃破し大略奪を行う。

その後、ブハラやサマルカンドの拠点都市では、逃亡相次ぎ、降伏した兵士や市民の多くがモンゴル軍に編入されるか虐殺され、技術を持つ工芸家や職人はモンゴル王族や将軍に分配され、市街は徹底的に破壊され尽くされた。そして、サマルカンドはいったん歴史から完全に忘れ去られてしまう。

しかしサマルカンドは百五十年後、チムール帝国の首都として華麗に復活する。中国の陶磁器とアラブの顔料が融合して生まれた「青色タイル」が「地球上で最も美しい街」を飾っている。

ウズベキスタンの歴史を知ると、まさに岡田英弘が言うように、モンゴル帝国の西征により、東洋史・西洋史が統合され、初めて真の世界史が誕生したことを実感する。

それにしてもウズベキスタンの北側と南側を流れ、アラル海に消え入るシル・ダリアとアム・ダリアは、発音からして何故か魅せられてしまう。モスクワ経由のヨーロッパ便が生まれた頃、窓の黒い覆いをそっと開けて砂漠にうねる大河を見たことがある。シル・ダリアだったのではないかと勝手に思っている。

かくして、『西域物語』を読んでから、あこがれのシルクロードは、楼蘭、敦煌、亀茲にかわり、サマルカンド、イスファハン、イスタンブールとなった。そしてしばらくの間、モンゴル帝国の興亡について読み漁っていた記憶がある。

なぜモンゴルが強かったか、いろいろと学んだ。遊牧民の特徴として、騎乗疾走して敵に近づき、至近距離から両手を使って矢を速射し、疾走して去る。狩りのような戦法や偽装敗走をしては包囲する戦法など、戦闘にはめっぽう強かったばかりでなく、征服した地域から、職人・工人や軍勢まで巧みに獲得し、自軍を温存しながら戦線を拡大していった。更には、現地の色目人を高級官僚に据え、後の帝国の基礎を着々と築くなど、モンゴルは単なる蕃族などではなく、すぐれて政治的、文化的な集団であった。

次々に奪った攻城機等を改良し現地生産しながら進軍するのは、まさに武器の東西交流であった。モンゴル帝国のヨーロッパ侵攻によって、火薬や投石機などと共に、宋の高炉製鐵技術や大砲も伝わったのではないかとするのが私の「世界製鉄史観」である。

このように『西域物語』に描かれたシルクロードは、タクラマカン砂漠のシルクロードから、モンゴル帝国西征のシルクロードに拡がったが、一般的な人気はやはり砂漠のシルクロードに留まっていた。

それから十年後、昭和五十五年に始まったNHK特集『シルクロード―絲綢之路―』はシルクロードブームを決定的なものにする。中国の長安（西安）を出発し、パキスタンとの国境パミール高原までの行程を毎月一編・十二回にわたって放送した番組である。NHK技術陣が総力を挙げて取り組んだ日中共同取材の映像は、喜多郎作曲の異国情緒あふれるシンセサイザーのメロディとともに、ロマンのシルクロードを日本に定着させた。

その人気によって、五年ほど経つと、もはやシルクロードは誰でも行ける観光地と化し、一般旅行客が押し寄せるようになった。

その頃、職場の部下が中国の『シルクロード』に行くと休暇を申し出てきた。私の顔を見ながら申し訳なさそうにしている。私のシルクロード趣味を知っていたからであろうか。お土産に、細工の優れた革製の鞄に、象眼のある金属製柄をつけた「小刀」を頂戴した。単なる「土産品」というよりは、焼き入れもしてあり「実用品」のようであった。今でも時々使っている。

NHK特集『シルクロード―絲綢之路―』は毎回二十パーセント前後の視聴率を誇り、新聞に「巨人戦を見るか、シルクロードを見るか」という記事が載ったほどであったが、パミール高原が終点。そのため、視聴者から「シルクロードは中国だけではない。ローマに至る道である」という声も上がったという。私も同じことを考えていたので、当然のことだ。

それに応えて、昭和五十八年四月から翌年九月まで『シルクロード・第2部』十八回が放送され、インド、イラン、イラクと足を延ばしローマにたどり着いた。更に昭和六十三年には『海のシルクロード』も制作されたという。

もっともNHKは映像の『シルクロード』ばかりを追いかけていた訳ではない。最初の『シルクロード―絲綢之路―』が終わってまもなく、昭和五十七年に『NHK市民大学講座』が始まり、その中で「シルクロード文化史」二十六回を放送する。そして、その講義録がその翌年、長澤和俊著『シルクロード文化史』全三巻として白水社から出版された。

長澤和俊はシルクロード学者、市民講座では、はるかに広い地域や時代を対象に、より学問的な記述を行っている。ちなみに、『―絲綢之路―』の主要部分は、全二十六回の講演の内、第10回・謎の楼蘭王国、第11回・仏教の伝来、第12回・石窟美術の開花、そして第25回・中央アジアの探検があるくらいで、全体の六分の一ほどに過ぎない。やはりシルクロードは広大である。講演記録をもとにしたものなので、豊富な写真・図・表を使って平易な記述を行っているので読みやすい。

さて、冒頭、この稿は村上氏の「安芸門徒シルクロード紀行」に刺激を受けて書きはじめたと述べた。しかし、ここまでは「日本におけるシルクロード」のイメージの変遷について私見を披露したのに過ぎない。

実は最初に漠然と想ったのは、私と仏教の関わり合いのことを、シルクロードに絡めて書けたら良いかなということであった。

いまでは確信しているけれど、私には信仰心が欠如している。昔、知り合いの僧侶から「新井さんは話がうまいからお坊さんになりなさい」と薦められ、すこし心が動いたことがあるがすぐ諦めた。しかし、信仰心がない割には、宗教に対する関心は高く、人生の節目〃〃に、宗教と交差することが多かった。

そもそも冒頭、高校生の頃からシルクロードに憧れていたと書いたが、それは理系志望なのに歴史が好きで、和辻哲郎の『古寺巡礼』や亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』をかかえ、学割の夜行列車に乗って奈良に向かい、法隆寺、薬師寺、唐招提寺や東大寺戒壇院、三月堂などを歩き廻っていたからである。

『古寺巡礼』は、アジェンター壁画から、ガンダーラ、ペルシャ、ギリシャへとまさに「シルクロード」への想いから始まっているし、『大和古寺風物誌』もギリシャ、ローマ、ルネッサンスの西洋美術への想いが下敷きとなっている。

私の場合、最初は古寺建造物に対する興味であつたが、エンタシスのルーツがギリシャにあると知り、シルクロードに思いを馳せた。それと同時に奈良南都六宗の伝来にも興味を持ち、判りもしないのに大野達之助の『日本仏教思想史』を読んでいた。

その後、建築様式への興味は建築モジュールの研究につながり、ライフワークの「古韓尺」を提唱するに至っている。

大学時代には、「科学と宗教」と題する本がいくつか出版され、ちょっとしたブームであつた。その中には創価学会の池田大作の「科学と宗教」もあったので読んだ。関連して「創価学会史」も学んだ。その頃、創価学会の「折伏」には嫌悪観をもちながら、キリスト教やイスラム教との比較で、宗教活動の本質はむしろ「折伏」にあるのではないか等と想った。

社会人になってまもなく、突如として「英会話」を勉強しなければと思い立った。それまでは、英語の試験のない大学を志望するとか、英語の配点が極めて低い大学に行くのだと公言して、その通りにしていて、D・Hロレンスの『チャタレー夫人の恋人』を原文で読むことを以て免罪符にしていた。

「英会話」のきっかけは、会社でGEの技術者による「原子力発電」の講演があり、水野誠常務が英語で応対しているのにびっくりしたからである。水野氏は紀州藩御付家老、三万五千石の新宮水野家の直系十四代、工場には馬に乗って通勤していたとの伝承もある方である。とても穏和な方で、氏の博士論文の執筆をお手伝いしたことなどから、退任後お亡くなりになるまで、個人的なお付き合いがあった。新宮水野家祖先の菩提を弔いながらも本人は敬虔なクリスチャン、ご心労もあったと聞く。

新宮水野家十代の水野忠央は大老井伊直弼と組んで紀州藩の慶福を徳川十四代将軍家定とした人物。吉田松陰も「水野奸にして才あり、世頗るこれを畏る……また一世の豪なり」と評している。水野氏の奥様は生田流箏曲家元の富山清琴の直弟子とのこと、どこかのお姫様だったのであろうか。

英会話を始めるに際しては、「個人教授」と決めていた。当時、初任給に毛の生えた程度の給料だったので、週四回のレッスンを支出するのは、かなり負担だったが、個人教授なら「休めないし授業料も惜しい」ので続けることができるとの歯止めのつもりであった。「将来、海外旅行に行って三倍楽しんで元をとる」というのが、自分に対する言い訳であった。

その結果、ケン沖山先生に出会った。最初は日系将校OBとばかり思っていたが、スリランカの大僧正の息子(隠し子か)だという。小乗仏教の発祥地に近く、ドイツの仏教学者に友達がいるという。私の英語力では仏教

の話はほとんど理解できなかったが、結婚するまで教えていただき、結婚式にも出席していただいた。

それから妻の実家が熱心な法華経信者で、妻も私をなんとか信者にしようと努力していた。世間体としての最小限の歩調は合わせていたが、信者にはとてもなれそうになかった。ただ、経典や読経には興味があったので、今でも法華経は、ルビの付いた経巻があれば、格好の付く程度には詠める。訳の分からない梵語の御経が一番有り難そうに感じた。

その延長で、私が韓国慶尚大学の招聘教授として、家を留守にするにあたって、妻からは、帰ってきたら身延山に登って修行することが条件つけられた。ただし韓国の寺院で修行するのでも良いというので、友人の教授に伝手を求めたところ、尼寺ではどうかと言われたが、さすがに止めた。

その代わりというのもおかしいが、韓国にいる時にたまたま「仏教の本」を二冊頂いた。

一冊は、私の学生だった河童仁さんが、私の誕生日に贈ってくれた、曹渓宗の改革の中心人物・道法僧侶が書いた『私が見る仏』という本。もう一冊は慶尚南道の多率寺の僧侶から頂いた曹渓宗第七代宗正の性徹僧侶の『永遠の自由の道』という本である。

身延山での修行に全く心が動かなかったわけではないが、修行中禁酒という条件がつくのを警戒していた。この二冊を日本語に翻訳することで、身延山の修行の代替えとするのは悪い話ではない。いずれも二百ページ弱の著書で、結局半年近くかけてなんとか完訳。もちろん出版に至るような機会はなかった。しかし、翻訳と言うのは、読むだけでなく、自分の頭でいったん理解してから書き出す作業で、随分勉強になった。

こんなことをだらだら書いていると、やはり私には宗教心が欠如しているのを改めて実感する。

最初、本稿の仮題を「あこがれのシルクロード」としていた。しかし如何にも陳腐である。感覚としては、郷愁やノスタルシックが近いが、今度はシルクロードと合わない。無理に造語として「愁想」としたのは、結局「絹の道」にも「仏の道」にも踏み入ることなくこの世を去ることになりそうな寂しさ侘しさを表わしたつもりである。それでも「絹の道」や「仏の道」は私の人生を豊かにしてくれたと想っている。

その点、「安芸門徒シルクロード紀行」を読むと、村上氏は全く異なる。

第一、冒頭の文章からして、

僕は「安芸門徒」だ。

で始まっている。堂々とした「門徒」宣言である。

自己紹介を読むと、

僕自身は郷里には七歳までしかおらず、あまり熱心なほうではないが、我が家は数百年続いている代々浄土真宗の門徒である。

とある。軽く数百年というが、それだけでも大変なことだ。

その上、本稿シルクロード探索の主人公とも言うべき渡辺哲信と哲乗の兄弟は、村上氏の郷里竹原市に隣接する三原市浄念寺出身である。

またもうひとりの主人公、堀賢雄も、村上氏の菩提寺住職が堀賢雄の孫、豊田山蓮照寺住職堀恵雄と龍谷大学の同期生で、その縁から、村上氏は堀賢雄の日記をはじめ多くの資料や写真を譲り受けている。そのお陰で、渡辺哲信と堀賢雄の手記がそろい、かれらの探検旅行がより正確にたどれるようになったという。

それにして村上氏はもはや完全な宗門の専門家扱いを受けている。まさしく「安芸門徒」である。

「安芸門徒シルクロード紀行」はまだまだ続くようである。ぜひとも『千家尊福伝』と同様、『大谷光瑞伝』としてまとめあげてほしいと願っている。

漢詩

潮汐錄（百）

鯨游海

獨逸漫遊其一粒別克

令和元年八月

婆璢斗海最南隅
藩坐同盟盟主都
幽邃古城非幻影
北洋珍味憶醍醐

押韻・隅都醐

〈独逸漫遊その一粒別克〉

婆璢斗海の　最南隅
藩坐同盟　盟主の都
幽邃の古城は　幻影に非ず
北洋の珍味に　醍醐を憶う

〔注　解〕

婆璢斗海のクルーズ船を丁抹の甲尼巴玄で降りた私たちはホテルで一泊した後、長距離バスに乗って南下、国境を隔てる海峡をフェリーで渡り独逸に入った。

甲尼巴玄発藩城行きの特急バスで三時間。フェリーで国境を越え、東独の粒別克で途中下車し三泊した。中世を残す古都は藩坐同盟の盟主の港湾都市で美しさを誇る。

璢＝瑠の正字。幽邃＝奥深くて静か。

藩坐同盟＝13世紀に海上交通の安全保障や共同防衛、商圏拡張等を目的とした北海、バルト海沿岸の都市同盟。

文豪トーマスマン縁故の地である。国境にも近い要衝で、新緑に覆われた古城の庭園は美しい。独逸の森だ。

私たちは一瞬夢幻の世界に迷い込んだようであった。

樹木の緑は濃く、縦横に流れる水路は碧く、数隻のボートが過ぎ水がゆれ、静寂に時が過ぎてゆく。正に幽邃。

ドイツの森は深く、樹木は鬱蒼と繁茂し蒼天に伸びる。

空も海も飽くまで蒼く、北洋の珍味やビールもうまい。

☆北洋の秩序護りしふるき城
　いかめしき門今も堂々

獨逸漫遊其二珠伯林　　令和元年八月

越埜超山湖水津
忽焉出現美祇神
千紅萬紫桃源境
終日無逢日本人

押韻・津神人

〈独逸漫遊その二珠伯林〉

埜を越え山を超えし　湖水の津
忽焉と出現したる　美の祇神
千紅万紫の　桃源境
終日逢わず　日本人に

〔注　解〕

埜＝野の古字。津＝船着き場。渡し場。岸。みなと。祇＝地の神。天神地祇。天上の神に対する地上の祇。粒別克滞在の二日目支線の列車を乗り継ぎ訪ねた古城。

〔口語訳〕

埜を越え山を超えた邸遠の奥地の湖水の津。
突然眼前に現われた美の祇神……
千紅万紫の桃源境
終日、日本人に逢うことはなかった。

☆ローカル線乗り継ぎ来たる桃源境
　今日も終日邦人を見ず

婆瑠斗海周航其五瑞典・首禿甫斐夢　　令和元年八月

叡智結晶成就時
榮譽褒賞聖堂茲
當誇日本超頭腦
刻印英名三九椅

押韻・時茲椅

〈婆瑠斗海周航その五瑞典・首禿甫斐夢〉

叡智の結晶　成就せる時
栄誉の褒賞　聖堂は茲なり
当に誇るべし　日本の超頭脳の
英名を刻印せる　三九（27脚）の椅子を

〔注　解〕

瑞典はスカンジナビア半島及びバルト海西南諸国の盟主だった丁抹から一五二三年に独立した王国。その後ノルウェーを合併また分離。社会福祉制度のゆき届いたモデルの国といわれる。殆んどが清教徒。
爆薬を発明した諾貝の遺言と遺産で設立された諾貝賞創設の国。日本人も27名が受章している。
三九＝27。十五を三五、十六を二八と表記する類。
當＝当の正字。

☆蔭と陽ダイナマイトに罪有りや
　用うる手際人にこそ有れ

獨逸漫遊其三藩城　　令和元年八月

大洋賓館太河頭
懇篤接遇疲勞休
雜踏喧騒妙音律
古都君臨大歐州

押韻・頭休州

〈独逸漫遊その三藩城〉

大洋賓館　太河の頭
懇篤な接遇に　疲労休む
雑踏の喧騒　妙なる音律
古都は君臨したり　大欧州に

〔注　解〕

中部欧州に発し独逸平原を北西に流れ北海に注ぐ太河。藩城はこの下流の河港に在る独逸第二の大都会。また文化芸術の発信地でブラームスやM・ゾーンが活躍した。

〔口語訳〕

最后の泊は出緒あるあの大洋賓館。太河の頭に立つ。
懇篤なサービスと落ち着いた調度が旅の疲れを癒す。
雑踏の喧騒にも妙なるリズムがあるように感じられる。
独逸では伯林と肩を並べる大欧州第一の古都なのだ。

☆雑踏にブラームスの韻あり
　ヱルベの波はメンデルスゾーン

《漢詩の流れ88》戦国時代③上杉謙信

武田信玄を前々回採り上げたからには今回この人を挙げない訳にはいくまい。好敵主二人の漢詩の実力は如何。
信玄が今川義元の奇策で塩の路を断たれた時、謙信は「卿と我と争う所は弓箭にあり、何ぞ米塩に有らんや」と塩を贈るフェアプレーを演じた律義者であった。

九月十三夜　　不識庵

霜滿軍營秋氣清　霜は軍営に満ちて　秋気清し
數行過雁月三更　数行の過雁　月三更
越山併得能州景　越山併せ得たり　能州の景
遮莫家鄉憶遠征　さもあらばあれ家郷の　遠征を思うは

霜がまっ白に軍営を覆い秋の気配が清々しい。
幾行かの雁の飛び去る姿を夜更けの月が照らしている。
今我らは従来の越中、越後の地に併せ、能登を手中に収めたのだ！
ままよ、故郷の家族らは我らの今回の遠征の戦を如何ばかり心配していようと、とり敢えず勝利に酔うのだ。

織田信長が南方から抬頭し始めた風雲急の危機を迎え越後に勢力を培っていた謙信が漸やく動き出した。最終目的地は京都であろうか。先づは能登に足掛かりを得たのは天正五年（一五七七）のことであった。
不識庵は謙信のあざ名、ペンネーム。

漢詩

汲深録（二十二）

松井秀人

暑日讀書

連日炎天蒸草廬
蟬聲滿耳懶繙書
時圖消夏北窗几
獨領清風趁蠹魚

〔注　解〕
草廬＝草ぶきの庵。
懶＝ものうし。不精なさま。
几＝敷物の上に座るときに寄り掛かる用具。物を載せる小机。
消夏＝夏の暑さをしのぐ。暑さしのぎ。
蠹＝衣服や書物を食う虫。日にさらして虫よけをする。
蠹魚＝衣服や書物を食う虫。
　虫の形が魚に似ていることから魚という。紙魚。

〔口語訳〕
連日の夏の暑い日差しが、草ぶきの庵を蒸していて
さらに蟬の声も耳にうるさく、書を読む気にもならない。
夏の暑さをしのごうとして、北窓近くの几に寄り掛かり
そこへ清風を受けて涼しくなれば、書物の虫干しをして読書でもしよう。

（暑日読書）
令和二年七月

連日の炎天 草廬を蒸す
蟬声耳に満ち 書を繙くに懶し
時に消夏を図る北窓の几
独り清風を領して 蠹魚を趁う

押韻・廬　書　魚

避暑偶吟

赫赫炎陽日午天
山荘風動北窗前
丁東檐鐸催詩興
滅却心頭倣快川

〔注　解〕
赫赫＝熱気の盛んなさま。ひでりで燃えるように暑いさま。
炎陽＝夏の時候。夏。
丁東檐鐸＝のきにつるした風鈴のふれあう音。
快川＝恵林寺の快川和尚。

〔口語訳〕
ま昼の空が燃えるように暑い夏に
山荘に風が入ってくる北窓の前にいる。
軒につるされた風鈴の音が詩興を催すが
快川和尚に倣って、心頭を滅却しよう。

（避暑偶吟）
令和二年七月

赫々たる炎陽 日午の天
山荘 風動く 北窓の前
丁東檐鐸 詩興を催す
滅却心頭 快川を倣う

押韻・天　前　川

夏夕納涼

吳天險路汗珠流
遙望山莊夕照浮
一浴一觴還一詠
清風陣陣爽於秋

〔注　解〕
吳天＝夏の空。
汗珠＝玉なす汗。玉となって落ちる汗。
陣陣＝とぎれとぎれに続くさま。
爽於秋＝秋よりも爽やかなり。

〔口語訳〕
暑い夏空の下の険しい山路を登っていくと玉のような汗が流れてくる。
遥かに望む目的地の山荘には夕日が浮かんでいる。
一風呂浴びて一杯飲んで、さらに一詩を詠めば
清風がとぎれとぎれに吹いてきて、秋よりもいっそう爽やかな気分だ。

（夏夕納涼）
令和二年八月

吳天の険路 汗珠流る
遥かに望む山荘 夕照浮ぶ
一浴一觴 還た一詠
清風陣々 秋よりも爽やかなり

押韻・流　浮　秋

長橋月夜

千尺河橋跨大江
往来人影月光中
明看交手倚欄久
客路離愁遂不窮

〔注　解〕
交手＝別れのときに互いに手をとり合う。
遂不窮＝そのまま尽きない。

〔口語訳〕
千尺もの長い河橋が、大江を跨いでいて
橋の上を往来する人影を、月のひかりが照らしている。
月が明るく、手をとり合う二人が欄干に長くもたれているのを見守っている。
しかし旅に出る別れの悲しみは、そのまま尽きることはない。

（長橋月夜）
令和二年八月

千尺の河橋 大江を跨ぐ
往来の人影 月光の中
明らかに看る交手 欄に倚りて久し
客路の離愁ついに窮まらず

押韻・江　中　窮

客中逢秋

白頭遊子肆閑行
客舎庭園月影明
籬落西風香馥郁
一枝黄菊見秋生

〔注　解〕
遊子＝旅人。
肆＝ほしいままにする。思うままにする
閑行＝のんびりと行く。
客舎＝宿屋。旅館。
月影＝月のひかり。
籬落＝生垣。
馥郁＝香りの高いさま。
見秋生＝秋になったことがわかる。

〔口語訳〕
年老いた旅人は、思うままにのんびりと旅をしてきて
到着した旅館の庭園は、月のひかりに明るく照らされている。
生垣からは、秋風がよい香りを運んできて
匂いのもとの一枝の黄菊で、秋になったことが感じられる。

（客中逢秋）
令和二年九月

白頭の遊子 肆に閑行す
客舎の庭園 月影明らかなり
籬落西風 香馥郁
一枝の黄菊 秋の生ずるを見る

押韻・行　明　生

古い物・遠い夢

忠内正之

我家の一品〈一〉

道安作の茶杓

「名品歴々」という仰々しいお題目で、まんじ誌に天下の茶道具の名品を、今月まで六回に及んで紹介させて戴いた。

このあたりで拙宅の押入れや棚に埋まっている諸々の茶道具の中から、〝これは〟と思える一品（逸品と云いたいところだが）を紹介したいものと思う。

勿論、我が家の所蔵品は、これ迄に紹介した天下の名品と比較するべくもない存在とは思うが、貧書生夫婦が長年かけて営々と集めた成果なので、恥ずかしながら、懐かしい思い出を織り交ぜ紹介させて戴く。

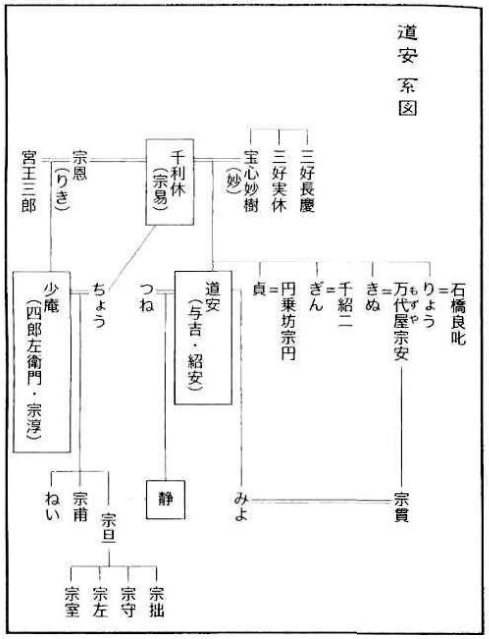
第一回目は「道安作の茶杓」である。

道安とは

千道安（一五四六―一六〇七）は、天文十五年、利休とその先妻宝心妙樹の間に生まれた。幼名紹安。可休斎。眼翁と号した。堺今市の人である。

利休の家系を複雑にしている一つの要因は、千家が利休の実子道安によって継承されずに、養子の少庵（一五四六―一六一四）によって継がれたことにある。道安は、利休と先妻との間に生まれた一男三女の長男である。当然、千家嫡流を継ぐ地位にあったが結果として継子少庵が千家を継いだ。

道安は父利休の茶湯を学び、その技量・見識は高く評価された。豊臣秀吉の茶頭八人衆の一人に加えられたほどで、利休の信頼もあつく、秀吉が大佛殿内陣の茶湯を



命じた際、利休は即座に道安を推したという。

道安の茶風は独創性に富み、剛・動の茶で知られる。之に対して千家を継承した少庵の茶風は柔・静であったと伝えられる。

利休は千家の家督と茶系を、道安に継がせようと考えたのは当然であり、道安も同様の認識をもっていたと思われる。

天正六年ごろ、利休が、宗恩と再婚し、連れ子少庵が堺の千家の一員になるという事態が生じた。しかも、道安とは同年齢であり、道安はかなりの衝撃を受けたらしい。天正九年まで、茶事の記録から道安の名が消えたのも、道安の父に対する抵抗を示唆しているものであろうと解されている。

利休は天正八年ごろまでに、少庵を堺から京都紫野の大徳寺寺門前に移り住まわせたのは両者の関係を考慮してのことであり、実子道安に、堺の千家を継承させようという意志表示でもあった。いわゆる堺の千家と、京千家の誕生となり、二子の処遇に悩んだ利休の苦慮のほどが想像される。このことは、少庵の母、宗恩に対する強い配慮が働いたものと思われる。

宗恩は、才色兼備の男まさりの女性であったらしく、さすがの利休もかなり押されがちであった形跡が窺われる。

天正十九年二月、利休は自刃前の十日余り、堺に滞在したが、この間に末期の文（堺の千家関係の財産処分状。現存している）を作成している。このなかに道安の署名があり、家督相続者であったことを示している。

道安は父の処罰まで堺にいて、その後飛騨の高山にのがれ、金森氏（道安の弟子筋）の庇護を受けた。慶長初年には、許されて再び秀吉に仕え、茶頭の地位を回復している。

慶長三年（一五九八）八月、秀吉が伏見城で没したことは、道安にも大きな転機をもたらす結果となった。当時伏見にいた道安は秀吉の死を契機に堺の千家屋敷に退

いたのである。

その後細川三斎を頼り、豊前におもむき、茶頭として三百石の知行を与えられた。しかしこの知行は「捨て扶持」だったのではないかとの説もある。

当時少庵が事実上千家の系統を継ぎ、不審庵二世として活動を始めた情況を考慮すれば親交のあった三斎に身を寄せたのは理解できる。また、信頼した秀吉の死去により、茶頭という地位や、精神的な支えを失った道安が京・堺から遠く離れて、細川家を頼ろうとしたのは当然だと思われる。

ともあれ道安の後半生は、まさに不遇であったといえよう。後嗣に恵まれず、千家の再興は少庵の手になった。

慶長十二年二月の道安の死によって、堺千家は廃絶してしまう。悲運としか言い様がない。

しかし、道安は亡んでも、道安の茶法が、門弟の桑山宗仙を通じて、片桐石州に伝えられて花開いた事実を忘れてはならない。

少庵は当初より、千家の家督と茶統を継承する立場にないことを充分認識していた。それは嫡男宗旦を大徳寺に入れ喝喰としたことでも理解できる。つまり、宗旦の入寺は少庵・宗旦が千家の後嗣と無関係であるとの姿勢を示しているものである。

しかし、利休の処罰、秀吉の死去という大きな客観情勢の変化により、茶統継承の流れが、少庵千家（京千家）の方に移っていったのである。

少庵が、赦免されて帰京した際、没収された茶室不審庵や茶器などを少庵側に返還してもらったが、これが以後の少庵の立場に大きな意味をもった。このことについては、母宗恩の陰の働きかけが功を奏したものと察せられる。また屋敷を本法寺前に移し、いち早く千家の再興に着手していたことなどが流れを変えた条件となったのである。

宗旦は、父の赦免を機に大徳寺を離れ、また少庵自身も仙嶽宗洞（大徳寺一二二世）に利休号の意義を問うなど、系統継承への意欲をみせた。

秀吉の死による道安の傷心は、少庵の意識との落差を大きくし、主役の座を少庵に譲る結果になった。これには、後嗣に恵まれなかった道安に対し、宗旦という後継者の存在のある少庵側に有利に働いたことは見逃せない。

かくて、堺千家の自然消滅に対し、千家の茶統は京千家に受け継がれ、江戸初期、少庵・宗旦により千家流茶道の保持と流布がはかられた。

宗旦は、後年になって伯父である道安の画像を描いている。道安の茶風を慕い、強い敬愛の念を持っていた様である。一説によると宗旦は道安の実子であるともいわれていると言うが、之は穿ちすぎであろう。



宗旦筆　道安画像　今日庵蔵

道安の茶は、利休の指導のもとに、基本的にはその継承というべきものであったと思われる。それ故にまた甥の宗旦も道安を慕ったのであろうか。

道安は床を四尺三寸に縮めたり、灰匙の柄を竹から金属にしたり、夏の茶事に真の手桶を用いたり、薄板に水を打つなど、その独創性を発揮している。

ただし、点前畳と客畳との間に仕切りのある有名な「道安囲」は、むしろ足の不自由なのは少庵の方であったという説が有力視されていて、道安の作意であるという説は否定されている。

道安好みの茶器に黒大棗、上げ底白粉解香合、道安風炉などが有名であるが、その他に所縁品は不遇であった晩年を反映してか数は少ない。

道安は慶長十二年（一六〇七）六月没、太宰府の宗福寺に葬られた。墓は堺の南宗寺塔頭の海眼庵にあったものを、現在は南宗寺に移され、利休一族の墓域に道安夫妻の墓が建てられているのである。

「道安作茶杓」について

前に述べた通り、千道安の茶道具関係の所縁品は少ないとされている。

堺千家の終焉によって道安の遺産もまた大方の物は消滅してしまったのであろう。

千道安作の茶杓も同様の理由で、現代に伝わる数は少ない。恐らく伝来の明瞭な茶杓は一桁以内の存在と思われる。茶会や展示会等でもお目に掛かることは皆無である。

因みに、利休作の茶杓（下職が削っている場合もあるが）で信頼できるものが百本程度は存在するというから、道安作の稀少さが浮かび上がる。

中興名物記茶杓（元禄期の茶人による茶書）の中に、千道安作共筒として一本が記載されている。また、茶杓雲州蔵帳記（松平不味公の道具帳）にも名物茶杓として、千道安作（筒石州・道安作〃将弥様へ〃の筒書き）古象牙の二本が載っている。いずれも普通我々が直接拝見できる品ではない。

ところで数少ないと言われる、道安作茶杓が我家ごときに存在しているのである。我家に届いた経緯については後で説明するとして、先づは「茶道における茶杓とは」について考えてみたい。

茶杓とは、簡単に言うと、茶入の中にある抹茶を掬って茶碗に移す匙である。竹材で作られているものが殆どで、他に象牙・木地・塗物、まれに鼈甲・銀・砂張・陶器などで作られたものがある。

長さは六寸余（約十八㎝余）ほどが通常である。昔、中国渡来の象牙その他の茶杓を竹の素材に移し、はじめて珠徳（生没年不詳。室町時代の茶杓削り師）に作らせたのは村田珠光（一四二三―一五〇二。室町中期の茶人。茶湯の開山）の創始であると伝えられる。

珠光は節なし。紹鷗（一五〇二―一五五五。堺流茶道の開祖と言われ、門下に利休他多数）は節止。利休は中節を標準として今日に至っている。

この三種を真・行・草と区別する。現在では、一般の茶湯には中節の茶杓、いわゆる草の茶杓が用いられ、真・行の茶杓は特別の茶会に用いられ、また点前の種類によっても取合わされる。

なお、珠光以後、利休・少庵時代までの竹茶杓には、すべて漆拭きしており、宗旦はそうでないものとの両方もあり、宗旦以後は漆拭きをしていない。

利休時代からは、茶杓を筒に入れるようになり、作者を明らかにするのを習いとした。茶杓の作者と筒書の筆者は同人を最上とするが、場合により後世の人が追筒をする場面もある。

利休以前は銘を付けた物が少ない。無銘、または贈筒が多く、宗旦、遠州（小堀遠州、一五七九―一六四七、江戸初期の茶匠、近代茶道芸術を完成させた）の時代になって意識的に銘に趣向を凝らすようになった。茶杓に文学的要素が加わったのである。宗旦は禅語や謡曲、花鳥四季風物を銘とし、遠州は王朝時代の和歌を書き付ける歌銘を創作した。

この時代から作者の教養を筒書きの上に表現するようになり、各人の好み、または流儀によって色々定めが生ずることになった。

茶杓作者の箱書付（共箱）を最もよしとし、同流の後人の書付がそれに次ぐ。

茶杓の最も重視されるべき条件は作者の社会的・歴史的背景と茶道人としての実績である。また茶杓は伝来、次第（筒・箱・書付）と、筒書きの銘が最も重視され、結果として今日では商品価値としての価格を決定する要素となっていることは残念に思われる。

茶道具のなかでその真価が最も理解しがたいものが茶杓であると思う。工芸品としてはあまりに小さく、しかも技術的に手の加わったところもなく、たかが一片の竹のかけらにすぎぬようにも見える。しかし、この一本の茶杓には茶の湯の歴史と同じくする流れがあり、また多くの見所がそなわってもいる。

自作を原則とするそれぞれの茶杓には時代性や茶人の

茶道観、人格までもが刷り込まれているのである。

茶杓は茶人の魂とか、取り合せの要とかいわれる所以もその点にある。

茶杓は茶会の絶対必要品であることを忘れてはならない。茶会は定められたルールに従って喫茶を中心とした交歓会である。そのルールのうち「道具拝見」ということはかなり重要な式次第である。その拝見道具の中でも客に興を催させるのが茶杓である。茶会における客の茶杓に対する真剣な眼差しが思い浮かぶのである。

ここで蛇足を一つ加えたい。

近代最期の大茶人であるといわれる松永安左エ門（一八七五―一九七一）は昭和十二年六月、戦国の大名茶人蒲生氏郷（一五五六―一五九五）作の茶杓を一万六千円の値で購入している。貨幣価値一万倍と考えて計算すると驚くべき価格であったと想像される。

因みにこの茶杓は他の優品と共に、その後東京国立博物館に寄贈されており、時として拝見するチャンスがある。

それでは、本稿のテーマである、我が家の宝物と言うべき道安作茶杓に話を進めよう。

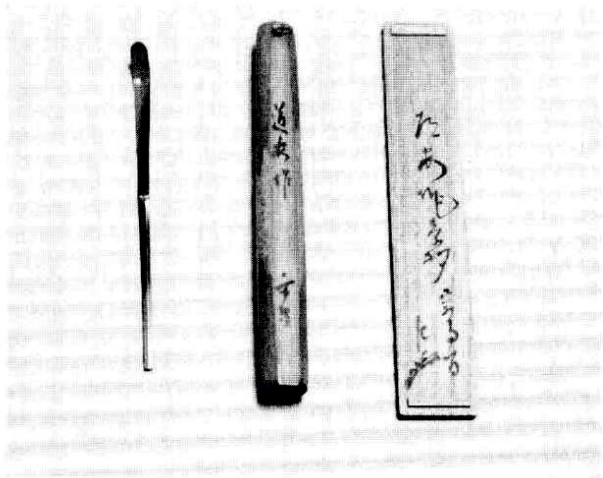
先づ外箱があり、蓋裏には如心斎宗左（一七〇五―一七五一、表千家七代、表千家中興の祖）が、〝道安作茶杓、宗守筒〟と認めている。

筒は白竹の順竹で、筒中に道安作、下部に宗守と書かれ、蓋は花押で〆めてある。認めたのは文叔宗守である。

文叔宗守（一六五八―一七〇八）は、武者小路千家の五代を嗣いだ人で、初代一翁宗守が塗師家から戻って、茶人として新発足した後の六十五歳の時の子だといわれる。

文叔は陽明文庫の茶杓箪子に納められている名杓に、いくつも追筒を作って自署している。文叔は目利きとし

道安作茶杓（忠内蔵）



左　道安作茶杓
中　宗守署名花押（〆印）
右　如心斎署名花押

ても知られ、近衛予楽院（一六六七―一七三六）という当代京洛第一の文化人からも厚い信任を得ていたのである。

この茶杓は本人の自署でなく、宗守の追筒であるが、この時期の作としては満足しなければならない。

茶杓は白竹の順樋、単樋で、樋は深く、漆が拭いてある。一見すると、利休作〝泪〟系統の造形と思われ、やさしく、みやびやかで、スマートな感じである。櫂先はゆったりと、ゆるやかな弧を描いて曲げてあり、二重だめではない。先端部が左から右へごくわずか高まっているような感じを与え、美しさを増している。

櫂先から中節への削り下げもきわめて微妙な弯曲を見せている。中節の横稜はよく整い、中節は高い。その節裏を深く削り取って美しい雉子股・蟻腰となっている。この中節からすぐ下のところで急に一ミリ狭め、あと切止まで同じ五ミリ幅としてある。この平行直線は強く冷厳な引締めを見せ、節上のはなやかさと相対してきびしく鋭い凛然とした決まりを見せている。切止めは裏八、表二ほどの比の両刀で鋭く切止めている。

このほか木賊や椋の葉での磨きで仕上げられており、道安の美意識と作刀法は大変秀れていたものと認められる。

この優美な茶杓は長年大切に扱われていたものの櫂先の露（最先端の節のこと）四ミリ程度の長さでごく細い隙間が生じている。この程度の経年劣化は止むを得ないところである。当家としては、茶会の時は飾りとして展示し鑑賞のみにしていただくなど配慮している。

以上で茶杓の説明は終わりとしてしからば、何故この様な名品が、わが家などに招来したのか、その経緯について書き添えたい。

骨董趣味から茶道具収集に至る

「骨董は、ただのガラクタではない。時をわたって生き延びて来た、美の化身である」

この言葉は作家〝火坂雅志〟の言である。

私はこの言葉に共鳴する骨董狂いである。

若い頃より古い物に対する関心が強かった。物を大切にするという節約時代の親の教えが身についてしまったものか？また生まれつき物に対する執着心と好奇心が人一倍強いのであろうか？

それらの物に関わる由来や、故事来歴にも強いこだわりをもって、幼いころ、父母を質問責めにして困らせたこともあったらしい。

東京へ出て、養家を継ぐことになった。養家は浜松の出身で、元亀元年家康の家来となり、関ヶ原で戦功を挙げたらしく、二百三十石余と微禄ながら旗本の家であった。

関東大震災と戦災に遭い、多くの物を失ったものの、刀剣、陶器、胡銅の類が少し残っていて興味をそそられた。

その様な下地があった上に、更に本格的に骨董好きになったのは、大阪地区の勤務となってからである。

昭和四十三年十二月、富山支店から大阪の福島支店勤務となった。当時は三十八歳で、今では信じられないくらい元気で、使命感に溢れていた。しかし初めての関西勤務でもあり、果たして新築開店の重責を完遂できるかどうか心配した。

大阪の福島地区はキタの一部で、商業が活発、中堅中小企業がひしめいていて魅力あるところである。店主たちは一国一城の城主よろしく貫禄があり成功者としてプライドの持主が多く懐へとび込むのは容易ではなかった。こちらは東京者であり警戒されたむきもあったのであろう。

そこで一計をめぐらし相手の趣味趣向を聞き出して、対話の糸口にすることを考えた。

ここはと狙う取引先の玄関や応接間には、陶器、絵画、書跡等、美術骨董品が並べてあった。これらを話題としてアプローチする内にすっかり親密な関係となっていった。

元来関西には美術等への興味をそそる環境が横溢している。

時間はかかったものの美術館、骨董品店めぐり、鉄斎寺などを案内してもらったり、はては、自宅の茶事に招かれる迄に至った。そのうちいつの間にか金融の相談に迄与かる程の間柄になり成果も挙がった。

しかし乍ら副作用として、元々私の素質の中にある美術骨董への興味を目醒めさせてしまったのである。

昭和四十六年一月、本部勤務となり、東京へ帰ることになったが、引っ越し荷物の中に、家人が見れば唯のガラクタとしか思えない様な骨董品の詰まった行李がふえており顰蹙を買った。

東京へ戻っての本部勤務は支店とは違った責任の重圧はあるものの比較的気楽な立場であった。その故で益々美術骨董漁りに熱が入った。

都内の美術館、博物館、デパートの催場、数ある美術骨董品店等を渉猟した。気に入り、手の届きそうな値段の物は迷わず購入した。手の届かない高レベルの優品は鑑賞に留め、専ら眼の保養とした。

この頃、駒込の骨董品店で北大路魯山人作の〝染付詩文大鉢〟の掘出しに成功した幸運などもあって骨董漁りに益々熱が入った。

またある時、なじみの骨董品店で、一風変わった老人と話を交わす機会があった。秦秀雄と言い、北大路魯山

人とも浅からぬ因縁があり、井伏鱒二の小説「珍品堂主人」のモデルとされるユニークで辛口の美術評論家であった。

初心者と見て、私にアドバイスをくれたのである。

「君は、骨董好きの様だが、骨董は分野が広すぎてキリがない。しかも値が上がっている。君は酒を呑むかネ、酒が好きならば、徳利とぐい呑み（盃のこと）に的を絞りなさい。まだ安く良い物が手に入るよ」との内容であった。以降は酒器集めに熱中した。

しかしこの様な自侭がいつ迄も続けられる筈がない。家計を司る妻から強い不満の声があがった。まだ、わざと避けてきたのだが、自宅住替え資金準備などを質され、自分勝手が許されないことを自覚するに至った。

そこで妥協案として、私の骨董買いは打ち止めとして今後は、茶道具集めに転換することで決着した。茶道具はかなり値が張るので簡単に買うことができない。また妻の認める物となるので質量共に相当絞られることで妻も了解した。

それ以降、長年に及んで茶道具が少しずつ増えていった。資金が不足する場合は、骨董品を下取りしてもらったり、分割払い等で賄った。酒器も下取りに出したが値上がりが大きくなっており助けられた。秦氏の予言は当たっていたのである。

前段が長くなってしまった。本題である茶杓の方へ話を戻さなければならない。

話は前後するが、妻は東京へ帰ってから、裏千家流の正統的な茶道の師匠であるK先生に入門を許され、ご指導により勉強も進みやがて正教授の資格を得るに至った。

そして、現在迄に十数人のお弟子さんを抱える立場になり、自前の茶道具を生かしての茶会も何度か催す様になった。

私と言えば、茶道のお作法からは辟易するも、茶道具や茶道史の勉強を始めた。武者小路宗屋先生のおっしゃる、〝道具茶〟である。

約二十年前から、三戸岡先生のご指導を得て、同人誌〝まんじ〟に加盟させていただき時として茶道関係の拙稿を載せていただいている。また、集めた道具を用いての茶会では、亭主として諸道具の説明など司って、楽しい気分を満喫している。

茶会は、お弟子さん方の勉強の成果を確認する上でも、またお茶友達との交流の面でも必須のものであり誠に興趣が深いのである。

茶道具集めに転向してから、早くも四十年位は経ったであろうか？現在では玉石混交の嫌いはあるものの、数だけは春秋二期に使用する道具類を充足できたと思っている。

欲望は限りないものである。名品や筋の取ったものが

少なくて、如何に「侘茶故に」と、言訳をしても通用しない。

悩んでいるところへ支援して下さる方が現れたのである。その方は妻の茶道の師匠K先生であった。廻りくどい説明となったが、K先生から、道安の茶杓他の名品を譲り受けることになったのである。

結びとして

K先生は若い頃から、厳しい茶道の修業をなされて、裏千家茶道の名誉師範という最高の資格をもたれており（因みにわたしの周辺では、他に名誉師範の存在は、三戸岡夫人のみである）人格識見共に秀れた方であった。

私も妻と連れだって度々訪問させて戴き貴重な指導を受けた。というよりは話題が豊富で男性的かつ楽しい方であって談論風発帰る時間を忘れる程話が弾んだのである。

やがて先生は老齢になられたので引退され、施設での悠々の生活に移られることになり妻を含むお弟子さん達に秘蔵の茶道具を譲って下さったのである。

私共が戴いたのは、本件の道安の茶杓、玉室宗珀（一五七二―一六四一）の禅語の掛物、李朝の黒釉の花入の三点である。いずれも私共の力では、到底手の届かない貴重な品々である。K先生は私共が道具を死蔵することなく、茶会で生かして使うことに希望を託され、名指しで譲って下さった由である。

私共の所蔵品は之等が加わって、一段と厚みが増した。思えば茶道具の生命は大切に扱われれば、永遠といっても過言ではない。之に対して私共の生命は一瞬にしかすぎない。従ってこれら茶道具は所有すると言っても、ほんの一時期世の中からお預かりするだけのことである。やがてはどなたか引き継いで下さる方に無事お渡しする覚悟でいなければならないと心得ている。

茶杓他二点が当家へ来たのは平成十七年一月である。以降、何度か茶会に出陣して、皆さんに鑑賞して戴いている。

K先生は数年前天寿を全うされたが、この茶杓他の活動振りに満足して下さっているものと思うのである。

尚、茶杓以外の二点の道具説明については別稿に譲りたいと考えている。

終

参考資料

千　道安　　斎藤文子　　鳥影社

少庵と道安　神津朝夫　「淡交」平成25年3月号　論文

茶杓銘々伝　高原杓庵　河原書店

茶杓百選　西山松之助　淡交社

茶杓　池田　巖　淡交社

利休大事典　千　宗左他

茶道人名辞典　桑田忠親編　東京堂出版

角川茶道大事典　角川書店

茶道美術鑑賞事典　淡交社

予楽院茶杓箪笥（茶の美術展カタログ）　東京国立博物館特別展

その他

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

信託の歴史世界旅　その二

永田俊一

信託の歴史世界旅は二回に分けて掲載予定で、全体の目次を再掲すると次の通りで、二回目の今回は、三の（五）から終了までである。

目次

一、ローマ法の信託要素の歴史旅からみた信託の歴史世界旅

（一）ローマで

（二）西ローマ帝国滅亡（AC395）に伴うヨーロッパ世界

（三）イスラム世界で生まれ発達したワクフ

（四）西ヨーロッパにローマ法が蘇る

（五）ラテンアメリカ

二、現代世界の信託あれこれ

三、夫々の流れ毎に描く、信託の歴史世界旅

（一）ローマ

（二）東ローマ（ビザンツ）帝国・東欧世界

（三）イスラムのワクフ

（四）西ヨーロッパに蘇るローマ法、大陸法の世界（独・仏）

［以上 前回、以下 今回］

（五）西ヨーロッパ、大陸法の世界その後

（六）英連邦形成と信託の伝播

（七）東アジアへ

（八）南米ラテンアメリカへ

（九）東欧の世界、その後

（一〇）河口で出会う流れ

それでは進めて行くこととしよう。

三、夫々の流れ毎に描く、信託の歴史世界旅

（五）西ヨーロッパ、大陸法の世界その後

（1）二〇世紀後半まで

（四）西ヨーロッパに蘇るローマ法、大陸法の世界

（独・仏）では、大陸法はローマ法上の概念であるフィドゥーシア及び信託遺贈の双方の影響を受けてきていることについて、ドイツでは「トロイハント」の概念形成が進み、ローマ法的信託及びゲルマン法的信託遺贈両要素が影響しあいながら、所有権は受託者に移転しないが、機能的に見て信託に類似する場合を含み発展したこと、そしてフランスでは、一八〇四年に制定されたナポレオン法典により信託遺贈は明文上は消えてしまったこと、を述べた。

（閑話休題）

法と実際の綾なす関係変化の中で、振り返れば歴史は筋道を流れて行くが、法と実際が図ったように同一であることはむしろ稀で、互いにはみ出して流れていることの方が多いと思われる。そのずれが耐えがたくなると流れが整序され、また息苦しくなると別の流れを作り出す、それを繰り返しながらも歴史は大括りして一本の流れで語られる。そんな観点からの例として、このフランスの叙述絡みでエピソードを。

○一六七三年パリ初演のモリエールの『病は気から』から
医者から病を暗示された主人公アルガンが若い後妻と前妻の娘の前で、後妻に財産を残す遺言状を示すも、パリ等では法的に遺言者の意志は無効、生存者間贈与も子供がいると駄目と公証人に言われ、怒ったアルガンに公証人が裏の手を囁く。「奥様と親しい方に、遺言状で譲りたいもの全てを贈与し、あとでその方がそっくり奥様にお返しになる、という寸法です・・・」と。

慣習法の地域では当初遺言が難しく、他地域で可能な方法を使おうとしている。ただ一八世紀になると、慣習法地方でも遺言は一般的になり、両地域の信託遺贈の使い方も差異はなくなった。

○ところが既述のように、アンシアンレジーム崩壊後の一八〇四年制定のナポレオン法典で信託遺贈は明文化されず消えるが、現実にはバルザックの『ゴプチェック』(1830) に見られるように、『病は気から』的な使われ方は残っていた。ただ、「死後効を生じる委任」として明文化されるのは二百年後の民法改正を待ってのことであった。

さて寄り道をしたが、こうしたジグザグの背後に、進歩といった大きな流れの方向の中で接合しながら見ないと旅の航路を見誤るといったことも感じつつ、元の流れの話しに戻ろう。

背景をなす大陸法における所有者についての認識は、当該事物について財産権に関連するすべての権利を享受する。対照的に、イングランドで発展したコモン・ロー法域はローマ法の影響を殆ど受けなかったので、封建制における財産権理論により、当該財産において同時併行的に複数の財産権が存在し得る。即ちそれぞれの財産権が一つの財産（または財産の集合体）における異なる権利の総体を為すことが認められていた。

このような法理上の違いから、ヨーロッパの大陸法の国では、リヒテンシュタインで一九二六年にイギリスの一九二五年受託者法に倣った信託立法がなされたほかは、信託はローマ法の伝統と相容れないと考えられていた。二〇世紀初頭にアメリカの信託を研究したピエール・ラポール（仏）の業績も、ケベックや中南米には一定の影響を及ぼし、日本でも四宮教授などの研究で注目されもしたが、ヨーロッパには大きな影響を与えなかった。一九七三年にイギリスがEECに加盟した時点でも、ヨーロッパでは信託に対する関心は高くなく、イギリスで設定された信託に対し、大陸法諸国でいかなる効果を与えるかが問題となった程度であった。

純粋な大陸法の法域、すなわち歴史的にコモン・ローの統治に服した事のない法域は信託を契約または無名の対人的義務と考えてきたとされる。大陸法の法理および法体系の範囲内において、AによるBの排他的利益のための財産管理は契約による当事者の結合であるとの理解が論理的かつ賢明であるとされてきたからと考えられている。

（2）近年のヨーロッパの信託という観点で

ところが一九八〇年代に入ると、大陸法諸国の間でも信託に対する関心が高まってきた。大きな契機となったのが、一九八五年に成立したハーグ信託準拠法承認条約である。起草開始当初の目的は、英米法圏の信託を巡る紛争が大陸法の裁判所にかかった場合の問題に対処することにあった。

しかし、最終的には大陸法の信託類似の制度も取り込んだ規定内容となり、その結果、同条約二条における信託の定義は、「ある者すなわち委託者が、生存者間または死亡とともに成立させた法的関係であって、資産が受益者の利益のためまたは特定の目的のために受託者のコントロール下に置かれた場合」、と英米の信託よりも広い内容を包含する規定となっている。これは、目的信託や委託者が信託財産に対する実質的コントロールを及ぼす信託をも包含し得るもので、論者によっては「形のない信託」と形容する向きもある。

イタリアやオランダなどハーグ条約を批准した諸国では、信託の実務が発展し、国内で信託も用いられるようになった。フランスでは二〇〇七年に民法典にフィ

フリカ・スリランカといった諸国は、いずれも大陸法の影響の強い国や地域にイングランド流の信託が取り入れられた国であった。いわゆるコモン・ローと大陸法が混在している法域は、歴史上ある時代にはイギリスに支配され、また別の時代にはスペイン、フランス、ドイツのうちいずれかに支配された国であり、そしてそれらの国が支配を行う際に自国の法を導入した（コモン・ローの様式が常に近くに存在し、コモン・ローの国の支配者が足を踏み入れたことのない法域においても信託の考えが採用されたところもある。）。このような大陸法とコモン・ローの影響が混合した国と地域を混合法系（mixed legal system: mixed jurisdiction）と呼び、大陸法系とコモン・ロー系と並ぶ第三の法系として位置付けようとする学問的試みは、二〇世紀初頭からなされてきた。こうした学問的営為が、欧州統合と私法の統一の試みに合流することになり、とりわけ一九九〇年代以降活性化してきたと言われている。

混合法系に属する国々における個々の信託法については、いずれの国においても大陸法系の私法体系上にインググランド流の信託が載っている、という特徴を見出すことができるとされる。コモン・ローの上に大陸法が載るという逆の形式はみられず、これは相対的に後発のイギリスが大英帝国を形成し、その後影響力を強めた経緯を

デューシーの規定を設けるなど、国内立法もなされるようになった。一九九九年には、ヨーロッパの研究者を中心に、欧州の信託法原則の集大成の試みが公表された。財産承継の分野において信託に対する警戒が強かったヨーロッパでも、一九八〇年代以降は、主に金融・商事面で信託の活用が活発化し、信託に対する原理的な拒絶反応はかなり後退してきた訳である。

フランスのフィドゥーシー（フィドゥーキア）では受託者と第三者との間における不法な契約は無効であり、当該財産をフィドゥーシーの資産に回復することが出来るとされていることは、興味ある革新とされている。またハーグ信託条約の条文の助けを受け、信認関係に基づく所有、信託資産、並びに受託財産の分別を考える等、コモン・ロー法域の法律家が「信託」として理解しているものへ向けた新たな動きも出てきたようである。

こうした展開に、イギリスも無関係ではありえず、一九八七年にハーグ条約を批准し、一九九〇年代にはオーストラリアとカナダもこれに続いた。またさらにイギリスと憲法上の関係のある諸地域として、カリブ海からバミューダ、英領バージン諸島、イギリス周辺からガンジー、マン島、ジャージー島、さらにジブラルタルなど一三のオフショア諸国が批准を受け入れた。

一方スコットランドや、ルイジアナ・ケベック・南ア

反映しているとされる。これらの国の信託法は大陸法を基礎とするため、コモン・ローとエクイティの二重所有権を避け、債権的構成をとることが多いと考えられている。他方で、混合法系の特徴は、これもイギリス植民地であった歴史的経緯から、イギリス流の民事・公益的信託の利用が多いと分析されている。

「イギリスの植民者は、信託を法的・知的カバンの中に詰めて持ってきた。」と、比喩的に説明されることもある。植民地の法律家にとっては、信託とはすでに設定された現実であって、否が応でも既存の法制度に取り入れなければならなかったということだったのではないかと考えられているようだ。

こうして民事・公益を中心としたイングランド信託の伝統が持ち込まれた混合法系でも、近年は商事的利用を重視する流れが強まっている。これは、金融・商事目的の利用を中心に、信託法制を進めつつある一九九〇年代以降のヨーロッパ大陸にとって、一つのモデルとなり得るものだったと考えられている。また、こうした欧州の信託法制への影響を念頭に、混合法系諸国の動きも活発化しているとされている。

（六）英連邦形成と信託の伝播

（四）・（五）では、西ヨーロッパ・大陸法の世界の信託の流れを傍流として追ったところだが、ローマ法を再評価継受して行く段階で、所謂大陸法と英米法の分岐が生じたことは既に触れたところである。曰く「その理由の一つは、ローマ法が再発見された当時、イングランドでは既にコモン・ローが成立し、発展を始めていたという事実である。・・・この結果、イングランドの制度であるコモン・ローは、ローマ法を基礎とする大陸法と並立して発展した。」

また、信託の歴史の世界風景も基幹道としての流れは、ローマの信託遺贈―ゲルマンのザルマン―イングランドのユースからトラストへの発展―アメリカでの継承発展―日本への到来、に据えており、これについての説明は既に行っている。

そこでここでは、英国から米国ルートの分岐点に戻って、英国が大英帝国を作り上げて行く過程で、植民地として組み込まれていった国々、そしてその後二十世紀後半所謂オフショア市場として発展した英周辺の国々の旅を試みたいと思う。

（1）植民地

一五世紀半以降植民地経営に先行した大陸法すなわちローマ法の影響を受けたヨーロッパ諸国の支配体制を、イギリスの進出がコモン・ローと共に襲った経緯がある。

イギリスの信託が影響を与え根付いて行く中で、その国の信託が形作られて来たことも念頭に置いておくことが、今日の世界的な信託の多様性を理解するのに必要でもある。以下具体的にみて行こう。

（イ）カナダ

カナダは、仏英戦争後のパリ条約により、一七六三年イギリス領となり、一八六七年に自治領になり、一九三一年ウェストミンスター憲章で英連邦が成立し実質独立する。その法体系は全般にイングランド法の影響を受けている。

ただし、ケベック州はフランス法の影響が強く独自の民法典を持った(1866)。一八七九年に信託立法がなされ、それが民法典に取り込まれたが（1888）、信託を民法体系上どう位置づけるかに不安定な状況があり、一九九四年の民法典改正で、受託者を他人の財産の管理人とするとともに、信託は受託者個人の資産とは独立かつ分離された充当資産（パトリモニー）と位置付けられた。こうした経緯から、カナダの中でもケベックはスコットランドやルイジアナと並び、混合法系の法域の一つとされている。

（ロ）東インド

①南アフリカ

オランダ東インド会社の支配下にあった南アフリカは、一八〇六年イギリス領となった。実体法はローマン・ダッチ法（オランダで法典化が行われる前の、内容的には大陸法である判例法体系）を維持しつつ、裁判所や統治機構はイギリスの制度が導入された。二次に亘るボーア戦争後自治領となる（1910）。

南アフリカの裁判所は、二〇世紀初頭に信託を巡る紛争をローマン・ダッチ法の判例法にいかに取り込むか腐心した。南アフリカ信託は受託者の公的性質を強調するところに特徴があるとされている。

②インド

イングランドの判例法を法典化する作業が一八三〇年代から行われ、信託についても、ニューヨーク民法典草案を参考にしつつ、イングランド法に沿った法典化が進められ、一八八二年に信託法典が成立した（受益者の権利を物権的に理解する立場は取っていない。日本の信託法制定にも参考とされた）。

インドは一九四七年独立すると共に英連邦に加入する。また、インド信託法典は、以前オランダに支配されていたセイロン（現スリランカ）にも移植された（1917年信託条例）。

（ハ）オセアニア

①オーストラリア

一七七〇年からニューサウスウェールズとして入植が開始され、一七八八年からは、流罪植民地としてイギリス人の移民を受け入れるようになり、一八二八年に全土がイギリスの植民地となった。一九〇一年にオーストラリア連邦として自治領になる。オーストラリア法は、イングランド法の影響を強く受けており、エクイティ法理は、ニューサウスウェールズ州で伝統的なエクイティ裁判所が残存したため、今日まで高度な信託法理が発展した。

一九七〇年代ごろからは、オーストラリアの信託法判例や概説書が、イングランドやコモンウェルス諸国の判例法理や学説にも影響を与えるようになった。一九八六年にはイギリスとの政治的関係が正式に切断され、オーストラリアの判例法も、特に連邦最高裁長官アンソニー・メイソン卿の下で、独自の法発展(1987-95)が進められた。

②ニュージーランド

一七六九―七〇年に移民の流入が始まり、一八四〇年イギリス直轄植民地となる。一九〇七年イギリス連邦内の自治領となり、一九三一年ウェストミンスター憲章を経て一九四七年に正式に独立した。

ニュージーランドも、イングランドと長らく判例学説のレベルで関係をもってきた。医療過誤の無過失補償や、雇用者と従業員の紛争についての仲裁強制などリベラルな立法で知られ、判例法理も二〇世紀後半に徐々に独自性を強めていき、英国枢密院の上訴管轄は二〇〇〇年を最後に廃止された。

（2）オフショア諸国

（1）で当初英国の植民地となり、一九世紀から徐々に自治権を拡大し、ウェストミンスター憲章（1931）によってコモンウェルスを形成し、順次実質独立したカナダ・南アフリカ・オーストラリア・ニュージーランド（ニューファウンドランド・アイルランド自由国も連邦に）の諸国及び一九四七年に独立すると共にコモンウェルスに加わったインドへの信託の伝播について述べたが、それに続きその延長としてオフショア信託の展開をみておこう。

「オフショア信託」とは、税率の低い海外のタックスヘイブン（租税回避地）と呼ばれる国・地域で設定された信託のことを言う。その利用は税の回避にとどまらず、財産保護・債務者保護・委託者支配権保護等様々な仕掛けがあり、むしろオフショアと呼ぶに相応しいものである。それは、主として大英帝国の歴史的遺産の上に形成されているシステムと言え、そのシステムを担うのがオフショア諸国である。

有名なケイマン始めカリブ海諸国の対象国、クック諸島・ナウル等のオセアニア・太平洋の対象国、セーシェ

ルなどのインド洋の対象国、マン島・ジャージー島等大西洋の対象国の大半が大英帝国の歩みに関係している。

カリブ海の独立国は、ジャージー島・マン島・バージン諸島などの英王室属領と併せて、所謂オフショア諸国を構成している。これらの国では、一九七〇年代から国際的な資金誘致のため、新たな形の信託立法が行われてきた。

オセアニア・太平洋では、ナウルが先駆けて一九七二年に立法を行い、一九八四年にクック諸島が続いた。

最初の包括的な国際信託法制として影響力の大きいのはカリブで、一九八九年のバミューダにおける立法であった。これに続いたところを挙げると、バージン諸島が一九九三年、バハマが一九九五年、ジャージー島が一九九六年、ケイマン諸島が一九九七年、それぞれ特別の信託立法を行っている。

オフショア信託は、一九七〇年代から資産や現金の国際的な流れが加速する中で、会社のオフ・バランス取引や資産流動化、富裕層の資産運用に利用されてきた。オフショア諸国は、税制上の優遇措置などで競ってこうしたビジネスを誘致しようとしたし、それは旧植民地を経済的に自立させたいイギリス本国の意向にも適っていた。

これらの信託には、イギリスの信託原則から逸脱しているものが少なくなく、情報提供義務を制限したり、受託者責任を限定したり、公益目的でもなく受益者もいないノンチャリタブル（非慈善の）目的信託などである。英国内では同様の信託は無効とされる可能性が高いだけでなく、オフショア諸国で設定された信託をイギリス国内で承認執行出来るか疑義が表される場合もあると言われる。ただ、これ等諸国の多くからは、枢密院への上訴可能ということ、またイギリスでもオフショア諸国の判例は参照されていることから、ある意味両法体系は一定の関係を維持しているということはあり、オフショア信託は国際ビジネスにおける信託法理の行方を左右するとも言われている。

オフショア信託が盛んになったと同時期に、ハーグ信託準拠法承認条約が成立した（1985）。多くのオフショア諸国もこれに加盟しているが、信託の準拠法や承認の問題は、これらの国のオフショア戦略にとって重要な意味をもつ。例えばケイマンで認められているようなノンチャリタブル目的信託（非慈善の目的信託）の存在が必要とされるなら、米国では州による立法が必要（二〇〇〇年統一信託法典を採択している州は可とされている）とされているし、コモンウェルス諸国においても同様に考えられている。

このような非慈善目的信託が、公的機関による登録を受けない場合には、マネーロンダリングの手段として悪

用されることが憂慮されているところである。近年、タックスヘイブン法律事務所利用の各国政治家等の解明公表で有名になったパナマ文書事件や、米国の外国口座税務コンプライアンス法のマネロン調査報告要請等問題が顕在化し、対応を迫られている。

（3）イングランドに併合されたスコットランド

ところで大陸法の旅で、一九八〇年代入り後の大陸諸国の信託に対する関心の高まりの大きな契機が一九八五年に成立したハーグ信託準拠法承認条約であり、コモンウェルスの諸国も同法を受け入れたと述べた。スコットランドやケベック・南アフリカ等大陸法系に英流の信託が取り入れられ、所謂混合法系も巻き込んで、欧州統合と私法の統一の試みが一九九〇年代以降強まったと言われる、とも述べた。元々の英連合王国の一員たるそのスコットランドについて、この英連邦の旅の始めに遡って、ここで補足しておきたい。

スコットランドの法制度・教育制度・裁判制度は、イングランド・ウェールズとは異なる独自性を維持している。とりわけ法律に関しては、ローマ法の影響が強いといわれる。信託は知られていたが、信託法はイングランドとは独自の発展を遂げ、用語からしても独特のものを使用している。

そして、独自の信託類似の制度を維持してきているのではあるが、一九世紀以降はイングランドの影響も強まってくることになる。ただ、逆に二十世紀後半以降その独自性を強調する意味で混合法系として論じられる。しかし二十一世紀に入ると、国際的な商事化の流れの影響もあり、スコットランド法律委員会も信託の全面的な改正に着手し改革提案をするようになっている。

（閑話休題）ユースの起源説

さてこれまで、ローマ法におけるフィドーシアと信託遺贈という信託要素の底流がどのように伝播してきたかを、一と三の（五）迄では主に取り上げてきた。また、比較軸の本流をユースを源流として設定している。この三の（六）では本流に連なる支流にあたる流れに戻ったので、源流のユースについて、流れの継ぎ穂という意味でも、信託遺贈―ザルマン―ユースにおけるユースの起源と言う意味でも、ユースの起源説に触れておこう。

イングランドで独自のユース―トラストの発展があったわけだが、信託が確立した後、一九世紀になると信託の起源、ユースの起源について論争が起こった。

起源説としては三つあった。一つは、ローマの信託遺贈（fideicommissum）あるいは用益権（usus-fructus）の影響説、二つは、英国固有説、三つは、ゲルマン民族法のザルマン（Salman）

と共同起源説、この三つである。

（イ）ローマ起源説

ノルマン・コンクェスト以来、土地を協会に寄進する風習が一般に広まり、法人である教会に土地が直接譲られると国王や領主は封建制度に基く負担を強制出来ず所謂死手地となった。そこでこれを禁ずる死手法が制定された（1279年）。エドワード三世時代の末期になりこれを避脱する為考えられたのが、直接譲渡せず土地の譲渡証書取得の方法で譲渡し実質取得できる方法であった。時の宰相（聖職者でもあった）がこれをローマ法のfideicommissum に当たるとみなし、アウグストゥス帝がしたようにこれを強制した。また、他人の所有物を使用し、その果実を取得し得る権利（usus—fructus　所謂用益権）にあたるとする説もある。

（ロ）英国固有説

これに対して固有説は、ローマ起源説は実例を指摘しているが、実質的には所有権の形式に類似点はなく、表面的類似点を以ってローマ法伝来とは言えないとしてこれを否定している。その上で、ローマ法の信託遺贈は本質的に遺言法の領域の話であり、初期のユースが遺言絡みのものがあったとしても希有なことであったこと、用語も fideicommissum を使わず ad opus や ad usum を使っていること等を説明している。

そして、大法官達が最初から相続の案件等につき英国土地法の規則を準用、受益者の権利を土地についての物権に酷似するものとして扱ったこと等を理由にしている。

（ハ）ザルマンとの共同起源説

当初はその基本観念は、ユースは一定の目的のために財産の移転を受けた者がその目的遂行の義務を認識することであり、ザルマンもゲルマン古法で同様の義務の効力を認めた機関であって、英国においても大陸においてもかかる観念より発展したものである。しかして、復活評価後のローマ法の影響の度合いが大陸とイングランドでは顕著に違い、イングランドではその後独自に固有の発達をユースとして遂げたとする。

（七）東アジアへ

次は東アジアの支流の流れを垣間見ておきたい。

大英帝国展開と信託伝播で東周り途次たるインドの信託法制定は一八八二年であった。一方既述の西周り米国経由の日本でのそれは一九二二年であり、カリフォルニア民法典とインド信託法を参照したものであった。その後信託は、東アジアでどういう旅をするのだろうか、少しく複雑である。

第二次大戦前後に分け中国・台湾・朝鮮・香港・シンガポールでその流れをみてみよう。

（1）戦前

（イ）中国

清朝末期、上海租界の土地は条約で外国人に永代貸与されており、その権利証（道契）は正確・精細なものだったが、中国人は旧来の権利証（田単）しか得ることが出

来なかった。「掛号商」という外国商人がその名義で代わりに道契を取得、受託証書を持つ実質所有者の中国人は、これを使って土地売却等を行った。いわば不動産信託に当たり、東周り英国流であった。

ただ初めて一般的な「信託」が導入されたのは、一九二〇年代、国民党政権下で富裕層が資産運用の手段として利用したのが切掛けだった。第一次大戦勃発（1914）から戦後（1922）にかけては工業資本の発展期であり、上海を中心として各種商品の交易所即ち取引所が創設された。これに触発され一九二一年（民国一〇年）、上海通商信託公司の創立を嚆矢として、五～七月の間に十二社設立という狂熱を見る。これは米国流信託会社が日本経由で入ったものだが、真正な信託会社というよりは投機目的の設立であったから、直後の恐慌で二社を除き破綻する。その後一九二八年（民国一七）から一九三一年（民国二〇）にかけて、上海の国安信託股份有限公司の創立を先駆として、上海等諸都市の信託公司設立や各地の大銀行の信託部設置が相継ぎ、発展を見て支那事変直前の一九三六年には上海に信託公司が十一社になっていた。

（ロ）台湾

日本の植民地時代、一次大戦を機に経済も活況を呈し、一九一七年台北で設立の東華信託株式会社を嚆矢として、日本同様相継いで信託会社が設立され一九二〇年には二四社になった。しかし違法な組織も多く経営悪化から、一九三四年時点で存続信託会社は数社になった。日本の信託法成立の一九二二年には、統治は「一国二制度」から「内地延長主義」に移り、多くの法制度は日本国内法が適用になるが、信託法は適用されなかった。

一九三六年以降、中小の信託会社が増え一九四二年には二三社になったが、日本の戦時統制強化から、一九四四年より日本の信託業法が施行され、当時大手の信託会社であった三社は強制的合併で台湾信託株式会社と改名、台湾銀行、商工銀行等四行が五五・五％の株を持ち事実上は台湾銀行支配下に入った。

（ハ）朝鮮

一七世紀以来農民が税軽減の為土地の管理を領主に託す「投托」なる信託類似の仕組があった。奇しくも朝鮮王朝がそれを廃した一九〇七年（明治四〇）以来信託会社の数は増加（1910 日本の朝鮮併合）、一九三〇年（昭和五）には二九社となる。翌年朝鮮の実情と内地信託事業政策にもなるべく順応させるため朝鮮総督府は、「朝鮮民事令に依る信託法」「朝鮮信託業令」を公布、これにより改めて信託会社の免許を得たのはその内五社であった。

併せて新法令に基づき朝鮮信託会社に免許が与えられ、朝鮮銀行及び朝鮮殖産銀行が株の七五％を所有した。

一九三五年（昭和一〇）末迄には前記五会社を漸次合併し、朝鮮の信託事業は一社独占となった。

（ニ）香港・シンガポール

東周りで英国傘下にあった香港では一九三四年受託者令が、シンガポールの信託法は戦後だが、いずれも一九三五年英国受託者法に倣い制定されたものである。

（2）戦後

（イ）中国

大戦後大陸では一九四九年中華人民共和国が成立、国民政府が経営していた中央信託局、中国農民銀行、交通銀行、中央合作金庫等に附属する信託部を接収したり、民営の信託会社を営業停止にしたりして、信託は姿を消すことになった。

その後中国では改革開放政策に乗り、一九七九年の中国国際信託投資公司設立を嚆矢として、爾後一五年で信託投資公司が濫立、千社近くを数えるようになる。しかしこの間法的根拠は薄く信託の定義規定すら欠き、中国人民銀行による銀行との競合規制もあり、第二の銀行として銀行活性化業務や輸出入業務・不動産開発・リース等非銀行業務更には投機的投資にも手を出すに到った。ために信託投資公司の債務超過・倒産が相継ぎ、一九九八年には広東国際信託投資公司が、当時国際倒産事件では史上最大の債務額で破産した。この動きを踏まえ、信託業法たる「信託投資公司管理弁法」が二〇〇一年施行され、同年基本法の中国信託法が制定される。（この年WTOにも加入）

（ロ）台湾

一九四七年中華民国の統治に復帰、政府は台湾信託株式会社を接収し台湾信託股份有限公司に変更、更に華南銀行を併合し信託部を設け、その業務を引き継いだ。一九七〇年代にかけて資本形成を加速し経済発展を促すため、民間投資信託会社の設立を促進し開業が相継ぐ。そして、より米法に倣い一九九六年信託法、二〇〇〇年信託業法が制定された。法的には専業信託会社も可能だが、現在全ての信託業務は銀行の兼営によるものとなっている。

（ハ）韓国

戦後も旧法が引継がれたが、一九六一年の韓国信託法、信託業法、担保附社債信託法（証券投資信託業法は六九年）も日本の信託法を踏まえたものであった。更なる発展を踏まえ新法が出来るのは二〇〇一年になる。

（ニ）香港・シンガポール

香港は九〇年代になるとファミリイ信託に加えオフショア信託、返還（1997）後はオフショアファミリイ信託が増加した。シンガポールも一〇年で香港に追いつき、二〇〇四年英受託者法（2000）改正に倣った改正法が通る。

（ホ）南米ラテンアメリカへ

一で、ローマ法要素の伝播という切り口での検証の部分については述べたところであるが、本格的伝播の流れは本流である米国からの影響が本格化したのは二〇世紀に入ってからである。そこでそれ以降は勿論、それ以前も合わせここでその流れを全体的に整理して見ておきたい。

南米には先住民インディオが、熱帯高地周辺には高度農業生産力と多数人口を抱える階層社会を、広大な周辺熱帯雨林・サバンナ・温帯草原には狩猟・採集・低度農耕の小部族社会を持つ独特の文明社会が発展していた。ヨーロッパの新大陸発見が突然その存続発展に終止符を打ち、南米は一五世紀末以降スペイン・ポルトガル・フランス、ラテン諸国の植民地と化す。

そして一九世紀初め、仏革命を契機にこれら宗主国から独立を果たした共和国諸国が、以後ラテンアメリカとしてその歴史発展を担うこととなった。

従って法域的には、植民地時代（一五～一九世紀）には大陸法系の旧宗主国の影響を受け（地域の広さでいえば圧倒的にスペインついでポルトガル）、各国独立後はフランス民法典の影響も幅広く受けたが、信託の要素も入り始める。そして英法承継の米国が強勢となりその影響を大きく受けるのは二〇世紀に入ってからになる。

これまでの研究では植民地化以前のインカ等先住民国家時代には信託の萌芽的なものも見るべき指摘はないようであり、植民地時代も宗主国は大陸法諸国であったから、信託のラテンアメリカへの旅は、各独立国の基盤が固まり新法制の整備検討に端を発している。丁度西欧でも先に見たように大陸法諸国に信託制度を完成させた英国からの影響が次第に強まった時にも当たっており、新法制整備にその影響が入り始めた訳である。そして信託法を持つ米国の影響力が強くなるにつれ強まり、旅のスピードはより速まった。そこで、大陸法すなわちローマ法の影響ということで、西欧の旅をした時と同様、ローマ法における信託要素から見てゆくと、先ずは旅の当初の様相が浮かび上がってくる。

西欧の旅の際「信託との関連で言うと、大陸法はロー

伝播させる旅の出発は、米国からパナマ・メキシコルートでということになる。

米国の強い影響下にあったパナマで一九二五年、法律家アルファーロ博士の草案公表（1920）を受けて信託法が起草成立した。米国に隣接するメキシコは一九世紀末ディアス政権が誕生、ようやく政権が安定、急速に経済発展を遂げ、一九〇五年には米国で鉄道建設資金を社債調達する担保設定に信託会社導入を企図し銀行法改正案を提出する。しかし金融恐慌や独裁化政権に一九一〇年民衆が蜂起し内戦は一〇年に及び、法案は実現するところとならなかった。

その後政情が落ち着き、新大統領下での金融制度検討で一九二四年には信託銀行創設の動きが始まり、一九二六年にはパナマ法に倣い法律家パブロ・マセドによる「信託銀行法」が、追って「信用機関・銀行設立一般法」も成立する。

ところが、以上のパナマ法もメキシコ法も実際にはこれに基づく信託は使用されず。結局一九三二年の「信用機関一般法」（この中で受託者を規定）及び「証券・信用取引法（この中で信託を規定」の成立を待つことになるが、その辺の事情は次のようかと考えられる。

当初の「信託銀行法」では、信託を撤回不可の委任行為とし、「委託者から移転された財産を、受託者たる銀

マ法上の概念であるフィドゥーシア及び信託遺贈の双方の影響を受けている。」と述べた。ラ米の表現では Fiduciae 及び Fideicommisum ということになる。前者が債務返済まで保証のため債権者（受託者）が財産を自由管理し返済とともに返す、後者は受託者が移転された財産を第三者の利益のため所有し管理処理するものである。

ナポレオン法典はローマ法から受け継いだ信託遺贈を旧体制の象徴として否定、即ち fiduciary の語が消えたことは前述したところである。折しも仏革命の動きを受けて独立運動を推進したラテンアメリカ諸国では、その法整備に当たってフランス民法典の影響を強く受ける処となった。

従って一般的には信託採用の動きは無かったが、チリ（1855）とコロンビア（1887）で起草したアンドレ・ベローがアングロサクソンの制度にも通じていたため、信託の完全な所有者ではないとしつつも fideicomiso (fiduciary) と受託者を定義し、ラテンアメリカの信託である Fideicomiso を民法上に先ず実現した。因みにチリはその後独立した信託法は制定していないが、民法上に今の姿へと完成させている。

そしてラテンアメリカに信託法で Fideicomiso を広く

行は、委託者の意思に従い、受益者と呼ばれる第三者の利益のために管理処分する」と規定されていた。委任だと大陸法の立場にも馴染み所有権は移転せず撤回可能である。ところが定義された委託者は財産移転しそれを受託者が管理処分することになると単一所有権を採る大陸法国には抵抗感があった。

その後出た信託の財産所有権を、同じ目的下での受託者の法的所有権と受益者の経済的所有権に分ける拡張所有権論も英米信託の二重所有権論と近く批判され、数年後著名な仏法律学者ルポールの「信託財産は誰からも独立し、法律と公共政策の範囲で自由に形成される」という所有主なしの特別目的財産論が紹介され影響を与えたが、立法者の受け入れまでは行かなかった。

しかしやがて受託者の特別目的財産論となり、マセドが、委託者は信託財産に完全に所有権を渡すわけではないと説明、大陸法の財産権概念との共存が図られ、新法で認められ信託業務としても具体化することになったと解される。

これがラテンアメリカの信託概念 Fideicomiso を以って、その後立法化の動きは、北から南へ、コロンビア（1941）ホンジュラス（1950）ベネゼエラ（1956）コスタリカ（1961）ブラジル（1965）グァテマラ、エルサルバドル（1970）ボリビア（1977）パナマ（1984）エクアドル（1993）アルゼンチン（1995）ペルー、パラグァイ（1996）ウルグァイ（2003）と波及してゆくことになった。

（九）東欧の世界、その後

先に、三、（二）東ローマ（ビザンツ）帝国・東欧世界、で「東ローマ（ビザンツ）帝国は、攻防・盛衰を繰り返しながらも一四五三年まで続いた。法的にはその影響を受けていた北のスラブ系等諸国も含め、この間特に信託法制化的動きは、この東欧的世界ではなかったと推察される。」と述べた。その後東欧に変わらず覇を捉え続けたのはロシア帝国（一部鼎立相手となったのは、リトアニア、ポーランド、オーストリアと変遷はあるが）で、封建制の時代には特に顕著な動きは手元では窺われない。

そこで時代は一気に飛ぶが、東欧圏の信託事情に若干触れておこう。

東欧圏の多くの国では、一八～一九世紀封建制から近代化が行われる時期に法整備が図られ、フランス法、ドイツ法の影響が強く、基本的に大陸法国と位置付けられる。なお、近代化以前における信託類似制度の利用として、王侯貴族による家産の継承や相続手段の一つとして信託遺贈（fideicommisum）の利用は見られた。第二次大戦後は社会主義国になり、私的財産権そのものが否定

された。一九九〇年以降の民主化後も、信託制度の導入は、大陸法をベースとした私法体系の整備が図られた後で、国家的プロジェクトの管理、年金、投資スキーム等の分野で法の手当てが図られていった。民法典の中に信託に関する条文を追加するとともに、個別法や規制でそのような仕組み全体を規制しようとする場合が多い。西欧の大方の大陸法国と同様、英米の信託の二重の所有権を認めた国、匿名性を認めた国はない、と見られる。

（一〇）河口で出会う流れ

旅立ちに当り「世界の信託あれこれ」で現況紹介させてもらった上、英国を源流として本流・別流・傍流・支流といった形で、信託の世界風景の旅を続けてきた。夫々の流れを辿り様々な風景を描き広がった信託が、世紀の変わり目を挟み、特に経済金融社会のグローバル化急進展の中で、その相互依存関係や統一志向から、流れを重ね大河となって共通の海を求めて河口に向かおうとしているように感じられる。この現況に近付いて来る道行風景から、今後世界の信託が進むあるいは進むべき方向を考えてみたいと思う。

（1）道行の風景描写としては世界的な信託法規革新の動きがある。

英国では、一九九〇年（平成二年）代末から金融サービス庁の創設や金融サービス業を包括し市場取引をも包括した金融サービス市場法の成立等総仕上げが行なわれ、二〇〇〇年、七十五年振りに受託者法も新たになった。米国では、九九年（平成一一）末に金融サービス現代化法（GLB法）が成立、金融業の相互乗入れが実現し、ビジネスや生活の著しい環境変化に対応するため信託規制の包括的な見直しが進み、信託法の現代化、各州の信託法の統一を働きかける統一信託法典の採用や判例統一化のための信託法第三次リステイトメント策定作業も進行した。

EUでは九九年ヨーロッパ信託法原則が取り纏められ、各国法制度の中へ調和的に受け入れられるべき信託原則が提示され、フランスやルクセンブルグ等では、こうした潮流の中、法改正が行なわれた。このように欧米でも日本でも金融自由化の仕上げが、金融サービス法的制度構築と相伴って、信託法規の革新の動きにつながったわけである。

このように米国や英国旧植民地では信託の法典化が進められ、各国で新たな信託の創生発展があり、クロス・ボーダーの利用や係争そして研究議論が活発化して来た。それがEUの信託法原則との関係や、オフショア信託の取り扱い議論、新信託商品流入に伴う係争調整の拡がり等各国信託法との調整議論に繋がると共に、煩雑な判例法への自国内の批判もあり、英国では受託者法に留まらず信託法そのものの成文法化検討と合わせ議論が続けられている。国際法学の泰斗溜箭教授がいみじくも「世界各地で展開した信託が、今度は母国イングランドの信託に影響を与える現象が見られる。」とされる所以のところである。

流れを振りかえると「英国を源流として本流・別流・傍流・支流といった形で夫々の流れを辿り広がった信託が、ここへ来て流れを重ね大河となって共通の海を求めて河口に向かおうとしているように感じられる。」との感を強くすると言うことである。

（2）少しく世界の信託が今後進むないし進むべき方向を考えてみたいと思う。

世紀の変わり目を挟み、特に経済金融社会のグローバル化急進展により、ヒト・モノ・カネのクロスボーダーでの行き交いが急速に頻繁かつ重層的になって行く中で、その相互依存関係や統一志的向から平準化調整が進み、信託に限らず、グローバルスタンダードが制度的に形成されないと、円滑に行き交う平和な世界は展望できないという自然の法の摂理が看取される。そしてそれを支える世界の人々が理解し合い強い絆で結ばれる心の在り様もグローバルスタンダードとして共有が必要となる。即ち、国際化が急激に拡大・深化し、交易・交流の範囲が飛躍的に広がり経済発展を地球規模で促す一方、他方で世界の何処かで社会的経済的困難・紛争・政治課題を日々つきつけられ、一触即発の危険と隣り合わせの時代をどう乗り切るか正念場にある。新たな「形」と「心」の形影相添う国々・人々の関係を作り上げることが喫緊の課題であり、信じて託しあえる器作りに国際的なスタンダードを論じることが喫緊の課題になっている。

そして国際的なスタンダードを論じていく場合、改めて注意しておきたいのは、「心」そのものについては、よほど腹をすえてやらねばならないということである。民族的違いの残る神性の宗教とは別に、実社会の行動や心構えとしての絆を信頼の精神・法理に育て上げ、世界に流れを作り同じ海に注ごうとしている信託。その上俵の上で、国際魂国際才を切磋琢磨し合い互いが納得する「国際的スタンダード」を共有してゆくのが、自然の途ではないかと思う。

新しいIT・デジタルの時代が来つつある。あるべき論もそれを踏まえて論ずる必要があろう。信託の土俵の上でと言ったところだが、信託は元々信頼の三角形の容

器であり、クラウド（雲―集合）サービス時代風に言えば信託のクラウドである、しかもグローバルに意志に従い拡げ得るクラウドであり、信託法理という安心で誠実履行のクラウドの中に、あらゆる財・サービスを取り込み、あまねく財・サービスを提供し得るものである。同時に社会の人々を繋ぎ、纏め、継いで行く信頼の器であり、社会全体が歴史的構造変化の時代にある今、この自由設計と安全・安心・誠実履行のクラウドの精神・理念を国際的に共有する絶好の機会を迎えておりその役割は誠に大と考えられる。

信託商品がモノ・サービスのアンバンドル（分解）やリバンドル（統合）作用を使い自由設計機能を発揮し、受託者責任に基づき安全・安心の役割を果すという本質に変わりはなく、それ故デジタル化においても、幅広く高度に進化する誠実なデータのやり取りや対話を通じて、信託プラットフォームは顧客が真に望む将に多種多様なソリューション需要に、最適解を提供するであろう。

ところでモノとカネはその顕れ方・絡み方は時代とともに変わろうとも、その存在・機能は人間の経済生活に一つながら常に不可欠である。今変化の方向は「活用生産であり、「活用市場取引であり、キャッシュレス化である。

現金・銀行預金・中央銀行預金・国際通貨基金といった人々の信認を法的背景とする通貨勘定の間のネットワークで重層的に果たされているのが、カネの決済機能である。キャッシュレス化とはそれら通貨勘定のデジタル化が人々の信認を得て進んでいるということで、ある意味このシステムは世界の人々に委任され通貨機能を果たすカネの信託クラウドといえる。因みにこの法定の信託クラウドに、非法定のカネのクラウドで挑んでいるのが仮想通貨である。その仕上がりは、安全安心で国際的に人々の信認を受け得る信託クラウドを実現する世界的に交換可能な合法的デジタル通貨システムであろう。

そして信託プラットフォームは、カネとモノを合わせ、安全安心の自由設計機能で転換・増殖・転形・創造等を果たし、信託商品・サービスを提供している。

デジタル化に伴う信託クラウドの視点からは、銀行、証券、保険等と信託プラットフォームの距離感・親和性がより増すということもある。信託クラウドの傘の下に、銀行・証券・保険・信託がプラットフォームを共有しながら金融商品・サービスが提供され、安全・安心の新たな金融市場サービス法といった利用者保護の総合的枠組が形成され、縦割りや非合理的壁が排され、胃の腑に入りやすい時代になるように思われる。

勿論信託は金融に限らない。何がしかの事業や取り組みや処理・措置を行うに当たって、託し託され約束を誠

実に果たす、自由設計の安心・安全なプラットフォームを提供する信託クラウドであり、信託財産・サービスの対象となるのは、私益・生活益から公益まであらゆるものに及び、受託者の責任義務が安心・安全の利用者保護を支えている。現に今企業は全てのステークフォルダーの為、私益から公益まで幅広く念頭に、いわば渋沢栄一の「論語と算盤」ならぬ倫理的経営をフィデューシャリー・デューティー（元は信託の受託者責任に由来）の下に求められている。

（3）新型コロナウイルス（Convid-19）

近年世界は経済が先進諸国を中心とした経済の不況・低成長、後発国成長の凹凸、内外の格差拡大や国際経済紛争に直面、自分ファーストやポピュリズムの蔓延、テロ・反政府の地域紛争や核・ミサイル問題等パワーバランスの亀裂、かてて加えて地震・津波・噴火・風水害・温暖化に伴う異常気象と、地球自身の厳しい環境変化もあり、人間社会のリスクを飛躍的に高めてきた。一方でこのようなリスクの高まりとともに他方でこれを歴史的転換局面と捉え、世界的な社会構造改革で新秩序の構築の必要性も強く意識されつつあった。

そこへ、究極のミクロ新型コロナウイルスが世界を席巻、日に見えぬ神出鬼没・変幻自在のパンデミック狙撃兵との世界的戦いが始まった。感染症パンデミックの歴史的経験則は、見付けて隔離治療であり、医科学進歩に伴い同定の精度と対応スピードは飛躍的に改善されているが、ウイルスとの共生はワクチンの普及や人々の行動変容を待たねばならない。

世界は隔離と言う別の意味での国境封鎖で国家意識を高め、感染抑止を各国ごとに努めその結果がＷＨＯによって比較され公表されている。しかしこの戦いは国同士や人間同士のものではなく、コロナウイルスと言う姿の見えぬ世界に散開した共通の相手との戦いであり、その戦い方や隔離の仕方、治療・ワクチンの適用等国際共同戦線の作動が必須のものである。

今はその一刻も早い収束に向け、世界がそれに負けず打ち克つ為の最適政策を総動員し、コロナの解明度を上げそれに応じた感染認定・経路同定・隔離治療体勢の迅速かつ弾力的対応戦略による防疫で命を守りつつ経済社会の崩壊を防ぎ、更にはワクチンの開発普及を急ぎつつ、コロナと共生する新生活様式や社会経済構造の新常態の構築に向け、各国各人の努力と世界協調が行われなければならない。

既に構造的にはデジタル化が加速度的に進む兆しが見られる。不安・不信先行の中、安全安心・信頼の信託クラウドの支え・寄添いが再新生の命運を握っていると言っても過言ではないと考える。今回のパンデミックは、

①DXを促進する、②ニュー・ノーマルを余儀なくさせる（革新を進めざるを得ない）という意味で、信託クラウドの活用を促すと共にそれが果たす役割自体も大きくする。（隔離の中で繋がるにはDX促進だし、不安要素が強まる中で、より深く親密【信頼】に心を繋ぎ合う力は、信託クラウドの深化と活用に懸って来る。）

我国の動向を夏前から振り返ってみると、新日常更には主体的な変革を果たし新常態の実現を視野に、経済と防疫の調和を求め歩が踏み出されたが、また東京の記録的感染拡大に直面し、その対応に世論も揺れてきた。

コロナと共生する新日常には人々のコロナ防疫の新行動様式の徹底が前提だが、Ⅱほどにはできず、見えぬコロナはそこを突いて浸潤を再開、緩和に向かった海外諸国も再規制のブレーキを踏むところが多くなった。しかし、全体的再ロックダウンは避けたいので、対象や地域を絞ったアクセルブレーキが採用された。特に日本では、その為には先ずは感染や防疫体制の全容実態が明らかになり、科学的証しに整合した道行を執る意識の共有が必要であり、的を絞った徹底感染対応を図る為には強い要請や規制手段が必要との認識が強まった。

コロナは電子顕微鏡でしか見えないが、逆に社会を虫眼鏡の役割で実態を大きく見せつけた。これ迄もそうだったが、コロナでも不思議な国日本を強く印象付けている。結果の被害は桁が違い自己評価者もいるが、まだ初期段階だし評価されるまでには至っていない。パンデミックは経験的にも合理的にも最悪事態対応で、網を大きくかけて（総検査体制）徹底隔離（ロックダウン）が基本と考える欧米の人々には、狙い撃ち検査の単視眼的・一辺倒逐次投入や徹底力のない自粛要請等は思いも及ばないのだろう。

また、それが民主的やり方としプライバシー一辺倒を声高に言うのも却って不思議の国の民主主義との印象を与えているかもしれない。Xファクター論もそれ自体は大事だが、闇雲に唱えるのはそれこそ、またぞろ日本人特別論に見られるのではないか。

二波・三波を乗り切り長い収束のプロセスを執り仕切って行くには、いよいよ科学的アプローチ、合理的対応、アカンタビリティで納得しながら収めてゆかねば、それこそ右往左往、右顧左眄になり社会不信・崩壊に繋がりかねない。結果が良ければいいではないかと言っても、道行も不安かつワクチンに辿りついた時結果は二つに一つが失敗、自らはその原因説明も将来への科学的知見も得られないという、闇雲に賭けたいつか来た道に迷い込みかねない。

可能な限りの証拠に基き全体的事実に正面から向き合い合理的判断と優先順位を決め感染防疫を図り、虫眼鏡で誰にもはっきり見えた改善・改革に本気で結果を出さねば、未曾有のパンデミック危機を乗り越え、新日常と新常態はないだろう。これまでも一人一人の心構えとして「歴史に学び、事の由って来るところを事実によって究明し、時勢に的確に対応し事を実現することが道であり、矜持を以って事に処す」ことが大事と言ってきた。それが社会に共有されることが信託に通じることであり、また究極の民主主義の基盤に通じることでもある。コロナはそれを試しているとも言えよう。

改めて、正しい事実の認識共有の下、関係を紡ぎ、事を約束通り誠実に果たし、自由設計の安心・安全なプラットフォームを提供する、国際スタンダードたるDX時代の信託クラウドの、導入・普及・発展に努めることの重要性を強調したい。

（了）

【参考文献】

「信託の大航海時代」溜箭将之　信託研究奨励金論集三五号　信託協会

「世界的視点から眺めた信託の将来」D.ウォーターズ著　清水真人訳（徳島大学社会科学研究二七号）

「信託とは何か―歴史的に見たユース、信託、そして信任すること」N.G.ジョーンズ（深尾訳）　立教法学第八八号

「信託法史論」水島廣雄著　学陽書房

「ローマ法」原田慶吉　有斐閣全書

「羅馬法」船田享二　刀江書院

「ローマ法の信託遺贈による相続法変革」吉村朋代　信託研究奨励金論集三八号　信託協会

「包括受遺者の地位の系譜」有地亨　九州大学学術情報リポジトリ

「メフメト二世のワクフ文書群の成立」林佳世子　日本中東学会年報（1988）

「信託および信託類似制度の研究　第四章イスラムにおけるワクフ」トラスト60研究叢書

「イスラム経済の基本構造」加藤博　経済研究所年報第二九号（一橋大学）

「文明としてのイスラム」加藤博　東京大学出版会

「ドイツ信託法理―日本信託法との比較」中田英幸　東北大学出版会

「病は気から」モリエール著　鈴木力衛訳　岩波文庫

「台湾における信託法の制定経緯に関する一考察」黄端宜

「台湾信託法の理論展開」王志誠　日本加除出版

「支那の信託業と信託預金」藤原泰

「中国信託法における理論と実務」ルシーナ・ホー著

新井・岸本共訳
「朝鮮信託企業の特異的発展」藤原泰　会報信託（S９）
「韓国信託法概論」張亨龍
「ラテン・アメリカにおける信託法の展開」中川和彦（四宮和夫先生古稀記念論文集）
「The Anglo American Prigin of the Latin American fideicomiso」Sergio Rodriquez-Azuero（IIDFWorkinng Paper Series）
「The legal Institution of the Trust in the Economy Law of Eastern Europian Countries」Istvan Sandor（139 Europian Sceientific Journal）
「Trusts in Latin America」Nicolas Malumian. Trusts & Trustees, 06 March 201

青雲の彼方（十）

太田精一

十．蒋介石軍北伐開始、中国統一に向かう

（一）南京事件における日中間の亀裂

英二が、ハルビン総領事に就任した大正十四年（一九二五）からほぼ二年が過ぎた。

その間、日本は、中国東北部の満州に、満鉄を中心に影響力を強め、ソ連は、東支鉄道を中心に、その勢力の拡張を図ってきた。

他方、外国勢力に反発する中国の排外運動は、中国全土に広がり、排日運動も目立ち始めた。

そうした中で、昭和二年（一九二七）三月二十四日、南京における外国領事が、襲撃されるという事件が起きた。いわゆる南京事件である。

北伐の途上にあった蒋介石軍の江右軍が南京を占領した際、日本を含む外国領事館と居留民を襲い、略奪と暴行に及び、各国を震撼させた事件である。なかでも日本は、中国への関わり合いが大きかったために、その被害は甚大であった。日本領事館は、館員が暴行を受け、館内の物品が略奪された。日本人居留民の安全は、確保されず、大きな被害が及んだのである。

中国兵の略奪の後、南京の住民までが暴徒化し、日本人居留民の住居に乱入し、暴行を加え、生活必需品まで持ち去った。日本海軍の陸戦隊が十人ほどいたが、わずかな人数でなすすべもなかったという。そこで日本海軍は、漢口に停泊していた駆逐艦の陸戦隊九十人を上陸させ、日本人居留民を駆逐艦に収容した。が、持ち去られた居留民の財産を回収することはできなかった。

欧米の領事館や居留民も蒋介石の江右軍の略奪行為に大きな被害を受けた。米、英、仏の領事館、外国人住居、教会が暴徒に襲われ六名が殺害された。米英両国は報復

として揚子江に軍艦を派遣し、南京を砲撃、中国側に二千人の死傷者が出た。加えて陸戦隊を上陸させ、居留民の保護を図った。米英が中国兵や暴徒を威嚇射撃したのに対し、日本は何の威嚇も砲撃による対処もしなかった。そのことが、日本の弱腰を中国に見透かされることになり、漢口でも日本領事館や居留民が襲われ、蘇州でも日本人が監禁されるという事件が起きる要因となった。こうした一連の事件により政府に対する非難がごうごうと沸き起こったのである。

非難は国内だけではない。

英国は、「日本は、抵抗もせず、英国からの共同出兵の要請にも反対した態度はおかしい」とし、対日不信感を招いたともいわれている。

こうしたことがもとで、当時、憲政会の若槻内閣は苦境に陥り、外務大臣であった幣原喜重郎は国の内外から非難を浴びた。

幣原外交は、内政不干渉を標榜し、無抵抗主義を貫き、南京政府官憲の良識に期待するという考えのもとに、中国との摩擦を極力避ける方針であったのである。

幣原外務大臣は、「中国における日本居留民の保護のために兵を出さない」とする方針を掲げ、軍隊を派遣せず、危険の及んだ居留民を上海などの大都市に引き揚げさせ、集中させるという方策を取った。

これに対し、当時の政党政友会は、「居留民保護のためには出兵もやむを得ない」とする態度で臨み、幣原外務大臣を非難するとともに、同氏を指名した憲政会の若槻礼次郎首相を退陣に追い込んだ。

対満洲政策においても政友会と憲政会の違いは明かであった。憲政会は、満州は中国の一部であるとの認識を示し、政友会は満州の特殊性を重視して、日本の権益を守ろうとしていたのである。

南京事件によって幣原外交は軟弱外交との批判を浴び、それがもとで昭和二年四月、若槻内閣が倒壊、新たに田中儀一内閣が誕生した。同内閣は、外相は、田中首相が兼務し、外務政務次官に、対中強硬派の森恪氏を任命したのである。森氏は、後に政友会幹事長に就任している。

その森政務次官が、昭和二年八月、吉田茂奉天総領事とともにハルビン総領事館を訪問、天羽英二総領事と南京事件後の中国東北部及びソ連情勢についての意見交換を行った。その時、森政務次官は、英二に「対中交渉は、強硬な姿勢で臨むべきである」と主張、「満州における日本の権益は、安易に手放すべきではない」と述べている。

翌月の九月には、山本条太郎満鉄総裁もハルビンを訪問、英二から満蒙の情勢と排日運動の状況に関する説明を受けている。

「中国全土に広まっている反帝国主義、不平等条約廃棄をスローガンとする排外運動の急波を真正面から堰き立

てると勢いに乗じて土手おも破る恐れがある。日本は、その権益を固守するとともにこの急激な排外の勢いと真正面から衝突しないよう善導するよりほかない」と英二は意見を述べた。

山本総裁もほぼ同意見であったという。その時同総裁は、山東鉄道、京奉鉄道を外郭として満鉄を中心とした東亜の交通網を整備する政策についての構想を語っている。

田中首相は、森外務次官の帰国後、吉田奉天総領事、畑英太郎陸軍次官、武藤関東軍司令官を交え、対中方針を固めるための「東方会議」を開催した。同会議では、「中国における日本の権利が侵害されれば、自衛の措置を取る。中国の動乱が満蒙に及べば防護する」といった内容の結論が打ち出され、これがその後の日本の対中国政策綱領となって、中国に対し、次第に強硬な態度で臨むようになるのである。そうしたこともあって、奉天では吉田茂総領事が張作霖に対して条約違反、その他諸懸案の解決を要求している。

さらに、森次官は旅順で、関東庁長官、関東軍司令官、吉沢駐中国公使、吉田奉天総領事を集めていわゆる大連会議を開いて対満政策を協議した。

このように中国政策については対中強硬派が主流を占めるようになったが、山本満鉄総裁は、奉天における日本の強硬な交渉の仕方に反対し、田中首相に反省をうながしていた。だが、対中強硬姿勢の流れは、奔流となって日本国中を覆いつくし、やがては中国大陸全土に流れ込むことになるのである。

(二) 一等書記官として北京公使館へ

英二は、昭和二年八月二十四日付で北京公使館一等書記官に任命された。一等書記官は、首席書記官で所属在外公館の実務一切を統括する役職である。英二の前任者は、重光葵であった。同氏は、後にミズリー号の艦上で、今次世界大戦終戦の署名をしている。

辞令を受けて、三週間後の九月十三日に英二は、東支鉄道の特別列車でハルビンを発ち東京に向かった。北京に赴任する前に東京で、外務省幹部及び関係機関の要人と中国問題に関する意見のすり合わせをするためである。

ハルビン駅頭には、日本人はもとより中国人、ロシア人、英国人など各国の関係者が、英二を駅頭に見送った。中国の一部でありながら、ヨーロッパの雰囲気の漂う街並みが、車窓を通して流れて行く。その景色を眺めながら英二は、山積する問題を抱える中国の心臓部である北京で、外交官として何をなすべきかをあれこれと思いめぐらしていた。

途中奉天で下車、吉田総領事、松岡満鉄副総裁と面談した後、湯崗子温泉で一泊家族と共に過ごした。その頃

家族は次女次男が生まれていたので子供は四人、夫婦と併せて六人家族であった。次女の和子は、大正十四年東京で生まれたが、次男は昭和二年の二月にハルビンで生まれたばかりで、民衆的英雄になって欲しいと願いを込め民雄と名付けた。民雄は後に外務省に入りユーゴスラビア大使、大阪大使を歴任、退官後は青山学院大学教授となっている。

九月二十一日東京着。翌日の二十二日から二十三日にかけて英二は、関係各省庁を訪問し、満州の事情報告に併せて今後の方針につき意見のすり合わせを行った。

その翌々日の二十四日、外務省に田中首相兼外相、事務次官、有田アジア局長、畑陸軍次官、阿部軍務局長、南参謀長、松井参謀本部第三部長が集まり、田中首相からの張作霖に対するメッセージの内容を協議することになった。英二もこの会合に参加している。その会合で得た結論をたまたま上京中の本庄繁、張作霖顧問に託すことになった。

同氏は、北京駐在武官から張作霖の顧問となった人物である。

英二は、さらに九月二十六日に白川陸軍大臣の招待で陸軍幹部、二十八日には、野村海軍軍令部次長、大隅海軍次官の招きによって海軍首脳部と会談した。

膨張する満州問題について互いに忌憚のない意見を交換するためである。これによって英二は、当時の日本軍の意向を十分察知することができた。

加えて、内田、幣原両元外相、平沼枢密院顧問、牧野内大臣からも満州情勢についての英二の見解を聞きたいとの要請があった。英二は、それぞれの官邸を個別に訪れ、自説を開陳した。いずれの方々も時局を憂慮し、その成り行きに重大な関心を示していた。

牧野内大臣は、吉田茂奉天総領事の女婿であった。そのため、吉田奉天総領事とは、個人的な関係もあって、本音を言い合える中であったようである。同大臣は、吉田奉天総領事に対し「張作霖側との会談は、慎重かつ考慮の上行うようにし、軽はずみなことをしないように」との伝言を英二に託している。それはちょうど張作霖が北京政府の大元帥となって、南京には国民政府が樹立された頃である。

英二は、九月二十日に赴任前の外務省での最後の打ち合わせを終えた。十月一日、彼は、田中首相から吉沢公使へ「張作霖とわが国との関係をどのように保つか」について伝言を託された。

「張作霖と交渉してどうにも張が日本の要求を聞かなければ、日本にも大いに考えるところがある。長の運命も長くはないであろう。ただ、具体案については情勢の変化に従って考慮したい」というものであった。

英二は、こうして各部門の要人と会って、田中首相の意見とは、相当なずれがあることを感じた。吉田奉天総

領事は実力行使にだいぶ傾いているが、吉沢公使は、もう少し好機の来るのを待つという考えであったようである。

北京に赴任前に、英二はハルビン総領事時代から抱えているソ連との関係修復について何らかの手段を講じておく必要があると感じていた。それには、後藤新平伯が会長をしている日露協会を活用することが適切であると考えた。そこで英二は、同協会の副会長をしている倉知鉄吉氏に紹介を依頼し、ドヴカレスキー大使との会談を取り持って頂いた。おかげでドヴカレスキー大使とは、今後の日ソ関係について大いに語り合うことができ、ソ連とのパイプをつなげることができ、心置きなく北京に赴任できると彼は思った。

英二は、昭和二年十月二日、東京を発ち、京城経由で奉天に向かい吉田総領事、松岡満鉄副総裁と会って田中総裁より託された伝言を述べ、京奉線経由で、北京入りした。出迎えた吉沢公使の車で、公使館に直行、満州及び東京の状況を報告した。併せて田中首相、外務省、陸海軍から託された伝言をもとに吉沢公使と今後の交渉方針について協議した。

北京は、英二にとって日中山東還付条約及び郵便局撤廃問題の時に滞在した土地で、その頃とほとんど変わっていなかった。十月初旬の北京は最も良い季節である。青空が秋の訪れとともに中天深く広がり、さわやかな風が吹いてくる。だが、その季節は長続きしない。英二は、この季節の後に到来する冬の厳しさが、できるだけ穏やかであってほしいと願った。

英二は、北京飯店に長期滞在の予定で宿を取った。しばらくして彼は、妻と子供たちそれに付き添いを北京に呼び寄せ、天津河口の塘沽まで出迎えた。

英二の宿泊している北京飯店には、山本満鉄総裁、ソ連のスキテルスキー、蜂須賀侯爵も宿泊していた。山本満鉄総裁は、十月十日と十二日張作霖と会談、満鉄の計画している北満五線の新設について了承を求めた。その五線とは、吉林—会寧、海林—局子街、吉林—五常、長春—大賚、洮南—索倫である。同時に中国側の計画している吉林—海林、開通—扶余、新埠—打通の三線が満鉄との平行線になるという理由で反対し、中止を要求した。

山本総裁は、この他にも満州の治安維持に関する日中交渉公文案及び日中経済協定案を提出した。鉄道問題は、中国側の常蔭槐交通次長が強硬に反対したため行きづまった。

後になって山本総裁は、日中交換公文及び日中経済協定を持ち出したのは越権行為であると気が付いた。この件を彼が持ち出すのは、後に吉沢公使と張作霖との交渉に支障をきたすと考え、彼は、この案を引っ込めた。しばらくして、彼の秘書鎌田弥助を外交容喙の詫び状を持

たせ、吉沢公使のもとに派遣している。とはいえ、山本総裁の構想は、外務省の考えとほぼ一致しており、すでに交渉の中に織り込み済みであった。言い換えれば、当時の満鉄と外務省の満州政策に食い違いはなかったといえる。

山本総裁は張作霖との鉄道新設交渉が難航し北京に引き上げた。その後の交渉は、もっぱら中国側の懐に深く入りこんでいた江藤豊二の内部工作と本庄張作霖顧問の側面援助で進められた。鉄道問題は、常蔭槐交通部長の壁を突き崩すことは容易ではなかったが、張作霖は日本との妥協を考えていた。そこで、張作霖は常蔭槐を天津に出張させ、その留守に五鉄道路線新設を裁可してしまった。これによってやっと鉄道新設交渉は妥協することができ、昭和四年五月十日正式に調印を終えた。

常蔭槐は、揚宇霆とともに張作霖の股肱の臣であったが、その後張作霖が、死んで息子の張学良の時代になった時に、張学良の衛兵によって暗殺されたといわれている。

（三）済南事件で反日運動活発化

五鉄道問題は解決したが、北京における満蒙問題はこじれ、交渉は遅々として進まなかった。正式交渉は、吉沢公使と北京政府外交部王蔭春との間で行われていたが、実際には実権を持つ張作霖とこれを補佐する揚宇霆との交渉であった。

張作霖側には、日本人顧問がいた。張作霖には町野武馬陸軍中佐、本庄繁陸軍大佐、揚宇霆には、奉天特務機関松井七尾が日本との交渉に裏で糸を引いていたのである。

そんな時に田中外相から久原房之助逓信大臣が北京に行くから張作霖を始めできるだけ多くの中国要人と会わせるよう吉沢公使宛訓電が届いた。その訓電を受けた吉沢公使は、久原逓相の到着に備えて、中国情勢の説明を整理し、来訪を待っていた。

昭和二年十二月二十三日、暮れも押し迫った頃、久原逓相は、伊藤博文公の息子伊藤文吉氏と後に駐米大使となった斎藤博氏を伴って北京に着いた。田中内閣は前にも述べたように首相が外相を兼務して実際の外務は森恪政務次官が仕切っていた。田中首相は、同郷の長州出身者久原逓相を外相にしたい意向であったのか、久原逓相にヨーロッパ訪問をさせたり、モスクワでスターリン、北京で張作霖との会談を取り計らったりして、国際的な人脈づくりを後押しするつもりだったようだ。

吉沢公使は、久原逓相をまず張作霖に紹介、その後公使館で、盛大なレセプションを開き瀋復総理他中国側要人数十人を招いて紹介した。

久原逓相は、田中首相兼外相から密命を受けてきたのか、それとも自分の手で外交を進めたいと思ったのか、

翌日張作霖と会談した折に、外務省のシナリオにない予想外の発言をした。その内容は、「蒙古、満州、朝鮮を独立させる。しかる後日本、満州、蒙古、中国から十人ずつ計四十人の委員を出して、これらの国を治世させる。これらの国は軍備をせず、関税もなく中立地帯とする」という案を出したのである。日本の庇護のもとに極東連合国家を創ろうというもので、中国の尊厳を無視した案で、張作霖にとって全く受け入れがたいものであった。

この案を聞くと張作霖は、顔色を変え、会見を止め、席を立ってしまった。

張作霖は、生来利口で策謀に長けていた。だが、もともと馬賊の出身との噂さがあり、教育はなく共産主義を毛嫌いしていた。ことに彼は委員会を作ることを極端に嫌っていたのでその言葉が出たとたん席を立ってしまったのである。

英二はこの話をその時通訳をした公使館の西田一等書記官から聞いた。

久原逓相の提案は、公使館を通して正式に中国側と交渉している内容とずいぶん異なるものであった。このように政府と異なる内容の提案を行う場合、少なくとも吉沢公使には事前に相談すべきであり、いきなり張作霖に切り出すのは、外交を混乱する行為であると英二は判断した。

そこで、英二は、久原逓相に事情を質し、善後策を講じなければならないと考え、吉沢公使に進言した。吉沢公使は、すぐ久原逓相を公使館に招き、伊藤文吉、斎藤博両氏を交え協議し、久原逓相の提案は、撤回する旨張作霖に伝えることにし、事なきを得た。当時張作霖は、奉天から北京に乗り込んできて、北京で奉天内閣を立ち上げていた。また、自ら大元帥となって三軍を統率し、南京から北上する蒋介石軍を迎え撃つ構えを示していたのである。だが、スローガンは、中国国民に最も人気の高い「排外主義」を標榜し、蒋介石軍と同様、排日、抗日を強調したのである。

中でも満州は、日本の権益を無視する行動に出たため、日本側も黙っているわけには行かず北京で満州問題について度重なる交渉を行った。

それでも、排日運動は、ますます高まり、昭和三年三月中国に理解を示していた吉沢公使も「満蒙問題を解決するには、断固たる措置を講ずる以外打開の道はない」と本省に打電するほど追い詰められていたのである。

その頃蒋介石は、奉天内閣と戦う一方、日本に来て田中首相と会談日本に援助を求めたりしていた。蒋介石は、硬軟を使い分け、自己の勢力の拡張を図っており、その勢力は済南まで迫っていた。早晩北部中国は、大戦乱となり多数の日本人の生命、財産が危険にさらされることは容易に想像できた。

そこで田中内閣は、昭和三年（一九二八）四月末、在

留民保護のために青島、済南方面に出兵を決意した。済南事件はこうして五月三日、蔣介石軍と日本軍が武力衝突して起きたのである。

北伐中の蔣介石率いる中国革命軍と山東省に出兵した日本軍が衝突し、双方に犠牲者が出たが、これによって中国国民の反日感情が増幅された。済南は、山東省の中心都市で、黄河河畔の東西交通の要衝である。戦死者は、日本側五百人、中国側三千六百人と発表されていて、中国側の犠牲者の方が圧倒的に多い。この事件によりこれまで主に英国を敵としていた中国の排外運動の矛先が日本に向かい、蔣介石を始めとする国民政府要人の対日感情を悪化させた。また、第一次山東出兵では、比較的同情的であった英米両国民が中国国民党に接近して、日本に批判的となり、満州事変の導火線となったともみられている。

中国革命軍と張作霖軍との激突によっていずれ北京も戦火に巻き込まれると予想した英二たちは、万一に備えて北京公使館内に在留民を避難させる手配をした。また、中国の要人の中には、日本公使館に避難しようとする者も現れ、公使館内は混乱状態となり、在留民の婦女子たちの中には、北京を離れようとする者も少なくなかった。

英二の家族も吉沢公使及び館員の家族と共に大連星ヶ浦にある満鉄の別荘に避難した。このころちょうど美代夫人が妊娠していたので、英二は、中学校の同窓生で婦人科の医師をしている原正平満鉄病院副委員長に万事を託することにした。

(四) 張作霖爆破事件、日中間の亀裂深まる

北京日本公使館が在留民避難活動をしている間に田中総理から訓令が入った。

「吉沢公使は昭和三年（一九二八）五月十八日に張作霖と会見、同日天羽一等書記官は保定で張学良、揚宇霆と会見し、中国の戦乱が満州に波及する場合は、日本政府は、治安維持のため、適当な措置を取る」という趣旨を伝えよというものであった。

この通告は、同時に蔣介石の南京政府にも伝えた。だが、北京の張作霖と保定の張学良には、さらに強い文言を加えている。

「もし奉天軍が、中国革命軍と戦って敗れ奉天に帰る時には、日本軍は小海関（奉天と直隷の間）でその敗走軍の武装を解除する。だが、戦わずして北京を引き上げるのであれば、武装のまま通過させる」と申し入れよということであった。

ところがこの公電を受ける前に吉沢公使は、五月十七日の深夜、張作霖と会う約束となっていた。英二は、どうしても北京を留守にすることができず、保定での張学良、揚宇霆との会談には、北京駐在武官建川少将に代わって行ってもらうことにした。

五月十七日に、吉沢公使は、張作霖と会談を行った。張作霖は、戦わずして奉天に引き揚げることに難色を示したが、あくまでも反対するというほどではなかった。保定では、張学良は奉天に引き揚げることに同意した。結局、奉天内閣は、北京を去り、本拠の奉天に帰ることに決定。五月三十日その命令を出し、六月一日には、外交団を招いて退京の挨拶を行った。翌六月二日午前一時半、張作霖は大元帥の軍服で約五百の守兵に護衛されて北京を発った。

二日、三日と北京は静かな日が続き、張作霖は奉天に帰るものと思われていた。だが、四日になって、予想もしない事件が発生した。それは英国大使館の国際日で、北京でレセプションを開催している最中のことであった。

「張作霖の列車が満鉄付属地で爆破され、呉俊陞は爆死、張作霖の生死は不明」

とのニュースである。

もはやレセプションどころではない。レセプション会場に居合わせた建川武官は、参加者から質問攻めとなった。建川武官にも張作霖が爆死とだけしか知らされていない。誰が何のために張作霖を殺害したのか謎のままであったのだ。

張作霖死後の北京は、袁世凱の陸軍総長であった王士珍を会長として治安維持が組織され、間もなく北京政府直隷派の馮玉祥、その国民軍の韓復榘軍が入京、このため馮玉祥が事実上北京での権力を掌握、六月十四日には、馮玉祥の一派である山西の第一級上将閻錫山が北京駐在の外交団を招待し挨拶をした。

後になって日本側が、張作霖を殺害したと公然と報じられるようになったが、息子の張学良は、北京から奉天に引いた後、東三省の保安指令に就任した。いつの間にか親の政敵蔣介石と手を結び、東三省に初めて国民政府の青天白日旗を掲げていたのである。

一方、北京は、張作霖を追い出したものの馮玉祥の天下となり、相変わらず蔣介石と葛藤を続けることになった。そして南京の国民政府軍もやはり排日運動を掲げ、ついには日本との通商条約を廃棄するなど結局日本の軍部が考えた「武断政策」は何の意味も持たなかったのである。

昭和三年（一九二八）七月五日、英二は一時帰国の命を受け日本に帰った。途中大連の星ヶ浦にいる家族のもとを訪れ、朝鮮経由で帰国した。

英二は、まず田中総理に北京の事情を報告、次いで森政務次官、奉天総領事から昇進したばかりの吉田茂事務次官など外務省首脳陣を交え、現地事情を説明した。さらに陸海軍幹部とも会談したが、いずれも張作霖爆死事件については、事情を聴かれることはなかった。英二は、

今回の日本の対応は、非常にまずく中国側を刺激するだけでなく、諸外国の批判を浴びることになると強く主張した。

英二は七月二十四日、帰任の途に就いた。その途上、天津の加藤総領事宅に立寄った。そこで三男の誕生が知らされた。

北京に戻ってしばらくした九月十日、英二は済南事件調査のため、青島、済南方面に出張を命じられた。この出張には、米国で有名となっていた外交評論家河上清氏が同行してくれる事になったのである。

英二の調査報告書は、山東視察報告要領として在中国公使館から外務本省に提出されている。

済南事件は、すでに述べたように昭和三年五月三日中国山東省の済南で起こった事件で、蒋介石の率いる国民革命軍の一部による日本人襲撃事件である。日本は、国の権益と居留民を保護するため山東省に軍を派遣した。この事件は、その日本軍と北伐中の蒋介石の率いる国民革命軍との間に起きた武力衝突事件である。事件の発端については日本軍と国民革命軍の言い分が異なっていた。

始めのうちは、外国特派員も日本に有利な報道をする記者が多かったが、その後だんだん中国側の反日宣伝に同調する報道が増え、「国際ジャーナリストで外交評論家河上清氏が同行し、日本の立場を外国特派員に伝えてくれることは、頼もしく感じられた」と英二は述べている。

済南に行く途中、天津から塘沽にかけてイナゴの大群が襲ってきて、汽車が止まった。だが、九月十六日には無事済南に着いた。

済南では、偶然に現地視察中の日本参謀本部総務部長と一緒になり、共に済南事件の戦跡を見た。帰路溜川岳山にある日本軍司令部に宿泊していると遥か西北の明水付近で、日本兵が馬賊を追跡している。ところが、この日本兵は馬賊が二十支里（約十キロ）以上遠方に逃走してもなお発砲しながら追跡している。日中協定によれば、「日本は満鉄沿線の二十支里内の秩序維持に任ずることになっているのである。

そこで英二は、同席していた谷参謀長に聞いた。

「相手は二十支里の外に逃げているのに追跡しているのはどうであろうか」

「実は、論功行賞を行うときには、発砲することが必要なのでそれを勘定に入れているのであろう」と苦笑いしていた。

軍は勲章のために事を起こすことがあると聞いていたので、その時なるほどと英二は述懐している。

山東では、藤田青島総領事、西田済南総領事代理などからも意見を聞き、おおよその現地視察も終えた。そこで英二は、大連経由で妻及び二人の子供と二人の付き添いを連れ、北京に戻った。

この調査視察で英二は、「山東における日本軍の行動は、それほどの批判に当たらないと思う。だが、山東出兵については、まずかったのではないか」と批判的な結論を出したのである。

北京に戻ってみると、北京は、蒋介石の国民革命軍の勢力が浸透していて市内の各所には、ポスターや壁に国民党のスローガンが派手に書かれ、宣伝、教宣活動が活発に行われていた。張作霖時代の風景が影を潜め、北京は、蒋介石の国民軍に彩られた南京色で様相が一変していた。

また、昭和四年一月には、かつて広東総領事の頃知り合った蒋介石一派の呉鉄城、林森らが乗り込んで来た。彼らは、実質的な支配者として日本公使館員たちを招待した。

ここに広東で孫文が創設した国民党が、天下に号令することになったのである。

英二は、孫文が主張していた欧米のくびきから解放されるアジアの胎動が、中国の中から起こりつつあることを感じた。彼は、国民党が主張する「三民五族主義」を基本とする「反帝国主義」「不平等条約廃止」を標榜して人心を掌握し、理念を貫いた孫文の政治家としての手腕を改めて高く評価するのであった。

それに比べ、奉天にはこうした理念がなく、人心を掌握し結束を固めるスローガンもなかった。したがって首魁の張作霖が、亡くなった後には、後継者もなく、自壊してしまうことになったのだ。

英二は、張作霖の在世中に「奉天政府は、何か結束できるようなスローガンを掲げたほうが良い」と力説した。その結果か遅ればせながら、「保境安民」なるスローガンを持ち出してきたが、魅力に欠け遅きに失した感を免れなかった。

いずれにせよ中国は、北京から南京へと政治地図が、変わりつつあった。

南京の国民政府を中心に統一が進みつつあり、諸外国は公使館を北京から南京に移すか北京公使館の代表部を南京に置くようになったのである。

日本もその例外ではなかった。

孫文の理念と不屈の行動は、後に次ぐ同志たちの共感を呼び、結束させた。

英二は、沸き起こる民衆のエネルギーと民族意識の高揚を感じ、こうした中国と今後どのように向き合えば、日本の国益につながるのかを思いめぐらし日々を過ごすのであった。

（つづく）

私の「昭和20年」(3)
―終戦から75年―

山田嘉久

6　昭和20年6月―本土決戦計画

5日　「沖縄戦局いまや重大段階　全線にわたって苦戦　彼我戦力の差漸く顕著」(朝日新聞)

8日　御前会議、本土決戦方針を決定

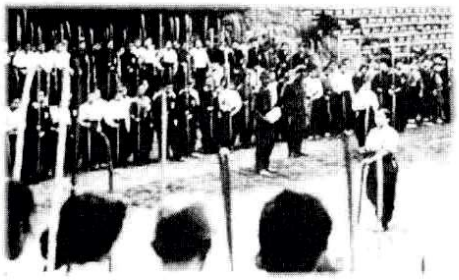
23日　「国民義勇兵役法」交布

23日　沖縄の日本軍全滅

6月に入ると、我が家も疎開することとなった。

疎開先は茂原からバスで40分ほどの山奥の山地で、房総半島のヘソと呼ばれた地域だった。親父が其処の農家の一軒家を借りたらしかった。

「疎開」とは都会人が対象になるもので、こんな田舎町では必要がないのでないかと親父に質したが、九十九里沖の敵艦から艦砲砲撃されたら、茂原市街はぎりぎり射程内に入るので、山奥なら安全とのことだった。



第52軍による訓練の様子(九十九里浜　昭和20年)

この月の23日、「国民義勇兵役法」という恐ろしい法律が成立していた。この法律によれば「15歳から60歳までの男子、17歳から40歳までの女子は「義勇戦闘隊」を編成する」とある。

そしてこの法律の公布に当たって、天皇はわざわざ詔勅を賜り「勇奮挺身、皇国を防衛せよ」と本土決戦を指示していたのである。

我が家では50歳代の親父と15歳に達した私が「義勇戦闘隊」に強制的に入れられたので、勝手に山奥に疎開などできなかったのだ。

その教令に曰く。「戦闘隊員は激闘いかに熾烈となるとも命なくして任務遂行の職場を離るることあるべからず。たとえその身重傷を被るとも、これがため戦意を阻喪することなきを要す」

そして米軍が上陸した暁には、竹槍でも持って徹底抗戦する義務を負ったことになる。

当時のパンフレット「国民抗戦必携」にもこうある。

たしかにこの頃、九十九里浜一宮町在住の友人がある日、自宅近くの高台から海上を眺めたら無数の敵艦で覆われ真っ黒に見え、腰を抜かさんばかりに驚いたとの話を聞いていた。

早速、母親は幼い弟や妹を連れて山奥に疎開していった。明治30年に生まれて以来、一度も茂原駅前を離れたこともなく名物女将として家業を守ってきた母親にとっては、断腸の思いであったであろう。後には親父と私だけが残った。

なぜ私は疎開できなかったのか、現に通っている中学の授業は4月以降、向こう1年間の授業停止になっているし、弟妹たちと一緒に疎開することはできたはずだ。それができないのは、私は現在、軍需工場に動員されているからと単純に考えていたが、後になって重大なことに気が付いた。

「銃、剣はもちろん刀、槍、竹槍から鎌、ナタ、玄能、出刃包丁、鳶口に至るまでこれを白兵戦闘兵器として用いる。」

まるで戦国時代に戦場に駆り出される農民そっくりだが、その数、全国で2千8百万人。そういえば作家司馬遼太郎も今大戦におけるわが軍の兵器について元亀天正時代のそれと大差がなかったと書いている。

「必携」には、それぞれの武器の使い方についてもこうも書いてある。

「刀、槍を使う場合は斬撃や横払いよりも背の高い敵兵の腹部目掛けてぐさりと突き刺した方が効果がある。」

「鎌、ナタ、出刃包丁などを用いるときは後ろから奇襲すると最も効果がある。背後からの奇襲は卑怯ではない。敵はわが神土へ土足で入り込んだ無礼者である。」

このパンフレットは一人ひとりに配布されたというが私には全く記憶がない。あるいは親父が受け取ったかもしれないが私が受けとったにしても当時のこと、当然のことと感じていたであろう。今では悲壮感を通り越してマンガチックにさえ感じるけれども。

隊長には地元の名士千葉弥次馬氏が選ばれた。千葉家は江戸時代から「永吉の眼医者」として親しまれた房総最古の眼科医で、先代は我々の長生中学や茂原高女の創立者でもあった。

一方、沖縄では4月以降、日米軍が激しい攻防戦を展開していたが、6月末ついに最高司令官牛島中将の自決によって日本軍は全滅、完全に米軍の手に落ちた。

次はいよいよ米軍の日本本土上陸。その場所は？

常識的には、まず沖縄から島伝いに南九州（志布志湾）であろうが、九十九里浜も有力な候補地とされていた。現に戦後明らかになった本土決戦計画「決号作戦」によれば米軍の主力上陸地を関東地区と予測、関東方面の作戦「決三号」は田中静壱大将（第12方面軍司令官）が立案した。それによると「上陸時期は昭和21年春、上陸地点は相模湾、九十九里浜、鹿島灘」として、米軍の計画「ダウンフォール作戦」（後述）とほぼ正確に一致している。

そして相模湾、九十九里浜、鹿島灘の3方面のうち九十九里方面を最も重視して兵力を集中させることにして、第12方面軍配下の近衛第3師団司令部を上総東金に置いた。早速、第一総軍司令官杉山元帥はこの方面を視察している。

○第一総軍（杉山元帥）―第12方面軍（田中大将）―第52軍―近衛第3師団

勿論、このようなことを知る由もない私たちだったが、この頃、九十九里浜に兵力、武器が集められていることは子供心にも薄々感じていた。

余談だが、司馬遼太郎は当時、陸軍少尉として満州の地にあったが、この年春、米軍本土上陸に備えて「虎の子」戦車70輌を伴っての本土帰還命令を受けた。そして栃木県佐野に駐屯するのだが、「敵状視察」の名目で九十九里浜に出張しているのもこの頃である。（司馬遼太郎著「私の関東地図」）

（注1）米軍の本土上陸に備えて大本営は統帥組織を強化し、4月8日に関係方面に下令した。長い戦争の間で初めての陸海軍共通の作戦計画であった。

それによると日本本土を2分して東北、東部、東海各軍管区方面軍を統合して「第一総軍」に、中部、西部軍管区を統合して「第二総軍」とした。そしてそれぞれの総軍司令官に杉山元元帥（前参謀総長）と畑俊六元帥（前教育総監）を充てた。また全国の航空軍、航空師団を統率して「航空総軍」とし、その司令官に河辺正三大将（前中部軍管区司令官）が就任した。

（注2）田中大将は終戦時には「東部軍管区司令官」として「8・15事件」の処理に当たった。同事件とは近衛第1、第2連隊の若手将校たちが森近衛第1師団長を射殺、偽りの師団長命令を出し、また陛下の玉音放送のレコードを宮内省から盗み出そうとした事件で、田中は身をもって彼らを説得して事なきをえさしめた。この辺の事情は昭和40年にベストセラーになった「日本のいちばん長い日」（半藤一利著　当初は大宅壮一編で刊行）に詳しい。

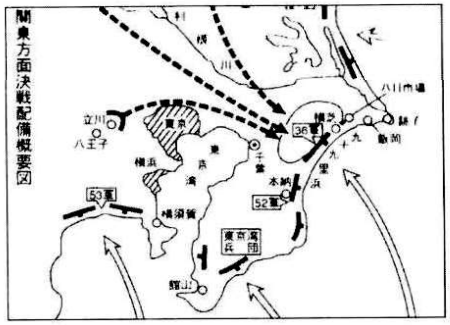
では、肝心の米軍の日本本土上陸作戦はどうであったのであろうか。これも戦後になってすべて明らかになっている。1945年（昭和20年）3月29日、米統合参謀本部は、事前作戦としての九州侵攻作戦「オリンピック」（45年12月）、本作戦となる関東平野侵攻作戦「コロネット」（46年3月）の2段階計画からなる対日侵攻作戦「ダウンフォール」を発表している。「ダウンフォール」は「破滅、滅亡」の意で、文字通り「日本滅亡作戦」であった。

（オリンピック作戦）45年12月1日、米軍は宮崎海岸、志布志湾に上陸、6日には鹿児島湾と種子島に上陸、45年中に九州南部を制圧する。

（コロネット作戦）46年3月、九十九里浜と相模湾の二正面作戦を基本線とする。投入される兵員は陸上兵力107万人、あの「世界最大の作戦」と言われたノルマンデー作戦の実に4倍に及ぶものであった。

これに対する日本軍の総兵力は35万～37万と見積もっている。特筆すべきは我々義勇兵の抵抗があれば毒ガス兵器（サリン）の使用も考慮していることである。（勿論、当時も化学兵器の使用はジュネーブ議定書で禁じられている。）

特に九十九里浜上陸は沖縄戦を戦ったホッジス将軍指揮下の精鋭部隊（第1軍）であった。九十九里浜片貝海岸付近に上陸した米軍は3隊に分かれ、a隊は房総半島を南西に進み要衝館山を確保、b隊は利根川河口の要衝銚子を確保、本隊となるc隊は千葉、印旛沼間を確保して東京へ直行する。その後、茅ケ崎方面に上陸して東京へ侵攻する第8軍と合流して東京湾を東西から制圧するというものであった。



「本土決戦」（土門周平編）より

これに対して勝ち目の全く立たない日本軍は水際での玉砕戦術を取る以外になかったのである。

「昭和天皇独白録」6月12日付けにこうある。

「私が今まで聞いた所では海岸方面の防備が悪いということであったが、報告によると海岸のみならず決戦師団でさえ武器が満足に行き渡っていないということであった。敵の落とした爆弾の鉄を利用して「シャベル」を作るという。これでは戦争は不可能ということを確認した」。

特に3方面から上陸、攻撃された千葉県民（当時2百万人）はもしこの作戦が実行されていれば、真っ先に全滅の運命に遭っていたに違いない。

同じような事態が、これより数ケ月前、同盟国ドイツで起きていた。この年の4月末、ソ連軍はベルリン中央部に突入した。その際、激しく抵抗した主体はドイツ軍のSS（親衛隊）とヒットラー・ユーゲントであった。前者は16歳から18歳、後者は13歳から15歳の若者であったが、ほとんどが戦死した。彼らは日ごろ、「ドイツ的誠実さに」のモットーのもと猛訓練を受けていたが、このことは「いざというときには鬼神を哭かしめる勇戦敢闘」を命じられていた日本の国民義勇軍とそっくりだったと、当時、私と同じ15歳だった歴史家半藤一利は書いている。（「世界史の中の昭和史」）

なお、国民義勇軍は本土決戦が生起する前に終戦を迎えたため実戦経験することはなかったが、唯一の例外が樺太で起きた。8月9日、ソ連参戦により樺太にもソ連軍が侵攻してきたため正規の陸海軍隊とともに実戦に参加している。この戦闘は終戦の後も1週間続いた。そのため多くの少年少女が戦死している。この模様は最近のNHKでも取り上げていた。

なお、沖縄戦で組織された「鉄血勤王隊」「ひめゆり学徒隊」などは「義勇兵役法」の施行前に組織的戦闘を終えている。

かくて、国民義勇軍に入れられた親父と私の2人だけの生活が始まった。明治30年、茂原駅開設と同時に創業したという古さだけが取り柄の駅前旅館の我が家ではあったが、この頃には泊まる客など殆んどなく開店休業。そこで客室の畳は防火上、全部取り外されたので二人一緒、居間一部屋で過ごした。

毎日の食事は従業員が一人もいなくなったので親父が作ったのであろうが、あまり記憶がない。ただ6月のある日、東京下町の3月10日の大空襲で焼け出された従姉が泊まりに来た時に、彼女が作ってくれた野菜の炒めご飯を大げさに言えば世の中にこんな旨い料理があるのだろうかと感激して食べたことが忘れられない。勿論、当時のこと、大した料理ではなく使った油も粗悪なものであったに違いないが、生涯で一番の食べ物だったと今でも思っている。

食糧については田舎のこととて、さしてひもじい思いをしたことはなかったが、それよりも我が家の日の前の茂原駅から毎日、吐き出される数十人の群衆を不思議な気持ちで眺めていた。東京方面からの「買出し部隊」である。

駅頭には「鉄道は兵器だ」「決戦輸送の敵は買出し部隊」といった標語が貼られていたが、全く効果はなかった。「買出し部隊」はこれらのポスターが剥がされた戦後に最盛期を迎えるのだが、それについては（戦後編）に譲りたい。

当時、私が食糧よりも最も悩んだのはノミ虱（しらみ）対策だった。洗濯も入浴も十分でなく、その上に栄養不十分では当然であったであろう。連日の空襲よりもこちらのほうが怖かった。尾籠な話だが、ある日、下着に何十匹の虱が隙間なく並んでいるのを発見して卒倒するくらい驚いたことを思い出す。

そのため戦争が終わっても長い間、重度の皮膚病（疥癬）に悩まされることになる。

余談だが、戦争が終わってほどなく読んだ福沢諭吉の「福翁自伝」に「虱の話」（彼の母親は彼を手伝わせて近くの女乞食の頭の虱を取ってやるのが常だったという逸話）が出てきて妙に懐かしかった。

国民学校（小学校）の教師をしていた従兄が結核で亡くなったのもこの頃だった。当時、結核は不治の病で国民病といわれ、同世代の若者では戦中戦後にかけて結核に罹る者が多かった。

幸いにして私は結核の経験はなかったが、その代わり今でも「健康診断」の血液検査では常に血管が細いといわれる。これも戦時中の栄養不足のせいだろう。

この頃、子供たちの間で「栄養失調5分前」というはやし言葉が流行った。

7　昭和20年7月―姉の渡満

10日　最高戦争指導会議、ソ連に終戦斡旋依頼のため近衛文麿の派遣を決定

10日　米機動部隊、関東に接近、空襲

18日　ソ連、近衛特使派遣を拒否

前々号で書いた通り、千葉市の陸軍高射学校での教育実習のため一時帰国していた義兄が実習期間を終えて、古巣の関東軍（満州）に帰ることになった。

その際、妻子（姉と乳飲み子）を一緒に連れてゆくことも決まった。当時、義兄は陸軍中尉だった。

義兄は早大専門部を卒業後、応召を受けて幹部候補生として関東軍に赴任した。その当時、小学生だった私は頻繁に慰問文を送っている。「満州国牡丹江省牡丹江市」は今でも覚えている慰問文の宛名である。

一方、シンガポール（当時は新嘉坡）方面に応召されていた従兄にも交互に慰問文を出していた。丁度、新嘉坡が陥落して日本中が提燈行列に沸き立っていた頃だった。この時、二重橋前で挙行された戦勝祝賀会に天皇陛下が大元帥として白馬に跨ってお出ましになった写真を始めて観て感激したことを覚えている。

また、山下奉文中将と敵将パーシバルの会見が宮本三郎の名画で有名となったが、その際、山下中将が敵将に対し「イエスかノーか」と脅迫的に迫ったエピソードは戦後になってから知った。日露戦争時の「昨日の敵は今日の友」と歌われた乃木大将と敵将ステッセルとの水師営会見と大分違うなと率直に思ったものだ。

余談だが新嘉坡陥落の日、日本軍の落下傘部隊がスマトラ島パレンバンに奇襲降下している。そのときの軍歌「空の神兵」（高木東六作曲）は戦時中の名歌として知られている。（今、習志野の自衛隊空挺部隊でその銅像を見ることができる。）

従兄は新嘉坡入城に際しては「銀輪部隊」の一員として参加した。「銀輪部隊」とは当時、初めて聞く言葉だったが、マレー半島のジャングルやゴム林を列をなして自転車で行進する兵隊さんたちはカッコよかった。

同じ初めて聞く言葉に「轟沈」があった。緒戦のマレー沖海戦のとき、英国の誇る不沈戦艦プリンスオブウエルスと巡洋艦レパレスを「轟沈」したとのニュースは日本中を歓喜させた。「轟沈」とは1分以内に敵艦を撃沈させることだと先生に教えてもらって、教室中で全員が立ちあがって喝采を叫んだことを覚えている。（しかし戦後、分かったことだが事実は「轟沈」ではなかったらしい。）

生前の従兄はよく話していた。

「日本人の多くは太平洋戦争は日本海軍の真珠湾攻撃で始まったと思っているが、俺たちの方が先なんだ。」

事実、戦争勃発を知らせる有名な「大本営発表」第一号（12月8日午前6時発表）「帝国陸海軍は今8日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」は「真珠湾攻撃」を告げる第2報（同日午後1時）より6時間も早い。

したがって翌日の夕刊の大見出しも「西太平洋に戦闘開始」となっており「我海鷲、ハワイ痛爆」の見出しは小さい。（写真参照）

長い間、私は前述の大本営発表第一号を真珠湾攻撃と勘違いして、ハワイがなぜ「西太平洋」なのか、ハワイにも英軍がいたのかと不思議に思っていたものだ。

ともかく、当時の私は義兄と従兄に連日のように慰問文を送り続けた。クラス内で慰問文の多さを競っていた時代だった。


帝國米
西太平洋に戦闘開始
布哇米艦隊航空兵力を痛爆
宣戰の大詔渙發さる

開戦を告げる朝日夕刊

戦地から返事が来ると、先生が皆の前で読んでくれた。

昭和7年、日本政府が「五族協和」「満蒙（まんもう）は日本の生命線」なるスローガンのもと造り上げた新国家「満州国」は全くの日本帝国の傀儡（かいらい）国家ではあったが、戦争末期の当時にあっては、連日の空襲に脅える内地と違って、まさに「王道楽土」であるとすべての日本人は信じていた。

だから義兄が妻子同道を決意したのは当然だった。

この頃、私は茂原飛行基地での勤労奉仕が頻繁に続いたことが多かったが、ある時、防空壕内で一緒になった若い操縦士が呟いた言葉が忘れられない。

「君たちは可哀そうだな。逃げるところがなくて。俺たちはいざとなったら、この零戦機に乗って満州に逃げることができるから。」

当時、満州には山田乙三大将率いる無傷の精鋭100万の関東軍が温存されていると国民誰もが信じていた。しかし実情はどうだったであろう。戦後明らかになったことだが、戦況悪化とともにその精鋭たちは順次、南方の戦場に送られ、残ったのはロートル組がほとんどだったという。しかも100万には遠く及ばなかった。

（余談だが、昭和47年にグアム島で発見されて有名となった横井庄一伍長も当初、満州が赴任地だったがその後昭和18年に南方（グアム）に移動した一人であった。）

その結果が、翌月のソ連軍の突然の満州侵攻の際の関東軍の醜態に表れている。

日本は前月（6月）から、現状ではまだ有効だった日ソ中立条約を頼ってソ連に和平調停の斡旋を依頼していた。

7月12日、正式に近衛前首相が天皇から特使に任命されたが近衛のモスクワ派遣は実現されなかった。近衛の交渉案では国体護持のみを最低条件として全ての海外の領土と琉球、小笠原、北千島を放棄、賠償として労働力を提供することに同意する内容だったという。

そもそも日ソ中立条約は昭和16年4月に締結された。相互不可侵および一方が第三国から軍事攻撃された場合の他方の中立などが内容であり期間は5年であった。

したがってこの時点では確かに法的には有効であったが、ソ連は同条約三条により有効期限満了一年前の昭和二〇年四月に同条約を延長しない（ソ連側は「破棄」と表現）ことを日本側に通達していた。その背景には同年2月のヤルタ会談の秘密協定（ドイツ降伏から3ケ月以内にソ連は対日参戦を約束）があった。そのため日本の提案を全く受けつけなかったのである。（この時、日ソ間で暗躍したのが、あの瀬島龍三中佐だったというが事実かどうか。半藤一利著「世界史のなかの昭和史」）

そして、1946年4月26日まで有効だった日ソ中立条約を8月8日、一方的に破棄して対日宣戦を布告、満州に侵攻したのでる。


ソ聯對日戰を布告

「ソ連参戦」新聞記事（20. 8. 10）朝日

こんな状況下に渡満した義兄家族はまさに「飛んで火に入る夏の虫」だった。

関東軍は完全に崩壊して高級将校らは続々と日本へ逃

亡し「満州国」の官僚も日本へ引き揚げていた。その結果、「満州」は事実上の無政府状態になり、武装解除された日本兵士は9月以降、シベリアに送られ強制収容所（ラーゲリ）で酷寒のなか労働に従事させられることになる。ソ連側は当初から戦争で荒廃した国土の復興を捕虜労働によって行う方針を持っていた。既に昭和16年の独ソ戦開始以降、ドイツ兵など350万人以上の捕虜を国内に抑留して労働に従事させていたのである。

そして次は日本の番であった。満州侵攻後直ちに「スターリン極秘指令」を極東のソ連軍各司令官に出した。日本人捕虜を極東とシベリアで労働に就かせる指令である。

明らかに国際法違反であった。その数60万人といわれ、義兄もその一人だったが後に残った姉は全く知らない異郷の地で、しかも乳飲み子を抱えてどんな生活を送ったのであろう。

数年後、ほうぼうの態でたった一人で帰国してきた姉は、乳飲み子を渡満後すぐに栄養失調で死なせたこと以外はあまり語らなかった。

我が家に帰ってきたとき、姉は髪を短くして完全な男装だった。その髪型をみて私が真っ先に思い出したのは、次の光景だったとは今考えても不思議に思えてならない。

昭和15年頃だと思う。旧制高女を卒業したばかりの姉は生まれて初めて髪にパーマをかけ多少得意になっていたが、当時、「パーマネントはやめましょう」という国策標語が流行っていた。そこで小学生だった私は、姉に向かってわざと大声で、この標語を叫んだ。当然、気の強い姉に家中追いかけられ、最後は便所に逃げ込んで難を逃れた事があった。

当時、毎月1日が「興亜奉公日」と定められ国民に非常時8項目の実施が求められていた。前記の「パーマネント禁止」や「贅沢は敵だ」「欲しがりません　勝つまでは」などだが、それらの標語を書いた看板が街角の方々に立てられていたので小学生の私でも知っていたわけだ。

なお、興亜奉公日の弁当は必ず「日の丸弁当」と決められていた。国民服やモンペが男女の制服と決められたのも、多分この頃だったであろう。

しかし興亜奉公日は太平洋戦争が始まると、新たに制定された「大詔奉戴日」（毎月8日）に吸収され姿を消したが、標語は終戦まで続いた。

此処に一冊の本がある。

義兄が渡満するとき、私に遺書替わりにくれたもので、今ではぼろぼろになり殆ど茶色に変色してしまっているが、戦前、ベストセラーになった三木清著「哲学入門」（岩波新書昭和17年版）である。

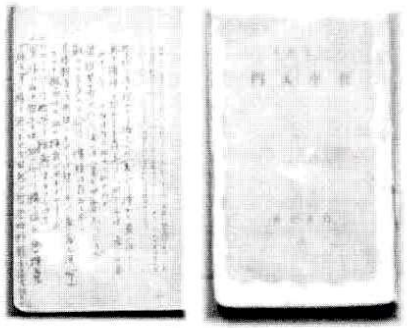
中学3年の私には難しい内容だったが、余白に義兄が記したメモを見つけたので今も大事に保管している。

以下、抄記する。

「哲学は人間としては一通り必要であり身につけなければならぬかも知れぬが、軍服を身につけた人間には豪も必要のないものだ。戦いに否定なく命令に懐疑は存在しない。軍隊教育には無智もなければ智もない。崇高な使命につながる徹底的な血の探求があるばかりだ。だからと言って哲学を軽蔑するものではない。云々」

少し理論矛盾の文章だが、それが却って当時の義兄の揺れ動く心情を物語っていると思えてならない。

なお、この本の著者三木清はこの年4月、思想犯として逮捕され、終戦直後の9月獄死した。「三木は東条に殺された」と巷間言われたが最もショックを受けたのはGHQであった。敗戦から既に1ケ月を経ていながら、いまだに政治犯が獄中でなお過酷な抑圧を受けている実態が判明したからである。この件を契機に治安維持法の急遽撤廃が決められることになる。



義兄の愛読書とメモ書き（三木清「哲学入門」）

問題の治安維持法は大正14年に制定された。この年1月に革命間がない（大正6年10月革命）ソ連との間に日ソ基本条約が締結されたのを機に、日本国内でも共産主義革命運動の激化を懸念されての制定だった。しかしその後、太平洋戦争を目前とした昭和16年に全面改訂され、その対象者も共産主義者だけでなく自由主義の知識人まで限りなく広がっていった。「天下の悪法」と言われた由縁である。

以下、全くの余分なことだが獄中、彼は私と同じ重度の疥癬に罹患して苦しんでいたことを後日知って妙な親近感を覚えた。

また、かって三木の故郷兵庫県龍野（現たつの市）の「市立龍野歴史文化資料館」を訪ねた際、真っ先に「哲学入門」（初版本）を見つけて、妙に懐かしかった。

彼は故郷「たつの市」の名誉市民である。

（続く）

回想　目白通りと神田川周辺の空間観察

都市は「ふるさと」か

山本鎭雄

はじめに

私は東京の中野区新井で生まれ、杉並区荻窪で育ち、仙台と広島の地方都市で暮らした後、東京に舞い戻ってきた。私の職場は東京都文京区の目白台にあった。その一帯は高台の尾根道の目白通り、その沿道の富士見坂、宿坂、胸突坂などの狭い坂道を下ると、神田川である。土曜日の午後や空いた時間を利用して、その周辺をタウンウオッチングした。次第に理解したことは、街はさまざまな表情をしていて、一方では歴史の経過と痕跡、人々の生活の表情などを映し出しているように見え、他方ではビルやマンションが目白通り沿いに盛んに建造されるなど急速に変化していた。

その頃、注目されたのが、「路上観察学」である。路上の看板、壁や電柱の張り紙、マンホールの蓋、風呂屋や町工場の煙突、都市河川に入り、上流で捨てられた廃棄物の収集などなど、あくまでも個々の「事物」を比較分析するのが、「路上観察学」である。誰もが日常的に道路を歩き、道路沿いの商店、住宅、ビルを見て、現状やその変化に気づくであろう。「路上観察学」はあくまでも個々の「事物」に執着して観察し、さらに比較検討し、新たに知見を得る試みであろう。

それは必ずしも学問的に確立した研究分野ではなく、好事家たちが個々の「事物」を観察し、その結果を『路上観察学入門』（一九八六年、筑摩書房）として出版した。ひと頃、路上観察マニアの入門書として大いに注目され、路上観察学会も結成された。湯屋（風呂屋、とくに男湯）の壁に壮大な富士山をペンキで描かれた壁画、東京近辺の女子高校生のセーラー服のスケッチなども読書界の話題となった。

暗渠（あんきょ）もまた「路上観察」の恰好な対象である。水路をアスファルト・コンクリートで覆い、地下に埋設された「暗渠」を、道路の形状、路上のマンホールの蓋や敷き詰められたコンクリート・パネルから推測し、路上からは目視出来ない地下の暗渠の存在を確認し、何故、何時ごろまで水路があったのかと考察する。それはあくまでも暗渠マニアの路上観察である。

NHK総合テレビの人気番組ブラタモリで暗渠がしばしば話題になる。地理、地質、歴史などの雑学に詳しいタモリは、暗渠マニアの一人であろう。私は暗渠マニアではないが、自宅前の市道は暗渠である。江戸期に水路を掘り、玉川上水から分水し、流れる清涼な水を飲用したという。ところが、一九六〇年代に家庭排水や工事排水が混入し、悪臭を放ち、マンホールの蓋をして暗渠にして道路を拡幅した。暗渠としてあまりにも粗末に造り、自動車の重量に堪えられないとして、ポールを組んで隔離し、専用歩道にした。当地では暗渠を「ほっこ抜き」というようだ。

私の関心は、個々の「事物」ではなく、目の前に繰り広げられている「地域空間」で人々の生活と、隠された歴史の解読を試みることである。私はタウンウオチッングのマニアとして、取り敢えず「空間観察学」と名付け、職場に近い目白通りや神田川の周辺の「地域空間」を観察した。その際、江戸末期に出版された『尾張屋版江戸切絵図』のうち、「雑司ヶ谷音羽絵図」（嘉永六年、以下、「切絵図」と称する）と最新の地図をコピーして携帯した。

「目白」の地名の由来

目白の地名の由来は、江戸初期に武蔵国関口（現・文京区関口）に本堂が建立され、新長谷寺（しんちょうこくじ）と命名された。本尊として江戸五色不動の一つ「目白不動尊」が安置された。新長谷寺は、江戸川（当時、上流は神田上水、下流は神田川。現在の名称は神田川）に架かる江戸川橋を渡り、急な目白坂を上り、高台の平地にあった。北には滔々と流れる江戸川の向うに風光明媚な江戸市中を眺めることが出来、しかも境内には茶屋や料理屋が出店し、見物に来た参拝人で大いに賑わっていたという。

だが、新長谷寺は戦災で焼失した。戦後、しばらく空



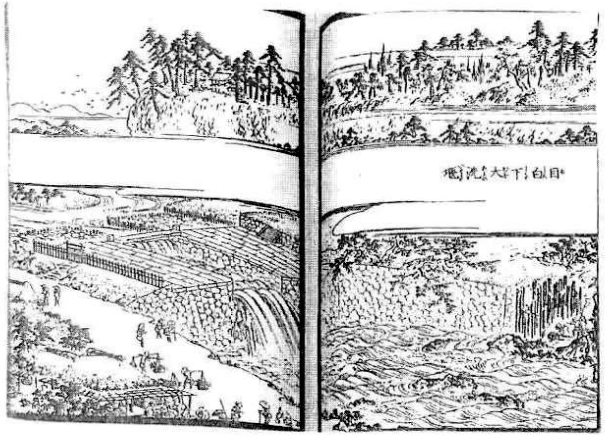
目白不動堂（新長谷寺）
（江戸名所図会）

地に急造された進駐軍の寄宿舎となり、寺院は廃寺となった。その後、新長谷寺の「日白不動尊」は、日白通りから神田川に下る途中の坂道沿いの平地にある豊島区高田の新霊山金乗院に移設され、祀られている。要するに、「日白不動尊」が「日白」という地名のもともとの由来で、日白坂、日白台、日白通り、山手線の日白駅などが命名されたのであろう。

文京区の「日白台」（一～三丁目）と、豊島区の「目白」（一～五丁目）は紛らわしい地名だが、江戸期の「日白不動尊」、さらに高台の日白台と尾根道の日白通りに由来する。すでに豊島区の「日白」は、明治一八年に開業した日白駅の東西の高級住宅街と学習院大学などの文教地区としてのイメージが定着している。江戸期、「目白」は「日白台」とは異なり、純然たる農村地域だったと思われる。大正期にぽつぽつ住宅が建つようになったであろう。とくに関東大震災で都心部は壊滅的な打撃を受け、被災地の一部は住宅建設地として高台の農村地域の「目白」に移転したのではなかろうか。

今、神田川（その過去、神田上水と称された）の江戸期の歴史的痕跡を瞥見することが出来る。尾根道の目白通りから胸突坂を下り、大滝橋の近くに保存された石造りの大洗堰（おおあらいのせき）を観察することが出来る。この堰を高く建造し、神田上水の北側を堰き止めて水位を上げ、水量を調節して神田、日本橋方面に飲料水として供給し、南側をそのまま下流に流水させた。ところが、はやくも明治後期には飲料水の供給を停止したとのことである。神田川の大洗堰の遺跡は保存され、見物することが出来る。人が生きるために、飲料水や生活用水を確保することが、如何に大切なことか認識することになろう。

すでに神田川は河岸を真っ直ぐに整備し、堤防を造った。本来、善福寺川と妙法寺川が合流して水量豊かな神田川はくねくねと蛇行していたのであろう。神田川の面影橋周辺の豊島区高田と新宿区西早稲田の最新のメッシュ地図を見ると、何と新宿区の区域が神田川を超え、豊島区の区域に編入されている箇所が散見される。思うに、蛇行する神田川のセンターラインに境界（例えば、豊島区と新宿区の区境）を設定したのであろう。蛇行する神田川を直進させ、コンクリートで護岸工事したため、豊島区と新宿区の区界は極めて理解し難い形状になっている。とまれ、日白台とその尾根道の日白通りとその坂道、神田川を地域観察すると、江戸期の痕跡をかいま見ることが出来る。



神田上水大洗堰（江戸名所図会）

目白台周辺の概念図（東京都文京区と豊島区の一部）

目白台を中心に道路の状態、街並み、敷地の大小などに着目すると、三つの地域空間に類別し、概念図を構想することが出来る。（A）の地域、目白通りの南側は広い敷地に日本女子大学豊明小学校、旧田中角栄邸、目白運動公園（元国家公務員共済組合連合会運動場）、男子学生塾の和敬塾、椿山荘とフォーシーズンズ（ホテル）、急な坂道の胸突坂沿いの両側には関口芭蕉庵、永青文庫、回廊式庭園の新江戸川公園（この一帯は旧肥後熊本藩細川家の土地と跡地）を見物することが出来る。「切絵図」によれば、（A）の地域は徳川幕府から拝領された諸大名（松平、稲垣、小笠原、細川、黒田など）の広大な下屋敷と抱屋敷である。大名下屋敷は江戸市中の大火の時、避難用として、あるいは夏季の避暑用の別邸として建造された。それぞれの大名下屋敷からは江戸市中を一望できる目白台の南面の傾斜地に立地している。



日白台周辺地域の類型（A）、（B）、（C）

このことは、江戸幕藩体制のヒエラルヒーの頂点を物語っているといえよう。戦後しばらくして「田中御殿」と言われた田中角栄首相の広大な敷地と邸宅は、一時期「今太閤」と称された最高権力を掌握したシンボルであろう。

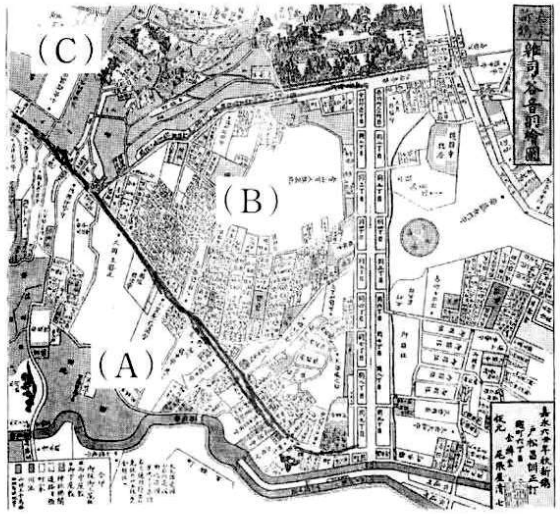
（B）の地域には日本女子大学、聖ドミニカ修道院、東京カセドラル聖アリア大聖堂の他、ビルやマンションがある。「切絵図」を見ると、大名の土井、溝口などの下屋敷が記載されているが、中・下級武士の武家屋敷（侍屋敷）が密集している。武家屋敷の一帯を散策すると、敷地はすでに細分化され、低層住宅が密集し、商店、事

務所、アパート、駐車場などが混在しているが、それでも地域として独立性があり、緑の多い閑静な住宅街である。しかも大町桂月や窪田空穂、杉山寧などの旧宅があったという。

さらに（B）地域で音羽通り方面へ歩いて行くと、坂道の電柱に「鉄砲坂」という案内版を見た。近くの断崖を「的」にした鉄砲の射撃訓練の「的場」があったという。そこで「切絵図」を見ると、徳川将軍の先陣を務める御先手鉄砲組と弓組の与力衆・同心方の組屋敷と弓道場が描かれている。下級武士の与力衆と同心方は、幕府から身分に応じて敷地を拝領し、住居を自前で普請したという。さらに御賄組の屋敷が密集している。彼ら下級武士は江戸城内の台所で炊事（賄）したのではなく、台所へ食料品を供給したという。さぞや、彼らは取引業者から応分の袖の下をせしめていたことであろう。

（C）の地域一帯は、概して道路は曲がりくねり、街並みは雑然として、住宅は不規則に密集していたという印象を抱いた。不忍通りの北西側は雑司が谷で、その地名は時代によって雑色谷、蔵王ヶ谷、僧司谷などと一定しなかった。八代将軍吉宗が来着した時、地名があまりにも「混雑」していたため、「混雑之雑之字相用可」との上意があったという。それ以降、雑司ヶ谷が地名となった（『御府内備考巻之五十二』）。

『切絵図』を見ると、清土道（現・不忍通り）に沿って、「百姓町」と数軒の武家屋敷が所在している。池波正太郎の『鬼平犯科帳』では長谷川平蔵が火付盗賊改方長官に任命される以前、一家で清土道沿いの武家屋敷に住んでいた。平蔵が長官に就任すると、官邸街の清水門外の旗本屋敷で職務に尽くしたという。そもそも、この地域は「百姓町」の他、農地や雑木林の地である。この雑司ヶ谷には威光山法明寺の飛び地に安産と子育ての鬼子母神（きしもじん）がある（後述）。



雑司ヶ谷音羽絵図（目白台周辺）

江戸「山の手」の場末―二つの怪談の舞台―

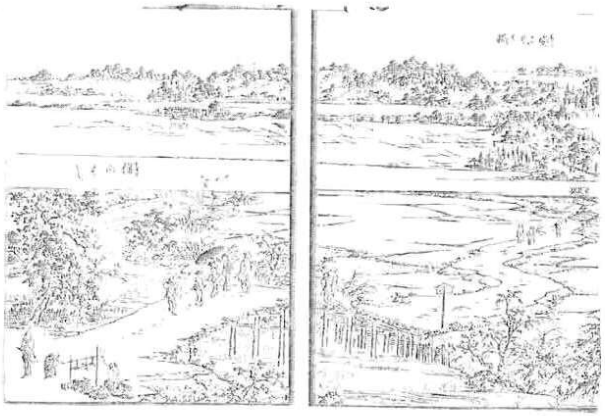
不忍通りの始点の道路沿いに老舗の鳳山酒店がある。関東大震災で焼失し、松材で新築し、天井に黒ずんだ松脂が見えた。南側の急峻な坂道を富士見坂という。そこから霊峰富士が眺めることが出来たのであろう。その直ぐ途中に「東坂」（俗に「ヒナシサカ」という）があり、かつては棕櫚などの樹木に覆われ、昼なお暗い坂道だった。この狭い坂道が文京区と豊島区の区境で、路上で文京区民と豊島区民がコンクリートの階段で枯れ葉を掃除しながら、和やかに会話していた。なんとも、微笑ましい光景だった。

（C）の地域は、すでに触れた（A）と（B）の地域とは異なり、「大江戸八百八町」の山の手の場末だった。四世鶴屋南北の「東海道四谷怪談」は江戸の怪談物の代表作で（初演・文政八〔一八二五〕年）、お岩さんが幽霊となって恨みを晴らすことで知られている。南北は江戸市中で囁かれた猟奇事件や怪談噺を盛り込み、歌舞伎狂言として創作された。

第二幕は「雑司ヶ谷四ッ谷町の場」、鹽治（えんや）の浪人・民谷伊右衛門の浪宅である。伊右衛門は傘張りの賃仕事で糊口を凌いでいたが、出世の邪魔になったお岩を毒殺し、さらに先祖伝来の妙薬を盗んだとして下男の小仏小平を殺害した。

伊右衛門は間男心中に見せかけるため、二人の死骸を戸板の裏表に打ち付け、「すがたみ（姿見）の、川に流してすぐに水葬」。伊右衛門の手下は夜陰に乗じて、戸板に打ち付けた二人の死骸を運び、目白通りを横切り、「宿坂」（俗にくらやみ坂という）を下り、さらに姿見橋から神田上水に投げ込んだ。

神田上水は井の頭池を水源とし、善福寺川や妙法寺と「落合」（合流し）、増水した。姿見橋から見下ろすと、全身が姿見の鏡のように川の水面に透き通って見える。この清浄な「上水」は江戸住民の日常的な飲料水である。神田川から供給された「上水」に二人の死骸が投げ込まれたのだから、江戸市中では吐き気をもよおし、気味の


姿見橋（江戸名所図会）

悪いグロテスクなショックを与えただけに、歌舞伎の怪談物として大いに話題になったのであろう。

ところが、「切絵図」を見ると、雑司ヶ谷には「四谷」という地名は見当たらない。日白通り沿いに、その日暮らしの振り売り商人、日雇い職人、内職で糊口をしのぐ浪人たちの「山の手」の場末である。彼らが住む「四軒之家」があり、そこから「四家町」と記載されたのであろう。今も日白通り沿い（雑司が谷二丁目）に「四つ家児童遊園」の表札を見ることが出来る。

「四ツ谷町」は長さ約五〇間、幅が三間から四〇間という地形により不規則な形状で、町方支配の町人地である（『御府内備考巻之五十一』）。歌舞伎の演題に東海道「四家」では恰好が付かない。むしろ甲州街道と青梅街道が追分、江戸城外郭の四谷見附や四谷大木戸の「四谷」が有名である。南北は演題を「四家」よりも「四谷」とした方が、はるかに恰好が付くと考えられたのであろう。

日白通り沿いの坂道の「宿坂」を下り、途中の「砂利場」の平坦地に大鏡院南蔵院がある。この寺院は明治初期の三遊亭圓朝の「怪談乳房榎」の前半の舞台である。「怪談乳房榎」は絵師の菱川重信が新築した南蔵院本堂の天井に雌竜と雄竜を描いていた。ところが、妻をかどわかして懇ろになった浪人の門弟は、重信を神田川姿見橋周辺の河原で殺害した。

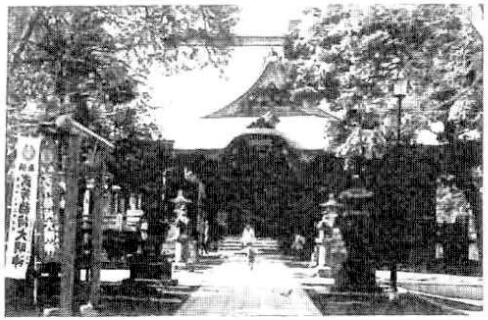
この河原は源氏蛍が乱れ飛び、夏の夕べの蛍狩りと夕涼みは江戸郊外の名所の一つだった。圓朝の怪談噺前半のクライマックスは、河原で惨殺された重信が画竜点睛ではないが、描き残した竜の眼を仕上げて、跡形もなく姿を消すという噺である。もう一つのクライマックスは重信の幽霊が現れ、遺児の真与太郎の命を救うという噺である。

雑司が谷鬼子母神

日白台から神田川に下る坂道の宿坂は、偶然とはいえ、江戸期と明治初期の代表的な二つの怪談の舞台となった。江戸の「山の手」の場末として、たしかに不吉で気味の悪い「影」の部分を象徴する怪談の舞台として登場した。ただ、「影」があってこそ、「光」もある。日白台で「光」の部分を最も象徴しているのが、雑司が谷鬼子母神である。

さきの「宿坂」を上り、日白通りを横切り、鬼子母神の表参道を行くと、境内に着く。安産と子育ての神様と信仰された鬼子母神は、徳川将軍の八代吉宗から十一代家斉が頻繁に参詣したため、諸大名、旗本、御家人をはじめ武士、町人、農民もこぞって参詣して繁栄したのであろう。

斎藤月岑（げっしん）の絵入り地誌「江戸名所図会」（江戸後期）には、「鬼子母神は霊験著しく、諸願が叶えられるため、つねに参詣人は絶えない」と添え書きされている。鬼子母神は先祖代々子々孫々、つまり、先祖代々の跡継ぎ当人らが子々孫々の永続を願って、老若男女が参詣し、境内にある茶屋や料理屋の客人となったのであろう。参道や境内には茶屋や料理屋のほか、尾花細工の「ススキみみずく」人形や紙製の五色の「風車」が参詣土産として定番だった。江戸市中から鬼子母神の日帰りピクニックのコースは、真言宗豊山派の別格本山の護国寺を参詣し、音羽通りを歩いて帰路についたのであろう。



堂本神母子鬼谷ヶ司雑



神母子鬼谷ヶ司雑（江戸名所図会）

当時、次のような川柳が紹介されている（海老澤了之介『新編若葉の梢』）。

帰り道　急げば廻る風車
風車わるく廻ると泊りがけ

鬼子母神参詣の際、子供の土産ものとして人気があったのは、とくに五色の風車だった。

この川柳は、参詣人が護国寺の「帰り道」に音羽町の遊女屋に泊まった光景を川柳にしたのであろう。だが、遊女屋の存続は一時的だったようだ。私は、音羽通りを歩き、覗いた狭い横道に数店の飲み屋と喫茶店の看板を見て、この辺りに遊女屋があったのでなかろうかと推測した。音羽通り沿いは講談社や光文社などの出版街である。そこの社員が常連の客だったのであろうか。当然、昼はさびしい横町だった。

夜、私は職場の同僚と日白通りを歩き、目白駅に向かった。途中、鬼子母神の表参道の前にさしかかると、近くの住民がグループ（「講」）ごと、なかには池袋方面からも飾りのついた二mの万燈（まんどう）を先頭に練行列をしていた。リズミカルに団扇太鼓を叩きながら、「南妙法蓮華経」の題目を唱え、「講」ごとに練行列して鬼子母神本堂に進んでいた。なかには外国人を見かけた。

その日は御会式（おえしき）大祭の三日間の最後の日で日蓮の入滅の日だったという。その夜は先を急いでいたので、鬼子母神の社殿までは行かなかった（今思うと、残念至極だった）。同行した幼児心理学の同僚の話しでは、近隣

の小学校で生徒は、御会式大祭が近づくと、男子は休み時間に教室で二本の棒でセルドイルの筆箱を叩き、無心に興じているというのだ。

都市も「ふるさと」だ

すでに触れたが、私は都市の東京都中野区新井に生まれた。その後、杉並区荻窪で育った。仙台と広島の地方都市に暮らした。東京に舞い戻り、住宅ローンの支払いに苦労して一戸建ての住宅に住み、それが「終の棲家」となった。これまで、体験的に農村とはまったく無関係だったのではない。しかし、それらの農村を「ふるさと」としてアイデンティティ（自己同一性）を実感することが出来なかった。

私は「農村」の出郷者、離郷者でもなく、生まれも育ちも、また暮らした場所はすべて「都市」である。「都市」に暮らした私は、電車の乗客に例えれば、電車が通り過ぎるただの通過駅（ステーション）ではなく、決められた停車駅（ストップ）で途中下車し、最寄りの場所に暮らし、やがてその土地や地域空間の歴史の経過と痕跡、人々の多様な暮らしを知り、次第に「愛着」を覚え、アイデンティティを実感するようになった。

農村に限らず、都市もまた「生まれ育った場所」を第一の「ふるさと」と言うならば、人生の「停車駅」で降り、その場所の近くにしばらく住み、次第に「愛着」を覚えるようになれば、第二の「ふるさと」と言えるであろう。さらに滞在したそれぞれの都市に「愛着」を覚えるならば、第三、第四などの「ふるさと」と言えよう。

私の「停車駅」がたまたま職場のある東京都文京区の目白台だった。その周辺をタウンウォッチングし、これまでの人生とは異質の地域空間の観察にはまり込み、この地域空間に「愛着」を覚え、我が「ふるさと」と自覚するようになった。以後、生まれ育った「ふるさと」、暮らした「ふるさと」を回顧したいと思うようになった。

補遺

本稿はすでに『史遊サロン通信』（史遊会通信継続）二五七号に掲載して頂いた寄稿文を修正・加筆した。

なお、景観観察学のパイオニアは東京を街歩きして、江戸後期、「整然と敷地割りされた計画性の強い都市組織」と「地形に順応した不整形な都市組織」に分類した。

この二類型の「都市組織」（「都市空間」）は、はからずも、これまで述べて来た目白台の尾根道、坂道と神田川とその沿道に典型的に観察された（陣内秀信『東京の空間人類学』、一九八五年、筑摩書房）。そこで、目白台を中心にその周辺の地域空間を類型化して、それぞれの地域空間の特徴を分析した。

二〇二〇年七月一〇日　脱稿

神儒仏正味一粒丸

浅野博文

一、賽は投げられた

今年の一月下旬に京都の藤森神社に参拝した。藤森神社には日本書紀編集総裁であらせられた舎人親王が祀られて居り、本年は日本書紀編纂千三百年の記念すべき年である。日本書紀とは、元正天皇の養老四（７２０）年五月に、本文三十巻に系図一巻（系図は散逸）とする我が国最古の正史（国家が編纂した歴史書）である。

その修史事業とは、六世紀末葉から七世紀初頭にかけて在位せられた、推古天皇朝の聖徳太子を中心として編まれた『天皇記』『国記』に遡り、その学統に連なる人達の叡智により完成に至つたもので、古代の勅撰史書（六国史）の中でも白眉とされる。それは、歴史の研究や編纂及び法令の整備が盛んになされてゐた平安朝の中頃まで、三十年に一度ほどの割合で講義も行われてゐた。

それは、孟子の言葉に「故家・遺俗・流風・善政」とある様に、古来より続く忠臣義士の旧家の存在と醇風美俗を受け継ぐ善き政治が、国の基盤を支へる柱であり、それらを培ふものが国史であるとの認識からである。幕末に僅か十畳半の粗末な私塾（松下村塾）から、多くの維新の指導者を輩出した、吉田松陰先生も『講孟箚記』にて「国の治安長久なるは、地広きにもあらず、民衆きにも在らず、惟頼みとすべきは此の四者にしくはなし、然れば政を為す者ここに心を用ひずんばあるべからず」と国の根本を維持する力とは何かを示されてゐる。

しかし、日本書紀の講義は、村上天皇の康保二（９６５）年を最後として行はれなくなり、法令の整備（古代の法律である律令の追加修正や施行細則である格式）は、醍醐天皇（御在位８９７～９３０）の延喜格と延喜式を

以て中絶し、正史編纂は延喜元（９０１）年の日本三代実録を以て最後となつた（注一）。それは国家統治の施が、これを境に弛まざるを得ない状況に入つた事を意味する。

そもそも、日本書紀（国史）の深き研究が、必然国體の明確なる認識となり、国體の明確なる認識とは、必ずや皇室の尊崇に結果してきたことは周知の事実である（奈良時代末の称徳天皇の御代に、皇位の簒奪を謀つた道鏡の野望を阻止した和気清麻呂公の義挙は有名である）。稽古照今と称し、温故知新とも言ひ換へられるその精神は、後世の亀鑑となり、伝統となり、日本の歴史を特徴付けるものとなつた。

「学問他なし孝と忠」とは、『大日本史』編纂を通じて明治維新の原動力となつた水戸学の大義名分論の根幹をなすものであり、それは国学と共に思想的影響を及ぼした崎門学の山崎闇斎先生の言葉でもある。日本書紀を最も重んじ、その編纂の大功を立てられた舎人親王を祀る藤森の社や伊勢大神宮に額づいて祈りを捧げ、その人倫を重んずる当然の帰結として、革命を否定し、今日も未だ革命のない日本の歴史、日本の国體を讃へたのは有名である。

踵を返して我が国の平安後期の朝廷に於いて、それを心配する見識や気迫は既に失はれてゐた。非常な大乱（保元の乱）を逃れる道は閉ざされた。中世に向けて、既に賽は投げられたのである。

二、日本の中世と神道の衰微

人は皆、肉体の死は避けられぬ。しかし精神の死といふものは、超克し得ることが可能である。我が国の特筆すべき点として革命のないのは、即ち建国以来の精神が死んでゐないと言ふことである。古代に於いて外国の識者が我が国を称した「国王一姓伝継」（『宋史』日本伝）や「逸書百篇今尚存」（歐陽修作『日本刀歌』）の言葉に象徴せられる継承発展がそれであり、それは、絶へず生をくりかえし連続してゆく不滅の生を一貫して説く神道の本質に他ならない。

神道とは基本的に死を認めない。祭祀の中心に罪穢れを清める「祓」があり、それを以て神々の祭りを立て、それを伝承し、生活の基盤としてきたのが日本人である。そこには、人間と言ふものは一人で生きるものではない、利己的存在ではなく、倫理的存在であることを教へる。したがつて、その意味に於いて我が国の中世とは、神道の衰微であり、それは乱世と同義である。

君民一致の朝廷政治は衰へ、新たに権力を掌握した武家の政治に象徴される様に、乱世の覇権争ひは幾多の不

条理を生み出した。特に慈悲の心を旨とし、仏に仕へ、学問に励み、世の人々を善導することを本務とする僧侶が僧侶としての本来あるべき道を捨て、武装し、人を殺し、寺は焼き払はれた。神道の衰微は同時に日本仏教の本来の姿も失はせたのである。

「一切衆生悉有仏性」。日本仏教の根本思想に流れる大乗教とは、衆生済度を認めることなく、自己の解脱だけを求める立場から、その人の精神も理想も死ねば永遠に失はれ霧消する小乗の教義を否定する（故に小乗仏教の僧侶は結婚もせず家庭を持つこともしない）。

全ての者は、絶対にくりかへすことなく断絶して終はるのではなく、継承及び発展の機会が認められるのが大乗教の根本思想であり、それはどこまでも現世の肯定である。個人の自覚と意志と努力の尊重であり、精神の死を否とする神道と重なり合ふものである。それは六世紀中頃に舶来した際に、日本人の心に受け入れられやすい（神道的）性格として、認識されたに違ひない。

かへりみれば、和国の教主聖徳太子は日本仏教の方向性を定められ、奈良時代には、聖武天皇の発願により全国に国分寺が建てられ、中央の東大寺には盧舎那仏が安置せられた。即ち、天皇を中心として、天皇には日本全国津々浦々の万民の心が映り、同時に天皇の御光が万民を照らすと言ふ、我が国元来の国家原理が大乗の教と重ねられたのである。

更に、平安の御代に於いて、東大寺を中心とした南都六宗に加へて天台・真言が入り、ここに鎮護国家の仏教、日本仏教としての礎は完成し、皇国日本の限りなき栄へが祈られる様になつたのである。

しかし、盛衰は世の常であり、殊に不幸は単独にて来たらずのもまた常である。平安中期から頻発する地方の反乱（十世紀中頃の平将門や藤原純友の乱はその代表）や私有地（荘園）の乱立は、恐ろしい動物的本能を以て続けられる武力闘争により、この世ながらの地獄の生活に入るとした末法思想を以て裏付けられた。

正確には解つてゐない釈迦の入滅時から正法・像法・末法と仏教的に時代区分されたそれは、根拠に乏しい運命観である。往生極楽を発願し、天喜元（１０５３）年に落慶した鳳凰堂とは、末法元年を記念する建築物であるが、現実社会に頻々と生じる内訌への不安や恐怖を増幅させた俗論として、当時の人々の心を暗くし、長年に亘り、その行動が支配されたのである。

「強キハ弱キヲ伐キ、賤シキハ尊キヲ凌グ、臣ソノ君ヲ殺シ、子ソノ父ヲ殺ス、上下カヘッテ転倒シテ、猿ノカムガ如ク、犬ノイガムガ如ク」

『応仁記』

仏教が予言する末法の世の地獄が現実となつた「下克上」とは、応仁の乱を象徴する言葉であるが、それは実に中世の世界観や人生観を端的に表す言葉である。それは、歴史に於いてただ破壊的作用をするだけであつて、継承及び発展には微塵も貢献することは出来ないのである。

人が、芸術功業の永遠であり続けたいと願ふのは、皆その一生には限りがあればこその希求である。これは恐らく古今東西の人の悲願に違ひない。さうでなければ結婚して子供を養育したり、敢えて建国といふ困難な大事業に身を投ずることもしないはずである。ただ一身の栄耀を求めるだけならば、その様なことをする必要がない。

死ねば神となり、その人の意志や精神は必ず後世の人間により継承せられ、詮ずる所は、皇室の安泰、国體の護持といふ理想や目的が永遠に保持されるのが、神道の本来の姿であり、精神思想とする所である。そして、日本仏教もまた、すべての衆生は救済され、現世の幸福と来世の安寧を約束し、君民一致、皇国弥栄への原動力としての幽明一致の仏となるのである。

三、中世の超克と乱世の終焉

ヨーロッパの中世が、（キリスト）教会の絶対的権力を中心として形成され、それに反抗すれば被告人として宗教裁判にかけられたのは周知である。その中世を完全に超克し、教会的宇宙観を粉砕したのは皮肉にも聖職者のコペルニクス（1473～1543）と敬虔な教徒であつたガリレイ（1564～1642）であつた。これは近代自然科学の知識が導いた偉業であるが、その知識を獲得する上で、キリスト教の存在は不可欠であつた。

数式を駆使した数学や物理学等の知識が、天地自然の仕組みを解明し、それらを応用して大小の工業製品を生み出し、人間の物質的生活を充実させることは、同時に旧約聖書の創世記に記された神の威光を増すことに繋がる（精神的生活の充実）。それはキリスト教徒としての使命であり、それこそイエスが願ひ、我々に望んでゐる本質的なことであるとの考へに立ち（注一）、異教徒に対する暴力的行為や略奪行為を積極的に推し進めたのである。

産業革命と並び称され、市民革命の先駆けにして議会政治の嚆矢として、君主神権説の打破を自画自賛する十七世紀イギリスの名誉革命も、要は下剋上であり、東洋的には湯武放伐であり、臣が君を殺害して権力を掌中にした暴力的簒奪に過ぎない。

小生は、実社会に活用されてこその学問や宗教であると信じるが、祖国を益し、世界を益すのが順序である。学問をして業が成つても、自分の生国が滅びて何の為になるのか。孔子や釈迦の教へが多くの人に利益をもたらした事実は偉業に違ひないが、当時の彼らの生国は今日存在しないのである。如何に聖賢の教へが尊くともそれは抜け殻に過ぎない。

また一方で、暗黒の中世から近代化を目指し、超克するも、他国の主権を排し、領土を侵すが如き蛮行を容認し続け、自らの版図の拡大にのみ汲々とするだけの西洋人を倫理的存在へと導くことが出来なかつたキリスト教も同じく形骸に過ぎない。その実際を観るにつけ、結局その本質とは、破壊断絶を是とする利己的なものと言ふ一点に集約されるのである。

翻つて、我が国の中世の超克は道義の回復に本質があつた。倫理的存在である本来の人間を主体とした道義国家の復活を目指したのである。そして我が国に於いては必ず、その中心に天皇がおありになられた。皇室の菩提寺として名高い御寺泉涌寺は、台・密・禅・律・浄の道場として、建保六（1218）年に再興され、貞応三（1224）年には後堀河天皇により皇室の祈願寺と定められ、日本仏教本来の鎮護国家のあるべき姿を示された。

変転著しい世にあつて、人の世を救ふことは、常に我が君主の治世の目的とするところであつた。鎮護国家とは、仏の加護によりて国家が鎮まり、守護されることであり、今日の日本仏教の大潮流をなす天台・真言の二つも、国家鎮護の大道場として、平安京を建設せられた桓武天皇の発願であることは周知である。浄土宗・真宗・日蓮宗・時宗などは皆この潮流から生まれて来た。

小生は先祖代々真宗門徒であるが、見真大師親鸞の教義も、その願意は「不孝の者を助けたまへ阿弥陀仏」に貫かれ、総じて世を益し救ふ所に全力を傾けられた、御歴代天皇の叡慮と重なる。それは、百行の本が孝であり、それに生ずる七難の消滅を祈念したのである。親鸞聖人の『浄土和讃』にも「山家の伝教大師は国土人民をあはれみて七難消滅の誦文には南無阿弥陀仏をとなふべし」と記されてゐる。

そして、念仏に帰依し、「厭離穢土欣求浄土」と墨書せられた馬印を掲げ、織豊の先輩の事業を完成させ、戦国乱世を完全に終焉させた家康公の祈願も、「（乱世の）穢土を厭ひ離れ、永遠に平和な浄土を願ひ求めるならば、必ず仏の加護を得て事を成す」であつた。保元の乱（1156年）から約四五〇年、元和偃武の到来と共に乱世は終焉し、江戸時代の幕が開けるのである。

四、明治維新と導き出した楠公精神

日本の中世（注二）とは、末法思想の広まりと戦乱の世の人心を治めるための新仏教の台頭等で、その精神生

活及び文化価値の上に於いて、その時代区分は「聖」の言葉に象徴される。その後に続く近世の江戸時代とは、出版文化を興隆して学問の興隆を促し、士農工商としての各々の本分を守ることを人倫の第一とする「善」の価値観が支配した。

そして、「武」ではなく「文」の力により国を治める事を欲した江戸幕府文教政策の中心となつた朱子学が、「善」の価値観を裏付けた。朱子学とは宋学とも称され、南宋（960～1279）の朱熹の説によりて儒教の古典を解釈する学問であり、とりわけ五倫の道徳の尊重は朱子学の本義にして、父子の間には親、君臣の間には義、夫婦の間には別、そして長幼は序、朋友は信を以て重しとする所から、これらの関係を離脱して「一切衆生悉有仏性」を説く仏教は、人間の道徳を破壊し、人生を無意義なものにするものだとして批判された。

当時の文教政策の中心人物の林羅山は法印道春を名乗る僧侶であり、その師である藤原惺窩も京都五山の相国寺の僧侶であつた。禅僧を中心とした室町時代の五山文学に代表される様に、仏教の僧侶が儒教を学ぶのは慣習になつてゐたが、僧侶による朱子学の興隆は、仏教を著しく衰退させ、葬式仏教に堕したのは不本意な結果であつた。

しかし一方で、朱子学の人倫を重んずる中で、日本の心ある学者は、シナの不幸にして度々革命が起り、国家が起つては滅び、立つては倒れてゐることに対し、「君雖不君、臣不可以不臣、父雖不父、子不可以不孝」（『古文孝経』序）の至言を想起した。そして革命を否定するに至り、革命の行はれたことのない日本の歴史、日本の国體を讃へたのは特筆すべき点である。

そのことは、古事記研究を中心として日本語の正しい姿と古代の思想の復活に尽力した本居宣長に代表される国学、本は僧侶にして朱子学の研究を経て日本書紀に至り、神道の本義を究めんとした山崎闇斎の学派、そして双方を吸収した水戸学に一貫する不易の精神であつた。

故に、水戸学は勿論、本居宣長先生も山崎闇斎先生も建武の中興に殉じた楠木正成公を忠臣の鏡として称へ、それが明治維新を導き出す原動力となつたのである（注四）。

五、神儒仏正味一粒丸

江戸幕府が大政奉還をし、旧幕府軍と薩長を中心とした官軍勢力との争ひから西南の役に至るまで、戦陣に死し、職域に殉じ、非命に斃れたる有望の人材は少なくなかつた。一方で、双方共四民平等となり一君万民の体制下では陛下の赤子の一人であるとされたが、現実は士族の商法などに代表される様に、理性では理解しやうと努

めても、現実社会を生きる中で感情が許さない部分もあつた。

明治天皇の宸翰が示す如く、我々が真に、万里の波涛を拓開し、国威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置かん事を欲するならば、和気清麻呂公や大楠公の如き貴種名門の偉人の他に、衆庶の一人にして百世の師となり、天下の法となる人物を代表的日本人として仰ぎ、士農工商の旧来の陋習を破らねばならない。

「怠奪奪」の支配する欧米列強の近代国家ではなく、神儒仏の東洋思想を統合した「勤倹譲」の道の体現者としての君子人を日本人の理想像として掲げ、真の近代国家建設に邁進せねばなるまい。

果して、英明の君主の明治天皇は、終生座右に二宮尊徳先生の負薪読書像をお手元に置かれた。また、先生の壮大なる財政再建事業（報徳仕法）の最初を記念した下野国桜町領（現・栃木県真岡市）に聳え立つ巨大な報徳訓（注五）の石碑は、三条実美公が謹書せられたものである。周知の如く公は京都御所紫宸殿にて天神地祇の御前にて五箇条の御誓文を奉読せられた人物である。

二宮尊徳先生は、神道は開国の道、儒学は治国の道、仏教は治心の道。高尚を尊ばず卑近を厭わず、この三道の正味（人間社会に切要なもの）ばかりを取つたのが報徳の教へとして、人間社会に無上の教へを立てた。これが報徳教である。それを神儒仏正味一粒丸と異称せられた。そして、その丸薬とは、国家社会の健康を維持する処方箋として、よく混ざり合つて、もはや何ものとも分からないものでなければならないと説かれた。

「人の世を益し、人の世を救ふ」、学問思想と実際の合致、六百余村の農村はこれを以て復興された。和魂洋才に於ける和魂の真面目がここにある。故に、日本の歴史的精神及び国民道徳の大本にして、神武天皇建国以来、御歴代天皇により承継せられた「日本の道」として、或ひは道義の源泉として、明治天皇が大臣の副署無しで親しく国民に御授けになられた『教育勅語』には、自づと百八文字の『報徳訓』の影が映されてゐる。

昭和二十年八月十五日（月日は奇しくも小生の生誕日）に玉音放送せられた『終戦の詔書』には「米英二国ニ宣戦セル所以モ亦実ニ帝国ノ自存ト東亜ノ安定トニ庶幾スルニ出テ他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スガ如キハ固ヨリ朕ガ志ニアラズ」と記されてゐる。正に、近代日本の戦とは大東亜戦争の一言に尽きるのであり、『教育勅語』は近代日本人のバックボーンにして今日も何ら恥ずべきものではない。『報徳訓』と併せて今日も、我が国の狂瀾を既倒にめぐらす上で日本人の光明であることに変はりはないのである。

注一　皇室をはじめとして公家や武士達が、上下相共に親子兄弟に分かれて殺し合つた保元元（１１５６）年に起つた乱により乱世に入つたと論じた、延元四（１３３９）年起稿の北畠親房著『神皇正統記』にも記される様に、後世からふりかへつて、醍醐・村上天皇の御代（延喜・天暦）は聖代にして、理想的時代とされた（武を以て世を統治する幕府政治から、古来の善政である祭政一致の建武中興政治（１３３４～１３３８）へと回帰せられた、後醍醐天皇やその皇子の後村上天皇の諡號からも明らかである）。

注二　キリスト教は、教祖イエスの開いた信仰であり、その教典としての『新約聖書』の存在は周知である。特にそのうちの四つの福音書は、教祖の体験と言葉と行為との伝承を記録したものである。「言は神と偕にあり、言は神なりき」そのイエスの言行そのものに、多く「神話」的な要素が含まれてをり、その信仰の中に、『旧約聖書』の「神話」が深く本質的な関はりを持つてゐる。

注三　日本の時代区分は古代・上代・中世・近世・近代（現代）と明確な区分が出来るが、それは国家と言ふ意味に於いては日本にのみ可能と言へる。加へて、純・美・聖・善・真の価値観が各々の時代の精神生活にて支配的であつた点に立脚する。それは、中近世に幕府といふ変体政治がありながらも、皇国日本の本質を変へることなく、日本国の重大なる危難に臨んでは、皇室みずから先頭に立つてこれに当たられ、苦難を厭はれない一貫した御態度（承久の御硎新・元寇・建武の中興、その他、著しく朝威の衰微した戦国乱世や江戸時代にあつても、日々御身を律し、国民の幸福と国家の平和を祈願）であつた事が、それら全ての根本にあると思はれる。

注四　まんじ（１５６号）、「楠公精神と報徳思想」参照

注五　父母根源在天地令命　身体根源在父母生育　子孫相続在夫婦丹精　父母富貴在祖先勤耕　我身富貴在父母積善　子孫富貴在自己勤労　身命長養在衣食住三　衣食住三在田畑山林　田畑山林在人民勤耕　今年衣食在昨年産業　来年衣食在今年艱難　年々歳々不可忘報徳

参考文献

平泉澄博士著　『少年日本史』　皇學館大學出版部
山　彦　『山　彦』　勉誠出版
谷省吾著　『神道原論』　皇學館大學出版部
杉浦重剛著・所功解説　『昭和天皇の学ばれた教育勅語』　勉誠出版
三戸岡道夫著　『二宮金次郎の一生』　栄光出版社

米価

横山正義

年（一五一七）でした。

駿州林鹿院から大樹和尚を迎えて開山し、今川義忠を開基としました。山を国源山と号し、寺を法号「長保寺殿桂山昌公大禅定門」より桂・昌の二字を採り昌桂寺と呼んだが、後に昌林寺、正林寺と変わって行きました。

正林寺、前住職様は駒澤大学総長でした。

今川氏系図

足利義氏―吉良長氏―今川国氏―（六代）―義忠―氏親―氏輝
　　―春桂尼
　　―義元

米価

昭和十三年　米一俵（六十キログラム）
　　十三円四十二銭

昭和六十一年　米一俵（六十キログラム）
　　一万八千六百六十八円

、正林寺の春桂尼の実像絵。

菊川歴史探訪見学会令和元年（二〇一九）十一月二十七日北原　勤先生指導。菊川市正林寺を見学した際、住職様より「今川義元の母春桂尼の実像絵を昭和十三年に百円で購入しました。今の値段にすれば、いくらになるだろうか？」と宿題が出されましたので、私は米の値段に比例させてみました。昭和十三年米一俵十三円四十二銭。現在、昭和六十一年より米の栽培技術の進歩による豊作、アメリカ米の値段等に影響され米価は値下がりに転じ、物価は横ばい状態ないしはデフレの状態になりました。そして昭和六十一年の米価一万八千六百六十八円となりピークとなりました。

今川義忠、文明八年（一四七六）横地氏と戦い塩買い坂で戦死。その子、氏親後室が春桂尼です。氏親は父義忠戦時の地に、国源山正林寺建立しましたのは永正十四年（一五一七）でした。

駿州林鹿院から大樹和尚を迎えて開山し、今川義忠を開基としました。山を国源山と号し、寺を法号「長保寺殿桂山昌公大禅定門」より桂・昌の二字を採り昌桂寺と呼んだが、後に昌林寺、正林寺と変わって行きました。

正林寺、前住職様は駒澤大学総長でした。

今川氏系図

足利義氏―吉良長氏―今川国氏―（六代）―義忠―氏親―氏輝
　　―春桂尼
　　―義元

米価

昭和十三年　米一俵（六十キログラム）
　　十三円四十二銭

昭和六十一年　米一俵（六十キログラム）
　　一万八千六百六十八円

倍率　一万八千六百六十八円÷十三円四十二銭＝
　　一三九一倍

春桂尼の絵の値段

百円×一三九一倍＝十三万九千百円。

昭和十三年百円の春桂尼の絵の現在の値段は十三万九千百円でした。

、、菊川市川上の病院戦病者の慰霊金。

平成三十年（二〇一八）・八・二二「菊川歴史探訪」北原　勤先生講義より。

故陸軍一等兵澤本兼吉の戦死（昭和十四年七月二十日）・村葬より

赤痢にて、新京（長春）で死亡」。

米価

昭和十四年　米一俵（六十キログラム）
　　十六円三十五銭

昭和六十一年　米一俵（六十キログラム）
　　一万八千六百六十八円

＊倍率　一万八千六百六十八円÷十六円三十五銭＝
　　一一四一倍

褒章金額

昭和十四年の費用　現在に換算した費用

①旅費　三十五円二銭　四万百六十三円

②埋葬料　三十円　三万四千二百三十円

③死亡賜金　百六十円　十八万二千五百六十円

計　二二五円二銭　二十五万六千九百五十三円

④香典

陸軍大臣　三円　三千四百二十三円

参謀総長　十三円　一万四千八百三十三円

関東軍司令官　十円　一万壱千四百十　円

儀蛾部隊長　十円　一万壱千四百十　円

藤沢部隊長　五円　五千七百五　円

計　四十一円　四万六千七百九十五円

、、金鵄勲章受章者の慰霊金。

昭和十二年九月戦死無言の凱旋。

「二宮尊徳と皇道報徳」より

米価

昭和十二年　米一俵（六十キログラム）
　　十二円九十銭

昭和六十一年　米一俵（六十キログラム）
　　一万八千六百六十八円

倍率　一万八千六百六十八円÷十二円九十銭＝
　　一四四九倍

褒章金額

金鵄勲章功七級年金

一金百五十円　二十一万七千二百五十円

御下賜金　一千四百円　二百二万八千六百円

計　二百二十四万五千九百五十円

四、爵位受賞者の報奨金。

明治維新勲功華族、二万～三万五千円
米価
昭和十七年　米一俵（六十キログラム）
一円八十四銭
昭和六十一年　米一俵（六十キログラム）
一万八千六百六十八円
倍率　一万八千六百六十八円÷二、八十四＝一〇一四六倍
報奨金額
二万　×一〇一四六＝二億二百九十二万円
三万五千×一〇一四六＝三億五千五百十一万
その後、勲功華族となった軍人、官僚、政治家は一万程度が公債などの形で下賜されました。
明治二十八年　一万円の褒賞金
米価
昭和二十八年　米一俵（六十キログラム）
四円
昭和六十一年　米一俵（六十キログラム）
一万八千六百六十八円
倍率　一万八千六百六十八円÷四＝四、六七二
報奨金額
一万×四、六七二＝四千六百七十二万円
明治二十七年　日清戦争
明治三十七年　日露戦争
公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵（国家に勲功ある者）

明治二十八年四十二人。明治二十九年四十六人。明治三十二年六十人。日清戦争で軍功、文勲で下賜。中将以上とする。
日露戦争、明治三十九年九十九人。
これらの下賜は毎年子々孫々まで続きます。しかし昭和二十二年五月三日、これらの明治憲法は廃止され、日本国憲法が施行されました。

年次	公爵	侯爵	伯爵	子爵	男爵	合計
明治十七年	一	二四	七六	三二四	七四	五〇九
昭和二十二年	一七	三八	一〇五	三五一	三七八	八八九

日清、日露戦争など　戦死者は「将、功なりて、万骨刈る」などといわれました。
進駐軍が調査したところによれば、太平洋戦争では高官の死亡率がアメリカの高官の十分の一であったと言われています。日本では高官は作戦を任務としたからです。アメリカは民主主義の国柄、高官が先頭に立ち、戦わなければ、部下はついていかなかったのです。高官とは陸軍士官学校などで教育を受けた人達です。
日本三パーセント、アメリカ三十パーセントでした。

『参考文献』

＊明治・大正・昭和
華族のすべてがわかる本
発行者　杉本　惇　㈱新人物往来社
＊〈華族爵位〉誓願人名辞典
著者　松田敬之　㈱吉川弘文館
＊天明後米一俵価格表
＊明治・大正・昭和、平成米価暦
＊明治天皇紀第六　宮内庁　㈱吉川弘文館
＊華族制度資料集
霞会館諸家資料調査委員会代表者　大久保利謙
㈱吉川弘文館
＊現代華族譜要
編者　日本史蹟協会代表　森谷秀亮
東京大学出版部
＊二宮尊徳と皇道報徳
加藤仁平　弘文堂　昭和十五年発行
＊正林寺　五百年史
正林寺五百年史編纂委員　田中良昭（駒澤大学名誉教授・元駒澤大学総長先代二十八世機良大和尚）
発行社　正林寺
菊川市高橋四九七　発行人　後藤道輝
＊小笠町誌　昭和五一年六月二十日発行
編集　小笠町誌編纂委員会　発行　小笠郡小笠町

安芸門徒シルクロード紀行（9）

村上邦治

四一　ネパール聖蹟探索

一九〇三年一月父明如光尊の示寂により、印度カルカッタで第二十二代宗主・本願寺住職・本願寺派管長を継いだ大谷光瑞は、急ぎ帰国の途に就かねばならなくなった。そのため乗船直前隊員に次のような指示を出し、仏蹟調査を継続させることにした。

随員諸氏継続調査の分担は左の如し。

藤井学士　ボンベイ・プレシデンシー・マドラス・ハイデラバット・セントラル・プロビンセス・ヲリッサ（東海岸・印度中央部）

薗田学士　マニプール地方には玄奘の憍賞弥国（世親・無著造論地）の位置に就き、西洋人の説と比較研究を要す

島地大等氏　クシナガラの遺趾

井上弘円氏　ネパール・隣接するバーライチ・ゴラクプール

玄奘の室羅伐悉底国（舎衛国）の位置に就き西洋人の説と比較研究を要す

本多恵隆氏　ジャワ・スマトラ・シャム（タイ）・カンボジア・安南（ベトナム）

（中国班略）

この探検一行の調査完結は本年九月三十日を期とす。故に今は調査半途に属し、精細に報道するの材料全からず。一行の得たる諸種の資材を蒐め、研究論定したる後にあらずんば、之を人に示すに由なし。今は唯その調査の行程・分担の区域を示すに過ぎざるなり。

指示書にあるように井上弘円と清水黙爾の二人は十二月王舎城探索に向かう光瑞一行と別れネパール国にある仏陀誕生の地ルンビニーと生育地カピラ城の探索に赴くため、ネパール当局に旅券の申請をした。審査の間光瑞の名代として英国エドワード七世の印度皇帝戴冠式と即位奉祝ダンバルの参列を命じられ、列車でデリーに向かった。

今夏ロンドンで行われたエドワード七世の英国王戴冠式に光瑞のお供として列席した弘円は、今度は光瑞の名代として黙爾を従い大役を済ませネパールの調査地に向かった。

ここからは清水黙爾「尼波羅探検日記抄」と島地大等「尼波羅通信」（いずれも『新西域記』所収）から、聖蹟探索に迫っていくこととする。

十二月末ネパール当局に旅券の申請を行ったが、国境近くのガンヂュで三週間待たされた。ネパール政府長官も皇帝戴冠式に招かれ、印度に長期出張し不在であったためである。当時チベット・ブータンとともに君主国で、列強（英・清・露）の進出に備え鎖国政策を敷いていた。一月中旬ようやく旅行免状を取得したものの、一部地名が明記されていなかったため、またしても待機を余儀なくされた。その間明如法主訃報の通知は二十三日に受け取り、光瑞は急遽三十日カルカッタを発って帰国することを知らされた。

カルカッタでマラリアのため入院中の本多恵隆は、三井物産孟買支店長を通じ旅券発行の交渉を続けた。また島地大等はネパール政府に直接談判した。二人の努力により二月十三日になり、ようやくネパール国内の探索が可能な旅券が下りた。十七日回復した本多と合流、三人で仏陀生育地カピラ城（梵語カピラヴァストゥ紀元前四―六世紀ネパール南部印度国境近くに存在した釈迦族の小王国の首都。釈尊は国王浄飯王の第一王子）の調査に向かった。

カピラヴァストゥの王都は釈尊（釈迦牟尼世尊の略本名ゴータマ・シッダッタ漢訳悉達多太子。成道後日覚めた人の意味のブッダ音写仏陀）が二十九才の時出家のため旅に出るまで、王子として何不自由なく暮らしたところである。この城での振る舞いや暮らしぶりは、仏教徒にとって仏画・壁画でなじみ深い。

精神修養から弓術・角力などの武芸まで六十四の学芸を修得した「幼年時代」、婚儀および出家を妨げるため父国王から五感の楽しみをふくめありとあらゆる歓楽を受ける日々を過ごした「結婚と王宮生活」、そして弱肉強食の残酷さとこの世の無常を知った「樹下観耕」、老人・病人・死人に出会いこの世では老・病・死は不可避であることを知るとともに愛憎を離れた修行僧をみて城から出て出家解脱を決意する「四門出遊」、歓楽の果

てに最終決断した「閨房脱出」、二十九歳の時父・妻子と別れ愛馬に乗り宮殿を出る「門出と俗世放棄」まで、三十年間暮らした。

仏教徒であれば釈尊がカピラ城で過ごした半生は多くの逸話にされ日に浮かぶのだが、二十世紀のネパールではカピラ城は誰も知らず忘れ去られていた。

七世紀玄奘が訪れた王都はすでに「人気のない町は十数あり、荒廃はすでに甚だしい。カピラ城は崩れ落ちており、その中の宮城は煉瓦を積み上げて作ってあり、基礎はなお高く堅固である」と述べている。すでに営ての面影はないがそれでも宮城の側には大伽藍があり、小乗正量部の教えを学ぶ僧徒がいた。さらに「宮城の中に建物の址があり、父浄飯王の正殿および母摩耶（摩訶摩耶）夫人の寝殿で胎内の釈尊に降神されたところ」が残り、その址には各々精舎が建てられ像が祀られていた。

その東北にストゥーバがあり、阿私多仙人が赤ん坊の太子を観相して、

「在家の人であれば転輪聖王（全世界を治める理想的君主）に、出家すれば悟りをひらき仏陀になるであろう」

と予言したところである。

近くに太子の妃耶輸陀羅（漢訳名聞・華色）の寝宮や二人の間にできた息子羅怙羅（仏十大弟子密行第一）の像があり、また太子が学業を受けている像と太子の学堂跡があった。

さらに隣国憍薩羅（コーサラ）国により釈迦族が皆殺しにされた処、仏陀が帰郷し「父子合会・帰郷説法」の場所、育ての母から金縷の袈裟を受けられた処、王子八人と五百人の釈種を得度し弟子にした処があり、仏陀にまつわる多くのいわれのある旧跡があった。

しかし二十世紀のネパール・印度国境付近は、イスラム教徒とヒンドゥー教徒に占められていた。現地の駅長に聞いただすが、「印度領内では」とのあいまいな返事であった。すでに英人カニンガムによって発見された生誕地ルンビニーの場所さえ「毫も知らず」と返答する始末であった。

カピラ城についてはこの五年前、国境から数キロしか離れていない印度ピプラハウで英駐在官ペッペが、経典と「ゴータマ・シッダッタおよび一族の遺骨」と記された壺を発掘し、この地がカピラ城であると発表した。三人はペッペが主張するピプラハウを探すが、あまりに廃頽しており玄奘の見たカピラ城とは断定できなかった。

次にムッカージーが主張したネパールティラウラコット周辺に散らばる十近くの古址を一週間かけて実査したが、玄奘のいうカピラ城と特定できなかった。カピラ城は死後千年間わたり巡礼者でにぎわったが、玄奘が訪れた七世紀にはすでに荒廃していた。その千三百年後三人が探索した時には、ジャングルのなかで眠り、住民に忘

れ去られていた。結局どちらもカピラ城跡に特定できなかった。ネパール・印度両国のカピラ城跡地の論争は現在にいたるまで続き、最終決着はついていない。

三月からルンビニーの調査に就いた。釈尊生誕地は、一八九六年印度考古局の発掘調査により、黄金の仏舎利やアショカ王の「仏陀生誕の地」と記された石柱が発見されたことから定まった。

既にネパール政府はこの地を国の管理対象にしており、徐々に整備が進められた。しかし黙爾は「聞きしに勝る荒廃のほとんど言うに忍びざるものを嘆ぜずんばあらず」と書き残した。今、玄奘が見た生誕地で目にできるのは、ルンビニ林の昼なお暗き森の老木翁鬱とした小丘であった。玄奘の「天上天下、唯我のみ独り尊し。今より以後、私の持前の生もはや尽くした。〔これが最後身であり、今後は輪廻転生することはない〕」と最も知られた逸話の処、釈尊水浴の池など「経」により受け継がれてきた仏陀降臨の聖蹟には多くのストゥーパが建てられてあったが、何も残っていなかった。

この地が大聖釈尊降臨の霊地と確定したのは、アショカ王がたてた石柱に「天祐を保全する阿育王は、即位の二十年に於いて、仏陀釈迦牟尼の誕生の地に馬を形どりたる石柱を採擇して、之を表彰す。その聖地たるルンミニーの村民には、課税を免除し、福利を享けしむ」（清水黙爾訳）と記されていたためであった。三人は石柱を背景に交互に写真に納まり残した。そして格好の記念物として柱上の文字を紙に擦り取った。

この石柱は玄奘が見た七世紀でもすでに雷で折れたままであった。側に小河が東南に流れているとの玄奘の記述は、日の前のチラウラ河に相違なかった。

黙爾はこの地を離れるにあたり「あゝ正法已に去って在るなく、末法五濁今に於いて熾んなり。油河〔チラウラ河〕溺れるまた爾るなからんや」と嘆いた。

三月四日仏陀入滅の地クシナガラの探索を終えた島地大等（清水黙爾義弟）と、印度東北部の中心都市ゴラクプールで落ち合った。四人はこれまでの積もる話で眠る時間もなかったのであろう、五日の記載は無い。

六日の夕方四人は二組に分かれた。井上・清水は舎衛城探索に向かい、東南アジアの調査に赴く本多と緬甸に行く島地はカルカッタに戻った。

四二　舎衛城・祇園精舎探索

舎衛国は真宗門徒にとってよく耳にする。

正衣の経典の一つ『仏説阿弥陀経』（姚秦三蔵法師羅什訳）は次の文句で始まる。

如是我聞。一時、仏在舎衛国、

祇樹給孤独園（祇園精舎）、
与大比丘衆、千二百五十人俱。

仏事や法事で唱えることの多い阿弥陀経の最初に出てくるので、門徒は諳んじている。

シラーヴァスティー（旧訳舎衛城）は古代印度十六大国コーサラ国の首都であった。『大唐西域記』では室羅伐悉底国として記載、「周囲六千余里あり都城は荒廃し境界もはっきりしない。伽藍は数百あるが倒壊したものが非常に多く、僧徒も少なく上座部の正量部を学んでいる」と記した。この地は仏教にとって重要であるとして、玄奘は多くの伝承や逸話を紹介している。

釈尊はこの地で多くの経典を説き、後半生をここで暮らした。これを支援したのが勝軍王であり、王の御殿の址と建物の址にストゥーパが建っていた。王が釈尊のために建てた大法堂の址である。法堂の遠くない所に釈尊の母方の叔母で育ての親でもある波闍波堤（唐生主最初の比丘尼）の精舎があり、やはり勝軍王が建立したものである。その隣のストゥーパは教団に資金を支援続けた善施（須達多）長者の自宅跡である。

そのそばのストゥーパは民衆を恐怖に陥れた殺人鬼指鬘外道が、釈尊の教誨により非を悟り仏に帰依改悔した処である。指鬘はその後修行を重ね阿羅漢になった。

城の南五、六里に逝多（祇陀）林がある。仏陀が「祇陀給孤独園」と名付けた精舎（略祇園精舎）が建てられ、嘗ては伽藍があった。長者善施が教団の為に布施したものである。四百キロ南の王舎城にある竹林精舎と舎衛城の祇園精舎は教団の二大拠点となり、釈尊は両拠点を四十五年間往復、法を説き続け仏教徒を増やした。

近くに病気の比丘を自ら看病された処、弟子の舎利弗と目連が神通の力は知恵の力に及ばないことに気付いた処、仏の用いた井戸、仏を嫉んだヒンドゥー教僧侶が衆人の前で辱めるために淫女を謀殺した処があった。

さらに釈尊の従兄弟堤婆達多が毒薬で仏を害しようとし生身で地獄に落ちた深い坑、堤婆の親友弧迦梨迦が如来を誹謗し生身のまま地獄に落ち込んだ処、婆羅門女戦遮が仏の子を身ごもったという中傷をして無間地獄に落ちた坑があり、三つの坑は底なし洞穴である。

また如来が諸外道と論議された影覆精舎、舎利弗が外道六師と議論し降伏させた処、釈迦族を誅殺した毗盧択迦王が仏をみて兵を返した処、のちに王が炎に焼かれ地獄に落ちた涸れ池があった。弟子で頭陀第一迦葉の本生地にはアショカ王が建てたストゥーパがあった。

四大聖地に劣らず釈尊と弟子たちの多くの逸話を残す舎衛城は、玄奘が訪れた七世紀ですら境界もはっきりしない情況ですでに荒廃していた。その千三百年後では黙爾の手記によると、「辺りは大ジャングルとなっており遺蹟はその下にある」ものと思われた。

二人はネパールと印度国境近くの小都市バーラプール付近を中心に、ラープチ川とガンヂュの間を八日から十六日までの九日間地元の言い伝えなどをもとに古跡・ストゥーパ址・陶片址など虱潰しに調べた。しかし西域記に事細かく記されている舎衛城・祇園精舎は手掛かりとなるものが見当たらなかった。地元の古老三人を呼び「他に古跡として見るべきものありや」と尋ねるが、「口碑に伝わるものは既に先日案内したのでその他は存じない」と述べるのみであった。黙爾は手記で「東西南北、古跡という古跡はことごとく遊覧し、足跡ほとんど遍しと云うも不可なきに至れり。故老輩の他に古跡あるを知らずと云へる、亦理無きに非ず」と発見できなかった無念さを記した。

最後に「舎衛城の旧地を発見し得ざりしは遺憾千秋の想いありしと雖も、亦如何ともなすなき也。初志を果たせざりしとが、ヴィンセント・スミス氏のいわゆる発見の無根の説たりしを知り得たるとともに、我々の職責を出来得べき限り尽くし得たりと信ずる也」と総括した。

二人の失敗は最後に出てくるスミスの説を信じたからに他ならない。一八六三年英駐在武官カニンガムが印度国境近くのバルラーンプールの西十二哩にあるサヘート・マヘートを発掘し、サヘートは祇園精舎、マヘートが舎衛城の遺蹟であると発表した。その後七六年にサヘートの地で菩薩像が発掘され、その台石に「カニシカ王が仏陀の経行処に建てた」と彫り付けてあった。この発見によりカニンガムの説は確定したものと思えた。

ところが二人が実査する前の一八九八年と一九〇〇年に王立亜細亜協会誌でカニンガムのサヘート・マヘート説を排し、新たに舎衛城を発見したと発表したのがヴィンセント・スミスであった。

彼は法顕および二百年後の玄奘二人とも、舎衛城は「カピラ城から北西九十哩」にあるとしているが、サヘート・マヘートは西南西五十五哩にあり、方角・距離とも一致せず、有力な証拠である銘文のある仏像は真の祇園精舎が廃趾となった時、ラープチ川を利用して発掘地に移されたものであると説明した。

スミスはこの方向・実測に基づき、ネパールバーラプールにある廃趾こそ舎衛城であると提唱した。わが国の『魏志倭人伝』の記す「邪馬台国」をめぐる長年の論争を彷彿させるスミス説は、ロンドンで光瑞らが仏教聖蹟探索計画中の時であり、重視したものと思われる。それ故井上・清水は初めからスミスが主張するネパール国内の廃趾探索に血眼になった。

「ヴィンセント・スミスが調査した廃趾は何処か」と周辺の住民に訪ね歩いたが、すでに二人が調査済みの廃趾

であることが分かり、「スミス氏の発見は決して信ずべからず」ことに気づくのは最後の日の前日であった。

こうして舎衛城・祇園精舎の探査は失敗に終わった。

後年法顕・玄奘の紀行記は方角・距離についてさほど精確には行っておらず、食い違う箇所が多くあり大体を知る上において尊い史料であるとの反論が出され、スミスが主張するカピラ城と舎衛城の位置・距離においてもそれ程依拠すべきではないとされた。

しばらくして仏教教団に六カ村を朱印地として与えたとの刻文のある銅板や舎衛城・祇園精舎の文字の入った刻文を具えた菩薩坐像が、サヘート・マヘートから発掘され確定した。スミス説は二十世紀初頭の一時期話題になったもの、すぐに論じられなくなった。

近年では網干善教教授が指揮する関西大学祇園精舎発掘調査隊が長期調査を行った。五世紀法顕の旅行記『法顕伝』、七世紀玄奘の『大唐西域記』に基づく考古学調査が実施され、広大な精舎の概要が明らかになった。

四三　東南アジア宗教調査

一九〇二年十二月本多恵隆はガンダーラで光瑞一行と別れ、一足早く首都カルカッタに向かった。一行の聖蹟調査のため印度政府との交渉や調査地への食料補給を整えることに従事した。しかしマラリアによる高熱を発し、年末からの六週間カルカッタの病院に入院した。上原の一月二十二日の記述に「熱を病みゼネラル・ホスピタルに在る本多氏を訪ふ。軽快の状あれどなお喪を秘す」とある。ネパールで旅券待ちをしていた黙爾の手記には、二十五日から煩瑣に恵隆と電信・手紙でやり取りをしている様子が記されている。これらから判断して日毎に回復、月末までには退院したものと思われる。

退院後光瑞は緬甸ラングーンに向かう二月一日までの数日間、印度に残る恵隆にこれからの探索について細かに明示した。恵隆は光瑞の指示や帰国の日程について印度各地に散らばる隊員に伝えた。そして体力の回復に努めながら三井物産孟買支店長の助言を得て、ネパール政府の旅券承認に動いた。

旅券が下り体力が回復した恵隆はカルカッタを出発、十七日井上・清水とネパールで合流、釈尊の生誕地・生育地の探索を一緒に行った。

本多恵隆は海外経験が豊富なことから、光瑞の西欧留学に伴い、留学生として渡欧した。光瑞一行より一か月早く日本を発ち、十二月末にはロンドンに着いた。印度で仏教聖蹟巡拝をした一行より三か月早い到着で、この間ホテルの確保、日野のケンブリッジ大学の留学手続き、留学生の宿舎手配など準備をした。

恵隆は一人オランダハーグに下宿先を定め和蘭語、仏語の語学習得と独語・マレー語による書籍も加え、光瑞の命により早くからアジア南洋諸国の研究調査に着手した。具体的には蘭領東印度ジャワ・スマトラ（インドネシア）、英領マレー半島シンガポール、仏領安南（ベトナム）・カンボジア、独立国シャム（タイ）における宗教事情の調査であった。国立文書館がある首都ハーグが調査研究に最適であった。

光瑞の帰途を利用した中央アジア・印度探検は西欧仏教学者の「大乗非仏説」を打破するため、梵語・パーリ語で書かれた大乗経典を発掘するという日本仏教の正当性を賭けた探検が主目的であった。がさらに浄土真宗本願寺派次期宗主として教線拡大を目指す中国・南洋諸国における宗教事情の調査という目的があった。

事実本願寺派の南洋への関心は早くから見られる。日清戦争終結の次年豪州木曜島（ニューギニアとの間にある小島）で布教を開始した。当時島では高級ボタンの材料である白蝶貝（真珠貝の一種）が採取できたので、多くの日本人が出稼ぎに行きそこに長く居住した。ここでの作業は潜水病とサメの恐怖が付きまとうが、高収入が得られたので、故郷の家族に送金することができた。

余談だがこの白蝶貝からは大きな黒真珠が養殖される。この南洋真珠の販売加工業者と取引があり、慌てて司馬遼太郎の『木曜島の夜会』を読んだ記憶が蘇った。

話を戻すと布教開始の二年後、探検隊員となる上原芳太郎ら三人を英領ニューギニアと豪州木曜島に派遣し宗教事情を調査させていた。

シンガポールに布教所を設立したのは一八九九年であった。当地は後漢時代から「海のシルクロード」の海上航路中継地であった。十世紀以降は中央アジアを通る「陸のシルクロード」に代わる大量輸送路として発展した。十六世紀大航海時代には西欧諸国の進出に伴い、中国の茶・陶磁器、セレベス島の香料を輸出、一方印度から綿・アエンが輸入され貿易量は飛躍的に拡大した。

十九世紀に入ると英東印度会社の交易所が設立され、英国の植民地となると貿易・交通・金融の中心地として繁栄した。マレー半島は既にイスラム教徒が過半を占めていたが、シンガポールは印度ヒンドゥー教・西欧キリスト教・周辺国シャム（タイ）・カンボジア・ベトナムなど仏教の信徒が併存する多様で独特な東西文化をもつ都市となった。日清戦争以降日本人の南洋諸国への出稼ぎ・移住、金融・交通・貿易の会社進出が目立ち始め、本願寺派は他派に先駆けて布教所を設けた。

新門光瑞がその年暮れ長期西欧留学の途上、この地で休憩のため上陸した時、開所間もない布教所を初めて訪問し激励した。光瑞はここを通るとき休憩・乗り継ぎのため上陸するが、そのたびに布教所を訪問した。

光瑞が東アジアの南洋方面を重視したのは、別の意図もあった。それを如実に語るのが、宗主退任後この地で農業事業を本格的に展開したことである。最初は英領のシンガポール・マレー半島でゴム採取、セレベス島で椰子油・コーヒー栽培など、既存園の買収により事業を始めた。しかし英国は日本資本の進出を好まず規制を強めた。一方和蘭領では日本からの投資を歓迎したため、光瑞は英領諸国の事業を売却、蘭領セレベス島にまとめた。最終的には同じ蘭領ジャワ島にすべてを集約、高地での養蚕・馬鈴薯栽培などを加え農業会社を経営した。

南洋事業は無論布教拡大の狙いがあったに相違ないが、口癖のように述べた「日本の経済的閉塞は邦人の海外発展しか打開の途はなく、中国は排外運動が激しく投資は危険で、残された安全確実な投資方法は熱帯農業しか残されていない」ことを信条としており、南洋の農業経営に早くから熱い思いを持っていた。

ここからは恵隆の孫にあたる本多隆成（静岡大学教授）の『大谷探検隊と本多恵隆』から、カルカッタに戻った後の足取りを追っていく。この著書は平成の始め白坊徳正寺から恵隆関係の資料がまとまって発見され、著者が新資料を整理し祖父の事績をまとめたものである。これまで詳細が不明であったカルカッタ以降について恵隆の足取りが少し判明した。

三月八日カルカッタに戻った恵隆は、東南アジア調査旅行の準備のため孟買に向かった。この地では三井物産間島支店長宅に在留したものと思われる。

準備を整え再度カルカッタに行き、四月二十七日シンガポール行きの貨客船に乗船した。航海中は調査資料に目を通し「蘭領印度行きの準備怠りなし」と記載している。五月四日マレー半島中部ペナンに着岸、ここでは多くの中国人が乗り込んできた。また印度から運んできた水牛を下ろし、新たな荷物が積み込まれ夕方出航した。

徳正寺所蔵の「恵隆日記」に残されているのはこの日までであり、五日以降の足取りは依然として不明である。おそらく五日にはシンガポールで下船、自派の布教所に立ち寄ったものと思われる。

その後は光瑞が指示した蘭領東印度（ジャワ・スマトラ）、シャム（タイ）、仏領インドシナ（カンボジア・安南）英領マレー半島の宗教事情を四か月にわたり調査したものと思われる。日本に帰国したのは九月二日のことであった。恵隆が日本を離れたのが一八九九年十月だったので、ちょうど四年間という長期にわたるものになった。その間西欧滞在中に北極圏や英・仏・蘭・独・伊・埃・希・埃など主要国を視察した。帰途には露国から中国新疆・印度・ネパールそれに東南アジア諸国を訪れたので、米国留学を加えれば世界を一周したことになった。

恵隆が宗教事情の調査を行った東南アジア諸国は、太平洋戦争で一時日本が占領した地域と奇しくも重なる。各国の事情に詳しく俯瞰することができた光瑞は、四十年も早く日本の進出を見通したのであろうか。

四四　藤井宣正客死

藤井宣正は一八五九（安政六）年越後国与板（長岡市西隣）光西寺の生まれで、光瑞より十七歳年上である。家老河井継之助が率いる長岡藩は無謀ともいえる新政府軍との戦いに挑み、その影響を受け生家は全焼した。敗戦の混乱から長岡中学の進学は三年遅れた。しかし向学心を抑え切れず東京に出て、地方出身者が頼った島地黙雷のもとに寄宿した。

八四年西本願寺内地留学生になり、福沢諭吉の慶應義塾に三年間学び、東京帝国大学哲学科に入学九一年卒業した。本派で帝国大学を卒業したのは宣正が初めてで、直ちに文学寮教授になり六年後に教頭になった。探検隊員渡邊哲信・本多恵隆・井上弘円の恩師でもある。

しかし学者らしい妥協を許さない正義感から、内局の一部と衝突、辞任し再び東京に戻った。黙雷方に身を寄せ、埼玉県第一尋常中学校長さらに埼玉高等女学校の教授に迎えられた。

この間本邦初の印度仏教史である『仏教小史』・現存経典をまとめ西欧仏教学者から高い評価を得た『日本大蔵経冠字目録』・最初の仏教辞典『仏教辞林』（死後出版）などにより、すでに内外に知られる真宗本派を代表する少壮仏教学者であった。貧乏な地方末寺の次男を、内地留学生に選抜し東京帝国大学で勉学させてくれた光尊・光瑞両宗主の恩を生涯忘れなかった。二人からの指示命令には直ちに従った。光瑞から西欧留学の要請があった時も、結核を病み医師から死を宣告されており、またすでに文学寮を離れ埼玉の中学校長兼高女教授に転じていたにもかかわらず、妻や医師にも諮らず直ちに英国の光瑞のもとにはせ参じた。

そして先端を行く西欧の近代印度学・仏教学の権威仏シャヴァンヌや英ミューラーとの会談では、宣正が光瑞の指南役を務めた。

一月中旬王舎城調査が終了して光瑞はカルカッタへ、宣正は西に残る遺跡調査を行いながら孟買へ向かった。帝大後輩の学者仲間姉崎正治（帰国後東大宗教学講座開設教授）と二人で仏陀伽耶・鹿野苑の調査を行った。その後も二人は印度中央部に進み、ヒンドゥー教の聖地ペナレスで教堂・浴壇・梵語学校を、続いてイスラム教が建国統一を成し遂げたムガル帝国の首都アグラでタージマハル・アグラ城（モスクマスジド）を視察した。「荘

厳美麗に日を驚かし」と回教建築の粋を集める廟・モスクに日を見張った。それに引き換え仏陀ゆかりの仏教遺蹟のあまりの荒廃振りを嘆いた。

この地から孟買に向けて南下、今も水の宮殿を目当てに観光客を集めるジャイプルでは、風の宮殿・シティパレスやアルバートホールの博物館など視察、「見るべきもの少なからず」と感想を記している。

更に南下して十二世紀イスラム教の勢力下となったアジメールに行き、印度最古のモスクアダーイディンカ・ジョーンプラーやムガル第三代アクバル大帝が建てた湖畔のパレスを見学した。近くにあるヒンドゥー教の聖地プシュカルにも行き、ヒンドゥー教の世界創造神ブラーフマーを珍しく本尊とする同名の寺院があり、純白の大理石と四周の回廊・八角柱の彫刻に「如何にその工事に資財を費やせしを知るに足らん」と驚嘆した。その後「湖に浮かぶ夢の宮殿」タージレイクパレスを求めて多くの富裕者が集まるウダイプルに行くが、夜の寒さに閉口した。印度でも二月この地は寄下になった。

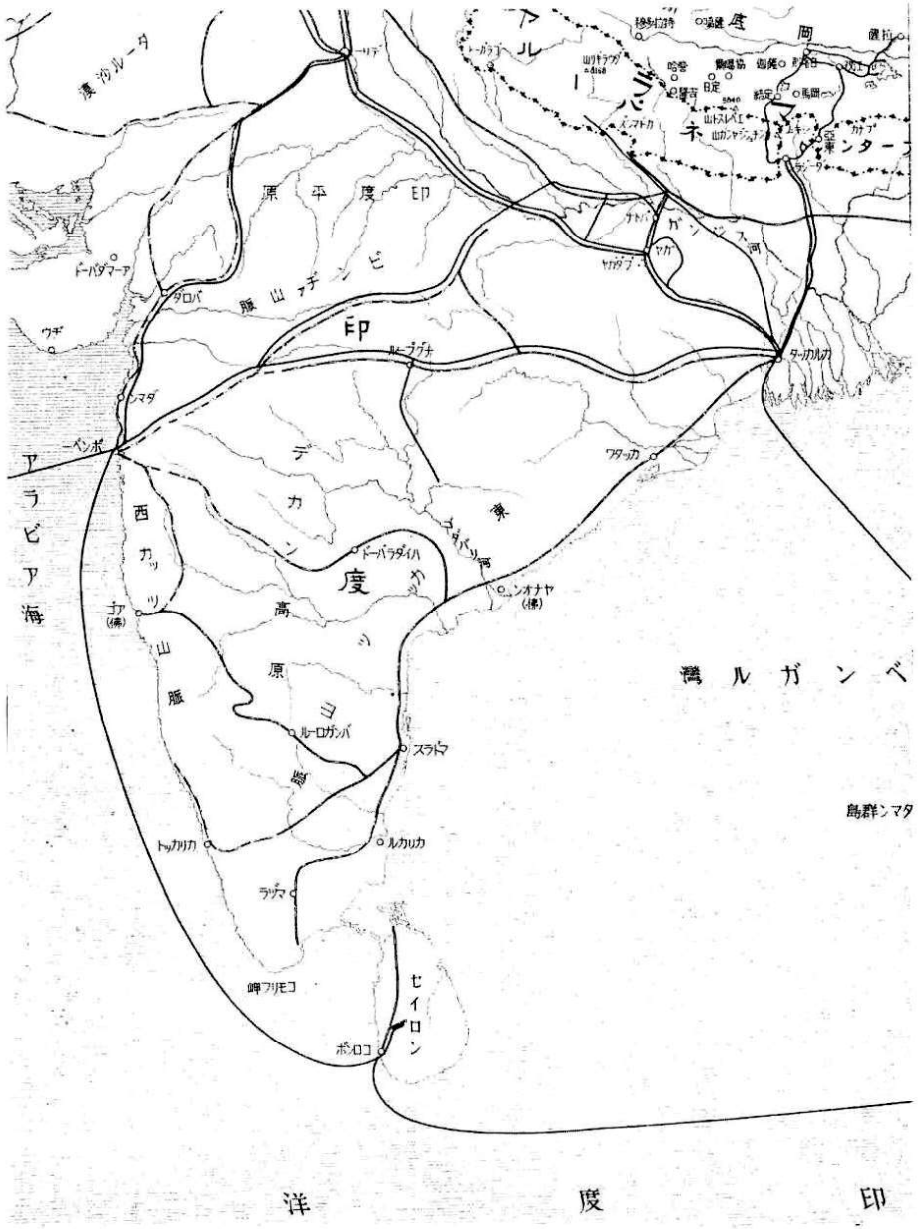
パキスタンに隣接するカティアワル半島と孟買との分岐点に位置するこの地方の中心都市アーメダバードを訪問した。「実に天下第一」と称される極めて細密に彫刻された大理石・砂岩のある古いモスクを視察、丹念に書き残した。

二月四日この地を出発したところで、三井物産孟買支店長から電報で「我が大法主猊下一月十八日を以て悠然遷化したまひし」ことを知らされた。そのため新猊下は「カルカッタ市に於いて凶報に接せられ、二月一日匆々帰朝の途に就れしこと」を拝承した。宣正は「嗚呼是何たる悲惨ぞ。この報を得て為すこと知らず」と一時茫然となり、列車に乗り遅れそうになった。明如光尊が亡くなってすでに半月経っていたが、光尊から受けた恩徳を振り返り悲しみは深まった。

悲嘆にくれながらも、次の予定地カティアワル半島突端ジュナガルに行った。ここには紀元前四世紀アショカ王が建設したウバルコート砦といわれる古跡があり、ブッディスト・ケイプと呼ばれる仏僧の宿舎として使われた洞窟が知られていた。ここでアショカ王の勅令を墨子で印取することができた。

この地にはジャイナ教とヒンドゥー教の聖地とされるギルナド山があり、約九百の寺院が九千九百九十九の石段の近くに建てられていた。中国四川の峨眉山といえるものであった。この第二長期旅行を終え、孟買の三井物産支店長宅に着いたのは二月七日であった。調査の時には使命感と好奇心で気が張っていたが、すでに体は疲労困憊し限界であった。

ちなみに日本郵船が孟買航路を開設したのは日清戦争前の一八九三（明治二十六）年で、北米航路より二年早い。



インド大陸行程
『新西域記』（上原芳太郎編）

その後三井物産支店、日本領事館が開設された。三井物産門島與喜支店長は日清・日露戦争を挟む十二年間にわたり勤めた人物である。当時多くの仏教僧が梵語・パーリ語の語学研修・聖地巡礼・セイロン上座部仏教研究等により当地に来た。十年間に約三十名に上った。東京の五倍にもなる物価に苦労する彼らのために、宿舎の提供・食料の世話を行い日本仏教界の恩人といわれた。三井物産は西本願寺の納入総代理店であり、本願寺僧には特別親密な世話をした。

藤井宣正はこの地で光瑞からの「賜りし親書」を拝読した。そこには「汝等が鋭意聖蹟の捜索に力を盡すは一は先宗主の恩徳に酬い、一は予が不幸を慰すべき唯一方法なれば勉めて発見する所あるべし」とあり、「東海岸に幾多の古銘文を印取せんことは一に汝を煩さざるべからず」との新たな訓令が記されていた。

宣正は「覚えず暗涙に手巾を湿ほせり。此時此際の感境を叙せんことはわれの筆の能くせざる所なり」と、両宗主の御恩に思いをはせた様子が伝わってくる。

二週間余り東海岸への新たな調査旅行に赴くため、この地で準備に取り掛かった。この間孟買在留日本人の求めに応じ法話を行い、また二年前に亡くなった母校慶應義塾創設者福沢諭吉の三回忌法要を営んだ。

二月二十三日孟買を出発、横断列車でカルカッタに向かい二十五日到着した。その日からすぐに博物館に通い、保管されている仏教遺物の調査を始めた。二週間朝十時から閉館するまで残り、古遺物の記録を作り終えた。

三月八日には井上・清水と別れた島地大等と久しぶりに会った。その二日後姉崎と二人で五百km離れた印度北東部ダージリンに向かった。十九世紀に入り東印度会社が二千㍍の高地を利用、森林のあとを茶畑に開墾し高級茶の産地として開発した。二十年前から主要輸出品となった茶の運搬用に鉄道路線が建設された。ネパールとブータン両王国にはさまれ、印度側からのチベットへの入口にあたりチベット仏教僧院が建てられた。

当時チベットは厳しい鎖国政策を敷いたので入国できず、この地のチベット（西蔵）仏教寺院を視察するためであった。手記には明確に記していないが、最古のゲルク派グーム僧院を観たことは間違いない。本堂の中央に高さ五㍍の本尊弥勒菩薩坐像が祀られている。さらに中心部から近い山腹の二階建僧院ブティア・ブスティ（カギュ派）も行ったであろう。二階は小堂になっており、日本と同じ仏教でありながら「西蔵寺の奇は人の能く知る所」と記し、独特のチベット寺院を視察した。

一旦カルカッタに戻り、光瑞から指示された東海岸・中央部の遺蹟調査と古銘の印取を求め姉崎と出発した。

まず光瑞が船便待ちを利用して訪ねたカタックのジャイナ教岩窟寺院遺跡ウダヤギリとカンダギリを調査した。碑文を印取しようと試みたが、碑面が円滑でなく採取できなかった。さらに南下してベツワダ（現ヴィシャーカパトブム）のアマラーヴァティーの大塔訪ねたが、一片の石も残っていなかった。

さらに南下十七世紀まで寒村であったが、東印度会社の前線地として発展したマドラス（現チェンナイ）で下車した。二番目の歴史を持つ州立博物館を訪問、当地の遺物や銘文を館長の好意で数日かけて印取した。

その六十㌔南にあるマハーバリプラムには、花崗岩で造られたヒンドゥー教の石造寺院が著名であった。海岸寺院と呼ばれ、ベンガル湾の波打ち際に露出する岩に八世紀頃造られたものであった。回廊にはシヴァ神などが祀られ、神話に出てくる竜やガルーダが浮き彫りにされていた。近くの小高い山には叙事詩「マハーバーラタ」からとった「アルジュナの苦行」として知られる幅三十㍍高さ十二㍍もある世界最大のレリーフといわれる巨大な彫刻や石窟があった。さらに砂地に一つの岩から掘り出された石造りの「ファイブ・ラタ」と呼ばれる五つの異なった形の寺院があり、見事な神像や牛など動物の像が祀られ周囲はレリーフで飾られていた。ここには中期ヒンドゥー教の寺院・回廊や叙事詩をレリーフした巨大彫刻・石窟寺院が多く残り入念に書き取った。

再びマドラスに戻った時三井物産孟買支店長からの電報により、中央高原部を北上する列車に乗り直接孟買に向かった。途中バーダーミに南方型と北方型が混在するヒンドゥー教石造寺院群やプーナ（現プネー）のパタレーシュワラ石窟寺院を、途中下車して調査しようとした。手記では「悪疫に妨げられる」と記したが、結核からの疲労とアメーバ赤痢による下痢が続き、もはや立ち上がることができなかった。他宗教の遺蹟調査にも執念を持っていた宣正も、見過ごさざるを得なかった。

孟買に戻ったのは四月四日であった。新たな指示は「帰欧せよ」であった。藤井宣正という信頼する学者をロンドンに駐在させ、面識ができたが大乗非仏説を信じる英・仏の仏教学者達と交流を深め、大乗仏教と中国・日本仏教について一層の理解を求める必要があった。さらに列強各国が激しく離合集散する欧州において政治と宗教の動向は東アジアに影響するので、正確な情報を欲した。薗田にも独国での留学続行を命じた。

一週間静養するものの症状・体力は回復せず、宣正自身余命が長くないことを悟った。そのため帰国の願いをすべきか大いに迷った末、これまでの恩顧から、指示される通り英国に戻ることを決心した。しかしなぜか薗田は指示通りの行動はとらず、宣正と別れ帰国した。

英国に行くことから、遺蹟調査資料や印取した古銘文

は帰国する姉崎正治に託し、写真や印度神画、東海岸探索のため購入した書籍、光瑞から渡された地図・図書は、問島支店長に依頼して京都に搬送することにした。

五月四日日本郵船のセイロンコロンボ発英国行きの因幡丸に乗船したが、航行中も病状は悪化し続けた。二十四日マルセイユに着くや入院したが、六月六日病院で亡くなった。享年四十四歳であった。

藤井宣正は最後の最後まで一代にわたる宗主の厚恩に酬いようと一途につとめ続けた。半年後宣正の死をシルクロード探検から帰途中の蘭州で弟哲乗の手紙により知ることになった渡邊哲信は、「内に驚悲すべき報在り。氏の性向は必ずしも相契ふと謂ふに非ざれども、扶宗愛山、殊に猊下翼賛の熱誠は、洵に敬服すべきものあり。而して渡印幾ヶ月、苦辛惨憺たる調査研究の結果を未だ世に公にするに及ばずして急逝す。公私の上に於いて哀惜痛悼に堪えず。嗚呼哀し」（一部略）と文学寮恩師の死を悼んだ。

三十五年後『新西域記』を編集した上原芳太郎は後記で「藤井氏は随員中の学歴の点と云い、又最年長者として、一行の萬一の過失なからしめんと常に焦慮し、且つ猊下の命を受けて、印度の探査には死病の身に迫れるを意とせず、熱誠事に当たり状況は文面にも溢ている。氏に貸すに数年の壽以てせしならば、仏蹟探査に関する纏まった記録を遺せしならんに、再び渡欧の途次に客死せしは、公私の上に真に哀惜の至りである」と、宣正への思いを綴った。

宣正の友人で東・西海岸を一緒に同行調査した姉崎正治は、帰国後東京帝国大学宗教学講座の開設教授に就任「日本宗教学の父」といわれる。彼は宣正の『仏教小史』について、宗教を歴史の視点で分析した初めてのものとして高く評価した。また病身の身でありながら、碑文や文物を丁重に写し取る実証的な調査態度を称えた。

すでに大きな業績を残し西欧の近代仏教学者からも評価を得ていた藤井宣正は、西欧留学、印度アジャンタ・エローラの仏教石窟、中・南部のヒンドゥー教寺院、西部イスラム教の廟モスクなど日本人として初の本格的調査を行い、セイロン上座部仏教の研究を含め、上原が惜しんだように「氏に貸すに数年の壽を以てせしならば」、まさに総合的な宗教歴史書が期待できた。また美術造詣の深い宣正は欧州でキリスト教美術を調査研究しており、印度遺蹟の実証調査を加えた宗教美術の新しい視点による先駆的な美術研究書も期待できた。それにしても本願寺派は惜しい学僧を失った。

藤井宣正の業績が見直され学階最高位勧学が追贈されたのは、十七年後の一九二〇年のことであった。

四五　老僧の悲嘆

明治初期の仏教界を代表する僧といえば島地黙雷（一八三八―一九一一）といっても過言ではない。安芸門徒で毛利家臣の祖先は、主君の移封により周防国に移った。防府の山村にある専照寺の次男として生まれ、十二歳で養子に出された。向学心の強い黙雷は、父から浄土三部経・宗祖親鸞の主著を、養子先では五経を、防府では漢籍を各々勉学した。二十歳になると肥後など九州を四年間遊学、この頃キリスト教の脅威について思索し始めた。

帰郷した藩内は下関海峡外国船砲撃事件から始まり、次年には四国艦隊から砲撃され、さらに幕府による長州征討が一次・二次と続き緊張が続く時期であった。家臣だけでなく「奇兵隊」など農民・商人・猟師が各々部隊を結成した。僧侶も金剛隊を組織、黙雷曰く「剣を帯して撃法を学び」武装、征討軍と戦った。この経験は維新後、政府高官の人脈に繋がり大いに役立つことになる。その後藩内の真宗派改革を主導、頭角を現した。

仏教寺院は徳川期幕府のキリスト教対策である宗門改・人別帳制度を担う末端の組織に組み込まれ、経済的に安定した恵まれた時代であった。ところが明治維新により仏教各派は寄てない苦境に直面した。新政府は「王政復古の大号令」を発し、神道を中心とする祭政一致の政治体制をとったためである。

明治元年三月長年仏教の下に位置付けられていた神道（神社）を、仏教（寺院）から切り離すため神仏混淆を禁じる「神仏判然令」を発した。これにより全国に廃仏毀釈運動が起こり、仏教は存続の危機に立たされた。

ついで明治二年版籍奉還後の中央官制は、七〇一年制定施行された大宝令そのままの二官（神祇官・太政官）制となり、神道家が熱望した太政官と同格の神祇官が復活した。あわせ神道国教化政策が進められた。

こうした情勢を長州でみていた黙雷は座しておれず、大洲鉄然・赤松蓮城らを引き連れ京都に上り本山改革の建白書を出した。これが第二十代広如に認められ、本派改革に携わることになった。本山では内政を長年牛耳ってきた家臣団の排除に成功、末寺の優秀な僧侶を抜擢し人材登用を実現させた。本末関係では間に上寺・下寺（あるいは中本寺・孫末寺）という中間的本末寺が存在したがこれを廃止、すべての末寺を本山直属の関係とした。これらにより本願寺派は封建的組織から絶対主義的教団に脱皮を成し遂げ、いち早く近代化が前進した。

次に東京に出た黙雷は自派に止まらず、仏教界を代表して地位回復に八面六臂の行動を起こすことになる。

まず新政府に対し神祇官管轄の神社に対し、寺院は太政官民部省社寺掛が管轄するという不平等の是正を求めた。すぐに寺院寮が設置され、神祇官自体も二年後には

太政官下部組織の神祇省に格下げされた。

キリスト教対策として維新政府は神道を防波堤とする策を推進したが、「神道は道であり教ではない」として仏教にしかその役割は果たせないと主張した。同時に神祇省の廃止とそれに代わる寺院省（後の教部省）の設置に動いた。これも黙雷の主張通り実現する。

黙雷の核心を捉え先を読んだ政治力は、仏教界を見渡しても群を抜いていた。その源泉は長州出身の政府高官木戸孝允・伊藤博文・井上馨・山県有朋らとの人脈にあった。僧侶らしからぬ行動と洞察力は長州藩では知れ渡り、趣旨を伝え協力を依頼した。木戸らは藩内を禁教としたほど真宗嫌いの薩摩藩出身者が神道化政策を進めることに快く思わず、黙雷の建議を受け入れた。

黙雷をさらに飛躍させたのが岩倉欧州使節団に同行したことである。欧州各国の視察により各国の宗教事情視察と敵愾心を燃やすキリスト教各派の教理研究、イスラム教など「宇内数十の諸教」を調査し、僧侶として初の「海外教状視察」・「印度仏教聖地巡拝」・「レリジョンを宗教と訳す」など、仏教界最右翼の視野の広い知識人とみなされることになった。また使節団に同行したことで人脈をさらに広げた。公家岩倉・東久世通禧、薩摩大久保・大山巌、福井由利公正、東京日々新聞主宰福地源一郎・言論人中江兆民など、明治初期各分野を牽引する要人と知り合った。帰国後はキリスト教を熟知した仏僧としての名声と多彩な人脈を武器に、明治五年から「黙雷の時代」といわれる、仏教界のために政府の宗教政策を転換させる行動を起こした。

黙雷の建議を受けて神祇省は教部省に編成替えになり、これで神道と仏教は対等の形となった。一元的に所轄した教部省は西欧からの強い要請により、キリスト教開教を決断、その対策に躍起となった。大教院を設置し神官と僧侶が一体になって教導職になり、「三条の教則」（敬神愛国・天理人道・皇上奉戴）を国民大衆に説く体制を推し進めた。神仏合同であったが神道優位の大教院・教導職体制に反対したのが黙雷であった。

宗教であるキリスト教の国内拡大を食い止めることができるのは、宗教である仏教だけであると繰り返し訴えた。そしてキリスト教解禁に対抗するためには官では難しく「政教分離」を進めるとともに、信仰は個人の問題であるから「信教の自由」を認め、キリスト教対策は仏教に任せよと迫った。その実現に人脈のある政府高官に働きかけた。

明治五年長年実現を望んだ一向宗を浄土真宗と称することが認められた。これに勢い得て不平等を強いられる大教院からの離脱を図った。使節団で懇意となった福地源一郎の「東京日日新聞」や東本願寺の欧州視察に同行

した成島柳北の『朝野新聞』を味方につけ、仏教側の主張を訴えた。

黙雷の運動が実り、明治八年大教院自体が解散され、神道仏教合同布教体制は終焉した。真宗派は主張が認められたとしてこれを歓迎し、維新以来吹き荒れた廃仏毀釈の嵐もようやく収まることになった。

余談だが別れた神道界は神道事務局を創設するが、この祭神を巡り薩摩を後ろ盾にする伊勢神宮派と千家尊福率いる出雲大社派による「祭神論争」が引き起こされ、全国の神官を二分する激しい対立が続いた。

黙雷は四十歳前後から本願寺派の議会議長・賛政主議を歴任、一時明如門主に煙たがられ内紛が生じたものの三年で復権した。伊藤博文はちょうどこの時期天皇の位置づけに悩みながら、明治憲法制定・国会開設を検討していた。本派においても内紛の後末寺から集会（議会）開設の要望が出されこれは早々と開設した。宗祖親鸞の血統を継ぐ本願寺住職（天皇・皇室にあたる）と一万の末寺と一千万人の門徒を統率する本願寺派管長および執行長（内閣総理大臣）の関係をどう位置付けるか、国と同様の問題を抱えていた。

この難題の解決を引率したのが黙雷である。博文から情報を得ながら、憲法に相当する「寺法」を定め、皇室典範にあたる「宗規綱領」により成文化した。本願寺派の一連の制度はなんと帝国憲法の制定・議会開設に先立つ十年前に成し遂げた。

一八九三（明治二十六）年五十六歳の時内局の最高位執行長に就き二年間務めた。退任の日黙雷を学階最高位勧学に昇階させた。これにより黙雷は宗政・教学双方の頂点を極めた。宗政では行動力統率力が認められ、またキリスト教に敵愾心を燃やし真宗の教義から徹底した攻撃を繰り返す彼の主張を評価したものであった。

この間黙雷個人の研修・支援団体「白蓮会」、この団体を母体に女子教育学校「女子文芸学舎」（現武蔵野大学付属千代田高等学院）の創設、真宗僧侶啓発団体「令知会」を主導した。

本願寺派を代表するだけでなく、仏教界の纏め役としての担ぎ出されることが多くなる。仏教各宗派の歴史・教義をまとめた『仏教各宗綱領』の編集長に就任した。日蓮宗派の他宗攻撃文言により混乱し、社寺局長が仲裁したが失敗、裁判沙汰にまでなったものの結局これを乗り越えてまとめ上げた。

言論誌にも積極的に持論を発表した。国粋主義を提唱した「政教社」に参加、機関紙『日本人』に幾度も日本人の奮起を促す呼びかけを行った。仏教界を離れ国民主義・排外的保守主義の立場から、キリスト教蔓延を警告する論陣を張った。

そのほか監獄教誨（受刑者教化）・免囚保護（出所者

更生）に注力、仏教人として死刑廃止を訴えた。

日清戦争から始めた従軍布教では幕末長州征伐軍と戦った経験があり、「今生の栄誉のみならず。仏の慈悲をこうむっているのだから来世往生は喜ぶべきことであり、喜び勇んで栄えある行為に邁進せよ」と教えた。

西欧では教会が冠婚葬祭に携わるが、日本の寺院は死後葬式から始まる。一方誕生から死まで人生の節目の行事を担う神道でも、死後の世界を扱うことができるとした出雲大社宮司千家尊福が「祭神論争」で主張した。

一方黙雷はこれまでの慣習を破り初めて仏前結婚式を考案実現させた。新潟から出てきて自宅に寄宿した藤井宣正と、井上弘円の姉で長野から出てきて黙雷宅で厄介になった瑞枝との結婚式がそれである。黙雷は仲人を務めた。

家庭的にも恵まれ男五人女一人が成人した。

息子は周防で養子に入った先妻との子長男俊雄（周防国末寺住職）、後妻との間に生まれた次男黙爾（黙雷生家へ養子）の二人は、西本願寺文学寮に学び学業は優秀であった。自慢の三男雷（来）夢は飛びぬけた秀才で跡継ぎとし、四男威雄（後佐賀大学理学部長）・五男輝麿（藤井瑞枝養子）は僧侶にならなかった。

しかし黙雷が還暦を迎えた途端、思ってもみなかった不幸が次々に襲ってくる。

九八年六十一歳の時跡継ぎの雷夢は二高に入学、その多彩な才気（文章・弁舌・語学）から高山樗牛や佐々木信綱をして、「後生畏るべし」と言わしめた。親元を離れ一人仙台で暮らしていたが、米女性宣教師ブゼル（尚絅女学校校長）の伝道により吉野作造らとともに、なんとキリスト教の洗礼を受け入信した。これまで先頭に立って邪教・仏敵として激しく攻撃してきた仏教界第一人者の子息が、よりよってキリスト教に改宗したことは、宗教関係者や知識人の間にすぐに広まった。

雷夢からの手紙には青年期らしい悩みや不安にさいなまれ、ついに「俄然天より黙示下り、我キリストにより救われたり」として、浄土真宗を捨て、キリスト教に改宗した経緯が記されていた。

黙雷は最高学階勧学の学識をかけて、「いかに仏教が優れキリスト教がまやかしの邪教である」かについて次のように説得した。

「万物は無始無終（始めもなく終わりもない）である。これは天然の性質であり、天然固有の真理である。その理は万物は不生不滅（生じることも滅びることもない）・不増不滅（増えも減りもしない）なのであり、この世の始めに生滅や増滅があるのではない。

この理は一切万有いかなる事物に備わっており、万物と相即不離であり、万物が体現している真実である。仏教ではこれを〔真如〕という。したがって真如はキリスト教が主張する無而忽有（無から有が生じる）であるところの始原の存在なのではない。法爾（自然にあるがままの姿の存在）が、そのまま万有に本然固有で常住の本質なのだから、これを造作（創造）する者もなければ造作（創造）されるべきものでもない。

キリスト教のように法爾であるところの万物が不在の無の世界において、神が初めて万物を作為（創造）したということは、法爾に背き天然に背理する無用の戯言である。

キリスト教は真如と生滅の二相に分けてしまい、両者の間に能（働きかける者）と所（働きを受ける者）をみる説である。仏教はこの二相を一体に摂帰して両者二つながら本来常住であり、両者の間に前後や遅延があることはないと説く。

故に仏教の眼をもってキリスト教をみれば、その教えを奉る神は仏教者が見ている二相のうちの半分（能としての真如）に過ぎないのである。明らかにキリスト教は仏教理性の半分しか見えておらず、窮屈で限られたものの考えである」

仏教界およびキリスト教徒の間で話題を広げていただけに、翻意を促すことに必死であった。

しかし雷夢は明確な意思を示さないまま、東京帝国大学に入り哲学科を卒業した。偉大な父との間に悩み、もはや早熟で才気煥発なところは消え失せてしまった。

やがて開校早々の神戸第一中学校長鶴崎久米一（札幌農学校クラーク校長の薫陶を受けた内村鑑三・新渡戸稲造と同級）がくすぶっていた雷夢を呼び寄せ、教師となり倫理を教えた。その教え子に矢内原忠雄がいる。彼は回想して雷夢の講義は「幅広い教養を身につけたクリスチャンで型破りの授業をした」と評した。中学には多くの秀才が集まり、教師としてようやく吹っ切れた。黙雷白坊の跡継ぎも兄清水黙爾の友人（島地大等）に決まり、父から精神的に解放された様子が矢内原の回想から伝わってくる。しかし雷夢はチフスにより三十九歳の若さで亡くなった。

雷夢はついにキリスト教からの改宗をはっきりさせず黙雷の心は癒されなかったが、新門光瑞の中央アジア・印度大探検の壮挙により、大きく弾むことになった。

自宅に二度まで寄食、息子同様に生活し才能を開花させた藤井宣正が西欧留学生に選ばれた。次に宣正の妻瑞枝の実弟井上弘円がロンドン滞在中の光瑞に呼ばれ、一九〇一年渡航した。かれは姉が寄宿した黙雷の家によく出入りして家族とも懇意であった。招集されたのは文学寮から大学林へ進み卒業した後のことであった。家族同様に世話をしてきた二人が西欧に留学、しかも帰途大探検に赴くという誇らしいことが続いた。

さらに一段と黙雷を高揚させることが立て続けに起き

た。雷夢が真宗から離れた後、次男清水黙爾と同級の友人を、自坊の後継者として四人の娘の内唯一人成長した三女と養子縁組させた。跡取りとなった島地大等が印度聖蹟調査の一員として急遽呼ばれ、上原正太郎とともに印度へと出発した。藤井宣正・井上弘円二人は身内同然とはいえ、今度は自分の跡取りが選ばれたのである。

さらに嬉しかったのは生家の寺に養子となった次男清水黙爾も一員に加わった。黙爾は勉学心が強く、ペナレスで凡語習得のため留学中であった。表向きは西本願寺海外留学生であったが、黙雷が費用を出した私費留学であった。光瑞が印度に入るや、ペナレスで勉学中の黙爾も呼び出され印度探検の一員に加わった。これで印度探検隊員十人の内四人が黙雷の親密者と身内であった。

これには仏教界第一人者とされた黙雷ならずとも誇り高く思えたに相違ない。三十年前欧州から帰途に、伊藤博文に勧められ日本人として初めて巡拝した仏教聖蹟について、その成果を四人から聞くのを心待ちした。

ところが順調に進んでいると思われた探検隊員に病人が出て、事態は暗転する。

一九〇三年一月四十年近く仕えた明如光尊が亡くなり、光瑞は中国調査を切り上げ三月に帰国した。幹部の黙雷は前門主の葬儀や光瑞の新宗主就任などで忙しくなった。光瑞による「直論」を、北陸・中国地方へ伝達することも重なり多忙を極めた。

その矢先間もなく帰国するものと思っていた藤井宣正が六月初め妻瑞枝を日本に残し、仏マルセイユで客死したのである。結核の持病を持ち病弱な身を心配していたが、遂に生きて会えることができなくなった。

黙雷は追悼文の中で悲痛な思いを次のように記した。

「明治十二年君が初めて東京に遊学するや、予が家に留寓し京都に居を構えても来住屡々予の家に出入りし、予家公私万般の事おいて懇篤忠実であった。

君は常に予を父と呼び、予が子は皆君を指して兄と呼べり。令室婿娶のことは父兄に代わり百般を周旋し、特に仏式婚礼を明治二十五年六月六日に行った。今マルセイユに瞠目せしも同じく六月六日ならんとは真に奇遇も亦甚叱らずや。予と君と情交深き、殆んど人をして宿世如何なる因縁の遭遇なるやを感ぜしむるに足れり。

故に予は君が訃報に接するや、驚倒錯愕、真に一臂を断たれしの感有。哀慟悲傷、殆んど腸九回するの歎ありしも亦宜ならずや」（一部略）

家族同様に接しまた父と慕ってくれた宣正との別れは、黙雷にとって代えがたいものであった。

更に黙雷に悲報が届く。回復すると思っていた次男黙爾が八月孟買で病死した。弘円とネパール国境近くの仏教聖蹟を探索した後、三月からペナレスに帰り梵語研究（会話・作文・英訳）に戻った。しかしマラリアに罹り高熱を発し孟買の病院に入院治療中であった。享年二十八歳の若さであった。

実息だけに黙雷は多言していない。ただ次の歌を詠み残した。

「藤井学士の逝去せられて間もなく児、黙爾が印度孟買にて身まかりしを悼みて」

法のため　おなじこころの　友なれば
おくれじものと　あとおひにけん

仏法のためと、わが息子の死をひたすら私情を抑え堪える黙雷の無念の心情が伝わってくる。

大谷光瑞は大乗非仏説という西欧学者の通説を、日本仏教の威信を賭けて仏教東漸の途をたどり、梵語・パーリ語で書かれた原典を発見・発掘するための大胆な行動を起こした。未知の中央アジアシルクロード探検は渡邊哲信と堀賢雄二人の比類なき精神力・信仰心と若い体力により、国家が支援・後援する西欧探検隊に伍して、一教団の自費でやり遂げた。大乗仏教の揺籃地ガンダーラや印度北東部の仏陀所縁の聖地探検も所期の成果を収めることができた。

大谷探検隊は中央アジア探検ばかりが注目されるが、印度では東海岸・中央内陸部の仏蹟やヒンドゥー教遺蹟さらに西部のイスラム教建築群の探索も行っていた。

さらにほとんど触られることはないが、浄土真宗本願寺派教線拡大の為に、中国国内に五人を派遣した。また数十年先の布教を視野に、蘭領東インド（インドネシア）、仏領安南（ベトナム）・カンボジア、英領マレー半島、シャム（タイ）までも調査領域を拡大させた。

前代未聞壮大極まる大谷光瑞の探検・調査行は、日露が開戦し旅順をめぐる激戦中のその年暮堀賢雄が帰国するに及んで終了した。実に六年に渡る期間を要した。

明治の日本人を大いに勇気づけた大谷探検隊であったが、藤井宣正という前途有望な学者と清水黙爾という梵語研究の若き学僧を犠牲にし、浄土真宗本願寺派の危機を救った最大の功労者島地黙雷を悲嘆させて終った。

国家の支援を仰がないこの探検は、現在の規模では数百億円を使ったものと推定される。まさに浄土真宗本願寺派宗主大谷光瑞しか果たすことはできなかった。しかし西本願寺に蓄えてあった莫大な資金はほぼ費消してしまうことになった。

二十世紀初頭この探検が行われた数年間は、世界史的にみれば主要十一か国による北清事変終結議定書の締結や日英同盟成立直後という、一時列強各国が協調し中央・東アジアに平穏をもたらした時期であった。しかしすぐ

に満州をめぐる日・露、チベット巡る英・清の対立が激化、帝国主義を振りかざし植民地争奪をめぐる争いが表面化することになる。大谷探検隊は辛うじて、千載一遇の国際情勢に恵まれていたといえよう。

　こののち東アジア情勢は日露が開戦し周辺国を巻き込み激しく揺れ動く。一方中央アジアでは「内陸探検の時代」と言われる、国家の威信をかけた西欧各国の発掘競争が続けられ、次々に驚嘆する成果が発表される。

　この情勢をにらんでいた大谷光瑞は、再び中国奥地へ挑むことを決意する。

（つづく）

参考文献は最後に記します

高山右近（八）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

右近一家　加賀へ

　右近の「加賀に南蛮寺を一ヵ寺建立賜りたい」の言葉に、前田利家は脇息にもたれ、視線は天井の一角を捉えたまま、暫し言葉が無かった。前田利家としては、関白秀吉の感情の流れを見つめながら、漸く秀吉の了承を得て、右近の現状を救済する目的での「加賀の客将にならないか」という提案にも関わらず、右近から「加賀に南蛮寺を建立願いたい」という条件を持ち出してきた。

　利家は、右近のこの言葉を聞いた瞬間「？」と思ったが、咄嗟に「右近は加賀に腰を据える気だな。それは当家にとっても好都合だ」更に「関白秀吉もキリシタン全面棄教を持ち出しているわけではない」「前田家がキリシタンにならなければ良い」などが彼の頭の中で閃いて『高山殿、貴殿の「加賀に南蛮寺を一ヵ寺建立」の申し出は了承した。建立場所等については、目下、金沢城は改築中だから、後日、城に近い場所でどこが良いか相談しよう』

「早速ご承引賜り有難うございます。宜しくお願いします」

　と丁重に挨拶した後

「金沢城にはいつ頃ご挨拶に伺ったらよろしいでしょうか」

「そうよな。予は十一月の十日過ぎに加賀に戻る予定だ。筆頭家老の横山が在城しているので、それまでに横山家老を尋ねて、既に用意してある屋敷に入り落ち着きなさい。予が加賀入りしたのち、別途貴殿の登城日時を指示する」

「有難うございます。では十月末日頃迄に横山家老殿にご挨拶させていただきます」

と挨拶して前田邸を辞し、家族の待つ堺の日比谷了慶宅に戻った。

翌日、十月十四日には、右近と篠田伊織が堺を出発して加賀金沢に向かった。大津から琵琶湖東岸を通って米原に出て、そこから北國街道を通って金沢へ出ることとした。所要日数は北国街道に出てからの中河内・倶利伽羅峠などの急坂も考慮して、七日後に金沢着を予定していた。その他家族はその翌日、二人の小姓と共に同じコースを行くことにしたが、所要日数を十日見ていた。

右近と伊織は予定通り十月二十一日には金沢に着き、翌二十二日には篠田伊織が金沢城に出向き、高山右近が到着したことを知らせ、右近が明日巳の刻に横山家老を訪ねる了解を得た。

翌二十三日、右近と伊織が巳の刻少し前に金沢城城門前に着くと、既に横山家老以下が迎えに出ていた。

金沢城は日下外構の改築中であったが、右近は一日見ただけで、流石百二十万石の本城だけあって広大な敷地を持つが、今後、京都を守る北陸拠点としての城の構築が課題と見抜いていた。

横山家老は、前田家の筆頭家老であり、前田利家不在時の城番家老を務め、物腰も柔らかく、右近との初めての対応も穏やかに接していた。

右近の住まいは、城から近くの甚右衛門坂に用意されていて、小姓には屋敷内の別棟が与えられ、母屋は家族と召使が住むこととし、余裕のある広さであった。

十月二十五日、右近家族が到着、横山家老にその旨報告すると、翌朝には城から部下が数人でやって来て、右近一家が必要とする家具・什器・当面の食糧などをすべて揃えてくれた。

右近は家族到着時にお世話になったお礼のために、金沢城に横山家老を訪問すると、前田利家金沢帰城が早まり、右近を入れての家老全員の会議が十一月初めには開かれる予定であることを教えられた。右近は、教会建築場所を見定めたかったので、その日的は言わないで

「お城の周辺や城下町を歩いて、一通り見ておきたいので、小姓を一人連れて、その辺を歩いても良いか」

と尋ね、了解を得た。横山家老からは、

『歩いていて誰かに「見慣れない人だが」などと尋ねられたら、高山殿の氏名を名乗り、家老横山の許しを得て歩いている』

と言うことの許しを得た。

そして、早速翌日朝から、篠田伊織を連れて金沢城の外周から歩き始めた。やはり、何人かから

「見慣れない方だが」

と尋ねられ、その都度丁重に

「今度前田家にお世話になる高山右近と申します。今日は横山家老様のご了解を得て、城下を拝見させていただいております」

と丁重にいうと、尋ねた人たちは「そうですか」とだけ言って横山家老の了解があることと、右近の丁重な言い方から、疑問を持つことはなかった。

その夜、右近は家族、小姓、召使の全員を集め、「キリシタン」として守るべきことを、この加賀で徹底してもらうため、次のように話した。

『将来、ここ加賀に教会を作る。既に金沢城主の前田利家様の了解は得ている。場所はお城の近くがいいと思っているが、場所、時期については未定。加賀は一向宗が多くキリシタンは我々が初めてだ。それだけに地域の人びとは「キリシタンはどんな人たち?」と言う目で我々を眺めてくるだろう。それで、皆一人一人がキリシタンの代表の気持ちで、既に教えられている十戒と慈悲の行い、七つの大罪の科（注 ①）を、より一層理解して、日々実行・順守してもらいたい。その為にここでもう一度学び直したい。

十戒は

第一戒　唯一の神を敬い尊ぶべし
第二戒　神の聖なるみ名において、いたずらに誓うべからず
第三戒　安息日を必ず守るべし
第四戒　父母に孝行すべし
第五戒　人を殺すべからず
第六戒　邪淫を犯すべからず
第七戒　盗むべからず
第八戒　人を讒言（ざんげん）すべからず
第九戒　他人の妻に恋すべからず
第十戒　他人の物をみだりに欲すべからず

慈悲の行い

身体に関する七つの行い

一　飢えた人に食物を与える
二　喉の渇いた人に飲み物を与える
三　裸の人に衣服を与える
四　病人と囚われた人をいたわって見舞う
五　巡礼者に宿を貸す
六　囚われた人を身受けする
七　人の遺体を葬る

精神に関する七つの行い

一　人に良い忠告を与える
二　無知な人に道を教える
三　悲しむ人の心を癒す
四　罪を犯した人を諫める
五　人から受けた恥辱を赦す
六　隣人の誤り、不足をとがめない
七　生者、死者、自分に仇を為す人のために神への救い

注　①　一六〇〇年版「どちりなキリシタン」現代語訳（能文社　水野護　訳）から引用。

右近　前田家重臣会議に出席

十一月二日、右近の住まいに金沢城から使者が来て、明日三日巳の刻（現在の午前十時）から重臣会議を行うので、その時刻までに登城されたい、との連絡を受けた。当日は何年振りかの帯刀・正装で登城した。

城内に入り帯刀を預けた後、案内された部屋に入った。既に家老他の重臣四十名が上座に向って座しており、右近の席は最前列に居並ぶ家老の右端斜め外寄りのところに設けられていた。最前列右端には横山家老が座っており、お互い軽く会釈を交わした。

「殿のお出まし」の声とともに、太刀持ちの小姓を従えた前田利家が上段に着座して

「皆の者、顔(おもて)をあげよ」

の一言で、平伏していた全員が顔を上げ利家を見た。

利家は右近を目で確認して

「今は、関白秀吉様の天下統一のため以外の戦いはない平穏な時を迎えている。ただし、現時点ではっきりとしを願う

七つの大罪

第一　高慢（高慢を抑え、へりくだること）
第二　貪欲（貪欲を抑え、人に与えること）
第三　邪淫（邪淫を抑え、清らかな心を持つこと）
第四　怒り（怒りを抑え、耐え忍ぶこと）
第五　暴食（暴食を抑え、ほどよく節制すること）
第六　嫉妬（嫉妬を抑え、博愛のこと）
第七　怠惰（怠惰を抑え、善の道を怠りなく進むこと）

以上について、皆がこれらの教えを日々順守することにより、この土地の方々が、我々を気持ちよく受入れてくださるであろう。予ねて、これらの書付を皆に渡してあるので、日々の祈りの前にその書付に目を通すこと。更に、キリスト教について聞かれた場合は、この家の玄関左の部屋を開けておくので、そこに案内して、丁重に対応するように。自分で説明できかねた場合は、右近でも、父ダリヨでも、また小姓の誰かにでも応援を頼めばいい。では宜しく頼む」

と言って散会した。

この集まりで右近の話を聞いた篠田伊織は、「歴史的に一向宗が根付いているこの加賀でのキリスト教伝道の厳しさを右近が全員に伝えたもの」と右近の言葉を理解していた。

た関白秀吉様の後継者がいないため、いずれ後継争いのための天下を分けた大戦(おおいくさ)が始まるとみている。前田家も後継争いの埒外に居るわけにもゆかず、その戦いには前田家の運命もかかることを承知されたい。ただし、前田家のあり方については、この利家が将来的に前田家が発展的に存続する道を歩むことを信じ、安心して欲しい」

「ところで、今日、皆に知らせることが一つある。それは今日ここに来てもらった高山右近殿を、前田家の客将として招いたので皆に知らせる。高山右近殿は、予ねて関白秀吉様のもとで自軍を率い、明智光秀、柴田勝家討伐に大変貢献があった。その後関白秀吉様の九州島津征伐にも先陣を任され、見事に役割を果たした。しかし、高山殿はキリシタン大名の指導的立場であったところから、関白秀吉様は、高山殿が関白秀吉様に仕えるかぎり今後キリシタンをやめよ、と言われ、高山殿はそれを断り、明石城主を関白様に返上して、今は浪人になっている。高山殿は戦では数々の功績をあげ、茶道においては千利休の高弟の中でも一番弟子であり、城郭建設には、織田信長が高山殿の居城高槻城攻略時にその見事さに唸ったと言い伝えられ、更に諸大名との交友も深く、浪人にしておくのは勿体ない人材だ。そこで、関白様のお許しを得て、この度、当前田家の客将として招くこととした」

利家はここまで言って重臣たちの反応を見て

「当面は前田家の家老の一人として重要な会議には出席して貰うし、もし、戦があれば前田家の一群を率いて率先して戦ってもらうことにもなる。ところで横山家老、高山殿が当家に慣れるまで、何かと相談相手になるように。では高山殿に一言挨拶してもらおう」

右近はその場で利家に平伏座礼し、その後重臣たちにも座礼した後

「この場からご挨拶をさせていただきますことをお許しください。先ほどは上様より過分なお言葉を賜り、恐縮致しております。この度は前田家に客将としてお招きいただき感謝しております。上様、および皆様方からいろいろと教えていただき、務めを果たしていきたいと思います。何かと宜しくお願い申し上げます」

と挨拶が終ると、利家は

「今日の会議はこれで終わる。横山家老と高山殿はそこに残るように」

と言って部屋を出て行った。

まもなく小姓が

「上様が別間にお越しになるように、とのご指示です」

と呼びに来た。行くと、そこは利家専用の打ち合わせ部屋であり、既に中央に利家が座り、その前に二つ座布団が置いてある。形式にこだわらない三人の「懇談」と言った趣になっている。

右近は言われるままに座ると、利家の

「ここでは固さは不要。膝をくづして胡坐をかけ」
の声で、横山家老ともども座布団に胡坐をかくと
「高山殿、これからも重臣会議と家老の打ち合わせには出席して貰い、前田家の抱える問題を始め必要事項を覚えて欲しい。わからない事項があれば、横山家老になんなりと聞いてくれ。南蛮寺建立については、希望するところがあれば、横山家老に申し出てくれ。場所については城下の総合的あり方の観点からよく協議しよう」
石近はこれらの利家の言葉に感謝した後
「上様、高山を呼ぶのに、高山殿はおやめ下さい。高山でも右近でも呼び捨てに願います」
「貴殿の職位は客将だから、殿をつけても差し支えないと思うが」
「いろいろとお考えが有るかと思いますが、他の御家老、重臣の皆様と同じく呼び捨てに願います」
「わかった。これからは高山で行こう」

城を出た右近は「客将として招かれた経緯から、一軍を率いて戦に臨むことも避けられない。おそらく、関白秀吉の後継争いは大戦になろうが、戦もそこまでではなかろうか。いづれにしても早く戦のない世をつくり、教会を立ち上げたいものだ」と思いながら自宅に戻った。

一方、前田利家は前田家後継の嫡男利長を自室に招き、右近を客将として招いた利家の考えの概略を次のように伝えていた。
「高山右近は、今までの戦歴から見る武将としての器は、利長も承知している通り、勇猛の中にも戦全体の中での自軍の位置と、今何を為すべきかについて適切にみることができ思慮深く、一軍を任せ得る人物である。茶道では利長と同じ千利休門下で、利休七哲の中でもその第一人者と言われているのも承知しているだろう。それから、今後前田家存続のため友好的な関係を持つことが必要な、蒲生家・黒田家・細川家などと右近は親しく交流しているので、茶道や俳諧などを通して、利長もそのような人物と親しくなることも頭に入れておいてくれ。そして右近の素晴らしい人となりを学んでほしい」
と利長に、右近を招いた利家の思いを、恰も「お前の師だよ」と言わんばかりに伝えた。

金沢城での重臣会議は頻繁にはなかったが、開催される都度、右近は会議の後横山家老と二人利家の別室に呼ばれ、利家から関白秀吉亡き後の「後継争い」に前田家としてはどのように対処すべきかを「仮定」を前提として意見を求められていた。利家は「家康が後継を奪いに立ち上がるときは、この前田家百二十万石が目障りになってくるであろう。場合によれば脅しで戦を仕掛けてくるかもしれない、そのとき前田家はどうあるべきか」

が議論と言うよりそれぞれの思いの述べ合いの場であった。

右近が金沢にきて、半年が過ぎようとしていた。この間、邸の裏庭に茶室を建て、時には自分で点前をして心の落ち着きを取り戻し、また、一人での祈りの場ともしていた。信仰面では、月に四回、家族、小姓、召使など全員を対象として、「十戒」や「主の祈り」の解説などを行って、全員の信仰生活を励まし、支えていた。
加賀は歴史的に一向宗が強く、織田信長による一向一揆討伐は激しく（前田家も信長勢の一員として討伐に参加）、滅ぼされてまだ年月があまり経過していないことから、領民は今迄聞いたことも接したこともないキリシタンを冷ややかに見つめていた。

宣教師たちの不安

日本にいる宣教師（バテレン）たちは、秀吉の「宣教師帰国命令」が発令後厳しい事後チェックがなされない状態ではあったが、その命令を無視した行動をとることはできず、その多くは長崎方面に集まっていた。
石近は肥後宇土から金沢に来てから、宣教師たちが一か所に長期にとどまっている状況でもなかったので、誰にも連絡できずにいた。

一方、宣教師たちは右近が金沢に行ったきり、全く連絡が取れず、右近からの連絡も全くなく、右近が肥後宇土から京に上るときにささやかれていた。
「右近に俸禄を与えて前田家の客将とする話は、秀吉が右近をおびき出して取り押さえる手段だ。前田利家は秀吉から命令され、京に来た右近を捕えて北国の寒い地域に幽閉する」
と言う噂が、宣教師間で「もしや」と言う不安を高め、「右近は噂の通り、今は前田利家に寒い北国で幽閉され、場合によっては殺されているかもしれない」
とまで不安が高じ、フロイスはその旨イエズス会本部にまで報告していた。宣教師たちは、右近が再び「キリシタンの大旦那」として再起することに期待と思いを寄せていただけに、不安と落胆の極みに陥っていた。

続く

参考文献
完訳ルイス・フロイス日本史1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社
フォレストブックス
茶の湯の心で聖書を読めば　同右
高橋敏夫

高山右近　海老沢有道　吉川弘文館
高山右近　加賀乙彦　講談社
キリシタン大名高山右近
谷　真介　パウロ文庫
キリシタン千利休　山田無庵　河出書房新社
利休にたずねよ　山本兼一　文芸文庫
キリシタン史の新発見
岸野久・村井早苗　雄山閣
武士道　新渡戸稲造　岩波文庫
茶の本　岡倉天心　講談社学術文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　宮帯出版社
日本史年表　歴史学研究会編　岩波書店
日本キリシタン史　海老沢有道　塙書房
加賀百万石異聞　高山右近　北国新聞社
どちりなきりしたん　水野　聡訳　能文社
どちりなきりしたん　海老沢有道校註　岩波書店
人身売買・奴隷・拉致の日本史
渡邊大門　柏書房
悠遠の人　高山右近　塩見弘子　ドン・ボスコ社
小豆島のキリシタンと高山右近の足跡
小豆島キリシタンの足跡をたどる会　編

私の伊達政宗像を訪ねて（その四－⑥）

安藤　剛

その一：伊達政宗のルーツ
念西と朝宗と宗村
福島に伊達氏発祥の地を訪ねて
その二：十七代政宗の誕生
父輝宗の惨劇
二本松の粟ノ須古戦場を訪ねて
その三：小田原陣の遅参
弟小次郎の刺殺
大悲願寺の白萩文書を訪ねて
その四：政宗と秀吉と家康
海外への夢か野望か
遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて
その五：仙台城と瑞鳳殿
政宗の逸話と書状
日比谷に政宗終焉の地を訪ねて

【慶長遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて】

政宗が海外に夢を馳せた慶長遣欧使節派遣の偉業と使節支倉常長の存在は、徳川幕府の禁教政策の下で、久しく歴史の記録と記憶から消されていた。

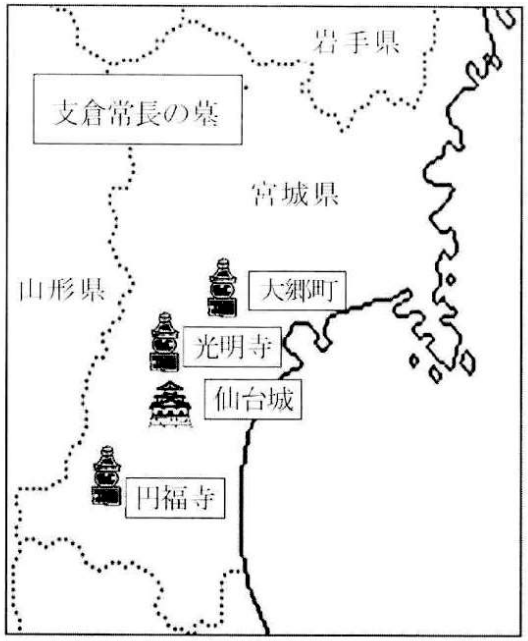
明治六年に明治新政府が欧米に派遣した岩倉具視使節団が、イタリアのヴェネツィアで支倉常長の署名が入った文書を発見、政宗の遣欧使節派遣の偉業が二六〇年の時空を超えて陽の目を浴びた。

そして仙台藩の切支丹改所に長く隠匿されてきた使節持帰り品が開陳され、政宗の遣欧使節派遣と使節支倉常長に関する研究熱が大いに高まり、主命を果たせず失意と絶望の中で帰国した常長のその後に思いを馳せて、それまで誰も関心を寄せてこなかった常長の墓がどこにあるのか、郷土歴史研究家の間で大きな関心事となった。

支倉常長の墓は、仙台市北山の光明寺で発見された五輪塔が定説だが、柴田郡川崎町円福寺と黒川郡大郷町に古くから常長の墓と伝えられる墓がある。

柴田郡川崎町は、仙台城の西南に十五キロの山村にあり、常長の養子先で青年期を過ごしており、帰国後の静養地として故郷に戻り病没したといわれる。

黒川郡大郷町は、仙台城の北東に二〇キロの山間にあり、政宗は幕府に帰国の二年後に病死したと報告、実は常長の義弟常次の知行地である当地に隠棲させ、八四歳の天寿を全うしたという伝承がある。



〈1〉仙台市北山の光明寺

「仙台市史：特別編八」の資料No.三七八「切支丹不分明者支倉六右衛門（常頼）死失帳」に「類門之者共出入仕候を不存候事、不届ニ被思召由ニ而、斬罪被仰付、旦那寺右於光明寺、火葬取置申候」とある。

六右衛門常頼は支倉常長の嫡男である。遣欧使節から帰国した父常長が死去した元和七年（一六二一年）の十九年後の寛永十七年に、キリシタンに関係したとして斬罪となり、支倉家は断絶となったが、斬罪された常頼が仙台市北山の光明寺で火葬されたことから、父常長の墓も支倉家の旦那寺光明寺にあるのではと云われていた。

明治二七年二月、その光明寺の墓地内で、ついに常長の墓が発見されたと、大きな話題になった。

大槻文彦が郷土史家鈴木省三らと常長の墓を発見した当時の模様を著書「金城秘韞補遺」に詳述している。

「明治二七年二月十日、文彦等、有志者ト、東昌寺住職國安敬州和尚ニ會セリ、隣寺ナル光明寺住職兼務ナリ、支倉氏ノ墓ノ事ヲ問ヘルニ、和尚云フ、光明寺ノ墓域ニ、一基ノ古墳アリ、已レ、幼キヨリ聞ケルハ、唯、遼遠ナル國ヘ行キテ帰リシ人ノ墓ナリト云フ」

「近キ頃、光明寺ノ雛僧、何處ヨリカ、長方形ナル石ヲ得來テ、庭ノ面ニスエタリ、見レバ、支倉常信ノ文字

アリ、何處ヨリ持來レルカト問ヘバ、伴ヒ行キテ、此所ナル土中ヨリ得タリト云フ、即チ、支倉氏ノ墓ト認ムル邊ナリシカバ、石ヲバ元ノ所ニスエ置ケリ、是レモ一ツノ確證ナルベシ、ト語レリ、人々、大ニ喜ビテ、同月十八日、東昌寺ニ集リ、和尚ノ後ニツキテ、光明寺ノ後山ニ入リ、荊棘ヲ伐リハラヒテ、是レナリト示スヲ見レバ、五輪ノ小塔、一座ノ基石ノ上ニ立テリ」

「墓前ニ、前ニムヘル長方形ノ石アリ、石燈籠ノ棹石ノミ存セルニテ、前面ニ、奉献、支倉齋常信ト刻メリ、即チ、常長ノ孫常信ノ、祖父ノ墓前ニ供セシモノナルコト知ラレタリ、是ニ於テ、常長ノ墓ハ発見セラレ又、今ハ何ヲカ疑ハムト、人々、歓喜踊躍シテ、墓前ニ羅拝セリ、此日ハ、實ニ、明治二七年二月十八日ナリ」

「常長ノ墓ハ求メ得タレド、其子常頼ハ見エズ、刑死火葬ノ事ニテ、家モ一旦断絶セシコトナレバ、墓トテハ建テザリシニヤ、爾来、墓邊ヲ修理掃除シ、法事を修ス」

光明寺に常長の墓を発見した大槻文彦は、近代的国語辞典「言海」を編纂した著名な国語学者である。祖父大槻玄沢が、江戸時代後期に日本最初の蘭学塾を開き仙台城内に隠匿されていた常長将来品を「金城秘韞」に著した蘭学者、父大槻磐渓が、幕末に奥羽越列藩同盟を提唱した儒学者、一関駅頭に大槻三賢人像が建つ大槻文彦博士の発見というお墨付きで光明寺の墓が定説となった。

光明寺は、仙台城の北三・五キロにある北山五山の古刹である。十三世紀後期に伊達氏四代政依が、当時の伊達氏本拠地だった福島県伊達郡に、京都五山や鎌倉五山に倣って創建した伊達五山の一つで、伊達氏始祖朝宗の夫人光明寺殿の菩提寺だったが、秀吉の奥州仕置で米沢から岩出山に移封された伊達氏十七代政宗が、本拠を岩出山から仙台に移した際に当山へ移転させた。

頼朝が奥州藤原氏を征伐した奥州合戦で主戦場となった福島県伊達郡国見町の阿津賀志山の山麓に、現在も光明寺の字名が残っており、移転した光明寺跡に塔頭の福聚寺が建立され、朝宗室結城氏墓所を守っている。

かかる伊達家の由緒ある臨済宗の光明寺に、なぜスペイン国王臨席で洗礼を受けてキリシタンとなり帰国してなお棄教しなかった支倉常長の墓があるのだろうか。

東北のキリシタン殉教に関心を抱いて殉教地巡りをしていた五年前に、その光明寺を初めて訪れた。

米沢の殉教地を訪ねた帰途にJR仙山線の終点仙台駅の二つ手前の北仙台駅に下車、徒歩五分ほどで「松蔭山光明禅寺」の石柱が立ち小高い丘に石段が伸びていた。さすが政宗の北山五山、落ち着いた佇まいの禅寺である。

本堂裏の墓地の薄暗い樹林に囲まれた墓域に、苔生す小振りな五輪塔が置かれ、彼岸の花が供えられて、傍らの墓柱に「支倉六右衛門常長菩提」とあった（次頁）。

五輪塔の上部二輪が失われて三輪だけだが、高さ一メートルあるだろうか。写真では見ていたが、想像以上に小さく粗末な五輪塔である。あなたは本当に常長さんですか、宣教師ソテロと政宗に翻弄された波乱の人生をここで閉じたのですか、問い掛けて十字を切り合掌した。

五輪塔の花台に並んで、高さ五〇センチほどの長方形の墓石が置かれていたが、墓石の前面に「奉献支倉齋」左下に「常信」の刻字がはっきり読み取れた。

大槻文彦博士は、この墓石を常長の嫡孫常信が墓前に奉献した石燈籠の棹石と考え、刑死して支倉家を断絶させた常頼の墓は建てられるはずがなく、石燈籠が奉献された五輪塔は、祖父常長の墓、と断言していた。

しかし石燈籠の棹石とすると、宝珠と笠を含めた全体の高さが一メートル程のかなり小振りな石燈籠である。キリシタンの嫌疑で刑死された父常頼の墓前だから、禁教の世情を憚り、あえて小さな石燈籠を供えたとは考えられないだろうか。もし祖父常長の墓前であれば、もっと大きく立派な石燈籠を献納していたに違いない。

常信が支倉家を再興した寛文一〇年（一六七〇年）の翌々年は、奇しくも父常頼三十三回忌の年である。父のキリシタン嫌疑を晴らして支倉家を再興させた報告を兼ね、父が火葬された菩提寺の光明寺に石燈籠を奉献して、父の三十三回忌法要を営んだのかもしれない。

そしてキリシタン嫌疑で罪人となり刑死され、家名を断絶させて墓を建てられなかった父のため、石燈籠の奉献に併せて五輪の供養塔も建てたのではないだろうか。

常信の生年を、没年と享年から逆算すると一六三八年、常長の死の十七年後の生まれになる。常信が祖父の顔を知るはずはなく、幼くして父の刑死と家名断絶という辛苦を舐めてきた要因となったキリシタンの祖父常長に対して、恨みこそすれ親愛の情を抱くことはなかったろう。

五輪塔に刻字がないことこそ、墓が建てられなかった常頼の墓だという証かもしれない、が、常信が石燈籠を奉納する以前から、この五輪塔がここにあった可能性もある。常長の墓か、常頼の墓か、真実は、わからない。

五輪塔の側に大正十五年建碑のソテロの顕彰碑がある。政宗に海外への夢を抱かせ、常長使節団をローマまで引率しながら、外交交渉が成功できず自らの司教の座も得られず、常長帰国の二年後に日本に密入国して長崎で火刑となったソテロの数奇な運命に安寧を祈り合掌した。

昨年一〇月に光明寺の住職にお会いする機会を得た。元勤務先の先輩の奥様の実家が檀家ということで紹介頂いたが、明治十三年の火災で堂宇と過去帳や位牌など資料は全て焼失して確かなことは何も分からないという。

光明寺にある常長の位牌については、常長の墓が発見された時に、無住だった光明寺の住職を兼務していた東昌寺住職が、常長の供養のために作られたものだという。

位牌の法名「海量軒月舟萬里居士」もその時に再授されたものだが、月ノ浦を出帆し万里の海を渡った偉業を讃えており、主命を果たせず失意のうちに帰国して歴史から抹殺された常長も浮かばれるのではないだろうか。

仙台市北山の光明寺：支倉六右衛門常長の墓



〈2〉柴田郡川崎町支倉の円福寺

常長の帰国後の消息について、明治四二年に発行された伊達邦宗公御遺辭：堀田信直謹述「伊達政宗欧南遣使始末」に、常長は郷里柴田郡支倉で病没したとあった。

「支倉ノ帰ルヤ外教ノ禁アル為、累ノ君公ニ及ハンコトヲ恐レ、復命後白ラ退テ其邑ニ蟄居セリトモ傳フ、支倉ハ長ク風土ノ異ナル地ニ在リシ故、健康ヲ害シ元和八年七月一日郷里柴田郡支倉村ニ於テ没ス、年五二」

「其墓所未詳、仙台市北山光明寺ニアルモノハ、支倉家ノ墓所ニ相違ナキモ、先年大槻文彦氏ノ発見シタルモノハ、果タシテ六右衛門ノ墳墓ナルヤ疑フヘキニ似タリ」

堀田信直が「緒言」で上梓経緯について「我カ旧藩主伊達伯ノ世子邦宗公ハ、多年支倉六右衛門使節ノ事ニ関シ深ク研究ヲ遂ケラレ、其蒐集セラレタル豊富ノ材料ニ就キ親シク信直ニ説明ヲ與ヘラレタリ」と書いていた。

伊達邦宗公は、禁教下で長く城内に隠匿されていた遣欧使節関連資料を直接調査できる立場にあり、藩祖政宗の欧南遣使の研究に特に情熱を注がれていた伊達家三十一代当主である。その邦宗公が、何を調べ、何を発見し、何を語るのか、大いに興味があった。

邦宗公は、本書の中で常長は郷里柴田郡支倉村に没したと語っていた。常長の墓も没した支倉村にあると考えていたに違いない。柴田郡は私の郷里である。

一昨年（二〇一八年）九月、久方振りの小学時代の同級会で帰省した折、柴田郡川崎町支倉の円福寺に伝わる支倉常長の墓を訪ねる永年の夢をついに実現した。

福島駅前ホテルに前泊、朝一番の東北本線下りに乗車、車窓に奥州合戦場となった阿津賀志山麓の信達平野が広がり、県境を越えてまもなく故郷の大河原駅に下車した。

午前八時始発の川崎行き路線バスの乗客は二人だけである。稲田が黄金色に輝き、懐かしい郷里の風景に昔の思い出を重ねながら、二五分程で「蔵造りの町：村田」に入った。なまこ壁の土蔵造りの町並みを抜けると、バスは人家も疎らな山間の道を、川崎町支倉に向かった。

今でこそ平凡な山道だが、律令時代に大和政権が蝦夷討伐のため開いた近江から陸奥までの東山道が柴田駅（大河原町）で分岐した出羽東山道で、県境の笹谷峠を経て出羽（山形県）に通じる街道である。

文治五年の奥州合戦で、源頼朝の大軍を迎え撃って阿津賀志山合戦で敗れた平泉方総大将藤原国衡が、出羽道を経て大関山（笹谷峠）を越えんとしたが、途中の芝田郡大高宮（大河原町金ヶ瀬）で、追撃してきた鎌倉御家人和田義盛に矢を射られ、名馬高楯黒が深田に落ちて、畠山重忠の家人に討たれた、と鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」にあったが、国衡はこの山道の笹谷峠を越えて出羽国に逃げようとしたのである。

出羽国（秋田県と山形県）は、平安後期の後三年の役で源義家に滅ぼされた清原氏の本拠地で、義家に助力して奥州の覇者となった藤原清衡の支配下に入っていた。

阿津賀志山合戦の敗北で、陸奥国は一気に頼朝の大手軍に制圧されていくが、国衡が逃げ込もうとした出羽国は、まだ頼朝の北陸道軍との決戦前で、国衡は出羽の奥州藤原氏郎党に合流しようとしたのだろう。翌文治六年に、出羽の豪族大河兼任が、奥州藤原氏の残党を糾合して鎌倉幕府に反乱を起こし、平泉を一時奪還している。

後に常長が育った支倉の地は、当時まだ奥州藤原氏の旧勢力が残存する出羽に通じる交通の要衝地であり、奥州の平泉政権を倒した頼朝は、その出羽の入口の抑えという大役を支倉氏の祖常久に託していたのである。

戦国末期から江戸初期にかけて、出羽の戦国大名最上義光は、政宗の母の兄であるが、終生の宿敵でもあった。仙台から出羽に通じる街道が、仙台から西へ秋保街道を名取川に沿い、赤石で二口街道と分岐して碁石川沿いに南へ、小野駅で奥州街道（旧東山道）から分岐した笹谷街道（旧出羽東山道）と合流して、蔵王連峰の北側標高八〇〇mの笹谷峠を越えて出羽（山形県）に至っている。

支倉の地は、秋保街道と笹谷街道が合流する小野駅の南隣に位置して、支倉氏は仙台と出羽を結ぶ戦略上の重要拠点を政宗に託されていたのである。

伊達治家記録の天正七年の条に、支倉氏と砂金氏が領地を争った鍋丸事件に触れて、山形に通ずる笹谷街道が最上領に接しており、地方小豪族が私欲に発した私闘も、最上と伊達という対立を背景にすると、大事件に発展しかねない、当時のこの地方の情勢を記している。

常長は政宗の父輝宗に仕える山口常成の嫡男として米沢に生まれ、父の兄支倉時正に子がないため養嗣子となり、この支倉村の上柄城に移り住み、支倉氏を名乗った。

関ヶ原の戦いの慶長五年に、家康が石田三成の挙兵に反転西上すると、直江兼継の率いる上杉軍が、米沢と庄内から山形の最上領に侵攻した。長谷堂城を包囲して山形城に迫る勢いに、最上義光は政宗に援軍を要請、政宗は母保春院が居る山形城の救援に叔父の留守政景を派遣、三千の兵を率いて白石からこの笹谷峠を越えて最上領に入ったが、最上・伊達連合軍と上杉軍との決戦は、関ヶ原の西軍敗退の報が伝わり、上杉軍の撤退で終わった。

まさにこの笹谷街道は「秋草や兵どもが夢の跡」である。様々な歴史の舞台となった山道を一〇分ほど走り、音無というバス停に降り立った。標高約二〇〇メートルの高地で、音無の名前通り、静かな山村である。

頭上高い案内板に「支倉常長ゆかりの町：川崎町」「宇宙翔ける政宗：海翔ける常長」そして「常長のふるさと支倉：支倉常長所墓（円福寺）」とあった。

小雨模様になってきたが、爽やかな秋風が心地いい。右手に黄金色の稲田が広がり、左手に山並みが迫り、道歩く人は誰もいない。時折り自動車が静寂を破っていく。途中に山口の地名があったが、常長の実父山口常成がこの界隈に住んでいたのだろうか。奥州仕置で福島の山口城を追われ、黒川郡に知行されるまでの間、息子常長が養子に入っていた当地に逗留していたのかもしれない。

バス停から歩くこと約二キロ、支倉村落の入口にある円福寺の案内板に「開創は平安後期、本尊の延命地蔵菩薩は平安時代の作、脇仏として仏像に模したマリア観音を拝した隠れキリシタンと云われる所以、墓地内に支倉六右衛門常長の墓という宝篋印塔があり、常長に同行した人物の墓と目されるイカリの印のついた墓石も平成三年に見いだされその信憑性が強まっている」とあった。

長い参道を登り境内に入ると、人の気配に気づいたのか、本堂の扉が開いて住職が顔を覗かせた。支倉常長のことを調べている者で、マリア観音を見させて欲しいと申し出ると、明日にテレビの取材があるので椅子を並べて準備していたところですがどうぞと、住職は快く本堂内に招き入れてくれた。

祭壇の本尊の右奥に仕舞われていた黒塗りの厨子を引っ張り出し、観音扉を開いてマリア観音を見せてくれた。色白のふくよかな顔立ちで赤いベールを被り、蓮華

台に半跏して右足を垂らし、右手に蓮華の蕾のついた茎を、左手に赤子を抱えて、子育て観音のように見えるが、まさしく聖母マリアとキリストの聖母子像である。

赤子を包んだ赤色のおくるみに描かれた緑色の十字の模様は、十字架を現しているかもしれない、とカメラの接写を勧めてくれたが、テレビ取材のリハーサルのように、懇切丁寧な解説を、独り占めさせていただいた。

厨子の前に置かれた黒塗りの像は、頭髪と顎髭が巻貝のような螺髪で、額に仏教の白毫があるものの、鼻筋が高く彫りの深い顔立ちは、明らかに外人神父である。

常長は、遣欧使節から帰国して故郷の支倉に隠棲しながら、禁制のキリスト教を守り密かに布教していたのだろうか。支倉地区の隠れキリシタンたちは、この二体を前に祈りを捧げていたに違いない。

住職の案内で本堂裏の常長の墓に向かった。墓地の最上段のブロックで区画された墓域に、風雪で劣化著しい白砂に覆われた宝篋印塔と四角柱の墓石が並んでいた。

相輪の上半分が欠落、笠部の四隅の隅飾突起は羽ばたくように張り出し、御椀を伏せた形の基壇と笠部を繋ぐ基礎は異質の石材である。住職にどちらが常長の墓ですか尋ねると、四角柱の墓石は宝篋印塔の笠部を支える塔身だったのではないかと言っていた。この墓石を塔身とすると、総高二メートル以上の堂々たる宝篋印塔になる。

政宗から棄教を勧められながら、山奥に隠棲して信仰を守り病癒えぬまま天に召された常長の墓は、もっと粗末な墓を想像していただけに、その立派さは意外だった。

異国の地で洗礼を受けてまで主命を果たさんとした常長の苦難を知る政宗は、禁教下の日本に帰国して失意のうちに病没した常長に対して、知行六〇〇石以上の格式ある宝篋印塔の建立で報いたのかもしれない。

その意味で、仙台市北山の光明寺の五輪塔は、余りに小さく貧相である。政宗の在世中に建立されたとすると、こちらの方が本当の常長の墓なのではないだろうか。

太平洋から大西洋を渡り、荘厳な宮殿と教会でスペイン国王とローマ教皇に謁見、ローマ市民権まで得ながら、宣教師派遣と領内布教を条件にメキシコとの交易を求めた交渉は、幕府によるキリシタン弾圧が伝えられて失敗に終わったが、壮大なキリスト社会を見聞してキリスト者となって帰国した常長を待っていたように、政宗は領内に禁教令を布告、水沢で仙台藩最初の殉教が行われた。常長は政宗の変心をどう受け止めただろうか。長駆の旅で病に蝕まれ天に召された常長の安寧を祈り合掌した。

円福寺からの帰り道、常長の育った上楯城に立ち寄った。円福寺住職が子供の頃に本丸跡に植わっていた先代の大銀杏に攀じ登ると、仙台平野や太平洋が望めたが、南から仙台に侵攻する軍勢を監視出来る戦略拠点だったに違いないと話されており、実体験してみたかった。

上楯城址の登り口の案内板に「常長の祖父紀伊守常正が天正十四年（一五四二年）に築いた東西に三〇〇m、南北に二〇〇mの中世の山城で、急坂に囲まれた館山に築城されて、空濠が巡らされている」とあった。

杉林の林道を登っていくと、前方につがいのカモシカが、キョトンとこっちを見つめていた。カメラを向けると地を蹴るように笹の生い茂る谷へ駆け下りていった。住職に熊や猪が出るよと驚かされてきたが、まさか天然記念物のカモシカに出会えるとは幸運である。

一〇分程で上楯城址の入口に着いた。杉の葉が敷き詰められた曲がりくねった急な山道を更に一〇分程登り、二重三重の空堀に囲まれた標高二六mの本丸跡に出た。こんな山奥にこんな大規模な城郭があったとは信じられない。一二〇〇石取りに相応しい風格である。

下草が刈られた本丸跡の広さは長径一〇〇mあろうか。密生する杉林からの眺望は、望むべくもなかったが、伯父時正に子がなく七才で支倉本家の養嗣子となった常長は、この上楯城で青春期を過ごしていたのだろう。

本丸跡に大銀杏があり、明治四二年に切り倒された二代目だという。先代の大銀杏に攀じ登った常長は、仙台平野の彼方に広がる太平洋を望んでいたに違いない。まさか三〇年後に政宗の命で太平洋と大西洋を渡りローマを往復することになるとは思いもしなかったろう。

日曜に四本しかない路線バスに、急ぎ足で下山した。揺れるバスの睡魔に襲われながら、この山奥で信仰に生きる常長の元へ、政宗は会いに来てくれただろうか、主君の来訪を待ち侘びる常長の姿を思い浮かべていた。

柴田郡川崎町支倉の円福寺：支倉常長の墓



〈3〉黒川郡大郷町東成田の西光寺

宮城県黒川郡大郷町に、古くから支倉常長の墓と言い伝えられる墓碑があり、密かに墓守りされてきたという。

明治二七年に大槻文彦博士が仙台北山の光明寺に常長の墓を発見したニュースに触発されたのだろうか、この大郷町東成田に残る伝承が、旧制二高（現東北大学）校長阿刀田令造の耳に入り、大正に入って現地調査が行われ、大郷町東成田墓地説が初めて世に紹介された。

禁教下の日本に帰国した常長が政宗の勧めに棄教しなかったため、政宗は帰国の二年後に病死したと幕府に届け出て、義弟常次の領する黒川郡大谷村（現大郷町）に密かに隠棲させ、八四才で没したというのである。

黒川郡大谷村は、「仙台市史：特別編八」の資料No.三八四「伊達綱基知行宛行黒印状」に「於黒川郡大谷川内村五貫一六七文之所（中略）寛文一〇年七月九日、支倉丹助（常信）とのへ」とあり、常長の孫常信が、支倉家を再興させた際に与えられた知行地である。

「仙台市史：特別編八」の資料No.五「支倉氏系図」に、「貞享二年二月二〇日卒、年四八、黒川郡大谷川内村桂蔵寺、法名花岳宗香信士」とあり、常信は知行された十五年後に死去、その知行地の桂蔵寺に墓がある。

黒川郡大谷村は、秀吉の石筆として小田原陣への遅参と大崎一揆の煽動疑惑で苦境に立つ政宗を助けてくれた和久宗是を、秀吉が没すると、仙台藩に招いて与えた所領でもある。大坂の陣が起きると、宗是は秀吉の恩に報ずるは今と、政宗に別れを告げて大坂城の秀頼の元へ馳せ参じ、単騎敵陣に突入して八一才の生涯を終えた。

黒川郡大谷村は、常長や宗是といった幕府に憚る家臣を隠匿するに適した秘境なのかもしれない。

川崎町支倉の円福寺を訪ねて塩釜に宿泊、翌朝に松島海岸駅前のレンタサイクルで黒川郡大郷町に向かった。

今日の予定は、常信の墓がある桂巌寺を訪ね、そのあと東成田西光寺にある常長の墓をお参り、できれば大郷町東成田説を唱えていた佐藤宗岳師の東光寺にも立ち寄りたい、総行程三〇キロの山岳サイクリングである。

松島海岸沿いの土産物店街を抜けて松島湾に注ぐ高城川沿いに北上、高い河岸壁から頭を出す巨大なクレーンが林立していた。東日本大震災から七年経つが、大津波が遡上した防波護岸工事はまだまだ終わりそうにない。

国道四五号から西に向かう県道八号に入ると、黄金色の稲田が左右に広がり、秋の陽射しが暑く感じられる。

やがて山間の緩やかなアップダウンが始まった。上り坂の立ち漕ぎで額に汗し、下り坂の滑走で風を切る。県道八号から新関バス停を左折して、山麓と田圃の間道を自転車を走らせること約一時間、山門前に観音石像が立つ「日月山桂蔵寺」が見えてきた。

桂蔵寺は、慶長十九年（一六一四年）に松島瑞巌寺の前身円福寺の八〇世廣天青和尚を開創として、瑞巌寺歴住が入寺した臨済宗妙心寺派の禅寺である。こんな山奥にこんな山緒ある立派なお寺があるとは、驚きである。

住職は突然の来訪者を温かく迎え入れてくれた。そして歴史家でもなく好奇心だけの一介の常長探訪者を相手に、二時間近く時間を割いていただいた。

この界隈が昔は砂鉄が採れて隠れキリシタンが多かったという住職の話に、北に五〇キロの岩手県大籠地区で砂鉄から製鉄するたたら製法の技術指導に備中から入植したキリシタンが布教を始めて、寛永十六年から数年の間に三〇〇人以上の信者が処刑される大殉教があり、三年前にその大籠殉教地を訪ねて来たこと、そして政宗の京都での足跡を求めて、伏見の伊達家上屋敷跡の黄檗宗海宝寺と臨済宗妙心寺派大本山の妙心寺、松島瑞巌寺の中興の祖雲居禅師の出た幡桃院を訪ねてきた旅の思い出話などを披露して、会話は大いに盛り上がった。

そこに老住職も加わり、仙台市博物館所蔵の「支倉系図」の常長の孫常信の条の記載内容と一致する法名、死亡年、実名が刻された墓石が、桂蔵寺の裏山に発見されたこと、当寺十六世の弟子で中村東光寺住職の佐藤宗岳師が、大郷町東成田西光寺に伝わる墓が支倉常長の本当の墓であることを立証した話などを説明いただいた。

支倉常長がローマから帰国した元和六年（一六二〇年）は、幕府の切支丹弾圧が厳しく、主君政宗は洗礼を受けてきた常長を密偵から発見されないよう、幕府には元和八年に病死したと届け出て、大郷町東成田に隠居させたという伝承が、当地の支倉家中伊藤家に伝えられており、「梅安清公禅定門、承慶三年二月十七日支倉氏」と刻された東成田西光寺にある墓石が、常長の墓だという。

常長が病死したとして幕府を欺き、常長を密かに大谷村に隠棲させるとは、小田原参陣前夜に、母義姫による政宗毒殺未遂事件と政宗による弟小次郎刺殺事件をでっち上げて、実は弟小次郎を密かにあきる野市の大悲願寺に隠匿させていた政宗なら、あり得そうな話である。

大郷村と支倉家の繋がりや常長の墓に比定した根拠などを質問する私に、支倉家十二代正雄氏が纏めた川内支倉氏系譜調、十三代現当主常隆氏が纏めた支倉家系譜、佐藤宗岳師が大郷村に伝わる資料を収集して地元に語り継がれる墓こそ常長の墓であることを論証した昭和三二年発行の小冊子『支倉六右衛門常長の墓について』（大郷町教育委員会発行）を持ち出して、これは限定版なのでお渡しは出来ないが、と全三〇頁をわざわざコピーして、後でゆっくり読んでみてくださいといただいた。

突然の来訪者への望外なご厚意に謝辞して、当寺の裏手の山の中腹にある常信の墓に向かった。

前日までの雨でぬかるんだ山道を五分程登ると、かつて本堂があったという杉木立に囲まれた墓域に、大小十二個の墓石が円形に並べられていた。

傍らの案内板に『支倉六右衛門常長「子孫の墓」』とあり、常長がここに隠棲した理由について「常長の実父常成が天正十九年に黒川郡内に采地五〇余町歩を賜わっていたからで、大郷村東成田と川内安戸に支倉家屋敷跡と伝承される処があり、ここ川内安戸に常長の孫常信以降の子孫が住んでいた」とあった。

桂蔵寺の過去帳から解明された各墓碑の名前が説明書きされており、ほぼ中央の高さ一mばかりの一番大きい苔生した墓石に、常信の法名「花岳宗香信士」の刻字が辛うじて読めた。支倉家を再興させた常信は、確かに寛文一〇年に知行された黒川郡大谷川内村に眠っていた。

美しい木洩れ日の中で墓前に跪き、祖父の常長がもし遣欧使節に選ばれることがなかったら、平穏な日々が送れただろうにと、波乱な支倉一族の安寧を祈った。

次は、東成田西光寺に伝わる常長の墓である。桂蔵寺から西に五キロの山道は、あまりの急坂に二度ばかり自転車を手押ししてしまった。おおさとゴルフ倶楽部を右手に、やがて支倉常長メモリアルパークが見えてきた。

平成八年にオープンした史跡公園で、仙台城二ノ丸跡の像と同じ佐藤忠良作の支倉常長像が迎えてくれた。

当地の住所に西光寺とあったが、ここに西光寺というお寺があったわけではなく、隠れキリシタンが信仰のため密かに集まる場所に寺の名を付けて隠れ蓑にしていたのではないか、と桂蔵寺の住職が語っていた。

小鳥のさえずりと小川のせせらぎ奏でる公園内の遊歩道から、栗のイガが散らばる山道の階段を登ると、途中に義弟常次の墓があり、案内板にこの山の初代知行主とあった。墓石の刻字は摩耗していたが「歸真本性宗峻禅定門」「寛文十二年正月十六日」と読めそうである。

常長は、実父常成の兄で支倉家宗家の時正に男子なく養子に入ったが、後に時正の後妻に久成と常次が生まれたため、家禄を二分して六〇〇石取りの分家となった。後に罪を犯した実父常成が切腹となり常長も追放されるが、遣欧使節から帰国して棄教しない常長は、政宗の配慮で時正の次男常次の下に匿われたのだという。

義弟常次の墓から更に整備された山道を上ること数分で、雨露凌ぎの屋根が付いた常長の墓と伝わる墓石が見えてきた。常次の墓より一回り大きい立派な墓である。

法名「梅安清公禅定門」の刻字は微かに読み取れたが、法名の左右にある承應三年（一六五四年）二月十七日と支倉氏の刻字は、判読できなかった。高さ九〇センチ、幅七〇センチの堂々とした墓石で、しかも常次より高い場所にある墓を前に、様々な疑念が浮かんできた。

途中にあった常次の墓石の刻字は不鮮明だったが、寛文十二年（一六七二年）だったとすると、この墓は、常次の死の十八年前で、知行主の常次が建てたのだろう。

常次が手許に隠匿した義兄常長の墓だと伝えられているが、支倉本家の次男常次が、実兄でもなく分家に過ぎない居候の義兄常長のため、自分の墓より大きく立派な墓を、自分の墓より高い場所に造るだろうか。

法名の禅定門は、政宗に殉死した家臣十五人と陪臣五人の全員にも付けられた格式ある士分の法名である。幕府に死んだと届け出て、キリシタンとして隠棲して天に召された常長にそのような法名まで付けるだろうか。

承應三年は、常長の嫡男常頼がキリシタン嫌疑で切腹となった寛永十七年の十四年後である。常長が自分の信教の影響で息子が死罪となり家名断絶になったというのに、十四年も平然と生き永らえていられるものだろうか。

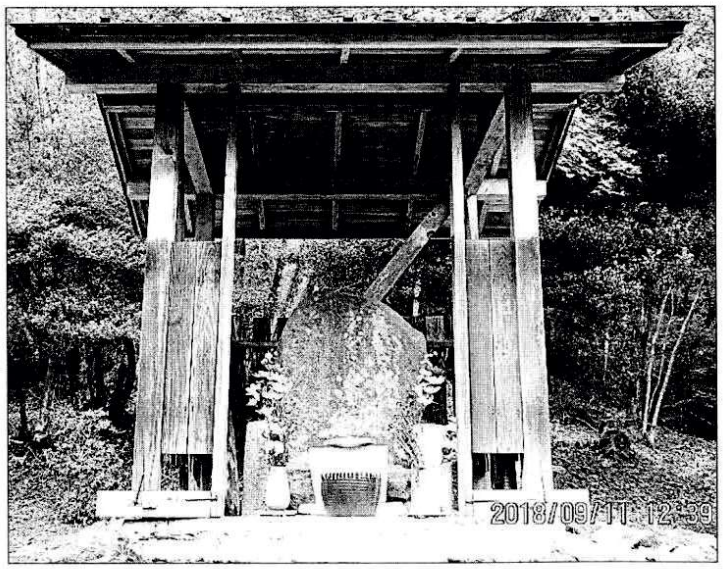
ここから北東に五〇キロの藤沢村大籠地区で、政宗の死後まもなく、寛永十六年から数年の間に三〇〇人余のキリシタン大殉教があったことは、当然耳にしていただろう。庇護者の政宗が逝って迫害が激化するなか、大郷村に隠棲して信仰を守り続けられるものだろうか。

人っこ一人いない支倉常長メモリアルパークのベンチで、コンビニお握りを頬張りながら、桂蔵寺でコピーしていただいた佐藤宗岳師の小冊子を広げてみた。

地元の東光寺の老住職の身ながら、現地を地道に歩いて、古くからの言伝えや古文書を緻密に調べ上げ、東成田の古碑こそ、常長の墓であると論述していた。

「御城下に居ると公方様から殺されるかもしれないので政宗様の御指図に依り此の在郷にかくれ人となって暮

黒川郡大郷町東成田の支倉常長の墓



らした人である」と云う古老の口伝えがあり、東成田西光寺や川内字安戸に支倉屋敷跡と称する処があり、東成田に切支丹信者の遺風が現在でも残っているという。

そして東光寺に残る享保年代（一七〇〇年前半）以降の過去帳に支倉氏一族の名があり、支倉家系図の常長の孫常信の条に、常信の墓が桂蔵寺にあること、常長の父常成の条に、天正十九年に黒川郡五〇余町を賜わったこと、登米郡米川村の後藤寿庵の生家にローマ渡航日記が珍蔵されていたこと、ローマ博物館所蔵の古文書に富谷と大郷の成田にキリスト教信者がいると記載があり、支倉家中伊藤家にマリア観音の小軸と六右衛門宛て表具用領収証が伝わること等を列挙して、常長は東成田に隠棲しながら部落の人々に神の福音を宣べ伝え、八四才の天寿を全うして西光寺北沢山に葬られたと結論付けていた。

しかし列挙されている資料は、あくまで傍証に過ぎず、常長の墓を立証するものではない。墓石の法名が常長を証明する過去帳が、佐藤宗岳師の東光寺にあったというが、政宗に刺殺されたはずの弟秀雄が生きていたとする大悲願寺の古過去帳のように、後世に加筆されている可能性もある。ここまで来たら東光寺に伺わず帰るわけにはいかない。遠回りになるが、東成田から国道四〇号を北へ約四キロ自転車を走らせて、大郷町の街中にある東光寺を訪ねた。玄関に出てこられたのはお孫さんだった。

支倉常長の墓を訪ねて、川内の桂蔵寺と西光寺を回ってきたが、どうしても墓石の法名「梅安清公禅定門」が常長の法名だという証を知りたい、と率直に尋ねてみた。

青年住職は、桂蔵寺でコピーいただいたと同じ小冊子を持ち出して、亡き祖父が書いたものだが、これ以上のことは分からない、寺が数度の火災に遭って、常長時代の古い過去帳は残っておらず、常長に法名を差し上げたかどうかもわからない、と率直に答えていただいた。

誠実な応対に謝辞して、松島海岸駅へ向けて丘陵のアップダウンに自転車を走らせながら、桂蔵寺の老住職が別れ際に話されていた言葉を思い返していた。

支倉常長の墓について、仙台市と川崎町と大郷町が主張しているが、互いに確証はなく、反証し合って論争すべきものでもないと仰っていた。好奇心と探求心だけで訪ねている自分の心に厳しく突き刺さる言葉だった。

帰宅して改めて支倉家略系図を調べてみると、常次の嫡子三右衛門に「父ニ先立死去」、その子源太左衛門に「祖父新右衛門継跡」と付記があり、常次の嫡子が父に先立って早死に、孫が祖父常次の次を引き継いでいた。

常長の墓と伝わる承應三年の墓石は、常長の義弟常次の嫡子三右衛門の墓だったのではないだろうか。我が子の早世を悼む常次が、十分扱いの法名を付けて立派な墓を一際高い所に造らせたのではないだろうか。

【続：支倉常長の墓を訪ねて（私的考察）】

〈1〉奥州市前沢区古城の常長知行地

支倉常長の墓を求めて、支倉家旦那寺の仙台市北山の光明寺、青春期を過ごした川崎町支倉の円福寺、義弟の元で隠棲したと伝わる大郷町東成田を訪ねてきたが、確かだったことは、嫡孫常信の墓が支倉家再興時に常信に知行された大郷町にあったことだけである。やはり常長の墓も常長の知行地にあるのかもしれない。

昨年一月に青葉城資料展示館で「支倉常長遣欧使節写真展」をご案内頂いた主任学芸員大沢慶尋氏が、岩手県奥州市に常長の本知行地があり、帰国後の常長はその地に帰って亡くなったかもしれないと言っておられた。

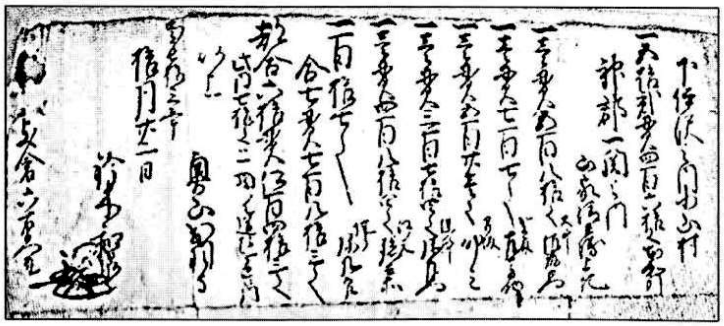
後日、常長が与えられた知行割目録（仙台市博物館所蔵）の写（下図）をメールで送っていただいた。

慶長十三年（一六〇八年）一〇月二二日付で、下伊沢之内小山村（奥州市前沢区）に五二貫四六〇文を本知行として、神郡一関之内（加美郡色麻町一ノ関）に七貫七八三文、都合六〇貫二四三文が知行されていたという。

当時、政宗は家臣団の所領の再編を行っており、慶長十二年二月の領内総検地の結果を踏まえ、翌十三年九月に個々の家臣宛に、総奉行の奥山出羽守（兼清）と鈴木和泉守（重信）の連名で一斉に出されたものである。

家臣の知行高と知行地の実高を一致させるとともに本知行分を確認するもので、常長に下伊沢之内小山村がこの時に与えられたのか、既に与えられて追認されたものなのか、いずれにせよ現存する常長唯一の知行状である。ここが常長に与えられた最後の知行地なのだろうか。

支倉六右衛門常長宛知行割目録
（慶長１３年１０月２２日）



伊達家三十一代当主伊達邦宗公が、堀田信直著「欧南遣使始末」の中で「郷里柴田郡支倉村ニ於テ没ス」と語っていたが、慶長十三年に下伊沢小山村が知行地に宛がわれた上掲の知行割目録が発見されたのは昭和五八年、欧南遣使始末が発行された明治四二年当時は、常長が下伊沢小山村に知行されていたことは知られておらず、郷里支倉村にて没す、と考えたのもやむを得ないのだろう。

常長宛て知行状の写を送って頂いた大沢慶尋氏から、個人的な見解を数回に分けてメールいただいた。

「支倉六右衛門の出帆五年弱前の本知行地は、奥州市前沢区小山でした。当時はまだ寺請制前で、お墓をお寺に設けるのは仙台藩では重臣までにとどまり、知行地内に土葬するのが一般的でした。帰国後、政宗公に領地へ帰って休むよう命じられ、帰国後一年未満で亡くなったので、この領地内に埋葬されている可能性が高いです」

「柴田郡支倉は、支倉本家紀伊の所領で、常長が一度養子に入りましたが、紀伊に実子ができ、出されましたので、そこに帰国後戻ることはありません」

「前沢区の小山は、路線バスのバス停留所「小山」があり大林寺があります。古城という地名のところがありそこが常長の館跡かと思われていますが判然としません。墓と思われるマウンド形状のものも特定されていません」

大沢氏の常長への熱い思いが伝わるメールである。

常長の本知行地が岩手県奥州市の水沢近くと聞いて思い当たるのが、キリシタン武将の後藤寿庵である。

秀吉の奥州仕置で改易された葛西氏の旧家臣で、長崎に逃れ住んでキリシタンとなり、慶長十六年に家康の命でメキシコを往復した京都商人の田中勝介と知り合い、その推薦で政宗に仕えて、翌十七年（一六一二年）に見分村（奥州市水沢区福原）に一二〇〇石を給付され、教会堂を建てて仙台に次ぐキリシタンの聖地となった。

その寿庵の福原から常長の下伊沢小山村まで南に僅か五キロ余り、寿庵が常長を遣欧使節に推挙したともいわれており、お互いの交流は当然にあったのだろう。

寿庵が政宗の棄教の勧めを拒絶して水沢を去ったのは常長がローマから帰国して三年後だから、マドリードで洗礼まで受けながら主命が果たせず、禁教下の日本に帰国した常長が、政宗にまだ信仰を黙認されていた寿庵の近くに戻っていくことは十分有り得ただろう。

常長の墓の奥州市小山説を調べるうち、水沢市に住む郷土史家切田未良氏の著書「支倉常長と胆沢町―常長の終焉地を探る―（一九九四年）」を知った。

国立国会図書館で閲覧すると、現奥州市胆沢小山にある八幡神社境内の裏山にある三基の五輪塔が、支倉家が再興された六年後の延宝四年（一六七六年）の刻字があり、常長の供養塔ではないかと推論されていた。

常長の孫常信が、父常頼のキリシタン嫌疑で断絶されていた支倉家を寛文一〇年（一六七〇年）に再興させて、仙台市北山の光明寺に、刑死した父常頼への追善に「奉納支倉齋常信」と脚柱に刻した石燈籠と五輪の小塔を建てたが、時期は公然と墓碑を建てられる時代ではなかったから再興の数年後であろう。その前後に、知行地の下伊沢の小山村にも三基の五輪小塔を建て、祖父始め一門の冥福を祈ったに違いない、というのである。

支倉常長の墓を訪ねて、仙台市北山と川崎町支倉と黒川郡大郷町に足を運んでみたが、今一つ手応えのない探訪劇の最中に、大沢氏が語っていた奥州市に、常長の供養塔を見付けたという話は、著者切田氏の身贔屓な郷土への思い入れもあるだろうが、闇の中の光明である。ぜひ奥州市に行ってみたいという思いを強くした。

奥州市のホームページに、切田未良氏の胆沢小山説に関する情報を問い合わせたところ、教育委員会歴史遺産課の学芸員さんから丁寧な返信メールをいただいた。

「切田氏が推論している八幡神社が所在する奥州市胆沢小山は、慶長十三年の時点では上伊沢の上野村で、常長の知行地になった下伊沢の小山村は、現奥州市前沢古城の四区・五区の行政区に該当しており、八幡神社の胆沢小山は、常長が知行された下伊沢小山ではなく、切田氏の見解は誤りです」と詳細な資料も添付してきた。

奥州市は、平成十八年に水沢市・江刺市と胆沢郡の前沢町・胆沢町・衣川村が合併して誕生した市である。

常長が知行された小山という地名が、奥州市前沢ではなく奥州市胆沢にある理由について、メールに添付されてきた資料「胆沢史談」に「元禄二年に上野村と小山村が合併して小山村となったが、明治八年の村統廃合で小山村が分割され、もともとの小山村であった本郷（現奥州市古城四区・五区）が中畑村と合併して古城村となり、その結果、もともとは上野村であった地域に、小山の地名が残された」とあった。

そして「慶長年間に下伊沢小山村だった現奥州市前沢古城に、支倉常長の墓といわれるものや伝承もなく、常長の知行地であったことを物語るものは何もない。唯一、古城が小山村だったことを示す名残といえば、陸中折居駅から国道四号を少し南に下ったところに小山というバス停があるくらいでしょうか」とメールは結ばれていた。

改めて国会図書館でコピーしてきた切田未良氏の著書「支倉常長と胆沢町」の巻末にある「小山村界図」を見てみると、明治八年に分割されて誕生した新小山村の絵図（胆澤郡小山村役場作成）で、切田氏は元禄二年に合併があったことを承知していなかったようである。

切田氏の八幡神社説が誤りだったとしても、常長の最後の知行地が下伊沢之内小山村で、常長が最後の知行地

で亡くなった可能性があるのであれば、常長の墓を訪ねる私の旅は、奥州市前沢古城を訪ねなければ終わらない。

奥州市を訪ねる日程を考えていると、平成三一年三月に高校同級の「心のふるさと創生会議」理事長田中克人君から仙台で開催するシンポジウム「伊達政宗晩年八年間の居城・若林城研究」への招待状が送られてきたので、その前日に奥州市まで足を延ばしてみることにした。

三月二三日早朝に埼玉を出立、東北新幹線一ノ関駅で東北本線盛岡行き二両編成のワンマン電車に乗換えた。平泉駅を過ぎると、左手に中尊寺のある関山の樹林が黒々と迫り、右手遥かに束稲山の山並みが美しい。衣川を渡ると、胆沢平野が広がってきた。水沢駅の一つ手前の陸中折居駅に下車したのは、正午を回っていた。

無人駅のホームに降り立つと、小雪が舞ってきた。暦の上ではまもなく四月だが、北国の春はまだまだ先のようだ。ここが常長の最後の知行地なのだろうか。帰国した常長は、ここで終焉を迎えたのだろうか。屋敷跡や墓などの考証は全くないというが、常長の最後の息吹を思うだけで胸がときめいてきた。

駅前の一〇軒ばかりの寂しい駅前通りを西へ五〇〇メートル程、南北を走る国道四号に突き当たったが、かつての奥州街道である。交差点の西側の高台に、かつて折居城があったという。

頼朝の奥州合戦後に奥州総奉行に任ぜられた葛西晴信の家臣柏山明好の四男折居宮内明胤の居城で、前沢村の中島・小山・折居に一万石を領有していたが、天正十八年に葛西氏が秀吉軍に敗れた際、柏山・折居一族は出羽仙北に逃亡して、欠所地となった当地の一部が、常長に給されたようだと「胆沢町史」にあった。

秀吉の奥羽仕置で改易された葛西氏の旧領を拝領した木村吉清の横暴と圧政に、葛西氏旧臣が蜂起した葛西大崎一揆は、最初にここ胆沢郡柏山で勃発したという。

後に政宗は常長にこの地を知行させたが、大崎地方で政宗の密命を受けて諜報活動に奔走していた常長の力量を信頼していたからかもしれない。

交差点を南の前沢方面へ左折、右手の小高い森に囲まれた「熊野神社」に向かった。国道四号から薄ら雪化粧した山道に入ると可愛い福寿草が覗いていた。熊野神社を囲む杉林の間隙から眼下に村里が見えてきた。

神社境内に立つ案内板の縁起に「過去三度不慮の火災に遭い、其の度毎に旧小山村氏子一同によって（現在の前沢区古城小山部落氏子の人達）各社殿の復興に御尽力維持整備を戴き現在に至っています」とあった。

古城小山部落とは、常長の知行地だった下伊沢小山村のことだろう。ついに常長の終焉の地に辿り着いた感慨に捉われた。この高台は常長の屋敷跡なのだろうか。

境内に散らばる苔生す墓石の刻字に、常長時代の痕跡を探してみた。神社裏手の母屋を訪ねて宮司さんに「この界隈は支倉常長の領地だったようですが、常長に関わる伝承はないでしょうか」と尋ねると「常長の伝承はないと思うが、ここから南へ一キロに、平安時代初期の瓦が大量に出土して、最近まで発掘調査が行われてきた」そして「坂上田村麻呂が築いた胆沢城より古い瓦で、地元では胆沢古城と呼んで、行政地名の古城の語源になった」とも話してくれた。住所が古城のこの高台は、常長とはどうも関連がなさそうである。

熊野神社を辞去して国道四号に戻る頃には、雪も止んで日が差してきた。やがて「小山」のバス停が見えてきた。村の統廃合で行政上の地名が小山でなくなったのに小山の名が付いているとは、地元の人たちに旧地名小山村への愛着があるからなのだろう。小山バス停を前にして、常長に一歩近づいている感慨を覚えていた。

国道四号を横切る明後沢川の袂に、明後沢遺跡の標柱が立っていた。明後沢遺跡は、北上川に注ぐ胆沢川と衣川が作る一辺二〇キロの扇状地の下辺中央に位置しており、蝦夷の拠点である胆沢郡と江差郡を俯瞰できる高台にあって、出土する大量の古瓦群から、東北辺境征夷開拓の拠点に造立が勅裁された覚鱉城の跡ではないかと学術報告がされたという。

宝亀十一年（七八〇年）に勅裁を得た陸奥出羽按察使紀広純が覚鱉城造営のために国府多賀城を出陣、北進して最前線基地の伊治城に入るが、帰属していた俘囚砦麻呂に殺害され、多賀城も襲撃焼討ちされてしまう。

延暦八年（七八九年）に征東大使紀古佐美が伊治城を奪還するが、胆沢子波攻略戦で惨敗。延暦十三年に征夷大将軍大伴弟麻呂と副将軍坂上田村麻呂がようやく蝦夷征討に成功するが、その裏に最前線基地として覚鱉城の造営があったのではといわれ、まさに幻の古城である。

常長の時代から更に八百年も遡る古代ロマンに夢を馳せ、標柱の「この先九〇〇m」の表示に、綺麗に整備された沢沿いを上ってみたが、丘陵に囲まれた田圃ばかりでそれらしい遺蹟跡が見当たらない。常長の本知行地である前沢古城の探訪が今日の目的で、時間も限られている。後ろ髪を引かれる思いで明後沢遺跡探索を断念した。

古い町並みへ分岐した旧街道が国道四号に合流する古城郵便局の隣に、常長の屋敷跡ではないかという淡い期待を抱いていた曹洞宗大林寺の石柱が見えてきた。

段差のない長い石畳の参道を登り、山門から後ろを振り返ると、眼下に扇状地の胆沢平野が広がり、エグネと呼ばれる防風雪林に囲まれた屋敷が点在する散居集落の風景が絵画のようである。常長は、この美しい景観に帰国後の病身を癒していたかもしれない。

立派な鐘楼門を潜り本堂を訪ねると、住職はこれから葬儀があるんだが、と云いながら突然の来訪者に快く会ってくれた。下伊沢小山村が支倉常長の知行地で、常長の屋敷跡やお墓を訪ねてやって来た旨を伝えたが、そういった伝承を自分は知らない、明治三〇年代に寺が火災に遭って今は何も史料が残っていない、いつかの法要の席で、そういった話を訊かれたことはあったが、その時もそう話した、と申し訳けなさそうに語ってくれた。

埼玉から遥々やって来ての無収穫にすっかり打ちひしがれてしまったが、ここまで来たら前沢古城にもう一軒あるお寺まで足を延ばしてみようと気を取り直した。国道四号を南へ一キロ、大儀寺も立派なお寺さんだった。

石段を登り山門を潜り、本堂で住職にお会いできたが、支倉常長については何も知らないし、伝承もないと思うという。ささやかな伝聞だけでも、という淡い期待も虚しく打ち消されてしまったが、伝承らしきものさえ何もないということを、自分の目と耳と足で現地のお寺さんを二軒も回って確認できただけで良しとしよう。

帰宅後に「前沢町史」で両寺の創建時期を調べてみると、大林寺が宝徳元年（一四四九年）の創建で現在地に移ったのが天文五年（一五三六年）、大儀寺は大永二年（一五二二年）に現地に創建とあり、いずれも常長時代の一世紀前で、常長の屋敷跡の可能性はなさそうである。

小雪が再び舞い始めたが、常長の終焉の地かもしれない下伊沢小山の地を歩けている昂揚感に、傘を持つ手の凍えも気にならない。やがて雪が本降りとなり、横殴りで冷たく頬に吹き付けてきた。駅までの近道と思しき白銀の畦道を、ひたすら急ぐこと三〇分、陸中折居駅で予定していた水沢駅行きに辛うじて間に合った。

せっかく水沢まで来たのだから、地元の図書館に行けば、地元ならではの何かしら情報があるかもしれない。

水沢駅から水沢市図書館まで雪降り頻る中を歩くこと三〇分、ようやく訪ね当てた図書館の受付で、郷土歴史研究家の常長に関する著書や資料の検索をお願いした。

若い職員さんが献身的にパソコンで検索してくれている間、書架の歴史書を物色していると、後藤寿庵に関する文献は沢山あるのですが、と資料二点を持ってきた。

一点は、地元の広報誌「広報胆沢（昭和五九年九月号）」である。「ふるさと紀行」に「いさわの支倉常長」と題した東北大学名誉教授山形敞一氏との対談記事が掲載されており「常長の領地が小山にあり、彼が死んだのも小山という注目すべき説を発表されています」とあった。

そして「常長がローマに出かける前に胆沢町の小山におよそ五二〇石の領地を与えられました」「大村の牢獄に入れられた宣教師ソテロがローマにあてた手紙の中に常長は自分の領地で最後を遂げたと書いてあるのです」

「常長の息子の時代に家事取り締り不行き届きで、お家断絶に処されました」「キリシタンであること、お家断絶という処分であったために彼の足跡はみな隠滅されてしまったのです。しかし三二年間も支倉一族が住んでいたのであるから、小山のどこかに屋敷跡があると考えています。長崎の例からみても今はお寺になっているところが最も可能性が高いと考えられます」と結んでいた。

もう一点は、仙台に本社がある河北新報の平成五年十二月十二日の新聞記事である。「胆沢・八幡神社の三基の五輪の塔は、常長の供養塔」という表題で、水沢市に住む常長研究家の切田末良氏が「小山地区ゆかりの人で五輪の塔を建ててもらえるほどの身分だったのは、小山地区を治めたことのある常長にほかならない」と根拠を示して研究成果をまとめたとあった。国立国会図書館で読んだ著書「支倉常長と胆沢町―常長の終焉地を探る―」が発刊される前年の報道記事だった。

夜の帳が下りて仙台に戻る車窓は漆黒の世界である。車内で水沢市図書館で調べてもらった資料を読み返すうち、切田氏を報じた新聞記事の後段が気にかかった。

「昭和五九年に山形敞一東北大名誉教授が「仙台郷土研究」に発表した「常長終焉の地は小山村」とした説に注目していたところ、六三年に小山地区民から「常長ゆかりの塔がある」と地区の言い伝えなどを聞き、宮城岩手両県内に足を運んで常長供養塔説をまとめた」と切田氏が語っており、切田氏の八幡神社五輪塔説が、山形教授の常長小山村終焉説に誘引されたという下りである。

八幡神社のある胆沢小山が、常長が知行された下伊沢之内小山村ではないことを、私は奥州市の学芸員さんに教えてもらって知っているが、山形教授や切田氏が常長の墓を探していた当時は、元禄二年に小山村と上野村が合併されて明治八年の村統廃合で小山村が分割されていたことが一般には知られておらず、二人は胆沢町小山が常長の知行地で終焉の地だと思い込んでいたのである。

前年に発見された前掲の常長供養塔説をまとめた」と切田氏が語っており、切田氏の八幡神社五輪塔説が、山形教授の常長小山村終焉説に誘引されたという下りである。

八幡神社のある胆沢小山が、常長が知行された下伊沢之内小山村ではないことを、私は奥州市の学芸員さんに教えてもらって知っているが、山形教授や切田氏が常長の墓を探していた当時は、元禄二年に小山村と上野村が合併されて明治八年の村統廃合で小山村が分割されていたことが一般には知られておらず、二人は胆沢町小山が常長の知行地で終焉の地だと思い込んでいたのである。

前年に発見された前掲の常長知行状をもとに、権威ある山形敞一教授が、常長の屋敷跡が小山村のどこかにあり、お寺になっている可能性があると語ったことから、胆沢町小山で常長の墓探しがブームとなり、他所で見つけた延宝四年と刻字された五輪塔を、胆沢小山の八幡神社の裏に運び込んで、常長の墓発見を捏造したのではないか、という疑念が浮かんできた。

もしかしたらその五輪塔は、常長の知行地だった前沢古城で見つけた本物だったかもしれない。胆沢町小山にないと常長の墓にはならないと考え、あえて胆沢町小山の八幡神社裏に移したということはないのだろうか。

もし本物だったらと思い始めると、はるばる奥州市までやって来て、胆沢小山の八幡神社に行かずに、このま

ま埼玉に帰るわけにはいかない、無駄足になってもいい、奥州市に引き返して、胆沢小山の五輪塔をこの目で確かめてみなければ、という思いが強くなってきた。

明日午前に予定していた松島瑞巌寺は次の機会にして午後二時のシンポジウムまでに仙台に戻ればいい。仙台駅で翌朝の仙台水沢往復の新幹線切符を急遽手配した。

〈2〉奥州市胆沢区小山の八幡神社

翌朝八時仙台発の東北新幹線に乗車、一ノ関駅で東北本線に乗り換えて水沢駅に着いたのは九時二〇分、胆沢地方は、昨夜の大雪で一面の銀世界になっていた。

胆沢小山の八幡神社は、水沢駅から南西に十一キロの山間地、自動車免許は後期高齢を機に返戻してしまい、レンタサイクルが唯一の足だが、この積雪ではかなり厳しい。しかしここまで来て諦めるわけにはいかない。

駅から一〇分のプラザアテルイで、胆沢小山までレンタサイクルを申し出ると、案の定、職員さんから雪の山道を自転車は危険だと断られたが、行けるところまで自転車で行ってあとは歩きますからと、強引に説得した。

車の往来激しい国道四号をひたすら南に自転車を走らせた。幸い雪は止んで、国道の積雪も解け始めていたが、トラックに雪解けの泥水を頭から浴びられながら、側道を慎重運転に徹した走行で約五キロを四〇分、昨日来た折居交差点を西へ右折して山道に入った。

急な上り坂は、自転車を下りて路肩の新雪を踏み締め、下りは轍の跡を注意深く滑走、山越えのアップダウンを繰り返しながら、三キロほどで山間を抜けると視野が広がり、胆沢小山の扇状地は、美しい白銀の世界である。

南の前沢方面へ左折、雪原の道端に一〇基程の苔生した墓石群があり、傍らの胆沢町民劇場「人首の笛の音」の立看板に「この地に、日照りや洪水に悩まされた農民のために大きな堤を築いた男と、村のために人柱となった娘の悲しい物語が伝えられている。人柱になる時に娘が吹いていた笛の音が風にのって聞こえてきませんか」とあった。小雪舞う風の音に耳をそばだてながら、二キロ先の五叉路を西へ右折、八幡神社の森が見えてきた。

新雪に足跡を印ながら杉林に囲まれた八幡神社の裏手に入った。杉の枯枝や落葉を覆う新雪をサクサクと踏み付けて二〇mほど、杉木立に囲まれた墓域に、代々の神職や家族の墓石であろうか、大小三〇基ほどが三列に並び、最前列左手に、切田未良氏の写真で脳裏に刻まれていた高さ五〇cm程の五輪塔が三基並んでいた（次頁）。

ついに見付け出した興奮に打ち震えた。白雪を被る五輪塔の前にしゃがみこみ、合掌しながら、あなたは誰ですか、と問いかけてみた。三基の真ん中が倒れていた。左側の五輪塔は、空風火水地の五輪が揃っており、水輪に延宝四年、基礎の地輪に孝子敬白の刻字があるという。

案内板もなく、倒れたまま放置された現状は、切田氏の常長の墓説が、現地では無視されている証しなのだろう。下伊沢の小山（現前沢古城）にあった常長の五輪塔をこの地（現胆沢小山）に移されたのではと考えたのは私の妄想なのだろうか。しばし自問してみた。

森の中の八幡神社は、古色蒼然とした佇まいである。説明板に「当社には、永保三年藤原清衡の社領寄進、寿永元年藤原秀衡の焼失社殿の再建、永禄八年（一五六五年）柏山氏の社領寄進再興、寛永十六年（一六三九年）武田五郎左エ門による勧請等の事蹟が伝わる。現社殿は延宝五年（一六七七年）に再興したもの」とあった。

胆沢地方は、朝廷の東北征討に抵抗した蝦夷の拠点であった。「胆沢郡誌」によると、当社は、延暦二〇年（八〇一年）に坂上田村麻呂が、東夷悪路王高丸征伐のとき、伊沢郡徳岡郷の勝地を選び、山城国の石清水八幡宮を鎮祭、のち康平五年（一〇六二年）に源義家が安倍貞任討伐を祈願し成就なって宝剣を奉納したとある。

文治五年（一一八九年）に源頼朝が藤原泰衡征伐に下向した際、和田義盛に社参奉幣を命じ、奥州第二殿の号を賜わり屈指の大社となった。奥州合戦の功で奥州総奉行に任ぜられた葛西氏の晴重の代に、永正十一年（一五一四年）八幡宮神領が没収されて衰頽するが、後に柏山伊勢守が寄進保護したという。

「胆沢町史」によると、社殿を再建した武田五郎左エ門は、武田信玄の父信虎の五男信次の孫貞信とある。

信玄の弟信繁に子がなく養子となった信次は、信繁が川中島の戦いで討死、武田氏が滅亡すると、会津から米沢に流転する。信次の長子重次が政宗に仕えて、慶長初めに屋敷奉行などを勤めて千石の禄を受けたという。

奥州市胆沢区小山八幡堂の伝支倉常長の墓



武田重次の子貞信は、慶長九年に生まれ、元和三年（一六一七年）十二才で忠宗の小姓となり、胆沢郡上野原に百町歩を給され、寛永五年に目付役出入司を勤めた。

蝦夷の拠点である胆沢地方に、坂上田村麻呂が東奥鎮撫のため胆沢城を築き鎮守府を置いて勧進した鎮守府八幡宮が、寛永十四年に政宗の正室愛姫によって胆沢川大洪水で決壊した社地の修造と社殿の現在地に遷座されたが、愛姫は坂上田村麻呂の後裔、武田貞信も甲斐源氏の後裔である。愛姫の鎮守府八幡宮再建に倣って、寛永十六年に貞信も自領の八幡神社を勧請したのであろうか。

武家の本流といわれる清和源氏の系統が悉く絶えるなか、武田信虎の曾孫として政宗家臣となり、前九年・後三年の役の武神八幡太郎義家ゆかりの奥州胆沢の地に知行されて、源氏の氏神である八幡宮を歓請し得た貞信の万感の思いは如何ばかりだったろう。

貞信の父重次は、政宗に仕えて佐々と改称し小山徳岡を領しており、常長が知行された下伊沢小山村の隣地である。常長は、武門の棟梁たる源氏の甲斐武田の末裔と交欲しながら胆沢の地を駆け巡っていたかもしれない。

八幡神社の説明板に、現社殿が延宝五年に再興されたとあったが、境内裏手の五輪塔に延宝四年の刻字があり、現社殿の再興者が五輪塔を建てたのかもしれない。果たして誰が八幡神社を再興し五輪塔を建てたのだろうか。

「胆沢史談」によると、武田五郎左衛門は、寛永十八年（一六四一年）十九年の飢饉による困窮救助手段として、寛永二〇年に知行地を返納して、登米郡（赤生津村）に移住しており、この地は寛永二一年に水沢伊達家三代宗直の知行地になっている。現社殿が再興された延宝五年に、武田五郎左衛門はここにはいなかった。

「胆沢町史」に、本殿の壇下から出た古い棟札「御胸札奉改納」に「領主武田貞信が寛永十六年に建てた八幡宮はその後廃れて、宮守の大宝院に一任し合せまつる。元禄二年に調べたところ、延宝五年に二度建立しているが棟札がないので、上野村有志達が改めて棟札を書いて納めた」とあり肝入らの名が列記されていたという。

延宝五年に八幡神社を再興したのが、宮を預かっていた大宝院と上野村の有志達だったとすると、延宝四年の五輪塔も、彼らが建てた供養塔だったかもしれない。

支倉家を再興させて黒川郡大谷村に知行された常信が北に七六キロも離れた、しかも他人の知行地になってしまった旧知行地に、祖父常長のため三基の五輪塔を建てて供養するだろうか。その五輪塔を胆沢小山に移したのではとも考えてみたが、八幡神社の再興に関わった地元有力者たちの五輪塔だった可能性を考えると、かなり無理な推論だったようである。八幡神社から水沢駅まで十二キロの白銀の胆沢平野をひたすら白転車を走らせた。

〈3〉支倉常長終焉の地を求めて

『宮廷から三ミリオ離れたところとは』

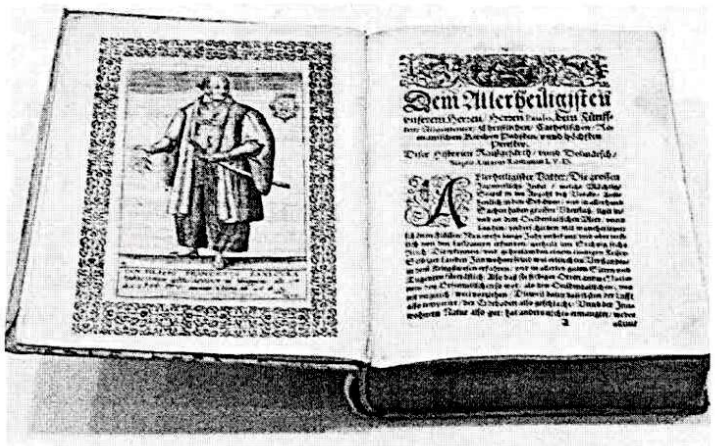
支倉常長の墓を訪ねて、光明寺、円福寺、大郷町、奥州市を巡ってきたが、これという確信を得られず、往生際の悪い自分に呆れながら、これまで収集してきた資料を整理するうち、見過ごしてきた手懸りを見つけた。

「仙台市史特別編8」第Ⅲ部「論考」の元仙台市博物館長佐藤憲一著「大使、支倉常長について」の中にあった。

『問題は、父の罪に連座して追放された常長が大使抜擢と引き換えに回復した知行地がどこであったかである。アマーティ著「伊達政宗遣欧使節記」に、次のような興味深い記事が載っている。「国王（政宗）は、支倉の妻と子どもたちに、彼らが宮廷から三日もかかる遠隔地にいるので、彼の領地を出て従者と共に首都に来るように命じた。そして収入も従者も町の近くで所有できるように、宮廷から三ミリオ離れたところに、屋敷と二つの村落を与え、そこで好きなように暮らせるようにした」

三日もかかる遠隔地とは本知行の小山村と考えられるから、問題は宮廷から三マイル離れた村落の場所である。この場所について、常長の父常成の知行地とされる黒川郡下ノ原村（宮城県黒川郡大和町吉田字下原）ではないか、とする説がある（佐々木一九九三）。切腹を命じられた常成の所領は当然没収された。その没収地を常長に与えたのではないか、というのである。下ノ原に隣接する西風には支倉六右衛門の墓と伝えられる一七世紀前半と推定される五輪塔が残っている。断定は避けねばならないが、一つの可能性として注目してよいと思う』

アマーティ著「伊達政宗遣欧使節記」仙台市博物館蔵



伊達政宗遣欧使節記（ドイツ語版）

Document of DATE Masamune and His Mission to Rome (German Version)

佐藤憲一氏が引用されたアマーティの著書は、マドリードからローマまで使節団に同行した通訳のイタリア人アマーティにソテロが話した内容が中心に綴られており、政宗に関して誇張した話もあり、割引いて読まなければならないが、常長最後の知行地を示唆する記述は、具体性があり、信憑性は高そうである。

予懸りの一つは「政宗が常長の妻子に三日もかかる遠隔地を出て首都に来るように命じた」という下りである。当時の家臣は必ずしも知行地に住んでいなかったといわれるが、常長の家族は、知行地の小山村に住んでいた、帰国した常長は妻子が移住した屋敷に戻ったに違いない。

もう一つは「宮廷から三ミリオのところに屋敷と二つの村落を与えた」という下りである。村落を与えたとは、本知行地以外に新たに加増されたのだろうか、小山村に代えて仙台城から三ミリオに領地替えされたのだろうか。

常長死去の翌元和八年（一六二二年）二月の御中屋敷御長屋之積状に「支倉勘三郎　六拾貫」とあり、慶長十三年に常長に知行された六〇貫が、嫡男の勘三郎常頼にそのまま引き継がれていたことが分かる。

もし二つの村落を加増されたのであれば、六〇貫プラス二村落になるが、常頼が引き継いだ知行高は六〇貫のまま、常長は下伊沢小山村に代えて仙台城から三ミリオに二つの村落六〇貫が知行されたのであろう。

帰国した常長が住んだのは、旧領の下伊沢小山村ではなく、仙台城から三ミリオに領地替えされて家族が待つ屋敷に違いない。そこが常長最後の知行地であり、常長終焉の地であり、そこに常長の墓があるのかもしれない。

仙台城から三ミリオ離れたところとは、どこだろうか。仙台市史の註24に、ミリオはマイルのこと、一ミリオは約一・六キロとあり、三ミリオは約五キロである。

政宗の仙台開府から七〇年後の寛文年間作成された仙台城下絵図で仙台城下町の広さを測ると、仙台城から半径三・五キロの円内に収まるから、五七年前の常長の時代では、仙台城下の端から更に二キロ以上外側になる。

遣欧使節の出発直前に常長に与えられた新知行地は、東・西・南・北、いずれの方角の五キロ先なのだろうか。

佐々木和博氏が想定した黒川郡大和町吉田、実父常成が政宗の領地替え時に拝領した黒川郡大森村、その後に移住した富谷下ノ原村、義弟常次の知行地であり孫常信が支倉家再興時に知行された黒川郡大谷川内村、いずれも仙台城から北へ約二〇キロ、十三ミリオにある。

政宗が仙台城から三日もかかる遠隔地から、仙台城に三ミリオの近くに住まわせたということは、慶長十三年に常長が知行された岩手県下伊沢小山村から、南の仙台城へ向かう直線上の仙台城寄り五キロの地点、と考えるのが自然だろう。

『仙台市泉区の七北田川流域』

岩手県胆沢地方から宮城県中部の黒川郡を経て更に南へ下がると、仙台城まで七・五キロの地点に、西の泉ケ岳を源流に東の仙台湾に流れ込む二級河川の七北田川があった。七北田、ナナキタ、懐かしい名前である。

中学時代に吹奏楽コンクールで全国を目指して競い合った相手が七北田中学だった。我が大河原中学が優勝して名古屋の全国大会に出場できたが、田舎中学と見縊っていた七北田中学の美しい旋律は、未だに忘れられない。

その七北田町から西へ一〇キロほど上流に遡ると、その支流になんと長谷倉川の名が付いていた。遠藤周作の小説「侍」で、主人公支倉常長が長谷倉殿の名前で登場してくる。支倉姓の元になった川崎町支倉の地名も、戦国時代には長谷倉・馳倉とも表記されていたという。

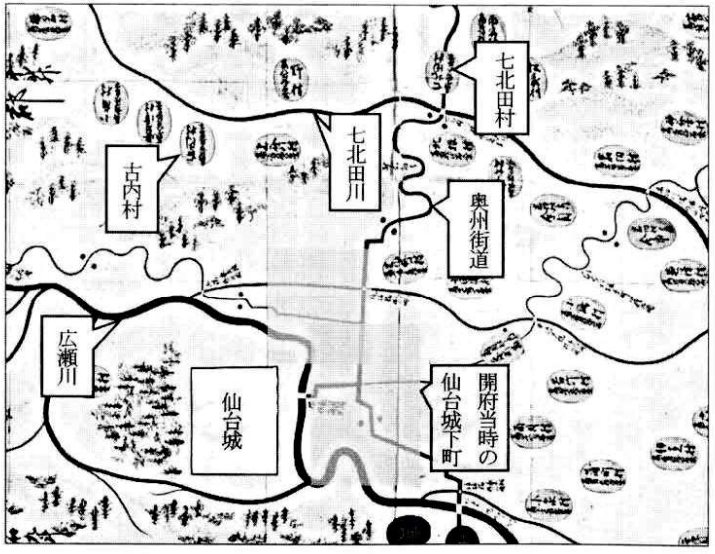
そして長谷倉川の上流二キロの山中に鎮座する神社が鷲倉神社である。長谷倉と鷲倉の地名は、同じ韻を持つ支倉との繋がりを連想させるではないか。支倉常長に与えられた新知行地がここだと教えているようである。

奈良時代の奥州街道は、多賀城から七北田川に沿って北西に向かい鷲倉の下を北上しており、中世時代には、仙台荒巻から上谷刈、七北田川に沿って野村、根白石を経て大和町宮床に抜け黒川に向かう奥州山道があり、山中の長谷倉川沿いは、往年の街道筋だったという。

国立公文書館蔵「陸奥国仙台領絵図（天保九年）」に当時の仙台藩の村落の分布をみると、仙台領の中央部を、黒川郡五〇箇村が東西に帯状に並び、その南側に宮城郡九〇箇村が七北田川流域に描かれていた。

奥州街道の西側の七北田川南岸に、東から上谷刈村、

「陸奥国仙台領絵図（天保９年）」国立公文書館蔵



古内村、実沢村、小角城、根白石村と並んでいるが、そこから仙台城下入口の北山五山まで約四キロの間に、一つの村落も描かれていない。仙台城から北へ五キロに常長に与えられただろう村落はなかったのだろうか。この空白地帯は、藩直轄の狩場と御林で、七北田川流域の村落と仙台城下をつなぐ道が通っていただけだという。

思えばミミリオの距離は、ソテロが実測した訳ではないだろう。ソテロはアマーティに常長が政宗にいかに厚遇されていたかを吹聴するため、距離数を少し騙っていたかもしれない。仙台城から七北田川南岸までの四・七ミリオは、三ミリオと五十歩百歩ではないだろうか。

『古内氏と支倉氏』

七北田川中流域の南岸段丘に拓かれた耕地に連なる村落の中に古内村があった。現代の地図を重ねてみると、県道二六四号（仙台大衡線）が古内村を抜けて南下、荒巻を経由して古海道と呼ばれた北山の輪王寺脇の街道から仙台城下に入り、支倉通りから広瀬川を渡り川内に通じており、常長の新知行地を求めた直線と重なってくる。

古内という地名が目に付いたのは、常長の孫常信が支倉家の再興を請願した相手奉行が、古内重広と古内志摩だったからである。もしかしたらその古内氏の領地だったのではないか、古内と支倉は繋がっていたのかもしれない。仙台市のＨＰを見ると、私の勘は当たっていた。

古内村にある賀茂神社が古内志摩の屋敷跡で、隣の慈眼寺に志摩一族の墓があり、七北田川を西に五キロ上流の根白石村の大満寺に古内重広の墓があった。

古内氏は、源義家の孫佐竹義信を祖とする下総国豊田郡古内村の地頭古内義武の子孫で、弘治元年（一五五五年）に奥州へ下り、頼朝の奥州合戦の功で千葉胤通を祖に宮城県中南部を支配していた国分氏の十四世宗政に仕え、国分上谷刈に住んで古内村の名が生じたといわれる。

宗政の長子盛氏に子なく、政宗の祖父晴宗が五男盛重に国分氏を継がせ、国分氏は伊達氏に臣従するが、盛重が甥の政宗と対立して出奔、国分氏は滅亡し残留した末子重広が、姉の夫古内実綱の養子となり古内家を継いだ。実綱の次男義実の嫡男古内志摩が、後に寛文事件で原田甲斐刃傷事件の唯一の生き残りとなる。

宗政の次男盛基は、国分氏から分家して横澤将監を名乗り、賀茂神社の北西二・五キロの実沢村に居したが、国分氏の没落で伊達氏に仕え、後に常長をメキシコに迎えに行き洗礼を受け帰国したサン・ファン号船長である。

国分氏の一族や旧臣が所領を連ねる七北田川流域は、常長が知行された下伊沢小山村から仙台城に参勤する道筋に当たっており、常長が古内重広や実綱、横澤将監らと面識更には交流があったことは想像に難くない。常長もこの界隈に新知行地を与えられたのかもしれない。

常長最後の知行地を古内村近くに想定する仮説の裏付けに、古内氏と支倉氏の接点を調べると、政宗に常長を遣欧使節に推挙したといわれる後藤寿庵の存在があった。

後藤寿庵顕彰会の関係略年表に「元和一〇年に寿庵が政宗の棄教指示を拒絶して福原を退去、寛永二年に横澤将監が寿庵の領地を預かり、寛永十三年に寿庵の旧領が玉虫次郎左衛門に割付け、寛永十七年（一六四〇年）に古内伊賀が、福原を知行された」とある。

胆沢町史にも「古内伊賀、胆沢郡上野村、南下葉場村（南都田）塩竈村（水沢）に知行地賜わる」とある。

寿庵の去った水沢に知行された古内伊賀は、後に寛文事件の原田甲斐刃傷事件で生き残りとなる古内志摩の実父義実で、義実の妻は、常長をメキシコに迎えに行った船長横澤将監の娘である。寿庵が信仰を守るため百名の家臣と秋田に逃亡、義実は残されていた寿庵の旧家臣八七戸を足軽に編入させて福原足軽組を組織したという。

五年前に東北のキリシタン殉教地を訪ねて、会津若松、米沢、仙台、そして奥羽地方のキリシタンの聖地と呼ばれた水沢の福原を散策した。

禁教下でマリア像を隠して礼拝した毘沙門堂と寿庵廟を見学した後、南に広がる稲田の農道を四〇〇ｍ、常長が帰国した年に仙台藩最初の殉教があり、翌年には更に五〇～六〇人が火刑されたクルス場橋に足を延ばした。

クルス場橋に隣接する福原墓園の案内板に「この墓地は昔からクルス（十字架）場と呼ばれたキリシタン信者の墓所で、寿庵が福原から逃亡して残された家臣たちは、改宗を余儀なくされ、時宗の長光寺の檀家となり、仏教に帰依させられた人々は、厳禁された宗義を憚ってか、黒州婆の文字を使用するようになった」とあった。

長光寺の時宗は、鎌倉仏教の浄土宗一派で、阿弥陀仏への信心に関わらず念仏を唱えるだけで極楽浄土へ導かれるという教義である。念仏と称してアーメンを祈る隠れキリシタンには格好な宗派だったのだろう。

後藤寿庵の去った水沢の城主になった古内義実は寿庵の残したキリシタン家臣を救済し、その子古内志摩はキリシタン嫌疑で断絶した支倉家の再興に尽力していた。

かくして後藤寿庵→古内義実→横澤将監→常長→後藤寿庵は、点と点が線となり輪となった。常長最後の知行地が古内周辺と考えたのも満更的外れではなさそうだ。

常長最後の知行地が仙台城から北へ五キロの郊外だったとすると、後に支倉家の旦那寺となり嫡男常頼が火葬された北山の光明寺は、その知行地から二・五キロの仙台城下の入口にあり、まさに最寄りのお寺さんである。

常長は、最後の知行地内か、最寄りの光明寺のどこかに、人知れずキリスト者として眠っているのかもしれない。私の常長を訪ねる旅は、まだまだ終わりそうにない。

明治時代の著述者　渋江保の一生（その二十三）

山本勉

第十期　大学館時代から晩年⑥（東京）一九〇三年（明治三十六年）～一九三〇年（昭和五年）四月

渋江思想変遷年表の視点

渋江は、幼少期に福澤諭吉の著書と出会い、西洋の書籍を翻訳する中で自由民権思想に開明し民権家として活躍するが、多くの民権家が国権へと思想を変節する中でエログロ売文家として怪しげな神秘主義にとりつかれ、晩年「挫折」していった。本稿においては、渋江がなぜ他の民権家とは異なり「挫折」の道を歩むに至ったのか、「渋江の著書の変遷と出版界の動向」・「渋江の経歴と渋江思想の変遷」・「民権家の思想変遷」を当時の政治・経済や社会状況を俯瞰しながら、渋江の一生を明治・大正思想史に位置づけ年表を作成した。いずれ渋江思想を貫く基調を明らかにしたい。

年齢	時代	滞在期間	著書の変遷と出版界の動向	民権家の思想変遷	渋江の経歴と渋江思想の変遷	政治・経済・社会の変遷
0～11歳	幼少時代（江戸）	1857年（安政4年）～1868年（慶応4年）		(1) 福澤諭吉 ①（民権運動期）：交詢社を創立、私擬憲法を発表する等民権運動を展開 ②（民権運動後期）：『時事新報』の社説で国権論的主張を展開、対清主戦論者 (2) 中江兆民 ①（民権運動期）：自由民権運動の理論的指導者 ②（民権運動後期）：国権論的な国民同盟会に参加 (3) 板垣退助 ①（民権運動期）：自由民権運動の指導者 ②（民権運動後期）：伊藤内閣内相、隈板内閣内相を歴任、政治家として活躍 (4) 徳富蘇峰 ①（民権運動期）：当初、板垣退助らと交わり自由民権運動に参加 ②（民権運動後期）：日清戦争を境に国家主義に転じる。『大日本膨張論』を展開 1894年（明治27年） (5) 後藤象二郎 ①（民権運動期）：板垣退助と自由党を結成し、大同団結運動を指導 ②（民権運動後期）：政治家として山県有朋内閣や松方正義	○1857年（安政4年）7月26日、渋江抽斎七男として江戸に生まれる。○1868年（慶応4年）に本国弘前へ転籍	戊辰戦争、江戸城無血開城
11～14歳	弘前時代（弘前）	1868年（明治元年）～1871年（明治4年）	○太田雄三『英語と日本人』には「明治維新後の文明開化の高まりにつれて英語学習熱も自然していった。明治四、五年ごろは英語熱が一つのピークに達した時期であったようだ。」とある。○山岡洋一『翻訳についての断章15年に数千点明治初期の大翻訳時代』には1868年から1882年の15年間で翻訳書が1869点、一年間でざっと100冊余の本が翻訳されていることが指摘されている。○長山靖生『日本SF精神史』には、明治期のSF小説には多くの政治小説が出版されており、民権期や国権期を題材にとったSF小説が出版されていることを指摘している。		○福澤諭吉の『西洋事情』をとおして西洋の学問に興味を抱き、民権思想が芽生える。○母を弘前に残し単身東京へ赴く。○尺振八の共立学舎で英語を学ぶ 1871年（明治4年）5月 ○大学南校に籍をおきフルベッキに英語を学ぶ 1871年（明治4年）6月	
11～18歳	第一次修学時代（東京）	1871年（明治4年）～1875年（明治8年）	『米国史八巻』や『授業必携二巻』等、英学を志した渋江の決意や教育への関わりを示す書や国会や選挙制度等を著したエモスの『英国憲法論』も執筆しており、民権思想萌芽の書が見られる。			
18～22歳	浜松時代（浜松）	1875年（明治8年）～1879年（明治12年）			○浜松県賜養学校赴任 1875年（明治8年）○慶應義塾に入学、キーリング・ラムパードに英学を学ぶ 1879年（明治12年）	民撰議院設立建白書 1874年（明治7年）

22～24歳	第二次修学時代（東京）	1879 年（明治 12 年）～1881 年（明治 14 年）		内閣、伊藤博文内閣で活動 (6) 植木枝盛 ①（民権運動期）：自由民権運動の理論的指導者 ②（民権運動後期）：婦人解放・風俗改良などの啓蒙活動 (7) 田口卯吉 ①（民権運動期）：嚶鳴社設立に発起人として参加し演説活動を行う。 ②（民権運動後期）：日清戦争では積極的に政府支持に回った帝国財政革新会を結成。 (8) 内藤魯一 ①（民権運動期）：民権運動の指導者として活躍し、「三河板垣」の名前で呼ばれる ②（民権運動後期）：愛知県議会議員・衆議院議員等を歴任し政治家として活躍 (9) 馬場辰猪 ①（民権運動期）：中江兆民らと自由民権運動を日本に紹介、交詢社活動に参加 ②（民権運動後期）：渡米し全米各地で講演や明治政府を批判する論説を発表するなど精力的な活動を続けたが若くして客死する。 (10) 内村鑑三 ①（民権運動期）：日露戦争において非戦論を展開 ②（民権運動後期）：無教会主義キリスト教を唱道する。	慶應義塾卒業 1880 年（明治 13 年）	国会期成同盟結成
24～25歳	宝飯中学校時代（豊川市）	1881 年（明治 14 年）～1882 年（明治 15 年）	開拓使官有物払下げ事件批判（明治 14 年）や主権論普通選挙論争（明治 15 年）を新聞紙上に掲載		◯宝飯中学校赴任・開拓使官有物払下げ事件を巡る記事を投稿（函右日報明治 14 年 10 月 7 日付）◯東京横浜毎日新聞、主権論普通選挙論争（明治 15 年 1 月 18 日～24 日の社説に 6 回に渡り掲載）◯初代愛知県議会議長・進取社副社長、渋江盟友、武田準平暗殺される（明治 15 年）◯三河地域で演説会を行う。◯交詢社回状の差出人に渋江保の名前が見られる 1882 年（明治 15 年）	◯開拓使官有物払下げ事件・明治十四年の政変・秋田事件 1881 年（明治 14 年） ◯福島事件 1882 年（明治 15 年）
26～27歳	東京横浜毎日新聞時代（東京）	1883 年（明治 16 年）～1885 年（明治 18 年）			慶應義塾教師	◯松方デフレにより 1883 年頃より中小資本家や地主・農民は深刻な不況の中で生活破綻に追い込まれ農村は貧窮化する。 ◯高田事件 1883 年（明治 16 年） ◯群馬事件・加波山事件・秩父事件・飯田事件・名古屋事件・自由党解党・立憲改進党、大隈重信・河野敏鎌らが脱党し活動を停止 1884 年（明治 17 年）
28～33歳	静岡時代（浜松市・静岡市）	1885 年（明治 18 年）～1890 年（明治 23 年）			◯体調不良のため現静岡県浜松市天竜区春野町転籍、英学研究所を開設し英語教育に取り組む。1885 年（明治 18 年）◯政談演説を見附宿（現静岡県磐田市見附）で行う。静岡県静岡市転籍、	

28～33歳	静岡時代（浜松市・静岡市）	1885 年（明治 18 年）～1890 年（明治 23 年）	暁鐘新報（旧東海暁鐘新報）編集主任・主筆として才筆を振るう。1887 年（明治 20 年）	(11) 島田三郎 ①（民権運動期）：『横浜毎日新聞』を創刊、主筆として活躍し自由民権運動を指導。渋江は 1882 年（明治 15 年）の東京横浜毎日新聞と東京日日新聞における主権論・普通選挙論争において島田に加勢している。 ②（民権運動後期）：足尾銅山鉱毒事件や労働問題で活発な言論活動を行う。 (12) 大井憲太郎 ①（民権運動期）：民権運動の急進派の指導者として活動、中江兆民たちと再び旧自由党勢力の糾合を目指して立憲自由党を結成 1890 年（明治 23 年） ②（民権運動後期）：普通選挙運動に取り組むと共に晩年は対外強硬論者として活動した。 (13) 頭山満 ①（民権運動期）：自由民権運動参加、向陽社・玄洋社結成 ②（民権運動後期）：国権論へ転じ日露開戦主張、大アジア主義を唱える (14) 沼間守一 ①（民権運動期）：嚶鳴社を設立し自由民権・国会開設を主張、横浜毎日新聞を買収し東京横浜毎日新聞本局開局、自由民権家として官有物払い下げ反対の大演説会を開き東海地方や東北地方を遊説	静岡英語専門学校にて英語教授 1886 年（明治 19 年）◯東海暁鐘新報編集主任として記事を執筆。暁鐘新報（旧東海暁鐘新報）主筆として招聘される。静岡大務新聞には暁鐘新報購読の広告として、社主前島豊太郎・編輯人渋江保の名前あり（静岡大務新聞 11 月 30 日付）1887 年（明治 20 年）◯暁鐘新報号外号（12 月 20 日付）には、渋江の社説と中江兆民の「暁鐘新報発刊の規言が掲載されている。中江兆民は社主前島豊太郎並びに渋江の名前を上げ祝意を表している。しかし、渋江は三年後に迫った国会開設について簡単に触れる程度で過激な政府批判や民権への意気込みは感じられない。渋江は暁鐘新報主筆として活躍する傍ら、静岡高等英華学校・静岡文武館にて英語を教授する。静岡時代に山路愛山に英語を教える。その縁で後年、山路愛山主催の『独立評論』の執筆や訳読会で英語を教授する。1887 年（明治 20 年）◯中江兆民が静岡に立ち寄り渋江と面会する。渋江兄、渋江脩と静岡市に渋江塾（英語塾）開校 1888 年（明治 21 年）◯後藤伯（後藤象二郎）大懇親会の広告（暁鐘新報 1 月 4 日付）に渋江他 31 名連名で掲載 1389 年（明治 22 年）	◯大同団結運動・静岡事件 1886 年（明治 19 年）◯三大事件建白運動・保安条例、伊藤博文を中心に天皇主権憲法草案が秘密裏に検討される。1887 年（明治 20 年）◯大隈重信を第一次伊藤内閣の外務大臣として入閣させ立憲改進党を民権運動から離脱させる 1888 年（明治 21 年）◯大日本帝国憲法発布、2 月帝国憲法が発布された直後の 3 月突如後藤が黒田内閣に入閣し大同団結運動はその中心的存在を失い一挙に冷却する。1889 年（明治 22 年）

28～33歳	静岡時代（浜松市・静岡市）	1885年（明治18年）～1890年（明治23年）		②（民権運動後期）：嚶鳴社を率いて立憲改進党に参加、大隈・河野の脱党後も党を孤守、東京府会議長として大日本帝国憲法発布式典参列	○県下政治家の指名「学術的政治家　渋江保　票数16」と得票数の記載あり（暁鐘新報4月3日付）○博文館で執筆活動開始 1890年（明治23年）	
33～44歳	博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	○博文館での執筆が始まる。初期は教育関係や教養書・人物伝等を出版する。通俗教育全書は27冊を執筆しているが驚異的な執筆量である。○1894年（明治27年）から渋江の代表作『万国戦史シリーズ』の執筆が始まる。『万国戦史』は全24冊刊行されているが、そのうち10冊は渋江名義である。他筆者名義、実質執筆者が渋江の『万国戦史』が8冊あることが明らかになっている。更に渋江名義の『万国戦史』10冊の割注に27冊もの著作を訳了及び今後出版予定の著作がある。○『博文館五十年史』における『万国戦史』の評価は賛否両論ある。実は『博文館五十年史』は出版されたものの他に、2冊（①手書きでガリ版印刷のもの②墨書き直筆のもの）が確認できており、この2冊においては『万国戦史』24冊全てが列挙され渋江の名前が確認できているにも拘わらず、実際に出版された『博文館五十年史』には渋江の名前が確認できるのは一箇所のみで博文館への貢献度が非常に高いにも拘わらず冷遇されている。○出世の栞続が博文館での渋江の最後の著作となる。1901年（明治34年）○漢訳万国戦史は、早いもので、万国戦史第六巻『露		○頭部に大けがをし人事不省となる 1897年（明治30年） ○株式市場にて金を儲けるが、他人の負債に連判し困窮する。1897年（明治30年） ○著作活動の頓挫（抽斎没後、独立評論「風俗雑話」による）1897年（明治30年） ○易学の根本通明に入門 1897年（明治30年）9月 ○東京瓦斯株式会社の翻訳業務を担当する 1899年（明治32年）	○帝国議会開設 1890年（明治23年） ○日清戦争勃発 1894年（明治27年） ○日清戦争後、獲得した戦時賠償金による消費の拡大（戦後景気）1895年（明治28年） ○社会民主党結成（政府により即日結社禁止処分）1901年（明治34年） ○福澤諭吉逝去 1901年（明治34年）

33～44歳	博文館時代（東京）	1890年（明治23年）～1901年（明治34年）	土戦史』は『露土戦紀』として大同譯書局から1897年（明治30年）に、万国戦史第二巻『英清鴉片戦史』は『英人強賣鴉片記』として1898年（明治31年）に、出版されている。 ○押川春浪は大学館時代に冒険小説を次々と発表し、渋江の後釜として押川は博文館において『冒険小説』の主筆となり活躍した。			
46～73歳	大学館時代～晩年（東京）	1903年（明治36年）～1930年（昭和5年）	○『活動写真術自在』を大学館より出版し大学館での執筆を始める。1903年（明治36年）8月7日 ○大学館では「冒険もの」を中心に書き始め、「ゴシックもの」、数は少ないが「SFもの」、大学館時代の最後には「メスメリズム（催眠術）」の著書が見られる。○明治40年代、日本に欧米のスピリチュアリズムが伝わり、心霊関連書が多数出版されるが、渋江の著作の中にも「メスメリズム（催眠術）」の書籍が増えてきた 1909年（明治42年）○『以心伝心術独習』出版に際し、故武田準平との友情により著作名を「以心伝心」とした。○静岡時代の教え子、山路愛山の『独立評論』に渋江保談話掲載を始める 1913年（大正2年）○「私は従来著訳の書が既に百余種に及んだ、併し是れ等は概ね糊口の為書肆の需むるままに筆を執りたるも多く、言はば再び見るすら不快を感ずるのである（抽斎没後）」より生活のために執筆をしていたことがわかる。1916年（大正5年）○易学関係の書籍を1921年（大正10年）から執		○東京瓦斯株式会社の翻訳業務を解任される 1903年（明治36年）8月29日 ○大学館で著書執筆開始 1903年（明治36年） ○日露戦後不況で株投資に失敗して借財を重ね生活が困窮する。渋江は怪我や病気、生活上の失敗、東京瓦斯の翻訳業務の解任、博文	○幸徳秋水、堺利彦は平民社を興して週刊新聞『平民』刊行、非戦論展開 1903年（明治36年）○日露戦争勃発 1904年（明治37年）○日露講和条約（ポーツマス条約）調印 1905年（明治38年）○日比谷焼き討ち事件 1905年（明治38年）○明治四十年恐慌 1907年（明治40年）○1月、東京株式市場が大暴落、翌年にかけて企業の倒産や銀行の休業など経済恐慌が全国を襲う 1905年（明治38年）○足尾銅山暴動 1905年（明治38年）○警察犯処罰令（催眠術の乱用を禁止する条文追加）1909年（明治42年）○5月頃から大逆罪

		筆始めるが、渋江と易学との関係は 1897 年（明治 30 年）の根本通明に入門したことから始まる。文教大学には渋江の根本義塾（義道館）での講義筆記が残っている。根本義塾（義道館）で講義をし中国最古の詩集『詩経』の「周頌」を講義している。（藤元直樹『渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館』）。○根本との関係は、『独立評論』においても述懐している。○場所や期日は不明だが、『集英社の『易経下』』にエッセイとして「渋江先生は私に向かって、「このごろ京都大学出の若い人が『周易注疏』を読みに来ているが、あなたもいらっしゃいませんか」とおっしゃった。」との記述がある。○村岡功『渋江保の事績』には、「大正十二年頃声教社の創設者、漢詩人である上村売剣と相知るに及んで、売剣は三才社を創設して、「天地人」を創刊することとなり、彼は清朝諸家の経説その他の資料を訳注し、保は、周易史伝、象義史伝、象義を担当したともいう。大正十三年から昭和四年にかけて「周易史伝」「周易象義二巻」「周易占筮既筮法」「繋辞新釈」「説卦伝新釈」が成り、他に国会図書館蔵の「五行易活断」がある」とある。○渋江は神誠館からも易学関係の書籍を数多く出版しており息を引き取るまで易学に没頭した。○『万国戦史』全 24 四冊のうち 14 冊が漢訳され出版されている、このうち 11 冊は渋江が執筆した『万国戦史』である。	1903 年（明治 36 年）～1930 年（昭和 5 年）	大学館時代～晩年（東京）	46～73歳
		館での執筆もなくなり、生活上の行き詰まりや思想的行き詰まり、師と仰いだ開明派の福澤の姿勢、自説であるイギリス立憲思想に忠実であったが故に、堕落の一途を辿る。 ○劉成禺に支那語の教えを受ける 1905 年（明治 38 年） ○大学館での執筆終了 1910 年（明治 43 年） ○『大東文化』創刊、渋江は毎号執筆する。1924 年（大正 13 年） ○漢詩人、上村売軒三才社、創設、『天地人』創刊（入正 12 年 6 月）し、渋江も執筆に加わる 1924 年（大正 13 年） ○渋江保 1930 年（昭和 5 年）4 月 7 日逝去 享年 73 歳			
		に問われ社会主義者が次々検挙される 1910 年（明治 43 年）○8 月 22 日、日韓併合条約締結 1910 年（明治 43 年）○千里眼事件 1910 年（明治 43 年）○大逆事件が起こり、幸徳秋水ら処刑 1911 年（明治 44 年） ○第一次護憲運動 1912 年（大正元年）○第一次世界大戦 1914 年（大正 3 年） ○関東大震災 1923 年（大正 12 年）○第二次護憲運動 1923 年（大正 12 年） ○浅野和三郎によって東京本郷に心霊科学研究会設立 1923 年（大正 12 年）○普通選挙法成立 1925 年（大正 14 年）○岡本和久『長期投資仲間通信「インベストライフ」』には日露戦争後、外債募集の成功により熱狂的な企業投資ブームが起こり、綿紡績、電気、造船、鉱業、諸機械、電気機械などの企業が設立され、徐々に日本の産業の重工業化が進んだが、1907～08 年の反動恐慌により第一次大戦まで景気沈滞が続いたことが記載されている。			

人事部長　首切り姫（八）

（トゥーランドット）

匠　克仁

〈時系列〉

一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年三月三十一日　良香、東西信販退職
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット入社
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証が東西信販から京亜クレジットGへ全株式譲渡
（登記上はケイワンが全株所有）
二〇一八年三月一日　良香・御木アサヒ信用保証転籍
二〇二〇年三月二日　アサヒ信用保証組織改革
二〇二〇年七月三十一日　アサヒ信用保証決算
（譲渡後二回目）
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
二〇二一年三月三十一日　アサヒ信用保証決算予定
（八ケ月に決算期間変更）
二〇二一年四月一日　アサヒ信用保証の全株式名義ケイワンから京亜クレジットへ変更予定

〈登場人物〉

弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
東西信販から京亜クレジットを経て転籍
御木武利　アサヒ信用保証会長
京亜クレジット常務から転籍
猪本進一　アサヒ信用保証前会長（創業社長）
東西信販から社内ベンチャーで創業
立花豊　アサヒ信用保証社長（二代目）
東西信販から創業時に出向・転籍
高畑巌　元アサヒ信用保証法務担当マネージャー
現京亜クレジット法務担当マネージャー
桐先副夫　ケイワン（アサヒ信用保証持ち株会社）
社長　京亜クレジット創業者の息子

二〇二〇年十月三十一日午後一時より第十三回目のアサヒ信用保証の株主総会が開かれる。株式買収後からは既に三回目である。

その日の午前九時、出勤した御木武利会長は週刊誌を叩きつけた。京亜クレジット時代の部下からある情報が伝えられたのである。

「あの小娘が」

御木は内心で人事部長の弓本良香を小娘や首切り姫と呼んでいたが、口について出た。

「これで高畑に続いて、二人目だ」

八ヶ月前の二月末に自分に反抗する東西信販出身の法務の高畑マネージャーを強引に解雇させた。しかし、その高畑は三月には京亜クレジットに法務担当として入社したと知った。

「この俺に小娘は盾突くつもりか」

高畑の様な自分に反抗的な東西信販出身の社員の解雇を御木は人事部長の良香に命じていた。

今回も解雇した社員が京亜クレジットの別の子会社に就職したと知り、御木は激怒したのである。

良香は東西信販から京亜クレジットに転職した後にアサヒ信用保証に転籍した。アサヒ信用保証買収は良香の個人的なキャリアがきっかけで、プロジェクトが発足し、成立したものである。

かつて同じ会社で働いていた同僚だろうが、同情することは御木は許さなかった。

（首切り姫とまであだ名をつけられたほど大量に解雇をしたくせに、今さらイメージチェンジでも狙うのか）

もっとも良香の意に反して大量解雇を命じたのは御木会長自身である。首切り姫のあだ名も根本は御木会長が原因であった。

（そろそろ、首切り姫の首を切る時期だな。株主総会が終わったら、Kのやつらに根回ししておこう）

御木は悪人面をより一層、醜くして哄笑した。

（あの小娘は一から最後まで自分でディールをまとめたつもりでいる。俺がいないと成立しない案件だった）

ディールというのはアサヒ信用保証の買収である。

実際に良香が買収プロジェクトチームを作り案件をまとめたときは完全に傍観者の立場であった。というよりも失敗したときの責任者をつるし上げる立場にいた。

しかし、予想に反して買収が成功しそうな展開になってきたのである。上手くいったときには自分の手柄にして、失敗したときには部下に押し付ける。

露骨な部下の手柄、いや、今回は部下ですらなかった、独立した組織の買収プロジェクトチームの手柄の横取りをしたのである。

成功が見込まれるようになると、買収プロジェクトチームがいつの間にか組織上で常務配下に変更された。その上で買収案件は常務直轄案件となったのである。

役員の権威を傘にきた露骨な横取りというより、強盗まがいであると当時のプロジェクトチームで言われた。

あまりの卑怯さに実際にチームから退職した社員もいた。

今までそのような仕事ぶり、人生を貫いていた御木にとっては別に気にもしなかった。御木本人はこのディールは自分しか結べないと勝手に思い込んでいた。

横取りどころか暗礁に乗り上げた案件を自分の力で解決したと主張して取締役会で強引に通したのである。

現実にプロジェクトチームが交渉している上で、買収について二つの問題点を御木常務から指摘されていた。

第一には創業者で当時の猪本進一会長の処遇の問題であり、第二はアサヒ信用保証の決算の問題である。

創業者で当時の猪本会長が買収されることに強硬に反対していたのである。会長の持ち株も東都信販が買い取り、株式を１００％保有していたから、株主の意向で売却は可能である。

といっても、創業者で社内の最大の実力者が反対しており、売却側が一枚岩ではない。本来は売主側の問題であるが、それを解決しなければ、会社売買は成立しない。

プロジェクトチームでは会長の職を役員報酬から全てそのまま当時の条件で維持することでまとめようとしていた。

しかし、その条件は京亜クレジット側、というより御木個人が許さなかった。猪本会長の退任が絶対条件であったのである。

そこで当時の常務の立場で御木が企てたのが、猪本会長へのゴールデンパラシュートである。

ゴールデンパラシュート、つまり会長への退職金五億円で退任を追ったのである。まさに五億円の札束で相手の頬を引っ叩いたのである。

結局は五億円に釣られて、猪本会長は退任した。御木がその実績を評価されて、猪本の後任として会長の座を奪ったのである。

第二は決算の問題で、決算の半ばで買収したので、買収後の初めての決算で赤字の可能性は０％でなかった。

プロジェクトチームでは当初から赤字となっても京亜グループでは誤差の範囲の少額であり、直接、京亜クレジットの１００％子会社とするつもりであった。

しかし、買収したその期から、京亜クレジットの連結決算に赤字が加算される可能性は残っていた。御木は赤字転落の可能性がある以上は連結子会社を認めないと主張した。

結局は買収案件に対して、御木本人が二件の難題を突き付け、暗礁に乗り上げさせた。それを当の本人が解決したとして実績を横取りしたのである。

マッチポンプというか、放火犯が消火活動を表彰され

たようなものであったとチームでは語られた。
二つ目の赤字回避策も御木らしい茶番劇である。
結果として買収初年度は計画通り少額の赤字にしたが、黒字決算も可能であった。仮に赤字としても京亜グループとして問題にもならない額であるから、ヤクザの因縁に近い理屈である。
子会社化の前に、御木はダミー会社を噛ませることにした。ダミー会社で１００％買い取って、その間の赤字は覚悟でリストラをして、完全に膿を出し切って、その後に連結子会社にするのである。
御木がダミー会社として選んだのは、株式会社ケイワンという会社である。ケイワンは京亜クレジットのグループ会社であるが、連結子会社でなく、大株主である。
ケイワンの実態は京亜クレジットの創業者である桐先始の一族が保有する資産管理会社である。始が病死した後、一人息子の桐先嗣夫が現社長に就任している。
御木は総会屋対策時代に、この会社の裏仕事をしたことがあったので、話を付けやすいと考えた。ケイワンと御木個人にも旨味のある条件を御木は準備していた。
ケイワンは七十六億円を出資して、アサヒ信用保証の１００％株を取得している。その七十六億円は全額が京亜クレジットからの借入金である。
ケイワンは形式上年間５％の借入利息を払うことになるから、一年で三億八千万円の利息となる。
御木はこの時の金額も一円単位で覚えている。
実際にケイワンが株式を保有する期間は三年超（二〇一八年二月一日から二〇二一年四月一日までの三年二ヶ月一日）である。三年六一日分（二〇二〇年は閏年のため一年一日分として計算）の支払い利息は約十二億円（１，２０３，５０６，８４９円）になる。
しかし、利息は据え置きで実際は支払わない。なおかつ利息相当額を上乗せし、さらに一億円を加えた金額の約八十九億円（８，９０３，５０６，８４９円）で、全株式を京亜クレジットが買い取る。
この条件でコンサルティング手数料として二千万円を要求していた。御木が総会屋対策で利用していた会社、つまり御木個人の手に入るはずであった。要するに「お前にただで一億円やるから俺に二千万円くれ」という話である。
しかし、御木の目論見通りに進まなかった。
（ただで一億円を貰う甘い条件を蹴りやがって）
桐先は二千万円のコンサルティング手数料に難色を示した。そこで御木は他の会社に持ち込もうとした。
ところが、桐先は他社での契約を許さず、ケイワンの名義を貸すだけで一切の利益を発生させない形で契約を結んだのであった。
御木は二千万円を儲け損ねたと桐先を逆恨みしていた。
桐先嗣夫は普段は大学病院の外科医師をしている。

桐先は外科医としては有名であるが、毀誉褒貶の激しい人物である。困難な癌の手術を成功させるが、予後の患者のＱＯＬ（生命の質）が悪いという噂が絶えなかった。
癌の手術について、できるだけ癌以外の部位を温存するという手術が増えてきている。しかし、桐先医師は癌の浸潤、転移の可能性のある部位は全て摘出するという方針で手術を続けていた。
ある手術で「患者は死んだが、手術は成功した」と強弁して問題になったことがあった。医学界の反対勢力からは『切り裂きジャック』という、あだ名をつけられたが、本人はかえって気に入っているという。
（俺がＫの総会屋対策をしていた時の株主総会と比べればママゴトみたいな総会だな）
人間性に問題のある御木会長が京亜クレジット時代に常務まで上り詰めたのは、総務部時代に株主総会で総会屋対策で活躍したからであった。
個人の多重債務や破産などが社会問題となっていた時期もあり、クレジット業界が厳しい目で見られていた。上場企業の中で営業が強引と知られていた京亜クレジットは悪質な総会屋が狙いを付けていた。
京亜クレジットの株主総会は毎回、怒号が飛び交い、異常に荒れたものになった。その株主総会を取り仕切ったのは自分であるという自負が御木にはあった。
蛇の道は蛇というか、毒を以て毒を制すというのか、御木の悪人ぶりと悪人面は株主総会、特に総会屋対策では大活躍した。人相の悪さがこれだけ武器になる仕事は他に無かった。
御木が対応すると、ヤクザのような総会屋も大人しくなった。一方で総会屋にも花を持たせることにして、面子は立て、上手く関係を保った。御木自身も裏社会と関係していた。
総会屋からの脅迫や情報を元に会長、社長、副社長、専務たちの秘密を入手した。その秘密も武器にして出世したのであった。
「御木会長、時間ですので株主総会の会場へ来て下さい」
良香の声で御木は過去の回想から現実の世界に戻った。
今回の株主総会は御木が代表取締役会長として議長を務めることになった。一回目と二回目は立花社長が議長を務めた。
今回も通常通り立花社長が議長をする予定であった。
しかし、昔の株主総会での自慢話をしたら、立花社長から今回の総会の議長を薦められたのである。
アサヒ信用保証は株主総会といっても、株主はケイワン一社のみで、桐先嗣夫とケイワン社員の計二名のみが出席する予定であった。
株主がケイワンになってから、既に三回目の株主総会である。一回目も二回目も桐先は株主総会を「面倒くさい」と言って、出席すら嫌がっていた。

今回は事前に日程の打ち合わせをした上であったが、何も抵抗もなく、午後一時前に会場に桐先は現れた。桐先は社員一人を連れてくると連絡していたが、実際は一人であった。

会場は懲罰委員会でも使う役員会議室である。懲罰委員会と同様に取締役全員が横一列に並んでいる。人事部長の良香も末席に座っていた。

懲罰委員会と全く同じ構図であるが、株主の桐先一人が取締役全員を見下すような堂々とした態度である。会場での中では最も若い四十五才であるが、手術現場で修羅場をくぐってきた雰囲気を持ち合わせていた。

実際に取締役の生殺与奪の権利を握っている立場にある。しかし、御木の内心ではダミーで株式を持っているだけなのに偉そうにしすぎだと思っていた。

御木は腹立たしさを感じながら、株主総会の開催を宣言し、議案について説明を始めた。

「第1号議案の第十三期決算書類承認の件ですが」

今期の決算は最終的に十万円ほどの赤字である。当初から不良資産を処理するなどリストラ優先で利益を出すつもりは無かったのである。

「第十三期決算におきましては…」

御木が決算内容を説明しようとしたところ、桐先がさえぎった。

「分かった。承認する」

切り捨てるような冷たい口調であった。

「株主総会ですから、株主には決算の説明を…」

御木が反論するとことろを、桐先は再び口を挟んだ。

「ケイワンは京亜クレジットにつなぐためのダミーに過ぎない。決算には興味が無い」

七十六億円を出資している株主から決算に興味が無いという発言が出た。これには他の取締役も眉をしかめた。

「続けて」

桐先は居並ぶ取締役の様子を全く気にしない様子で次の議案を促した。

「第2号議案、決算月の変更の件です。創業以来の七月決算から三月決算に変更とします。従いまして今現在の期だけは八ケ月決算となります」

決算月の変更は株主総会の決議事項である。実務では臨時株主総会で決定することが多いが、当然ながら定時株主総会でも決議できる。

京亜クレジットに株式を１００％譲渡したら、連結子会社となるので、三月決算に合わせるのである。

「この理由は…」

またも御木の発言を桐先が封じた。

「分かった。承認する」

いつも高圧的な御木会長が若い株主に翻弄されていた。

「第3号議案は…」

御木が次の議案の人事に進もうとしたとき、良香が挙

手をした。

「緊急動議を提出します」

良香が発言した。この発言に取締役全員が唖然と良香を見つめた。

御木のこめかみに静脈が浮き上がった。三度も発言を中断させられた上に、三度目はあの小娘である。

「何を言っているんだ。株主でもない社員の君に緊急動議なんてできる権利はないだろう。馬鹿なことを言うな」

御木が良香に怒声を浴びせた。他の取締役もこればかりは御木の言い分が正しいと思っている様子である。

「いや。いいんだ。弓本君は今月付けで弊社に出向して兼任で正式に社員となっている」

桐先社長が御木の発言を抑えた。

「社員一人を出席させると伝えていた。それが弓本君だ」

意外な展開に御木は目を見開き、動物の様なうなり声をあげた。

「人事担当の俺に無断でそんな人事をしたのか。そんな勝手なことが許されるか」

「私の出向人事に関しては社長経由で決裁されており、手続き上の問題はありません」

良香は平然と反論する。

「御木君には利益相反の問題があるので、君の決裁権限を一時剥奪させてもらった」

桐先は御木会長をくん付けして、きみと呼んだ。

「俺の利益相反だと。どういう意味だ」

御木は桐先でなく良香に向かって問いただした。

「それは順番に説明します」

良香はあくまで冷静に答えた。

「株主のケイワン様におそれながらご指摘いたします。桐先社長は株主総会という制度についての基本的な知識をお持ちではないようです」

御木は桐先に向かって声をやわらげて続ける。

「そもそも株主総会では緊急動議は認められておりません。何か安っぽいテレビドラマでも見られたのでしょうか。株主総会では招集通知に記載された議案のみ議決することになっています」

株主総会対策の経験豊富な御木は説明した。

「いや、例外として緊急動議が認められる場合がある」

御木の発言に対して、桐先は反論し、続ける。

「議長の不信任案だ。弓本君、続けてくれ」

桐先の言葉を受けて、良香は立ち上がった。

「御木武利代表取締役会長は本株主総会での議長として信任できません。従いまして、議長の不信任案を緊急動議させていただきます。第3号議案からは議長を立花豊代表取締役社長に交代してください」

「何だと。馬鹿野郎が」

御木が議長席から良香に怒鳴った。

「御木君、株主は我が社が１００％だ。この緊急動議を

承認する。君は議長席から離れなさい」
桐先は御木に威圧的に発言して、立花社長に目を向けた。
「立花社長、代わりに議長をしてくれ」
桐先の言葉に立花社長も戸惑っていた。御木がふてくされて自席に座った。
「議長は誰がやろうが、議決に関係ない」
御木は正論をつぶやいたが、議長を引き釣り下された屈辱感で体を震わせていた。
立花社長は訳の分からない様子で、議長席に立った。
「それでは第3号議案の取締役の選任の件に進みます」
立花社長は再開したが、今度は中断されなかった。
事前の招集通知書に現在の取締役と次の取締役とが記載されていたが、全く同じ名前が並んでいる。
立花は全取締役の名前を読み上げた。
「ということで今回は全取締役が再任ということになります」
立花が言い終わると、沈黙が訪れた。
「否決する」
桐先の発言に取締役全員が動揺した。
「後は我が社の社員である弓本君に話してもらおう」
桐先に促されて、良香が続ける。
「取締役の内の一人の選任を否決します。御木武利代表取締役会長は次期の取締役に選任しません。代表取締役会長職は無くします。後は全員の再任を承認します」
「何だと」
会長は驚いて立ち上がると、勢いで椅子が倒れた。
「たかが人事部長の分際で会長の俺を解任するだと」
「アサヒ信用保証の人事部長の立場でありません。あくまで株主であるケイワンの一員として話しています。第3号議案の取締役の選任について一人を取締役に選任しないというだけです」
「俺が解任される理由などない」
会長の言葉を無視して、良香は続ける。
「なお、会長への退職金は支払われません」
「ふざけるな」
御木は叫んだが、いつもの気魄は無かった。
「株主として御木会長に一億円の損害賠償を請求します」
会長は力が抜けたように座り込もうとしたが、椅子が倒れていた。
「御木氏の退任とその理由を各新聞とテレビ局へ向けてプレスリリースします」
良香が畳みかける。
「なお、民事だけでなく、御木氏が過去に行った行為は刑法246条1項の詐欺罪が成立すると思われますので、御木氏を刑事告訴をすることも株主として通告します」
御木は、そのまま腰がくだけて、尻餅をついた。

1・2・3・4・5……0

匠　克仁

※○は（注○）の意味で後記しています

1966年（昭和41年）8月14日生れのぼくは2020年（令和2年）のこの原稿を執筆している時点で53才である。出版される時は磯野浪平※1と同い年の54才になる。サザエさん※2と違い人生100年時代で50代はちょうど折り返し地点である。人生の後半への60代へ向けどう生きていこうか模索している。2017年にぼくはアスペルガー症候群と診断された。通常は8才くらいまでに診断されるのだろう。今までの人生の9割が偽りの人生だった気がした。診断されたときが50才丁度だったのは意味があるかもしれない。体重は51．数kgが、ここ3ケ月の毎朝の値となっている。52才のときストラテラか鬱で1年間で6kgも痩せて、53kgから47kgまで落ちたので、当時から比べると4kg戻っている。それまでは社会人になって30年間53kg前後を維持していた。レスリングのため大学時60k以上になり、筋肉がついていた。大学4年では57kg級の階級で試合をしていた。大学最初の試合は48kg級だった。減量前の状態は57kg近くあったが9kg近く2週間かけて試合前に減量した。計量後に10kgも2日で太った。体重に神経質になり、社会人で1Rに住んだときは中央に体重計を置いていた。朝に52kg台であることを確認する。上回ると、その夜に53kg台になるように食事をし、運動する。就職後も34年間かかさず、腕立て伏せ等している。34年間365日だから、歯磨きのように習慣になった。といっても60回（30×2）とかなり減ってきた。学生時代には7日に1度は100回10セットした。ということで38年前と比べると、運動量は極端に少なくなった。例え9割以上減っていたとしても続いている。ぼくは完全に0で運動しないより良いと思う。公的なデータでは2

０１９年の学校保健統計で１３才男子の平均体重が４９．２ｋｇとなっている。１４才では５４．１ｋｇである。１３才女子の平均体重は４７．３ｋｇと男子並みである。１４才では５０．１ｋｇである。体重に関しても、ぼくは５４才にも関わらず中学２年生並みなのである。さらに６０台になれば小学生並みになるかもしれない。再び４７ｋｇ台に落ちることもあるような気がする。体脂肪率８～９％を維持してたが、２桁になってしまった。再び９％に戻ればその分の体重は減るだろう。体脂肪率は１０％を切ろうと思っている。体重に関連して腹囲はここ１０年間は６９ｃｍ＋－１ｃｍ内で収まっている。平成２０年開始したメタボ検診以降初めて測定した腹囲が７３．２ｃｍで最大値である。メタボ検診は腹囲を含めた４項目で決定するが全項目が正常である。腹囲基準は８５ｃｍであるが、ぼくの同世代の平均が基準値を超え８６ｃｍである。測定者により誤差もある。実際にぼくは７５・０ｃｍと測られて、おかしいと言ったら、６９．８ｃｍになった。いいかげんである。女性の腹囲基準が９０ｃｍというのは男性差別でなく、内臓脂肪面積１００平方ｃｍから逆算している（皮下脂肪を除く）ぼくは１５９．９ｃｍの身長と書いていたがその時の４年前が１５９．６ｃｍであった。次の年は年１ｍｍ伸びたので１５９．７ｃｍになった。さらに次の年は頑張ったのに１５９．８ｃｍになった。１６０ｃｍ突破と思ったのに１５９．９ｃｍに留まったのである。「何で、こんなに１段１段なんだろう」おそらく、ぼくはこの世界の中で１番、モーグルの上村愛子選手の気持ちが分る。その後１６０ｃｍに０．５や０．９足りないときがあったのが１５９．９ｃｍとまた計測された。神様は無慈悲であり１５９．８ｃｍと翌年になった。さらにその一年後には１５９．６ｃｍと２ｍｍ縮んだのである。その翌年には１５９．２ｃｍと４ｍｍ縮んだのである。その翌年には１５８．４ｃｍと８ｍｍ縮んだのである。ぼくはこれは１５９．９ｃｍから毎年２ｍｍの２乗ずつ縮んでいくと１大法則を発見したのである。ちなみに２ｍｍの０乗は１ｍｍである。５年間はこの大法則が成立しているので１０年間で５年後は過去の法則を未来に適用すればよく１０２４ｍｍ（２の１０乗ｍｍ）縮んでいる計算になり１５９．９ｃｍから１０２．４ｃｍ（ｍｍを換算）引き１ｍにも足らず５７．５ｃｍになっているに違いない。小１から中学３年間・高校３年間・大学４年までクラスで１番小さかった。小学生では女の子の方が成長するので１番小さい女の子よりも更に小さい年もあった。不動の１番である。まるで完全試合を達成したエースナンバー１番のピッチャーになった気分である。就職後は職場で１番小さい記録を連続している。広島の衣笠選手の２２１５連続試合出場の世界記録みたいである。なお、２０１９年の学校保健統計によると１３才男子の平均身長

が１６０．０ｃｍである。因みに１３才女子の平均身長は１５４．８ｃｍである。野球の話が出たついでに挿話を１つ書こう。ぼくは代々木駅で山手線に乗ろうとしたら１ロー…いやイチロー選手（オリックス時代・背番号５１）と遭遇した。電車のドアが開くと立っていた。身長１８０．３ｃｍが仁王立ちして微動しない。両手両足を１直線に伸ばし、Ｘの字のように通せんぼをした。後に１人いて確か田口壮選手であった。記憶では、その日は１９９８年終盤の土曜日であった。二人が山手線にいる１因は西武戦後オリックスバスが故障したからであるが１度、西武線から高田馬場で山手線に乗り換えしたのは１種のファンサービスなのだろう。イチローさんから中１生に、ぼくはみえたのかもしれない。現実に、ぼくは１３才の平均身長以下で、帽子を目深に被って、ひげが１本も無く（ひげが数えるほどしか生えないので、１本１本抜いていて、ひげを剃る習慣が無かった）、さらに１冊参考書を両手で持っていた。ぼくは乗車を試みたが１歩もイチローさんが引いてくれない。その日ぼくは朝１０時から水道橋で１２時間勉強し渋谷に帰る途中で夜１１時頃で疲れていた。電車が出たら、ホームはもう人１人いなかったのでもっと遅かったかもしれない。電車１本も待てない事情もあった。車掌から怒鳴られたので１分近く経っていたのかもしれない。そのままの状態で１回ドアが閉まりかけた。それを防ぐためぼくは右足を１歩ドアの隙間に差し込んで強引に開かせた。こうして１回ドアが開いたが、イチローさんは微動だにしないで１直線に両手を広げ通せんぼする。ぼくはちびだが胸囲１ｍで体は鍛えていた。そこで、イチローさんの肝臓の１点※５に狙いをつけた。ぼくは少しためらったのだが１瞬だけで、イチローさんの肝臓に右肘で肘打ち※６を１撃（正式名ケンドー・カシン・エルボー・スマッシュ１撃）して強引に乗車した。勿論寸止めである。ぼくが１発放ったら、反射神経の鋭い、天才のイチローさんは１瞬でかわした。彼は体をくの字に折り曲げて、右足を１歩後退した。その右脇の隙間をぼくは潜り抜け左足を１歩踏み込んだ後イチローさんの背後に回り込みその時１緒にいた田口選手の脇を通り車両奥に移った。ぼくは１駅以上前から乗っていた乗客の中に紛れ込んだ。この１部始終を見ていたドア左横の座席の３０才位の女性が１瞬の後に立ち上がり、イチローさんを座らせた。その１つ左横にいた女性と二人連れだったらしくその女性も１諸に立ち上がり、田口壮選手に席を譲った。乗客は誰１人ぼくに何も言わなかったし、見て見ぬふりをしたが１人小さく拍手した人がいた。イチローさんは冗談でも１部の車内の乗客は快く思っていない人がいると思って１瞬で判断したつもりであった。ぼく自身はそのときの１２年前から山手線を使っていた。車内がアウェーから１転してホームになった気がした。冷静になってみる

と1流の野球選手に悪いことをとぼくは反省した。当時週1回はストレス解消でサンドバッグを殴っていたが左右1つは拳が血だらけになるので肘打ちもしていた。体が1瞬で反応したのである。振り返ってみると今まで人生1番の後悔である。なぜあんな反応をしたのか、ぼくも1番不思議に感じている。ぼくは温和な方で、揉め事は1番嫌いである。実際に生まれてからそれまでの人生で1度も人様に手を出したことがない。いじめられた時も1度も反撃したこともない。銀行の上司に殴られて全治1ヶ月左眼球損傷で血だらけにされたが、銀行関係者に1言も言わなかった。格闘技をしていると、日常生活は1転して穏やかになる。寸止めとはいえ、後にも先にも1人イチローさんだけ手を出したのである。嫌いな人の1人であったなら理解できる。野球ではイチローさんは1番※7でないけど2番目に好きな選手だった。ここで1つ考えられるのは、心理学のアンビバレンスであって1愛と2憎とが併存する感情である。可愛さ余って憎さ100倍である。愛情の対象から裏切られたと感じたら100倍の憎悪の感情が生まれる。嫌いな人であったら1本電車をやり過ごしていただろう。好きな野球選手の1人であるイチローさんから山手線の乗車を拒否されて100倍の憎がでたかもしれない。イチローさんともう1度会えたら、このときの出来事をきちんと謝りたい。21年以上前の日常茶飯事を記憶を頼りに書いているので1部は不正確かもしれない。もしも、席を譲った女性が10代だったら、その人に失礼である。今も書いていて1諸にいたのは田口選手でなく谷佳知選手だったかもと1瞬は不安に感じた。記憶違いがあるのかもしれないが1連の流れとして、そのような出来事があった。読者に1つだけ誤解をして欲しくない。アスペルガーの性格が1原因と思わないで欲しい。たしかに、アスペルガーの1つの特徴は常人がしないことをすることである。また1つでも予定が狂うとパニックになる。ところが、他の1つ特徴で、壁にぶつかると回避する性格がある。ぼく1人が全人類の1%から2%のアスペルガーでその中の1%から2%の特殊なアスペルガーかもしれない。この1998年の代々木駅で、ぼくがイチローさんに肘打ち1発をしたときに、ふと頭に浮かんだことが量子力学で1番有名な、2重スリット実験※8である。これはぼく1個人の特徴かアスペルガーの為か分からない。ぼくは1本以上は頭のねじが緩んでいる。当時はストラテラを1錠も飲んでいなかったから副作用ではない。この薬の1番大きい副作用は成長期の身長が止まるというもので10才くらいから処方されていたら恐らくぼくの身長は120cm位になっていたかもしれない。障害の診断が10才頃でなく50才で良かった。ストラテラで身長が1…2…4…8mmと今も縮んでいるのだろうか。さて2ページ目で腹囲の話を書いたが補足する。1．腹囲

と2．ウェストは異なる。腹囲は1．立位臍高位、または2．肋骨下縁と前上腸骨棘の中点の高さ、との測位の内2つの低い方の数値であるが、ウェストというのはこの2つの数値よりも低い、最も細いくびれであり、59．2cmとぼくも昔は細かった。健康診断で心電図と腹囲2つを同時に測っている。そのやり方が合理的だろうが2年前の健康診断では腹囲を測る女性の顔面と煩悩くん2つがぶつかったのである。それでぼくの心臓の鼓動が2倍になったのである。ぼくは心電図検査の結果、過去20年で異常がなかったのに、頻脈と診断された。人生100年時代のぼくの人生の様々な側面を曲線で表すと50才をピークのベル型の正規曲線を描くと思う。では50才以降は下り坂を生きることになると考える。幸い50才位まで加齢による体力低下はしなかった。身長も1mmずつとはいえ伸び続けていたのである。それから50才頃から縮んでいるから、ゆるやかで、いびつだが1種の正規曲線にはなっている。この法則に従うと、100才で出生時の48．6cmになる。体重の方は大学4年の時が人生で最も重くて60kgを超えていたのと51才で1年間で53kgから47kgまで落ちたので50才をピークの正規曲線にはなっていない。しかし30年間は53kgだったことを考えると、生まれてから1つ凸と1つ凹を除けば、頂点がほとんど真平らに近い1種の正規曲線である。体重も法則に従うと100才で0才児の3150gになるかもしれない。視力も裸眼で1．0で老眼もない。生れ付き右目近視、左目遠視で小1から小6まで眼鏡を掛けていたぼくは生まれた時より50才の方が良いのである。今後は、視力が衰えるから50才をピークの正規曲線である。歯の白さ※9でも50才の時に人生で最も白くなったのである。ぼくは必ず1日4回、歯と舌磨きをするので虫歯は無い。それでも3ケ月に1回位は歯医者に診察に行く。歯周病の検査も1（歯周病ポケット検査1～4があり、1は歯と歯茎が3mm以内である）がほぼ全歯である。モニターとして0円でホワイトニングをしてもらった。治療する前はA2だった（日本人の歯の白さの平均A3．5）が今はA1である。この調子であれば、80才で20本どころか100才でも歯が全部残っていそうである。正規曲線に1つ例外があると気が付いた。幸か不幸かぼくの股間に1本生えている煩悩くんは下降曲線を描いていない。朝1番で立って放尿したらレーザービームのように天井に1点の穴を開けてしまいそうだ。ロダンの考える人を15度更に前に傾けて、ゆっくり用を足す。発達障害とは1次的に脳の障害で、体の発達の障害ではない。しかし2次的にぼくのように体の発達が遅れる。ぼくの場合は5つの感覚でも味覚が変なのか食欲が無かった。給食は2倍差の体重が違いがあっても同量である。平等でなく1番小さいぼくにとっては拷問である。給食時に栄養

士2人に監視され食べたことがある。日本社会は平均値の1．0になるように人間を育てていると思う。平均値の1．0に近づけるために、僕はフォアグラの鴨のように1つの人体実験のように扱われた気がした。そのような40年以上も前の経験を覚えている。背の順番で並ぶと1番前だったぼくは1番後ろになりたい願望があったが1番後にまんじに掲載され達成した。さてボクシングで1番軽い階級は男子でミニマム級である。リミットは47．62kgだから減量できる。プロで世界ランキング1位を目指そうかなあ。女子も男子と同じ階級に加えて1つさらに軽い階級がある。それがアトム級であり、46．26kgである。それぐらい減量できそうだ。心機1転、性転換して、女子ボクサーとして世界ランキング1位を目指そうかなあ。ちなみにボクシングランキング1位は2番目である。ランキングはチャンピオンに次に1番という意味である。世界チャンピオンが目標でなく1位というのは、理由がある。本人の努力でランキング1位になれても現チャンピオンが1位と試合をしないと1位は永遠にチャンピオンになれないからである。さて50kg台より40kg台の方が体が重く感じた。体重47kgでは筋肉も痩せた。50kg台なら小数点以下2桁目を4捨5入すれば0．1tである。ところが、40kg台は小数点以下2桁目を4捨5入してしまったら0．0tと存在感が無くなってしまう。話は替わるが小1のとき数字の意識が他人と違う、と気付いた。ここで1つ例をあげると、次のような足し算を考えてみる。

1＋2＋3＋4＋5＋6＋7＋8＋9＋…＋□＝？

10か20くらいまでだったかと小1なのでそう思う。

1＋2＝3、3＋3＝6、6＋4＝10…を繰り返す。

1＋2＋3＋…＋100まで計算して下さい。ぼくなら1＋2＋3＋4＋5＋6＋7＋8＋9＋…＋100＝（1＋100）＋（2＋99）＋……＋（50＋51）＝101×50＝5050と解く。小1なら掛算なしでも10個同じものを足せば後に0を加えればよいと考えて101に0を加えた1010を5回、足算しただろう。

1宇宙人である、ぼくらアスペルガー星人は、実は100万光年離れた星に生息する。地球人と同様進化したが2個の遺伝子が欠損する。1つはX染色体上のp22．3の場所にあるNLGN4遺伝子でもう1つはX上のp13の場所にあるNLGN3遺伝子である。AS星人は8：1と男性：女性の比率になる。XY型の男性は先の2遺伝子が1個ずつ欠損している。XX型の女性は先の2遺伝子が2個とも欠損している。地球人とAS星人を1つ1つ成長過程を示しながら説明する。補足※10

1　地球人もAS星人も脳細胞のシナプスは生まれた後8ヶ月まで増加する。（シナプス＝細胞間の接合部）

2　地球人では10才までに増加した脳細胞シナプスが2分の1ほどまで減少する。刈り込み（プルーニング）

※11という現象である。

3　AS星人ではシナプスの刈り込みが行われない。

4　AS星人は頭蓋骨内の前頭葉の体積が多くなる。

5　AS星人は小脳など他の脳が小さく成長する。

2番目の刈り込みが重要なのである。1つの刺激に対し1つの反応をするシナプスを残し別のシナプスを廃す。

1つの刺激に対して、複数のシナプスが反応すると、

1　感覚過敏（光や音などの刺激を2倍3倍に感じる）

2　共感覚（音を視覚で感じるなど五感が狂っている）

の2つの特徴が出る。ぼくも音で光を、臭いで味を感じて2つの感覚で日常生活に不便を感じている。ぼくたちの1番の特徴をいえば前頭葉前頭前野という7文字の中に3文字も前の字ある部分のシナプスが多い。この前の字3つある前頭葉前頭前野の働きは

1　言語表現

2　新しいものの創造

3　長期記憶

4　コミュニケーション　等である。

4番目のコミュニケーションをする前頭葉前頭前野が人1倍大きいがコミュニケーションができない。地球人は1つの情報の発信に対して1つの受信しかないがASは2つも3つも変な受信をするシナプスが残っている。

2個の遺伝子の違いで、地球人とアスペルガー星人では2方向の意思疎通は困難になる。ぼくも地球人との1体1のコミュニケーションができずに大変苦労している。

100万光年離れた地球にAS星人が生きている理由を1つ1つ理論的に説明する。

1　宇宙は11次元である。

2　地球人は空間3次＋時間1次元で認識している。

3　地球人は5次元以上を理論的に説明できるのだが、11次元まで理解できても上位次元の技術的開発は無い。

4　アスペルガー星人は地球人より理数系に強いものが8割ほどいて、物理数学分野が発達している。

5　AS星人は次元の畳み込み（コンボリューション）※12をする技術を地球人に先駆け開発した。AS星人は11次元の情報を2次元に畳み込みすることができる。

6　地球人のX染色体の上にあるNLGN4とNLGN3遺伝子を欠損させるRNAを合成し、それを2次元の1個の陽子に畳み込みした。

7　AS星人は地球へ2次元の陽子1個を発射した。（100万光年離れても2次元の陽子は即時に到着）

8　地球に到達した陽子は、2次元の状態から元々の11次元のRNAに展開した。

9　展開したRNAはウィルスの様に地球に拡散した。

10　地球人の妊婦の1％がこのRNAに感染した。

11　感染した妊婦の子は生れ付きX染色体にNLGN4とNLGN3遺伝子が欠損している。

12　つまり地球人からアスペルガー星人が誕生した。

13　読者は作者が何を書いているのか分からない。
14　心配しなくてもよい。作者も分かっていない。

『3体』※13というSF小説に着想を得て書いてみた。
1番ぼくがアスペルガーの特徴で嫌なのは、鬱である。
1次障害がアスペルガーで2次障害で鬱病は多くある。
1つ例を出すと朝に雨が降っていると、鬱を感じる。
1日休みたいと思いつつ、脳内では次の思考をする。
1　朝と夕方は太陽光が水平方向から地球に差し込む。
2　太陽光により地表面の気温が上昇する。
3　宇宙に近い上空では太陽光で気温は上がらない。
4　空気は暖かいところから冷たいところへ移動する
5　空気が上昇すれば、雲が発生する。
6　雲が発生すれば、雨が降る。
7　通勤時間帯の朝や夕方に雨が多くなるのは当然。
11…いや、一々、雨だけでこれだけ思索してしまう。
1日を始めるのに雨が降るなんで天が与えた試練であり1層自分が精神的に鍛えられてうれしいと思いたい。
小6ぐらいでぼくは鬱の漢字を書き順も正しく書けた。
1　缶　2　林　3　ワ　4　メ　5　、が4つ
6　L　7　1　8　ノ　9　L　10　三（杉の右）
1つだけ最後にアスペルガー星人から地球人にお願いで1つ1つの言動が地球人と異なると責めないで欲しい。
1番苦しんでいるのは、地球上に住むアスペルガー星人1個人であり、日常生活でひ～ひ～言ってるのである。

※1　磯野浪平　マンガのサザエさんの父親。明治28年9月14日生まれで、永遠の54才。
※2　サザエさん　毎週日曜日午後7時の少し前に、1億2596万人（令和2年8月総務省統計局）の日本人に1方的に憂鬱な気分にさせる呪いをかける魔女。ぼくも1被害者である。この呪いは青森・山梨・山口・徳島の4県の住民はかからない（フジ系列が無い）
※5　肝臓の1点
1点とは肝臓の右葉と左葉とが接合したくぼみ。肝臓は1つの臓器というより2つの臓器が隣り合わせくっつき1つの塊になっている。鳥レバーを料理したら分かるが1度引っ張って2つに裂ける。ぼくも接合部を強打して1時間ほど、のたうちまわった経験がある。あれから31年も経っているのに、痛烈に覚えている。医学的には1つも肝臓に痛点はなく、肝臓を包む腹膜に集中する。
※6　肘打ち
1撃は正式名ケンドー・カシン・エルボー・スマッシュ1撃である。この必殺技は早稲田大学のレスリング部で1年後輩のプロレスラーのケンドー・カシンが試合開始1番目に使う肘打ちアッパーである。白鳳のかち上げが1番近いかもしれない。カシンは早大大学院を卒業して1年間慶應義塾大学で講師もした文武両道である。
※7　1番
1番でなく2番目にイチローさんを…と書いたがそれ

で1番はロッテに入団した小宮山悟投手（早大体育会での1990年卒同期。横浜、大リーグ、ロッテを経て2019年から早大野球部監督）であった。この文を書いて1987年4月にレスリング部同期の主将の木村君が「1986年度入学式の席順はアイウエオ順なので自分の1つ隣がラグビーの清宮克幸（幸太郎の父親）で、次の1つ隣が桑田真澄の席であったので空席になって、次の1つ隣が小宮山悟」と言ったのを思い出した。小宮山は1般入試で受験勉強して入学した。小宮山は1浪でなく2浪したので2年間、野球から離れたが活躍した。
※8　2重スリット実験
2重スリット実験はいくつかのパターンがあるが中でも1個の電子で行うケースである。おそらく、ぼく自身を1個の電子にイチローさんを板に例えたのだろう。この1個の電子が板の左と右のスリット（縦に細長い隙間）2つ同時に通過して、奥のスクリーン（山手線車内）の1点に到達する。電子銃で電子を発射するのだが電子が1個なら、右か左のスリットの延長線上のスクリーンの1点に到達するはずである。しかし、延長線上ではない1点に到達する。電子を波動と考えれば、1個の電子が2つのスリットを粒子でなく波動として同時にすり抜け1点に到達する。つまり、2重スリット実験は、電子が1粒子、2波動の両方と証明した。この実験は物理学で1番美しい実験とされている。

※9　歯の白さ
1～4までで小さい方が白い。A～DとWは色でA1～4は日本人に多い赤み。W3はA1より白いが不自然。
※10　補足
2個のみアスペルガーに関する遺伝子を使った。実際は2個だけでなく、関係する遺伝子は他にも研究があって30種類の自閉症遺伝子が発見されている。NLGNは3、4だけではなく、第3染色体q26にあるNLGN1、第17染色体p13にあるNLGN2、Y染色体q11．2にあるNLGN4Y遺伝子もある。
※11　（シナプスの）刈り込み（プルーニング）
1神経情報を出力する側と、2入力する側の接続部分を2分の1にする。不要なシナプスを無くすことである。
※12　（次元の）畳み込み（コンボリューション）
3次元を2次元での様に高次元を低次元で表現する。
3次元の立体を2次元の平面で表現した例が写真であり2次元の写真が量子の粒で構成されて、何枚も重ねたら3次元に復元する。
※13
『3体』…いや『三体』という中国のSF小説。
3体は天文学および物理学の正式な学問用語である。
1番太陽系から近い恒星系はケンタウルス座α星であり3体、つまり恒星を3つ持つ。（惑星は5つほど確認）
3つの恒星を持つ惑星の軌道は物理的に予測できない。

編集後記

今年は全世界が全く予測していなかった新型コロナに振り回されています。また、最近のニュースでは、欧州で「第二波」感染が猛威をふるっているとのことです。

この新型コロナの被害は、財政的にアメリカだけでも二十六兆ドルとか報道されており、このような各国の財政的被害、民間企業被害とそれに関連する個人の低所得被害（所得ゼロ化も含めて）と、だれも予測していなかった全地球規模の被害損失は計り知れないものがあります。

見えない相手という厄介者ですから、医学的には新型コロナに即対応できる「薬品」の早期開発が叫ばれていても、今日の段階でも「開発途中」段階で、それらが完成して一般庶民に渡るのは来年度（月は未定）ともいわれています。

地球に生きる人間の一人として、新型コロナウイルス抗体薬品の開発には、全地球規模で英知を集めて、もっと早く何とかならないのか？と声を大にして叫びたい気持ちです。

明るい話題を一つ。

まんじ同人で、まんじ毎号の発行費個人精算金計算を一手に引き受けて奉仕をされている「村上邦治」氏が自費出版した「千家尊福伝」が、応募八十六編中上位十編に選ばれ、「日本自費出版文化賞」受賞の栄誉に輝きました。毎年十一月最終土曜日に「アルカディア市ヶ谷」で行われている表彰式は、今年は新型コロナの関係で記念誌を作成して「紙上表彰」になるとのことです。この受賞は、まんじ誌の栄誉でもあります。

「村上さん、おめでとう！」村上さんのお喜びの言葉は、次回合評会の席上でお願いします。

同人の皆さん、向寒の折、くれぐれもコロナにご注意を。

（鍋）

まんじ第158号

令和２年11月１日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL･FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について
「文明は変われど　真理は変わらず」
田寺怜葦（たでられい）画